岡山県中世城館跡総合調査報告書

第３冊

－　美作編　－

２０２０

岡 山 県 教 育 委 員 会

190 岩屋城陣城群跡の土塁（西から）

88 篠向城跡の畝状竪堀（南から）

巻頭図版２

157 矢筈城跡の石垣（東から）

375 淡相城跡の横堀（北から）

序

岡山県教育委員会では、県内に所在する中世城館跡について、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的として、「岡山県中世城館跡総合調査」を平成 25 年度から 7 か年にわたり実施してまいりました。本書はそのうち、旧美作国に所在する中世城館跡の調査成果報告書です。

美作国は、現在の岡山県北東部にあたります。この地は、標高 1,000 m前後の山々が連なる中国山地に抱かれた山国で、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝でした。このため、室町時代の前半には播磨（兵庫県）の赤松氏、伯耆・因幡（鳥取県）の山名氏、戦国時代に入ると出雲（島根県）の尼子氏、安芸（広島県）の毛利氏、備中の三村氏、備前の浦上・宇喜多氏といった諸勢力に攻め込まれ、たびたび戦場となりました。そうした中にあって中村氏、大河原氏、三浦氏、美作菅家党、垪和氏、後藤氏、草苅氏、新免氏といった国人達は、ある者は勢力を拡大し、ある者は没落していきました。そのことを反映するかのように、この地には伝承地を含めて備前・備中・美作 3 国中最多の約 650 か所を数える城館跡が存在します。これらは厳しい戦乱の時代を物語る証人ですが、現在ではほとんどが忘れ去られています。今回の調査ではこの城館跡のうち、約 400 か所の規模や構造等を明らかにすることができました。

本書が今後の地域の歴史研究に寄与するとともに、中世城館跡の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、総合調査及び報告書作成にあたりましては、文化庁をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和２年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　向　井　重　明

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会が平成 25 年度から平成 31（令和元）年度にわたり、国庫補助を受けて実施した岡山県中世城館跡総合調査の報告書第３冊（美作編）である。この調査は、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が担当した。

2　本書には、岡山県北東部の旧美作国に属する中世城館跡の調査成果を掲載した。旧美作国内に該当する市町村は以下のとおりである。

　真庭市、津山市、美作市、岡山市、苫田郡鏡野町、久米郡美咲町、久米郡久米南町、勝田郡奈義町、勝田郡勝央町、真庭郡新庄村、英田郡西粟倉村

3　調査及び報告書作成は、平成 26 年度に文化財センター職員 澤山孝之・米田克彦・上栁　武、平成 27 年度に同職員 澤山・米田・島崎　東、平成 28 年度に同職員 小林利晴・物部茂樹・小嶋善邦、平成 29 年度に同職員 小林・物部・岡本泰典、平成 30・31（令和元）年度に同職員 小林・氏平昭則・和田　剛が担当して実施した。

4　調査事業を円滑に実施するため、専門委員２名を委嘱し、調査全般及び報告書の作成に関する専門的な指導・助言を得た。また学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、調査協力員を委嘱し、さらに調査協力者を依頼し、助言を得た。記して深く感謝の意を表す次第である。

5　本書の執筆は、第１～３・第５章を文化財センター職員が、第４章歴史史料調査を畑　和良（歴史研究家）が、第６章を森　俊弘（真庭市教育委員会）と文化財センター職員で担当・執筆し、文末に文責を記した。

6　本書の編集は、文化財センター職員 小林・和田が行った。

7　畑　和良、島崎　東、難波澄夫、真庭歴史研究会、真庭市教育委員会、勝央町教育委員会の方々には、縄張り図の提供及び城館跡に関する教示を受けた。ここに感謝の意を表する。

8　本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の「数値地図 25000」（地図画像）を３万５千分の１に縮小して複製したものである（承認番号　令元情複、第 417 号）。本書掲載図を複製する場合は、国土地理院長の承認を得るものとする。

9　第３章の縄張り図で使用した地形図は、以下の機関から提供を受けて、掲載の許可を得た。

　真庭市域・美作市域・岡山市域・鏡野町域・勝央町域：各町市作成の都市計画図・市域図・地形図（1/2,500）を使用。

　津山市域：津山市長の承認を得て、同市所管の測量成果津山市都市計画図（1/2,500）を使用し調製。承認番号（平成 28 年津山市使用承認第６号・平成 29 年津山市使用承認第８号）

　美咲町域：岡山県知事の承認を得て、森林基本図（1/5,000）を使用し調製。承認番号（平成 27 年１月 26 日付け岡山県指令林第５号）

　久米南町域：岡山県知事の承認を得て、森林基本図（1/5,000）を使用し調製。承認番号（平成 27 年９月２日付け岡山県指令林第２号）

　奈義町域：奈義町作成の地形図（1/5,000）を使用。

新庄村域：新庄村作成の地形図（1/10,000）を使用。

西粟倉村域：岡山県知事の承認を得て、森林基本図（1/5,000）を使用し調製。承認番号（平成27年1月26日付け岡山県指令林第5号）

10　現地調査並びに報告書作成に関しては、以下の機関から多大なる協力、助言をいただいた。記して謝意を表する（順不同）。

文化庁、岡山県立図書館、真庭市教育委員会、津山市教育委員会、美作市教育委員会、岡山市教育委員会、鏡野町教育委員会、美咲町教育委員会、久米南町教育委員会、奈義町教育委員会、勝央町教育委員会、新庄村教育委員会、西粟倉村教育委員会

11　本書に掲載している縄張り図を転載する場合には、本報告書名に加えて作図者名を明記することとする。

凡　　例

1　第２・３・６章で用いた高度値は、標高である。

2　第３章で示した方位は、一部を除いて平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。

3　第３章に掲載した縄張り図の縮尺は、基本的に1/2,000であるが、必要に応じて変更（1/3,000、1/4,000など）している。また図ごとの縮尺は、見出しに記載している。

4　第３章で遺構を示す場合、原則として　曲輪及び曲輪群は曲輪「Ⅰ」のようにローマ数字で表記し、竪堀や堀切などは、竪堀「１」のようにアラビア数字で記載した。

5　第２章の分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「下加茂」・「福渡」・「井倉」・「呰部」・「西川」・「下弓削」・「足立」・「刑部」・「勝山」・「久世」・「津山西部」・「千屋実」・「上刑部」・「横部」・「美作宮原」・「香々美」・「根雨」・「美作新庄」・「湯原湖」・「富西谷」・「奥津」・「江尾」・「延助」・「蒜山」・「下鍛冶屋」・「上斎原」・「周匝」・「日笠」・「柵原」・「林野」・「上月」・「津山東部」・「真加部」・「佐用」・「楢」・「日本原」・「古町」・「美作加茂」・「大背」・「板根」・「加瀬木」・「智頭」・「郷原」・「伯耆溝口」・「伯耆大山」・「泰久寺」・「関金宿」を複製・加筆したものである。

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 5
第２章　城館跡の分布図・一覧表 …… 9
　１　分布図 …… 9
　２　美作国中世城館跡一覧表 …… 72
　３　美作国中世城館跡遺構の評価と残存状況表 ……100
　４　美作国不明中世城館跡一覧表 ……104
第３章　城館跡の概要 ……111
　第１節　真嶋郡 ……113
　第２節　大庭郡 ……167
　第３節　西西条郡 ……199
　第４節　西北条郡 ……239
　第５節　東北条郡 ……255
　第６節　東南条郡 ……283
　第７節　久米北条郡 ……287
　第８節　久米南条郡 ……337
　第９節　勝北郡 ……365
　第 10 節　勝南郡 ……393
　第 11 節　吉野郡 ……415
　第 12 節　英田郡 ……443
第４章　歴史史料調査 ……469
第５章　城館関連地名表 ……525
第６章　総括 ……533
　第１節　考古学から見た美作国の中世城館跡 ……533
　第２節　文献史料から見た中世美作国の政治動向と戦乱 ……545
美作国中世城館関連文献一覧表 ……559
報告書抄録
奥付

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

１　調査の経緯

瀬戸内海北岸のほぼ中央に位置し、近畿地方と東に接する岡山県は、備前・備中・美作の３国からなる。南北朝時代から室町時代にかけて播磨の赤松氏と伯耆・因幡の山名氏がこの地をめぐって争い、戦国時代には出雲の尼子氏や安芸の毛利氏、上方の織田氏が進出して抗争を繰り広げた。このため、県内に残る中世城館跡は、昭和 55 年に刊行された「日本城郭大系」13 で 884 か所、現在の遺跡地図で約 1,100 か所と全国的に見てもすこぶる多い。

こうした城館跡の大半は、眺望に優れた山頂や尾根上に立地するため、テレビ塔などの建設候補地にあげられることが多く、近年では携帯電話基地局の設置も相次いでいる。また、林道建設や土砂採取により、城跡が損なわれる事態も頻発している。

このため岡山県教育委員会では、県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成 25 年度から国庫補助事業として中世城館跡総合調査を実施することとなった。

２　調査の計画

調査にあたっては、平成 25 年７月１日に策定した「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」に基づいて、７か年にわたる調査体制を組織した。当初は、平成 25･26 年度に備前地域 471 か所、平成 27・28 年度に備中地域 410 か所、平成 29・30 年度に美作地域 491 か所と、現在の行政地域単位で調査を実施することとしていた。しかし、県北部の美作地域や備中地域北部は遠隔地である上、降雪等の気象条件により県南部と同様に調査を進めることは困難と考えられた。このため、平成 26 年度に調査計画を見直し、県北部・南部を並行して調査するよう改めた（第１図・表 1)。最後の令和元年度は、これまでの調査結果に検討を加え、その成果を備前国・備中国・美作国の３分冊の報告書にまとめて刊行した。

岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項

（目的）

第１条　この事業は、岡山県内に所在する中世城館跡の所在とその内容等について悉皆的かつ総合的に調査し、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的とする。

（事業主体）

第２条　この事業は､岡山県教育委員会（担当　岡山県古代吉備文化財センター（以下「センター」という。）が行う。

（実施期間）

第３条　この事業は、平成 25 年度から平成 31 年（令和元年）度まで実施する。

（調査対象）

第４条　この事業における調査の対象は、おおむね中世（平安時代末から戦国時代までをいう。）に築かれた城、館、屋敷、砦、陣、要害、烽火台、物見櫓等（以下「城館」という。）とする。ただし、古代又は近世の城館についても、中世の城館との関連をうかがわせるものについては、これに含める。

（事業内容）

第５条　この事業の内容は、次のとおりとする。

（１）現地調査

ア　図面、地図等関連資料の収集・整理

イ　現地踏査による縄張り調査

ウ　台帳作成

（２）文献調査

ア　関連する史誌、報告書、研究論文等の収集・整理

イ　城館関連地名の抽出と検討

ウ　台帳作成

（３）報告書作成・刊行

［報告書の主な内容］

目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等

（専門委員等）

第６条　この事業を円滑に実施するため、専門委員（以下「委員」という。）３名以内及び調査協力員（以下「協力員」という。）10 名以内を置く。

２　委員は、調査全般及び報告書の作成・刊行にわたって必要な専門的指導・助言を行う。

３　協力員は、当該年度の対象地域で行う調査の実施に当たって必要な専門的協力を行う。

４　委員及び協力員は、岡山県内の埋蔵文化財に詳しい学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、岡山県古代吉備文化財センター所長（以下「所長」という。）が委嘱する。

５　委員の任期は、委嘱した日から令和２年３月 31 日までとする。

６　協力員の任期は、委嘱した日の属する年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

（庶務）

第７条　この事業の庶務は、センターにおいて処理する。

（その他）

第８条　この要項に定めるもののほか、この要項の実施に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附　則

この要項は、平成 25 年７月１日から施行する。

３　調査の体制

調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その実施にあたって専門的な指導・助言を得るために専門委員２名、対象地域の調査について協力を得るために調査協力員数名を、中世城館跡及び中世史の専門的知識を有する者の中から委嘱した。

専門委員

稲田孝司　岡山大学名誉教授（平成 25 ～令和元年度）

中井　均　滋賀県立大学教授（平成 25 ～令和元年度）

調査協力員

有賀祐史　赤磐市教育委員会社会教育課主任（平成 25 年度）

石井　啓　備前市教育委員会生涯学習課主幹（平成 25 年度）

村上　岳　瀬戸内市教育委員会社会教育課文化振興係長（平成 25 年度）

團　正雄　勝央町教育委員会教育振興部主査（平成 26・27 年度）

池田和雅　美作市教育委員会美作分室主任（平成 27 年度）

高田知樹　井原市教育委員会文化課係長（平成 28 年度）

森　俊弘　真庭市教育委員会生涯学習課主幹（平成 28 年度）

山本原也　笠岡市教育委員会生涯学習課文化係学芸員（平成 28 年度）

小郷利幸　津山市教育委員会文化課企画参事（平成 29 年度）

日下隆春　鏡野町教育委員会生涯学習課主幹（平成 29 年度）

西野　望　矢掛町教育委員会教育課生涯学習係長（平成 29 年度）

前角和夫　総社市教育委員会文化課文化財係主査（平成 29 年度）

藤原好二　倉敷市教育委員会生涯学習部文化財保護課倉敷埋蔵文化財センター主任（平成 30 年度）

水田貴士　浅口市教育委員会文化振興課文化振興係長（平成 30 年度）

三浦孝章　高梁市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事（平成 30 年度）

白石祐司　新見市教育委員会教育部生涯学習課文化振興係主任（平成 30 年度）

畑　和良　歴史研究者（平成 25 ～ 30 年度）

調査協力者

乗岡　実　岡山市教育委員会文化財課課長（平成 26・27 年度）

高橋伸二　岡山市教育委員会文化財課主査（平成 26・27 年度）

調査指導

近江俊秀　文化庁記念物課埋蔵文化財部門調査官（平成 25 ～平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門調査官（平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門主任調査官（令和元年度）

大橋雅也　岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 25 ～ 27 年度）

岡山県教育庁文化財課総括参事（平成 28 年度）

柴田英樹　岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 29 ～令和元年度）

岡山県古代吉備文化財センター

平成 25 年度

所　　長　平井泰男

次　　長　大崎智浩

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総括主幹　岡部　一

主　　任　宮岡佳子

主　　任　岡村涼平

〈調査第二課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　小嶋善邦（調査担当）

主　　任　河合　忍（調査担当）

平成 26 年度

所　　長　村木生久

次　　長　大崎智浩

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　岡部　一

主　　任　宮岡佳子

主　　任　山内基寛

〈調査第二課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　米田克彦（調査担当）

主　　任　上栁　武（調査担当）

平成 27 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　成本俊治

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　金藤賢史

主　　任　宮岡佳子

主　　任　山内基寛

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　米田克彦（調査担当）

主　　任　島崎　東（調査担当）

平成 28 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　成本俊治

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　金藤賢史

主　　任　浦川徳子

主　　任　山内基寛

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総 括 主 幹　小林利晴（調査担当）

主　　幹　物部茂樹（調査担当）

主　　幹　小嶋善邦（調査担当）

平成 29 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　髙田　亮

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総括副参事　金藤賢史

主　　任　浦川徳子

主　　任　東　恵子

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総 括 主 幹　小林利晴（調査担当）

副　参　事　物部茂樹（調査担当）

主　　幹　岡本泰典（調査担当）

平成 30 年度

所　　長　向井重明

次　　長　髙田　亮

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　甲元秀和

主　　任　浦川徳子

主　　任　東　恵子

〈調査第一課〉

課　　長　髙田恭一郎

総括副参事　小林利晴（調査担当）

副　参　事　氏平昭則（調査担当）

主　　任　和田　剛（調査担当）

令和元年度

所　　長　向井重明

次　　長　佐々木雅之

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　甲元秀和

主　　任　東　恵子

主　　任　多賀克仁

〈調査第一課〉

課　　長　髙田恭一郎

総括副参事　小林利晴（報告書担当）

副　参　事　氏平昭則（報告書担当）

主　　幹　和田　剛（報告書担当）

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

現地調査

城館跡の現地調査にあたっては、まず、『改訂岡山県遺跡地図』（2003）に記載されているものや文献に見えるものに、地元の伝承等を加えて台帳を作成した。それをもとに現地を踏査し、関連遺構を確認したものについては測量や写真撮影を行って現状の記録を作成した。測量には主にＧＰＳ受信機を使用し、作成した縄張り図は市町村作成の都市計画図（1/2,500 ～）もしくは岡山県作成の森林基本図（1/5,000）から抜粋した地形図と合成した。

文献調査

中世・近世の文書から中世城館跡に関わる記事を抜き出し、一覧表を作成した。また、城館跡にかかわる記載のある近代～現代の自治体誌や研究書を収集して台帳を作成し、城館跡の概要を記述する参考とした。

関連地名調査

『角川日本地名大辞典　岡山県』角川書店（1989）や自治体誌に集成されている地名（小字名）から、城館に関連するものを抽出して一覧表を作成するとともに、その一部について地籍図・切図との対照を行い城館跡の所在を検討した。

２　調査の経過

平成 25 年度

年度当初は、事業の体制や全体計画の検討と併行して、調査対象とする備前市・瀬戸内市・赤磐市・和気郡和気町・玉野市・加賀郡吉備中央町所在の城館跡 311 か所について情報収集を行うとともに、城館跡に関わる文献や地名の調査及び報告書作成に着手した。７月１日（月）に「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」を策定し、８月 15 日（木）付けで専門委員２名と、当該年度の調査協力員４名を委嘱して調査体制を整えた。また、26 日（月）には九州歴史資料館 岡寺良学芸員から縄張り図の作成方法について指導を受けた。９月３日（火）から対象地の現地調査に着手したが、吉備中央町については狩猟期と重なって実施が困難となったことから翌年度に変更した。10 月 16 日(水)には、古代吉備文化財センターにおいて調査事業会議を開催し、調査の計画や方法等について協議した。また 30 日（水）には、京都府教育委員会に赴いて「京都府中世城館跡調査」の進め方について教示を受けた。１月 17 日（金)、古代吉備文化財センターにおいて文化庁記念物課 近江俊秀調査官にこれまでの調査状況を説明し、翌日、津山市岩屋城跡にて現地指導を受けた。２月 25 日（火）には、瀬戸内市中央公民館において調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。３月 28 日（金)、現地調査、文献調査、城館関連地名調査を終了し、31 日（月）に事業を完了した。

平成 26 年度

４月から、調査対象の岡山市、勝田郡勝央町に所在する城館跡 258 か所について検討を行うとと

もに、前年度から繰り下げた吉備中央町所在の城館跡 77 か所の現地調査及び報告書作成に着手した。また 5 月 1 日（木）には、当該年度の調査協力員等 4 名を委嘱した。10 月 15 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、調査計画の変更を協議するとともに、調査報告書の作成案について協議した。また、岡山市勝尾山城跡において現地指導を受けた。3 月 13 日（金）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして、24 日（火）には現地調査、27 日（金）には文献調査と城館関連地名調査を終了し、31 日（火）に事業を完了した。

平成 27 年度

調査対象とした岡山市、美作市、勝田郡奈義町、久米郡美咲町、英田郡西粟倉村所在の城館跡 274 か所について情報収集を行い、4 月から現地調査と関連文献・地名調査及び報告書作成に着手した。5 月 1 日（金）には、当該年度の調査協力員等 4 名を委嘱した。10 月 7 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、備中高松城合戦の舞台となった岡山市宮路山城跡において現地指導を受けた。3 月 14 日（月）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。18 日（金）には現地調査、25 日（金）には関連文献・地名調査を終了し、31 日（木）に事業を完了した。

平成 28 年度

調査対象とした笠岡市・井原市・浅口郡里庄町・真庭市・真庭郡新庄村・久米郡久米南町所在の城館跡 410 か所について検討を行い、4 月から現地調査及び報告書作成に着手した。また 4 月 28 日（木）には、当該年度の調査協力員 4 名を委嘱した。5 月 9 日（月）から、城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 19 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、八浜合戦の陣地となった玉野市両児山城跡において現地指導を受けた。2 月 22 日（水）に城館関連の文献・地名調査を、3 月 13 日（月）には現地調査を終了した。3 月 2 日（木）、文化庁記念物課 近江調査官に調査状況を報告するとともに、同所にて開催された「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」において県内の代表的な城館跡を紹介した。17 日（金）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして 31 日（金）、調査記録の整理を終えて事業を完了した。

平成 29 年度

4 月から、津山市・総社市・小田郡矢掛町・苫田郡鏡野町に所在する城館跡 400 か所の情報収集を行い、現地調査及び報告書作成に着手した。6 月 8 日（木）には当該年度の調査協力員 5 名を委嘱し、29 日（木）から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 11 日（水）、真庭市久世公民館において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、真庭市陣山城跡において現地指導を受けた。3 月 1 日（木）には現地調査を、7 日（水）には関連文献・地名調査を終了した。3 月 14 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。3 月 30 日（金）には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成 30 年度

新見市・高梁市・倉敷市・浅口市・都窪郡早島町に所在する 276 か所の城館跡を対象に調査を行った。4 月から、対象城館跡の情報収集を行うとともに調査及び報告書作成に着手した。5 月 18 日（金）には当該年度の調査協力員 5 名を委嘱し、6 月 20 日（水）から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 10 日（水）、倉敷市ライフパーク倉敷において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、倉敷市黒山城跡において現地指導を受けた。3 月 15 日（金）、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。3 月 19 日（火）には現地調査を、20 日（水）には関連文献・地名調査を終了した。3 月 29 日（金）には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成 31（令和元）年度

4 月 1 日（月）から報告書作成・編集を開始した。作業は、城館跡と文献の調査に関する前年度までの整理作業結果に検討を加え、その成果を備前・備中・美作の旧国単位 3 分冊への編集する計画で進めた。7 月 24 日（水）古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、報告書作成について協議した。また、矢掛町茶臼山城跡において現地指導を受けた。2 月 28 日（金）に 3 分冊、総頁数約 1,600 頁の報告書を刊行した。3 月 31 日（火）には報告書作成作業を終了し、事業を完了した。（亀山・髙田）

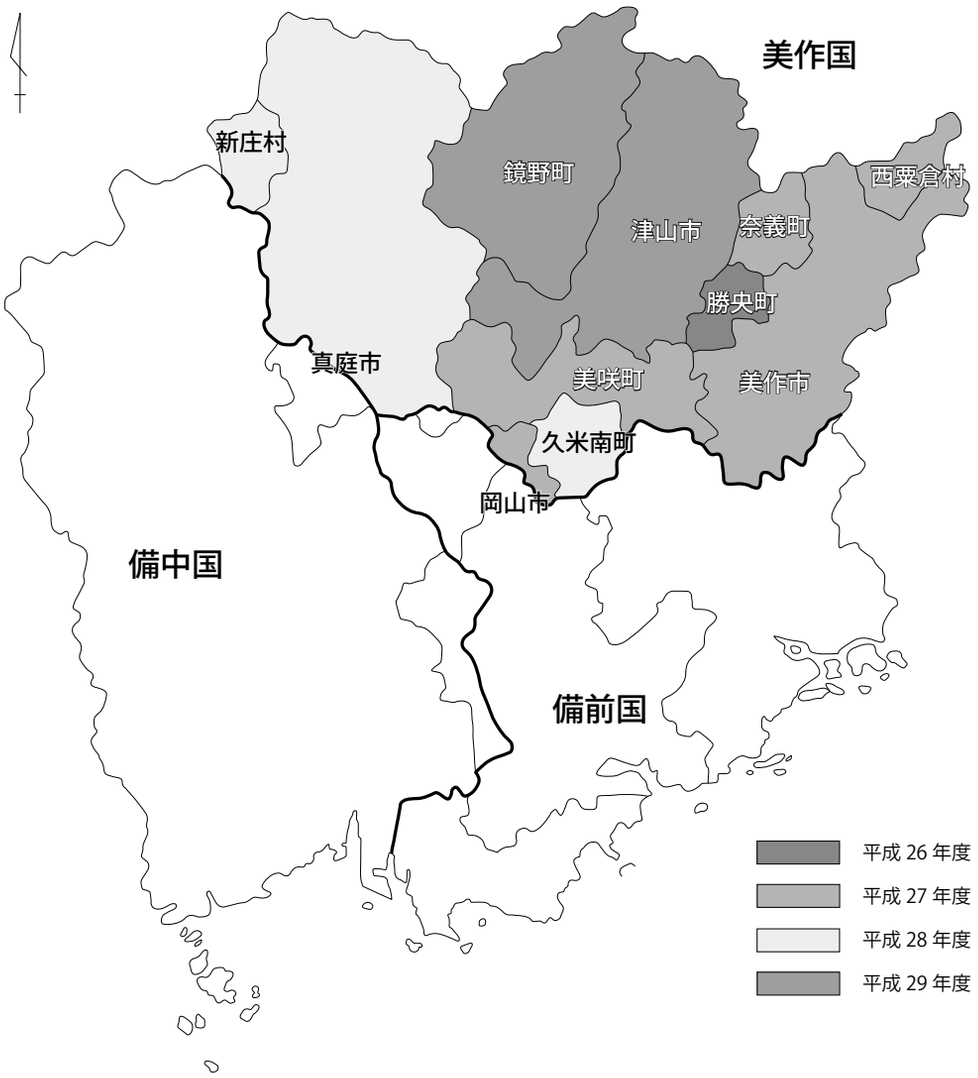
○美作国の現地調査

平成 26 年度の勝田郡勝央町の 26 地点を皮切りに、平成 27 年度は、美作市・英田郡西粟倉村・勝田郡奈義町・久米郡美咲町・岡山市（旧建部町の一部）の 180 地点、平成 28 年度は真庭市の大半・真庭郡新庄村・久米郡久米南町の 126 地点、平成 29 年度は津山市・苫田郡鏡野町の 161 地点の調査を実施した。合計では 493 地点の調査を実施し、結果 406 城の城館関連遺構を確認している。また、近世地誌に記載があるがその実態が明らかではない城館などが、他にも 253 か所存在する。

岡山県全体では、1,423 地点の調査を実施し、1,126 城の城館関連遺構を確認している。（備前国：446 地点の調査を実施、278 城の城館関連遺構を確認。備中国：484 地点の調査を実施、442 城の城館関連遺構を確認。）

写真 1　調査風景（苫田郡鏡野町 岩棚城跡）

写真 2　調査事業会議（平成 29 年度）



第 1 図　美作国調査実施年度

表 1　岡山県中世城館総合調査事業 7 か年計画

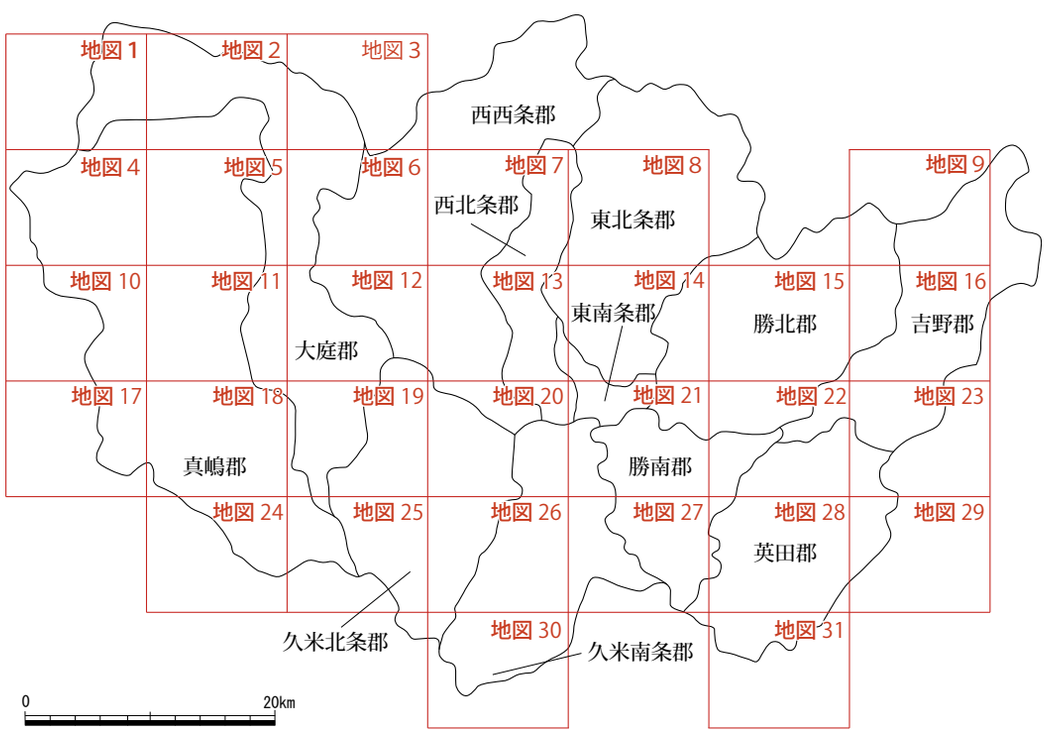
年度	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元
対象地域	備　前（446）						報告書刊行
		美　作（493）					
				備中（484）			
小計	244	265	211	243	244	216	
調査該当市町村名	玉野市42	岡山市182	岡山市39	笠岡市37	総社市54	倉敷市63	
	備前市34	吉備中央町57	美作市87	井原市50	矢掛町29	高梁市54	
	瀬戸内市36	勝央町26	奈義町30	里庄町 2	津山市111	新見市77	
	赤磐市86		西粟倉村 4	真庭市131	鏡野町50	浅口市20	
	和気町46		美咲町51	新庄村 2		早島町 2	
				久米南町21			

※網図は美作国関係を示す。

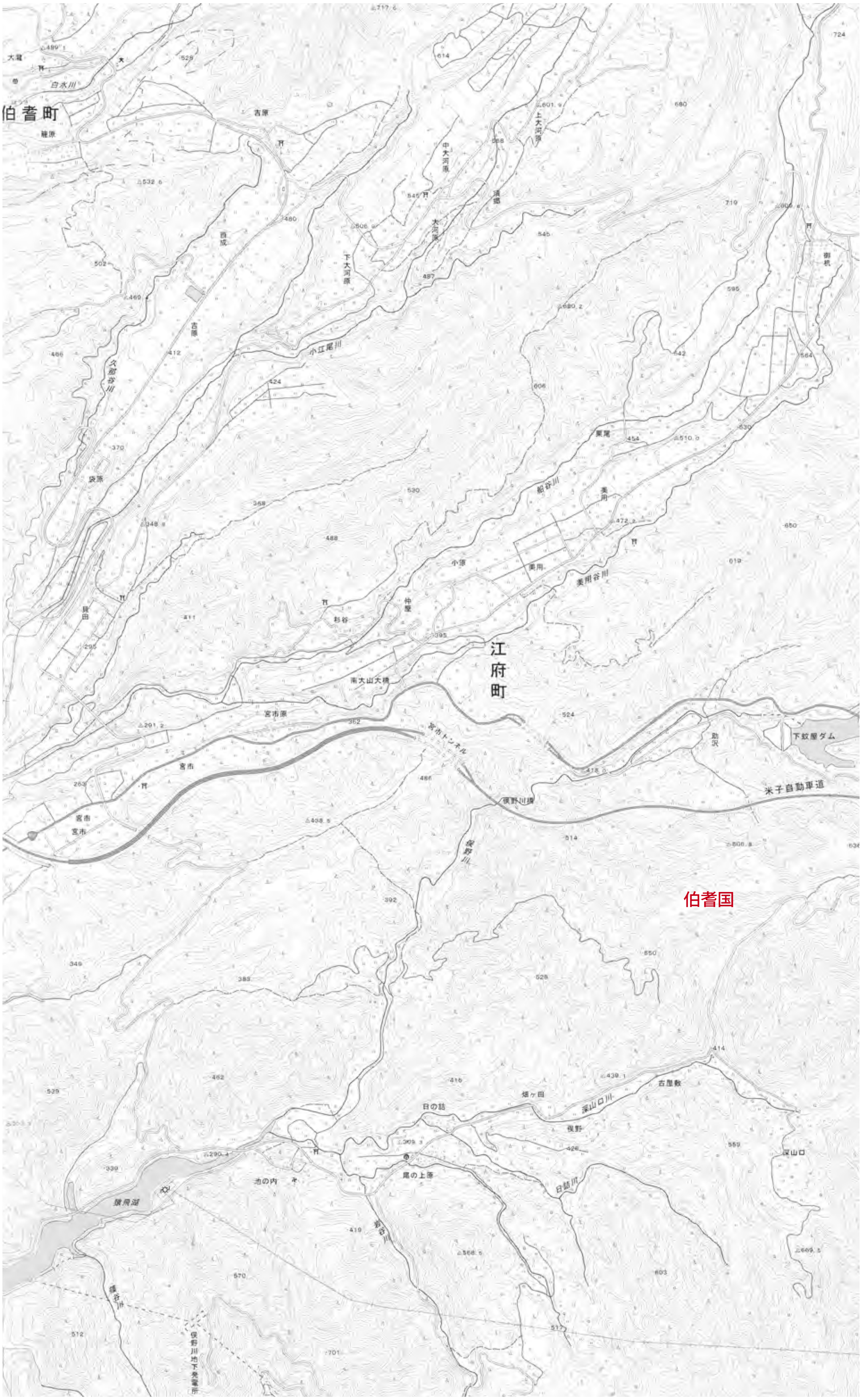
第２章　城館跡の分布図・一覧表

1　分布図

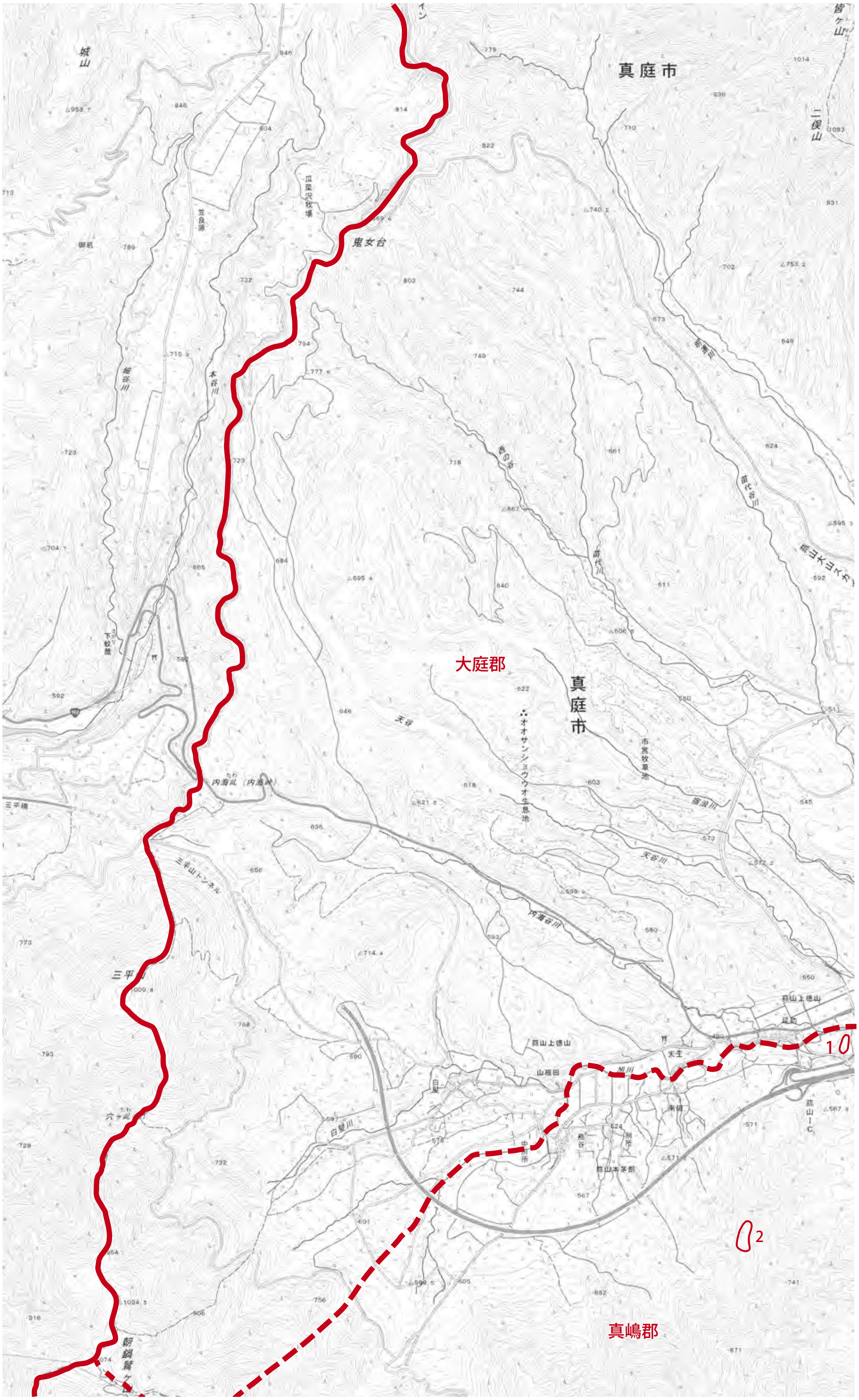
・城館番号は、旧郡を通して番号を付している。
・本巻の収録市町村は、真庭市（旧北房町を除く）、真庭郡新庄村、苫田郡鏡野町、津山市、久米郡美咲町（旧旭町の一部を除く）、久米郡久米南町、岡山市（旧建部町の一部）、勝田郡奈義町、勝田郡勝央町、美作市、英田郡西粟倉村である。
・城館跡の範囲は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」を基に赤の実線で示している。すでに消滅しているものは、赤の点線で示している。また地形改変等により、城域が不明瞭なものは赤丸で示している。
・旧国境を実線で、旧郡境は点線で示している。
・旧国・旧郡の境界線は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館『旧高旧領取調台帳データベース』に記された旧村境を基にしており、おおむね新郡区編成時（明治 11 年）のものである。



第 2 図　　城館跡索引図（１/600,000）


伯耆町
江府町
伯耆国
白水川
久部谷川
小江尾川
船谷川
美用谷川
南大山大橋
宮市原
宮市
宮市トンネル
俣野川橋
俣野川
下蚊屋ダム
米子自動車道
深山口川
深山口
古屋敷
日の詰
日詰川
池の内
俣野川地下発電所

地図 1

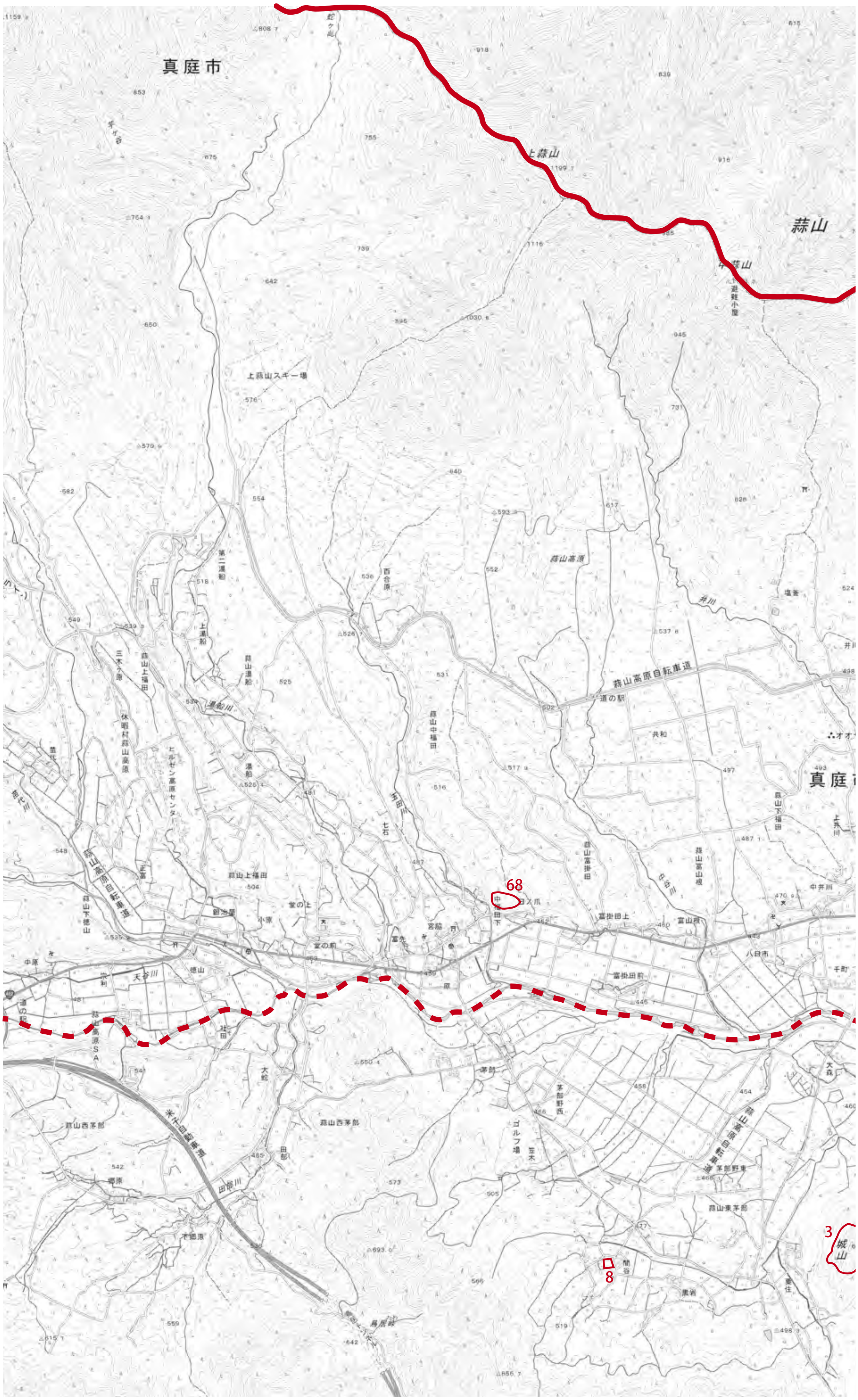


真庭市
大庭郡
真庭市
真嶋郡
鬼女台
城山
二俣山
笠良原
本谷川
三平山トンネル
内海谷川
天谷川
オオサンショウオ生息地
市営牧草地
白髪川
蒜山上徳山
山根田
1
2

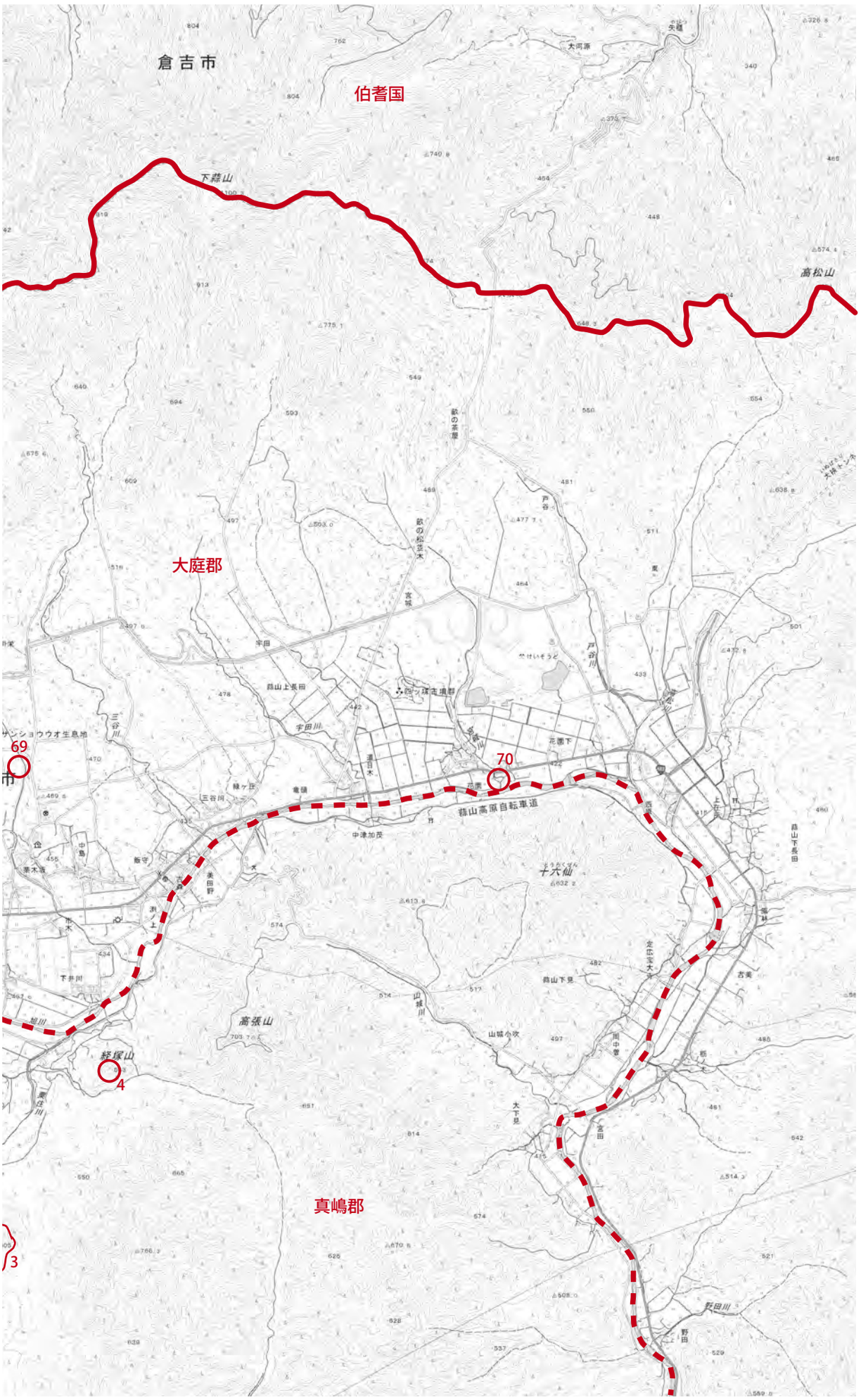
→
2

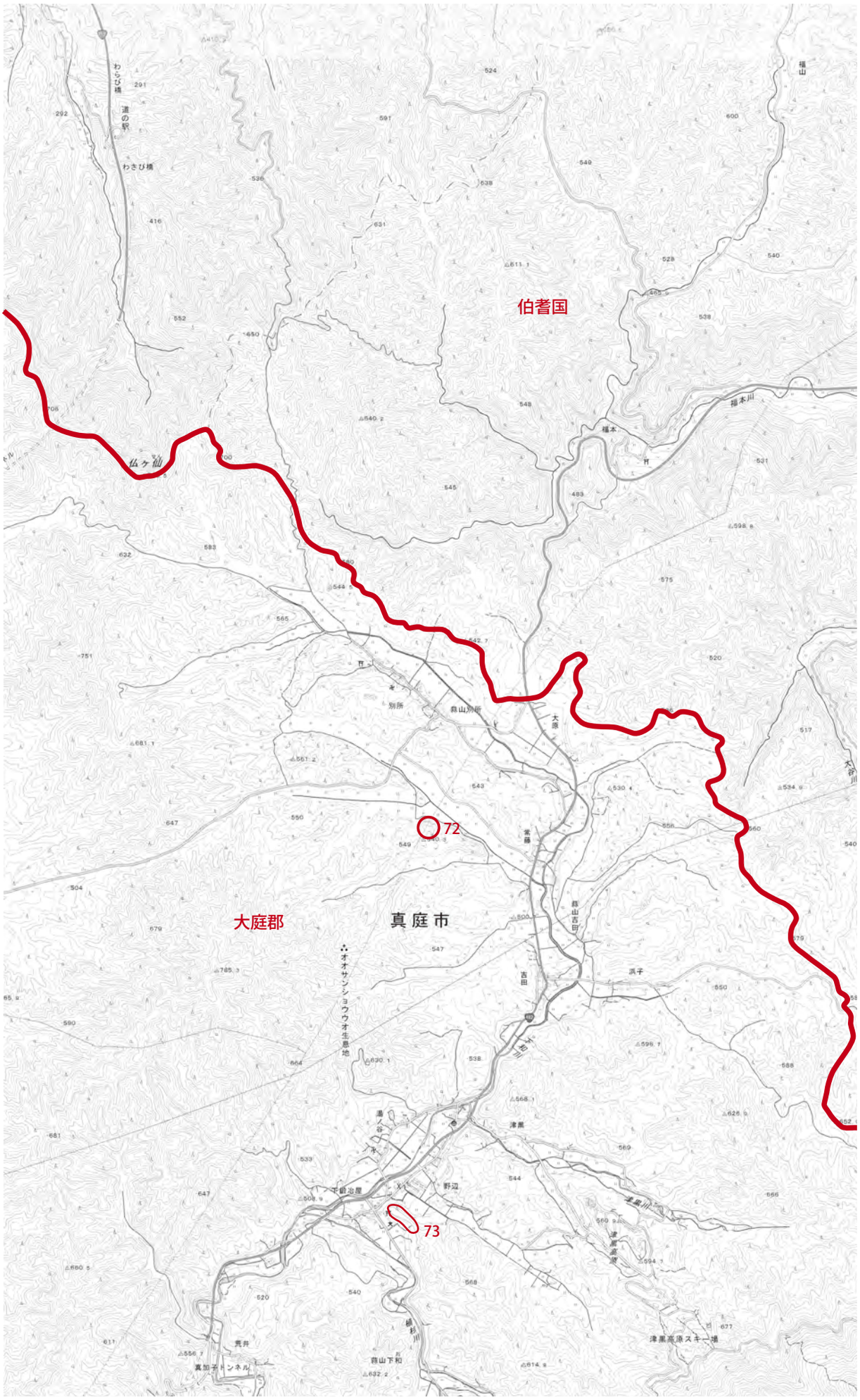
4
↓

← 1


真庭市
上蒜山
蒜山
中蒜山
上蒜山スキー場
蒜山高原
蒜山高原自転車道
道の駅
共和
真庭市
蒜山上福田
蒜山中福田
蒜山下福田
休暇村蒜山高原
ヒルゼン高原センター
富掛田上
富山根
八日市
蒜山西茅部
蒜山東茅部
ゴルフ場
米子自動車道
68
8
3
城山

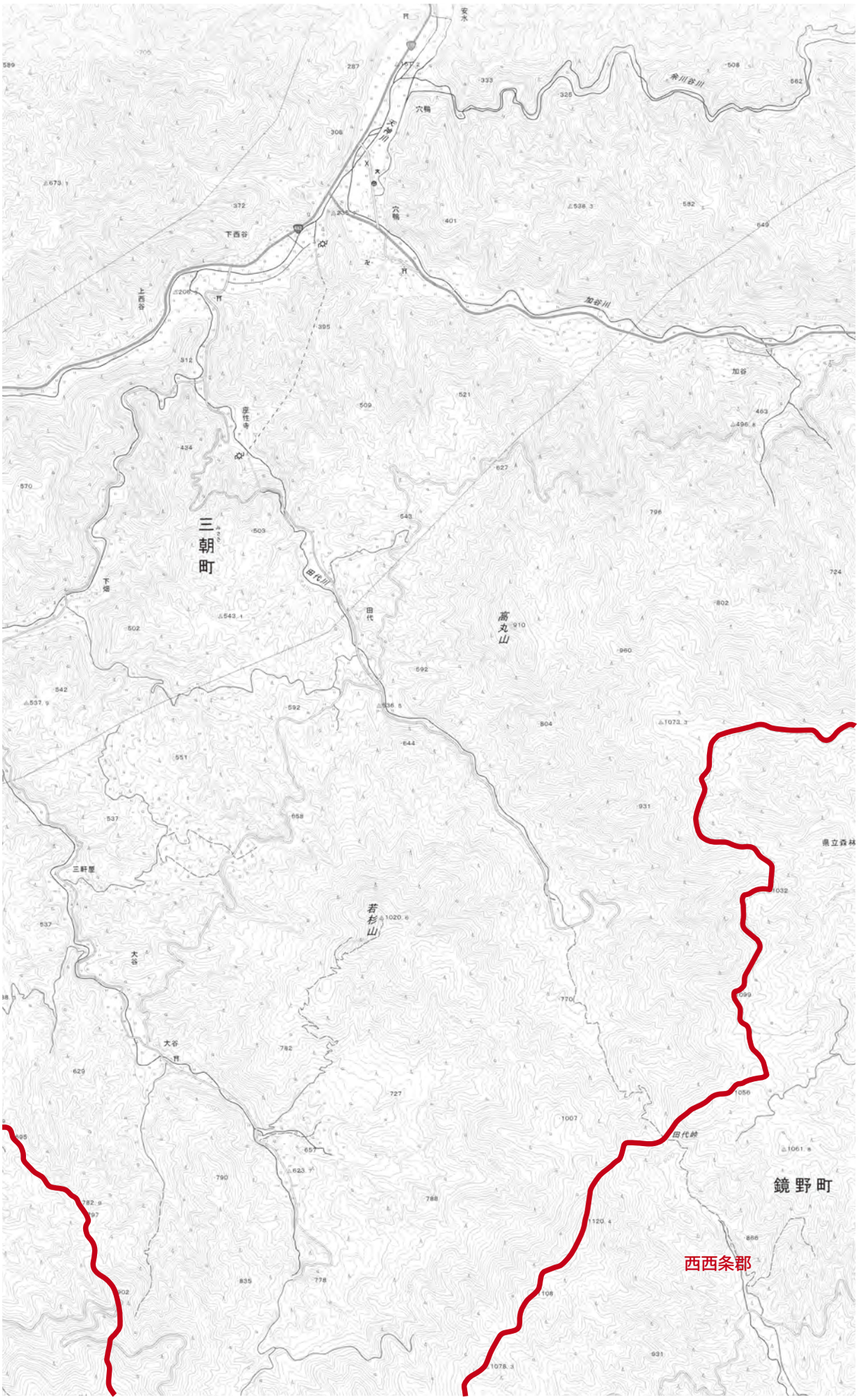
地図 2




伯耆国
大庭郡
真庭市
72
73
仏ケ仙
わさび橋
道の駅
福本
別所
森山別所
大原
常藤
森山吉田
吉田
浜子
オオサンショウウオ生息地
温ノ谷
野辺
津黒
津黒高原スキー場
荒井
真加子トンネル
森山下和
横杉川
大谷川

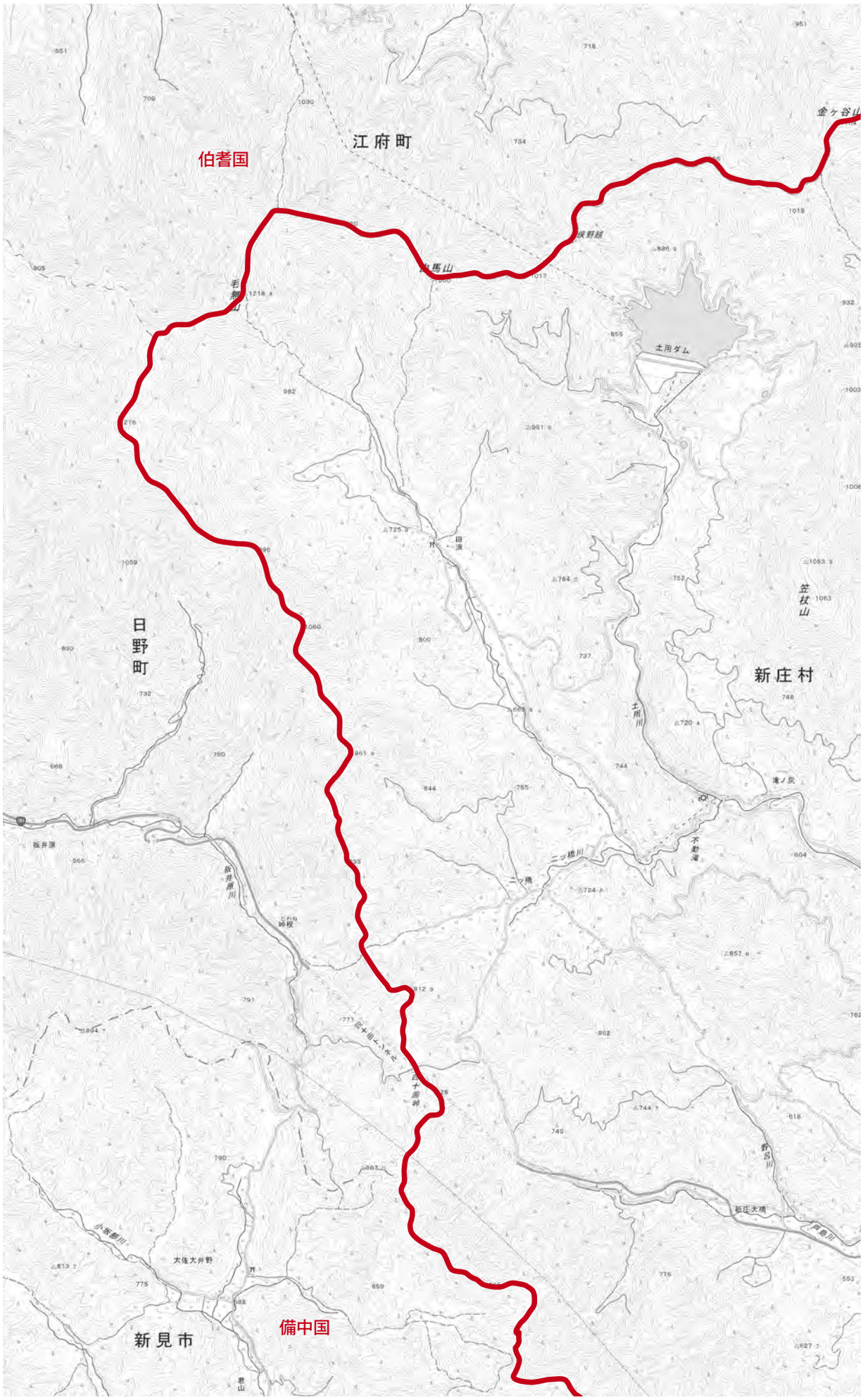
←
2

地図 3



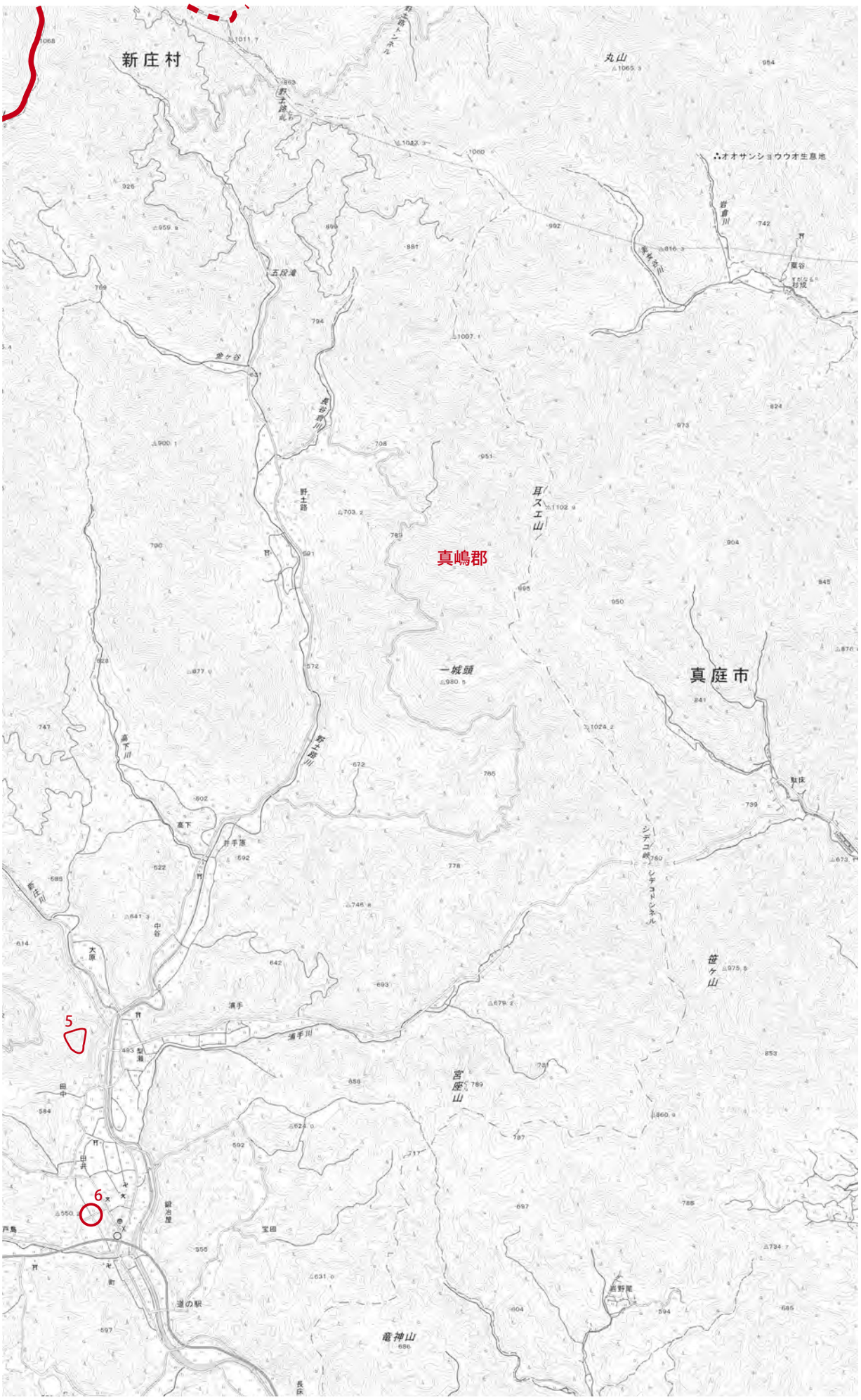
6
↓

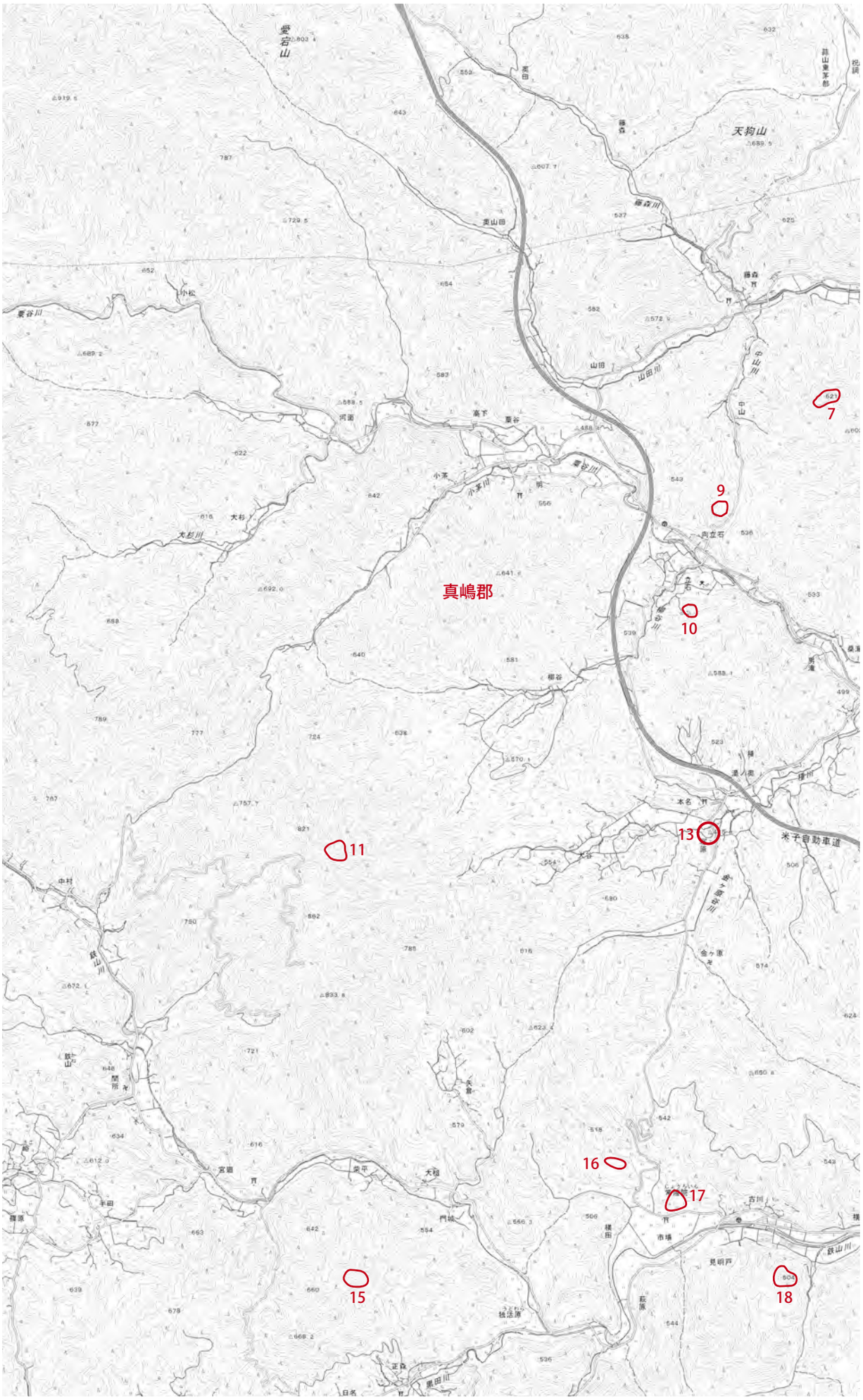
↑
1



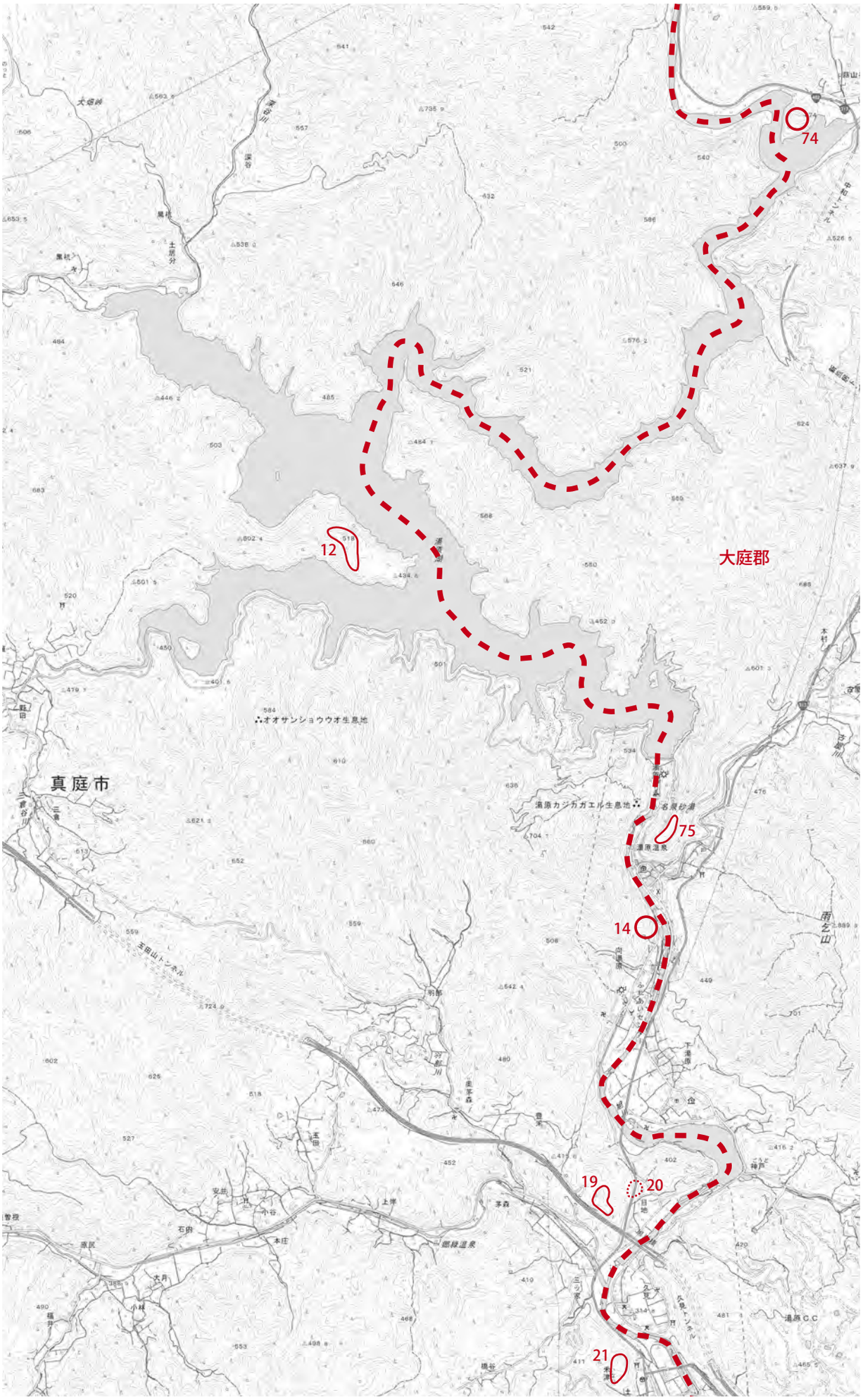
伯耆国
江府町
金ヶ谷山
土用ダム
日野町
新庄村
笠杖山
土用川
滝ノ尻
不動滝
ニッ橋川
ニッ橋
板井原
板井原川
岭根
野呂川
新庄大橋
戸島川
小阪部川
大佐大井野
新見市
備中国

地図 4

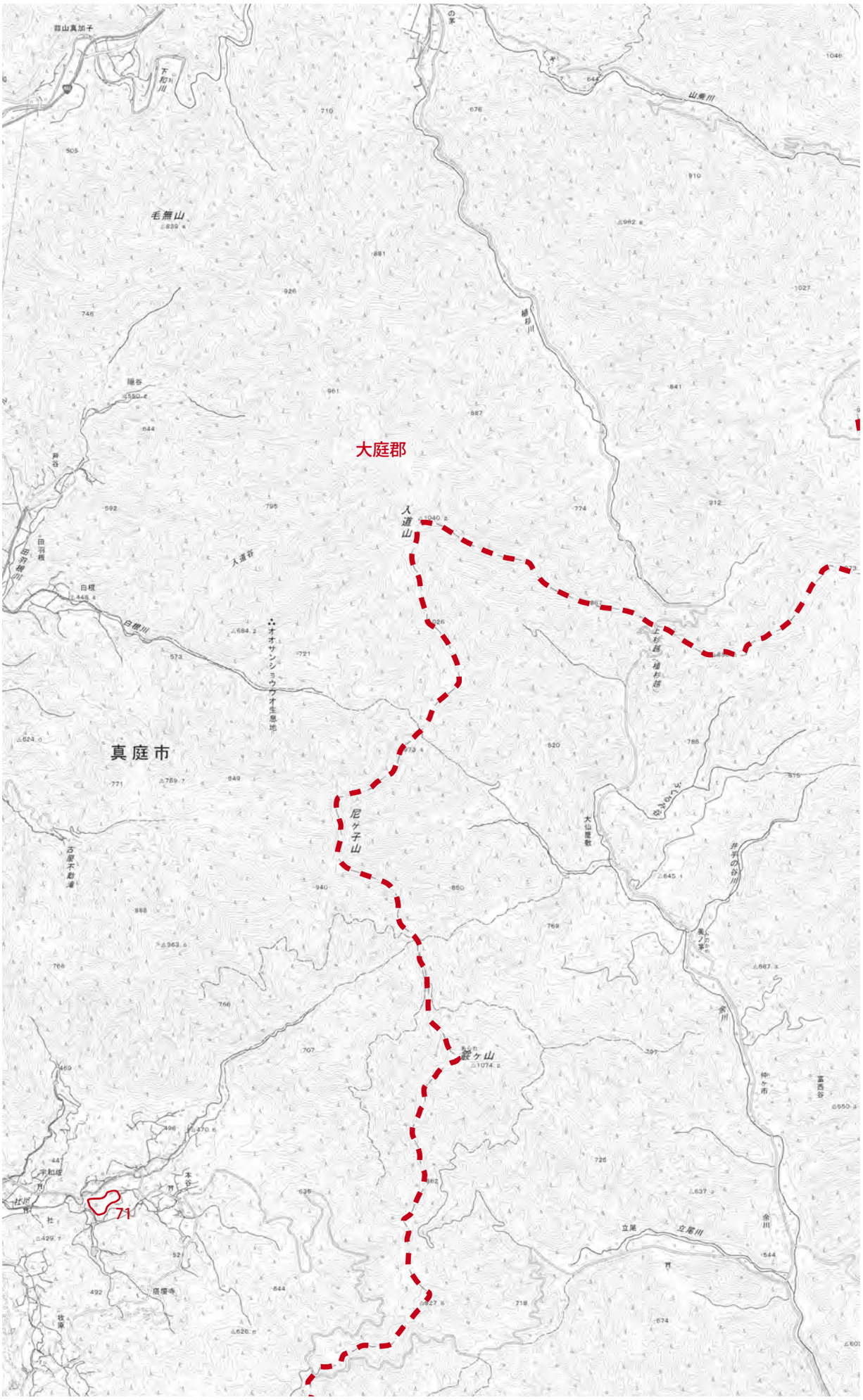



↑
2
←
4
真嶋郡
7
9
10
11
13
15
16
17
18
米子自動車道
天狗山
愛宕山

地図 5

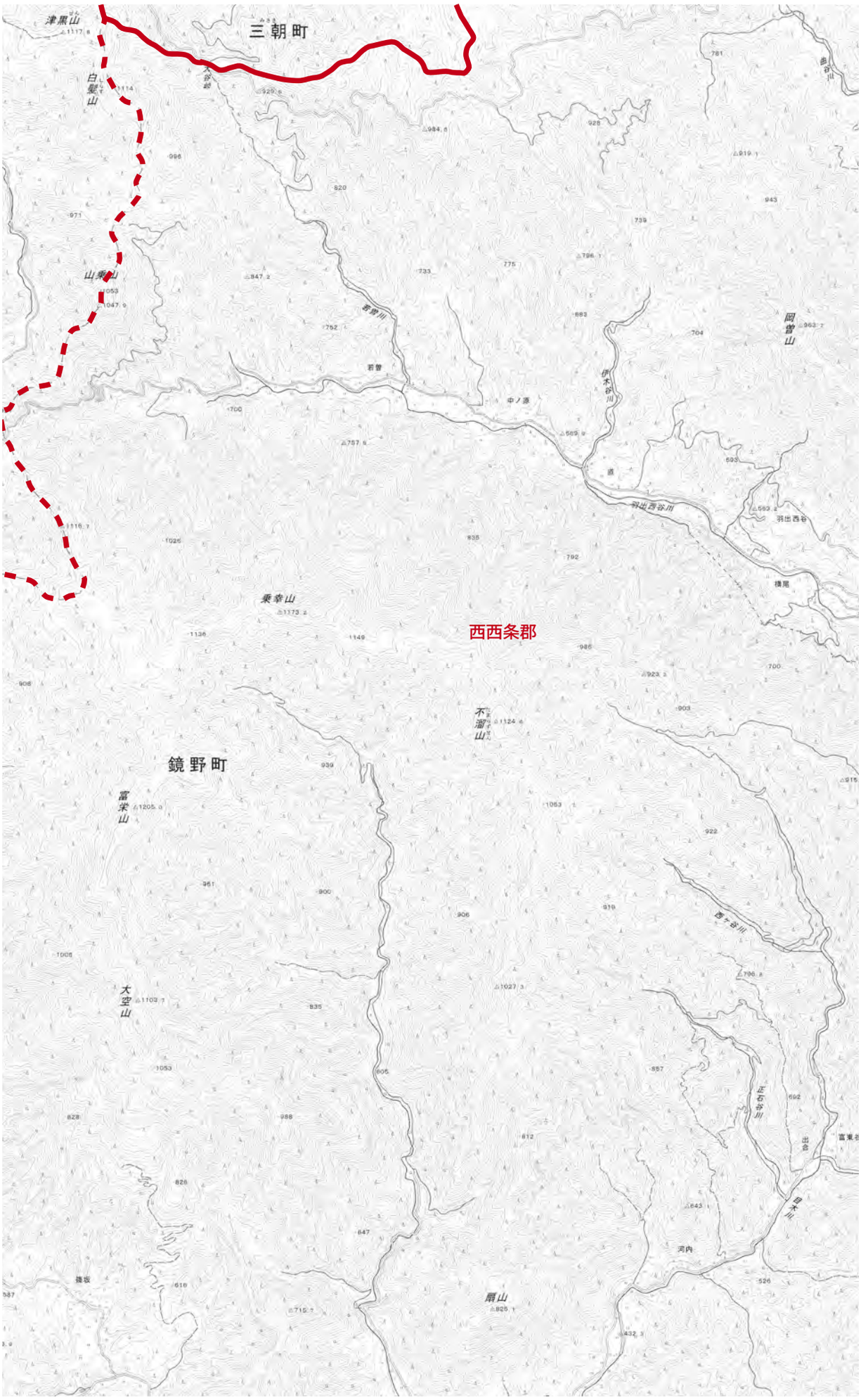


↑
3



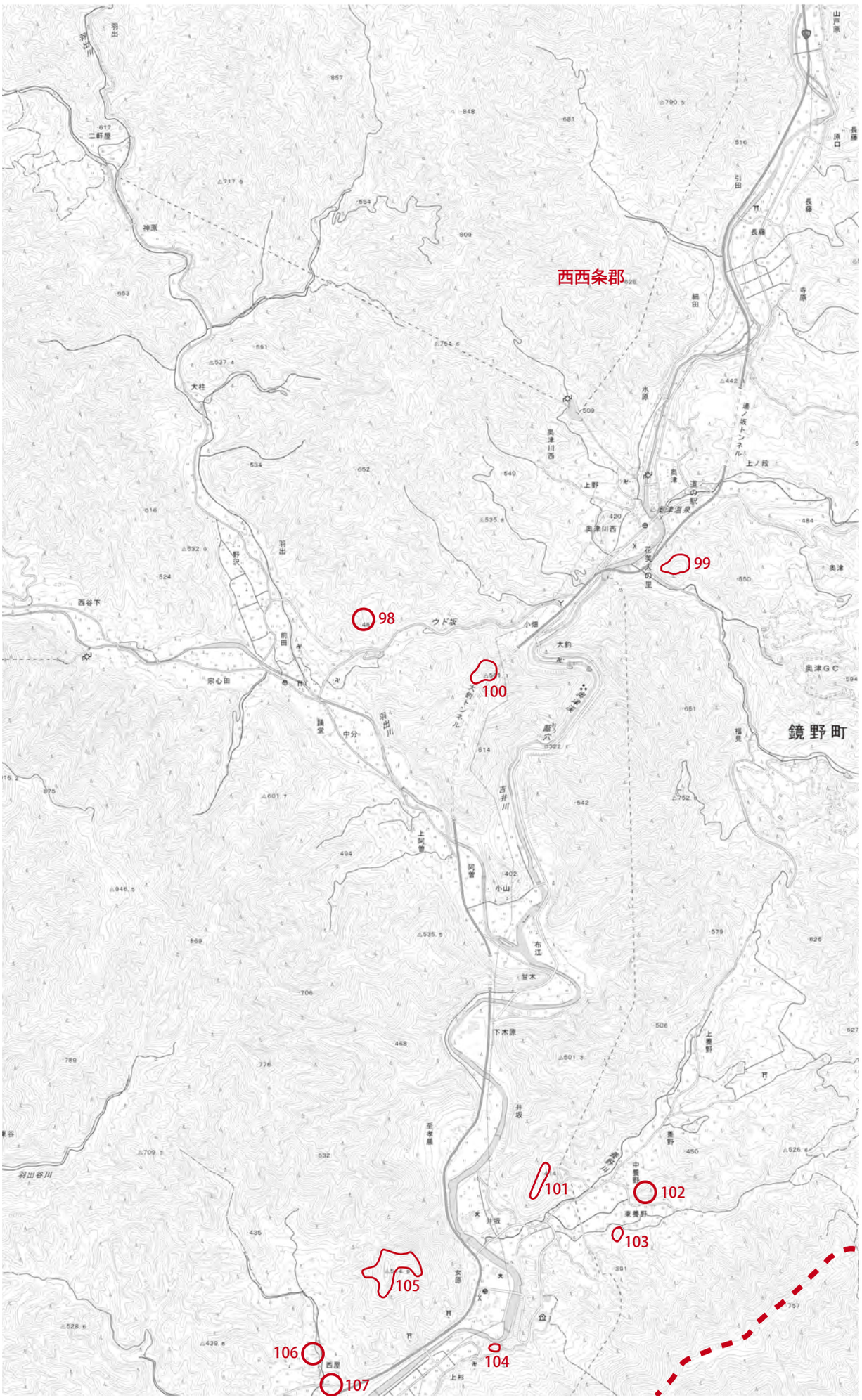
←
5

地図 6

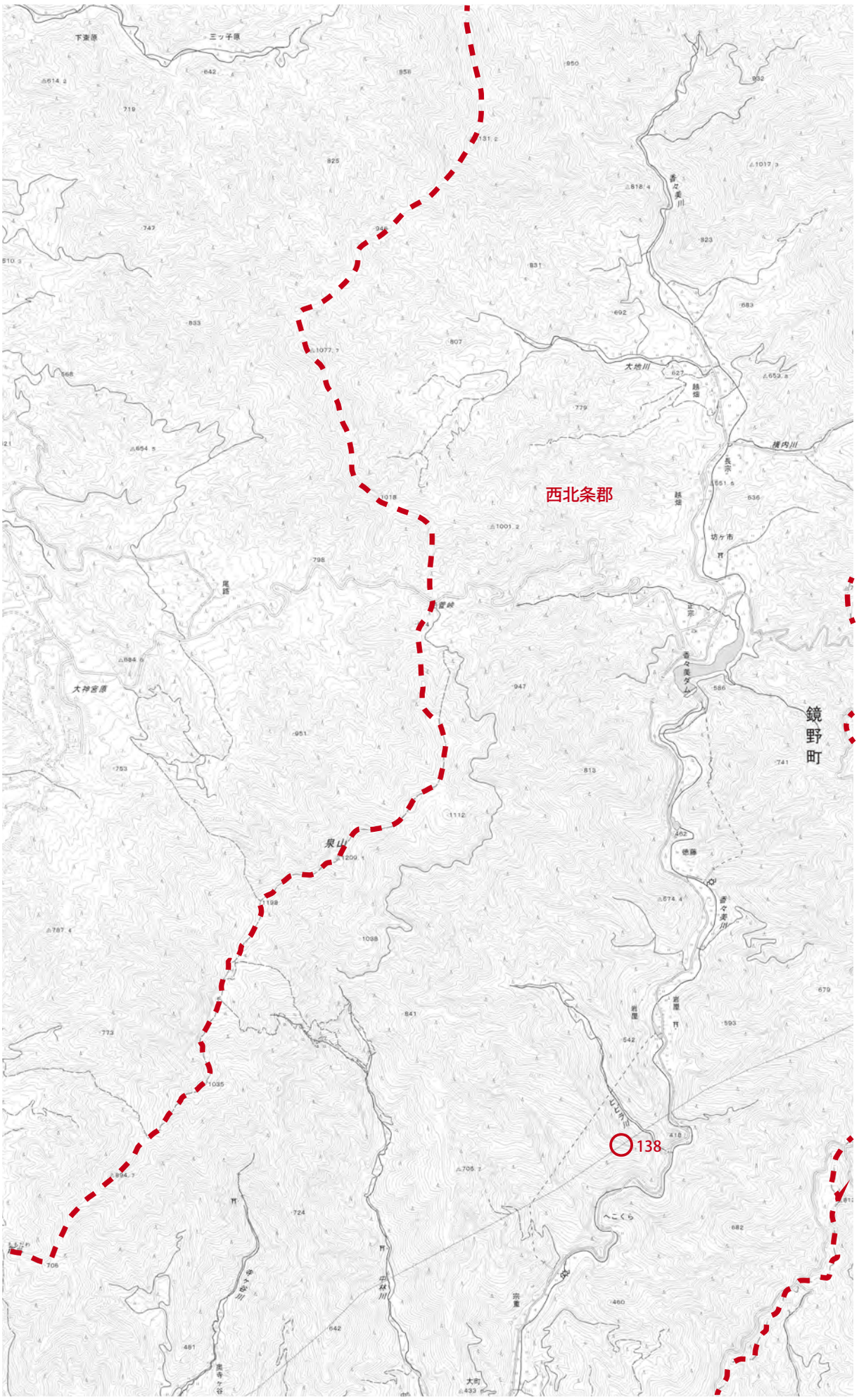

三朝町
津黒山
白髪山
山乗山
若曽川
若曽
中ノ源
伊木谷川
岡曽山
羽出西谷川
羽出西谷
横尾
乗幸山
西西条郡
不溜山
鏡野町
富栄山
大空山
西ヶ谷川
正石谷川
目木川
河内
扇山

→ 7

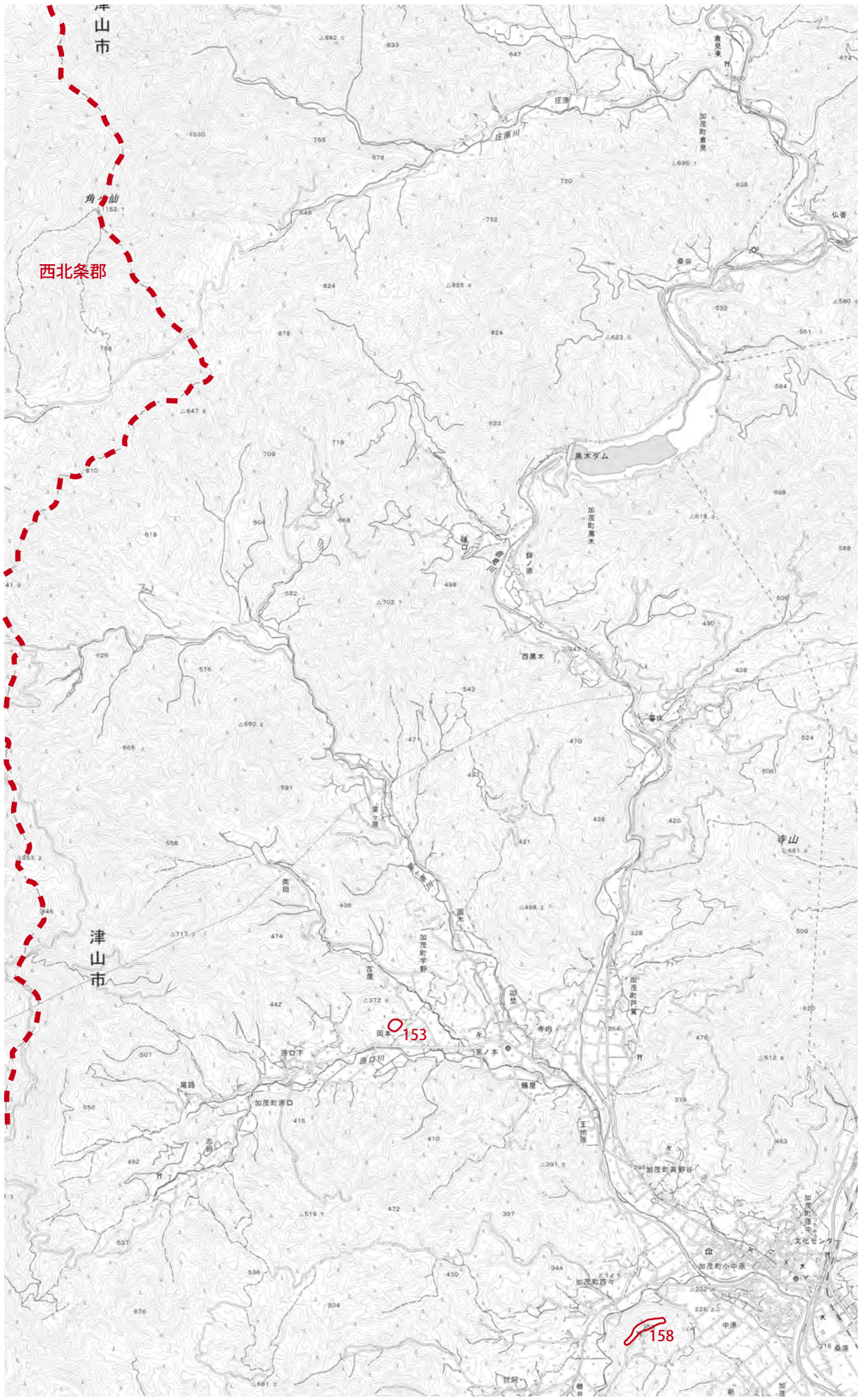
12 ↓


西西条郡
鏡野町
99
98
100
101
102
103
104
105
106
107
←
6

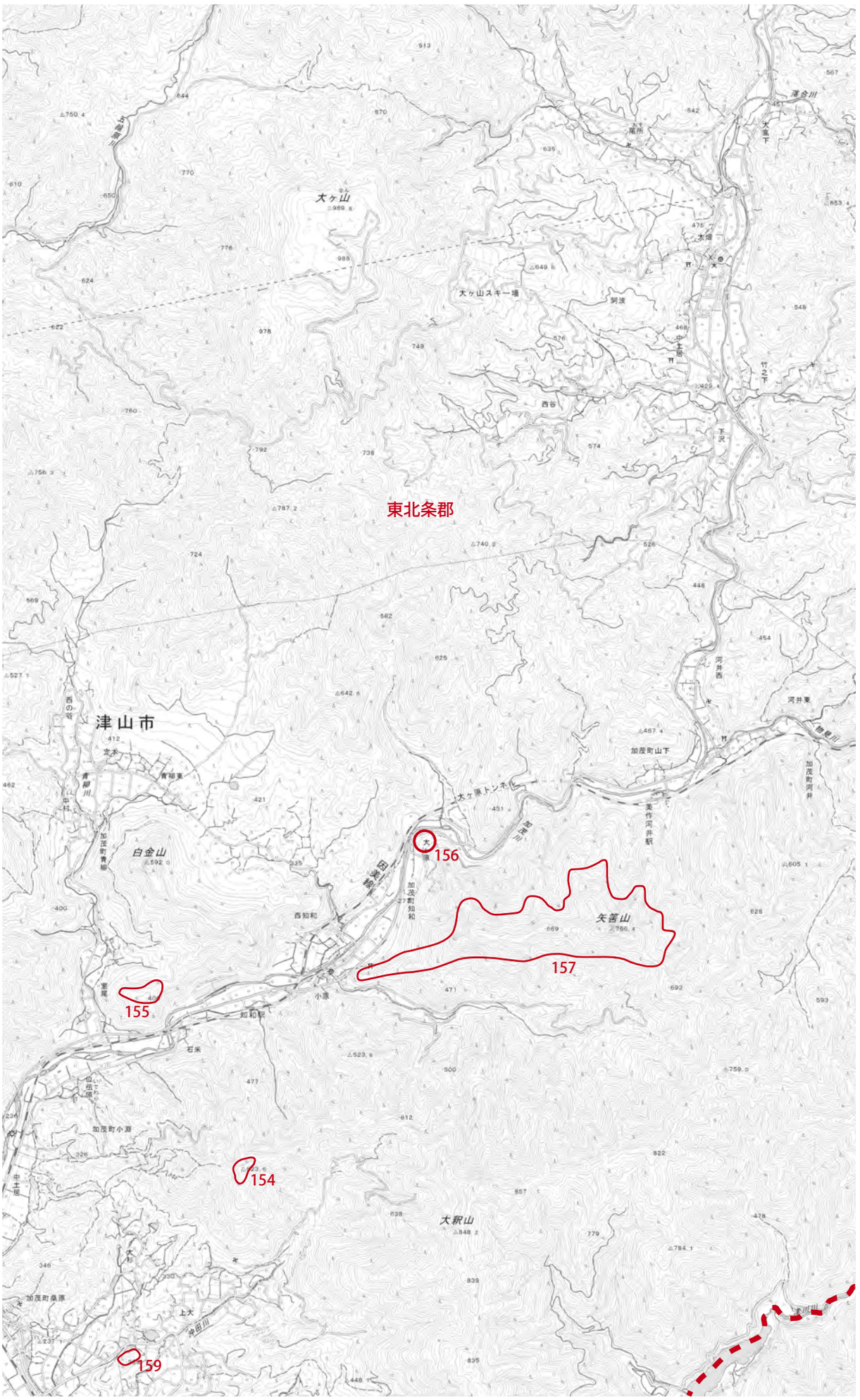
地図 7



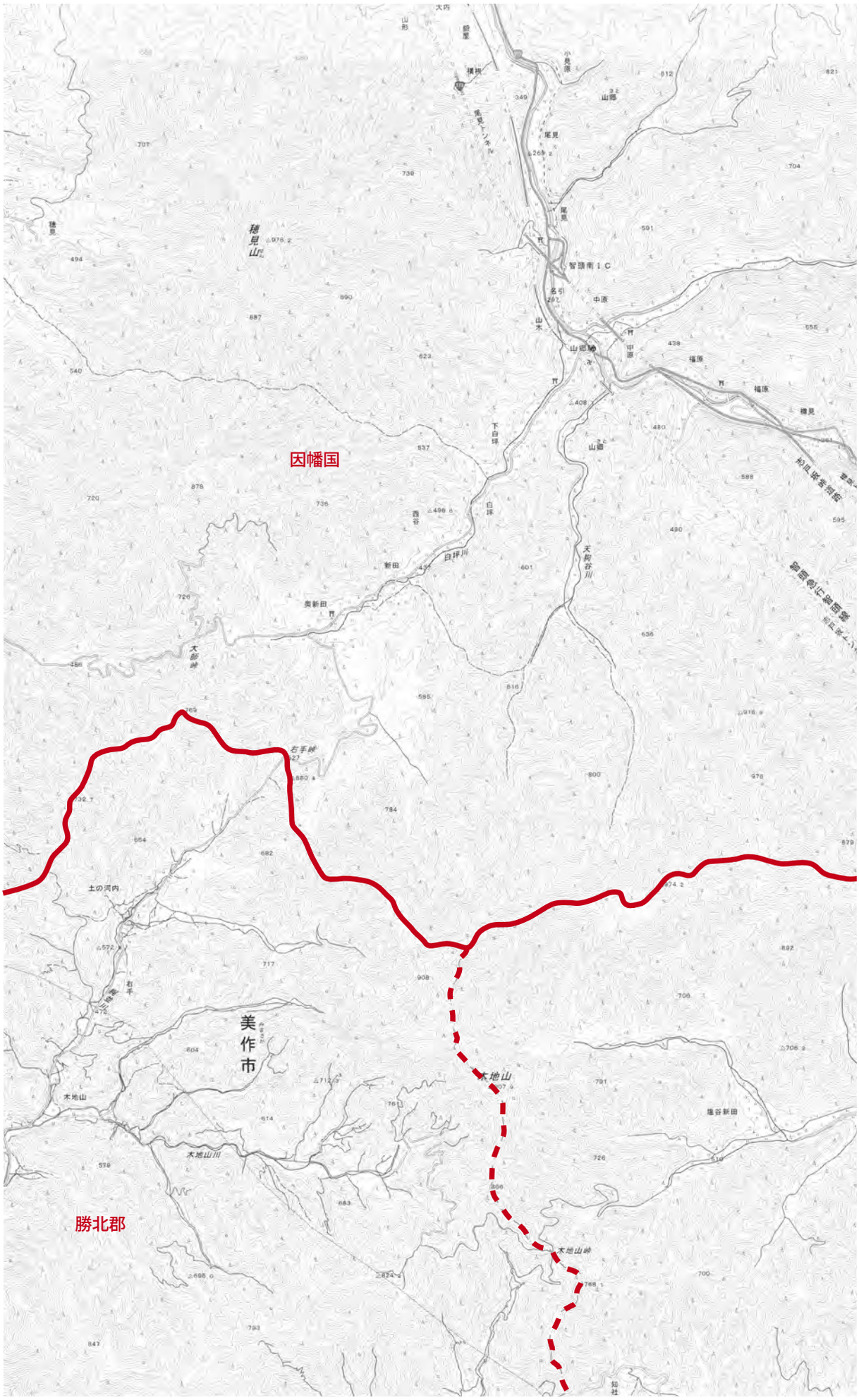
←
7



地図 8



14
↓

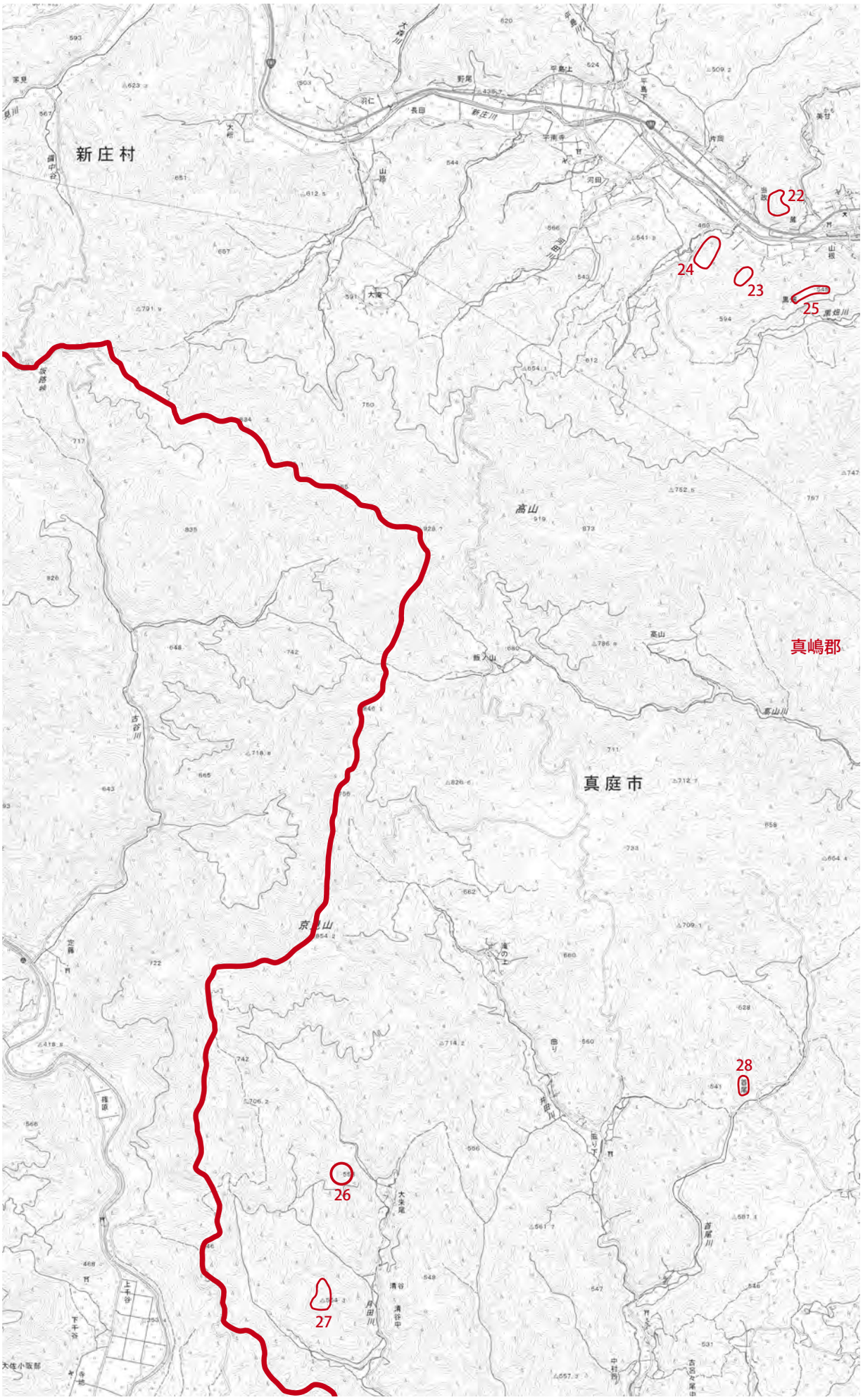

因幡国
勝北郡
美作市
木地山
木地山川
木地山峠
智頭南ＩＣ
山郷
尾見
中原
福原
白坪川
天狗谷川
新田
奥新田
右手峠
土の河内
塩谷新田

地図 9

↑
4

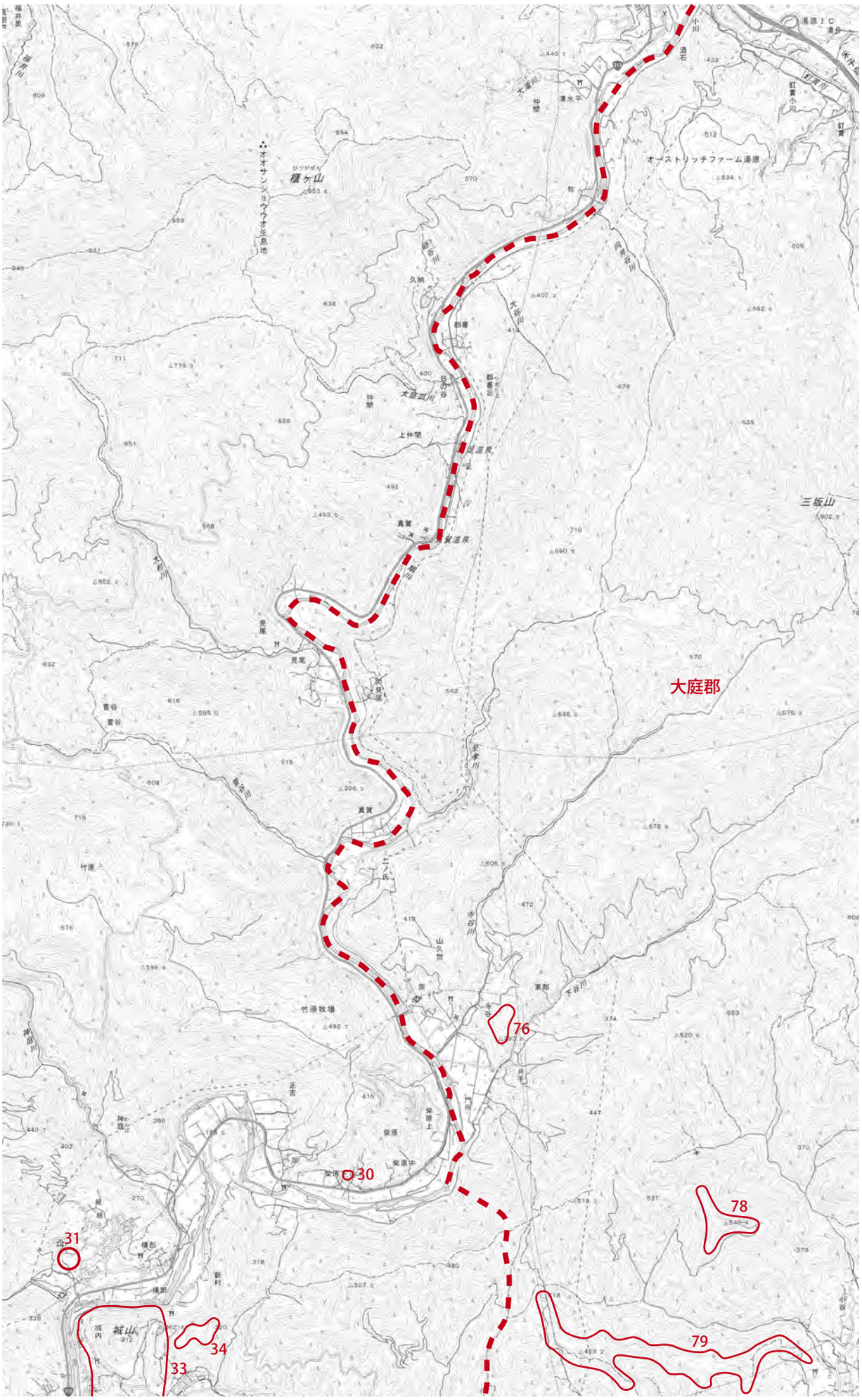
新見市
備中国
硯ヶ山
伏谷
伏谷川
大佐大井野
大井野下組
赤松
大井野川
大佐ダム
大佐ダム湖
つづら畑
つづら畑川
大佐上刑部
実清
大津川
徳定
落合

地図 10



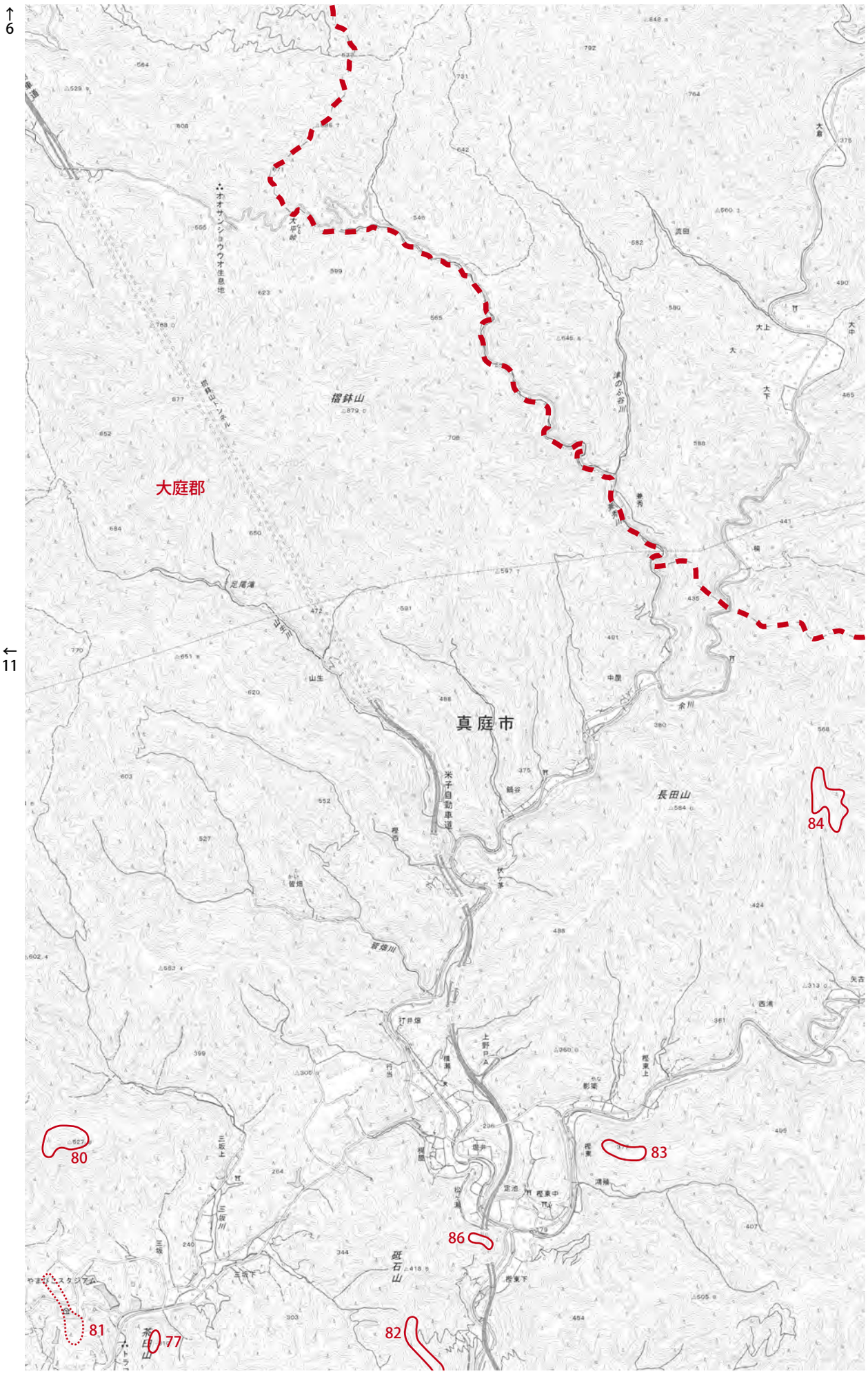
↑
5
←
10
三谷山
星山
真嶋郡
真庭市
29
32

地図 11

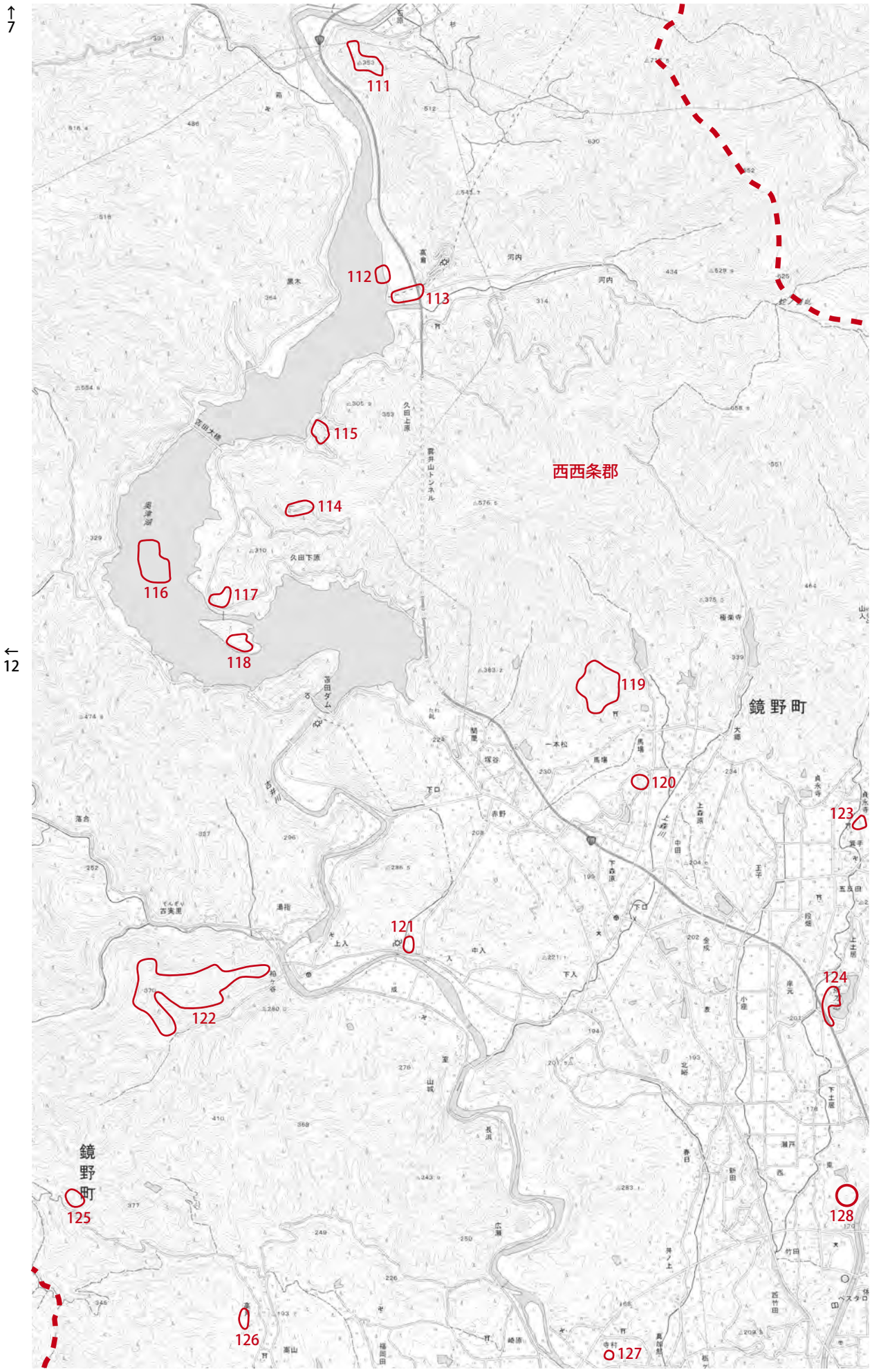


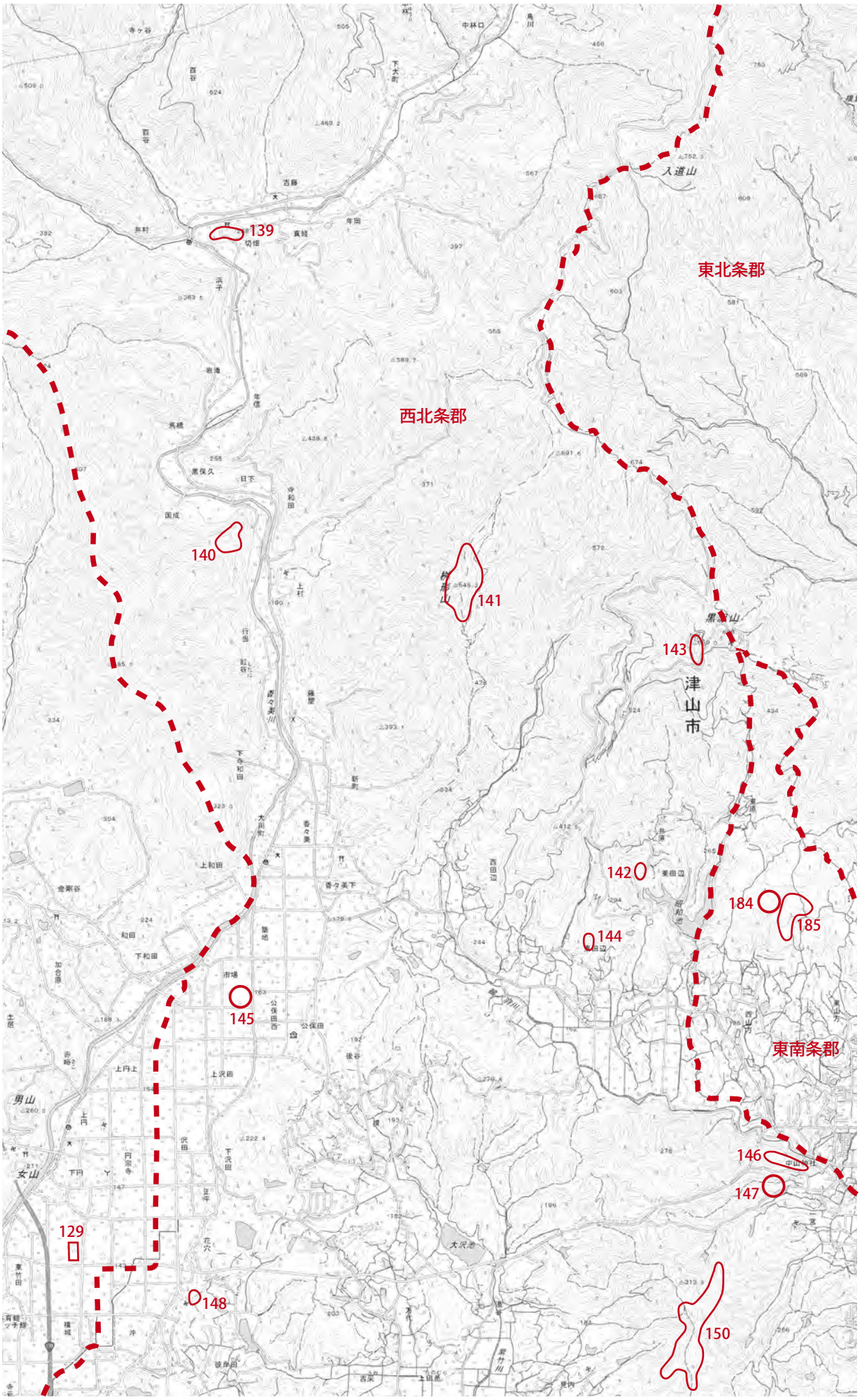
→ 12

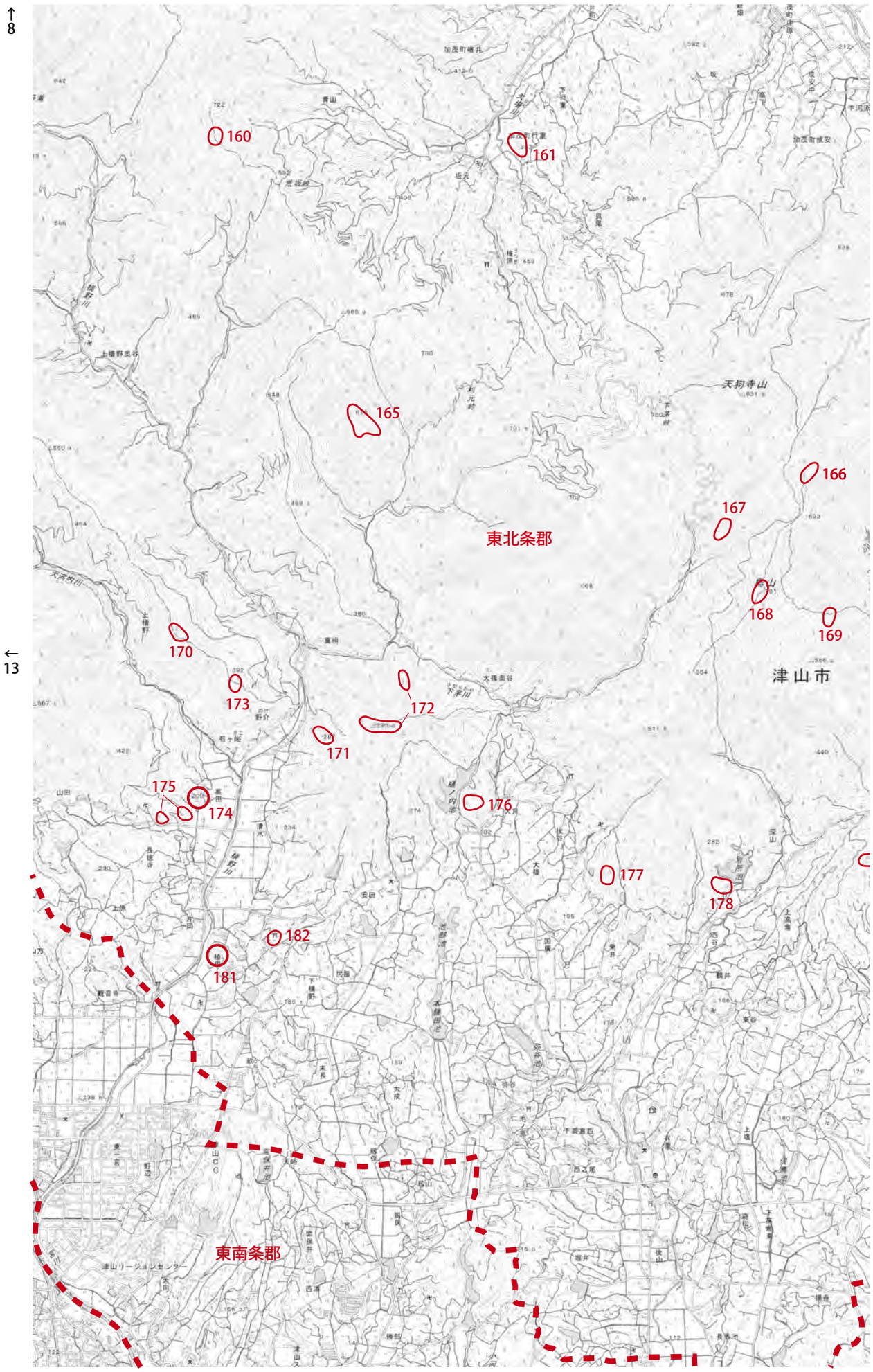
18 ↓


↑
6
←
11
大庭郡
真庭市
擂鉢山
長田山
砥石山
米子自動車道
84
80
83
86
81
77
82

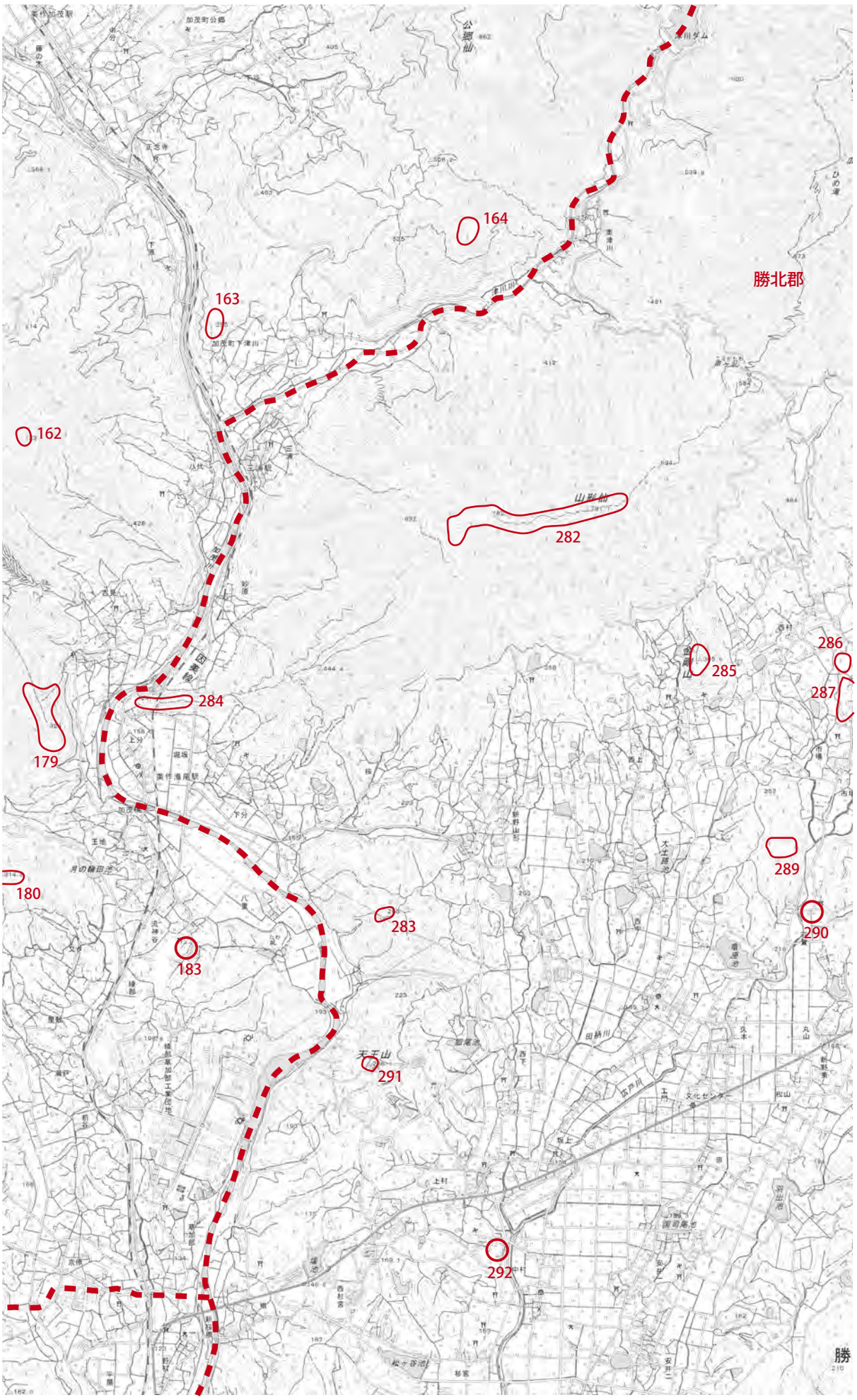
108
109
110
西西条郡
天ガ山
鏡野町
85
久米北条郡
津山市
187
188
→
13
19
↓

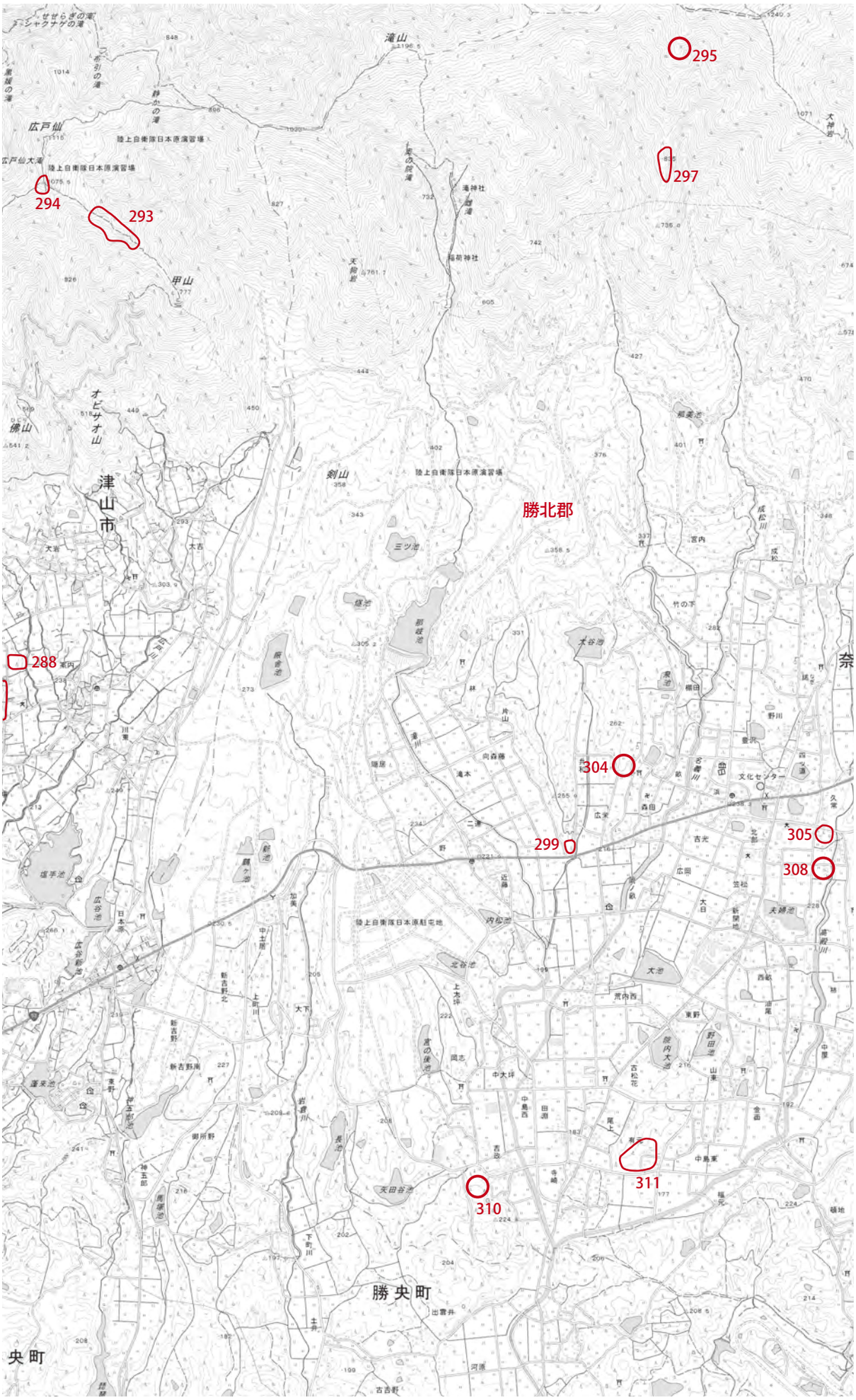

↑
7
←
12
111
112
113
115
114
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
西西条郡
鏡野町
鏡野町


139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
129
150
東北条郡
西北条郡
東南条郡
津山市
184
185
入道山
男山
女山
→14
20↓

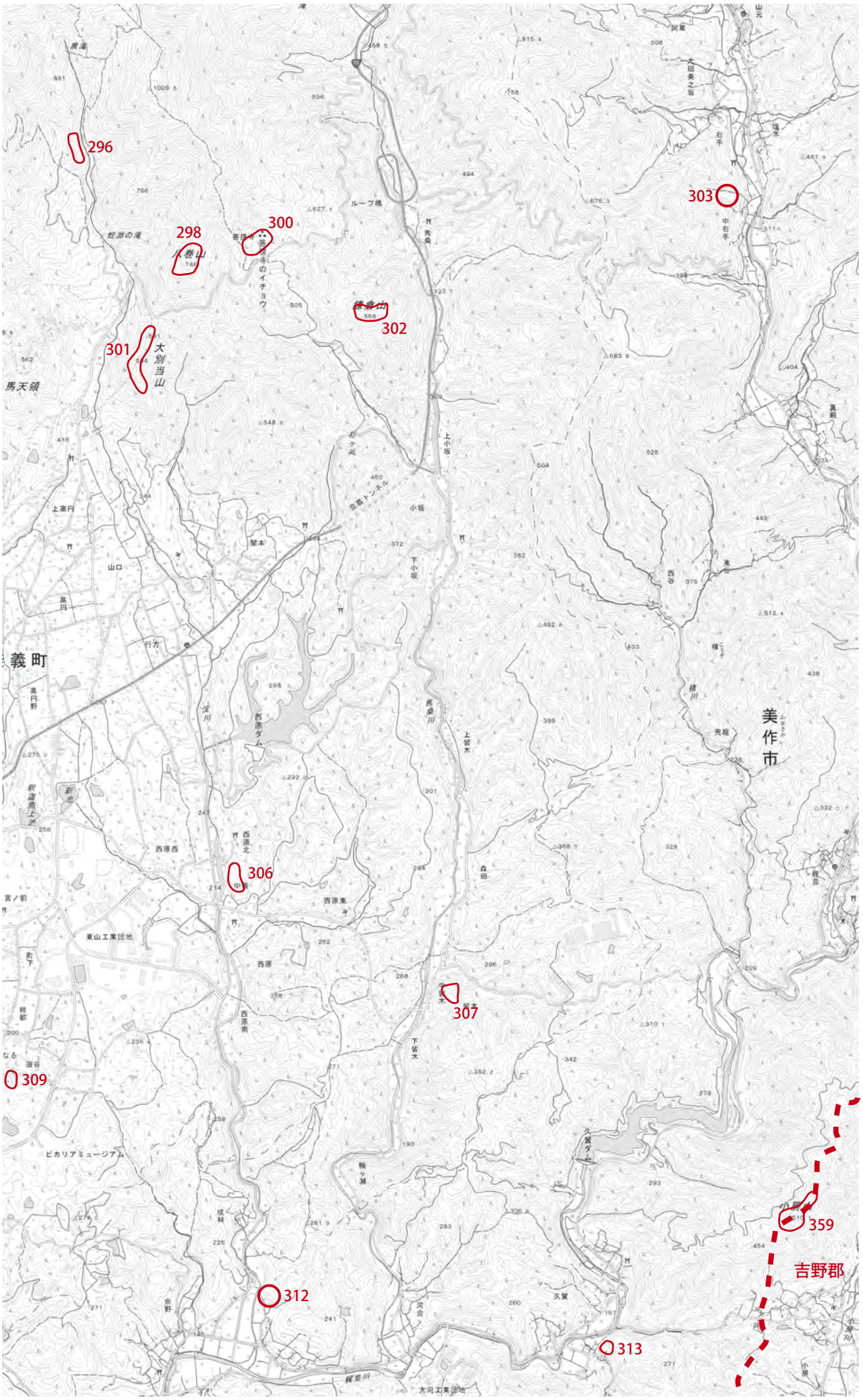

↑
8
←
13
160
161
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
181
182
東北条郡
東南条郡
津山市
天狗寺山

地図 14


勝北郡
162
163
164
179
180
183
282
283
284
285
286
287
289
290
291
292
→ 15
21 ↓

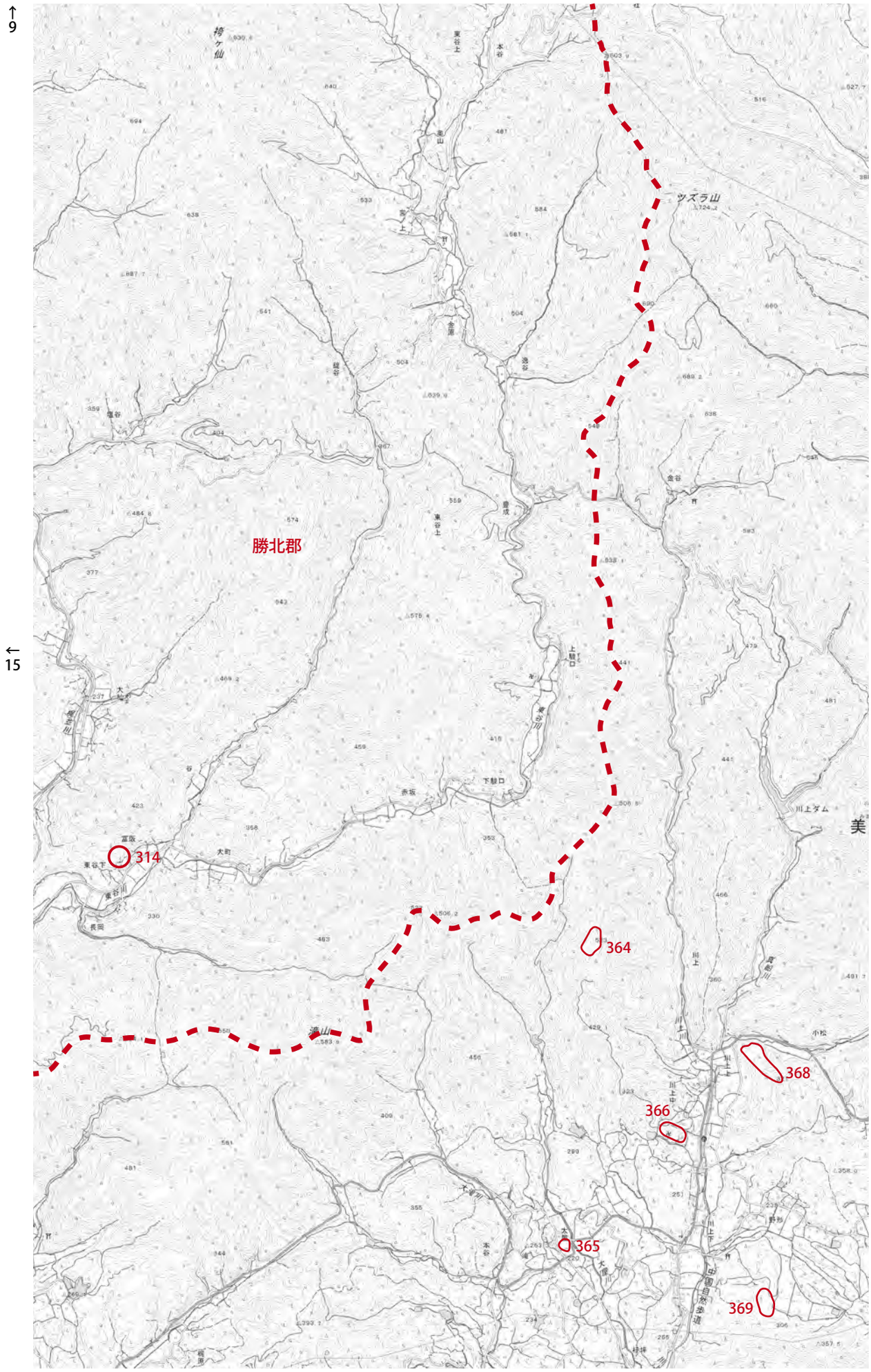

295
297
294
293
288
304
305
299
308
311
310
勝北郡
津山市
勝央町
滝山
広戸仙
甲山
剣山
陸上自衛隊日本原演習場
陸上自衛隊日本原駐屯地
←
14

地図 15

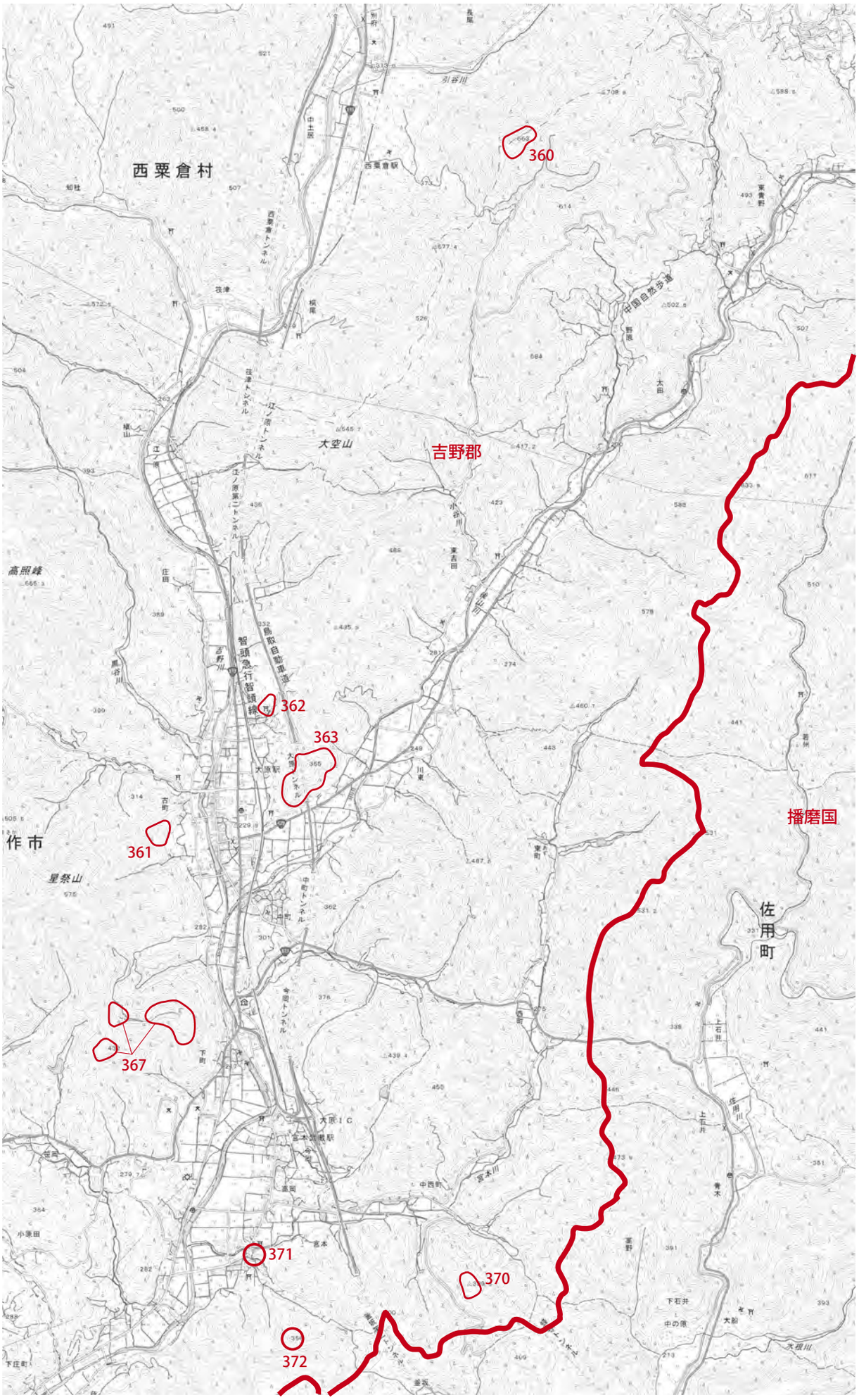

296
298
300
301
302
303
306
307
309
312
313
359
吉野郡
義町
美作市
馬天領
大別当山
ループ橋
ピカリアミュージアム

→16

22↓

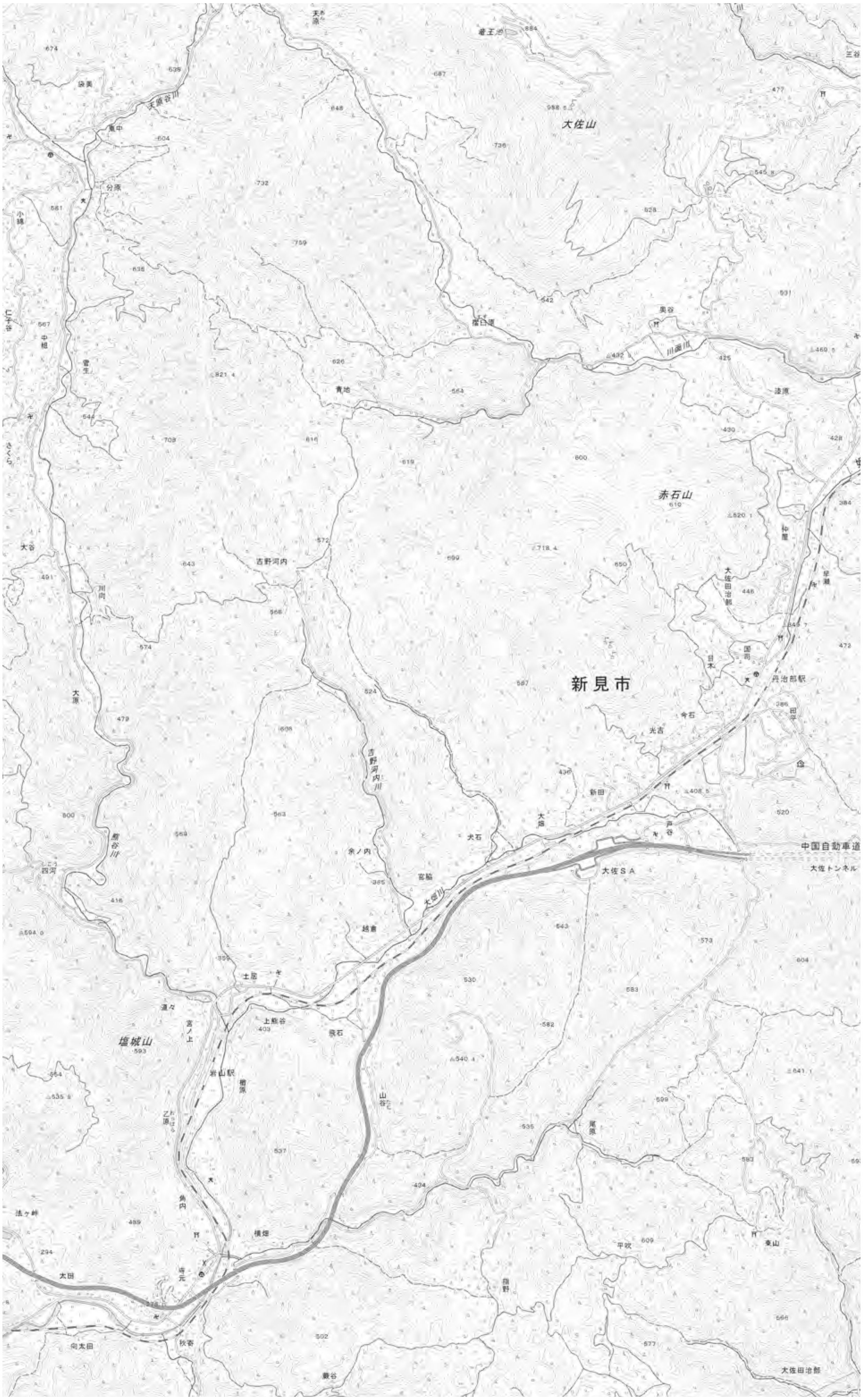

↑
9
←
15
勝北郡
ツズラ山
1724.2
314
364
365
366
368
369
川上ダム

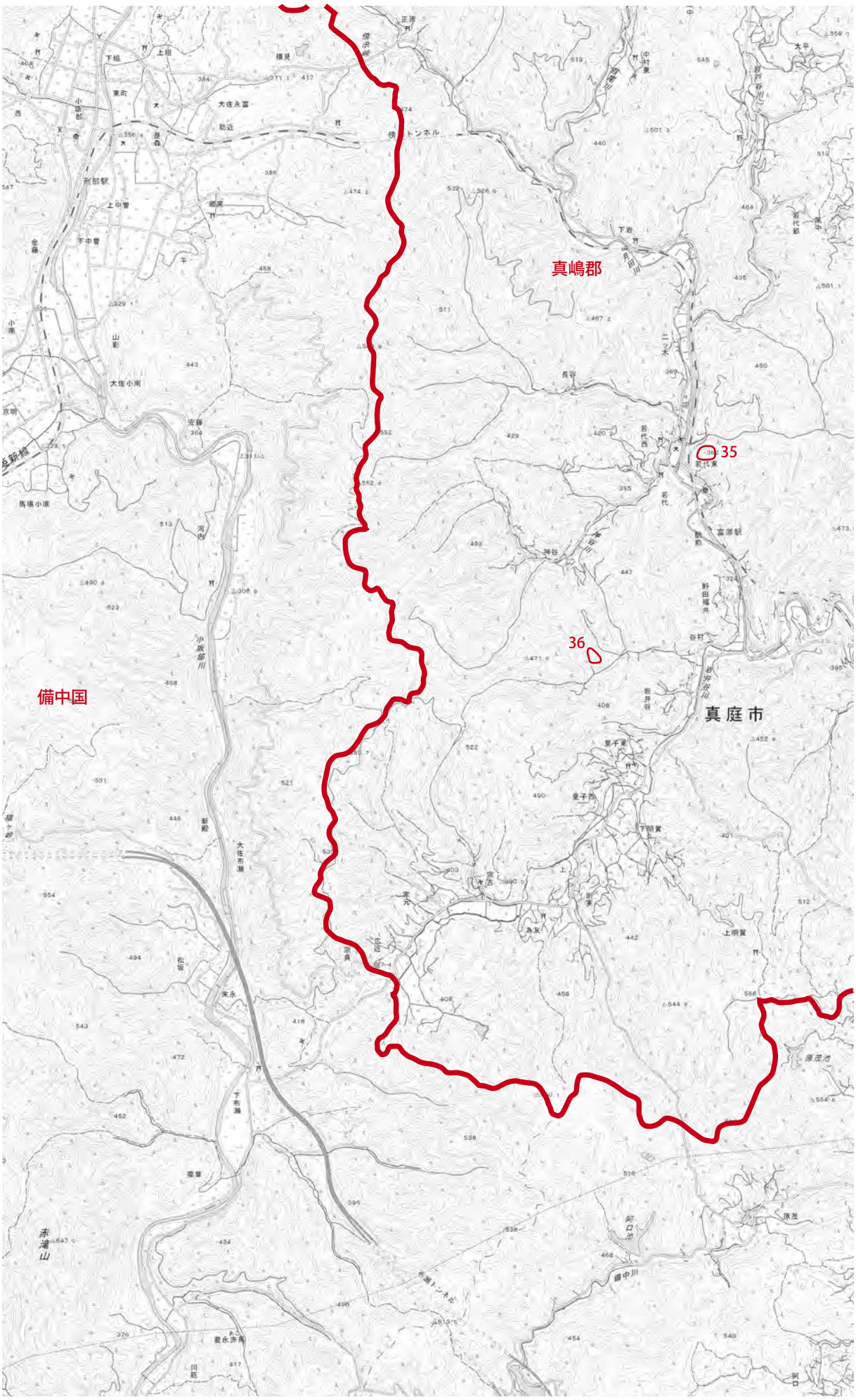
地図 16



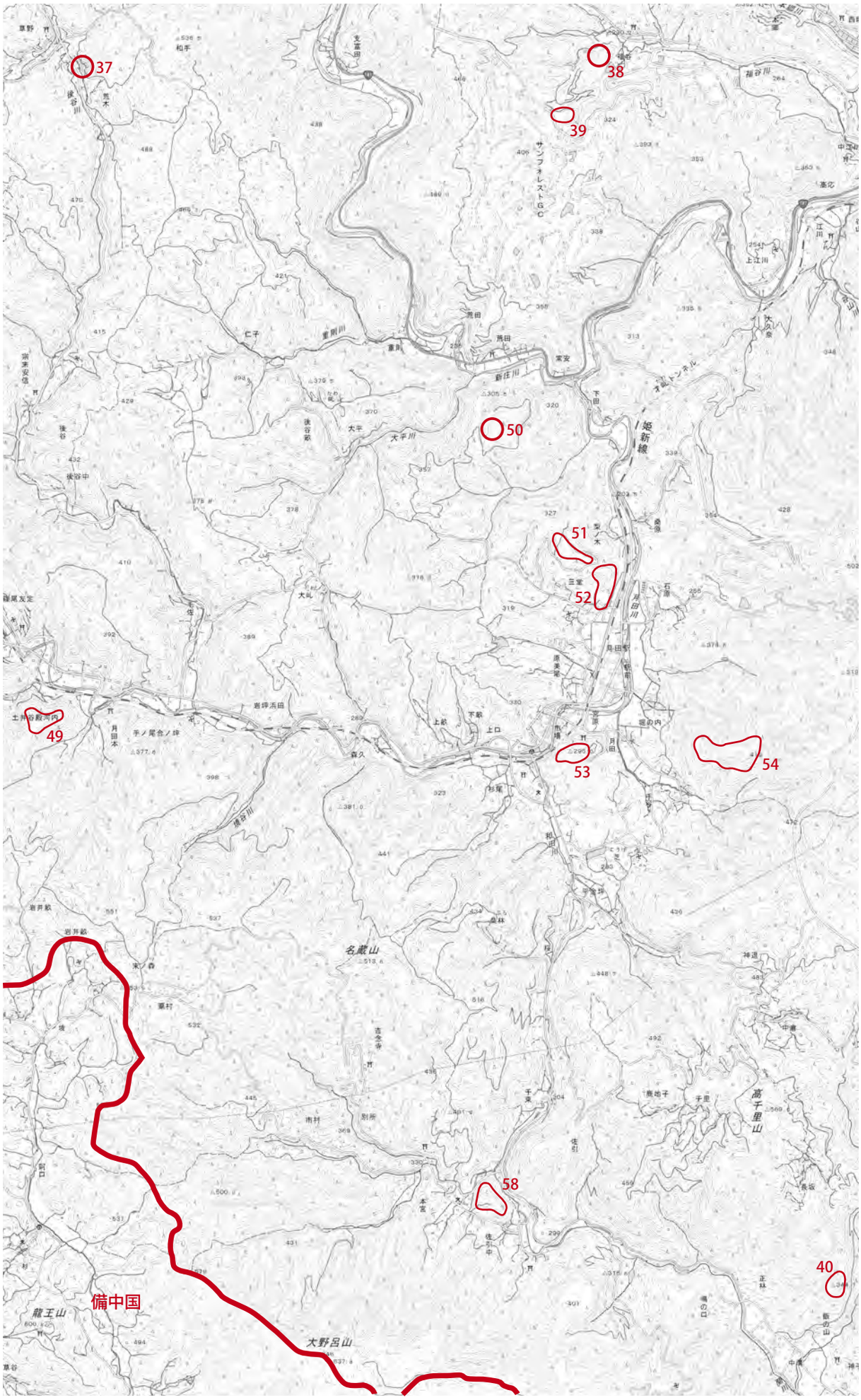
23
↓

↑
10

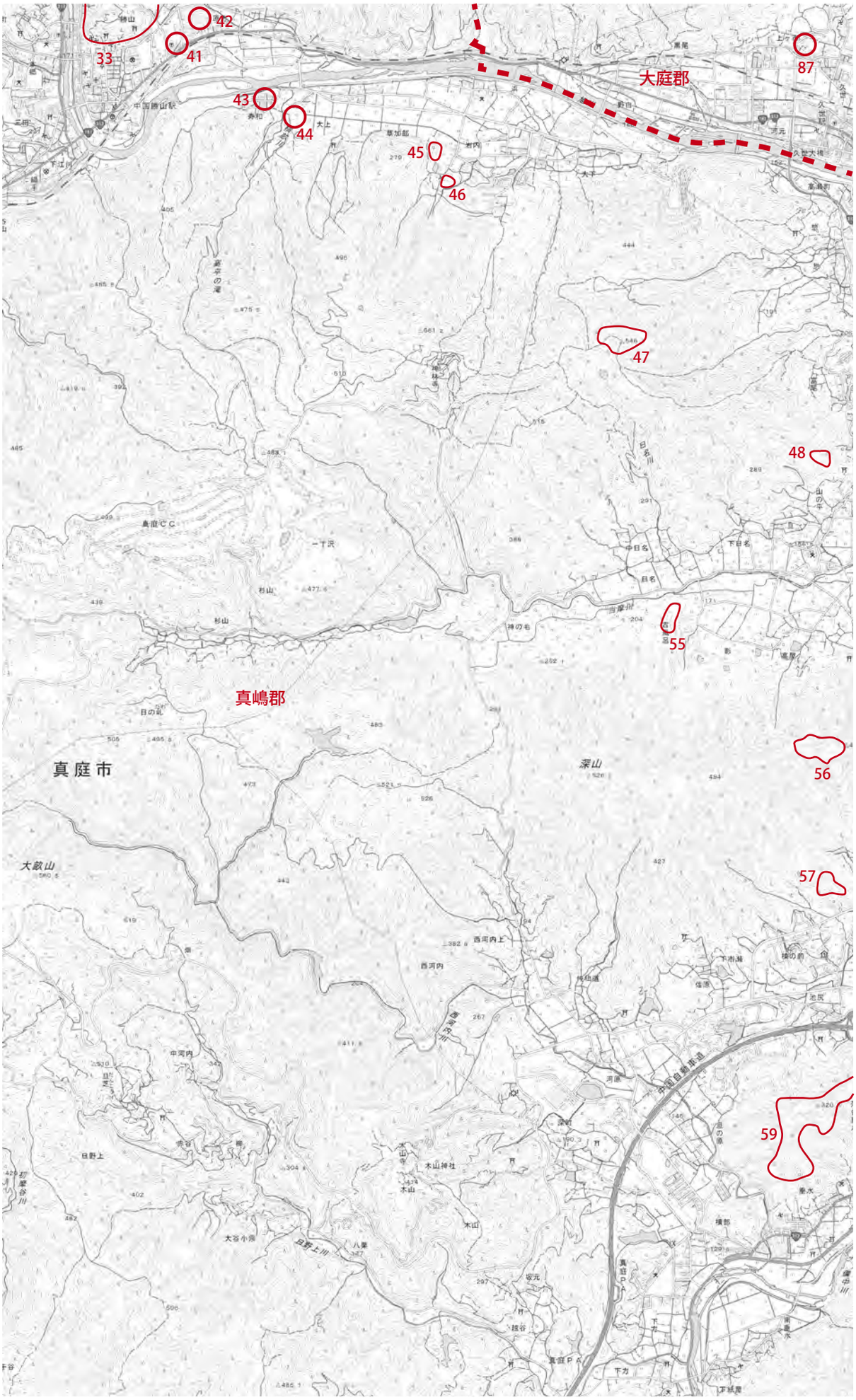

大佐山
赤石山
新見市
塩城山
中国自動車道
大佐トンネル
大佐ＳＡ
岩山駅
丹治部駅
大佐川
吉野河内川
吉野河内
大佐田治部


真嶋郡
備中国
真庭市
35
36
→
18

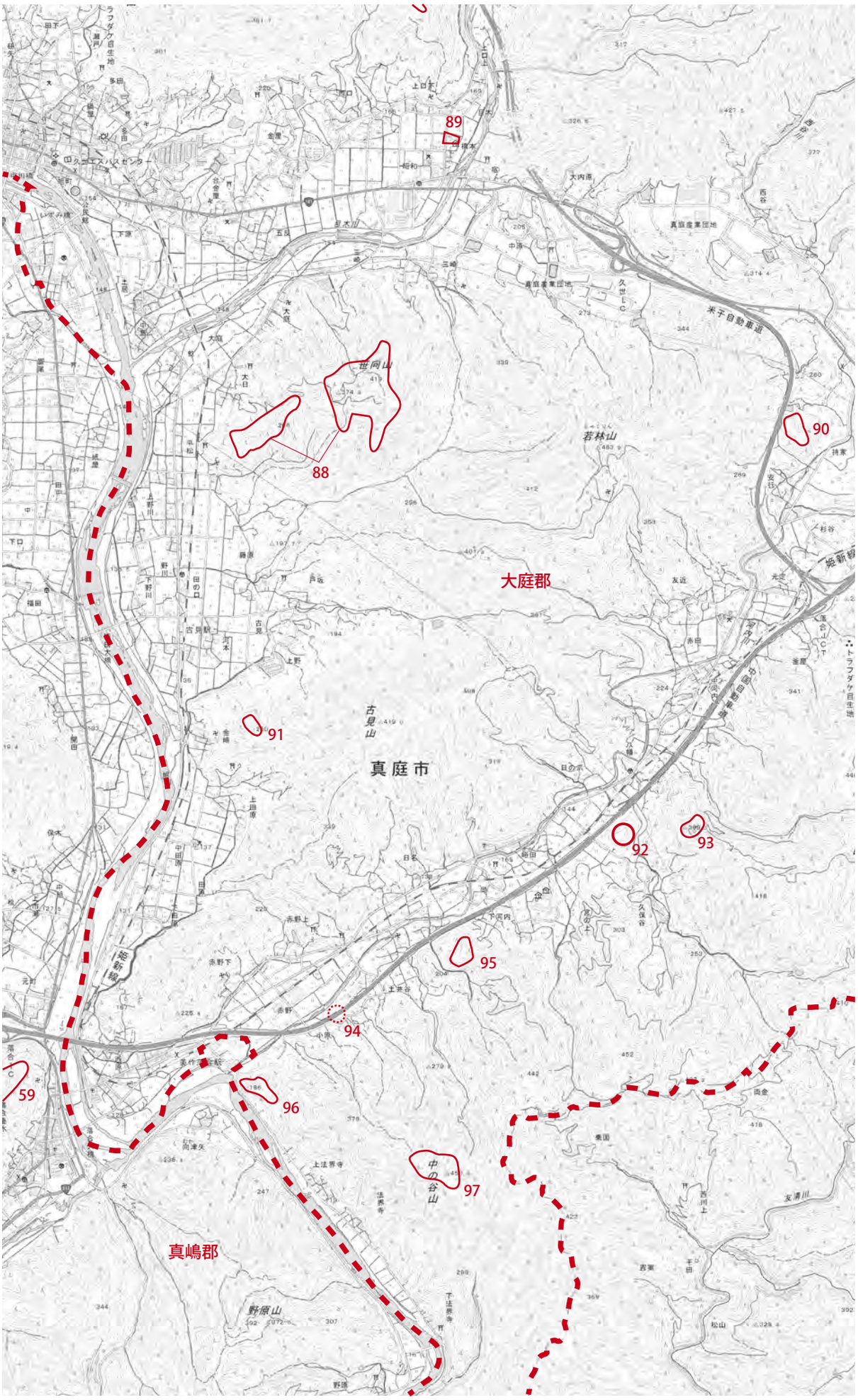
↑
11



←
17

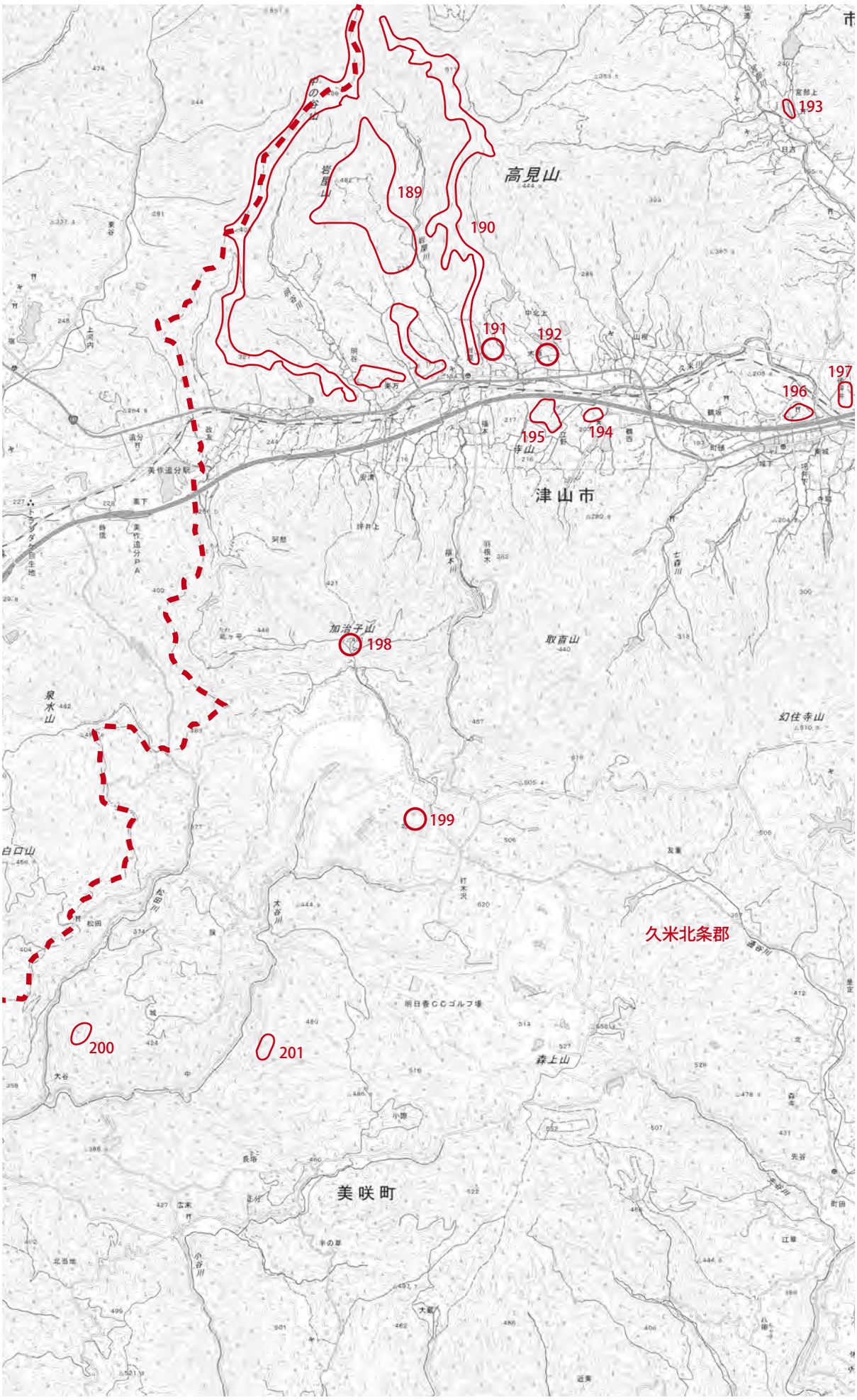

大庭郡
真嶋郡
真庭市
33
41
42
43
44
45
46
47
48
55
56
57
59
87
→
19
24
↓

↑
12


89
88
90
91
92
93
94
95
96
97
59
大庭郡
真庭市
真嶋郡
世向山
若林山
古見山
中の谷山
野原山
米子自動車道
姫新線

←
18

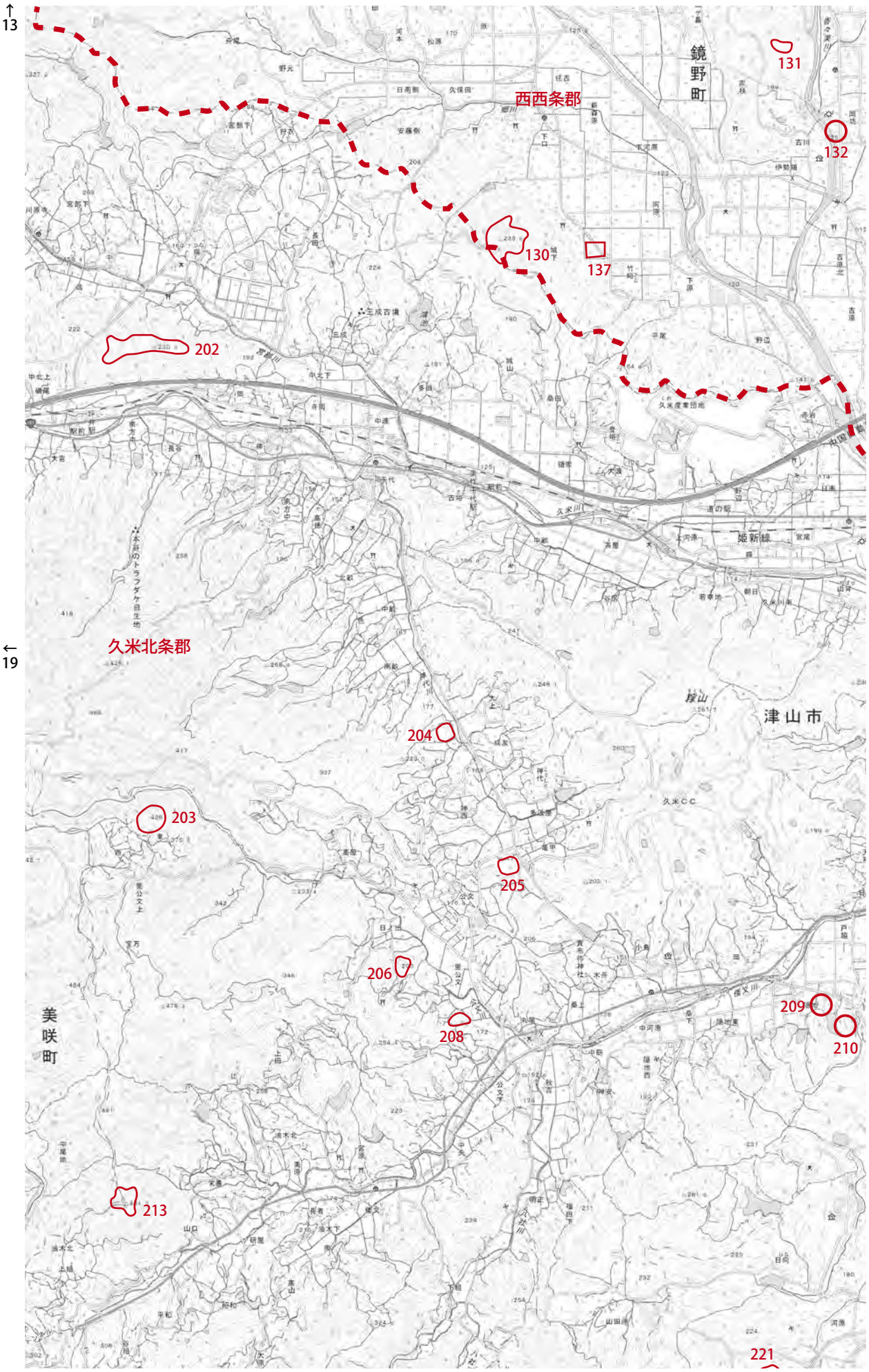
地図 19



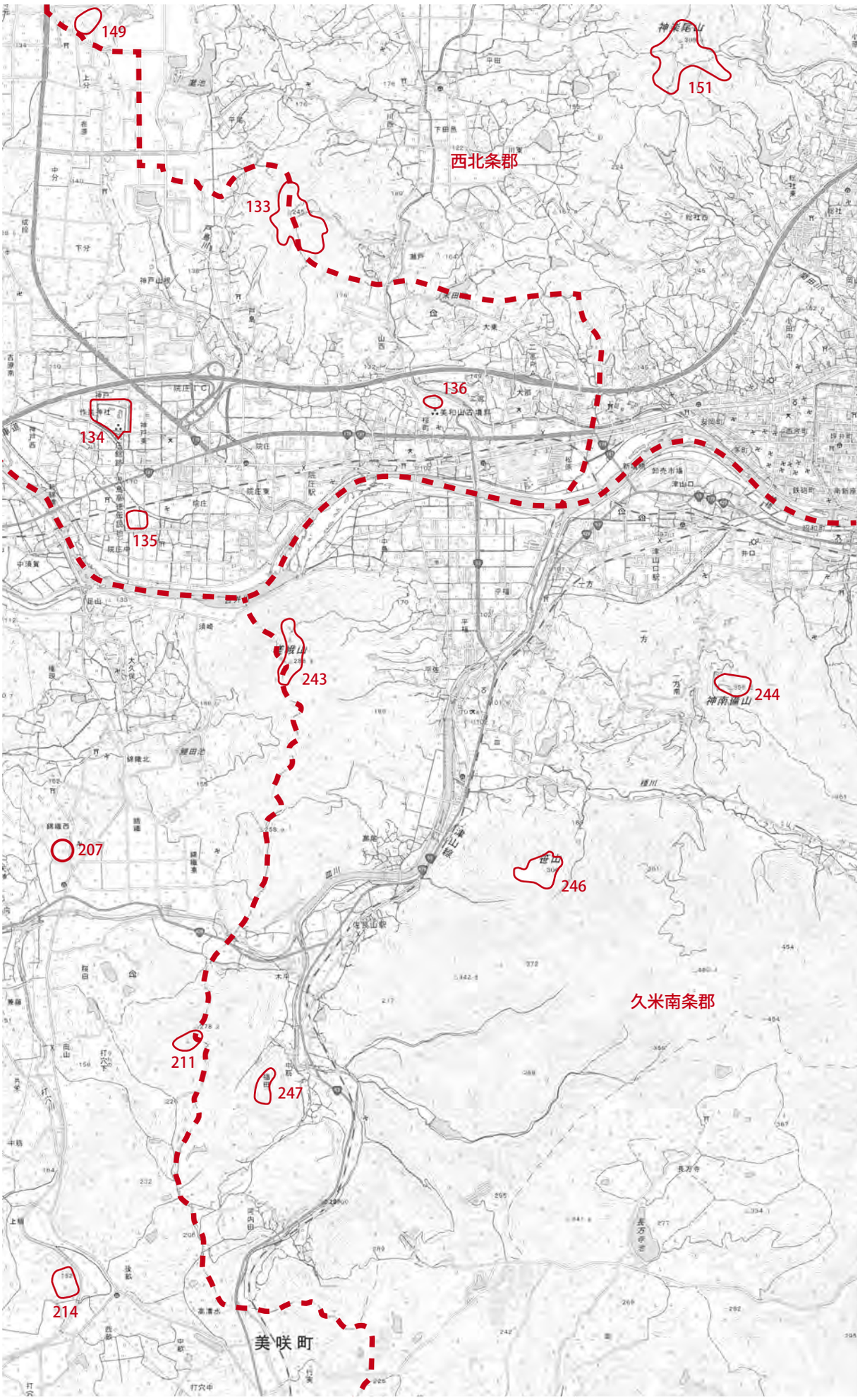
高見山
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
津山市
加治子山
取直山
幻住寺山
泉水山
白口山
久米北条郡
森上山
美咲町

→ 20

25 ↓

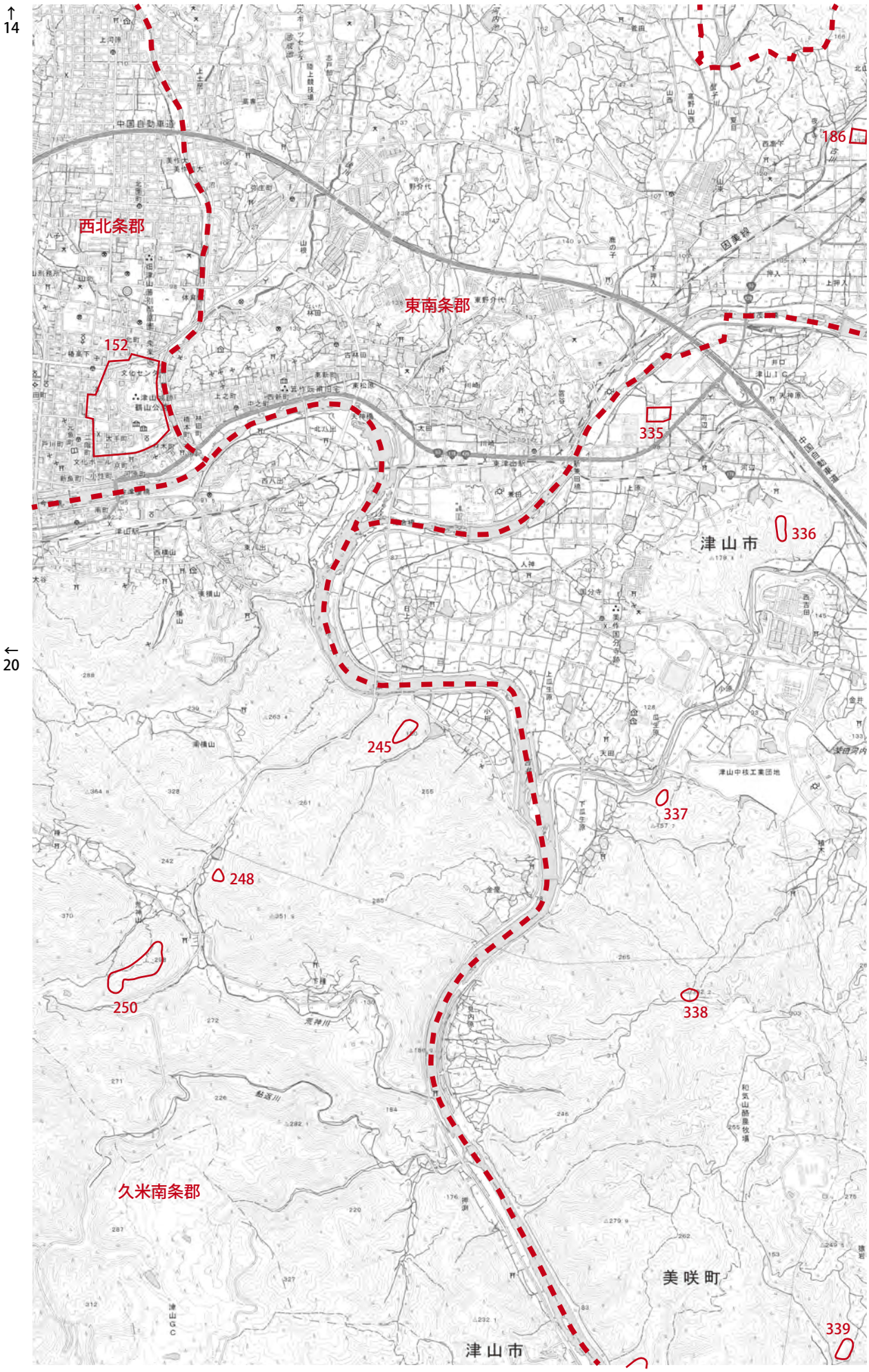

↑
13
西西条郡
鏡野町
131
132
130
137
202
久米北条郡
←
19
204
津山市
203
205
206
208
209
210
美咲町
213
221

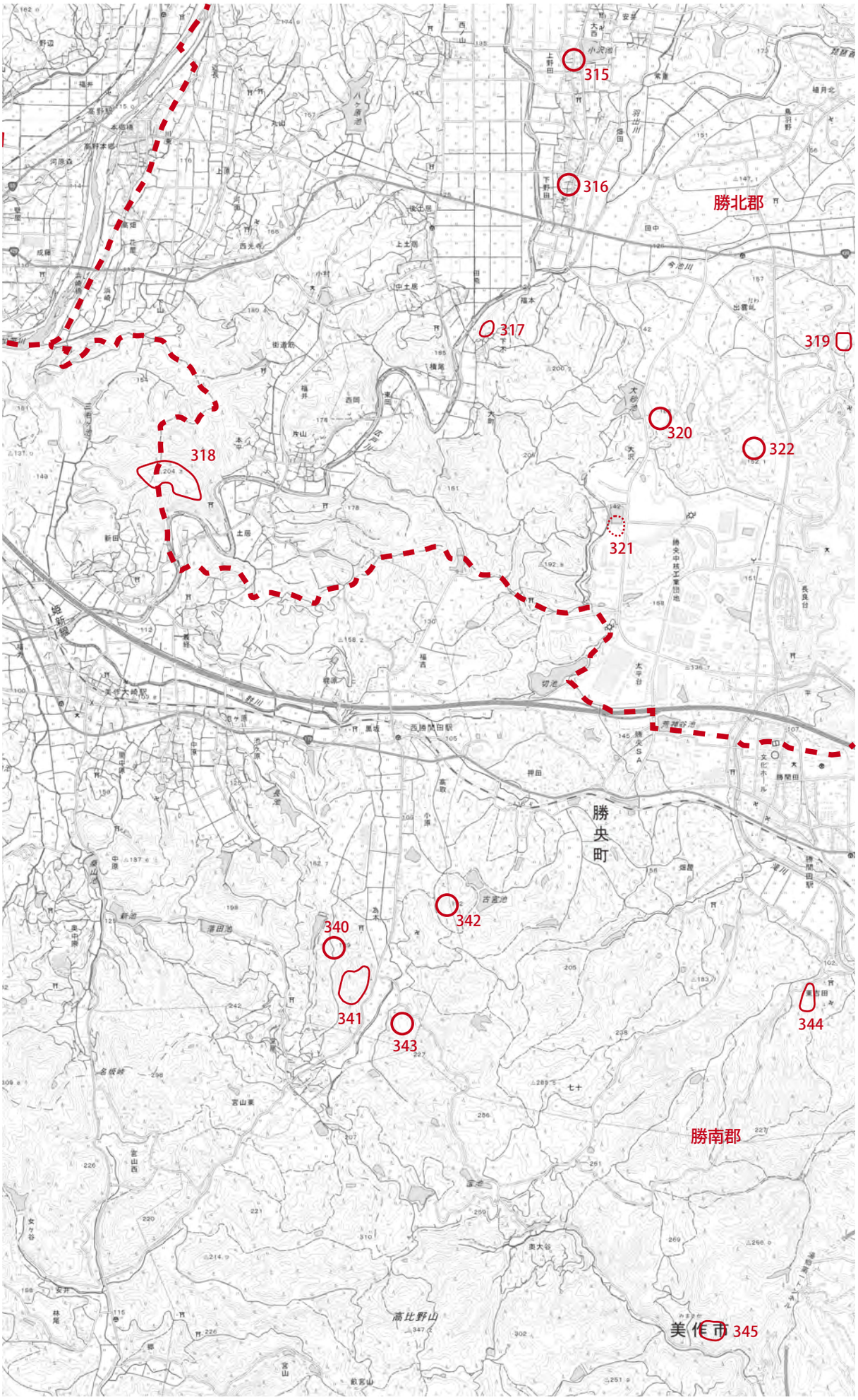
地図 20


149
151
西北条郡
133
136
134
135
243
244
神南備山
207
246
久米南条郡
211
247
214
美咲町

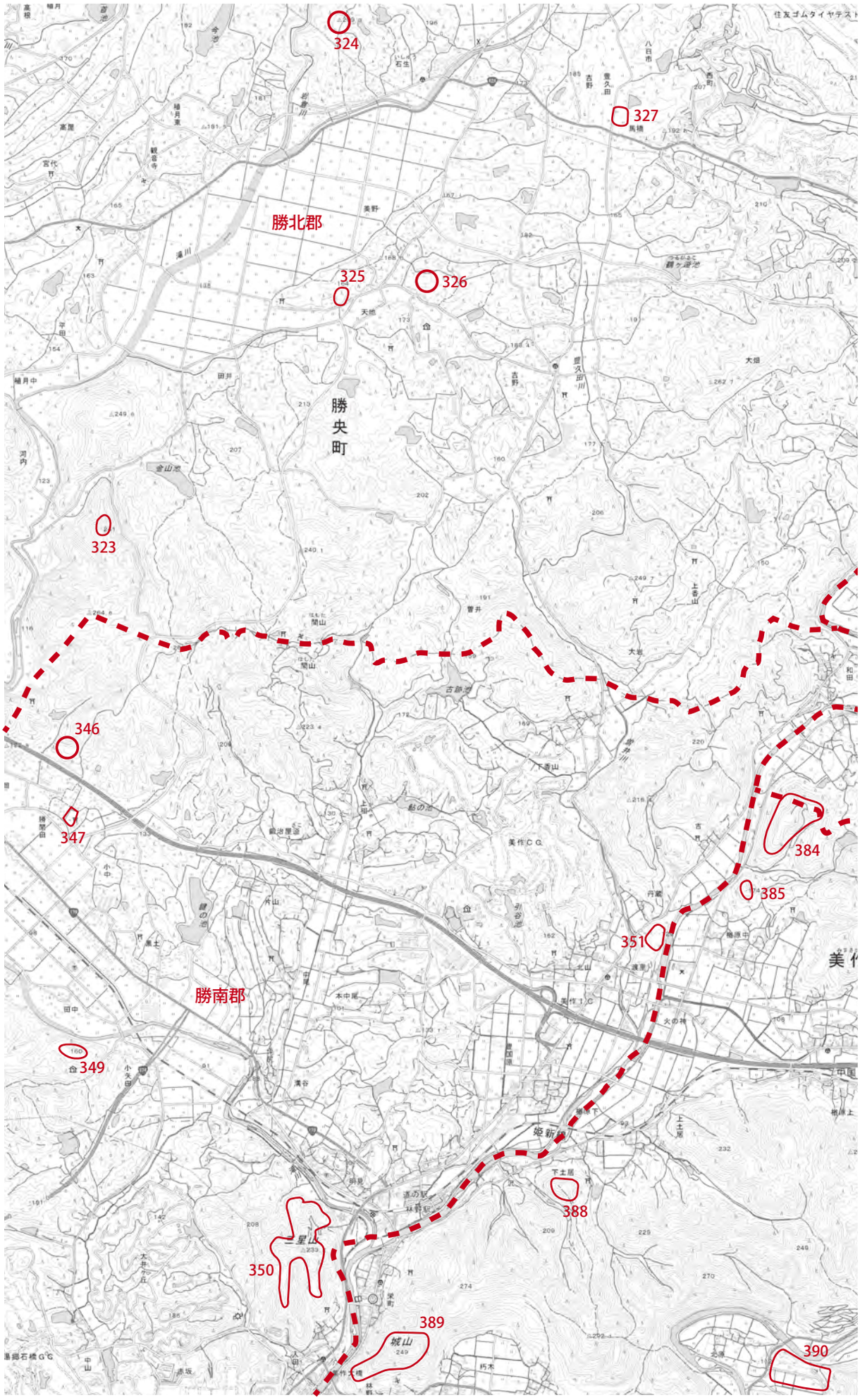
→ 21

26 ↓


↑
14
西北条郡
東南条郡
152
186
335
336
津山市
245
337
248
250
338
久米南条郡
美咲町
339
津山市
←
20

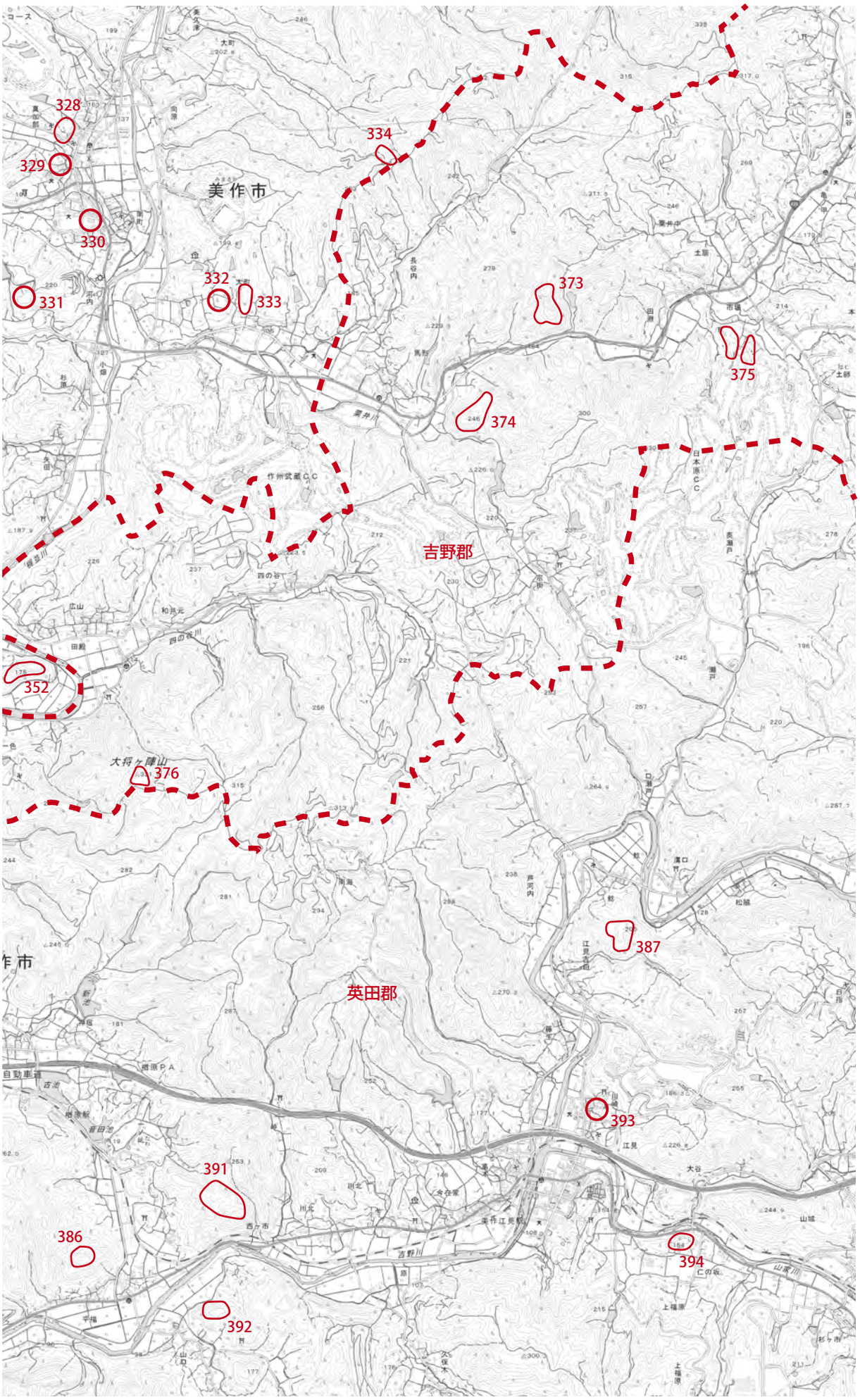

315
316
勝北郡
317
319
320
322
318
321
北陸新幹線
→
22
勝
央
町
342
340
341
343
344
勝南郡
高比野山
美作市
345
27
↓

↑
15


勝北郡
勝央町
勝南郡
324
325
326
327
323
346
347
349
350
351
384
385
388
389
390

←
21

地図 22

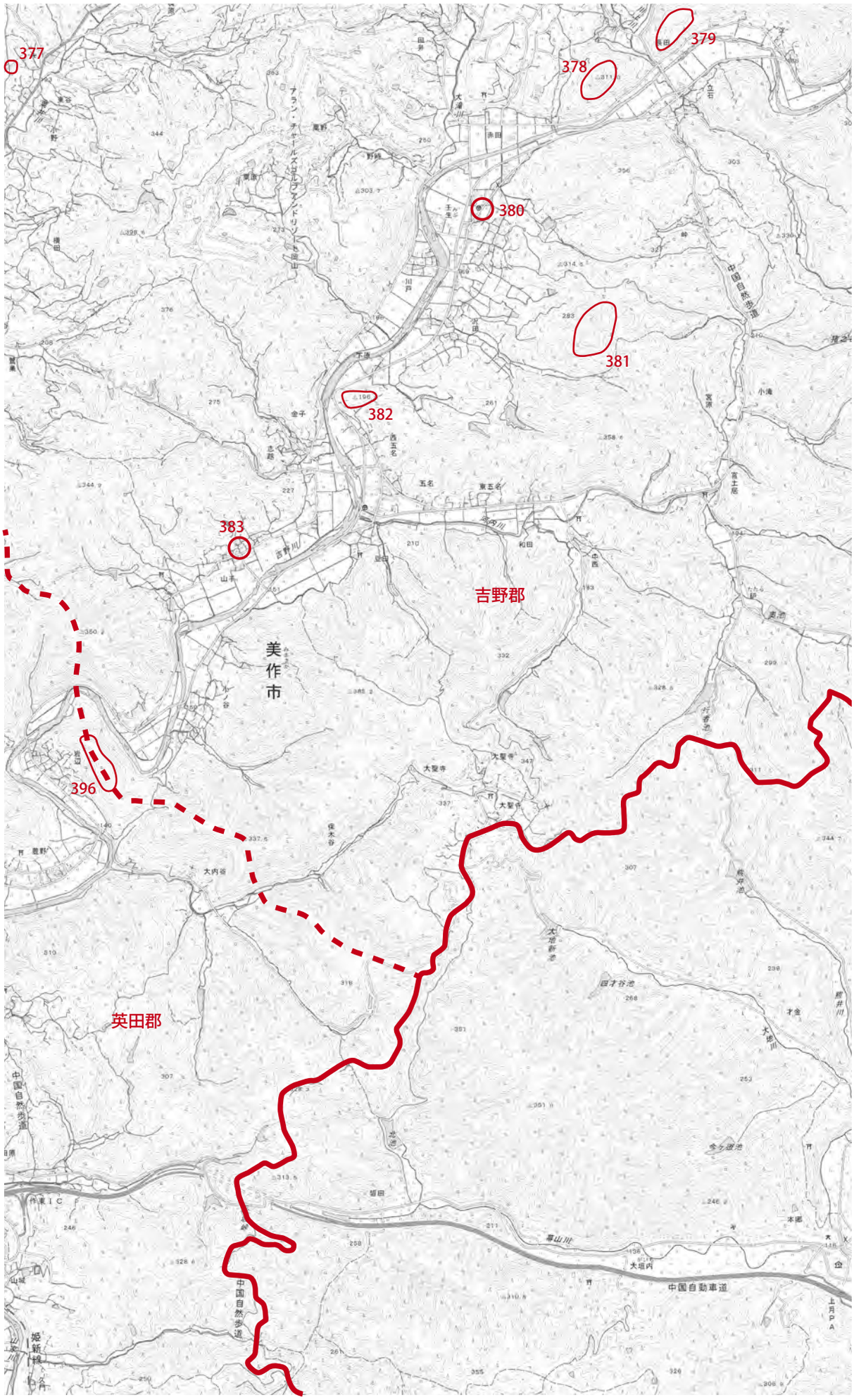


328
329
330
331
332
333
334
373
374
375
352
376
387
393
391
386
392
394
美作市
吉野郡
英田郡
大将ヶ陣山

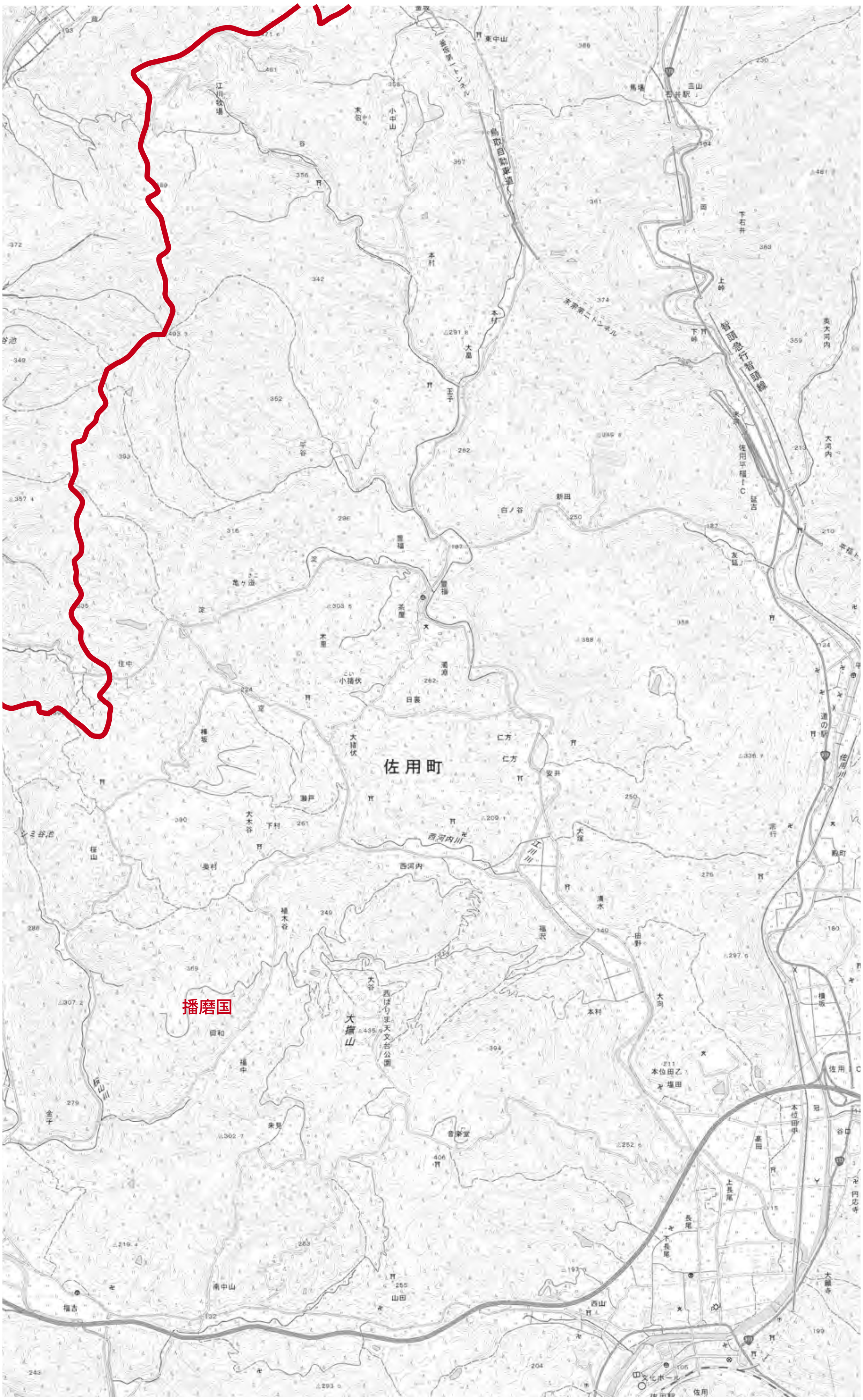
→ 23

28 ↓

↑
16

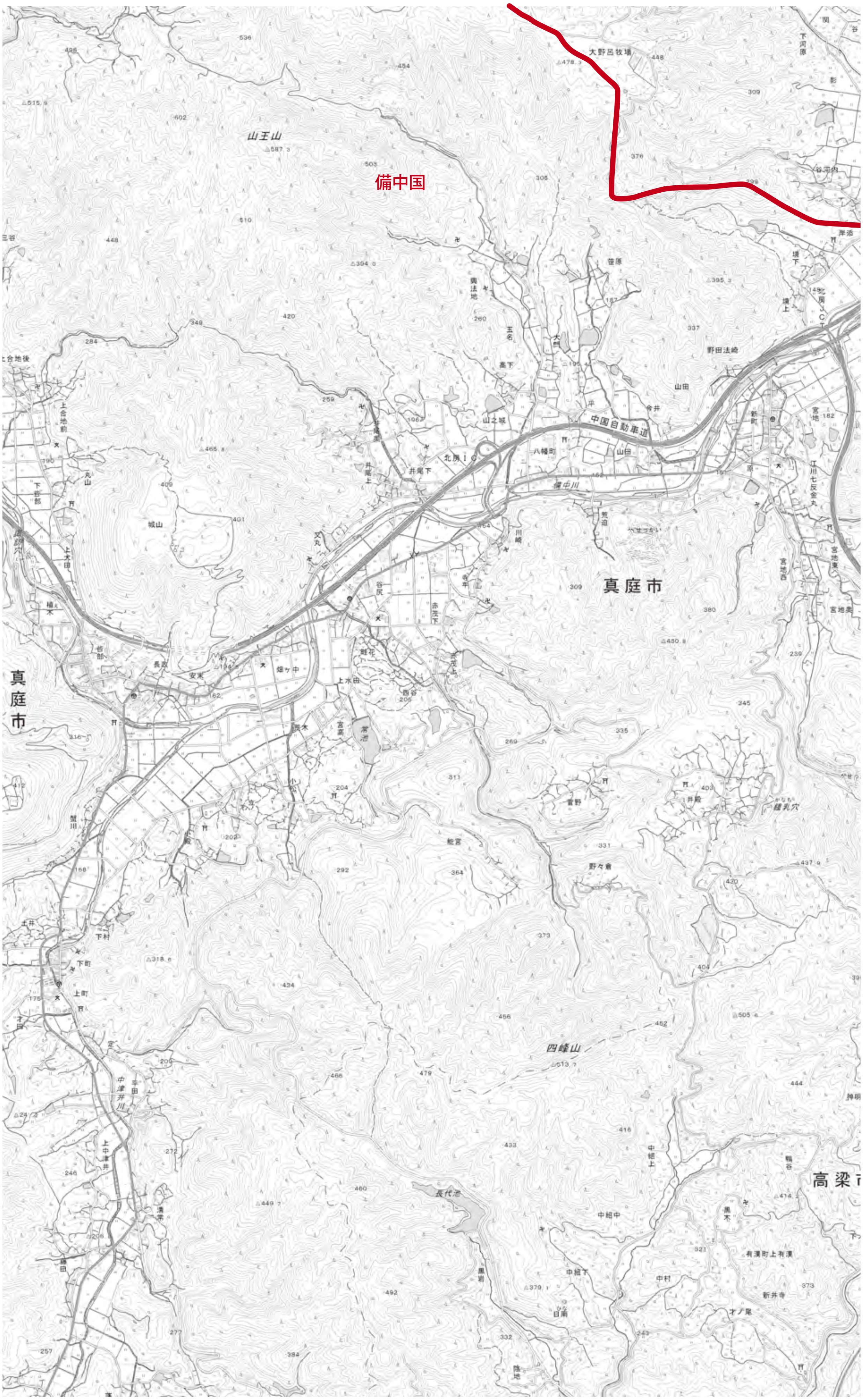


←
22

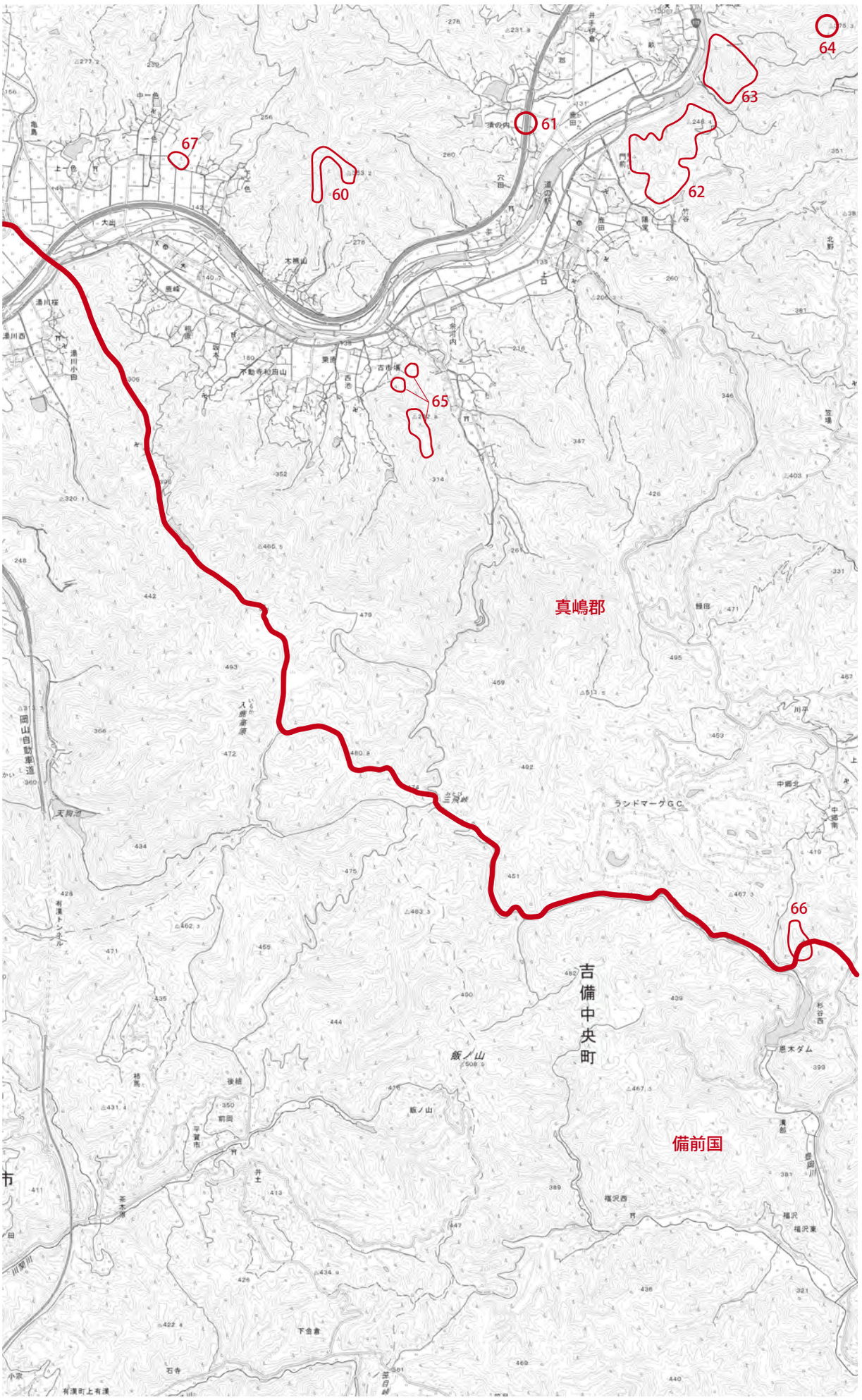


29
↓

↑
18


備中国
山王山
大野呂牧場
真庭市
真庭市
高梁市
中国自動車道
備中川
北房ＩＣ
四峰山
長代池
笹原
野田法崎
城山
上水田
野々倉
中組中
井殿
鍾乳穴
有漢町上有漢
新井寺
中村
日南

地図 24

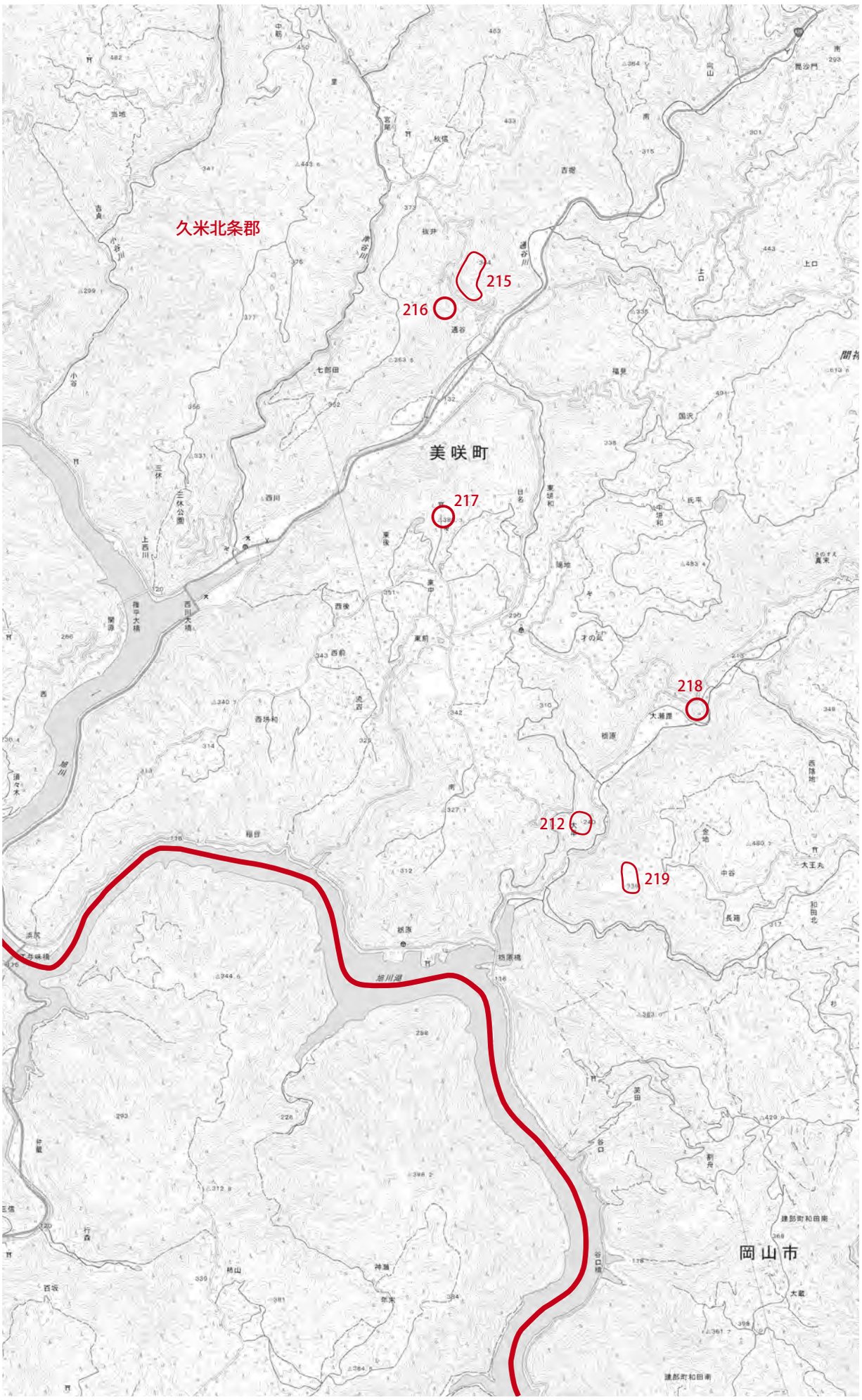


→25

↑
19

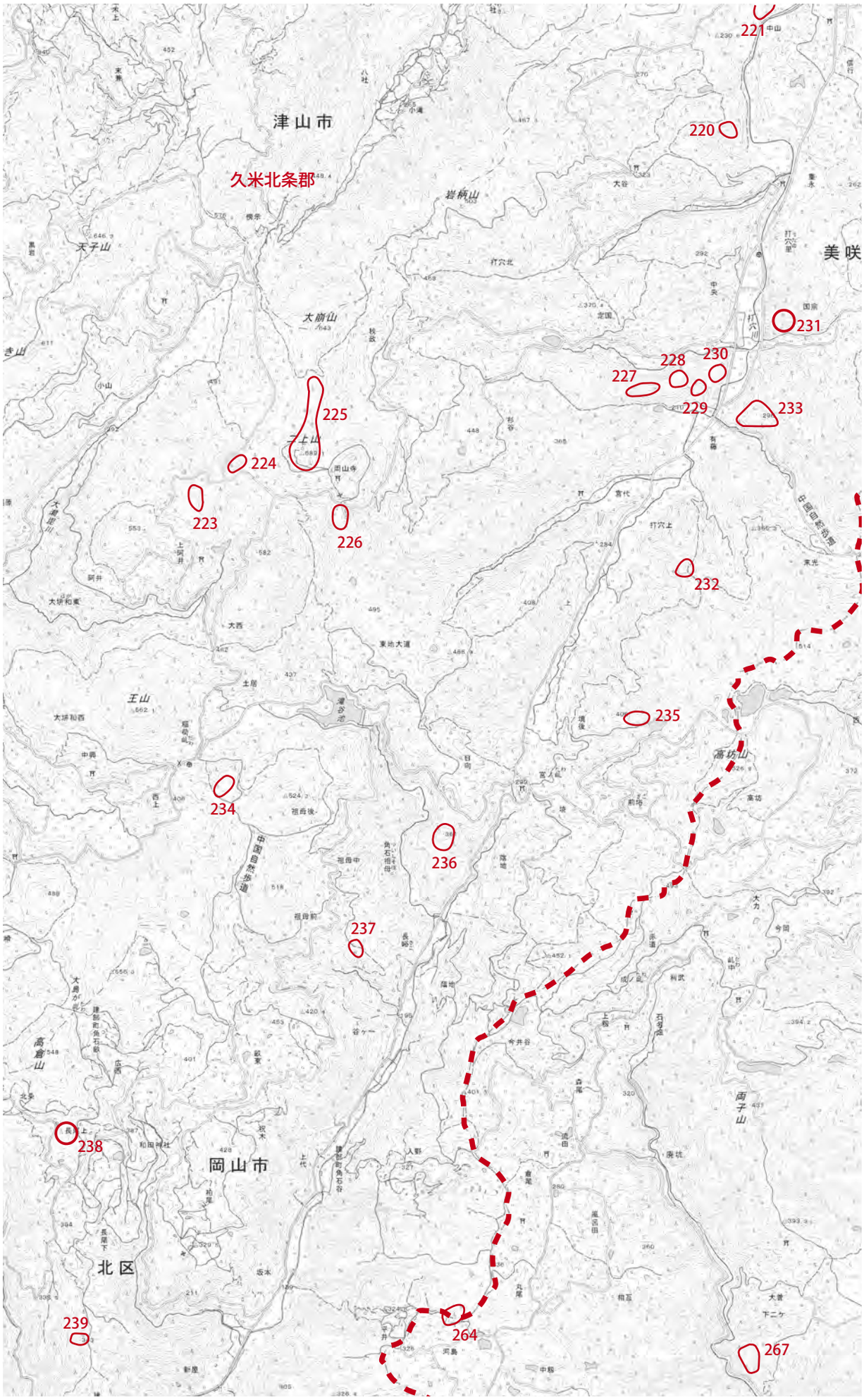
←
24

地図 25



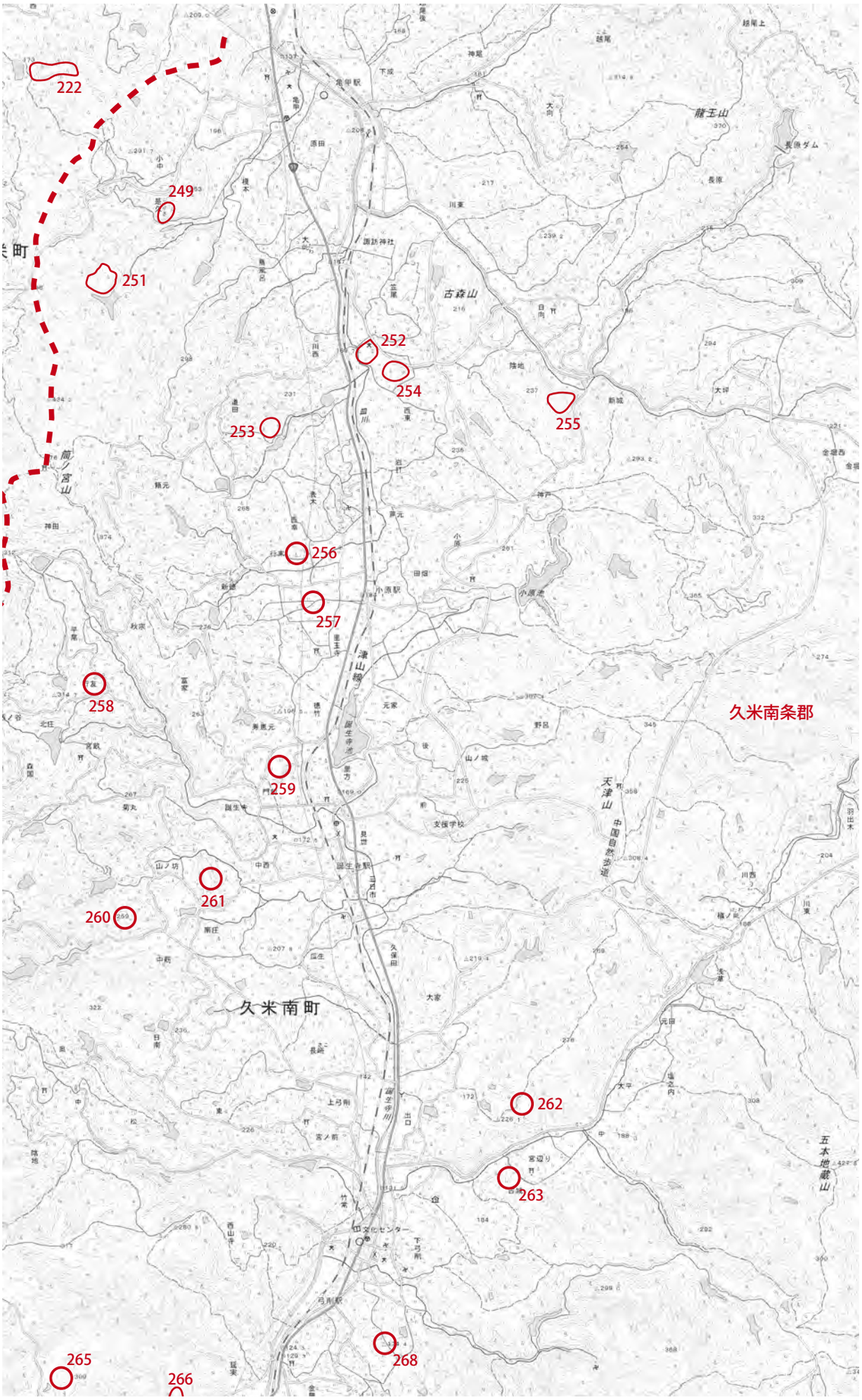
→ 26

↑
20

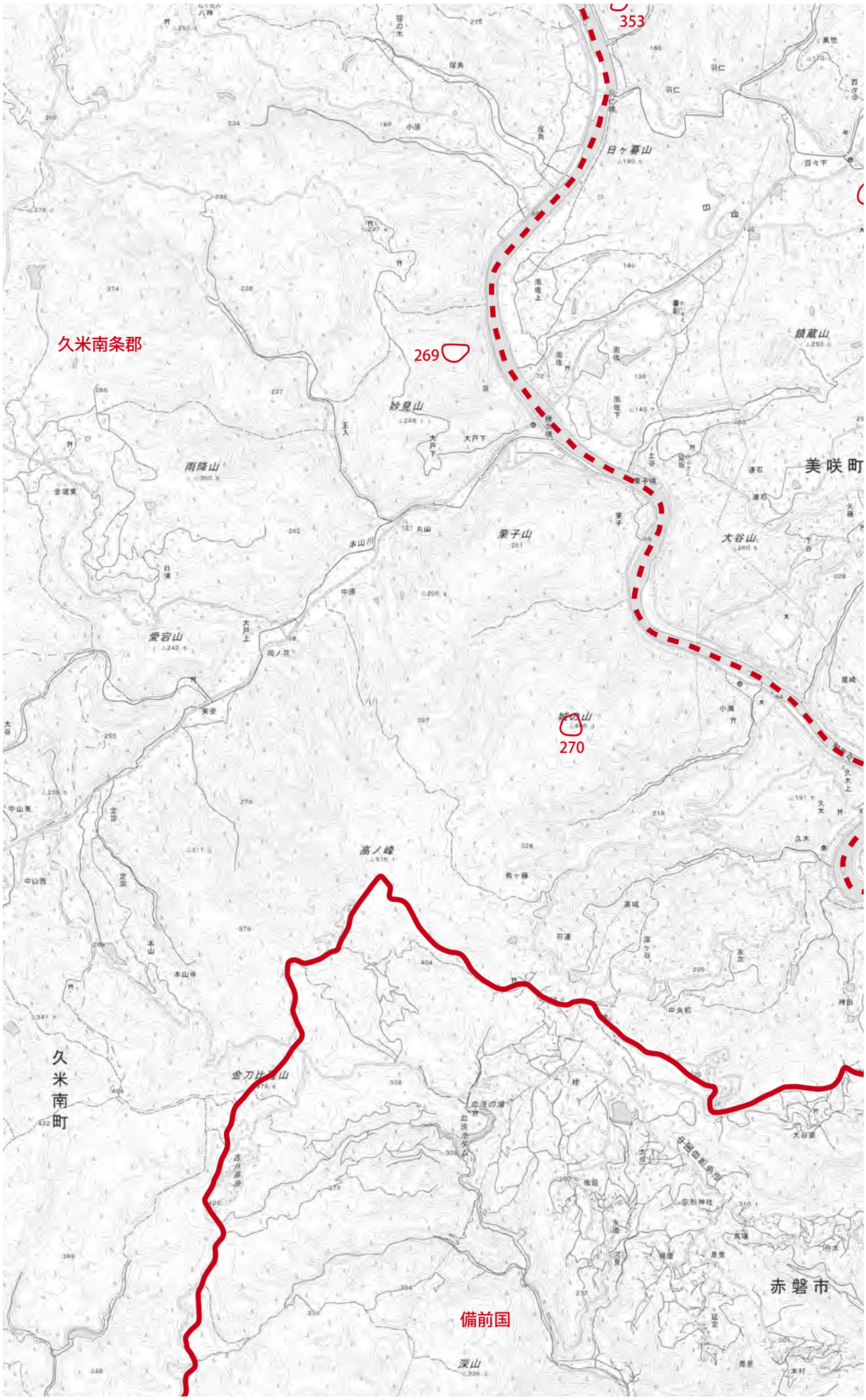


津山市
久米北条郡
岩柄山
天子山
大崩山
美咲
王山
高坊山
岡山市
北区
221
220
231
228
230
227
229
233
225
224
223
226
232
235
234
236
237
238
239
264
267

←
25

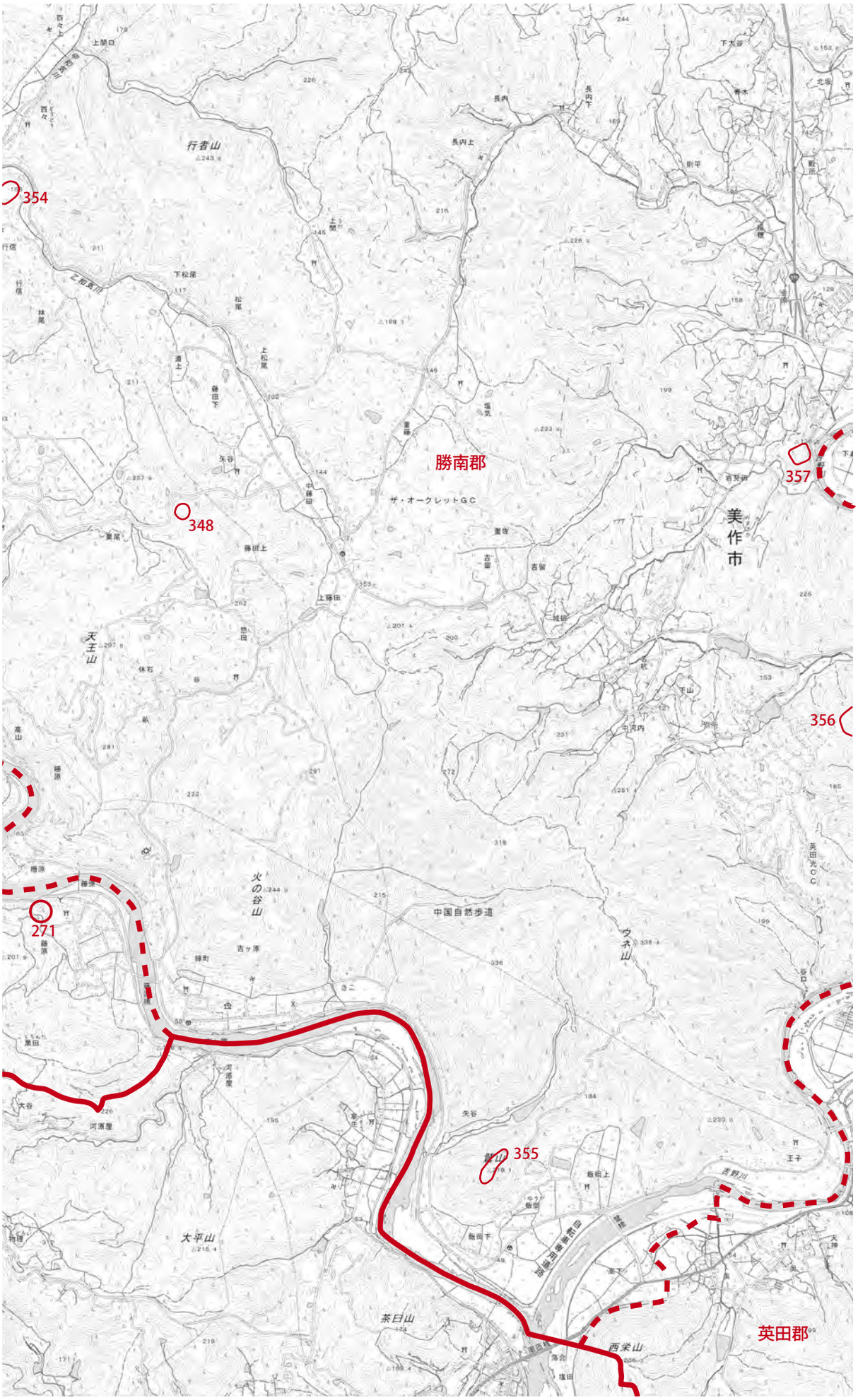

222
249
251
252
254
253
255
256
257
258
259
260
261
262
263
265
266
268
久米南条郡
久米南町
→
27
30
↓

↑
21


353
久米南条郡
269
妙見山
雨降山
栗子山
大谷山
美咲町
愛宕山
270
高ノ峰
久米南町
金刀比羅山
備前国
赤磐市
深山

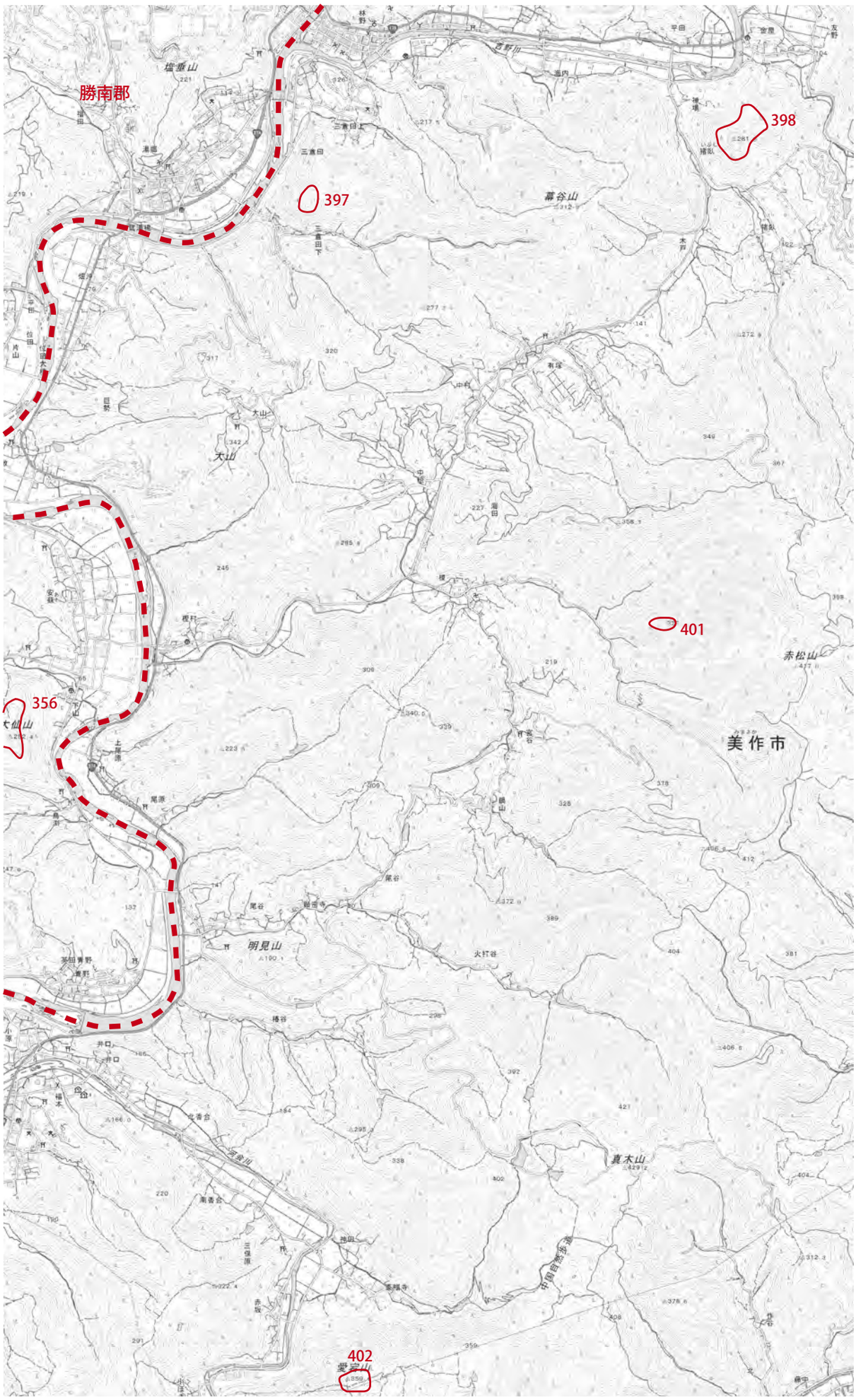
←
26

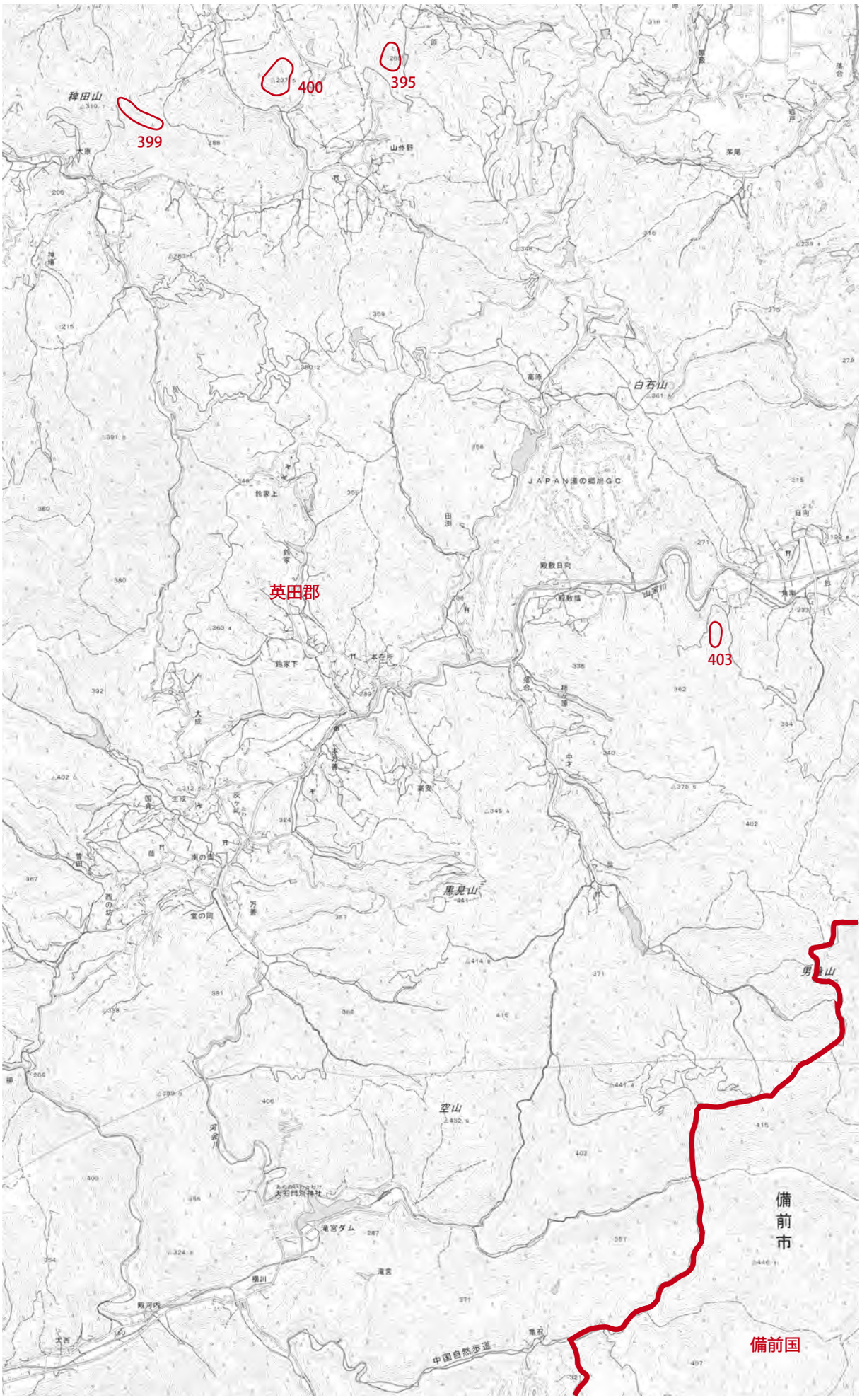
地図 27



354
行者山
勝南郡
348
ザ・オークレットGC
357
美作市
356
天王山
火の谷山
中国自然歩道
ウネ山
271
355
大平山
茶臼山
西栄山
英田郡

→ 28

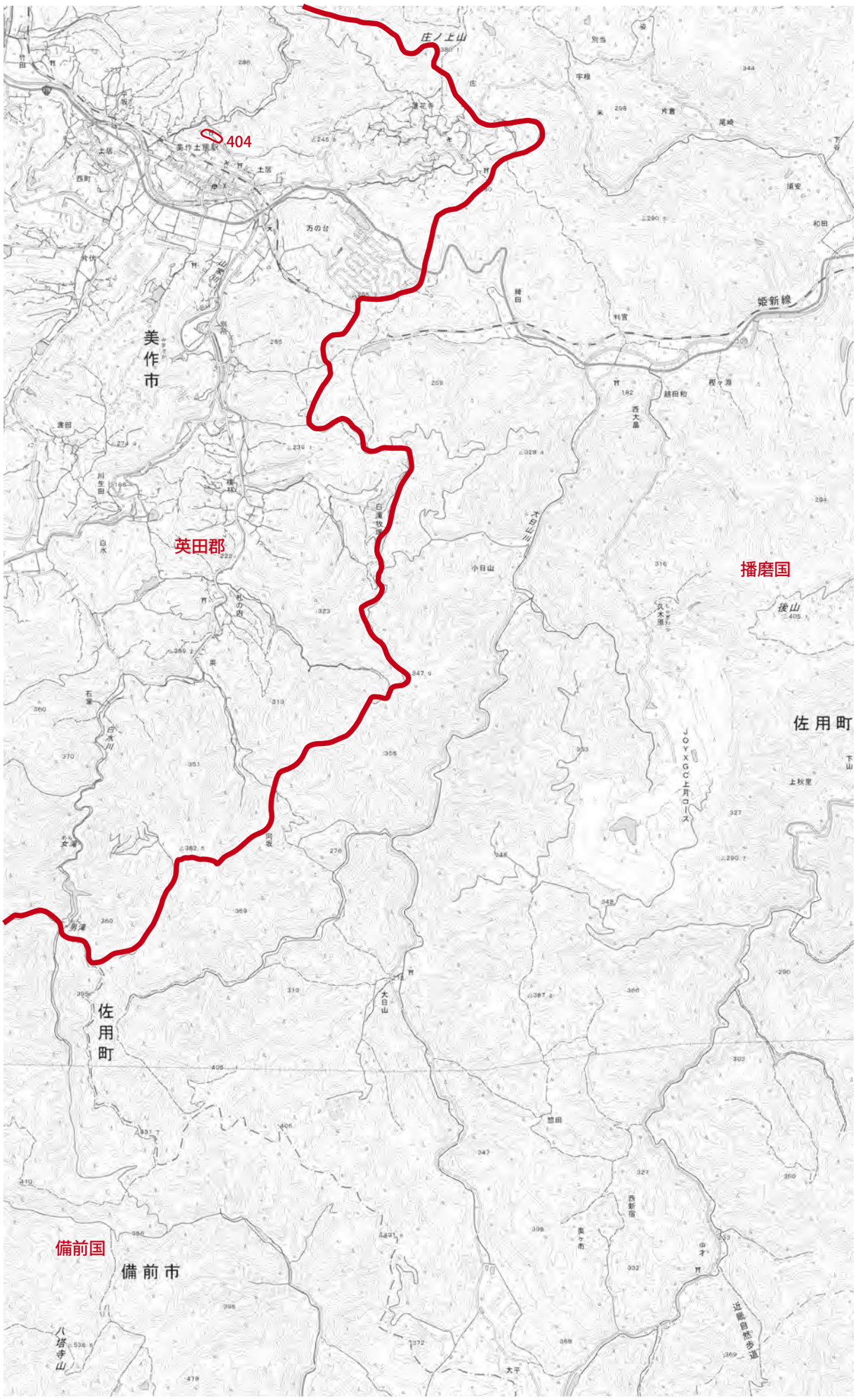

↑
22
勝南郡
397
398
401
356
402
美作市
←
27



→ 29

31 ↓

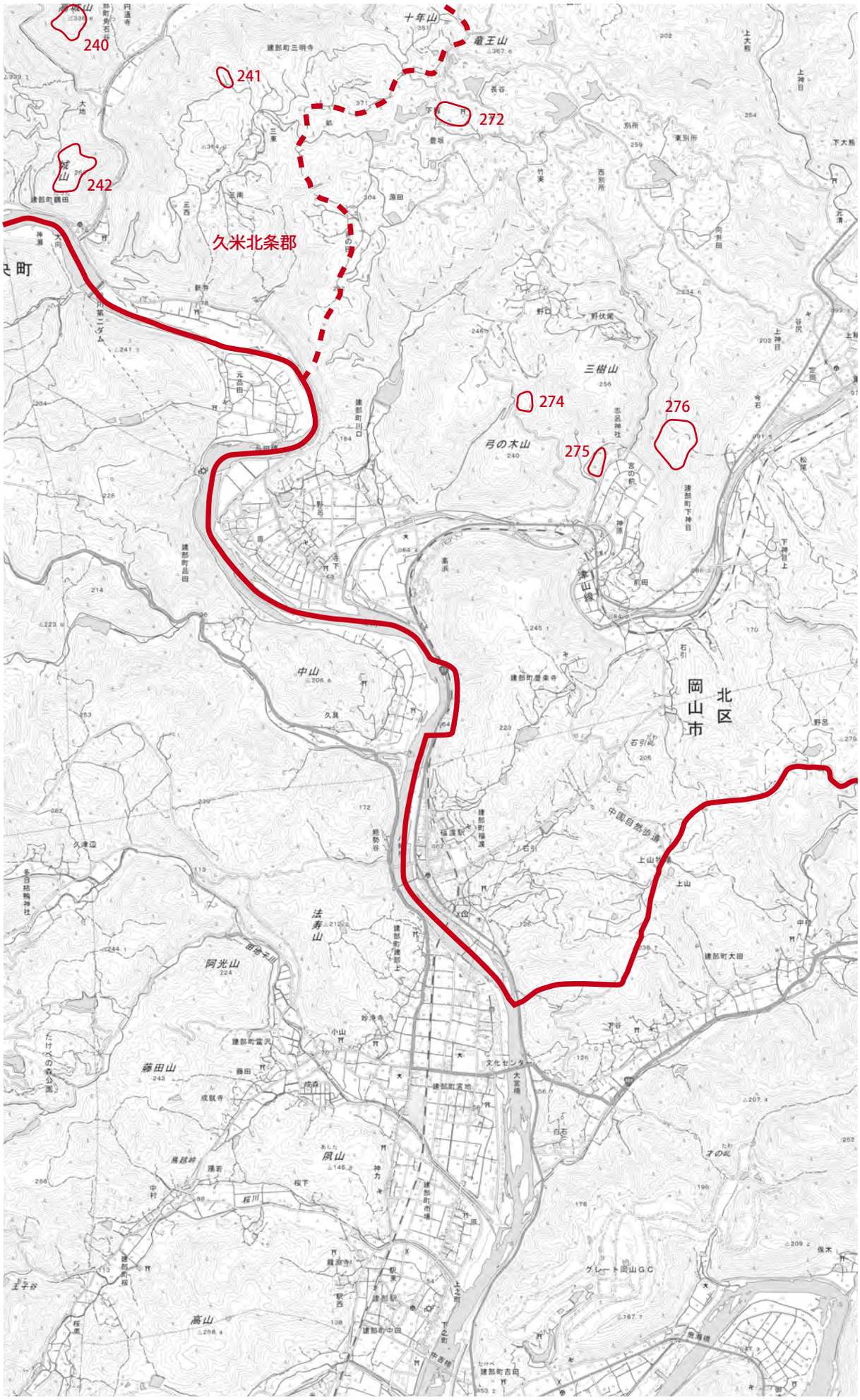
↑
23


404
美作市
英田郡
播磨国
佐用町
佐用町
備前国
備前市
姫新線
庄ノ上山
小日山
大日山
JOYXGC上月コース
近畿自然歩道

←
28

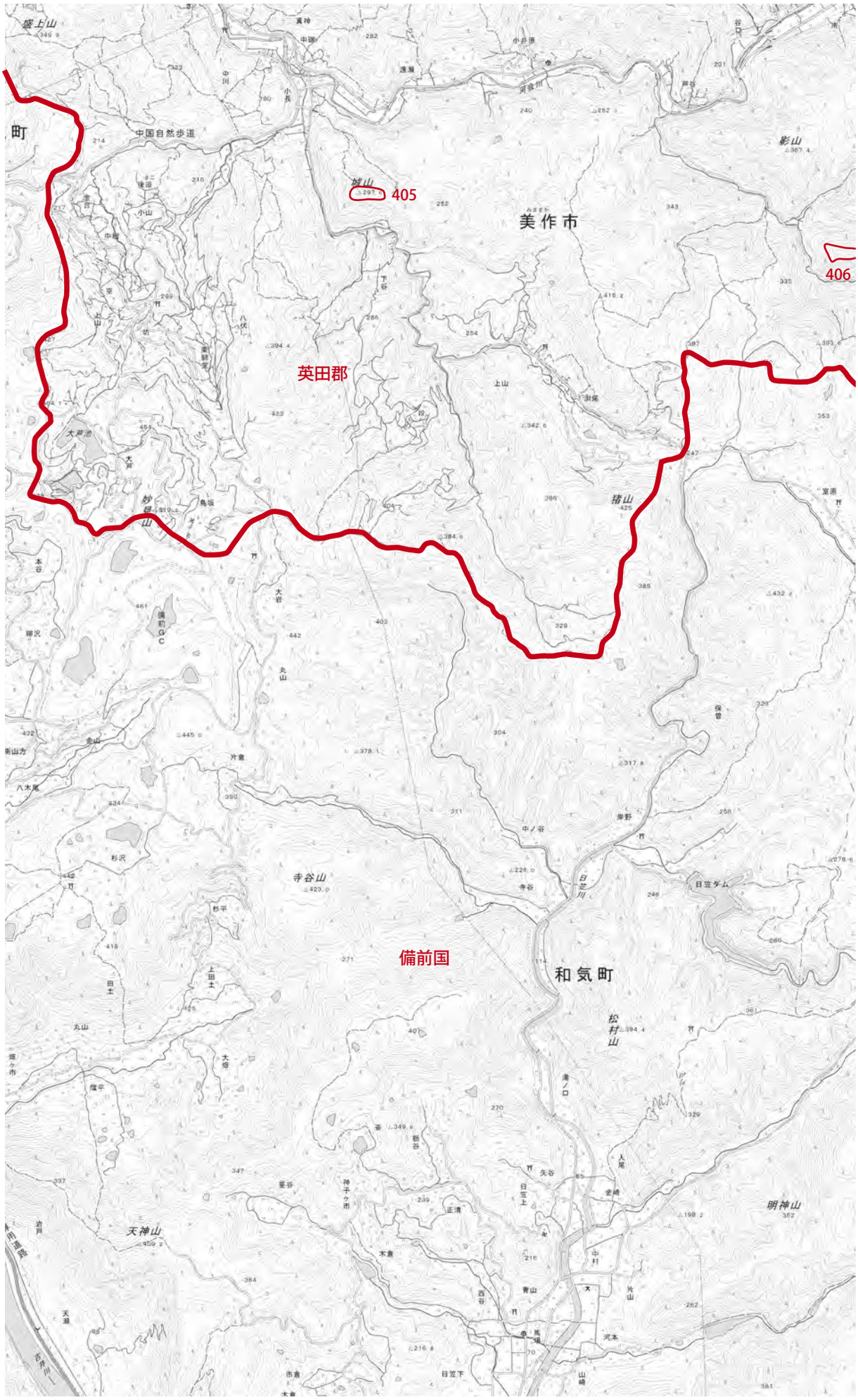
姫新線
ダイヤモンド佐用ＣＣ
高倉山
上月駅
久崎駅
久崎トンネル
智頭急行智頭線
佐用川
千種川
円光寺
飛龍の滝
国見トンネル
小赤松
相ノ原
大酒
国見
船岩
上郡町

↑
26

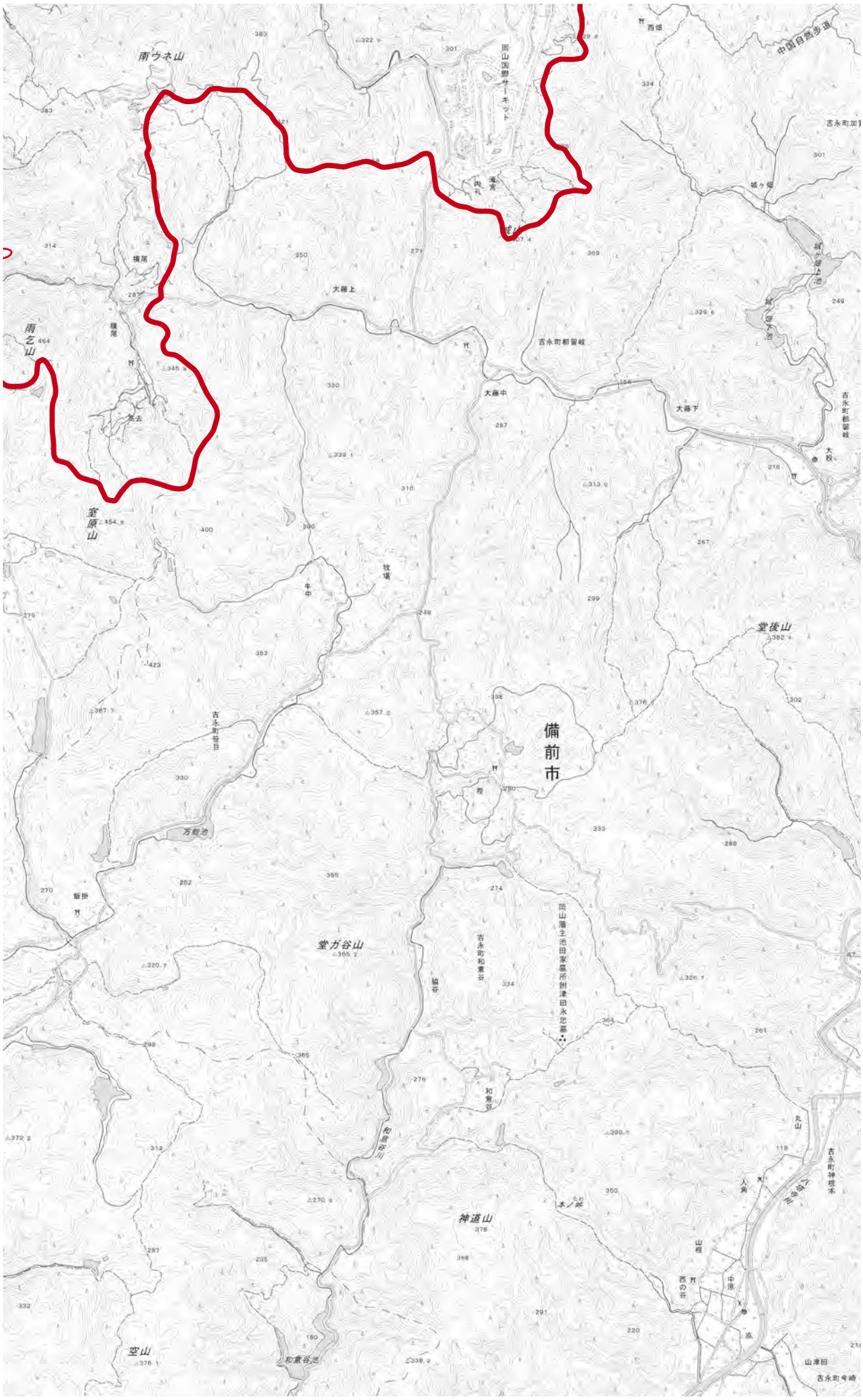

240
241
242
272
274
275
276
久米北条郡
十年山
竜王山
三樹山
弓の木山
中山
法寿山
阿光山
藤田山
高山
岡山市
北区

266
277
小丸山
273
280
279
281
278
久米南町
久米南条郡
竜王山
影清山
城山
赤磐市
大目山
位王山
備前国

↑
28



地図 31


南ウネ山
岡山国際サーキット
中国自然歩道
吉永町加
城ヶ畑
大藤上
吉永町都留岐
大藤中
大藤下
雨乞山
室原山
牧場
牛中
堂後山
備前市
万能池
堂ガ谷山
岡山藩主池田家墓所附津田永忠墓
吉永町和意谷
和意谷
神道山
空山
和意谷池
山津田
吉永町今崎

2　美作国中世城館跡一覧表

1　一覧表の作成について

（1）本表は、旧美作国に属した旧真嶋郡、旧大庭郡、旧西西条郡、旧西北条郡、旧東北条郡、旧東南条郡、旧久米北条郡、旧久米南条郡、旧勝北郡、旧勝南郡、旧吉野郡、旧英田郡（以後旧を除く）に所在した城館跡等の一覧である。

（2）郡の単位は、分布図凡例のとおりである。ただし、郡境に位置するものは、①：近世地誌等に記載された旧村のある郡、②：①がない場合は主要部分が属する郡に含め、「郡名」覧には両方を明記している。

2　一覧表の記載内容について

（1）本表は、中世城館跡及び城館関連遺構等を記載している。

（2）本表には、城館番号、城館跡名、旧郡、所在地、位置（緯度・経度）、立地、標高（最高所）、比高（最高所と山麓間）、城域（東西･南北の長さ）、現況（地目）、概要、分布図（地図番号）、解説頁を記載した。

・城館番号：分布図及び解説頁の番号と対応する。

・城館跡名：『改訂 岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会 2003 年）に用いられたものを原則として使用している。また別称については、中世城館関連文献一覧に記載している。

・所 在 地：市町村名と大字を掲載している。また城館範囲内に複数の住所が存在する場合は、その全てを記載している。

・位　　置：主郭と推定した位置の北緯・東経を示している。

・立　　地：広義の意味で、以下の 4 種に分類する。なお第３章では、より詳細な地形的特徴を記述している場合もある。

頂　部：独立丘陵や山塊の頂部に占地するもの

尾根部：山塊から派生した尾根筋に占地するもの（尾根頂部や平坦部を含む）

端　部：尾根の先端部分や斜面・裾部分に占地するもの

平地部：平地に占地するもの

・標　　高：城館の最高所の数値を表記し、1 の位は切り捨てている。ただし、標高 10 m未満のものは、そのままの数値を表記している。

・比　　高：城館の麓と思われる場所から最高所までの数値を表記し、1 の位は切り捨てている。ただし比高差が 10 m未満のものは、そのままの数値を表記している。

・城　　域：城館遺構が存在する範囲を表記し、1 の位は切り捨てている。また、城域が判然としないものは空欄にしている。

・現　　況：山林・水田・畑・果樹園・宅地・社寺・その他の項目に分けて記載している。

・概　　要：第３章で解説した城館は、確認した遺構の種類のみを記載している。また、その他のものは、現地の状況や故事来歴等を記載している。

・分 布 図：分布図にある図番号と右・左を表記している。

・解 説 頁：第３章で解説した城館はページを表記している。

表２　美作国中世城館跡一覧表

真嶋郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
1	徳山城山城跡	真嶋	真庭市蒜山西茅部	北緯35°16′28″ 東経133°37′16″	端部	490	10	東西50m 南北120m	その他	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・土塁を確認。	1右	114
2	波作利城跡	真嶋	真庭市蒜山本茅部・蒜山西茅部	北緯35°15′47″ 東経133°36′51″	尾根部	720	220	東西100m 南北150m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・櫓台を確認。	1右	114
3	粟住山城跡	真嶋	真庭市蒜山東茅部	北緯35°15′42″ 東経133°41′04″	頂部	600	130	東西210m 南北360m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	2 右左	115～ 116
4	経塚山城跡	真嶋	真庭市蒜山東茅部	北緯35°16′21″ 東経133°41′35″	頂部	540	100		山林	経塚山（543m）山頂尾根筋に立地。山頂および南西に延びる尾根筋に平坦な地形が見られる。堀切はない。小規模な陣城の可能性はある。山頂部に祠あり。	2右	
5	浦山城跡	真嶋	真庭郡新庄村	北緯35°11′27″ 東経133°33′53″	尾根部	610	110	東西150m 南北140m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口・櫓台・土橋を確認。	4右	117
6	沢城跡	真嶋	真庭郡新庄村	北緯35°10′50″ 東経133°33′56″	平地	480	0		水田	平城であったらしく、かつては土塁が残存していたとされる。水田耕作中に、石敷などが見つかったと言われる。	4右	
7	飯山城跡	真嶋	真庭市藤森・黒杭	北緯35°13′47″ 東経133°40′55″	頂部	620	170	東西240m 南北120m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	5左	118
8	間谷城跡	真嶋	真庭市蒜山東茅部	北緯35°15′39″ 東経133°40′02″	端部	470	5	東西50m 南北50m	畑	曲輪・堀切・土塁を確認。	2左	119
9	向立石城跡	真嶋	真庭市粟谷	北緯35°13′23″ 東経133°40′29″	尾根部	530	70	東西60m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	5左	119
10	立石城跡	真嶋	真庭市種	北緯35°13′01″ 東経133°40′20″	尾根部	510	50	東西50m 南北30m	山林・ 社寺	曲輪を確認。	5左	120
11	城ヶ山城跡	真嶋	真庭市種	北緯35°12′09″ 東経133°38′48″	頂部	820	260	東西120m 南北70m	山林	曲輪を確認。	5左	120
12	釜戸原城跡	真嶋	真庭市小童谷	北緯35°13′16″ 東経133°42′34″	頂部	510	140	東西160m 南北200m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	5右	121
13	塚原城跡	真嶋	真庭市種	北緯35°12′13″ 東経133°40′26″	端部	470	10		畑・ その他	時期不明の土塁状の高まりあり。小字「城ノ内」。	5左	
14	大沼山陣所跡	真嶋	真庭市豊栄	北緯35°11′53″ 東経133°43′52″	端部	400	60		山林	旧ロープウェイ乗場付近の尾根筋2か所に小さな平坦面があり、特に北側の平坦面は長さ約20mのものを含め、2面存在する。ただ切岸などは明瞭ではない。杉山盛重が湯山城攻略の際の陣所とされる。	5右	
15	要害山城跡	真嶋	真庭市黒田・鉄山	北緯35°10′36″ 東経133°38′53″	頂部	680	200	東西70m 南北40m	山林	曲輪・櫓台を確認。	5左	122

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
16	小坂向城山城跡	真嶋	真庭市見明戸	北緯35°11′02″ 東経133°40′00″	尾根部	490	60	東西60m 南北30m	その他	発掘調査あり。曲輪・土塁を確認。	5左	122
17	竹山旦城跡	真嶋	真庭市見明戸	北緯35°10′55″ 東経133°40′25″	端部	440	20	東西100m 南北140m	山林	曲輪・堀切を確認。	5左	123
18	見明戸城山城跡	真嶋	真庭市見明戸	北緯35°10′37″ 東経133°40′44″	尾根部	490	90	東西170m 南北150m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	5左	124
19	目地城跡	真嶋	真庭市豊栄	北緯35°10′54″ 東経133°43′41″	尾根部	410	70	東西90m 南北140m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	5右	125
20	藪迫山城跡	真嶋	真庭市豊栄	北緯35°10′56″ 東経133°43′50″	尾根部	370	40	南北40m 東西30m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切を確認。	5右	125
21	土居城跡	真嶋	真庭市禾津	北緯35°10′18″ 東経133°43′47″	尾根部	390	70	東西70m 南北200m	山林	曲輪・堀切・虎口を確認。	5右	126
22	麓城跡	真嶋	真庭市美甘	北緯35°09′26″ 東経133°36′46″	頂部	510	90	東西160m 南北170m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	10右	127～128
23	陣山城跡	真嶋	真庭市美甘	北緯35°9′13″ 東経133°36′51″	尾根部	460	40	東西20m 南北70m	山林	曲輪を確認。	10右	128
24	陣山城跡	真嶋	真庭市美甘	北緯35°9′15″ 東経133°36′41″	端部	490	70	東西140m 南北170m	山林	曲輪を確認。	10右	129
25	山根城跡	真嶋	真庭市美甘	北緯35°09′09″ 東経133°37′09″	尾根部	540	120	東西240m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。	10右	130
26	清谷城山城跡	真嶋	真庭市清谷	北緯35°05′59″ 東経133°35′05″	頂部	560	120		山林	2か所の高所に人為的造成と考えられる平坦地が存在する。小字「城山」。	10右	
27	岩明山城跡	真嶋	真庭市清谷	北緯35°05′31″ 東経133°35′00″	頂部	550	170	東西110m 南北90m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	10右	131
28	臼水城跡	真嶋	真庭市古呂々尾中	北緯36°06′16″ 東経133°36′49″	尾根部	540	30	東西40m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	10右	131
29	大料城跡	真嶋	真庭市神代・本郷	北緯35°05′55″ 東経133°39′24″	頂部	520	240	東西80m 南北240m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	132
30	出羽屋敷跡	真嶋	真庭市柴原	北緯35°05′59″ 東経133°42′35″	端部	220	20	東西30m 南北40m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	133
31	舟津屋敷跡	真嶋	真庭市組	北緯35°05′41″ 東経133°41′22″	端部	210	0		社寺	水田造成などにより改変を受け、往時の姿を留めていない。三浦氏の家臣、舟津氏の居館と伝えられる。	11右	
32	陣山砦跡	真嶋	真庭市本郷・組	北緯35°05′24″ 東経133°41′03″	尾根部	360	180	東西30m 南北20m	山林	曲輪を確認。	11左	133
33	高田城跡	真嶋	真庭市勝山	北緯35°05′22″ 東経133°41′35″	頂部	310	130	東西350m 南北650m	山林	市指定史跡。発掘調査あり。曲輪・堀切・竪堀・土塁・石垣・虎口・櫓台・掘立柱建物・井戸を確認。	11右 18右	134～138

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
34	天神山砦跡	真嶋	真庭市勝山・横部	北緯35°05′24″ 東経133°41′59″	尾根部	320	160	東西290m 南北120m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	139
35	若代城跡	真嶋	真庭市若代	北緯35°03′36″ 東経133°36′41″	尾根部	360	60	東西70m 南北60m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	17右	140
36	則行城跡	真嶋	真庭市岩井谷	北緯35°02′52″ 東経133°36′13″	尾根部	380	70	東西40m 南北110m	山林	曲輪・土塁を確認。	17右	140
37	荒木屋敷跡	真嶋	真庭市若代畝	北緯35°04′59″ 東経133°37′44″	端部	430	0		宅地	屋敷地を想定しているが、宅地化しており現状では改変が著しい。	18左	
38	浅田城跡	真嶋	真庭市福谷	北緯35°05′08″ 東経133°40′00″	尾根部	270	40		山林	東尾根稜線横から南東斜面の竹林中に階段状の加工段が存在する。尾根頂部・稜線上は自然地形。	18左	
39	浅田城跡	真嶋	真庭市福谷	北緯35°04′48″ 東経133°39′51″	尾根部	320	90	東西60m 南北60m	山林	曲輪・井戸を確認。	18左	141
40	飯ノ山城跡	真嶋	真庭市関	北緯35°00′34″ 東経133°41′00″	尾根部	340	140	東西80m 南北110m	山林	曲輪・土塁を確認。	18左	141
41	牧土居	真嶋	真庭市勝山	北緯35°05′05″ 東経133°41′51″	平地	160	0		水田・宅地	旭川の北側に近接し、現在の勝山市街地の西側に位置する。周囲より1段高いところがあり、屋敷地の可能性がある。北東隣に「阿波土居」が近接する。	18右	
42	阿波土居	真嶋	真庭市勝山	北緯35°05′08″ 東経133°41′57″	平地	160	0		水田・宅地	発掘調査あり。旭川の北側に近接し、勝山市街地の西側に位置する。工場の敷地内とその北側の水田が、周辺地形より0.5～1mほど高くなる。この高まり部分から、掘立柱建物や石垣などが検出される。	18右	
43	梶原屋敷跡	真嶋	真庭市草加部	北緯35°04′47″ 東経133°42′18″	端部	170	10		宅地	『久世町誌』に略測図掲載。現状は大規模に改変を受けるものの、略測図の形状が若干残存している。	18右	
44	殿土井	真嶋	真庭市草加部	北緯35°04′45″ 東経133°42′23″	端部	170	10		山林・その他	旭川の南側の河岸段丘裾部に位置しており、西側には横畝川が近接して流れる。約40×20mの平坦地が残るが、南側は畑地による改変で旧状を呈していない。屋敷地であったと想定する。	18右	
45	飯山城跡	真嶋	真庭市草加部	北緯35°04′40″ 東経133°43′00″	端部	190	40	東西60m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	18右	142
46	惣七遺跡	真嶋	真庭市草加部	北緯35°04′33″ 東経133°43′03″	端部	190	20	東西60m 南北70m	山林	曲輪を確認。	18右	142
47	金砕山城跡	真嶋	真庭市惣・草加部・日名	北緯°35′03″59 東経133°43′50″	頂部	540	400	東西290m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	18右	143
48	月沢城跡	真嶋	真庭市中	北緯35°03′34″ 東経133°44′42″	尾根部	220	80	東西80m 南北60m	山林・社寺	曲輪・堀切・土塁を確認。	18右	144
49	本山城跡	真嶋	真庭市月田本	北緯35°02′36″ 東経133°37′30″	尾根部	380	130	東西250m 南北150m	山林	曲輪・土塁・櫓台を確認。	18左	145

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
50	栩原城跡	真嶋	真庭市月田	北緯35°03′40″ 東経133°39′31″	頂部	360	150		山林	山頂や周辺尾根筋に自然地形に近い平坦地が続く。『美作古城史』に栩原氏代々の城で地元の伝承があると記す。	18左	
51	会下山城跡	真嶋	真庭市月田	北緯35°03′15″ 東経133°39′49″	尾根部	310	100	東西50m 南北110m	山林	曲輪・横堀・土塁・虎口・櫓台を確認。	18左	146
52	三堂坂城跡	真嶋	真庭市月田	北緯35°03′09″ 東経133°40′01″	尾根部	260	50	東西90m 南北220m	山林・ その他	曲輪・堀切・土塁を確認。	18左	147
53	鳶乃森城跡	真嶋	真庭市月田	北緯35°02′30″ 東経133°39′51″	頂部	290	70	東西200m 南北60m	山林	曲輪を確認。	18左	148
54	月田城跡	真嶋	真庭市月田	北緯35°02′30″ 東経133°40′37″	尾根部	410	190	東西400m 南北300m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・櫓台を確認。	18左	149～ 150
55	野田屋敷跡	真嶋	真庭市日名	北緯35°03′02″ 東経133°44′03″	端部	190	20	東西80m 南北140m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認	18右	151
56	宮山城跡	真嶋	真庭市高屋・開田・ 上市瀬	北緯35°02′31″ 東経133°44′40″	尾根部	450	320	東西350m 南北200m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁を確認。	18右	152～ 153
57	城山城跡	真嶋	真庭市上市瀬	北緯35°02′01″ 東経133°44′43″	尾根部	210	70	東西220m 南北90m	山林	曲輪を確認。	18右	154
58	佐引城跡	真嶋	真庭市佐引	北緯35°00′54″ 東経133°39′29″	頂部	320	70	東西200m 南北160m	山林・ 畑	曲輪を確認。	18左	155
59	注連山城跡	真嶋	真庭市落合垂水・ 西河内・下市瀬	北緯35°01′13″ 東経133°44′41″	頂部	310	190	東西880m 南北450m	山林・ 社寺	曲輪・堀切を確認。	18右 19左	156～ 157
60	蜂ヶ城跡	真嶋	真庭市一色・栗原・ 鹿田	北緯34°59′35″ 東経133°42′38″	頂部	340	200	東西240m 南北350m	山林	曲輪を確認。	24右	158
61	植木構跡	真嶋	真庭市鹿田	北緯34°59′43″ 東経133°42′24″	平地	130	0		水田・ その他	発掘調査あり。鎌倉時代～室町時代にかけての掘立柱建物群を検出。調査時の遺跡名は須之内遺跡。	24右	
62	石ヶ城跡	真嶋	真庭市鹿田	北緯34°59′46″ 東経133°44′07″	頂部	240	110	東西560m 南北460m	山林	曲輪・堀切を確認。	24右	159～ 160
63	真木ヶ城跡	真嶋	真庭市鹿田・下方・ 田原山上	北緯34°59′57″ 東経133°44′21″	頂部	270	150	東西290m 南北430m	山林	曲輪・堀切・竪堀・虎口・土塁を確認。	24右	161～ 162
64	十六城跡	真嶋	真庭市落合垂水・ 田原山上	北緯35°00′08″ 東西133°44′45″	頂部	370	250		山林	備中川の南に所在する山塊頂部に立地するとされる。浅い鞍部を挟み高所が2つある。北西斜面は急傾斜。眺望良好。	24右	
65	栗原城跡	真嶋	真庭市栗原	北緯34°58′41″ 東西133°42′57″	尾根部	280	140	東西190m 南北520m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	24右	163～ 164
66	都我布呂城跡	真嶋 津高	真庭市上山・加賀郡吉 備中央町溝部	北緯34°56′49″ 東経133°44′36″	尾根部	410	110	東西160m 南北210m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	24右	165
67	城山城跡	真嶋	真庭市一色	北緯34°59′39″ 東経133°41′51″	端部	160	10	東西90m 南北90m	山林	曲輪を確認。	24右	166

大庭郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
68	日爪城跡	大庭	真庭市蒜山中福田	北緯35°16′58″ 東経133°39′33″	端部	490	40	東西150m 南北90m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・土塁・虎口・櫓台・土橋を確認。	2左	168
69	七屋敷跡	大庭	真庭市蒜山下福田	北緯35°17′27″ 東経133°41′09″	平地	460	0		畑	中蒜山南麓に位置し、南流する井川の西岸に立地する。現状は畑地で、高さ30～50㎝の土塁残痕とも見てとれるものもあるが、畑の畦と区別できない。周囲より約30㎝高い、長方形（約30×20m）の畑がある。『八束村史』に「七屋敷」「長者の井戸」とある。	2右	
70	山名屋敷跡	大庭	真庭市蒜山上長田	北緯35°17′24″ 東経133°43′16″	平地	420	0		宅地	土塁・壕を確認。	2右	169
71	田井城跡	大庭	真庭市社	北緯35°10′54″ 東経133°45′18″	端部	430	40	東西60m 南北100m	山林・畑	曲輪を確認。	6左	169
72	殿屋敷遺跡	大庭	真庭市蒜山別所	北緯35°17′12″ 東経133°46′43″	端部	530	20		山林	「別所」と「吉田」の字境をなす低丘陵から北へ派生する尾根筋に立地。3段程度の広い平坦地。「トノヤシキ」の地名から館の可能性あり。丘陵頂部に字境の土盛りを確認。	3左	
73	下和城跡	大庭	真庭市蒜山下和	北緯35°15′50″ 東経133°46′33″	端部	500	20	東西220m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	3左	170
74	初和城山堡	大庭	真庭市蒜山初和	北緯35°14′47″ 東経133°44′34″	頂部	460	70		山林	通称「城山」に所在すると伝わる城。平坦地は認められるが判然としない。	5右	
75	湯山城跡	大庭	真庭市湯原温泉	北緯35°12′13″ 東経133°43′59″	尾根部	480	150	東西30m 南北150m	山林	曲輪・堀切を確認。	5右	171
76	大壇城跡	大庭	真庭市山久世	北緯35°06′31″ 東経133°43′16″	尾根部	310	90	東西80m 南北100m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	172
77	茶臼山城跡	大庭	真庭市三阪	北緯35°05′15″ 東経133°45′26″	尾根部	300	130	東西20m 南北120m	山林	曲輪・土塁を確認。	12左	172
78	大寺畑城跡	大庭	真庭市久世	北緯35°05′48″ 東経133°44′13″	頂部	540	360	東西300m 南北360m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・櫓台を確認。	11右	173～174
79	陣山城跡	大庭	真庭市久世	北緯35°05′20″ 東経133°43′37″	頂部	450	280	東西1800m 南北300m	山林	曲輪・堀切・土塁・石列・虎口・櫓台を確認。	11右	175～179
80	小寺畑城跡	大庭	真庭市久世・三阪	北緯35°06′00″ 東経133°45′03″	頂部	520	310	東西220m 南北140m	山林	曲輪・竪堀・土塁を確認。	12左	180
81	羽庭城跡	大庭	真庭市久世	北緯35°05′23″ 東経133°45′03″	尾根部	210	60	東西120m 南北20m	その他	発掘調査あり。曲輪・堀切を確認。	12左	181
82	砥石山城跡	大庭	真庭市目木・三阪	北緯35°05′18″ 東経133°46′35″	尾根部	410	250	東西20m 南北150m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	12左 19左	182
83	神上城跡	大庭	真庭市樫東	北緯35°05′57″ 東経133°47′30″	尾根部	370	180	東西200m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀・虎口・櫓台を確認。	12左	183

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
84	二ツ山城跡	大庭	真庭市余野下	北緯35°07′16″ 東経133°48′25″	頂部	560	330	東西200m 南北370m	山林	曲輪・堀切・竪堀・櫓台を確認。	12左	184～185
85	高山城跡	大庭	真庭市余野上・余野下・上河内	北緯°35′06″04 東経°133′49″59	頂部	660	420	東西180m 南北50m	山林	曲輪・竪堀・土塁・石列を確認。	12右	186～187
86	城山城跡	大庭	真庭市樫東・樫西	北緯35°05′38″ 東経133°46′54″	尾根部	270	90	東西100m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	12左	187
87	上ヶ市遺跡	大庭	真庭市久世	北緯35°05′02″ 東経133°44′39″	端部	150	0		畑・宅地	旭川北岸、段丘前面は約3mの段差。段丘上は平坦。現在、畑地や宅地となり、改変が著しい。	18右	
88	篠向城跡	大庭	真庭市三崎・大庭・平松・古見	北緯35°03′52″ 東経133°46′27″	頂部	410	270	東西600m 南北750m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・土橋・掘立柱建物を確認。	19左	188～191
89	目木構跡	大庭	真庭市目木	北緯35°04′43″ 東経133°46′49″	平地	160	0		宅地	堀を確認。	19左	191
90	持家城跡	大庭	真庭市上河内	北緯35°03′42″ 東経133°48′19″	尾根部	270	90	東西150m 南北230m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	19左	192
91	鳥越山城跡	大庭	真庭市古見・田原	北緯35°02′36″ 東経133°45′57″	尾根部	240	100	東西50m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	19左	193
92	名称未定	大庭	真庭市下河内	北緯35°02′13″ 東経133°47′33″	頂部	200	50		山林	標高約190mの独立丘陵頂部に位置する。頂部に平坦地あり。南西斜面に細い段や、東尾根に曲輪状平坦地がある。頂部に古墳あり。	19左	
93	田楽城跡	大庭	真庭市中河内	北緯35°02′13″ 東経133°47′52″	頂部	330	170	東西80m 南北30m	山林・その他	発掘調査あり。曲輪を確認。	19左	194
94	赤野遺跡	大庭	真庭市赤野	北緯35°01′35″ 東経133°46′17″	端部	140	10	東西80m 南北70m	畑	発掘調査あり。曲輪・堀切・土塁・掘建柱建物を確認。	19左	194
95	高山城跡	大庭	真庭市下河内	北緯35°01′47″ 東経133°46′51″	尾根部	240	110	東西150m 南北160m	山林	曲輪を確認。	19左	195
96	逆巻城跡	大庭	真庭市法界寺・赤野	北緯35°01′17″ 東経133°45′59″	尾根部	180	60	東西150m 南北250m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	19左	196
97	土器尾城跡	大庭	真庭市下河内・法界寺	北緯35°00′59″ 東経133°46′47″	頂部	450	320	東西240m 南北210m	山林	曲輪を確認。	19左	197～198

西西条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
98	陣山	西西条	苫田郡鏡野町羽出	北緯35°12′58″ 東経133°53′55″	尾根部	460	60		山林	尾根先端頂部付近が該当する。頂部に約10mほどの平坦地が存在し、祠がある。現状では堀切・切岸・土塁は見られない。	7左	
99	奥津城山城跡	西西条	苫田郡鏡野町奥津	北緯35°13′10″ 東経133°55′18″	頂部	470	100	東西110m 南北60m	山林	曲輪を確認。	7左	200

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
100	余瀬ヶ城跡	西西条	苫田郡鏡野町奥津川西・羽出	北緯35°12′47″ 東経133°54′28″	頂部	550	190	東西160m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	7左	201
101	西浦城跡	西西条	苫田郡鏡野町井坂・養野	北緯35°11′00″ 東経133°54′43″	尾根部	410	140	東西40m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	7左	201
102	寄山城跡	西西条	苫田郡鏡野町養野	北緯35°10′55″ 東経133°55′14″	尾根部	380	60		山林	養野川流域の平地の東奥に位置する尾根筋に立地する。大規模な畑地掘削が各所に認められる。『苫田郡誌』は「寄山城」とし、所在地は泉村、城主は河端周防・河端丹後とする。	7左	
103	二山城跡	西西条	苫田郡鏡野町養野	北緯35°10′47″ 東経133°55′03″	端部	350	30	東西70m 南北60m	山林	曲輪を確認。	7左	202
104	小丸城跡	西西条	苫田郡鏡野町杉	北緯35°10′22″ 東経133°54′30″	端部	270	30	東西50m 南北20m	山林	曲輪を確認。	7左	202
105	西屋城跡	西西条	苫田郡鏡野町西屋・女原	北緯35°10′39″ 東経133°54′01″	頂部	510	250	東西290m 南北260m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	7左	203～204
106	斎藤別墅跡	西西条	苫田郡鏡野町西屋	北緯35°10′15″ 東経133°53′42″	端部	240	0		宅地	『作陽誌』に記載があり、西屋川と西谷川に挟まれた「屋敷・古邸」の地名に平坦地が残る。一帯は宅地となり、集落の中心やや上方に、竹藪となった広い平坦地や石垣が存在する。	7左	
107	侍屋敷跡	西西条	苫田郡鏡野町西屋	北緯35°10′12″ 東経133°53′47″	端部	240	0		水田・宅地	『作陽誌』が記載する「斎藤別墅」を地理的な観点から西屋川と西谷川に挟まれた「屋敷・古邸」の地名が残る平坦地に比定する。一帯は宅地となり、集落の中心やや上方に、竹藪となった広い平坦地や石垣が存在する。	7左	
108	岡の屻城跡	西西条	苫田郡鏡野町富東谷・富西谷	北緯35°09′49″ 東経133°50′40″	尾根部	470	60	東西310m 南北200m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・土塁を確認。	12右	205～206
109	城山	西西条	苫田郡鏡野町富西谷	北緯35°09′36″ 東経133°50′14″	頂部	430	20	東西60m 南北40m	山林	曲輪を確認。	12右	207
110	ビクニガ城跡	西西条	苫田郡鏡野町富西谷・富東谷	北緯35°09′20″ 東経133°50′32″	尾根部	540	160	東西100m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	12右	207
111	天狗山城跡	西西条	苫田郡鏡野町杉	北緯35°09′58″ 東経133°53′52″	尾根部	360	120	東西150m 南北200m	山林	曲輪・堀切を確認。	13左	208
112	河内構跡	西西条	苫田郡鏡野町河内	北緯35°09′12″ 東経133°53′54″	平地	210	0		その他	発掘調査あり。堀・掘立柱建物・井戸を確認。	13左	209
113	河内城跡	西西条	苫田郡鏡野町河内	北緯35°09′08″ 東経133°54′03″	尾根部	250	60	東西160m 南北40m	山林・宅地	発掘調査あり。曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	13左	210～211
114	東山城跡	西西条	苫田郡鏡野町久田上原・久田下原	北緯35°08′20″ 東経133°53′34″	頂部	440	240	東西120m 南北20m	山林	曲輪・堀切を確認。	13左	211
115	久田上原城跡	西西条	苫田郡鏡野町久田上原	北緯35°08′37″ 東経133°53′38″	尾根部	260	50	東西70m 南北90m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	212
116	久田堀ノ内遺跡	西西条	苫田郡鏡野町久田下原	北緯35°08′08″ 東経133°52′51″	平地	180	0		その他	発掘調査あり。堀・掘立柱建物・土坑墓を確認。	13左	213～214

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
117	比丘尼ヶ城跡	西西条	苫田郡鏡野町久田下原	北緯35°08′01″ 東経133°53′12″	尾根部	280	100	東西150m 南北110m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切を確認。	13左	215
118	城峪城跡	西西条	苫田郡鏡野町久田下原	北緯35°07′52″ 東経133°53′16″	頂部	240	60	東西200m 南北100m	山林・ その他	発掘調査あり。曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	13左	216～ 217
119	小田草城跡	西西条	苫田郡鏡野町馬場	北緯35°07′41″ 東経133°54′52″	尾根部	390	170	東西250m 南北250m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	13左	218～ 219
120	城山城跡	西西条	苫田郡鏡野町馬場	北緯35°07′21″ 東経133°55′04″	端部	220	20	東西100m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	220
121	岩棚構跡	西西条	苫田郡鏡野町入	北緯35°06′45″ 東経133°54′02″	端部	160	20	東西70m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	220
122	葛下城跡	西西条	苫田郡鏡野町山城・ 中谷	北緯35°06′37″ 東経133°53′01″	頂部	370	220	東西870m 南北550m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・土塁・竪堀を確認。	13左	221～ 226
123	春日城跡	西西条	苫田郡鏡野町貞永寺	北緯35°07′12″ 東経133°56′04″	端部	210	20	東西90m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	227
124	犬城跡	西西条	苫田郡鏡野町土居	北緯35°06′32″ 東経133°55′55″	尾根部	200	30	東西60m 南北210m	山林	曲輪・堀切を確認。	13左	227
125	小田城跡	西西条	苫田郡鏡野町高山	北緯35°05′49″ 東経133°52′33″	尾根部	470	280	東西100m 南北80m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	228
126	キリゴ谷城山城跡	西西条	苫田郡鏡野町高山	北緯35°05′22″ 東経133°53′18″	端部	190	20	東西70m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	229
127	鴫津の構跡	西西条	苫田郡鏡野町真加部	北緯35°05′14″ 東経133°54′56″	端部	130	10	東西60m 南北80m	水田・ 畑・ 宅地	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	229
128	大田和城跡	西西条	苫田郡鏡野町瀬戸	北緯35°05′51″ 東経133°56′04″	端部	180	30		山林	香々美川の浸食崖上の尾根筋に比定されている。尾根上には平坦地がある。『作陽誌』は竹田村「大田和堡」とし、東西20間、南北50間で、「壁塹」が残るとし、永禄の頃(1558～70)、芦田右馬亮が籠もる沖城を毛利の兵が大田和と茶臼山に陣して攻撃したと記す。	13左	
	竹田遺跡	西西条	苫田郡鏡野町瀬戸						その他	遺跡は大規模農道・鏡野中学校建設に伴い、1972～76年に発掘調査を町教委が実施。調査後一部消滅。堀切を検出したとされる。位置・規模など詳細不明。『鏡野町史』は大田和城の堀切と推定している。	13左	
	竹田古墳群	西西条	苫田郡鏡野町竹田						その他	『竹田遺跡発掘調査報告第1集』によると、1971年に鏡野中学校建設に伴い、発掘調査を町教委が実施。6・7号墳の間約10m弱ほどの中世の小土塁があるとしている。また、『鏡野町史考古史料編』は竹田古墳群の所在地を竹田・斎藤丸とする。古墳を利用した陣地の可能性がある。	13左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
129	沖構跡	西西条	苫田郡鏡野町円宗寺	北緯35°05′40″ 東経133°56′25″	平地	140	0	東西80m 南北150m	水田・畑・宅地	曲輪・堀を確認。	13右	230
130	目崎城跡	西西条	苫田郡鏡野町下原・津山市中北下・領家	北緯35°04′22″ 東経133°54′29″	頂部	230	100	東西250m 南北310m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	20左	231～232
131	古川城跡	西西条	苫田郡鏡野町宗枝	北緯35°05′05″ 東経133°55′43″	尾根部	180	60	東西110m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	20左	232
132	因幡殿	西西条	苫田郡鏡野町古川	北緯35°04′44″ 東経133°55′54″	平地	120	0		宅地	香々美川が近接して西側を流れる。藤原景清、また因幡という武将を祀った地とされ、昭和初期まで塚があったらしい。現在は宅地化されいる。「因幡殿」という地名が残る。	20左	
133	局笠山城跡	西西条	津山市戸島・下田邑	北緯35°04′28″ 東経133°57′22″	頂部	240	120	東西240m 南北390m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	20右	233～234
134	院庄館跡	西西条	津山市神戸	北緯35°03′43″ 東経133°56′35″	平地	110	0	東西250m 南北300m	社寺・その他	国指定史跡。発掘調査あり。土塁・堀を確認。	20右	235
135	院庄構城跡	西西条	津山市院庄	北緯35°03′22″ 東経133°56′42″	平地	100	0	東西140m 南北150m	水田・畑・宅地	発掘調査あり。曲輪・堀を確認。	20右	236
136	美和山城跡	西西条	津山市二宮	北緯35°03′47″ 東経133°58′00″	尾根部	150	20	東西110m 南北60m	その他	曲輪・土塁を確認。	20右	237
137	下原構跡	西西条	苫田郡鏡野町下原	北緯35°04′18″ 東経133°54′52″	平地	120	0		水田	曲輪を想定。	20左	238

西北条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
138	さんこう城跡	西北条	苫田郡鏡野町岩屋	北緯35°11′05″ 東経133°58′50″	尾根部	500	160		山林	曲輪を確認。	7右	
139	相坂城跡	西北条	苫田郡鏡野町真経	北緯35°09′23″ 東経133°57′07″	尾根部	280	50	東西170m 南北30m	山林・神社	曲輪を確認。	13右	240
140	日上山城跡	西北条	苫田郡鏡野町寺和田	北緯35°08′17″ 東経133°57′05″	尾根部	280	90	東西140m 南北50m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	13右	240
141	桝形城跡	西北条	苫田郡鏡野町香々美・寺和田・津山市西田辺	北緯35°08′06″ 東経133°58′06″	頂部	640	450	東西200m 南北400m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・土塁・竪堀を確認。	13右	241～243
142	東田辺城山城跡	西北条	津山市東田辺	北緯35°07′05″ 東経133°58′54″	頂部	250	40	東西40m 南北80m	山林	曲輪・土塁を確認。	13右	243
143	黒沢山城跡	西北条	津山市西田辺・東田辺	北緯35°07′53″ 東経133°59′08″	頂部	650	320	東西50m 南北120m	山林	曲輪・堀切を確認。	13右	244

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
144	東田辺谷上城跡	西北条	津山市東田辺	北緯35°06′50″ 東経133°58′40″	尾根部	250	60	東西30m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	13右	245
145	山名房安居館跡	西北条	苫田郡鏡野町香々美	北緯35°06′36″ 東経133°57′08″	平地	160	0		水田	香々美川東岸の沖積地に立地。一帯は水田化される。『作陽誌』は「山名旧宅」とし、市場村にあって、土地の人は山名房安の住居と言うとする。「構の内」「馬場の内」「築地」の小字が残る。	13右	
146	長良獄城跡	西北条	津山市一宮	北緯35°06′01″ 東経133°59′35″	尾根部	160	30	東西40m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13右	245
147	一宮甲宮ノ谷遺跡	西北条	津山市一宮	北緯35°05′56″ 東経133°59′29″	尾根部	170	40		山林	宮川と鵜ノ羽川が合流する地点の西側に位置する。小さい平坦地があり、井戸状の施設がある。また尾根線に平行する形で土塁が約50mほど続く。	13右	
148	天王木土塁跡	西北条	苫田郡鏡野町沖	北緯35°05′33″ 東経133°56′55″	端部	170	10	東西60m 南北60m	その他	曲輪・土塁を確認。	13右	246
149	茶臼山城跡	西北条	苫田郡鏡野町寺元・沖	北緯35°05′09″ 東経133°56′29″	端部	170	30	東西60m 南北90m	山林	曲輪・土塁を確認。	20右	246
150	神楽尾城関連遺構跡	西北条	津山市一宮・上田邑	北緯35°05′20″ 東経133°59′05″	尾根部	300	160	東西280m 南北400m	山林	曲輪・土塁を確認。	13右	247～248
151	神楽尾城跡	西北条	津山市上田邑・下田邑・総社・小原	北緯35°05′04″ 東経133°59′04″	頂部	300	170	東西520m 南北460m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	20右	249～252
152	津山城跡	西北条	津山市山下	北緯35°03′45″ 東経134°00′18″	頂部	140	40	東西700m 南北700m	その他	国指定史跡。発掘調査あり。曲輪・石垣・虎口を確認。	21左	253～254

東北条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
153	殿ノ山城跡	東北条	津山市加茂町宇野	北緯35°11′32″ 東経134°01′33″	端部	330	30	東西80m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	8左	256
154	祖星ヶ山砦跡	東北条	津山市加茂町公郷・加茂町小渕	北緯35°11′00″ 東経134°04′38″	頂部	620	310	東西50m 南北90m	山林	堀切を確認。	8右	256
155	室尾城跡	東北条	津山市加茂町青柳・加茂町小渕	北緯35°11′37″ 東経134°04′12″	尾根部	400	140	東西220m 南北50m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・石積・虎口・櫓台を確認。	8右	257
156	内構跡	東北条	津山市加茂町知和	北緯35°12′11″ 東経134°05′27″	平地	290	0		山林・宅地	県指定史跡。矢筈山から派生した尾根が加茂川にぶつかる裾部に位置する。約100mの平坦地があり、その内側に石塁と井戸状のくぼみが存在する。矢筈城主である草刈氏の居館跡に比定される。	8右	
157	矢筈城跡	東北条	津山市加茂町山下・加茂町知和	北緯35°11′52″ 東経134°06′15″	頂部	750	470	東西1750m 南北460m	山林	県指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・石垣・虎口・櫓台を確認。	8右	258～263
158	百々城跡	東北条	津山市加茂町百々・加茂町中原	北緯35°10′26″ 東経134°02′39″	頂部	350	110	東西350m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認	8左	264

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
159	佐良山城跡	東北条	津山市加茂町公郷	北緯35°10′18″ 東経134°04′07″	尾根部	280	40	東西60m 南北30m	山林	曲輪・土塁を確認。	8右	265
160	仙の城跡	東北条	津山市加茂町楢井・上横野	北緯35°09′43″ 東経134°00′40″	頂部	720	300	東西30m 南北70m	山林	曲輪を確認。	14左	265
161	行重城跡	東北条	津山市加茂町行重	北緯35°09′41″ 東経134°02′02″	頂部	350	50	東西70m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	14左	266
162	梶間山城跡	東北条	津山市加茂町成安・吉見	北緯35°08′38″ 東経134°03′42″	頂部	720	540	東西70m 南北100m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口を確認。	14右	266
163	松ヶ屸城跡	東北条	津山市加茂町下津川	北緯35°09′02″ 東経134°04′32″	尾根部	280	70	東西40m 南北180m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	14右	267
164	笠松城跡	東北条	津山市加茂町下津川	北緯35°09′23″ 東経134°05′40″	頂部	530	280	東西110m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	14右	267
165	利元城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°08′42″ 東経134°01′18″	尾根部	610	330	東西120m 南北200m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	14左	268
166	吉見仙砦跡	東北条	津山市加茂町成安・吉見・大篠	北緯35°08′29″ 東経134°03′21″	山頂部	760	510	東西120m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	14左	269
167	天狗寺城跡	東北条	津山市大篠	北緯35°08′16″ 東経134°02′57″	尾根部	600	150	東西20m 南北130m	山林	堀切を確認。	14左	269
168	烏ヶ仙城跡	東北条	津山市大篠・吉見・綾部	北緯35°08′02″ 東経134°03′08″	頂部	700	520	東西70m 南北130m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・土橋を確認。	14左	270
169	塩屋ヶ城跡	東北条	津山市綾部・吉見	北緯35°07′57″ 東経134°03′26″	尾根部	580	430	東西40m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	14左	271
170	天神山城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°07′54″ 東経134°00′29″	頂部	450	250	東西70m 南北160m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	14左	271
171	福田城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°07′30″ 東経134°01′09″	尾根部	280	90	東西80m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	14左	272
172	懸縄山城跡	東北条	津山市上横野・下横野・大篠	北緯35°07′33″ 東経134°01′23″	頂部	390	210	東西300m 南北390m	山林	曲輪・竪堀を確認。	14左	273～274
173	うらば城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°07′42″ 東経134°00′45″	尾根部	390	220	東西60m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	14左	274
174	上横野谷口遺跡	東北条	津山市上横野	北緯35°07′17″ 東経134°00′34″	尾根部	200	30		山林・畑	南北に流れる横野川の西側で、河岸段丘の先端頂部に位置する。頂部に宝篋印塔が置かれた高まりがあり、古墳とされる。その箇所以外は、畑地などによって削平され旧地形を残さない。尾根先端方向にも平坦地が存在する。	14左	
175	横田城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°07′13″ 東経134°00′31″	尾根部	200	30	東西230m 南北70m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	14左	275
176	藤田山城跡	東北条	津山市大篠	北緯35°07′15″ 東経134°01′50″	頂部	250	50	東西100m 南北70m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	14左	276

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
177	台山城跡	東北条	津山市大篠	北緯35°06′59″ 東経134°02′26″	頂部	260	70	東西40m 南北90m	山林	曲輪・堀切を確認。	14左	277
178	別所城跡	東北条	津山市上高倉	北緯35°06′57″ 東経134°02′57″	尾根部	230	50	東西90m 南北80m	山林	曲輪・堀切を確認。	14左	277
179	医王山城跡	東北条	津山市綾部・吉見	北緯35°07′41″ 東経134°03′46″	尾根部	340	170	東西400m 南北120m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・石垣・虎口を確認。	14右	278～280
180	鉢伏城跡	東北条	津山市綾部	北緯35°07′03″ 東経134°03′36″	頂部	310	130	東西200m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	14左右	281
181	小丸山城跡	東北条	津山市上横野	北緯35°06′42″ 東経134°00′41″	端部	170	20		山林・畑	前方後円墳の上横野小丸山古墳を利用して築かれた単郭式の城とされる。現在、古墳は後円部のごく一部を除いてほとんどが削平され、畑となっている。	14左	
182	池上城跡	東北条	津山市上横野・下横野	北緯35°06′46″ 東経134°00′56″	端部	190	30	東西70m 南北90m	社寺	曲輪・土塁を確認。	14左	282
183	中陣跡	東北条	津山市綾部	北緯35°06′47″ 東経134°04′23″	頂部	180	20		山林・社寺	蛇行して流れる加茂川の南西側に位置する。河岸段丘上の頂部にあたり、綾部神社の裏山である。頂部に10m前後の平坦地があるが、神社の別院によって削平されている。周辺には曲輪が伸びないようである。	14右	

東南条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
184	山方深田遺跡	東南条	津山市山方	北緯35°06′53″ 東経133°59′26″	尾根部	240	60		山林	山方高築遺跡・山方芦屋遺跡の西隣の尾根筋に立地し、平坦地や高まりが連なる。人為的な地形改変の可能性は高いが、主郭や堀切などは確認できず。	13右	
185	山方高築遺跡	東南条	津山市山方	北緯35°06′58″ 東経133°59′34″	尾根部	280	110	東西150m 南北100m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	13右	284～285
	山方芦屋遺跡	東南条	津山市山方	北緯35°06′51″ 東経133°59′31″	尾根部	240	70	東西60m 南北110m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	13右	284～285
186	高野城跡	東南条	津山市高野本郷	北緯35°04′43″ 東経134°03′34″	平地	110	0	東西70m 南北50m	宅地	曲輪・堀を想定。	21左	286

久米北条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
187	高味城跡	久米北条	津山市宮部上	北緯35°05′16″ 東経133°50′23″	頂部	520	230		山林	宮部川上流の山塊の尾根上に立地する。山頂や尾根筋は平坦である。『美作国の山城』は、永禄9(1566)年に小田草城主の斎藤氏が太田氏に「宮部高味籠屋」を攻撃した功により感状を与え、所得を与えているとする。	12右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
188	城山城跡	久米北条	津山市宮部上	北緯35°05′16″ 東経133°51′42″	尾根部	270	80	東西100m 南北170m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土橋を確認。	12右	288
189	岩屋城跡	久米北条	津山市中北上	北緯35°04′34″ 東経133°50′03″	頂部	480	260	東西650m 南北1000m	山林	県指定史跡。曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	19右	289～293
190	岩屋城陣城群跡	久米北条 大庭	津山市中北上・宮部上・真庭市上河内	北緯35°03′54″ 東経133°50′27″	尾根部	230	60	東西1700m 南北2400m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	19右	294～305
191	一備谷砦跡	久米北条	津山市中北上	北緯35°04′02″ 東経133°50′42″	尾根部	210	40		山林	荒神ノ上砦跡が所在する尾根の東隣尾根に立地するとされる。尾根鞍部に堀切状の掘削と加工段が認められるが、後世の谷を繋ぐ切通しの道の可能性も否定できない。	19右	
192	八幡埒城跡	久米北条	津山市中北上	北緯35°03′57″ 東経133°50′58″	端部	190	20		山林	荒神ノ上砦跡の東約500mに位置する尾根端部に立地する。頂部を小さな塚状に残し、周囲に狭い平坦地を設ける。その西斜面にも平坦地が認められる。	19右	
193	宮ノ上城跡	久米北条	津山市宮部上	北緯34°04′51″ 東経133°52′01″	頂部	210	30	東西40m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	19右	306
194	茶臼山城跡	久米北条	津山市坪井上	北緯35°03′44″ 東経133°51′11″	尾根部	190	20	東西110m 南北50m	山林	曲輪を確認。	19右	306
195	姿山砦跡	久米北条	津山市坪井上	北緯35°03′44″ 東経133°50′56″	尾根部	210	40	東西150m 南北110m	山林	曲輪・土塁・土橋を確認。	19右	307
196	亀山城跡	久米北条	津山市坪井下	北緯35°03′44″ 東経133°52′04″	尾根部	170	10	東西150m 南北100m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	19右	308
197	磯尾城跡	久米北条	津山市中北上	北緯35°03′47″ 東経133°52′17″	尾根部	190	40	東西60m 南北130m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	19右	308
198	加冶子山城跡	久米北条	津山市坪井上	北緯35°02′54″ 東経133°50′06″	頂部	490	310		山林	標高490m級の加冶子山山頂に位置する。北側正面に岩屋城を望める場所である。中村氏による岩屋城攻略の際、陣を敷いたと言われる。狭い高所から下った北側と西側に堀切状の施設がある。	19右	
199	萩丸城跡	久米北条	久米郡美咲町北	北緯35°02′16″ 東経133°50′23″	尾根部	480	40		山林・その他	大谷川右岸、まきばの館の南端の丘陵頂部に位置。丘陵頂部で墓地に利用された平坦地2面を確認し、城主澤氏先祖代々の石碑がある。南斜面に帯曲輪状の段が8面確認できる。『旭町誌』などで想定されている本丸、侍屋敷、倉庫群、駆乗場などの施設は確認できない。	19右	
200	城小屋城跡	久米北条	久米郡美咲町中	北緯35°01′31″ 東経133°48′56″	尾根部	400	150	東西30m 南北90m	山林	曲輪を確認。	19右	309
201	横岩城跡	久米北条	久米郡美咲町中	北緯35°01′28″ 東経133°49′44″	尾根部	440	170	東西30m 南北150m	山林	曲輪を確認。	19右	309
202	年末城跡	久米北条	津山市中北上・中北下・宮部下	北緯35°03′57″ 東経133°52′52″	頂部	230	80	東西350m 南北100m	山林・その他	曲輪・堀切・土塁・虎口・櫓台を確認。	20左	310～311
203	円宗寺城跡	久米北条	津山市里公文上	北緯35°02′14″ 東経133°52′55″	頂部	420	40	東西200m 南北150m	山林	曲輪・土塁を確認。	20左	312

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
204	鍋山遺跡	久米北条	津山市神代	北緯35°02′33″ 東経133°54′14″	端部	170	20	東西40m 南北40m	山林	曲輪・土塁を確認。	20左	313
205	構城跡	久米北条	津山市神代	北緯35°02′04″ 東経133°54′30″	端部	170	10	東西110m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	20左	313
206	平福寺城跡	久米北条	津山市里公文	北緯35°01′41″ 東経133°54′02″	端部	200	40	東西110m 南北170m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口を確認。	20左	314～315
207	稲荷山城跡	久米北条	久米郡美咲町錦織	北緯35°02′11″ 東経133°57′56″	端部	130	10		山林	倭文川左岸の南方に延びる丘陵端部に立地。平坦面の中央付近に東西に延びる高さ約2mの土壇状の高まりが認められる。丘陵頂部も墓地造成や畑により地形改変されている。『作陽誌』は杉山宗三郎が住む「錦織立万城」として、『久米郡誌』は錦織の北の立満の地にある「立万城」として記す。	20右	
208	八幡長者屋敷跡	久米北条	津山市里公文	北緯35°01′29″ 東経133°54′16″	端部	170	20	東西130m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	20左	315
209	江原兵庫助別墅跡	久米北条	津山市戸脇	北緯35°01′33″ 東経133°55′55″	端部	130	10		畑・宅地	倭文川と打穴川の合流地を北に見る低丘陵尾根の末端部に立地する。畑や宅地による地形改変あり。『作陽誌』は「封内」敷地内に「七人塚」があるとする。『久米郡誌』は小字「兵庫土居」にあって、約二坪の七人塚と榎の古木があるとする。	20左	
210	戸脇土塁跡	久米北条	津山市戸脇	北緯35°01′29″ 東経133°56′00″	端部	150	10		山林	倭文川沿いの平野に向かって南から延びる尾根上の平坦地に位置する。南東側が開いた、直径15mほどの半円形に土塁状の遺構が巡っている。	20左	
211	天神山城跡	久米北条 久米南条	久米郡美咲町錦織・ 打穴下・津山市福田	北緯35°01′29″ 東経133°56′56″	頂部	270	140	東西140m 南北100m	山林	曲輪を確認。	20右	316
212	一之瀬城跡	久米北条	久米郡美咲町栃原	北緯34°57′17″ 東経133°51′09″	頂部	240	110	東西70m 南北120m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀・石垣を確認。	25右	316
213	高山城跡	久米北条	久米郡美咲町北・ 津山市油木北	北緯35°0′49″ 東経133°52′49″	頂部	430	210	東西250m 南北210m	山林	曲輪・土塁を確認。	20左	317
214	鬼山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴中	北緯35°0′38″ 東経133°56′22″	頂部	180	40	東西140m 南北160m	山林	曲輪・竪堀・土塁・虎口を確認。	20右	318
215	江原城跡	久米北条	久米郡美咲町里	北緯34°59′17″ 東経133°50′41″	尾根部	340	190	東西150m 南北310m	山林	曲輪・堀切・竪掘・土塁・石積を確認。	25右	319～320
216	丸山城跡	久米北条	久米郡美咲町里	北緯34°59′09″ 東経133°50′31″	尾根部	280	140		山林	道谷川を南に臨む山頂部に立地。細尾根上に幅狭の平坦地が3面認められ、中央付近と南側の平坦地間で比高差約3mの切岸が伴う竪堀状の地形改変が見られる。『旭町史』の記す物見櫓相当の小規模な施設が存在した可能性もある。	25右	
217	三宮城跡	久米北条	久米郡美咲町西垪和・ 東垪和・西川	北緯34°58′23″ 東経133°50′31″	尾根部	390	50		山林・社寺	通谷川左岸の丘陵頂部に立地。故事来歴があり、三宮八幡神社周辺に比定されているが、境内地に約45m×35m、50m×30mの平坦地が2面認められるのみで、その周辺の斜面は緩い。	25右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
218	鳥首城跡	久米北条	久米郡美咲町栃原	北緯34°57′41″ 東経133°51′39″	端部	220	50		山林	大瀬毘川に張り出す山端部に立地。削平度が高い平坦地が認められ、烽火台程度の小規模な施設が想起される。	25右	
219	金地城跡	久米北条	久米郡美咲町和田北	北緯34°57′03″ 東経133°57′21″	尾根部	330	220	東西70m 南北200m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	25右	321
220	城山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴北	北緯34°59′45″ 東経133°55′33″	尾根部	250	80	東西50m 南北70m	山林	曲輪を確認。	26左	321
221	細田城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴西	北緯35°0′12″ 東経133°55′41″	端部	190	40	東西140m 南北60m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	20左 26左	322
222	天神山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴西	北緯35°59′57″ 東経133°56′15″	尾根部	210	50	東西250m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	26右	323
223	中の城城跡	久米北条	久米郡美咲町両山寺	北緯34°58′26″ 東経133°53′12″	頂部	600	30	東西40m 南北100m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	26左	324
224	あたご山城跡	久米北条	久米郡美咲町両山寺	北緯34°58′33″ 東経133°53′23″	尾根部	620	60	東西70m 南北20m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	26左	324
225	高陣城跡	久米北条	久米郡美咲町両山寺・打穴北	北緯34°58′35″ 東経133°53′40″	頂部	680	90	東西70m 南北290m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	26左	325
226	両山寺城跡	久米北条	久米郡美咲町両山寺	北緯34°58′22″ 東経133°53′50″	尾根部	590	10	東西120m 南北150m	山林	曲輪を確認。	26左	326
227	杉城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上・打穴北	北緯34°58′48″ 東経133°55′02″	尾根部	300	100	東西160m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	26左	326
228	城山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上・打穴北	北緯34°58′51″ 東経133°55′18″	尾根部	280	80	東西60m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口・土橋を確認。	26左	327
229	構跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上	北緯34°58′51″ 東経133°55′25″	端部	220	20	東西70m 南北100m	山林	曲輪を確認。	26左	327
230	八幡山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上	北緯34°58′53″ 東経133°55′29″	端部	230	40	東西70m 南北60m	山林	曲輪・竪堀を確認。	26左	328
231	青木城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴里	北緯34°59′04″ 東経133°55′45″	尾根部	240	60		山林	標高250ｍの丸山の東側斜面に、高さ約4ｍの切岸と2面の曲輪があり、そこから北～西側にかけての斜面にも最高7ｍに達する高い切岸が廻る。ただし、丸山頂部には主郭となるような造成面は見られず、中心は現在宅地の敷地が相応しいと考える。	26左	
232	植松城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上	北緯34°58′11″ 東経133°55′20″	尾根部	350	230	東西70m 南北80m	山林	曲輪を確認。	26左	328
233	鳥越山城跡	久米北条	久米郡美咲町打穴上・打穴里	北緯34°58′43″ 東経133°55′41″	尾根部	290	100	東西230m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	26左	329
234	茶臼山城跡	久米北条	久米郡美咲町大垪和西	北緯34°57′24″ 東経133°53′19″	頂部	490	70	東西80m 南北60m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	26左	330

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
235	高土城跡	久米北条	久米郡美咲町境	北緯34°57′38″ 東経133°55′08″	尾根部	410	100	東西110m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	26左	330
236	城能城跡	久米北条	久米郡美咲町境	北緯34°57′13″ 東経133°54′18″	頂部	350	140	東西170m 南北130m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	26左	331
237	三角城跡	久米北条	久米郡美咲町角石祖母	北緯34°56′52″ 東経133°53′54″	尾根部	340	140	東西70m 南北90m	山林・その他	曲輪を確認。	26左	332
238	石丸屋敷跡	久米北条	岡山市北区建部町和田南	北緯34°56′08″ 東経133°52′39″	尾根部	440	40		山林	高倉山から南に延びる山端部に位置する。北東と北西側に土塁が伴う屋敷跡と思われる。この東側には『作陽誌』が記す杉山備中守為就の墓や石碑が、南側に竹内善十郎為能の旧宅跡を示す石碑や一族の墓が広がる。なお、『美作古城史』に杉山備中守為就が落城跡に「石丸屋鋪」に住み同所で没したとある。	26左	
239	寄城跡	久米北条	岡山市北区建部町和田南	北緯34°55′24″ 東経133°52′42″	頂部	330	230	東西70m 南北40m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	26左	332
240	高城跡	久米北条	岡山市北区建部町和田南・建部町角石谷	北緯34°55′08″ 東経133°52′38″	山頂部	330	230	東西280m 南北180m	山林	曲輪・掘切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	30左	333〜334
241	蕨尾城跡	久米北条	岡山市北区建部町角石谷	北緯34°54′57″ 東経133°53′18″	尾根部	310	220	東西40m 南北90m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認	30左	334
242	鶴田城跡	久米北条	岡山市北区建部町鶴田・建部町角石谷	北緯34°54′35″ 東経133°52′39″	頂部	260	180	東西200m 南北340m	山林	曲輪・堀切・竪掘群・石垣を確認。	30左	335〜336

久米南条郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
243	嵯峨山城跡	久米南条 久米北条	津山市中島・平福・久米郡美咲町錦織	北緯35°02′59″ 東経133°57′21″	頂部	260	150	東西100m 南北380m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口を確認。	20右	338〜339
244	神南備山城跡	久米南条	津山市井口	北緯35°02′45″ 東経133°59′17″	頂部	350	80	東西150m 南北80m	山林	曲輪・横堀・土塁を確認。	20右	340
245	小桁城跡	久米南条	津山市小桁	北緯35°02′33″ 東経134°01′31″	尾根部	180	90	東西60m 南北180m	山林	曲輪・土塁を確認。	21左	340
246	皿山城跡	久米南条	津山市皿・高尾	北緯35°02′07″ 東経133°58′29″	頂部	300	180	東西370m 南北290m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	20右	341〜342
247	丸山城跡	久米南条	津山市福田	北緯35°01′19″ 東経133°57′14″	頂部	210	80	東西100m 南北250m	山林	曲輪・土塁を確認。	20右	343
248	荒神山黒岩遺跡	久米南条	津山市荒神山	北緯35°02′0″ 東経134°0′40″	端部	150	20	東西70m 南北60m	山林	曲輪を確認。	21左	344
249	是久山城跡	久米南条	久米郡美咲町原田	北緯34°59′29″ 東経133°56′49″	尾根部	250	70	東西80m 南北130m	山林	曲輪を確認。	26右	344

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
250	荒神山城跡	久米南条	津山市荒神山	北緯 35° 01′ 41″ 東経 134° 0′ 23″	頂部	290	140	東西580m 南北170m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・石垣・虎口を確認。	21左	345〜347
251	大谷城跡	久米南条	久米郡美咲町原田	北緯 34° 59′ 12″ 東経 133° 56′ 31″	尾根部	300	120	東西120m 南北180m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	26右	348
252	構跡	久米南条	久米郡美咲町原田	北緯 34° 58′ 57″ 東経 133° 57′ 41″	平地	160	0		宅地・その他	曲輪を想定。	26右	349
253	城山城跡	久米南条	久米郡美咲町西幸	北緯 34° 58′ 40″ 東経 133° 57′ 15″	尾根部	240	50	東西130m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	26右	350
254	稲荷山城跡	久米南条	久米郡美咲町原田・西幸	北緯 34° 58′ 53″ 東経 133° 57′ 49″	端部	180	20	東西60m 南北70m	山林	曲輪・横掘・土塁・虎口を確認。	26右	350
255	新城城跡	久米南条	久米郡美咲町新城	北緯 34° 58′ 46″ 東経 133° 58′ 32″	尾根部	240	60	東西150m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	26右	351
256	丸山城跡	久米南条	久米郡美咲町西幸	北緯 34° 58′ 13″ 東経 133° 57′ 22″	端部	210	20		山林	最高所に築かれた主郭と想定される約30m四方の平坦地から東側に３〜４面、北側には２面の平坦地が見られるが判然としない。『作陽誌』では原田氏が構えた「丸尾山」、『久米郡誌』では事跡不詳の「丸尾山城」として記す。	26右	
257	名称未定	久米南条	久米郡美咲町西幸	北緯 34° 58′ 02″ 東経 133° 57′ 26″	端部	190	5		水田・宅地	東にゆるく下がる丘陵端部に立地。周囲より約５m高い場所に平坦地が広がるが、判然としない。地元では「古屋敷」と呼ばれている。	26右	
258	原田故営堂跡	久米南条	久米郡久米南町北庄	北緯 34° 57′ 45″ 東経 133° 56′ 30″	尾根部	280	20		水田	尾根全体が棚田となり、地形改変が大きく判然としない。	26右	
259	本丸城跡	久米南条	久米郡久米南町里方	北緯 34° 57′ 27″ 東経 133° 57′ 16″	端部	180	10		畑	現在当地は畑地として改変を受けているが、最も高所の畑地には祠が存在する。段々に造られている畑地が、曲輪の名残になるのかもしれない。	26右	
260	大将軍城跡	久米南条	久米郡久米南町南庄	北緯 34° 56′ 55″ 東経 133° 56′ 36″	頂部	250	60		畑	城跡と伝わる尾根先端部は、大正8年の耕地整理により大規模に改変を受けている。『久米郡誌』には、頂上に約1段歩の本丸址、その南に三段あり、これらの周囲に幅1間余の壕があると記す。	26右	
261	奥谷城跡	久米南条	久米郡久米南町南庄	北緯 34° 57′ 03″ 東経 133° 56′ 59″	尾根部	210	40		畑	城跡と伝わる丘陵ほぼ全域が畑地造成等により大規模に改変を受けている。『久米郡誌』には、丘陵の南側に壕が二つと三段あると記す。	26右	
262	樋の元城跡	久米南条	久米郡久米南町上弓削・塩之内	北緯 34° 56′ 13″ 東経 133° 58′ 22″	尾根部	240	80		山林	頂部に平坦地があり、北西側と西側の尾根筋にもなだらかな地形が残る。人工的な遺構であるかは判然としない。	26右	
263	秋小屋城跡	久米南条	久米郡久米南町塩之内	北緯 34° 55′ 58″ 東経 133° 58′ 18″	端部	160	20		畑	「古城」という小字が残るが、周辺は畑地による改変が著しい。かつて土塁や堀切が存在したと言われる。	26右	
264	上殿城跡	久米南条	久米郡久米南町中籾・岡山市北区建部町三明寺	北緯 34° 55′ 29″ 東経 133° 54′ 19″	頂部	350	20	東西100m 南北170m	山林・社寺	町指定史跡。曲輪・堀切・竪堀を確認	26左	352

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
265	将監山城跡	久米南条	久米郡久米南町仏教寺	北緯34°55′16″ 東経133°56′20″	尾根部	310	200		山林	山頂付近の幾つかある頂部の１つ。お地蔵様を巡る参道の掘削が大きく、遺構の存在は判然としない。	26右	
266	立畑城跡	久米南条	久米郡久米南町上ニケ	北緯34°55′11″ 東経133°゛56′50″	尾根部	210	90	東西70m 南北180m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・櫓台を確認。	26右 30右	352
267	安盛城跡	久米南条	久米郡久米南町上神目	北緯34°55′22″ 東経133°55′37″	尾根部	240	80	東西80m 南北140m	山林	町指定史跡。曲輪・堀切・竪堀を確認	26左	353
268	上原陣跡	久米南条	久米郡久米南町下弓削	北緯34°55′23″ 東経133°57′48″	端部	170	30		水田・宅地	誕生寺川沿いに形成された下弓削の小平野を北に望む低丘陵上に立地するとされる。棚田や圃場整備で、地形改変が大きく、遺構は判然としない。	26右	
269	大戸山轟城跡	久米南条	久米郡美咲町大戸下	北緯34°58′56″ 東経134°01′49″	尾根部	240	170	東西180m 南北80ｍ	山林	曲輪・堀切・竪堀・虎口を確認。	27左	354
270	高城跡	久米南条	久米郡美咲町小瀬・栗子	北緯34°57′35″ 東経134°2′20″	頂部	400	330	東西90m 南北60m	山林	曲輪を確認。	27左	355
271	藤原城跡	久米南条	久米郡美咲町藤原	北緯34°56′56″ 東経134°03′47″	端部	100	30		その他	吉井川右岸の丘陵に立地。地元では「丸山」と呼ばれ、城跡の伝承がある。頂部で曲輪、南東斜面で小曲輪と竪堀の可能性がある痕跡を確認したが、公園整備による地形改変が著しい。	27右	
272	竜王山城跡	久米南条	久米郡久米南町下籾	北緯34°54′47″ 東経133°54′19″	頂部	370	50	東西80m 南北50m	山林・社寺	町指定史跡。曲輪・横堀・土塁・土橋を確認。	30左	355
273	草木城跡	久米南条	久米郡久米南町下二ケ	北緯34°54′39″ 東経133°56′30″	尾根部	200	80	東西170m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	30右	356
274	下風城跡	久米南条	岡山市北区建部町川口	北緯34°53′45″ 東経133°54′37″	頂部	220	150	東西150m 南北90m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	30左	357
275	伏山城跡	久米南条	岡山市北区建部町下神目	北緯34°53′32″ 東経133°54′56″	尾根部	130	60	東西30m 南北170m	山林	曲輪・掘切・竪堀・石垣・虎口を確認。	30左	358
276	伊勢畑城跡	久米南条	岡山市北区建部町下神目・久米郡久米南町神目中	北緯34°53′38″ 東経133°55′16″	頂部	240	170	東西240m 南北320m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	30左	359～361
277	小松城跡	久米南条	久米郡久米南町下弓削・上二ケ	北緯34°54′49″ 東経133°58′08″	頂部	310	180		山林	頂部にわずかな平坦地のみ認められる。『作陽誌』に記載の「小松山」に比定されるか。	30右	
278	沼元構跡	久米南条	久米郡久米南町宮地	北緯34°54′08″ 東経133°56′44″	尾根部	190	20	東西100m 南北50m	山林	堀切を確認。	30右	362
279	大西構跡	久米南条	久米郡久米南町山手	北緯34°54′16″ 東経133°57′24″	尾根部	270	70	東西70m 南北70m	山林	曲輪・土塁を確認。	30右	362
280	蓮華寺城跡	久米南条	久米郡久米南町全間・下ニケ・山手	北緯34°54′25″ 東経133°58′26″	頂部	300	130	東西230m 南北180m	山林	曲輪・堀切を確認。	30右	363
281	大植城跡	久米南条	久米郡久米南町山手	北緯35°54′17″ 東経133°58′07″	頂部	290	40	東西100m 南北140m	山林	町指定史跡。曲輪を確認。	30右	364

勝北郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
282	仲山城跡	勝北	津山市奥津川・三浦・妙原・新野山形・西上・市場	北緯35°08′23″ 東経134°06′11″	頂部	790	530	東西1160m 南北150m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	14右	366～368
283	黒目城跡	勝北	津山市堀坂	北緯35°06′55″ 東経134°05′18″	頂部	260	130	東西100m 南北50m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁を確認。	14右	368
284	堀坂城跡	勝北	津山市堀坂・妙原	北緯35°07′42″ 東経134°04′24″	尾根部	210	50	東西320m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	14右	369
285	烏帽子形城跡	勝北	津山市西上	北緯35°07′50″ 東経134°06′40″	頂部	380	110	東西120m 南北210m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	14右	370
286	河原山城跡	勝北	津山市市場	北緯35°07′50″ 東経134°07′17″	平地	260	5	東西100m 南北140m	山林	市指定史跡。曲輪・横堀・土塁・虎口・土橋・井戸を確認。	14右	371～372
287	本丸城跡	勝北	津山市市場	北緯35°07′45″ 東経134°07′19″	平地	260	5	東西60m 南北320m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・土塁を確認。	14右 15左	371～372
288	国司尾館跡	勝北	津山市市場・大岩	北緯35°07′50″ 東経134°07′23″	平地	260	5	東西50m 南北70m	山林	市指定史跡。曲輪・土塁を確認。	15左	371～372
289	吹山城跡	勝北	津山市市場	北緯35°07′09″ 東経134°07′01″	頂部	270	70	東西150m 南北100m	山林	曲輪・横堀・土塁を確認	14右	373
290	名称未定	勝北	津山市市場	北緯35°06′56″ 東経134°07′08″	平地	190	0		水田・畑	長さ約200mの舗装道路が、谷筋を遮断するように東西に走り、その両側は畑および水田である。道路自体がかつての土塁跡に沿って建設された可能性がある。	14右	
291	天王山	勝北	津山市堀坂・西下	北緯35°06′22″ 東経134°05′13″	頂部	230	70	東西130m 南北90m	山林・その他	曲輪・土塁を確認。	14右	373
292	金森城跡	勝北	津山市中村	北緯35°05′42″ 東経134°05′47″	端部	170	20		山林・その他	広戸川の右岸に接する丘陵上に立地する。頂部に、おおむね方形を呈する平坦地が認められ主郭の可能性があるが判然としない。	14右	
293	矢櫃城跡	勝北	津山市大吉	北緯35°09′25″ 東経134°07′47″	尾根部	910	570	東西350m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	15左	374
294	爪ヶ城跡	勝北	津山市大岩・奥津川・大吉	北緯35°09′33″ 東経134°07′31″	頂部	1070	720	東西40m 南北90m	山林	曲輪・堀切を確認。	15左	375
295	名称未定（伝三穂太郎屋敷跡）	勝北	勝田郡奈義町宮内	北緯35°10′02″ 東経134°10′18″	尾根部	1050	590		山林	人工的な平坦地を確認。	15左	
296	名木ノ城跡	勝北	勝田郡奈義町高円	北緯35°9′41″ 東経134°11′23″	尾根部	720	350	東西50m 南北140m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	15右	375
297	細尾城跡	勝北	勝田郡奈義町宮内	北緯35°09′38″ 東経134°10′14″	尾根部	830	460	東西40m 南北200m	山林	曲輪・堀切を確認。	15左	376
298	八巻城跡	勝北	勝田郡奈義町高円	北緯35°09′16″ 東経134°11′53″	頂部	740	360	東西50m 南北200m	山林	曲輪・堀切を確認。	15右	377

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
299	今宮城跡	勝北	勝田郡奈義町広岡・滝本	北緯35°07′09″ 東経134°09′49″	端部	220	20	東西50m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	15左	377
300	菩提寺城跡	勝北	勝田郡奈義町高円	北緯35°09′21″ 東経134°12′11″	尾根部	600	300	東西100m 南北80m	山林・社寺	曲輪を確認。	15右	378
301	大別当城跡	勝北	勝田郡奈義町高円	北緯35°08′58″ 東経134°11′41″	頂部	590	210	東西40m 南北420m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	15右	379～380
302	鎌倉山城跡	勝北	勝田郡奈義町馬桑・関本・小坂・高円	北緯35°09′04″ 東経134°12′38″	頂部	550	250	東西220m 南北90m	山林	曲輪を確認。	15右	381
303	右手城跡	勝北	美作市右手	北緯35°09′31″ 東経134°14′13″	尾根部	380	60		山林	梶並川に東方向に張り出した山端部に立地する。尾根上方に約20m四方の平坦地があり、その下方には数段の平坦地が認められるが、判然としない。なお、山裾には五輪塔の集積が見られる。故事来歴は不明である。	15右	
304	岡・城が端城跡	勝北	勝田郡奈義町広岡・豊沢	北緯36°07′27″ 東経134°10′03″	平地	250	0		水田	名義川右岸の圃場整備事業に伴う岡・城が端１号墳の調査により、残存長約20m、下端幅約４m、上端幅約0.7～１m、高さ約1.5～1.7mの土塁が確認され、「構」の存在が想定される。『東作誌』には勝北郡沢村東分に構えた砦跡の「矢倉か鼻」があり、同一の可能性がある。	15左	
305	久常城跡	勝北	勝田郡奈義町久常	北緯35°07′12″ 東経134°10′56″	平地	240	5	東西60m 南北80m	山林・畑・その他	曲輪を確認。	15左	382
306	加賀尾城跡	勝北	勝田郡奈義町西原	北緯35°07′03″ 東経134°12′04″	端部	240	40	東西40m 南北140m	山林	曲輪を確認。	15右	382
307	丸山城跡	勝北	勝田郡奈義町皆木	北緯35°06′38″ 東経134°13′01″	尾根部	290	80	東西110m 南北60m	山林	曲輪を確認。	15右	383
308	久常城跡	勝北	勝田郡奈義町久常	北緯35°07′05″ 東経134°10′57″	平地	230	10		山林・畑・その他	高殿川右岸の独立した小丘陵頂部に立地するが、後世の地形改変が進む。中央付近の平坦地から下方に段状を呈する平坦地が巡り、その西側には宝篋印塔や五輪塔の集積が認められる。なお、『美作国の山城』では「久常城跡」は別地点とする。	15左	
309	福光屋敷跡	勝北	勝田郡奈義町柿	北緯35°06′18″ 東経134°11′05″	平地	210	10	東西70m 南北130m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	15右	383
310	吉正城跡	勝北	勝田郡奈義町中島西	北緯35°05′55″ 東経134°09′27″	端部	200	10		山林	中島西集落西側の丘陵端部に立地し、南東麓に「吉正屋敷池」がある。『美作国の山城』では土塁が巡る単郭式山城と記載されるが、後世の削平が著しい。	15左	
311	有元城跡	勝北	勝田郡奈義町中島東	北緯35°06′01″ 東経134°10′02″	端部	200	8	東西200m 南北150m	山林・宅地・墓地	町指定史跡。曲輪・横堀・土塁を確認。	15左	384

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
312	余野山屋敷跡	勝北	美作市余野	北緯35°05′34″ 東経134°12′14″	端部	180	30		山林・畑・宅地・その他	梶並川右岸、淀川左岸となる山塊から南西方向に延びる山裾部に立地。墓地造成に伴う東西３段の平坦地があり、西上段に鷹取佐利の碑が建つ。周辺にも細長い平坦地が数段見られるが、後世の地形改変と思われる。『東作誌』には鷹取彦次郎種佐が「小吉野庄内余野村屋敷」を築いたとされる。なお、『日本城郭全集』では、「鷹取城」として鷹取佐利の碑が建つ平坦面を本丸、墓地群を二の丸などと記すが判然としない。	15右	
313	長畑構跡	勝北	美作市久賀	北緯35°05′21″ 東経134°13′41″	端部	190	20	東西50m 南北40m	山林・神社	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	15右	385
314	富坂屋敷跡	勝北	美作市東谷下	北緯35°07′02″ 東経134°15′13″	端部	250	20		山林・果樹園・社寺	長さ30～40mの人為的な平坦地のみ確認できるが、城館関連遺構かどうか判然としない。	16左	
315	野田構跡	勝北	津山市上野田	北緯35°05′0″ 東経134°06′06″	平地	130	3		畑・宅地・その他	南流する広戸川の東に沿う自然堤防上に立地する。周囲より約３ｍ高い。『勝加茂史』は古土井・どゐ根・市場の地名があるとする。	21右	
316	野田城跡	勝北	津山市下野田・勝田郡勝央町植月北	北緯35°04′34″ 東経134°06′04″	平地	120	0		水田・畑・宅地	広戸川と羽出川に挟まれた微高地上に立地する。現状では改変が著しい。	21右	
317	岩倉山城跡	勝北	津山市田熊	北緯35°04′03″ 東経134°05′43″	端部	140	20	東西60m 南北100m	山林・畑	曲輪・横堀・竪堀・土塁・虎口を確認。	21右	385
318	新宮城跡	勝北 勝南	津山市福井・新田	北緯35°03′31″ 東経134°04′22″	頂部	200	100	東西440m 南北200m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	21右	386～387
319	植月城跡	勝北	勝田郡勝央町植月中	北緯35°04′01″ 東経134°07′17″	尾根部	150	5	東西70m 南北80m	山林・水田・畑・宅地	町指定史跡。曲輪・横堀・土塁・井戸を確認。	21右	387
320	構城跡	勝北	勝田郡勝央町植月中	北緯35°03′45″ 東経134°6′27″	尾根部	150	20		果樹園	頂部はやや開けているが明確な平坦地は造成されておらず、判然としない。	21右	
321	茂平城跡	勝北	勝田郡勝央町大平台	北緯35°03′20″ 東経134°06′18″	端部	150	10	東西130m 南北100m	その他	発掘調査あり。曲輪・堀切・掘立柱建物・井戸・貯蔵穴を確認。	21右	388
322	鬼ヶ池城跡	勝北	勝田郡勝央町植月中	北緯35°03′36″ 東経134°06′51″	端部	140	10		山林・その他	北東、東、南東の３方向に延びる丘陵上に位置。尾根上及び斜面部においては城館関連遺構は判然としない。	21右	
323	大谷城跡	勝北	勝田郡勝央町植月中	北緯35°03′17″ 東経134°07′46″	尾根部	230	100	東西60m 南北90m	山林	曲輪・土塁を確認。	22左	388
324	石生構跡	勝北	勝田郡勝央町石生・下町川	北緯35°05′05″ 東経134°08′49″	頂部	200	60		山林・畑・果樹園	滝川右岸の山塊頂部に位置。頂部の北及び東西の尾根上が包蔵地の範囲とされるが、自然地形に近い。	22左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
325	小風呂山城跡	勝北	勝田郡勝央町美野	北緯35°04′07″ 東経134°08′48″	端部	160	10	東西40m 南北80m	山林・畑・宅地・その他	曲輪・堀切・土塁を確認。	22左	389
326	構城跡	勝北	勝田郡勝央町美野	北緯35°04′10″ 東経134°09′09″	端部	170	20		山林	西側の延びる丘陵先端に平坦地が２面あり、祠２基と構城の看板がある。尾根筋は切られているが、道の可能性がある。	22左	
327	鎌倉屋敷跡	勝北	勝田郡勝央町豊久田	北緯35°04′48″ 東経134°10′03″	端部	170	5	東西60m 南北90m	山林・水田・宅地	曲輪・堀切・土塁を確認。	22左	389
328	上ノ山城跡	勝北	美作市真加部	北緯35°04′45″ 東経134°11′20″	端部	160	10	東西130m 南北120m	山林・畑	曲輪・土塁・堀切を確認。	22右	390
329	大爺の構跡	勝北	美作市真加部	北緯35°04′37″ 東経134°11′20″	端部	140	10		水田	推定地は、ほ場整備により地形改変が著しい。伝承によると、近世の屋敷である可能性が高い。	22右	
330	真加部構跡	勝北	美作市真加部	北緯35°04′24″ 東経134°11′28″	平地	150	10		その他	梶並川西方に位置する丘陵頂部に立地する。主郭に帯曲輪が伴う縄張りで、土塁・堀切がかつて認められた城館とされるが、現況は美作市役所勝田総合支所の敷地であり、改変されている。『東作誌』によれば、安東信濃守が居城したとされる。	22右	
331	河内山城跡	勝北	美作市河内	北緯35°04′10″ 東経134°11′15″	尾根部	200	60		山林	梶並川右岸の山頂部に立地。範囲内は現地への立ち入りが困難で、山頂中央部のみを確認。『勝田町の城址と構え跡』では方形の土塁に囲まれた城館跡があったとされるが、大半が消滅している。	22右	
332	別所城跡	勝北	美作市大町	北緯34°04′06″ 東経134°12′01″	端部	160	5		山林・畑・宅地	粟井川右岸の丘陵頂部に立地し、星尾城跡に西隣。不整形な平坦地が４面、池、低い土塁状の高まりが確認できる。	22右	
333	星尾城跡	勝北	美作市大町	北緯35°04′07″ 東経134°12′08″	尾根部	160	30	東西40m 南北130m	山林	曲輪・堀切を確認。	22右	391
334	比丘尼城跡	勝北 吉野	美作市大町・長谷内	北緯35°04′38″ 東経134°12′44″	端部	280	90	東西50m 南北130m	山林	曲輪・土塁・竪堀を確認。	22右	392

勝南郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
335	河辺構跡	勝南	津山市河辺	北緯35°03′42″ 東経134°02′39″	平地	90	0	東西120m 南北80m	宅地	曲輪・堀を想定。	21左	394
336	河辺城跡	勝南	津山市河辺・西吉田	北緯35°03′19″ 東経134°03′12″	頂部	160	40	東西60m 南北100m	山林	曲輪を確認。	21左	395
337	瓜生原城跡	勝南	津山市瓜生原	北緯35°02′17″ 東経134°02′39″	尾根部	140	50	東西40m 南北80m	山林	堀切を確認。	21左	395

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
338	横手城跡	勝南	津山市瓜生原・金井・久米郡美咲町羽仁	北緯35°01′34″ 東経134°02′47″	頂部	330	200	東西90m 南北50m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	21左	396
339	姥ヶ城跡	勝南	久米郡美咲町羽仁・安井	北緯35°0′15″ 東経134°03′29″	尾根部	170	50	東西60m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	21左	396
340	井上城跡	勝南	勝田郡勝央町為本	北緯35°01′49″ 東経134°05′03″	尾根部	180	50		山林	祠を祀る山頂部は平坦である。斜面にも平坦地が造成されているが、植林に伴う可能性がある。鉄塔の背後に堀切状の造作がみられるが、判然としない。別称塔尾城。	21右	
341	神田城跡	勝南	勝田郡勝央町為本	北緯35°01′42″ 東経134°05′07″	頂部	190	60	東西140m 南北180m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・土橋を確認。	21右	397
342	高取城跡	勝南	勝田郡勝央町黒坂	北緯35°01′58″ 東経134°05′32″	頂部	180	60		山林・社寺・その他	包蔵地は谷を挟んだ東西の山を包括している。西側山では明確な遺構は確認していない。東側山では帯曲輪状の平坦地の造作を確認したが、判然としない。別称為本城。	21右	
343	新造構跡	勝南	勝田郡勝央町為本	北緯35°01′32″ 東経134°05′20″	尾根部	180	40		山林	高取川右岸の山先端部に立地。尾根頂部は平坦で、一部に人為的な高まりが認められる。	21右	
344	東吉田城跡	勝南	勝田郡勝央町東吉田	北緯35°01′37″ 東経134°07′07″	端部	130	30	東西80m 南北120m	山林	曲輪・土塁・虎口・櫓台を確認。	21右	398
345	大谷城跡	勝南	美作市下大谷	北緯35°0′25″ 東経134°6′41″	尾根部	230	100	東西180m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪掘を確認。	21右	398
346	糸山筑紫城跡	勝南	勝田郡勝央町岡	北緯35°02′29″ 東経134°07′36″	尾根部	170	40		山林・その他	包蔵地の範囲内で古墳は確認できるが、それ以外の遺構は判然としない箇所が多い。	22左	
347	岡城跡	勝南	勝田郡勝央町岡	北緯35°02′15″ 東経134°07′38″	頂部	110	10	東西50m 南北100m	社寺	曲輪・土塁を確認。	22左	399
348	城の尾山城跡	勝南	久米郡美咲町藤田上・藤田下	北緯34°58′22″ 東経134°04′23″	尾根部	250	70	東西60m 南北50m	山林	曲輪・土塁を確認。	27右	399
349	小矢田城跡	勝南	勝田郡勝央町小矢田	北緯35°01′23″ 東経134°7′38″	尾根部	150	60	東西200m 南北60m	山林	曲輪・土塁・横堀・竪堀を確認。	22左	400
350	三星城跡	勝南	美作市明見・入田・栄町	北緯35°0′40″ 東経134°08′38″	頂部	230	140	東西400m 南北700m	山林・社寺	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・井戸を確認。	22左	401～405
351	尼ヶ城跡	勝南	美作市北山	北緯35°01′50″ 東経134°10′12″	端部	120	30	東西160m 南北100m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・横堀・土塁・虎口を確認。	22左	406
352	舞山城跡	勝南	美作市和田	北緯35°02′47″ 東経134°11′11″	尾根部	170	40	東西280m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。	22右	407
353	鴛淵山城跡	勝南	久米郡美咲町羽仁	北緯35°0′11″ 東経134°02′33″	頂部	200	120	東西180m 南北230m	山林	曲輪・竪堀・土塁・虎口を確認。	21左 27左	408
354	金室城跡	勝南	久米郡美咲町行信・百々	北緯34°59′31″ 東経134°03′38″	頂部	150	50	東西170m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	27左右	409

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
355	鷲山城跡	勝南	久米郡美咲町飯岡	北緯34°55′59″ 東経134°05′44″	頂部	210	150	東西290m 南北30m	山林	曲輪・堀切・虎口・櫓台・土橋を確認。	27右	410
356	井内城跡	勝南	美作市下山・鳥渕	北緯34°57′34″ 東経134°07′23″	頂部	250	190	東西240m 南北400m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・土塁・虎口を確認。	27右 28左	411～ 413
357	勝間城跡	勝南	美作市位田	北緯34°58′33″ 東経134°07′06″	頂部	150	80	東西80m 南北80m	山林	曲輪・横堀・竪掘・土塁を確認。	27右	414

吉野郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
358	佐淵城跡	吉野	英田郡西粟倉村長尾	北緯35°10′22″ 東経134°20′0″	尾根部	370	50	東西60m 南北120m	山林・ その他	曲輪・堀切を確認。	9右	416
359	小房城跡	勝北 吉野	美作市久賀・小房	北緯35°05′49″ 東経134°14′30″	頂部	510	260	東西230m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・石積・虎口・土橋を確認。	15右	417～ 418
360	黒山城跡	吉野	美作市東吉田・英田郡 西粟倉村長尾	北緯35°09′43″ 東経134°20′49″	頂部	660	350	東西70m 南北180m	山林	曲輪・堀切を確認。	16右	419
361	会下城跡	吉野	美作市古町	北緯37°07′13″ 東経134°19′15″	頂部	300	70	東西40m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	16右	419
362	八幡山城跡	吉野	美作市古町	北緯35°07′40″ 東経134°19′43″	尾根部	280	30	東西100m 南北100m	山林	曲輪・堀切・横堀・土塁を確認。	16右	420
363	小原山王山城跡	吉野	美作市古町	北緯35°07′27″ 東経134°19′54″	頂部	350	120	東西300m 南北320m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	16右	421～ 422
364	仁寿寺城跡	吉野	美作市川上・滝	北緯35°06′45″ 東経134°17′19″	頂部	520	290	東西70m 南北130m	山林	曲輪・土塁・虎口・堀切・竪掘を確認。	16左	423
365	政岡城跡	吉野	美作市滝	北緯35°05′38″ 東経134°17′12″	端部	220	5	東西70m 南北70m	畑・ その他	曲輪・土塁・虎口を確認。	16左	423
366	寺坂城跡	吉野	美作市川上	北緯35°06′02″ 東経134°17′40″	尾根部	250	30	東西150m 南北60m	山林・ 社寺・ その他	曲輪・土塁を確認。	16左	424
367	竹山城跡	吉野	美作市下町・笹岡	北緯35°06′34″ 東経134°19′20″	頂部	420	200	東西250m 南北50m	山林・ その他	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群を確認。	16右	425～ 427
368	小淵城跡	吉野	美作市川上	北緯35°06′16″ 東経134°18′05″	尾根部	300	80	東西380m 南北220m	山林	曲輪を確認。	16左	428～ 429
369	比丘尼ヶ城跡	吉野	美作市川上・野形	北緯35°05′25″ 東経134°18′06″	尾根部	270	40	東西100m 南北140m	山林・ 果樹園	曲輪・堀切・土塁を確認。	16左	429
370	比丘尼城跡	吉野	美作市宮本	北緯35°05′34″ 東経134°20′37″	頂部	390	140	東西30m 南北100m	山林	曲輪・土塁を確認。	16右	430

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
371	伝宮本武蔵宅跡	吉野	美作市宮本	北緯35°05′42″ 東経134°19′40″	平地	210	0		宅地	県指定史跡。宮本集落に位置し、周囲は東側が丘陵、北側が宮本川、南・西側が鎌坂川に囲まれている。宮本武蔵の生誕地と伝え、宅跡は方三十間、構屋敷と称している。『美作古城史』では地名を「構の段」と言うとする記述が見られる。	16右	
372	小山城跡	吉野	美作市宮本	北緯35°05′23″ 東経134°19′50″	頂部	350	140		山林	宮本集落の南側に位置する山頂部に立地し、東麓には佐用町釜坂地区に至る古道が通る。山頂部には平坦地が広がり、一部で人為的な造作が見られる。『東作誌』に記載がある。	16右	
373	高畑城跡	吉野	美作市馬形	北緯35°04′08″ 東経134°13′27″	頂部	250	100	東西160m 南北220m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	22右	431～432
374	高山城跡	吉野	美作市馬形・宗掛	北緯35°03′41″ 東経134°13′08″	頂部	240	100	東西70m 南北290m	山林	曲輪・竪堀・土塁を確認。	22右	433～434
375	淡相城跡	吉野	美作市粟井中	北緯35°03′57″ 東経134°14′17″	端部	200	20	西側丘陵 東西80m 南北130m 東側丘陵 東西50m 南北120m	山林・宅地・社寺	曲輪・堀切・横堀・土塁・櫓台を確認。	22右	435～436
376	大将ヶ陣山城跡	吉野	美作市田殿	北緯35°02′23″ 東経134°11′40″	頂部	340	210	東西40m 南北70m	山林	曲輪を確認。	22右	437
377	殿屋敷跡	吉野	美作市小野	北緯35°05′00″ 東経134°14′51″	尾根部	240	40	東西40m 南北40m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・土橋を確認。	23左	437
378	赤田城跡	吉野	美作市赤田・桂坪	北緯35°04′59″ 東経134°17′26″	頂部	310	130	東西70m 南北170m	山林・その他	曲輪を確認。	23左	438
379	法天山城跡	吉野	美作市川上・立石	北緯35°05′11″ 東経134°17′45″	尾根部	270	90	東西250m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23左	439
380	壬生の構跡	吉野	美作市壬生	北緯35°04′29″ 東経134°16′55″	平地	170	0		水田・畑・宅地	吉野川左岸の河岸段丘上に位置。壬生の集落内に壕で囲まれた曲輪が所在したとされるが、後世の地形改変が著しい。曲輪・堀切・土塁・横堀・横矢掛けを確認。	23左	
381	比丘尼ヶ城跡	吉野	美作市沢田・壬生	北緯35°04′03″ 東経134°17′24″	頂部	380	200	東西200m 南北350m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	23左	440～441
382	横山城跡	吉野	美作市五名・沢田	北緯35°03′49″ 東経134°16′23″	尾根部	190	30	東西260m 南北60m	山林・畑・果樹園	曲輪・土塁を確認。	23左	442
383	殿屋敷跡	吉野	美作市山手	北緯35°03′15″ 東経134°15′52″	端部	160	0		水田・畑・宅地	吉野川右岸の河岸段丘上に位置。大海廃寺跡周辺の集落内に殿屋敷が比定されているが、後世の地形改変が著しい。	23左	

英田郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
384	鞍掛城跡	英田 吉野	美作市田殿・楢原中	北緯35°02′14″ 東経134°10′47″	頂部	220	110	東西350m 南北160m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・土塁・竪堀・虎口を確認。	22左	444～ 445
385	比丘尼城跡	英田	美作市楢原中	北緯35°01′59″ 東経134°10′36″	頂部	160	50	東西70m 南北50m	山林・ その他	曲輪・竪堀を確認。	22左	446
386	妙見山城跡	英田	美作市平福	北緯35°0′40″ 東経134°11′25″	頂部	220	120	東西110m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	22右	446
387	鳥越山城跡	英田	美作市鮹・江見吉田・ 松脇	北緯35°01′50″ 東経134°13′47″	尾根部	200	80	東西180m 南北180m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口・土橋を確認。	22右	447
388	鬢櫛山城跡	英田	美作市楢原下	北緯35°0′54″ 東経134°09′47″	頂部	180	90	東西140m 南北70m	山林	曲輪・虎口を確認。	22左	448
389	林野城跡	英田	美作市林野・栄町・ 朽木	北緯35°0′19″ 東経134°09′05″	頂部	240	150	東西500m 南北150m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	22左	449～ 452
390	友野城跡	英田	美作市友野・北原	北緯35°0′18″ 東経134°10′45″	端部	120	20	東西650m 南北450m	山林・ 社寺	曲輪・堀切・竪堀・土塁・磐座を確認。	22左	453～ 454
391	緑青山城跡	英田	美作市平福・川北	北緯35°0′52″ 東経134°12′01″	尾根部	240	120	東西240m 南北150m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	22右	455
392	比丘ヶ城跡	英田	美作市山口	北緯35°0′27″ 東経134°12′01″	尾根部	150	40	東西170m 南北70m	山林	曲輪・堀切・竪掘・土塁・虎口を確認。	22右	456
393	川越屋敷跡	英田	美作市江見	北緯35°01′11″ 東経134°13′39″	端部	110	0		畑・ 宅地・ 社寺	山家川の合流地点の北東に広がる河岸段丘に位置。川端久右衛門の屋敷と伝えられるが、現在宅地化が著しい。	22右	
394	松田城跡	英田	美作市上福原	北緯35°0′43″ 東経134°14′04″	端部	150	20	東西90m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	22右	457
395	久保木城跡	英田	美作市原	北緯35°0′01″ 東経134°12′48″	尾根部	260	130	東西70m 南北140m	山林・ その他	曲輪・土塁・虎口を確認。	28右	457
396	越坂山城跡	英田 吉野	美作市岩辺・小ノ谷	北緯35°02′29″ 東経134°15′16″	頂部	270	120	東西300m 南北100m	山林・ その他	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	23左	458～ 459
397	三倉田城跡	英田	美作市三倉田	北緯34°59′30″ 東経134°08′42″	尾根部	240	160	東西60m 南北150m	山林	曲輪・横堀・竪堀群・土塁を確認。	28左	460
398	矢櫃山城跡	英田	美作市北原・猪臥	北緯34°59′44″ 東経134°10′34″	頂部	280	180	東西250m 南北80m	山林	曲輪・土塁を確認。	28左	461
399	大屻城跡	英田	美作市大原・山口	北緯34°59′48″ 東経134°11′40″	尾根部	310	190	東西50m 南北300m	山林	曲輪・堀切・竪掘・土塁を確認。	28右	462
400	大畠城跡	英田	美作市山外野・山口	北緯34°59′56″ 東経134°12′17″	頂部	230	80	東西130m 南北210m	山林	曲輪を確認。	28右	463
401	鷹ノ巣城跡	英田	美作市海田	北緯34°57′59″ 東経134°10′16″	頂部	320	210	東西150m 南北40m	山林	曲輪・堀切・虎口を確認。	28左	464

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
402	神田山城跡	英田	美作市真神	北緯 34° 55′ 15″ 東経 134° 08′ 52″	頂部	350	270	東西170m 南北120m	山林	曲輪を確認。	28左	465
403	尾越城跡	英田	美作市柿ヶ原	北緯 34° 57′ 58″ 東経 134° 14′ 12″	尾根部	270	80	東西20m 南北120m	山林	曲輪・堀切を確認。	28右	466
404	福城跡	英田	美作市土居・蓮花寺	北緯 35° 59′ 45″ 東経 134° 15′ 43″	端部	190	50	東西90m 南北50m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	29左	466
405	高鉢城跡	英田	美作市上山・中川	北緯 34° 54′ 32″ 東経 134° 08′ 54″	頂部	290	200	東西170m 南北40m	山林	曲輪・石積・虎口・櫓台を確認。	31左	467
406	横尾城跡	英田	美作市横尾	北緯 34° 54′ 18″ 東経 134° 11′ 03″	頂部	320	160	東西170m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土橋を確認。	31 左右	468

３　美作国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

・本表には、美作国城館跡の「遺構の評価」と踏査時における城館の「残存状況」を掲載している。

・本表で用いた城館番号は、第２章・第３章で表記したものと一致している。

【城館の評価】

◎：城館関連遺構が良好に遺存しており、また規模も比較的大きいもの

○：城館関連遺構が残存するもの

△：城館関連遺構は判然としないが人工的な地形改変が認められる、もしくは副次的な情報があるもの

【残存状況】

・「完存」「一部損壊」「半壊」「全壊」「消失」「一部消失」に分けてと表記している。

・発掘調査が行われた後に消失した城館を「消失」、一部が消失したものを「一部消失」と表記する。

表３　美作国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

真嶋郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
1	徳山城山城跡	○	完存
2	波作利城跡	○	完存
3	粟住山城跡	◎	完存
4	経塚山城跡	△	完存
5	浦山城跡	○	一部損壊
6	沢城跡	△	全壊
7	飯山城跡	◎	完存
8	間谷城跡	○	一部損壊
9	向立石城跡	○	完存
10	立石城跡	○	一部損壊
11	城ヶ山城跡	○	完存
12	釜戸原城跡	◎	完存
13	塚原城跡	△	一部損壊
14	大沼山陣所跡	△	完存
15	要害山城跡	○	完存
16	小坂向城山城	○	消失
17	竹山旦城跡	○	一部損壊
18	見明戸城山城跡	○	一部損壊
19	目地城跡	○	完存
20	藪邉山城跡	○	消失
21	土居城跡	○	完存
22	麓城跡	○	一部損壊
23	陣山城跡	○	一部損壊
24	陣山城跡	○	一部損壊
25	山根城跡	○	完存
26	清谷城山城跡	△	完存
27	岩明山城跡	○	一部損壊
28	臼水城跡	○	完存
29	大料城跡	○	完存
30	出羽屋敷跡	○	一部損壊
31	舟津屋敷跡	△	全壊
32	陣山砦跡	○	完存
33	高田城跡	◎	一部損壊
34	天神山砦跡	○	一部損壊
35	若代城跡	○	完存
36	則行城跡	○	完存
37	荒木屋敷跡	△	全壊
38	浅田城跡	△	完存
39	浅田城跡	○	完存
40	飯ノ山城跡	○	完存
41	牧土居	△	一部損壊
42	阿波土居	△	半壊
43	梶原屋敷跡	△	半壊
44	殿土井	△	半壊
45	飯山城跡	○	一部損壊
46	惣七遺跡	○	完存
47	金砕山城跡	○	完存
48	月沢城跡	○	完存
49	本山城跡	○	完存
50	栩原城跡	△	一部損壊
51	会下山城跡	○	一部損壊
52	三堂坂城跡	○	一部損壊
53	鳶乃森城跡	○	一部損壊
54	月田城跡	◎	一部損壊
55	野田屋敷跡	○	一部損壊
56	宮山城跡	◎	完存
57	城山城跡	○	完存
58	佐引城跡	○	完存
59	注連山城跡	◎	一部損壊
60	蜂ヶ城跡	○	完存
61	植木構跡	○	一部損壊
62	石ヶ城跡	◎	完存
63	真木ヶ城跡	○	完存
64	十六城跡	△	完存
65	栗原城跡	○	完存
66	都我布呂城跡	○	一部損壊
67	城山城跡	○	一部損壊

大庭郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
68	日爪城跡	◎	完存
69	七屋敷跡	△	一部損壊
70	山名屋敷跡	○	一部損壊
71	田井城跡	○	一部損壊
72	殿屋敷遺跡	△	完存
73	下和城跡	○	完存
74	初和城山堡	△	半壊
75	湯山城跡	○	完存
76	大壇城跡	○	完存
77	茶臼山城跡	○	完存
78	大寺畑城跡	◎	一部損壊

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
79	陣山城跡	◎	一部損壊
80	小寺畑城跡	○	完存
81	羽庭城跡	○	消失
82	砥石山城跡	○	半壊
83	神上城跡	○	完存
84	二ツ山城跡	○	完存
85	高山城跡	○	完存
86	城山城跡	○	完存
87	上ヶ市遺跡	△	一部損壊
88	篠向城跡	◎	一部消失
89	目木構跡	○	一部損壊
90	持家城跡	○	完存
91	鳥越山城跡	○	一部損壊
92	名称未定	△	完存
93	田楽城跡	○	一部損壊
94	赤野遺跡	○	消失
95	高山城跡	○	完存
96	逆巻城跡	○	一部損壊
97	土器尾城跡	○	完存

西西条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
98	陣山	△	一部損壊
99	奥津城山城跡	○	一部損壊
100	余瀬ヶ城跡	○	完存
101	西浦城跡	○	完存
102	寄山城跡	△	半壊
103	二山城跡	○	一部損壊
104	小丸城跡	○	一部損壊
105	西屋城跡	◎	完存
106	斎藤別墅跡	△	一部損壊
107	侍屋敷跡	△	一部損壊
108	岡の屺城跡	◎	完存
109	城山	○	完存
110	ビクニガ城跡	○	完存
111	天狗山城跡	○	完存
112	河内構跡	○	消失
113	河内城跡	○	消失
114	東山城跡	○	半壊
115	久田上原城跡	○	一部消失
116	久田堀ノ内遺跡	○	消失
117	比丘尼ヶ城跡	○	一部消失
118	城峪城跡	○	一部消失
119	小田草城跡	◎	完存
120	城山城跡	○	完存
121	岩棚構跡	○	一部損壊
122	葛下城跡	◎	完存
123	春日城跡	○	完存
124	犬城跡	△	一部損壊
125	小田城跡	○	完存
126	キリゴ谷城山城跡	○	完存
127	鴫津の構跡	○	一部損壊
128	大田和城跡	△	一部損壊
	竹田遺跡	△	消失
	竹田古墳群	△	消失
129	沖構跡	○	一部損壊
130	目崎城跡	◎	完存
131	古川城跡	○	完存
132	因幡殿	△	半壊
133	局笠山城跡	○	完存
134	院庄館跡	◎	一部損壊
135	院庄構城跡	○	一部損壊
136	美和山城跡	○	完存
137	下原構跡	△	一部損壊

西北条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
138	さんこう城跡	△	完存
139	相坂城跡	○	半壊
140	日上山城跡	○	完存
141	桝形城跡	◎	完存
142	東田辺城山城跡	○	完存
143	黒沢山城跡	○	一部損壊
144	東田辺谷上城跡	○	完存
145	山名房安居館跡	△	完存
146	長良獄城跡	○	一部損壊
147	一宮甲宮ノ谷遺跡	△	完存
148	天王木土塁跡	○	半壊
149	茶臼山城跡	○	完存
150	神楽尾城関連遺構跡	○	完存
151	神楽尾城跡	◎	完存
152	津山城跡	◎	一部損壊

東北条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
153	殿ノ山城跡	○	一部損壊
154	祖星ヶ山砦跡	○	完存
155	室尾城跡	○	完存
156	内構跡	○	一部損壊
157	矢筈城跡	◎	完存
158	百々城跡	○	一部損壊
159	佐良山城跡	○	半壊
160	仙の城跡	○	完存
161	行重城跡	○	半壊
162	梶間山城跡	○	完存
163	松ヶ屺城跡	○	一部損壊
164	笠松城跡	○	完存
165	利元城跡	○	完存
166	吉見仙砦跡	○	完存
167	天狗寺城跡	○	完存
168	烏ヶ仙城跡	○	完存
169	塩屋ヶ城跡	○	完存
170	天神山城跡	○	完存
171	福田城跡	○	完存
172	懸縄山城跡	○	完存
173	うらば城跡	○	完存
174	上横野谷口遺跡	△	半壊
175	横田城跡	○	完存
176	藤田山城跡	○	完存
177	台山城跡	○	完存
178	別所城跡	○	完存
179	医王山城跡	◎	完存
180	鉢伏城跡	○	完存
181	小丸山城跡	△	全壊
182	池上城跡	△	一部損壊
183	中陣跡	△	一部損壊

東南条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
184	山方深田遺跡	△	完存
185	山方高築遺跡	○	完存
	山方芦屋遺跡	○	完存
186	高野城跡	△	全壊

久米北条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
187	高味城跡	△	完存
188	城山城跡	○	完存
189	岩屋城跡	◎	完存
190	岩屋城陣城群跡	◎	完存
191	一備谷砦跡	△	完存
192	八幡垰城跡	△	完存
193	宮ノ上城跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
194	茶臼山城跡	○	一部損壊
195	姿山砦跡	○	一部損壊
196	亀山城跡	○	半壊
197	磯尾城跡	○	完存
198	加冶子山城跡	△	完存
199	萩丸城跡	△	半壊
200	城小屋城跡	○	一部損壊
201	横岩城跡	○	完存
202	年末城跡	○	一部損壊
203	円宗寺城跡	○	一部損壊
204	鍋山遺跡	○	一部損壊
205	構城跡	○	一部損壊
206	平福寺城跡	○	完存
207	稲荷山城跡	△	完存
208	八幡長者屋敷跡	○	半壊
209	江原兵庫助別墅跡	△	一部損壊
210	戸脇土塁跡	△	完存
211	天神山城跡	○	一部損壊
212	一之瀬城跡	○	一部損壊
213	高山城跡	○	一部損壊
214	鬼山城跡	◎	一部損壊
215	江原城跡	○	一部損壊
216	丸山城跡	△	一部損壊
217	三宮城跡	△	半壊
218	鳥首城跡	△	完存
219	金地城跡	○	一部損壊
220	城山城跡	○	一部損壊
221	細田城跡	○	完存
222	天神山城跡	○	一部損壊
223	中の城城跡	○	完存
224	あたご山城跡	○	完存
225	高陣城跡	○	半壊
226	両山寺城跡	○	一部損壊
227	杉城跡	○	完存
228	城山城跡	○	全壊
229	構跡	○	完存
230	八幡山城跡	○	完存
231	青木城跡	△	一部損壊
232	植松城跡	○	完存
233	鳥越山城跡	○	完存
234	茶臼山城跡	○	完存
235	高土城跡	○	完存
236	城能城跡	○	一部損壊
237	三角城跡	○	一部損壊
238	石丸屋敷跡	△	半壊
239	寄城跡	○	一部損壊
240	高城跡	◎	一部損壊
241	蕨尾城跡	○	完存
242	鶴田城跡	◎	一部損壊

久米南条郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
243	嵯峨山城跡	◎	一部損壊
244	神南備山城跡	○	完存
245	小桁城跡	○	完存
246	皿山城跡	○	完存
247	丸山城跡	○	完存
248	荒神山黒岩遺跡	○	完存
249	是久山城跡	○	完存
250	荒神山城跡	◎	完存
251	大谷城跡	○	一部損壊
252	構跡	△	半壊
253	城山城跡	○	完存
254	稲荷山城跡	○	一部損壊
255	新城城跡	○	一部損壊
256	丸山城跡	△	半壊
257	名称未定	△	全壊
258	原田故営堂跡	△	半壊
259	本丸城跡	△	半壊
260	大将軍城跡	△	半壊
261	奥谷城跡	△	半壊
262	樋の元城跡	△	完存
263	秋小屋城跡	△	半壊
264	上殿城跡	○	一部損壊
265	将監山城跡	△	一部損壊
266	立畑城跡	○	完存
267	安盛城跡	○	一部損壊
268	上原陣跡	△	半壊
269	大戸山轟城跡	○	完存
270	高城跡	○	一部損壊
271	藤原城跡	△	一部損壊
272	竜王山城跡	○	完存
273	草木城跡	○	完存
274	下風城跡	○	一部損壊
275	伏山城跡	○	一部損壊
276	伊勢畑城跡	◎	一部損壊
277	小松城跡	△	完存
278	沼元構跡	○	一部損壊
279	大西構跡	○	一部損壊
280	蓮華寺城跡	○	一部損壊
281	大植城跡	○	一部損壊

勝北郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
282	仲山城跡	◎	一部損壊
283	黒目城跡	○	完存
284	堀坂城跡	○	一部損壊
285	烏帽子形城跡	○	完存
286	河原山城跡	◎	完存
287	本丸城跡	◎	一部損壊
288	国司尾館跡	○	半壊
289	吹山城跡	○	一部損壊
290	名称未定	△	一部損壊
291	天王山	○	半壊
292	金森城跡	△	一部損壊
293	矢櫃城跡	○	完存
294	爪ヶ城跡	○	完存
295	名称未定	△	一部損壊
296	名木ノ城跡	○	一部損壊
297	細尾城跡	○	完存
298	八巻城跡	○	完存
299	今宮城跡	○	一部損壊
300	菩提寺城跡	○	一部損壊
301	大別当城跡	○	一部損壊
302	鎌倉山城跡	○	完存
303	右手城跡	△	完存
304	岡・城が端城跡	△	全壊
305	久常城跡	○	半壊
306	加賀尾城跡	○	一部損壊
307	丸山城跡	○	完存
308	久常城跡	△	一部損壊
309	福光屋敷跡	○	一部損壊
310	吉正城跡	△	全壊
311	有元城跡	○	一部損壊
312	余野山屋敷跡	△	全壊
313	長畑構跡	○	一部損壊
314	富坂屋敷跡	△	一部損壊
315	野田構跡	△	一部損壊
316	野田城跡	△	半壊
317	岩倉山城跡	○	完存
318	新宮城跡	◎	完存
319	植月城跡	○	一部損壊
320	構城跡	△	一部損壊
321	茂平城跡	○	消失
322	鬼ヶ池城跡	△	一部損壊
323	大谷城跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
324	石生構跡	△	一部損壊
325	小風呂山城跡	○	一部損壊
326	構城跡	△	一部損壊
327	鎌倉屋敷跡	○	一部損壊
328	上ノ山城跡	○	一部損壊
329	大爺の構跡	△	半壊
330	真加部構跡	△	全壊
331	河内山城跡	△	全壊
332	別所城跡	△	一部損壊
333	星尾城跡	○	一部損壊
334	比丘尼城跡	○	完存

勝南郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
335	河辺構跡	○	半壊
336	河辺城跡	○	完存
337	瓜生原城跡	○	完存
338	横手城跡	○	一部損壊
339	姥ヶ城跡	○	完存
340	井上城跡	△	一部損壊
341	神田城跡	○	一部損壊
342	高取城跡	△	一部損壊
343	新造構跡	△	一部損壊
344	東吉田城跡	○	一部損壊
345	大谷城跡	○	一部損壊
346	糸山筑紫城跡	△	一部損壊
347	岡城跡	○	半壊
348	城の尾山城跡	○	完存
349	小矢田城跡	○	一部損壊
350	三星城跡	◎	一部損壊
351	尼ヶ城跡	○	一部消失
352	舞山城跡	○	一部損壊
353	鴛淵山城跡	○	完存
354	金室城跡	○	一部損壊
355	鷲山城跡	○	完存
356	井内城跡	◎	一部損壊
357	勝間城跡	○	完存

吉野郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
358	佐淵城跡	○	半壊
359	小房城跡	◎	一部損壊
360	黒山城跡	○	完存
361	会下城跡	○	完存
362	八幡山城跡	○	一部損壊
363	小原山王山城跡	◎	完存
364	仁寿寺城跡	○	完存
365	政岡城跡	○	一部損壊
366	寺坂城跡	○	一部損壊
367	竹山城跡	◎	一部損壊
368	小淵城跡	○	一部損壊
369	比丘尼ヶ城跡	○	一部損壊
370	比丘尼城跡	○	完存
371	伝宮本武蔵宅跡	○	一部損壊
372	小山城跡	△	完存
373	高畑城跡	○	一部損壊
374	高山城跡	○	完存
375	淡相城跡	◎	一部損壊
376	大将ヶ陣山城跡	○	完存
377	殿屋敷跡	○	一部損壊
378	赤田城跡	○	一部損壊
379	法天山城跡	○	完存
380	壬生の構跡	△	半壊
381	比丘尼ヶ城跡	◎	完存
382	横山城跡	○	一部損壊
383	殿屋敷跡	△	半壊

英田郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
384	鞍掛城跡	◎	一部消失
385	比丘尼城跡	○	半壊
386	妙見山城跡	○	完存
387	鳥越山城跡	○	一部損壊
388	鬢櫛山城跡	○	一部損壊
389	林野城跡	◎	完存
390	友野城跡	◎	一部損壊
391	緑青山城跡	○	一部損壊
392	比丘ヶ城跡	○	一部損壊
393	川越屋敷跡	△	半壊
394	松田城跡	○	完存
395	久保木城跡	○	完存
396	越坂山城跡	○	完存
397	三倉田城跡	○	一部損壊
398	矢櫃山城跡	○	完存
399	大屺城跡	○	完存
400	大畠城跡	○	完存
401	鷹ノ巣城跡	○	一部損壊
402	神田山城跡	○	一部損壊
403	尾越城跡	○	完存
404	福城跡	○	一部損壊
405	高鉢城跡	○	一部損壊
406	横尾城跡	○	完存

4　美作国不明中世城館跡一覧表

・本表は、近世地誌などに記されてはいるが所在地が不明の城館と城館が所在したとされる伝承地を踏査したが、城館関連遺構が不明瞭であったものを載せている。
・所在地欄には、所在地が推定される現在の市町村名と大字名を載せているが、場所が推定できないものは市町村名のみもしくは空欄にしている。
・文献番号欄には、巻末にある文献一覧表の番号を記載している。

表４　美作国不明中世城館跡一覧表

真嶋郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
407	鍛治屋敷	真嶋	真庭市勝山	高田村の勝山の麓にあり、鍛治の旦忠光が住み、三浦家の武器を作っていたと記載される。	97・98
408	市構	真嶋	真庭市勝山	高田村に所在し、市又次郎が居住する所と記載される。	97・98
409	柴平山	真嶋	真庭市鉄山	柴平山山上に削平があると記載される。	97・98
410	兵庫屋敷	真嶋	真庭市上	上村にあると記載される。	97・98
411	殿土居	真嶋	真庭市上市瀬	「字殿土居の地名があり」と記載される。	27
412	木山城	真嶋	真庭氏木山	『作州記』では木山村に所在し、城主を源修理秋行と記載する。	
413	名称未定	真嶋	真庭市惣	以前の分布調査時に、人工的に加工した平坦面を確認している。現在は、古墳群の範囲である。	
414	脇坂陣屋	真嶋	真庭市中	『城郭全集』に江戸時代の陣屋跡と記載される。	
415	薬師寺構	真嶋	真庭市西河内	「薬師寺与三左衛門が平城を構え」と記載される。	129
416	殿屋敷	真嶋	真庭市日野上	真島郡日上村小宗に古宅跡がありと記載される。	97・98
417	市構	真嶋	真庭市福田	「福田村に市構あり」と記載される。	97・98
418	佐野屋敷	真嶋	真庭市別所	「別所村粟村に佐野屋敷があり」と記載される。	97・98
419	八幡山城	真嶋	真庭市曲り	曲村にあって、「屯聚之迹」が有ると記載される。	97・98
420	首切坂陣	真嶋	真庭市美甘	『城郭全集』に「防塞」・「楯塁」と記載される。	
421	長者屋敷	真嶋	真庭市若代	若代地区の長谷集落付近に所在すると記載される。	133
422	長者屋敷	真嶋	真庭市若代	桐峪集落に、長者が住んでいたと記載される。	71
423	城山	真嶋	真庭市若代畝	尾根筋の平坦面に人為的な加工痕跡が認められるものの、明確な城館関連遺構と断定できない。	

大庭郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
424	かげ由屋敷	大庭	真庭市赤野	川東村赤野に地名があると記載される。	129
425	さいしょう小屋	大庭	真庭市樫西	余野・樫西の土民が「寨」を構えたと記載された文章中に「かし村さいしやう小屋」とある。	97・98
426	清太馬場	大庭	真庭市樫西	「樫村西北の三坂山道にあり」と記載される。	97・98
427	野州陣山	大庭	真庭市上河内	上河内東谷上村に高さ２町１２間の「古文山」と記載される。	97・98
428	中山屋敷	大庭	真庭市久世	黒尾集落の北側に所在すると記載される。	133
429	若林山の砦跡	大庭	真庭市古見	「若林山と東隣の山頂に小曲輪を配置」するが「平成8年末工事で完全消滅した」と記載される。	28
430	仲村城跡	大庭	真庭市山久世	山頂及びそこから派生する尾根筋には平坦地形が認められるが、明確な城館関連遺構は確認できない。『城郭全集』の記載には中村にあるとする。	
431	下村田永城跡	大庭	真庭市山久世	なだらかな尾根が続く。明確な城館関連遺構は未確認。『城郭全集』の記載には下村にあるとする。	

西西条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
432	家老屋敷	西西条	鏡野町円宗寺	沖構に隣接した屋敷と記載される。	97・98
433	横木山	西西条	鏡野町上斎原	田中四郎乗影が居住したと記載される。	42
434	構	西西条	鏡野町上森原	城主大林久助と記載される。	32

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
435	離山	西西条	鏡野町高山	小田城の東の「離山」に城跡が残ると記載される。	97・98
436	小屋谷	西西条	鏡野町高山	葛下城攻めの陣屋と記載される。	97・98
437	角田構	西西条	鏡野町薪森原	現小学校の地にあると記載される。	52
438	築山	西西条	鏡野町竹田	毛利氏が沖構跡を攻めたときの砲台の跡と記載される。	31
439	櫻井屋敷	西西条	鏡野町塚谷	桜井越中の屋敷と記載される。	97・98
440	中尾山	西西条	鏡野町貞永寺	中尾平三兵衛の居城と記載される。	97・98
441	殿屋敷	西西条	鏡野町富西谷	文献70に記載される。	70
442	土居	西西条	鏡野町土居	文献31に記載される。	29・31
443	山崎鼻砦跡	西西条	鏡野町羽出西谷	羽手川の北側にある山塊中腹付近が該当する。細尾根上に平坦地が断続的に存在するが、堀切・切岸などの遺構は確認出来ない。	25・26
444	毘沙門屋敷	西西条	津山市院庄	院庄村にあり、東西32間、南北23間と書かれる。	97
445	砥岩城跡	西西条	津山市神代	構城と同一か近隣と施設としている。	133

西北条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
446	太郎屋敷	西北条	鏡野町香々美	斉藤実秀の弟、又太郎の屋敷と記載される。	97・98
447	澁谷屋敷	西北条	津山市小田中	永禄のころ「渋谷平内者」の屋敷とされる。	97・98
448	城所屋敷	西北条	津山市小原	小原村にありと書かれる。	97・98
449	采女屋敷	西北条	津山市小原	猪股采女の屋敷跡と書かれる。	99・100
450	有木屺の山手の砦	西北条	津山市西田辺	福田玄蕃勝昌の家臣大塚某の砦と記載される。	31
451	有木屋敷	西北条	津山市西田辺	有木氏居住と記載される。	31

東北条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
452	杉山城	東北条	津山市加茂町青柳	東北郡青柳村の杉山とあり、城主不明とある。別名青柳城。	6
453	丹後屋敷	東北条	津山市加茂町下津川	川端丹後守の屋敷と記載される。	99・100
454	大島屋敷	東北条	津山市加茂町下津川	丹後屋敷の下にあると記載される。	99・100
455	関源次郎屋敷	東北条	津山市加茂町下津川	関源次郎の居館と記載される。	99・100
456	石山城跡	東北条	津山市加茂町楢井・加茂町行重	「郭跡上下二段あり」「行重村の界なり」「居主不知」と書かれる。	99・100
457	比丘尼屋敷	東北条	津山市加茂町物見	「舞見山の内にあり」「二町四方」と書かれる。	99
458	利休屋敷	東北条	津山市加茂町物見	「津也ヶ谷にあり」と書かれ、千利休の屋敷とされる。	99
459	袴腰城	東北条	津山市加茂町行重・上横野	「城主不知」「行重山とある是れか」と書かれる。	99・100
460	有元屋敷	東北条	津山市草加部	有元屋敷として土塁と堀切があると書かれる。	99・100
461	郡家屋敷	東北条	津山市下高倉西	杉森神社の馬場に接し郡家屋敷という土地があると記載。	68
462	城山	東北条	津山市下横野	「竹内の南なり少し堡形あり半に段が有り城主不知」と記載。	99・100

東南条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
463	古屋敷	東南条	津山市川崎	「古屋敷と云う」と記載される。	99・100
464	志戸部城跡	東南条	津山市志戸部	現在の津山市陸上競技場が推定地とされる。競技場東の斜面に段があるが判然としない。	
465	上藪屋敷	東南条	津山市東一宮	西山方の清右衛門の持つ林の内にあると記載される。	99・100
466	中島頼名屋敷	東南条	津山市東一宮	「中島頼名宅趾」として高さ二丈、西北に「景向殿」があると記載される。	68
467	城山	東南条	津山市籾保	城山の地名があると書かれる。	99・100

久米北条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
468	仏空殿	久米北条	津山市久米川南	文献46に記載される。	46
469	長者屋敷	久米北条	津山市坪井下	文献13に記載される。	13
470	寺城	久米北条	津山市坪井下	岩屋城攻撃の陣地と記載される。	13
471	長者屋敷	久米北条	津山市坪井上	貞清四郎左衛門の屋敷と記載される。	13
472	赤木屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
473	河本屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
474	大蔵又兵衛屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
475	怒本新右衛門屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
476	安田屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
477	市三郎兵衛屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
478	植木藤左衛門屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
479	清水伊勢屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
480	長船越中屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
481	新田屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
482	清水勘右衛門屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
483	原田屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城下の家中屋敷と記載される。	129
484	幸助屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城の麓にあると記載される。	47
485	仁反田屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城の麓にあると記載される。	47
486	西尾与九郎屋敷	久米北条	津山市中北上	岩屋城の麓にあると記載される。	47
487	陣簱跡	久米北条	津山市中北下	尼子氏の家臣立原某が目崎城を攻撃した時に大旗は翻した所と記される。別称「陣簱砦跡」「立原砦跡」。	46
488	宗呂木跡	久米北条	津山市中北下	陣簱の東南にあり、目崎城の兵が城を出て惣論議した場所の記載される。別称「総論議砦」。	46
489	西尾屋敷	久米北条	津山市中北下	文献46に記載される。	46
490	城屋敷跡	久米北条	美咲町打穴里	城屋敷として、今は稲荷の小祠 ありとする。	46
491	氏平屋敷跡	久米北条	美咲町中垪和	間祢き山から南西へ延伸する丘陵上にあり、氏平集落に接する尾根の突端に位置する。	46・97・98
492	錦織屋敷跡	久米北条	美咲町錦織	立満の東北にあたる高台にあり、昔秦氏が住んだとする。	46
493	州前城跡	久米北条	美咲町錦織	吉井川左岸の山塊南西側の山頂部に立地。自然地形の平坦面に溝・古道が取り巻き、東方の鞍部には堀切状を呈する３～４条の尾根の切断が見られる。砦の可能性があるが、城館類似遺構とも認められる。同所は「嵯峨山城南城」や「州前城」と呼ばれる。	97・98
494	城尾城跡	久米北条	美咲町西垪和	西垪和地区南集落から南西の舌状尾根に位置すると記載。別称城之尾城跡。	98
495	長者屋敷跡	久米北条	美咲町南	八柳集落から江草集落へと抜ける谷間付近にあると記載。	97・98
496	侍屋敷跡	久米北条	美咲町南	向山集落から北西の山の道筋右手付近に位置すると記載。	10
497	畑の平陣	久米北条	津山市久米町	文献116に記載される。	116

久米南条郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
498	高田構屋敷	久米南条	久米南町上神目	宅址は畑、壕址は水田となっていると記載される。	46
499	内田屋敷	久米南条	久米南町上神目	物部肩野連乙麻呂の末裔と称する内田氏が居住した場所と記載伝えられる。	99・100
500	下神目の常山	久米南条	久米南町上神目	文献86に記載される。	86
501	岡田屋敷	久米南条	久米南町上籾	今井治郎左衛門が居住した跡と記載される。	83
502	実盛屋敷	久米南条	久米南町北庄	口碑に原田家の従士であるというと記載。また北庄山手下村にあると記載。	46・99・100
503	津野田屋敷	久米南条	久米南町北庄	浦上宗景の家士角田越中の墓が北庄山手上村にあると記載。	99・100
504	三村屋敷	久米南条	久米南町神目中	三村家親が寓居を構えた記載される。	46
505	小松尾城	久米南条	久米南町下二ケ	小坂与三郎が守っていたと記載される。	46
506	興禅寺	久米南条	久米南町下籾	『常山紀談附武将感状記』や『備前略史乾』などに、三村暗殺の場所として記載。	
507	堡	久米南条	久米南町下弓削	「小坂」や「下弓削」にあると記載される。	86
508	横部屋敷	久米南条	久米南町羽出木	花房職之の妹婿横部治郎左衛門が居住と記載される。	46
509	長者屋敷	久米南条	久米南町松	東南に面して東西４０間、南北２５間、その西部に本宅址、東部に築山泉水の址があると記載される。	46
510	構屋敷	久米南条	久米南町南庄	大将軍城主の部将某が守っていた堡址と記載される。	46

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
511	吹上城	久米南条	久米南町南庄	山頂平坦部の中央に城山と刻した石碑と愛宕神金刀比羅宮の碑があったと記載。	46
512	宮地城	久米南条	久米南町宮地	新右衛門景直という城主名は記載される。	86
513	右近屋敷左近屋敷	久米南条	久米南町安ヶ虻	屋敷がありその周囲に七人塚や右近の墓があると記載。	46
514	小山堡	久米南条		沼元彦左衛門の城主名は記載される。	86

勝北郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
515	関源次郎屋敷	勝北	津山市市場	関源次郎の居館と記載される。	99・100
516	流郷館	勝北	津山市上村	文献115に記載される。	115
517	城ノ段	勝北	津山市上村	古城跡と云傳ふれとも不分明と記載される。	99・100
518	中土居	勝北	津山市坂上	文献33に記載される。	33
519	蓬莱屋敷	勝北	津山市坂上	文献34に記載される。	34
520	福岡屋敷	勝北	津山市坂上	文献34に記載される。	34
521	長者屋敷	勝北	津山市坂上	文献34に記載される。	34
522	鎌倉屋敷	勝北	津山市杉宮	文献115に記載される。	115
523	構	勝北	津山市新野東	文献133に記載される。	133
524	草刈景継屋敷	勝北	津山市新野東	草刈景継の屋敷と記載される。	99・100
525	寺坂屋敷	勝北	津山市新野東	寺坂桃千代の屋敷と記載される。	99・100
526	古土居	勝北	津山市新野東	荘園時代における公文所が置かれた場所と記載される。	57
527	いまさか屋敷	勝北	津山市西上	烏帽子形城関連の居館と記載される。別称「今坂屋敷」「美作屋敷」。	57
528	川戸屋敷	勝北	津山市西上	烏帽子形城関連の居館と記載される。	57
529	土居	勝北	津山市西上	加茂郷総社に隣接した賀茂郷庁阯と記載される。	34
530	中西城	勝北	津山市西中	中西玄蕃頭吉勝が在城と記載される。	129
531	土居	勝北	津山市西下	土居の内構居阯と記載される。	34
532	河内館	勝北	津山市原	土居の中の地名と記載される。	34
533	殿屋敷	勝北	津山市三浦	豊田氏の屋敷と記載される。	99・100
534	土居	勝北	津山市安井	文献34に記載される。	34
535	岩山の南の陣	勝北		文献106に記載される。	106
536	天神城跡	勝北	奈義町柿	高殿川左岸に位置する独立丘陵の頂部に築城したと想定されているが、明確な城館関連遺構は確認できなかった。	133
537	比丘尼城跡	勝北	奈義町柿	高殿川左岸の独立丘陵頂部に築かれたとする。頂部の平坦面の周辺と南東方向に延びる尾根部に１～２段の平坦地が認められるが、明確な城館関連遺構は確認できなかった。	99・100
538	松岡刑部屋敷跡	勝北	奈義町高円	「山の上」の地に所在するが時代・人物ともに不詳という。	99・100
539	殿小屋跡	勝北	奈義町高円	一名「尖り山」もいい、山半南東にありと記載される。	99・100
540	愛宕山跡	勝北	奈義町関本	「愛宕山」の頂部付近で、土塁状の囲みとその下方に帯曲輪状のものがあると記載される。	114
541	久永屋敷跡	勝北	奈義町滝本	今は畑となり２町四方と記載される。	99・100
542	比丘尼屋敷跡	勝北	奈義町中島西	大路の地にあり、長さ38間、横18間の屋敷と記載される。	99・100
543	倉内屋敷跡	勝北	奈義町西原	倉内隼人助の居宅の跡と記載される。	99・100
544	菅原実兼卿館跡	勝北	奈義町久常	今は耕作地になって地字に残ると記載される。	99・100
545	比丘尼屋敷跡	勝北	奈義町宮内	諾（那岐）山上にある20間四方の屋敷で由来は不詳と記載。	99・100
546	干尾城跡	勝北	美作市大町	粟井川右岸の丘陵頂部に立地し、星尾城跡に東隣。頂部に名称未定の古墳が所在するが、周辺はなだらかな自然地形が広がり、城館関連遺構は確認できなかった。	
547	西田屋敷跡	勝北	美作市矢田	浦上氏に与した西田氏の屋敷で、矢田に構えたと記載される。	92
548	佐々木屋敷跡	勝北	美作市余野	近江国の蒲生氏郷の子清綱が逃れ住んだというと記載あり。	115

勝南郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
549	義経屋敷	勝南	津山市池ヶ原	源義経の陣所であったと記載される。	99・100
550	梶原が陣	勝南	津山市池ヶ原	梶原景時父子の陣屋跡と記載される。	99・100
551	蒲の尾	勝南	津山市池ヶ原	源範頼の陣所として義経陣所の北にあると記載される。	99・100
552	大屋敷	勝南	津山市池ヶ原	『大岡家文書』に庄屋宅跡と記載される。	
553	井保木屋敷	勝南	津山市瓜生原	伊保木左衛門の屋敷と記載される。	99・100

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
554	名称未定	勝南	津山市瓜生原	「田淵(城)」、「田口山古城」の可能性がある箇所を踏査する。小松寺池の北西で金井分の丘陵で尾根高所は、平坦であるが自然地形で、明確な城館関連遺構は未確認だった。	6・99・100
555	田淵城跡	勝南	津山市金井	「山の高さ五町餘邑の午未」にあり「城主田淵某」と記載。	99・100
556	田口山城跡	勝南	津山市金井	「城主名不知」「小松寺より西北に当る小山なり」と記載。	99・100
557	シトト城	勝南	津山市河辺	時期・由来不詳の古戦場と記載される。	99・100
558	吉田城	勝南	津山市西吉田	『東作誌』に記載される。	99・100
559	難波屋敷	勝南	津山市西吉田	『大岡家文書』に難波平次郎ノ宅跡と記載される。	
560	谷口喜右衛門尉屋敷跡	勝南	美作市英田青野	谷口氏の屋敷が土居の「一の段」の地にありと記載。	99・100
561	長者屋敷跡	勝南	美咲町上間	「岡ガ坂」の地にあり、「岡ノ入道」が住んだ屋敷と記載。	99・100
562	屋敷跡	勝南	美咲町塩気	「ウ子の台」の地にあり、居主不詳と記載される。	99・100
563	一村屋敷跡	勝南	美咲町藤田上	一村右衛門が住み時代不詳と記載される。	99・100
564	藤田屋敷跡	勝南	美咲町藤田上	藤田八郎左衛門の屋敷で、城尾坂の地に古墓ありと記載。	99・100
565	倉見屋敷跡	勝南	美咲町安井	「倉見の権三」という長者の屋敷跡があると記載。	99・100
566	矢の藤屋敷跡	勝南	美咲町連石	「矢の藤刑部」という富裕の長者あり、時代不詳と記載。	99・100
567	殿屋敷跡	勝南	美作市奥大谷	由来不詳、県令などの古宅か、土塁のあとが明瞭と記載。	99・100
568	龍王山城跡	勝南	美作市北山	「古城跡」として、龍王山というと記載される。	99・100
569	城山城跡	勝南	美作市明見・中尾	明見地区の丘陵上に位置が遺構は確認できないと記載。	133
570	屋敷跡	勝南	美作市豊国原	昔大身 の人が住んだ跡ありとして、村に東門・西門、土塁の跡があり、北には堀切、南は埋めると記載される。	99・100
571	山下屋敷跡	勝南	美作市長内	後藤勝元家臣の山下四郎三郎の屋敷前と記載される。	99・100
572	入田城跡	勝南	美作市入田	三星山であり前山は明見村に、後山は入田村にかかり当村の城山と称すと記載される。	99・100
573	龍王山城跡	勝南	美作市入田	入田城（美作市入田）より西に約700m 、吉井川に望んだ急な山の山頂にあり、八頭竜王宮の岸壁上に本丸、北へ10m 下がって二の丸、三の丸があると記される。	115
574	花房屋敷跡	勝南	美作市入田	花房氏がこの地に帰農して館に住んだと記載。	115
575	湯郷土居館跡	勝南	美作市湯郷	湯郷地区に、「ツイジ」・「東門」・「堀リ」・「かまへ」などの地名が残る。『蔭涼軒日録』に記載される。	133
576	高山城跡	勝南	勝央町東吉田	頂部は平坦で、植林が行われていない南側斜面に犬走り状の平坦面が造作される。しかしながら防御施設は認められない。	
577	城山城跡	勝南	美作市明見・中尾	明見地区の丘陵上に位置するが、山頂は耕作により削平されると記載。	133
578	塩垂山陣跡	勝南	美作市湯郷・入田・中山	吉野川右岸の塩垂山頂とそこから南側に延びる尾根筋に位置する平坦地および塩垂山頂東側の頂部を踏査したが、いずれも明確な城館関連遺構は確認できなかった。全壊または別所の可能性がある。『応仁別記』によれば、応仁元年（1467）六月、赤松氏の家臣宇野上野入道・太田三郎が赤松伊豆守被官粟井右京進の手引きで美作国に乱入し「塩垂山」に陣を取ったとされる。	

吉野郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
579	井口構跡	吉野	美作市赤田	『新免家侍帳』に「井口長兵衛　塀高城下構」とある。	
580	大熊屋敷跡	吉野	美作市江ノ原	『新免家侍帳』に「中村刑部　江原大熊」とある。	
581	土居殿跡	吉野	美作市太田	殿村の内高陽の地に屋敷跡ありと記載される。	99・100
582	清水構跡	吉野	美作市小ノ谷	『新免家侍帳』に「渡辺又左衛門　小の谷清水構」とある。また「江見家記」に「新免侍渡部亦右衛　小ノ谷ニ住ス」とある。	
583	土居跡	吉野	美作市川上	大野氏代々の屋敷で、墓所は山上、権現に祭った宮居や持仏堂観音ありと記載。	99・100
584	久古屋敷跡	吉野	美作市川上	久古（俗名は杉原孫兵衛）という人物が住むと記載される。	99・100
585	新免与三屋敷跡	吉野	美作市川上	下山の地にあって今は田となると記載。	99・100
586	大野新左衛門屋敷跡	吉野	美作市川上	大永年中に新免備中守貞弘が住み、子孫が続くと記載。	99・100
587	大門屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「元木刑部　大門　同上（川上村の内）」とある。別称井垣屋敷跡。	129
588	野間藤三郎屋敷跡	吉野	美作市川上	竹の鼻の地にありと記載される。	99・100
589	寺内屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「同（剣持）又次郎　寺内」とある。	99・100
590	中屋屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「有元三郎右衛門　川上の内」とある。	129
591	塔田屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「新免又四郎　塔田　川上の内」とある。	
592	竹の鼻屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「同(新免)弥十兵衛　竹の鼻　川上の内」とある。	99・100

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
593	岡屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「新免藤右衛門　岡　川上の内」とある。	129
594	中島屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「新免次郎九郎　中島　川上の内」とある。	129
595	山根屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「新免源太夫・孫惣　山根　川上の内　新免備中守子なり」とある。	129
596	宮脇屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「新免孫惣　宮脇　川上の内　新免備中守子なり」とある。	129
597	森畑屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「森惣兵衛　森畑　川上村の内」とある。	
598	構跡	吉野	美作市川上	「惣土居、昔大野の氏族大夫坊法橋の住むところ」と記す。	99・100
599	中尾屋敷跡	吉野	美作市川上	『新免家侍帳』に「同（新免）宮千代丸　美土路川上の内」とある。	129
600	的場屋敷跡	吉野	美作市川上	吉野郡川上村の「的場」として昔、大野一族や在々の郷士が朝夕 射事を行った場所で、村井監物成政が住むとする。	99・100
601	源内屋敷跡	吉野	美作市川戸	『新免家侍帳』に「江見源内　中北構」「江見友八郎　源内子なり」とある。	99・100
602	郷籠山城跡	吉野	美作市川戸	比丘尼城（美作市壬生・沢田）攻撃時の向城の跡といい、堀切二ヶ所ありと記載。	8・99・100
603	山根構跡	吉野	美作市川戸・栗野	吉野川右岸の丘陵頂部に立地とされる。山頂部と北端に平坦地が認められるが、明確な城館関連遺構は確認できない。『新免家侍帳』には「井門亀右衛門　川戸山根構」とある。	99・100
604	梅ヶ坂構跡	吉野	美作市川東	『新免家侍帳』に「竹内中務大輔　梅ヶ坂　河東」とある。	8・115
605	郷城跡	吉野	美作市川東	川東の「郷城」に古城跡があり、元大原卿司の居跡と記載。	8
606	殿河内構跡	吉野	美作市五名	『新免家侍帳』に「江見出雲守　五名殿河内構」とある。	99・100
607	吉野城下構跡	吉野	美作市五名	『新免家侍帳』に「江見平太　吉野城下構」とある。	
608	和気周防屋敷跡	吉野	美作市笹岡	『新免家侍帳』に「和気周防　笹岡堀切」とある。	
609	沢田城下構跡	吉野	美作市沢田	『新免家侍帳』に「中村源蔵兵衛　沢田城下構」とある。	
610	千原砦跡	吉野	美作市下庄町	赤松貞規範 の子貞時が平尾氏が築くと記載される。	115
611	本位田駿河守屋敷跡	吉野	美作市下庄町	『新免家侍帳』に「本位田駿河守　下の庄千代」とある。	
612	大当屋敷跡	吉野	美作市下庄町	「新免家侍帳」に「木南加賀右衛門　大当下の庄の内」とある。	
613	隠岐殿跡	吉野	美作市下町	『新免家侍帳』に「新免隠岐守　下町　備中守伯父なり」とある。	99・100
614	土居構跡	吉野	美作市下町	『新免家侍帳』に「野村藤左衛門　土居構　下町の内」とある。	
615	船曳屋敷跡	吉野	美作市下町	『新免家侍帳』に「船曳杢左衛門　扇屋の上同上」とある。	
616	香山屋敷跡	吉野	美作市下町	『新免家侍帳』に「香山半大夫　下町竹山の下」とある。	
617	本位田構跡	吉野	美作市下町	『新免家侍帳』に「本位田外記之介　小谷上城構　下町の内」とある。	
618	滝構跡	吉野	美作市滝	『新免家侍帳』に「水島与三左衛門　滝構」「佐志太郎左衛門同上」とある。	
619	石塔城跡	吉野	美作市立石	「石塔之（城）」「堂ヶ峰古城」「石塔峯古城跡」「石堂の峰城」とし、本丸を中心に二の丸、三の丸の区画も明瞭で、周囲に堀切跡も残るとする。『天保国絵図』に記載あり。	6・99・100
620	立石構跡	吉野	美作市立石	『新免家侍帳』に「新免惣兵衛　立石構」とある。	
621	刑部屋敷跡	吉野	美作市田殿	広井郷司の屋敷跡とする。	8
622	安積小四郎屋敷跡	吉野	美作市中町	『新免家侍帳』に「安積小四郎　上庄」とある。	99・100
623	山田勘介屋敷跡	吉野	美作市古町	『新免家侍帳』に「山田勘介　古町」とある。	99・100
624	平田又右衛門屋敷跡	吉野	美作市古町	『新免家侍帳』に「平田久右衛門　同上（古町）」とある。	99・100
625	平尾弥十郎屋敷跡	吉野	美作市古町	『新免家侍帳』に「平尾弥十郎　同上（古町）」とある。	99・100
626	土居田構跡	吉野	美作市古町	『新免家侍帳』に「新免伊予守　尾崎土居田構　備中守従弟なり」とある。	
627	高岡構跡	吉野	美作市宮本	『新免家侍帳』に「新免備後守　高岡構　宮本村の内　備中守従弟なり」とある。	
628	郷城跡	吉野	美作市宮原	上古酋長の居所で山上に平旦な段２か所あり、奈良時代以前の陶器の破片が多数残ると記載される。	8
629	景清屋敷跡	吉野	西粟倉村影石	屋敷跡は荒神の森となるとする。	99・100
630	船曳屋敷跡	吉野	西粟倉村影石	『新免家侍帳』に、「船曳助十郎　影石関屋」とある。	
631	御馬屋敷跡	吉野	西粟倉村知社	「竹ガナル」の地にあり、由来不詳と記載。	99・100
632	景石城跡	吉野	西粟倉村長尾	文献115に記載。また『太平記』に「景石・塔尾」がみえる。	115
633	公文所跡	吉野	西粟倉村長尾	公文所が置かれた所と記載。	8
634	船曳屋敷跡	吉野	西粟倉村長尾	『新免家侍帳』に「船曳弥野　長尾社礼」とある。	

英田郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
635	阿部屋敷跡	英田	美作市岩辺	石川右近と子の「あべ」の屋敷と記載される。	99・100
636	岩戸城跡	英田 吉野	美作市大内谷	山嶺は平坦で左右に堀切（幅２間、長さ５間あるいは７間）、城主は小鴨伯耆守と記載。	99・100
637	土居跡	英田	美作市巨勢	下倉敷神社との間約三町に「土居」という所ありと記載。	8
638	駿河館跡	英田	美作市巨勢	吉野川左岸にある巨勢・下倉敷集落の小字「土居」周辺の平地に位置したと想定される。現況は水田・宅地であるが、城館関連遺構は認められない。	
639	小坂田屋敷跡	英田	美作市栄町	「小坂田又四郎宅址」と記載される。	8
640	屋敷跡	英田	美作市栄町	天正以前からの屋敷地で、付近一帯に古瓦の破片、器具などの発掘されることありとする。	8
641	大夫殿屋敷跡	英田	美作市白水	地名が残るが由来不詳。	99・100
642	安東屋敷跡	英田	美作市鈴家	安東兵衛国定がこの地に住み、末に水野六左衛門勝成を聟としたが、諍いとなり勝成に斬り殺されたと記載。	99・100
643	佐々木屋敷跡	英田	美作市鈴家	「佐々木開隆の宅址」と記載される。	8
644	湯川屋敷跡	英田	美作市瀬戸	「屋敷跡」として、奥瀬戸にあり、湯川刑部が住む、時代や事跡は不詳と記載される。	99・100
645	景清屋敷跡	英田	美作市竹田	萱尾奥にあり、由来不詳、地下に金鶏があり、除夜に発声すると地元民が伝えると記載される。	99・100
646	公文所跡	英田	美作市竹田	『英田郡史考』は鎌倉時代公文所の遺跡とし、付近の墓地に同時代の五輪塔があると記載される。	8
647	杉坂城跡	英田	美作市田原	杉ヶ坂の内鞍掛岩の上にあり、嶺は平坦で堀や砦の跡は見えないと記載。	8・99・100・129
648	土居殿屋敷跡	英田	美作市鯰	江見右馬助為行の養子となり土居秋仲から名前を改めた若狭守為秀の隠居所というと記載。	99・100
649	塩垢離山城跡	英田	美作市楢原下	山の高さ約10町、砦の跡といい、西谷の岩に大砲の銃痕あり、柿ノ木峪というと記載される。	99・100
650	天狗松山城跡	英田	美作市楢原下	「塩カキ山」の砦を攻めた際の寄手の陣所というと記載。	99・100
651	大塚屋敷跡	英田	美作市楢原中	森家第一の国老大塚氏がここに住むと記載される。	99・100
652	岡崎孫次郎屋敷跡	英田	美作市原	孫次郎の屋敷地。村の地侍で、耶蘇宗門で処罰され闕所となり屋敷は破却、跡へ安東与右衛門が入ると記載。	99・100
653	殿屋敷跡	英田	美作市原	安東肥前守が住み、地名は「殿屋敷」という、谷間なりと記載。	99・100
654	平井屋敷跡	英田	美作市万善	「浮田氏の女松姫宅址」として字空にあり、193坪の宅地で泉水跡という窪地ありと記載。	8
655	長大寺跡	英田	美作市三倉田	西方に吉野川と梶並川の合流地点を望む独立丘陵頂部に築城と想定される。『英田郡誌考』は「三倉田城」として主郭を中心に南北方向に腰曲輪が数段伴うと記載されているが、公園造成からか明確な城館関連遺構は確認できなかった。	8
656	古屋敷跡	英田	美作市山城	「郷司庁址」として、垣内の地にありと記載される。	8
657	安東相馬屋敷跡	英田	美作市山口	「安東相馬の屋敷」として、泉水の一部が残るとする。	8
658	楢原城跡	英田	美作市楢原下	正保書上五四城の一で、英田郡楢原中村の「楢原之（城）」として城主を山名蔵人とする。『東作誌』は鞍懸城（美作市田殿）の別名とする。『英田郡史考』は「楢原城」として、（楢原）上163番地にあり、竜王山山頂の長方形の平地（東西40間、南北30間余り）で、堀切が囲み、足利時代に山名蔵人の居城というとする。	8・99・100

（参考：文献 133）

第３章　城館跡の概要

美作国は、現在の岡山県北東部を中心とした地域である。北側は因幡国・伯耆国、東側は播磨国、南隣は備前国、西隣は備中国に囲まれている。北の因幡・伯耆境は中国山脈があり、南側は備前・備中から続く吉備高原の山塊が続く。この両者に挟まれた中央を、東西方向に盆地が連なる。この地域の西側は旭川水系、中央部と東部は吉井川水系が、主に中国山脈から発し南の備前国へと流れている。

本国は、和銅６（713）年に備前国の北部六郡（真嶋郡・大庭郡・苫田郡・久米郡・勝田郡・英多郡）を割いて成立した。本書では明治初期頃の状況を反映したため、さらに苫田郡を西西条郡・西北条郡・東北条郡・東南条郡の４つに、久米郡を久米北条郡・久米南条郡の２つに、勝田郡を勝北郡・勝南郡の２つに、英多郡を吉野郡と英田郡の２つに分け、計 12 郡を掲載する。

真嶋郡：真庭市の西側（旧北房町を除く）と真庭郡新庄村全域が該当する。基本的に南北方向に走る旭川が東隣の大庭郡との境となる部分が多い。今回の調査では 67 か所の城館関連遺構を確認し、52 城を本文に掲載している。

大庭郡：真庭市域の東半分が該当する。旭川が東隣の真嶋郡との境となっている。今回の調査では、30 か所の城館関連遺構を確認し、25 城を本文に掲載している。

西西条郡：苫田郡鏡野町の西側と津山市の一部が該当する。今回の調査では、40 か所の城館関連遺構を確認し、34 城を本文に掲載している。

西北条郡：苫田郡鏡野町の東側と津山市の現市街地の西側部分を含む一部が該当する。今回の調査では、15 か所の城館関連遺構を確認し、12 城を本文に掲載している。

東北条郡：津山市の北側が該当する。今回の調査では、31 か所の城館関連遺構を確認し、27 城を本文に掲載している。

東南条郡：津山市の中央部分と南東部分が該当し、吉井川の北側、加茂川の西側に当たる。今回の調査では、３か所の城館関連遺構を確認し、２城を本文に掲載している。

久米北条郡：津山市西部、久米郡美咲町の西部と岡山市（旧建部町の一部）が該当する。今回の調査では、56 か所の城館関連遺構を確認し、43 城を本文に掲載している。

久米南条郡：津山市南東部、久米郡美咲町東部と久米郡久米南町全域が該当する。今回の調査では、39 か所の城館関連遺構を確認し、27 城を本文に掲載している。

勝北郡：津山市東部（旧勝北町）、勝田郡奈義町の全域、勝田郡勝央町の北半分と美作市旧勝田町の一部が該当する。今回の調査では、53 か所の城館関連遺構を確認し、34 城を本文に掲載している。

勝南郡：勝田郡勝央町の南半分と久米郡美咲町（旧柵原町の東半分）、美作市旧美作町、旧英田町域のうち吉野川より西側が該当する。今回の調査では、23 か所の城館関連遺構を確認し、19 城を本文に掲載している。

吉野郡：美作市の北半と英田郡西粟倉村全域が該当する。今回の調査では、26 か所の城館関連遺構を確認し、22 城を本文に掲載している。

英田郡：美作市の南半分で、旧美作町と旧英田町域は吉野川の東側が該当する。今回の調査では、23 か所の城館関連遺構を確認し、22 城を本文に掲載している。

城館跡概要凡例

1　城館跡概要のタイトルに示した内容は、以下の通りである。

①城館番号　城館番号は第２章の城館跡分布図、及び一覧表の番号を記している。

②城館名　城館名は周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称を記している。

③所在地　所在地は現在の市郡町村名並びに大字名の順に記している。複数の大字にまたがる場合は、「・」で大字名間を区分している。

④分布図番号　分布図番号は第２章の城館跡分布図で用いた、分布図の挿図番号を記している。右・左は地図の見開き右ページに記載してあるか、左ページに記載してあるかを示している。

---

①番号　②城館名（よみがな）　③所在地（大字、大字・大字）　④分布図番号

2　城館跡概要における以下のとおり、城館跡に関する情報を記している。

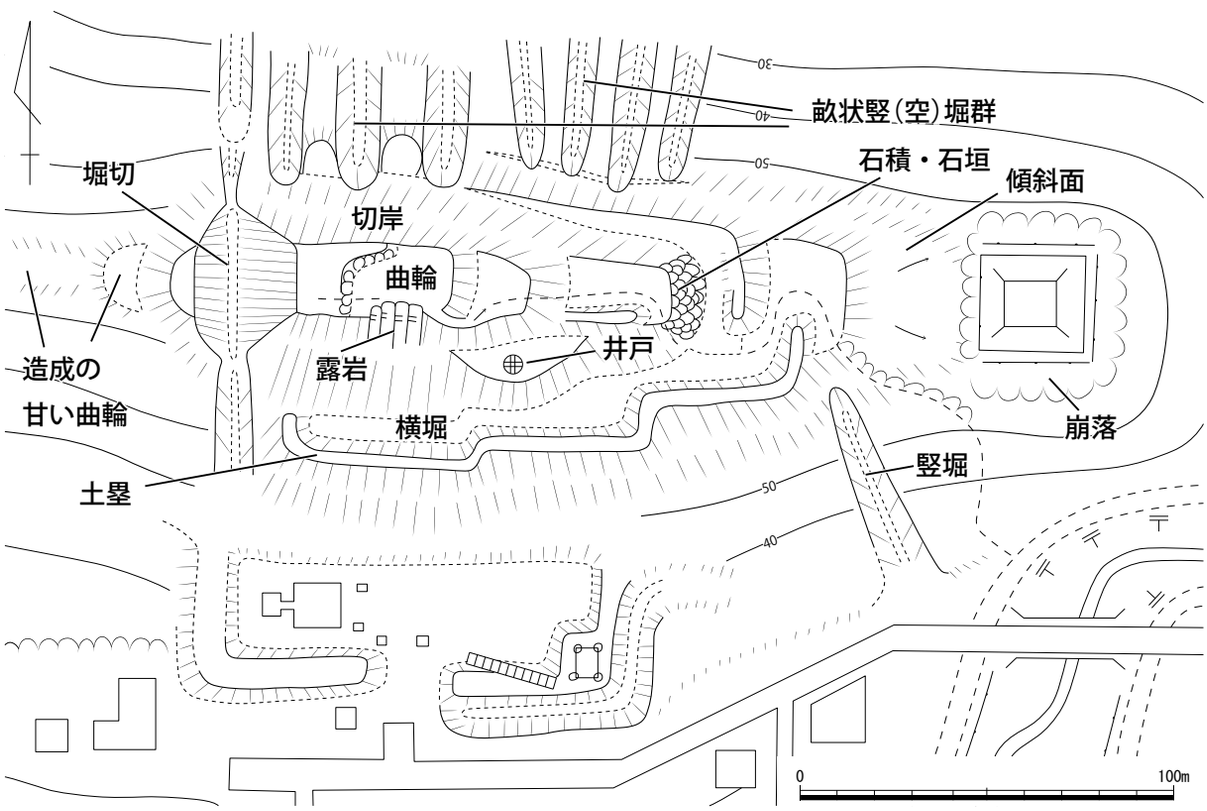
立地　城館跡に関する地理的情報を記す。他の城館との位置関係などについても記す。

概要　城館跡の縄張りに関する観察結果について記す。

文献・伝承　城館跡に関連する一次文献や参考文献の内容について記す。

あわせて執筆者の所見についても記載し、文責は文末の（　）内に示している。

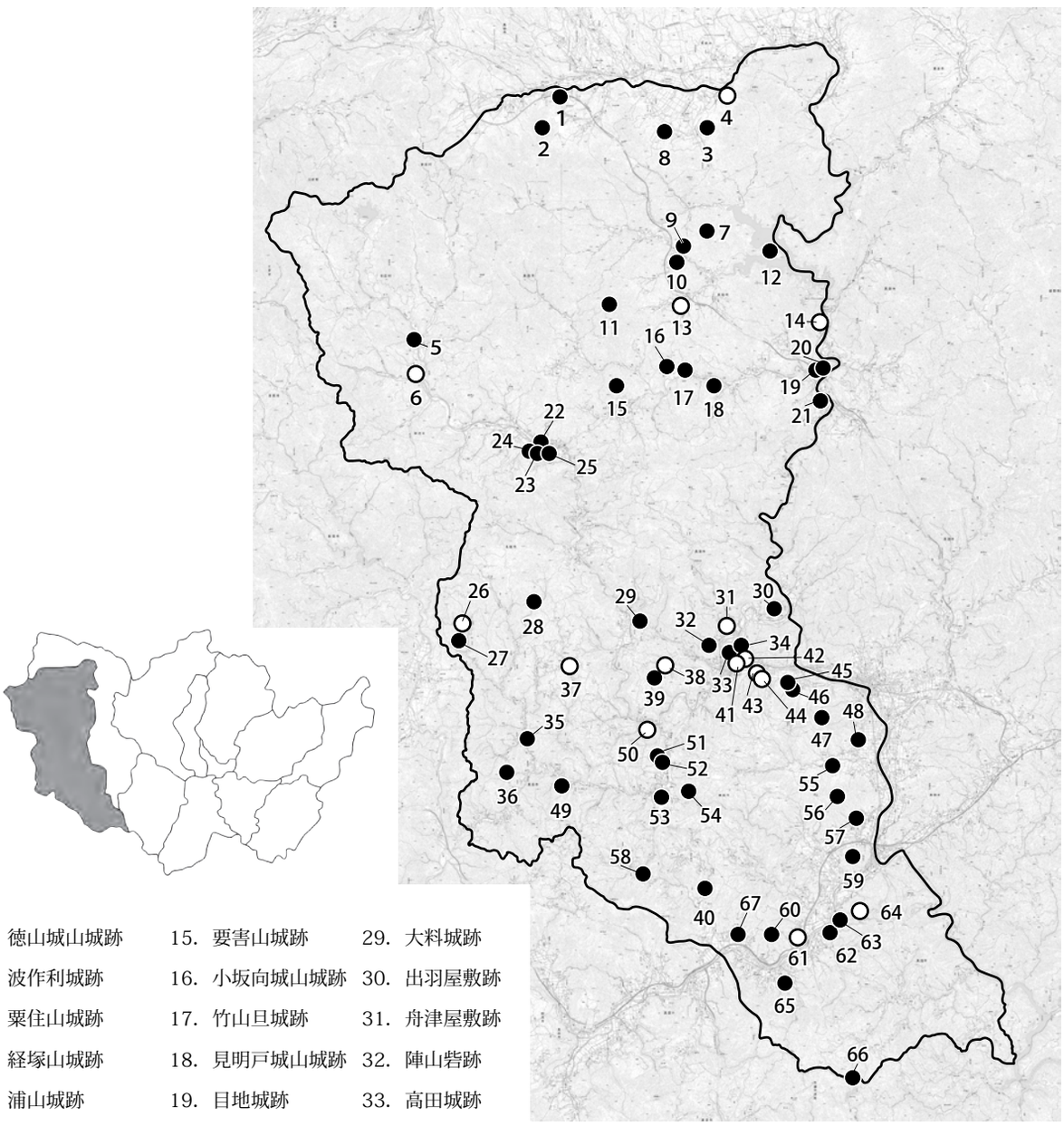
3　縄張り図に記載している遺構等の表現は下図のとおりであるが、製作者により異なる場合もある。



第３図　縄張り図凡例（『京都府中世城館跡調査報告書』を参考に作図）

※各節先頭ページ城館位置図の凡例：●解説文の掲載あり　○第２章の一覧表のみ掲載

第１節　真嶋郡



1．徳山城山城跡
2．波作利城跡
3．粟住山城跡
4．経塚山城跡
5．浦山城跡
6．沢城跡
7．飯山城跡
8．間谷城跡
9．向立石城跡
10．立石城跡
11．城ヶ山城跡
12．釜戸原城跡
13．塚原城跡
14．大沼山陣所跡
15．要害山城跡
16．小坂向城山城跡
17．竹山旦城跡
18．見明戸城山城跡
19．目地城跡
20．藪谷山城跡
21．土居城跡
22．麓城跡
23．陣山城跡
24．陣山城跡
25．山根城跡
26．清谷城山城跡
27．岩明山城跡
28．臼水城跡
29．大料城跡
30．出羽屋敷跡
31．舟津屋敷跡
32．陣山砦跡
33．高田城跡
34．天神山砦跡
35．若代城跡
36．則行城跡
37．荒木屋敷跡
38．浅田城跡
39．浅田城跡
40．飯ノ山城跡
41．牧土居
42．阿波土居
43．梶原屋敷跡
44．殿土井
45．飯山城跡
46．惣七遺跡
47．金砕山城跡
48．月沢城跡
49．本山城跡
50．栩原城跡
51．会下山城跡
52．三堂坂城跡
53．鳶乃森城跡
54．月田城跡
55．野田屋敷跡
56．宮山城跡
57．城山城跡
58．佐引城跡
59．注連山城跡
60．蜂ヶ城跡
61．植木構跡
62．石ヶ城跡
63．真木ヶ城跡
64．十六城跡
65．栗原城跡
66．都我布呂城跡
67．城山城跡

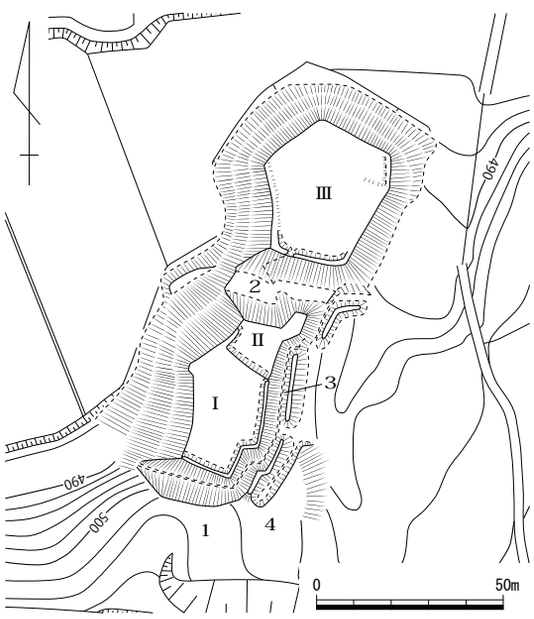
第４図　　真嶋郡城館位置図

1　徳山城山城跡（とくやまじょうやま）　真庭市蒜山西茅部　＜市指定史跡＞　地図１右

立地　城は、旭川に向かって北へ突き出した台地先端に立地する。北及び西側は比高差 10 m以上の急崖で、東側は旭川に注ぎ込む谷川が北流する。

概要　南側尾根続きに幅約 10 m、深さ約 4.5 mの堀切１を掘削し城域を画する。南辺から東辺にかけて高さ約１mの土塁がある曲輪Ⅰは、東辺をほぼ直角に屈曲、西辺中央を突出させている。曲輪Ⅰから約１m低い曲輪Ⅱは、幅約 20 m、深さ約５mを測る堀切２に向かって北辺東端を突出させる。五角形を呈する曲輪Ⅲは、その南辺に高さ１mの土塁、東・西辺に土塁の痕跡を残す。曲輪Ⅰ・Ⅱの東側には、堀切１と一体化した横堀３を開削する。この横堀３の前面には高さ２m弱の土塁を築き、さらにその東に横堀４を設けるなど、東側からの攻撃に対して入念な防御施設が備えられている。

文献・伝承　『真庭郡誌』では、波作利城主岩倉権頭の家老徳山将監の屋敷としている。　（小嶋）



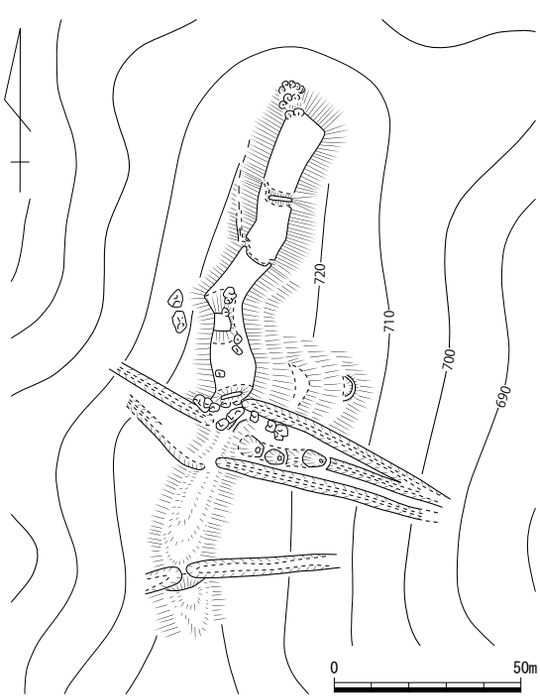
第５図　徳山城山城跡縄張り図（1/2,000）

2　波作利（はさり）城跡　真庭市蒜山本茅部・蒜山西茅部　＜市指定史跡＞　地図１右

立地　丸山（標高 1065 m）山塊の北部に位置し、北へ延びる尾根先端部に立地する。

概要　曲輪３面を設ける。曲輪には高さ約 1.5 mの土塁が２か所と、高さ約 1.5 mの櫓台が１か所ある。東へ張り出す小さな尾根下方に土塁囲みの小曲輪がある。堀切は３か所、東西両斜面に対の竪堀を設けるもので、北の２か所はやや喰い違う。東側斜面の竪堀の間には直径約１mの窪地を３段に造っているが、性格等不明である。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『作陽誌』は「波作利山」、『美作鏡』は西茅部村の「岩倉山城」城主不詳、『真庭郡誌』は、岩倉権頭晴時の居城で、晴時は赤松氏に従ったが、康安２（1362）年、山名時氏・師氏父子に攻撃され落城、権頭も討ち死にし、家老の徳山将監は山名氏に、後に赤松義則に属したとする。　（物部）



第６図　波作利城跡縄張り図（1/2,000）

3　粟住山（あわずみやま）城跡　　真庭市蒜山東茅部　　＜市指定史跡＞　地図２左・右

立地　旭川と粟住川の合流地点の南東側にあり、700 m級の山塊から西側に下った先端付近にある。山城のある箇所は、「城山」と呼ばれる独立丘陵状を呈しており、その頂部に位置する。蒜山高原の南東端部付近にある最も高所の場所になり、頂部からは同高原が一望できる。

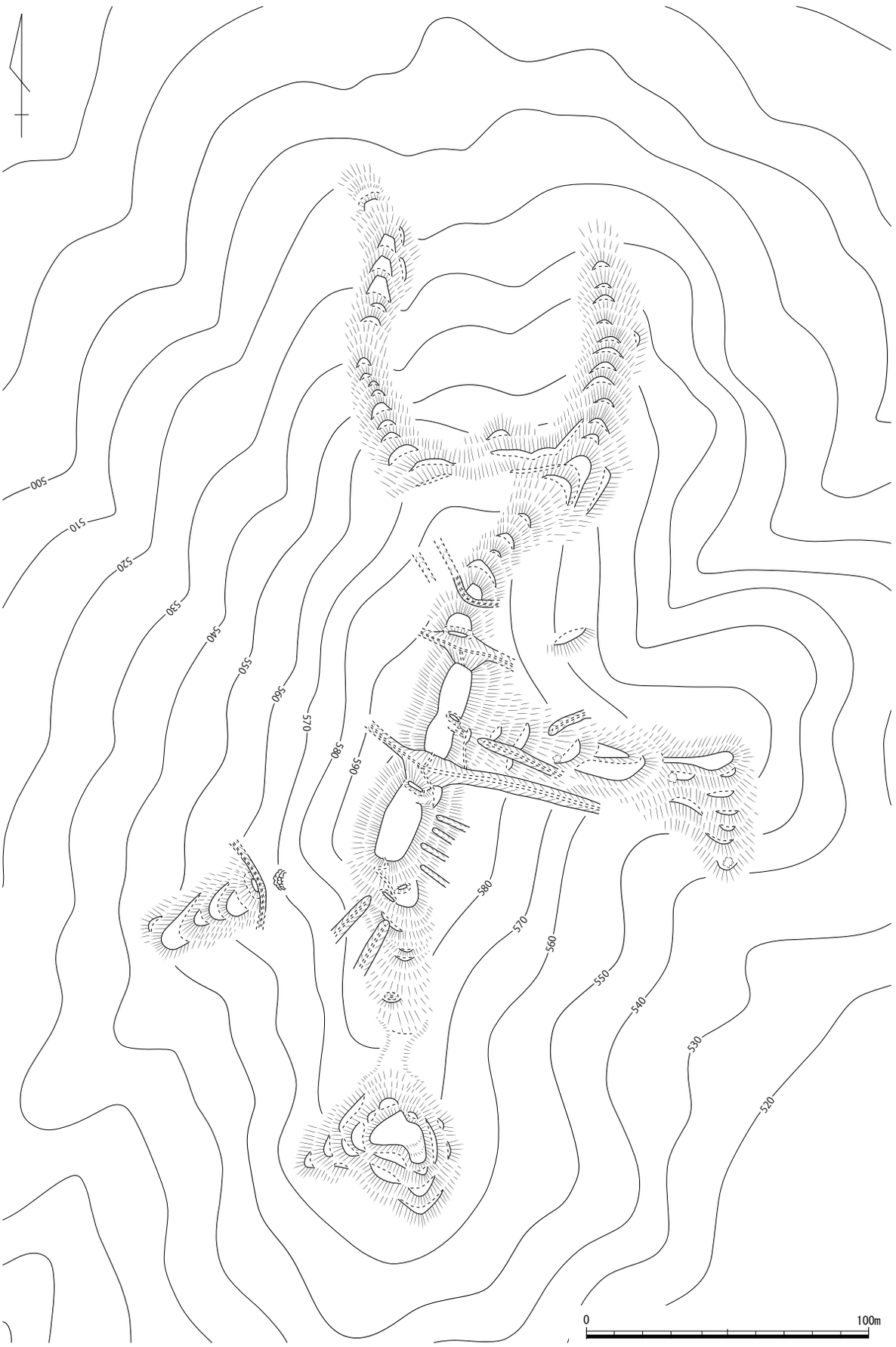
概要　南北方向に並んだ長さ約 25 mと約 35 mの２つの主郭を中心に、５方向に派生する尾根筋にそれぞれ曲輪と堀切を配する大規模な構造である。２つの主郭の間には幅約 20 mで深さが約７mに達する堀切によって仕切られる。南側の主郭には堀切に接した北側縁部に土塁が築かれ、その東脇に虎口状の施設を築いていた。北側主郭の北尾根筋には、堀切と土塁が２組ずつ続き、さらに長さ２～３m程の小さな曲輪が５面ほど続く。その下方曲輪からさらに２方向に尾根が分かれるが、どちらにも曲輪が続く。東側の尾根筋は、長さ２mほどの小さい曲輪が 11 面も続く。この曲輪群から約 40 m西側に尾根筋があり、長さ２m前後の小さい曲輪が８面続いた後、５mほど下って小さい曲輪が２面と長さ５m前後の曲輪が３面続いていた。その先は比較的傾斜がなだらかであり、本来はこの尾根筋を入口として意識し、主郭へは一旦東側の尾根筋に折れてそこから登った可能性が考える。北側主郭の東側へ延びる尾根筋には、３～４mほどの曲輪が３面続いた後、幅が 20 mほどのやや大きな曲輪が２面続く。さらに南側に折れて１～２mほどの小さな曲輪が６面ほど続いていた。南側主郭から南東側へ伸びる尾根筋には、U字状の堀切と土塁で仕切った後、長さ４～５m、幅７～８mほどの曲輪を４～５面連ねていた。南側主郭の南側は、長さ８m、幅 10 mほどの曲輪を１面配し、さらに小さい曲輪を３面ほど配する。そのさらに南側の尾根筋頂部幅 20 mほどの大きな曲輪を配する。この曲輪は主郭の出丸的な役割を果たしたと考えられ、周囲に３面ほどの腰曲輪が配される。

本城は、全長 300 mを超える大規模な施設である。また主郭を２つ配し、派生する尾根筋全てに曲輪を配する重厚な造りでもあった。蒜山地域で最も大きな城郭であり、地域の拠点的な位置付けであった可能性が高い。

文献・伝承　築城時期や城主などの記載はない。『作陽誌』では、津山城の粟角矢倉を当山の材木で造ったとされる。（文献 133）　（小林）

写真３　遠景（西から）

写真４　南側主郭からの眺望（南東から）



第 7 図　粟住山城縄張り図（1/2,000）

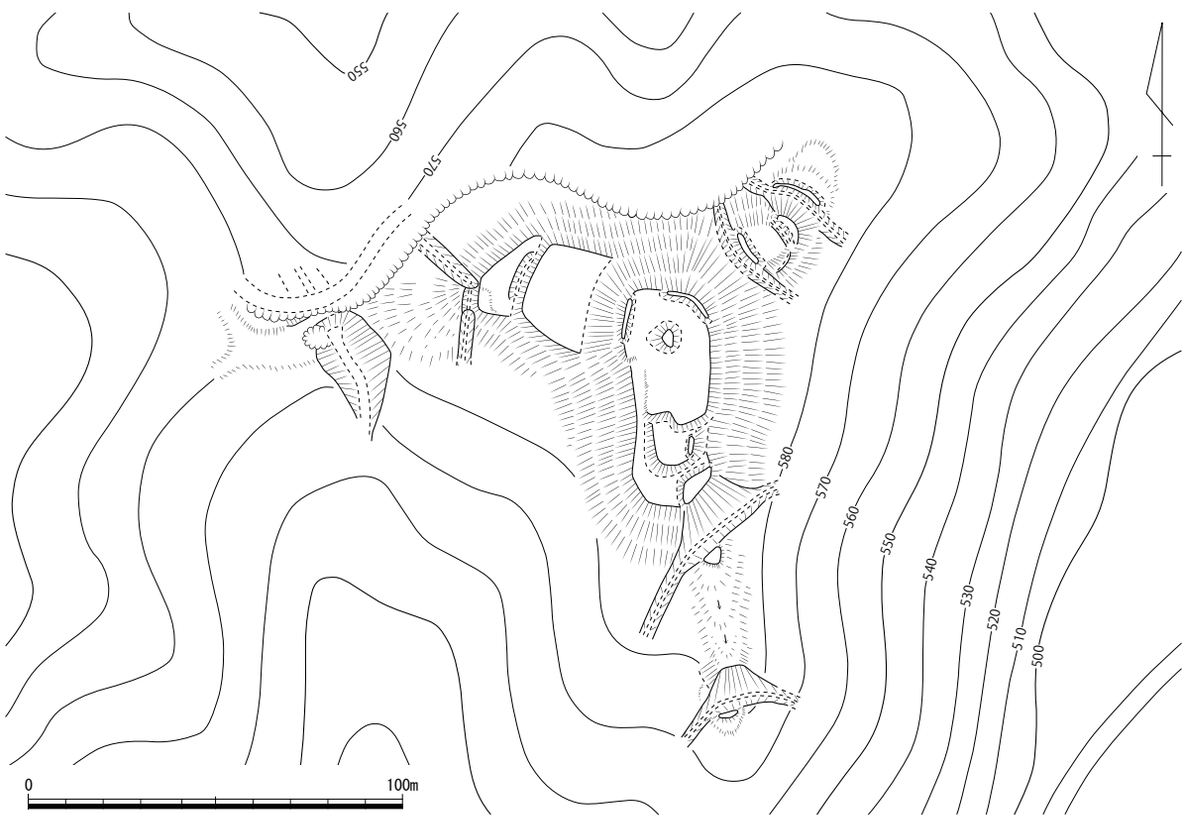
5　浦山（うらやま）城跡　　真庭郡新庄村　　地図４右

立地　南北に走る新庄川の西側付近に位置する。標高 850 m級の手火山から東に下る尾根筋の先端付近で、標高は約 610 mである。山城の規模は、南北約 140 m、東西約 150 mである。

概要　頂部に主郭を置き、北東側と南側の２方向に派生する尾根上と、山側に当たる西側の３方向にそれぞれ曲輪を築く構造である。主郭は長さ約 35 m、幅約 20 mの規模で、やや北側に寄った中央部に幅 10 m弱で高さ約 1.5 mの高まりを置く。曲輪が伸びる西側と北東側に、高さ 0.5 m程度の土塁を築く。また南側には虎口状の施設があり、その先に曲輪が２面連なっていた。この２面に曲輪先端には、土塁がそれぞれ築かれる。さらにその先に幅 10 m以上、高さ約 10 mの堀切と土塁、30 mほど離れてもう１条の堀切が存在する。主郭の北東側は、高さ 10 mほどの切岸があり、その先に２条の堀切と３つの土塁が配される。鞍部側にあたる西側には、高さ約 10 mの切岸の先に大型を含め２面の曲輪が配される。さらに堀切、竪堀と、幅約 20 m、高さ約 10 mを測る当山城の中で最大の堀切が築かれ、尾根筋を画して城域としていた。なおこの堀切には、土橋状の施設も付随する。

当山城の特徴は、派生する３方向の尾根筋に２条ずつの堀切が築かれることである。この内尾根筋を分断する形の西側は、山城の裏側に当たると考えられる。また南側は、２条の立派な堀切が存在するが、虎口状の施設の存在などから入口として意識していたと考える。

文献・伝承　『美作鏡』では城主不詳としている。『新庄村史』では、三浦氏の家臣内田源左衛門とその弟の市助、尼子氏に従った池田孫三郎などが城主になったとする。　（小林）



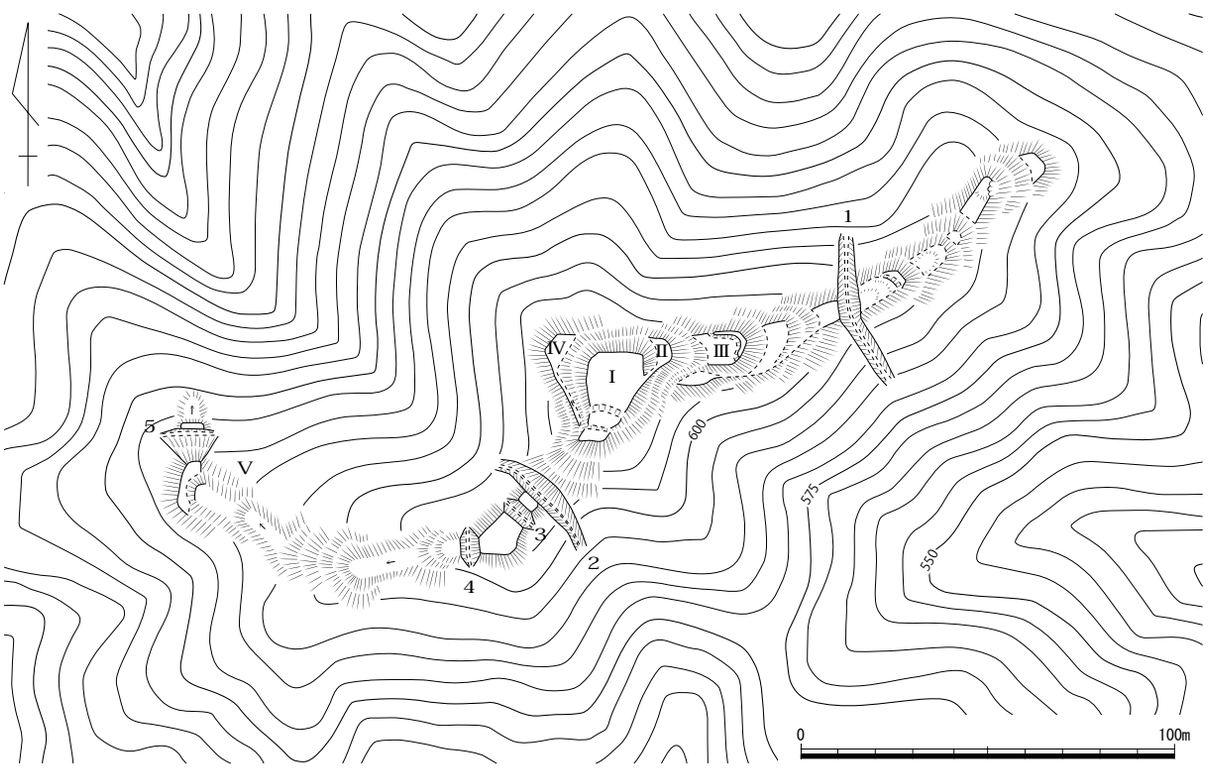
第 8 図　浦山城跡縄張り図（1/2,000）

7　飯山城跡（いいやま）　　真庭市藤森・黒杭　　＜市指定史跡＞　地図５左

立地　城は、藤森川と中山川が湯原湖へ注ぎ込む山田川と合流している地点を南東から見下ろす山塊の頂部に所在する。藤森集落を北西眼下に一望し、約 2.5km 東方に釜戸原城跡、約 3.5km 北方に粟住山城跡が位置している。

概要　山頂に高さ約４mの切岸を設けた曲輪Ⅰを配して主郭とする。多角形を呈するこの曲輪の南半には、切岸とは認めづらい２段の段差が存在する。曲輪Ⅰの東辺には、曲輪Ⅱからの通路が接続しているが、往時のものか判然としない。曲輪Ⅱと３m程比高差がある曲輪Ⅲ東辺には、幅１～２m、高さ約 50cm の土塁が残存する。幅約６m、深さ約４mを測る堀切１以東の尾根筋には、切岸が不明瞭なものや自然地形を残しているものもある曲輪を６面配している。曲輪Ⅳ南端から犬走り状の平坦面が曲輪Ⅰ南西辺に向かって続いている。曲輪Ⅰから南西側に延びる尾根筋は、急斜度に下ったのち、堀切２～４を連続して開削している平坦面が存在する。幅約７m、曲輪Ⅰとの比高差約 10 mを測る堀切２の両端は、竪堀として斜面へつづく。堀切４以西は人為的加工痕跡が認められない尾根筋が約 80 m続いたのち、この尾根筋先端を取り巻く曲輪Ⅴが築かれる。この曲輪からは北と西の２方向へ尾根筋が続いていくが、北方向のもののみに高さ約 50cm の土塁が北辺に遺存する堀切５が掘削される。

文献・伝承　『作陽誌』には、安芸盛重という人が居城していたとする。『二川村史』では、久米郡大井町中北下石井氏の家記に、正和５年に右京太夫正直が城主となると書かれていることを紹介し、天正７（1579）年頃は毛利方の武将杉原盛重が城主であったと記す。　（小嶋）



第９図　飯山城跡縄張り図（1/2,000）

8　間谷（まや）城跡　　真庭市蒜山東茅部　　地図２左

立地　南の山塊から南東へ延びる舌状の尾根先端部に立地。

概要　宅地の中に、一辺約 40 mの方形を呈する畑地がある。その周囲は宅地や道路の造成によって改変を受けていると推定されるが、切岸状となっており、周囲より２～３m高く突出している。畑地北縁に長さ約 30 m、基底幅約３m、高さ 1.5 ～２mの土塁が残存する。土塁の北側に、尾根上を東流する水路が沿っており、幅約 2.5 m、深さ最大で 2.5 mを測る。土塁上面から水路底面の比高は約５m。この水路を堀としていた可能性がある。

文献・伝承　『川上村史』に、この場所の地名が「城」であり、土塁・壕の記述がある。　（物部）

写真５　遠景（南から）

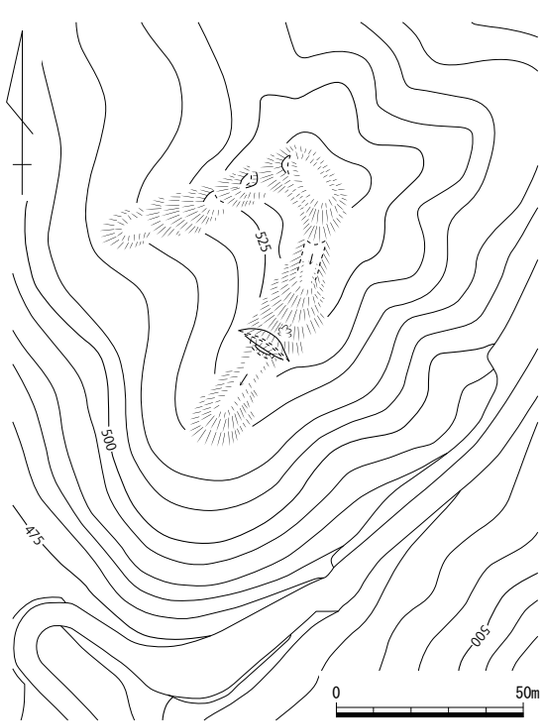
写真６　北東角部（北東から）

9　向立石（むこうたていし）城跡　　真庭市粟谷　　地図５左

立地　南東へ流れる粟谷川へ南から柳谷川が合流する地点の小さな平地の北側に小さな谷があり、その谷奥にある尾根先端部に立地する。

概要　尾根高所は自然地形であり、西と南に下がる尾根筋に遺構がある。西の尾根筋には小さな曲輪が３面確認された。いずれも尾根筋の北側にのみ切岸を造っている。南の尾根筋には曲輪１面、堀切１条、土塁１つを確認した。曲輪は東西の切岸が甘く、南の尾根筋に切岸は設けていない。堀切は幅約５m、深さは北側で約 2.5 m、南側で約 30㎝を測る。堀切の南に土塁があり、現状で高さ 30㎝程度である。他にも、頂部や尾根筋に平坦面があるが、自然地形と考えられる。なお、西に谷を挟んだ尾根筋には、遺構を確認できなかった。

文献・伝承　故事来歴未確認。　（物部）



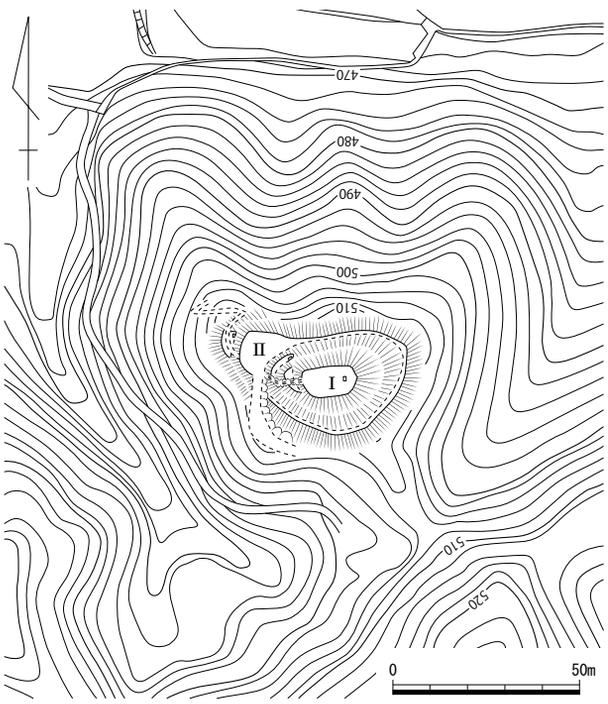
第 10 図　向立石城跡縄張り図（1/2,000）

10　立石城跡（たていし）　　真庭市種　　地図５左

立地　城は、柳谷川が栗谷川に合流する地点を北方眼下に望む尾根の先端頂部に立地する。1.8km 北東には、飯山城跡が所在する。

概要　比高約 50 mの頂部に約４mの切岸を備えた曲輪Ⅰを配して主郭とする。この曲輪は、その東端に小祠が祀られており、それに伴う改変が著しい。北西尾根筋に設けた曲輪Ⅱの南辺東端は、後世の通路によって削平されている。曲輪Ⅰを取り巻いている幅約１mの犬走りは､曲輪Ⅱ北辺東端に接続している。緩やかに下がって鞍部に至る南東尾根続きには、防御施設が認められず、自然地形を残している。

文献・伝承　城主等は不明であるが､「城ヶ山ノ内柿ノ木谷」などの城館関連地名が、城範囲及びその周辺に残っている。　（小嶋）



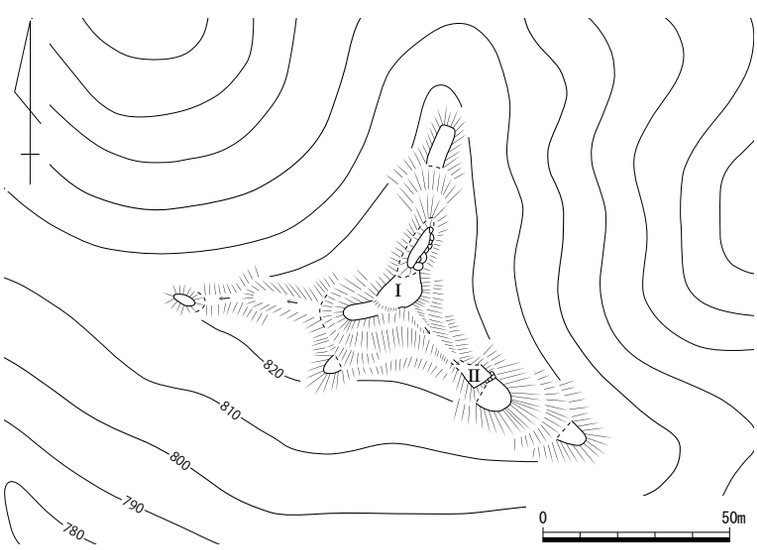
第 11 図　立石城跡縄張り図（1/2,000）

11　城ヶ山城跡（じょうがやま）　　真庭市種　　地図５左

立地　城は､種の集落を西から見下ろす標高 820 mの山頂に立地する。東側への眺望に優れ､約 4.5km 北東の飯山城跡や約４km 南東の見明戸城山城跡を視認する。

概要　頂部及びそこから４方に延びる尾根筋に曲輪を配した城である。逆「く」字を呈する曲輪Ⅰは２～３mの切岸を備えている。この曲輪の北側には、巨大な露岩を取り込んだ高まりが認められる。曲輪Ⅰから南東に約５m下った所に築かれた曲輪Ⅱ南東辺には、意図的かどうか判然としなかったが、大きさ１m弱の巨石が３石並ぶ。西に延びる尾根筋には、自然地形の平坦地を挟んで小曲輪を設けている。

文献・伝承　城主や故事来歴が伝わっていない城であり、詳細は不明である。　（小嶋）



第 12 図　城ヶ山城跡縄張り図（1/2,000）

12　釜戸原（かまどはら）城跡　　真庭市小童谷　　地図５右

立地　現在は湯原湖に向かって西から半島状に突き出ている尾根頂部に所在している城であるが、湯原ダム建設前は、旭川沿いの街道が真庭市黒杭から犬畑峠を経て真庭市蒜山東茅部に至る街道と分岐する地点を北方に見下ろしていた。約 2.5km 西に飯山城跡、約３km 南東に湯山城跡が所在する。

概要　尾根の先端頂部に築いた曲輪Ⅰは、その南半に一辺約 10 m、高さ約 50cm の方形の高まりが認められる。北西辺中央部には曲輪Ⅵ北端から曲輪Ⅰの北端を回り込む通路が、また北西辺南端には、曲輪Ⅳからの通路が取り付く。南西辺にも曲輪Ⅱの側面を通るように屈曲させた曲輪Ⅲから続く通路が接続しているが、後世に改変を受けている可能性も捨てきれない。曲輪Ⅰの北東側に配置されている曲輪Ⅴ・Ⅵには、両曲輪間の横移動を防ぐためか曲輪Ⅴ北西辺に高さ約 50cm の土塁が残存していた。曲輪Ⅲから南に延びる尾根筋には、突出部を設けた曲輪や堀切１を掘削し、敵の侵入を防ぐ。同じく東に延びる尾根筋には、曲輪１面と南側が竪堀として斜面へ続く堀切２を配している。一方曲輪Ⅳ以西の尾根続きには、堀切ではなく曲輪を連続して配して守りを固めている。一辺約 10 m の方形の高まりが中央部に所在する曲輪Ⅷの南辺には、曲輪Ⅶ・Ⅸ間を結ぶ通路が認められる。曲輪Ⅶと曲輪Ⅳの比高差は、約 2.5 m を測る。なお､曲輪Ⅰ・Ⅷにある方形の高まりは、昔この場所に祀られていたと伝えられる銅山神社に伴うものかもしれない。

第 13 図　釜戸原城跡縄張り図（1/2,000）

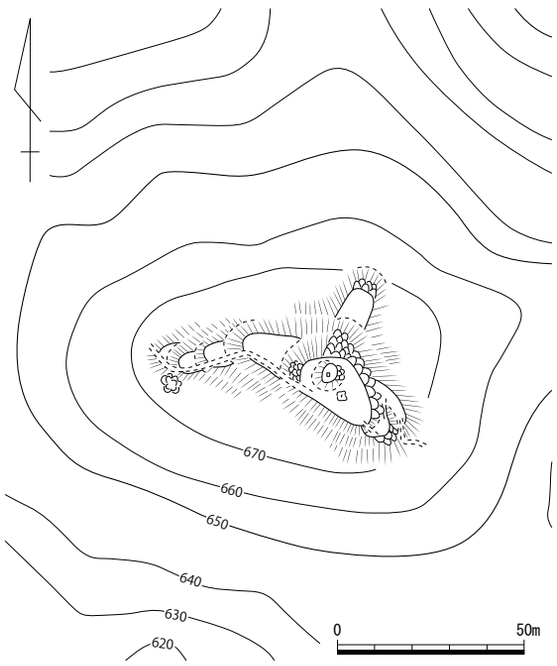
文献・伝承　近世地誌類には記載がなく、城主や築城時期などは不明である。　（小嶋）

15　要害山城跡（ようがいざん）　真庭市黒田・鉄山　地図５左

立地　鉄山川と黒田川が合流する地点の西側に位置する。標高 600 mを超える山塊の中でも、独立峰の頂部に所在する。

概要　頂部に主郭を置き、その東西と北側の３方向に曲輪を配する山城である。主郭は長さ約 25 m、幅約 15 mを測り、中央部より西側に幅５m、高さ１mほどの高まりがあり、祠が所在していた。主郭の周囲には２～３m程の露岩があり切岸としていた。主郭の西側は曲輪が４面連なり、最大で長さ約 10 mを測っていた。東側は曲輪が２面のみで、西側より小規模であり、しかも主郭からの切岸が高い。当山城は規模小さく、また主郭にある高まりの存在から、櫓台などを置いた見張りを主とする施設であったと考える。

文献・伝承　『村誌美甘』などでは、大森采女や大盛左馬介が在城したとする。　（小林）



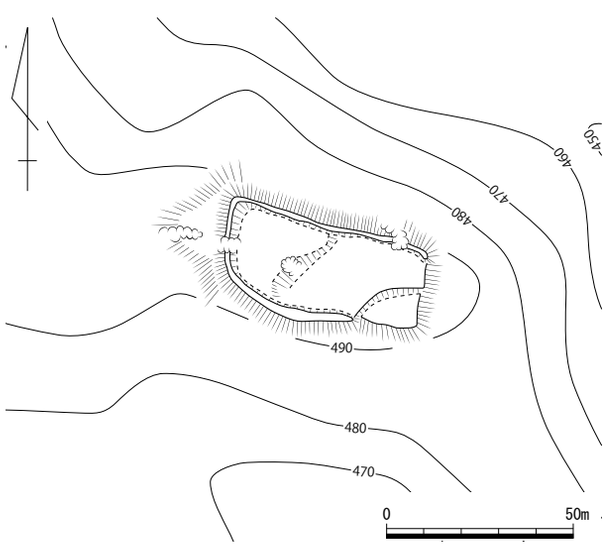
第 14 図　要害山城跡縄張り図（1/2,000）

16　小坂向城山城跡（こさかむかいしろやま）　真庭市見明戸　地図５左

立地　城は、出雲街道と伯耆街道を東西に結ぶ鉄山川沿いの街道を北から見下ろす尾根の先端頂部に立地する。鉄山川を挟んだ約１km 南東には、見明戸城山城跡が所在する。

概要　道路建設に伴い岡山県教育委員会が平成 13・14 年度に発掘調査を実施した城で、現在は東端を除き消滅している。比高差約 60 mを測る頂部に曲輪を１面配したのみの単郭の城で、曲輪東辺及び南辺東端を除く縁辺には高さ 0.5 ～１mの土塁が残存していた。曲輪内は西から上・中・下段と３段に造成されており、上段と中段は北側で約１mの段差があるものの、南に行くにしたがいその段差は解消する。遺物が出土しなかったため、城の存続時期は不明である。

文献・伝承　『作陽誌』に見明戸村小坂山に屯跡あり、『湯原町誌』に小坂屯所と記載された城跡に比定される。　（小嶋）



第 15 図　小坂向城山城跡縄張り図（1/2,000）
文献 143 を加筆

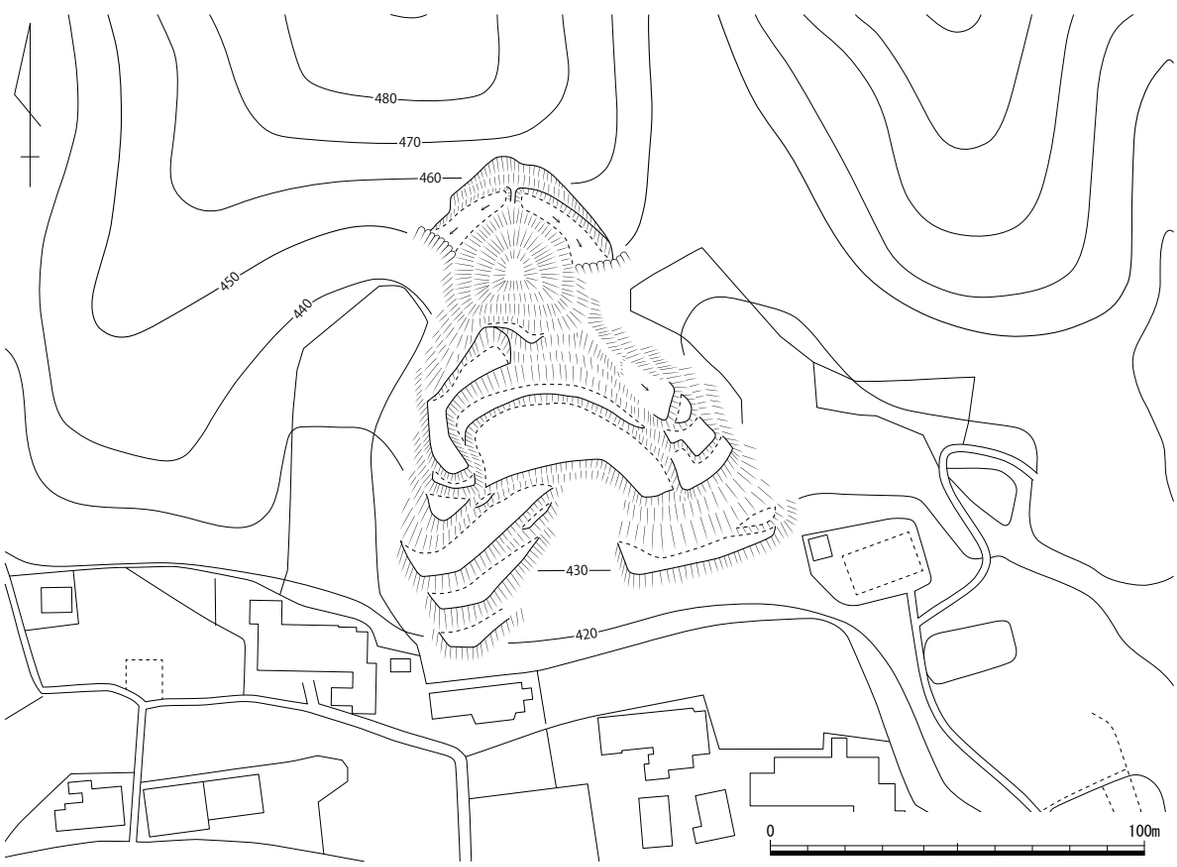
17　竹山旦城跡（たけやまだん）　　真庭市見明戸　　地図５左

立地　東流する鉄山川沿いの谷底平野に北から張り出す小さな尾根端部に立地する。

概要　尾根鞍部を大きく半円形に掘り切り、山塊と分離している。幅約 20 m、北側の切岸は高さ約 11 mを測る。堀底は現状で幅４～６mの平坦地で、高さ 0.5 ～１mの土橋を設けている。尾根高所は小さく、曲輪の造成は認められない。そこから尾根が二叉に分かれて南方へ下り、傾斜が緩やかになるあたりから、西尾根と東尾根に各６面、谷部に２面の曲輪がある。切岸は１～６mとしっかりしており、最下段の曲輪は集落のすぐ背後に位置する。西尾根の曲輪は東の谷部へ長く延びるものが多く、谷部下段の曲輪は約 50 × 15 mと広い。これらの曲輪の内、下方に配された山裾に近い曲輪は後世に造成された畑地かもしれない。曲輪等が所在する当該地の小字は「竹山旦（且）」、南山裾に「馬場」「馬場ノ上」「馬場道ノ上」「馬場屋敷」、その南の平地に「堀ノ内」などの城館関連地名がみられ、山裾平地までが一体となった城跡と考えられる。

文献・伝承　不明である。　（物部）

写真７　堀切（南西から）



第 16 図　竹山旦城跡縄張り図（1/2,000）

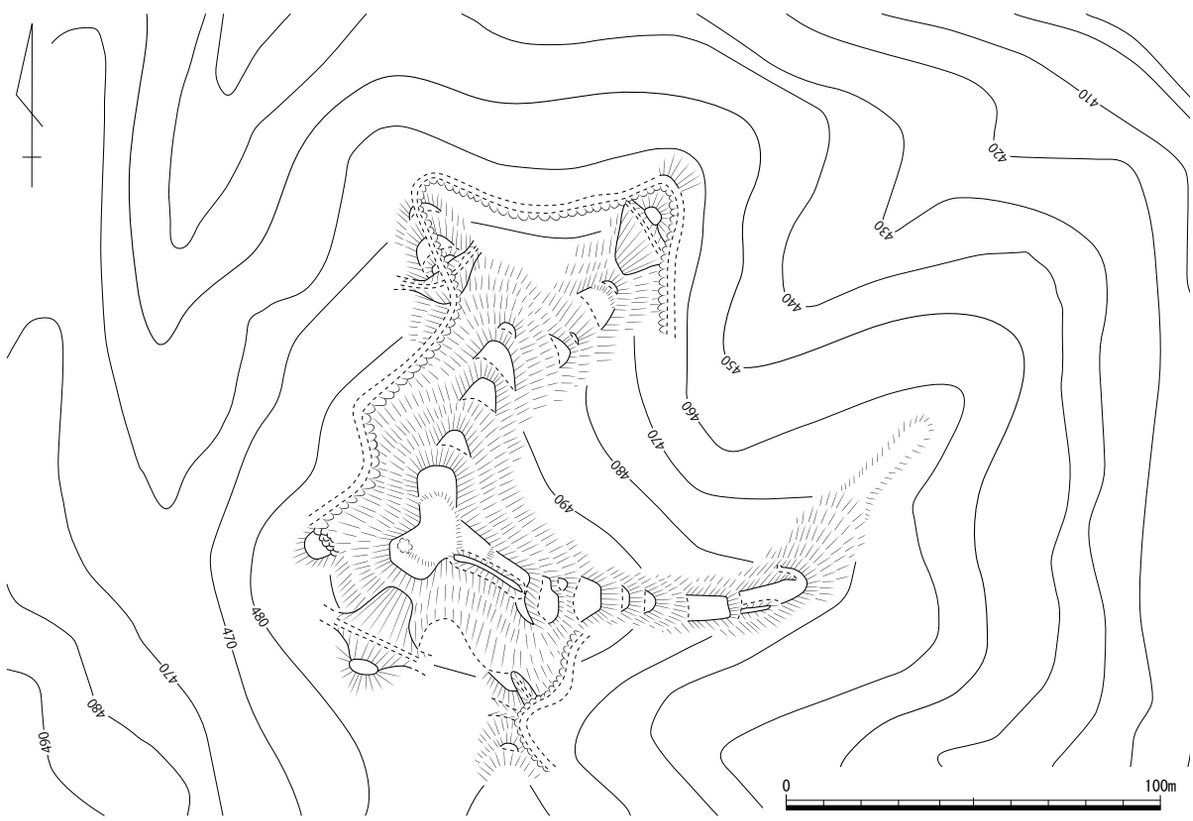
18　見明戸城山城跡（みあけどしろやま）　　真庭市見明戸　　地図５左

立地　東西に流れる鉄山川と、南から北へ流れる山根川との合流する地点の西側に近接する。標高500 m級の山塊から派生した尾根先端付近の頂部に所在する。

概要　山頂付近にある主郭を中心に、大きくは２方向に下る尾根筋に曲輪を連ね、山側は堀切によって画する山城である。山城の大きさは東西約 170 m、南北約 140 mの中堅規模であるが、それぞれの切岸が高く、当時は山頂にそびえ立つ印象を与えたであろう。

頂部にある主郭は、長さ約 30 m、幅約 10 mの規模で、中央付近の幅約 20 mと１段高い造りである。主郭から東側に伸びる曲輪群は、７面続き、さらに北東方向に下った箇所にも平坦面が存在する。主郭から数えて１面目と７面目の南側端に土塁が築かれていた。２～３面間と４～５面間の切岸が約４mを測り高い。主郭から北側へ伸びる曲輪群は、それぞれ４～５mと高い切岸を持つ３面の曲輪が続いた後、北東方向と北西方向の２方向に分かれる。北東方向は２面の曲輪、堀切、土塁と続く。それぞれの切岸は４mで、堀切は幅 10 m以上ある。北西側は、堀切、土塁、曲輪２面と続くが、植林道により一部が破損していた。さらに主郭から西側にも、かなり下った箇所に１面のみ曲輪が存在する。山側に当たる主郭の南側には幅約 20 m、高さ約 15 mの当城最大の堀切が存在し、これにより城域を画していた。さらに東側曲輪群１面目の南側にも堀切状の痕跡があるが判然としない。

文献・伝承　『作陽誌』には「鷂山」とあり、地元では「城山」と伝わる。落城時に、城主を含め７人が自刃した「七人の御崎」を祀った「粟田城」であったとも伝わる。（文献 133）　　（小林）



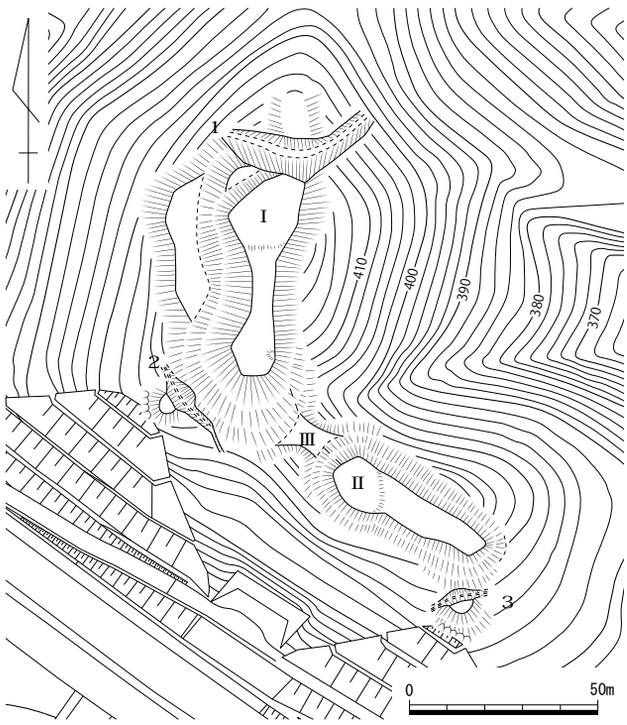
第 17 図　見明戸城山城跡縄張り図（1/2,000）

19　目地（めじ）城跡　　真庭市豊栄　　地図５右

立地　城は、鉄山川が旭川と合流する地点を北から見下ろす尾根先端頂部に立地する。

概要　平地からの比高約 70 ｍを測り、「Ｌ」字を呈する尾根筋に曲輪を配している城で、北半に自然地形の段を残す曲輪Ⅰは、南北 50 ｍ以上の規模を測り、南端東側には虎口状の凹みが認められる。曲輪Ⅰから南東に延びる尾根筋には、約５ｍ下がった尾根鞍部に築かれた曲輪Ⅲを挟んで約 40 × 10 ｍの曲輪Ⅱを構える。北側尾根続きには、幅 10 ｍ以上、深さ約４ｍの堀切１を開削し、守りを固める。また、曲輪Ⅰ西端及び曲輪Ⅱ南端から延びる小尾根にも堀切２と堀切３を設けて、敵の侵入を防ぐ。

文献・伝承　『作陽誌』には、昔、佐山氏が陣したと記す。『湯原町史』には、明治初年に古伊部焼の瓶を発掘したと記載され、その写真を掲載している。　（小嶋）



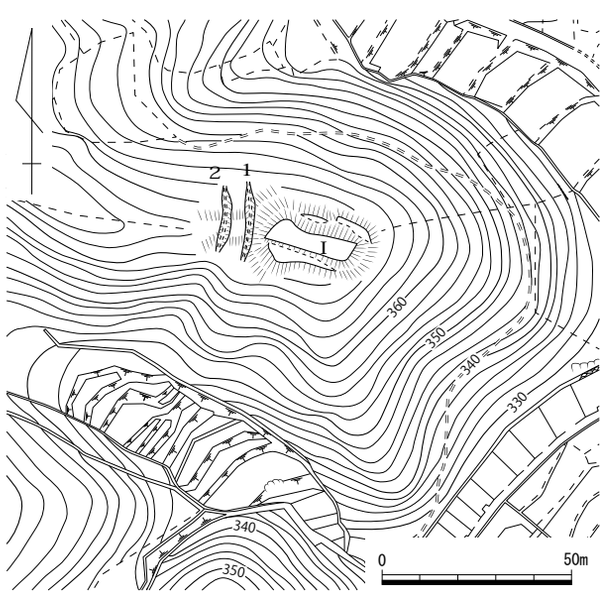
第 18 図　目地城跡縄張り図（1/2,000）

20　藪迯山（やぶさこやま）城跡　　真庭市豊栄　　地図５右

立地　城は、目地城跡と同一山塊に所在し、東へと延伸する尾根上に立地する。

概要　平地からの比高約 40 ｍを測る尾根の先端頂部に配した曲輪Ⅰを主郭とし、その周囲に帯曲輪状に小曲輪を３面設けている。西側尾根続きには、２条の堀切を掘削しており、断面「Ｖ」字を呈する堀切１は、全長 22 ｍ、幅 2.5 ｍで、曲輪Ⅰと堀底面の比高差約４ｍを測る。平成 11・12 年度に発掘調査が行われ、その際に陶製の硯、砂岩製の砥石のほか、鉄鏃や用途不明鉄片などが出土したものの、時期を決定できるものは認められない。

文献・伝承　築造時期や城主名などは伝わっていない。　（小嶋）



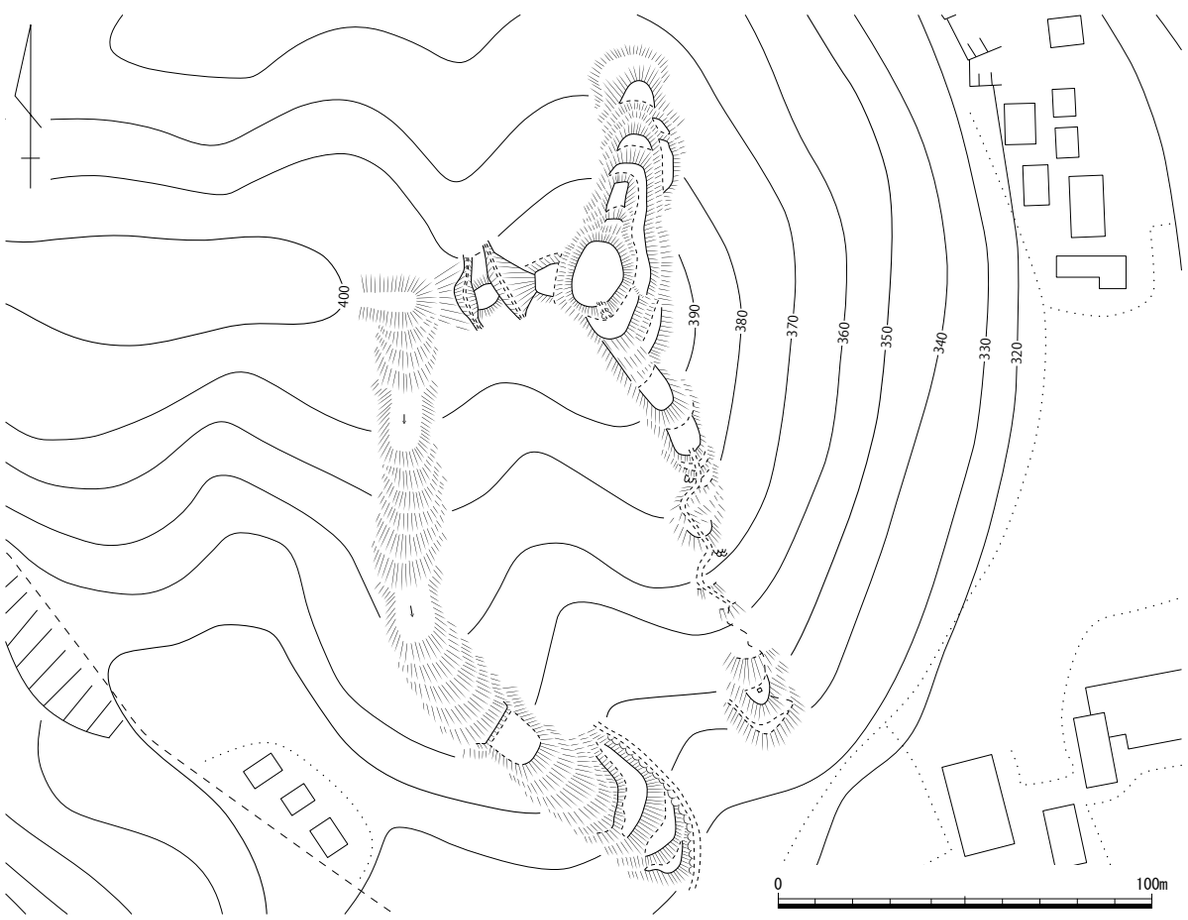
第 19 図　藪迯山城跡縄張り図（1/2,000）
文献 155 を加筆

21　土居（どい）城跡　　真庭市禾津　　地図５右

立地　南流する旭川の西側に近接して存在しており、米子道湯原 IC の西側付近に当たる。標高 950 m級の櫃ヶ山から続く山塊から東へ向けて派生した尾根が、旭川と接する端部に位置する。

概要　当城は、全長が約 120 mの小さくまとまった山城である。山塊から下った尾根端部付近の頂部を主郭とし、そこから南北２方向へ派生し下る尾根筋を利用している。尾根の鞍部側には、幅約 10 mと５mを測る２条の堀切が配され、城域を画している。主郭は、尾根頂部に築かれ、約 20 × 15 mほどの規模である。そこから南北方向にそれぞれ曲輪を配しているが、北側は５面ほど続き、南側も５面ほど続く。北側曲輪群は、長さが約５～ 10 mを測るものがほとんどであり、中には主郭東側まで回り込み、腰曲輪状になるものもある。主郭の東側の防備はこの腰曲輪のみで、これは急斜面に当たる箇所であることが要因であろう。南側の曲輪群は、５面ほど存在するが、長さが約５～ 10 m ほどのものがほとんどである。主郭から１面目の曲輪へは、通路状の施設が付随している。また２面目の曲輪は、全体が斜面状になっていて、３面目の曲輪に続いている。通路的な機能であったと考えられる。

文献・伝承　城主等は不明である。『作陽誌』には土居村に陣跡があると書かれており、当城がその城になる可能性がある。　（小林）

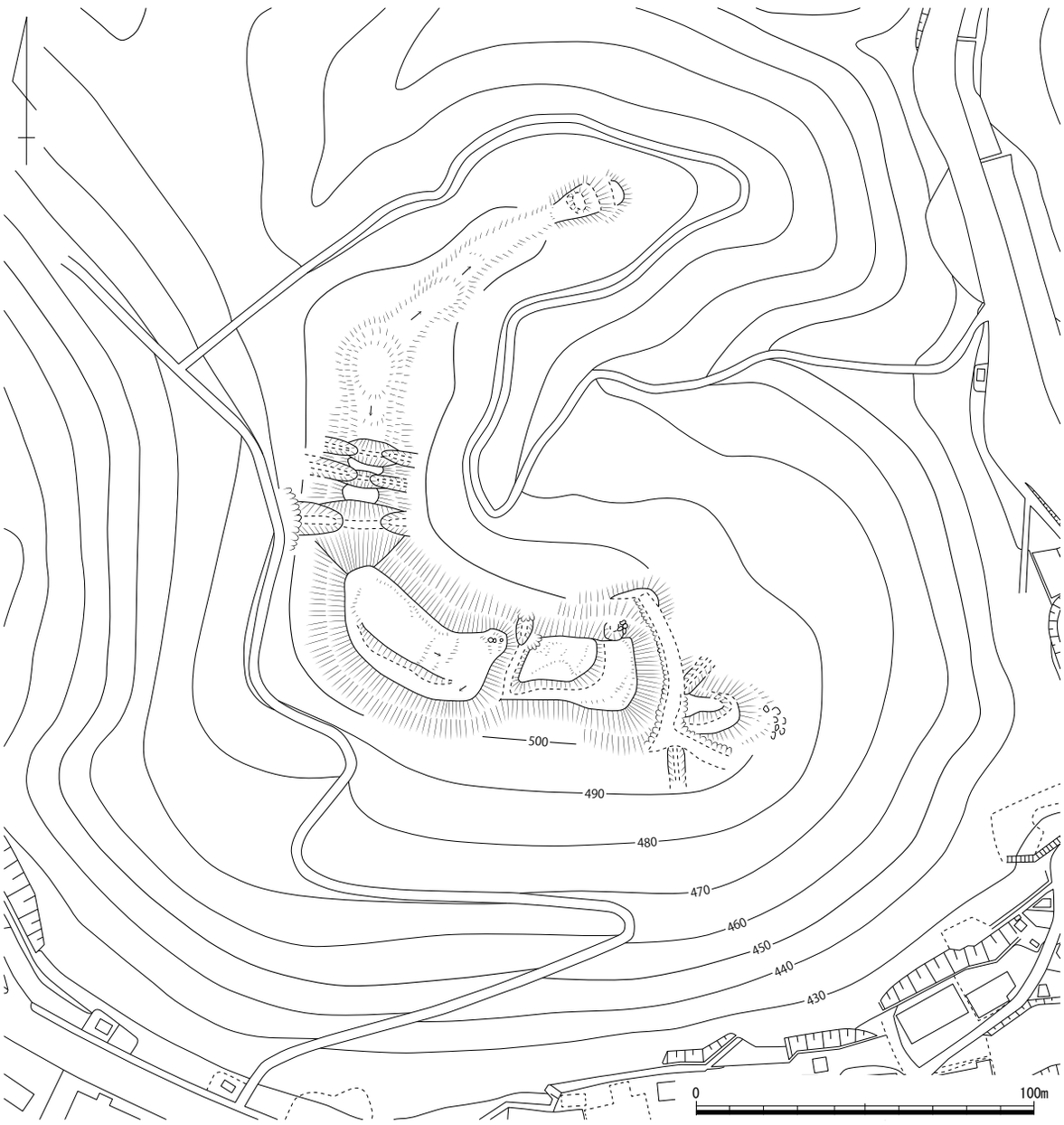


第 20 図　土居城跡縄張り図（1/2,000）

22　麓城跡（ふもと）　　真庭市美甘　　地図 10 右

立地　美甘平野の西部に位置し、東流する新庄川へ向け突き出した尾根先端に立地する。新庄川の流域を良く見通せる。

概要　高所の主郭から東へ下る尾根筋に曲輪を 4 面配し、主郭背後の北側の尾根に連続する 3 条の堀切を設け、その先約 100 m離れた北東方向に続く尾根先端に小曲輪 2 面を設ける。主郭は 50 × 20 mの広さがあり、南～東にかけて 1 m程低い平坦部がある。東側の切岸は高さ約 6 mあり、直下には現状で深さ 50㎝の堀切とその東に 20 × 13 mの曲輪、その南～東側約 2 m下方に「 L 」字状の曲輪があり、北側斜面に井戸の可能性がある窪みがある。その曲輪の東約 10 m下方に、林道による削平があるが、堀切と曲輪と「 L 」字状の曲輪が同様に配置されている。主郭北側の切岸は堀切底面から



第 21 図　麓城跡縄張り図（1/2,000）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会

約 10 mの高さがある。中央の堀切は深さ約 1.5 m、北側の堀切は深さ約３m、堀切と堀切の間は盛り土をして土塁としている。

文献・伝承　『美作国の山城』によると『作陽誌』に、天文年中（1532 ～ 1555）、城主三浦美濃守忠近は尼子修理太夫晴久と戦って敗北、城下の石に座して自刃したと伝わり、この石に触れると腹痛を起こす等祟りがあったので、祠を建てて祀ると祟りが止んだと言う。また、これより先、忠近は岩井谷村（真庭市岩井谷）の浅井屻で柴田助丞と戦って助丞らを討ち、柴田党６人の墓が同村にあるとされる。『村誌美甘』は、今でも麓地区には武士が自決した「腹切石」や「女中墓」が、河田地区には三浦忠近が自刃したという「腹切岩」があるとする。　（物部）

写真８　遠景（東から）

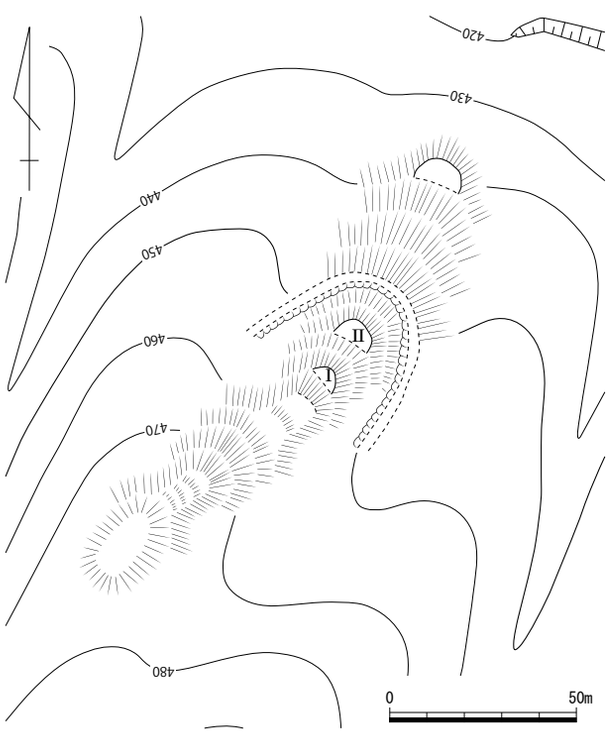
写真９　主郭（北西から）

23　陣山（じんやま）城跡　　真庭市美甘　　地図 10 右

立地　城は、山根城跡が所在する山塊の北へ樹枝状に延びている尾根筋に立地し、出雲街道を北側に見下ろす。約 250 m西側には 24 陣山城跡が、新庄川を挟んだ北側の山塊には麓城跡が所在する。

概要　尾根の先端頂部は、約 20 × 10 mを測る自然地形の平坦地で、そこから約 15 m下がった尾根筋上に約３mの切岸を備えた曲輪Ⅰ・Ⅱを配したのみの城である。山根城跡と一体化した運用を行っていたためか、背後の尾根続きには堀切等の防御施設が認められない。なお、曲輪Ⅱから約 40 m北東側に石碑の基壇と思われるものが残存する平坦面が認められるが、曲輪かどうか判然としない。

文献・伝承　築城時期や城主名などの故事来歴は、伝わっていない。　（小嶋）



第 22 図　陣山城跡縄張り図（1/2,000）

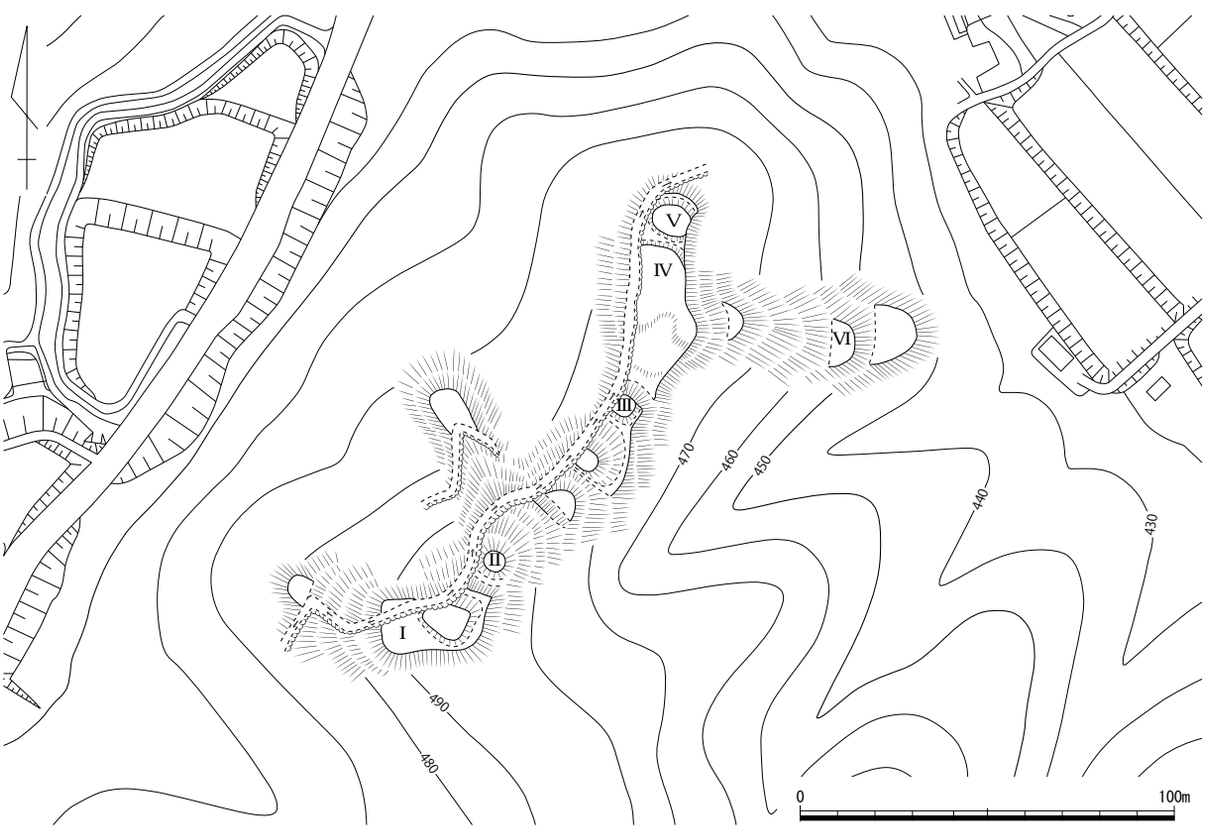
24　陣山（じんやま）城跡　　真庭市美甘　　地図 10 右

立地　城は、山根城跡が所在する山塊から新庄川に向かって樹枝状に延びる尾根筋のうち、最西端の尾根筋に所在する。麓城跡とは新庄川を挟んで対面し、出雲街道を北方眼下に一望する。

概要　林道によって一部削平を受けているものの、保存状況が良好な城である。尾根筋頂部に略長方形の曲輪Ⅰを配し、その中央部には方墳とも想定される平面約 12 × 8 m、高さ 1 ～ 1.5 mを測る高まりが所在する。この曲輪から北東に下がる尾根筋には、周溝を持つ古墳を取り込んだ曲輪が階段状に築かれている。曲輪Ⅱは径 10 m弱、高さ約 1.5 mの円墳、曲輪Ⅲは径約 10 m、高さ約 1 mの円墳、曲輪Ⅴは径約 12 m、高さ約 1.5 mの円墳を利用する。曲輪Ⅳから東側に小さく延びる尾根上には、２面の曲輪を築き、守りを固める。小祠が祀られている曲輪Ⅵは、曲輪Ⅳとの比高差が 15 m弱である。曲輪Ⅰから南東側尾根続きは、約 4 mほど緩やかに下がって幅約 5 mの鞍部となるが、堀切などの防御施設は一切設けられていなかった。

写真 10　古墳を利用した曲輪Ⅴ

文献・伝承　築城時期や城主名など、伝わっていない城である。　（小嶋）



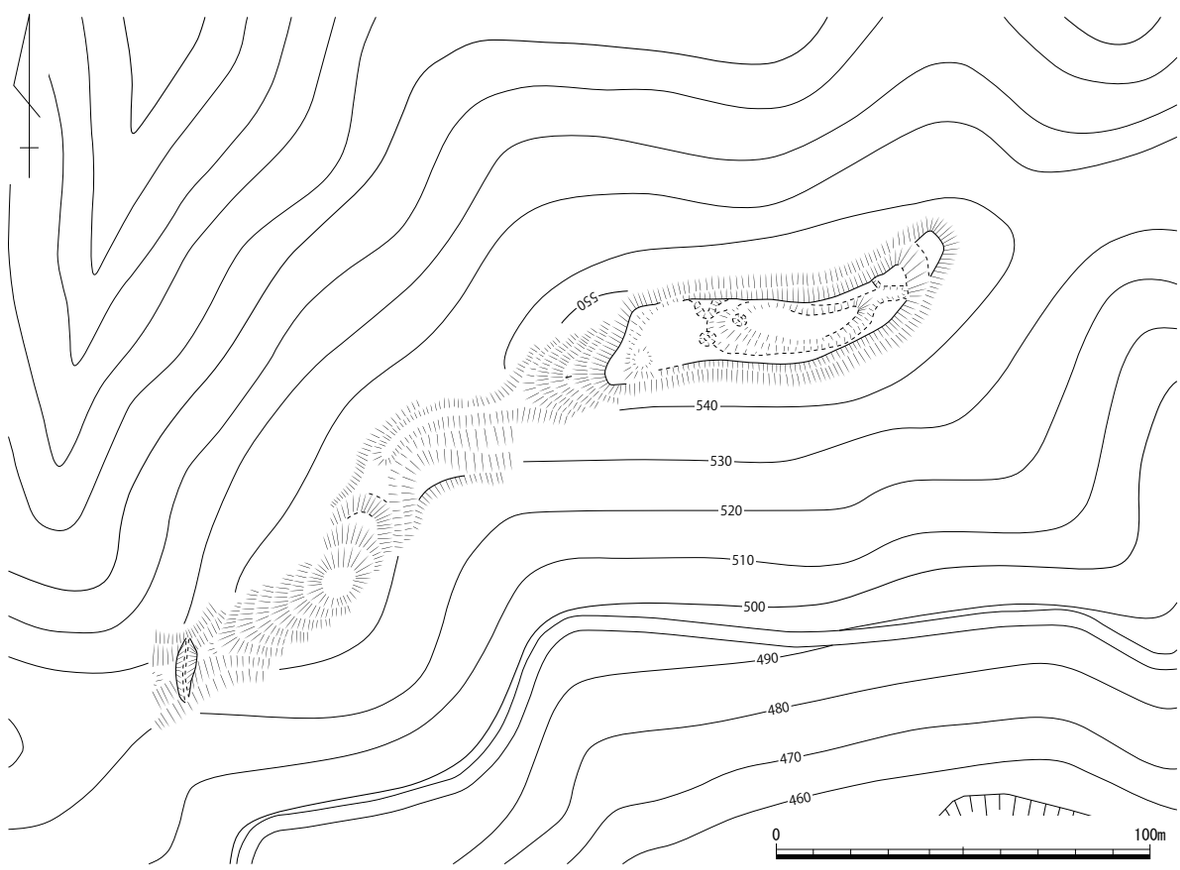
第 23 図　陣山城跡縄張り図（1/2,000）

25　山根（やまね）城跡　　真庭市美甘　　地図 10 右

立地　東流する新庄川の南岸の山塊山頂に立地する。新庄川の上流・下流域を見通し、新庄川を挟んで北北西約 600 mに麓城がある。

概要　東西に連続する曲輪３面と西側尾根筋の堀切で構成されている。高所にある中央の曲輪は東西約 70 m、南北 12 ～ 16 mを測る。中央部に 0.5 ～ 1 m高い部分を残し、その上面は平坦であるが、周囲の斜面は自然の傾斜を多く残す。その西側緩斜面には直径約３m、深さ約 30㎝の円形の窪地が２か所確認されるが、性格等不明である。東側の緩斜面部は稜線部分を通路状に残しながら、僅かな段差をつけた平坦面を巡らせている。北側・南側には犬走りを設け、東西の平坦部を繋いでいる。この主郭の東西両側には、0.5 ～ 1 m下がった位置に小さな曲輪をそれぞれ 1 面ずつ配している。曲輪群から西へ約 140 m離れて、山稜線の鞍部に堀切が 1 条確認された。幅約 5 m、深さ約 2.5 mを測る。尾根線に若干斜行して掘削されているが、山道等が確認されなかったことから堀切と判断した。堀切から曲輪群までの尾根筋には小さな高所と鞍部が見られる。大半は自然地形であるが、人為的と考えられる平坦部が２か所ある。

文献・伝承　1994 年の分布調査では、麓城攻略の際、尼子勢が陣を敷いたと伝えられているとする。『美作国の山城』では、遺構の状況から、尼子勢の麓城攻略以降に整備された可能性を指摘し、麓城と併せて街道の往来を押さえる役割を果たしたものと考えられるとする。　（物部）



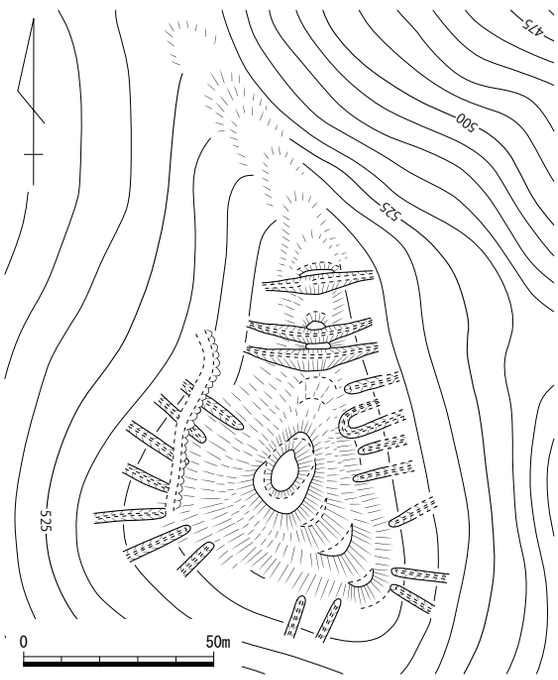
第 24 図　山根城跡縄張り図（1/2,000）

27　岩明山城跡（がんみょうやま）　　真庭市清谷　　地図 10 右

立地　月田川の源流付近の西側に位置する。700 m級の山塊から南東方向に派生する尾根筋の頂部付近に立地する。山城の規模は、東西約 90 m、南北約 110 mを測り、周囲は尾根鞍部方向以外は急峻な地形を呈している。

概要　頂部にある主郭は、規模が小さく径 10 m弱しかない。この主郭南東側に向けて、３面ほどの曲輪が配されるが、いずれも長さ２～３m程で小さい。曲輪の間も自然地形を利用してなだらかに下っており、一見小規模な山城に思える。しかし尾根鞍部に向けた主郭の北側には、３条の堀切と土塁を配しており、また曲輪群より斜面をやや下った箇所から、城をほぼ全周するように 17 本の竪堀が築かれていた。主郭や曲輪の規模に比べて、堅固な守りの城館である。

文献・伝承　『作陽誌』に記載がある。　（小林）



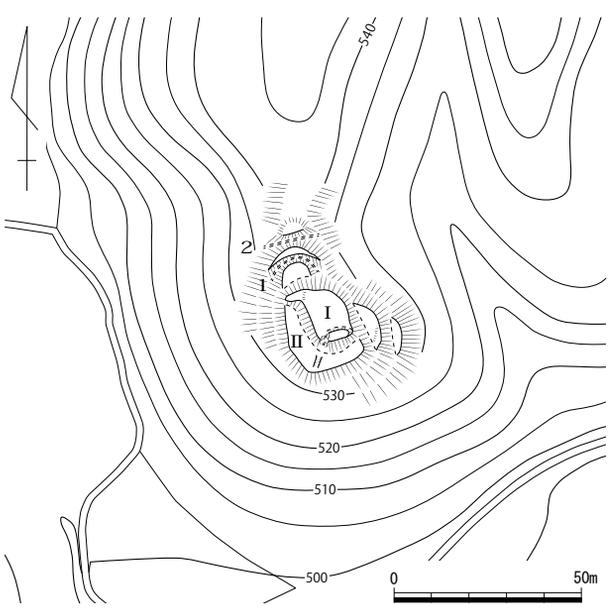
第 25 図　岩明山城跡縄張り図（1/2,000）

28　臼水城跡（うすみず）　　真庭市古呂々尾中　　地図 10 右

立地　城は、真庭市下岩で月田川に合流する首尾川の上流部、狭小な谷平野に向かって北から張り出す尾根の先端部に所在する。周囲は山に囲まれており、首尾川の上流方向のみ視界が開けている。

概要　標高 530 mの頂部には、約 15 × 10 mを測る曲輪Ⅰと、その南・西側を取り巻く曲輪Ⅱを配置している。この曲輪Ⅰには、「L」字形の土塁が築かれていると伝えられていたものの、今回の調査では南辺のみに土塁痕跡が認められた。頂部から東へ延びる尾根筋には、約 2.5 mの切岸を備えた小曲輪を２面配して守りを固めている。尾根続きの北側には、腰曲輪を１面配し、それを取り巻くように堀切１を開削する。堀切２は、幅約４m、深さ約２mの規模を測る。

文献・伝承　『作陽誌』では、古呂々尾中村に「屯聚之迹」があると記載されており、この城が該当するかもしれない。　（小嶋）



第 26 図　臼水城跡縄張り図（1/2,000）

29　大料城跡（だいりょう）　　真庭市神代・本郷　　地図 11 左

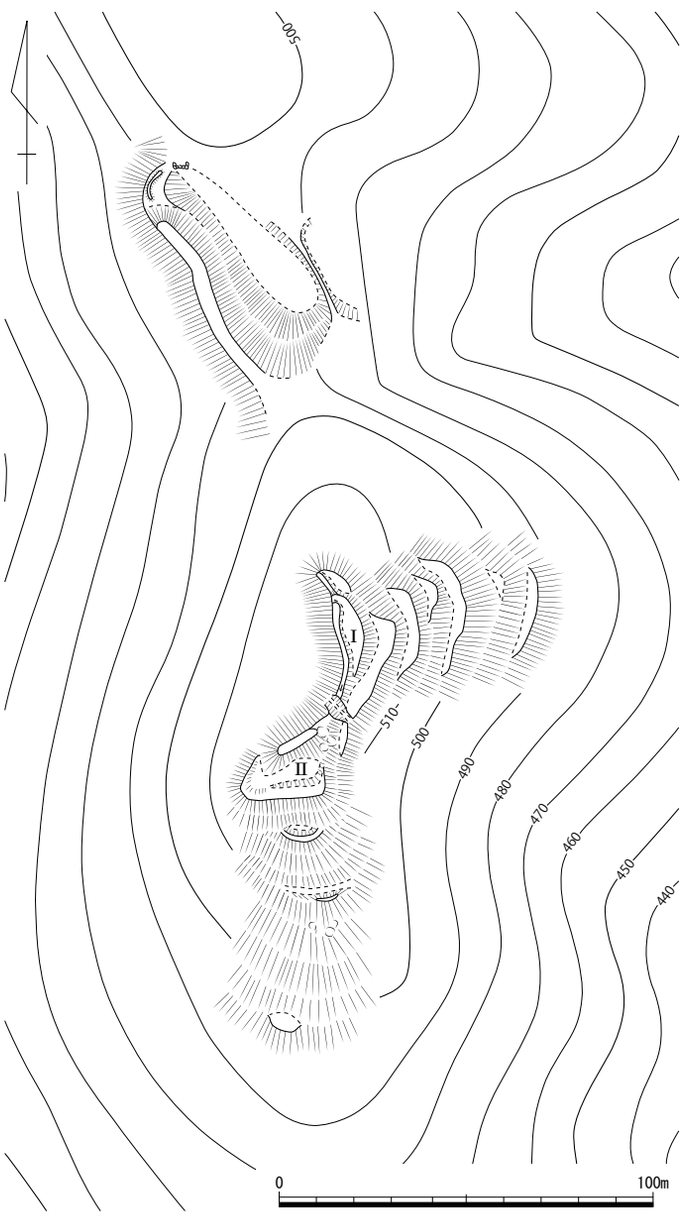
立地　城は、新庄川左岸の標高約 520 mの山頂部に立地する。南眼下に出雲街道が通り、真庭市神代の集落を西方に一望する。約３km 南東に高田城跡、約２km 南に浅田城跡が所在する。

概要　西辺に土塁状の高まりが認められる曲輪Ⅰを頂部に築いている。ただしこの土塁状の高まりについては、その西側が急涯となっており、さらに『改訂岡山県遺跡地図』に「山頂の大規模な山崩れにより、主郭等は一部のみ残存」と記載されていることから、主郭の東縁部が土塁状に残存しているものかもしれない。頂部から東に延びる尾根筋には狭長な曲輪を５面配しているが、植林段との判別が難しい。曲輪Ⅰ・Ⅱ間には、礫を集積して高さ約 30cm の土橋状の高まりを中央部に築いている堀切状の溝がある。曲輪Ⅱ西辺にも土塁状の高まりが認められるが､曲輪Ⅰと同様な状況かもしれない。なお、城館関連遺構と断定できないものの、曲輪Ⅰから 30 m以上下った北側の鞍部には、西辺に上面幅４m、高さ約４m以上の土塁、東辺に高さ約１mの土橋状の高まりが築かれた平坦面が所在する。土塁の西側は急崖となっている。

文献・伝承　『作陽誌』には、城主不詳と記載されている。『勝山町史』には、三浦方が詰めていたが、天文 17（1548）年、尼子氏によって落城したと記し、また神代側の城下には「大料くずれ」と呼ばれる墳墓が多く点在し、新庄川の右岸後方には川を隔てた大料城に対して尼子勢が陣を構えた「備後うね」と呼ばれる場所があると伝える。

（小嶋）

写真 11　遠景（西から）



第 27 図　大料城跡縄張り図（1/2,000）

30　出羽屋敷跡（でわ）　真庭市柴原　地図 11 右

立地　420 m級の山塊から、南に向かって派生する尾根先端部分に位置する。南接している旭川が、東から西へ向けて走る。

概要　尾根先端頂部に、東西長・南北長ともに約 25 mで方形の曲輪が存在する。この曲輪は北側から南側に向けてやや下ってはいるものの、ほぼ平坦な地形である。切岸が曲輪の東～南～西側の斜面３方向に見られ、1.5 m～２m前後の高さを持ち、比較的明瞭に造られたようである。曲輪の背後には、竪堀が１本存在する。この竪堀の西側端は、現在の山道の造成によって埋まっており、あるいは本来堀切として機能していた可能性がある。

この城館は曲輪が１面のみの小さな造りであるが、眼下に旭川の流域を見渡せる立地である。

文献・伝承　『作陽誌』は、三浦出羽守貞俊の屋敷としている。（文献 133）　（小林）

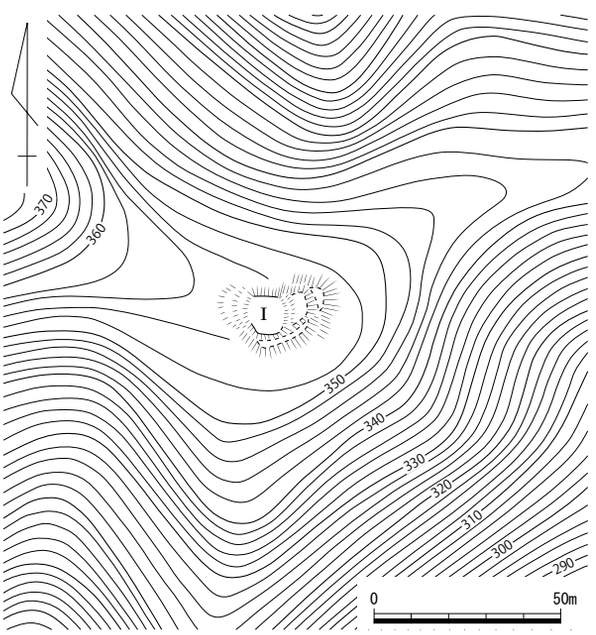
第 28 図　出羽屋敷跡縄張り図（1/2,000）

32　陣山砦跡（じんやま）　真庭市本郷・組　地図 11 左

立地　城は、旭川右岸の山塊から東に延びる尾根筋上に立地し、旭川の対岸に所在する高田城跡を西から見下ろす。

概要　尾根筋頂部に築かれた小規模な城である。曲輪Ⅰは北辺を除き切岸が不明瞭で、かつ自然地形を残す。北西側尾根続きには防御施設を備えておらず、鞍部に向かって緩やかに下がる自然地形である。なお、北東に延びる尾根筋の先端頂部付近に加工痕跡が認められる平坦地が存在する。

文献・伝承　『作陽誌』には、「陣山」として尼子の兵が高田城を攻める際に陣を敷き、山上には「屯跡」があると記す。『真庭郡誌』には、享禄年間に尼子晴久が高田城を攻撃する際に陣を敷いたと伝える。『勝山町史前編』には、尼子氏の本陣であった処に、陣山という字名が今も残っているとする。（小嶋）



第 29 図　陣山砦跡縄張り図（1/2,000）

33 高田（たかだ）城跡　　真庭市勝山　　＜市指定史跡＞　地図 11 右・18 右

立地　標高約 500 m級の山塊から西へ派生した尾根が、旭川に接した端頂部に位置する。「城山」「勝山」と呼ばれる２つの曲輪群からなる山城である。北から南へ流れてきた旭川が、「城山」に当たり西に曲がり、再び南へ折れ、「勝山」の南側を通り、東へ向けて久世方面に流れる。本城は、このように旭川が逆「コ」字に流れを変える内側に位置しており、３方を川に守られた天然の要害でもある。さらに「勝山」の南側には出雲道が通っていたと推定され、また新庄川が合流する地点にも当たる。古くから水運が盛んであったため、まさに当地域を代表する交通の要衝であった。当城の麓には、江戸時代になると勝山藩の本拠が置かれた。近年でも旧勝山町時代には町役場が、また現在でも真庭市役所勝山支所が置かれるなど、美作地域西部の拠点の１つである。

概要　「城山」「勝山」と曲輪群が２つあるが、中心は北側に位置する「城山」であり、主要な施設が集中している。

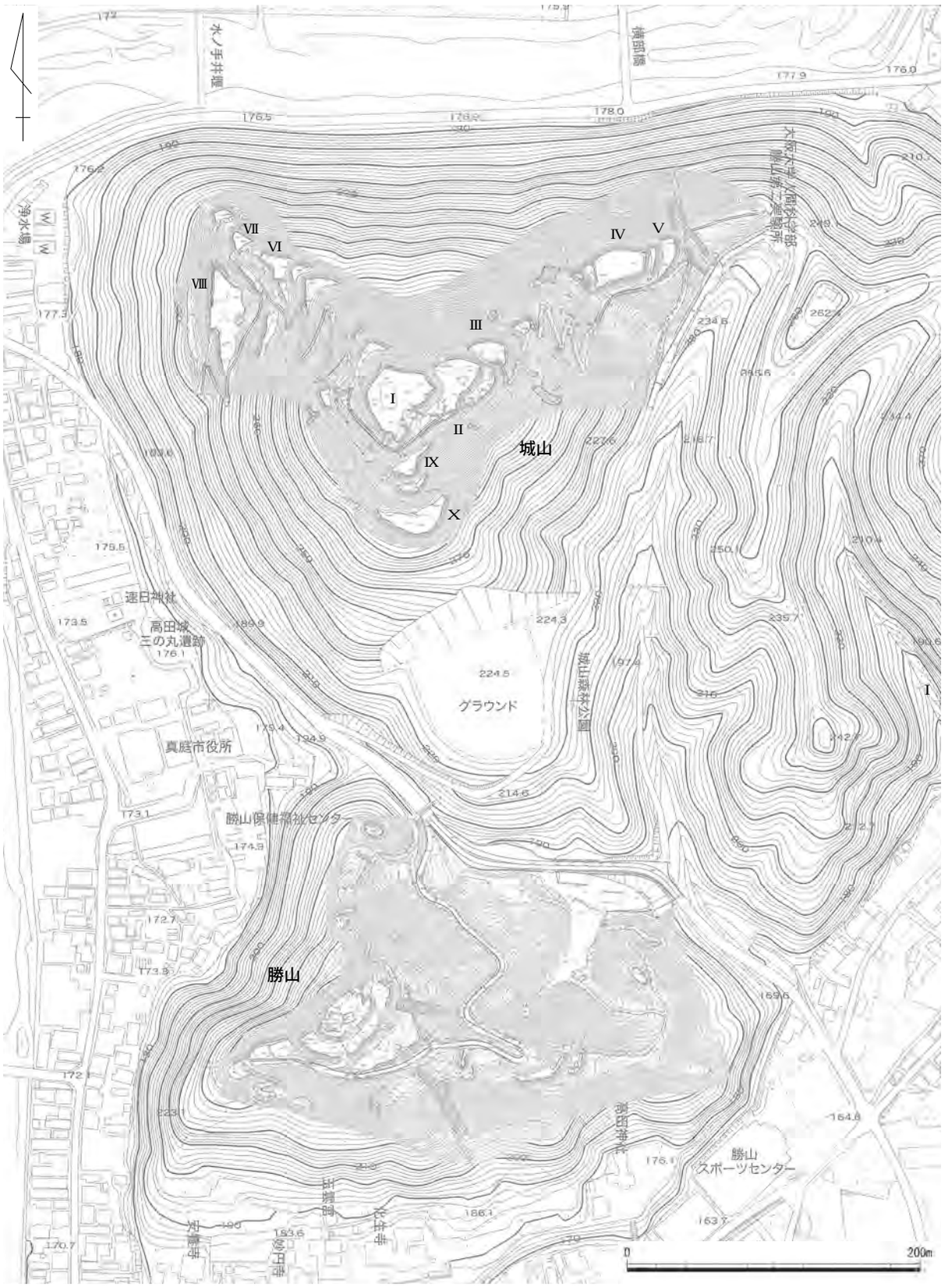
「城山」は、頂部の主郭から３方向に派生する尾根筋に曲輪を連ねる連郭式の山城である。西側尾根の鞍部に幅約 10 m、深さ約 10 mの堀切を配して城域を画しており、ここから測ると、この「城山」だけでも全長が約 350 mにも及ぶ。主郭（Ⅰ）は、長さ約 40 mにもなる広大な多角形を呈する。この主郭は部分的な発掘調査が数回行われる。その結果、礎石建物のものと想定される石列や、主郭南側の先端部分では虎口（第 32 図）が検出されている。遺物では、16 世紀後半～ 17 世紀前半の土師器、14 世紀後半と 16 世紀後半の備前焼、慶長年間の瓦などが見つかっている（第 35 図）。虎口は、周囲を石垣で囲み石段で構成されていた。検出時には石段上に不規則な状況で石が置かれており、波却時に置かれたもの推定された。この結果、少なくとも主郭付近は、16 世紀後半に改築がなされ、17 世紀前半に波却されたと考える。この虎口は西側を向いており、主郭の北西方向に続く尾根筋の小道に繋がっていく。主郭の東側には長さ約 20 m、幅約 30 mの大きな曲輪Ⅱが付随している。この曲輪Ⅱの南東側に、帯曲輪状の長さ約 10 m、幅約 25 mの施設が付随する。また各曲輪間の切岸は、約５mと高いのも特徴である。ここから北東方向に伸びる尾根筋上に、大小７つの曲輪が連なり、その先に先述した大型堀切が続く。この尾根筋上の曲輪で規模が大きいものは、Ⅱから数えて、１面目（Ⅲ）と５面目（Ⅳ）と７面目（Ⅴ）である。Ⅲは長さ約 10 m、幅約 25 mを測る。Ⅳは長さ約 30 m、幅約 15 mで特に大型になる。曲輪背後に小さな曲輪を挟んで高さ 1.5 mの土塁と深さ 1.5 mの堀切を配している。Ⅴは長さ約７m、幅約 20 mを測る。北西方向の尾根筋には、大小９面の曲輪が連なって、また主郭直下の西側に２面、尾根筋先端付近の南側にも複数の曲輪が配される。各曲輪は長さが約 10 mを測る大型のものが多く、幅も 15 ～ 20 mを測るものもある。また各曲輪の切岸は、高く急峻なものが多い。主郭直下の切岸が８mを測るのを皮切りに、大半のものが４～５mの高さを有する。また露岩がむき出しの箇所が多く、40 ～ 50㎝ほどの河原石が散在している場所も多い。曲輪Ⅵ・Ⅶの南側には、帯曲輪状の施設が付随する。５m以上の幅があり、道のような役割があった可能性がある。これら帯曲輪の下段に「小屋の段」（Ⅷ）と呼ばれる長さ約 20 m、幅約 60 mにもなる大型の曲輪が存在する。ここには江戸時代には勝山藩の屋敷が置かれた。今でも西側端部には石積みの塀があり、東側には井戸状の窪みが残される。この曲輪のさらに下段にも帯曲輪状の施設があり、西側端部には河原石の石垣が残存する。主郭南側の曲輪群は、現在３面が残されている。主郭直下の曲輪Ⅸ

は長さ約 10 m、幅約 20 mを測り大型である。曲輪Xは、長さ約 15 m、幅約 35 mを測りさらに大きい。この尾根筋も切岸が高くまた急峻であり、５m以上が平均であるが、２～３面間は約 10 mの高さがある。この３面目の下にも曲輪の存在が想定されるが､現在ではグランドとなり判然としない。

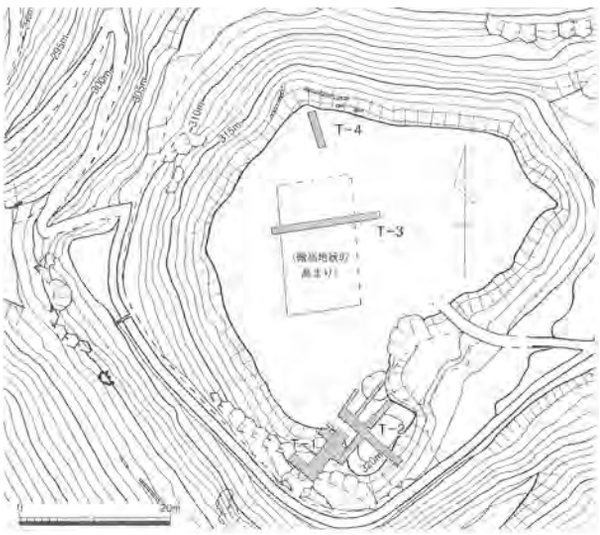
一方「勝山」は別名「太鼓丸」と呼ばれ、江戸時代にここで太鼓をたたく櫓が建てられたことに名前が由来する。頂部にある主郭を中心に、大きく３方向へ派生する尾根筋上に曲輪を配した山城である。西側筋の曲輪先端が入口の方向と見られ、ここから東側尾根筋にある２条の堀切までの約 200 mが一応の全長と考える。ただし北側筋のさらに約 30 m先と、堀切の北西側約 50 m先に櫓台のような施設があり、城域はさらに広がっていたと思われる。頂部にある主郭は、約 30 × 20 mの規模がある。約３mの高さの切岸をもち、南東側と北側に虎口状のくぼみがある。この主郭の東側～南西側にかけての直下に、約 10 m弱の帯曲輪がめぐる。さらに東側に長さ約 15 m、幅約 45 mの大きな曲輪が続く。切岸の高さは４mほどある。この曲輪には「かんかん井戸」と呼ばれる施設があり、また別箇所にも井戸状の窪みも残る。主郭からこの曲輪までは非常に精美な形を残している。また主郭頂部の一部については、発掘調査が行われたことがある。２×１間で総長が 5.9 × 4 mの掘立柱建物１棟が検出され（第 33 図）、16 世紀後半～ 17 世紀前半の遺物が出土した。これらの曲輪から西側に派生する尾根筋には、５面以上の曲輪が連なる。しかしその大半は斜面状になっており水平な平坦地にはならない。その先端方向には、極小の曲輪のみが続いている。主郭の北側尾根筋には、３面以上の小さな曲輪のみが存在する。さらに先には先述した櫓台がある。この方面は「城山」との連絡通路的な意味合いがあったと思われる。主郭の東側へ続く尾根筋には、現在は道によって削平された部分に大きな曲輪があったと考えられ、その先端に今でも土塁が残っている。この曲輪の先は先述した２条の堀切で、それぞれ土塁と帯曲輪が付随する。堀切の深さは現在では１m強ほどである。さらに尾根先端部分に向けて、小さな曲輪状の施設が４～５面ほど続いている。

文献･伝承　延文５（1340）年～嘉慶２（1388）年ごろ､関東から来た地頭三浦氏が築城したと伝わる。『作州高田城主覚書』には、初めの城主は三浦貞連とする。同書や『作陽誌』によると、三浦氏は文亀年間（1501 ～ 1504）に山名氏の美作侵攻に呼応し、同市所在の篠向城を攻略するなど勢力拡大に努めている。亨禄５（1532）年や天文 13（1544）年などには､尼子氏の美作侵攻に際して､浦山城･沢城･麓城･浅田城などとともに落城している。その後尼子方の家臣である宇山氏が在城していたが、永禄２（1559）年に三浦貞勝が再び城を奪還し、復帰を果たす。永禄８（1565）年には、毛利氏と組んだ三村氏に攻略され三浦貞勝が自害するが、翌年三浦貞守が奪還し三浦貞広を城主に据える。永禄 11（1568）年に三浦氏が尼子氏と手を組むと、毛利氏によって再度攻められ落城する。しかし同 12（1569）年には､三浦氏が再び城を奪還する。天正３（1575）年に毛利氏に明け渡すこととなり、以後月田城主の楢崎氏が城に入ることとなる。

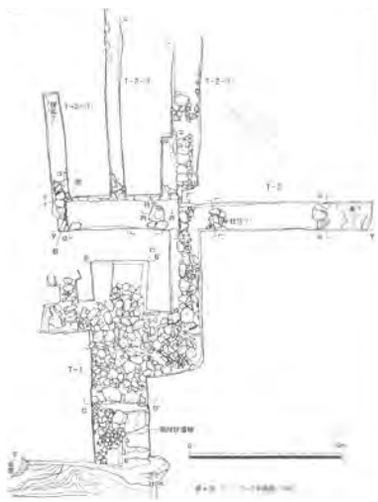
天正７（1579）年以降､毛利氏と宇喜多氏が対立すると､当城は真庭市内の戦いの前線基地となり、『萩藩閥閲録』にはその重要性が度々記されている。備中高松城水攻め時の織田・毛利の和睦により真庭市域は宇喜多領となるが、毛利側は城明け渡しを引き延ばす。しかし天正 12（1584）年になって毛利方も折れ、宇喜多方の牧氏が入城することとなる。その後、小早川・森氏と経るが、元禄 10（1697）年に森氏が改易されると、幕府の直轄地となる。明和元（1764）年から勝山藩として三浦氏が当地を治め、当城の西麓を本拠とした。（文献 133）　（小林）



第 30 図　高田城跡縄張り図（1/4,000）文献 149 より引用

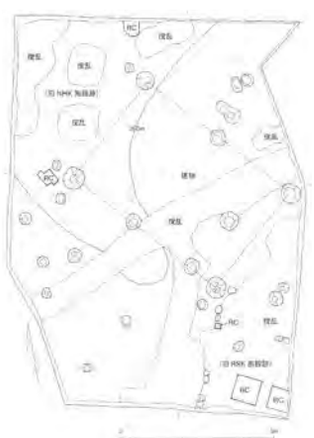


第 31 図 「城山」主郭調査区配置（1/1,000）

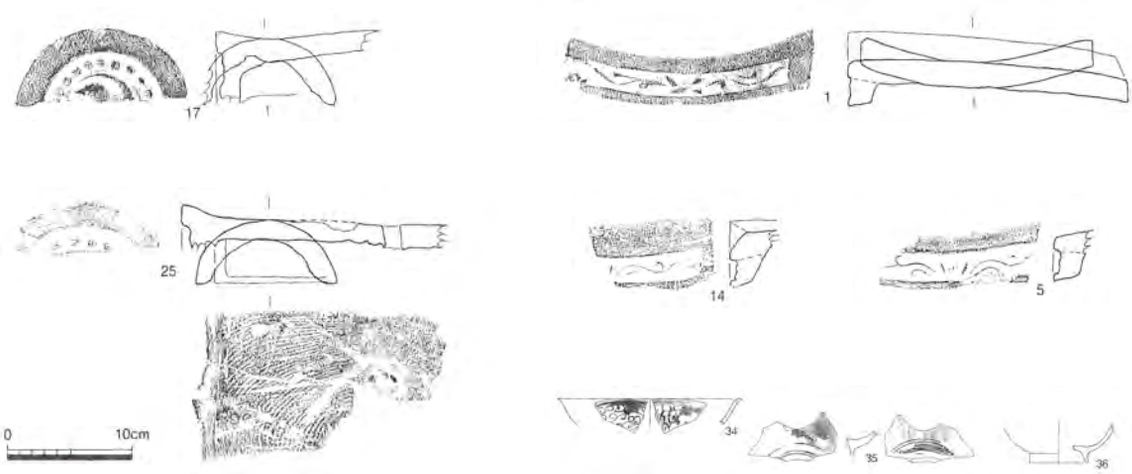


第 32 図 「城山」主郭遺構配置（1/250）

第 33 図 「勝山」主郭調査区配置（1/1,000）



第 34 図 「勝山」主郭調査区配置（1/250）



第 35 図 「城山」主郭出土遺物（1/6）

図は全て文献 149 より引用

写真 12　遠景（南西から）

写真 13 「城山」主郭（南から）

写真 14 「城山」主郭虎口（南西から）
真庭市教育委員会提供

写真 15 「城山」切岸（南西から）

写真 16 「城山」堀切（南から）

写真 17 「小屋の段」石列（北から）

写真 18 「勝山」帯曲輪（北から）

写真 19 「勝山」竪堀（北西から）

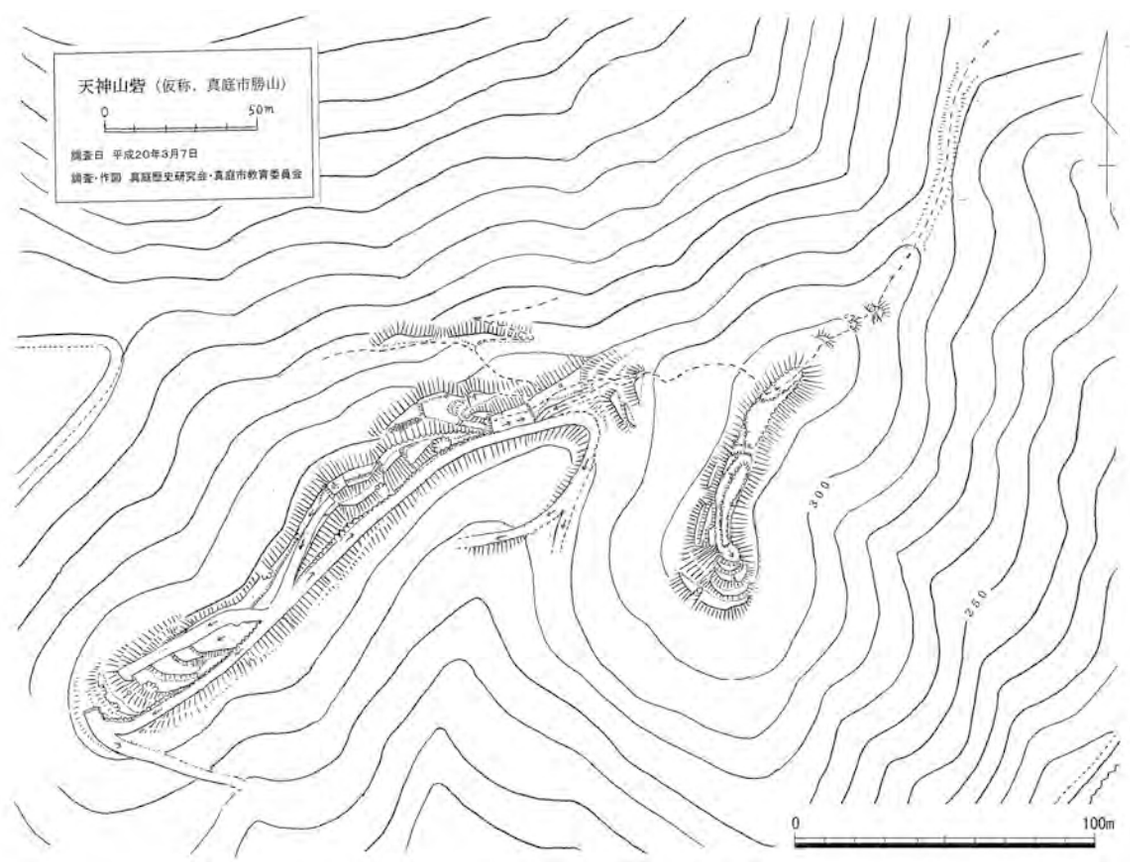
34　天神山砦跡（てんじんやま）　真庭市勝山・横部　地図 11 右

立地　旭川の湾曲部へ東から延びる山塊の尾根西端には高田城が所在し、高田城から尾根づたいに東約 600 m離れた高所に立地する。山塊南側の勝山平野や山塊北側の旭川流域を眺望できる。標高は高田城とほぼ同じである。

概要　頂部には南北約 65 m、東西 6 m前後の細長い平坦地があり、主郭と考えられる。主郭南半部は尾根線をそのまま残し、周縁を削平し平坦にしている。南に下がる尾根筋に小さな曲輪 4 面を配する。切岸の高さは 1 ～ 2.5 mほどである。西斜面には 2 段の犬走りを設けている。東の山塊に続く尾根筋には主郭から約 10 m下がった地点に堀切を設けている。幅約 4 m、深さは尾根上方側が約 2 m、尾根下方側が約 0.5 mの小規模なものである。主郭から南西に派生する尾根高所にも小さな平坦地と人為的な小さな段が認められ、曲輪と考えられる。この南西尾根周辺は林道による改変が大きいが、城館関連遺構が存在すると考えられる。

写真 20　遠景（南から）

文献・伝承　不明。　（物部）



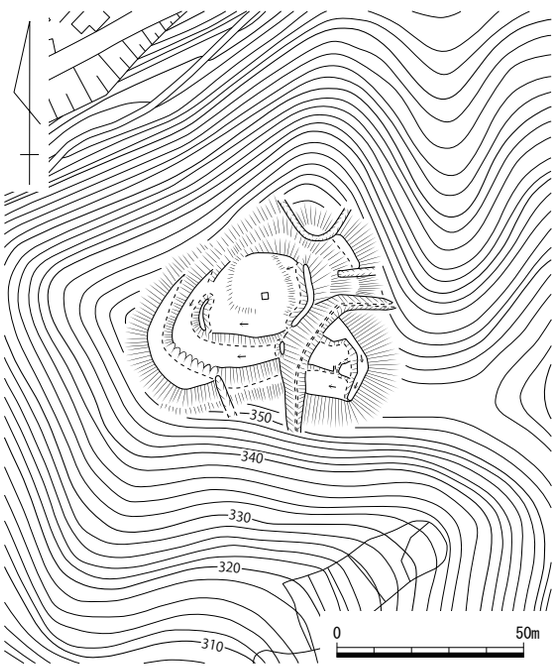
第 36 図　天神山砦跡縄張り図（1/2,500）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会

35　若代城跡（わかしろ）　　真庭市若代　　地図 17 右

立地　月田川が南北に流れる箇所の東側に位置する。標高 470 m級の山塊が月田川に向かって下る尾根の先端付近に立地する。東西幅 70 mで南北幅 60 mほどの規模である。

概要　尾根頂部に長さ約 25 m、幅約 20 mの主郭を持ち、主郭の東西両側は土塁によって守られている。尾根先端方向にあたる、主郭から見て東側～南側にかけて幅 5 mほどの腰曲輪が 2 面巡る。それぞれの切岸が明瞭で、高さが 3 ～ 4 mを有する。尾根筋側にあたる南東側には、幅約 5 m、深さ約 4 mの堀切がU字形に巡る。さらに先には、周囲を土塁で固めた幅 15 mほどの曲輪がある。主郭の北側にU字形の竪堀、尾根筋側に当たる南側と東側には竪堀を配し守りを固めていた。

文献・伝承　『作陽誌』には「若代堡」とあり、井原越前守が居城したとする。（文献 133）（小林）



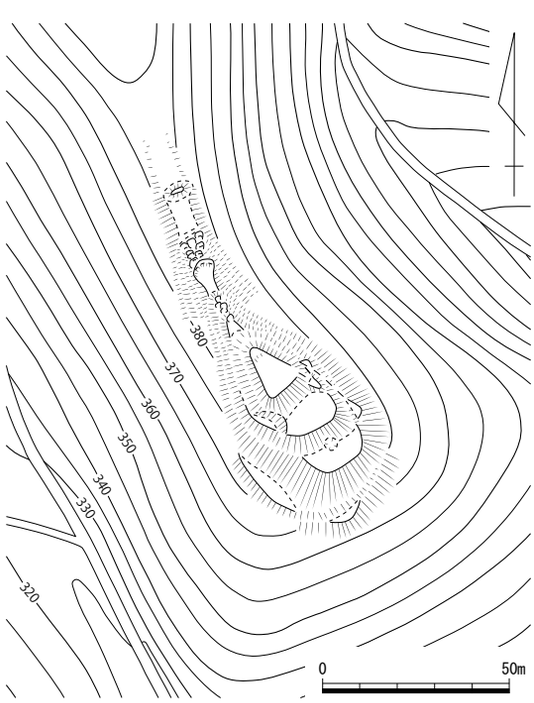
第 37 図　若代城跡縄張り図（1/2,000）

36　則行城跡（のりゆき）　　真庭市岩井谷　　地図 17 右

立地　東へ開く谷筋の西奥に位置する尾根先端部に立地する。眺望は谷筋とその先に月田川を見通す。標高 380 m、山裾との比高約 80 m。

概要　最高所の曲輪（主郭）を中心に、尾根先端方向に 3 面、尾根鞍部方向に 3 面、南西側の斜面に 2 面の曲輪が確認出来る。北東斜面には主郭からジグザグに下る通路が認められ、屈曲部に小さな平坦地を設けている。鞍部方向の 2 ・ 3 面目の曲輪には土塁があり、現状での高はそれぞれ 30㎝・50㎝である。また、その 2 ・ 3 面目の曲輪の間にある切岸は露岩を利用し、高さ約 8 mに達する。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『古城之覚』は真島郡岩井村の「岩井」として、城主を河内兵庫助とし、『作陽誌』は「則行堡」、『富原村史』は字城山にあり、山の高さ 140 m、山上は本丸、二の丸、三の丸の 3 段とする。　（物部）



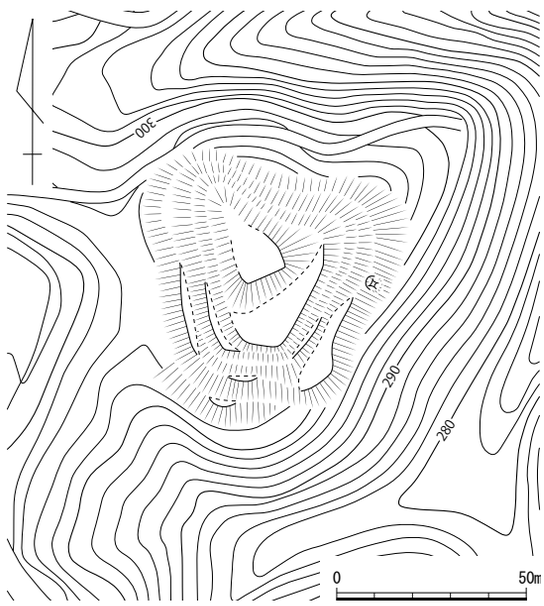
第 38 図　則行城跡縄張り図（1/2,000）

39　浅田（あさだ）城跡　　真庭市福谷　　地図 18 左

立地　山間の集落を望む谷奥の尾根頂部に立地する。眺望は北東に開く谷部に限定される。

概要　尾根先端の高所から南東斜面にかけて比較的広い３面の曲輪と、南東から南西にかけての斜面に小規模な曲輪や犬走り状の細長い曲輪を５か所配している。高所の北側は遺構が見られず、頂部の主郭切岸も曖昧になる。主郭から６～７ｍ下がった東側斜面に素掘りの井戸１基を確認した。井戸は最下段の広い曲輪の端から２～３ｍ下がった位置にあり、平面形は一辺２m弱の方形を呈し、深さは５ｍを測る。落ち葉が堆積しているため水が溜まっているかどうか不明。谷地形ではないので雨水が集まるとは考えにくい。西側の尾根鞍部には地形改変があり、堀切等の存在は不明である。

文献・伝承　『勝山町史』は、羽別村、勝山町大字福谷にあり、三浦氏の拠った大料城（No.29）を尼子氏が攻撃し、落城した際に浅田城も落城したと伝えるとする。（文献 133）　（物部）



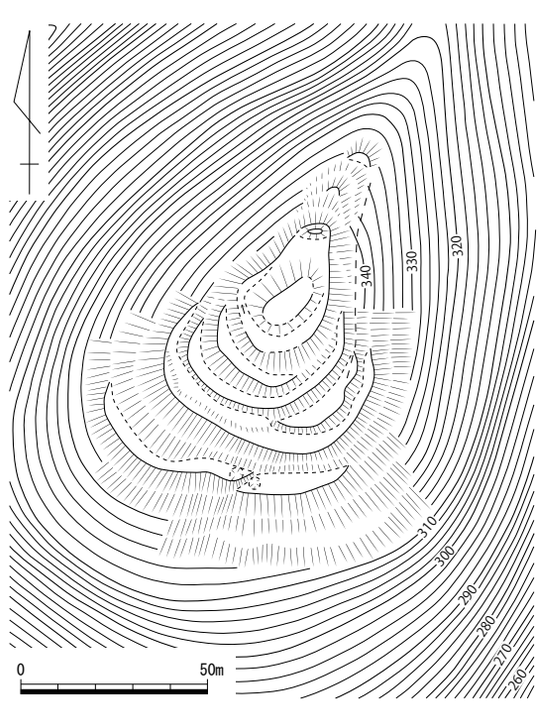
第 39 図　浅田城跡縄張り図（1/2,000）

40　飯ノ山（いいのやま）城跡　　真庭市関　　地図 18 左

立地　高千里山（標高 570 ｍ）から南へ延びる尾根先端部に立地し、南東方向へ流れる関川流域を一望できる。

概要　尾根先端高所に主郭と考えられる広さ約 40 × 20 mの曲輪があり、その中央部分に高さ 0.5 ～ 1 m、広さ 15 × 7 mの台形の高まりを残す。北端部には幅約２m、残存高 30㎝の土塁がある。主郭南側斜面には、複数の帯曲輪が階段状に見られる。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『古城之覚』は真島郡関村の「関山」、城主不詳、『真庭郡誌』は「関山城」、小瀬右京進広勝の居城と記すとし、現在、「関山城」は、城頭山城（初伏城）とその中腹にある飯の山城の総称と考えられるとする。『真庭郡誌』は「城頭山城」は一名初伏城とし、嘉吉・文安 (1441 ～ 1449) の頃綱島左近将監が居城、「飯の山城」は初摩総兵衛が居城したとする。　（物部）



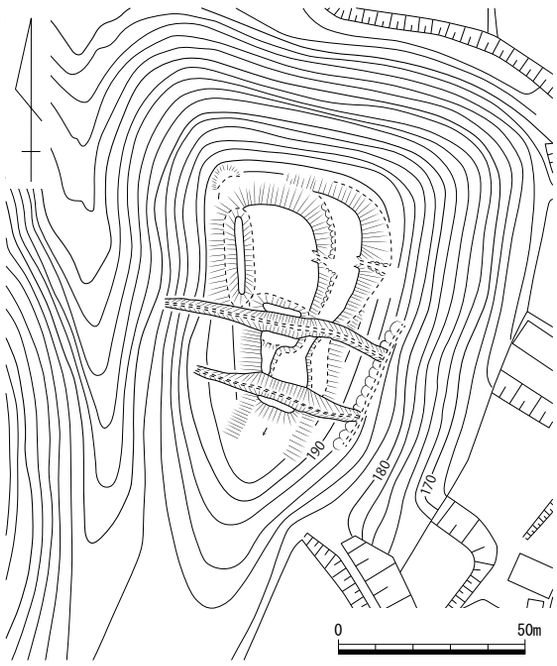
第 40 図　飯ノ山城跡縄張り図（1/2,000）

45　飯山城跡（いいのやま）　　真庭市草加部　　地図 18 右

立地　旭川が東西に走る箇所の南側にあり、標高 500 m級の山塊から下ってきた尾根の先端部分に位置する。城館の頂部は標高 190 m付近で、平地との比高差は約 30 mである。

概要　主郭は東西約 25 m、南北約 30 mを測り、その西側と南側を高さ 0.5 mほどの土塁で守っていた。主郭の東側から北側にかけては、幅５～６m程の腰曲輪が１面巡っており、北西側にも小曲輪が存在する。尾根筋側に当たる南側は、それぞれが幅５m程ある２条の堀切と高さ１m弱の土塁によって城域を画していた。主郭と曲輪が１つずつという小規模な山城ながら、主郭の周りに土塁を築き、また規模の大きな堀切を配し守りとする、重厚な造りとなっている。

文献・伝承　『作陽誌』では、城主が三浦氏臣の福島右近としている。（文献 133）　　（小林）



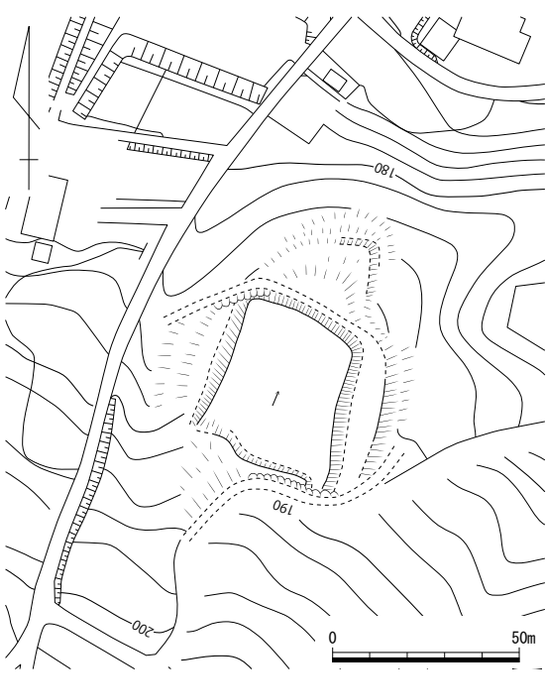
第 41 図　飯山城跡縄張り図（1/2,000）

46　惣七遺跡（そうしち）　　真庭市草加部　　地図 18 右

立地　旭川の南側に近接した段丘上にあり、標高 560 m級の山塊から北側に向けて派生した尾根の先端地点に位置する。本遺跡の北東側近くには、飯山城跡が存在する。

概要　長さ約 40 m、幅約 30 mの長方形を呈する曲輪が、１面のみ存在する。この曲輪の３方向には高さ１～ 1.5 m前後の切岸が築かれる。切岸の一部の裾には、石塁が存在する箇所もあり、本来は裾部全面に築かれていたと思われる。この面の背後には、0.5 mほどの土塁状高まりがあるが、当時のものかどうか判然としない。また北側先端方向は、なだらかな自然地形が続いていた。本遺跡は屋敷地であったと想定しており、旭川を見下ろす高台に造られた立地や曲輪の形状などは、同じ真庭市内にある出羽屋敷と類似する。

文献・伝承　城守等は不明である。　　（小林）



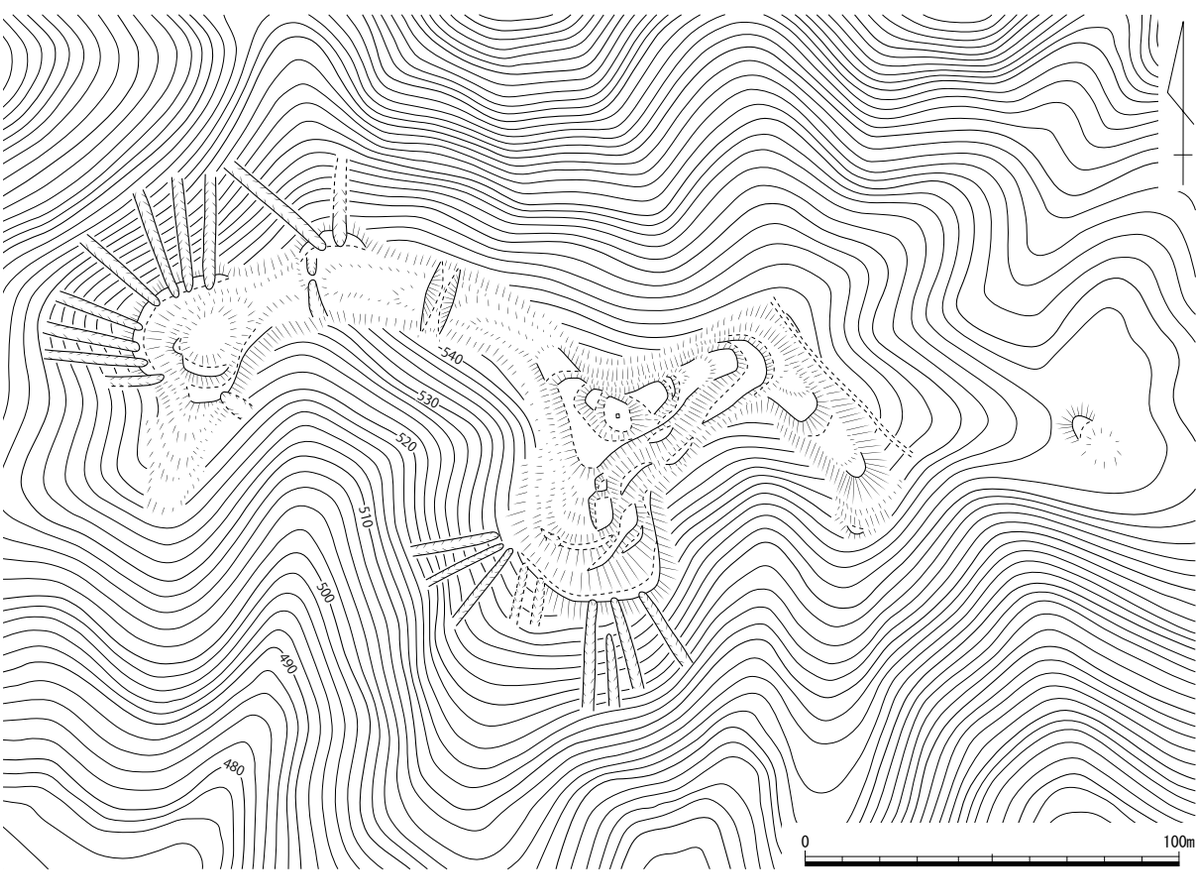
第 42 図　惣七遺跡縄張り図（1/2,000）

47　金砕山城跡（かなめぎやま）　真庭市惣・草加部・日名　地図 18 右

立地　標高 564 mの金砕山山頂に立地する。東側山麓の集落との比高は約 400 mを測る。久世平野を広く見渡し、東側に篠向城跡、南に宮山城跡、北に大寺畑城跡を眺望できる。

概要　山頂の最高所を中心に、三方向に延びる尾根筋と斜面にかけて、段差の小さい曲輪を配置している。最高所にある曲輪は８×６mと小さいが主郭と考えられる。東へ下る尾根筋に大小４面の曲輪があり、そこから南に屈曲して延びる尾根筋に曲輪３面、再び東へ折れた尾根筋が小さな高所をつくって北へ下がる部分に１か所曲輪を確認した。南へ張り出す幅の広い尾根筋には、主郭直下に西の尾根へ繋がる曲輪が１つ、その下方には、尾根筋をはずして設けられた２面の曲輪がある。さらにその下方には、２段の犬走りが尾根を取り巻くようにあり、下方の犬走りを起点に９本の竪堀が地形に合わせて放射状に掘削されている。この竪堀の規模は幅約３m、深さは 0.5 ～ 1 mを測る。さらに南尾根筋から東斜面にかけては小さな曲輪が５か所造られている。主郭から西へ湾曲しながら延びる尾根筋には、主郭直下に３面の曲輪があるが、その先は自然地形の尾根となる。３面目の曲輪から 25 m先に、上幅８m、深さ１～ 1.5 mの堀切があり、そこから 30 m先に尾根筋を土橋状に残した浅い堀切がある。この北側斜面に２本の竪堀がある。また、西端の高所の周囲には８本の竪堀が放射状に延びている。

文献・伝承　『作陽誌』は「加那女岐山」とし、真島郡惣村の西境にあり、かつて神林寺（真庭市神）の僧徒が篠向城（No.88）の城主との戦いに陣したと記す。（文献 133）　（物部）



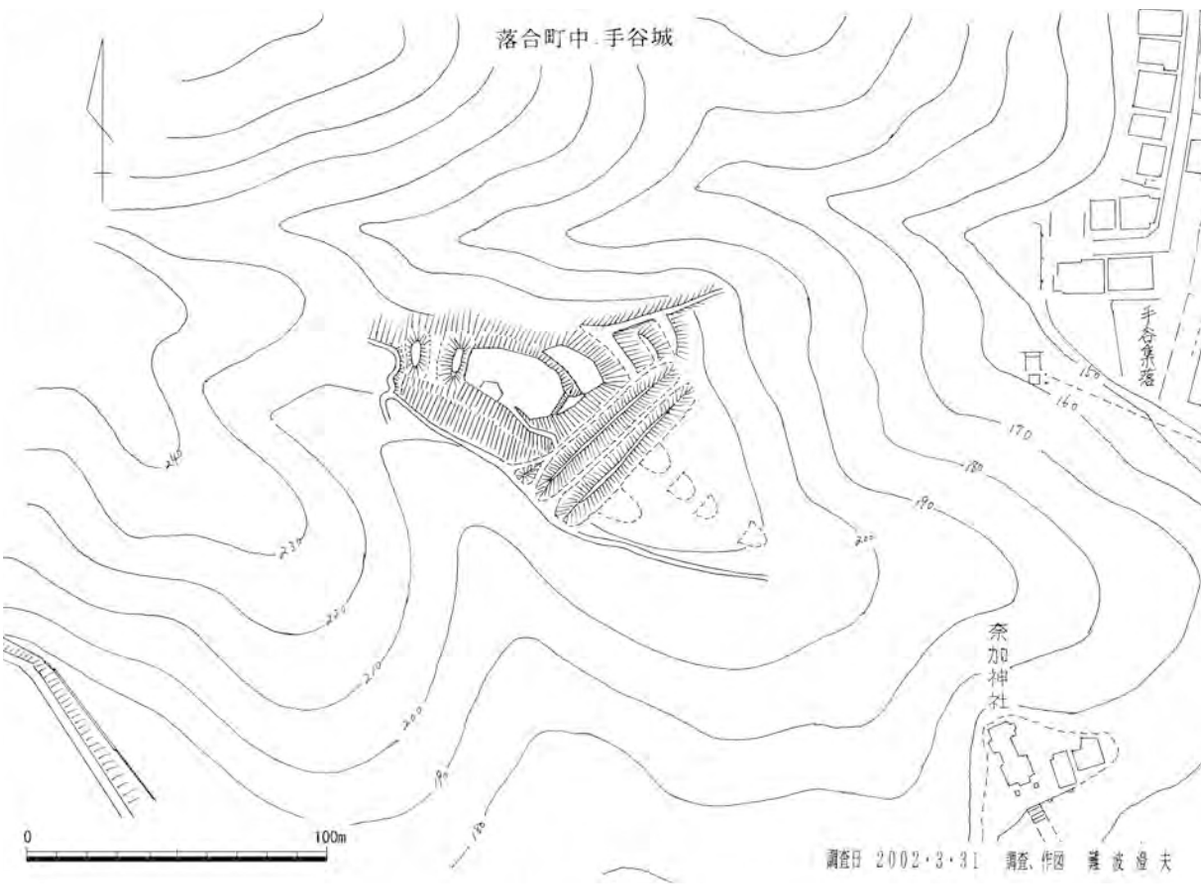
第 43 図　金砕山城跡縄張り図（1/2,000）

48　月沢（つきざわ）城跡　　真庭市中　　地図 18 右

立地　標高約 540 mの金砕山（加那女岐山）山塊から東へ延びる尾根先端頂部に立地する。眺望は良く、眼下の旭川や、北東の久世の平野から南西の落合の平野を見渡すことができる。

概要　主な曲輪は、頂部の主郭と北東へ下る尾根線に 1 面であるが、その下方に何面か幅の狭い曲輪が存在する。その尾根線から北斜面にかけては植林による地形改変が一部に見られる。主郭の東西両端部には残存高 0.5 ～ 1 mの土塁が認められる。北東側下段の曲輪の南東縁部に、斜面を掘り残して土塁を設け、主郭東端の土塁と一体のものとしている。曲輪群を挟んで、尾根の先端側と鞍部側に連続した堀切と土塁をそれぞれ設けている。尾根先端側の尾根筋は幅が広いため、堀切・土塁の長さは約 50 mに及ぶ。外側の土塁は残存高約 2 m、土塁上面から背後の堀切底までの比高は 2.5 mを測る。内側の堀切南西端部は堀底が二叉に分かれる。堀底と主郭東端土塁上面の比高は約 4.5 mを測る。尾根鞍部側の堀切底と主郭西端土塁上面との比高は約 3.5 mを測る。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『古城之覚』は真島郡中村の「月沢」にあり、城主を宇喜多秀家の陪臣北右衛門督直利とし、『牧佐馬助覚書』は宇喜多氏の家臣牧佐馬助は、毛利方の中村氏と宇喜多氏の交戦にあたって「作州月沢」で太刀打ちして小原源太兄弟を討ち取って、褒美として西々条郡北方村（所在未詳）に与えられた。その後佐馬助は北右衛門督と二人、「月沢」の城主となり、岩屋城からの攻撃では城を守りきり、宇喜多氏から感状を与えられたとする。　（物部）



第 44 図　月沢城跡縄張り図（1/2,500）

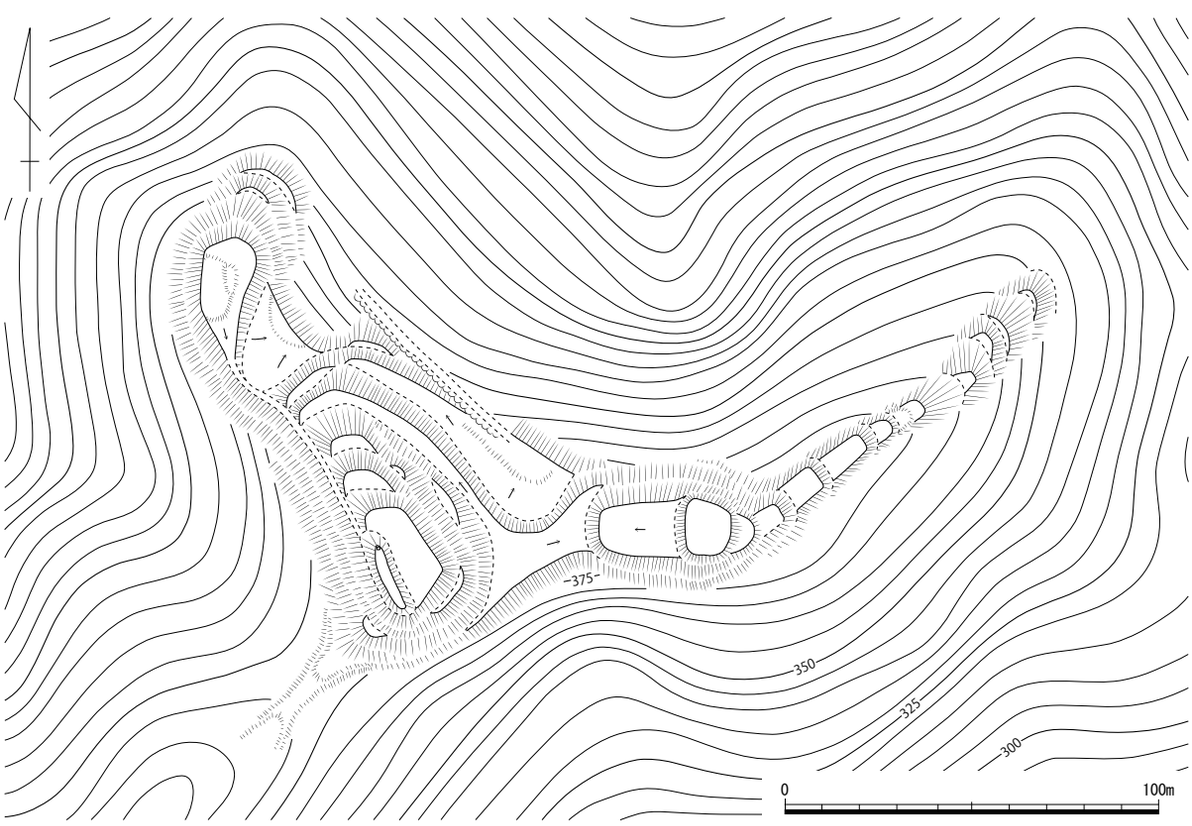
49　本山（もとやま）城跡　　真庭市月田本　　地図 18 左

立地　南北に流れていた月田川が屈曲し、東西に流れる付け根の箇所の南側に位置する。標高 550 m級の山塊から、北側に下った標高 380 m前後の尾根先端付近に立地している。山城の規模は、東西約 240 m、南北約 150 m前後である。

概要　尾根頂部付近に、長さ約 25 m、幅約 10 mの主郭を置き、尾根鞍部方向に当たる南西側には、高さ 2 mにもなる土塁を築き守りとしていた。この方向には小さな曲輪が 1 面築かれる他は、特に施設が造られていない。尾根筋は、主郭を中心に北西と東方向に分かれる。北西側には、長さ約 5 m、幅約 10 mの曲輪が 2 面配され、切岸の高さは 5 mにも及ぶ。その下段には、主郭と曲輪を囲むように腰曲輪が 2 面築かれていた。さらにその先には、長さ約 25 m、幅約 15 mの比較的大きな曲輪が築かれ、さらに尾根先端方向に向かって小さい曲輪が 2 面配されていた。主郭の東側には、幅 15 m ほどで櫓台程度の頂部が築かれる。この頂部から尾根先端方向の北西側に向けて、曲輪が 6 面配される。規模は幅が 5 〜 10 m前後で、長さはそれぞれ 5 m、10 m、15 m、20 m、10 m、15 mを測る。さらにその先にも、小曲輪が 4 面ほど連なる堅固な造りとなっていた。

当山城は、2 筋に分かれる尾根両方ともに曲輪を連ねているが、明確な堀切や竪堀を持たないのが特徴である。また主郭上にある立派な土塁は、尾根鞍部方向にのみ築かれており、山城の弱点を補う役割があったのだろう。

文献・伝承　『古城之覚』では真島郡本村の「本山」として、城主を源修理亮秋行とする。（文献 133）　（小林）



第 45 図　本山城跡縄張り図（1/2,000）

51　会下山城跡（えげやま）　　真庭市月田　　地図 18 左

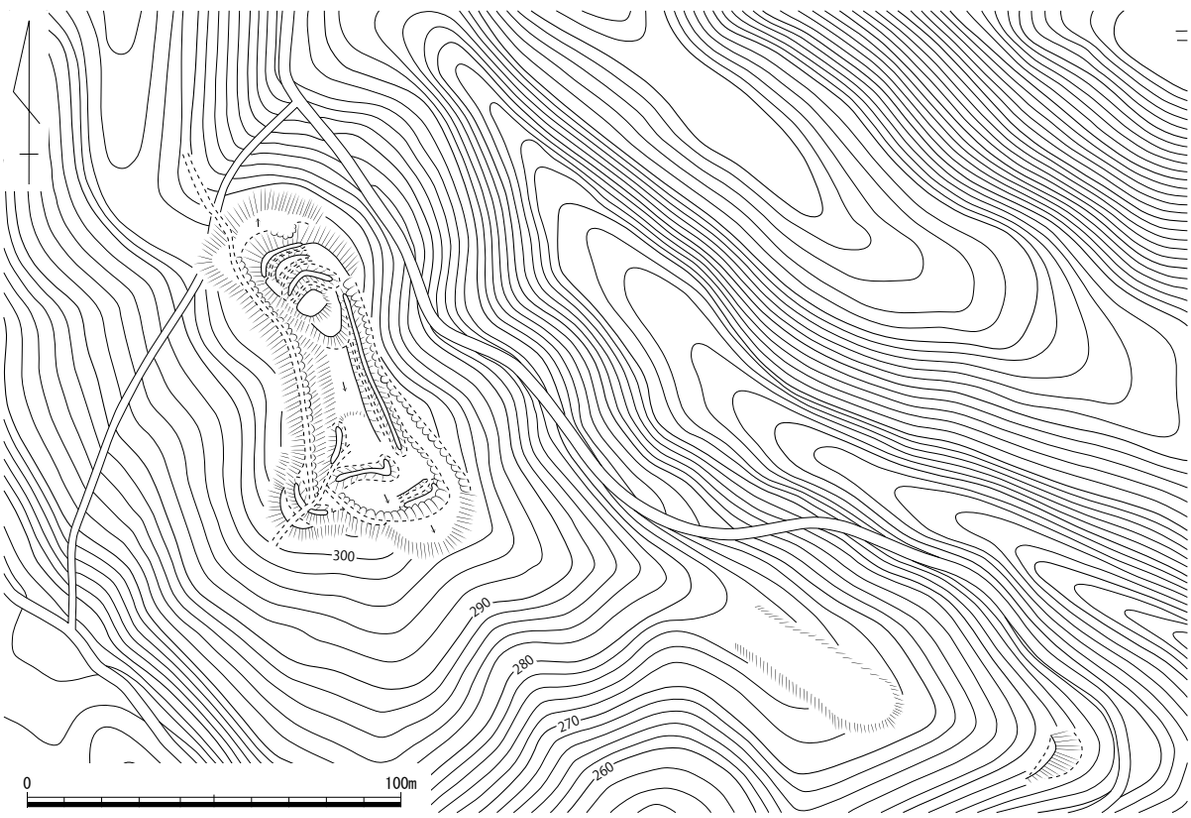
立地　月田川が南から北へ流れる箇所の西側に位置する。標高 330 m級の山塊が南東側へ向かって下る先端付近の尾根上に立地している。

概要　頂部に幅 15 mほどの主郭を置き、その北側に 1 面、南東側に 2 面の曲輪を配する。さらに派生する尾根上に小さい曲輪を築き、その数は北西側で 1 面、南西側で 2 面、南東側で 2 面を数える。さらに南東側の尾根筋上には、かなり離れた位置であるが曲輪状の平坦面がある。

当山城を特徴付けるのは、主郭や曲輪の周囲に土塁や堀切が築かれることである。特に主郭背後の土塁は高さ約 1 mに達し、両側に 0.5 mほどの横堀が配されていた。北側の曲輪にも土塁が築かれ、その背後は高さ 5 mにもなる切岸が築かれる。このように主郭の山側に堅固な施設を配するのは、山城を画するような明確な堀切が築かれない代わりをなすためと考えられる。また主郭南側の曲輪は、東辺に長さ約 40 mに渡って高さ約 0.5 mの土塁と堀切が配される。南辺と西辺の一部にも土塁が築かれ、南東側は虎口状に開かれている。さらに南東側と南西側に伸びる曲輪の 1 面目にも、土塁が築かれていた。当山城は、主郭が櫓台程度の規模しかなく、また離れた曲輪を除けば、長さ 100 m未満と小さい。おそらく同尾根上の南東下側に位置する三堂坂城跡との関連が考えられるが、多くの曲輪を土塁や堀切によって守りを固める構造は、周辺地域にはない事例で興味深い。

文献・伝承　『作陽誌』には、真島郡三堂坂村の会下山に陣跡があったと記され、当地と思われる。

（小林）

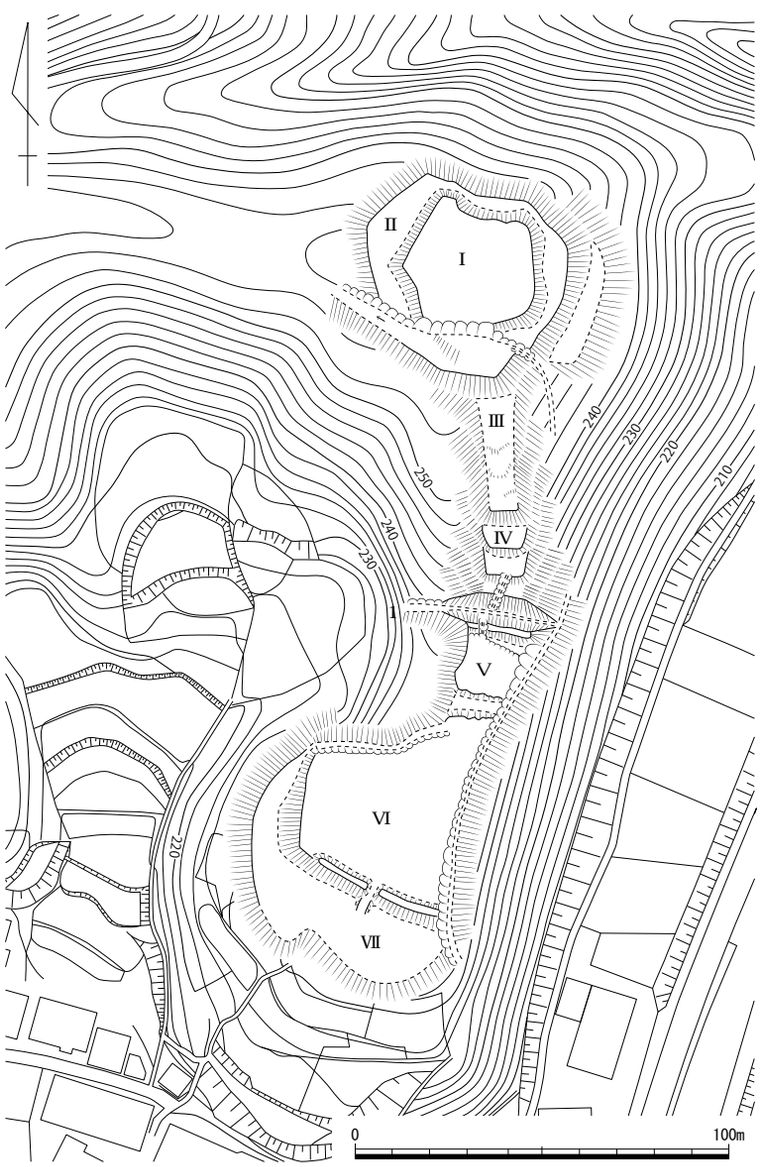


第 46 図　会下山城跡縄張り図（1/2,000）

52　三堂坂（みどうさか）城跡　　真庭市月田　　地図 18 左

立地　城は、月田川左岸の尾根筋先端頂部に立地する。東方には真庭市福田から杉山を経て月田に至る往還の月田側出口を望み、西方尾根続きには会下山城跡が所在する。

概要　北辺西端部が北へ向かって突き出した曲輪Ⅰを頂部に配している。曲輪Ⅰ全周を取り巻く曲輪Ⅱは、南側が林道によって改変を受けている。頂部から南側に延びる尾根筋には、曲輪を連続して設け、守りを固める。曲輪内に自然地形を残す曲輪Ⅲは、南辺のみに切岸が施され、東西両辺は自然地形のままであろう。曲輪Ⅲとの比高約１ｍの曲輪Ⅳに残された小祠の残骸は、『勝山町史』に描かれた「八幡宮趾」に相当すると思われる。この曲輪から南側には、曲輪１面と自然地形の平坦地を挟んで上面幅約８ｍ、深さ約２ｍの堀切１が開削される。この堀切は、集落まで続く山道として利用されている。堀切１の南側には、北辺に高さ約 1.5 ｍの土塁を築いた曲輪Ⅴが所在する。この曲輪は、曲輪Ⅵと同じ高さにするためか、後世に土塁際まで削平を受ける。約 40 × 35 ｍの大きさの曲輪Ⅵは、南辺に高さ約１ｍの土塁が築かれる。この土塁の中央部は、平入り虎口状となっているが、後世の改変によるものかもしれない。曲輪Ⅶは、畑作による改変が著しい。曲輪Ⅰから西側尾根続きは、浅い谷地形を挟んで『勝山町史』に「松尾屋敷」と描かれた平坦面が存在する。なお、曲輪Ⅴ南側にも南辺に土塁が築かれた堀切があるとされるが、現状、溝状のくぼみが認められたのみである。



第 47 図　三堂坂城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『美作の山城』によると、『古城之覚』では牧左衛門の家臣池田新兵衛・沼田太郎左衛門、『作陽誌』では沼田太郎左衛門を城主としているとされる。『勝山町史』に掲載の平面図には、「山屋谷」・「山谷屋敷」・「家下（えげ）」・「大門」・「殿河内」などの地名が記載される。

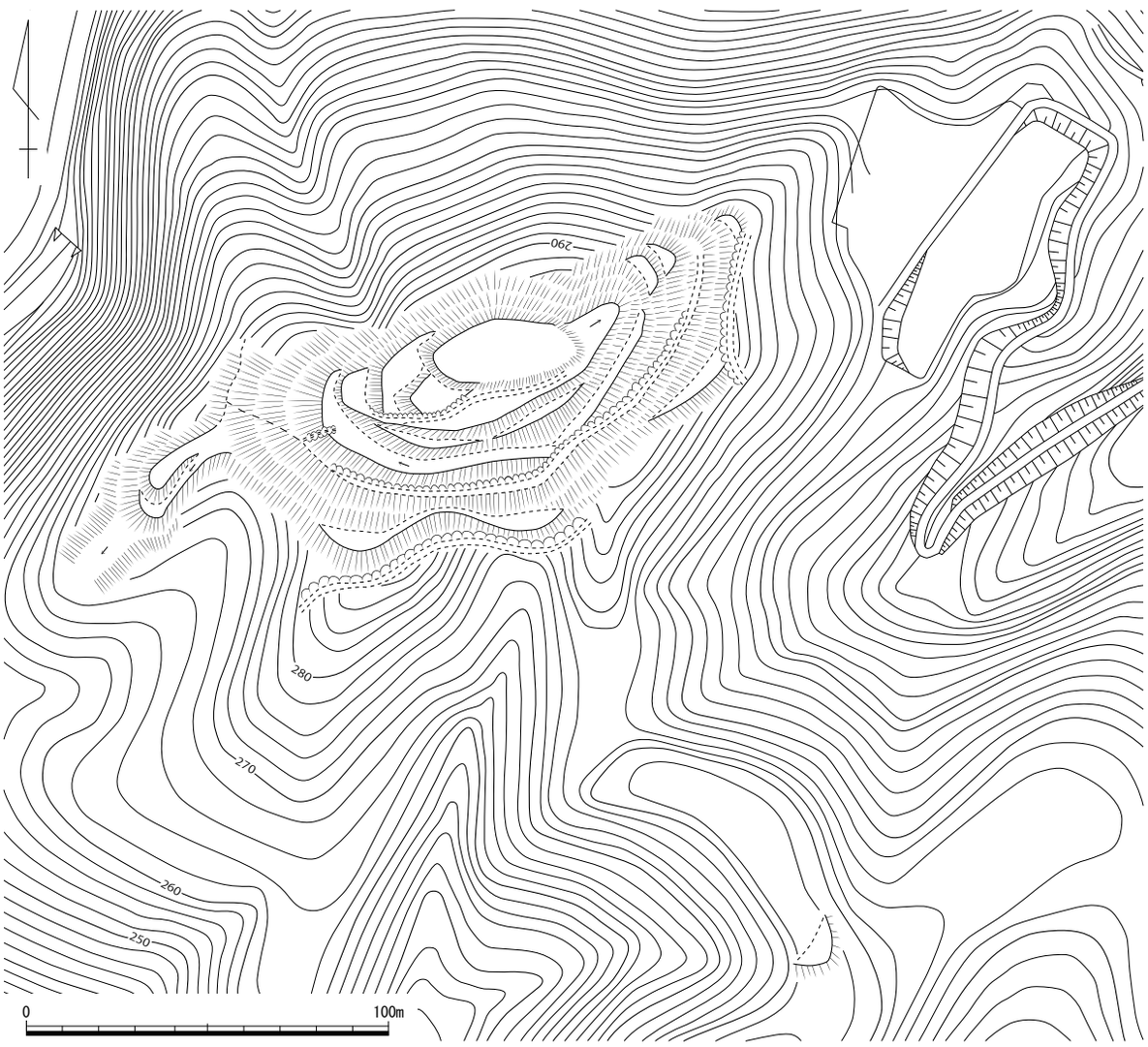
（小嶋）

53　鳶乃森（とびのもり）城跡　　真庭市月田　　地図 18 左

立地　西から東に流れていた月田川が、北に向けて屈曲する付近の南側に位置する。東西に細長い丘陵上に、約 190 mに渡って施設が築かれる。

概要　頂部に長さ約 40 m、幅約 20 mの主郭を築き、東西両脇に幅５～ 15 m前後の曲輪を３面ほど配していた。さらにそれらを囲むように、西側～南側～東側にかけて幅約５mの帯曲輪が３～４面ほど築かれる。また西側尾根筋の少し離れた箇所には幅約５mの細長い曲輪が２面築かれており、守りを固めていた。主郭から見て北側は、急峻なためか何の施設も築かれない。また当山城の南側に位置する別の尾根上にも、曲輪状の平坦地がいくつか存在するが、人工的な施設かどうか判然としない。この山城は主郭の両脇に何重にも曲輪を配する重厚な造りであるが、堀切など城を画するような施設は存在しない。当山城から見て南東側に位置する月田城との関連が考えられる。

文献・伝承　『作陽誌』には宮原山にある陣跡と記される。戦時中に主郭及び西側の曲輪付近と開墾した際、土器、刀が出土したと伝えられる。　（小林）



第 48 図　鳶乃森城跡縄張り図（1/2,000）

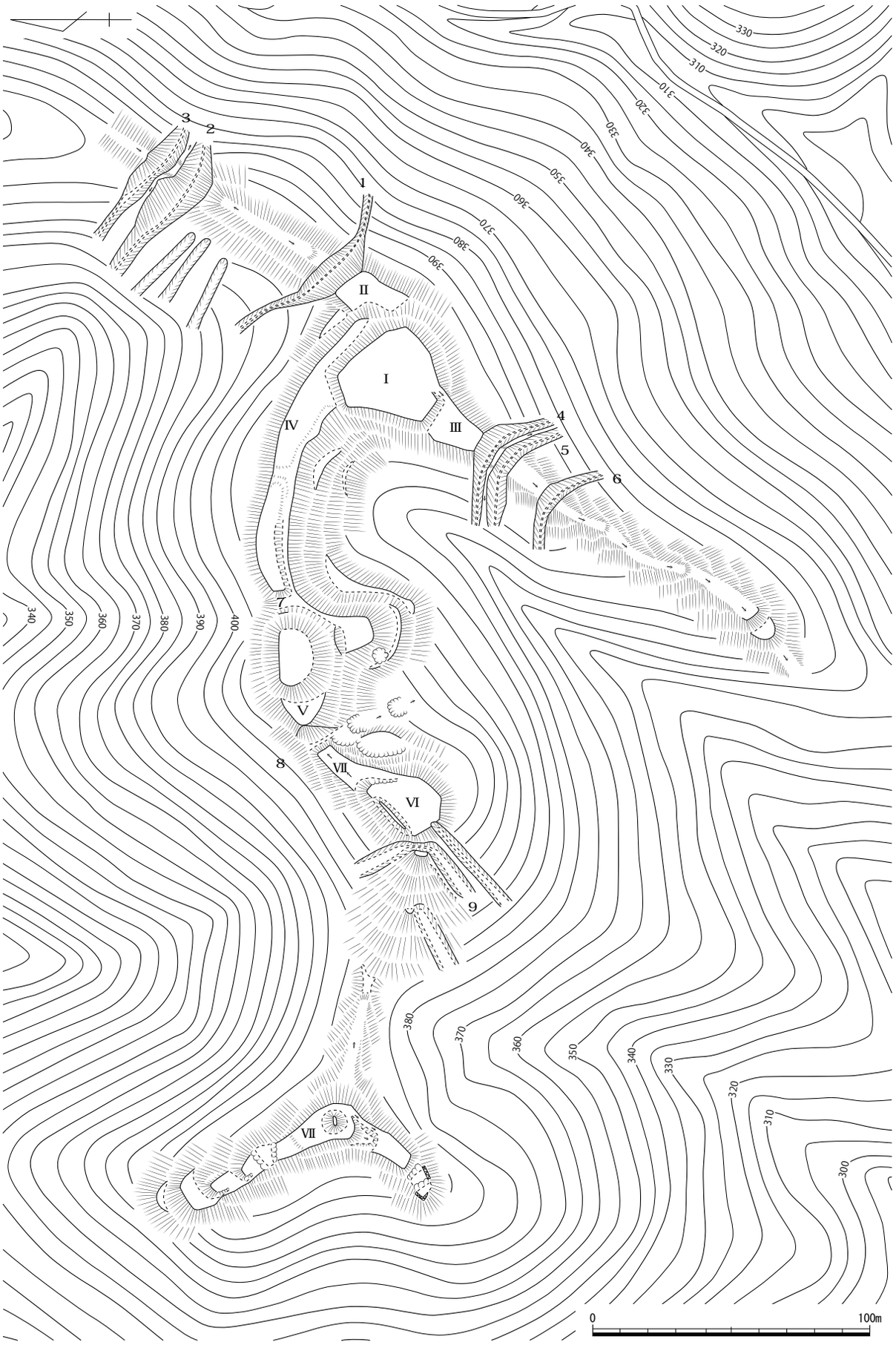
54　月田（つきた）城跡　　真庭市月田　　地図 18 左

立地　城は、真庭市月田本から東流していた月田川が、新庄川との合流地点に向けて北に流路を変える場所を東から見下ろす尾根筋頂部に立地する。月田川流域を一望し、真庭市一色から佐引を経て月田に至る往還を南西に望む。

概要　「妙見宮」を祀っている標高約 420 mの頂部に占地した曲輪Ⅰは、平面多角形を呈する。曲輪Ⅰ南西辺東端に曲輪Ⅲへ続く通路があるが、「妙見宮」への参道として作られたものかもしれない。曲輪Ⅰから北東側の尾根続きには、曲輪Ⅱと竪堀として斜面へと続く堀切を３条配している。堀切１以北は、両側が急崖となっているやせ尾根が続くが、上面幅約 13 m、南西側尾根筋との比高 10 m以上の堀切２と、上面幅約 10 m、北東側尾根筋との比高約 2.5 mの堀切３を設け、さらに尾根筋南西側にも竪堀が３本開削されるなど、強固な防御構造を備えている。曲輪Ⅲから南西へと下がる尾根筋にも、竪堀として斜面を下る堀切を３条掘削し、この方面からの敵の侵入を防ぐ。曲輪Ⅰから西側は、２か所の峰部を経て約 300 m先の曲輪Ⅷが所在する尾根筋に至るが、これらの間にも縄張りを構えている。自然地形が残る狭長の曲輪Ⅳの西端南側には、堀切７底面から続く通路が認められる。曲輪ⅤとⅥの鞍部には、深さ約４mの堀切８を配している。この堀切は、植林時の通路として利用されたようであり、南側斜面部や曲輪Ⅶ東辺に地形改変の痕跡が残る。曲輪Ⅵは、北西辺に高さ 50cm程度の土塁が、東辺に曲輪Ⅶから続く植林のための通路が認められる。曲輪Ⅵから西側は、急傾斜で 30 m近く下がり尾根鞍部に至るが、その尾根筋にも南北両側の斜面へ続く堀切９と２本の竪堀が開削され、守りを固める。高さ約 1.5 mの櫓台が築かれている曲輪Ⅷから南北に延びる尾根筋に築かれた曲輪のうち、南端の曲輪と中央付近の曲輪は、鉄塔建設により改変を受けている。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『古城之覚』では真島郡手谷村の「手谷」として、城主不詳、山の高さ約 200 間、西向きで東南に山続きとなり、本丸（14 間四方）、屋くら丸２つ（東は長さ７間、横 15 間、西は長さ 12 間、横８間）、本丸の西にかんへい丸（東西６間、南北 11 間）、北西に馬場（東西 50 間、南北 11 間）、本丸に明神社があると記載されているとする。『作陽誌』には、「手谷堡」として、兼居城あるいは月田城とよび、楢崎弾正忠元兼が居城していたと記す。『勝山町史』には、月田城は元々手谷城とよび、牧左ヱ門の家臣池田新兵衛が守城していたが、天正元（1573）年に毛利氏が占拠したのちは楢崎元兼が城主となり、元兼が天正４（1576）年に高田城主となったのちの城主は不明なものの、天正８（1578）年の頃は草刈三郎左ヱ門重継が居城したと書かれている。表５史料 33 には、天文 10（1541）年頃、尼子詮久が美作・備中国へ攻め込んだ際に、「築田ノ城」の三浦氏を破って大勢を討ち取ったと記す。『美作国の山城』によると「花房家記事」に、元亀３（1572）年頃か、宇喜多氏の家臣花房職秀は毛利氏の抱える「つきだの城」を攻撃、城を奪ったとある。史料 97 には、天正２（1574）年頃、毛利輝元が重臣桂就宣を介して木原左馬允に月田に籠るよう命じている。（小嶋）

写真 21　遠景（西から）



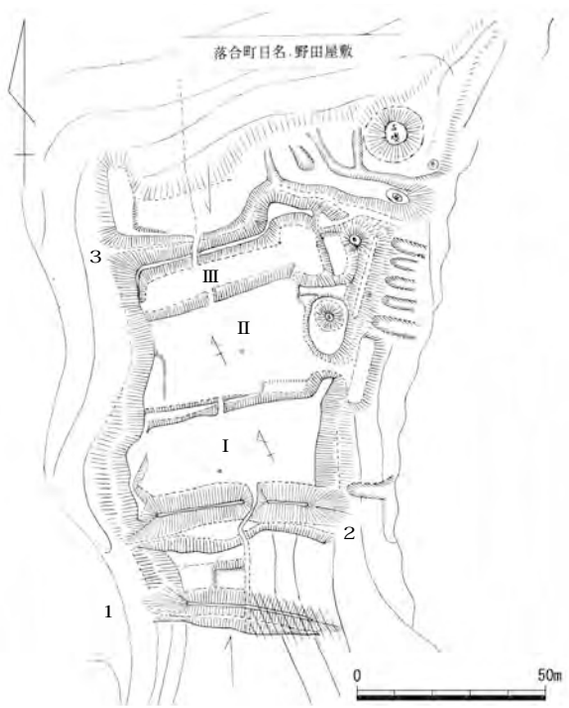
第 49 図　月田城跡縄張り図（1/2,000）

55　野田（のだ）屋敷跡　　真庭市日名　　地図 18 右

立地　屋敷跡は、宮山城跡が所在する山塊から北に樹枝状に延びる尾根筋のうち、一番北に延びる尾根の突端に所在する。この尾根の東西両側には谷川が北流し、北端は当麻川が形成した平野に向かって下がる急斜面である。

概要　南北両端を堀切によって区画された南北約 140 m、東西約 80 mの範囲を屋敷地とする。約 50 × 20 mを測る曲輪Ⅰは、南辺に高さ約２～ 2.5 mの土塁を、北辺東端に曲輪Ⅱに向かって突き出す幅約２mの突出部を備える。曲輪Ⅰから約１m低い曲輪Ⅱは、平坦に造成された約 50 × 25 mの規模を測り、この東辺には古墳墳丘とその周囲を掘り残して築いた櫓台及び土塁を築き、その南端に平入りの虎口が開口している。虎口の東側には、何らかの防御意図があったと思われる切岸が不明瞭な約９× ２mの平坦面が築かれる。曲輪Ⅱから約 1.5 m低く、約 50 × ８mの広さを持つ曲輪Ⅲは、その東辺に古墳墳丘を利用した櫓台とそこから南に延びる土塁を設け、それらの屋敷地内側には幅約５mのテラス面が認められる。この曲輪の北辺には横矢掛けを備えた高さ約１～ 1.5 mの土塁が築かれ、土塁の東端には櫓台及び北辺土塁によって守りを固めている虎口が存在している。南側尾根続きには、幅約６m、深さ 2.5 mの堀切１と、幅約９m、深さ約 1.5 mの堀切２を開削して守りを固める。堀切１北辺には、残存高約 1.5 mの土塁を設けていた。堀切１・２間の西半部には、性格不明の高さ 20 ～ 30cm の土塁が逆Ｌ字形に残存している一方で、東半部は植林等によって削平されている。幅約５m、深さ約２mの堀切３より北側には、古墳墳丘を利用した櫓台状の高まりや土塁状の高まり、さらに堀切状の溝が存在しているが、どこまでが屋敷に伴うものか判然としない。谷川に向かって急崖となっている屋敷地西側は防御施設が認められないが、緩斜面である東側は竪堀を５本開削している。なお、屋敷地内を南北に貫く通路によって土塁や堀切が削平されている。また、東斜面にも植林道が通り、改変を受ける。

文献・伝承　近世地誌類に記載がない屋敷地であるが、地元では「家中屋敷」や「倉屋敷」として使用されていたと伝わる。　　（小嶋）



第 50 図　野田屋敷跡縄張り図（1/2,000）
作図：難波澄夫

写真 22　曲輪Ⅰ南辺土塁（北西から）

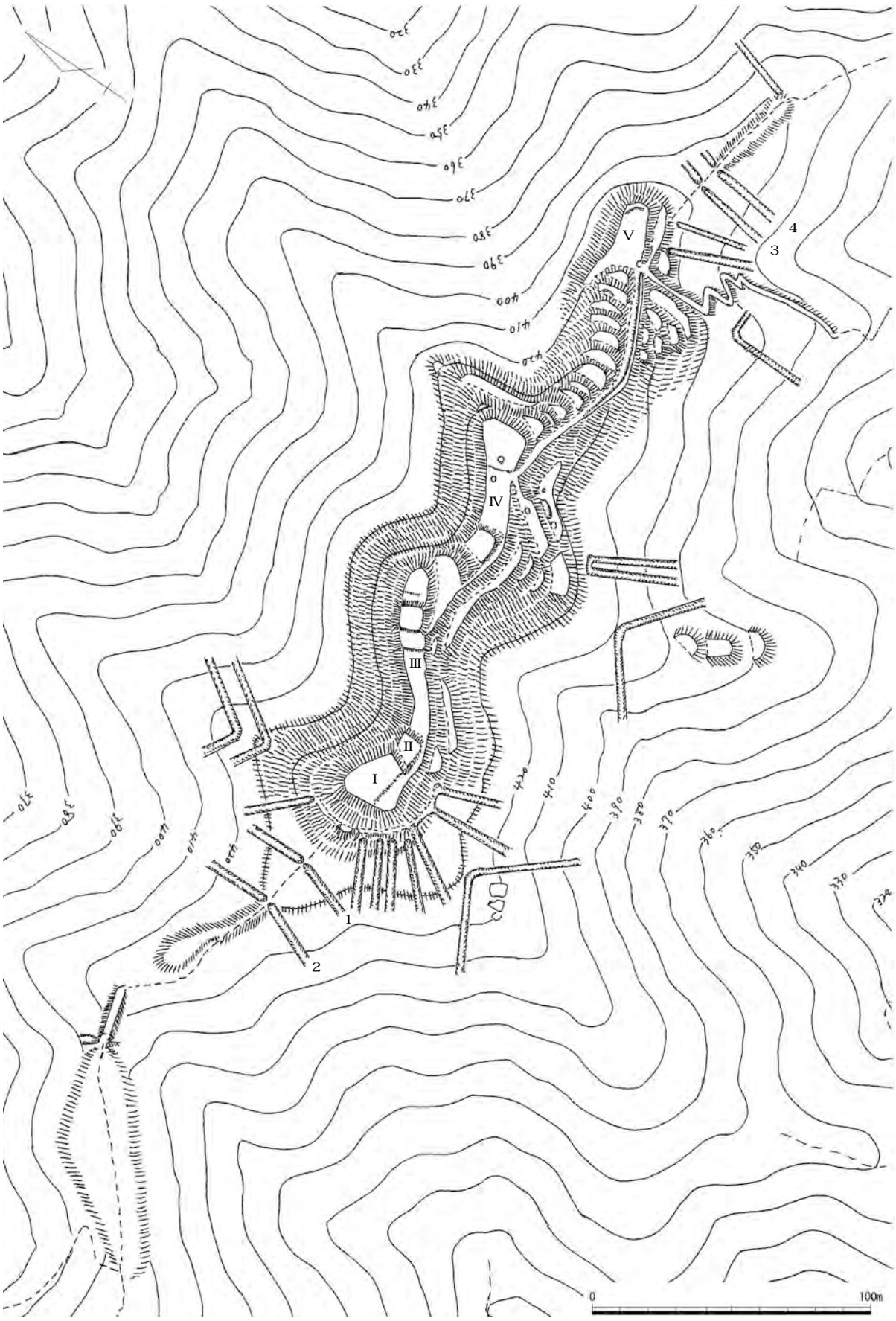
56　宮山（みややま）城跡　　真庭市高屋・開田・上市瀬　　地図 18 右

立地　城は、標高 526 mを測る深山から東に延びる尾根の先端頂部に立地する。この先端部から東側は、旭川に向って下がる急斜面である。旧落合町内の旭川が形成した平野部を一望し、南は備中川と旭川の合流地点、北東は篠向城跡、北に目を向けると金砕山城跡や大寺畑城跡を視認する。

概要　標高 450 mの頂部に曲輪Ⅰを配し、そこから東へ延びる尾根筋に曲輪を連続して築いた連郭式の山城である。城域は、曲輪Ⅰから北西側尾根続きに設けられた堀切１・２と、曲輪Ⅴから東側尾根筋に設けられた堀切３・４によって画され、その範囲は東西 350 m、南北 200 mを測る。城内は良好に保存されているものの、一部植林や山道によって改変を受ける。曲輪Ⅰ及びⅡの南側には、曲輪Ⅲから曲輪Ⅰに至る通路が認められるが、往時のものか判然としない。細長い曲輪Ⅲは、自然地形の段差を残しつつ東に向かって徐々に高くなる。曲輪Ⅳには、自然地形の段差を挟んで円形の穴が２か所存在していた。曲輪Ⅳから東側に急斜に下がる尾根筋には、各々の比高差が１～ 1.5 mの小曲輪を 10 面以上連ねているが、なかには切岸が明瞭でないものも認められる。また、これらの曲輪の南側は、植林道と思われる山道によって改変を受ける。これら小曲輪群を下りきった場所には、東辺に土塁が残存している曲輪Ⅴが設けられる。曲輪Ⅰから北西・北・南に延びる尾根筋には堀切を設けて守りを固め、とくに南側には横堀と接続する竪堀が７本設けられる。また、曲輪Ⅲ―Ⅳ間と曲輪Ⅴ西端から南に延びる尾根筋にも幾面かの曲輪を配し、さらにこれらから南は急斜に下がるものの、やや平坦になった場所に竪堀状に斜面へと続く堀切が存在する。

文献・伝承　築城年代は定かではないが、『落合町史　通誌編』には、『日本柔術の源流　竹内流』に天文 22（1553）年５月 13 日、尼子勢は美作・播磨の攻略をめざし本隊は東進、伝承によれば尼子氏の部将三沢三郎左衛門と岸某は 3000 騎を率いて垪和氏の守る真島郡の高屋砦を攻めるとあると記し、さらに『美作国古城跡』に「高屋城市又次郎」の名がみえることから、天文の終わり頃から永禄年間に作られたと記載している。城主もしくは在番の部将は、『美作国の山城』によると、『古城之覚』では真島郡高屋村の「高屋」として、城主を宇喜多秀家の陪臣市又次郎、別に同郡市瀬村の「宮山」として城主を同じく秀家の陪臣市瀬三郎兵衛とすると記載している。また、『作陽誌』には、「宮山城」として、宇喜多家の将小瀬中務・市三郎兵衛が守ると記す。表５史料 169 には、天正８（1580）年３月下旬、宮山城に小瀬修理・市三郎兵衛・新見平内丞が籠るとし、天正９（1581）年６月 25 日に岩屋城が落城、篠向城も６月 29 日に退去し、真島郡内の宇喜多方の城が宮山城１城になったことから、直家の命で宮山城から退去したと記載する。表５史料 346 には、その後に宮山城に在番した毛利氏武将の有福元貞（民部大輔）と和智元郷の名がみえる。　（小嶋）

写真 23　曲輪Ⅴから北方を望む（南から）



第 51 図　宮山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

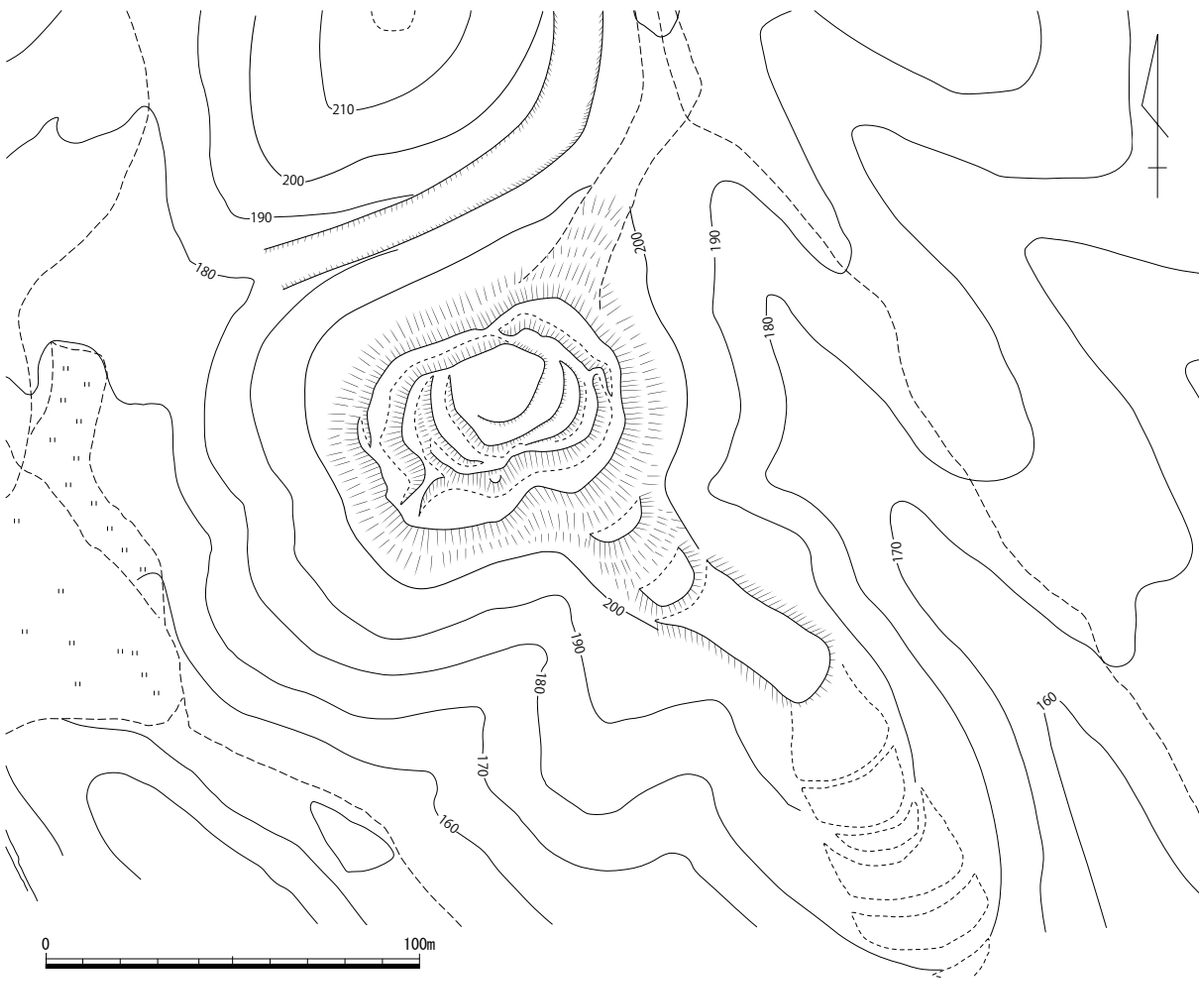
57　城山（じょうやま）城跡　　真庭市上市瀬　　地図 18 右

立地　深山から南東に延びる尾根の先端付近に立地する。尾根筋は当山城付近で一端切れ、再び高まった頂点付近が主郭となる。標高は 217 mを測り、麓との比高差は 60 mほどになる。

概要　尾根頂部付近に平面規模 25 × 25 mの主郭を置き、その周りを幅３mほどの帯曲輪を２面配する構造である。２面目の帯曲輪南西側には、スロープ状の高まりが残った箇所がある。この高まりは、尾根筋と直行しており、帯曲輪の掘った際の残存であった可能性もある。

南東側に伸びる尾根筋上には、３面の曲輪が連なっていた。各曲輪の幅は 15 m程で、長さは先端に向けて５m、10 m、40 mと長くなるのが特徴である。さらに曲輪は、尾根先端付近にまで伸びていた可能性もある。主郭北側は、地形が急峻であり、切岸の高さが３～４mほどにも達していた。この山城の周りは植林が進んでおり、主郭や曲輪の中には植林による浸食によって損壊しているものがある可能性も考えられる。

文献・伝承　『落合町史』では、弘治元（1555）年に妹尾孫九郎が備中国からやって来て、城山の地に砦を構えたとしている。　（小林）



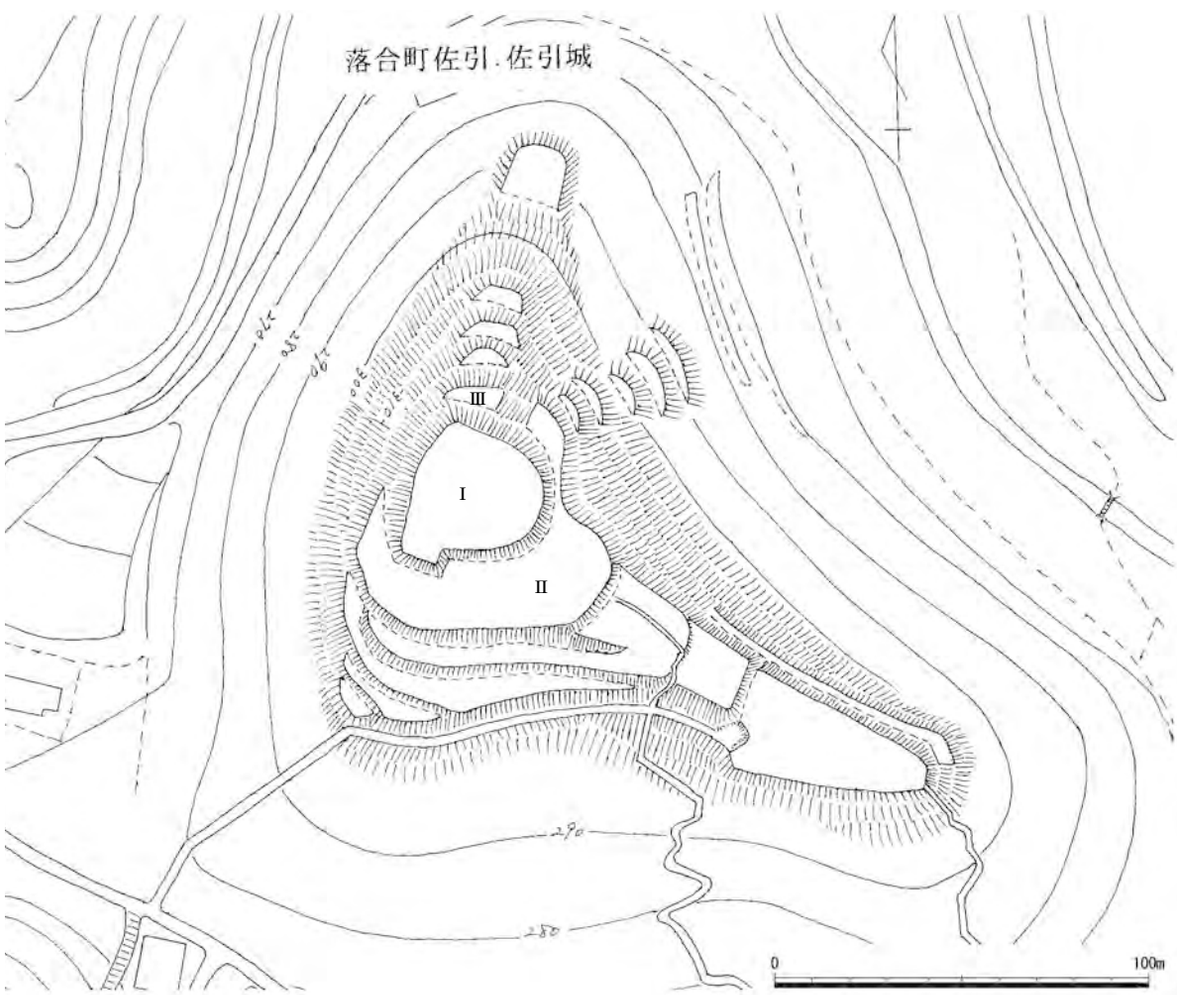
第 52 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

58　佐引（さびき）城跡　　真庭市佐引　　地図 18 左

立地　標高 320 m、平地との比高差約 50 mの独立丘陵頂部に城は立地する。この丘陵の南北両裾には、丘陵東端で合流する谷川が流走している。真庭市一色から佐引を経て月田に至る往還の旧落合町側出口を押さえる。

概要　城は、頂部から北及び西へ延びる尾根筋に曲輪を連ねた連郭式の山城であるが、後世の植林及び畑作等によって改変を受けていた。中央部に約 1 mの高まりを残した曲輪Ⅰは、高く急な切岸を備え、その南辺西半を横矢掛けを意図するように凸状に突出させているが、往時のものか判然としない。曲輪Ⅰを取り囲むように設けた曲輪Ⅱの東側中央部には、高さ約 1 mの土壇状の高まりが認められた。曲輪Ⅱの南辺切岸の高低差は約 2.5 mを測るが、東辺では約 1.5 mしかない。曲輪Ⅰとの比高差約 5 mを測る曲輪Ⅲ以北は、小曲輪を連ねている。

文献・伝承　山全体が「城ウネ」という地名である。『作陽誌』では、「佐引堡」として「不知何人住」と記す。『美作古城史』には、杉系図に「佐引城主の後裔中山次郎右衛門」とあることから、中山某が居城したと推定されると記載する。　（小嶋）



第 53 図　佐引城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

59　注連山（しめやま）城跡　　真庭市落合垂水・西河内・下市瀬　　地図 18 右・19 左

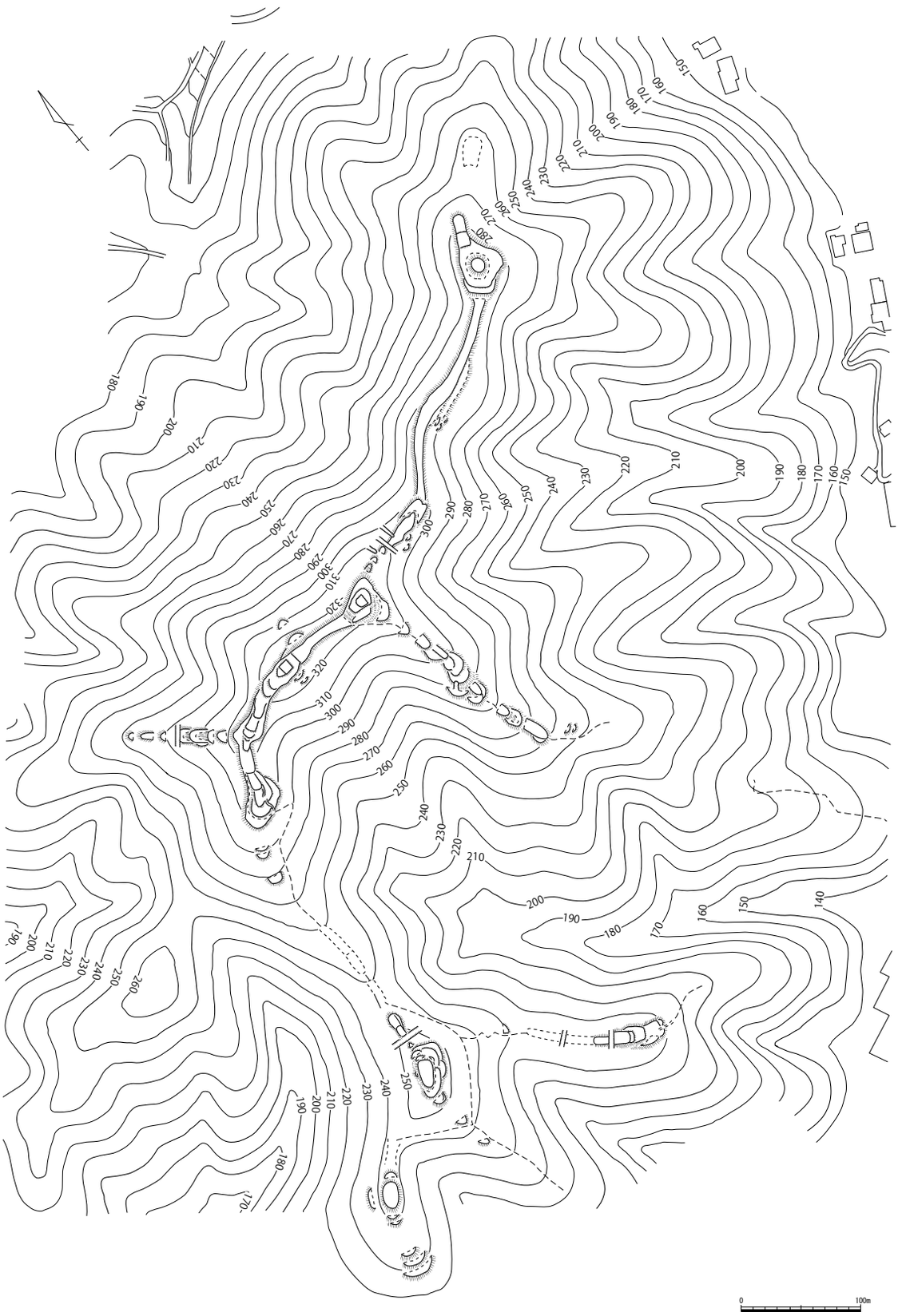
立地　東側に旭川、南側に備中川、西側に西河内川に挟まれた、標高 320 m級の独立丘陵頂部に位置する。当城の東南側の麓には、旧落合町市街地が広がる要衝の地である。また北側には宮山城跡、篠向城跡が、南側～南西方向にかけて真木ヶ城跡、石ヶ城跡、八ヶ城跡、栗原城跡などが見渡せる絶好の眺望である。

概要　頂部の主郭を中心に、そこから派生する尾根筋上にそれぞれ曲輪を連ねた全長 800 mほどの大型山城である。主郭は長さ 30 mほどでそれほど大きくなく、現在では神社が鎮座している。主郭の西側には、大小 10 程の曲輪が続く。主郭直下の曲輪の切岸は、高さ２mほどあり、堅固な造りである。また南西側に折れた曲輪群先端付近も２～３mほどの急峻な切岸が築かれていた。北西方向に派生する尾根筋には、５以上の曲輪が連なる。この筋は高さ約５mにも達する切岸が数箇所あり、また堀切も築かれていた。主郭の東側約 60 m先には、櫓台程度の平坦地をもった曲輪が存在する。この箇所は、帯曲輪を２面配し、さらに南側に向かう尾根筋にも 10 弱ほどの曲輪が続く。特に頂部直下は切岸が約５mと高い。この頂部の東側斜面は、高さ約６mほどの急峻な地形であり、その先には堀切が築かれていた。当城はこの堀切から西側の曲輪群までの約 300 mが一応の主要範囲と思われるが、西側尾根筋のさらに南側約 200 m先と、東側曲輪群の約 250 m先にそれぞれ出丸状の曲輪群が存在する。特に南東端に位置する曲輪群は、帯曲輪を２面配し背後は堀切で画していた。またここから３方向に派生する尾根筋にも、曲輪が築かれるなど重厚な造りである。この尾根筋下には現在「仏土寺」があり、山道も存在するなど比較的なだらかな地形が続く。当時はこの方面を入口として意識していたと考える。当城は、それぞれの痩せ尾根に細い曲輪を幾重にも連ねる構造が特徴的である。また竪堀などの防御施設がなく、また堀切なども小さいものしか存在しない。その代わりに各曲輪群は、切岸を高く造り、それにより守りを固めていた。

文献・伝承　城名の由来はもともと当地に木山神社があり、別地に移る際に注連縄を張ったことからきている。『作陽誌』では、比多淡路守が砦を築いたとあり、井原左衛門が居城していたといわれる。また『古城之覚』では、天正期に小瀬右京進広勝が居城したとも言われる。（文献 133）　　（小林）

写真 24　遠景（南から）

写真 25　主郭南側切岸　（南から）



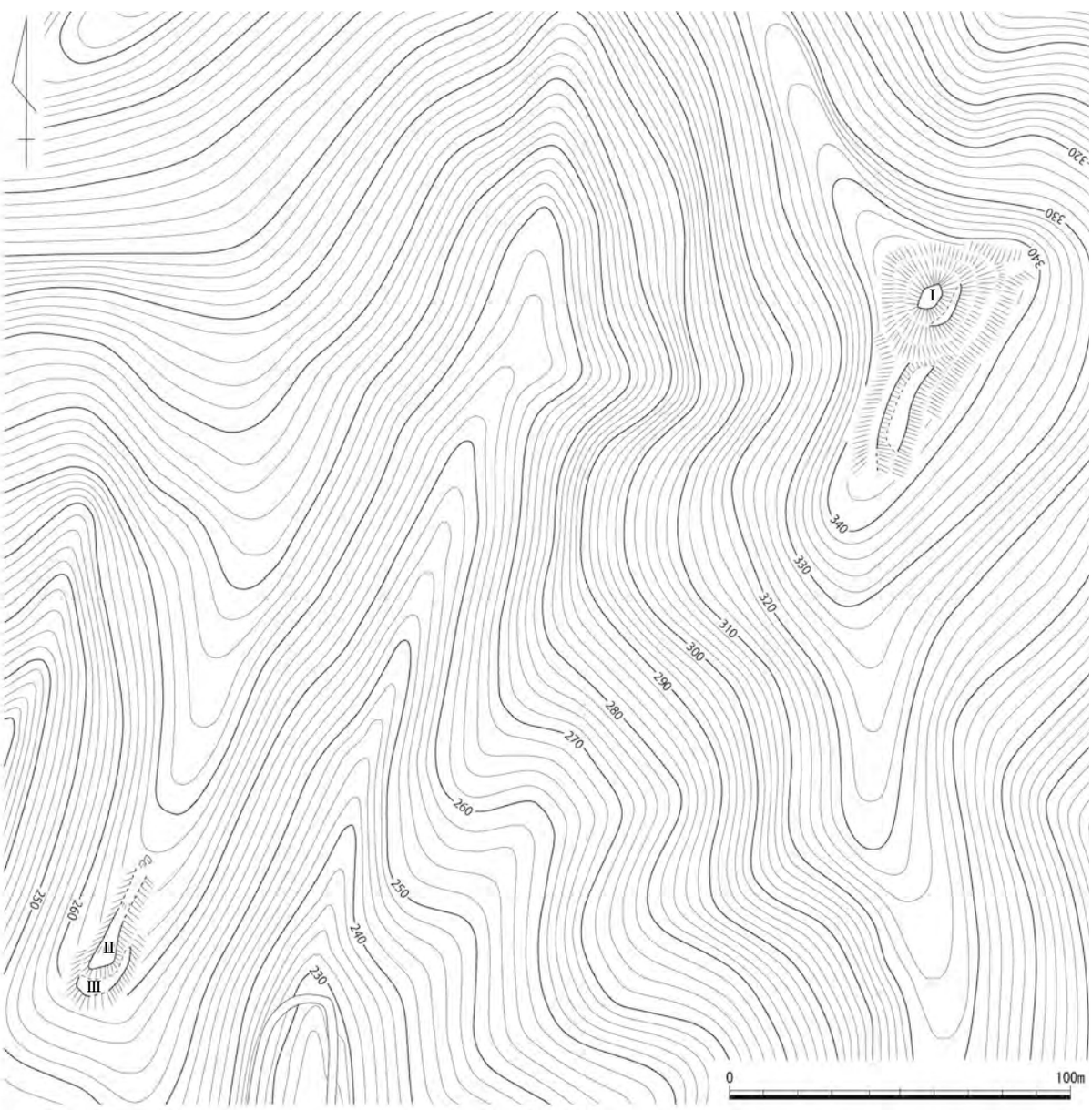
第 54 図　注連山城跡縄張り図（1/5,000）　作図：難波澄夫

60　蜂ヶ城跡（はちがじょうあと）　真庭市一色・栗原・鹿田　地図 24 右

立地　城は、備中川左岸に所在する木樵山から南に延びる２か所の尾根筋に立地している。備中川を挟んだ対岸には、栗原城跡が築かれている。

概要　東側は標高約 350 ｍの尾根筋頂部に曲輪Ⅰを配し、その南東側に狭長の腰曲輪を構えている。また、頂部から南に延びる尾根筋の東側斜面にも平坦面が認められるものの、城館関連遺構かどうか判然としない。西側は、尾根の先端部に曲輪Ⅱ・Ⅲを設けている。

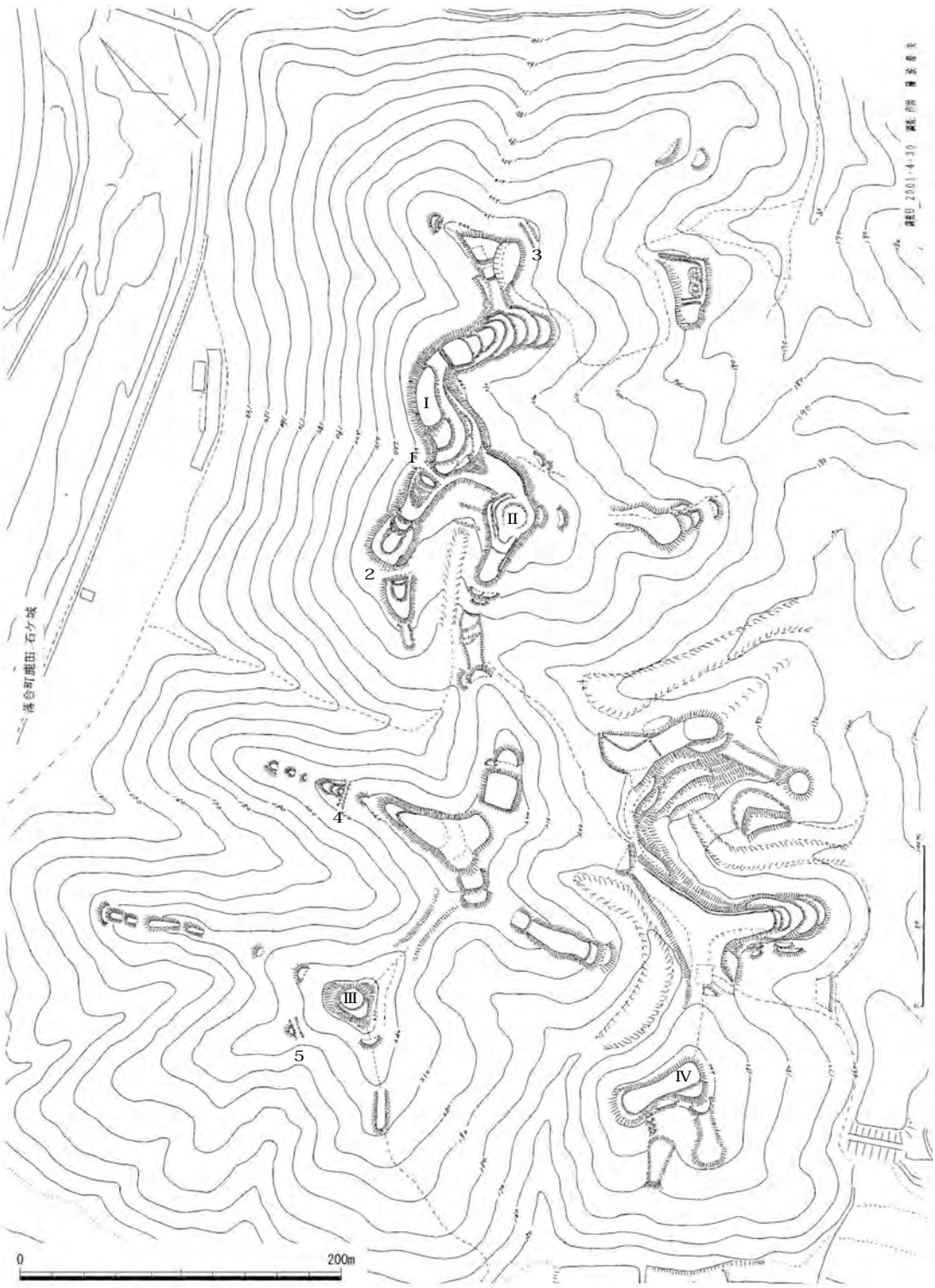
文献・伝承　別名「八ヶ城（はちがじょう）」とも伝えられる。『美作古城史』には、延享４（1747）年の栗原村明細帳に三浦与三衛門の古城跡と書かれているが、この三浦与三衛門は毛利氏の軍監の三輪与三兵衛の誤伝と想定されると記す。（小嶋）



第 55 図　蜂ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

62 石ヶ城跡（いしが）　真庭市鹿田　地図 24 右

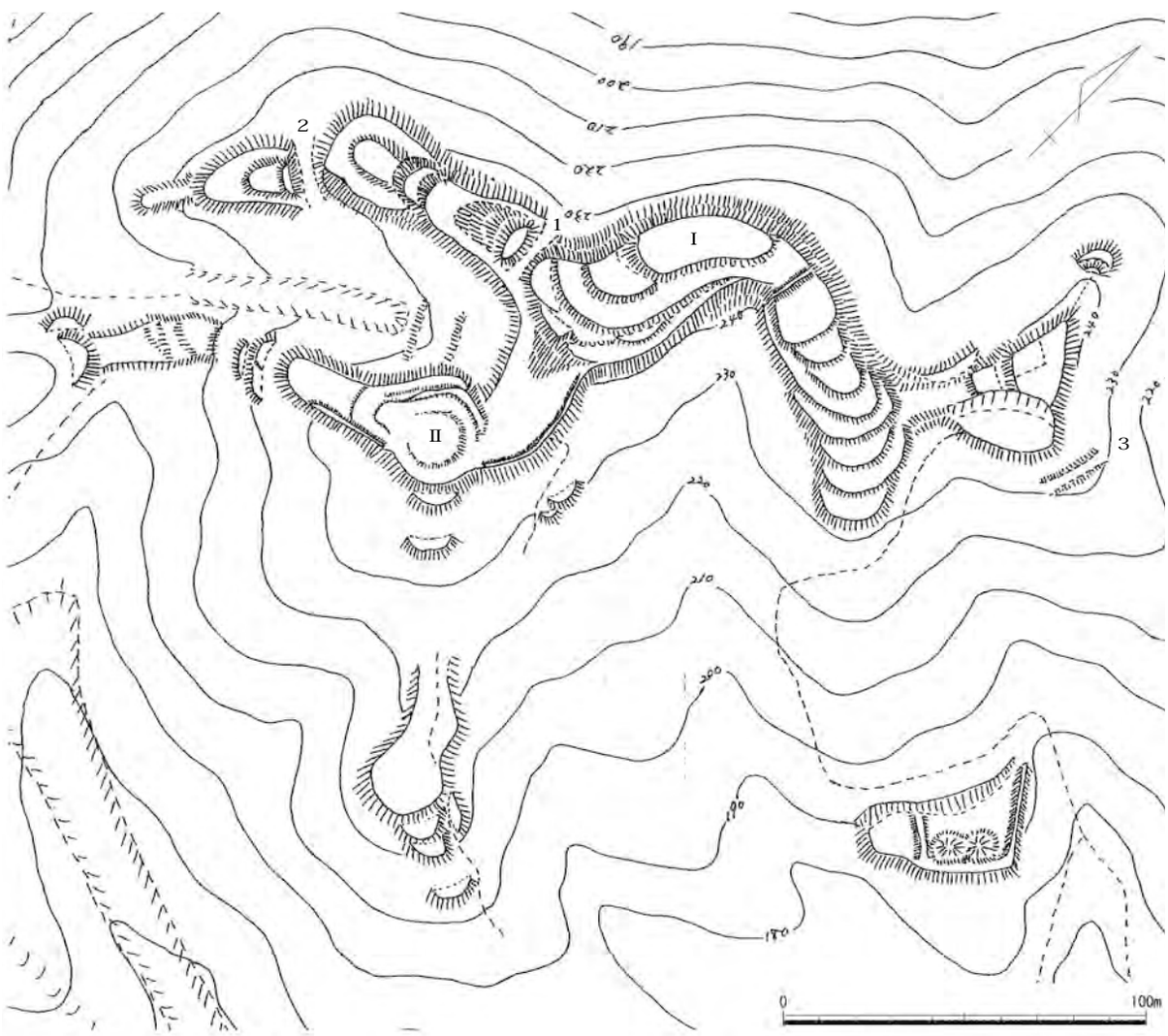
立地　城が所在する山は、北側に備中川、東西両側に備中川に注ぎ込む小河川が流走し、南側は低い鞍部によってのみ背後の山塊と繋がっており、ほぼ独立丘陵と言ってよい。備中川が形成した平野を一望し、東側の小河川の対岸には真木ヶ城跡が所在している。



第 56 図　石ヶ城跡縄張り図（1/4,000）　作図：難波澄夫

概要　５か所の峰部及びそれらから派生する尾根筋の頂部や鞍部に曲輪や堀切を構えた城で、美作国内でも屈指の規模を誇るが、造成が甘い曲輪も認められる。また、植林による改変のため、曲輪の評価が難しいものもある。主郭は東峰部の頂部に配された曲輪Ⅰと想定され、その曲輪から東西に延びる尾根上には、高さ１～２ｍの切岸を備えた曲輪や前面に土塁を設けた堀切１～３を開削し守りを固める。曲輪Ⅰから尾根鞍部を挟んで南に所在する峰部には、曲輪Ⅱを取り巻くように曲輪が配されている。中央の峰部には広い平坦地が存在するのみであるが、ここから北西に延びる尾根筋に堀切４が開削されていることから、何らかの形で利用されていたと想定される。なお今回の調査で、堀切４以北は林道によって消失していることを確認した。西端峰部には、径 15 ｍ程の曲輪Ⅲを築き、さらに西へ延びる尾根の鞍部に堀切５を掘削していた。また北西に延びる尾根筋には、小曲輪を連ねている。南西峰部に設けた曲輪Ⅳは、高い切岸を備えているものの、内部に自然地形を残す。

文献・伝承　『作陽誌』には、「石城附真木城」として辻新次郎が居城していたとし、天正９（1581）年の宮山城攻撃に参加した新次郎へ宛てた毛利輝元からの感状を記載する（表５史料 103）。『美作古城史』では、辻新次郎は菅家一族で、永禄年間より毛利氏の幕下となり、武功を挙げたと記す。表５史料 103 から、辻新次郎は天正９年に真木山城も守備したことが分かる。（小嶋）



第 57 図　石ヶ城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

63　真木（まき）ヶ城跡　　真庭市鹿田・下方・田原山上　　地図 24 右

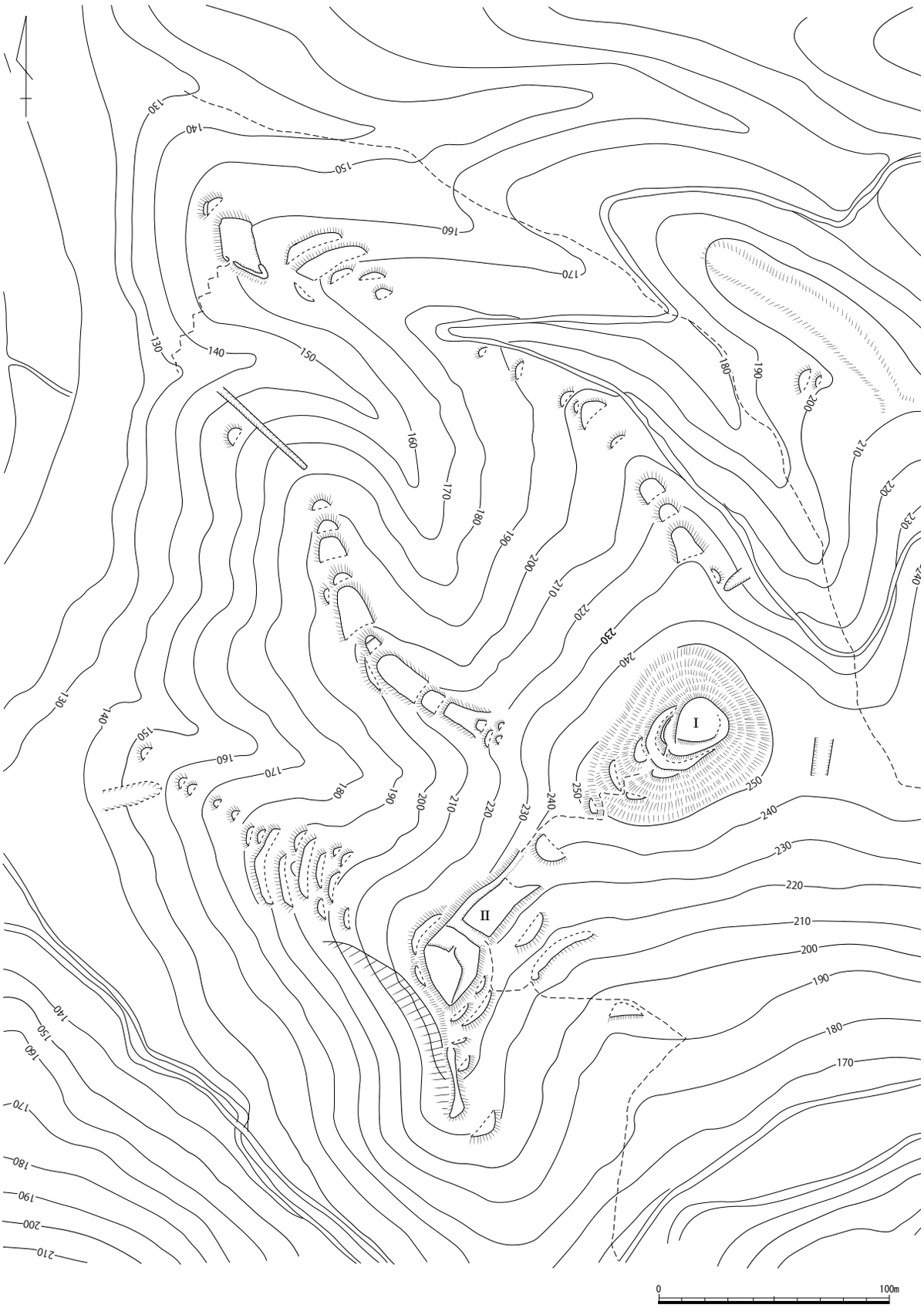
立地　備中川と大谷川が合流地点する地点の東側にあり、標高 370 m級の山塊から西へ向かって派生した尾根先端頂部に位置する。大谷川を挟んで南西隣の尾根上には、石ヶ城跡が近接する。また栗原城跡や八ヶ城跡などと同じで、備中川右岸に位置する山城である。

概要　標高約 270 m前後の頂部にある主郭（Ⅰ）は、長さ約 20 mほどの小さな平坦面である。この主郭から南西側の尾根筋に小さい曲輪が５面ほど続くが、３面目に大型の石で囲んだ虎口状の施設がある。この尾根筋の先端には、大きな曲輪（Ⅱ）が付随し、先端方面に向けて虎口状の施設が配されていた。主郭東側にある鞍部には、幅 10 mほどの堀切があり城域を画している。この堀切から主郭を含め曲輪Ⅱまでの約 200 mが、当城の主要な部分であったと思われる。この山城最大の特徴は、主郭の四周が高さ約 20 mの急峻な斜面によって守られていることである。南西方向に延びる曲輪群以外の箇所は、主郭北西側にあるＵ字状の竪堀が唯一の人工物であり、他は自然地形によって防御していた。さらに主郭から延びる２方向の尾根筋と、Ⅱから延びる２方向の尾根筋の計４方向にそれぞれ曲輪群が続く。Ⅱの南側にある曲輪群は、小さいものが３面ある。備中川に向かう北西方向の尾根筋には、規模の小さい曲輪が 10 以上連なる。さらに主郭から 30 ～ 40 mほど下った箇所から備中川に向けて延びる２方向の尾根筋には、比較的大きい曲輪を連ねる。まず南側の曲輪群は、長さが約 30 ～ 40 mのものもあり、切岸の高さは４～５mにも達するものもある。北側の曲輪群は、規模がそれほど大きくないが、麓付近まで延びる。先端付近の曲輪のみは、長さ 30 m、幅 50 mを測る大型の施設である。当山城は、主郭を急峻な斜面で守り、各尾根筋に長大な曲輪を連ね、全長は 300 mを超える。近接して築かれた石ヶ城跡も長大な規模であり関連が考えられる。

文献・伝承　『作陽誌』には「石城附真木城」と記される。もともとは備前虎倉城守の伊賀氏の支配下にあったようで、『下河内牧家文書』には天正年間に牧菅兵衛尉が攻め落としたと書かれる。『美作古城史』では、その後毛利方の三輪与三兵衛が居城し、さらに鈴木孫右衛門が入城したとする。表５史料 357 によると、鈴木氏が天正 11（1583）年に宇喜多氏に味方し、秀家が喜んだとされる。当地は、最終的に宇喜多方の城となった。　（小林）

写真 26　遠景（北東から）

写真 27　主郭東側の切岸（南から）

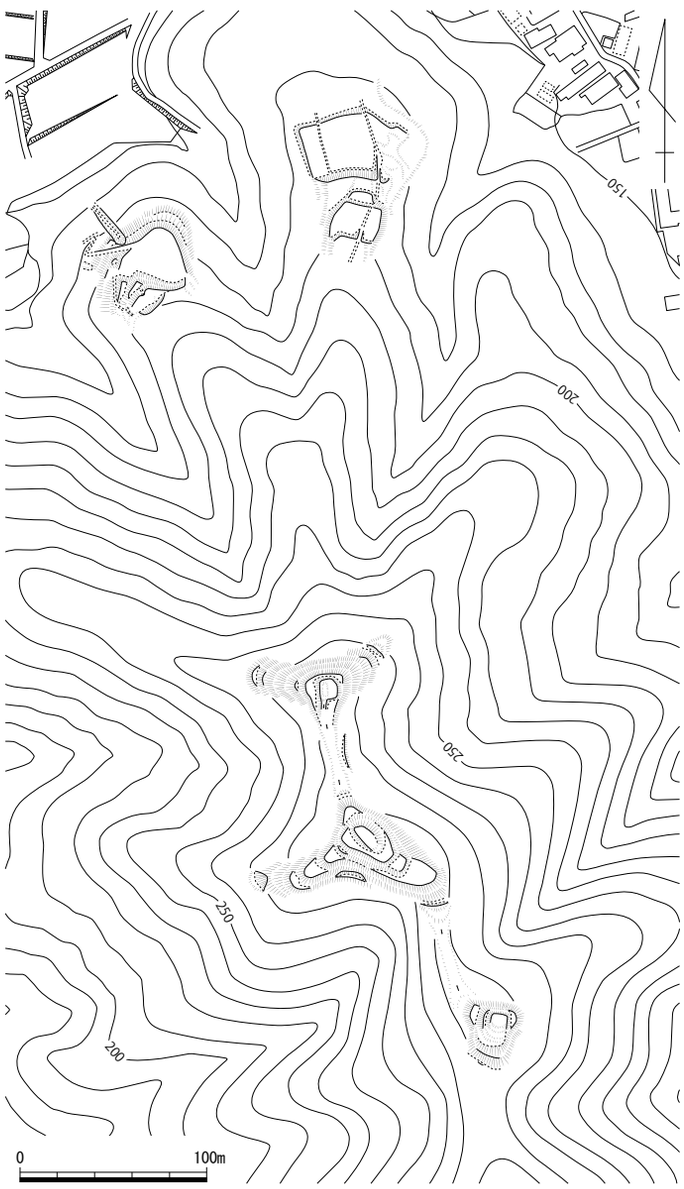


第 58 図　真木ヶ城跡縄張り図（1/2,500）　作図：難波澄夫

65　栗原（くりはら）城跡　　真庭市栗原　　地図 24 右

立地　備中川南岸の山塊から北へ延びる尾根筋の高所と先端緩斜面とに立地する。北西方向の一色の平野や、北東方向の鹿田の平野など備中川流域を見通せる。

概要　尾根先端部は二股に分かれ、その両方の緩斜面に広い平坦地が認められた。西側尾根の平坦地は、平面形が一辺約 30 mの三角形を呈し、北縁の切岸高は約３～４mを測る。南側は尾根筋を掘削し、高さ約５mの崖とする。北西縁下方に深さ約１mの竪堀１本が確認でき、南西に接して小さな平坦地を造っている。南の崖上方には階段状に３面の平坦地を造っている。１～３mの切岸をもち、下方の２面の北角は直角である。最上段の平坦地の背面は尾根を削って高さ約３mの崖とし、南西縁には高さ約 30㎝の土塁状の高まりが認められる。東側尾根の平坦地は上下２段あり、下段のものは約 40 × 30 mの長方形を呈する。北縁は高さ約２mの切岸状を呈し、南側は尾根を削り高さ約２mの崖とする。上段の平坦地は約 20 × 15 mのややいびつな長方形を呈し、北に接して小さな平坦



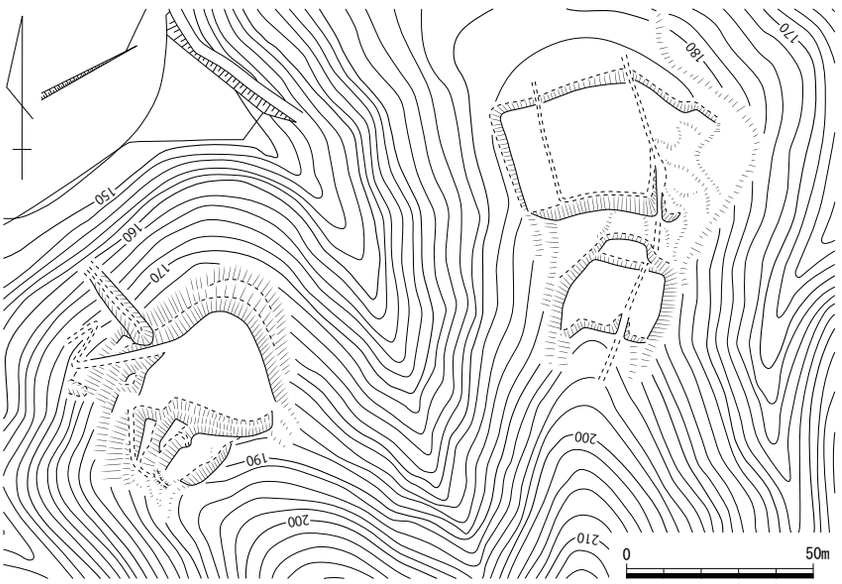
第 59 図　栗原城跡縄張り図（1/4,000）

写真 28　遠景（北西から）

写真 29　東尾根平坦地（南から）

写真 30　西尾根平坦地（西から）

地があり、段差は約１ｍである。北西縁の段差は約２ｍある。これらの平坦地から南に尾根筋を比高約 100 ｍ登った高所に２面の小さな曲輪があり、ここから西に下る尾根筋には、約 1.5 ｍ下に小曲輪、その約 10 ｍ下に背面に切岸を持つ曲輪を設けている。また、北東尾根下方に深さ約３～0.5 ｍの堀切がある。南に尾根筋を約 80m 行くと再び高所があり、８面の曲輪がある。切岸高は約１～４ｍを測る。曲輪群を挟んで北側と南側に、現状では浅く窪む程度の堀切を設け、南西に下がる尾根の下方に高さ約３ｍの切岸を設けている。この高所からさらに南約 120 ｍに高所があり、小さな曲輪３面を造っている。また、中央の高所は城内でも最高所にあり、主郭と推定される。



第 60 図　栗原城跡尾根先端部縄張り図（1/2,000）

第 61 図　栗原城跡尾根高所部縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『美作国の山城』は、『古城之覚』は真島郡栗原村の「栗原」、城主栗原惣兵衛とし、『美作古城史』所収「延享４年（1747）の栗原村の明細帳」は「前川山」は栗原惣兵衛の古城跡とあるとし、『美川村郷土誌』は、古市場にあり、城主は栗原与惣兵衛 (惣四郎) といい、城跡に礎石が見られるとし、『落合町史』は、北の中腹に「前川城」と地元で呼ばれる館城、山上の城跡を「水船城」と呼ぶことがあり、総称して「栗原城」と呼ぶようであるとする。

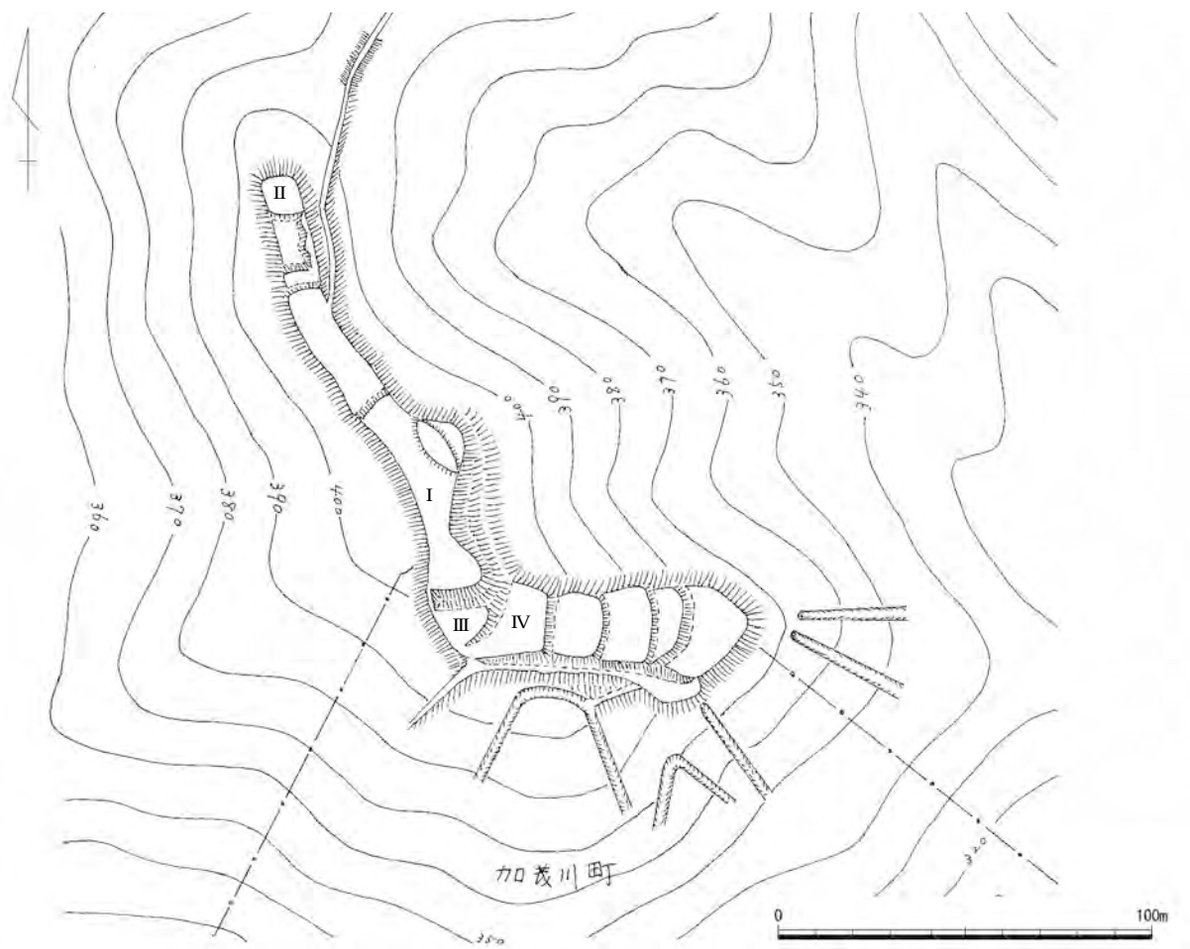
（物部）

66　都我布呂城跡（つがふろ）　真庭市上山・加賀郡吉備中央町溝部　地図 24 右

立地　城は北から延びる尾根の先端頂部に立地し、西方約 2.5km には備前・備中・美作の国境が接する三飛峠がある。

概要　標高 410 mの頂部に高さ約３mの切岸を備えた曲輪Ⅰを配して主郭とする。この曲輪南辺西端から曲輪Ⅲ、さらには曲輪Ⅳへと続く通路が認められるが、林道として改変されており、往時の姿を反映しているのか判然としない。曲輪Ⅱ北辺の切岸は急で、高さ約５mを測る。曲輪Ⅳから東南東に延びる尾根筋には、各々の比高差が１～ 1.5 mの曲輪を 4 面連ね、さらにこの曲輪群の東～南斜面にある小尾根筋を遮断する「U」または「V」字の堀切を設けていた。

文献・伝承　別名上山城（ういやま）、栂森城（つがふろ）、都我風呂城（つがぶろ）とも伝えられる。『美作国の山城』では、真島郡上山村の「上山」として、城主を由井宗四郎、備前国との境で、「つかふくロ」とすると『古城之覚』は記すとする。『作陽誌』では芦田作内・新山玄蕃が守るとし、『美作古城史』には芦田作内を宇喜多家の士とするものの毛利家家中とも考えられると記載する。史料には、天正８年正月に小早川隆景がこの城の普請が整ったこと（表５史料 139・140）、同年同月に毛利輝元が在番していた河北木工助や高須元与（彦次郎）に対して給地を与えること（表５史料 143・144・146）、同年閏３月に小早川隆景と吉川元春が「栂森」に陣替えしたことなどを伝えたもの（表５史料 181）がある。　（小嶋）

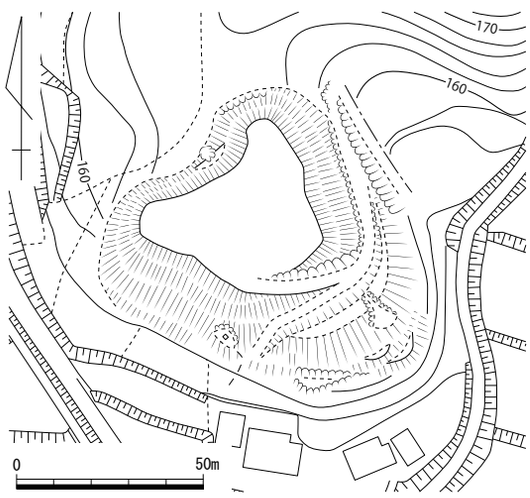


第 62 図　都我布呂城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

67　城山（じょうやま）城跡　　真庭市一色　　地図 24 右

立地　備中川北岸の小平野の北縁に位置する舌状尾根先端に立地する。周囲の田面との比高約 10 m を測り、一色の平野を見渡すことができる。

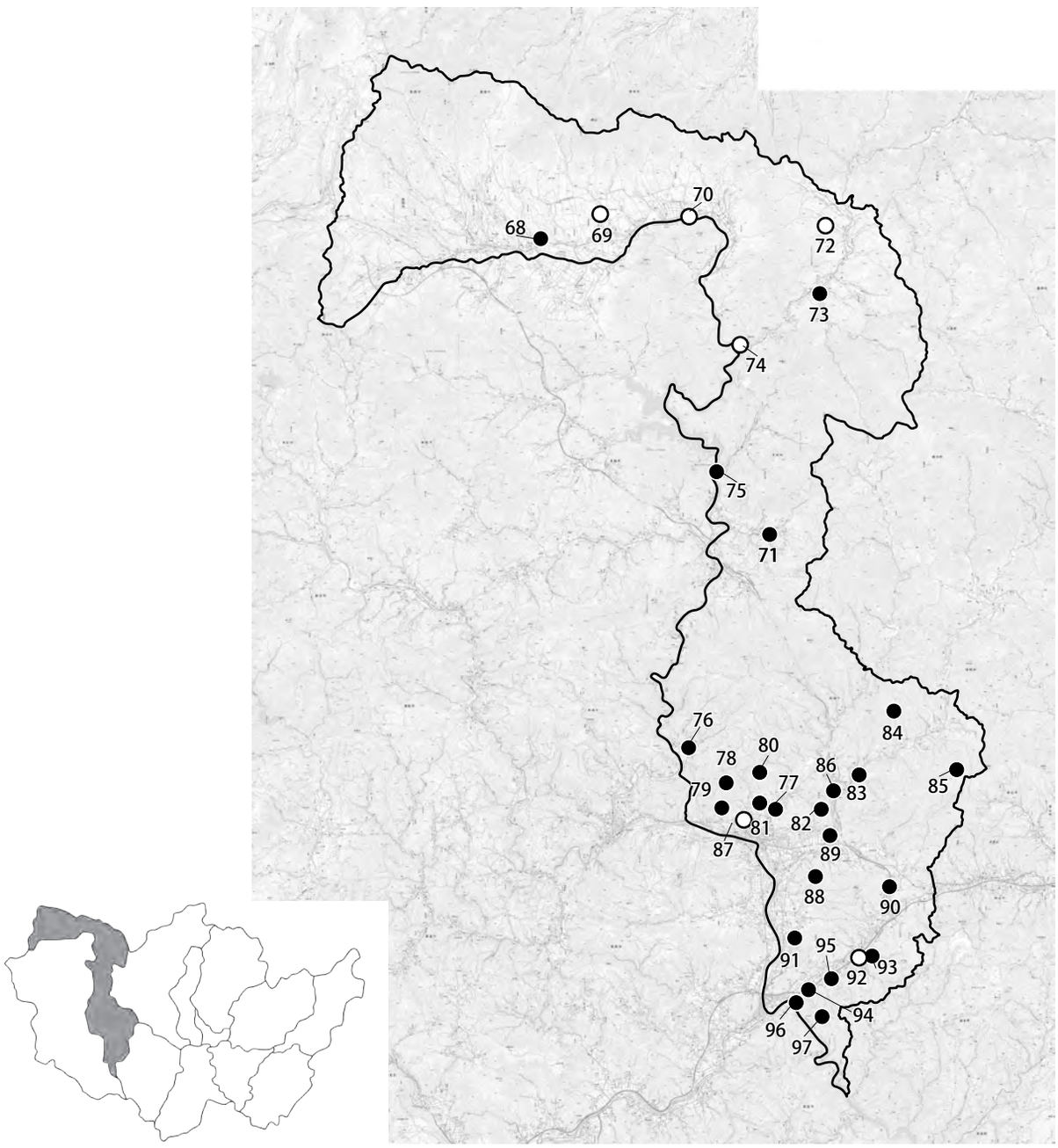
概要　尾根先端の高所には約 40 × 30 mの平坦地があり、周囲は 3 ～ 6 mの切岸となる。かつて畑地として開墾されているが、曲輪跡を利用したものと考えられる。現在、一体は植林され、東～南東側斜面に林道が曲輪まで通じている。南から東側の切岸直下は林道の掘削により、溝状の地形を呈しており、横堀あるいは堀切跡を利用して道を造った可能性がある。その南側は緩斜面で、その先傾斜が急になる辺りに小さな平坦地が 2 面認められるが、曲輪かどうかはっきりしない。西～北切岸直下は平坦地が広がっている。南東側に横堀あるいは堀切を設けた単郭の城館と推定される。



第 63 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『美作国の山城』では、付近に「城山」「城の前」「マトバ」「中村」などの地名が残るとし、村落に割拠する土豪層の持城と推定する。『落合町史』では館跡と評価する。　（物部）

第２節　大庭郡



68．日爪城跡
69．七屋敷跡
70．山名屋敷跡
71．田井城跡
72．殿屋敷遺跡
73．下和城跡
74．初和城山堡
75．湯山城跡
76．大壇城跡
77．茶臼山城跡
78．大寺畑城跡
79．陣山城跡
80．小寺畑城跡
81．羽庭城跡
82．砥石山城跡
83．神上城跡
84．二ツ山城跡
85．高山城跡
86．城山城跡
87．上ヶ市遺跡
88．篠向城跡
89．目木構跡
90．持家城跡
91．鳥越山城跡
92．名称未定
93．田楽城跡
94．赤野遺跡
95．高山城跡
96．逆巻城跡
97．土器尾城跡

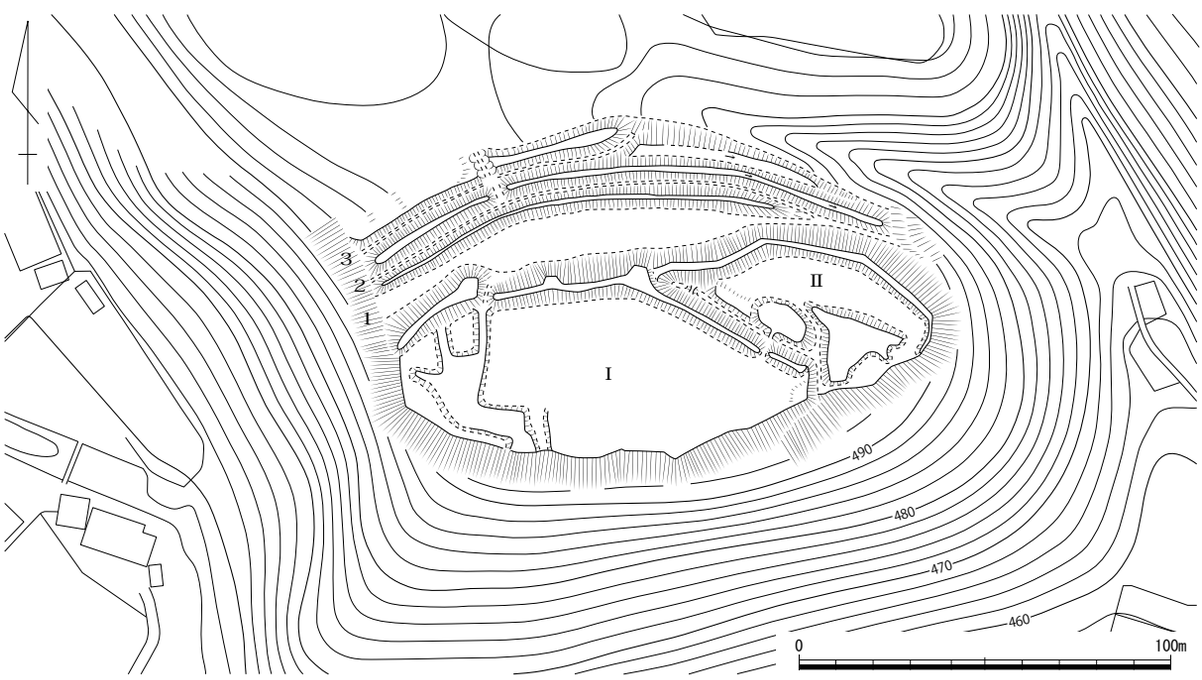
第 64 図　大庭郡城館位置図

68　日爪（ひのつめ）城跡　　真庭市蒜山中福田　　＜市指定史跡＞　　地図２左

立地　城は、蒜山高原から南に延びる台地の南端に所在する。この台地の南側は旭川が形成した平野部に向かって急角度で下がり、西側は旭川に注ぎ込む玉田川への急崖、さらに東側は谷が入り込んでいる。旭川を挟んだ南側の山塊には、粟住山城跡や経塚山城跡が所在する。

概要　蒜山高原へ続く北側を３条の堀切で遮断した台地南側を城域とし、その規模は東西約 150 m、南北約 90 mを測る。上面最大幅が 20 mを超える堀切１は、底面幅 10 m以上の箱堀を呈する。下底幅約６m、高さ１～２mを測る堀切１―２を分ける畛線は、西端から東へ約 110 m続いた後途切れ、その地点から堀切１と２の底面は合流している。堀切２－３を分ける畛線高は、西半で約５mを測るが、東に向かうにしたがい低くなり、東端で約 1.5 mとなる。この畛線は中央やや西側が途切れているが、堀切３北辺の削平されている箇所と一直線上に結ばれることから、後世に破壊されたのであろう。堀切３は東側の谷部まで掘削しておらず、約 70 m続いた後、緩やかに北東方向に曲がって開口する。これら堀切によって区画された南側の城内には、約 110 × 50 mの曲輪Ⅰと約 75 × 40 mの曲輪Ⅱが配される。多角形を呈する曲輪Ⅰは、草木の繁茂により現認できなかった場所があるが、西半部に２本の土橋状の高まりを含む不整形な高まりが認められる。北辺には、堀切に向かって凸状に張り出す櫓台が３か所築かれた土畛を設ける。土畛は、堀切１底面から約８m、城内から 1.5 ～２mの高さで、上面幅が 1.5 m前後と広い。西側櫓台の東側では、城内の土橋状の高まりに向う通路が取り付いているが、後世の改変かもしれない。北東辺にも北辺から続く土畛が築かれ、その中央南側に平入りの虎口が認められる。この土畛の前面となる曲輪Ⅱ西辺には、虎口へと続く土橋が設けられた横堀が掘削されている。

文献・伝承　城主や築城・廃城時期など伝わっておらず、詳細は不明である。　（小嶋）



第 65 図　日爪城跡縄張り図（1/2,000）

70　山名屋敷跡（やまな）　　真庭市蒜山上長田　　地図２右

立地　東流する旭川に南流する小川が合流する部分に形成された、自然堤防末端に立地する。

概要　敷地は南北が西で 50 m、東で 30 m、東西が 50 mの「L」字形を呈し、縁辺に土塁が巡る。土塁で囲まれた内部の広さは南北が西で 40 m、東で 22 m、東西が 38 m。土塁は残りのいい西側で基底部幅約６m、上幅約２m、高さ約２mを測る。土塁は敷地を全周していたと思われるが、現在は西側と東側に残る。東側の土塁は２箇所で口を開けているが、北側は新しい削平と考えられ、南側は幅約３mである。入口は北側にあったと考えられるが、詳細は不明。敷地の北～東を小川が流れ、天然の堀となっている。西側には幅 10 mほどの低い区画があり、堀跡の可能性がある。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『作陽誌』は「山名氏旧宅」は、大庭郡上長田村にあり、山名某が世間を避け同地に住んだとし、『日本城郭全集』は「山名砦」、『八束村史』は「花園のいわれ」で、花園集落の公会堂の場所は城跡で、山名某がいた頃、毛利氏の軍が旭川の方から攻め寄せ落城、公会堂の前には「ごもん口」という地名が残り、門前に広い花畑があり、地名の由来になったとするとする。（物部）

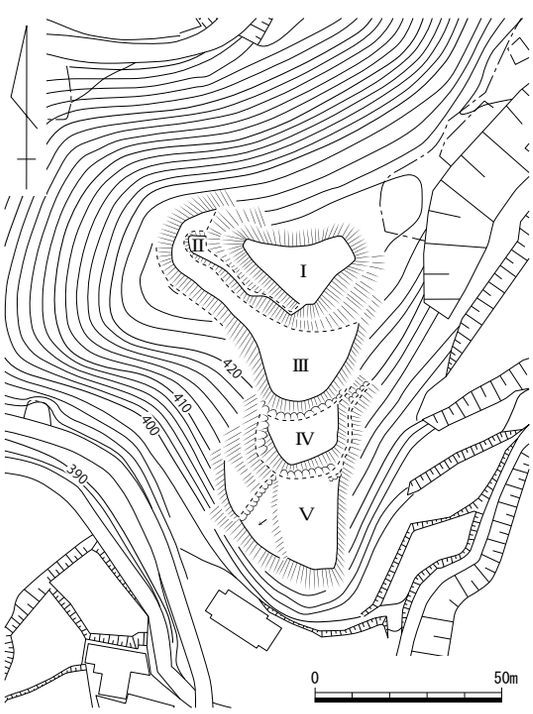
写真 31　土塁と堀跡（南から）

71　田井（たい）城跡　　真庭市社　　地図６左

立地　城は、標高 440 mの丘陵頂部に立地する。旭川に注ぎ込む社川が形成した谷平野を東から一望し、鏡野町富西谷へ至る往還の真庭市側出口に所在する。

概要　比高約 50 mの頂部に曲輪Ⅰを構え、そこから南及び西へ延びる尾根筋に曲輪を配している城である。曲輪Ⅰ南端には坂虎口が設けられ、そこから犬走り状を呈した幅の狭い通路が曲輪Ⅱ東端へと続く。曲輪Ⅰ・Ⅱの南～西側を取り巻くように築かれた曲輪Ⅲや曲輪Ⅲ南側の曲輪Ⅳ・Ⅴは、畑地造成による改変を受けているものの、その切岸は高く急峻である。北東側尾根続きには、後世の削平もしくは改変のためか堀切等の防御施設が認められない。

文献・伝承　「田井堡」として『作陽誌』に記載されている城である。『美作鏡』には、「田井城」として城主を美甘助右衛門と記す。（小嶋）



第 66 図　田井城跡縄張り図（1/2,000）

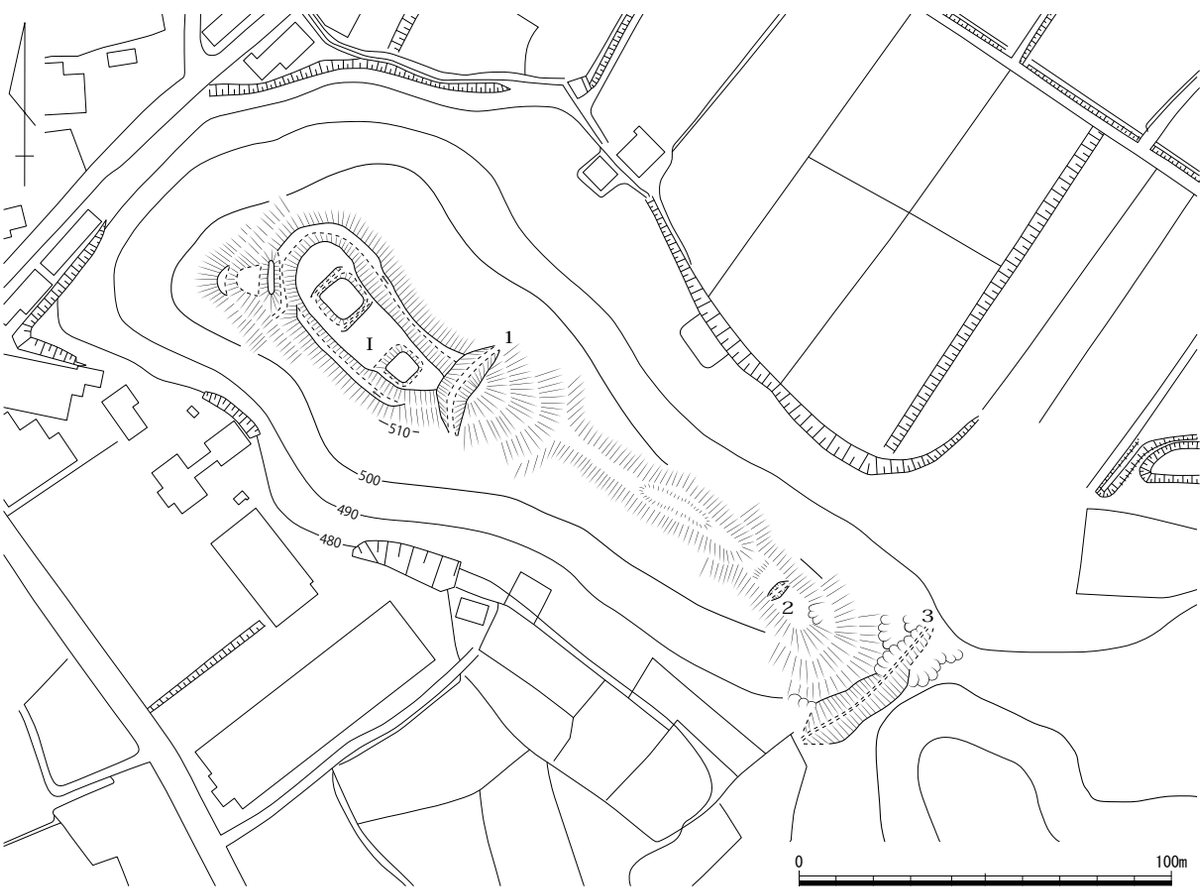
73　下和（したお）城跡　　真庭市蒜山下和　　地図３左

立地　城は、白髪山から北西に派生している痩せ尾根上に所在する。この尾根の先端部から堀切３までの尾根上は、平地との比高約 20 ｍで一定していた。下和川沿いの平野部を一望し、鏡野町富西谷から上杉越を経て真庭市蒜山下和に至る往還や下和川と植杉川の合流部を北東から見下ろす。

概要　幅約８ｍ、深さ約３ｍの堀切１から北西側のやや広くなった尾根先端頂部に、高さ約３ｍの切岸を備えた曲輪Ⅰを配している。高さ約１ｍを測る２基の方墳を取り込んで防御施設として利用しているこの曲輪の周囲には、幅２ｍ弱の犬走りを馬蹄形に設けている。この犬走りの北西側には、高さ約 50cm の土塁が遺存していた。自然地形を残している南東側尾根続きには、切通し道によって一部改変を受けた幅約 10 ｍ、深さ約４ｍの堀切３や堀切２を開削し、守りを固める。

文献・伝承　『作陽誌』に記載された「下和堡」に比定され、そこには下和村下鍛冶にあり、山の高さを 13 間と書かれている。　（小嶋）

写真 32　堀切３（南西から）



第 67 図　下和城跡縄張り図（1/2,000）

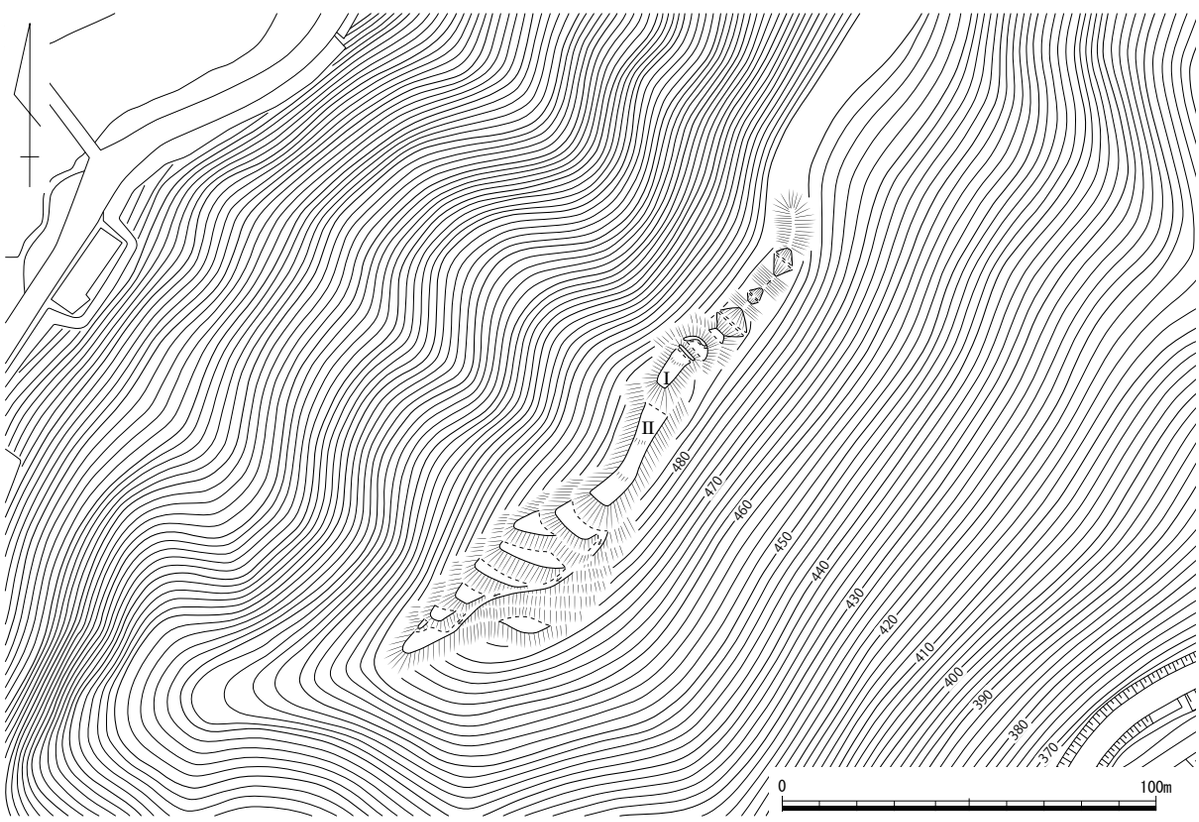
75　湯山（ゆやま）城跡　　真庭市湯原温泉　　地図５右

立地　城は、南へ延びる細い支尾根上に立地し、旭川と田羽根川の合流地点や湯原温泉・下湯原の平野部を北から見下ろす。旭川を北に約３km 遡ると釜戸原城跡が所在し、約１㎞南には大沼山陣所跡がある。

概要　平地との比高差約 140 ｍの尾根先端頂部に約 10 × 5 ｍの曲輪Ⅰを配し主郭とする。曲輪Ⅰ北東辺には、高さ約 50cm の土塁が残存していた。曲輪Ⅰの北東側尾根続きには小規模な曲輪を２面設け、さらにそれ以北の幅１ｍ弱で両側が急崖の痩せ尾根には３条の堀切を開削していた。堀切１は幅約８ｍ、深さ約 2.5 ｍ、堀切２は幅約５ｍ、深さ約 1.5 ｍ、堀切３は幅約８ｍ、深さ約３ｍを測る。堀切３以北もほぼ水平な痩せ尾根が 10 ｍ程続き、その北端から４ｍ以上急傾斜に下がって幅５ｍ弱の尾根鞍部に至る。曲輪Ⅰとの比高差が約２ｍで約 30 × 5 ｍの大きさの曲輪Ⅱは、造成が甘く自然地形を残すものの、その周囲には高さ約２ｍの切岸を備えている。この曲輪から南西に下がる尾根筋には、曲輪を７面連ねて守りを固める。これら曲輪群の東側を通って曲輪Ⅱに至る通路が所在しているが、往時の姿を伝えるものか判然としない。

文献・伝承　『美作国の山城』では、『古城之覚』に大庭郡湯本村の「湯本之（城）」として城主を牧野源内、また湯原村の「湯山」として城主を宇喜多平右衛門盛重と重出するとし、湯山城と湯本城を同一の城とする。『美作鬢鏡』では、城主を湯本村湯本の城が牧源内、湯原村湯山の城が宇喜多平右衛門と記す。

（小嶋）



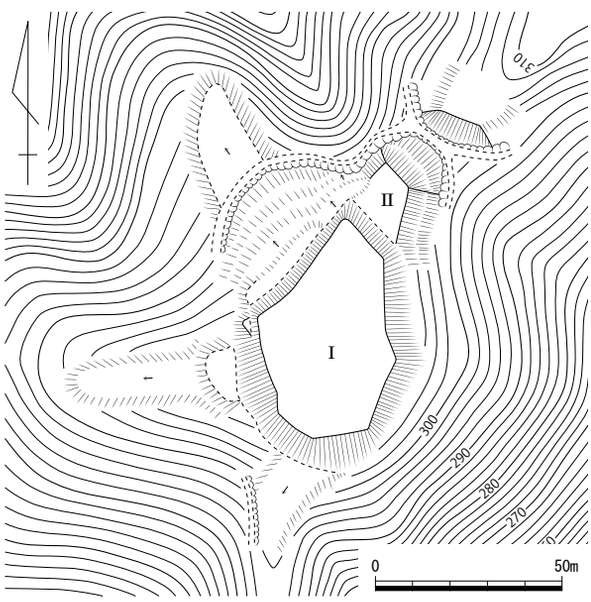
第 68 図　湯山城跡縄張り図（1/2,000）

76　大壇（おおだん）城跡　　真庭市山久世　　地図 11 右

立地　城は、旭川に注ぎ込む寺谷川と下谷川に挟まれた標高約 310 mの尾根筋頂部に所在する。

概要　頂部に高さ約３～４mの切岸を備えた約 60 × 40 mの曲輪Ⅰを配し、主郭とする。北東側尾根続きには、曲輪Ⅱと堀切を設けて守りを固める。堀切は林道によって底部が改変を受けているものの、上面幅 20 m強、深さ約６mと推測される。頂部から南・西・北西に小尾根が延び、北西のものには曲輪Ⅱ西辺南半に接続する犬走り状の平坦地や切岸が不明瞭で自然地形をとどめた平坦地が認められる。

文献・伝承　『作陽誌』では、居主不詳と記載する。『山久世小史』では、「城ヶ段（じょうだん）の城跡」として天文期に尼子の武将上井手六衛門が築城し、城の周辺には「土居の上」・「土井の前」・「荒掘り」・「的場」等の字名が残り、上井手氏の墓が井出の上にあると記す。なお、古井戸の痕跡もあるとする。　（小嶋）



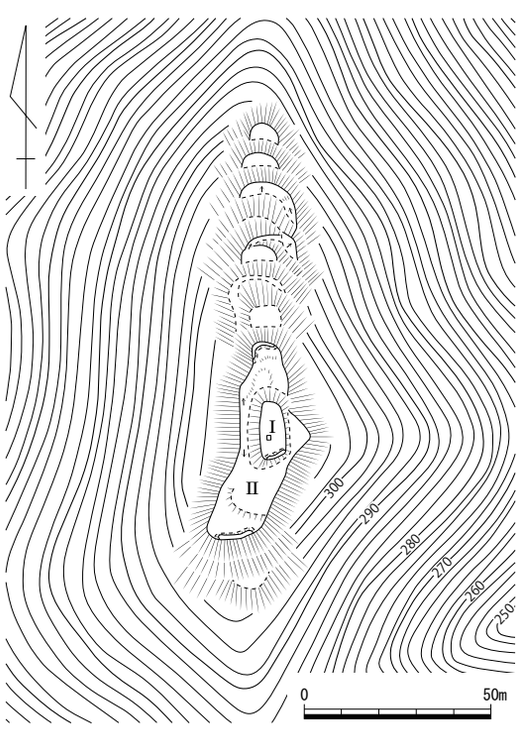
第 69 図　大壇城跡縄張り図（1/2,000）

77　茶臼山（ちゃうすやま）城跡　　真庭市三阪　　地図 12 左

立地　城は、三坂川左岸に所在する標高約 300 mの茶臼山山頂に立地する。

概要　南北に延びる尾根筋に曲輪を配した連郭式の山城である。「真庭三十三観音」を祀っている曲輪Ⅰは、南辺に高さ 50cm 弱の土塁が残存していた。この曲輪を取り巻くように配した曲輪Ⅱは、高く急峻な切岸を備え南北両辺に土塁が築かれるが、曲輪内部には自然地形が残っている。北に向かって下がる尾根筋には、切岸が不明瞭な平坦面を含め６面の曲輪・平坦地で守りを固める。

文献・伝承　近世地誌類に記述されている三坂村の多田山城に比定され、天正３（1575）年、浦上方に属した三浦氏の属城であった寺畑城を攻めるために、宇喜多方が陣を敷いた城である。城主は、『作陽誌』では牧兵庫・牧菅兵衛、『美作鏡』では沼本新右衛門・牧兵庫と伝えている。　（小嶋）



第 70 図　茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）

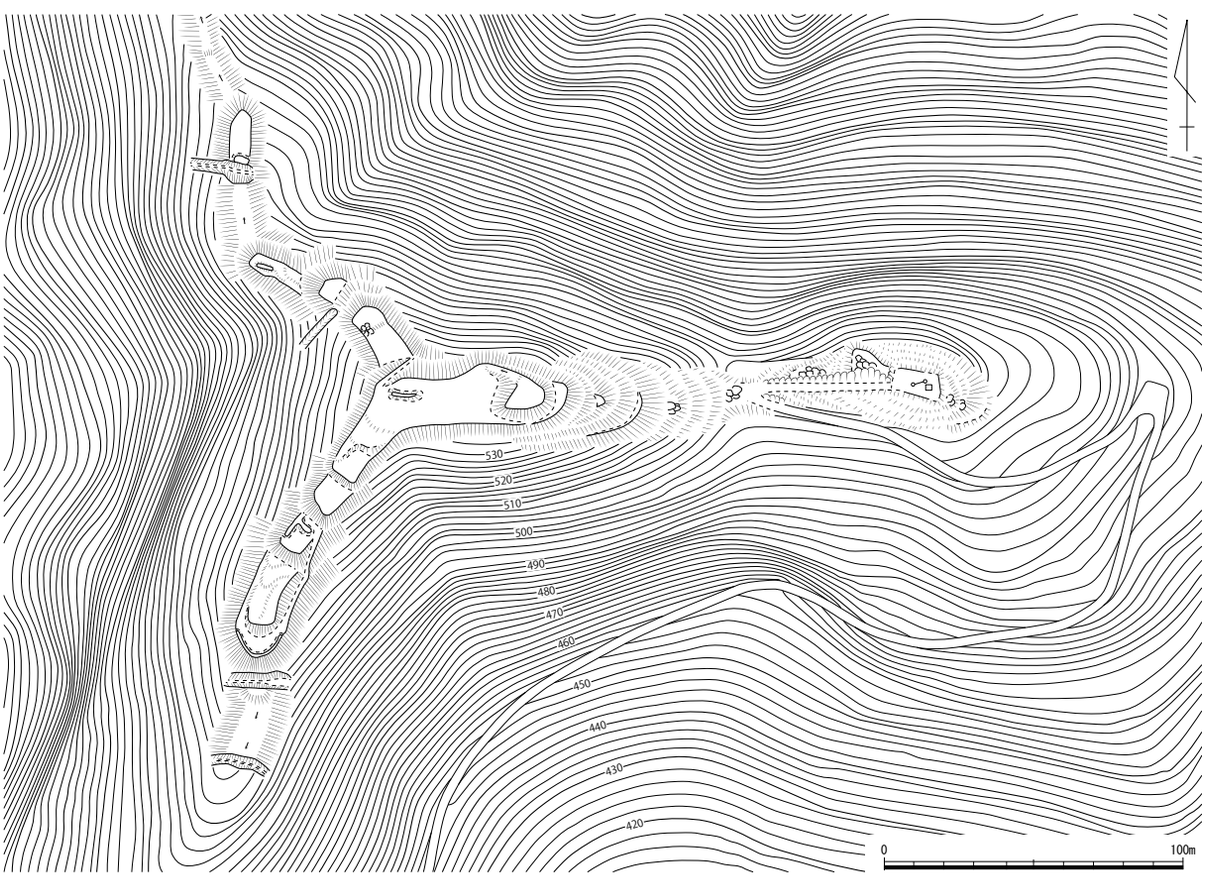
78　大寺畑城跡（おおてらはた）　　真庭市久世　　地図 11 右

立地　久世平野の北西に位置する山塊の山頂部に立地する。山頂からの視界は良く、東西に連なる陣山の峰（標高約 400 ～ 450 m）が南方を遮るようにあるにもかかわらず、山越しに旭川と目木川の合流部を中心とする久世、落合の平野を広く見渡すことができる。

概要　山頂部を中心に北・南・東の３方向へ派生する尾根に曲輪・土塁・堀切・竪堀を配している。主郭と考えられる山頂の曲輪は東西 45 m、南北 10 ～ 14 mを測り、東寄りに高さ２～３m、広さ８×７mの櫓台状の小さな高台を造っている。主郭西部には高さ 50㎝の石塁状の高まりが東西に８mほど残っているが、これは岩脈の堀残しと考えられる。

主郭から東方向に延びる尾根筋は約 30 m下って鞍部をつくる。この下りの部分には小さな曲輪１か所と犬走りが１か所認められる程度である。鞍部から東は再び 10 mほど高くなるが、この高所はテレビ塔と侵入道路建設によって、大きく削平を受け、遺構としては頂部北西角部分に曲輪の一部と思われる平坦地が観察されるにとどまる。また、この高所への尾根筋には露岩が多く、露岩を利用した切岸等の可能性があるが定かでない。

北西方向へ下る尾根筋には、主郭から高さ約 4.5 mの切岸があり、その先３面の曲輪が階段状に続く。２面目の曲輪の南西側斜面に竪堀状の溝があり、３面目の曲輪には主郭で見られたような岩脈の堀残しが認められる。曲輪群から先は 15 mほど自然地形の尾根筋が続いたあと堀切がある。堀切の



第 71 図　大寺畑城跡縄張り図（1/2,500）

切岸は南側が高さ約２m、北側が約 50㎝を測る。西側にのみ竪堀が延びている。堀切を超えた南側には曲輪があり、その南端部、堀切と接する部分に残存高 50㎝の土塁が認められる。その先尾根筋はさらに 12 m程下って鞍部をつくり、再び８mほど登って小さな高所をつくるが、自然地形である。主郭から南西方向へ下る尾根筋には５面の曲輪が配されている。主郭は南西方向に湾曲しながら、緩やかに下がり、約 50㎝の段差を造って１面目の曲輪を造成している。西縁は尾根を堀残し、土塁・通路状にしている。その先、約 1.5 mの切岸、曲輪、約３mの切岸と続き、３面目の曲輪には、「T」字形に高さ 0.5 ～１mの土塁を設けている。その先、２mの切岸、曲輪、1.5 mの切岸と続き、５面目の曲輪の南縁に曲輪の先端を囲むように残存高 30㎝土塁が囲む。３～５面目の曲輪を繋ぐ犬走りが斜面に確認出来る。高さは残りの良いところで 30㎝である。５面目の曲輪と３面目の曲輪を結ぶ通路が東側斜面に造られている。５面目の曲輪から先には堀切が、幅 15 mほど間隔を開けて２条掘削されている。５面目の曲輪の土塁上面と堀切底部の比高は４～ 4.5 mを測る。

文献・伝承　以下は『美作国の山城』による。『古城之覚』は大庭郡久世山形村の「寺畠」として城主を牧兵庫・息勘兵衛尚晴とし、『作陽誌』は「寺畑堡」として、高さ八町、三坂村の小寺畑城と相対し、天文（1532 ～ 55）の頃、牧兵庫・勘兵衛父子が相次いで居城し、三浦貞久に属し軍功を立てたと記すとする。また、『下河内牧文書』では、天正３年（1575）３月 26 日、三浦貞広は家臣の牧勘兵衛尉らが加茂伊賀氏の軍勢の拠る真木山城（真庭市鹿田）を攻撃､落城させたとの報を「寺畑」から受け、これを賞しているとし、『佐々部一斎留書』『譜録』では、天正７年（1579）宇喜多氏と毛利氏の対立にあたり、宇喜多方の篠向城（真庭市大庭・三崎）の城主江原兵庫は高田城の相城として「寺畑山」に「取出之城」を築いて籠城、11 月に吉川元春は「寺畑之城」などを落去させ岩尾山城（No.179）への連絡をとるといった戦略をしめしているとし、『厳島野坂文書』『閥閲録』は、翌８年正月「寺畑・宮山」の両城を攻撃することを決し、２月２日に月田（真庭市月田）から陣替えして９日から小寺畑城を攻撃し 12 日の夜に落去、16 日から「本城」の「大寺畑」の攻撃が予定されているとする。さらに、『桂岌円覚書』『佐々部一斎留書』『安西軍策』『武家伝聞記』では、毛利勢が仕寄を付けて大寺畑城を包囲したところ、城中の反逆人が固屋に放火。切岸際まで迫った攻城勢を、江原兵庫助ら籠城勢は何とか退けたが、毛利勢はさらに仕寄を近くに付けたため、城を明け渡し、家城の篠向城へ落ち延びたとされるとし、『閥閲録』は、以降、閏３月には毛利氏の家臣和智元郷と有福元貞が寺畑在番が命じられているが、その後の消息は不明であるとする。　（物部）

写真 33　遠景（南東から）

写真 34　主郭（東尾根高所から）

79　陣山（じんやま）城跡　　真庭市久世　　地図 11 右

立地　旭川が東西方向に走る箇所の北側に近接して、標高約 420 m級で東西に細長い山塊が存在する。当山城はこの山塊尾根線上に位置し、約 1,800 mにわたって曲輪や土塁などの施設を築いている。また北側約 900 m離れた山塊頂部には、大寺畑城が築かれている。

概要　当山城は、東西に長い尾根上ほとんどの箇所に曲輪を連ねる壮大な施設である。その間に頂部は 15 箇所ほどを数え、それら全てが平坦面を持ち周りを曲輪で囲っていた。特にⅥからⅧ間（中心はⅦ）とⅡからⅣ間（中心はⅢ）は最も施設が充実している。

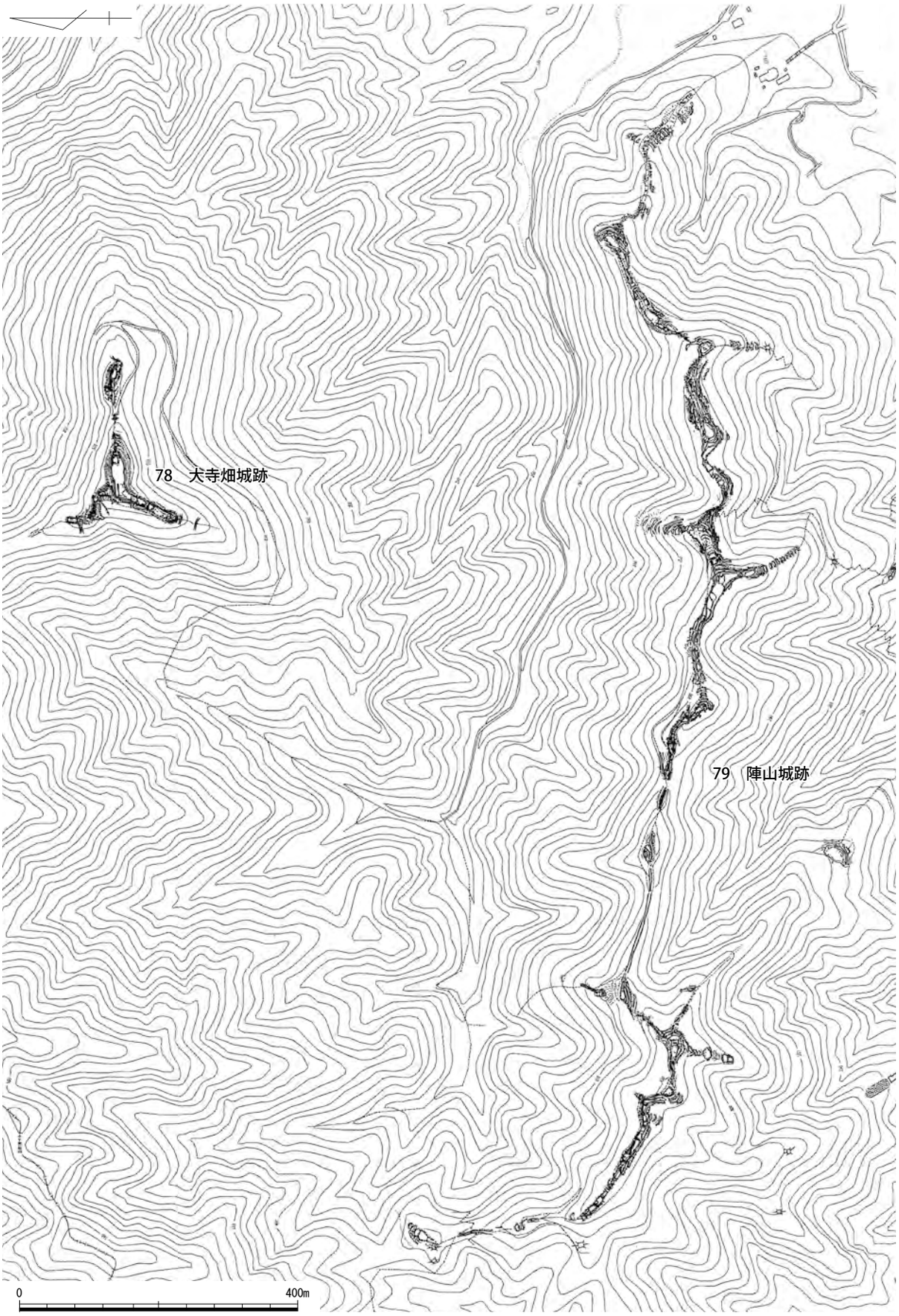
Ⅶは標高約 380 mの頂部から、Ⅵへ向けた西側、Ⅷへ下る北東側、南側の細尾根上の三叉に曲輪を連ねている。頂部には幅 10 m前後の高まりがあり、虎口にあたる部分は両側に石列を配していた。この頂部に接して南側と西側へ約 20 m程の曲輪が続く。さらに北東側には５～６面の曲輪、西側は少し広めの曲輪、南側はさらに長い曲輪を設け、さらに細尾根上にも無数の小曲輪を配していた。また北東曲輪の先の尾根先端部分Ⅷには、10 m前後の高まりを中心に角を持った曲輪が存在する。

Ⅲは、標高約 450 m付近の尾根頂部に位置する。長さ 30 m、幅 10 mほどの主郭を頂点とし、主郭から見て東側～北西側にかけて腰曲輪を３面ほど、西側にかけてと南側にかけて数面の曲輪を配する。Ⅱへ向かう斜面状からⅠに向かう尾根北側線上にかけて、高さ 0.5 mほどの土塁が築かれていた。総延長は約 200 mにもなる。主郭の西側部分には、尾根に直行する形で土塁と堀切が築かれる。また堀切の西側にも曲輪が続いており、当山城の中で最も施設の種類が多彩である。

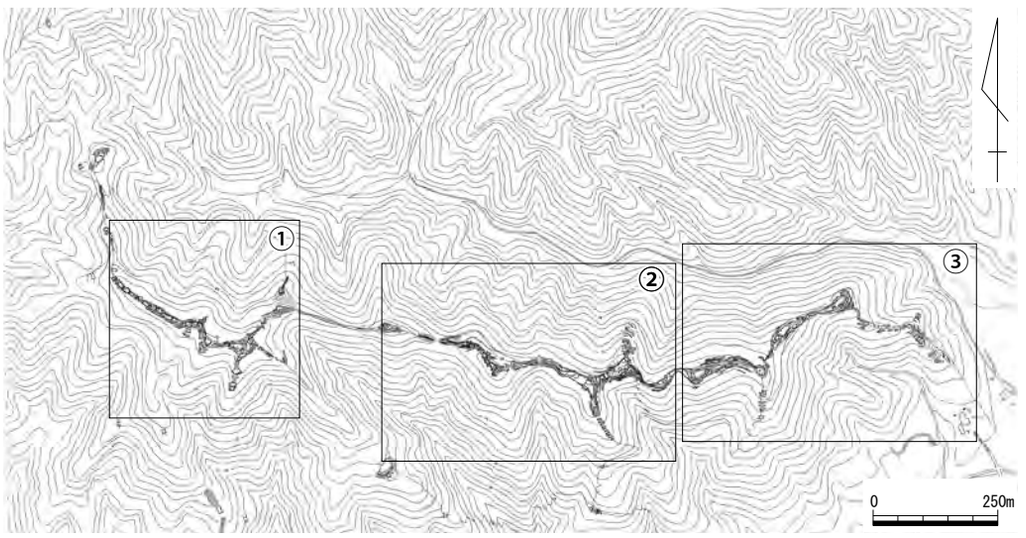
この２箇所以外にも、Ⅹ・Ⅻなどの頂部では比較的広い平坦面を有していた。Ⅹでは東側から南側にかけて腰曲輪が配置される。腰曲輪は５面前後存在し、幅は２～５m前後になり、最高で５m前後、通常では２mほどの切岸を持つ。Ⅻは、東側にあるⅫ方向へ下る箇所に曲輪が５つ存在する。高さは最高で３m程、通常では２m前後の切岸をもつ。また南西方向にあるⅪに向けて上がる形で２～３面の曲輪が連なる。Ⅺは、頂部の北側線上に高さ 0.5 mほどの土塁を築いて守りにしていた。主郭の西側から南側にかけて３面程度の腰曲輪が配される。さらに南側端部に小曲輪が連なっていた。またⅪに下る東側は、現在は道によって削平されており、北側と南側に曲輪が配されたように見える。これらⅢとⅦを除いた頂部は、まさに櫓台程度の規模である。櫓台とは言え、その周りはことごとく曲輪を築いており、Ⅰでは北東側に向けて曲輪が３面、Ⅱでは南西方向に３面の腰曲輪、Ⅳでは西側～南側～東側にかけて２～３面の腰曲輪、Ⅴでは頂部から東側向けて３面前後の曲輪、Ⅸでは東西両側に２面の曲輪、Ⅹでは東側方向と西側方向に２面の曲輪、Ⅺでは南側に伸びる細尾根線上に小曲輪が６面、ⅩⅣでは長さが２～３m前後の小さな曲輪を８面前後、がそれぞれ築かれていた。

当山城は、尾根頂部全体を使って防御施設を配する壮観な出で立ちであるが、城域を画するような施設が少ないのも特徴の一つと言えよう。

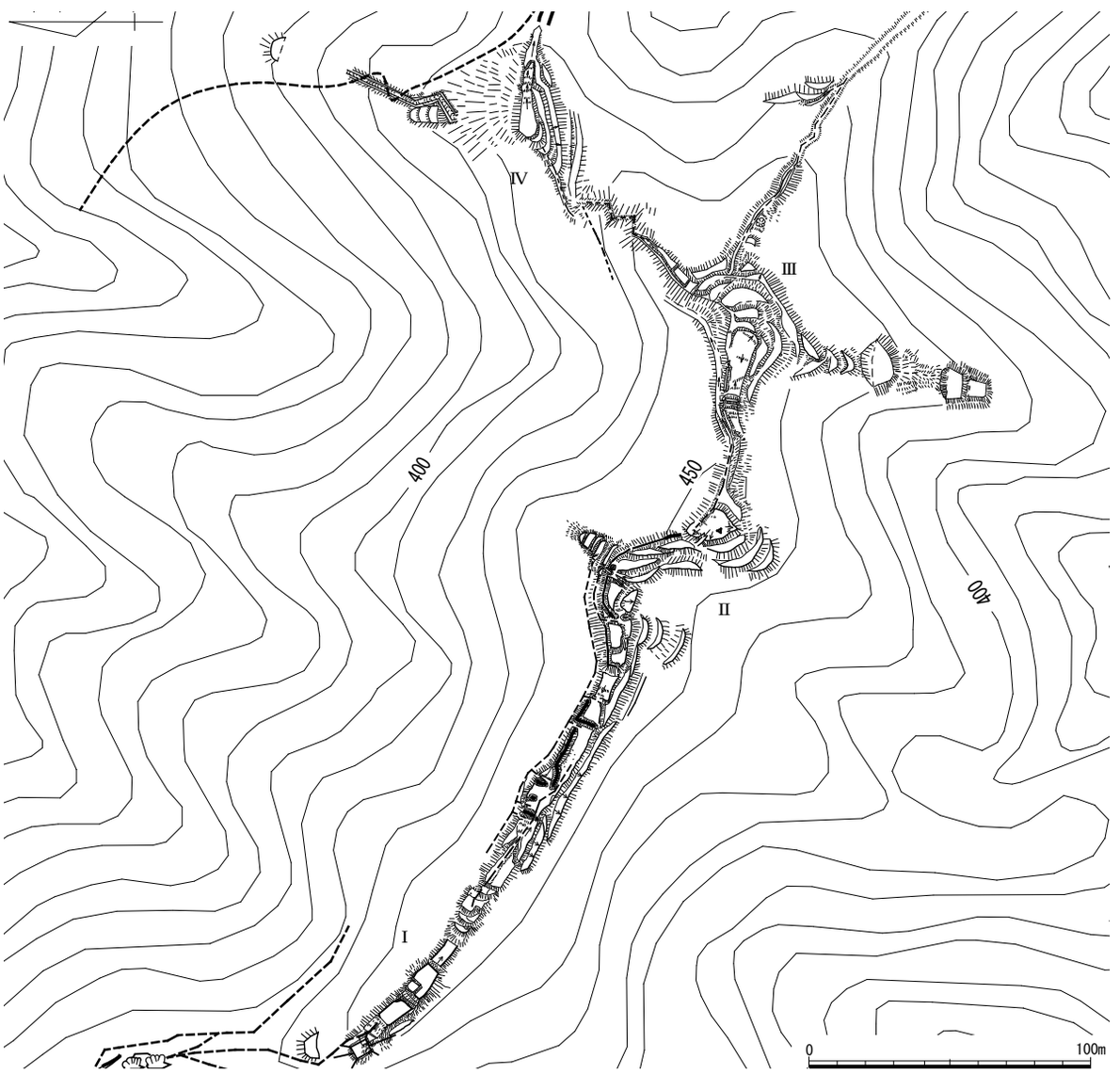
文献・伝承　『作陽誌』に書かれた、天正８（1580）年に大寺畑城を攻撃した毛利方が布陣した場所に比定される。その規模の大きさから、大寺畑城のみならず、小寺畑城や篠向城など旧久世町域に存在する宇喜多方の諸城攻略を目的とした、毛利方の陣城であったと推定される。大寺畑城の落城後も、小早川隆景は備中国境へ陣替するまで「寺畑の御陣」におり、『萩藩閥閲録』にはその間に宇喜多方の牧氏が攻撃し、城兵に死者を出したと記される。　（小林）



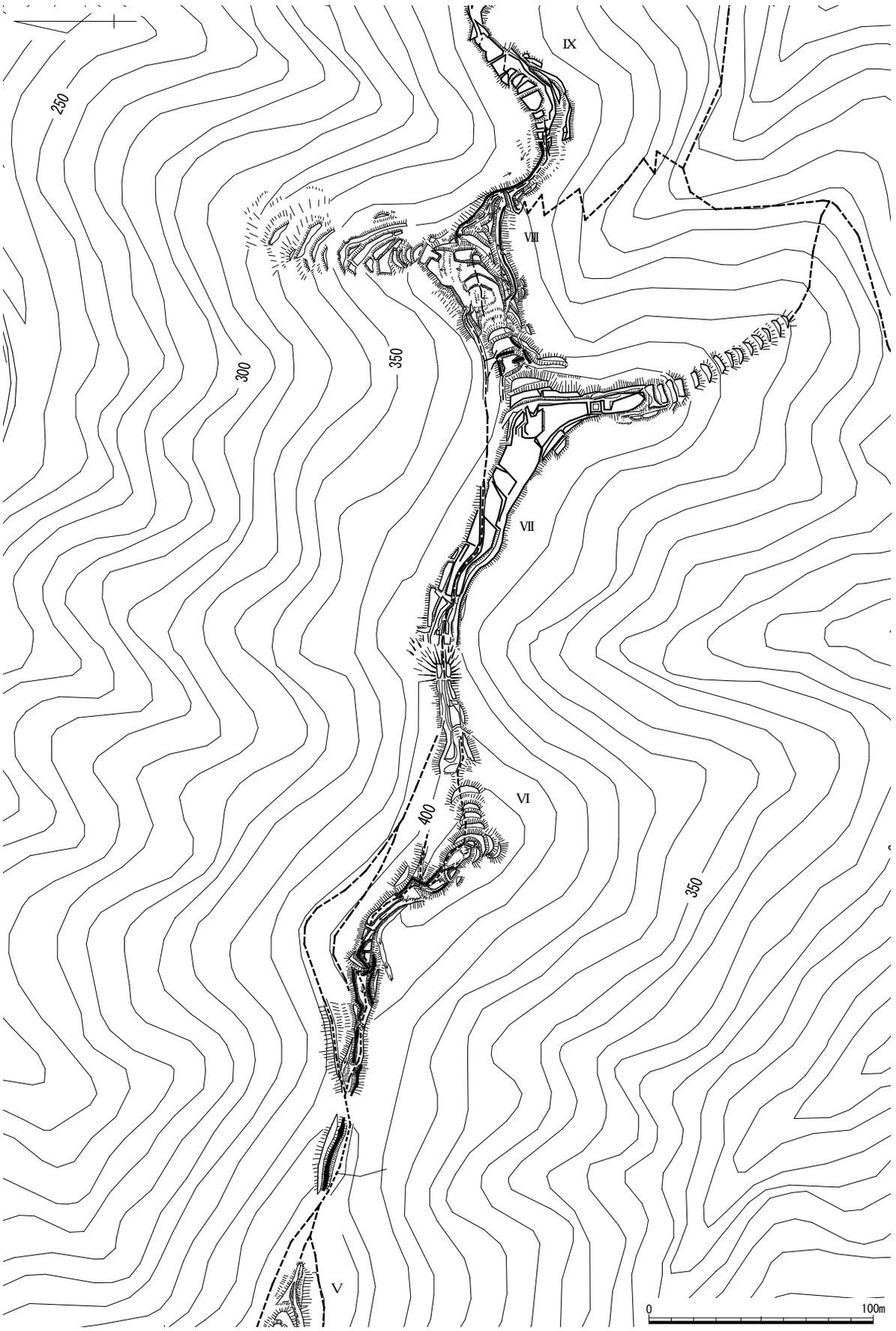
第 72 図　陣山城跡と大寺畑城跡縄張り図（1/8,000）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会



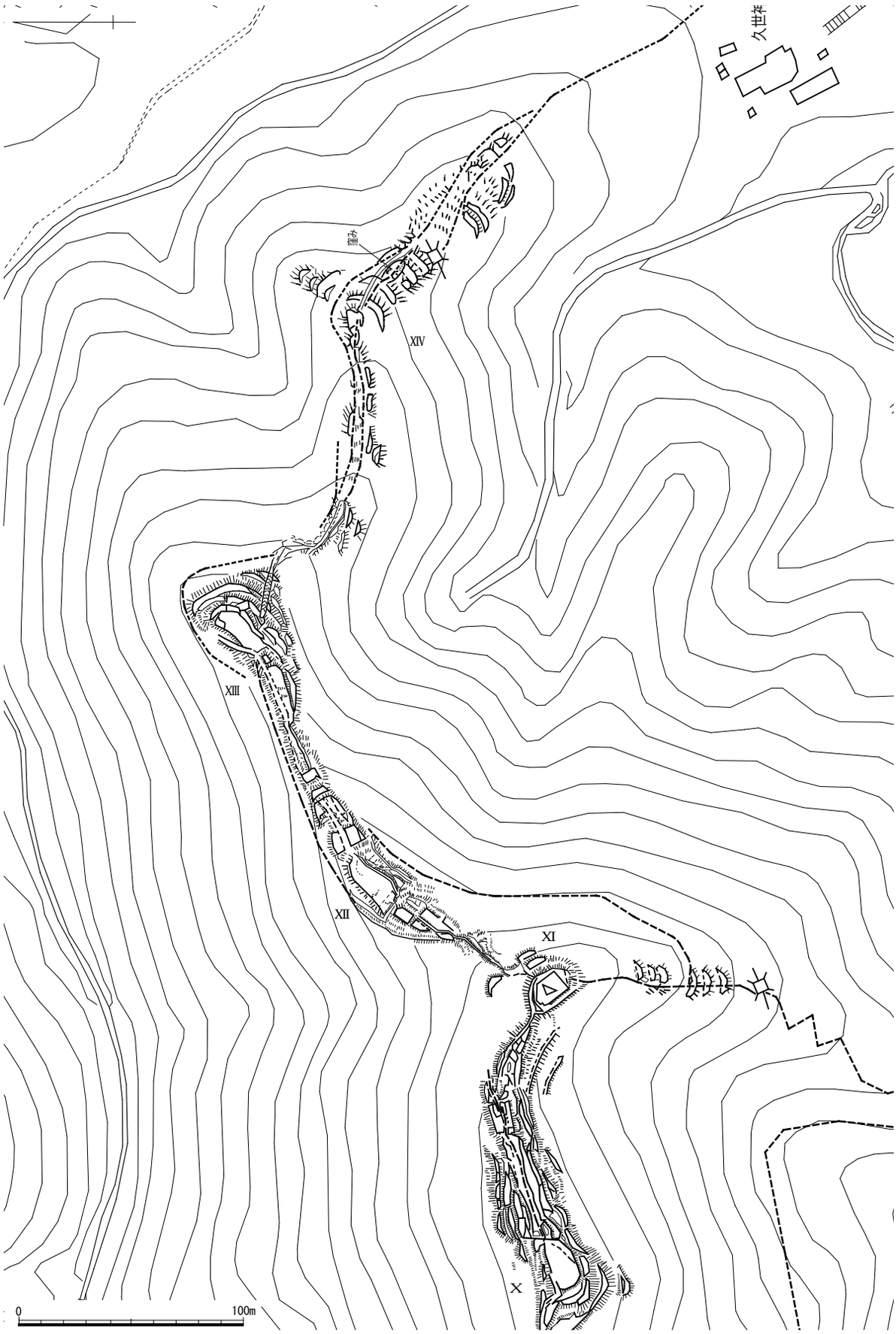
第 73 図　陣山城跡図面配置図



第 74 図　陣山城跡縄張り図①（1/2,500）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会



第 75 図　陣山城跡縄張り図②（1/2,500）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会



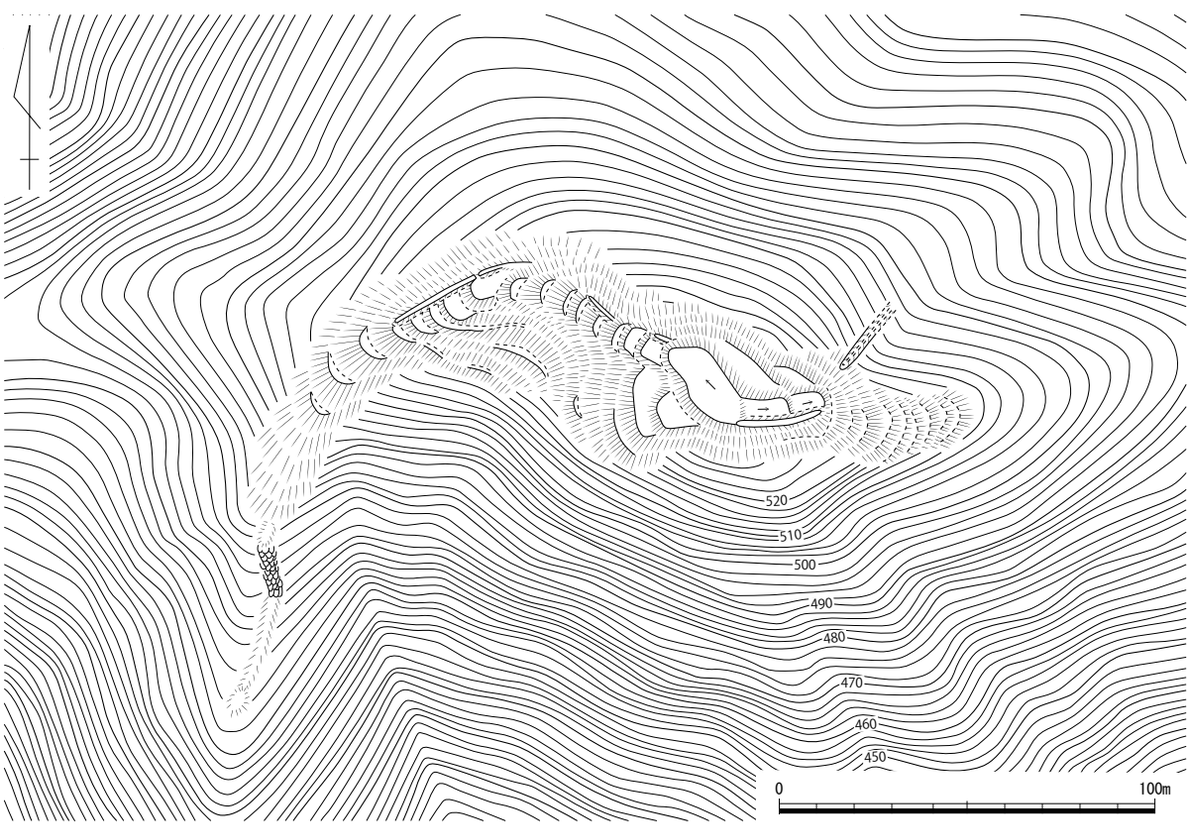
第 76 図　陣山城跡縄張り図③（1/2,500）　作図：真庭歴史研究会・真庭市教育委員会

80　小寺畑城跡（こてらはた）　真庭市久世・三坂　地図 12 左

立地　旭川が西から東へ流れる箇所で、現真庭市役所が存在する盆地の北側端に位置する。標高 520 m級の山塊の頂部が当城の位置である。規模は東西約 200 m、南北約 140 mを測り、中規模の山城である。当城の西側には大寺畑城跡や陣山城跡が、東側には羽庭城跡や砥石城跡が近接する。

概要　頂部にある主郭は長さ 30 m、幅 10 mほどを測り、途中で「く」字に屈曲している。主郭の東西ともに段々の曲輪があり、南東側端には土塁が築かれるが、平坦箇所が少ない印象である。また北東側に竪堀が 1 本のみ配され守りを固めていた。主郭東側は、曲輪状に小さな面を連ねるがその先には施設が続かない。主郭の西側には、尾根筋に向けて小さい曲輪が 8 面続いた後、さらに南東方向に屈曲し 5 面が築かれていた。この曲輪群の北側端には土塁が配され、特に先端部分は曲輪間を貫く形で続く。さらに南側の尾根筋に向けて 3 面曲輪が築かれ、曲がりながら南側の尾根先端に向かう。この方向が、当時は入口として意識していたと推定する。当城は、城館規模の割に主郭部分が曖昧であり、陣城として機能していたと推定する。

文献・伝承　『作陽誌』にその名が記される。東側に近接している大寺畑城と同様に宇喜多方が城であり、天正 7（1579）年に同氏が毛利氏から離反したことにより、当地域は両者が激突する場所の 1 つとなった。天正 8（1580）年に毛利方が大寺畑城跡の南側に陣山城跡を築き、攻防戦が行われる。『萩藩閥閲録』によると、毛利軍が 2 月 9 日から攻撃を開始し、同月 12 日には陥落したと書かれ、大寺畑城跡や篠向城跡より先んじて落城したことになる。　（小林）



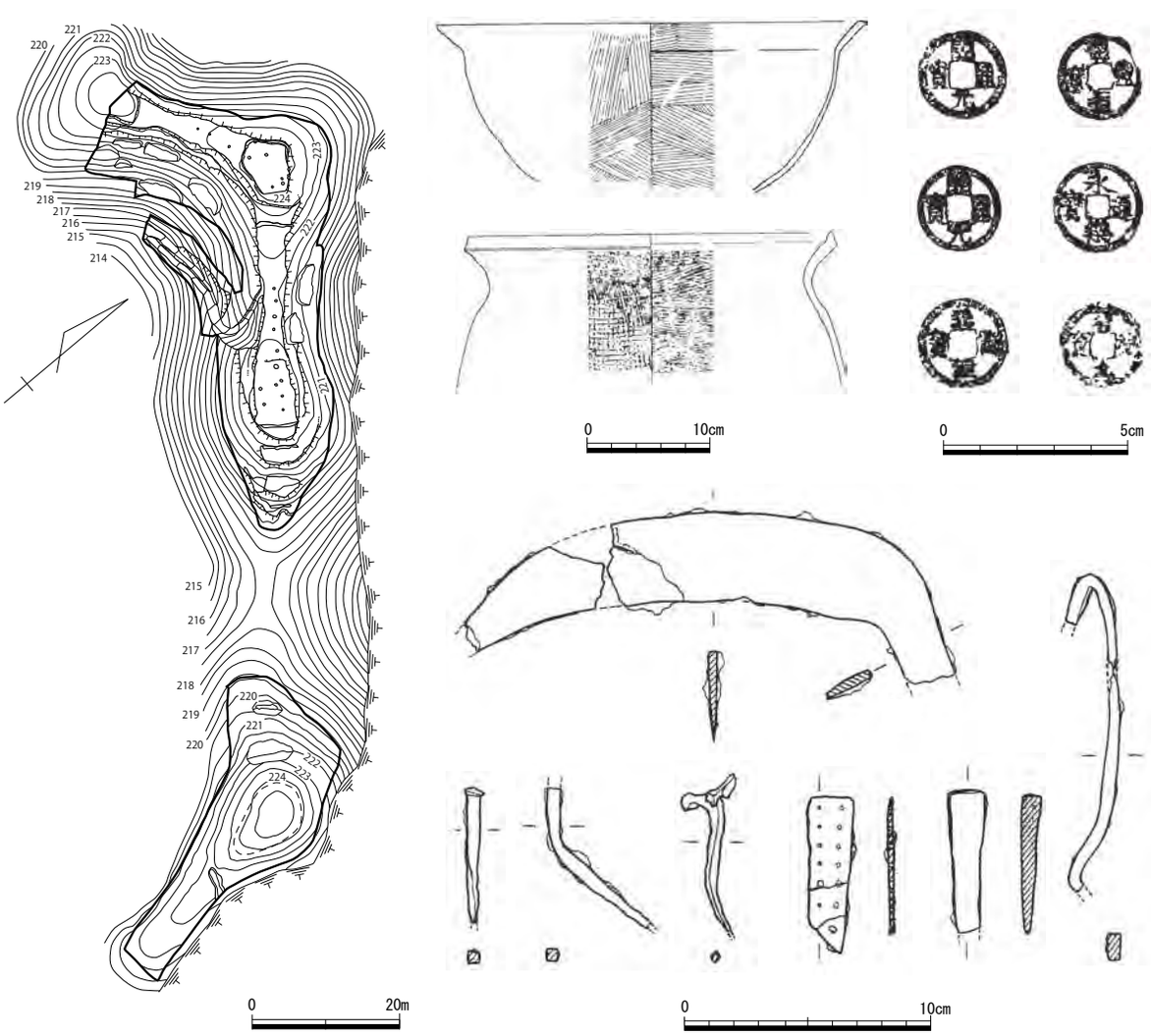
第 77 図　小寺畑城跡縄張り図（1/2,000）

81　羽庭（はば）城跡　　真庭市久世　　地図 12 左

立地　城は、久世の市街地を北から望む標高約 220 mの山頂部に立地する。小谷川を挟んだ西に陣山城跡、北西に大寺畑城跡、三坂川を挟んだ東に茶臼山城跡が所在する。

概要　久世町教育委員会（現真庭市教育委員会）が平成９～ 10 年にかけて発掘調査を実施した城で、平坦地・堀切・通路状遺構・柵列などが検出され、さらに虎口も確認された。22 面ある平坦地には、埋土中に多量の灰や炭化物を含む土坑や、建物として纏まらないものの柱穴が検出されているものも存在する。南から延びる通路状遺構が取り付く尾根筋上には、柵列を設けていた。南端の尾根筋頂部から南側に延びる斜面で検出された堀切は、尾根を断ち切っていないことから竪堀の可能性も考えられる。遺物は、須恵器・土師器・備前焼・鉄釘・刀子・鉄鎌・小札・銅銭などが出土しており、それらから室町時代の城と判断される。

文献・伝承　近世地誌類には記載がない城で、築城時期や城主などは伝わっていない。　（小嶋）



第 78 図　羽庭城跡遺構配置図（1/1,000）・遺物実測図（1/6･1/3･1/2）
文献 153 より引用・一部加筆

82　砥石山（といしやま）城跡　　真庭市目木・三阪　　地図 12 左・19 左

立地　城は、砥石山山頂から南に延びる尾根上に立地する。砥石山の東裾から南裾を流走する目木川が旭川と合流する地点を南西眼下に見下ろし、目木川を隔てた対岸に篠向城跡が所在する。

概要　標高 410 ｍを測る尾根峰部とそこから南東に延びる尾根先端頂部に曲輪を構えた城である。峰部の曲輪群は、石取りによって大規模に削平を受けている。曲輪Ⅰの北辺には、巨石を取り込んだ高さ約 1.5 ｍの土塁が認められるが、採石によって北半が削平された曲輪の南辺付近のみが残存している可能性も否定できない。切岸が明瞭でない曲輪Ⅱから南側はやや急斜度で下がったのち平坦面となるが、この場所にも石取りによる削平及び改変が認められる。砥石山山頂へ至る尾根筋には、幅約３ｍの堀切を設けて守りを固める。東辺北半を林道によって削平されている尾根先端頂部の曲輪Ⅲは、造成が甘く、自然地形を多く残す。南東辺から南西辺にかけて設けた犬走り状の平坦面の前面には、幅 1.5 ～２ｍ、高さ 30cm の土塁が残存している場所もある。

文献・伝承　『新釈陰徳太平記』の「砥石山の城」、『新釈備前軍記』の「砥石城」に比定される。両軍記物では、毛利氏と宇喜多氏の間で行われた天正８年（本文では天正７年）２月の合戦譚において、宇喜多方の城として記載されている。　　（小嶋）

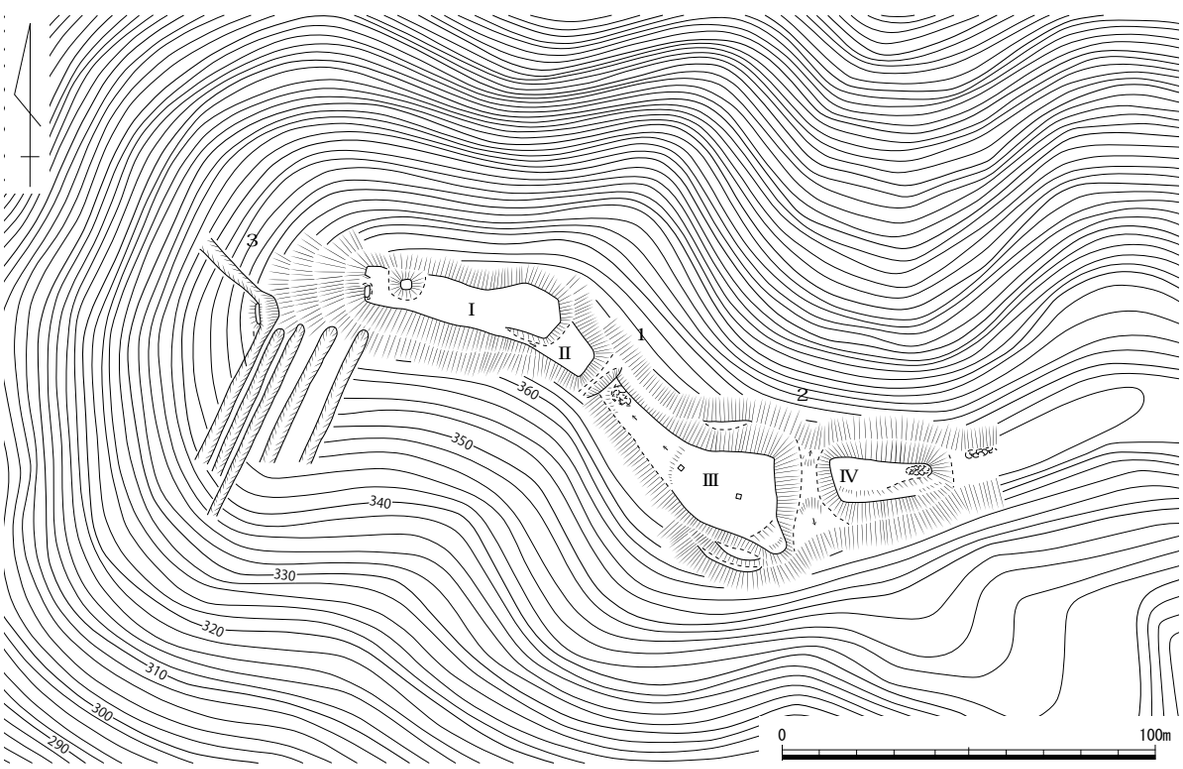
第 79 図　砥石山城跡縄張り図（1/2,000）

83　神上城跡（こうのうえ）　　真庭市樫東　　地図 12 左

立地　鏡野町富に源を発する目木川が、西から南へ大きく湾曲する地点に突き出した尾根の先端頂部に城は立地する。久世町の平野部から鏡野・余野方面に至る往還を眼下に一望し、約 1 km 南西には城山城跡が所在する。

概要　東西方向に延びる尾根筋を、幅約 8 mの堀切 1 と幅約 15 mの堀切 2 によって大きく 3 か所の城域に分けた城である。西側の城域には、約 55 × 15 mの曲輪Ⅰと曲輪Ⅱを配する。曲輪Ⅰ西辺には、南側に土塁痕跡と思われる高まりが認められる平入りの虎口が開口する。この虎口から城内に至る通路は、この虎口から 5 m東側に築かれた高さ約 2 mの櫓台の南裾を囲むように作られており、鍵型を呈する。東側の城域には、東端に集石が認められる約 25 × 10 mの曲輪Ⅳを築いている。この曲輪東辺は、約 4 mの切岸を設け防御を固める。曲輪Ⅳから東側は、幅広い尾根筋が続くものの、明瞭な城館関連遺構が認められない。中央部の城域には、曲輪Ⅳとほぼ同じ標高を測る曲輪Ⅲが所在する。平坦に造成しているのは東半のみで、西半は北西に向かって緩やかに下がる自然地形が残る。堀切 1 に面する西端部には集石が認められる。この曲輪の南北両側には植林によるものと想定される幾面かの加工段が認められる。曲輪Ⅰの西側には、尾根筋を逆「く」字形に断ち切る堀切 3 を開削する。また、堀切 3 と曲輪Ⅰに挟まれた南西緩斜面には、竪堀を 4 本掘削して守りを固める。

文献・伝承　近世地誌類では、岩佐勘解由を城主として伝えている。『美作国の山城』には、永禄 9（1566）年頃の岩屋城と高田城との合戦で、牧佐馬助が「大庭郡樫村高の上之城」で首 2 つを討ち取り、高田城主三浦貞広から感状を与えられたと記す。　（小嶋）



第 80 図　神上城跡縄張り図（1/2,000）

84　二ツ山城跡（ふたつやま）　真庭市余野下　地図 12 左

立地　長田山山頂（584 m）付近、南方へ細長く延びる尾根先端部に立地する。この尾根（主尾根）の高所付近から東へ別尾根（派生尾根）が、主尾根と並ぶように南方へ延び、その両尾根に遺構が存在する。尾根線を下ると余野下の集落に至る。この集落との比高 320 mを測る。南方の遠方に眺望が良く、城跡からは高山城跡や砥石山城を望める。

概要　主尾根には、北方の山頂へ続く尾根筋に３条、南方の尾根先端に１条の堀切を掘削し、その間約 140 mの細尾根に曲輪を連ねる。最高所の主郭と考えられる曲輪は長さ 65 m、幅８～３mと細長く、北端には櫓台と考えられる高さ 1.5 m、４×４mの高台があり、堀切と接している。堀底から櫓台上面までの比高は現状約４mを測る。櫓台から南へはゆるやかな登り坂で、最高所に長さ約 13 mの平坦地、その南に 50㎝ほどの段差を設けている。ここから南方は尾根筋が下がり、６面の曲輪を階段状に設けている。切岸は高さ１m弱～３mである。南端の曲輪から約５m下がった尾根筋に堀切が１条あり、堀切の深さは現状で約１m、東西両側に竪堀を伸ばしている。曲輪群北側の３条の堀切はそれぞれの間隔が約 15 mと約 30 mで、深さは北の堀切が約 1.5 ～２m、中の堀切が約２m、南の堀切は櫓台と接し、深さ約１～４mである。派生尾根は主尾根の主郭南端から派生する。両者は浅い鞍部で繋がれており、比高は、主尾根高所と鞍部は約 30 m、鞍部と派生尾根高所は約 10 mを測り、派生尾根高所は主尾根高所より約20ｍ低い。主尾根主郭から鞍部への下がりに小曲輪が３面ある。鞍部には北東縁に沿って土塁（あるいは土橋か）を設けている。規模は最大で幅約３m、高さ約１mを測る。土塁の両端は、斜面に配された曲輪の北東側掘り残し部分に接続し、これを含めた長さは約 32 mを測る。派生尾根には約 160 mにわたって曲輪群が造られている。高所には、北端に幅約３m、高さ約１mの土塁を設けた 20 × ８mの曲輪があり、そこから北側の鞍部までの下がりには４面の曲輪を設け、段差は２～３mあり、比較的切岸が明瞭である。反対に南側は馬の背状の細長い尾根筋が約 100 m続き、ここに曲輪を連ねているが、段差は僅か 0.5 ～１mで、自然の傾斜か区別しにくいところもある。その先、尾根が角度を付けて下がっている部分に堀切２条を穿っている。どちらも斜面下方に盛り土して土塁を拵えている。深さは上方の堀切が 0.5 ～ 1.5 m、下方の堀切が 0.5 ～ 2.5 mである。派生尾根高所から東方へは小さな張り出し状の尾根がある。曲輪面から約 30 m下った地点に堀切１条を確認した。深さは 0.2 ～３mで、斜面下方に盛り土している。さらに、鞍部から北東へ延びる小尾根には、約 17 m下った地点に堀切１条を確認した。深さは 0.5 ～ 2.5 m、斜面下方に盛り土している。二ツ山城は、麓との比高は 300 mを越え、東西両斜面は急峻であり、すべての尾根筋に丁寧に堀切を設けるといった特徴がある。

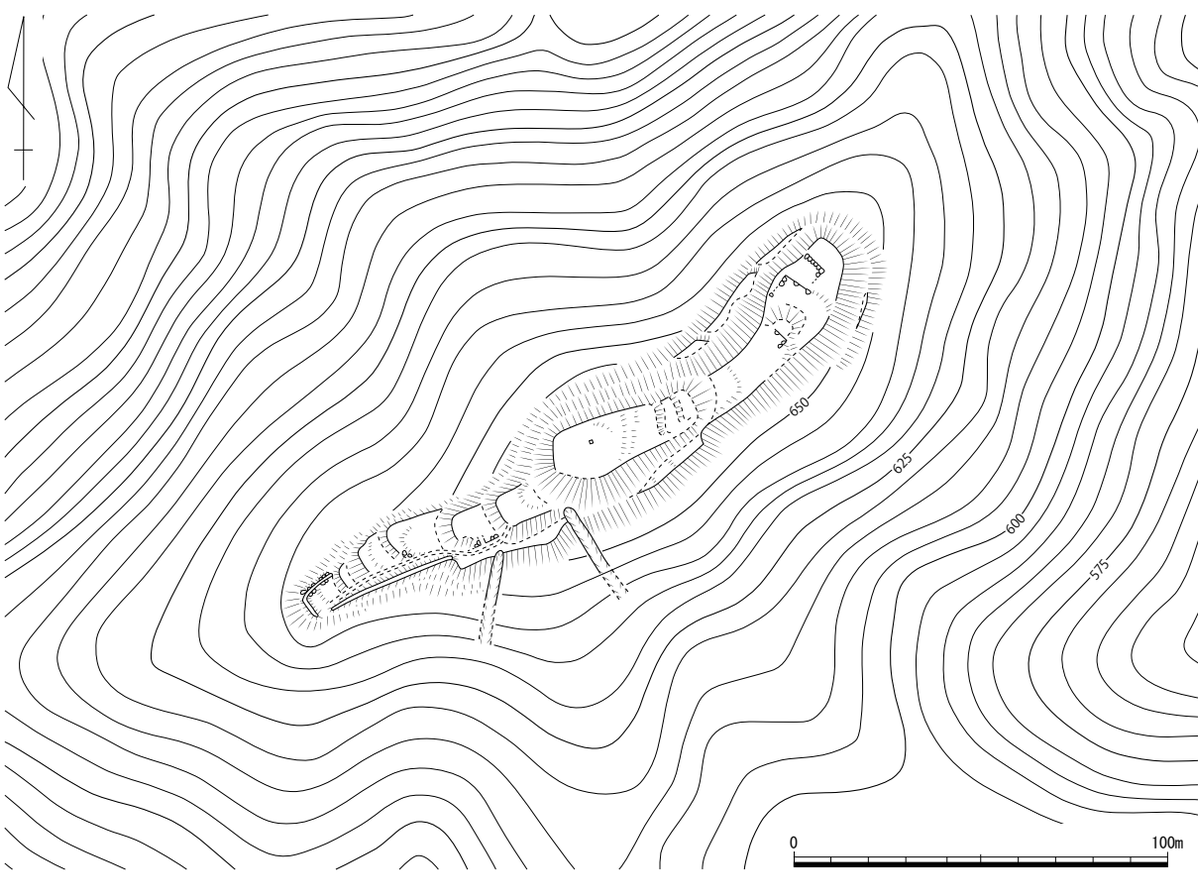
文献・伝承　『美作国の山城』は、『作陽誌』には「二山堡」として大庭郡余野下村にあり、山の高さ１町余り、昔、鵜殿（湯殿）右衛門尉･落合行部大輔が拠ると記し、『美作鏡』は「二山城」とするが、先行する『古城之覚』に見えず､「湯野藤右衛門尉」は別の二ツ山城（苫田郡鏡野町養野）の城主とされ、余野と養野で混乱があると指摘し、さらに、『萩藩閥閲録』は、天正８（1580）年 11 月４日、毛利輝元は高田（真庭市勝山）から「二山」近辺まで出張・山陣し、所々の山見などを命じ、まもなく高仙城（真庭市余野上）の普請が行われた、と記すとする。　（物部）

第 81 図　二ツ山城跡縄張り図（1/2,000）

85 高山城跡（たかぜん）　真庭市余野上・余野下・上河内　地図 12 右

立地　標高 664 mの高山山頂に立地する。麓との比高約 420 m。周囲の山並みを遠くまで見渡せ、南方では岩屋城を望むことができ、北側は山裾の目木川谷筋も見ることが出来る。

概要　最高所にある曲輪（主郭）を中心に、北東方向と南東方向に延びる尾根筋に曲輪を連ねている。主郭は約 40 × 15 ～ 10 mの広さで、東半部は自然の傾斜を残して下がり、端部に僅かな段差を拵えているようである。主郭から北東方向の尾根筋には、約 1.5 mの緩斜面の先に、概ね３面の曲輪があるが、段差が 0.5 ～ 1 mと小さく切岸も明瞭でないため、１つの曲輪と捉えることもできる。ここに石列を３か所確認した。いずれも途切れ途切れであるが「L」字状に屈曲し、外側に面をもつ。北西斜面には細長い曲輪が約１mの段差をもって連なる。東側斜面にも犬走り状の細長い段がある。主郭から南西方向の尾根筋には、６面の曲輪が連なり、段差は北東側に比べると明瞭で、0.5 ～２mを測る。主郭から２面目の曲輪南縁に石列がある。1.5 mほど途切れる部分があり、入口と考えられる。これら石列は曲輪の擁壁、建物の土台部分の土留めとして設置されたと考えられる。曲輪の南縁に沿って通路と高さ約 50㎝の土塁が配されており、土塁はさらに最下段の曲輪の先端を囲んでいる。また、土塁の一部は側面に石を積んで石塁としている。通路の東半部は土塁がない代わりに少し幅を広げ、細長い曲輪とし、曲輪の南西端部を短く屈曲させている。主郭南東斜面にも細長い曲輪がみられ、北東角を小さく屈曲させている。南斜面に竪堀２本を確認した。



第 82 図　高山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　以下『美作国の山城』による。『作陽誌』は「高山堡」として大庭郡余野上村にあり、水沢為虎が築城、東は播磨国、北は伯耆国、南は備前国が見え、上河内東谷村との境で小道が頂上に通じるとし、『天保国絵図』に「高山」、『美作鏡』に「高仙城」、『閥閲録』は、天正８年（1580）11 月 4 日、毛利輝元は高田（真庭市勝山）から二山城（真庭市下余野）近辺まで出張・山陣し、所々の山見などを命じ、17 日には小早川隆景に「高仙」の普請を命じ、隆景は 23 日までには普請を終わらせており、三沢氏を「城督」にするとし、『毛利家文書』は、安国寺恵瓊は児玉元良らに対し、「高田・岩屋・宮山・高仙」の城へ国元からも退去を言い聞かせるよう要請したとする。　（物部）

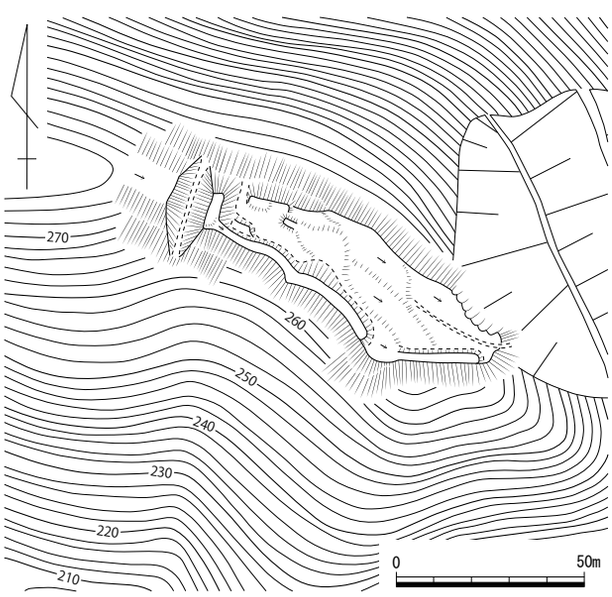
写真 35　遠景（北から）

写真 36　北東端部の石列（東から）

86　城山（じょうやま）城跡　　真庭市樫東・樫西　　地図 12 左

立地　城は、砥石山山頂から東へ派生する尾根の頂部に立地している。目木川と余川の合流地点を足下に控え、約 1 km 北東には神上城跡が所在する。

概要　北西尾根続きを幅約 10 m、深さ約３mの堀切によって遮断した単郭の城で、その規模は東西約 100 m、南北約 25 mを測る。尾根続き以外は急峻な斜面で、特に北東側は急崖である。曲輪内は造成が甘く、自然地形が残る。堀切に面した北西辺には、高さ約 1.5 mの土塁を設ける。また、南西辺にも土塁を築くが、屈曲した中央部付近には認められない。流出したのか往時から築かなかったのか不明である。北東辺西端には、折坂虎口が開口し、その東側には土塁の残痕と想定される高まりが認められる。



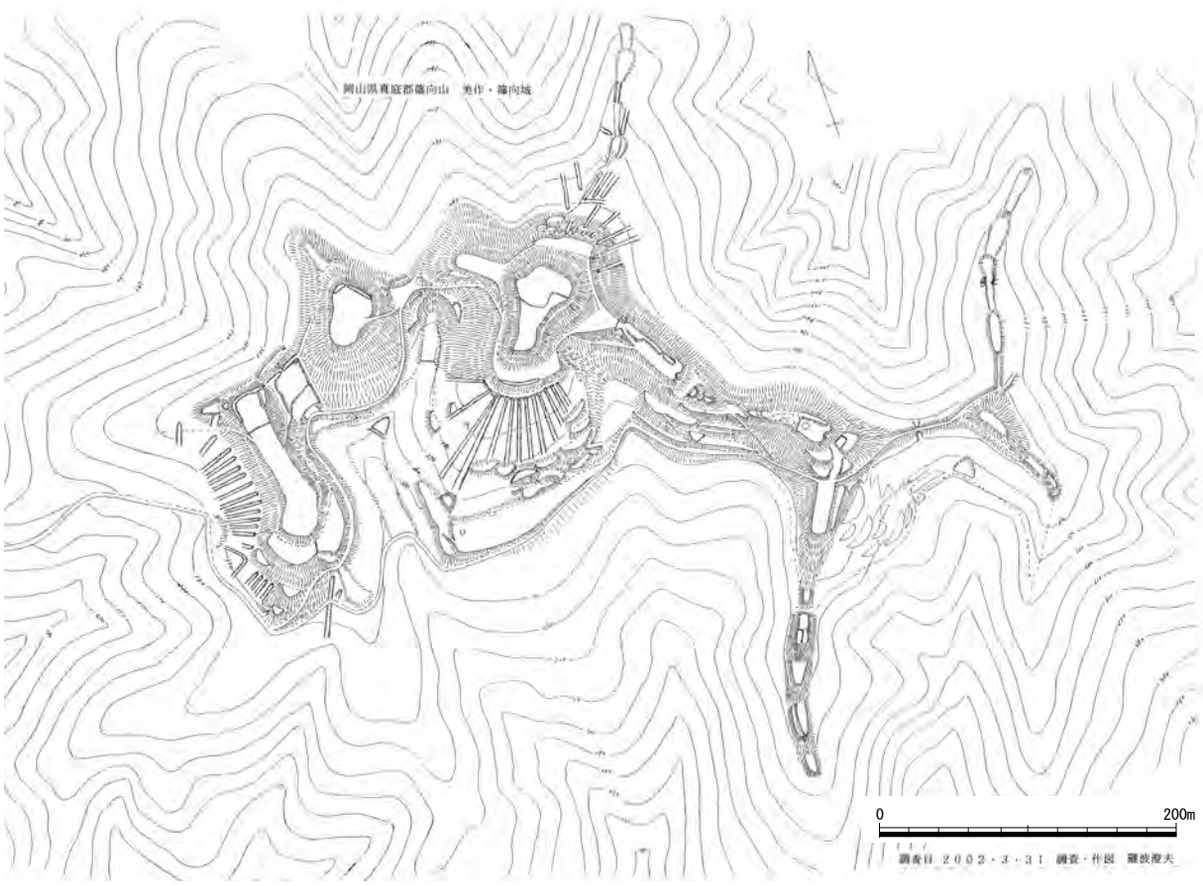
第 83 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　近世地誌類や自治体史には記載されておらず、詳細は不明である。　（小嶋）

88　篠向（ささぶき）城跡　　真庭市三崎・大庭・平松・古見　　地図 19 左

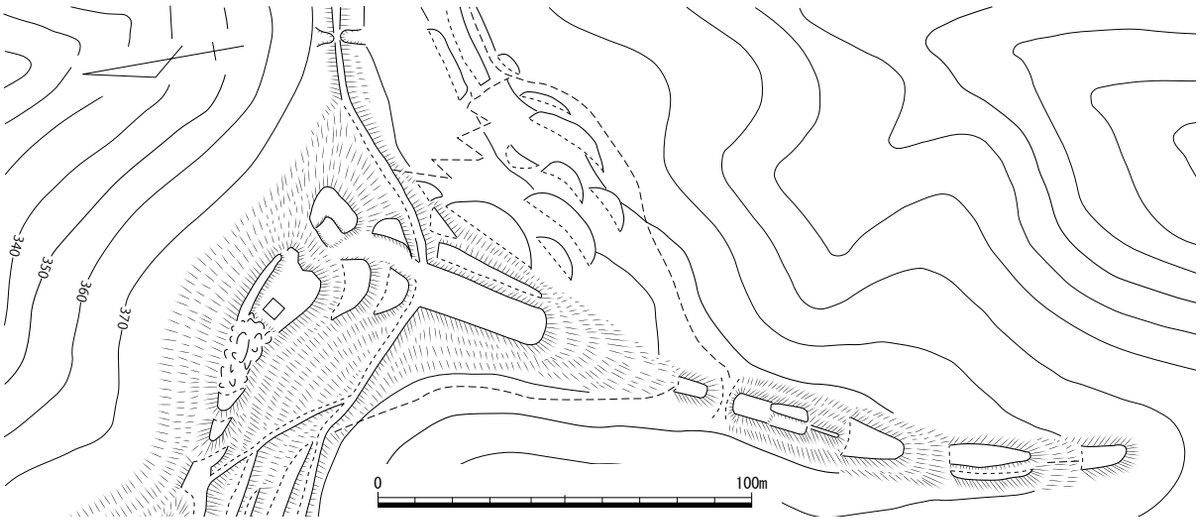
立地　旭川と目木川の合流部を西に見下ろす標高 419 mの笹向山山頂から尾根筋にかけて立地する。山頂からの眺望は良好で、久世から落合にかけての平野を広く見渡すことができる。津山・播磨方面や、勝山・出雲方面、新見・高梁方面への交通路の結節点に位置する。また、山頂部が切岸によって、台形に突出する山容は、遠方からでも容易に識別できる。

概要　山頂は３つの高所が東西に並び、それぞれの頂部に広い曲輪を築いている。東側の高所が一番高く、頂部の曲輪が主郭（本丸）と考えられる。主郭は中程に 0.5 ～ 1 mの段差を持ち、北半が高い。主郭の周囲に急な切岸を設け、その高さは７～８ mを測る。４方向に延びる尾根それぞれに腰曲輪があり、北東側腰曲輪では、平成 12 年度に発掘調査が実施され、礎石建物や幅の狭い掘立柱建物、土師器皿、備前焼擂鉢、鉄釘、北宋銭が検出されている（文献 145）。北東側と南西側腰曲輪の下方には 10 本前後の畝状竪堀群が設けられ、竪堀の中には、現状で深さ 1.5 mを測るものなど、保存状況の良いものが多い。中央の高所にある曲輪（二の丸）の北縁には残存高 0.5 ～ 1 mの土塁がある。平成 19 年度に行われた曲輪北角での発掘調査では、時期差のある掘建柱建物３棟が検出され、備前焼甕や擂鉢、丸瓦、平瓦、土師器皿、青磁碗、鉄釘が出土した（文献 146）。西側の高所には長大な曲輪（三の丸）が造成されている。その北縁に土塁が設けられ、二の丸、三の丸間の鞍部北側にも土塁を設け、北からの攻撃に対する備えとしている。三の丸西側斜面には畝状竪堀が良好に観察できる。規模は幅



第 84 図　篠向城跡縄張り図（1/5,000）　作図：難波澄夫

第 85 図　篠向城跡縄張り図　部分 1 （1/2,000）　作図：難波澄夫



第 86 図　篠向城跡縄張り図　部分２（1/2,000）　作図：難波澄夫

４～５ｍ、深さ約１～ 1.5 ｍを測る。南東側斜面にも３本ほど竪堀が認められる。本丸と二の丸の間には谷が入り、小さな池や井戸状の窪みが確認でき、当時から水源として利用した可能性がある。

これら３つの高所を中心にした縄張りに加え、各方向へ派生する尾根筋にも曲輪を連ねている。本丸から南東方向へのびる尾根は、腰曲輪から先は約 50㎝の段差をつけた連続した曲輪となり、その先に尾根筋の北東側を土塁状に掘り残して南西側に平坦地を造成した曲輪がある。土塁と平坦面の比高は高いところで３ｍを測る。その先に底幅約５ｍ、深さ１～２ｍの堀切がある。そこから２面の小さな曲輪と、鞍部を越えると露岩の著しい小さな高所となる。この高所を越えると、再び尾根筋の北東側を土塁状に掘り残して南西側に平坦地をこしらえた曲輪が認められる。その平坦面には１辺約４ｍ、高さ約 50㎝の方形基壇が残り、お宮関連の施設が建っていたと考えられる。また、この曲輪の南側下方に幾つかの曲輪が認められるが、その中に手水鉢や木製の鳥居が残り、「金比羅宮」とある。このお宮と城館遺構の関係は不明である。ここから尾根筋は南と東に分かれ、南へ下ると、上幅約５ｍ、深さ約 1.5 ～ 2.5 ｍの堀切があり、その先５面の曲輪が認められる。また東の尾根筋の鞍部には、竪堀が尾根筋を挟むように両側に掘削されている。本丸から北へのびる尾根は、畝状竪堀群の下方は細尾根となり、土橋が２か所と尾根先端部に切岸を持つ曲輪が１面存在する。三の丸から南にのびる尾根筋には幾つかの曲輪が階段状にあり、西側尾根筋を土塁状に堀残した曲輪がある。また、三の丸から西に延びる尾根筋には、かなり間隔を開けて尾根先端部の高所を中心に曲輪群が造られている。本丸の南側畝状竪堀群の下方には普門寺跡とされる広い平坦地があり、その西部山際に１辺 1.5 ｍ前後の方形で石積みの井戸が残る。

文献・伝承　『作陽誌』は、一説に、長野越中守が創城、その後矢矧・神戸・横田・稲葉・姉崎等の諸家が在城し、最後の城主姉崎は建武中の人と記す。『太平記』に慶安元年（1361）７月山名氏の美作侵攻にあたり降参した６ヶ城のうち「飯田ノ一族が籠タル篠向ノ城」が見える。以下『美作の山城』によると、『蔭涼軒日』に、明徳の乱（明徳３年 1392）のことか、浦上則宗の祖父「美作入道」が敵を追討すするために作州に発向、篠向城に籠もる大敵を攻め落としたとあるとし、『作陽誌』に、嘉吉の変（嘉吉元年 1441）にあたっては城に拠った赤松方の「凶党数百」を山名教之が討ち、また文亀年中（1501 ～ 1504）には高田城主三浦貞連が城に拠っていた山名右近亮を討ち取り、福田・

金田氏らを在番としたとされるとする。また、『安西軍策』に、天文 13 年（1544）11 月、尼子国久・誠久・敬久父子は備後国を経て美作国に討ち入り、三浦氏が軍勢を籠める「篠吹」など三ヶ城を落とし、出雲国に帰陣したとされるとし、『牧佐馬助覚書』は永禄 10 年（1567）のことか、「大庭郡篠向城」へ「岩屋衆」が攻撃した際、17 歳の牧左馬助は岩佐勘解由と出勢し、山下で首二つを討ち取り、高田城主三浦貞広から感状を与えられたというとする。また、『美作国諸家感状記』、『香川家文書』、『備中原家文書』、『作州高田城主覚書』は、同 11 年２月に毛利勢によって高田城が没落した後、家臣の牧氏は貞広を擁立、同 12 年７月にまず篠向城を切り取り、当城を拠点に高田城を攻撃したとあるとする。

『美作国の山城』は、『吉川家中并寺社文書』『閥閲録』『佐々部一斎留書』『安西軍策』『武家聞伝記』『花房家記事』などに、天正７年（1579）宇喜多氏と毛利氏の対立の際、高田城の向城「篠向之城主郷原（江原）兵庫」は寺畑城に籠城したが、同八年正月、毛利勢の攻撃に城を明け渡し家城の篠向城へ落ち延びたとされ、さらに城兵は同９年６月２９日に城を明け退き、江原親次は牢人したというとし、『中島本政覚書』 は、その後篠向城は再び江原氏の居城となり、天正期中頃か中島本政は「作州笹向」で古見源三郎を「本丸ト二ノ丸」の間で切り伏せ、親次から脇差を与えられたとあるとし、『作陽誌』は、親次は朝鮮へと出勢したが、慶長３年（1598）５月 17 日に釜山で病死、後継者が無く、家は絶えたというとあるが、内記という子息の存在を記す資料もあるとし、また、『作陽誌』に篠向山普門寺（現在は山下に移転）開基不詳、「元篠向城主祈願所也、城廃後堂宇従亡」とあることから、城郭が帰農していた時期から城内に存在していたのは間違いないと指摘する。 （物部）

89 目木（めき）構跡　真庭市目木　地図 19 左

立地　目木川左岸の沖積地に立地する。

概要　北・西・南に堀が巡り、南北約 80 m、東西 75 ～ 100 mのほぼ方形の範囲を区画している。江戸時代の大庄屋福島家の屋敷地であり、敷地内には江戸時代後期に建てられたと思われる母屋（市指定）が現存している。南側の堀は２か所で折れ曲がっている。堀の側面は石垣で、石垣は近世以降の造作である。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『美作古城史』は「目木構」として、福島氏の旧宅で、四周に堀を巡らせ、門前の大樹など構居の遺形を完全に留めるとし、福島玄蕃一則が居を構え、子の七郎右衛門則盛以降は大庄屋を勤め、十三代正美に到るまでこの地に住んだなどとする。 （物部）

写真 37　南側の堀（東から）

写真 38　東側の堀（北から）

写真 39　北側の堀（東から）

90　持家城跡（じげ）　　真庭市上河内　　地図 19 左

立地　河内川西岸に位置する尾根端部の高所一帯に立地する。河内川流域を一望できる。

概要　浅い鞍部を挟んで北西側と南東側に約 70 m離れて高所があり、両高所を中心に曲輪を配している。北西側の曲輪は広く、標高も南東高所より僅かに高いことから主郭と考えられる。主郭の南と北両側に 1 m程低い小曲輪があり、主郭西縁の犬走りで繋がれている。犬走りは深さ 10 ～ 50㎝の溝状を呈す部分があることから、土塁を配している可能性がある。北へ下る尾根には幅の狭い曲輪 4 面と、北東へ下る尾根に曲輪 6 面を配す。最下段の曲輪の背面に当たる東側切岸は高さ約 5 mある。その曲輪の北側緩斜面を 6 本の畝状竪堀群で埋めている。主郭南の鞍部には堀切が約 20 mの間隔を開けて 2 条あり、規模は幅約 5 m、深さ 3 ～ 0.5 mと幅約 4.5 m、深さ約 1 ～ 2 m。南東高所には 50㎝程の段差がある約 20 × 15 mの曲輪とその南下約 2 mに曲輪を設ける。その南に堀切 2 条と土塁を設け、その下方尾根筋にさらに 4 面の曲輪を造っている。北東に下る尾根にも堀切と土塁を設けている。主郭から鞍部に掛けての南西斜面には、竪堀と 4 条の畝状竪堀群が認められる。ちょうど尾根上の曲輪の切岸が緩斜面となる部分を埋めるように配されている。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『古城之覚』は大庭郡上河内村の「中村之（城）」として、城主不詳、『作陽誌』は「地家堡」として、上河内中村にあり、「地家」は地名で居主は不詳、北の麓から山上へ 1 町 40 間あるとし、『美作鏡』は「中村地家城」、『美作古城史』は「地下堡」とするとする。（物部）

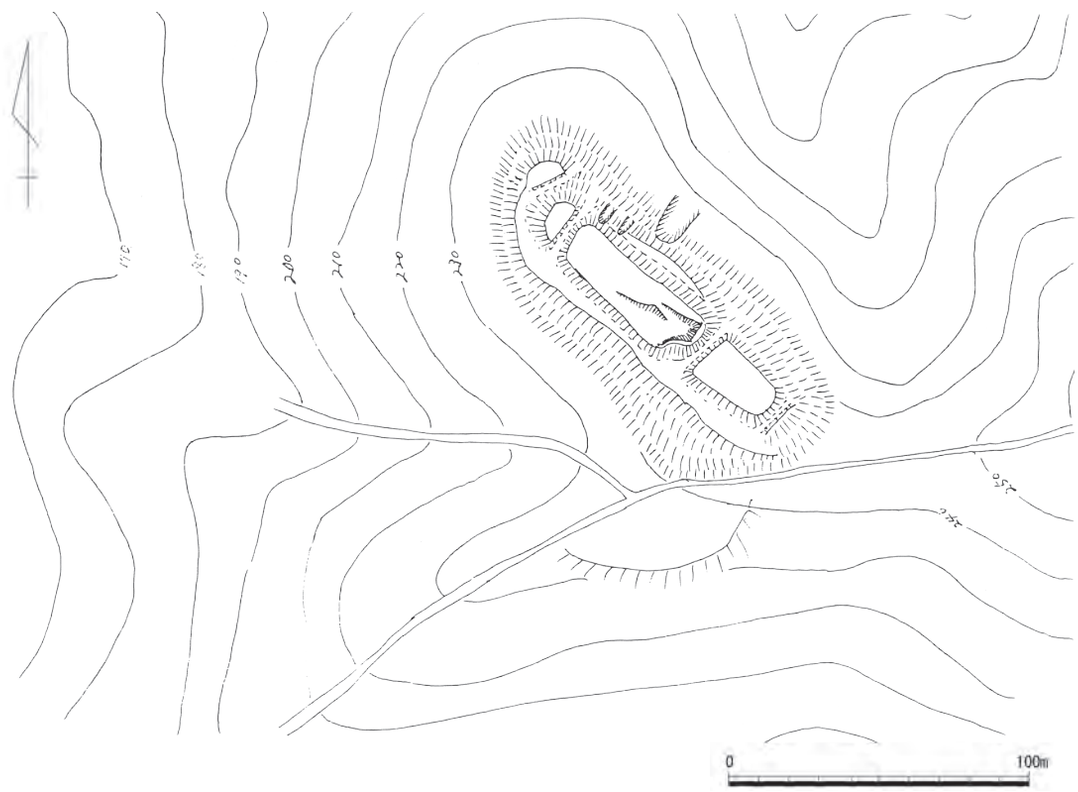
第 87 図　持家城跡縄張り図（1/2,500）　作図：難波澄夫

91　鳥越山城跡（とりごえやま）　　真庭市古見・田原　　地図 19 左

立地　旭川東岸に所在する古見山（標高 419 m）山塊の西端部に位置する尾根高所（標高 240 m）に立地する。麓の集落との比高は約 100 mで、落合から久世にかけての旭川流域を広く見渡すことができる。西側の山裾に善福寺が所在する。

概要　曲輪は尾根筋に３面並び、中央の曲輪が最高所にあり主郭と推定される。主郭は長さ約 50 m、幅約 10 mを測るが、南東側に大規模な虎口を設けている。主郭の南西辺の南よりから、まず北東方向に入ってすぐ南東に折れ、ここでＵターンするように北西方向へ斜路を上がって主郭面へ達する。虎口の造成時、地山の縁を南から東にかけて掘り残し、その上に高さ約 50㎝の盛土をすることによって、虎口を取り囲む高い壁を造っている。主郭北西側の切岸は高さ約３m、主郭南東側の切岸の高さは約２～ 2.5 mで、切岸直下には、現状で深さ 30㎝程度の浅い溝が認められる。北西側の尾根先端方向の尾根筋にはもう一つ曲輪があるが、切岸等明瞭ではない。尾根鞍部側にあたる南東側の曲輪の先端斜面下方にも浅い堀切状の溝が認められるが、明瞭でない。主郭の南西側斜面には犬走りが見られる。反対側の北東斜面は、植林による地形改変が認められ、曲輪の有無等不明である。

文献・伝承　『作陽誌』は「鳥越山」とし、古見村に在り、高さ百五十間、周四百二十間、山上は削平がありとする。『落合町史』は篠向城の出城と推定する。　（物部）



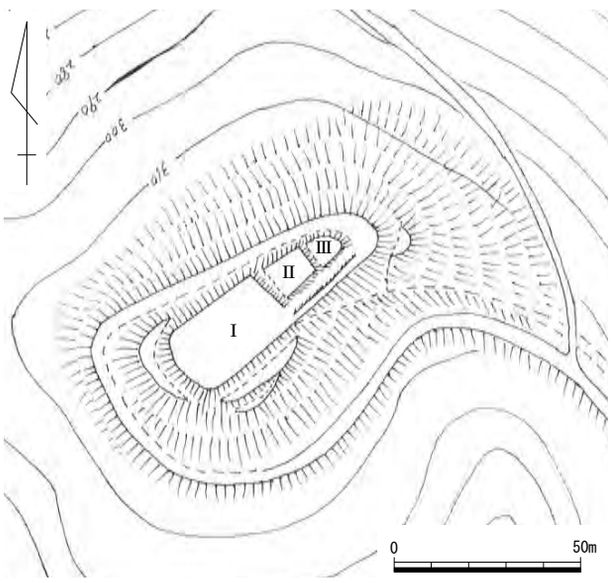
第 88 図　鳥越山城跡縄張り図（1/2,500）　作図：難波澄夫

93　田楽（でんがく）城跡　　真庭市中河内　　地図 19 左

立地　城は、河内川左岸に所在する白口山から北に延びる尾根筋の先端頂部に立地し、河内川流域を一望する。約３km 南西に同一山塊上の土器尾城跡が、約３km 北東に持家城跡が所在している。

概要　テレビ中継施設及びその管理道により、頂部平坦面と北西斜面部は大規模に改変を受けている。頂部に曲輪Ⅰを設け、その北東尾根筋に曲輪Ⅱ・Ⅲを配し、また南及び西側斜面にも曲輪を築く。なお、地上デジタルテレビ放送施設建設に伴い、平成 20 年度に曲輪Ⅰ中央部の発掘調査を実施したが、遺構・遺物ともに確認されていない。

文献・伝承　『作陽誌』には、宇喜多秀家家臣の牧藤左衛門家信が居住したと記載されている。『真庭郡誌』では、一名「田永城」としているが、「楽」字の草書を「永」と誤読したかもしれないと『美作国の山城』では指摘している。　（小嶋）



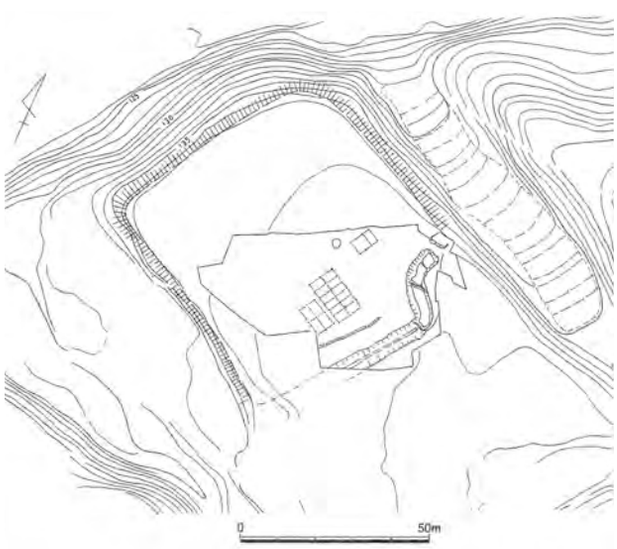
第 89 図　田楽城跡縄張り図（1/2,000）

94　赤野（あかの）遺跡　　真庭市赤野　　地図 19 左

立地　河内川に面した河岸段丘上に立地する。

概要　三方向を川と谷によって画された河岸段丘上の平坦地を堀切で切断し、一辺 60 ～ 70 ｍの方形の敷地を造っている。昭和 46・47 年の中国縦貫自動車道建設に伴い、その敷地の約４割が発掘調査され、掘立柱建物３棟と、幅約５ｍ、深さ約１ｍの堀切、東角部に通路状遺構、堀切の内側に沿って幅約５ｍ、残存高 0.3 ｍの土塁等を検出した。出土遺物には、備前焼擂鉢、古瀬戸の卸目皿や天目茶碗、青磁、白磁、須恵器、土師器杯や小皿等がある。備前焼は鎌倉時代後半から室町時代にかけての特徴を有す。荘園の荘官や、土器尾城や高山城主の居館の可能性が指摘されている。

文献・伝承　『美作国の山城』は地元でカチュウヤシキ（家中屋敷）と呼ばれ、南山上はトノノオクと呼ばれているとする。　（物部）



第 90 図　赤野遺跡平面図（1/2,000）
『岡山県立博物館研究報告』33 より引用

95 高山城跡（たかやま）　真庭市下河内　地図 19 左

立地　河内川の南岸の山塊から北西へ派生する尾根先端高所に立地する。河内川流域を見渡すことができる。

概要　最高所の主郭は一辺約 10 mの三角形状を呈する小規模なもので、中央部は自然地形を残し、周囲に小さな平坦部を設けている。

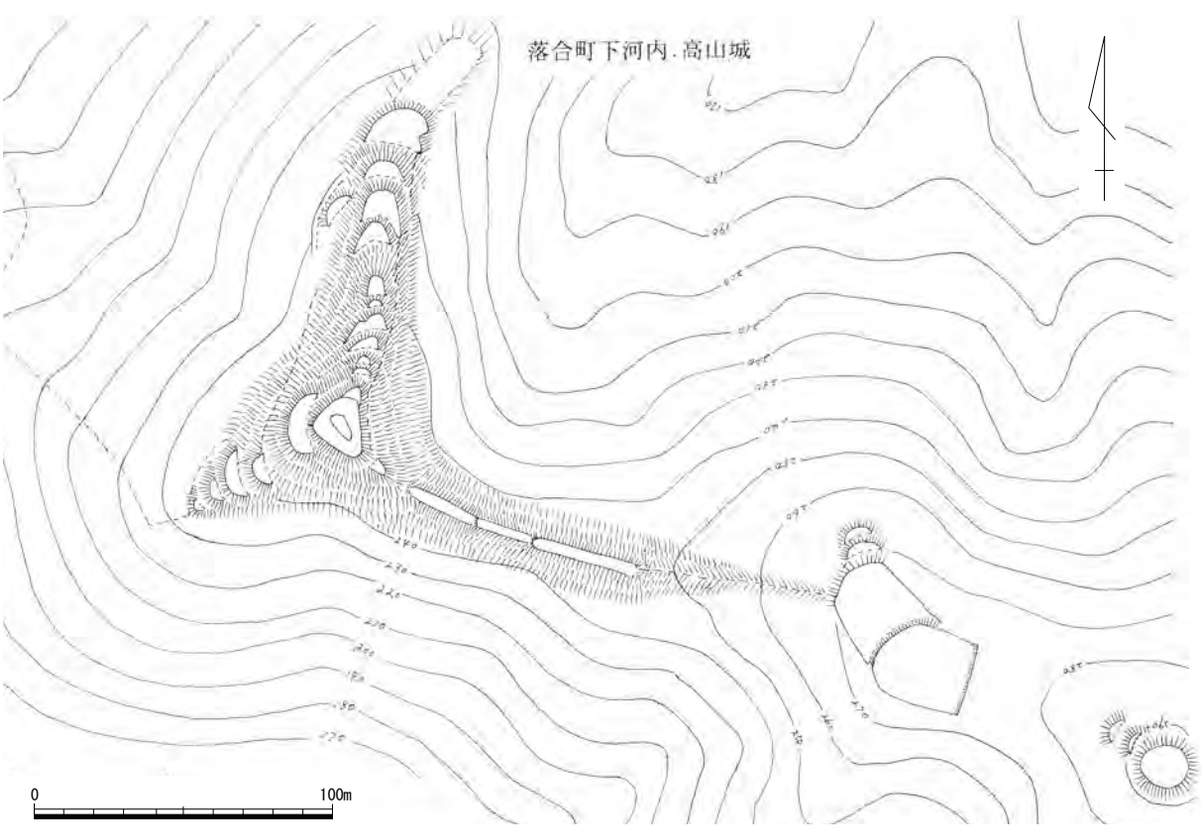
主郭から北へ下る尾根筋に 11 面の曲輪を階段状に設けている。曲輪の規模は小さなものから、下段ほど広いものとなる。段差は 1.5 m前後がほとんどで、切岸はしっかりしたものが多い。

主郭から西へ下がる尾根筋には５面の曲輪を連ねている。切岸は高さ約２m前後あり、しっかりしている。曲輪は総じて小さい。

主郭から南東方向の尾根鞍部は馬の背状の細尾根で、堀切等は見られない。その先の尾根は再び 30 mほど登ったところでなだらかになり、ここに広い平坦地がある。縁辺に人為的な平坦部が認められるが、多くは自然地形と考えられるため、城館関連遺構と判断しがたい状況であった。また、尾根をさらに登っていった標高 440 m付近の山頂は３つの高所が並び、その鞍部は広く平坦であるが、自然地形と思われる。

北西山裾は河内川が造った河岸段丘で、土井谷と呼ばれる。ここに居館が存在する可能性がある。

文献・伝承　『美作国の山城』は、城名と城主は、近世の諸記録に「高山城」と謝って表記されている神山城（真庭市樫東）からの訛伝であり、城跡として検討の余地があると指摘する。　（物部）



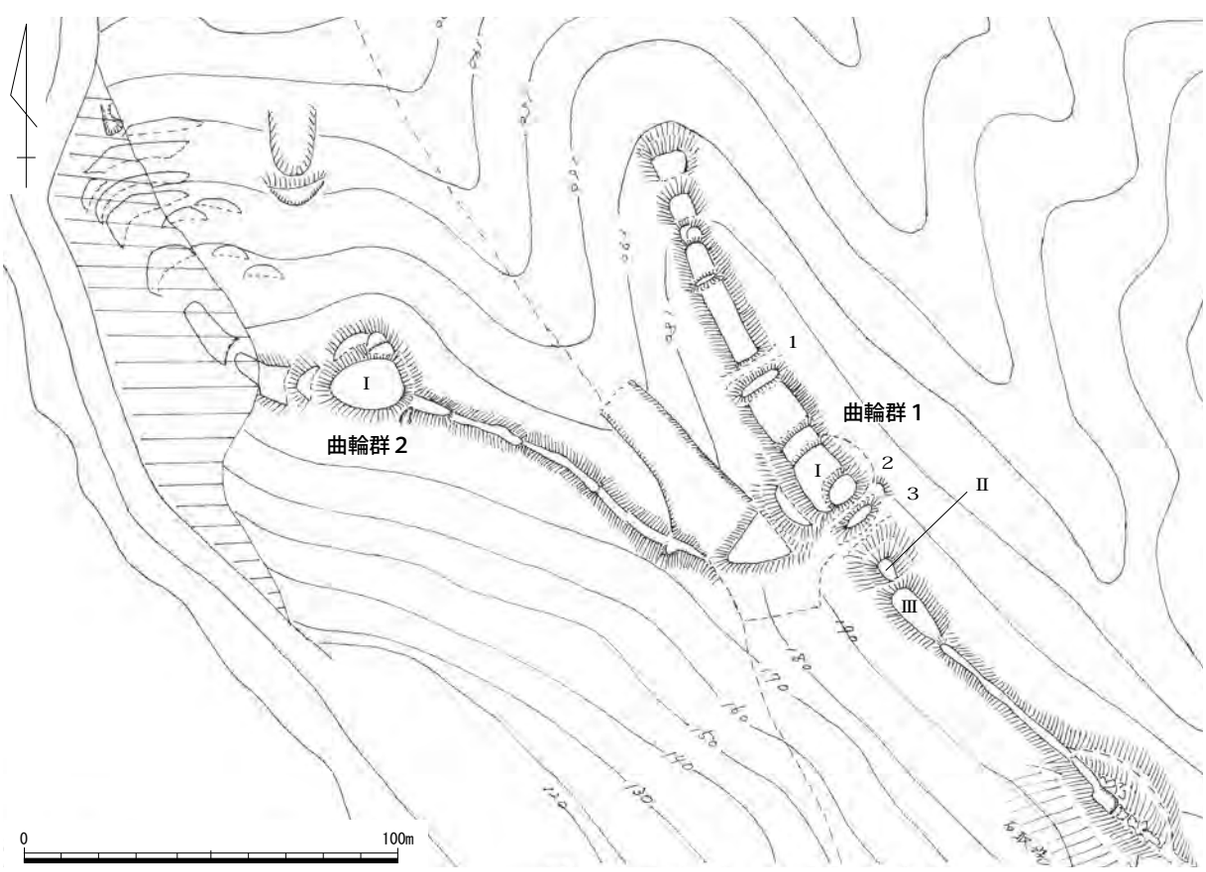
第 91 図　高山城跡縄張り図（1/2,500）　作図：難波澄夫

96 逆巻（さかまき）城跡　　真庭市法界寺・赤野　　地図 19 左

立地　城は、土器尾城跡が築かれた山塊の西端に所在し、旭川と河内川が合流する地点を北西眼下に望む。

概要　二股に分かれた尾根筋に曲輪を配した城で、東の曲輪群 1 と西の曲輪群 2 で構成される。曲輪群 1 は、尾根筋頂部に堀切 1 と堀切 2 ・ 3 によって画された曲輪 I を主郭とする。この曲輪の南東辺には高さ約 1.5m の櫓台を、北西辺には土塁を築き守りを固める。堀切 1 より以北は、曲輪を 5 面連ねており、そのなかには土塁を設けているものもある。曲輪 I より標高が高い曲輪Ⅱ・Ⅲは、高さ約 1.5 mの切岸を備える。曲輪群 2 は、先端頂部に約 20 × 10 mの曲輪 I を設け、この曲輪から北西に延びる尾根筋に曲輪を連ねていたようであるが、道路拡幅工事によって消失しており、現状では 2 面のみ残存している。曲輪群 1 と 2 は、幅 2 ～ 3 mの痩せ尾根で繋がる。曲輪群 1 の西側は、なだらかな平坦面が広がる谷地形となっている。この城は、単体では曲輪群 1 の曲輪 I を主郭とするものの、その立地から土器尾城跡の出城的な役割を持っていたと考えられる。

文献・伝承　別名「坂牧城」もしくは「城山」と伝えられている。『美作国の山城』では、『古城之覚』に大庭郡赤野村の「坂牧」として、城主が牧藤右（左）衛門家信で、法界寺村と赤野村の境にありとし、また『美作鏡』には「逆巻城」とすると記載する。『美作古城史』では、牧藤左衛門居城、また東郷若狭守居城との説も伝えられているとし、落合町垂水神社の社記に「永禄年間逆巻城主東郷若狭守源義邦」が記載されていると記す。　（小嶋）



第 92 図　逆巻城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

97　土器尾（ときお）城跡　　真庭市下河内・法界寺　　地図 19 左

立地　城は、「中の谷山」と呼ばれる山頂に立地し、東流する備中川と西流する河内川が旭川と合流する地点を南西から望む。この山の頂部から樹枝状に広がる尾根の先端頂部には、逆巻城跡・田楽城跡・高山城跡が所在する。約３km 西北西に所在する注連山城跡や、約 4.5km 北西に所在する宮山城跡、さらに北に目を向けると大寺畑城跡や篠向城跡をも視認する。

概要　城は、幅の狭い鞍部で繋がる東の曲輪群１と西の曲輪群２に分かれる。前者は南北に延びる尾根筋に、後者は北西に延びる尾根筋に築かれている。

曲輪群１は、標高約 450 mの頂部に配した曲輪Ⅰを主郭とし、その北辺には土塁が築かれる。この曲輪から北に延びる尾根筋には、各々約１～ 1.5 mの切岸を備えた曲輪を連ねた防御構造を有するが、これらの曲輪の造成は雑で、なかには自然地形が残っているものも存在する。曲輪Ⅱ以北は明確な城館関連遺構が認められず、痩せ尾根が続く。曲輪群２と繋がる西側の尾根筋には、小曲輪を２面配して守りを固める。曲輪Ⅰの背後は急斜面である。

曲輪群２は、尾根の頂部に自然地形を残す約 25 × 10 mの曲輪Ⅰを設ける。この曲輪から北西に延びる尾根の先端には、南辺から西辺にかけて土塁を築いた曲輪Ⅱを配している。この両曲輪間は馬の背状の痩せ尾根で繋がっているのみで、明瞭な加工痕跡は認められない。曲輪群１と２を結ぶ鞍部は非常に狭く、その幅は２～３mを測る。鞍部の南側には、比高差が各々２m以上の加工段が数面認められるが、城に伴うものか不明である。

文献・伝承　『作陽誌』には、「土器尾山」として、山頂に「塁石」があり、宇喜多秀家家臣の牧藤左衛門家信を城主としている。また『美作古城史』には、妹尾氏の先祖が「土器尾之城」を預かり、妹尾重助が土器尾山の下で討死し、その墓が赤野村にあると伝える覚書の写しを載せている。『落合町史』では、牧藤左衛門が在城し、尾根続きの田楽城・高山城と逆巻城を兼衛していたと記す。地元ではこの城を「一の丸」や「要害」と呼んでおり、この城の麓にある小原集落の上の山中には「殿の奥」という地名が残されている。また、曲輪群１の南東側の谷地形となっている地点は、「城廊ヶ峪」と呼ばれているようであり、やや広い平坦地が所在する。（小嶋）

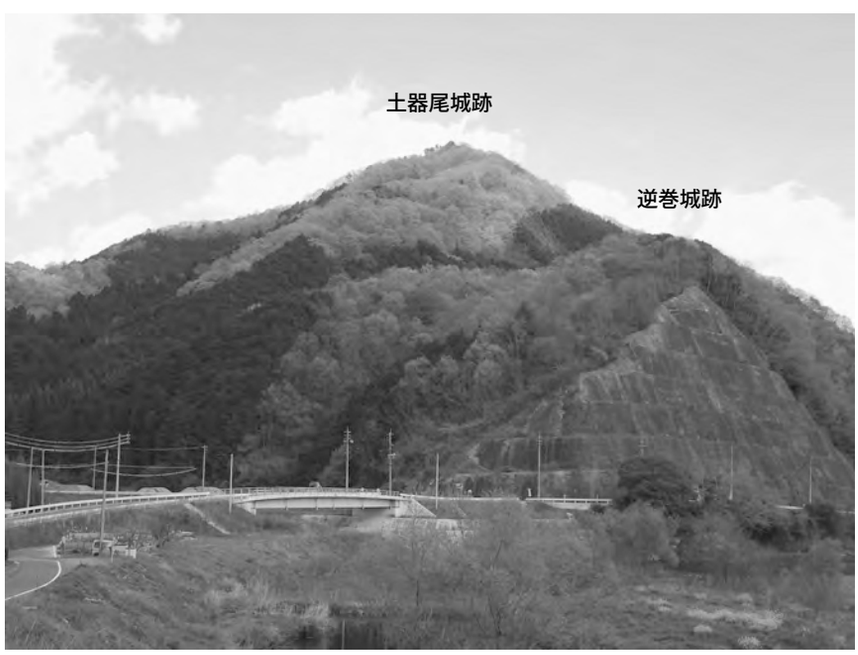
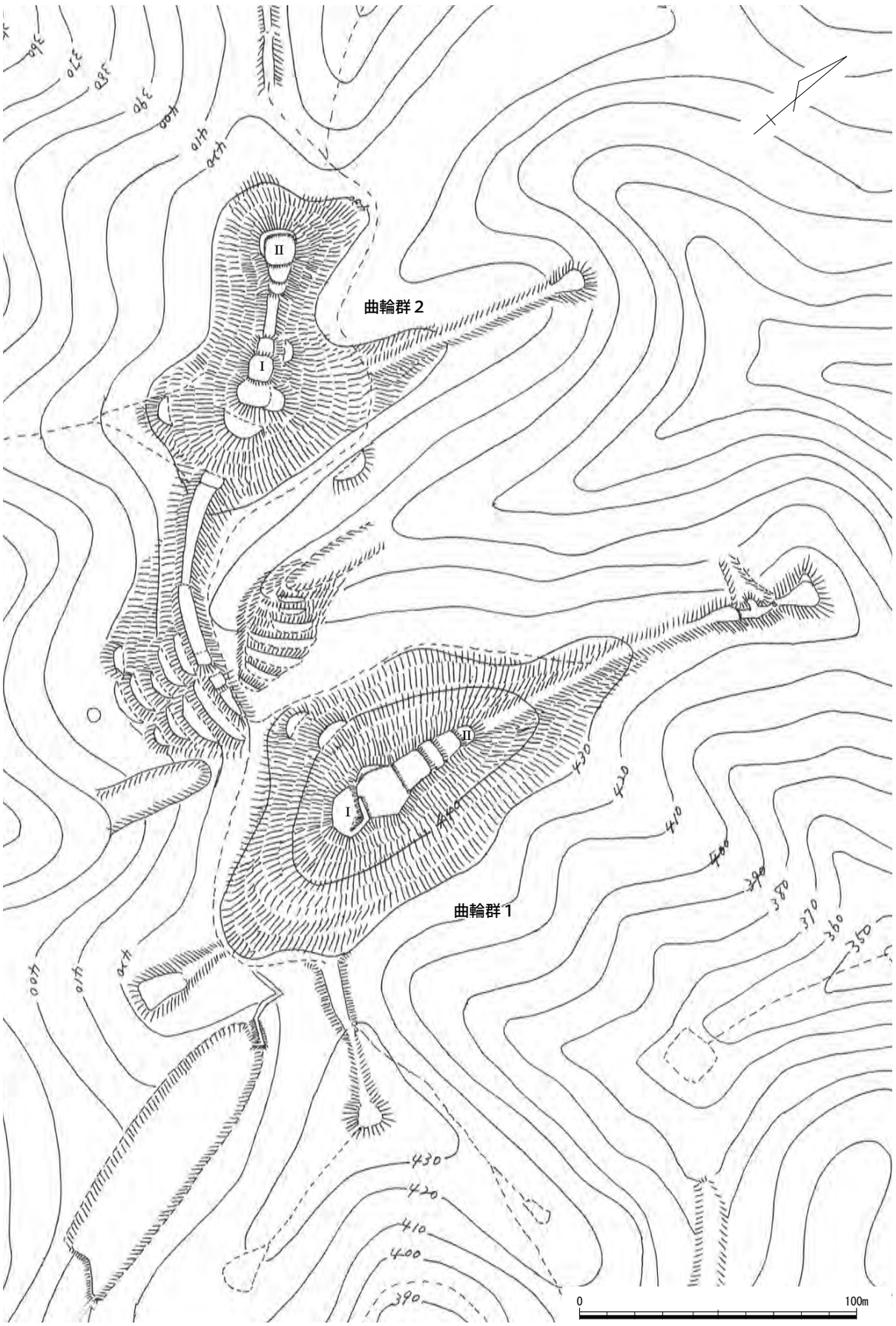
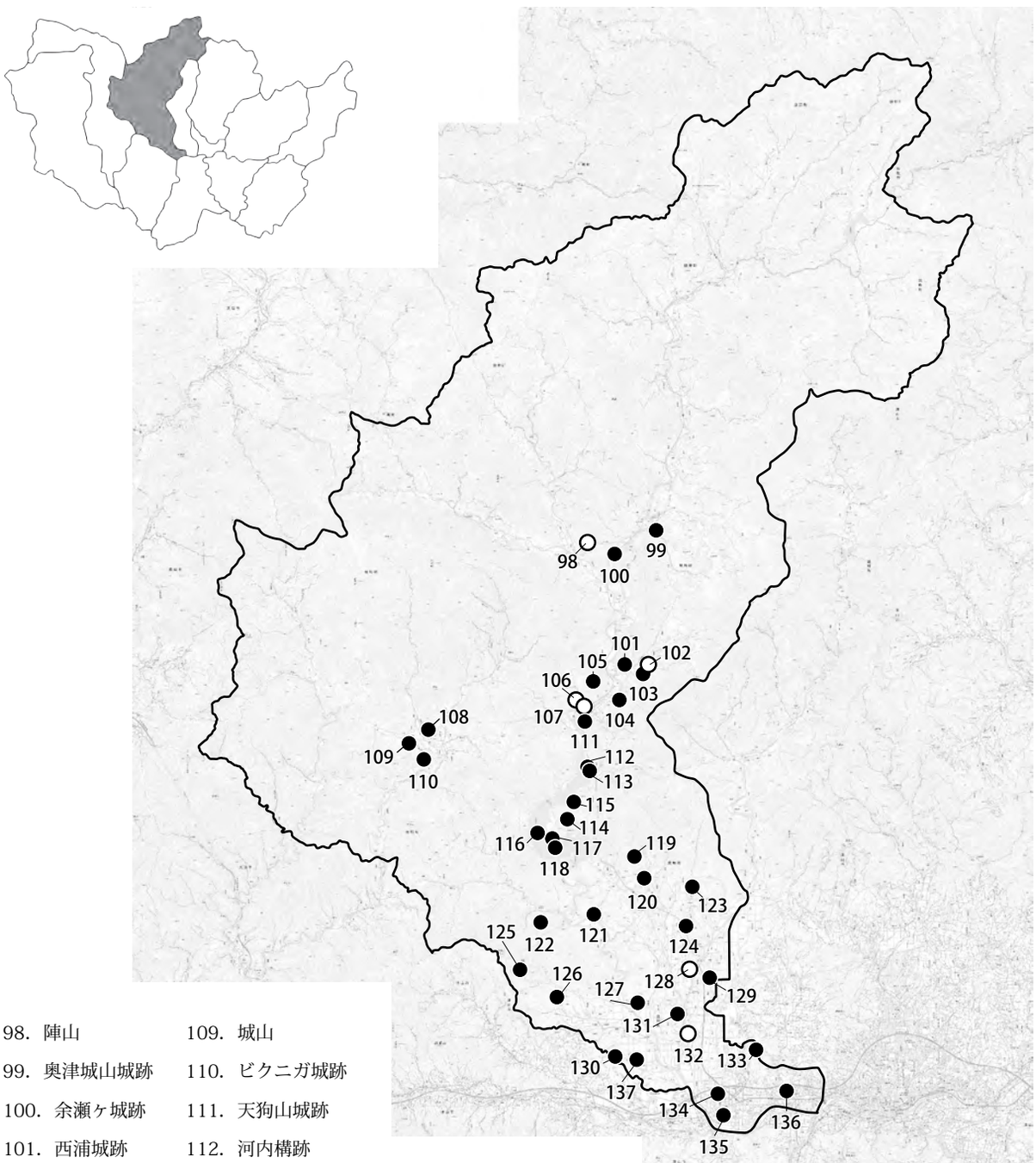


写真 40　遠景（北西から）
（頂部が土器尾城跡で、向かって右側尾根上に逆巻城跡が所在）



第 93 図　土器尾城跡縄張り図（1/2,000）　作図：難波澄夫

第３節　西西条郡



98．陣山
99．奥津城山城跡
100．余瀬ヶ城跡
101．西浦城跡
102．寄山城跡
103．二山城跡
104．小丸城跡
105．西屋城跡
106．斎藤別墅跡
107．侍屋敷跡
108．岡の屻城跡
109．城山
110．ビクニガ城跡
111．天狗山城跡
112．河内構跡
113．河内城跡
114．東山城跡
115．久田上原城跡
116．久田堀ノ内遺跡
117．比丘尼ヶ城跡
118．城峪城跡
119．小田草城跡
120．城山城跡
121．岩棚構跡
122．葛下城跡
123．春日城跡
124．犬城跡
125．小田城跡
126．キリゴ谷城山城跡
127．鴫津の構跡
128．大田和城跡・竹田遺跡・竹田古墳群
129．沖構跡
130．目崎城跡
131．古川城跡
132．因幡殿
133．局笠山城跡
134．院庄館跡
135．院庄構城跡
136．美和山城跡
137．下原構跡

第 94 図　西西条郡城館位置図

99　奥津城山城跡（おくつしろやま）　　苫田郡鏡野町奥津　　地図７左

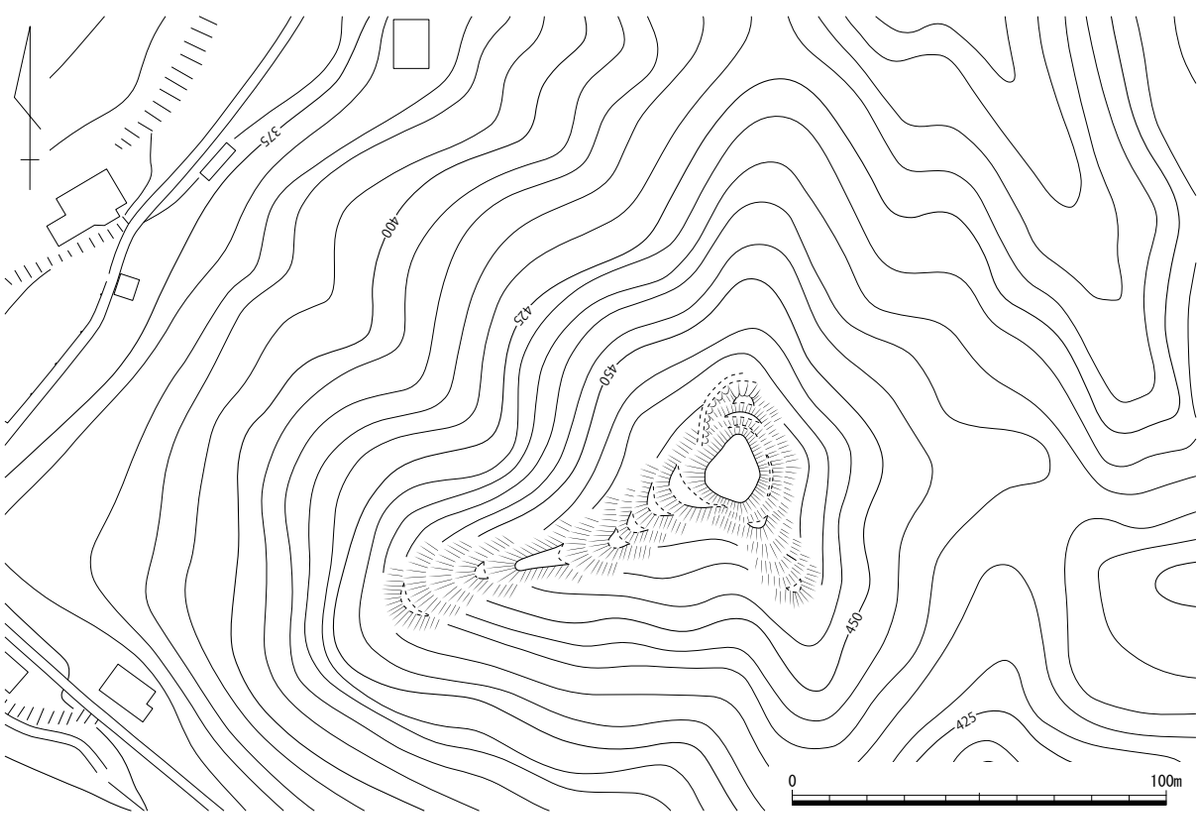
立地　標高約 550 mの山塊から西側に派生する尾根筋の先端頂部に位置する。南北に流れる吉井川に近接した東側地点にあたる。当城から見ると眼下に奥津温泉街が見渡せ、眺望は絶好である。

概要　標高約 460 m地点にある主郭は、直径が 20 m前後と小さい。そこから３方向に伸びる尾根筋に曲輪を連ねた山城である。主郭の周囲は２mほどの切岸が比較的鮮明に築かれる。切岸の裾部には、犬走り状の段が残る箇所があり、主郭を巡っている。３方向ある尾根筋の中でも、西側が最も曲輪が多く連なる。大小の曲輪が７面あり、主郭からみて１面目は幅約 20 m、５面目は長さ約 20 mと大きい。各曲輪の端部は不鮮明な部分が多い。北側と南東側に伸びる尾根筋には、それぞれ２面と１面の曲輪を配する。主郭の背後にあたる東側は急斜面で、天然の守りであるため堀切などは存在しない。

当城は全長が 100 m強の小さな山城ではあるが、吉井川流域を広い範囲で見渡せる位置にあり、見張りの役割もあったと考えられる。

文献・伝承　『作陽誌』に書かれた、苫西郡奥津川東村にある「城尾山」と思われる。城には「暫削」の跡があると記される。（文献 133）　　（小林）

写真 41　遠景（北西から）



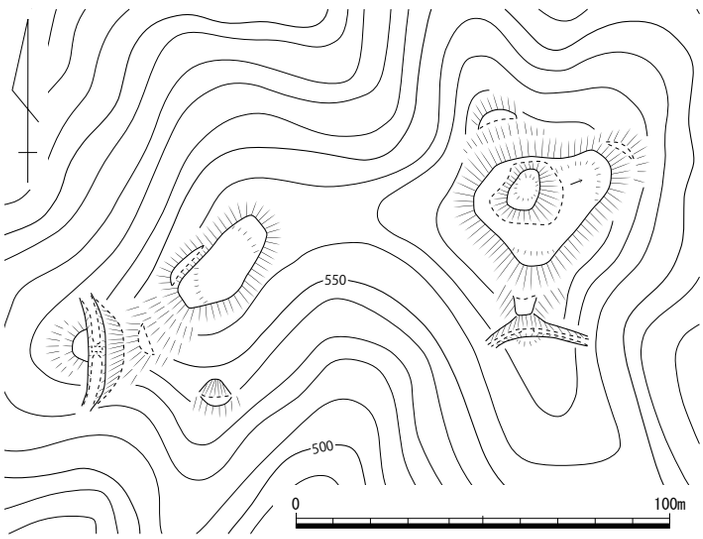
第 95 図　奥津城山城跡縄張り図（1/2,000）

100　余瀬（よせ）ヶ城跡　　苫田郡鏡野町奥津川西・羽出　　地図７左

立地　吉井川と羽出川の合流点の北側にある独立山塊の頂部（標高 551 m）とその周辺に立地する。

概要　山頂の主郭は地形に規制されて不整形で、内部には高さ３mほどの土壇状遺構が築かれている。西側の尾根頂部にも不整な長方形の曲輪が見られるが、間の尾根筋には特に造成した痕跡はない。両曲輪の周囲には小規模な平坦面が散発的に認められる。城域の南端と西端は堀切によって尾根を遮断し、西端の堀切には不明瞭な土橋らしき遺構が伴っている。

文献・伝承　『作陽誌』は「大河原堡」として、大河原将監の居城で、将監は住民の反乱で殺されたと記す。『美作鏡』では「鷹巣山城」とし、城主を「河原将監」とする。『三浦家統道』には、『奥津村東西谷筋名残』の領主、大河原将監は小幡に居城したとある。（文献 133）　（岡本）



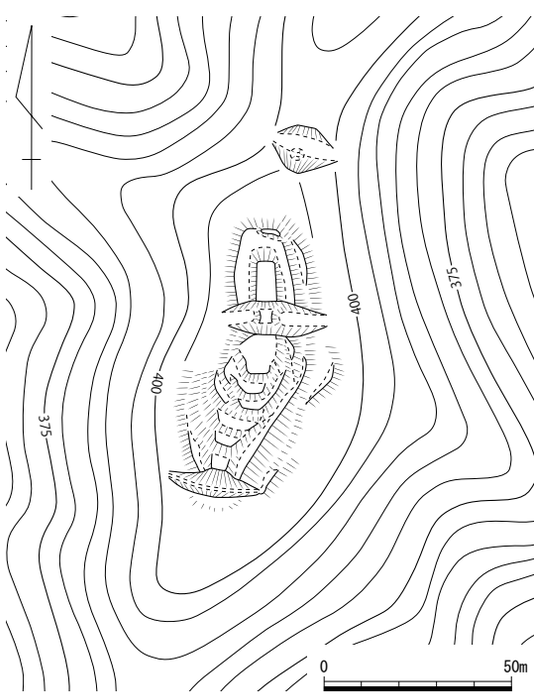
第 96 図　余瀬ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

101　西浦（にしうら）城跡　　苫田郡鏡野町井坂・養野　　地図７左

立地　吉井川東岸、養野川北岸の山塊端部の南に延びる尾根に立地する。西屋城を南西に望める。

概要　尾根筋の高所に約 10 m四方の曲輪 (主郭) を設け、北側に深さ 0.7 ～ 3.5 mの堀切を配する。箱堀状の底部中央には土橋がある。主郭の南側には段差 0.5 ～ 1.5 mの曲輪が５面と、その南に深さ 0.5 ～ 2.5 mの堀切、曲輪群の東西両斜面には犬走りが認められる。北の堀切の北側にも、曲輪と帯曲輪があり、北端に土塁が残る。その北の尾根鞍部に堀切があり、その先は自然地形である。図示していないが、曲輪群から南約 150 mの尾根筋に２段の平坦地が確認でき、城域の南端はこの辺りか。

文献・伝承　『作陽誌』は「井坂堡」とし、西屋城と争うとする。『奥津町史』はでは城主として大原主計、福光彦四郎佐良、裔太郎左衛門佐久、裔太郎兵馬佐幸等の名を挙げる。（文献 133）　（物部）



第 97 図　西浦城跡縄張り図（1/2,000）

103　二山（にざん）城跡　　苫田郡鏡野町養野　　地図７左

立地　吉井川の支流、養野川の左岸に向かって南から延びる丘陵尾根の端部付近に立地する。

概要　標高約 360 mの頂部に楕円形の主郭を置き、内部に土壇状の高まりが残る。西側斜面に曲輪と思われる平坦面が数面認められるが、後世の地形改変が著しい。また、主郭から約 150 m東側の尾根筋にも平坦面があり、土塁・竪堀状の遺構も確認されるが、城の遺構かどうか不明のため右図では除外した。両地点の間は、宅地や畑の造成で旧地形が失われている。

文献･伝承　『古城之覚』は、苫西郡養野村の「弐ツ山」として、城主を湯野藤右衛門尉とする。『美作国の山城』によれば、宇喜多氏の家臣、牧左馬助が毛利氏の陣に夜討ちした際、「余野二ツ山」の城主湯殿右衛門督と切り合い負傷、互いに退いたという（『牧左馬助覚書』）。（文献 133）　（岡本）

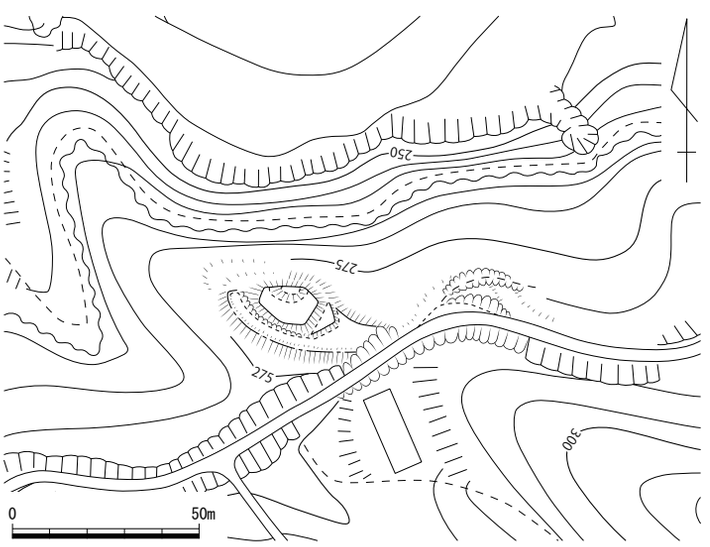
第 98 図　二山城跡縄張り図（1/2,000）

104　小丸（こまる）城跡　　苫田郡鏡野町杉　　地図７左

立地　蛇行する吉井川の攻撃面にあたる山腹の尾根突端高所に立地し、北に吉井川を見下ろし、対岸山頂の西屋城を望む。

概要　高所に３面の平坦地が残る。上段の主郭は北側に約 50㎝の高まりを残している。主郭の東側、約 1.5 mの切岸の下に２面目の小さな曲輪、その下約２mに、東側尾根鞍部から南斜面にかけて平坦地が巡る。この３面目の平坦地は、車道の造成と考えられる痕跡が認められ、地形改変を受けていると推定されるが、曲輪を利用した可能性がある。また、その東の尾根鞍部には現道による大規模な掘削があり、堀切の存在は不明である。

文献・伝承　『岡山県遺跡地図』は規模や立地から村落単位の土豪が構えた城郭と推定する。　（物部）

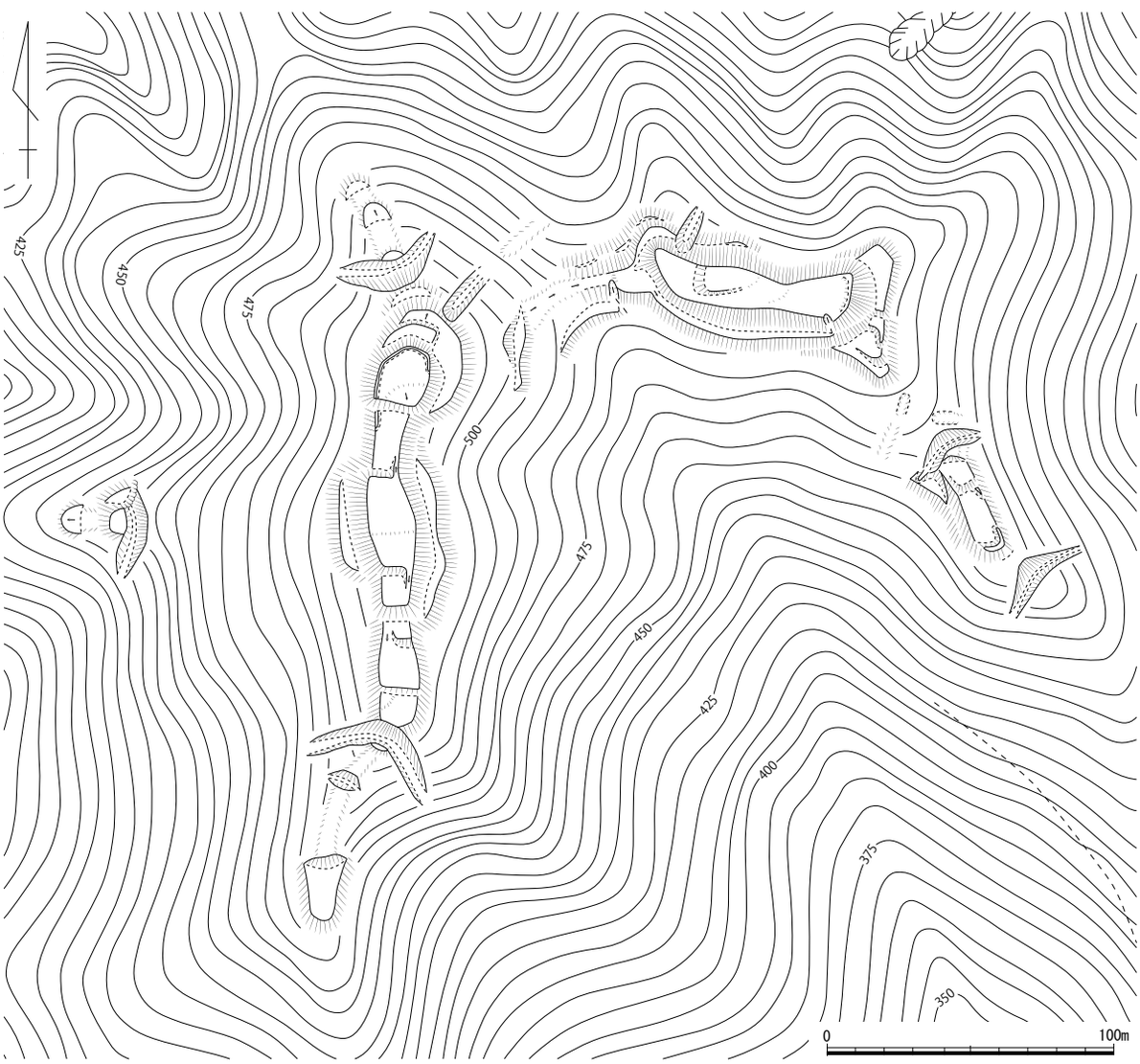


第 99 図　小丸城跡縄張り図（1/2,000）

105　西屋（にしや）城跡　　苫田郡鏡野町西屋・女原　　地図７左

立地　吉井川の右岸に接する標高 515m の山頂とその周辺に立地する。地形は急峻で、北側背後の山塊との間が鞍部となっており、半ば独立丘陵の景観を呈している。城からは北側を除く三方に展望が開け、東は養野・井坂・女原、南は箱、西は西屋の各集落を広く見渡すことができる位置にある。吉井川対岸の養野・井坂地区に西浦城跡、杉地区に天狗山城跡が所在する。また、南西麓の西屋地区には斎藤別墅・西屋士人居宅（侍屋敷）と伝えられる場所がある。

概要　山頂周辺の尾根筋上を城域とし、その範囲は南北約 260 m、東西約 350 mに及ぶ。城域は大きく東西に二分され、全体としては馬蹄形の曲輪配置がなされる。個々の曲輪は概してしっかりと造成されているが､土塁や竪堀は部分的な使用にとどまっている。急峻な地形や､『作陽誌』で「西屋八谷」と呼ばれる深い谷筋そのものも、天然の防御施設として活用できたであろう。城域の東西南北の各端は堀切によって画されている｡東西曲輪群に挟まれる南向きの谷筋にも多数の平坦面が認められたが、



第 100 図 西屋城跡縄張り図（1/2,500）

植林の段の可能性が高く、城とは無関係と判断し縄張り図に含めていない。

城域西半部は、南北方向に延びる尾根筋上に、約 260 mにわたって各種施設が連なる典型的な連郭式で、北側は１条、南側は２条の堀切で遮断される。西側の尾根筋にも堀切がみられる。西半部曲輪群の中心をなすのは、おおむね長方形を基調とし、直線的に並ぶ６面の曲輪である。主郭は山頂かつ曲輪群の中心に置かれ、南北約 30 m、東西約 15 mの長方形を呈し、南北の曲輪とは斜路で接続している。また、東西両側の４～６m下方には細長い犬走りを有する。主郭の北側は、鞍部にあたる曲輪を経て北端の曲輪に至る。この曲輪は六角形に近い形状で、北辺から西辺にかけて高さ約 0.5 mの土塁を伴っている。北側は６～７mの切岸となり、２面の曲輪が付属し、さらに北東に向けて１本の竪堀が伸びている。城域の北端部は､城内からの高低差が約５mを測る堀切によって遮断されるが､その外側にも小規模な曲輪が認められる。主郭の南側には、長方形の曲輪が１～２mの段差を介して３面に連なる｡南端には２条の堀切があり､特に北側のものは城内からの高低差が10m近くに達する。北端と同様に、堀切より南側にも曲輪が１面設けられている。

東半部では、西半部曲輪群の北端付近から派生する東西方向の尾根上と、さらに南東に延びる尾根上に、約 200 mにわたって諸施設が並列する。前者の尾根上には、東西約 70 mに及ぶ城内最大規模の曲輪が置かれる。曲輪内はほぼ平坦だが、中央からやや西寄りの位置に、高さ最大 1.5 mの方形の盛り上がりが認められる。曲輪の周囲は高さ 3.5 ～６mの切岸となり、南側から西側にかけては、西側の尾根筋から面が連続する細長い犬走りが取り巻き、北西部には１本の竪堀が設置されている。東端部にはごくわずかな帯状の高まりがあり、土塁の痕跡と考えられる。曲輪の南東端と、犬走りの西端付近には肩口がえぐれたような箇所があり、虎口跡の可能性が指摘できる。一方、東側は高さ４mほどの切岸の下に、３面程度の曲輪が設けられている。ここからさらに南東に延伸する尾根は２条の堀切によって遮断され、その間には２面の曲輪が設置される。

西屋城はその規模の大きさと、吉井川沿いの平野部を広く見渡せる立地条件にある点から、奥津地域の戦国時代を代表する城といえよう。

文献・伝承　『古城之覚』は苫西郡西屋村の「西屋」とし、城主を河端丹後とする。『作陽誌』は、西屋村にあり高さ二百三十間、天正の初めに宇喜多直家の将、斎藤玄蕃助近実が居城、吉川氏・小早川氏らが城を囲んだが積雪のため果たせず、翌春再び城を囲み、玄蕃は逃れ落城したと記す。『美作鏡』は城主を河端丹後に続き、のち苔口宗十郎・斎藤玄蕃とする。『美作古城記』は、築城の年代は不明としたうえで、以下のように記す。天正初年、荒神山城主の花房助兵衛が苔口宗十郎らを派遣して西屋城に置いた。宇喜多氏は毛利氏の攻撃に対処するため、さらに小田草城主の斎藤玄蕃助近実を西屋城の守将とした。毛利氏は、中村頼宗を派遣して天正９（1581）年の秋にこの城を攻撃したが年末に至るも陥落せず、いったん包囲を解いて撤退。翌春に攻撃を再開しようやく落城、斎藤近実は宇喜多方へと退去した。天正 12（1584）年に毛利・宇喜多の和睦が成立すると、西屋城には川端丹後守家長が在城したが後に嵯峨山城に移り、以後は廃城となった、とする。（文献 133）　（岡本）

写真 42　遠景（北西から）

108　岡の峠城跡　　苫田郡鏡野町富東谷・富西谷　　＜町指定史跡＞　地図 12 右

立地　鏡野町旧富村役場の北側に、約 580 m級の扇山がある。この山の両脇には白賀川と目木川が流れている。当城は、扇山から南に派生した尾根筋先端頂部でこれら両川に挟まれた箇所に位置している。旧富村の中心地を北側から見下ろす立地であり、当城がある尾根筋一帯は墳丘墓を含む弥生時代の遺跡が所在する。

概要　頂部にある主郭は、長さが約 50 m、幅が約 25 mと長大で、さらに東側へ緩やかに長さ約 15 mと 30 mある２面の曲輪が延びており、この３つの施設が当城の中心になる。主郭周辺の切岸は、２mほどありしっかりとした造りである。西側の尾根鞍部には、腰曲輪１面と不明瞭な曲輪が１面続き、その先に２条の堀切が配される。この堀切は、現状では１mほどの深さしかなく、不明瞭なところもある。その間には 10 mほどの高まりがあり、「三塚の壇」と呼ばれる弥生墳丘墓であった。堀切は弥生墳丘墓の造成面を利用して配されたようだ。ちなみにここからかつて特殊壺が出土した。この堀切から主郭の東側端曲輪までの規模だけでも、すでに 250 mを越える。

主郭の東側にはさらに２面の曲輪が続き、その先端から尾根先端部に向けて、土塁で囲んだ施設や竪堀状の施設が不規則に配される。土塁による囲いは大小３つほどあり、その上辺付近の規模は、最大で 70 mほどを測り、平均でも 50 m前後のびる。ただし地形に沿って配されて、規則性には乏しいと言えよう。

主郭から南側に伸びる尾根筋にも長さ約 70 mと約 50 mの土塁が２つ伸びている。この土塁によって内側を完全に囲っている。土塁の高さは２m程だが、先端付近では最大４mを測る箇所もある。この南側と東側にある土塁囲いは、当城を特徴付ける施設と言え、その用途が注目される。これら施設を含めると、当城は全長が 300 mを越え、旧富村を代表する山城となる。

文献・伝承　城主等は不明である。『作陽誌』では、当城周辺の山塊は、麓にある布施神社の旧社地であったと記される。（文献 133）　（小林）

写真 43　遠景（南から）

写真 44　土塁（西から）

第 101 図　岡の屺城跡縄張り図（1/2,000）

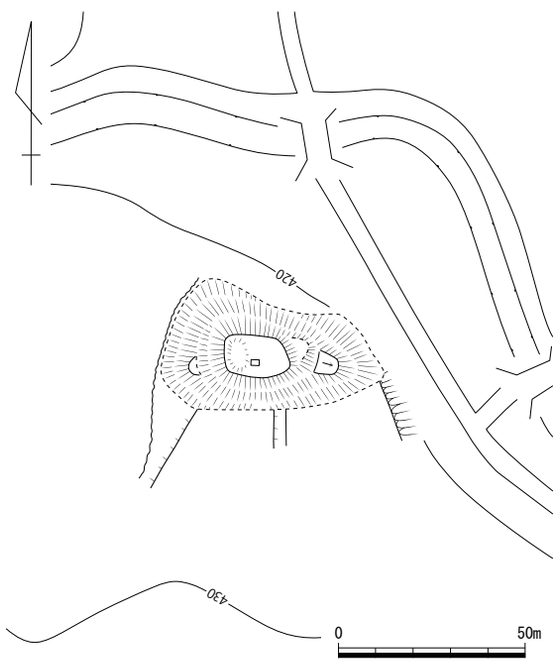
109　城山（じょうやま）　　苫田郡鏡野町富西谷　　地図 12 右

立地　馬郷川の南側の畔に小さな丘があり、当城はその頂部に位置している。背後にはビクニガ城が存在する山塊がそびえている。

概要　全長約 50 mの小さな施設であり、比高差も約 20 mしかない。頂部にある主郭も、長さ約 15 m、幅約 10 mと小さい。今でも祠が存在している。主郭の東側に 2 面の曲輪があるが、切岸は不明瞭である。西側には長さ・幅とも 5 mにも満たない曲輪が 1 面存在する。当城はすべてにおいて小規模な施設であるが、主郭の周囲は急峻な地形であり、この立地こそが最大の防御施設であったと思われる。

文献・伝承　城主等は不明であるが、『富村史』では、尼子方の長田九郎左衛門と記されている。

（小林）



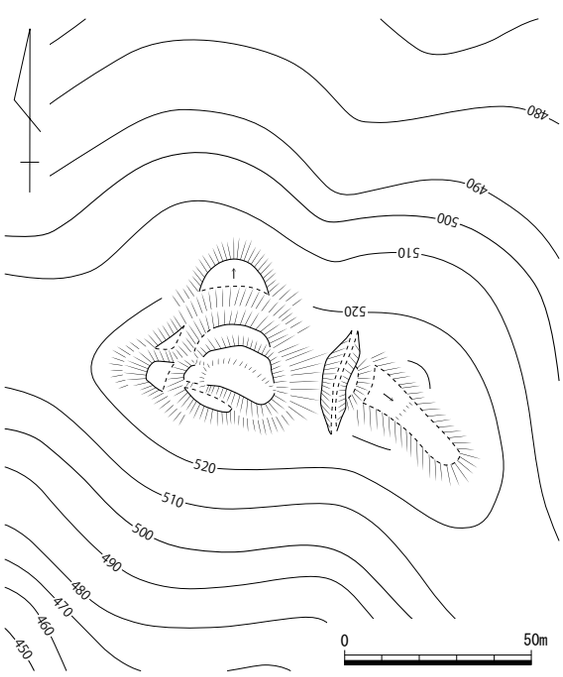
第 102 図　城山縄張り図（1/2,000）

110　ビクニガ城跡　　苫田郡鏡野町富西谷・富東谷　　地図 12 右

立地　吉馬郷川の南側に約 580 m級の山塊があり、ここから東へ向けて延びる尾根先端頂部に位置する。

概要　全長が約 90 mの小さい施設である。頂部にある主郭は、長さが約 20 m、幅約 15 mであるが、平坦地は不明瞭なところが多い。尾根先端部側に堀切 1 条と土塁が 1 つ存在する。堀切りの深さは約 1.5 mで、主郭から底部までは 7 mを測る。なお土塁の先端方向に緩やかな平坦地があり、曲輪になるかもしれない。主郭の両脇は、北側に 2 面、南側に 1 面の曲輪が配される。背後には 1 面の曲輪があるが、尾根鞍部付近に堀切は存在しない。当城は、規模も小さく主郭の造りも判然としないが、眺望がすぐれているため陣城的な役割があったと考えられる。

文献・伝承　城主等は不明である。　（小林）



第 103 図　ビクニガ城跡縄張り図（1/2,000）

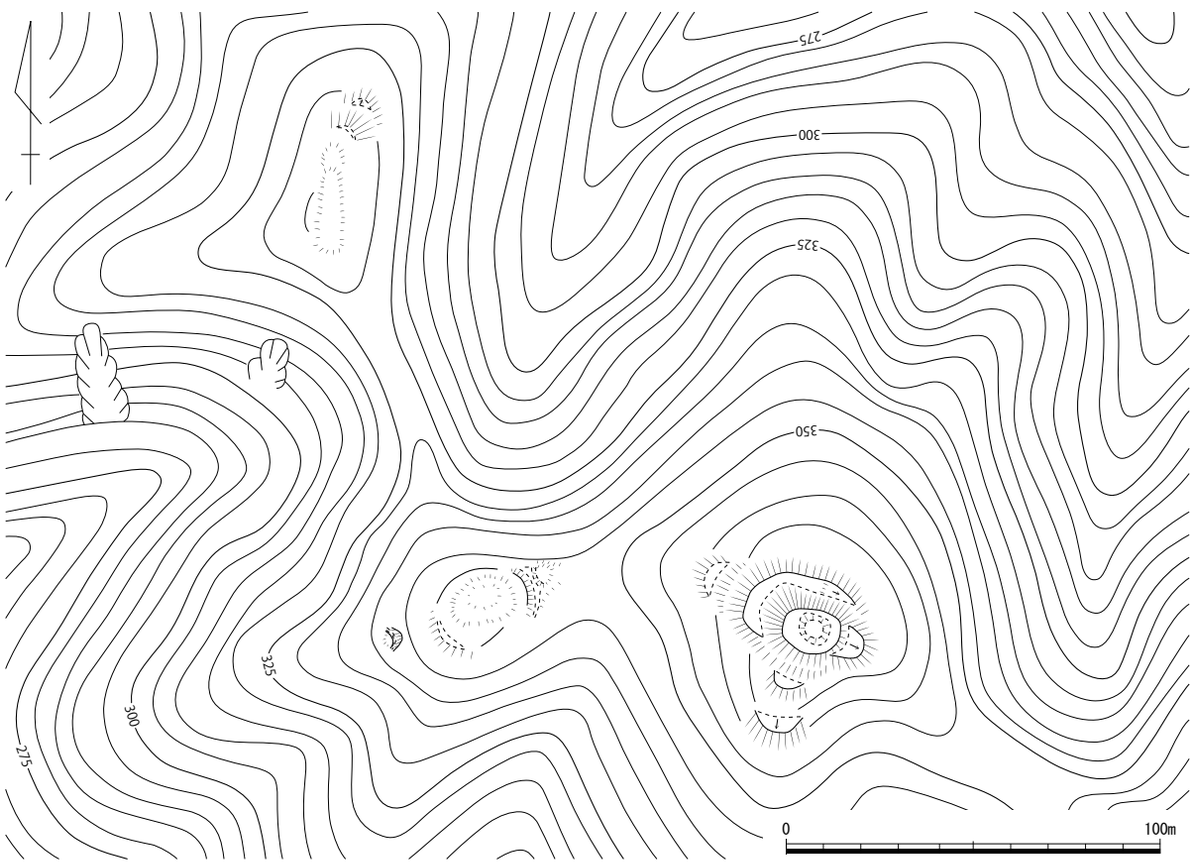
111　天狗山城跡（てんぐやま）　　苫田郡鏡野町杉　　地図 13 左

立地　西に流れていた吉井川が、南東へと鋭角に流れを転ずる部分に向かって、左岸側から突出した尾根筋上に築かれた山城である。尾根筋上に三つの頂部があり、それぞれの箇所に城郭遺構の存在が想定されている。北側に西屋城を望見することができる。

概要　最も標高が高い東端の頂部には、全長 15 mほどの不整楕円形の主郭が置かれている。郭面上には、不明瞭であるが高さ 0.7 mほどの高まりがあり、奥津地域の山城によく見られる土壇状遺構かもしれない。主郭の北側から西側にかけては、６～７ｍ下方を帯曲輪が巡るほか、周囲には小規模な平坦面が数か所認められる。中央と西側の頂部は、地形はほぼ平坦ではあるが造成の痕跡が希薄で、自然地形の可能性が高い。ただ､中央の頂部では東西両側に小規模な堀切、西端の頂部では北側に小規模な地形改変がそれぞれ確認できたことから、何らかの利用がなされた可能性があると判断し、城域に含めることとした。城域の背後、各地点を結ぶ尾根筋上には､堀切などの遮断施設は確認されなかった。

文献・伝承　近年になって確認された城であり、関連する伝承や文献などは存在しない。　（岡本）

写真 45　遠景（北東から）



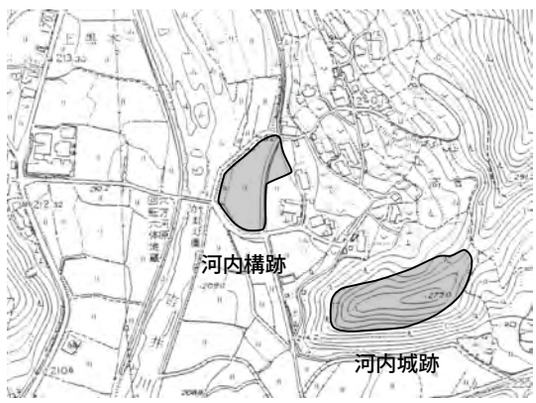
第 104 図　天狗山城跡縄張り図（1/2,000）

112　河内構跡（こうちのかまえ）　　苫田郡鏡野町河内　　地図 13 左

立地　吉井川がほぼ南に流れる場所で、左岸に接する比高約10ｍの河岸段丘上に立地する遺跡である。苫田ダムの完成に伴い、現在では遺跡のあった場所は奥津湖（ダム湖）に水没している。

概要　本地点には「構」という小字名が存在し、南東の丘陵上にある河内城跡と何らかの関連を有する遺構の存在が想定されていた。苫田ダム建設に伴い、平成７・８年度に発掘調査が実施され、主として南北方向の町道よりも西側から、弥生時代及び中近世の遺構が検出されている。中近世の遺構としては、２条の直線的な大溝と、掘立柱建物 12 棟・井戸・土坑・溝などが多数検出された。大溝の時期は室町時代後半である。掘立柱建物には、大溝と軸線を揃えたものも含まれている。以上のように、河内城の時期である南北朝時代に位置づけられる遺構はなく、両者の関連を裏付ける成果は得られなかった。とはいえ、大溝や掘立柱建物群から、室町時代以降の屋敷地の存在は明らかである。

文献・伝承　『作陽誌』では「河端構」として、苫西郡河内村にあり、河端清次の居宅跡と記す。『美作鏡』は、河内村の「構ノ城」として、城主を河端清次とする。（文献 133）　　（岡本）



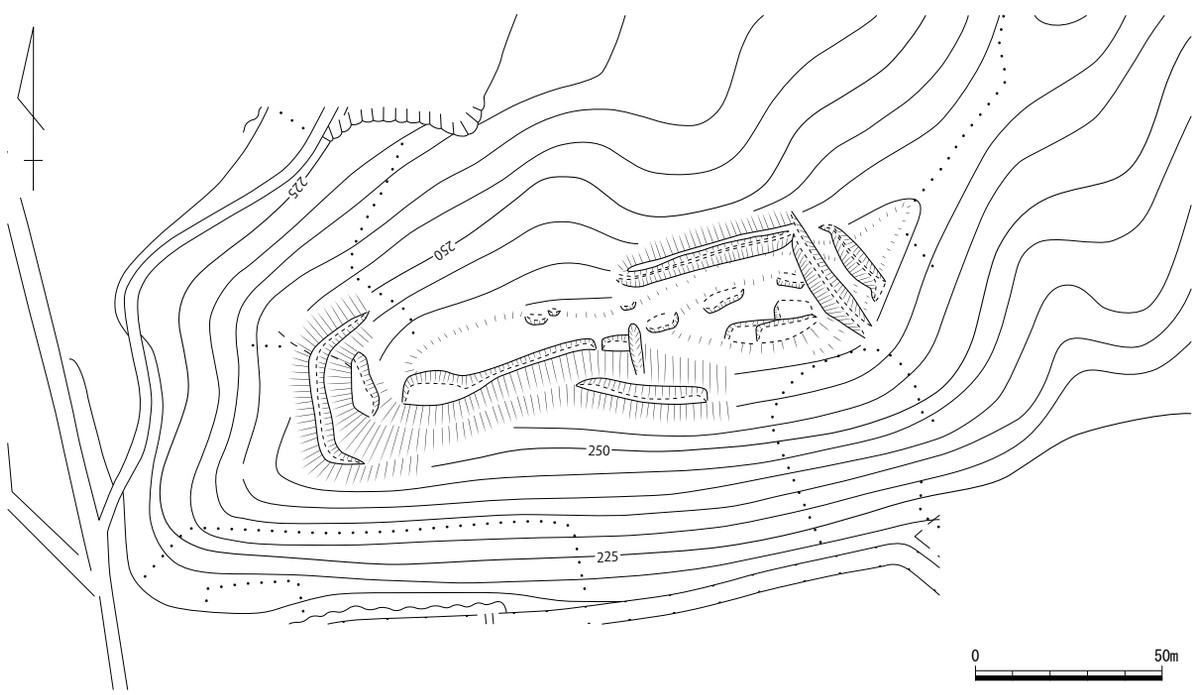
第 105 図　河内構位置図（1/10,000）

第 106 図　河内構跡遺構配置図（1/1,000）文献 142 より引用

113　河内（こうち）城跡　　苫田郡鏡野町河内　　地図 13 左

立地　北側の山塊から吉井川左岸の平地に向かって、細長く張り出す尾根上に立地する城である。城の南麓には支流の河内川が西に流れている。北西の河岸段丘上には河内構跡が所在する。城域は現在も残っているが、一部は住宅地となり、麓の平地は奥津湖（苫田ダムのダム湖）に没している。

概要　平成８・９年度に全域を対象とした発掘調査がなされ、城の全容が判明した。二条の堀切で背後の尾根筋を遮断し、さらに北側斜面に切岸・土塁、西側及び南側斜面に切岸・犬走りを設け、これらに囲まれた尾根上を城域とする。西端の急斜面には、山裾から曲輪にまで続くつづら折りの山道がつけられており、登城道として機能したと考えられる。全体に、城内の地形の改変は限定的なものにとどまり、戦国時代の山城とは様相が大きく異なる。城内の尾根頂部や緩斜面からは 11 面の曲輪が検出された。曲輪の規模は、2.5㎡から 132.8㎡まであり、概して小規模なものが多く、むしろ段状遺構と呼べるような形態である。さらに、相互の連結が欠如して自然地形の中に散在する傾向がみられ、一部を除いて通路による連絡も図られていない。不明確ながら主郭と考えられるのは、頂部付近に位置し、城内で最大規模の曲輪２であるが、内部に建物の存在は確認できなかった。西半部にある曲輪 10 では､内部に 21 個の柱穴が認められたが建物や柵は特定できなかった。この曲輪 10 からは、東側の曲輪６に向けて通路が延びている。東端部の曲輪３では、内部から「つぶて石」の可能性のある礫が多数出土した。城域背後の堀切２条は､城外側の堀切１は断面がＶ字形をなす典型的な薬研堀、城内側の堀切２は断面が台形を呈する箱堀である。深さはそれぞれ 2.75 m、2.9 mを測る。城域北東部の斜面に設けられた切岸・土塁は、切岸の造成で生じた土砂を下方斜面上に盛土し、さらに土塁を設けることで構築されている。土塁と切岸の間は溝状となり、内部から「つぶて石」と考えられる多数の礫が出土している。このほか、曲輪５と曲輪６との間に１本の竪堀が確認された。城内の出土



第 107 図　河内城跡縄張り図（1/2,000）

遺物には、生活用品として白磁皿・土師質小皿・瓦質羽釜・鉄鍋・砥石など、武器として鉄鏃・薙刀の石突・刀子がある。これらの遺物から判断して、城の時期は南北朝時代の 14 世紀中葉から後葉に比定される。

河内城は、近隣の南北朝期城郭である城峪城・比丘尼ヶ城・久田上原城と同様に、2 条の堀切で背後の尾根筋を遮断するという特徴を有し、一定の規格のもとに築かれたと推測される。一方、多数の曲輪が城域内に散在し主郭が明確でないという特徴からは、これら諸城の中では古相を示すといえる。

文献・伝承　近世の地誌類には記載がなく、伝承も特に知られていない。（岡本）

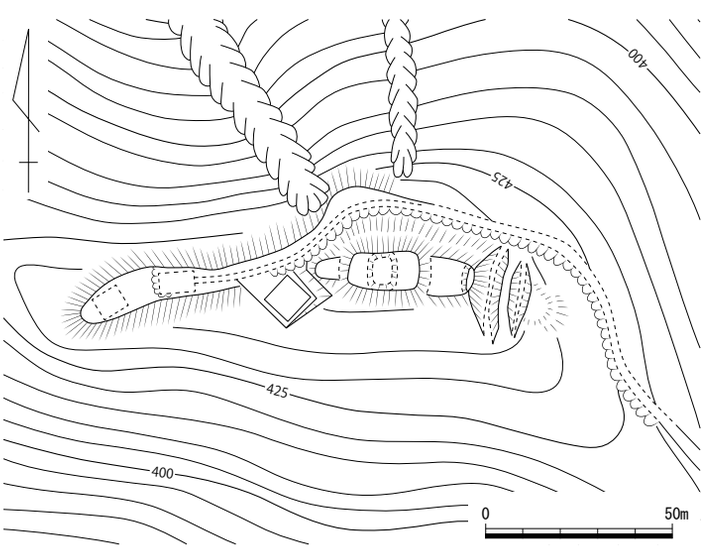
写真 46　遠景（北西から）

写真 47　つぶて石出土状況（南西から）

114　東山城跡（ひがしやま）　苫田郡鏡野町久田上原・久田下原　地図 13 左

立地　吉井川左岸の久田上原・久田下原地区の境界にあたる標高約 440 mの山頂に立地する。久田上原城と比丘尼ヶ城のほぼ中間に位置し、現在は奥津湖となった久田地区の平野部を広く見渡せる。

概要　東西方向に延びる山頂の尾根筋を利用して築かれている。電波塔と道路の建設によって地形がかなり改変され、縄張りの正確な把握は難しいが、稜線に沿った東西に細長い城域が想定できる。山頂に長方形の主郭を構え、東西にもそれぞれ曲輪を配置する。主郭内には高さ 0.7 mほどの方形の高まりが認められる。東端の尾根筋は 2 条の堀切で遮断される。西端については、電波塔が立つ平坦地までを城域と推定した。久田上原城と比丘尼ヶ城を結ぶ情報伝達を担った城と考えられる。



第 108 図　東山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　近世地誌類には記載がなく、伝承も知られていない。（岡本）

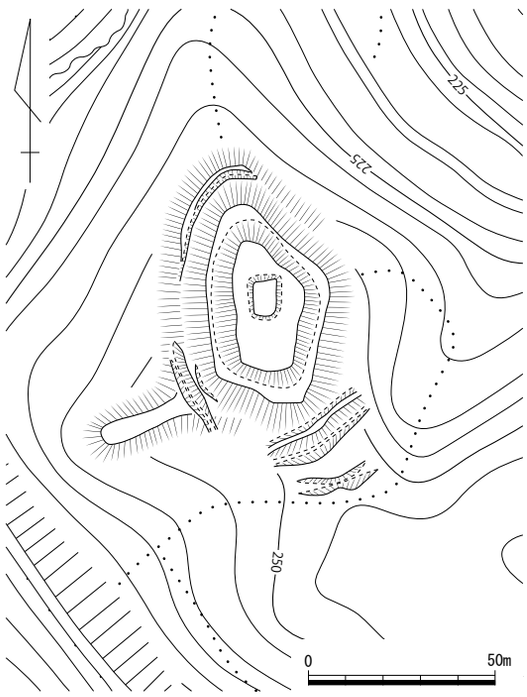
115　久田上原（くたかみのはら）城跡　　苫田郡鏡野町久田上原　　地図 13 左

立地　城峪城と河内城のほぼ中間に位置し、吉井川左岸の平野に向けて、南側から延びる丘陵の頂部に立地する。苫田ダムの完成に伴って、現在は湖岸に面する位置にある。

概要　平成７・８年度に、城域北端部の発掘調査が実施されている。城域は、南側背後の鞍部を２条の堀切、平野側にあたる北側を切岸と土塁、西側に延びる尾根筋を１条の堀切でそれぞれ遮断することで形成される。頂部に置かれた主郭は南北約 35 m、東西約 19 mを測る不整な台形を呈し、平坦に造成されている。中央部には、地山を削り残すことで、南北約 12.5 m、東西約 8.3 m、高さ約 0.8 mの長方形の土壇状遺構を築いている。主郭より４mほど下方には、幅 0.8 ～ 4.8 mの帯曲輪が全周する。さらに西側堀切の外側にも、長さ 20 m、最大幅６mほどの曲輪が延びている。

南側鞍部の堀切２条のうち北側のものは、掘削した土砂を城内側に盛り上げることで土塁を構築し、防御力を高めている。また西側の堀切も、内側に溝を掘削することで結果的に土塁と同様の効果が生じている。北側の切岸・土塁は、帯曲輪の下方約６mの位置に、約 40 mにわたって弧状に巡っている。切岸を掘削・成形した土を外側に盛り上げて土塁を構築したとみられ、両者の間は溝状を呈する。溝の底からは「つぶて石」とみられる円礫が多数出土した。城内から土師器小皿や青磁碗・備前焼・勝間田焼などの遺物が出土している。これらの遺物からみて、本城は久田地区の他の城と同じく、南北朝時代の 14 世紀後半を中心として機能したと推測される。城の構造の点からは、河内城や城峪城よりも新しい時期に位置づけられよう。

文献・伝承　『作陽誌』は「城尾山」として、久田上原村岩元にあり、同所に鉱穴があって、かつて和泉国の富人道珍がここで銀を鋳た、と記すが、城に直接関わるような記述はない。（文献 133）（岡本）



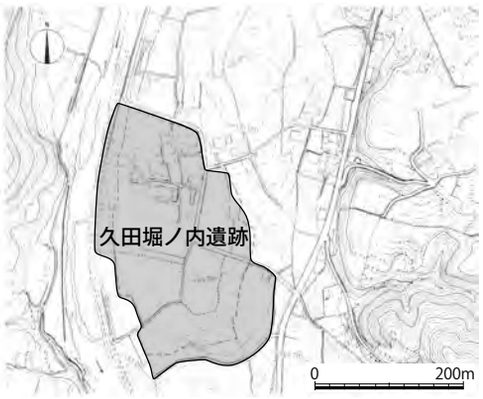
第 109 図　久田上原城跡縄張り図（1/2,000）

写真 48　遠景（北東から）

写真 49　つぶて石出土状況（西から）

116　久田堀ノ内遺跡（くたほりのうち）　　苫田郡鏡野町久田下原　　地図 13 左

立地　吉井川が大きく蛇行した部分において、その左岸側に形成された平野に所在する遺跡である。この平野には、上流側から順に夏栗遺跡・久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡が所在し、縄文時代から一連の遺跡群を構成していたとみられている。久田堀ノ内遺跡は、北隣の久田原遺跡から続く微高地上に形成されているが、両遺跡の間には集落の境となる旧河道が存在していた。現在、遺跡は苫田ダムの底に水没している。



第 110 図　久田堀ノ内遺跡周辺地形図（1/10,000）文献 144 より引用・加筆

概要　遺跡の所在地には、ヤシキ・土居・馬場・堀といった小字名が分布し、堀に囲まれた平地居館の存在が想定されていたが、苫田ダム建設に伴って平成 11・12 年度に発掘調査が実施され、その全容が明らかになった。岡山県内において、全域が調査された中世居館は本遺跡が唯一で、その構造や変遷に関する貴重な知見が得られた。調査の結果、「コ」の字形を呈する３条の堀（堀１～３）と、その内外から掘立柱建物・竪穴遺構・土坑墓・土坑・溝など多数の遺構を検出した。出土遺物は、土師器・須恵器・備前焼・勝間田焼・亀山焼・瀬戸美濃焼・常滑焼・瓦質土器・貿易陶磁器・和鏡など、他地域産のものも含め多種多量であり、中世における本遺跡の発展ぶりを物語っている。堀は、居館部分の北・東・南側を囲み、西側は吉井川が防御機能を果たしたと想定できるが、堀とは接続していない。囲まれた区画はいびつな方形ないし長方形をなす。３条の堀は内側から外側へ順次拡張されたことが判明しており、それに囲繞される居館も第１～３段階に区分される。堀に伴う土塁は確認できなかった。居館第１段階は 14 世紀中頃の鎌倉時代末～南北朝時代にあたり、南北 75 m、東西 72 m、面積 5,453㎡である。第２段階は 14 世紀末から 15 世紀前半にあたり、南北 95 m、東西 80 m、面積 8,294㎡である。第３段階は 15 世紀後半から江戸時代初頭までにあたり、南北 182 m、東西 100 m、面積 12,076㎡と最大規模で、有力国人層の居館と想定される。第３段階に伴う堀３は、南東隅が途切れており出入り口の可能性があり、北東隅付近から東側へ直線状の堀４が延びることから、複式の曲輪をもつ、本格的な城館への発達が推測される。居館内（堀３より内側）で検出された掘立柱建物群は、棟方向からａ・ｂの２群に区分され、ａ群が居館第１・２段階、ｂ群が居館第３段階に対応する。一方、居館外にあたる堀３の東側から南側にかけても屋敷地が広がり、建物や溝の分布状況から 10 に区分され、14 世紀から 17 世紀初頭まで存続した。

写真 50　堀３南辺完掘状況（東から）

久田原遺跡・夏栗遺跡も含め、中世におけ

る当地の発展には、陰陽交通の要衝である点に加え、鉄生産も経済基盤として挙げられ、久田堀ノ内遺跡の居館はその到達点の象徴といえよう。

文献・伝承　「山名政之注進状」によれば、文明 13 年（1481）に山名氏の内紛によって伯耆国から追われた山名元之を、播磨守護赤松氏の家臣、大河原氏が引き取り、作州久田庄に匿ったとある。本遺跡は、この久田庄の中心部分に相当する居館跡と考えられる。　（岡本）

第 111 図　久田堀ノ内遺跡　堀と建物の配置（1/2,000）文献 144 より引用

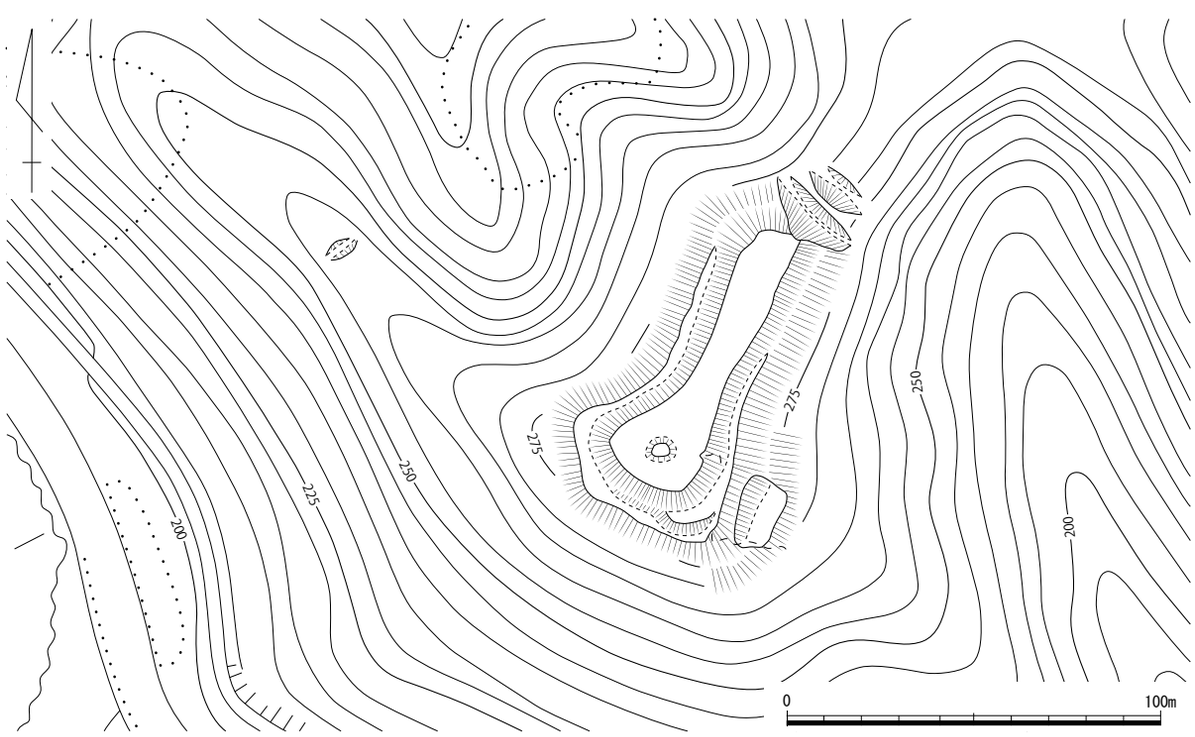
117　比丘尼（びくに）ヶ城跡　　苫田郡鏡野町久田下原　　地図 13 左

立地　吉井川左岸の平野部を見下ろす丘陵上に立地し、南側の城峪城と対峙する位置にある。

概要　南に延びる尾根筋上の平坦面に主郭を置き、そこから北西へ派生する尾根上までを城域とするが、ほとんどの遺構は主郭周辺に集中する。主郭は南北長約 76 m、東西の最大幅約 24 mで、北側の尾根筋を２条の堀切で遮断し、東・南・西では約４～５m下方を「コ」の字状の帯曲輪が巡る。主郭内部はほぼ平坦で、南端付近に１基の土壇状遺構が築かれている。この土壇状遺構は、不整楕円形を呈し、主郭の造成の際に地山を削り残すことで構築されている。この種の遺構は、久田上原城跡や余瀬ヶ城跡でも確認されている。主郭の南東側にも、小規模な曲輪が築かれている。平成９・10 年度に、主郭南端部から北西へ延びる尾根が発掘調査の対象となり、小規模な堀切が１条検出された。城に伴う出土遺物は皆無であるが、近接する河内城跡・久田上原城跡・城峪城跡の縄張りと共通性がみられることから、それらの城と並行する、おおむね 14 世紀後半～ 15 世紀前半に機能した城と考えられる。

写真 51　遠景（北西から、奥は城峪城跡）

文献・伝承　『作陽誌』には、「下原堡」として、南二丁余にある「故塁」（城峪城跡）とともに、居城者は不明と記す。（文献 133）　（岡本）

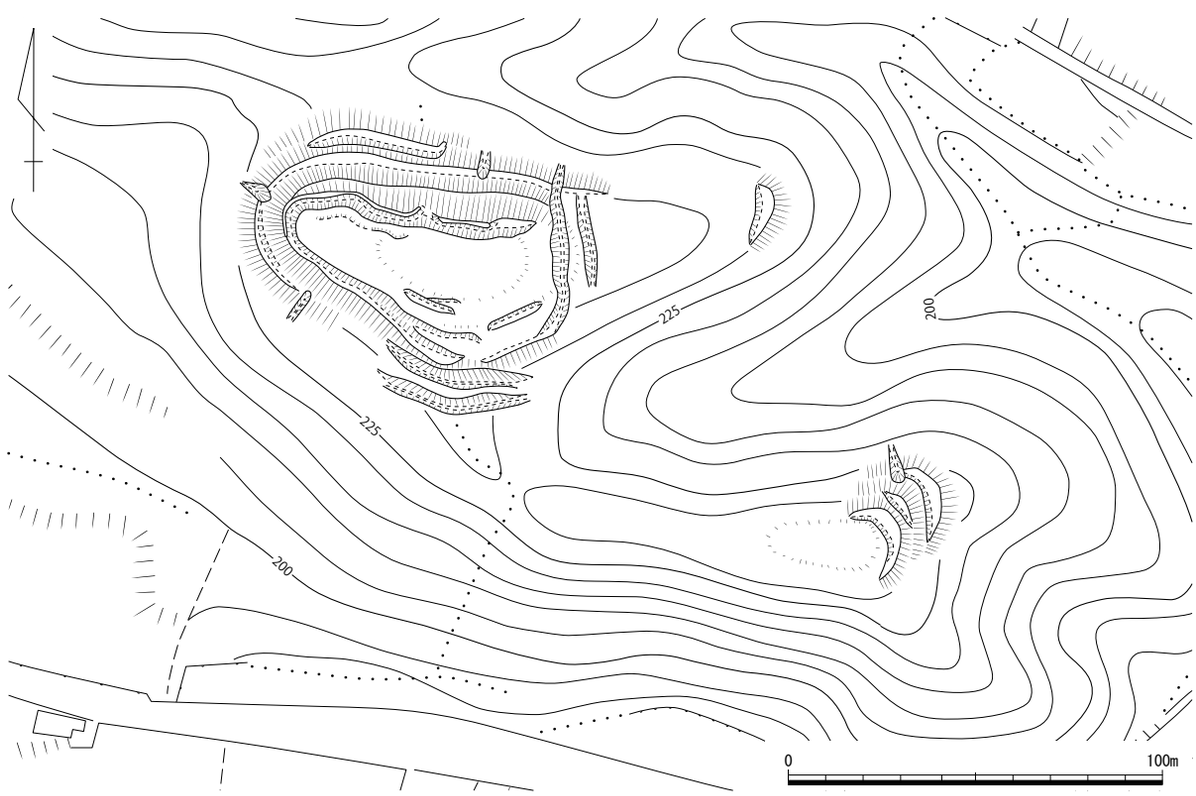


第 112 図　比丘尼ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

118　城峪（しろざこ）城跡　　苫田郡鏡野町久田下原　　地図 13 左

立地　吉井川が「く」の字状に蛇行する部分の左岸にあり、北側の山塊と谷筋で分断された独立丘陵上に立地する。標高 242 mの頂部周辺と、そこから南東に派生する尾根筋上を城域とする。城域は現在、苫田ダムの完成に伴って奥津湖（ダム湖）の島となっている。

概要　苫田ダム建設に伴い、平成８・９年度に発掘調査が実施され、城の全容が明らかとなった。丘陵頂部に置かれた主郭（曲輪１）は、不整な楕円形を呈し、東側と南側の尾根筋はいずれも２条の堀切で遮断される。頂部は平坦に成形されているが､南側の堀切までの間は自然地形を残しているなど、造成の規模は比較的小さいと考えられる。主郭の北側と西側斜面には、切岸と土塁からなる防御線を３段にわたって巡らしている。切岸と土塁の間は溝状をなし、数か所に「つぶて石」と思われる河原石の集積が認められ、その総重量は 2,150kgに及んだ。また北・西・南西斜面には、中段の切岸・土塁に伴う竪堀が１本ずつ掘削され、防御力を高めている。主郭の東側尾根筋は、自然地形をそのまま利用した曲輪２となり、その先に小規模な平坦面を造成した曲輪３が所在する。さらに、南東に延びる尾根筋の頂部も曲輪として利用し（曲輪８）、その東側には、切岸際に溝を伴う弧状の曲輪群（曲輪９～ 11）が連なっている。主郭の南側では、長さ 15 mほどで等高線にほぼ平行する段状遺構が２基検出された（曲輪４・５）。遺構内からは多数の柱穴が密集して検出され、規模や棟数などは明らかではないが、建物の存在が示唆される。一方、主郭内の平坦面からはわずかな柱穴の検出をみたのみで、建物の存在は考えがたいという状況であった。主郭内の他の遺構としては土坑５基がある。出土遺物には、生活用具として備前焼・勝間田焼甕・白磁・土師器など、武器としては鉄鏃・槍の石

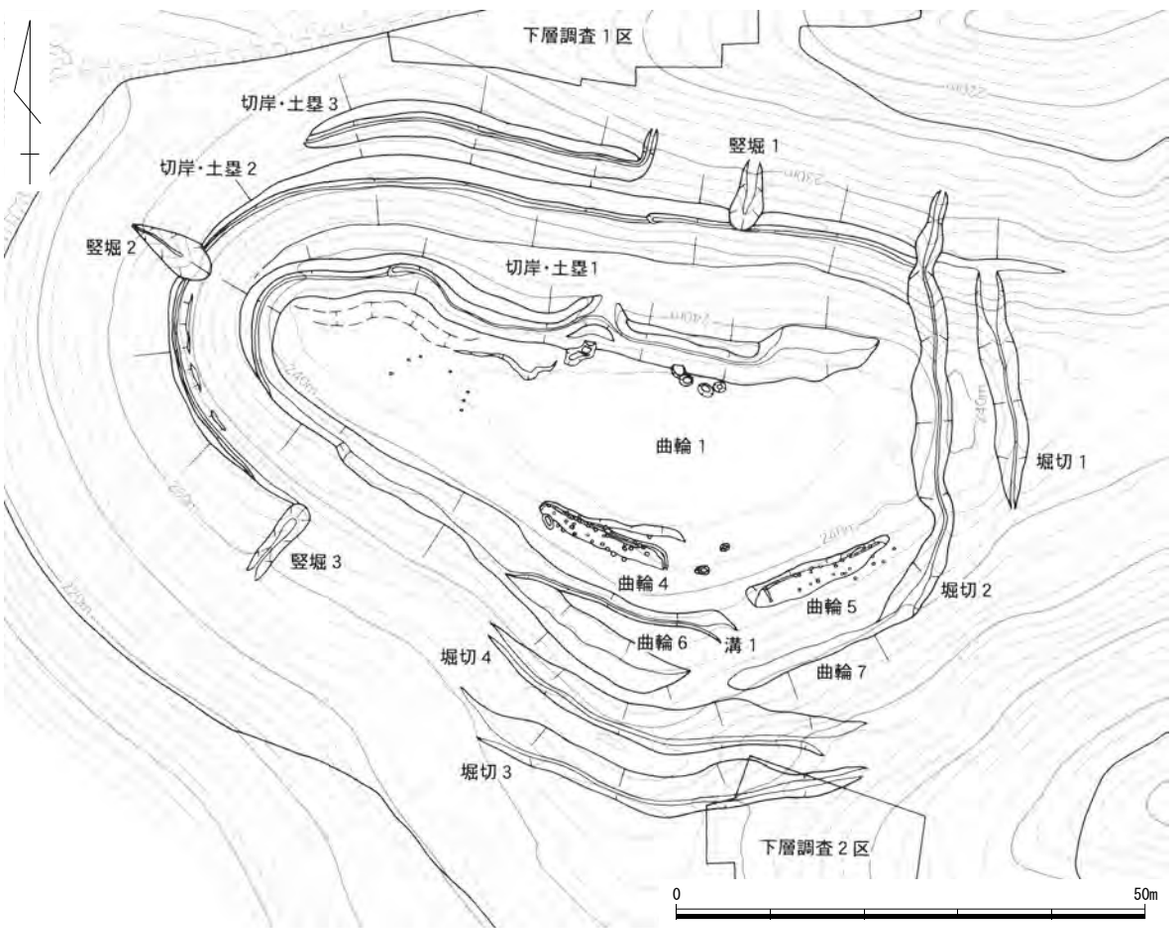


第 113 図　城峪城跡縄張り図（1/2,000）

突などがある。これらの遺物からみて、城の時期は南北朝時代の 14 世紀後半に位置づけられる。

城峪城は、曲輪が小規模で主郭も不明瞭な河内城と比較すると、堀切によって主郭の独立性が高められた様子が見受けられる。一方、曲輪の平坦化がより進行した久田上原城や比丘尼ヶ城に比べると、主郭内に自然面を残すなど造成の範囲が限定されることから、城峪城の築城時期は両者の間に位置づけられよう。

文献・伝承　『作陽誌』には、「下原堡」（比丘尼ヶ城）の南二丁余に「故塁」があり、居城者は不明と記す。位置関係からみて、この「故塁」が城峪城跡に相当すると思われる。（文献 133）　（岡本）



第 114 図　城峪城跡主郭周辺実測図（1/800）文献 144 より引用

写真 52　曲輪 4（北西から）

写真 53　土塁 1・つぶて石出土状況（西から）

119　小田草（おだくさ）城跡　　苫田郡鏡野町馬場　　＜町指定史跡＞　地図 13 左

立地　吉井川の東側にある、標高 670 m級の山塊から南方向に派生した尾根先端頂部が該当する。苫田ダムの南東側に位置し、南側の眺望が開けており、頂部からは鏡野町の平地部分の大半が見渡せる。奥津温泉方向から山塊部を流れてきた吉井川が、平地部分に注ぐ出口部分に当たり、交通の要衝に築城されている。

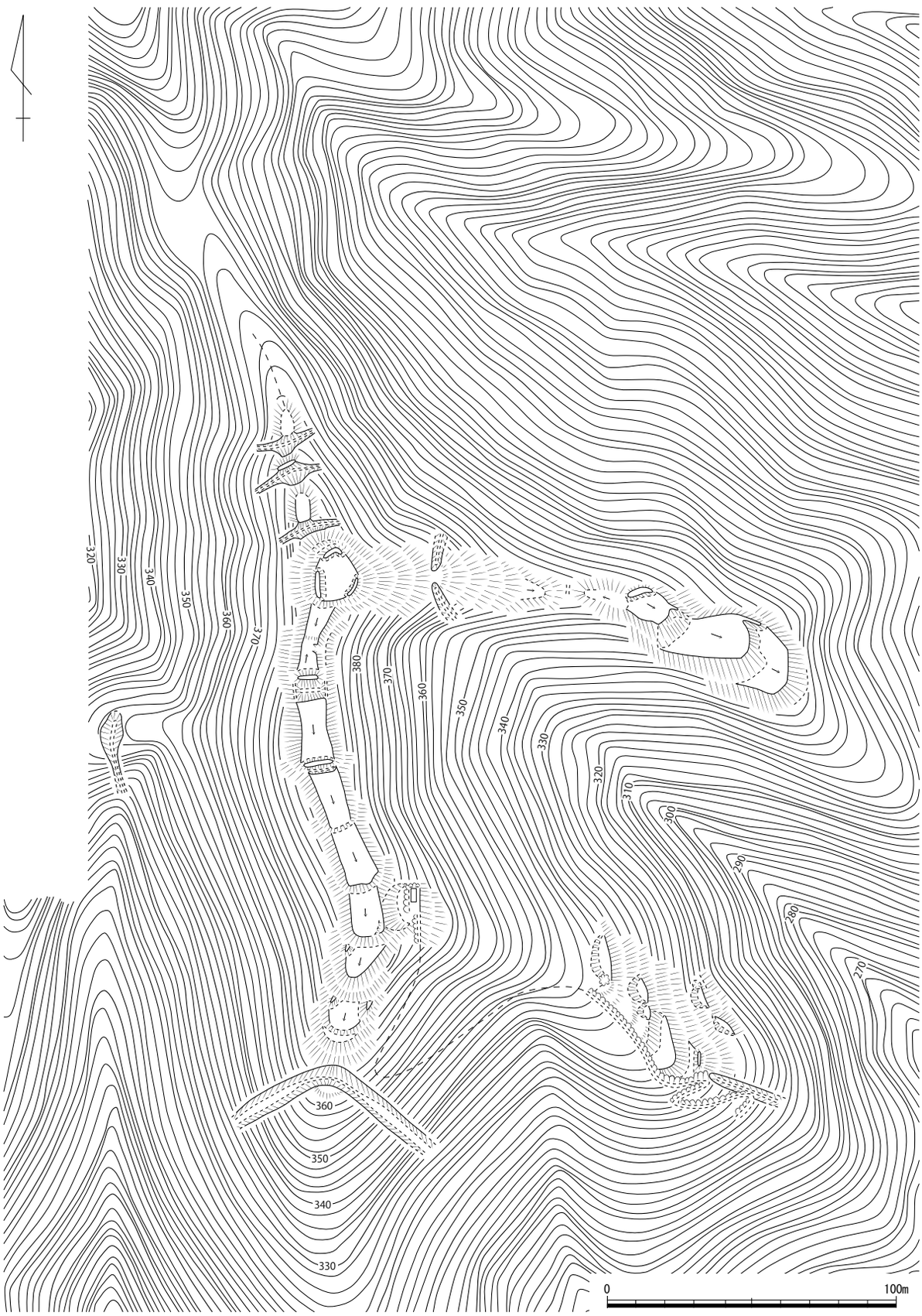
概要　南北方向へ細長い尾根筋に、曲輪を８面連ねた山城である。この部分の全長は約 250 mである。主郭は約 10 mで小規模であるが、周囲３方向を高さ約１mの土塁で囲んでいる。主郭から約 30 m離れた南側にもう１箇所高所があり、長さ約 20 m、幅約 10 mの曲輪である。この曲輪と主郭の間には、四方を土塁で囲んだ施設がある。さらにこの曲輪から南側に向けて同規模の曲輪が３面続き、斜面部にも曲輪が２面、その先端部を幅約 10 mと広いＶ字状の堀切を配している。主郭背後の尾根鞍部は、３条の堀切を斜面上に配し城域を画する。またこの尾根筋から西側へ派生した２つの尾根筋にも曲輪を連ねている。主郭東側の尾根筋には、長さ約 30 m、幅約 20 mと大きめを含む３面の曲輪が連なっている。曲輪背後を土塁で守り、切岸も高い。主郭のある尾根筋以外の箇所では、最も重厚に作られた箇所である。主郭の筋より先端方向にある尾根筋には、斜面を削り出して築かれた平坦面が続く。10 m未満のものが多いが、幅約 20 mある大きい曲輪も存在する。この筋の先端は、土塁と竪堀で守りを固めていた。西側に派生する尾根筋には曲輪は存在しないが、この筋を断ち切るように１条の堀切が配される。幅は 10 m弱で、深さは３mほどの規模である。

当城は山陰方面から続く中国山地の出口付近にある要の場所に立地している。規模の大きい曲輪が何面にも続いており、地域を代表する国人の本拠地にふさわしい陣容である。

文献・伝承　当城の麓の小田草神社にある梵鐘に、「小田草城主　斉藤二郎」と刻まれている。また『古城之覚』や『作陽誌』では城主を斉藤玄蕃としており、代々斉藤氏の居城であった。『萩藩閥閲録』では、医王山城から毛利方が退去後、福田氏・小川氏が当城に入ったとする。　（小林）

写真 54　遠景（南から）

写真 55　土塁（西から）



第 115 図　小田草城跡縄張り図（1/2,000）

120　城山（じょうやま）城跡　　苫田郡鏡野町馬場　　地図 13 左

立地　吉井川に注ぐ上森川西岸に広がる低丘陵の高所に立地する。小田草城跡の南南東約 700 mに位置する。

概要　頂部に造られた細長い主郭には、西端に削り残された小さな高まりが、東端にやや下がって方形の平坦地がある。主郭から１～２ｍ下がった北から西、南にかけて帯曲輪と、さらにその下約２～３ｍの斜面に犬走りを設けている。地形が張り出す西方には犬走りに土塁が認められる。東斜面には数面の小曲輪と数面の曲輪が見られる。これらの遺構のさらに約４～５ｍ下に犬走りを一周させ、地形が小さく張り出す西方・南方・東方の３か所には、犬走りの外縁に土塁を配している。

文献・伝承　『苫田郡鏡野町史』は『作陽誌』に記述されている小田草城の南東２町ばかりにある小堡に比定する。　（物部）

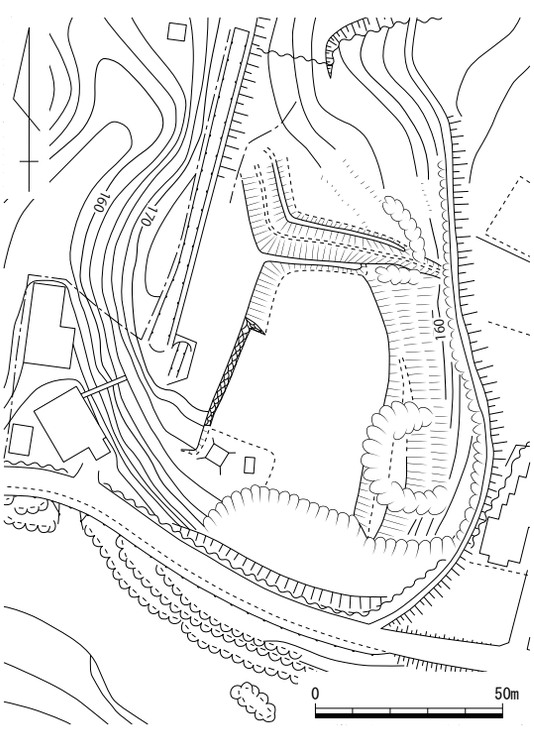
第 116 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

121　岩棚（いわだな）構跡　　苫田郡鏡野町入　　地図 13 左

立地　水力発電所のある谷筋の東に接し、吉井川左岸に向かって張り出した南向きの尾根に立地する。

概要　尾根先端付近の頂部一帯を城域としていたと考えられる。西側は発電所の水路、南側は県道法面によって地形が改変されている。尾根中央部に、現状では南北約 60 m、東西約 40 mのいびつな長方形を呈する曲輪が残存する。その北側には、Ｌ字状に屈曲し両側に土塁を伴う堀切が設けられ、深さは最大６mに達する。西側にも５mほど高い別の平坦面があり、地形改変のため断定はできないが、堀切の形状も考慮すると、この場所も曲輪であった可能性はある。城域の東辺にみられる湾曲した溝状の落ち込みについては、後世の攪乱と判断した。

文献･伝承　『作陽誌』には苫西郡の「岩棚構」として、入村にあり、斎藤玄蕃が屯営した場所で、現在は無量寺の僧が住む、と記す。（文献 133）　（岡本）



第 117 図　岩棚構跡縄張り図（1/2,000）

122　葛下（くずか）城跡　　苫田郡鏡野町山城・中谷　　＜町指定史跡＞　　地図 13 左

立地　吉井川と中谷川の合流点の南西にそびえる標高約 380 mの大松山山頂と、周囲に延びる尾根筋上に広く展開する山城である。津山と奥津方面を結ぶ吉井川沿いの交通路に面し、山頂からは東に鏡野町入・山城地区の平野が一望でき、北には中谷川に沿った真庭市余野地区への交通路も見下ろすことができる。周囲を川や谷筋に囲まれた急峻な地形は、まさに天然の要害といえる。

写真 56　遠景（東から）

概要　城域が東西約 870 m、南北約 550 mにも及ぶ大規模な城郭で、美作地域でも有数の規模である。L 字形に屈曲する主尾根の稜線上と、各方向へ派生する枝尾根や斜面に多数の曲輪が配置される。全体として土塁の使用は限定的で、竪堀の使用も一部にとどまる。城を取り巻く急斜面自体が強固な防御施設であったと考えられる。ここでは、諸施設の配置状況から、主尾根の稜線上にある 4 条の堀切を境界として、城域を東西に分けて説明する。東半部は、東西方向の主尾根をはじめ、南に延びる枝尾根や谷筋に多数の曲輪が密集し、西半部では南北方向の尾根上に曲輪が分布している。なお、『美作国の山城』などの書籍や現地の看板では主要な曲輪に名称が付されているが、当時の呼称や実際の機能に即したものかどうか不明である。本項でも、あくまで説明上の便宜としてこれらの名称を使用する。

東半部は、主郭ほか主要な曲輪を含み城の中枢部と考えられる。主尾根上に置かれた主郭（「本丸」）は東西約 50 m、南北約 30 mの不整な台形状を呈し、現状では土塁などの構造物はみられない。東には高さ約 6 mの切岸の下に三日月形の帯曲輪（「二の丸」）が隣接する。さらに幅約 20 m、深さ最大で 10 m近い大規模な箱堀状の堀切を過ぎると、「桜井丸」と呼ばれる、不整な長方形を呈し東西両端に土塁を伴う曲輪がある。北辺の一部が内側に屈曲しているが、虎口かどうかは不明である。「桜井丸」の東側には深さ約 3 mの堀切が掘削され、隣接して長方形の曲輪が設置される。この曲輪は周囲に土塁を伴い、東半部では内側に深さ 70㎝ほどの溝が巡るという特徴がある。

ここから東側は尾根が二つに分岐し、それぞれに曲輪が連なり先端は堀切で遮断される。うち南側の尾根筋をさらに下ると、吉井川に面した標高約 240 mの平坦面に至る。現在は給水タンクが建つが、立地からみて出丸などが置かれた可能性があり、ここを城域の東端と考える。主郭の西側には、なだらかな尾根筋を利用して「城主の館」と呼ばれる東西に細長い曲輪が置かれる。「城主の館」は不整な長方形を呈し、郭面は比高 1 m程度の段差を作り出すことで階段状を呈している。その西端から 10 mほど登った位置にある痩せ尾根が大松山の山頂にあたり、「見張り台」と呼ばれる狭長な曲輪が置かれる。内部はあまり平坦化されず、北側から西端にかけては高さ 0.5 ～ 1.5 mの土塁が巡っている。この土塁の状況は、「桜井丸」の東隣の曲輪とやや類似している。主郭の南東側からは舌状に延びる曲輪があり、「官兵衛丸」と呼ばれている。その東側下方の尾根にも小規模な曲輪が近接して設けられている。ここから南東側の斜面下方にかけては、近世以降の炭窯と思われる遺構が点在するが、曲

輪を再利用したものが含まれる可能性もある。さらに南東には、尾根筋の突出した部分に単独の曲輪が確認できる。また､｢官兵衛丸｣の延長線上には畝状竪堀の可能性のある遺構が４本確認できる。｢見張り台｣の東端付近から南東に派生する尾根筋には、高さ約３～８ｍの切岸を有する多数の曲輪が連なり、先端の３、４面は「加藤丸」と呼ばれている。

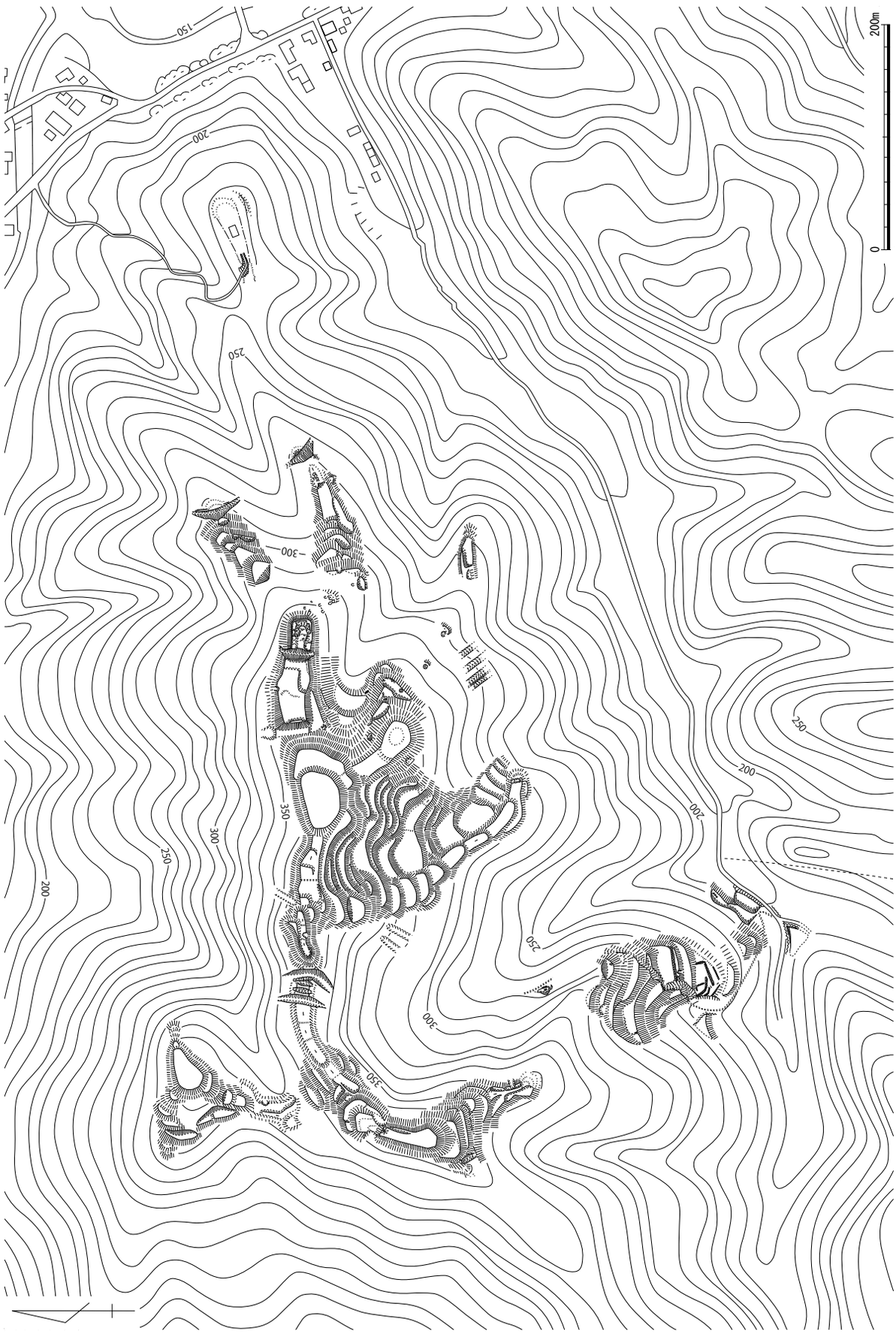
主郭と「見張り台」から派生する２本の尾根筋の間は、南向きの幅広い谷筋となり、多数の犬走りないし帯曲輪が段々畑状に設けられている。地形が急峻なため細長いものが多く、一部では幅１ｍ程度に狭まる箇所もあり、一方で切岸の高さは最大で７～８ｍに達する。下方に至ると傾斜が緩くなるとともに個々の面積も広がり、うち最大のものは東西約 70 ｍで「家臣屋敷」と呼ばれている。最下端近くの曲輪には井戸跡が残るとされるが確認できなかった。これら東半の曲輪群の西端を画すのが、尾根筋を遮断する４条の堀切群である。両端の２条が大規模で、深さはそれぞれ 2.5 ～３ｍを測る。一方、間の２条は深さ１ｍ程度と小規模である。東端の堀切は、底面から東側の郭面との比高は約 10 ｍに及ぶ。

城の西半部は、４条の堀切から続く尾根筋に「鉄砲丸」と呼ばれる輪郭の不明瞭な曲輪があり、さらに南西側には「朝山壇」と呼ばれる曲輪がある。｢朝山壇｣は不整な長方形を呈する、南北約 50 ｍの細長い曲輪である。南北の尾根筋上には多数の小規模な曲輪や犬走りが設けられている。なお｢朝山壇｣の位置は文献によって異なるが、ここでは『美作国の山城』の掲載図に従う。

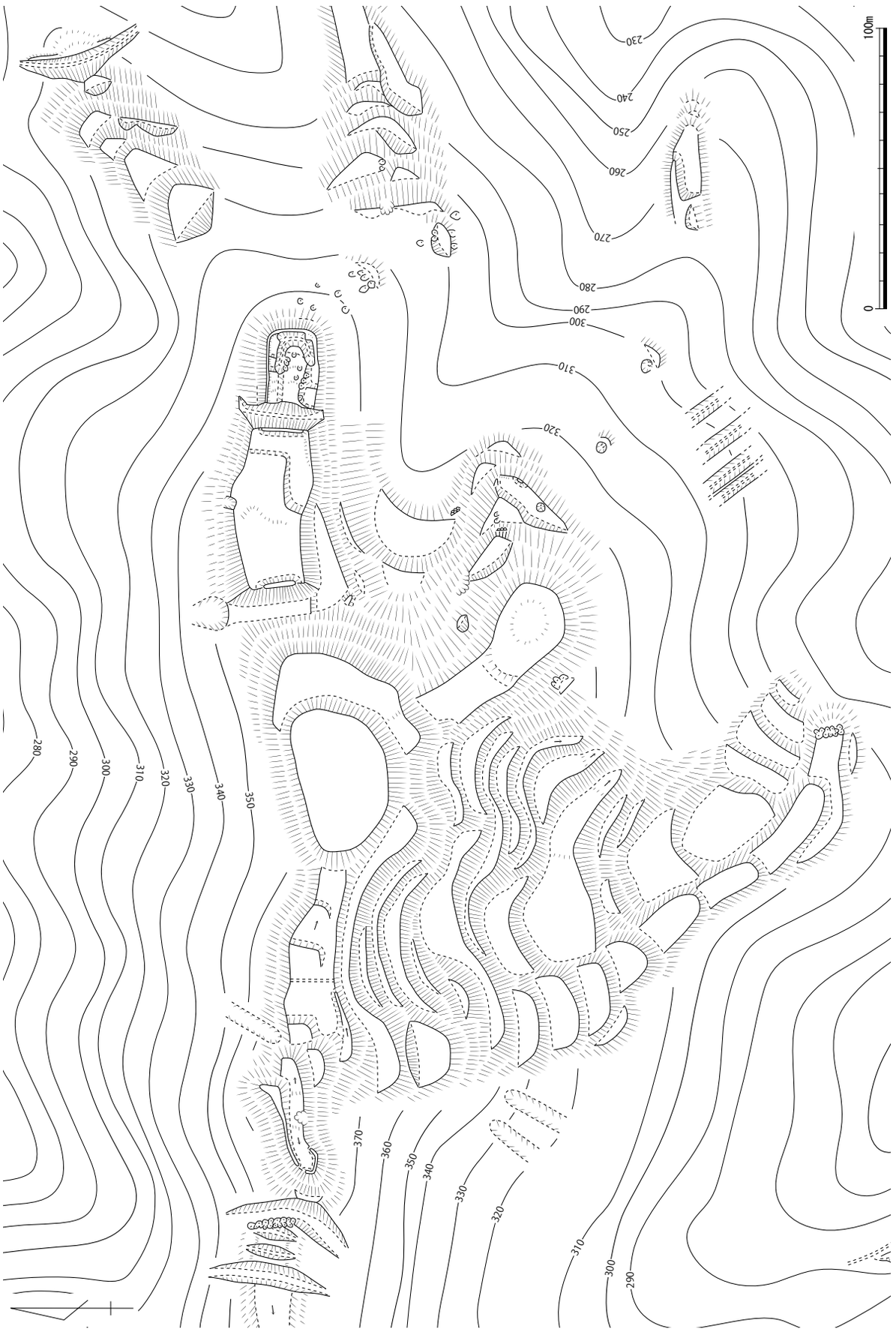
「朝山壇」と「鉄砲丸」の中間あたりから北へ派生する尾根をたどると、｢石見丸｣と呼ばれる東西約 40 ｍの曲輪が置かれた頂部に至る。｢石見丸｣も、南側及び西側の尾根筋に多数の小規模な曲輪を配置している。｢朝山壇｣南東の斜面下方、つまり城域の南端部にも多数の平坦面が段状に造成されており、｢真鍋屋敷｣ないし「家臣屋敷」と呼ばれているようである。これらの平坦面では、随所に石垣が残り、近現代の陶磁器が散布する箇所や、近世後半から近現代の墓地などがあることから、近世後半以降に居住地や墓地として利用されたことが明白である。昭和 50 年代の現地調査でも、この一帯を「旧民家」としており、地形改変を受けた可能性が高い。とはいえ、『作陽誌』の記述などから元々はこの地点に曲輪の存在したことは十分考えられるため、城域に含めることとした。

葛下城は、その規模に加えて、堅固な造りや交通の要衝を押さえる立地条件などから、永禄～天正年間の当地域において毛利方の重要拠点のひとつであったと考えられる。

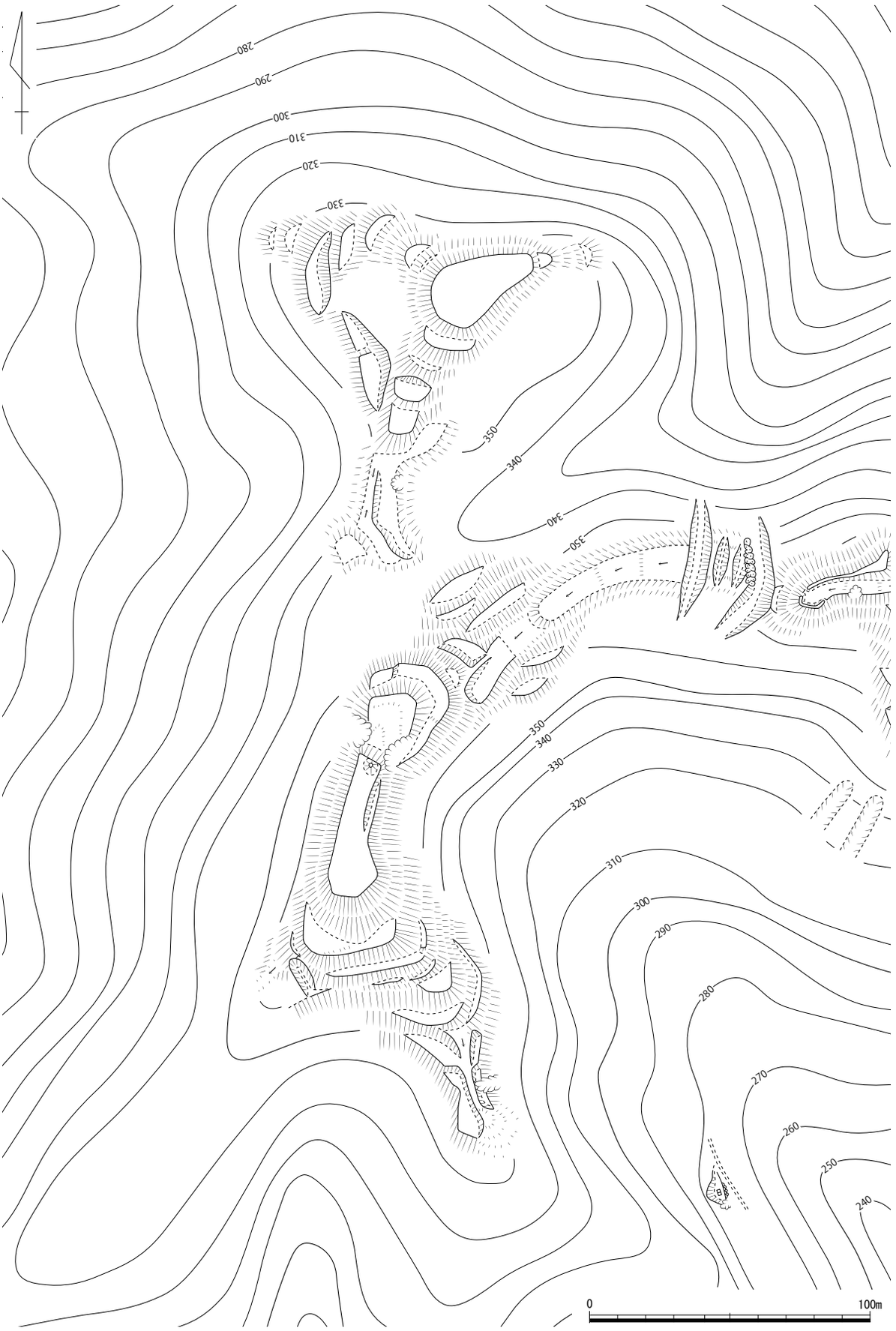
文献・伝承　築城年代は不明である。『作陽誌』には山麓から山上まで五町半、初代城主は大河原大膳太夫、後に中村大炊介頼宗、落城の際に頼宗の従者浅山図書は城を焼き死んだとする。山中からは焼米が出土し、城の南西と東には桜井越中・加藤豊後・木村菅兵衛らの居宅跡があると記す。現在、主要な曲輪はこれらの人物にちなむ名称で呼ばれるが、史実を反映したものかは不明である。『美作国の山城』には、諸史料を引用し以下のように記す。永禄 12（1569）年２月、閏５月に毛利元就は備中の侍、原太郎左右衛門尉に重ねて「蔦下里」「蔦下」での在番を慰労している。７月には浦上宗景の反攻にも「蔦外里」を守っていることを称されているが、８月になると高田在番に移っている。天正７（1579）年 11 月、吉川元春は「作州葛下の城」が毛利方の城となればとして、医王山城救援に向けた戦略を報じている。その後まもなくして葛下城を拠点とした中村頼宗の活動が確認されるようになり、同８年９月には桜井越中守を使者に兵粮と玉薬の補給を毛利氏に要請している。同９年６月の岩屋城の落城を受けて、毛利輝元は頼宗に岩屋城への引き移りを命じ、その後城が落去するに至って、頼宗の家臣浅山図書は城に火をかけ自らも死を選んだという。（文献 133）　（岡本）



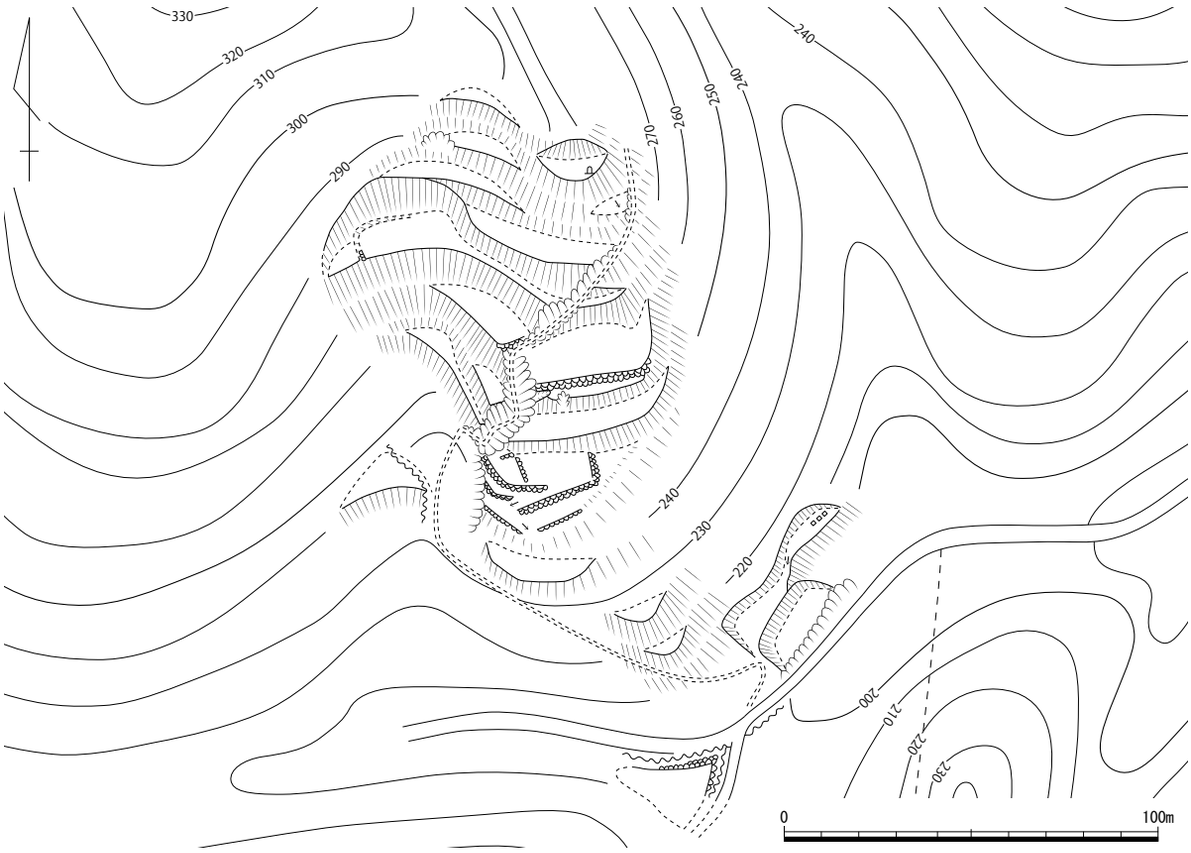
第 118 図　葛下城跡縄張り図（1/5,000）



第 119 図　葛下城跡東半部縄張り図（1/2,000）



第 120 図　葛下城跡西半部縄張り図（1/2,000）



第 121 図　葛下城跡南端部縄張り図（1/2,000）

写真 57　主郭周辺（西から）

写真 58　谷部の曲輪群（北から）

写真 59　土塁（北から）

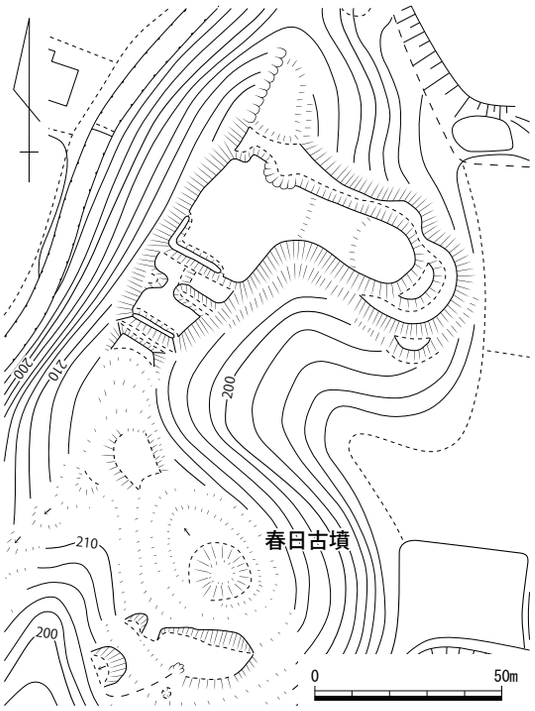
写真 60　堀切（北から）

123　春日（かすが）城跡　　苫田郡鏡野町貞永寺　　地図 13 左

立地　貞永寺地区の平野に接する小丘陵上に立地する。丘陵の西麓から南麓を山入川が蛇行して流れる。

概要　主郭はＬ字状を呈し、南西隅のみ低い土塁が残る。周囲の斜面は急峻で、地形自体が堅固な守りとなっている。南西側には２条の堀切があり、北側のものは曲輪を両側から切り込むような形状で、中央を土橋とする。南側のものは城内側に高さ約 1.5 mの土塁を伴う。主郭の東端から北側にかけては、1.5 ～３m下方に細長い帯曲輪が巡り、背後の鞍部まで続いて弱い堀切状を呈する。南側の頂部には春日古墳という円墳が所在し、周囲に人為的な削平面が散在するが、城の遺構とは積極的に評価できない。

文献・伝承　『作陽誌』には「中屋山」として、中屋平三兵衛がこの地を領し、麓に中屋墓があることにちなむ山名とする。『美作鏡』は「城山」として、城主を中屋与三兵衛とする。（文献 133）　（岡本）



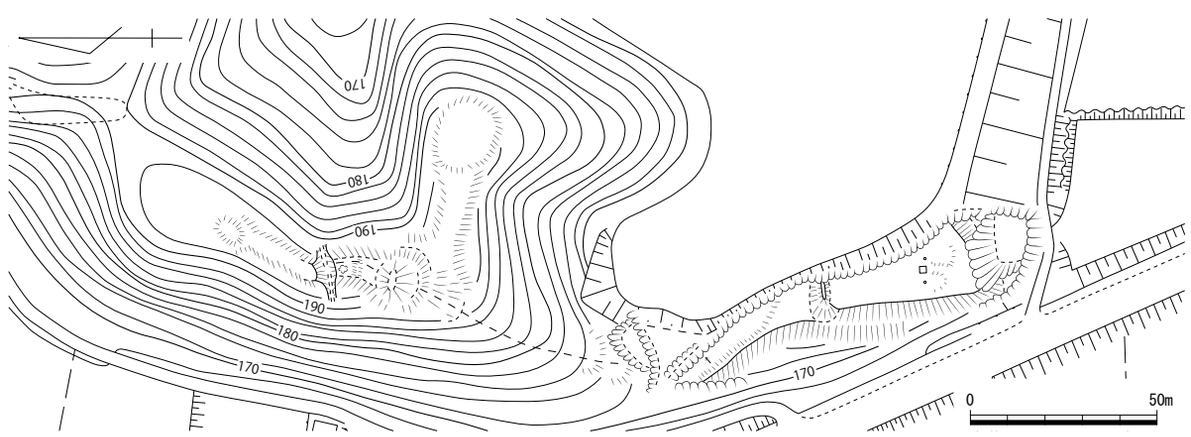
第 122 図　春日城跡縄張り図（1/2,000）

124　犬（いぬん）城跡　　苫田郡鏡野町土居　　地図 13 左

立地　香ヶ美川と吉井川の間にある標高 320 m級の山塊から南西方向へ派生した丘陵上に位置する。

概要　独立丘陵上に数箇所の高所がある。幅３～４mほどの堀切によって画された高所は数mの平坦地しかなく、切岸の造作も曖昧である。ここから南に下った張方池の麓に細尾根が残り、長さ約 30 m、幅約 10 mの平坦地が南北に２箇所続く。南側の平坦地には祠がある。

文献・伝承　城主等は不明である。　（小林）



第 123 図　犬城跡縄張り図（1/2,000）

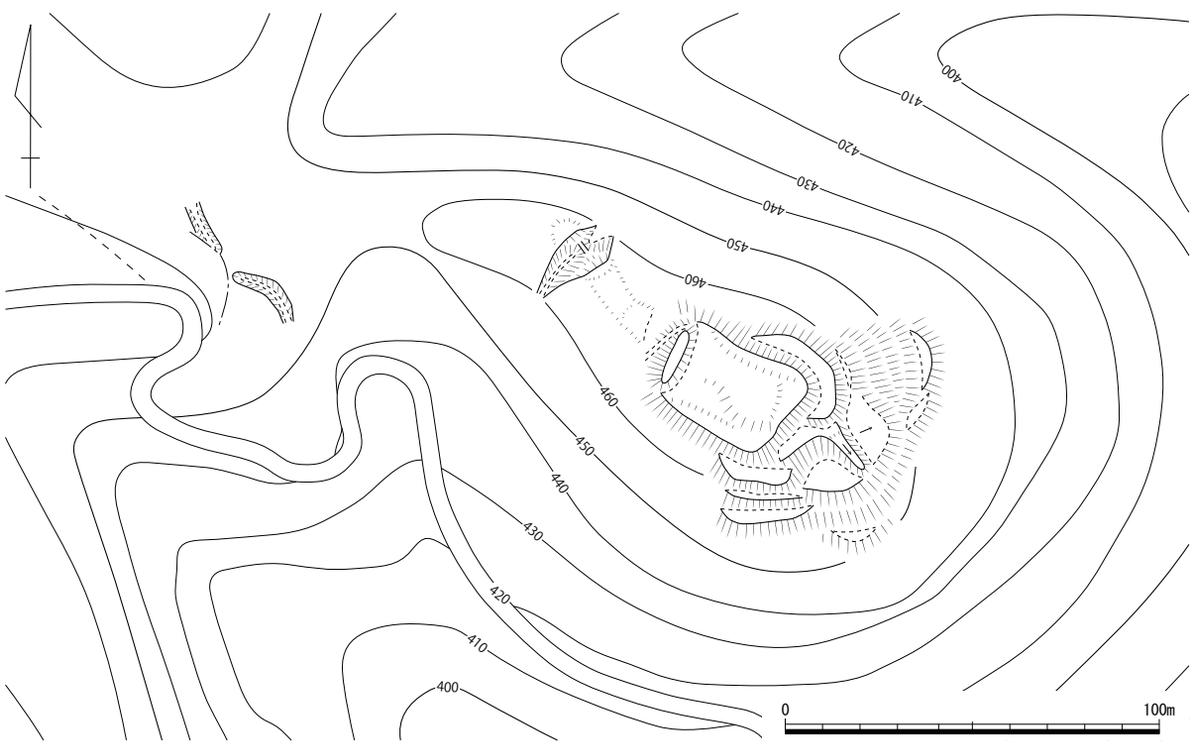
125　小田（こだ）城跡　　苫田郡鏡野町高山　　地図 13 左

立地　津山市との境界付近に位置する妙見山の山頂（標高 613 m）から南東へ約 800 mの地点に所在する。東麓の平野からはかなり谷筋をさかのぼった場所に立地し、交通路には直接面していない。

概要　基本的に単郭の構造で、南東に張り出す尾根頂部の平坦面を城域とする。主郭は東西約 35 m、南北約 25 mの不整な長方形を呈し、西端にのみ幅約 4 m、高さ約 1.2 mの土塁を伴う。郭面は造成が不十分で自然地形がかなり残っており、高低差 1 m以上に達する起伏がある。主郭東側の斜面上には曲輪が放射状に設置されるが、形状の不明瞭なものも含まれている。主郭西端から約 30 m西の尾根筋に、深さ約 1.5 mで土橋を伴う堀切があり、ここが城域の西端と考えられる。さらに西側にも、尾根筋に直交する堀切状の溝がみられるが、山道と判断し城域には含めていない。なお、本城の西に位置する桧ヶ山の頂部や、妙見山の参道沿いにも複数の平坦面を確認したが、これらは城とは無関係の遺構と考えられる。

写真 61　主郭西端の土塁（東から）

文献・伝承　『作陽誌』には、築城者は不明であり、頂上からは播磨・伯耆・因幡・備前が皆指呼の間に見渡せると記す。『美作古城史』には、桧ヶ山の支峰に小田城の阯があり俗にコダガセンと呼ばれる、とある。（文献 133）　（岡本）



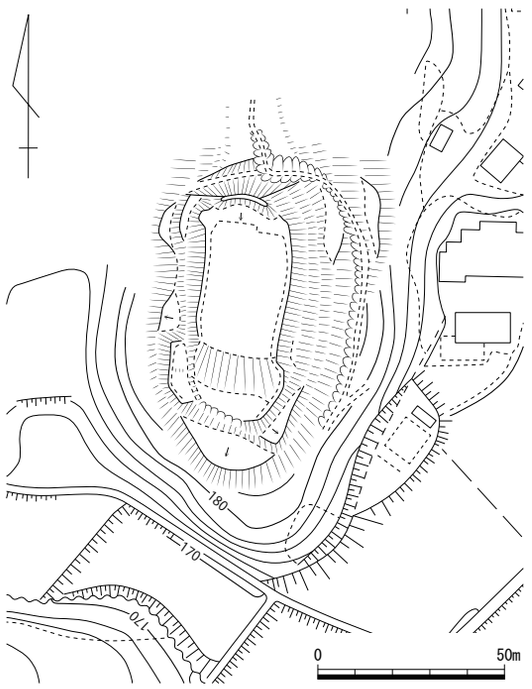
第 124 図　小田城跡縄張り図（1/2,000）

126　キリゴ谷城山城跡　　苫田郡鏡野町高山　　地図 13 左

立地　郷川上流部、郷川沿いの小平野を北から見下ろす丘陵尾根突端に立地する。

概要　北の尾根に深さ約 1.5 ～ 3.5 mの堀切を設け、そこから南側に曲輪群を築く。高所にある約 40 × 20 mを測る長方形の主郭には、北端部に高さ約 1 mの土塁や、北西角に小さな突出部が見られる。主郭の南端の切岸は明瞭ではなく、２m程緩やかに下がって曲輪があるが、この曲輪の西側続きには、西に突出する曲輪を配している。その南、約２mの切岸の下に、やや傾斜する曲輪がある。東西斜面にも小さな平坦地が認められる。曲輪面は近年まで畑地として利用されており、周縁に溝と土手が設けられている。

文献・伝承　『作陽誌』は「後谷」として、苫西郡高山村にあり、谷の上に屯営の跡があり、尼子勝久の兵が拠るとも言うと記す。（文献 133）　（物部）



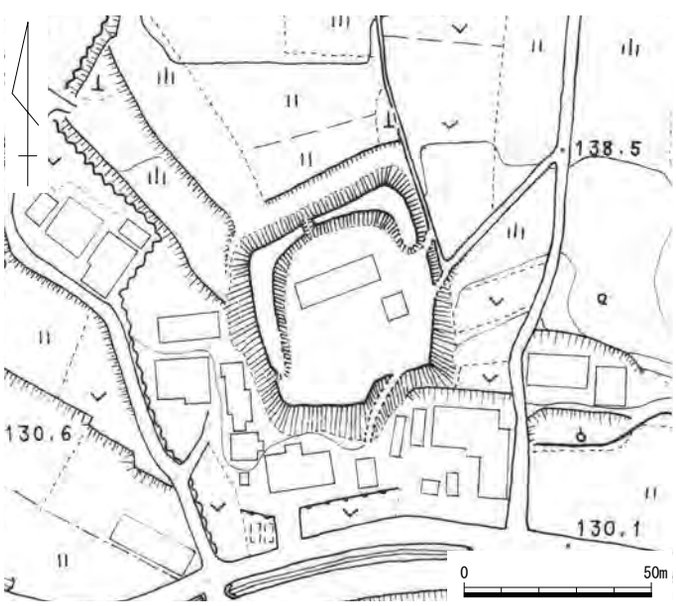
第 125 図　キリゴ谷城山城跡縄張り図（1/2,000）

127　鴫津（しぎつ）の構跡（かまえ）　　苫田郡鏡野町真加部　　地図 13 左

立地　吉井川左岸の河岸段丘上にあり、南向きの緩斜面上に築かれている。

概要　鏡野町内においては円宗寺地区の沖構跡とともに、城館の形状を明瞭に留めた遺跡である。単郭の城館で、主郭は約 40 m四方のややいびつな方形を呈し、周辺の田畑よりも高い。背後にあたる北側には堀を有し、土塁が「コ」の字状に巡る。土塁の幅は最大で約５mを測り、曲輪面からの高さは最大で３m近くに達し重厚である。南辺の切岸は高さ約６mに達し急峻である。なお、畑和良氏による縄張り図の作成後に、開発行為によって西辺の土塁が損壊している。

文献・伝承　『作陽誌』には「石須構」として、真加部村にあり宅地跡は方二十間で四方に土塁、外に堀を伴うとある。（文献 133）　（岡本）



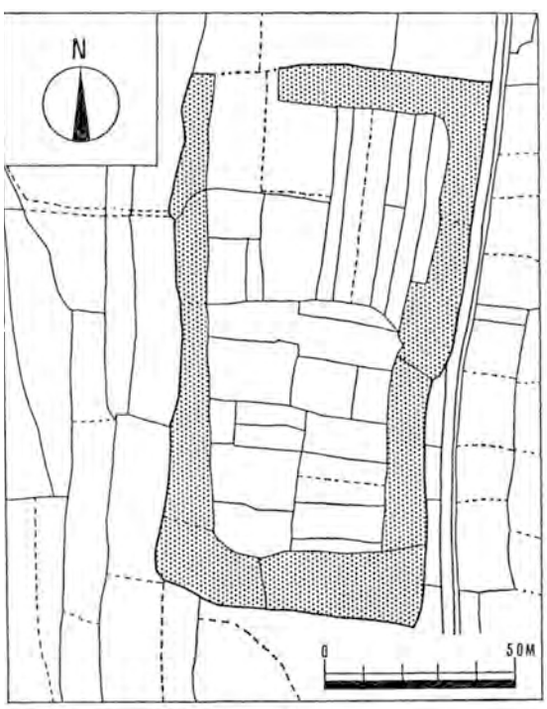
第 126 図　鴫津の構跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑和良

129　沖構跡（おきのかまえ）　　苫田郡鏡野町円宗寺　　地図 13 右

立地　香々美川の左岸に広がる平野のほぼ中央に位置する平地城館で、現在南側を広域農道が通る。西及び南西の丘陵上には、攻城時の付城と考えられる大田和城、茶臼山城がそれぞれ所在している。

概要　「構城」ともいう。城域は、南北に細長い長方形の敷地を堀が囲繞する構造である。明治時代の地籍図（第 127 図）によれば、構の敷地は堀に囲まれた南北約 120 m、東西最大約 60 mの範囲と想定される。堀を含めた全体の規模は南北約 150 m、東西約 80 mとなろう。現在、堀部分は水田、構の敷地はそれより 50㎝ほど高く畑として利用されている。周辺では圃場整備が進行し、本城館でも西辺の堀跡が消失しているが、北辺及び東辺では現在でも堀の形状をとどめている。また、城域の南端は石材店の敷地となって破壊されている。一方、内部は現在でも旧区画がよく残っている。現状では土塁などの施設は確認できない。

本城館は、一部が損壊しているとはいえ、その形状を地表面で明瞭に確認できる平地城館の事例として貴重である。



第 127 図　沖構跡平面図（1/2,000）
文献 117 より引用

文献・伝承　『作陽誌』は、芦田右馬允の旧跡で地元では「沖構」といい、東西二十三間、南北五十六間、四方に水沢があり深さ四、五尺で人馬は渡ることができないと記す。『美作鏡』は「構ノ城」として城主は芦高右馬之丞とする。同書によれば、永禄年中に芦田右馬允の在城する沖構に対し、毛利氏は大田和城と茶臼山に陣を構えて攻撃を加え、芦田右馬允は堅く城を守ったが、毛利方は大田和城の近くにある「築山」という丘に櫓を築いて大砲で砲撃を加え、落城させたという。右馬允はのちに出家して宗源と称し、西田辺村（津山市西田辺）に住んだという。

『美作国の山城』は、諸史料に基づき次のように記す。天正 11（1583）年 6 月、毛利氏配下の国人・土豪らが籠城する沖構に対し、宇喜多勢が付城を構えて攻撃した。この戦闘で、沖構に籠城した武本源兵衛は、鉄砲で敵数人を討ち取り、葛下城主の中村頼宗から感状を与えられた。また籠城勢が花房職之の拠る付城に夜討ちした際、職之の家臣難波又市郎が先駆けの興津市郎を討ち取り敵を撤退させたことから、宇喜多秀家から感状を与えられたという。その後、宇喜多勢の攻勢により、沖構は落城した。

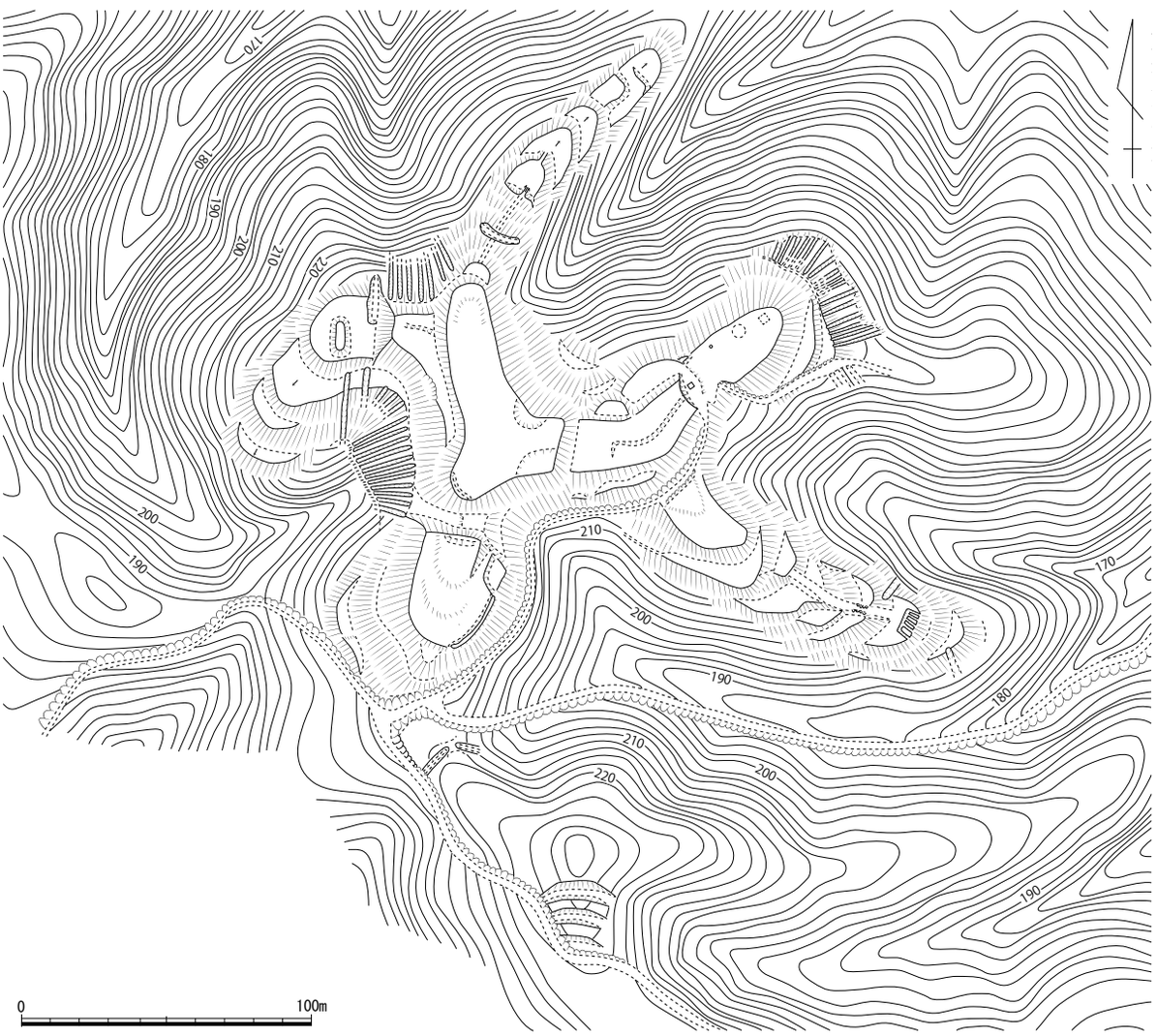
（岡本）

写真 62　近景（南東から）

130　目崎（めさき）城跡　　苫田郡鏡野町下原・津山市中北下・領家　　地図 20 左

立地　鏡野町下原と津山市久米地区との境界をなす、北西から南東に延伸する丘陵上に立地する。本城は、丘陵頂部とその周辺の尾根を利用して築かれ、北側に広がる吉井川右岸の平野を見下ろせる立地条件にある。東麓には「城下」の小字名が残り、また下原構という城館跡がある。

概要　主郭は標高約 230 mの頂部にあり、南北約 75 m、東西約 35 mの不整なＹ字形を呈し、内部はほぼ平坦で、土塁や虎口の存在は不明瞭である。主郭から 5 方向に延びる尾根上には、曲輪が連続的に設置される。主郭南側には幅 10 mほどの大規模な横堀を隔てて、東側肩口に土塁を伴う曲輪を配し、その先の尾根筋を 1 条の堀切、さらに南の尾根上を 3 条の堀切で遮断している。この 3 条堀切では、平成 29 年度に鏡野町教育委員会によって西半分の発掘調査が実施され、青磁片が出土している。主郭東側には、２m弱の段差を置いて「く」の字状に屈曲した曲輪があり、そこから北東及び南東方向にのびる尾根上に曲輪群が続く。北東尾根には帯曲輪から連続するような形状の平坦面が広がるが、現在は公園として整備されており地形改変の可能性もある。南東尾根には、最上段に比較的



第 128 図　目崎城跡縄張り図（1/2,500）

大きな曲輪を置き、それより下段は尾根筋の地形に合わせた三日月状を呈する曲輪を多く並べ、一部は軸線をずらして配置している。最下段から２番目の曲輪にみられる梯子状の溝は、城に伴う遺構かどうか判然としない。主郭北端から北東に延びる尾根筋にも、地形の制約を受けた小規模で造成の甘い曲輪が連なる。主郭の西側には、２～３ｍの段差を置いて南北に細長い帯曲輪があり、その外側に堀切と、４面にわたる曲輪が設けられている。うち最上段の曲輪には、内部に高さ１ｍほどの細長い塚状の高まりが認められた。本城で特筆すべきは、主郭の北側と西側、および現北東側尾根筋の先端部の合計３か所に畝状竪堀群が密に掘削されていることで、すべての主要尾根筋に配置された曲輪群と併せて、守りを固める。

文献･伝承　『古城之覚』は、苫西郡下原村の「眼崎之（城）」として、城主不詳とする。『作陽誌』は、「目崎城」として、一名を妻山、麓から三町余りのところに砦跡が残り事跡不詳とし、目裂金剛王という巨人が住み暴虐を働いたという伝承を載せる。また一説に、目崎城は大崎美濃守頼末が築き子孫が代々継承、文明年間に毛利日向守秋家が奪取したが､天正９年秋に子孫の次郎盛光が戦死し、以後無住となったと記す。『美作鬢鏡』は城主を浦山左馬助行信、『美作鏡』は「目崎城」として城主を浦山行信とする。天保国絵図に「目崎古城跡」とある。（文献 133）　（岡本）

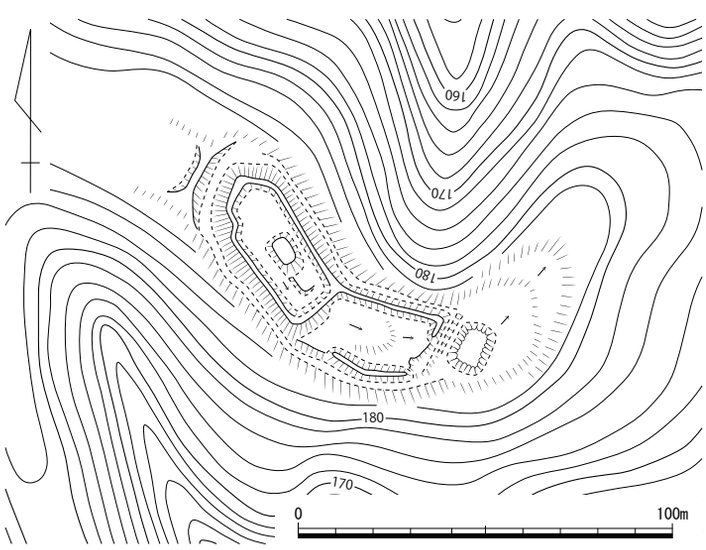
写真 63　遠景（南東から）

131　古川（ふるかわ）城跡　　苫田郡鏡野町宗枝　　地図 20 左

立地　香々美川右岸の丘陵上に立地し、丘陵の主尾根から南東に延びる枝尾根上に城域を設ける。

概要　背後を堀切で遮断した尾根筋に曲輪を上下２段に並べ、周縁部を土塁で囲む構造である。堀切の外側は高さ 1.5 ｍほどの土塁状を呈する。切岸の高さは２～３ｍ程度である。曲輪はいずれも、内部の平坦化が不十分で、自然地形に沿って南東に傾斜する。上段の主郭は、土塁の北端が突出する形状で、内部には長方形の高まりが確認できる。下段の曲輪は、東端部と南西部の２か所で土塁が途切れ、特に東端部については虎口の可能性がある。城域の南東にある方形の高まりは近年の地形改変によるものと判断した。

文献・伝承　『作陽誌』には、寺元村と沖村の境界に「茶臼山」、その西に「小営」があると記す。「小営」は位置関係からみて本城のことか。（岡本）



第 129 図　古川城跡縄張り図（1/2,000）

133　局笠山城跡（つぼねかさやま）　　津山市戸島・下田邑　　地図 20 右

立地　吉井川へ合流する戸島川と紫竹川の間に挟まれた山塊の中央部に位置し、山頂とそこから各方向へ派生する尾根に立地する。

概要　山頂には直径約 40 mの大きな円墳があり、その墳頂を、中央に高さ約 1 mの高まりを残して削平し、直径約 22 mの平坦な曲輪を造成している。南側の墳裾には墳丘斜面を高さ約 2.5 m削り込んで造った曲輪が 2 面並んでいる。その曲輪の境や東縁に土塁がある。山頂から南東に延びる尾根をたどると、なだらかな高所があるが、その高所の手前に、尾根筋の両側を削平し、尾根筋を土橋状に残した遺構がある。その土橋の南には、土橋から繋がる通路部分を土手状に残し、その両側を掘り込んだ造作がある。その南の高所は平らではあるが自然地形で、そこより南には徐々に下がっていく。その幅の広い尾根筋の緩斜面の南縁に土塁を設けた曲輪を 2 面拵えている。この 2 面の郭を繋ぐ通路が見られる。そして下段の曲輪の南縁にある土塁の南には並行して高さ 0.5 ～ 1 mの土塁があり、その南に接して深さ 0.5 ～ 1 mの溝状の堀切が連続している。堀切と土塁には土橋と途切れがあり、虎口としている。ここを北へ通ると東へ曲がってさらに北へ曲がって曲輪内部に入る仕組みである。そのほか、各方向へ派生する尾根に人工的な平坦面が確認でき、曲輪の可能性が高いと考えられる。

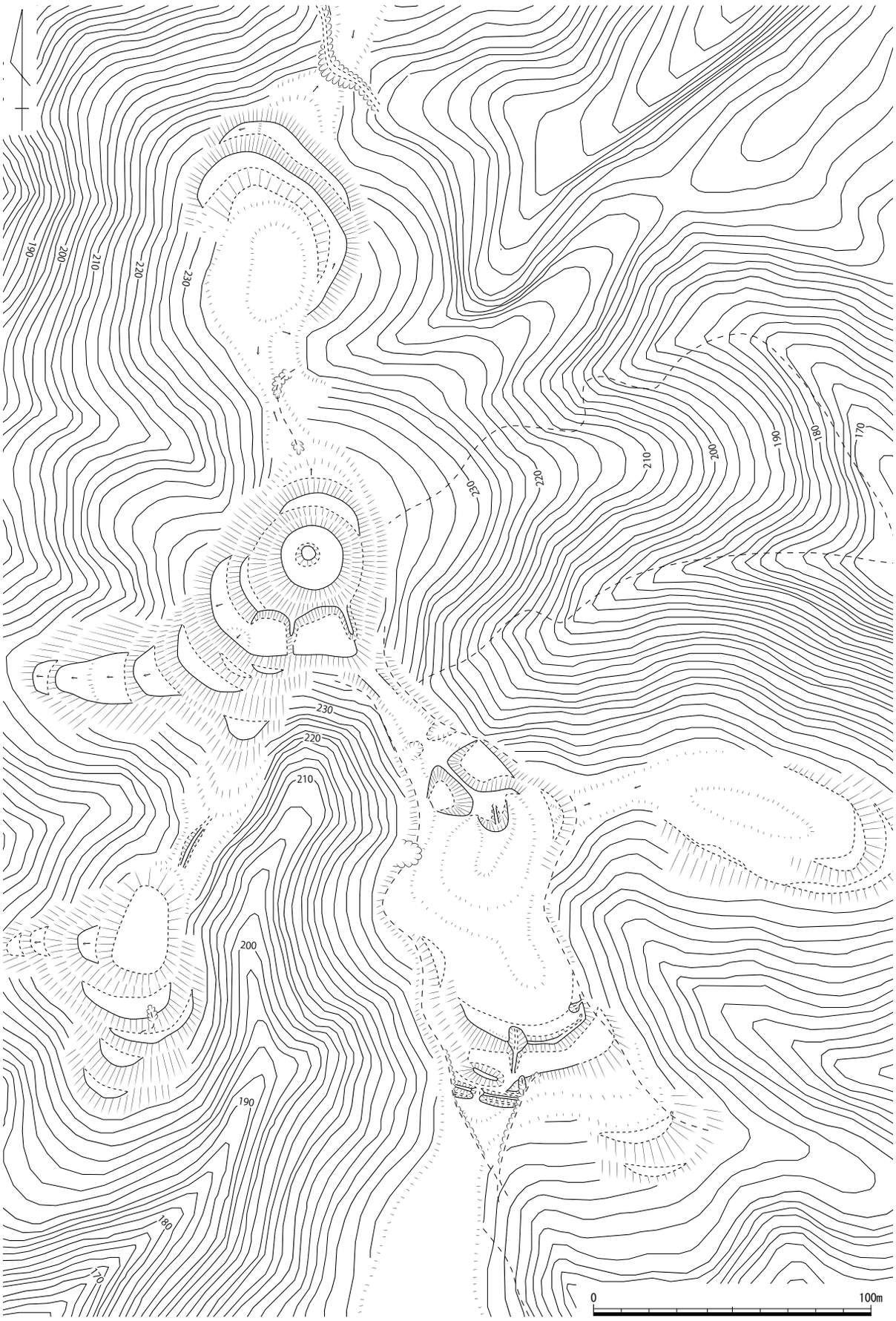
文献・伝承　『美作国の山城』は、『作陽誌』は「盒層山」として山名の由来を記すが、城の記述はないとし、城として初めての記述は『美作鏡』で、戸島村「局笠山城」、城主不詳とするとする。（物部）

写真 64　遠景（北西から）

写真 65　古墳裾の曲輪（西から）

写真 66　城域南端の土塁と堀切（西から）

写真 67　高所北側の土塁状遺構（南から）



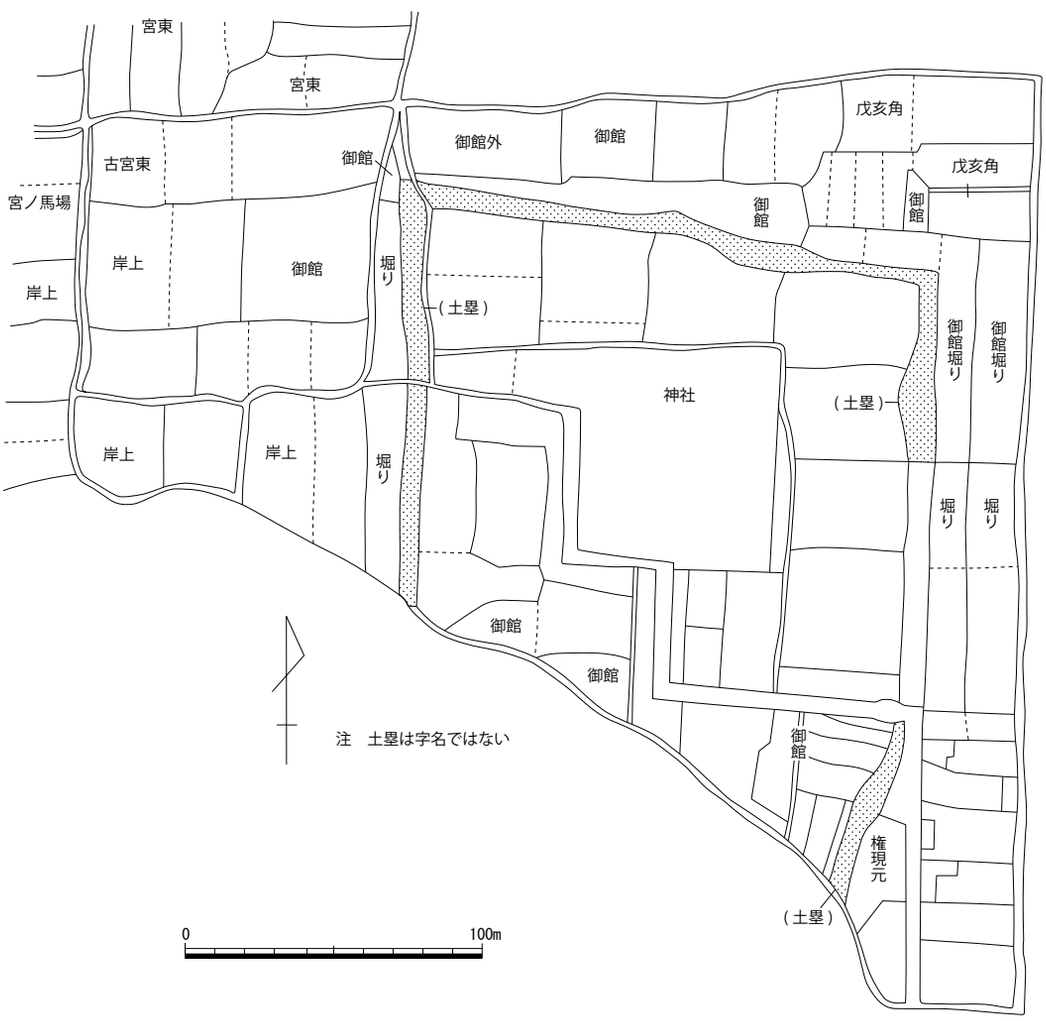
第 130 図　局笠山城跡縄張り図（1/2,000）

134　院庄館跡（いんのしょうやかた）　　津山市神戸　　＜国指定史跡＞　　地図 20 右

立地　吉井川が南東から東へ大きく湾曲して流れを変える、その湾曲の内側の沖積平野に立地する。

概要　現在、幅５ｍ前後の堀と、幅３～６ｍ、高さ 0.5 ～ 1.5 ｍ土塁が方形に巡っている。昭和 48 年度に津山市教育委員会が実施した調査によると（文献 140）、現在の堀は第二次世界大戦末期に掘られたもので、土塁は鎌倉時代以降の館存続期に築造されたとし、発掘調査で確認された井戸は鎌倉時代、柱穴は館期のものとした。また、地籍図の調査で確認された「御館・堀・御館堀・御館外」などの地名から復元される館の広さは東西 250 ｍ、南北 300 ｍ以上とする。その規模等から美作国守護所・守護館に比定されている。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『作陽誌』は苫田郡神戸村の「後醍醐天皇駐驛跡」として、元弘２（1332）年に隠岐配流途次の後醍醐天皇が院庄に入ったことを「増鏡」や「異本太平記」などを引用して示し、村人の伝承からその遺跡がこの地であるとし、『太平記』は康安２（1362）年６月、山名時氏が「美作院ノ庄」に入り、備前・備中国へ出兵したとあるとする。　（物部）



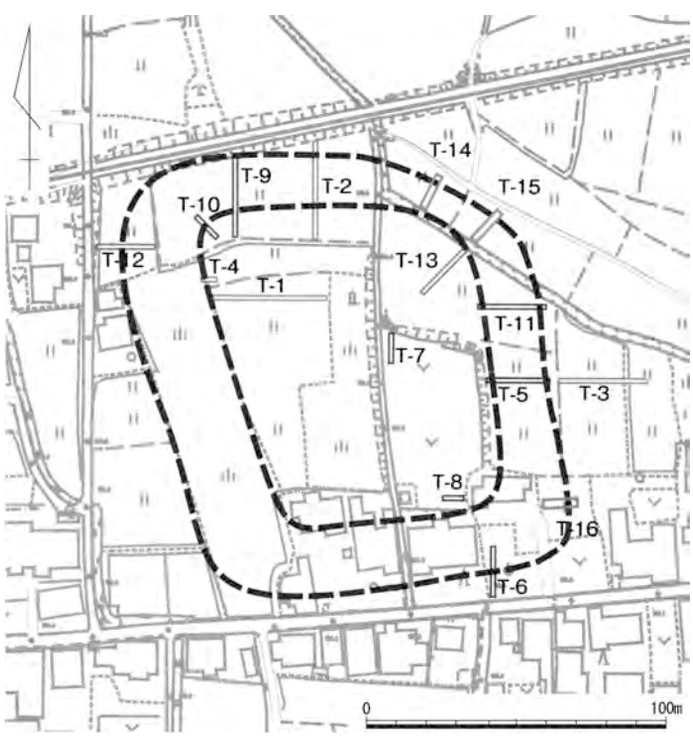
第 131 図　院庄館跡周辺の切り絵図（1/2,500）　文献 140 を加筆

135　院庄構城跡（いんのしょうかまえ）　津山市院庄　地図 20 右

立地　院庄館跡から約 600 m南方に位置する平地城館である。城館の北東側は、院庄館跡の南西隅から続く旧河道の流路にあたる。城館の南側を旧出雲街道が東西に通っている。

概要　周囲を堀で囲まれた方形居館であったと想定される。城館敷地の南東部分は現在でも周囲の水田より２ｍほど高い畑となっており「構城址」の石碑が立っている。本城館においては、平成 19 ～ 22 年度の津山市教育委員会による確認調査の成果と、地籍図や「森家先代実録」の記述に基づき、東西約 80 m、南北約 110 mのややいびつな長方形の城域が想定されている。周囲を水堀が巡り、その幅は南側・西側に比べると北側・東側が狭く、特に北東隅は切り取られたような形状を呈する。堀も含めた全体の規模は、東西約 140 m、南北約 150 mとなる。築城時期については調査でも明らかにならなかったが、出土遺物のほとんどは 16 世紀後半～ 17 世紀前半に属し、『作陽誌』が記述する寛永 15 年の廃城に近い年代を示している。本城館について前原茂雄氏は、寺院を永正６（1509）年以降に城館に転用したとし、森俊弘氏は、中村氏の守護代就任とともに本城館が守護ないし守護代の館の機能を持ったと推測する。

文献・伝承　『古城之覚』は城主を片山杢之助宗満とする。『作陽誌』は、天正末年に片山木工允・同左馬助が在城、慶長８（1603）年、森忠政の美作支配に際し津山に移るまでの「仮居所」となり、寛永 15（1638）年に破却、今は堀がわずかに残ると記す。『美作国の山城』は、諸史料に基づき以下のように記す。応永元（1467）年､赤松氏の被官中村五郎左衛門は「院庄」に入り山名勢を逐ったが、文明 15（1483）年に再び山名氏が院庄を拠点とし、さらに長享２（1488）年、赤松家家臣の浦上伯耆守が院庄から山名勢を退けた。その後赤松氏の被官中村則久は院庄の「中村館」に入り、永正 16（1519）年に赤松・浦上氏の対立にあたり退き岩屋城に籠城した。永禄９（1566）年頃、花房職秀は院庄の「ぢんこ」の合戦で高名を挙げた。同時期の某年３月、毛利輝元は中西三郎兵衛尉に先年の院庄での籠城を賞している。また牧河内・藤蔵と片山木工は宇喜多直家から「院庄の御番」を命じられたという。天正９（1581）年６月には毛利勢による「院庄」への軍事行動が報じられ、再び毛利方の拠点となったらしい。構には毛利輝元の家臣､片山木工助が籠められ、「皿山の取手」（嵯峨山城）に拠る宇喜多直家の家臣、河端丹後と対峙したとされる。（岡本）



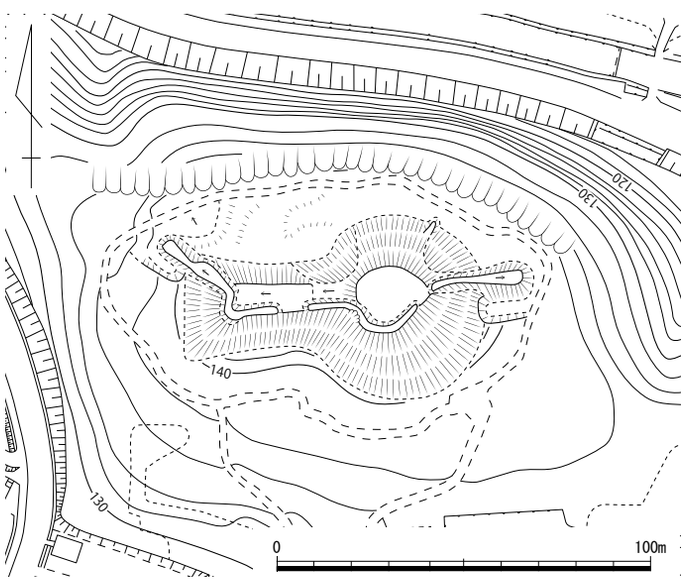
第 132 図　院庄構城跡復元想定図（1/2,500）
文献 139 より一部加筆

136　美和山（みわやま）城跡　　津山市二宮　　地図 20 右

立地　吉井川と紫竹川の合流点に向かって、西から張り出すなだらかな丘陵上に立地し、北に紫竹川、南に吉井川流域の平野を見下ろすことができる。丘陵頂部にある古墳時代前期の前方後円墳、美和山１号墳の墳丘を利用して築かれた城郭である。

概要　美和山城は、全長約 80 m、高さ約 10 mの美和山 1 号墳を城域に取り込んで築かれた、比較的小規模で単純な構造の城である。

現在、最も顕著に残る遺構は土塁で、墳丘の削平及び盛土によって築かれている。一部に途切れる箇所もあるが、後円部の東側から後円部・前方部の頂部南側縁辺を巡り、前方部の北西隅に至る。土塁の両端は墳丘から突出し、その南側は深さ１mほどの浅い堀状に掘削されている。土塁の高さは墳丘上で 0.5 ～ 0.6 m、両端部では 2.5 m近くとなる。城域は南側をこの土塁、北側を紫竹川南岸の急斜面を防御線としており、後円部、前方部及び墳丘北側の平坦面を曲輪としたようである。後円部の北東部・北西部斜面には削り取られた跡が残り、築城工事に伴う土取りの痕跡と見られる。また、後円部北東斜面の下端に短い土塁状の突出部があり、もとは曲輪を仕切る構造物であった可能性もある。墳丘北側の曲輪は、内部構造も明らかでないが、郭面の西端部は若干窪みになっており、虎口の存在を示唆するのかもしれない。



第 133 図　美和山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『古城之覚』は二ノ宮村の「二ノ宮」として、城主を立石掃部助とする。『作陽誌』は「美和山　附古城」として、立石中務丞漆高光の居城、その曾孫の掃部亮久朝のときに三星城主、後藤勝基の攻撃を受けた。久朝は迎え撃ったが大敗して城は陥落した、と記す。

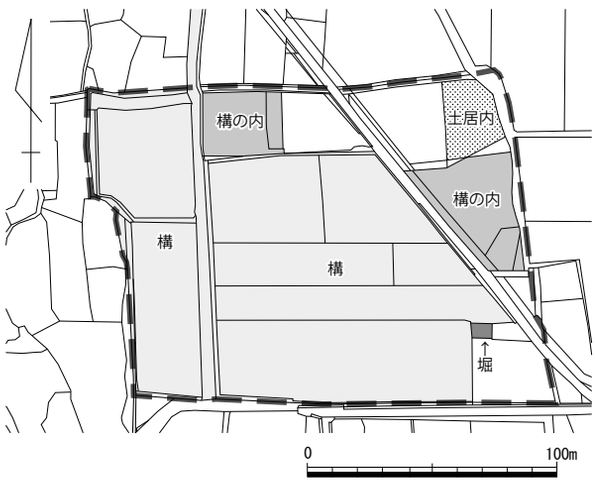
『美作鬢鏡』は「二ノ宮城」、『美作鏡』は「二宮城」とする。『苫田郡誌』では「美和山城」とし、東西三町南北一町三十間、ほとんど円形で松が繁茂する、と記す。（文献 133）　（岡本）

写真 68　近景（南から）

137　下原構跡（しもばらかまえ）　　苫田郡鏡野町下原　　地図 20 左

立地　目崎城のある丘陵の東麓に立地する城館である。丘陵裾部の末端で、周囲の平地よりやや高い場所を利用して築かれているようである。

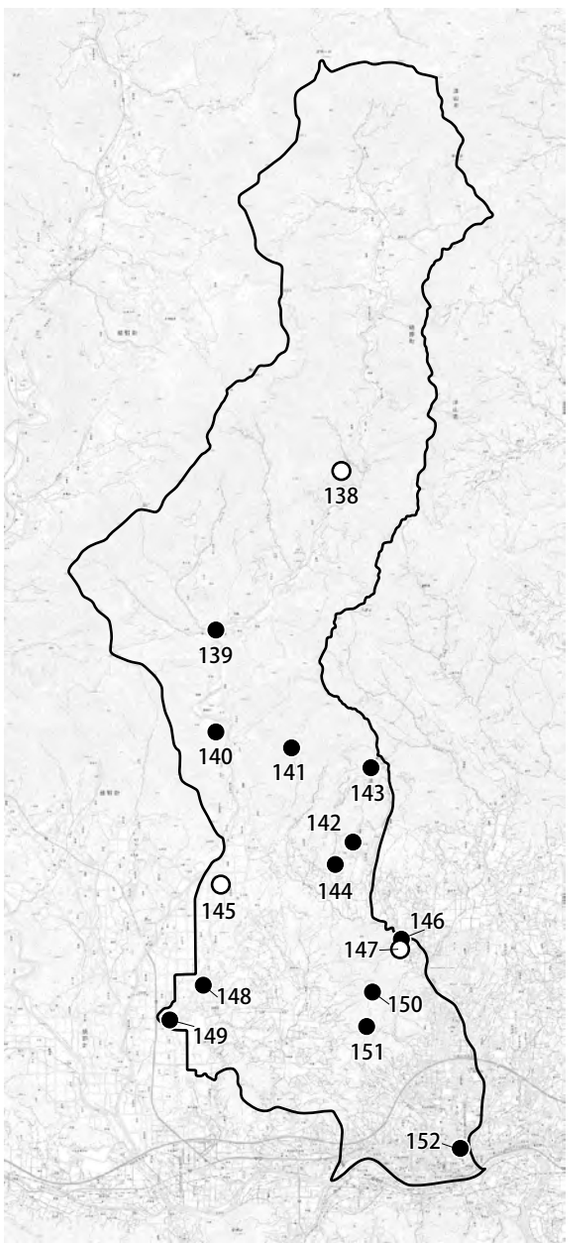
概要　城館推定域の大部分は水田及び畑となっている。文献 117 によれば、推定地内に「構」「土居の内」、南側に「構の脇」「的場」という小字が残っており、南北 106 m、東西 125 mの規模で、北東隅が円弧状を呈する方形の城館と想定されている。当時の観察では、構内と推定される水田は、中央を走る町道（現県道）より約 1.5 m高く、東側及び南東隅に堀の痕跡があり、幅は約８mで、周囲の水田から約２m低いと記録されている。なお、第 134 図の小字名は鏡野町提供の地籍図による。現在は圃場整備により旧区画が失われているが、北東隅から東側にかけては、城館の輪郭が水路や段差として残る。



第 134 図　下原構跡平面図（1/3,000）

文献・伝承　『作陽誌』は、目崎城の東南に「構屋敷」があり、目裂金剛王の館との伝承を載せる。（文献 133）　（岡本）

第 4 節　西北条郡



138. さんこう城跡
139. 相坂城跡
140. 日上山城跡
141. 桝形城跡
142. 東田辺城山城跡
143. 黒沢山城跡
144. 東田辺谷上城跡
145. 山名房安居館跡
146. 長良獄城跡
147. 一宮甲宮ノ谷遺跡
148. 天王木土塁跡
149. 茶臼山城跡
150. 神楽尾城関連遺構跡
151. 神楽尾城跡
152. 津山城跡

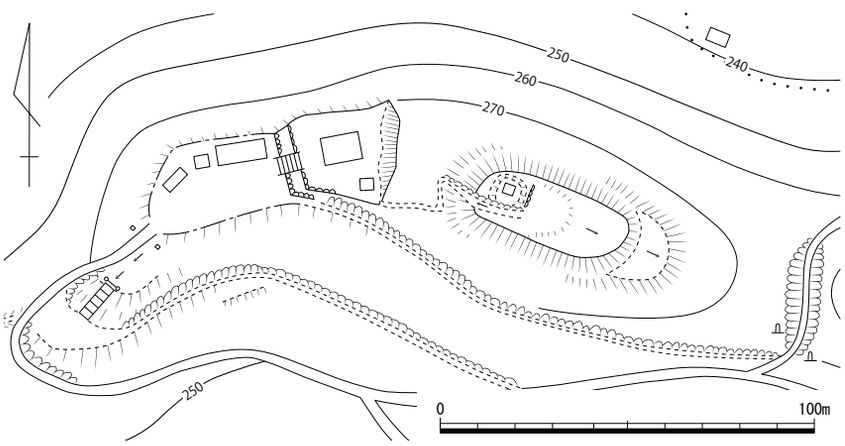
第 135 図　西北条郡城館位置図

139　相坂（あふさか）城跡　　苫田郡鏡野町真経　　地図 13 右

立地　香々美川がＶ字状に大きく蛇行する部分に向かって、東側から延びる尾根筋上に立地する。

概要　標高 288 mの尾根頂部を主郭とし、東西に細長い城域を形成していたとみられる。明確に残るのは主郭のみで、東西約 40 m、南北約 15 mを測り、西端部に高さ約 60㎝の不整な方形の高まりがみられるが、城の遺構かどうか不明である。背後の尾根にある切通しの道は、堀切を踏襲したものかどうかはっきりしない。西半部は香々美北神社の社地で、地形改変が著しく遺構の評価が難しい。現在の造成面が曲輪の形状を反映している可能性はあるため、西端の駐車場までを城域に含めることとした。

文献・伝承　『古城之覚』は「あふさか」として、小瀬勘兵衛の抱とする。『美作鬢鏡』では「相坂ノ城」、『美作鏡』では「逢坂城」とする。（文献 133）　（岡本）



第 136 図　相坂城跡縄張り図（1/2,000）

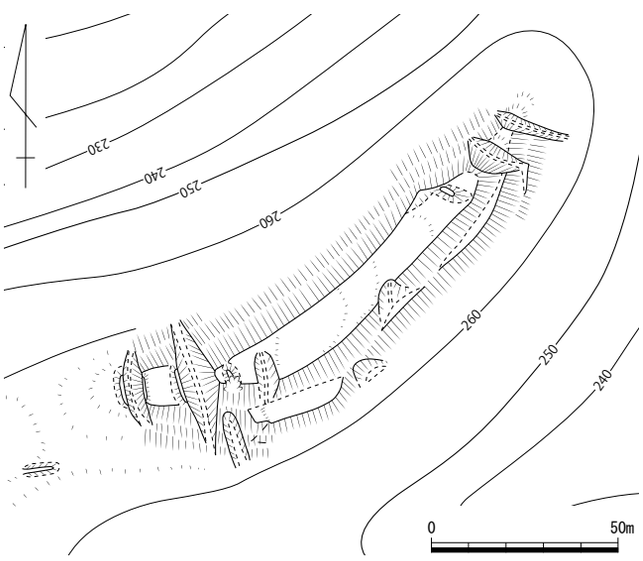
140　日上山（ひかみやま）城跡　　苫田郡鏡野町寺和田　　＜町指定史跡＞　　地図 13 右

立地　香々美川の湾曲部に向けて北東に突き出す尾根先端に立地する。香々美川流域を眼下にする。

概要　尾根の先端と鞍部を２条の堀切で画し、その間の尾根線に長大な曲輪を造成している。曲輪の東西両端部に、端部から少し内側に配された土塁がある。また、曲輪の南東縁に虎口を２か所造り、特に西側の虎口は竪堀状に曲輪を大きく掘削して下方斜面の曲輪と繋いでいる。尾根鞍部の堀切には土塁が付設し、南東斜面には、犬走りや竪堀 1 本が認められる。

尾根鞍部西側に確認できる高さ 0.5 m程度の土塁や、谷を挟んだ南の尾根に認められる人為的な平坦地についてはその性格を判断しがたい。

文献・伝承　『作陽誌』は「日上山」として、小瀬勘兵衛が住むと記す。　（物部）



第 137 図　日上山城跡縄張り図（1/2,000）

141　桝形（ますがた）城跡　苫田郡鏡野町香々美・寺和田・津山市西田辺　＜町指定史跡＞　地図 13 右

立地　鏡野町と津山市との境界をなす、標高 645 mの桝形山の山頂とその周辺に立地する城である。桝形山は、津山盆地の北縁に接する山塊の一角にあり、狭い谷筋を南流してきた香々美川が、旧鏡野町域の平野にさしかかる箇所の左岸に位置している。山頂からは津山盆地を広く見渡すことができる。

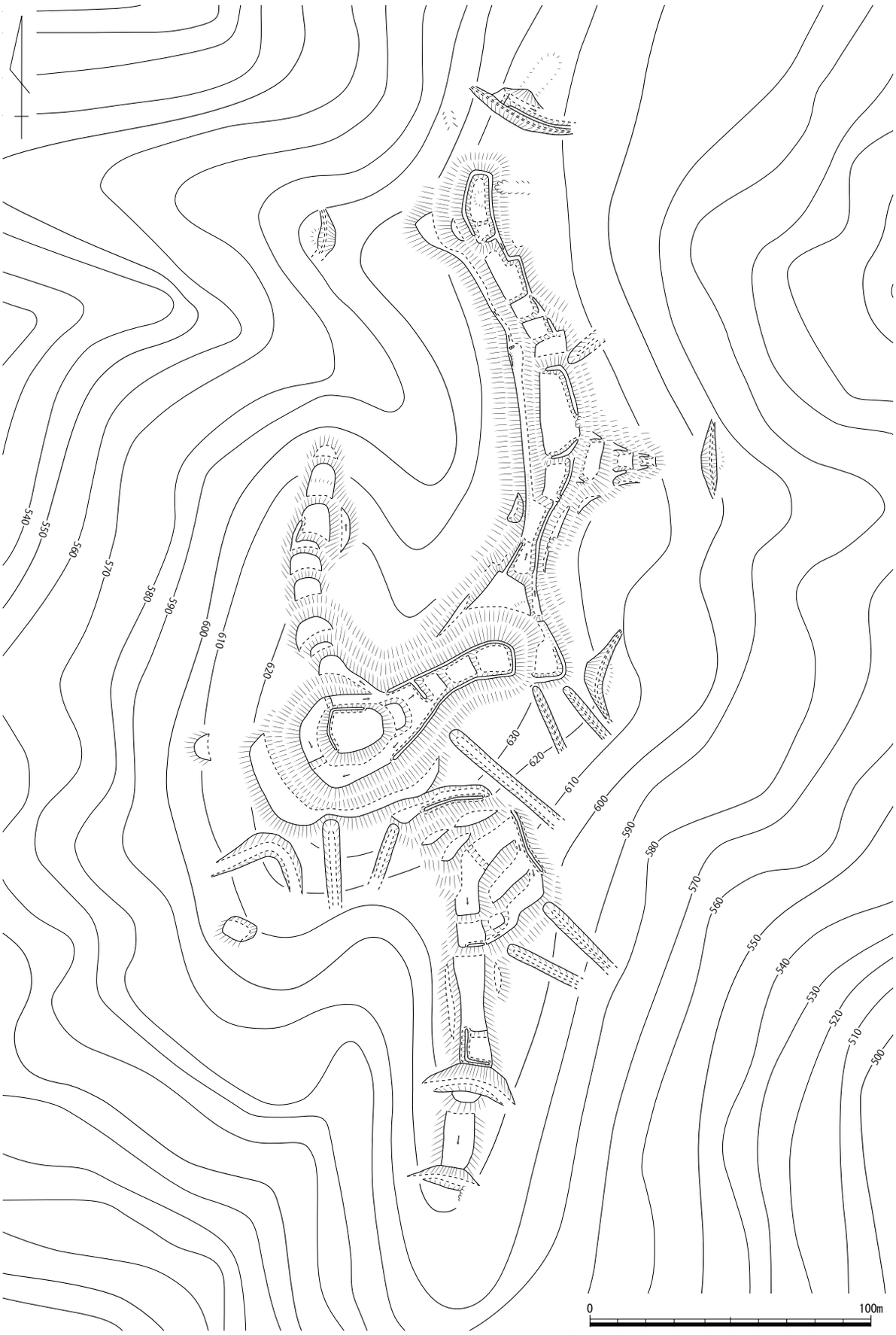
概要　桝形山山頂から南北方向に延伸する尾根上に諸施設が配置され、南北の長さは 400 mに達する。曲輪群の南北両端と、４方向に延びる枝尾根の合計６方向に堀切を掘削し城域を画している。山頂の主郭はほぼ東西約 20 m、南北約 16 mの長方形を呈し、縁辺の一部に土塁が残存している。主郭から２～ 3.5 m下方を帯曲輪が囲繞しており、北東に派生する尾根筋の曲輪群と面が連続している。北東側の曲輪群は、高さ 0.5 ～ 0.8 mの土塁で囲まれた中に、４面の曲輪が 1.5 ～２m程度の段差をもって連なる特異な構造であり、その形状が「桝形」に似ることから城名の由来になったとされている。ここまでが、郭面や土塁の連続性からみて城の中心部と見なすことができよう。南東側斜面には３本の竪堀、東へ派生する尾根筋には１条の堀切が掘削されている。

この中心部から北に向かって２本の尾根筋が延び、その双方に曲輪が配置される。桝形状曲輪群の東端から延びる尾根筋には、長方形を基調とする曲輪が９面連続し、中でも中央に位置する曲輪は南北約 30 m、東西約 15 mを測り城内で最大規模である。曲輪間の切岸は高さ 0.5 ～ 2.5 mを測る。各曲輪の東側肩口には土塁が伴い、途切れる箇所はあるが曲輪群の東辺をほぼ固め、先端の曲輪では西側にまで回り込んでいる。一部に塁線の折れが認められ、横矢掛けを意図しているとみられる。一方、曲輪群の西側では、約３m下方に細長い犬走りが約 120 mにわたって設けられる。曲輪群の先端は、深さ約３mで外側に土塁を伴う堀切で遮断される。また、最大の曲輪から東へ派生する尾根筋には、両脇に土塁を伴う３面の曲輪と堀切を設けている。主郭から北側に延びる尾根筋にも、不明瞭なものも含めて９面の曲輪が連なる。最上段の曲輪は、桝形状に曲輪群から斜路で連続している。この尾根の曲輪には、一部を除いて土塁の構築は認められない。

中枢の曲輪群の西側から南側にかけては、約８m下方にＬ字形を呈する帯曲輪が巡っている。その南西側の尾根筋は深さ 1.5 m程度の浅い堀切で遮断され、南側斜面には２本の竪堀が設けられている。帯曲輪の東端からは南へと尾根が延び、多数の曲輪が配置される。北半部は地形がやや急峻なためか、

写真 69　遠景（南西から）

写真 70　主郭から見た鏡野盆地（北東から）



第 138 図　桝形城縄張り図（1/2,000）

形状が不定形のものが目立ち、切岸も 2.5 ～ 4 m程度と高い箇所がある。南東側斜面には２条の竪堀が掘削されている。南半部は、なだらかな尾根筋上に長方形の曲輪が並び、南端は間に曲輪を挟む２条の堀切で遮断されている。これら南側尾根の曲輪群にも土塁が付属しているが、その設置状況は散発的であり、北側尾根とは対照的である。

桝形城はその規模に加え、南麓の平野や西麓の香々美川流域を広く視界に収める立地条件からしても、毛利方の拠点的な城郭のひとつであったと考えられる。

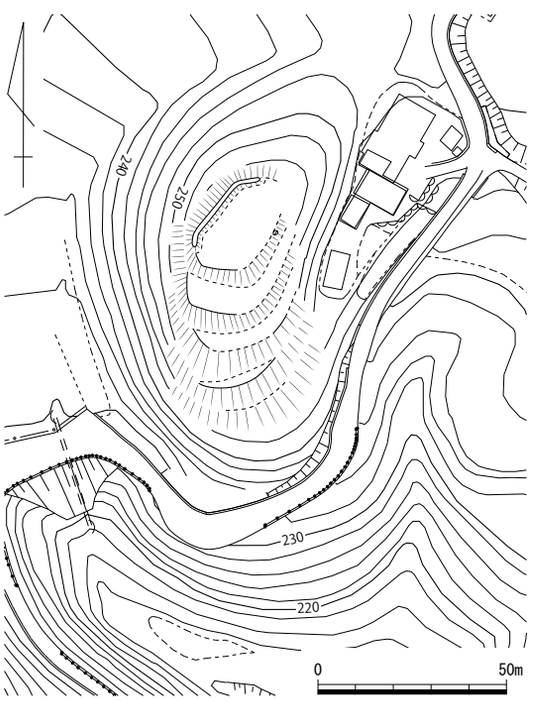
文献・伝承　『古城之覚』は、「升形之城」として、城主を福田玄蕃勝昌・同助四郎盛昌とする。『作陽誌』は「枡形城」として、小早川隆景が修築し、福田勝昌・盛昌らに守らせたとある。『美作国の山城』は、各種史料に基づき以下のように記す。永禄 12（1569）年以降、少なくとも翌元亀元（1570）年まで、毛利方で出雲国高平城の城主、牛尾豊前守が「益形」に在番したとの記事がある。天正７（1579）年 11 月には城の普請が調い、毛利氏による岩尾山城（医王山城）への兵粮搬入の拠点となった。宇喜多直家は「高田ノ城」（利元城か）に先駆けて升形城を攻撃したが、まもなく高田まで退き荒神山城に花房職之を籠め升形・岩尾山攻略を進めた。また直家は、荒神山城に拠り岩尾山・升形城を攻撃しようとしたが、吉川元春が四十曲まで出勢したところ、直家は既に岡山へ退いていたという。花房職之は草刈氏の出城「いわう山」「ますかた」「としもと」の三城を攻め取り、「ひつめの城」（日詰城）の相城として加番の兵を籠めたとする。ただ天正９年正月に岩尾山城から退去した湯原春綱は升形城の在番を命じられており、また同 12 年正月、羽柴秀吉は蜂須賀正勝・黒田孝高が毛利氏から升形城を受け取るとの報告を受けていることから、その後も継続して毛利氏の支配にあったことがうかがわれる。（文献 133）　（岡本）

142　東田辺城山城跡（ひがしたなべじょうやま）　津山市東田辺　地図 13 右

立地　黒沢山（668 m）の南山麓に位置し、宮川へ向けて開く谷奥の小さな独立丘陵状の尾根頂部に立地する。周辺は同様な小丘陵と谷が入り組んだ地形であるが、現在、谷部は「昭和池」となって水没している。

概要　頂部には、西縁に高さ 0.5 ～ 1 mの土塁を持つ平坦な曲輪（主郭）があり、その南から東斜面にかけて２～３面の曲輪が認められる。主郭から東斜面は猛烈なヤブのため、各曲輪の輪郭など不明な部分があり、特に北東部は未調査である。

文献・伝承　『作陽誌』は「湯原」として、苫南郡東田辺村にあって、温泉跡と薬師堂とともに芦田右馬丞・作内の旧宅ありと記すが、『苫田郡誌』は「芦田屋敷」として、一宮村湯谷にあり、俗に城山と称すとする。東田辺村の湯原と一宮村の湯谷と違いが見られる。（文献 133）　（物部）



第 139 図　東田辺城山遺跡縄張り図（1/2,000）

143　黒沢山城跡（くろさわやま）　　津山市西田辺・東田辺　　地図 13 右

立地　津山市東田辺の北部で、黒沢山南麓に建つ萬福寺の西側に所在する。萬福寺から谷を隔てて西へ 220 m、南へ延びる丘陵頂部に立地する。標高は約 660 mである。直線距離で約 1.6km 西に枡形城跡が存在する。

概要　尾根頂部に長さ 30 m以上、幅 10 mの不整形な主郭を設け、その南側に爪形の曲輪 4 面程度と堀切 1 条を配する。頂部主郭より北側は現代の削平があり、さらに北側には自然の尾根が続く。

頂部主郭は尾根の形に沿って蛇行しており、郭面は若干の高低はあるが総じて平坦になっている。主郭の周りには高さ３～５mの切岸を巡らせている。頂部主郭から南側の尾根上には、２～３mの切岸を設けながら幅 10 m弱、長さ５m弱の曲輪を 4 面続けていて、最南端に位置する掘切との間は５mの切岸がある。掘切は中央が道路造成で埋められているが、地形観察から元来土橋は存在しなかったと思われる。掘切の残存高は北側で１mを測る。

現在南斜面曲輪群を貫いて頂部曲輪まで階段が設けられている。これとは別に、頂部主郭の北側が平坦に造成され、建物などが設置されている。この建物に続く作業道が北側の尾根鞍部から頂部主郭へ向かって作られている。頂部主郭とその北の尾根鞍部との間は５m程度の落差があり、元来掘切が存在した可能性があるが、作業道により埋められていて不明瞭となっている。

文献・伝承　故事来歴は伝えられていない。　（氏平）

高橋成計「美作医王山城合戦の意義について」『戦乱の空間』13　2014 年

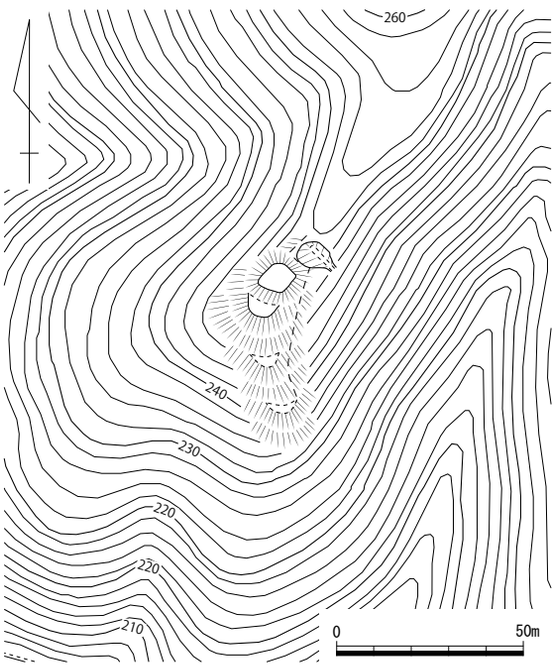
第 140 図　黒沢山城跡縄張り図（1/2,000）

144　東田辺谷上城跡（ひがしたなべ）　　津山市東田辺　　地図 13 右

立地　黒沢山から南へ派生した、標高約 250 m の尾根の先端頂部に位置する。南側には鵜ノ羽川が流れる。

概要　全長約 50 mの小さな山城である。細尾根上に小さな主郭と曲輪を配する連郭構造である。主郭は 10 mほどしかなく、平坦地も緩い。この主郭の南西側に長さ５mほどの曲輪が配される。さらに南斜面に向けた前面に、稜線があいまいな２面の曲輪を連ねている。この２面の曲輪は長さ３mほどと小さいが、切岸は約５mありやや高くなっている。主郭背後には、深さ２mの堀切が築かれ、城域を画している。この堀切も幅が５m前後であまり大きくはない。当城は、全長も各施設の規模も非常に小さく、見張り台のような役割であったと考えられる。

文献・伝承　城主等は不明である。　（小林）



第 141 図　東田辺谷上城跡縄張り図（1/2,000）

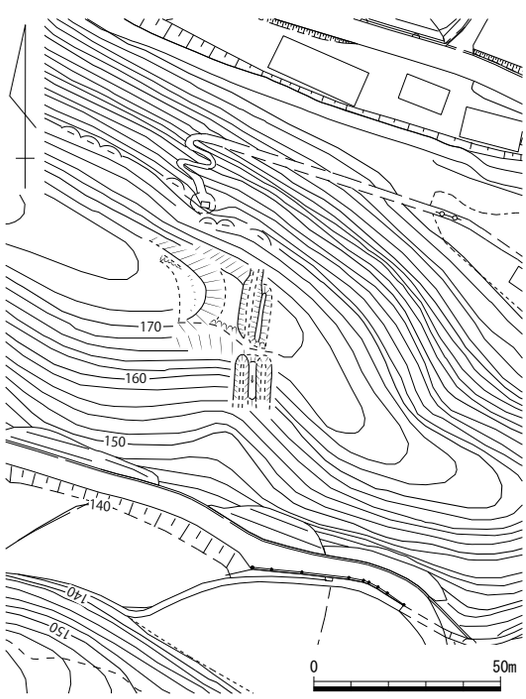
146　長良嶽（ながらだけ）城跡　　津山市一宮　　地図 13 右

立地　中山神社背後の丘陵尾根に立地する。北側山裾を宮川が流れ、尾根北斜面は広く露岩が絶壁を造っている。

概要　尾根先端付近に堀切と竪堀、土塁が認められる。堀切は深さ約 1.5 m、土塁の高さ約 1.5 mである。ここから西へ約 170 m離れた尾根高所に人為的な広い平坦地が認められる。明瞭な切岸は持たず、自然地形に近い。

なお、尾根先端部は激しいヤブのため調査することができなかった。

文献・伝承　『作陽誌』によると、天文末頃「苫田人」が国の疲弊に乗じて叛乱、群盗が呼応し兵は数千となり、尼子晴久は連戦しても勝てなかった。その賊将は美作国一宮に拠っており、晴久は社殿に放火して賊兵を大敗させ、永禄２（1559）年に本殿を造営したとされると記す。（文献 133）　（物部）



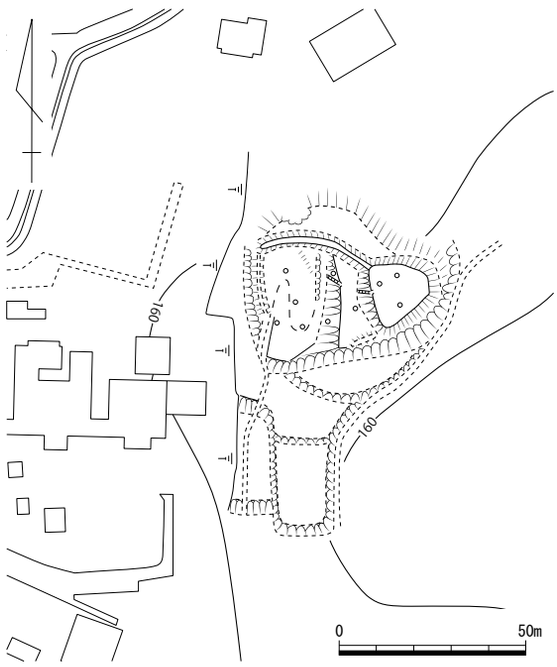
第 142 図　長良嶽城跡縄張り図（1/2,000）

148　天王木土塁跡（てんのうぎ）　　苫田郡鏡野町沖　　地図 13 右

立地　香々美川の東側で、標高 200 m前後の山塊が西へ派生した尾根先端裾部に位置する。同地点には天王木古墳群が存在する。本所より西側は開けており、苫田郡鏡野町の平地部分が見渡せる。沖構を見据えるには絶好の位置にある。

概要　本所は安養寺の敷地内にあたり、複数の祠が祀られている。そのため地形の改変が著しく、数面の平坦地は存在するが、全てが曲輪であったどうかは疑わしい。この箇所の北側辺から東側辺にかけて高さ 1 m程度の土塁が残る。北側辺は残存状況が良好で、約 40 mの長さがある。東側辺は高さ約 0.5 mしかなく曖昧であるが約 20 mの長さが残る。当所は土塁で囲んだ陣として役割が大きかったと考えられる。

文献・伝承　位置関係から、沖構を攻略するための陣城であった可能性がある。　（小林）



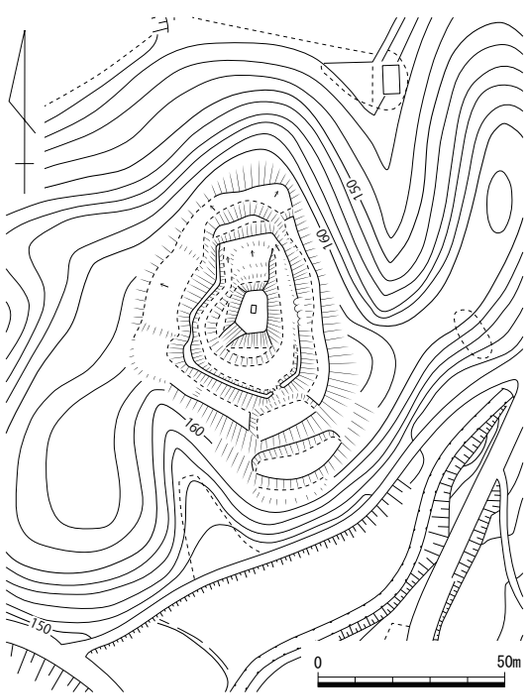
第 143 図　天王木土塁跡縄張り図（1/2,000）

149　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　　苫田郡鏡野町寺元・沖　　地図 20 右

立地　香々美川東岸の平野部に、東の山塊から南西に突き出た丘陵尾根に立地する。構城跡（沖構）の真南約 1 ｋmにあたる。

概要　茶臼山古墳は周壕を持つ全長約 25 mの帆立貝形前方後円墳である。この墳頂部を削平し主郭とし、墳丘斜面を削って切岸としている。周壕を帯曲輪としてその外縁に土塁を設け、外方を切岸に加工している。さらにその外側に帯曲輪を一周させ、その南部に平坦地を造り、その南下方にも同規模の平坦面を配している。

文献・伝承　『作陽誌』に「茶臼山」として苫西郡寺元村にあり、永禄年中（1558 ～ 1570）、備中国の兵が陣したとする。また、『東作誌』掲載「吉川元春書状写」に天正 11 年（1583）、宇喜多軍が沖構の周囲に付城を築いた事が記されており、茶臼山城はその付城の一つか。（文献 133）　（物部）



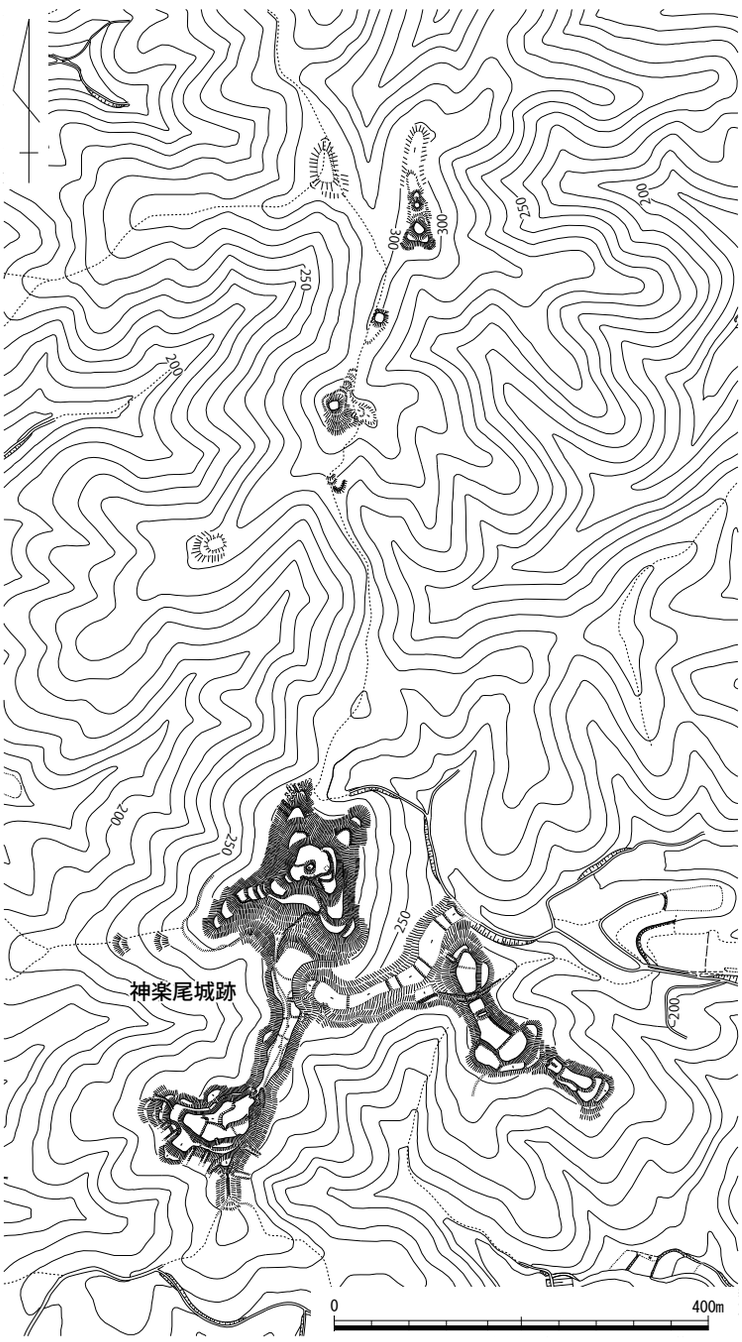
第 144 図　茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）

150　神楽尾城関連遺構跡（かぐらお）　　津山市一宮・上田邑　　地図 13 右

立地　標高約 300 mの神楽尾山山頂から北へ派生する尾根筋一帯と、さらに枝別れした尾根筋が該当地である。

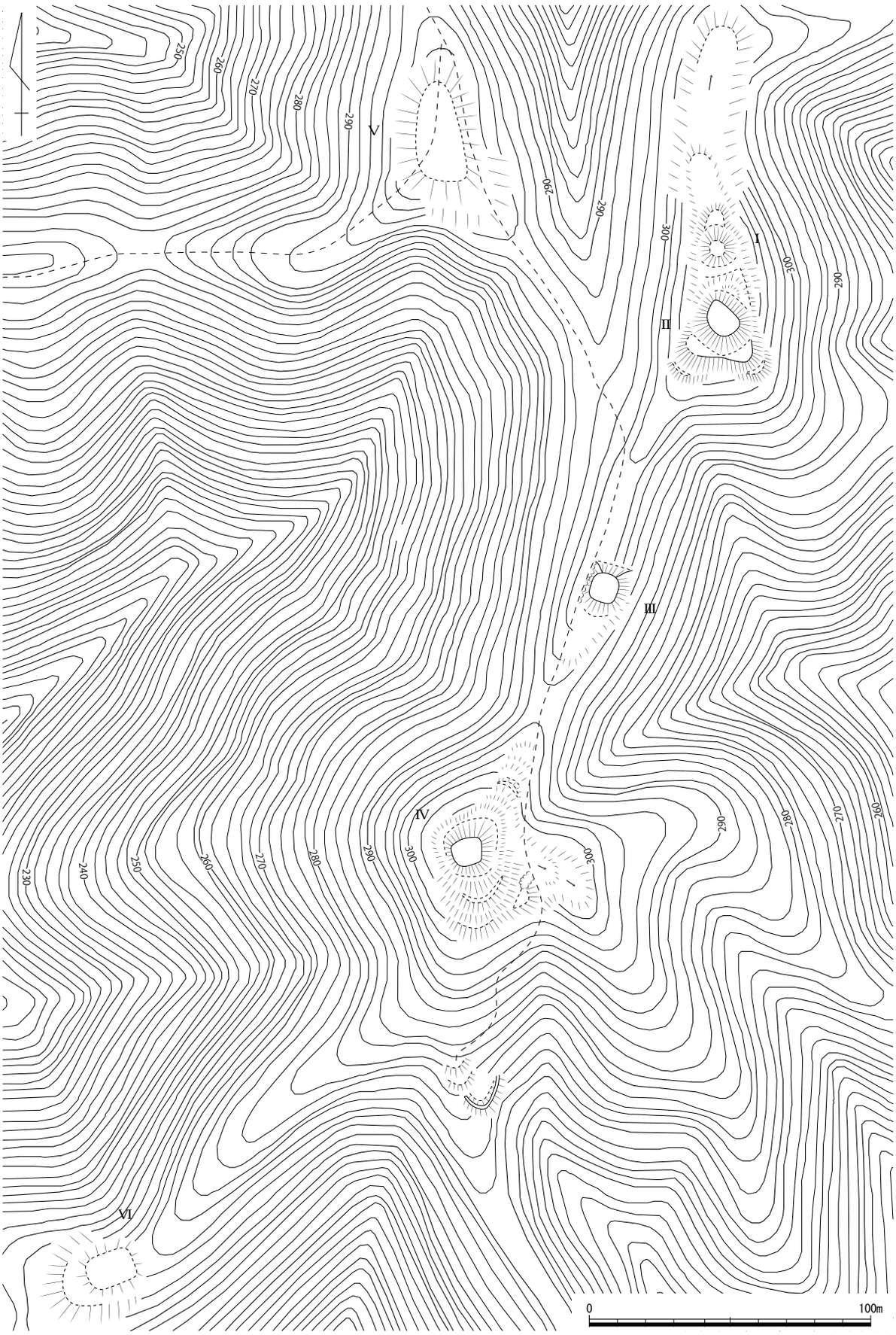
概要　神楽尾城跡から北へ延びる尾根筋約 400 mの範囲に４つ（Ⅰ～Ⅳ）、さらにそこから派生した２つ（Ⅴ・Ⅵ）の尾根筋に一つずつの計６箇所に高まりがある。この高まりはそれぞれ径 10 m前後の規模であり、特に南北尾根筋にあるⅠ～Ⅳは元々古墳であった可能性が高い。しかし古墳の側面などを切岸状に形成してあり、また付随して曲輪を築くなど、城館関連遺構として改変したと考えられる。Ⅰ・Ⅱは近接して存在するが、二つの頂部の間は堀切状に整形している。Ⅰの北側は尾根筋に合わせて若干の平坦地を造り、Ⅱの南側には２方向に小さな曲輪を数面配する。Ⅲは、高まりの北側が切岸状に改変していると思われる。Ⅳは頂部の平坦地の南側と南東側に曲輪状の段差を数面築き、南東方向はさらに東側に向けて平坦な地形が続く。また南側斜面には、曲輪が数面あり、最南端のものは縁辺部を土塁で囲っている。この曲輪から南側の尾根筋上には、土塁状の高まりが神楽尾城に向けて帯びる。この遺構は神楽尾城に対して直行して築かれているため、城に関連した施設であるかどうか判然としない。Ⅴの頂部は自然地形に近い平坦地である。Ⅵにも高まりがあり、遺構であった可能性が高いが、祠が建っており後世の改変を受けている。

これらの遺構群は、尾根伝いに神楽尾城に直結する位置にあるため、城の弱点補強もしくは攻撃拠点などの目的で築かれたと推定している。



第 145 図　神楽尾城跡と関連遺構跡（1/8,000）

文献・伝承　故事来歴不明。（小林）



第 146 図　神楽尾城関連遺構跡縄張り図（1/2,000）

151　神楽尾城跡（かぐらお）　津山市上田邑・下田邑・総社・小原　＜市指定史跡＞　地図 20 右

立地　宮川水系によって形成された津山市街地の盆地と、紫竹川によって形成された田邑地区盆地との間にある、標高約 300 mの神楽尾山山頂に位置する。津山市指定史跡である。

概要　主郭を含め、３つの曲輪群が連結した山城である。それぞれの曲輪群は 200 m前後になり、総計の規模は 500 mを超える大規模な縄張りである。

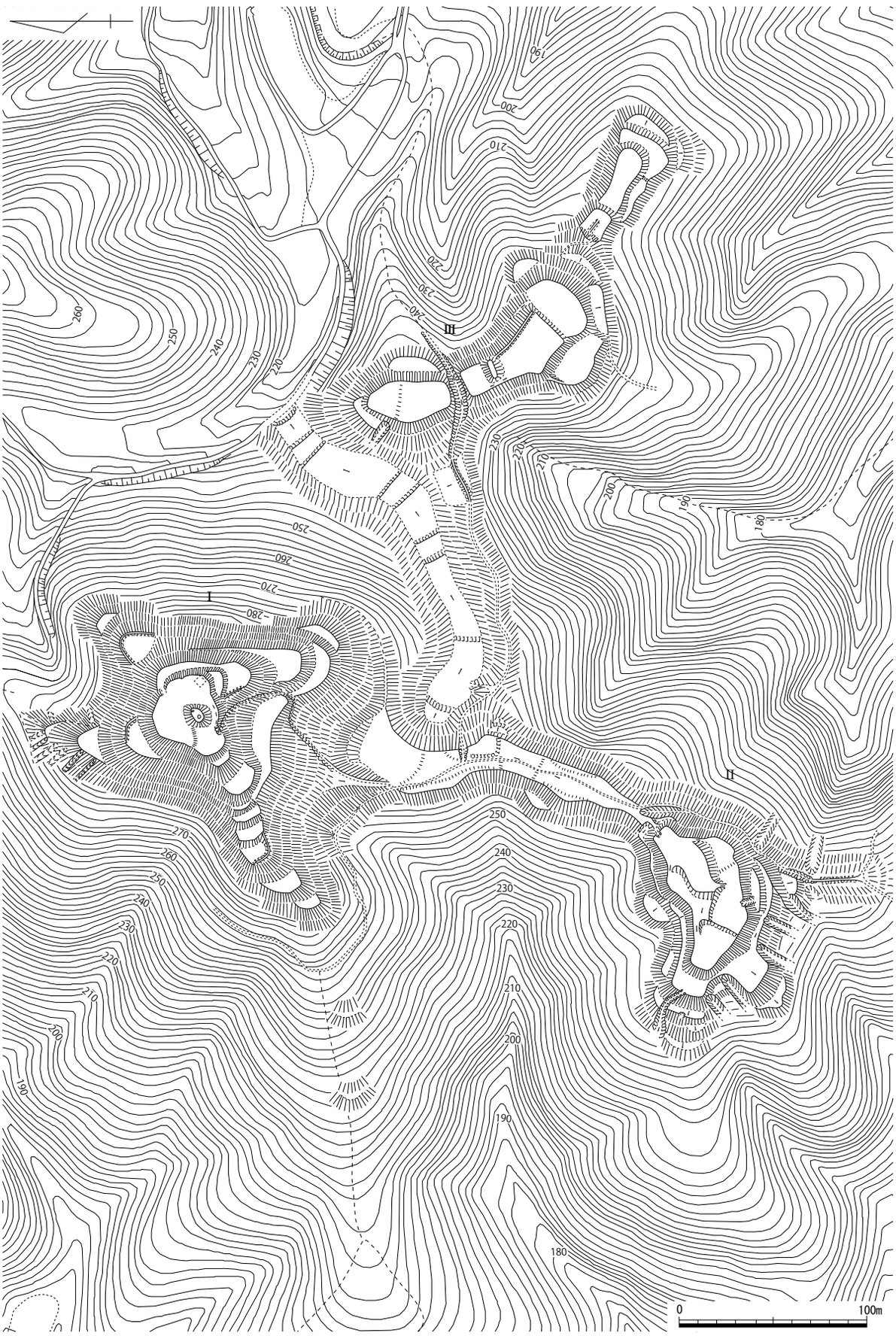
曲輪群（Ⅰ）の頂部は、長さ・幅とも 40 m前後あり、当城における最大の曲輪である。神楽尾山の山頂にあり見晴らしがいい。中央よりやや南側に櫓台状の高まりが残されている。頂部主郭の南側と南西側に張り出した尾根筋には、それぞれ曲輪が連郭状に築かれている。南側は５面ほど続くが、各切岸は５～８mほどある高く急峻なものが多い。主郭から数えて２面目と３面目は規模が特に大きく、長さ・幅ともに 20 m前後になる。また主郭の東側斜面に向けて腰曲輪状に張り出している。５面目も東側斜面に向いて築かれており、主郭の東側の防御を意識したような配置になっている。南西斜面の尾根筋は、大小８面の曲輪が連なっている。南側尾根筋に比べて規模は小さく、長さ 10 m前後、幅 20 m弱のものが多い。各切岸は５m近くあり、高く急峻である。主郭から数えて６面目の曲輪は、端部を囲うように土塁が築かれていた。この２つの尾根筋は、腰曲輪によって結ばれる。主郭背後に当たる北側は、斜面が急なため堀切などは築かれない。しかし斜面上の２方向に曲輪が続き、守りとしている。北東側斜面には２面、北西側斜面には３面が連なる。どちらも主郭から見て１面目の曲輪はやや大きく、長さ 10 m前後、幅 20 m前後になり、端部は土塁で囲っている。尾根筋が北側へ続く北西斜面側には、２面目と３面目に竪堀群が築かれ、城の弱点部分の守りとしている。

主郭からみて南西側に位置する曲輪群（Ⅱ）は、尾根筋頂部が長さ約 90 m、幅約 50 mと広大である。しかしⅠとは違って凹凸が激しく、平坦な地形はわずかである。この曲輪を中心に輪郭状に曲輪が築かれるのが特徴的である。さらに南側斜面には、計８本の竪堀によって守りを固める。この曲輪群と主郭の間には、長さ 100 mを超える細長い平坦地があり、連絡通路のようになっている。

主郭からみて南東側に位置する曲輪群（Ⅲ）は、尾根筋頂部に長さ約 40 m、幅約 30 mでⅠ頂部に次ぐ大きな曲輪を配する。この頂部から南東尾根筋に向けて曲輪を連ねる。特に一つ目の曲輪は、東側端部に土塁を築き、また平坦地状にも土壇状の高まりがあるなど、精美な造りである。ここから南東斜面上に腰曲輪を配し、さらに尾根先端方向へ向けて曲輪を築いている。この曲輪群の全長は 200 m前後になり、曲輪群Ⅰに次ぐ規模と内容である。またⅠの方向との連絡通路には土橋状の施設も存在し、Ⅰ頂部との間の谷筋が、曲輪状に続く。

文献・伝承　『太平記』にある山名時氏の諸城の内、赤松世貞・則祐が攻撃した城の中に「神楽尾ノ城」がある。『作陽記』には、山上に天剱神社があり、夜に神楽が無人で鳴り響いたことにより、その名になったとする。

天文年間には山名右京亮氏兼、小次郎氏直が在城していたが、尼子修理太夫が派遣した原田播磨守によって落城した。その後尼子氏に代わり毛利方の大蔵甚兵衛尉・千場三郎左衛門が入る。天正７（1579）年に荒神山城を守る宇喜多方の花房職秀との間で交戦状態になり、後に落城する。『美作緒家感状記』には、花房氏から攻略にあたった配下の苔口氏などに宛てて、功績をたたえた感状が送られたとしている。（文献 133）　（小林）



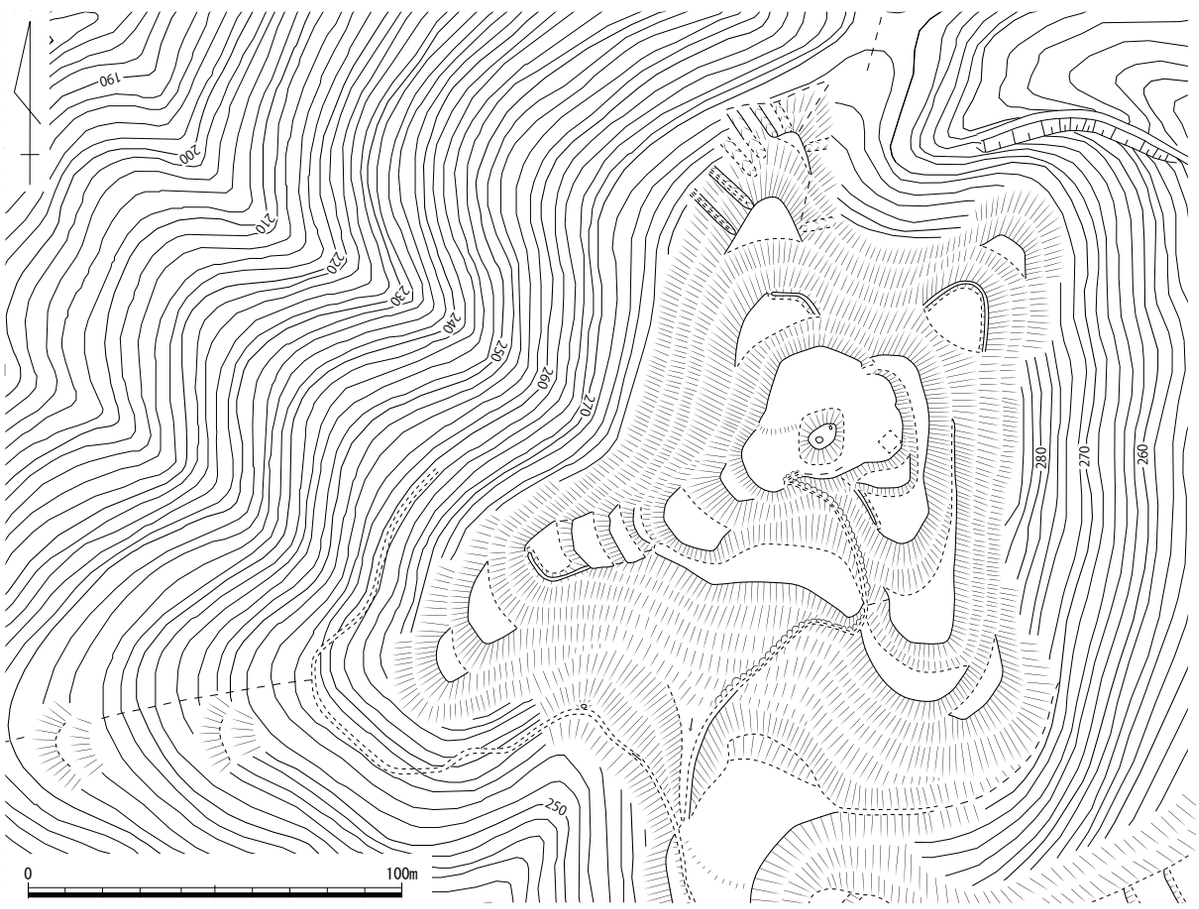
第 147 図　神楽尾城跡縄張り図（1/3,000）

写真 71　遠景（南から）

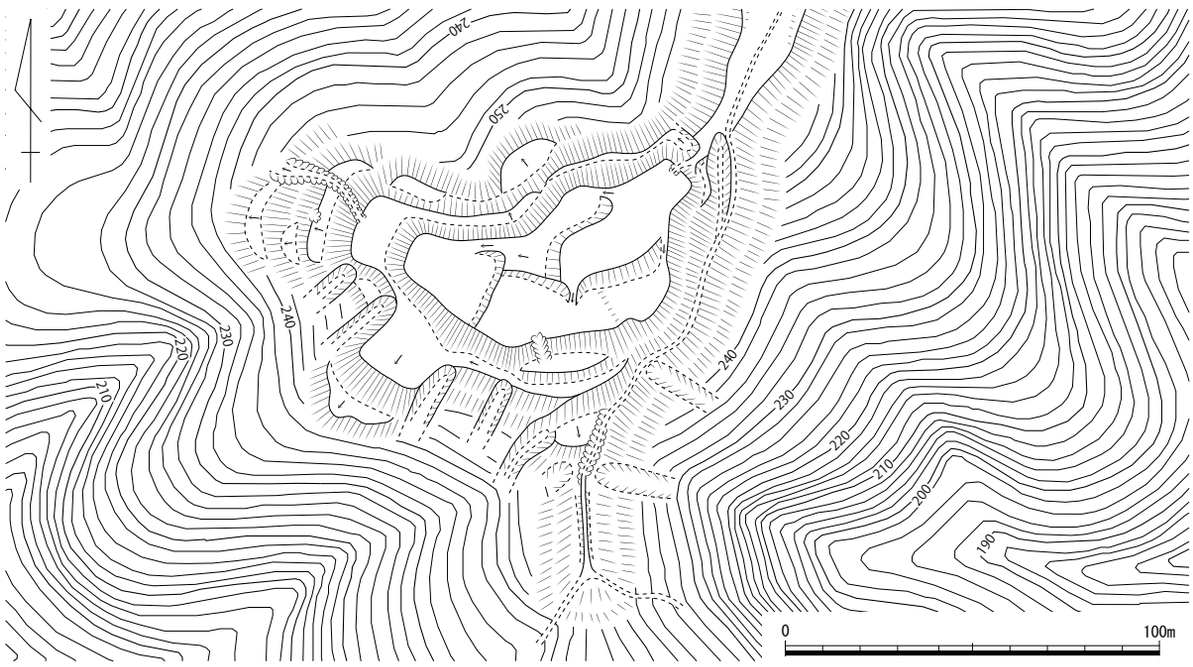
写真 72　主郭（西から）

写真 73　曲輪Ⅱ（南から）

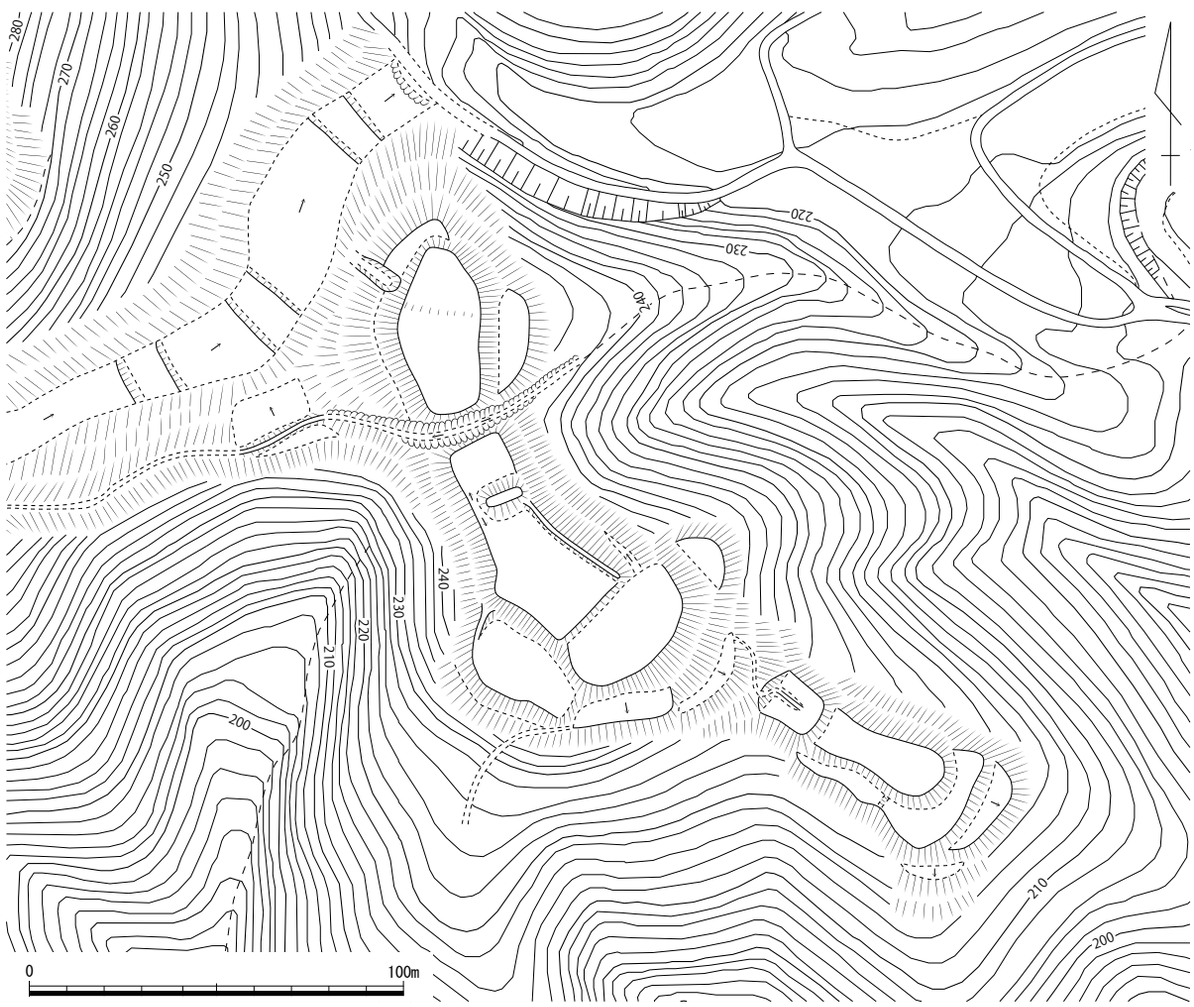
写真 74　曲輪Ⅲ（北から）



第 148 図　神楽尾城跡曲輪群Ⅰ縄張り図（1/2,000）



第 149 図　神楽尾城跡曲輪群Ⅱ縄張り図（1/2,000）



第 150 図　神楽尾城跡曲輪群Ⅲ縄張り図（1/2,000）

152　津山城跡（つやま）　　津山市山下　　＜国指定史跡＞　　地図 21 左

立地　津山盆地のほぼ中央を東西に流れる吉井川と南北に流れる宮川の合流点を南東に見下ろす丘陵「鶴山（つやま）」に立地する。東の宮川と山頂との比高は約 50 mである。

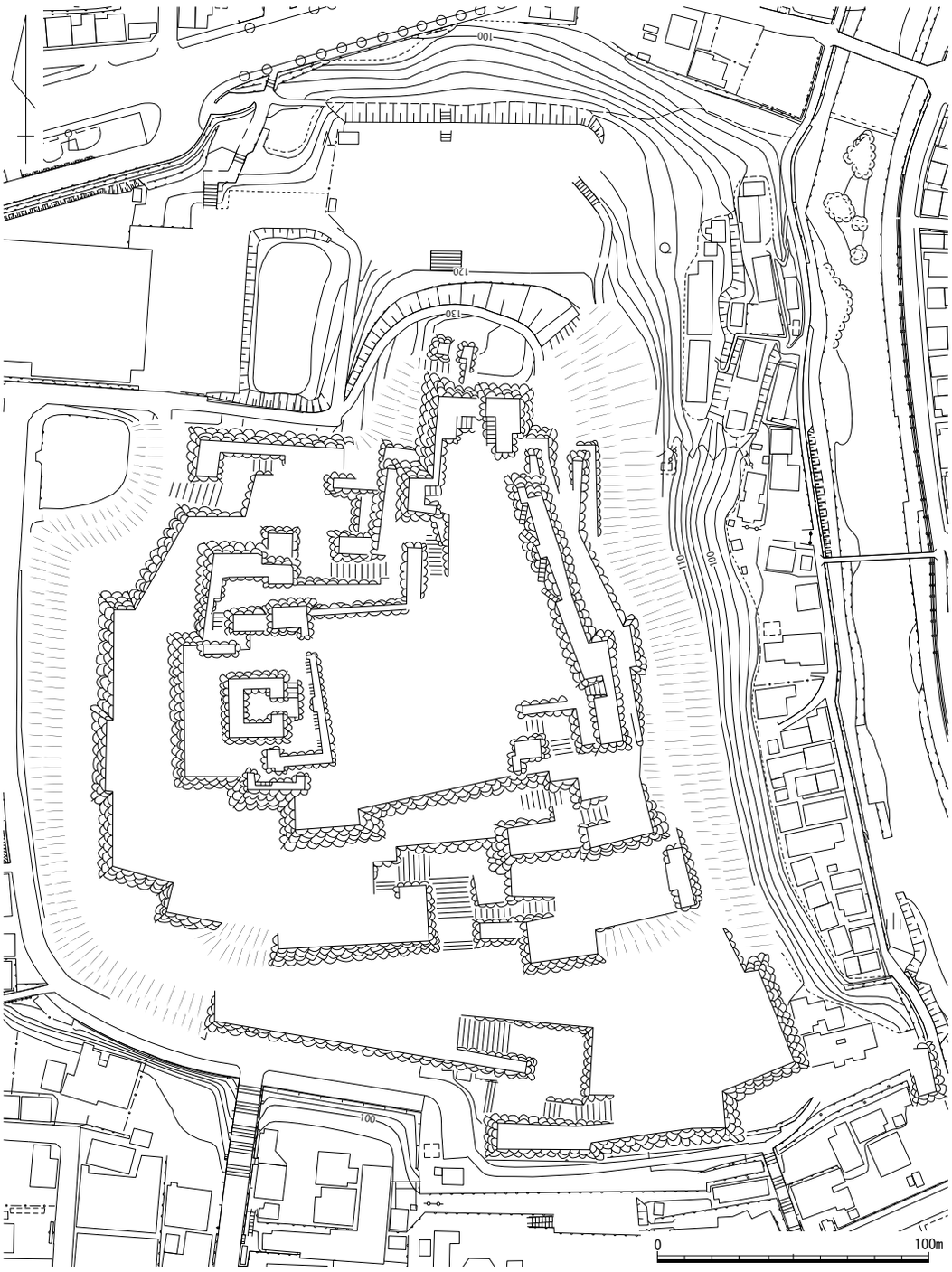
概要　現存する石垣等は、慶長 8 年（1603）に美作国一円 18 万石余りを拝領した森忠政が築城した近世城郭である。これ以前には、南北朝の頃、山名氏が築いた山城があったとされる。鶴山の北西側に残る「薬研堀」と「厩堀」は山名氏の遺構と言われているが、詳細は不明である。

鶴山最高所の本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸を高低差約 13 mの階段状に配し、それらを繋ぐ虎口は、敵が容易に侵入できないように複雑に折り曲げられている。天守は本丸の東に寄せ、御殿を挟んで、本丸西端には高い石塁を設けている。宮川に繋げて鶴山を取り囲むように造った堀内部は南北約 580 m、東西約 540 mある。平均幅 24 mの堀の内側に沿って土塁を造っている。

城下町は、吉井川の北岸を走る出雲往来に沿って東西に長く、約 2.5㎞に渡って形作られている。武家地は内山下と呼ばれる堀の内側や北側の高台に配置された。

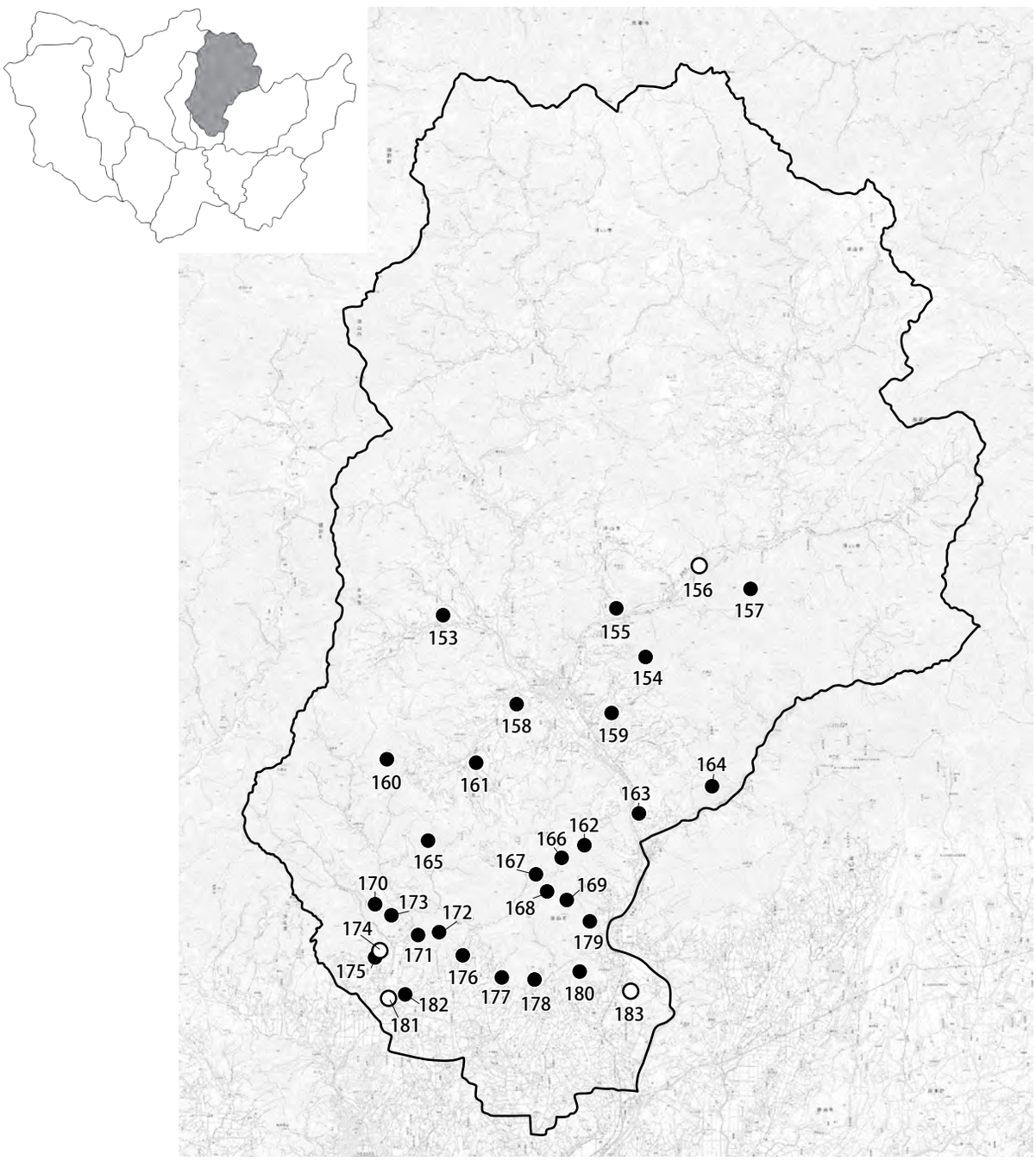
文献・伝承　『美作国の山城』によると、『武家聞伝記』は、建武（1334 ～ 1338）の頃、鶴山（小篠山）の城主に山名伊豆守時氏の末流山名美作守忠政があり、忠政死後、城山に鶴山八幡宮が勧進され、津山城の堀二つは山名氏が掘らせたもの、『苫田郡誌』は、嘉吉元年（1441）に伯耆山名氏の一族山名判官忠政が築城したもので、今も残る薬研堀は当時の遺構と記すとする。築城年代については文献によって違いがある。　（物部）

第 151 図　津山城跡と城下町（1/25,000）
城下町復元図『津山の街並』津山市教育委員会 1983 と文献を合成・加筆



第 152 図　津山城跡主要部分縄張り図（1/2,500）

第５節　東北条郡



153. 殿ノ山城跡
154. 祖星ヶ山砦跡
155. 室尾城跡
156. 内構跡
157. 矢筈城跡
158. 百々城跡
159. 佐良山城跡
160. 仙の城跡
161. 行重城跡
162. 梶間山城跡
163. 松ヶ屸城跡
164. 笠松城跡
165. 利元城跡
166. 吉見仙砦跡
167. 天狗寺城跡
168. 烏ヶ仙城跡
169. 塩屋ヶ城跡
170. 天神山城跡
171. 福田城跡
172. 懸縄山城跡
173. うらば城跡
174. 上横野谷口遺跡
175. 横田城跡
176. 藤田山城跡
177. 台山城跡
178. 別所城跡
179. 医王山城跡
180. 鉢伏城跡
181. 小丸山城跡
182. 池上城跡
183. 中陣跡

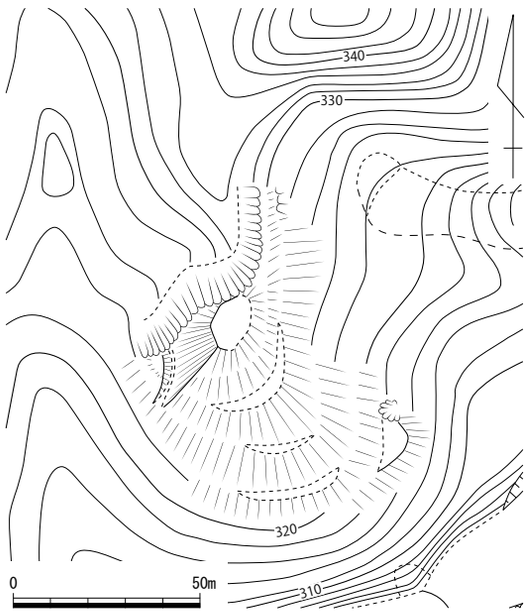
第 153 図　東北条郡城館位置図

153　殿ノ山城跡（とののやま）　　津山市加茂町宇野　　地図８左

立地　原口川北岸の低丘陵端部の南東端部にある高所に立地する。山裾の集落との比高は約 30 ｍで、南東に原口川流域の平地を見渡せる。

概要　高所は平坦に造成され、その南の緩斜面には明瞭な切岸を持たない４段の細長い平坦地が巡っている。西斜面の僅かな張り出しに、比高約５ｍの堀切状の加工が確認できるが、北西側に開墾に伴う大きな削平があり、詳細不明である。今回踏査できた他の高所は、人工的な加工は認められず自然地形のままであり、谷部には部分的に、農地造成など後世の大きな地形改変も認められるため、城としての全体像はよくわからない。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『東作誌』は東北条郡宇野村の「殿ノ山」とし、上がり約１町で頂上に高さ約八間の所があり、昔の高貴な人の居所というと記すとし、周囲に「屋舗」「古屋敷」などの小字が残るとする。　（物部）



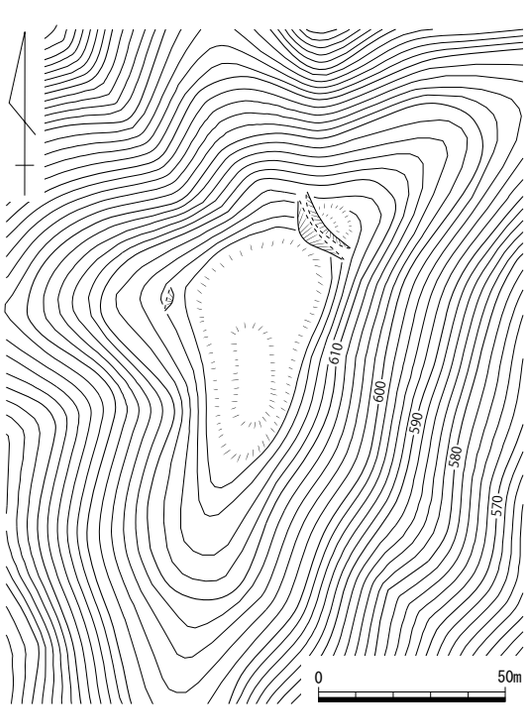
第 154 図　殿ノ山城跡縄張り図（1/2,000）

154　祖星ヶ山砦跡（そぼしがせん）　　津山市加茂町公郷・加茂町小渕　　地図８右

立地　加茂川東岸の大釈山山塊の西端部位置する山頂に立地する。谷を挟んで北東約３㎞に矢筈城跡が位置し、南東約 1.7㎞の山裾に佐良山城跡が位置する。東へ稜線を伝っていくと谷を回り込んで矢筈城へ到達する。標高は約 620 m、南山裾からの比高は約 310 mを測る。

概要　頂部から３方へ延びる尾根のうち、東の尾根に堀切を設けている。幅約７ｍ、深さ１～ 3.5 mを測る。西方尾根には極小さな切岸が見られる。頂部は平坦でなだらかな自然地形であり、加工は見られない。東西に長く延びる稜線には幾つかの高所や鞍部が連続するが、城館関連遺構は未確認である。頂部へ繋がる尾根を１か所堀切によって遮断しただけの城である。堀切はしっかりしたものである。

文献・伝承　現在の所、不明。　（物部）



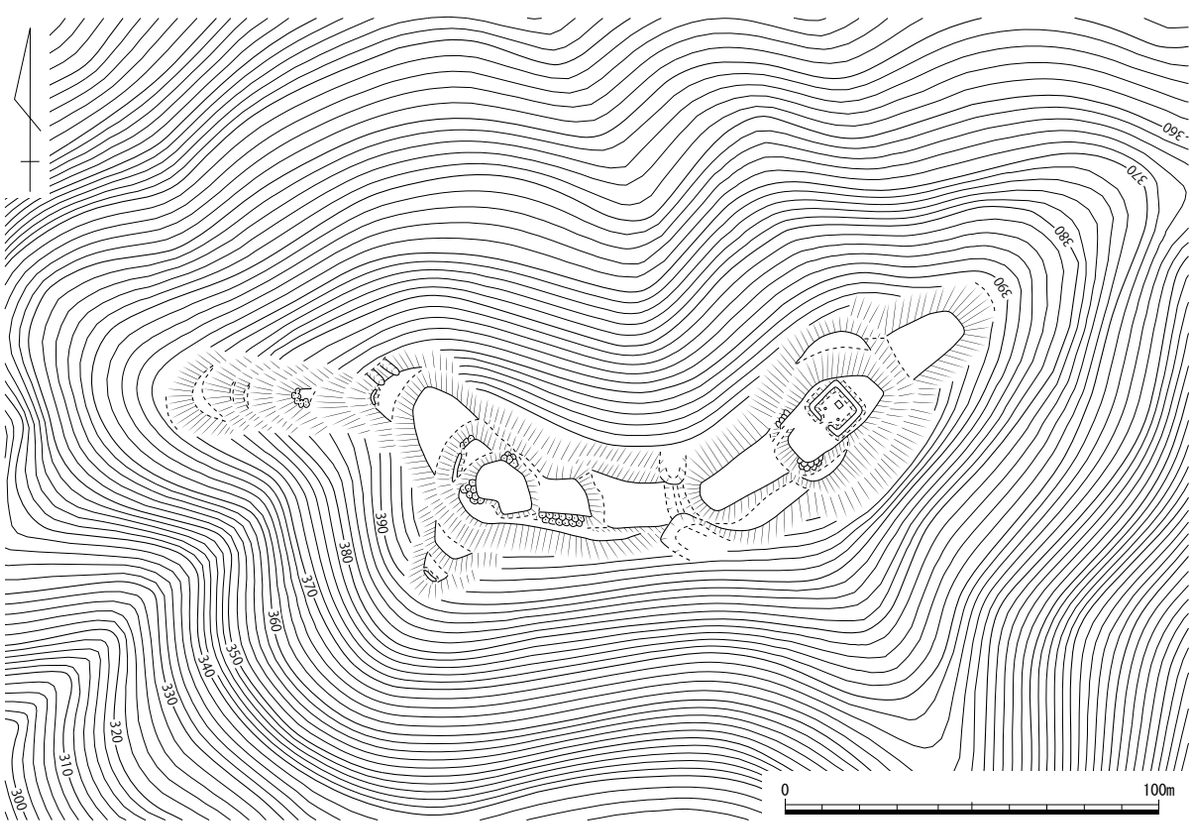
第 155 図　祖星ヶ山砦跡縄張り図（1/2,000）

155　室尾（むろお）城跡　　津山市加茂町青柳・加茂町小渕　　地図８右

立地　東西に流れる加茂川と南北流れる青柳川の合流地点の北東側に位置する。標高約 590 m級の白金山から南へ派生した尾根筋頂部にあたる。

概要　全長約 220 mの山城で、範囲内に２つの頂部が存在し、その接点を浅い堀切で画する構造である。そのうち東側は、長さ約 30 m、幅約 15 mの主郭があり、その中央部に約 10 mの正方形に近い土塁で囲った施設がある。現在その内側には、祠が建っている。主郭の尾根筋方向両側には、長さ約 20 mの比較的大きな曲輪がそれぞれ連なる。主郭の南西方向側には虎口があり、その脇には石積状の施設が存在する。またこれら主郭や曲輪の両脇にも腰曲輪が築かれ、重厚な造りとなっている。西側の頂部は、約 10 mの範囲でやや小さい。この曲輪から３方向に派生する尾根筋に曲輪を連ねている。東側の尾根筋には、約 10 ～ 20 mの曲輪を２面連ね、東側主郭との境である堀切へと続く。南西側の尾根筋には、長さ約５mの小さい曲輪を２面連ねる。北西側の尾根筋には、３面の曲輪を連ねる。特に２面目の曲輪は長さ約 20 mあり、比較的大きい。３面目の曲輪の北西側には竪堀が２本あり、西側方向の尾根筋にはさらに小さい曲輪が数面続く。これら西側の曲輪群は、端部に土塁が築かれた箇所が多く、また露岩が切岸の役割を果たす箇所が多数見られる。

文献・伝承　『古城之覚』には「室尾之城」とあり、城主は天正年間には川端左近とする。『閥閲録』では天正 11（1583）年に宇喜多方が矢筈城攻略のため「石米・佐良山両城」に兵を置いたとあるが、当城は周辺の地名から、そのうちの「石米城」に比定されている。　（小林）



第 156 図　室尾城跡縄張り図（1/2,000）

157　矢筈（やはず）城跡　　津山市加茂町山下・加茂町知和　＜県指定史跡＞　　地図８右

立地　加茂川の南東岸に位置する矢筈山山頂および尾根筋に立地する。加茂川から物見川の谷筋を西へたどると県境の物見峠に達し、鳥取県智頭町から鳥取市へ通じ、矢筈城は因幡国と美作国を繋ぐ交通の要衝に位置するといえる。

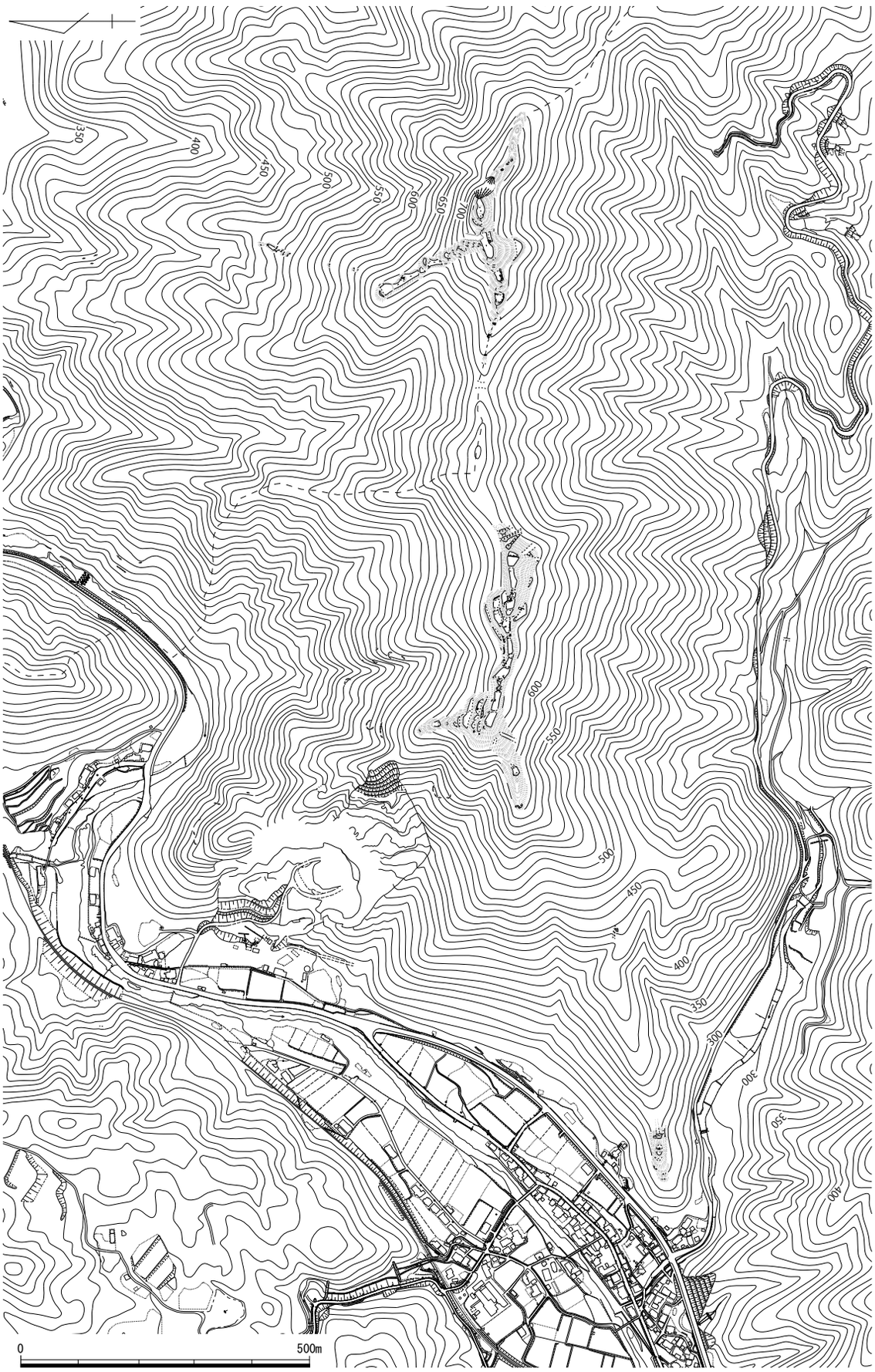
概要　主要遺構は、矢筈山山頂部（標高 750 m）周辺と、西に尾根を下った高所（標高 660 m）周辺の２か所に分かれ、両者は距離で約 600 m離れている。

山頂部には、東西の尾根筋に曲輪が４つ並ぶ。それぞれ 20 m前後の比高差をもって階段状に配され、東端の曲輪（主郭）が「大筈」と呼ばれる最高所に立地する。主郭の東側に、深さ 15 m以上の断崖絶壁をはさみ、「小筈」と呼ばれる高所がある。小筈の東側尾根筋にも、小さな高所と絶壁が連続し、天然の堀切となっている。主郭の西下の曲輪には、曲輪上面を抉って、竪堀状の巨大な溝が北へ落ちているが、おそらく雨水による自然の崩落と思われる。その下の曲輪には岩脈を削り残した石塁が南縁にあり、その下、西端の曲輪は西～南縁に土塁を設けている。主郭西下の曲輪からは尾根が南北両側に派生する。小さく張り出す南の尾根には曲輪が１か所確認された。長く延びる北の尾根は、曲輪から下へ比高約 50 mは急傾斜で、小さな平坦面を約７か所程度設け、傾斜が小さくなった尾根筋に細長い曲輪を連ねている。北端の曲輪の北縁に高さ約 1.5 mの土塁を配する。

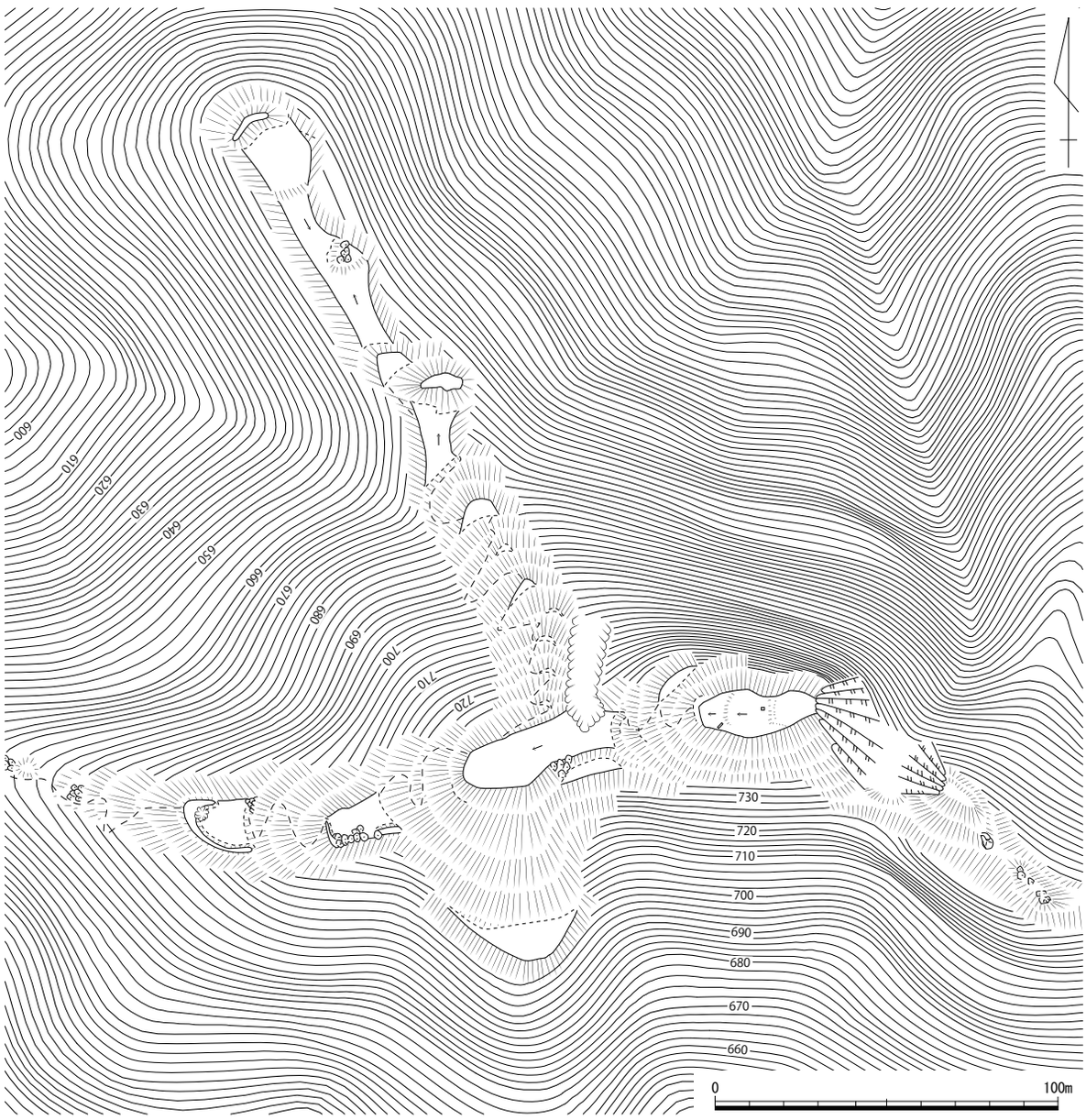
西の尾根高所には、主に尾根筋と北斜面に曲輪が設けられている。尾根筋には約 300 mにわたって大小 14 面の曲輪を連ねる。堀切は東端最高所の曲輪の東に接して３条設けられ、それぞれ竪堀となって南斜面に下りていく。西寄りの曲輪と曲輪の間にも堀切１条が配され、その東に接して櫓台状の小さな高台がある。その東側法面に炭窯がある。西端の曲輪の西縁に低い土塁が残る。曲輪と曲輪の間の切岸部分に石垣が残存するか所が２か所あり、大方崩れ石材が散乱しているが、復元すると高さ 1.5 mほどの石垣となる。また、南北斜面側に石垣を設けている曲輪が１か所ある。石垣は土留めの役割が大きい印象を受ける。

北斜面の曲輪群は西と東に分かれて配されている。東側の曲輪群は３段に分かれ、上段の曲輪は南斜面を削り込んで約 15 × 10 mの広さを確保している。削り込んだ斜面部分には、尾根筋に突出していた露岩の側面を露出させ、その岩壁から続く西壁は高さ 1.5 mほどの石垣を築き補強する。また､石垣を西へ直角に曲げて曲輪への入口としている。中段の曲輪は広さ約 50 × 10 mと東西に長く、中程に約 50㎝と約 1.5 mの段差があり、後者には石垣を築いていたと推定できる。また東端部には高さ最大で２mの土塁が設けられ、西半部には石材が多く散乱している。下段の曲輪は幅が狭く、犬走り状に東西に長い。西側の曲輪群は、北に派生する尾根筋に配された階段状の曲輪群と連続させて主に３段に分かれる。上段は尾根筋の曲輪から犬走りが東に伸びる。中段は約１mの段差をもって３つの曲輪が並んでいる。東端の曲輪は約 25 × 7 mの広さがあり、建物の敷地を囲むとみられる石列が残り、その西に接して約２× ２mの方形基壇の痕跡が認められる。下段は広さ 50 × 5 ～ 10 mの曲輪で、中程にある 50㎝程の段差から下方の尾根筋の曲輪へ続く道が伸びる。尾根筋の曲輪はさらに北下方へ続く。

この他に、北斜面に立地する西東曲輪群の間に、近年、石垣が見つかっている。尾根筋の曲輪から約５m下がった急斜面に、所々崩れているが東西約 50 mにわたって伸び、野面積みで、残存高は、

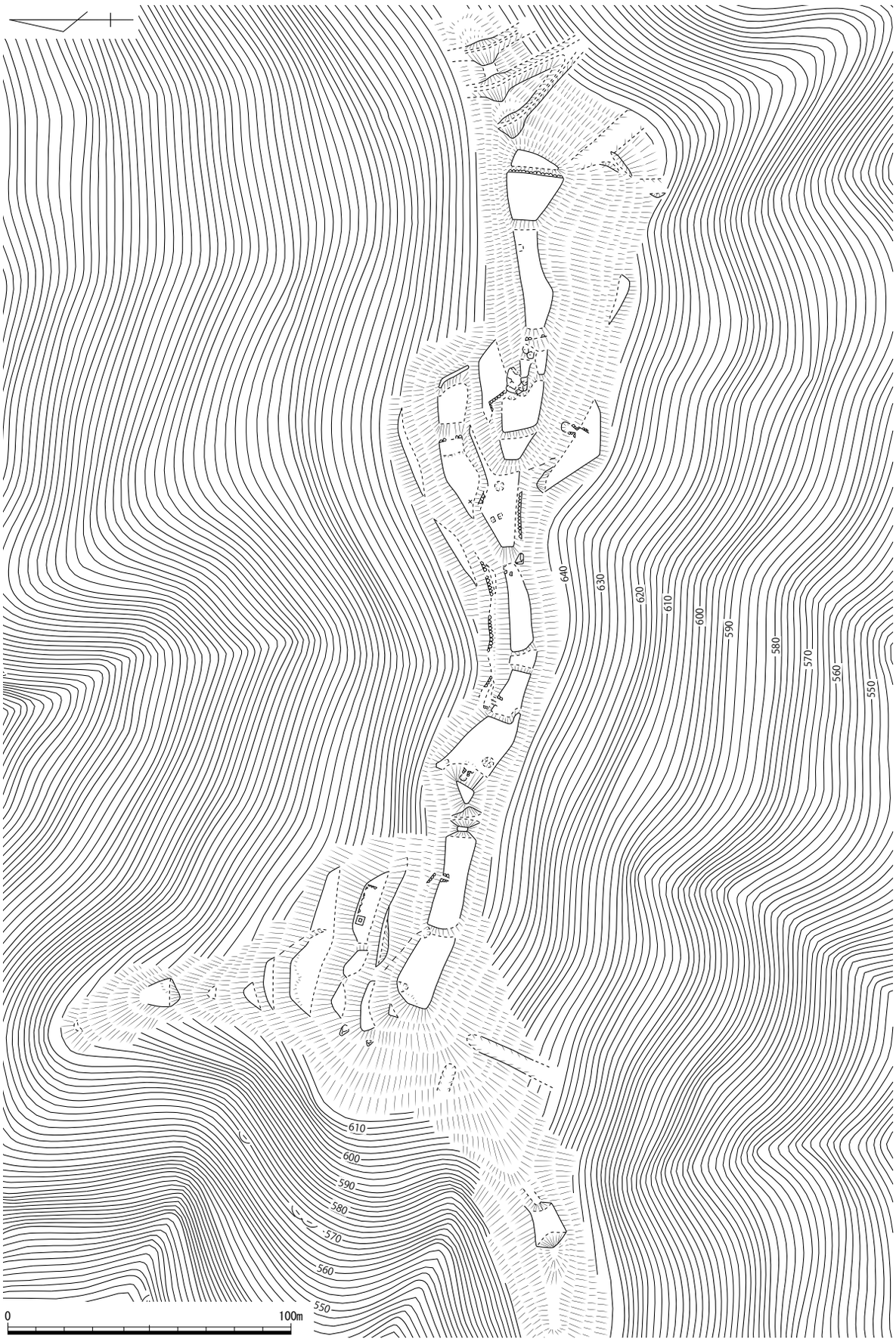


第 157 図　矢筈城跡　全体図（1/10,000）

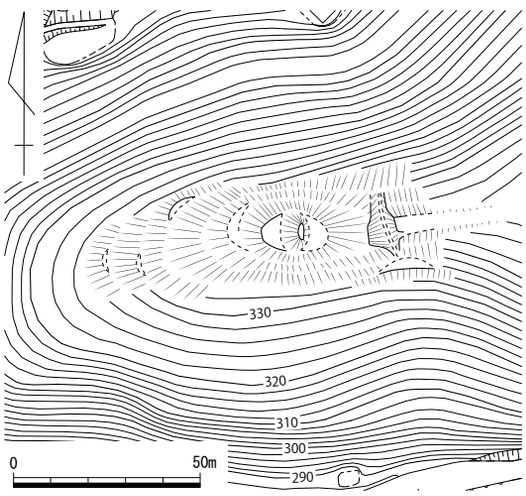


第 158 図　矢筈城跡縄張り図　山頂部（1/2,000）

高いところで約 1.5 mを測る。石垣の西端部は尾根上の曲輪の北縁に設けた虎口に連結すると考えられる。虎口は幅約２mで、曲輪の平坦地の端を掘削し斜路を造るもので、斜路を下りたところに小さな平坦地があり、石垣はこの平坦地の北縁を補強するように築かれ、東方へ延びている。石垣の東端は、北斜面の東側曲輪群の中段と下段の間あたりまで伸び不明瞭となることから、この石垣は、尾根上の曲輪と斜面中段の曲輪とを繋ぐ通路と考えられる。尾根上の曲輪にはもう 1 か所、西方の曲輪に虎口が確認できる。幅約 1 mで、曲輪北縁部を掘削し北斜面へ下りる斜路を造り、下りたところに石垣が僅かに残存していることから、やはり、北斜面の西側曲輪群と尾根上の曲輪を繋ぐ通路と考えられる。その他、南斜面の小さな張り出し状の２つの尾根にそれぞれ 1 か所曲輪が配されている。その内の 1 つに、櫓台東斜面に見られたのと同様な炭窯がある。また、尾根筋西端の曲輪から南西に伸びる尾根筋を下った所に、尾根筋を夾むように竪堀状の溝が確認できる。さらに下ると小さな鞍部を造成しつくった曲輪が 1 か所ある。鞍部を掘削して両端に切岸や高所を残す特徴的な造り方をしている。



第 159 図　矢筈城跡縄張り図　西尾根部（1/2,000）



第 160 図　矢筈城跡縄張り図　西端部（1/2,000）

尾根筋を西に下った標高 330 mの突端部に、土塁を持つ小さな曲輪を主とし、その西側に２か所ほどの曲輪を配し、東側の尾根鞍部に深さ２～４mの堀切を設けている。堀切の東側は馬の背状の細尾根が続いているが、堀切に接する尾根上はある程度平坦に造成していると考えられる。

以上のような遺構配置状況から、城域は東西約 1750 m、南北 460 mに及ぶと推定される。山頂の遺構は尾根筋に曲輪を配しているのに対し、西尾根の遺構は北斜面にも大きな曲輪を造成している点で違いがみられ、石垣や通路、虎口など存在も含め、西尾根の遺構の方が居住性が高いと言える。井戸は現在のところ確認されていない。

文献・伝承　『作陽誌』は高山 (かうやま)、一名矢筈山とする。築城は『萩藩閥閲録』では、草苅加賀守衡継（或平継）が天文元（1532）年に、赤松一族の浦上備前守村宗・同遠江守宗景と交戦し、作州東北条郡と西北条郡を切り取り、同２（1533）年に高山城を築城し、作州へ移り住むとある。『作陽誌』では、築城を天文元年とている。『美作国の山城』は『草苅氏覚書』などに草苅衡（平）継・景継・重継三代の居城として推移したとされるとする。『作陽誌』には、永禄２（1559）年に、嫡男景継に家督を譲るまで草苅衡継は、天文５（1536）年に、英田・吉野両郡を攻略、天文９（1540）年山名・尼子の連合軍と戦い勝利、天文 10（1541）年に大庭郡多田山城を攻略するなどの記述があり、美作各地で転戦している状況がうかがえる。また、天文 11（1542）年には毛利方に属し、天文 22（1553）年、美作国に進攻の尼子晴久と交戦しこれを退けたとしている。

『萩藩閥閲録』等によると、草苅景継は、天正２（1574）年、毛利方として因幡で尼子氏と戦う一方で、織田方に通じ、このことが毛利氏の知るところとなり、天正３（1575）年、その責めを負って自刃したという。

家督を継いだ弟重継は、毛利氏への忠誠を誓い、『東作誌』よると、天正５～６（1577 ～ 1578）年にかけて織田信長・羽柴秀吉は度々、味方につくように勧めているが重継はこれを断っている。天正６（1578）年、『美作国の山城』では、『寺坂三郎右衛門家伝覚』に、山中幸盛が「高山城」に押し寄せた際、寺坂桃千代が初陣し、幸盛配下の高村氏を討ち取ったとされるとする。『作陽誌』に、天正７（1579）年には宇喜多方の新免氏が、高山城を攻めたが落ちず、天正９（1581）年、羽柴秀吉が亀井・木下等をして矢筈城を攻めたが、城峻険で落とせずとある。

天正 10（1582）年、毛利氏と秀吉の講和によって、矢筈城は秀吉 (宇喜多氏) に明け渡すことになったが、これに反発し、宇喜多氏との戦いは続き、『萩藩閥閲録』には、天正 11（1583）年、草苅重継が河端氏の居城石米城の麓や、佐良山城方面で宇喜多軍と戦って討ち取った首級と首級を獲得した武将について毛利氏に報告し、毛利輝元の確認を求めた文書が所収されている。また、天正 11 年末頃から天正 12 年にかけて、毛利氏から、退城を促す書状が見られる。

天正 12（1584）年、草苅重継は退城し、しばらくたった文禄４（1595）年、『萩藩閥閲録』によると、小早川秀俊が草苅重継に筑後国内に知行地を与えたとある。　（物部）

写真 75　遠景（北から）

写真 76　山頂の曲輪（西から）

写真 77　山頂の曲輪＜大筈＞（小筈から）

写真 78　岩盤を利用した石塁（北西から）

写真 79　西尾根の曲輪の虎口（南から）

写真 80　北斜面上段の曲輪（北西から）

写真 81　北斜面中段の曲輪（西から）

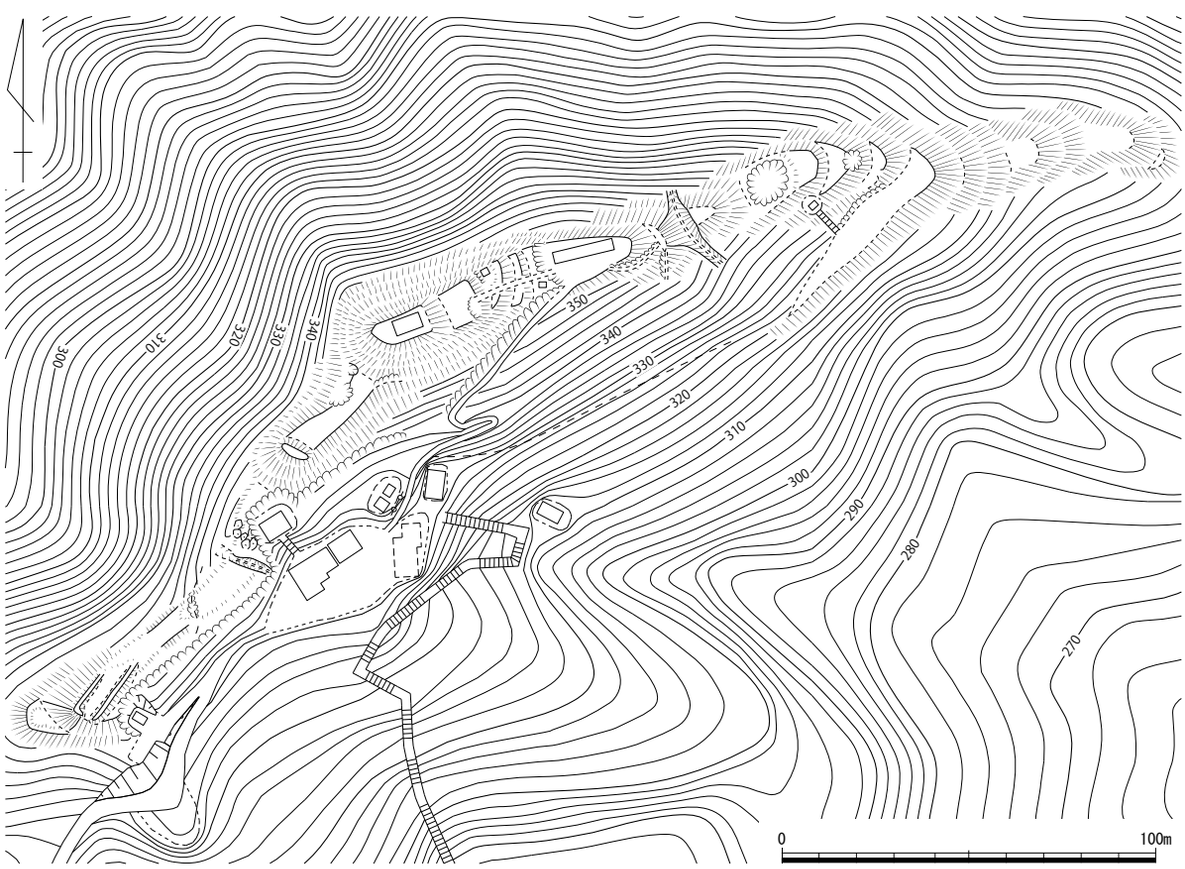
写真 82　北斜面の石垣（東から）

158　百々（どうどう）城跡　　津山市加茂町百ヶ・加茂町中原　　地図８左

立地　北に突出する独立丘陵風の山塊山頂に立地する。倉見川と欠場川の合流地点を北東に、倉見川と加茂川の合流点を西に見下ろし、周囲の平地や谷筋を良く見通せる。

概要　山頂部を中心に東西に延びる尾根稜線に曲輪を連ね、総延長は約 350 mになる。主郭と考えられる山頂の曲輪には後世の建物が設置され詳細不明である。主郭から北東へは、方形の曲輪、細かな段差のある緩斜面、展望台が造られた広い曲輪、深さ５～１mの堀切と繋がる。緩斜面部分は祠等があり旧状を留めていない可能性がある。堀切から東にも尾根筋に６面以上の曲輪が連なる。主郭から南西へは、先ず高さ約６mの切岸があり、次に南西端部に土塁を設けた細長い曲輪、自然の切岸状の露岩、その直下の小規模な堀切、堀切を越えると、自然地形に近い細長い曲輪、その先２m下に縁辺を土塁で囲った小さな曲輪が配されている。細長い曲輪の南東端部には約５mの間隔で「コ」字状に囲む土塁が設置されている。土塁の規模は幅約 2.5 m、高さ 30 ～ 50㎝である。主郭より北東側は単純に曲輪を連ねるのに対し、南西側は土塁を多用し、趣が異なる。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『古城之覚』は苫北郡百々村の「百々之（城）」として、城主は「草刈一族」とし、元禄 16（1703）年 10 月『小西孫左衛門書状』（『東作誌』所収）は、草苅景継の出城で、家臣の黒岩土佐守・草刈左近・中西四郎左衛門・真野市兵衛尉の４人が廻番を勤めたとあり、『花房家記事』は、花房職之は、「ひつめの城」の相城として、加番の兵を籠めたとあるとする。　（物部）



第 161 図　百々城跡縄張り図（1/2,000）

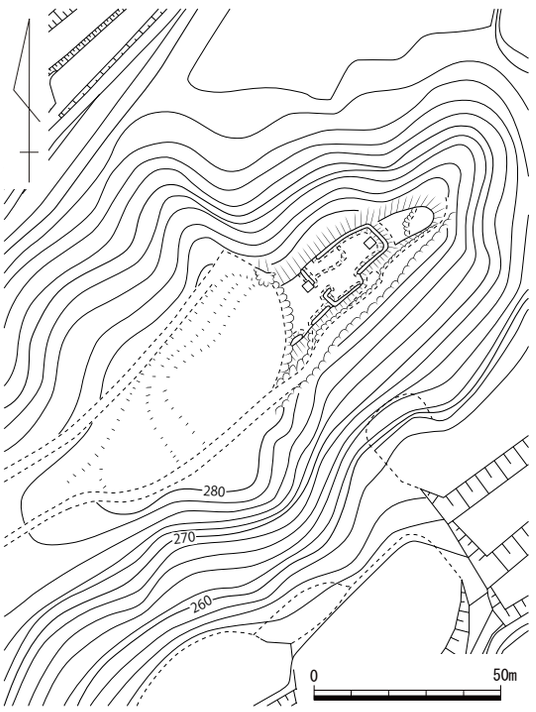
159　佐良山（さらやま）城跡　　津山市加茂町公郷　　地図８右

立地　公郷仙（標高 862 m）の西麓にあり、加茂川左岸の平野に向かって延びる細長い丘陵上に立地する。

概要　丘陵上に曲輪が直線的に並んでいたと考えられ、北端付近に主郭とみられる長方形の曲輪が残る。高さが最大で 0.6 m程度を測る土塁が巡り、南東側には喰い違いを伴う開口部が認められる。南西側にも土塁を伴う曲輪があるが、造成によってかなり損壊している。また、主郭の北東側にも平坦面が認められる。現存する曲輪群の南西側にも城域が続いていたと思われるが、後世の開墾で削平され、現状では遺構の存在は確認できない。

文献・伝承　『作陽誌』では、天正年間には川端丹後守が城主であったが、矢筈城の草刈重継との戦いに敗れて以降は草刈氏の持ち城になったとする。

（岡本）



第 162 図　佐良山城跡縄張り図（1/2,000）

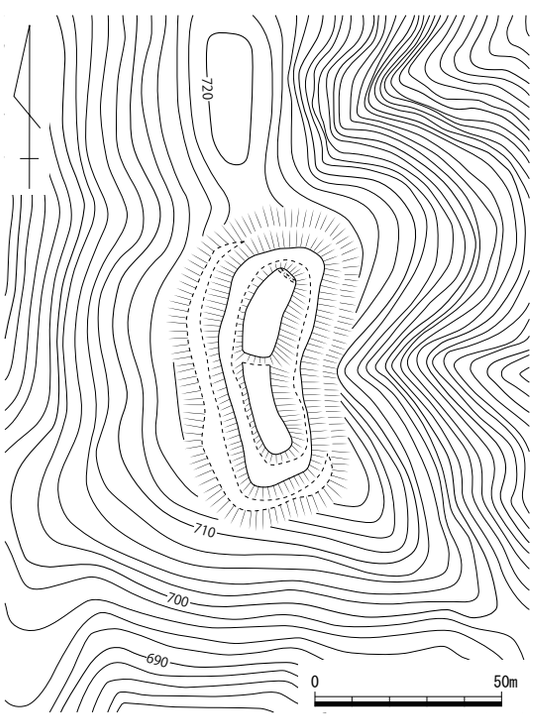
160　仙（せん）の城跡　　津山市加茂町楢井・上横野　　地図 14 左

立地　加茂町楢井地区と上横野地区との境界をなす荒坂峠から約 600 m北西に位置し、標高約 720 m の山頂部に立地する城である。

概要　南北に連なる尾根の南端付近に主郭を配置する。主郭は全長約 25 m、幅約 10 mの長方形を呈し、北端に土塁の痕跡がわずかに残る。南側には 1 mほどの段差をはさんで長方形の曲輪が隣接する。その周囲を帯曲輪状の平坦面が２段にわたって取り巻き、曲輪間の段差は２～３mである。ただし下段のものは全周せず、その輪郭も不明瞭である。主郭の北側には鞍部、さらに北側の尾根上には不明瞭な平坦面や土塁状の土手が認められたが、いずれも城の遺構とは考えにくい。

文献・伝承　『作陽誌』では城主・時代等は不詳とする。また、複数の史料に「仙」「仙々」と表記される城はこの城のことと考えられる。

（岡本）



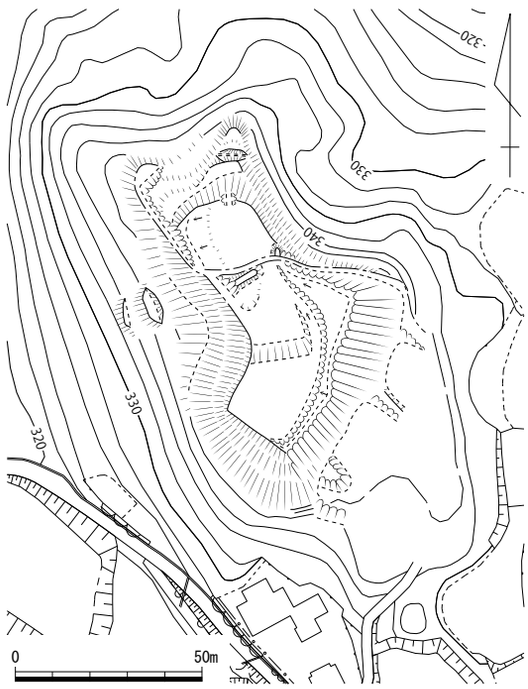
第 163 図　仙の城跡縄張り図（1/2,000）

161　行重（ゆきしげ）城跡　　津山市加茂町行重　　地図 14 左

立地　欠場川南東岸の低丘陵尾根高所に立地する。ここから南西へ荒坂峠を越えると津山市街地北部へ通じる。

概要　高所には南北に長い平坦地があり、中央やや北寄りに高さ約 1.5 m、幅約 4 mの土塁が残る。もとは東西に長く続いていた可能性がある。平坦地上面や周囲の斜面には開墾等に伴う後世の掘削が見られる。特に南東斜面は現状で 10 m前後の崖となり、大規模に削られていると考えられるが、本来は切岸であった可能性が高い。また、北に下る尾根は二叉に分かれ、その東尾根には小さいが明確な堀切がある。平坦面の南崖下には段状の平坦地が認められるが、開墾等に地形改変を受けていると考えられ、詳細不明である。

文献・伝承　『古城之覚』に見える行重村の「行重山」のことと考えられ、城主不明とされる。　（物部）



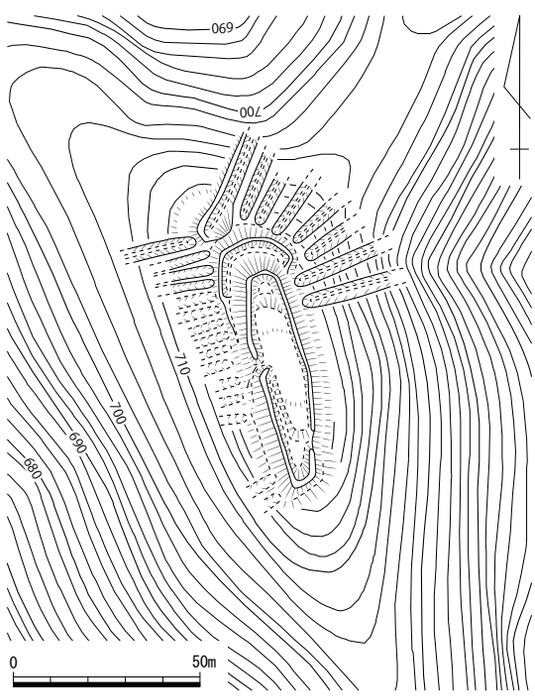
第 164 図　行重城跡縄張り図（1/2,000）

162　梶間山（かじまやま）城跡　　津山市加茂町成安・吉見　　地図 14 右

立地　天狗寺山山塊の東部、標高 720 mの梶間山山頂に立地し、東に加茂川、南方約 2 ㎞に医王山城跡を見下ろす。

概要　高所に南北 58 m、東西 13 ～ 7 mの細長い土塁囲みを造る。土塁の内側は中央が高く南北が低くなるため、土塁で囲まれた南北陵端部は深さ約 1.5 mの窪地状を呈する。土塁は西辺の中央で途切れ、虎口となる。北側土塁直下約 3 mに横堀、その北西に堀切を設け、堀切の北東側は連続して竪堀となる。北～東斜面と西斜面に畝状竪堀群を配するが、西斜面は多数の倒木により地形が変わり、竪堀の状況は不明確である。

文献・伝承　『東作誌』は東北条郡下原村の「梶間山」として、「天狗岩」と烏ヶ仙の間の平山で、下原村から約 15 町、南の畝は八代・吉見両村に、西の端は大篠村に境にあるとする。（文献 133）（物部）



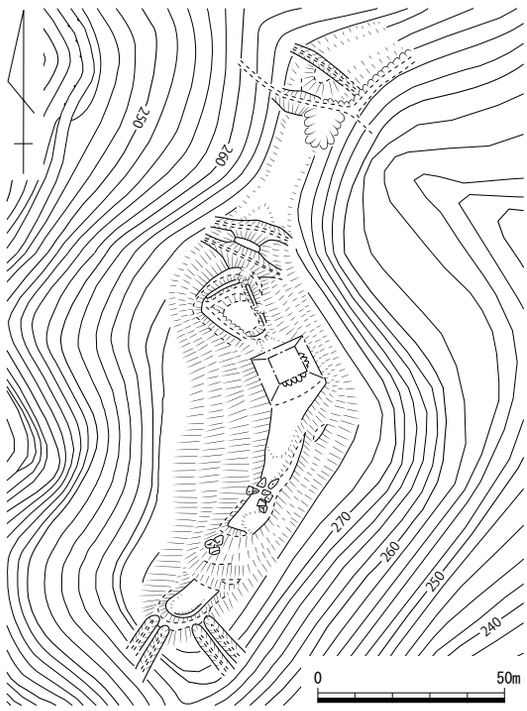
第 165 図　梶間山城跡縄張り図（1/2,000）

163　松ヶ屸城跡（まつがたわ）　　津山市加茂町下津川　　地図 14 右

立地　津川川と加茂川合流地点を南に望む、尾根高所に立地する。加茂川及び津川川流域を眺望できる。

概要　高所に鉄塔が建つため主郭周辺が詳細不明であるが、尾根筋に約 4 つの曲輪を連ねる。南端の曲輪南縁に土塁が残り、その南斜面に 2 本 1 対の竪堀が尾根筋を挟むように配されている。北の尾根に堀切 4 条があるが、鞍部を挟んだ北の 2 条は堀切は、尾根が北へ再び登っていく部分にあることから、性格が異なるのかもしれない。主郭北の曲輪には北辺と東辺に土塁が見られる。西辺は後世の削平を受けていると思われ、本来「コ」字形の土塁囲みであった可能性がある。

文献・伝承　『東作誌』は「松ヶ屸古城」として、笠松城の砦で、同地は敵を待ち受ける要所から待ヶ屸から書き改めたとする（文献 133）。　（物部）



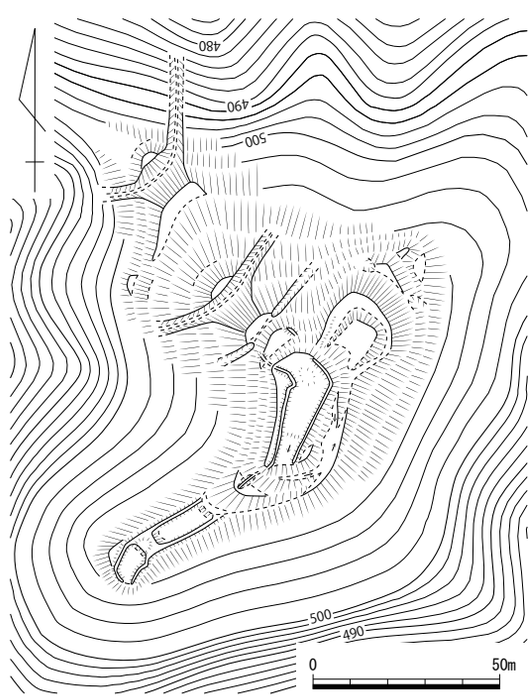
第 166 図　松ヶ屸城跡縄張り図（1/2,000）

164　笠松城跡（かさまつ）　　津山市加茂町下津川　　地図 14 右

立地　津川川と加茂川の合流地点から、津川川の谷筋を約 2 m遡った山塊端部の高所に立地する。谷筋を見通すことができる。

概要　頂部の主郭と北東と南西に延びる尾根にそれぞれ大小 2 ～ 3 の曲輪を配し、山塊につながる北西尾根鞍部に曲輪と 3 条の堀切・竪堀を設ける。土塁と呼ぶには小さな畦状の盛土が 2 つ、北西の曲輪から主郭上で屈曲し南西の曲輪へ延びている。幅約 1 m、高さ 10 ～ 20㎝、盛土の間隔は 5 ～ 10 m、段差で仕切って 4 つの長方形区画を造っている。曲輪の輪郭と土手が一致しない部分があるので、曲輪の造成と土手の設置に時期差がある可能性がある。

文献・伝承　『東作誌』は下津川村の「笠松城」として、城主は上原修理太夫高経、高経は草苅景継との争いは止む時無く、永禄 7（1564）年 7 月 16 日に討死し落城したと記す。（文献 133）　（物部）



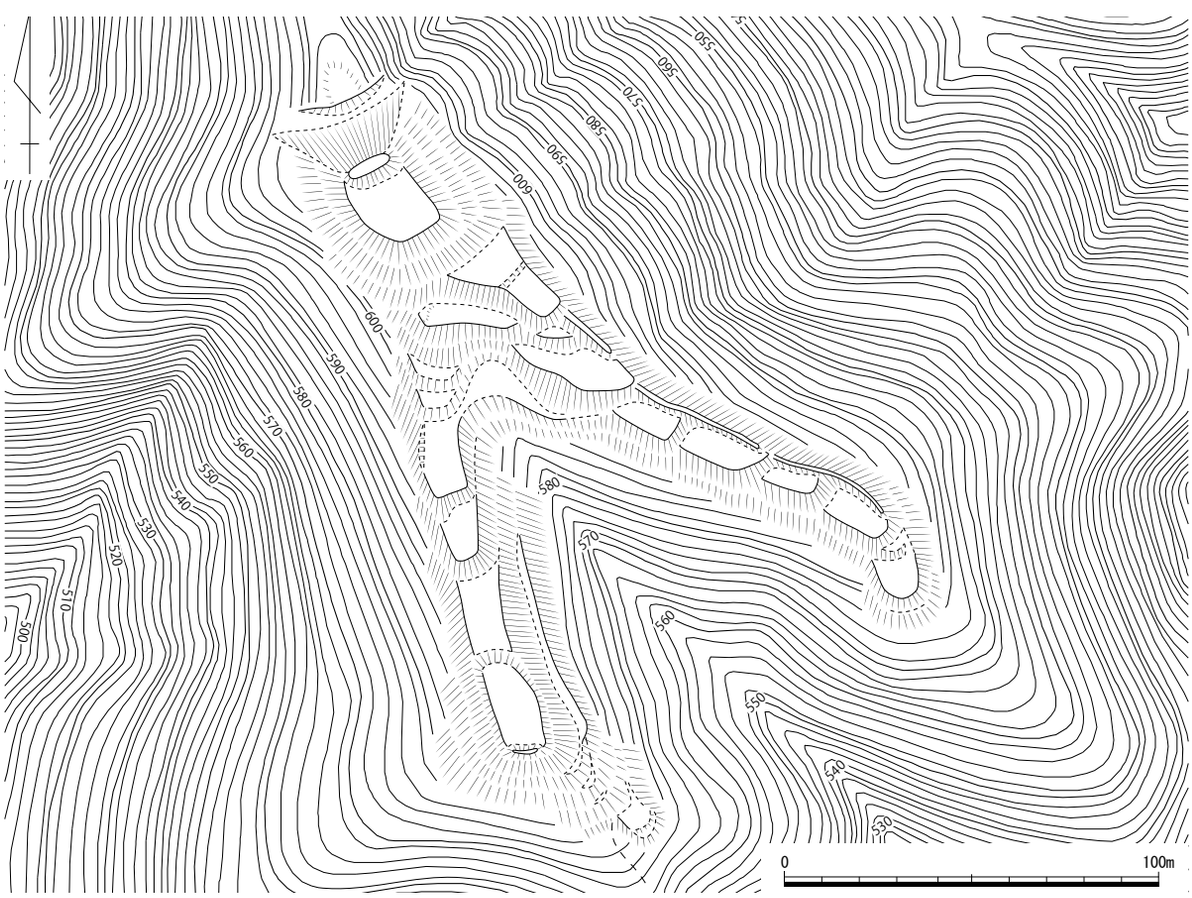
第 167 図　笠松城跡縄張り図（1/2,000）

165　利元（としもと）城跡　　津山市上横野　　地図 14 左

立地　旧加茂町との境界付近にある山塊頂部に立地し、周囲はきわめて急峻で難攻不落の城といえる。平地からはかなり奥まっており、集落や他の山城から離れた場所に単独で位置する。

概要　北から続く平坦な尾根筋の南端付近に主郭を置き、南東に派生する２本の枝尾根に曲輪を直線的に連ね、城域は全体としてＶ字形を呈する。主郭の北辺には、地山の削り残しによるとみられる高さ２ｍの土塁が構築され、背後は高さ約６ｍの堀切である。尾根分岐点付近の曲輪は形状が一定しないが、尾根筋上の曲輪はおおむね長方形を呈する。東側尾根筋の曲輪群には、東辺に約 100 ｍにわたって土塁が築かれる。この土塁は連続せず３本に分離し、いずれも地形に従って北西から南東へと低くなっている。西側尾根筋の曲輪群は、東側下方に犬走を伴い、先端の曲輪は背後から 0.5 ｍほど盛り上がり、南端に低い土塁の痕跡が残る。尾根の先端にも不明瞭な平坦面が複数確認できる。

文献・伝承　『作陽誌』では「利元城」として、福田助四郎盛昌とその子玄蕃勝昌の居城と記す。『美作国の山城』は、諸史料に基づき以下のように記す。天正８（1580）年、宇喜多直家は「高田ノ城」（利元城か）への攻撃に先立ち桝形城を攻撃したが一旦兵を引き、荒神山城に花房職之を籠め桝形城・医王山城の攻略を進めた。職之は草刈氏の出城「いわう山」（医王山城）、「ますかた」（桝形城）、「としもと」（利元城）を攻め取り「ひつめの城」（日詰城）の相城として加番の兵を籠めたという。（岡本）



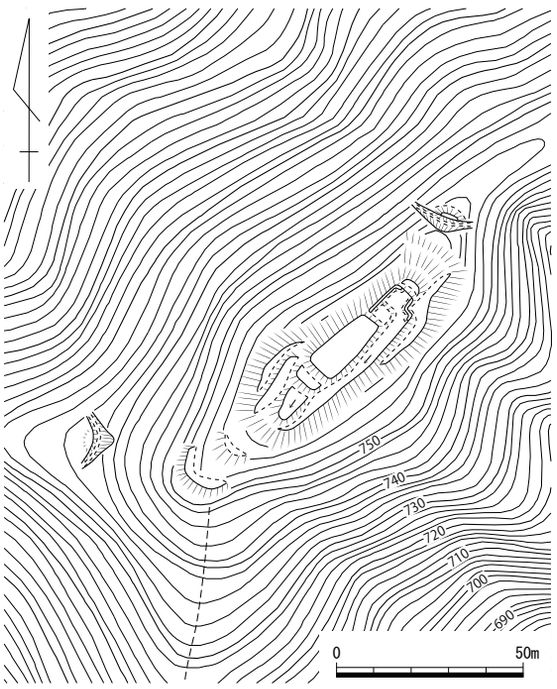
第 168 図　利元城跡縄張り図（1/2,000）

166　吉見仙砦跡（よしみせん）　津山市加茂町成安・吉見・大篠　地図 14 左

立地　天狗寺山山頂から南東約 800 mにある、標高約 770 mの山頂部に立地する。南に約 900 mの位置に烏ヶ仙城、北東へ約 600 mに梶間山城がある。

概要　最高所に全長約 20 m、幅約 10 mの長方形の主郭を置き、北東側には土塁を伴う曲輪を配置する。土塁の一部に切れ目と折れがみられる。主郭の南東側には犬走りないし帯曲輪状の平坦面が巡る。主郭の南西側尾根筋には小規模な曲輪が 4 面、その北西側には帯曲輪状の平坦面が 2 面確認できる。城域の北東端と南西端は堀切で画される。

文献・伝承　『東作誌』をはじめ近世地誌類には記載がない城である。『美作国の山城』では、本地点を梶間山にあてるが誤りと思われる。（岡本）



第 169 図　吉見仙砦跡縄張り図（1/2,000）

167　天狗寺城跡（てんぐうぎ）　津山市大篠　地図 14 左

立地　天狗寺山山頂から南約 850 mにある尾根端部に立地する。天狗寺山の南山腹に端を発する下茅川の谷筋を見下ろす。この下茅川の谷奥の下茅峠を北に越えると加茂町行重から加茂川筋へ通じる。

概要　尾根の高所は人為的な掘削や平坦地は見られるものの明瞭な城館関連遺構は確認できないが、北に下がる尾根に堀切 2 条が設けられている。南の堀切は深さ約 0.3 ～ 2 m、北の堀切は深さ約 0.6 ～ 2.5 mを測る。さらにその北の鞍部にも堀切状の掘削が見られるが、林道による削平が大きく、詳細は不明である。

文献・伝承　『美作国の山城』は、山形省吾氏は踏査により天狗寺山の南西地域に天狗寺城を見いだしたとし、『東作誌』には城郭としての記載はないが、『津山市中世城郭等配置図』は梶間山（701 m）山頂付近に「天狗寺城」と表記しているとする。（物部）

第 170 図　天狗寺城跡縄張り図（1/2,000）

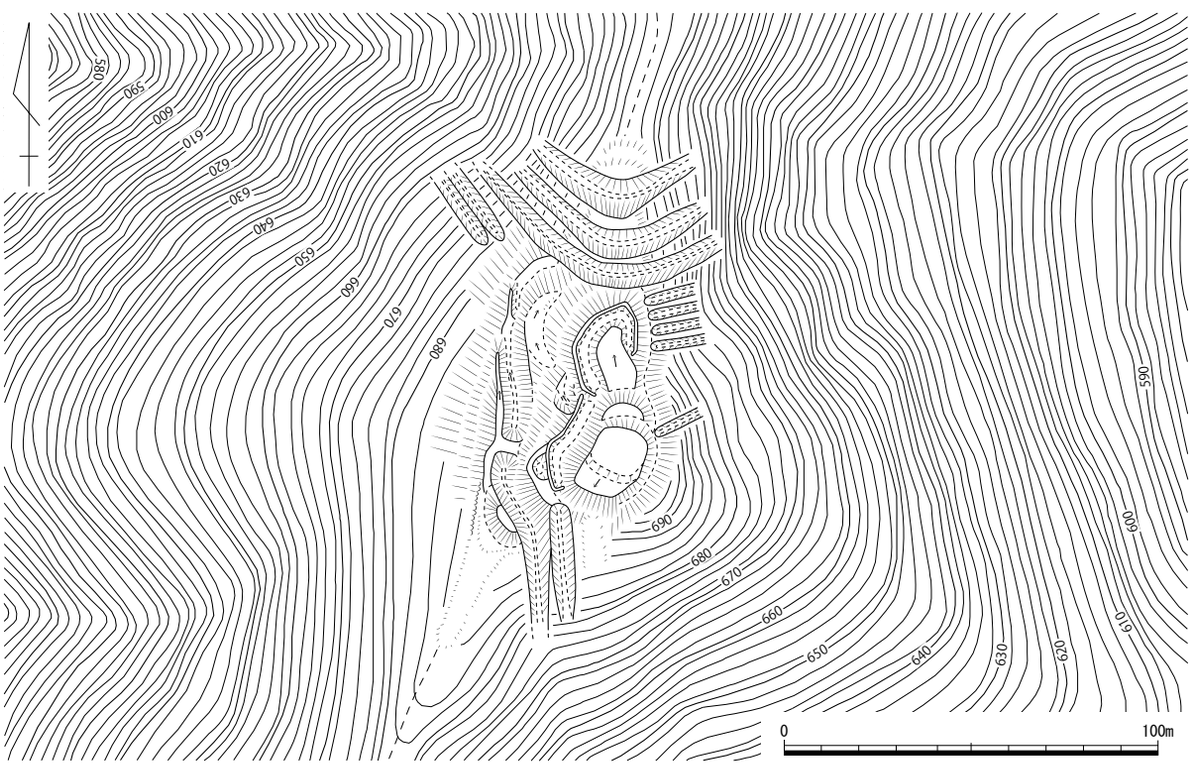
168　烏ヶ仙城跡（からすがせん）　　津山市大篠・吉見・綾部　　地図 14 左

立地　標高 831 mの天狗寺山から南に延伸する尾根筋上に立地し、津山盆地を一望できる。尾根筋を北に進むと吉見仙砦跡・梶間山城跡、東側の尾根筋を下ると塩屋ヶ城跡・医王山城跡に至る。

概要　標高 701 mの頂部に置かれた主郭は全長約 20 m、幅約 15 mのいびつな方形を呈し、土塁は確認できない。主郭の北側には曲輪が２面設けられている。城域の北は３条、南は１条の堀切で画される。北側の堀切は３条が密接し、北端のものは幅 10 m近くある。南側の堀切は、南に延伸して竪堀、北に延伸して横堀の一部となる。曲輪群の北側から西側にかけては二重の横堀が巡る。上段のものは外側に土塁を伴い、途中には等高線に直交する土塁を設け、内部を仕切っている。下段の横堀は、山側では深さ３～４ｍほどで、同じく外側に土塁を有する。上下の横堀の間は切岸となるが、一部に小規模なくぼみや平坦面が存在し何らかの機能があったとみられる。曲輪群の東側斜面では堀切の南側に接して４本の畝状竪堀群が設けられ、さらに西側・南側斜面にも、同様に堀切に接してそれぞれ２本、１本の竪堀が掘削されている。

写真 83　遠景（南から）

文献・伝承　『作陽誌』では、東北条郡大篠村の「烏ヶ山古城」として、医王山城の向城と伝わる砦の跡があり、約七、八間四方の郭と２条の堀切があると記す。（文献 133）（岡本）



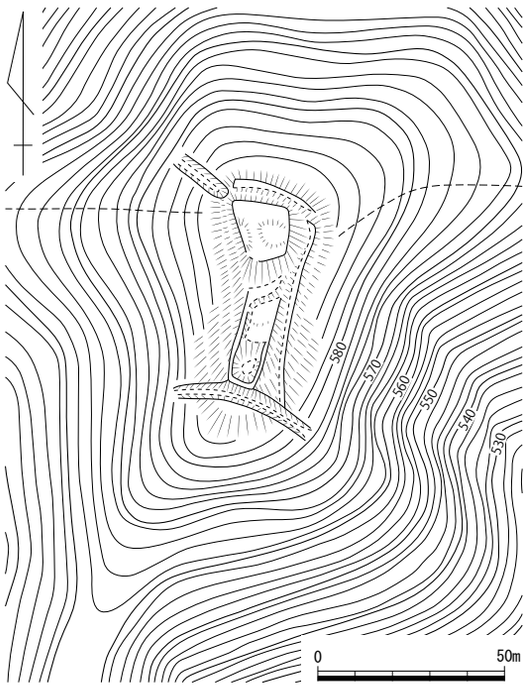
第 171 図　烏ヶ仙城跡縄張り図（1/2,000）

169　塩屋ヶ城跡（えんやが）　津山市綾部・吉見　地図 14 左

立地　烏ヶ仙山頂から南東約 450 m、標高 590 m の山頂に立地する。ここから南東約 700 mに医王山城跡が位置する。

概要　小さな主郭と、その南に「U」字状に土塁が廻る細長い曲輪、北～東斜面の犬走り、南尾根筋の堀切、北西斜面の竪堀 1 本で構成される。曲輪の周囲は高さ２～３mの切岸で、土塁のある曲輪の南端部は窪地状を呈する。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『東作誌』は東北条郡綾部村の「塩屋ヶ城」として、「洞フ谷」の上にあり、上の丸に堀切、城は東南に向き、背後は険しいと記し、『藩中諸家古文書編纂』『福原家文書』によると、天正７年（1579）11 月、塩屋豊後守元真は、毛利氏によって岩尾山城に派遣され、宇喜多勢の攻撃に対し、湯原春綱や小川元成と同城での籠城を続けているとする。（物部）



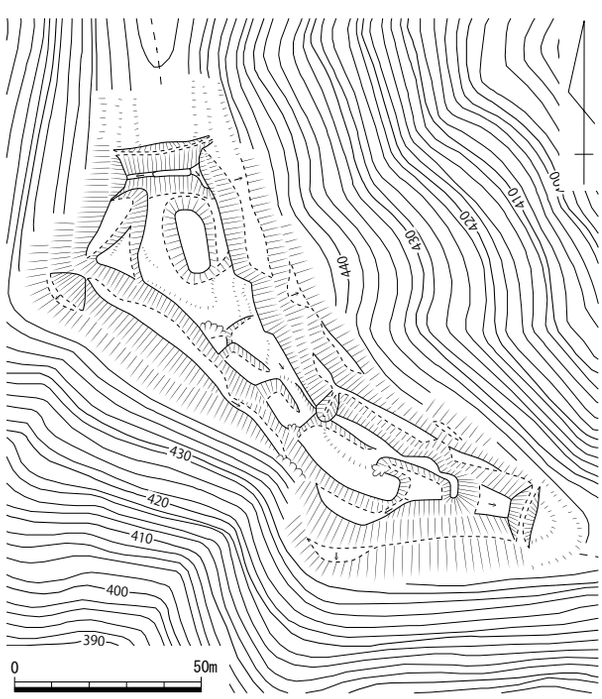
第 172 図　塩屋ヶ城跡縄張り図（１/2,000）

170　天神山城跡（てんじんやま）　津山市上横野　地図 14 左

立地　横野川と大河内川に挟まれて南東に長く延びる山塊尾根の高所が南になだらかに下り急傾斜になる地点に立地する。約 600 m 離れて、尾根先端部にうらば城跡が所在する。

概要　尾根筋を２か所で掘り切り、その間約 150 mに曲輪群を設け、その東西両縁に３m前後の切岸と、その下に犬走りを造成している。尾根幅が狭い南半部の曲輪群は、尾根筋の北東側を掘り残し通路とし、竪堀状の通路を造って斜面下の犬走りともつなげている。北端部の土塁は高さが堀底から約 3.5 m、南の曲輪から約２mあり、大規模である。

文献・伝承　『古城之覚』『作陽誌』は「天神山城」とし、城主は平家一族と伝え、上城と下城と南北に２か所郭跡ありとする。下城がうらば城に比定される。（文献 133）（物部）



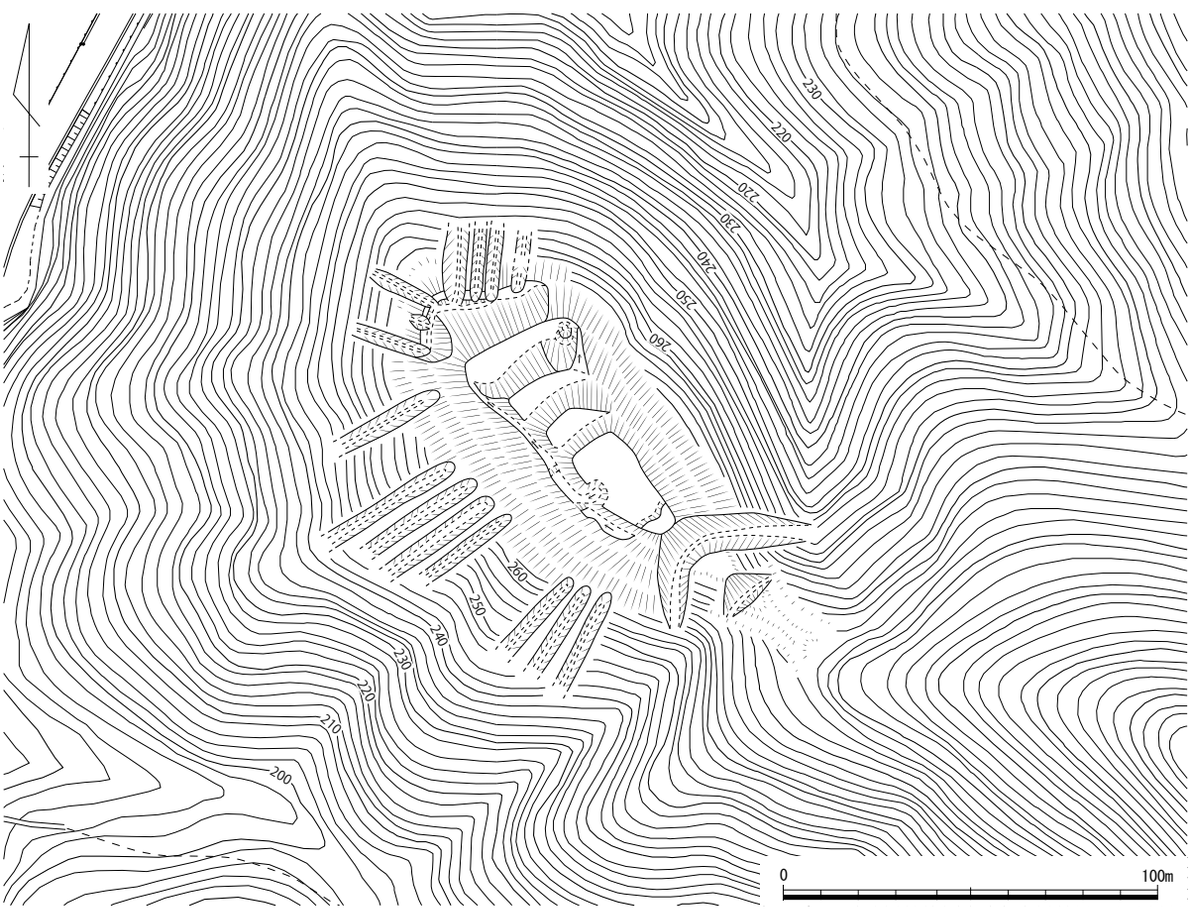
第 173 図　天神山城跡縄張り図（１/2,000）

171　福田（ふくだ）城跡　　津山市上横野　　地図 14 左

立地　南流する横野川の左岸に向かって、南東から突出した丘陵の頂部に立地し、周囲は急峻な斜面である。城の麓は、横野川沿いに形成された平野の北端にあたり、ここより上流は狭い谷筋となる。本城から約 400 m東側に懸縄山城跡、横野川対岸の山頂にはうらば城跡が所在する。

概要　尾根筋を２条の堀切で遮断して城域を形成する。最上部に主郭を配し、その下方には３～４ｍの切岸を介して３面の曲輪を連ねる。曲輪群の南西側には、主郭と最下段の曲輪とを結ぶ直線状の犬走りが付設されている。主郭の南東端は50㎝ほどの高まりとなる。虎口跡は主郭の南西辺で確認され、斜路によって犬走に連結している。最下段の曲輪の東端には径３ｍほどの円形の窪みが確認できるが、その性格は定かではない。城域の前端に相当する北西側では、郭面から約５ｍ下方に「く」の字状に屈曲する横堀があり、その肩部から尾根筋を境に東側に４本、西側に３本の畝状竪堀群が掘削される。また南西側斜面にも、北側からそれぞれ１本、４本、３本を数える竪堀群がみられる。小規模ながら、天然の急斜面に加え、多数の畝状竪堀群や堀切によって強固な防御力を有する城といえる。

文献・伝承　『古城之覚』には「勝山」として、城主を福田盛昌とする。『作陽誌』には「勝山城」として、福田盛昌の抱城で、宮田五右衛門が居城したとする。また、真嶋郡の高田城から攻撃があった際、矢合戦が行われたとの伝承を載せ、その際に落城したものか、と記す。（文献 133）　　（岡本）

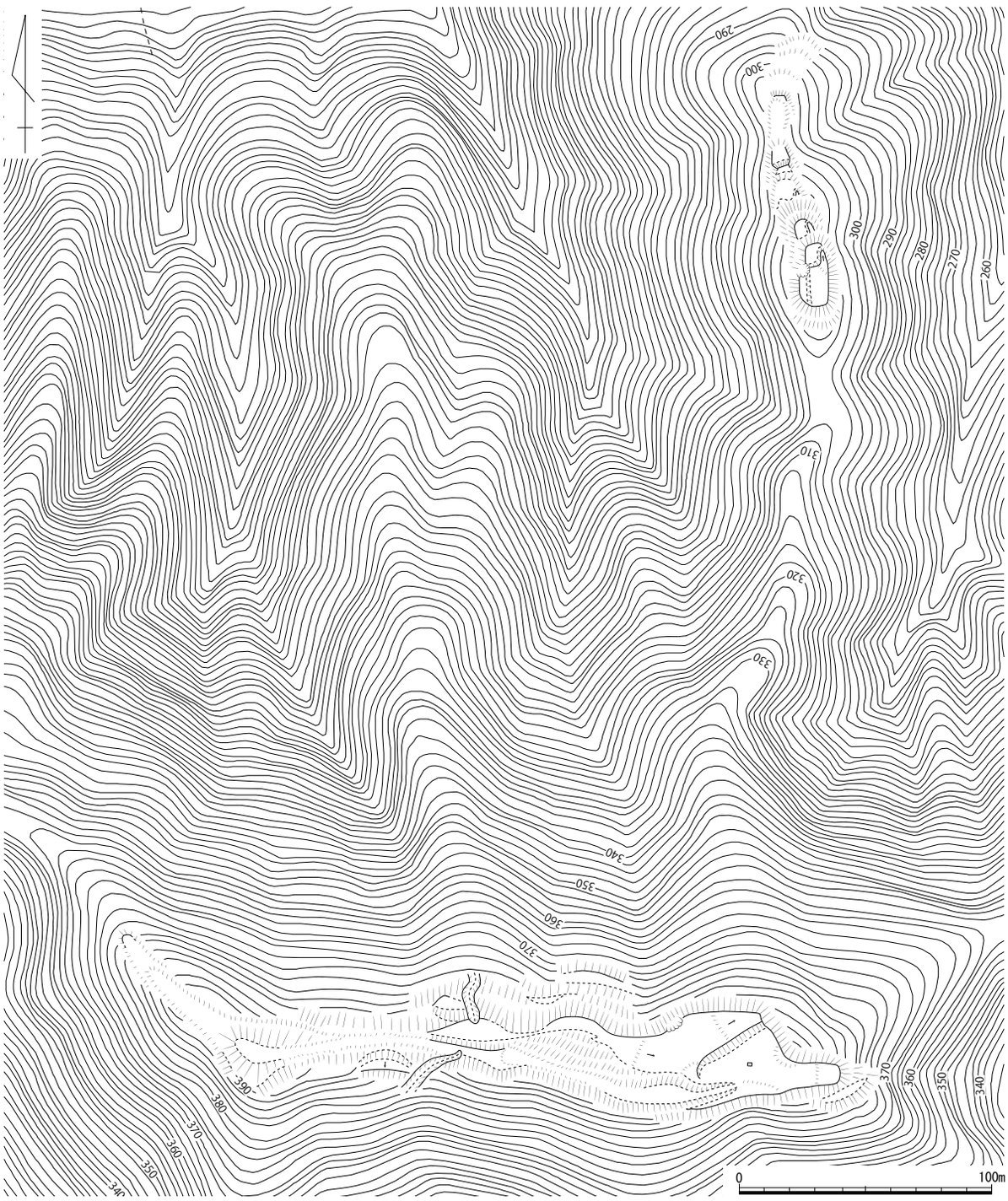


第 174 図　福田城跡縄張り図（1/2,000）

172　懸縄山城跡（かけなわやま）　　津山市上横野・下横野・大篠　　地図 14 左

立地　天狗寺山山系の南西端、横野川の左岸に位置する。北側を横野川の支流である下茅川が西流し、背後の山塊から分離した標高約 390 mの半独立丘陵の頂部周辺とその北側の尾根に立地する。頂部からは南に津山盆地を見渡すことができ、北側の利元城やうらば城も視界に収まる。

概要　東西に約 300 mにわたって細長く延びる尾根筋と、その東端から北に延びる尾根筋の 2 か所



第 175 図　懸縄山城跡縄張り図（1/2,500）

に城域を形成する。両者間には約 280 mの距離があるが、ここでは一連の城郭として扱う。

南側の城域は、西端付近が最高地点であるが、不明瞭な平坦面が認められるのみで、主郭と位置づけるのは難しい。東半部には人為的な造成面が連なるものの、形状が不規則で内部も十分に平坦化されず、曲輪としてはかなり簡素である。東端付近には、尾根筋を直線的に切り取って削平した平坦面があり、「掛縄神社遺跡」の碑が立つ。城域の中央付近からは南北に延びる溝は、規模や形状から堀切ではなく山道と考えられる。周囲の斜面に竪堀などは確認できない。以上、現地での観察による限り、遺構は概して不明瞭であるが、神社跡地周辺については曲輪を社地として再利用した可能性がある。主郭としての機能は東端部に置かれ、他の場所は最小限の造成で済ませたと考えられる。

北側の城域は、南側城域の東端付近から北へ延びる尾根筋上に、小規模な曲輪が約 80 mにわたって直線的に並ぶ。背後の尾根に堀切がなく、南側城域との連続性が強い。標高 300 m余りの最上段に、主郭に相当する長方形の曲輪を置き、その下方に 5 面程度の小規模な曲輪が連なる。上位 3 面分の曲輪は、東辺に土塁を伴っている。

文献・伝承　『作陽誌』には、東北条郡北高田庄下横野村の「懸縄山」として、天王社があり、応仁年中（1467 ～ 1469）に前原伊豆守影清が塞を構えたともいう、と記す。（文献 133）　（岡本）

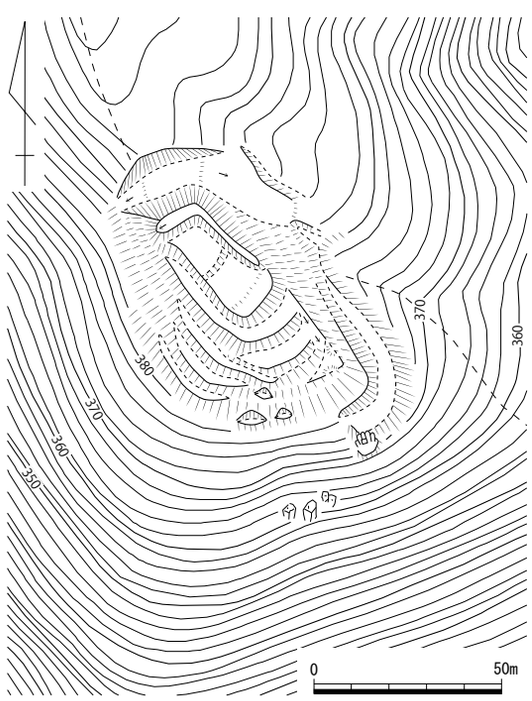
写真 84　遠景（南西から）

173　うらば城跡　　津山市上横野　　地図 14 左

立地　入道山（標高 752 m）から南東へ延びる尾根先端に立地する。南方眼下に横野川流域を眺望する。

概要　尾根筋を箱堀状の堀切で画し、その南に曲輪群を設ける。堀切と曲輪の境に配された「L」字形の土塁の高さは堀切底面から約 5 m、曲輪上面から約 2 mある。中心の曲輪の東～南～西斜面にかけて複数段の帯曲輪・犬走りが認められる。南斜面は倒木のため平坦面の繋がりが不明瞭である。南斜面下方に巨大な露岩が見られた。

文献・伝承　津山市立共和中学校郷土研究クラブによる『郷土の研究』は「うらば城」とし、『作陽誌』は上横野村「天神山城」として紹介している。城主は平家一族と伝え、上城と下城と南北に 2 か所郭跡ありとする。このうち、下城がうらば城に比定される。　（物部）



第 176 図　うらば城跡縄張り図（1 /2,000）

175　横田（よこた）城跡　　津山市上横野　　地図 14 左

立地　南北に流れる横野川の西側に位置する。舌状に張り出した河岸段丘の先端頂部に当たる。比高差こそ約 30 mと低いが、本城からは津山市横野地区が広く見渡せる絶好の位置に存在する。

概要　全長が約 70 mの小さな山城である。頂部の主郭も 1 辺 10 mほどと小さいが、四周を高さ 1 mの切岸で囲む。当城の構造は、この主郭を輪郭状に 3 面の曲輪を配する形である。特に 1 面目は、幅が約 10 mあり帯曲輪状に巡る。規模の上で、当城最大の曲輪である。その背後側端部には、高さ約 0.5 mの土塁が付随する。さらに背後は高さ約 5 mの堀切によって城域を画していたものと思われるが、現在はこの部分に道が築かれている。2 面目と 3 面目の曲輪は、腰曲輪状を呈し尾根の先端部分と側面を巡っている。幅はどちらも約 5 mと小さい。それぞれ切岸は、高さ約 2 mを測る。主郭の両側面の左右には、1 本ずつの竪堀が築かれ守りを固める。ただし今回の調査では、この部分の繁茂が激しく、必ずしも全長が把握できてはいない。

この尾根先端部分から約 100 m西側にある尾根頂部にも、平坦面が存在する。この平坦面には、南東方向に向けて 2 面の曲輪が付随している。

文献・伝承　『東作誌』では、東南向きの城で「横田城」としている。別位置を示す資料もあるが、当城こそが横田城であろう。『古城之覚』と『美作鬢鏡』では、城守を田中修理としている。この田中修理は、永禄年間ころから毛利氏に属し、「苫田田中郷の内千石」を与えられた。　　（小林）

第 177 図　横田城跡縄張り図（1 /2,000）

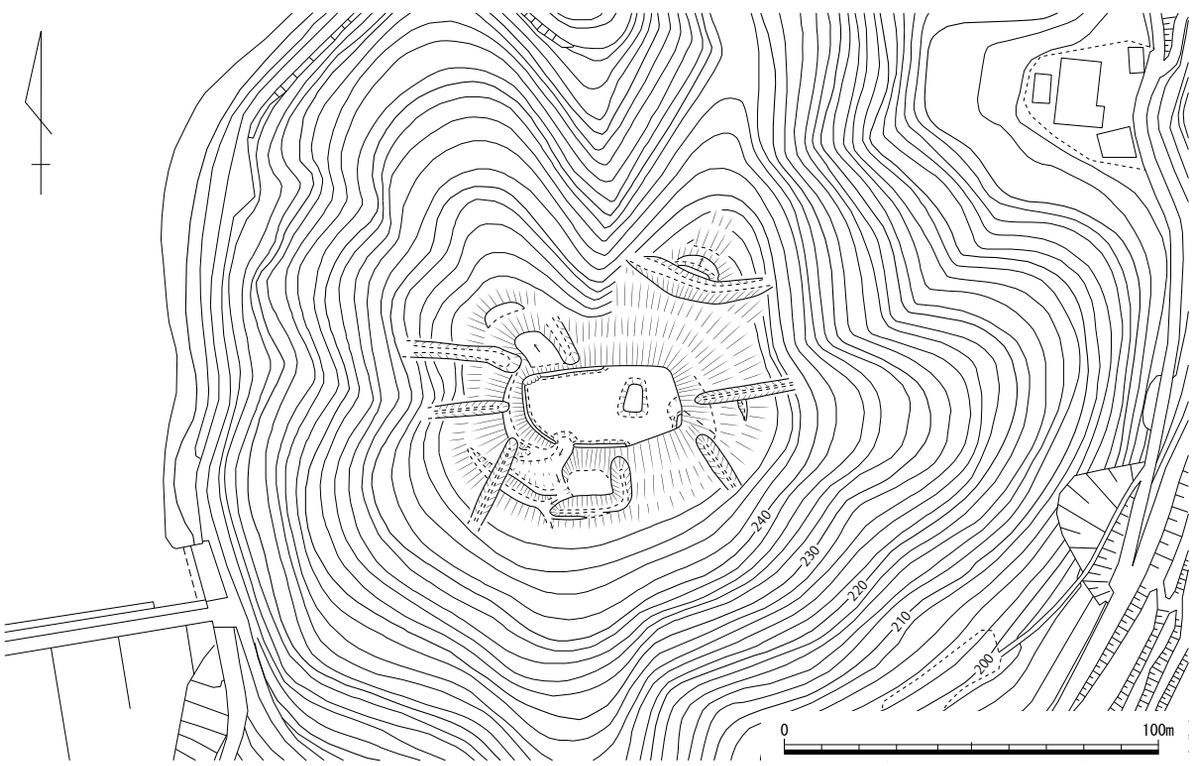
176　藤田山（とうだやま）城跡　　津山市大篠　　地図 14 左

立地　天狗寺山山塊の南端付近に位置し、標高 250 mの小丘陵上の頂部に立地する。この小丘陵は、東西を山に挟まれ、蟹子川と後川の源流にもなっている場所にあるが、南側への展望が開け、小丘陵が点在する平野を見渡せる位置にある。城の西側に樋ノ内池が隣接する。

概要　主郭以外の曲輪はごく少数で規模も小さく、単郭式の城といえる。主郭は東西約 40 m、南北約20 mの長方形を呈する。主郭内の東寄りには、長方形をした高さ 1 mほどの土壇状の高まりがある。主郭縁辺部の西半には高さ 0.3 mほどの土塁の痕跡が巡る。南側と南東側に虎口跡とみられる箇所があり、南側の虎口には登城道が屈曲しながら取り付く。南側虎口の下方には、部分的に土塁を伴う横堀が設けられ、その東端部は竪堀の下端と接続して、全体としてＬ字形を呈している。周囲の斜面には各方向に向けて 7 本の竪堀を散発的に設けた上、主郭の北東側の尾根筋は 1 条の堀切によって遮断される。小規模ながら防備の充実した城といえる。

文献・伝承　『古城之覚』では、苫北郡の「藤田」として城主不詳、また別に東北条郡大篠村の「たう多山」として、城主を赤松宮内少輔師範とする。『作陽誌』では大篠西村の「藤田山古城」として、城主を赤松宮内少輔、本丸・二の郭・三の郭、北の方尾崎に堀切が二重、南の方に三段あって、東南に向いた城と記す。（文献 133）　（岡本）

写真 85　遠景（南東から）



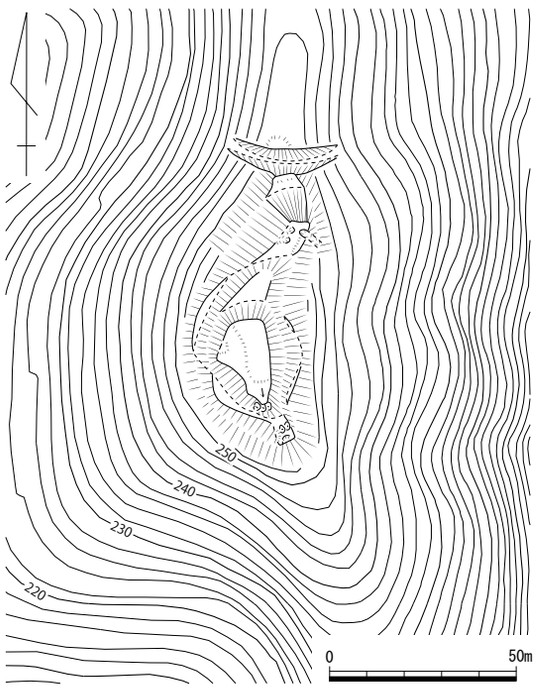
第 178 図　藤田山城跡縄張り図（1 /2,000）

177　台山（だいやま）城跡　　津山市大篠　　地図 14 左

立地　烏ヶ仙の南側山麓にある、南に長く延びる尾根先端部に立地する。

概要　最高所の主郭から北へ３面の曲輪と堀切１条を配する。堀切の深さは現状で１ｍ弱である。２面目と３面目の曲輪間の切岸は高さ約５ｍを測る。主郭の南端切岸は露岩を利用し、直下に小さな曲輪を１か所設けている。また、東西両斜面には犬走りが認められる。堀切から北へは、再び高所があり、なだらかな尾根が約 100 ｍ続くが、明確な城館関連遺構は未確認である。

文献・伝承　『東作誌』には大篠村の台山古城として登場し、城主を安黒和泉守久重と記す。『美作国の山城』は、『古城之覚』を引き、苫田郡大笹村の「大山之（城）」とし、城主不詳、また別に東北条郡大篠村の「代山」として、城主を赤松弾正少弼氏範とする。　（物部）



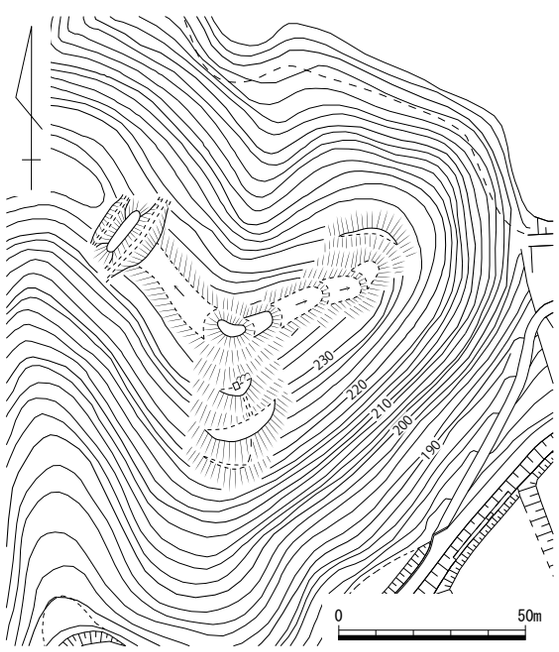
第 179 図　台山城跡縄張り図（１/2,000）

178　別所（べっしょ）城跡　　津山市上高倉　　地図 14 左

立地　標高約 550 ｍの山塊から南側に派生し、約 200 ｍ下った尾根先端頂部に立地する。現在当城の東側に近接して別所池が位置する。

概要　主郭から１方向に伸びる尾根筋と斜面部２か所に曲輪を連ねた、全長 90 ｍほどの小さな山城である。主郭は 10 ｍにも満たない小さいもので、形状も不定形である。主郭からみて東側へ延びる尾根筋には５面の曲輪が連なるが、各面ともに切岸が曖昧である。主郭の北西側は鞍部となり、ここに２条の堀切と土塁によって城域を画する。堀切は２条ともしっかりした造りで、その中間にある土塁も約１ｍの高さがある。主郭南側にある斜面上にも、３面の曲輪が続く。その最上にある曲輪には、麓にある若宮神社の別院がある。

文献・伝承　『古城の覚』では、城主を山口周防守としている。（文献 133）　（小林）



第 180 図　別所城跡縄張り図（１/2,000）

179　医王山城跡（いおうやま）　津山市綾部・吉見　＜市指定史跡＞　地図 14 右

立地　烏山（701 m）山塊東端の南へ突出する尾根（340 m）に立地する。鞍部を越えて北へ続く尾根筋を距離で約 800 m、比高で約 250 m登ると塩屋ヶ城跡に到達する。加茂川を東に見下ろし、加茂川が北の山塊から南の平野部へ出てくる、その出口に位置している。

概要　南北方向の尾根筋約 240 mにわたって曲輪を連ねている。尾根筋の南北両端に高所があり、北側の最高所に造成された曲輪（主郭）は、周囲が 10 m前後の切岸や急な斜面となっており、隔絶している。主郭は約 20 × 20 mの広さで、西縁と北東縁に幅約 5 m、高さ約 1.5 m、内外面を野面積みの石垣で補強した石塁を設けている。北西角部分は石塁を繋げず、幅 2 ～ 3 mの空間を空け、西向きの虎口としている。この虎口を西に出ると、北西方向に 1 m程の緩斜面があり、小さな曲輪に下りる。この曲輪の北東縁と南西縁には石列が認められ、幅約 1 mの小規模な石塁の痕跡と考えられる。ここから北へ続く尾根鞍部付近に堀切が 4 か所ある。鞍部に下りるまでに深さ 5 ～ 1 mと 2.5 ～ 1 mの堀切が連続する。鞍部の中央に幅 4 mほどの小規模な堀切 1 条、その北、再び尾根が上がっていく地点に露岩を利用し、高さ 4.5 mほどの切岸とした堀切を設けている。

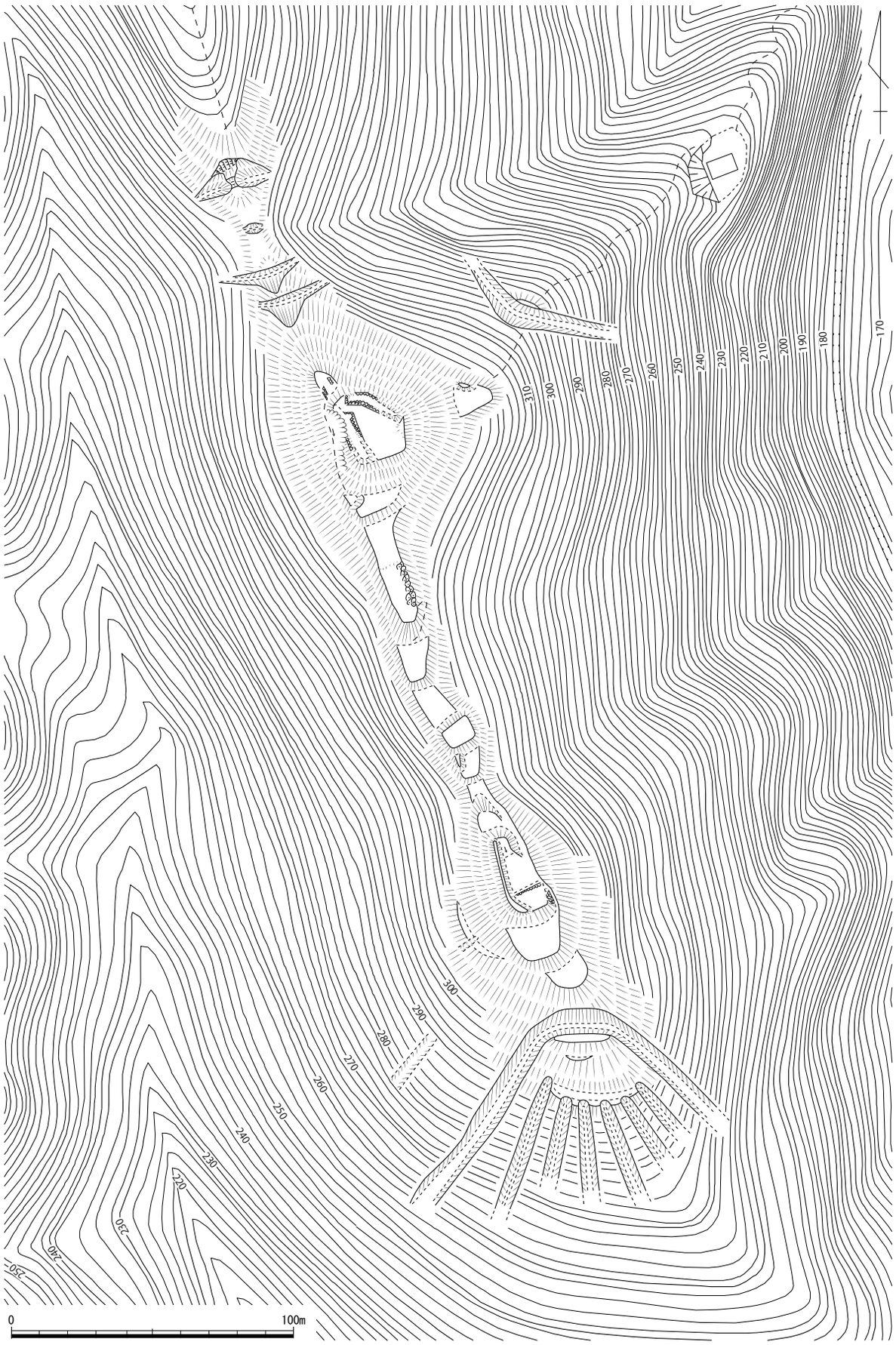
主郭から東に下る尾根筋には北縁に土塁を持つ曲輪と堀切を配する。

主郭から南の尾根筋には約 11 の曲輪を設けている。それらの曲輪の中には西縁部に土塁、東縁部に岩脈を掘り残した石塁を設けているものがある。南端の高所に立地する曲輪にも西縁に高さ 1.5 ～ 1.8 mの土塁が配されている。また、その曲輪の中央やや南寄りに石塁がある。この石塁は幅約 1 m、高さ 30 ～ 50㎝を測る小規模なもので、石が面を以て並べられたように観察できる部分もあるが、現状では石が散乱している状況である。この曲輪の東縁やや南、ちょうど石塁東端部の南側から、約 4 m下方の腰曲輪へ通じる通路がある。その降り口の西壁を石垣とし補強している。

曲輪群の南端から少し下ると、両端を竪堀とした堀切が掘削されている。深さは約 1.5 ～ 3.5 mである。堀切のさらに南下方には、尾根筋を囲むように放射状に配された畝状竪堀群がある。南西側斜面にあるとされる畝状竪堀群は多数の倒木のため、十分な踏査ができず詳細不明である。主郭から採集された瓦は、天正 11 年（1583）以降に制作されたものとする報告がある（1）。

文献・伝承　『日本城郭大系』は、往古、上道是次が築城したという説があると記す。『作陽誌』は「岩尾古城」とし、城主山名坊菴忠重とある。『美作国の山城』によると、元禄 3 年（1690）の『今井氏書上』（『美作古城史』所収）に、今井氏は「岩尾山之城主山名坊庵唯重」の家臣となり、「三星」（美作市明見・入田）から岩尾山を攻撃された際に草加部村（津山市草加部）で迎え撃ったとするとしている。また、『安西軍策』は、天文 13 年 (1544)11 月、尼子国久・誠久・敬久父子は、備後国を経て美作国に討ち入り、浦上氏が軍勢を籠める「伊王山」など三ヶ城を落とし、出雲国に帰陣したとされるとし、『桜井家文書』は永禄 2（1559）年 12 月 12 日、小田草城（鏡野町馬場）の城主斎藤実秀は「岩尾山表」で合戦、実秀は鑓の働きを賞し桜井藤兵衛に所得を与えられているとする。

天正年間 (1573 ～ 92）にはいると、美作は毛利氏と宇喜多氏が対峙することとなり、医王山は毛利方に属していた。『美作国の山城』は、『吉川家文書』『閥閲録』『藩中諸家古文書纂』などから、天正 7 年 (1579)、毛利氏との対立にあたり、宇喜多氏は「祝山城」に数カ所の付城を構え攻撃、対して毛利氏は 11 月に塩屋元真を、次いで湯原春綱、また、小川元成を城に籠め、以降、毛利氏からは



第 181 図　医王山城跡縄張り図（1 /2,000）

兵粮の搬入が続けられたとし、『藩中諸家古文書編纂』『閥閲録』は、同八年八月には城中から離反者がでて三丸まで進入され、10 月にも離反者が城から退出しているとする。『吉川元春書状写』（『萩藩閥閲録』巻百十五ノ二）は、同年 10 月、祝山城に付属する仙々城の番衆が宇喜多軍と内通して寝返り、さらに祝山城の守備は難航を極めた。元春は数度の危機を凌いできた湯原春綱（湯豊）に最大限の賛辞を送りつつ、因幡国の処置で何度も援軍出発が延期になり、もはや信用できないかもしれないが、今度こそ間違いなく決定したので、不審のないようにと釈明している。また、同年 11 月、『福原元俊・口羽春良・小早川隆景連署書状写』（『萩藩閥閲録』巻五十一所収）は、元俊ら毛利家宿老が、祝山城番の湯原春綱（豊前守）・塩屋元真（豊後守）・小川元政（右衛門兵衛尉）に指示を与えた書状で、祝山城救援につき吉川元春に相談したところ必ずその方面に出陣するとのことだったという。自分たちも出陣するので、「伝の城」を一、二ヶ所築いて待つこと、その間福田盛雅と相談し祝山城の維持に努めることを指示している。『美作国の山城』は、『閥閲録』『吉川家中井寺社文書』によると、最終的には天正九年正月、城兵は城から退去、湯原・塩屋氏は升形城へ、小川氏は小田草城の在番を命じられたとし、天正 11 年 1 月、『福原貞俊書状写』（『萩藩閥閲録巻百十五之四』所収）に、以前、祝山城に籠城し忠義を尽した湯原春綱（豊前守）に対し、毛利輝元は恩賞として所領を進呈する約束をしていた。しかし、都合のよい所領がみつからず、未だに恩賞支給に至っていないことを毛利氏宿老福原貞俊が弁解しているとする。（物部）

（1）平岡正宏「医王山城採集の瓦」『年報　津山弥生の里　第 4 号』平成 9 年津山市教育委員会

写真 86　遠景（北東から）

写真 87　主郭（東から）

写真 88　主郭虎口（東から）

写真 89　南高所の石塁（東から）

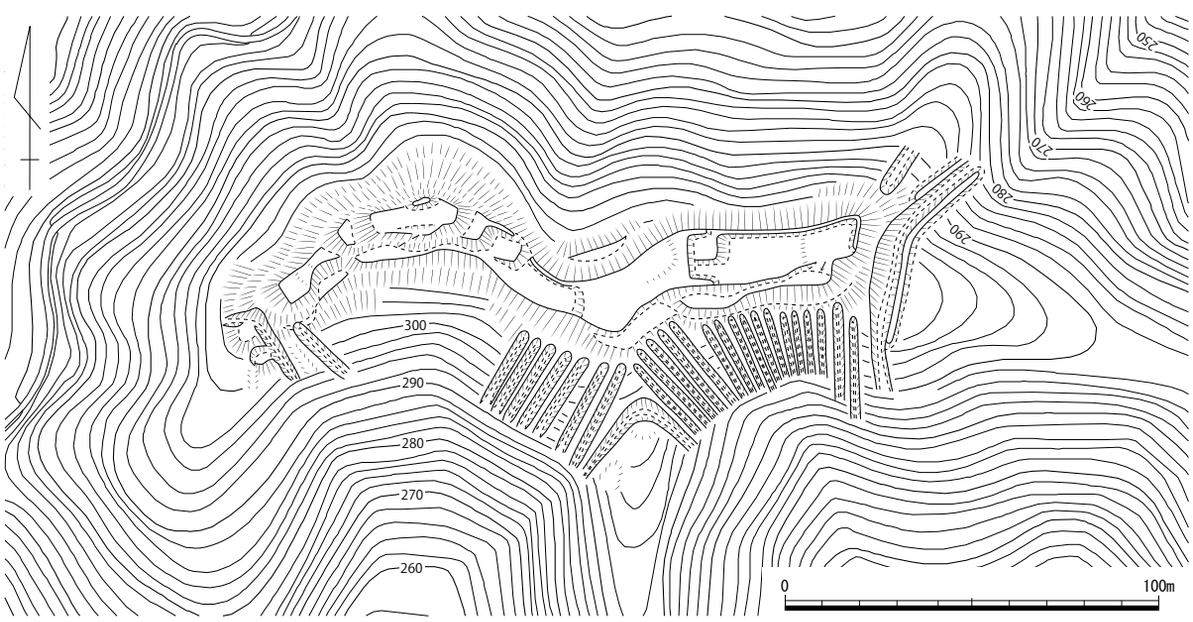
180　鉢伏（はちふせ）城跡　　津山市綾部　　地図 14 左・右

立地　天狗寺山山系の南端にあり、背後の山塊とは鞍部によって隔てられた半独立丘陵の頂部に立地する。加茂川右岸の綾部地区一帯を見下ろす位置にある山城である。

概要　東西方向の尾根筋上に約 200 mにわたって各種施設が連なり、城域のほぼ中央から南に向かって尾根が派生する。西端の標高 314 mの山頂に、東西約 20 m、南北約 10 mのやや不整な長方形の主郭を置く。北側のごく一部に土塁が残存し、南側には通路が取り付いており虎口の可能性がある。主郭の周囲は 1.5 ～ 2.5 mの切岸となる。主郭の東西には不整な曲輪が段状に設置され、北側の一部に土塁がみられる。東端には、全長約 45 mの細長い長方形の曲輪があり、北側から東側にかけて土塁を伴い、南東隅に虎口を思わせる斜路が認められる。また曲輪の西端に方形の高まりが設けられている。城域の中央付近はもともと地形が緩やかなためか、尾根筋の平坦化と切岸を設ける程度で、明確な地形改変は認められない。城域の東・西・南側の尾根は、それぞれ 1 条の堀切によって遮断され、東側の堀切は最も規模が大きい。城域東半部の南斜面には、南向きの尾根筋をはさんで 7 本と 17 本の２群からなる畝状竪堀群が密に掘削され、尾根筋の堀切と相まって防御を固めている。

文献・伝承　『作陽誌』は、「鉢伏山」として登山道が二町余り、本丸と東の丸があり間に堀切、南を大手として背後は険しいとし、天正 7（1579）年２月に毛利家家臣の楢崎弾正元兼、後に花房助兵衛職秀の陣城というと記す。（文献 133）　（岡本）

写真 90　遠景（東から）



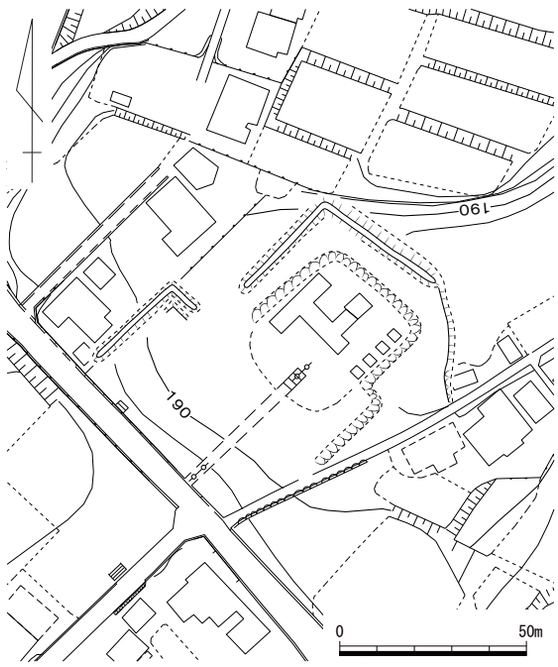
第 182 図　鉢伏城跡縄張り図（1 /2,000）

182　池上城跡（いけがみ）　　津山市上横野・下横野　　地図 14 左

立地　懸縄山（標高 390 m）の南麓から横野川に向かって南西に延びる緩やかな尾根上に立地する。同じ尾根上の約 400 m西側に小丸山城跡がある。

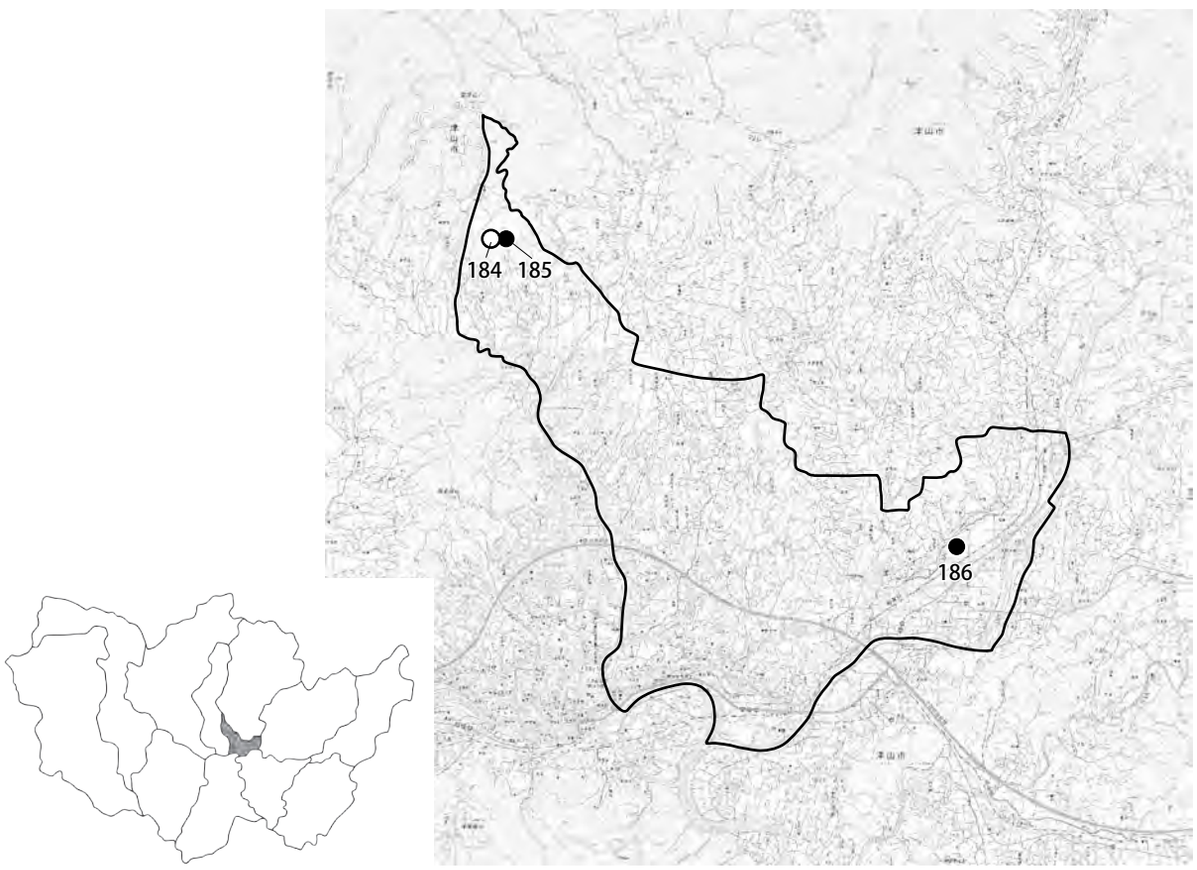
概要　現在は、高田神社の社地となっており地形は改変を受けている。『英田郡誌』によれば、高田神社は大正２（1913）年、五社を合祀して現地に移転したとされる。社殿は方形の削平面の中に建てられており、北側に土塁状の高まりがＬ字状に巡り、方形区画の存在をうかがわせる。また、社殿手前にある駐車場の北側にも土塁がＬ字状に残存している。現在の社地の形状が、元々あった城の曲輪を反映している可能性はある。

文献・伝承　『作陽誌』は「池上砦」として、懸縄山の砦で、永禄の頃に前原新之允という者が住み、元亀２（1571）年に没したと記す。（文献 133）　（岡本）



第 183 図　池上城跡縄張り図（１/2,000）

第６節　東南条郡



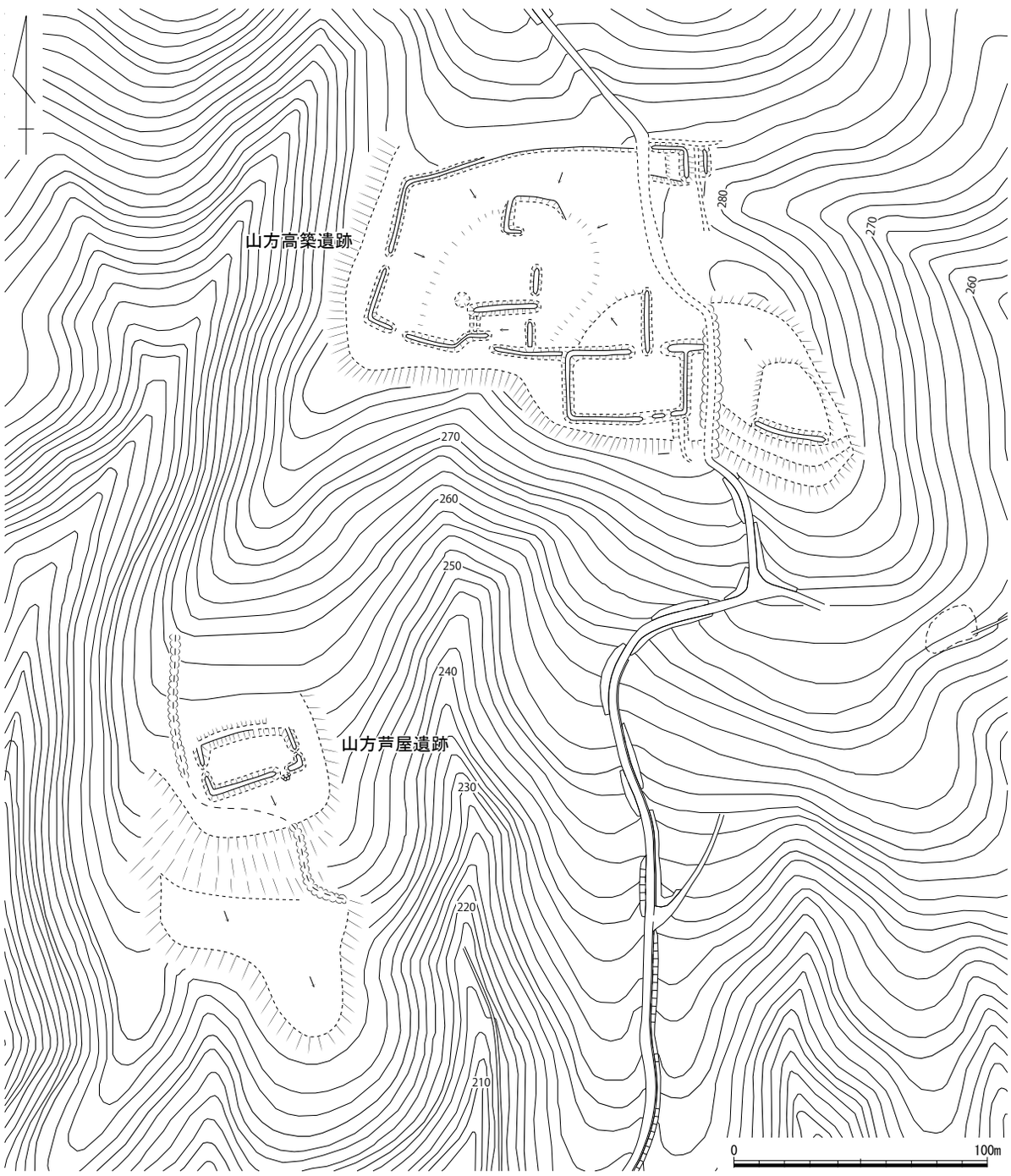
184．山方深田遺跡　　185．山方高築遺跡・山方芦屋遺跡　　186．高野城跡

第 184 図　東南条城館位置図

185　山方高築遺跡・山方芦屋遺跡　　津山市山方　　地図 13 右

立地　黒沢山（標高 668 m）の南麓にあり、南に延伸する尾根筋上に立地する。人里に近く、南向きの広い平坦面に山方高築遺跡、そこから南西側に延びる尾根上の平坦面に山方芦屋遺跡がある。

概要　山方高築遺跡は、一部を山道で破壊されているが、土塁で囲まれた曲輪群から構成されている。主郭とみられるのは、南側にある東西約 40 m、南北約 20 mの長方形の曲輪で、高さ 0.4 ～ 1.3 m ほどの土塁がほぼ全周し、南辺および北辺に 2 か所ずつ切れ目がある。主郭の背後には、東西 90 m、



第 185 図　山方高築遺跡・山方芦屋遺跡縄張り図（1 /2,500）

南北 60 mほどの広大な不整四角形の曲輪があり、高さ 0.3 ～ 0.8 m程度の土塁を伴うが、北側では削平のためか単なる段状を呈する。土塁には切れ目のほか、南辺には虎口を思わせる土塁の喰い違い、さらには内桝形と思われる構造物も認められ、防御への工夫が認められる。曲輪内部は中央に向かって窪地状に傾斜し、中央からやや北に寄った位置に長方形の削平面が設けられている。城域の北東端には土塁を伴う長方形の小規模な曲輪が付属している。南東端には、山道からの高さ約 2.5 mを測り、南に土塁を伴うやや不明瞭な平坦面がある。

山方芦屋遺跡では、全長 50 mほどの平坦地に、約 40 × 20 mの長方形の土塁囲みがある。土塁の高さは最大で 2 mほどを測り、しっかりと築造されている。三方に土塁が途切れた箇所があり、入口になる可能性がある。特に南側辺にある空間の前面は、石が多数見られる。主郭南側の尾根筋上にはやや平坦な地形が広がるが、人為的な改変の有無ははっきりしない。

この両遺跡は、人里に近いことから地形改変の可能性もあるが、特に山方高築遺跡にみられる技巧的な土塁の形状は、城館遺跡としての性格を端的に現している。両遺跡とも、土塁が全周する長方形の主郭をもつという特徴があり、時期や築城主体の共通性、相互の密接な関係が示唆される。

文献・伝承　『作陽誌』は、東南条郡東一宮村の「関勘解由屋敷跡」として、高築にありと記す。同書によれば、藤原氏の後裔、尾張一宮出身で織田信長に仕えた関十郎右衛門には 6 人の子がおり、息子のひとり勘解由は作州で死去、娘 3 人のうち 2 人は津山藩森家の家臣の妻、1 人は津山藩初代藩主、森忠政の継母となったと記す。さらに、「上藪屋敷」なるものが、西山方の農民清右衛門の持林の中にあり、上藪については不詳とする。『美作国の山城』では、山方高築遺跡を関勘解由屋敷、山方芦屋遺跡を上藪屋敷にあてている。　（岡本・小林）

写真 91　遠景（南西から）

写真 92　山方高築遺跡北郭周辺の土塁（東から）

写真 93　山方高築遺跡主郭周辺の土塁（北西から）

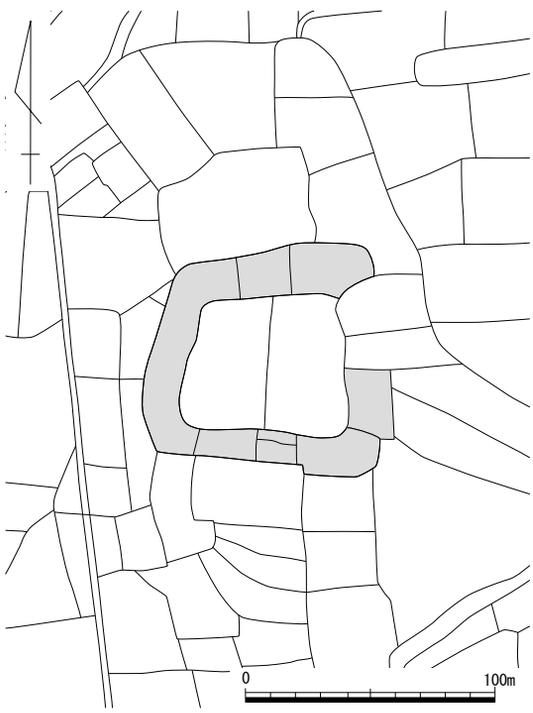
写真 94　山方高築遺跡北側曲輪の土塁（北東から）

186　高野（たかの）城跡　　津山市高野本郷　　地図 21 左

立地　加茂川の右岸に広がる平野に築かれた平地城館である。

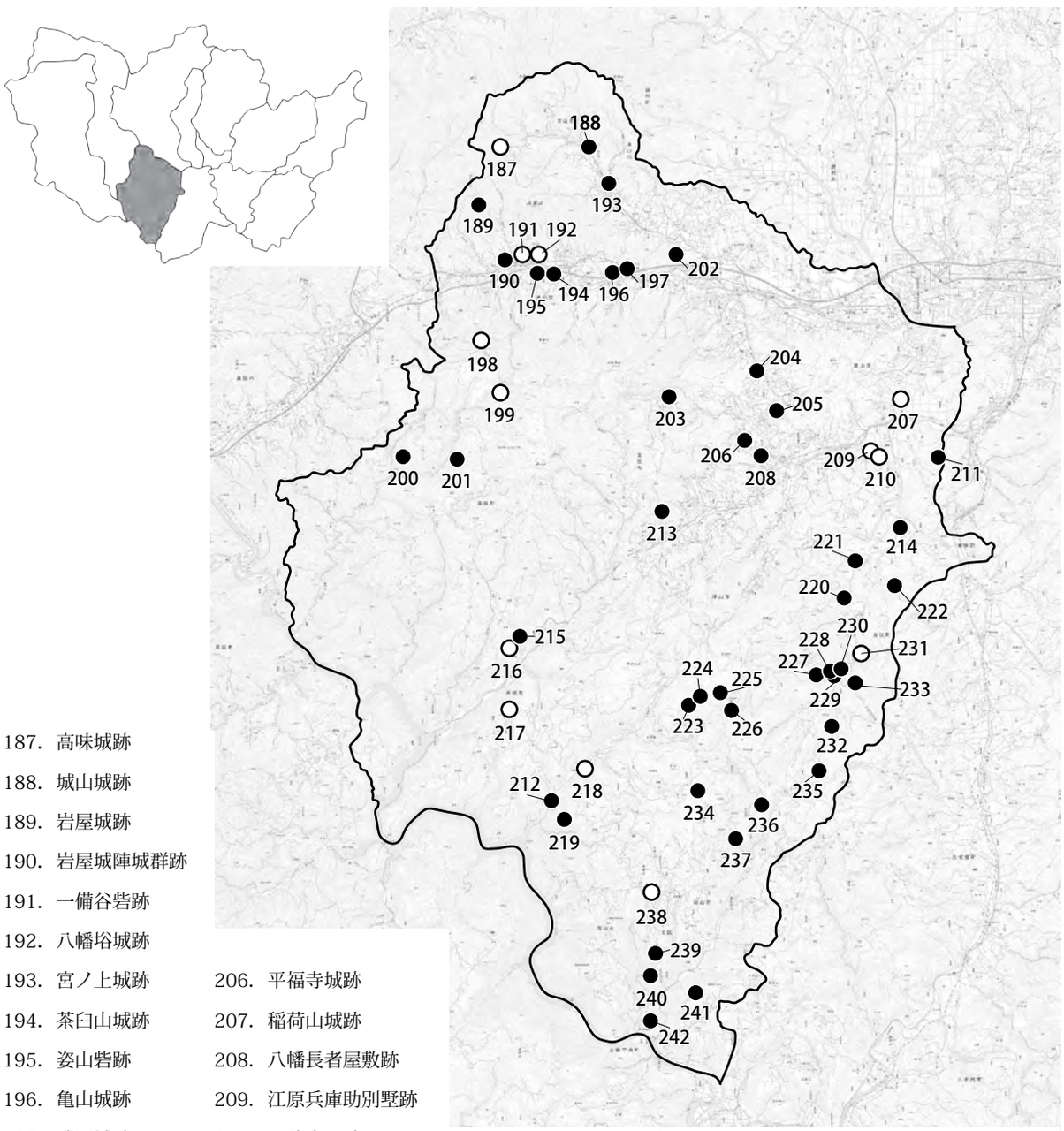
概要　現在、城域は集合住宅やグラウンドの用地となり、遺構は確認できない。昭和 22 年撮影の航空写真に基づくと、右図のような東西約 100 m、南北約 90 mの方形の城域が想定できる。城館の本体は東西約 70 m、南北約 60 mで、周囲に堀が巡り、文献史料によれば土塁も存在したようである。高野地域を治めた土豪の居館跡と考えられる。

文献・伝承　『作陽誌』では、東南条郡高野本郷西村の「築地跡」として、地元の人は「城」と呼び城主は不明、約 30 間四方で面積は 1 段 9 畝、中には田地があり、中島氏あるいは牧佐介の居城ともいう、と記す。『美作古城史』では、現地は「城の元」と呼ばれ、鴨川中学校が建設されるまでは土居の遺構が認められたという、と記す。（文献 133）（岡本）



第 186 図　高野城跡平面図（1/3,000）

第７節　久米北条郡



187．高味城跡
188．城山城跡
189．岩屋城跡
190．岩屋城陣城群跡
191．一備谷砦跡
192．八幡埒城跡
193．宮ノ上城跡
194．茶臼山城跡
195．姿山砦跡
196．亀山城跡
197．磯尾城跡
198．加冶子山城跡
199．萩丸城跡
200．城小屋城跡
201．横岩城跡
202．年末城跡
203．円宗寺城跡
204．鍋山遺跡
205．構城跡
206．平福寺城跡
207．稲荷山城跡
208．八幡長者屋敷跡
209．江原兵庫助別墅跡
210．戸脇土塁跡
211．天神山城跡
212．一之瀬城跡
213．高山城跡
214．鬼山城跡
215．江原城跡
216．丸山城跡
217．三宮城跡
218．鳥首城跡
219．金地城跡
220．城山城跡
221．細田城跡
222．天神山城跡
223．中の城城跡
224．あたご山城跡
225．高陣城跡
226．両山寺城跡
227．杉城跡
228．城山城跡
229．構跡
230．八幡山城跡
231．青木城跡
232．植松城跡
233．鳥越山城跡
234．茶臼山城跡
235．高土城跡
236．城能城跡
237．三角城跡
238．石丸屋敷跡
239．寄城跡
240．高城跡
241．蕨尾城跡
242．鶴田城跡

第 187 図　久米北条郡城館位置図

188　城山（しろやま）城跡　　津山市宮部上　　地図 12 右

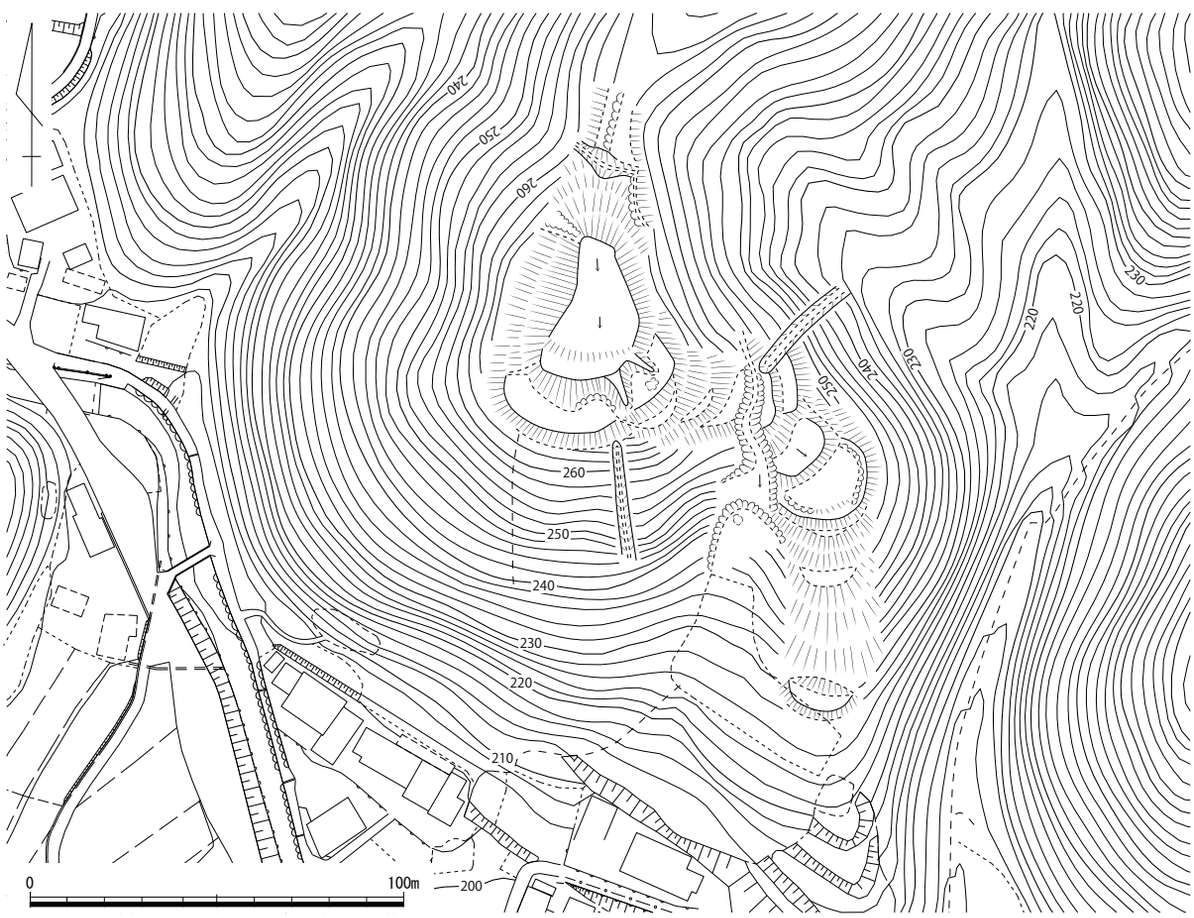
立地　宮部川の北側隣にあり、この川の上流域にある山城の中で最も奥に位置する。標高 450 m級の山塊から南に派生した丘陵先端頂部にあり、比高差は約 80 mとそれほど高くない。頂部からは宮部川下流域が広く見渡せる。

概要　頂部にある主郭は、長さ約 40 m、幅約 30 mと比較的広大である。この主郭の南側前面に、長さ約 10 m、幅約 50 mの広い腰曲輪が配される。主郭と腰曲輪の間には、スロープ状の施設が 2 つ存在し、その間には井戸状の凹みが残っている。腰曲輪の前面には、竪堀が 1 本のみ配されている。主郭背後の北側部分は、1 条の堀切によって城域を画し、また高い切岸で守りを固めている。

当城の主要施設は、この約 100 m前後の範囲と思われるが、さらに東隣の尾根にも断続的に曲輪が伸びていた。曲輪は大小 9 つ前後連なると思われる。中には長さ約 20 m、幅約 30 mある曲輪もあり、土塁状の高まりも存在する。しかしこの高まりは、後世の改変の可能性が高く、この東側曲輪群は、判然としないものが多い。

当城は、特に主郭を中心とした施設はしっかりしている。宮部川流域を押さえる要の位置にある山城と言えよう。

文献・伝承　城主等不明である。　（小林）



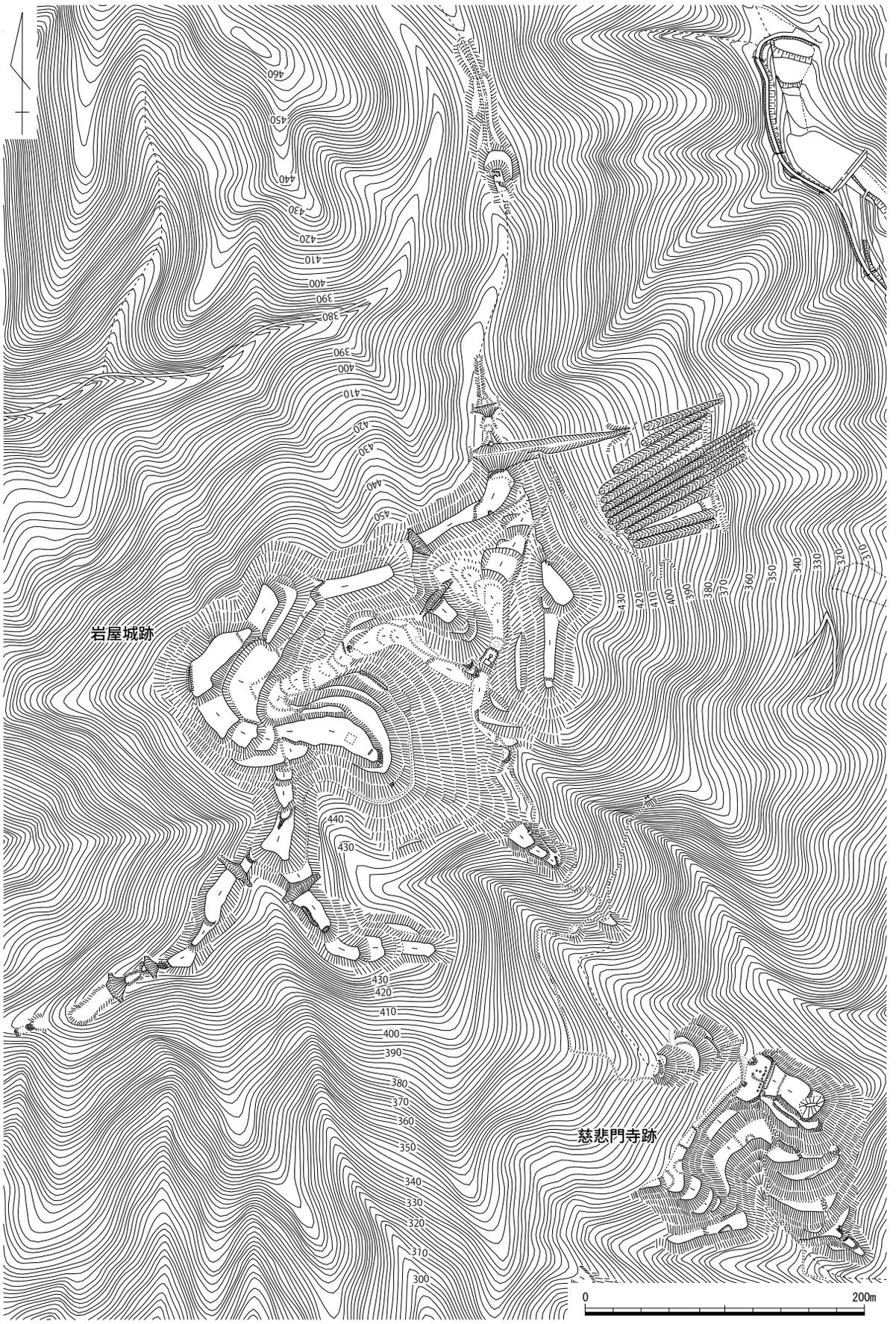
第 188 図　城山城跡縄張り図（1 /2,000）

189　岩屋（いわや）城跡　　津山市中北上　　＜県指定史跡＞　　地図 19 右

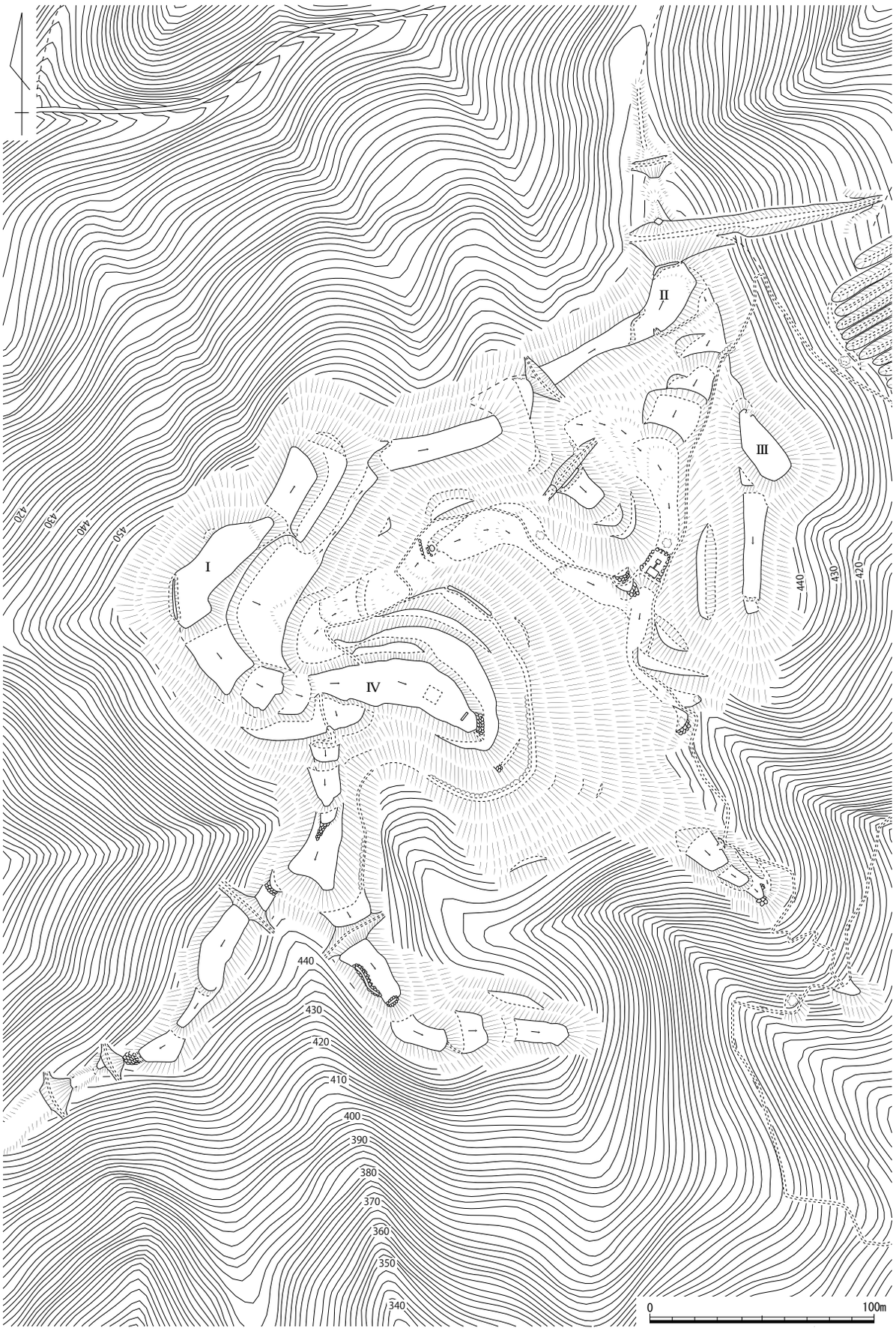
立地　津山市の旧久米町域にあり、同市と真庭市の境にある標高 650 m級の矢倉山山塊から南に派生する尾根筋上にあたる標高 480 m級の岩屋山山頂に位置する。東側には岩屋川、西側には明谷川がそれぞれ南流し、南側に西から東へ流れる久米川へと合流する。この久米川沿いに現在国道 181 号線が走っているが、かつてはそのラインが出雲街道であったと推測される。岩屋山の頂部からは、東は津山市街地が、西は真庭市旧久世町や旧勝山町・旧落合町まで見渡せる。また当城に近接した尾根筋の四周全域は、天正 12（1584）年に宇喜多方の花房氏が取り囲んだ陣城が存在する。

概要　岩屋城跡は、美作を代表する山城の 1 つである。岩屋山頂部に主郭を置いた全長 500 mを超える大型の山城で、「本丸」（Ⅰ）、「二の丸」（Ⅱ）、「三の丸」（Ⅲ）、「馬場」（Ⅳ）が、水源であり井戸が存在する谷部を囲むように立地する。「本丸」と呼ばれるⅠの主郭は、長さ約 70 m、幅約 20 mと細長く、東側は約 5 mの切岸で、西側は土塁と天然の絶壁で守っている。北東側に向いた尾根上に３つほどの曲輪を連ね、特に 1 面目は長さ約 30 m、3 面目は長さ約 50 mを測り、やはり長大である。その先には 2 方向に尾根が分かれ、南東側の尾根上には、堀切と大小３つの曲輪が続く。北東へ延びる尾根上には切岸、堀切を挟んで「二の丸」（Ⅱ）へと続く。Ⅰの南東側には曲輪を３つ連ね、その先は東側に向けて「馬場」と呼ばれる当城最大の曲輪（Ⅳ）へと続く。この曲輪は、長さ約 75 m、幅約 20 mを測る長大な規模である。尾根筋に当たる南東側から谷部にあたる北側にかけて、大小の腰曲輪が 4 面ほど連なる。「二の丸」（Ⅱ）もやはり細長く、長さ約 80 m、幅約 10 mを測る。その先端には土塁あり、その先は幅約 20 mを測る大型の堀切で城域を画している。なおこの曲輪の南側には虎口があり、谷状地形を挟んでさらに南西方向にある「三の丸」と呼ばれる曲輪群Ⅲに続いている。この曲輪群Ⅲは、長さ約 30 m、幅約 15 mの頂部から、南に向けて長さ約 50 m、幅約 10 mと細長い曲輪が続く。

これら主要曲輪群に囲まれた谷部には、井戸状の窪みが３基あり、また現在「水神宮」が祀られている。この「水神宮」を挟んで、東側にある「三の丸」（Ⅲ）と西側にある「馬場」（Ⅳ）から下った箇所にいくつかの曲輪が存在している。このうち最下段に当たり、「馬場」（Ⅳ）側からの下った曲輪には石段が存在する。この谷筋は、水道であったようで、現在でも山頂付近から「水神宮」を通って下流に流れている。「馬場」（Ⅳ）の先端をさらに伸びた先にも曲輪群が続く。その先端の曲輪から北側に、現在でも「山王宮」が残る。また「三の丸」（Ⅲ）の北東斜面で、大型堀切の南側に接して、竪堀が 12 本配される。この竪堀 1 本 1 本は、幅 5 mほどあり、深さは現状でも 2 m近くある。平面上から見た全長でも、約 80 m～ 120 mにも及ぶ大規模なものである。また大型堀切の北側には、細尾根が延びており、陣城へと続いている。この線上に小さい堀切 1 条とさらにその先に土塁囲いの砦状の遺構が存在する。岩屋城自体の北側境はこの位置になるであろう。「馬場」（Ⅳ）の南側には、緩やか尾根が派生しており、この部分にも曲輪が続く。曲輪は３面が連なり、そのうち３面目は、長さが約 40 mと大きい。ここからさらに 2 方向に派生する尾根筋にそれぞれ曲輪が延びる。東側の尾根筋には、曲輪 1 面、堀切、曲輪 4 面が続く。堀切下の曲輪が一番大きく、西側側面と南側先端部に石積が配される。一方西側の尾根筋には、小さい曲輪 2 面、堀切、曲輪 3 面と続いたのち堀切が 2 条配され城域を画する。



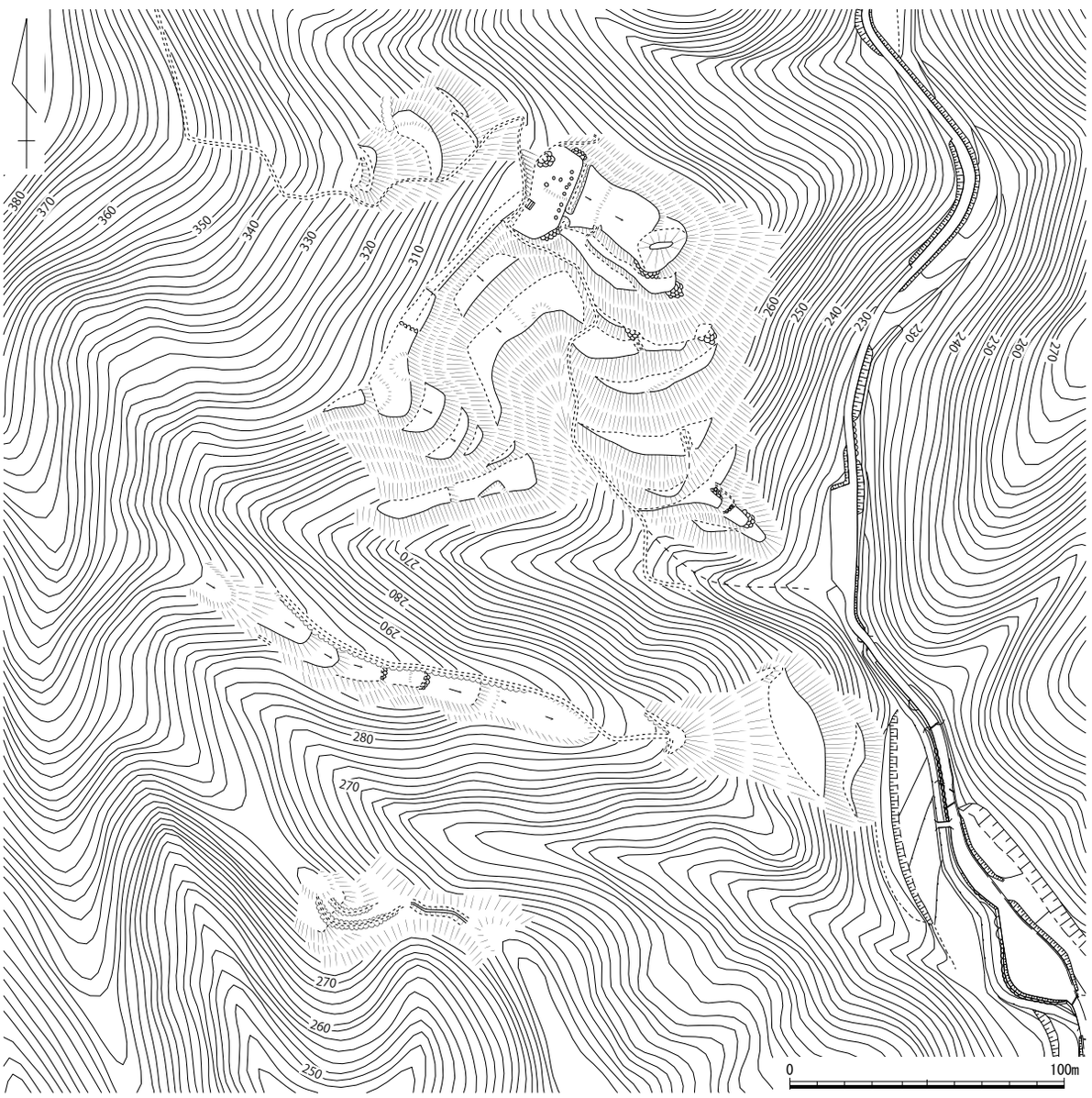
第 189 図　岩屋城跡縄張り図（1 /4,000）



第 190 図　岩屋城跡（中央部）縄張り図（1/2,500）

これら本城の南東側には、平安時代末に築かれた伝承がある「慈悲門寺」跡がある。長さ約 20 m、幅約 40 mの平坦面上に礎石の跡が残る。この一画の両端は石塁が築かれる。南西側には溝を挟んで長さ約 30 m、幅約 20 mの曲輪があり、その先端は高さ約 5 mの露岩がそのまま残る。この曲輪の南斜面側には虎口があり、ここから南西斜面に向けて 7 面ほどの曲輪が連なり、麓へと続く。この尾根筋の南西隣の尾根にも曲輪が築かれる。大小 5 面あり、最上段と最下段が幅広い。またこの尾根と「慈悲門寺」尾根の間にある谷筋にも曲輪が配され、現在本城へ続く山道は曲輪をよけるように続いている。なおこれら地点のさらに南側の尾根筋にも、曲輪状の施設が続き、石段が残る箇所もある。最下段の曲輪は特に大きく、長さ約 20 m、幅約 50 mの規模を誇る。

岩屋城跡は、本城だけでも全長 500 mを超える大型の城であり、さらに派生する尾根筋にも曲輪が伸びる大規模な構造である。「慈悲門寺」周辺だけでも、通常の山城 1 城分の規模がある。美作地域全体を見ても最大級であり、当地域を代表する山城と言える。



第 191 図　岩屋城跡「慈悲門寺」縄張り図（1/2,500）

文献・伝承　岩屋城は、『美作国の山城』や『作陽誌』によると、嘉吉元（1441）年に山名氏が美作国守護になったとき築城したとある。応仁の乱の時には、赤松氏が奪い城将を置く。永正 17（1520）年には浦上村宗によって落城し、中村則久を城主とする。天文９(1540)年に尼子氏の美作侵攻に伴い、高田城主三浦貞久の弟貞尚が一時城主になったと言われる。その後中村則治が城主になるが、芦田氏の下克上によって誅される。天正２（1574）年になって宇喜多方の花房氏と原田氏が芦田氏討ち、城主には浜口氏がなったと言われる。

天正７（1579）年から毛利氏と宇喜多氏が対立することとなり、同９（1581）年毛利方の葛下城主中村頼宗は、西浦城主の大原主計らと攻撃を開始。大原氏ら 32 人の夜襲によって落城させ、毛利輝元は城主に中村頼宗を置く。天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの際、毛利氏と羽柴氏の和議により高梁川以東は宇喜多領にすると決まる。当城は明け渡すことになるが、『萩藩閥閲録』によると安国寺恵瓊が中村氏に退去を命じるが聞かず、天正 12（1584）年に宇喜多氏が直接武力行使によって接収を測る。宇喜多方の将は花房氏で、岩屋城の四周を取り巻く陣城はこの時のものと考える。その後中村氏は退去し、宇喜多方の長船氏が城主となるが、天正 18（1590）年には廃城となる。（文献 133）　（小林）

写真 95　遠景（南から）

写真 96　馬場（西から）

写真 97　堀切（東から）

写真 98　畝状竪堀（北西から）

190　岩屋（いわや）城陣城群跡　　津山市中北上・宮部上・真庭市上河内　　地図 19 右

立地　久米川の北側に立地し、標高約 480 mの岩屋山を中心に見て、その両側にある岩屋川、明谷川のさらに外側の尾根筋が該当する。標高約 520 mを最高点として、490 m級の中の谷山をはじめ、岩屋城跡を取り囲む尾根筋上全てに陣城が存在している。

概要　『作陽誌』や『美作古城史』に「往還ノ上」「石蕨」「梅屸」「遣手場」「的場屸」「とちの木」「井ノ奥」「荒神ノ上」「妙福寺ノ上」「楽万ノ上」などの記載があり、それぞれが天正 12（1584）年の宇喜多方による岩屋城包囲戦の陣城跡と推定される。以下陣城ごとに記述する。

○荒神ノ上砦跡（第 200 図②）　岩屋城の南東側に位置する。尾根筋約 350 mの間に 4 か所の遺構を確認した。各遺構を繋ぐ土塁が明瞭に残り、部分的には二重のところもある。また直角に折れ曲がる箇所が見られる。土塁の南端部は、堀切に沿って西斜面を下っていく。砦の中には、多角形を呈し二重に土塁を築くものと長方形を呈し土塁と横堀を配するものがあり、どちらも虎口がつく特にしっかりした造りである。また鞍部を挟んだ尾根南端の高所は部分的に人為的な改変が確認できるが、城館関連遺構というより、墓地や畑地の開墾によるものと考えられる。

○妙福寺ノ上砦跡（第 200 図①）　岩屋城の南東側に位置する。荒神ノ上砦跡と楽万ノ上砦跡の間にあり、両者から続く土塁が尾根筋南辺に築かれている。土塁線の中央には、幅約 50 mの土塁で囲んだ曲輪がある。言い伝えでは、この箇所が岩屋城攻囲戦の主将であった宇喜多方花房助兵衛職秀の本陣とされる。この砦がある箇所は、尾根伝いに岩屋城の南側にある曲輪群に続くため、攻囲土塁線をはみ出した北側尾根筋にも遺構が築かれる。本陣から約 150 m離れた箇所に約 30 × 10 mの土塁で囲んだ曲輪があり、さらに約 250 m先にも曲輪が築かれ守りを固めていた。

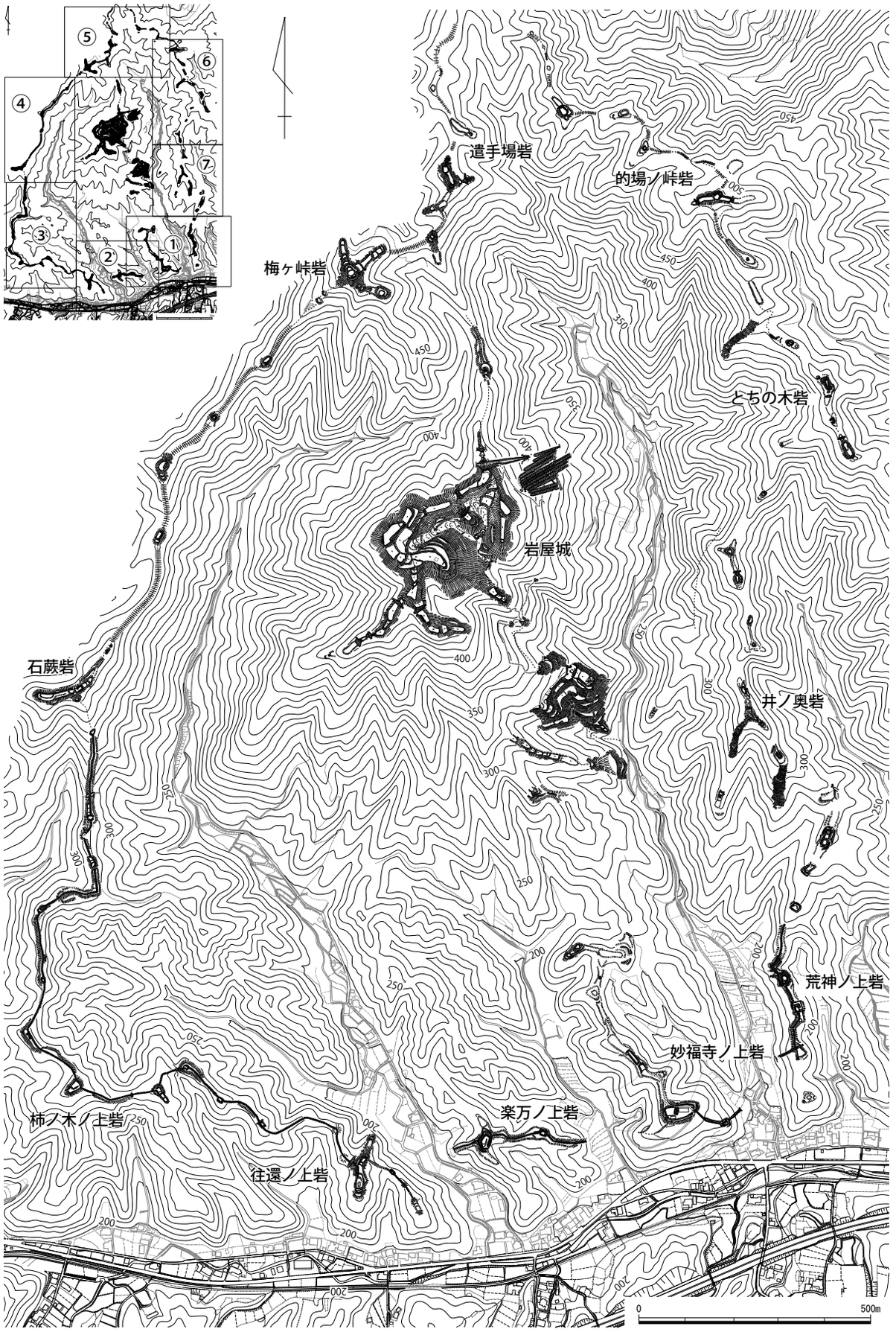
○楽万ノ上砦跡（第 200 図③）　岩屋城の南側に位置する。土塁線は約 300 mに渡り、高さも約 1 mに達しており、良好に残存する。範囲内には 2 か所ほど砦が存在する。そのうち西側のものは多角形を呈し二重の土塁を配する。曲輪内の平坦面も、比較的広い。土塁の南東側は一部開いており、虎口状を呈する。もう一方の砦は、長方形を呈し外周を土塁で囲んでいる。

○往還ノ上砦跡（第 200 図④）　岩屋城の南側に位置する。全長 120 mほどのある大きな砦が中心であり、南北に細長い尾根筋に曲輪を連ね、西側方向を堀切によって画す。主郭部分の約 70 m前後は、曲輪端部の大半を土塁で囲む。他にも、範囲内に 2 か所の高所に櫓台程度の土塁で囲んだ砦が存在する。各砦は土塁線によって結ばれ、さらに西側にある柿ノ木ノ上砦方向にも続いる。

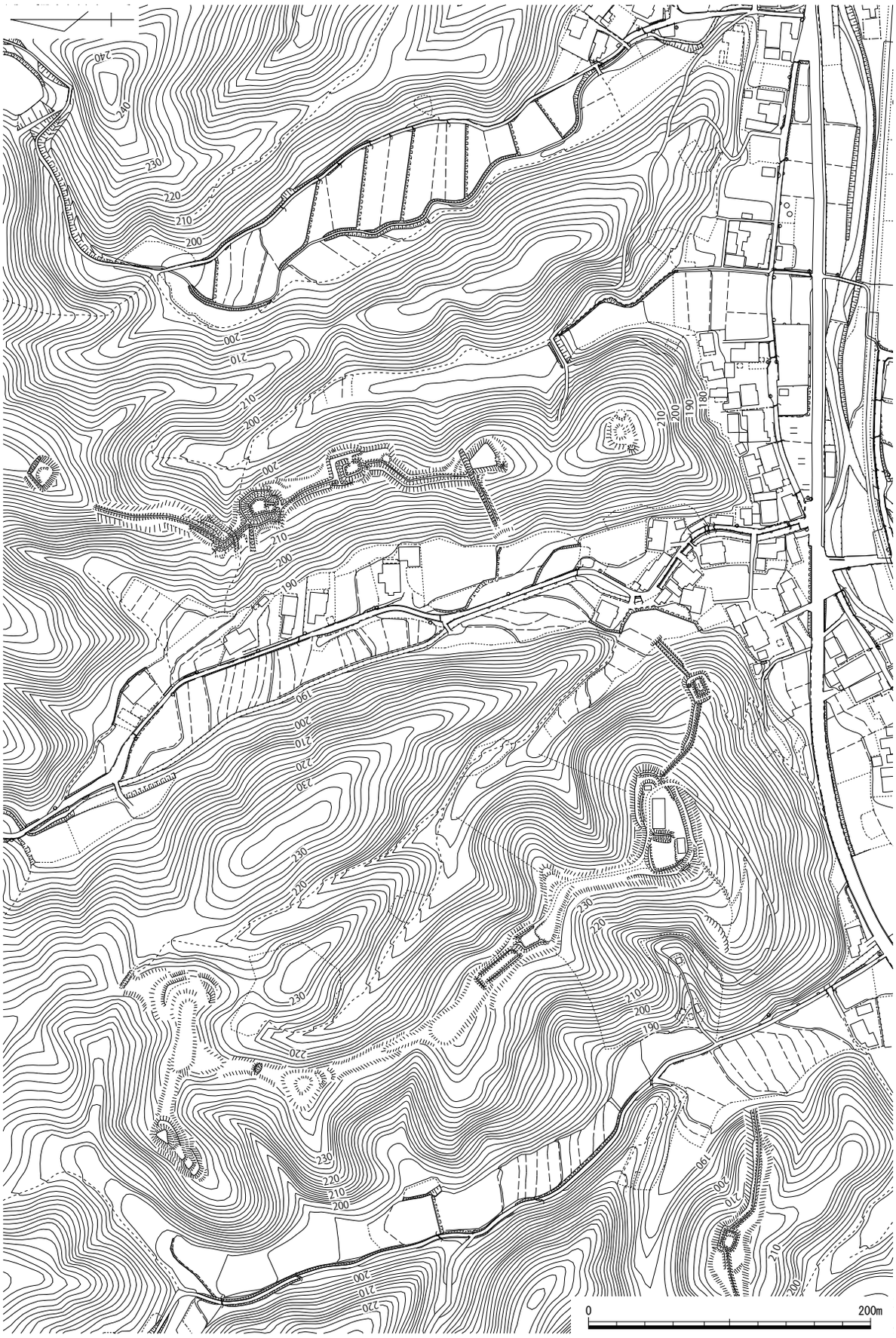
○柿ノ木ノ上砦跡　岩屋城の南西側に位置する。約 1 ㎞の範囲内に土塁線が続き、その間 10 か所の高所に土塁で囲んだ砦が配される。砦は最も大きいものでも長さ約 30 mしかなく、大半が 10 m四方前後の規模である。砦自体は大きくないが、土塁線が最も良好に繋がる箇所である。

○石蕨砦跡（第 200 図⑤）　岩屋城の西側に位置する。東西に細長い尾根筋上にある、約 140 mの砦が中心である。当砦より南側にある柿ノ木ノ上砦方向には、明瞭な土塁線が残るが、北東側にある梅ヶ峠砦方面は露岩が多く、石塁状を呈する箇所があるものの、土塁線は不明瞭になってくる。中心の砦には、曲輪が 3 面にわたって連なる。最上段の曲輪は、長さ約 20 mで 3 方向を土塁で囲む。最下段の曲輪は長さ約 70 mで大規模となる。北側と西側辺のみに土塁が築かれている。

○梅ヶ峠砦跡（第 201 図⑥）　岩屋城の北西側に位置する。約 800 mの尾根筋上に 6 か所の砦を築



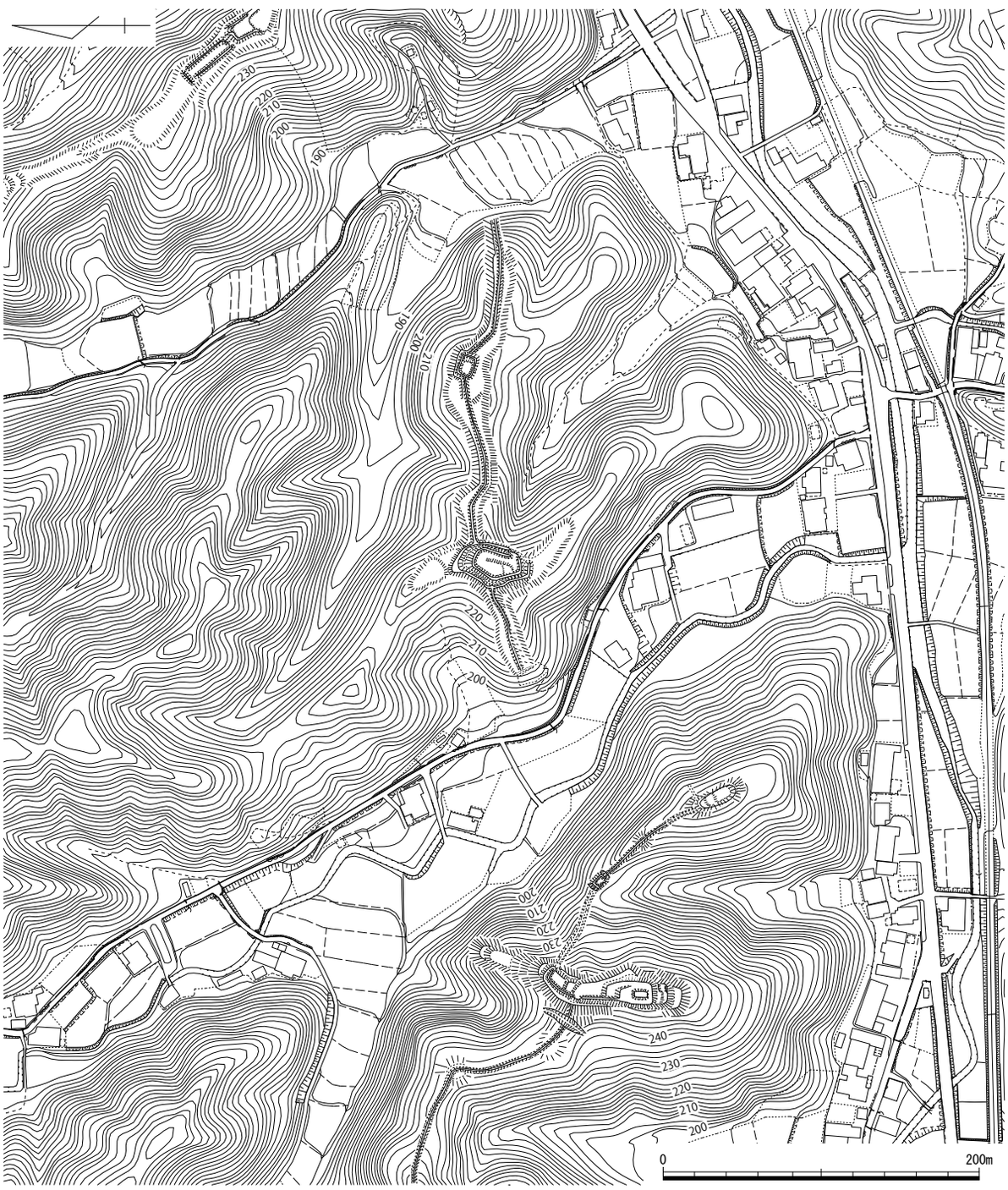
第 192 図　岩屋城跡と陣城群（1 /12,000）



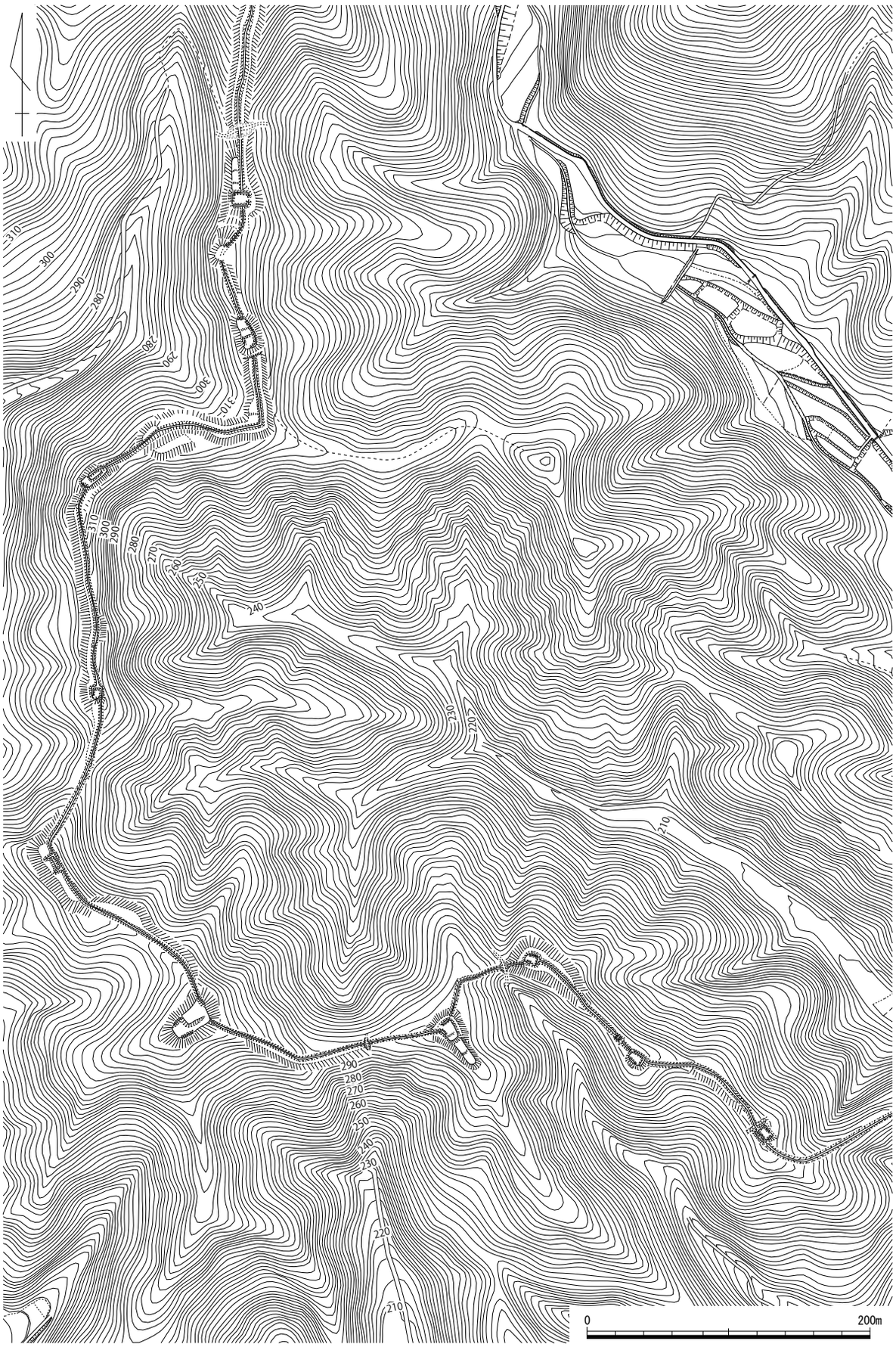
第 193 図　岩屋城陣城群縄張り図①（1/4,000）

いている。その中心は「中の谷山」山頂部にある砦で、３方向に延びる尾根上に曲輪を配する。また南西側にある２条の窪みを堀切と解釈すれば、当砦の全長は 150 ｍを超え、陣城群の中で最大の規模を誇ることとなる。他の砦は、櫓台程度の範囲内を土塁で囲んだ小さなものであるが、岩屋城の本城から北側へ向けて伸びる尾根との交点にある砦は、土塁で囲んだ曲輪の東側を堀切によって画している。なお当砦周辺は、尾根筋頂部の土塁は不明瞭となってくる。

○遣手場砦跡（第 201 図⑦⑧） 本城の北側に位置する箇所を総称して用いる。尾根筋では約 800 ｍの範囲になるが、最北端部分の遺構は明瞭ではない。範囲内に４か所に遺構が築かれた高所が存在

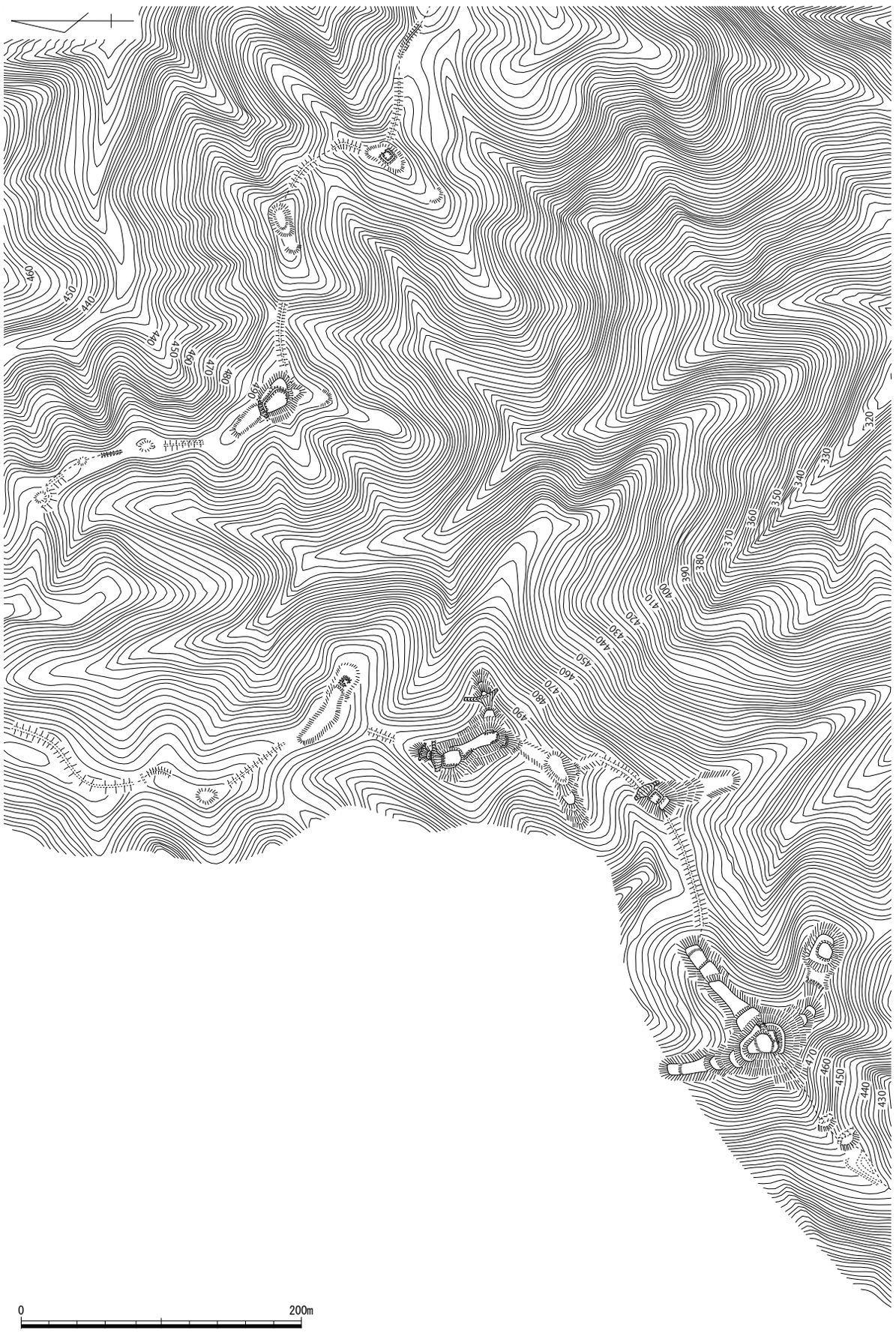


第 194 図　岩屋城陣城群縄張り図②（１/4,000）

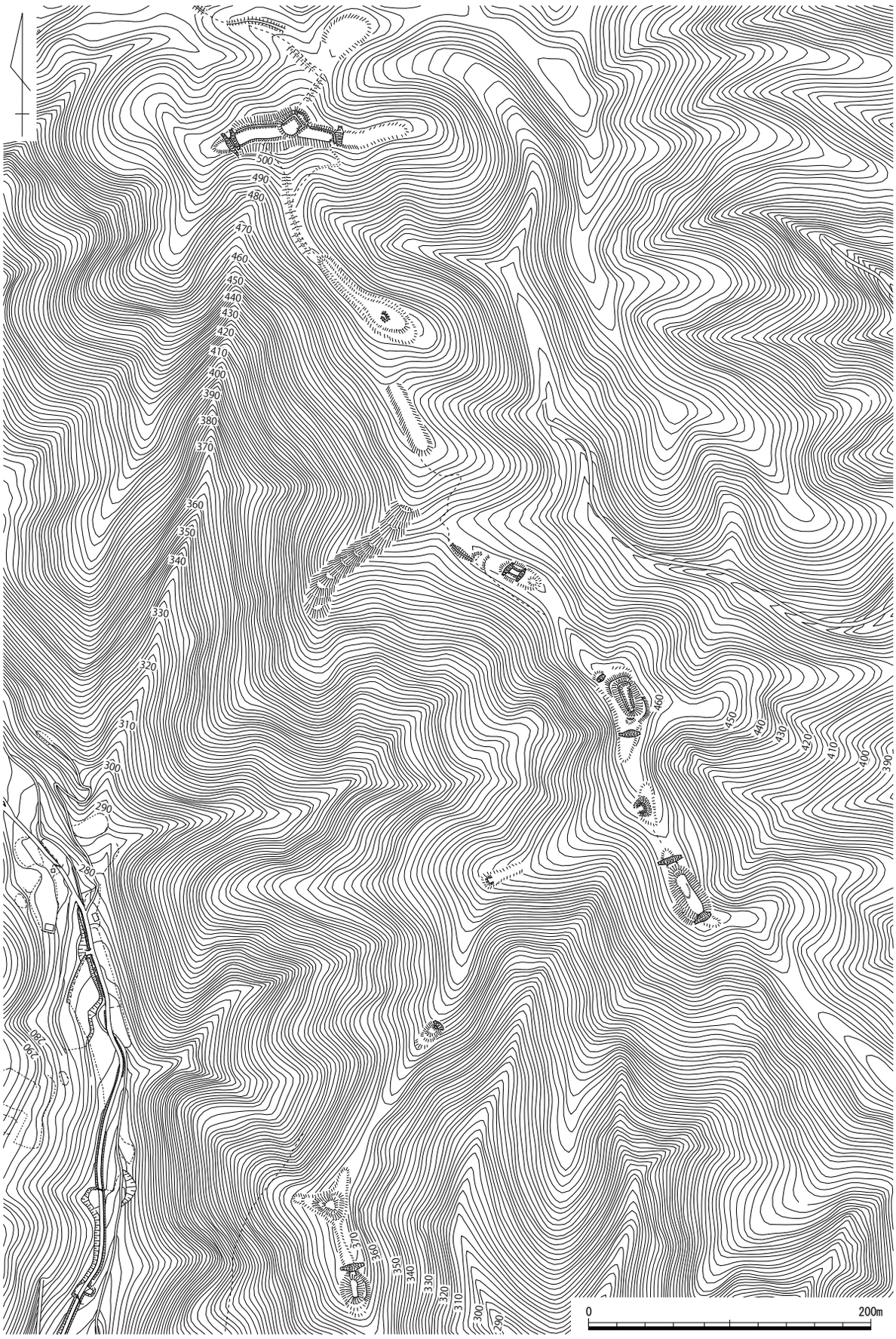


第 195 図　岩屋城陣城群縄張り図③（1/4,000）

第 196 図　岩屋城陣城群縄張り図④（1 /4,000）



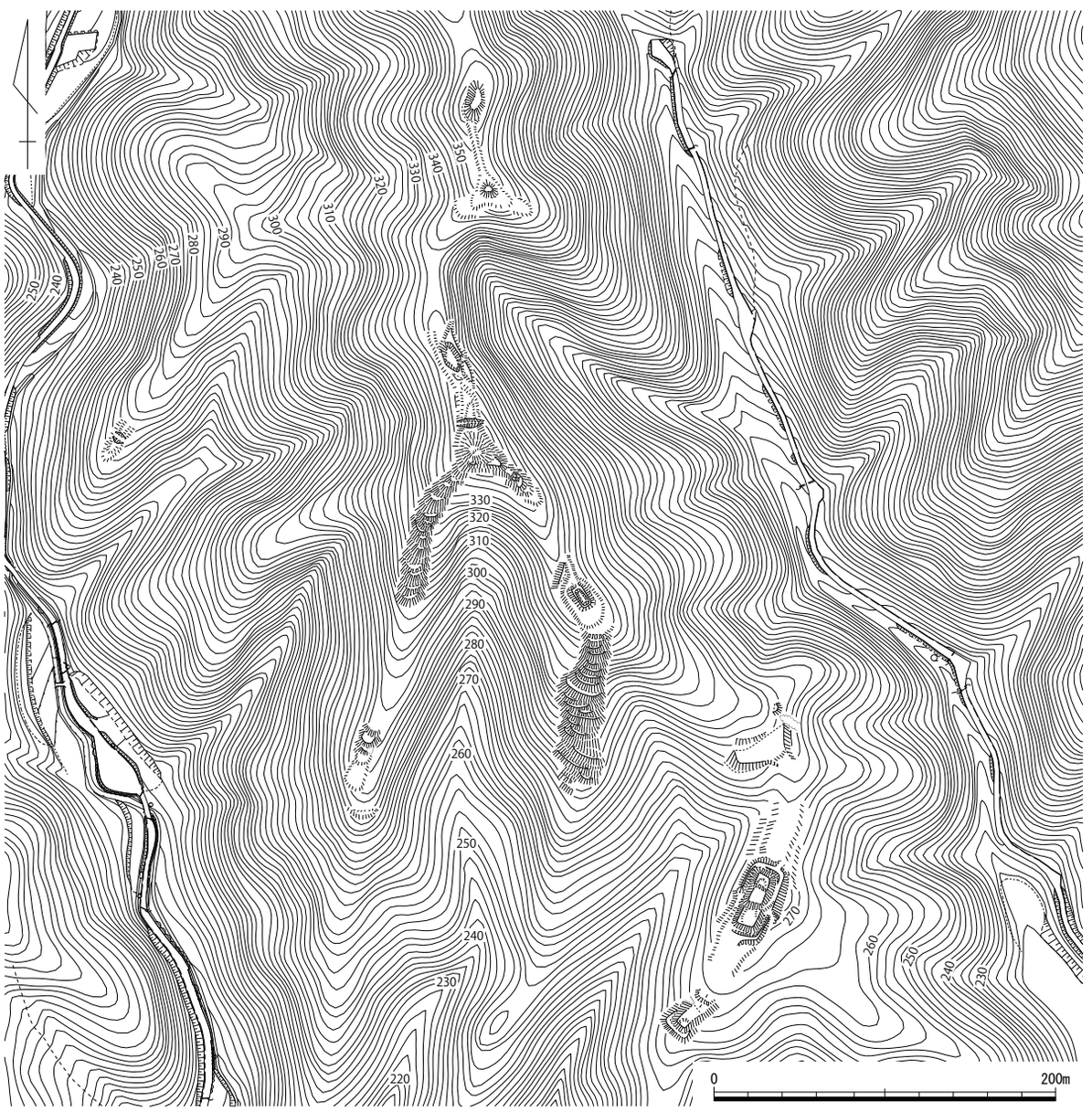
第 197 図　岩屋城陣城群縄張り図⑤（1 /4,000）



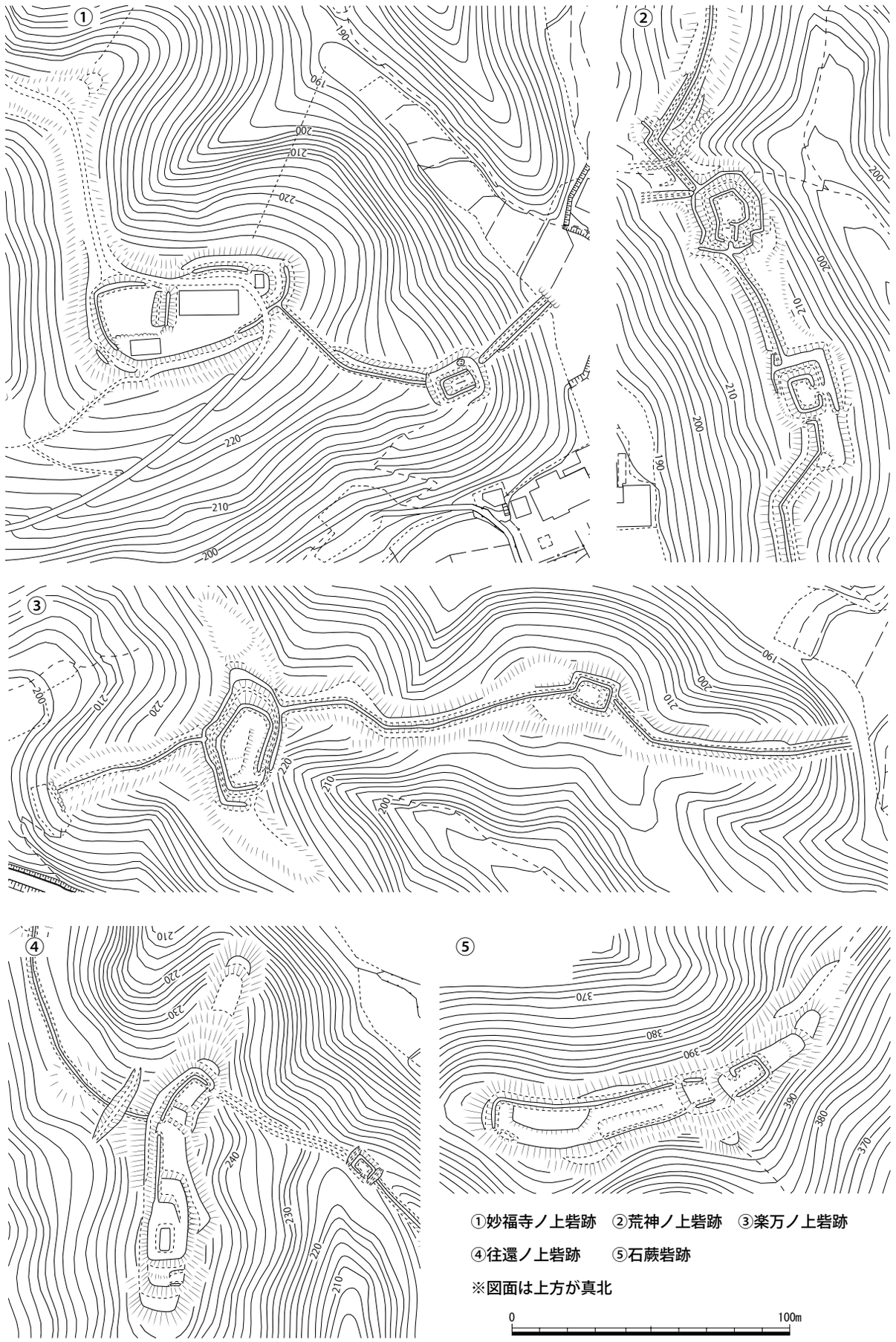
第 198 図　岩屋城陣城群縄張り図⑥（1/4,000）

し、その内２か所は、堀切によって城域を画するしっかりした砦である。２か所のうち西側の砦は、約 10 mの主郭とその南側にある約 30 mの曲輪を中心とし、東と南西方向に派生する尾根筋に曲輪を配する。中心の曲輪は、随所に土塁を配する。また主郭の北側には２条、東側尾根筋には１条の堀切を配し砦を画していた。東側にある砦は、約 20 mの主郭を土塁で囲み、南側と東側に各１面の曲輪を配する。また北側は堀切によって砦を画していた。この２か所以外にも土塁囲いの砦が１か所、櫓台程度の範囲がある平坦面が１か所存在する。なお尾根筋頂部の土塁は不明瞭となっていく。

○的場ノ峠砦跡（第 201 図⑩） 岩屋城の北東側に位置する。約 450 mの尾根筋上に３か所ほどの砦が存在する。その内中央にある砦は、東西に細長い尾根上に約 80 mに渡って曲輪を配する。その両端は堀切によって砦を画している。主郭は約 10 m四方であるが、３方向を土塁で囲んでいる。またその両脇に１面ずつの曲輪があり、長さ約 30 mと比較的大きい。両方の曲輪とも、北側に土塁が築かれる。また範囲内には櫓台程度の範囲を土塁で囲んだ箇所が２か所存在する。なお尾根筋頂部の



第 199 図　岩屋城陣城群縄張り図⑦（１/4,000）

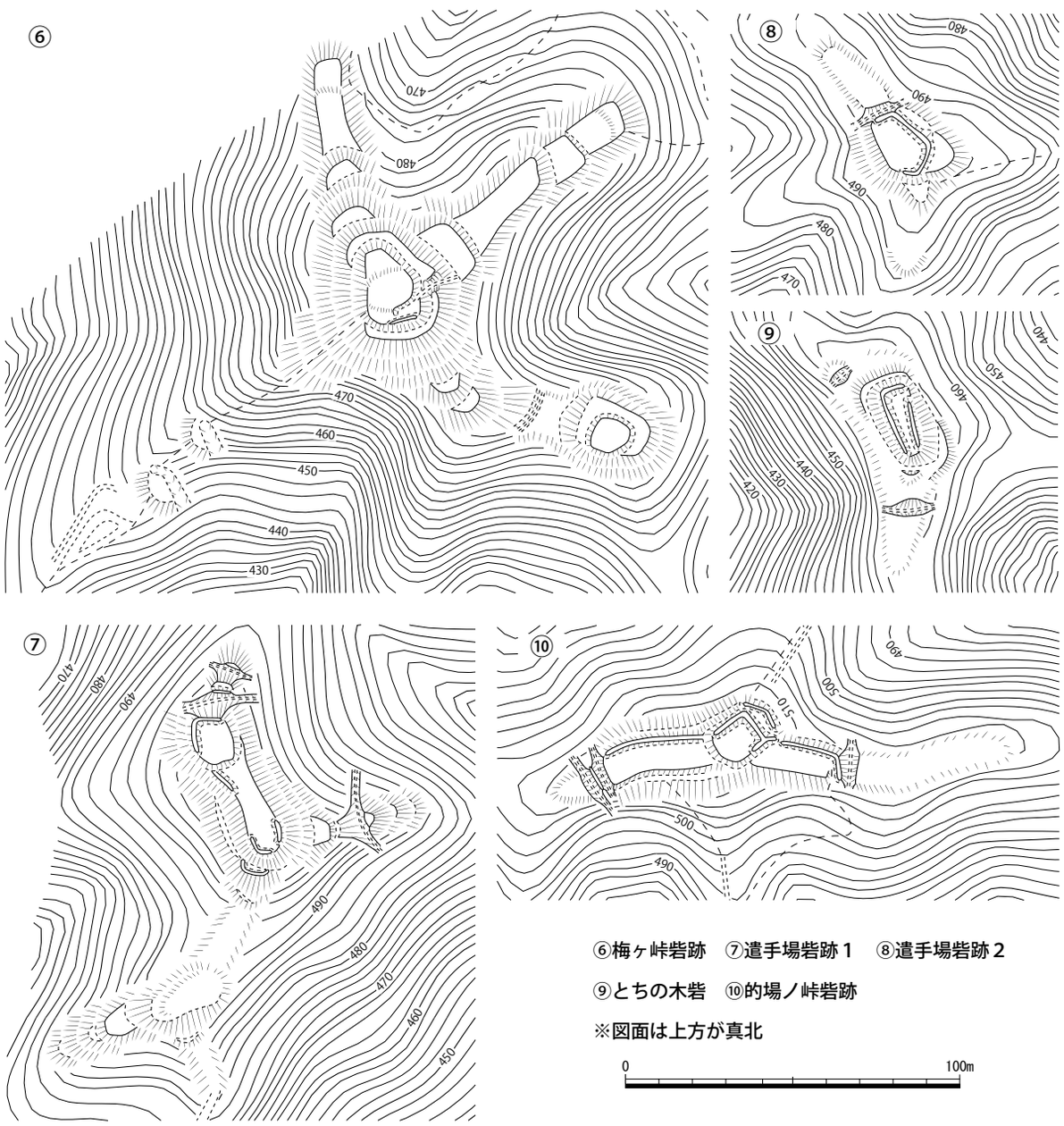


第 200 図　岩屋城陣城群部分図 1 （1 /2,000）

土塁は不明瞭である。

○とちの木砦跡（第 201 図⑨） 岩屋城の北東～東側に位置する。尾根筋約 550 mの間に 6 か所の砦を確認する。その中心は、長さ約 20 mの曲輪で、3 方向を土塁で囲み、尾根筋両側に堀切を設けている。この砦の南側にも頂部の両端を堀切で画する曲輪がある。この付近では、土塁線は不明瞭である。なお、的場ノ峠砦範囲の南端尾根から南西へ下る尾根筋に、小規模な曲輪を 8 か所連続で設けている尾根がある。

○井ノ奥砦跡　岩屋城の東～南東側に位置する。尾根筋約 900 mの間に 12 か所遺構を確認した。この内最大のものは、長さ約 50 m、幅約 30 mを測り、周囲には横堀を配する。その他の遺構は、平坦面だけのもの、堀切だけのもの、土塁で囲んだ小さな曲輪などがある。また、階段状に小さなや曲輪を設けた尾根が 2 か所、尾根筋の緩斜面部に広い平坦面と、尾根鞍部に窪地を掘削した場所がある。



第 201 図　岩屋城陣城群部分図 2（1/2,000）

これらの陣城群は岩屋城を取り巻くように総延長約 7㎞に渡って存在する。確認できる砦は 51 箇所にのぼり、それぞれ 100 ～ 150 mの間隔で存在する。岩屋城からみて南東側～南側～南西側に当たる、荒神ノ上砦・妙福寺ノ上砦・楽万ノ上砦・往還ノ上砦・柿ノ木ノ上砦・石蕨砦にかけては、各遺構を土塁線が明瞭に撃いでいる。この方面は旧出雲街道への出口付近にあたり、特に防御を厚くしたものと思われる。特に荒神ノ上砦や楽万ノ上砦では、主郭にあたる曲輪を二重の土塁で守るなど重厚な造りが目立つ。一方岩屋城の背後にあたる北側方面は、土塁線は不明瞭になる。しかし堀切を配した砦が６か所ほどあり、この特徴は岩屋城の北側のみに集中している。これらは、小さいながらも通常の山城と変わらぬ構造である。いわば陣城群は、岩屋城の南側においては土塁による線で囲い、北側は小規模な山城による点によって囲んだ形である。

文献・伝承　『美作古城史』『作陽誌』によると、天正 12（1584）年の岩屋城包囲戦における宇喜多方の各武将の配置が書かれている。往還ノ上には斉藤五郎左衛門、石蕨砦には戸川肥後、梅ヶ峠砦には江原兵庫、遣手場砦には杉原下野、的場ノ峠砦には長船越中、とちの木砦には川端右近、井ノ奥砦には小瀬修理大夫、荒神ノ上砦には浦上与九郎、妙福寺ノ上砦には包囲戦の主将である花房助兵衛、楽万ノ上砦には岡平内、をそれぞれ配した。『美作国諸家感状記』によれば、包囲戦時に岩屋城から見て西側にあたる石蕨砦と梅ヶ峠砦において抗戦の記載がある。（文献 133）　（小林）

写真 99　岩屋城跡と土塁線（南西から）

写真 100　楽万の上砦跡の土塁囲み（西から）

写真 101　楽万の上砦の土塁線（西から）

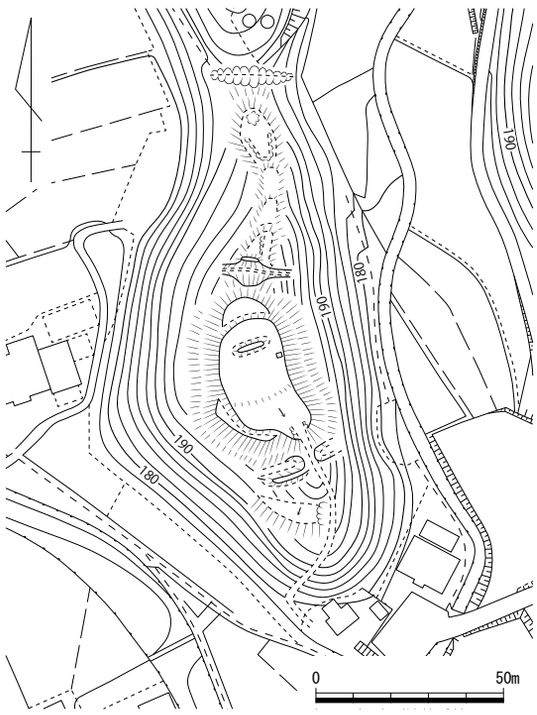
写真 102　柿の木の上砦の土塁線（東から）

193　宮ノ上城跡（みやのかみ）　　津山市宮部上　　地図 19 右

立地　宮部川の左岸に向けて北から張り出す丘陵の先端頂部に立地する。背後の丘陵との境は細い尾根でつながる。南麓に日吉神社が鎮座する。

概要　頂部に不整な長方形の主郭が置かれ、北側と南西側に小規模な曲輪を伴う。主郭の縁辺に土塁は認められないが､郭面上の北端近くには全長約６m、高さ約 60㎝の土塁状の盛土がある。主郭の北側には深さ３mほどの堀切があり、さらに北の尾根筋には曲輪の可能性のある不明瞭な平坦面が連続する。北端にある切通しは堀切かどうか判然としない。主郭の南側にも、現在の山道の左右に堀切状の窪みがみられるが、北側に比べてごく浅く不明瞭である。

文献・伝承　『久米町史』によれば、日吉神社の拝殿内に掲げられた額に、山名教清が岩屋城築城に際し、この地に武将を派遣し城塞を築かせたとの由来が記されている、という。　（岡本）



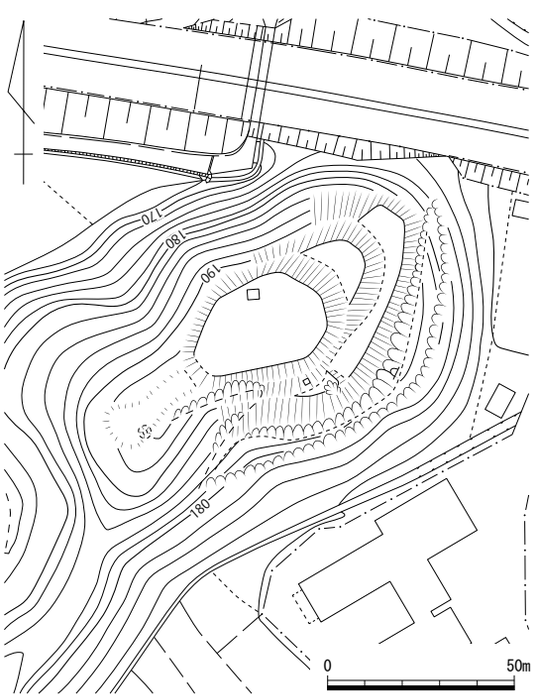
第 202 図　宮ノ上城跡縄張り図（１/2,000）

194　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　　津山市坪井上　　地図 19 右

立地　東流する久米川に南から細長く延びる低い尾根先端に立地する。

概要　尾根先端部に３面の曲輪を設ける。上段と中段間の切岸高は約３m、中段と下段間の切岸高は約 2.5 mを測る。上段の曲輪の南西端部はスロープ状に約 1.5 m下がる。最下段の曲輪は東斜面に長く平坦地を延ばし、南西端部に小さな段差がある。曲輪群から南西方向の尾根筋には堀切等は確認されなかった。なお、最下段の曲輪のさらに下方斜面に、半裁された古墳石室（茶臼山古墳）が崖面に残っている。

文献･伝承　『久米郡誌』は「茶臼山古戦場」とし、昔の城跡と伝え、坪井上の東端に位置し、永正 17 年（1520）10 月に浦上村宗が岩屋城城主中村則久を助けて小寺範職等を攻めたとき、ここに本陣を構えて、小寺勢を撃破した、とする。　（物部）



第 203 図　茶臼山城跡縄張り図（１/2,000）

195　姿山砦跡（すがたやま）　　津山市坪井上　　地図 19 右

立地　標高 440 m級の取首山から南へ派生した、標高 210 m前後の尾根先端頂部に位置する。平地との比高差は約 40 mとそれほど高くはない。久米川の南側隣にあたり、川を隔てた北西側に岩屋城跡が立地する。

概要　尾根頂部とその北側、また隣の尾根筋の計３か所に土塁で囲んだ曲輪が存在する山城である。最大の曲輪は、西側の尾根の頂部で、長さ約 50 m、幅約 30 mを測り、長方形を呈している。この曲輪は東側辺以外の３辺を土塁で囲んでいる。土塁の高さは１～ 1.5 m前後で、土塁の頂部より曲輪平坦面の方が高くなっている。この尾根筋の北側にある曲輪も､周囲を土塁で囲っていたようである。ただしこの曲輪の北側半分以上は、後世の改変によって状況がわからない。南側半に残る土塁の高さは 0.5 ～１m前後である。

さらに東側尾根にある曲輪は、長さ約 20 m、幅約 20 mと小さく、土塁は北側半分に残っている。この土塁は、西側尾根にあったもののように精美ではなく、曲輪を平坦にした時の削り残しのような形状であり、造りが粗い。

この山城は、３つの単郭の曲輪を近接させ、それぞれ土塁で囲んだ形状が特徴的であり、陣城的な役割であったと考えられる。

文献・伝承　『久米町史』では、赤松氏の本陣としている。土塁で囲んだ曲輪などから判断して、天正 12（1584）年の岩屋城攻囲戦に関連した山城の可能性が考えられる。　（小林）

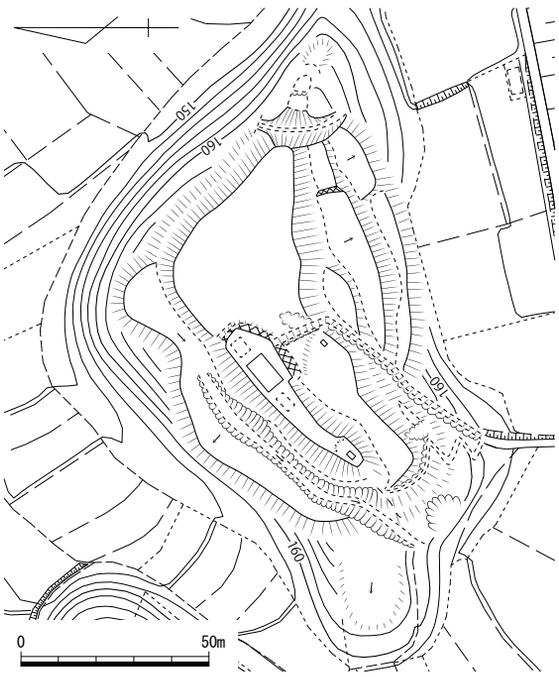
第 204 図　姿山砦跡縄張り図（１/2,000）

196　亀山（かめやま）城跡　　津山市坪井下　　地図 19 右

立地　西から東へ流れる久米川の南側隣に位置する標高約 170 mの独立丘陵上に立地する。江戸時代の坪井宿の北側にあたる。

概要　細長い主郭と、その直下の幅約 50 mの曲輪、さらに主郭の東隣にある長さ約 50 m、幅約 40 mと広大な曲輪からなる山城である。主郭には現在神社が建っており、改変が著しい。またこれらの曲輪の前面に、腰曲輪が数面続く。広大な曲輪の東側は 1 条の堀切で城域を画する。主郭の北東側は削平され改変が著しく、直下にある施設が横堀であるかどうか判然としない。曲輪は 1 面のみ存在する。当城は主郭を中心に、輪郭状に曲輪を配した小規模な山城である。

文献・伝承　『美作古城史』や『作陽誌』には、天文年間に河本肥後守が居城し、浅山与市を討ち取ったとある。（文献 133）　（小林）



第 205 図　亀山城跡縄張り図（1 /2,000）

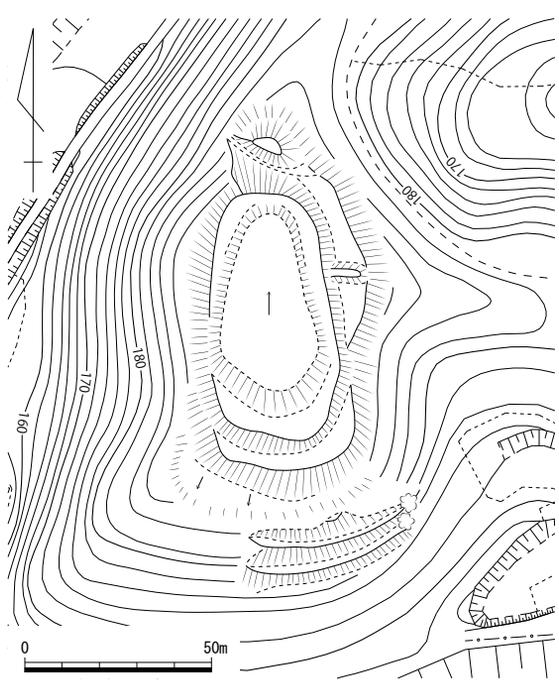
197　磯尾（いそう）城跡　　津山市中北上　　地図 19 右

立地　宮部川と久米川に挟まれた山塊から南側に派生した丘陵先端頂部に位置する。久米川の北側隣にあたり、亀山城は川を隔てた西隣に位置する。

概要　頂部の長さ約 50 m、幅約 30 mある広大な主郭を、帯曲輪と腰曲輪で巡らす山城である。主郭背後は 1 条の堀切で城域を画している。この堀切底面が腰曲輪に続いており、主郭西側から前面にあたる南側に向かって伸びる。途中直行する形で土塁が配される箇所がある。主郭西側には曲輪が伸びないが、これはこの方向が急峻であるためと考えられる。主郭前面側には、さらに数面の曲輪が配される。

この山城は、規模が 100 m前後と小規模であるが、比較的広い主郭を持つのが特徴である。

文献・伝承　『作陽誌』には、「以曾宇営」と記され、「敵見要害」であったとする。（文献 133）（小林）



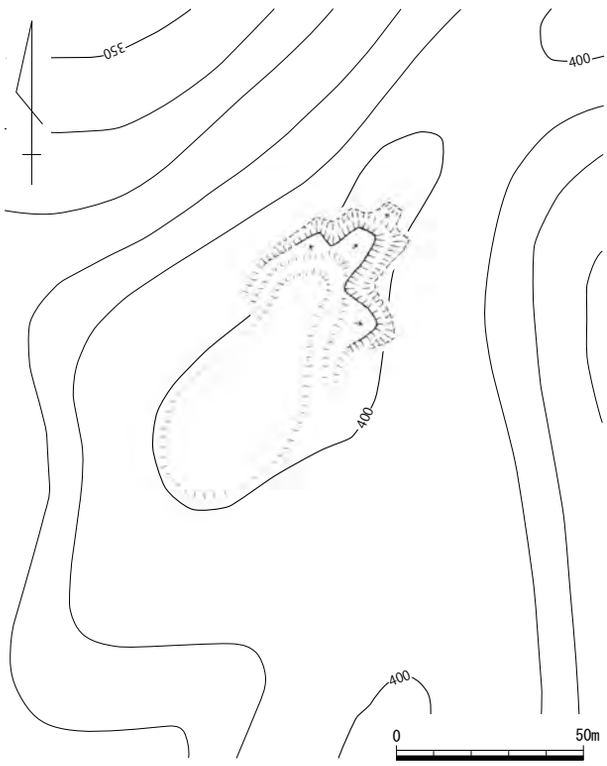
第 206 図　磯尾城跡縄張り図（1 /2,000）

200　城小屋城跡（しろのこや）　　久米郡美咲町中　　地図 19 右

立地　大谷川右岸の奥まったところにある標高約 400 mの山頂北半に立地する。比高は約 90 mである。大谷川に面した南西斜面は急峻であるのに対し、北東側の峰からは尾根伝いに勾配は緩い。大谷川沿いの眺望はよくない。近隣に城跡は少なく、南東約 4.5㎞に江原城跡、東 6.0㎞に高山城跡が分布する。

概要　頂部南半は自然地形であるが、頂部北東端のみ北東・北西・南東の３方向に横矢をかけるように小規模な曲輪を配置して、北東方向からの侵攻に対して守りを固めている。堀切や土塁は認められず、防御施設は切岸のみである。城域は自然地形の頂部を含めても、東西約 90 m、南北 32 mと小さく、臨時的な城跡であったと考えられる。

文献・伝承　周辺に「城（じょう）」の地名が残るほか、『改訂　岡山県遺跡地図』では三浦氏の持城と伝える。　（米田）



第 207 図　城小屋城跡縄張り図（１/2,000）

201　横岩城跡（よこいわ）　　久米郡美咲町中　　地図 19 右

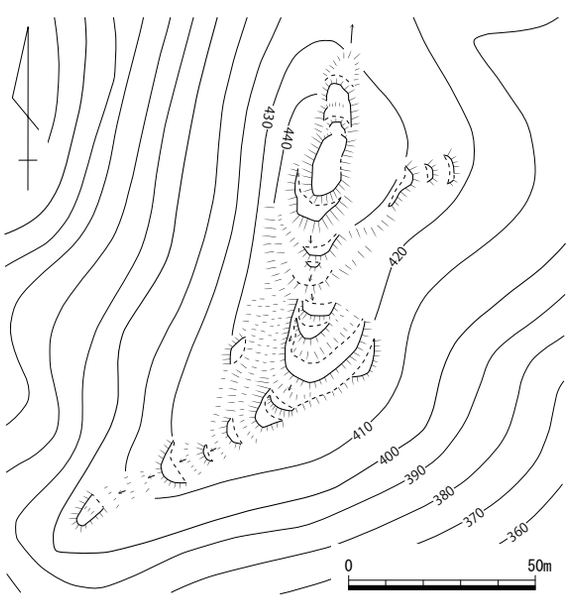
立地　大谷川左岸の山頂部の南西端に所在し、細長く延びる尾根部に位置する。

概要　連郭式の山城であり、最高所に築かれた長楕円形の主郭から尾根に沿って北側に 1 面、南側に 12 面程の大小の腰曲輪が連続的に認められ、東西斜面にも小曲輪が数か所造られている。

　各腰曲輪は比高差約 1 ～ 3 mを測る急峻な切岸が伴うが、自然地形自体が切岸状の急斜面を呈している箇所も見られる。ただし、土塁や竪堀などの防御施設は確認できなかった。なお、主郭には「杉家先祖之墓」の石碑が建つ。

文献・伝承　『旭町史』によれば、杉貞之丞が守り、嘉吉から天正年間まで存続したと伝わるとする。

（澤山）



第 208 図　横岩城跡縄張り図（１/2,000）

202　年末（とっせ）城跡　　津山市中北上・中北下・宮部下　　地図 20 左

立地　宮部川と久米川に挟まれた丘陵先端付近の頂部に位置する。宮部川流域の谷筋と久米川沿いにあった旧出雲街道を見下ろす眺望の地にある。また主郭からは、岩屋城を望むことができる。

概要　東西方向に細長い尾根筋の頂部に曲輪を築いた全長 500 mほどある山城である。ただし両端に位置する施設は、広い平坦地を有するものの判然としないところもあり、実際の城域は、主郭とその両隣にある尾根頂部の曲輪のみであった可能性も考えられる。当城は、それぞれの曲輪群が断続的に連なるわけではなく、独立して曲輪を築いており、ただしその間を帯曲輪によって繋ぐことにより、連結していたようである。

頂部にある主郭は、長さ約 40 m、幅約 20 mであるが、平坦地は 20 m前後のみで東側はゆるやかに傾斜している。この平坦地、傾斜地を含めて土塁が全体を囲んでいる。土塁は、高さが 0.5 m～1 mほどで、東側に虎口状に開いた箇所があり、また主郭南西部に折れを持つ。主郭の西側隣にある尾根頂部は、長さ・幅とも 10 m前後の方形の平坦面があり、やはり周囲を土塁で囲んでいる。この山城の特徴は、主郭とこの西側頂部の間を傾斜があるにも関わらず土塁で繋いでいることである。さらにその斜面部に帯曲輪を巡らしている。この２つの曲輪群の両側斜面にはそれぞれ曲輪状の平坦地が数面続いており、主郭東側の鞍部は堀切１条を配し城域を画している。そのためこの曲輪群２つを中心として堀切までの長さ約 180 mが、狭義の城域と考えることが出来る。

主郭の東隣にある尾根頂部は、長さ約 40 m、幅約 20 mの平坦地がある。現状では改変が著しく詳細は不明であるが、北側に削り残された高まりが土塁の名残であった可能性がある。またこの平坦地のさらに東側には、「馬場」と呼ばれる平坦な地形が残る。主郭西側にある尾根頂部にも平坦地があり、10 m弱ある井戸状の凹みがある。この頂部の南西斜面にも曲輪状の施設がある。山城の広義の城域は、この西側平坦地から東側端の「馬場」までを含めたものと考えることが出来る。

文献・伝承　『作陽誌』には、宮部下村に属した城としている。また『久米町史』では、田辺氏の居城で毛利方中村氏による岩屋城攻撃の際に落城し、田辺氏は自害したと記される。　（小林）

写真 103　主郭（南西から）

写真 104　主郭土塁（南東から）

第 209 図　年末城跡縄張り図（1 /2,000）

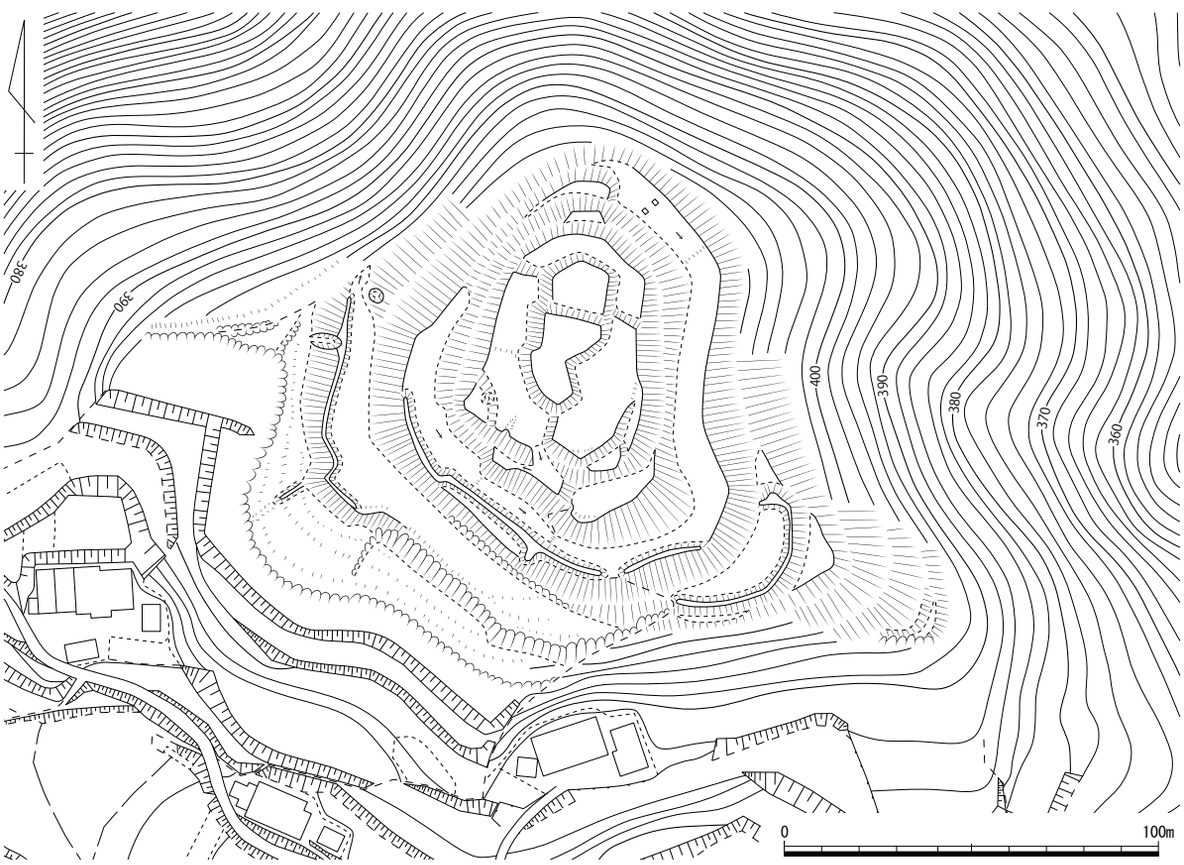
203　円宗寺城跡（えんじゅうじ）　　津山市里公文上　　地図 20 左

立地　久米川の南に位置する幻住寺山山塊に端を発する公文川が南東方向に深い渓谷を造っている。円宗寺城はその渓谷を北に見下ろす高原端部に立地する。眺望は谷が開く南東方向に良い。

概要　山頂に配された、屈曲する平面形の曲輪と、その北約１mの段差をつけた曲輪の２つが主郭と考えられる。その主郭の周囲を３面の曲輪で囲み、主郭との比高は約 1.5 ～ 2.5 mを測る。その下方に、外方へ小さく突出する曲輪を数か所設けている。さらに、これらの曲輪群の周縁に高さ約４～７mの切岸と帯曲輪を造っており、帯曲輪は北東部で一部途切れるがほぼ一周する。帯曲輪の南縁に沿って高さ約１mの土塁が付設され、小さな折れ曲りと突出部が見られる。さらに、その約６m下、南東の尾根筋に２面の腰曲輪を設け、上段の曲輪縁辺に土塁を配している。また、南西側斜面には高さ７～８mの切岸と長い曲輪を造成し、その西縁に折れを持つ土塁を築いている。その下方にわずかな自然の斜面があり、その下一帯は階段状に水田化されている。

この城は、平地からかなり離れた山塊中に位置する点や、曲輪や土塁の折れを多用している点、草木がなければ、壁のような３段の高い切岸が重層的に見えるだろうと想像できる点が、周辺の城館と異なる。

文献・伝承　『西作誌』は「円宗寺山」として、毛利左近亮がこの山と平福に営を構え、苫西郡の目崎城主と争って敗死したとする。（文献 133）　（物部）



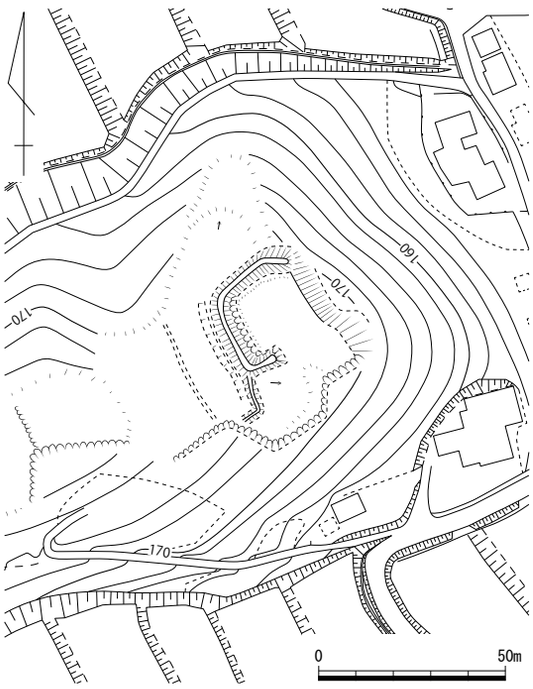
第 210 図　円宗寺跡縄張り図（1 /2,000）

204　鍋山（なべやま）城跡　　津山市神代　　地図 20 左

立地　北流する神代川西岸の低丘陵端部に立地している。

概要　一辺約 20 mの「コ」の字型の土塁が残る。現状で土塁の規模は、幅約６m、高さは「コ」の字の外側で約１m、内側で約３を測り、土塁の外側より内側がかなり低い。土塁のない東側は切岸となっており、急傾斜である。南側の土塁は、その断面から後世に削平されたと推定できるが、もし、東の切岸まで続いていたと仮定するなら、内部から外部に容易に出ることのできない空間となり、通常、土塁の内側より外側を高くする城館の土塁とは全く逆である。

文献･伝承　『久米町史上巻』は「東畝二号遺構 (鍋山遺構) とし、土地の人は南方に鍋を造っていた所があると話すが、この遺構は不明とする。　（物部）



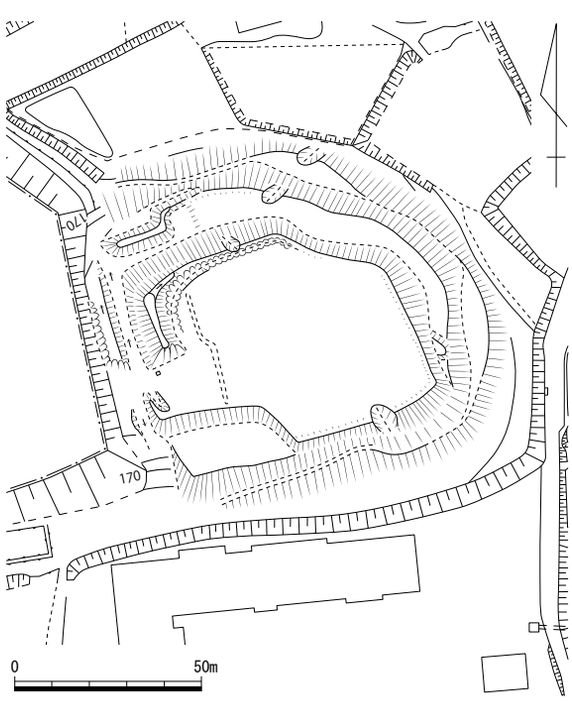
第 211 図　鍋山城跡縄張り図（１/2,000）

205　構（かまえ）城跡　　津山市神代　　地図 20 左

立地　神代川源流部に位置する、低丘陵先端部に立地する。

概要　東に伸びる尾根を堀切で画し、その東側に広さ東西約 60 m、南北約 50 mの主郭を配する。堀切と接する西縁には高さ約３mの土塁を衝立のように築き、その南部は後世に削平されていると考えられるが、本来は主郭南縁まで延びていた可能性がある。主郭の約３m下斜面に曲輪と帯曲輪、さらにその下２～４mに曲輪とそれらを繋ぐ犬走りが確認できる。帯曲輪の西端部には屈曲する高さ約２mの土塁がある。また、曲輪の端部を溝状に掘削した虎口が所々にあるが、往時のものか不明である。

文献・伝承　『作陽誌』は「川原屋敷」とし、宇喜多秀家の将川原四兵衛信基の屋敷で、四方に堀があるとする。（文献 133）　（物部）



第 212 図　構城跡縄張り図（１/2,000）

206　平福寺城跡（ひらふくじ）　　津山市里公文　　地図 20 左

立地　公文川の南側隣にあり、標高 470 m級の山塊から東側へ派生した、標高約 200 mの尾根先端頂部に位置する。平地との比高差は約 40 mである。頂部からは北西側から東側にかけての低地を見渡せる。

概要　南北方向に２つの曲輪群を並べ､その間を最大高８mで長大な堀切によって画する山城である。北側曲輪群は、幅約 30 mの多角形を呈する主郭をもち、土塁で全周を囲っている。切岸も最大高約 10 mあり急峻である。この主郭から北東方向にかけて２面の曲輪を配する。これら曲輪にも北側辺などには土塁を配している。さらにこの曲輪の先端部分は、尾根筋を囲うように横堀と土塁を配している。この横堀に取り付くように３本の竪堀が配される。また主郭の西側斜面にも８本の竪堀を配するなど、防御施設が整っている。南側の曲輪群は、長さ約 50 m、幅約 40 mと広大であるが、土塁に囲まれることはなく単純な構造である。側面には帯曲輪状に細い平担地が全周する。南側にある堀切も浅い。当城は、規模自体は 200 mにも満たない城であるが、特に北側曲輪群の重厚な造りが際立つ。土塁を多用するなど、同じ公文川流域にある円宗寺城との関連が考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』には城主が毛利左近尉とし、『作陽誌』は毛利左近亮としている。毛利左近は、鏡野町にある目崎城主との争いに敗れて戦死した。（文献 133）　　（小林）

第 213 図　平福寺城跡縄張り図（1 /2,000）

写真 105　遠景（南西から）

写真 106　主郭上の土塁（東から）

写真 107　土塁と横堀（北西から）

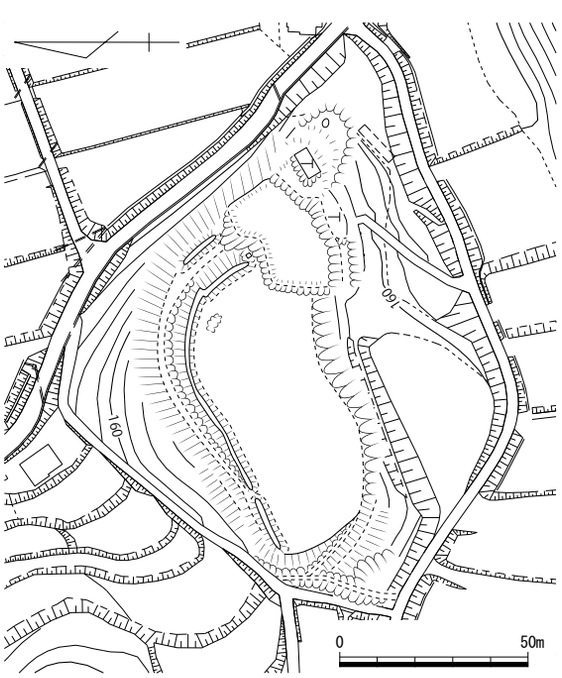
写真 108　堀切（東から）

208　八幡長者屋敷跡（はちまんちょうじゃ）　　津山市里公文　　地図 20 左

立地　公文川の西側隣にあり、標高 470 m級の山塊から東側へ派生した、標高約 170 mの尾根先端頂部に位置する。平地との比高差 20 mほどで、高くはない。当城の北西には平福寺城跡が存在する。

概要　頂部は、長さ約 70 m、幅約 40 mと広大な主郭で、北側半分の辺部に高さ最大約 2.5 mの土塁が巡っている。主郭の南側端は削平されており、本来はもっと広い敷地であったと考えられる。土塁は東側部分で折れを持ち、また２重になっている。土塁の外側は帯曲輪状に道が巡っている。主郭の東側は、２面以上の平坦地があり、かなり改変されている。これらも本来は曲輪であった可能性が高い。また主郭西側にある現道路は、本来は堀切であったと考えられる。これらを含めた当城の全長は、約 140 m前後なると推定する。

文献・伝承　城主等は不明である。　（小林）



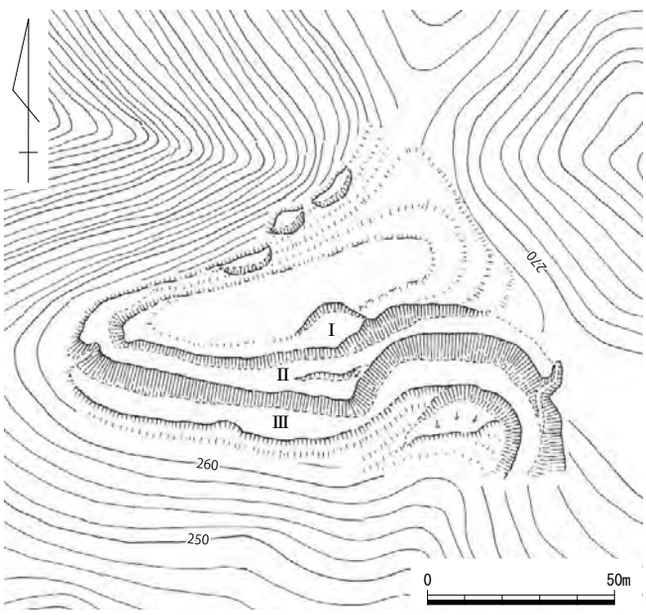
第 214 図　八幡長者屋敷城跡縄張り図（１/2,000）

211　天神山城跡（てんじんやま）　久米郡美咲町錦織・打穴下・津山市福田　地図 20 右

立地　北を倭文川、西と東側を打穴川と皿川の三河川に挟まれて連なる標高 272 mの大平山山頂に位置する。

概要　城は緩やかな山頂部から、西側に延びる尾根の南側斜面部にあって、大きくは三段の切岸によって地形された３面の曲輪で構成される。最大規模を誇る曲輪Ⅱは中段に造成された全長 70 m、幅３～８mの直線的なもので、約 2m 上段には曲輪Ⅰが、約４mの切下段には比較的緩やかな曲輪Ⅲが造成されている。一方、端部から北側にかけては２～３mの小規模な曲輪が点在するが、これらによって防御された頂部は全体が自然地形を残す。こうした特徴は、築城年代を南北朝時代に示唆される。

文献・伝承　中世史料はもとより近世地誌類にも城名は見られない。　（島崎）



第 215 図　天神山跡縄張り図（１/2,000）

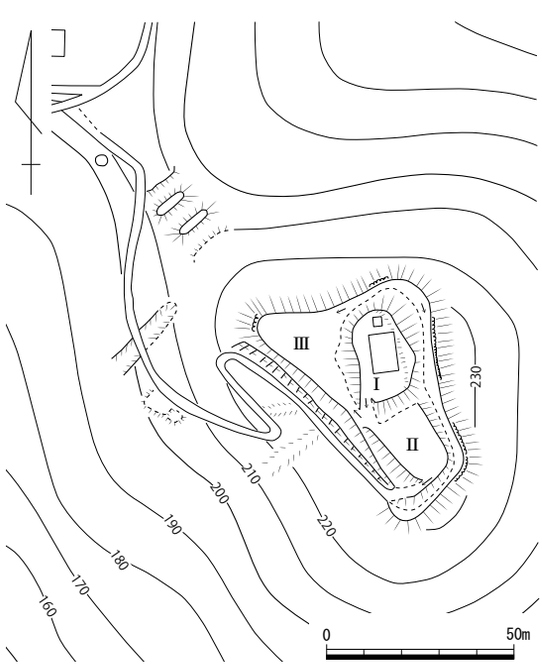
212　一之瀬（いちのせ）城跡　久米郡美咲町栃原　地図 25 右

立地　大瀬毘川に向かって張り出す尾根端部に位置する。

概要　主郭（曲輪Ⅰ）南側の約 2m 下方に曲輪Ⅱを設ける。主郭の神社裏には「摩利支天宮」の石碑や五輪塔がある。また、主郭西側の約 3m 下方には曲輪Ⅲが築かれ、各曲輪は通路でつながっている。

主郭や各曲輪の外縁部には、後世の改変の可能性もあるが、野面積みの石垣・石列が認められる。鞍部には深さ約２～ 3m の堀切２条が設けられ、西側斜面にも竪堀１本が見られる。谷頭には直径約 2m の窪みが見られ、井戸が想定される。南側斜面には石垣や平坦面が伴う道が巡るが、時期不詳である。

文献・伝承　『古城之覚』に久米北郡垪和村の竹内中務が城主の「一之瀬之（城）」、『作陽誌』に竹内中務丞久盛が居城した「一瀬山堡」とある。『久米郡誌』には「大串城」とも記す。（文献 133）（澤山）



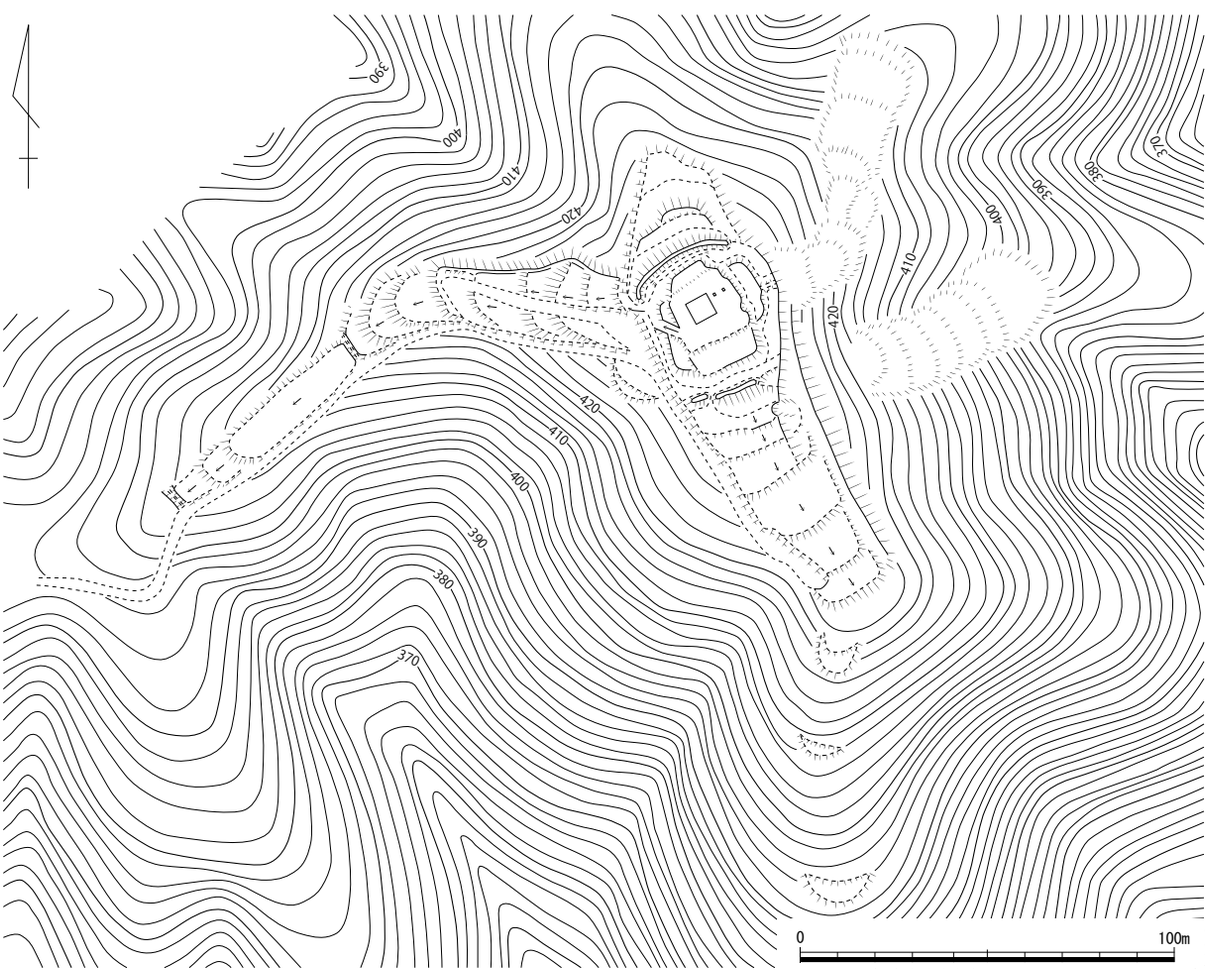
第 216 図　一之瀬城跡縄張り図（１/2,000）

213　高山（たかやま）城跡　　久米郡美咲町北・津山市油木北　　地図 20 左

立地　美咲町と津山市の境界にあたる倭文川左岸の山頂部に位置する。

概要　方形を呈する主郭の北東隅には横矢掛りが見られ、四方に小曲輪が伴うが、他と比べて東側の造作がよい。これらの下方には帯曲輪が巡るが、南・北側に築かれた土塁と主郭の間に堀状の窪みが生じている。また、帯曲輪の南・北側に比べて、東・西側がやや低い平坦面を形成している。主郭からは 5 方向に支尾根が延びている。このうち、西方向に延びる尾根上には、連続的に腰曲輪が築かれており、端部には堀切が認められる。また、その他の方向に延びる尾根にも、同様に平坦面が見られるが、後世の地形改変の可能性が高いものも含まれると思われる。なお、材木伐採のための作業道によって一部破壊を受けている。

文献・伝承　『古城之覚』には久米北郡油木村の江原兵庫親次が居城した「高山之（城）」、『作陽誌』は油木村と山手公文村の江原兵庫助が居城した「江原堡」、『美作鬢鏡』は江原兵庫が居城とある。また、天保国絵図に「高山古城跡」、『久米郡誌』は「江原城」、「高山城」とも呼ばれるとあり、『久米町史』は「高山城」と記している。（文献 133）　　（澤山）



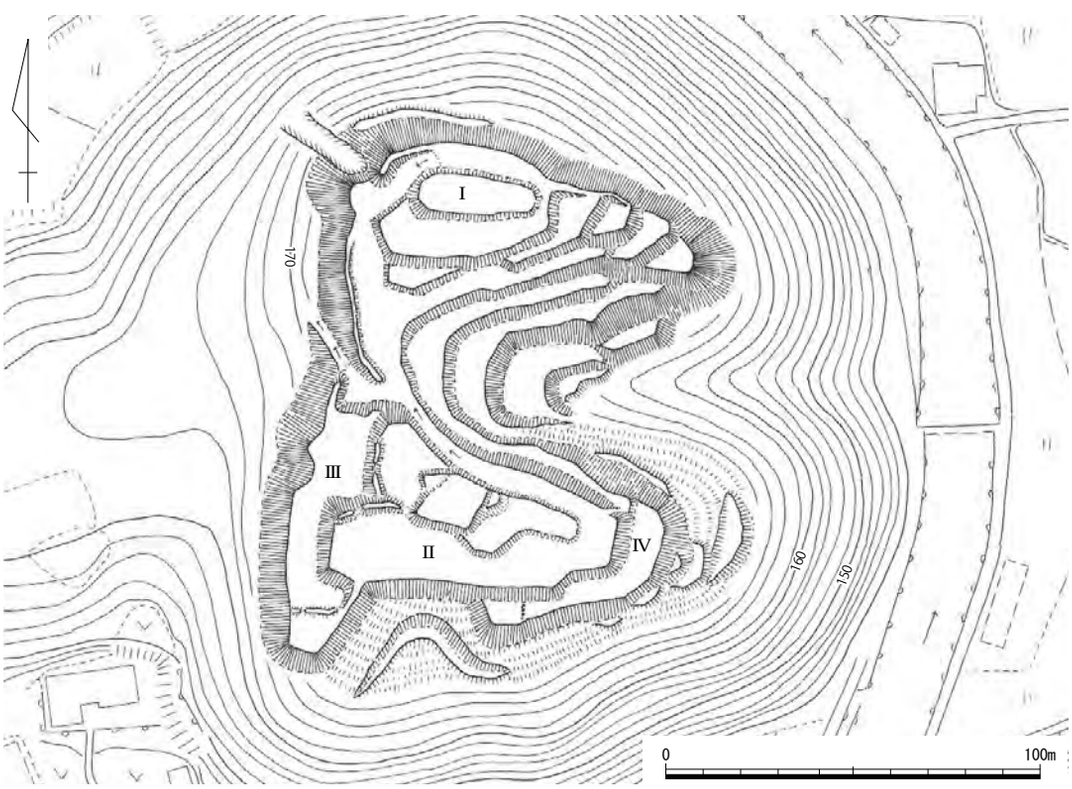
第 217 図　高山城跡縄張り図（1 /2,000）

214　鬼山（おにやま）城跡　　久米郡美咲町打穴中　　地図 20 右

立地　津山往来と出雲往来を繋ぐ坪井道沿いには、打穴川が下流域に形成した平野部が広がる。城はこの平野部中央に位置し、標高 170 mの鬼山山頂部に所在する。

概要　城の所在する鬼山には頂部二峰が南北に連なり、鞍部を挟んで尾根筋が二股状に繋がった山容である。城はその南北頂上部とこれを繋ぐ鞍部、さらに谷部斜面にかけて曲輪が配置され、全体を要害化している。防御上最も重点がおかれたのは比較的緩やかな西側で、南北総延長 130 mにわたって造成された高さ 7 m前後の切岸が堅固な城壁の役割を担っている。この中央部には現在道が斜めに取り付き､道を上がった鞍部上面端部には北側と南側からの高さの異なる土塁が喰い違いで見られる。その構造が枡形を意識した状態にあることから、本来ここに虎口が存在した可能性が高く、構築年代も天正以降と考えられる。曲輪は、南北ともに頂部を中心にその周辺部に階段状に見られるが、そのあり方には相違が見られる。北側は、頂部に存在する長さ 30 m、幅 10 mの長楕円形の曲輪Ⅰを中心に東側尾根筋には舌状の曲輪を、谷部に面した斜面には 50 m以上の長い曲輪を高さ 2 m前後の切岸により連結させる。一方、南側は、頂部の曲輪Ⅱは中央に方形を意識した高まりを造り、その周辺には幅 10 ～ 20 m、長さも 70 mを越える直線的で広い面を造成したもので、その下段にも 3 m以上の高い切岸を廻らした広い曲輪Ⅲ・Ⅳを配置する。北と南側のこうした縄張りの違いは築城もしくは改修の有無の差と推測される。

文献・伝承　『古城之覚』では「鬼山之」として、城主不詳とする。『作陽誌』には「鬼城」とされ、『三保村誌』では戦国時代に玉置玄蕃守が居城とする。『美作古城史』では、正平 17（1362）年に福依重信が築城したとの記事を引用する。　（島崎）



第 218 図　鬼山城跡縄張り図（1 /2,000）

215　江原（えばら）城跡　　久米郡美咲町里　　地図 25 右

立地　通谷川左岸の「城山」と呼ばれる標高約 330 mの山頂部に立地する。比高は約 170 mである。近隣では通谷川を挟んで南へ約 1.6㎞の丘陵に三宮城跡が分布する。

概要　頂部にある狭長な曲輪Ⅰを中心とし、頂部の南北と南に延びる尾根に曲輪を連続させた連郭式山城である。城域は東西 130 m×南北 310 mと大規模である。

主郭となる曲輪Ⅰは東西 55 m×南北 10 mの狭長い曲輪で、北辺に土塁をもつ。土塁は幅広で高さ 1 ～ 2 mと強固に造られている。土塁の中央北斜面には石積みが認められるが、一部は後世のお宮等で改変された可能性がある。さらに曲輪Ⅰの北側の切岸は極めて急で、曲輪Ⅲとの高低差が 8 m近くある点は注目される。曲輪Ⅱは曲輪Ⅰの南側に配置されており、規模は東西 14 m、南北 42 mである。東辺下には曲輪Ⅰから南側に配置された小曲輪と犬走りで繋がる。曲輪Ⅲは東西 14 m×南北 43 mで、北端にわずかに痕跡をとどめる低い土塁がある。曲輪Ⅲより南西側の尾根の張り出しには小曲輪があり、その上には曲輪Ⅱと繋がる犬走りがある。

防御施設として、曲輪Ⅲの北端の鞍部に幅約 13 mの堀切があり、北側の尾根筋を遮断する。堀切の南東肩には石積みが一部で確認できる。また、南側の尾根の小曲輪南端には竪堀を 1 本ずつ東西に配置する。さらに標高約 240m の尾根の南東端には小曲輪を置き、南端に竪堀を 1 本ずつ東西に配し、南方向からの防御を固める。

文献・伝承　『古城之覚』によると、「中山手之（城）」ともいい、江原和泉守佐次を城主と伝える。また、『作陽誌』は「中山手堡」とし、永正年間（1504 ～ 1521 年）の末に江原和泉守佐次が倭文庄を領有してから築城し、又四郎久清、兵庫介親次が相次いで居城したと伝える。　（米田）

写真 109　曲輪Ⅰ（東から）

写真 110　曲輪Ⅰ北辺の石積み（西から）

写真 111　北側鞍部の堀切（東から）

第 219 図　江原城跡縄張り図（1 /2,000）

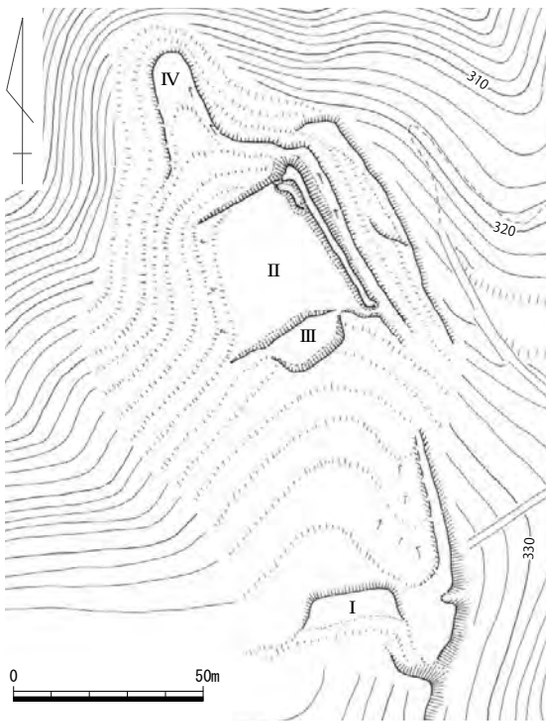
219　金地（かなち）城跡　　久米郡美咲町和田北　　地図 25 右

立地　一之瀬城跡と大瀬毘川流域を北西眼下に俯瞰可能な標高 310 ｍの築地山の北側斜面から端部に所在する。

概要　築地山の東側には全長約 100 ｍにわたって土塁状の高まりと切岸が存在する。この西側には 20 × 10 ｍに造成された平坦面Ⅰが見られるが、他は全て自然地形である。

明確な城郭遺構が存在するのは、曲輪Ⅰの北側約 50 ｍ下方で、舌状を呈する緩やかな斜面に方形館跡Ⅱと小規模な曲輪Ⅲが見られる。館跡は、南側を切岸によって、東側は全長 40 ｍ、高さ 1 ～ 3 ｍの土塁で、北側は土塁と造成によって画されている。また、一之瀬城の城内を監視可能な北下方の先端部には、曲輪Ⅳが存在する。

文献・伝承　地誌には見えないが宇喜多勢による一之瀬城攻めの陣城とする伝承が存在する。（島崎）



第 220 図　金地城跡縄張り図（1 /2,000）

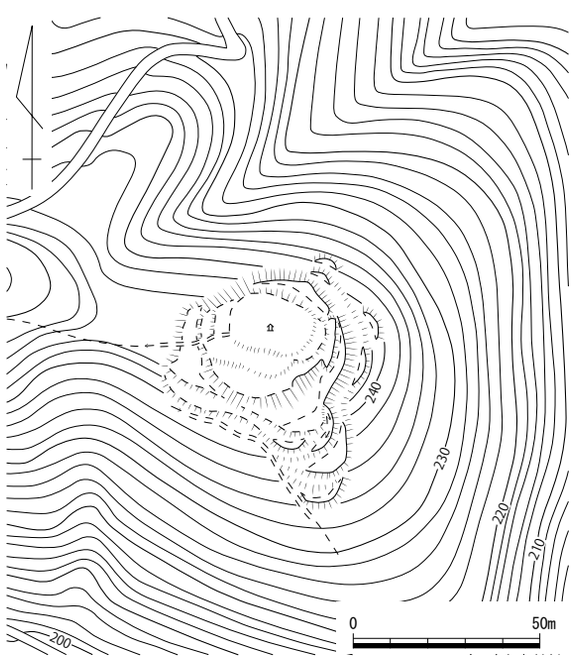
220　城山（じょうやま）城跡　　久米郡美咲町打穴北　　地図 26 左

立地　打穴川西岸に所在する山頂部から南東方向に延びる尾根端部に位置する。

概要　単郭式山城であり、最高所に自然地形を残す楕円形の主郭を設けて、地形に沿って周囲に 4 ～ 5 面程度の帯曲輪を巡らし、さらに周囲には小曲輪を数か所配置している。また、帯曲輪東側の一部では、横矢掛り状の肩口の屈曲が見られる。

文献・伝承　近世地誌の記述は認められない。

（澤山）



第 221 図　城山城跡縄張り図（1 /2,000）

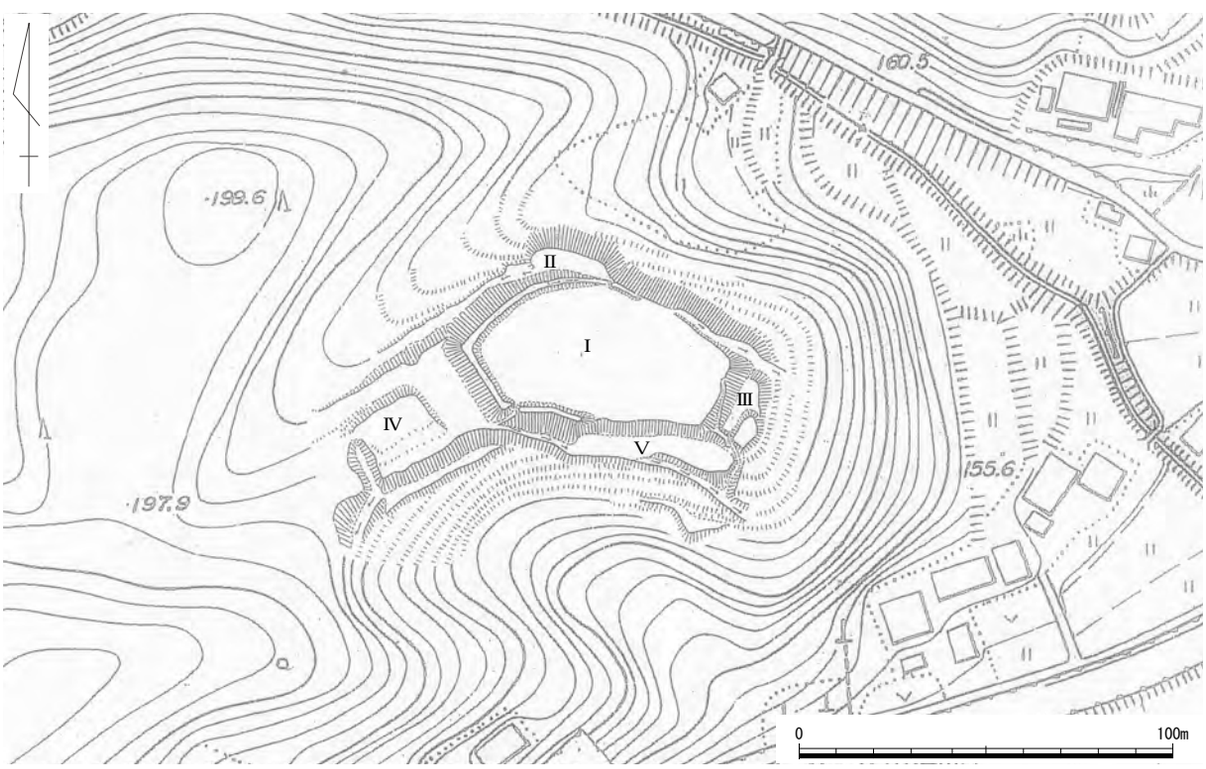
221　細田城跡（ほそだ）　　久米郡美咲町打穴西　　地図 20 左・26 左

立地　打穴川中流域にあって、打穴川が左岸の釜屋川と合流する地点は、川沿いの街道に面した交通の要衝である。城跡は、この二つの河川に挟まれた西から東に舌状に張り出した標高 192 m、低位部との比高差約 30 mの尾根の端部に所在する。城跡からは街道筋はもとより北に広がる平野の一望が可能で、北の鬼山城跡と南の城山城跡とはいずれも約１ｋｍの間隔で、両者のほぼ中間に位置する。

概要　城は、西から東方向に舌状に張り出した「城ノ南」という地籍名を有する尾根の端頂部に構築された主郭を中心に、周囲には小規模な曲輪の配置が見られる。

主郭Ⅰは、周囲の曲輪や斜面からは高さが４～６mの切岸上に造成されていて、全長約 70 m、幅 20 ～ 35 mの平面五角形を呈する。西側には逆コ字状に下端幅約３m、高さ約２mの土塁が造成され、西側尾根筋の防御が固められている。また、これに続く北側張り出し部分には、北側斜面下「城ノ口」という地籍名の谷筋からの城道が取り付く曲輪Ⅱが付設されている。一方、主郭を取り巻く約４m下段東側には桝形を呈する長さ 18 m、幅５～ 15 mの曲輪Ⅲが端部に土塁状の高まりを残して配置される。また、曲輪Ⅰの西側下方の尾根には幅７m、長さ 16 mの平坦面Ⅳが造成され、主郭との間には幅７m、深さ１mの堀切状の低位部が存在する。さらに、主郭の南側には全長 45 m、幅７m前後の曲輪Ⅴが配置されている。主郭を中心としたこうしたあり方から細田城は館の機能をもった館城と考えられる。

文献・伝承　地誌類に記載が見られない城である。『作陽誌』には、天神山の城主吉川広家に関係して「細田も其の居る所なり」との記事が見られる。この「細田」が細田城と考えられ、福井国太郎『地名史考』でふれられている「細田の構」がこれにあたると推測される。　（島崎）



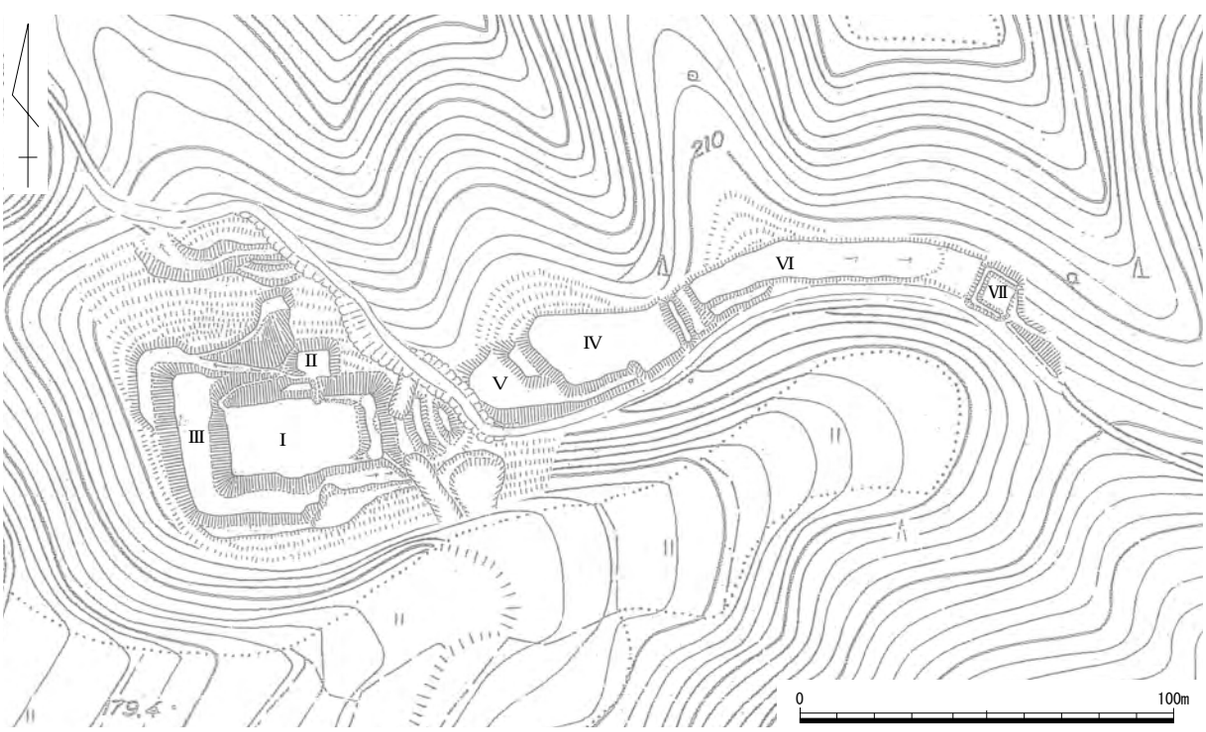
第 222 図　細田城跡縄張り図（１/2,000）

222　天神山城跡（てんじんやま）　久米郡美咲町打穴西　地図 26 右

立地　打穴川右岸にあって、東の鍋峪山塊から約 200 m以上西に延びた細長い尾根の先端部に位置する。城の所在する先端部は標高 216 m、麓の打穴西集落との比高差４０ｍを測る。

概要　城は、尾根先端部から東に約 80 mの尾根幅が狭まくなった地点に幅３～５m、長さ 10～15 mの比較的小規模な２条の堀切とそこから両側に竪堀が掘開されており、これより西側先端にかけての範囲を本城域とする。主郭Ⅰは西側に幅 3m、長さ 20m の土塁をもった、全長 40 m、幅 20 mの規模に造成された平面長方形を呈するものである。北側一辺中央部には西の土塁から延びたやや低い土塁との間に幅約３mの虎口が存在する。ここには主郭西側最下段のＬ字状の帯曲輪から北側斜面を通って上がってきた城道が一辺約 10 mの外枡形を呈する曲輪Ⅱに取り付き、これから虎口に上がるもので、防御に重点を置いた織豊系の縄張り構造といえる。主郭の西と南側約４ｍ下段には幅７～ 10 mのＬ字状を呈する帯曲輪Ⅲが取り付く。なお、主郭を防御する２条の堀切の東側には近年の山道の敷設により地形が改変されていて城との関係が不明ながら、上下二段に造成された曲輪ⅣとⅤが、またその東側には簡易な土塁と堀切によって分断された自然面を残した全長 80 mにも及ぶ曲輪Ⅵが存在する。さらに、東側尾根の取り付き部分、かつて小規模なこの尾根を切断する谷が存在した地点には、東斜面側を除く三方向に土塁が巡らされた一辺 10 mの正方形の曲輪Ⅶが存在する。その内面は西側尾根上面より一段低く、面は東斜面に向けて下がる。ここに北の谷筋から上ってくる道の痕跡が見られることから、城の東端を固める虎口としての性格が窺われる。

文献・伝承　『古城之覚』には久米北郡下打穴村の「天神山之」として城主を吉川蔵人広家とする。『作陽誌』では「天神山」として、「かつて吉川左衛門尉広家が住み」、と記されている。　（島崎）



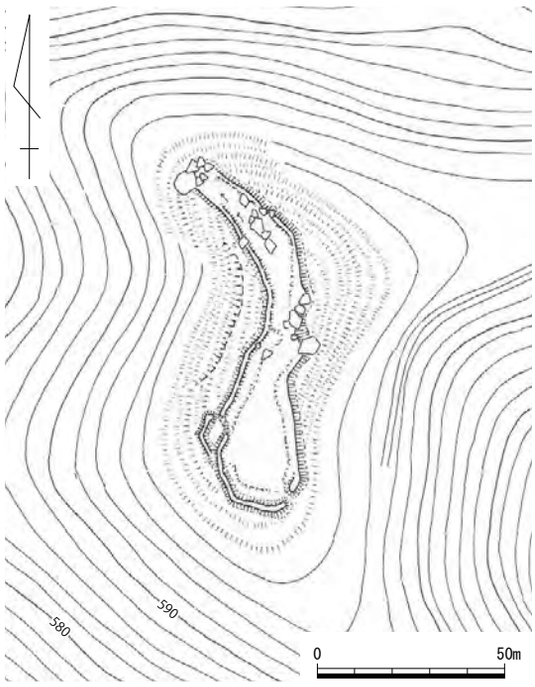
第 223 図　天神山城跡縄張り図（１/2,000）

223　中の城（なかのしろ）城跡　　久米郡美咲町両山寺　　地図 26 左

立地　高陣城跡から南西方向に派生した尾根筋にあって、阿井の集落を南眼下に眺望可能な標高 603 mの尾根の端頂部に所在する。

概要　緩やかな頂部に全長 100 m、幅 10 ～ 20 mの規模に構築された南北に長い城である。頂部を取り囲む状況で、南から西側には高さ約 1 mの土塁が、西側には高さ約 1m の切岸が廻り、露岩の一部も障壁として防御線に取り込んでいる。城内は自然地形をそのまま残した型式である。虎口は、南西側緩斜面部に枡形を呈する方形区画が付設され、そこに存在が確認される。来歴は不明ながら、西側を重点的に土塁で固めた陣城構造は、同一尾根筋に所在する高陣城跡やあたご山城跡との関係が示唆される。

文献・伝承　中世史料はもとより近世の地誌類にも見られない城である。　（島崎）



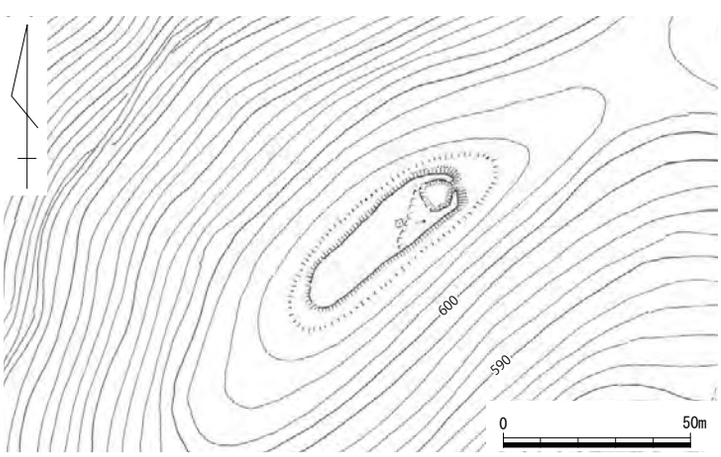
第 224 図　中の城城跡縄張り図（1 /2,000）

224　あたご山城跡　　久米郡美咲町両山寺　　地図 26 左

立地　高陣城跡の所在する二上山から西に派生した尾根筋の端頂部、標高 608 mに所在する。

概要　幅約 10 ～ 15 mの狭い尾根の頂部を中心に長さ約 50 mにわたって曲輪が見られる。曲輪の南北両肩口斜面には、1 m未満の高さに曲輪造成時の削平による土砂が斜面に押され、切岸状の急勾配な斜面を造る。上面端部には、土塁など防御施設は見られない。虎口は、主郭から高陣城跡側鞍部に向けて少し下った北側に位置する。尾根筋に直交して幅約 10 m、高さ約 1 mに造成された曲輪面の三方の端部に土塁が廻らされた、その北東側の中央部には幅約 1 mの平入りの虎口が存在する。その内側には枡形を呈する一辺がおよそ 7 m四方の小規模な曲輪が存在する。

文献・伝承　中世の史料はもとより近世の地誌類にも見られない城である。高陣城跡との位置関係や曲輪の構造、虎口位置などから高陣城の防御を固めるための附城として構築されたものと考えられる。　（島崎）



第 225 図　あたご山城跡縄張り図（1 /2,000）

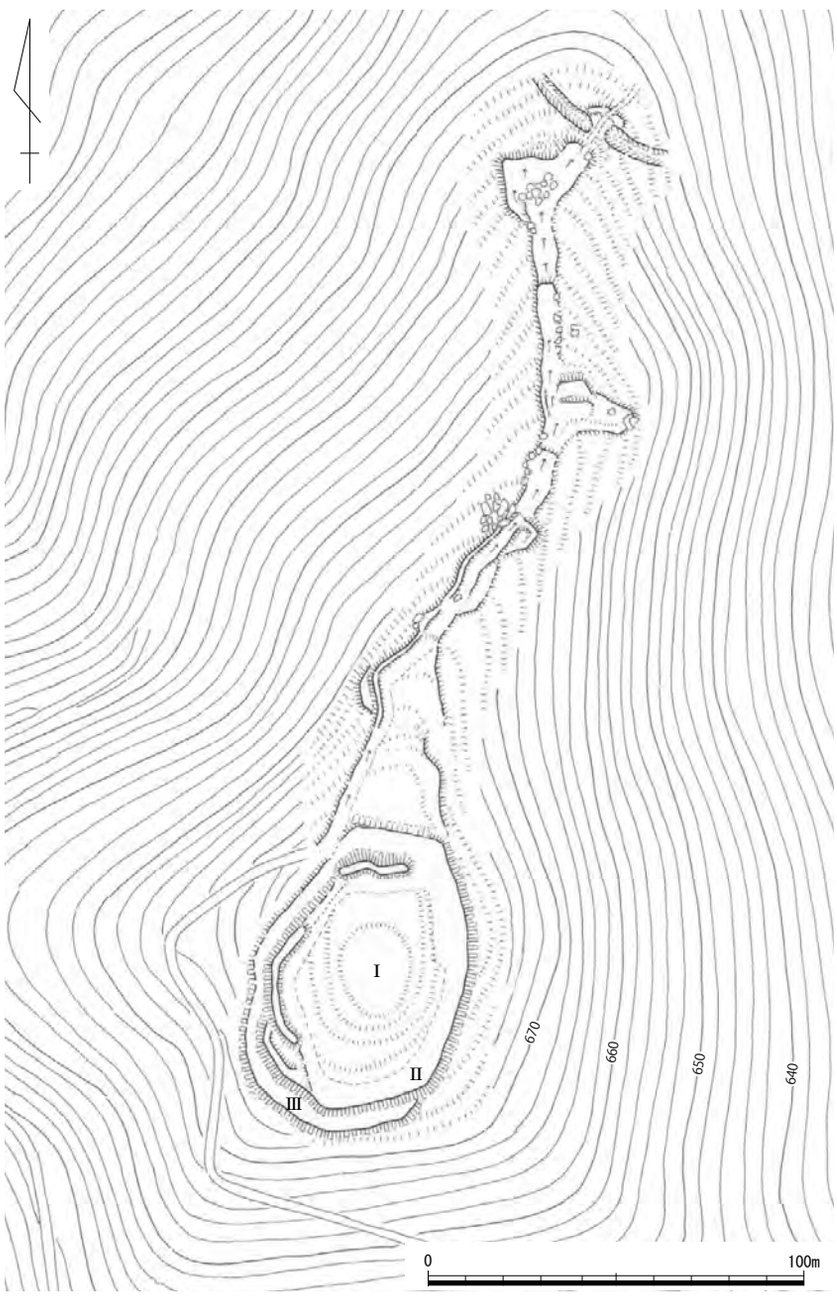
225　高陣（こうじん）城跡　　久米郡美咲町両山寺・打穴北　　地図 26 左

立地　遠くは津山方面からも南方山並みの中に突出して見られる山を二上山という。二上山は弥山と高陣峰又は城山という二峰の総称で、高陣城跡は標高 689 mの城山に所在する。

概要　現在、城山山頂には電波塔や携帯基地局などの塔が林立していて、頂上の地形はこの建設工事によって大きく改変されている。この結果、山頂部には城の遺構は存在しないが、主郭の存在した頂部周辺部および北に長く派生した尾根筋には曲輪や土塁の遺存が認められる。主郭Ⅰは、頂部全域に相当する南北約 60 m、東西約 50 mの楕円形を呈する範囲である。頂部周辺部には切岸造成によって整備された幅 5 m前後の曲輪Ⅱが存在し、この北と西側には上端幅約 2 m、長さ約 20 mと 35 mの土塁が遺存する。この間の 15 mは電波施設建設により消滅するが、本来連続していたと考えられる。また、西から南側には高さ 2 mの切岸によってその下段には幅 2 ～ 5 mの帯曲輪Ⅲが造成されている。

一方、主郭の北東側に派生した尾根筋の下方約200 mの地点には尾根を遮断する幅約 5m の堀切と竪堀が 40m にわたって掘られ、さらに、堀切から頂上までの間には自然地形の中に不明瞭ながら小規模な曲輪の配置が確認される。土塁は曲輪の西側に構築されており、北西側からの侵入に備えていることが知られる。

文献・伝承　『古城之覚』ではこの城山を「高陣之」として､城主を「尼子一族」とし､『作陽誌』には「高陣峯」として尼子氏の陣所があることから高陣という記述が見られる。　（島崎）



第 226 図　高陣城跡縄張り図（1 /2,000）

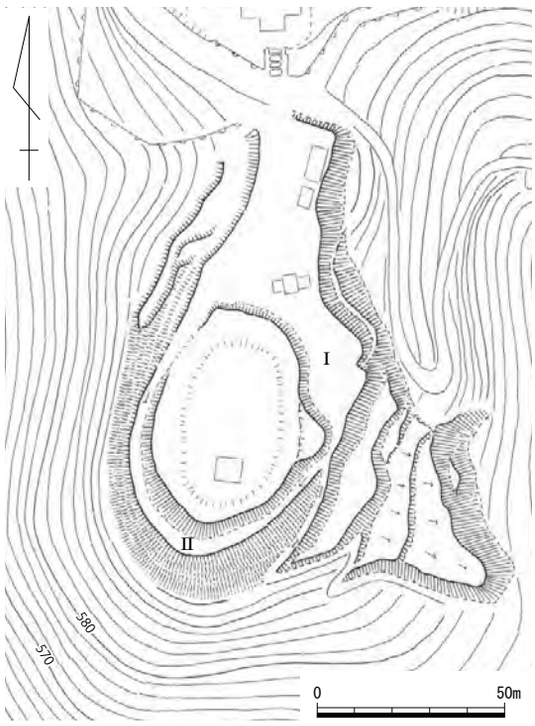
226　両山寺城跡（りょうざんじ）　　久米郡美咲町両山寺　　地図 26 左

立地　標高 689 mの二上山に鎮座する両山寺境内、二上山から南に派生した尾根の先端部に所在する。

概要　本堂から南に約 100 m張り出した尾根の先端部から下方尾根筋にかけて周囲を切岸によって固められた城郭遺構が見られる。頂部は自然地形を残したままで、周辺部を鉢巻き状に高さ２m前後の切岸を廻らし、その下端に幅３mから５mの曲輪Ⅱを造成している。東側には全長 50 m、幅 15 mにも達する規模の大きな曲輪Ⅰが造成されている。一方、緩斜面である尾根筋には外側最下段から４～７mの切岸が３段の障壁として存在し、防御を固める。

文献・伝承　城郭としては史料には登場しない。『作陽誌』によると永禄８（1565）年には両山寺が戦火により焼失したことが記されているが、この頃にも存在していた可能性がうかがわれる。

（島崎）



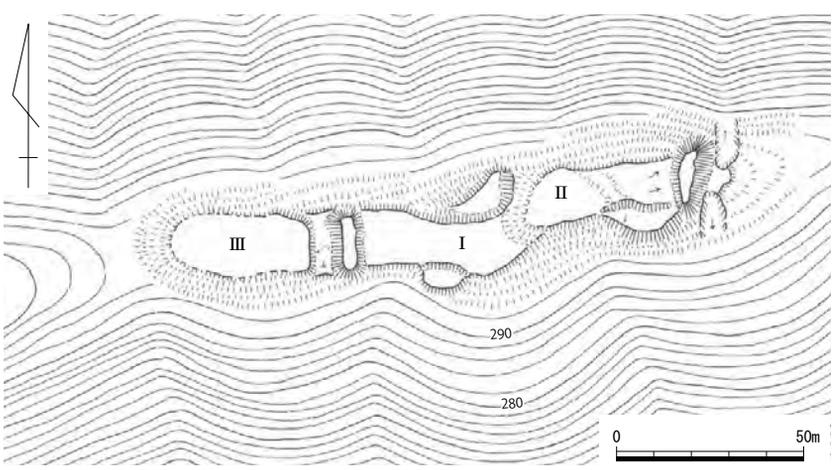
第 227 図　両山寺跡縄張り図（１/2,000）

227　杉（すぎ）城跡　　久米郡美咲町打穴上・打穴北　　地図 26 左

立地　打穴川左岸の下組集落の北西側背後にあって、二上山から東に長く派生した標高 300 m、低位部との比高差約 100 mを測る尾根の頂部に所在する。

概要　城は、幅約 15 mと比較的狭い尾根に全長約 150 mにわたって見られる。西と東側は土塁が尾根筋を遮断し、東側では高さ 3m の切岸によって、西側では幅７m、深さ約１mの堀切状の低位面が防御を固めている。城内は中央に自然面を残したわずかな高まりがあり、これを境に曲輪Ⅰは平坦に曲輪造成され、東側には自然地形を残した曲輪Ⅱが配置されている。また、曲輪ⅠとⅡのくびれ部と東端部には小規模な曲輪が３面付属する。なお、平坦に造成された曲輪Ⅲの西側は急勾配で鞍部へと下る。

文献・伝承　中世文書はもとより近世地誌類にも見られない城である。　（島崎）



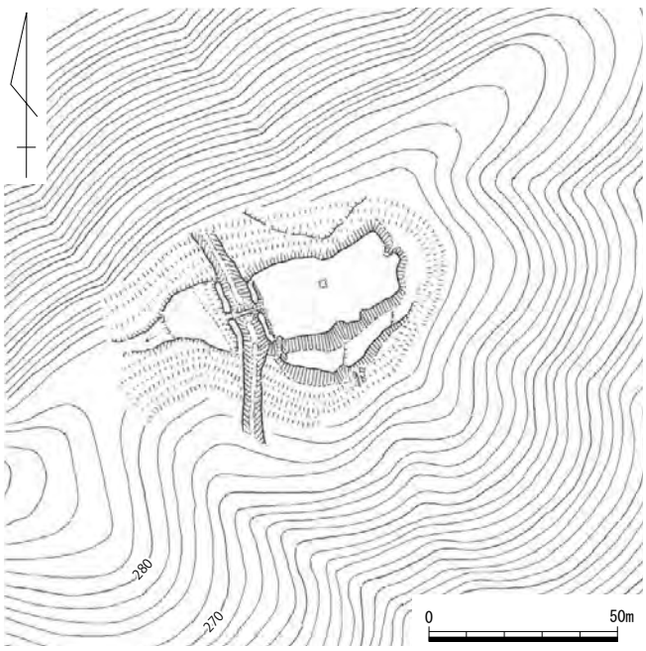
第 228 図　杉城跡縄張り図（１/2,000）

228　城山（じょうやま）城跡　　久米郡美咲町打穴上・打穴北　　地図 26 左

立地　打穴川左岸にある標高 280 mの山頂部に立地する。

概要　城域は東西 65 m、南北 55 mと小規模である。頂部に 45 × 25 mの不整長方形を呈する曲輪を構える単郭式山城である。曲輪の東西端及び南辺中央の３か所には虎口を設けるほか、西縁から北西隅角は低い土塁の痕跡をとどめる。曲輪の東側から南側にかけては帯曲輪を配置する。西側の鞍部には土橋をもつ深い堀切により尾根筋を遮断して防御をなす。堀切の西肩は土塁状の高まりがわずかに確認できる。

文献・伝承　『美作国の山城』で「城山」と伝えられる城と縄張りの構造が似ており、打穴地域の土豪の持城と考えられている。　（米田）



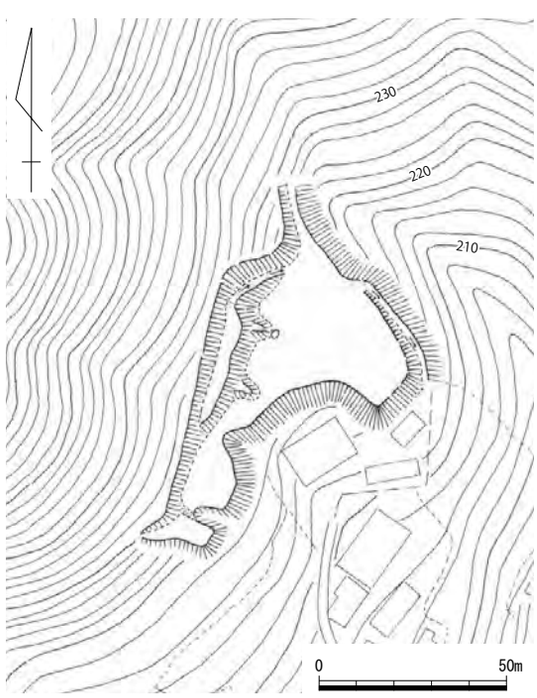
第 229 図　城山城跡縄張り図（1 /2,000）

229　構（かまえ）跡　　久米郡美咲町打穴上　　地図 26 左

立地　打穴川左岸の下組集落の北背後に構築された城山城跡から南側に斜面を下がった標高 220 m、低位部との比高差約 30 mの中腹に所在する。

概要　城山城跡下方の急峻な斜面が緩やかな斜面に変換するあたり、北側には谷筋が急斜面を見せ、南東側には舌状を呈する張り出しが存在する。ここに山側斜面を高さ３～５mの切岸によって全長約 100 mにわたって切り、そこで出た土砂を前面に押し出して造成された最大幅 50 mを測る平坦面が存在する。ここに存在する地籍名が構である。南側と東側下方には防御機能をもった高さ５mを超える切岸が造られていることからも、ここが城山城跡と対になって存在していた居館跡であった可能性が考えられる。

文献・伝承　中世史料はもとより近世の地誌類にも全く見られない。　（島崎）



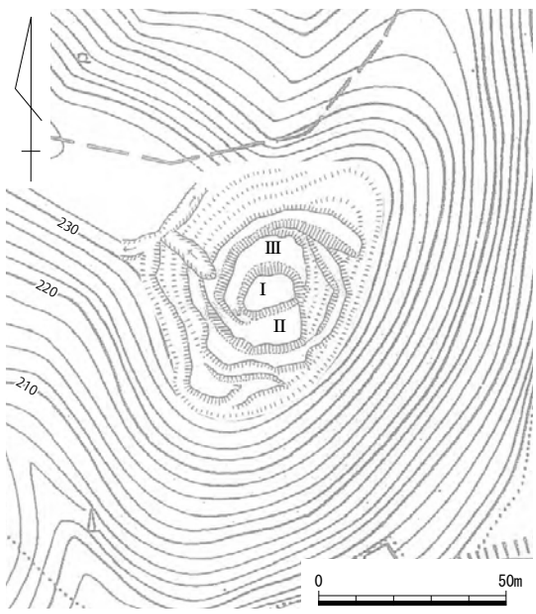
第 230 図　　構跡縄張り図（1 /2,000）

230　八幡山城跡（はちまんやま）　　久米郡美咲町打穴上　　地図 26 左

立地　打穴上地区の下組・有藤地域の低位部を東眼下に見下ろすことのできる標高 236 m、低位部との比高差約 50 mの八幡山山頂に所在する。

概要　現在ここには神社跡が存在するが、境内として使われていたのが曲輪をはじめとする城館遺構である。遺構は、頂部の主郭を中心に同心円状に高さ１m 前後の切岸造成による幅約 2m の曲輪が階段状に配置されている。主郭は、一部に自然地形を残して円形に造成された平坦面Ⅰで、15 × 10 mの規模を有する。また主郭の南側と北側約１m下段には幅 10 m前後の舌状を呈する曲輪Ⅱ・Ⅲが取り付く。なお、打穴の城山城跡と同じく北西側の鞍部には現在山道が存在するが、堀切は存在しない。

文献・伝承　中世史料はもとより近世の地誌類にも見られない城跡である。　（島崎）



第 231 図　八幡山城跡縄張り図（１/2,000）

232　植松（うえまつ）城跡　　久米郡美咲町打穴上　　地図 26 左

立地　城跡は、打穴川の流域に発達した宮代地区にあって、ここを西眼下に俯瞰できる標高 356 mの尾根先端部に所在する。

概要　尾根先端部は「植松」という場所で、「シロ」という城に由来した地籍名も近接する。城域は、南東から北西に延びてきた尾根の鞍部から先端にかけて存在する高さ５m前後の切岸より北西側の山塊頂部を中心として曲輪の配置が見られる。城内の一部は現在墓地として利用されており、この平坦面が曲輪である。頂部の曲輪Ⅰは東側に自然面を切って造成されているが西側には自然地形が残る。西側尾根筋に段状に二面の曲輪配置が見られたが、その造りは簡易で、自然地形を随所に残す。

文献・伝承　中世史料はもとより近世の地誌類にも見られない城である。　（島崎）

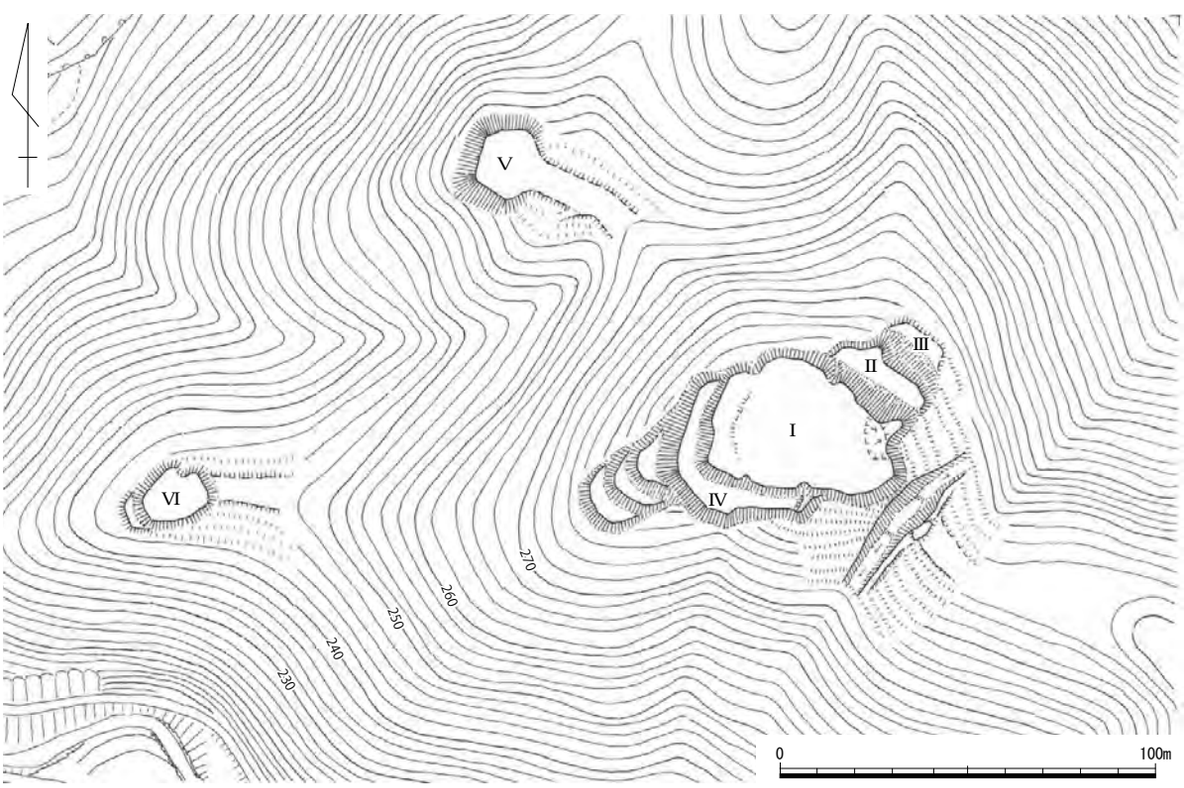
第 232 図　植松城跡縄張り図（１/2,000）

233　鳥越山城跡（とりごえやま）　久米郡美咲町打穴上・打穴里　地図 26 左

立地　城は、打穴川右岸の有藤集落東側に位置する標高 296 mの鳥越山山頂から尾根にかけて所在する。打穴川沿いの低位部を隔てて存在する西方山塊頂部から斜面にかけては杉城跡や城山城跡、さらには構跡等が指呼の間に位置しており、当該地は打穴川沿いの街道と鳥越山城南麓に存在する誕生寺へと抜ける山道が交わる交通と軍事の要衝といえる。

概要　城は、標高 476 mの名筒山から東側下方に延びてきた尾根筋を幅 10 m、深さ約 4 m、全長 50m の堀切で切り、それより西側鳥越山山頂の約 80 m間を城域としている。堀切の約 4 m上位に造られた主郭Ⅰは、山容から西と南側が直線的で北東側が弧状を呈する不定楕円形である。その規模全長 45 m、最大幅 33 mを測る。全体的に上面は平坦に造成されているが、周辺部に土塁は見られない。付属施設としては、主郭北東側約 4 m下段に尾根筋を造成して造られたコ字状を呈する長さ 20 m、幅 5 m前後の曲輪Ⅱが、さらにその下方約 7m にも、長さ 15 m、幅 3 m前後の曲輪Ⅲが見られる。また、西から南側にかけても主郭から約 1.5 m下段にはＬ字状に幅 5 ～ 10 mの曲輪Ⅳが取り付く。さらにこの曲輪Ⅳの西側尾根筋にも高さ 2 m前後の切岸により地形された幅 2 m前後の弧状を呈する曲輪 3 面が階段状に続いて緩斜面の防御をより強固なものとしているのが確認される。なお、頂部から北西と西方向に派生した尾根筋の比高差約 20 m下方にも全長 40m、幅 20m の曲輪Ⅴと全長 40m、幅 15m の曲輪Ⅵの配置が認められる。これらは西側からの攻撃に対処して構えられた出曲輪と考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』によると城は「鳥越之」として城主を「吉川一族」とする。『作陽誌』では「鳥越山堡」として、「昔、打穴肥後前司菅原家次居城」とされる。　（島崎）



第 233 図　鳥越山城跡縄張り図（1 /2,000）

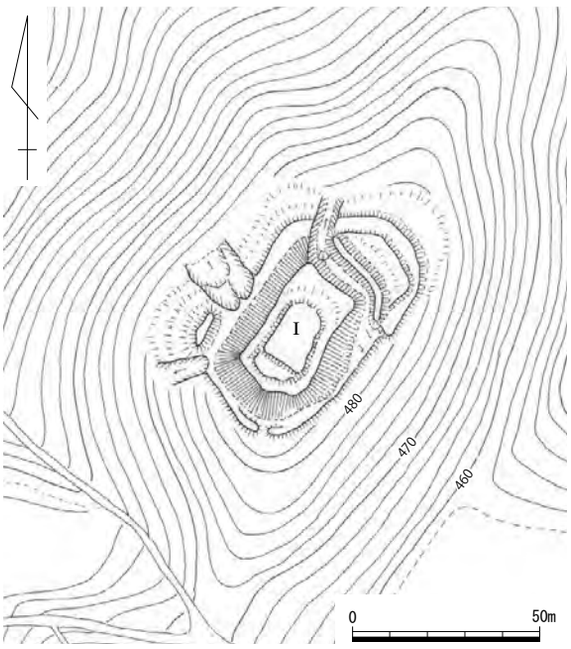
234　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　　久米郡美咲町大垪和西　　地図 26 左

立地　旧旭町の大瀬毘川流域から打穴川流域の境地区に抜ける街道の分水嶺である稲荷峠にあって、標高 470 mの茶臼山に所在する。

概要　城は、北東から南西に主軸をもった頂部に傾斜の緩やかな北東側尾根筋と西側に規模の異なる堀切を２条掘って防御を固める。最大は北東側の幅８m、深さは主郭Ⅰとの比高差４mと深い。山頂の主郭は堀切の南西側におよそ 35 × 23 mの長方形に造成されたもので、中央には長方形に地形された平坦面が存在する。虎口は、主郭南西側下段に廻る幅１m前後の狭い帯曲輪を一部切った状況で見られる。

文献･伝承　『作陽誌』には「茶臼山」として「大垪和西村廣田」にあるとする。『久米郡誌』には昔宇喜多直家の兵が陣取りした古戦場とする。

（島崎）



第 234 図　茶臼山城跡縄張り図（１/2,000）

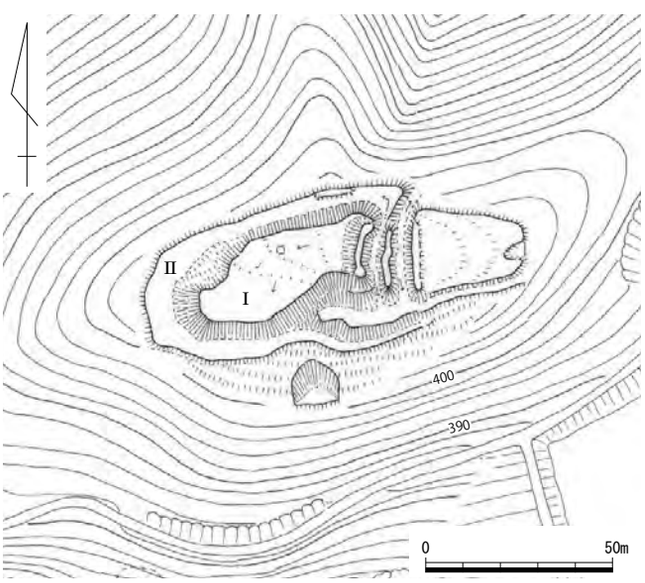
235　高土（こうつち）城跡　　久米郡美咲町境　　地図 26 左

立地　打穴川右岸、東の山塊から西に派生した尾根筋の標高 450 mに位置する。南眼下には打穴川沿いの宮の峠から峠を東に越えて久米南町北庄に抜ける山道が存在する。

概要　城は、尾根先端部から東に約 200 m入った頂部を中心に全長 100 mにわたって見られる。尾根筋を２条の堀切によって掘開し、その西側に高さ約３mの切岸によって地形された上下二面の曲輪を配置したもので、主郭Ⅰは全長約 40 m、幅 10 ～ 20 mを測り、上面は東から西側に向けて緩やかに下がる自然面である。主郭下段には幅５～ 8m の曲輪Ⅱが造られるが、土塁は一部のみで、他は最大高 1m 前後の切岸である。

文献・伝承　『作陽誌』には「高土山堡」として竹内民部少輔友長築城と伝える。

（島崎）



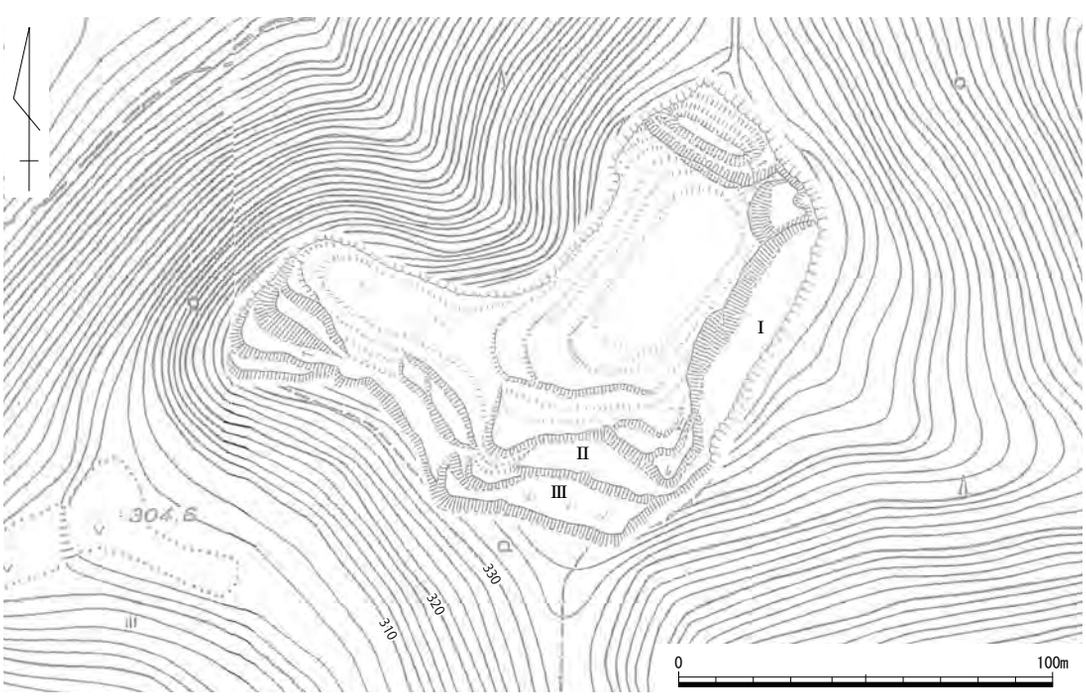
第 235 図　高土城跡縄張り図（１/2,000）

236　城能城跡（じょうのう）　　久米郡美咲町境　　地図 26 左

立地　北東から南西方向に通る打穴川沿いの街道と旧旭町大瀬毘川流域から境地域に通じる東西の街道が交わる要衝に位置する。街道を眼下に望むことの出来る標高 350 m、街道が通る低位部との比高差 120 mの滝谷城山に所在する。

概要　城能城跡は、尾根の最高所にあって、北側を除く三方には滝谷川や断層線谷に伴う深い谷が存在するなど天然の要害といえる。城の北側尾根筋には尾根筋を遮断する全長約 40 m、最大約 4 mに達する高い切岸が行われ、これにより切岸下面には堀切と土塁が一体化した防御線が見られる。また、緩やかな膨らみをもった南東側斜面には、全長 70 mにわたって高さ約 2 ～ 3 mの切岸が行われ、これにより下段には全長 70 m、最大幅 10 mの曲輪Ⅰの造成がなされている。さらに、これに直交する南から北西側にかけては、南方の尾根筋に繋がる部分と北西に延びた尾根の斜面部分にも防御を強固にするための切岸・曲輪の連続が見られる。前者の尾根筋部分では全長 50 m、高さ約 4 mの切岸によって直線的な防御線が、また、その上位斜面にはさらに 2 面の曲輪Ⅱ・Ⅲが高さ 2 mの切岸で階段状に造成されている。一方、後者の北西尾根西側斜面部であるが、ここは南から北西に張り出した尾根の南側と西側斜面で、ここには外側に等高線に沿う状況で弧状に切岸が全長 70 mにわたって切られ、その先端部の緩やかな斜面には 5 面の曲輪が階段状に配置される等、前者を含めた総延長 120 mに達する厳重な防御線が構築されている。一方、これら防御線に囲まれた城内であるが、頂部をふくめ全体的に自然の緩やかな面が残るのみで、削平しての曲輪地形は認められない。これら特徴は、城能城の築城年代を示すものと考えられ、古くは南北朝期に比定される。

文献・伝承　中世史料には見られない城である。『作陽誌』には「城能」として、「墩あり何人の築くかを知らず。後ろに子塹あり。」の記事が見られるように、城主などの来歴は不明とされる。（島崎）



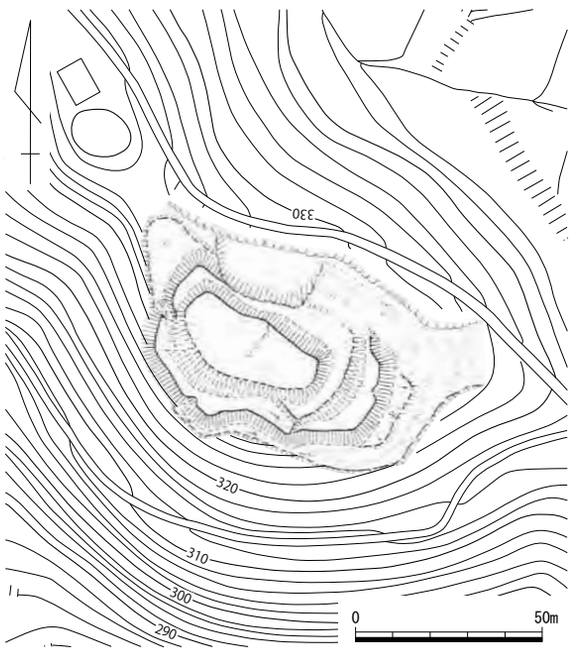
第 236 図　城能城跡縄張り図（1 /2,000）

237　三角（みすみ）城跡　　久米郡美咲町角石祖母　　地図 26 左

立地　滝谷川右岸の角石祖母集落南側の尾根上に位置する。

概要　長楕円形を呈する主郭の北側は、墓地造成による地形改変のためか南側に比べて若干高い。また、主郭下方の周囲には帯曲輪が巡っているが、南西側は下方の腰曲輪につながっている。この下方の腰曲輪の南側にも、さらに腰曲輪が築かれている。なお、城域の南東側は自然地形を多く残し、切岸が不明瞭となっている。また、城域の北側にも平坦面が認められるが、後世の地形改変の可能性がある。

文献・伝承　近世地誌の記述は認められず、故事来歴については不明である。　（澤山）



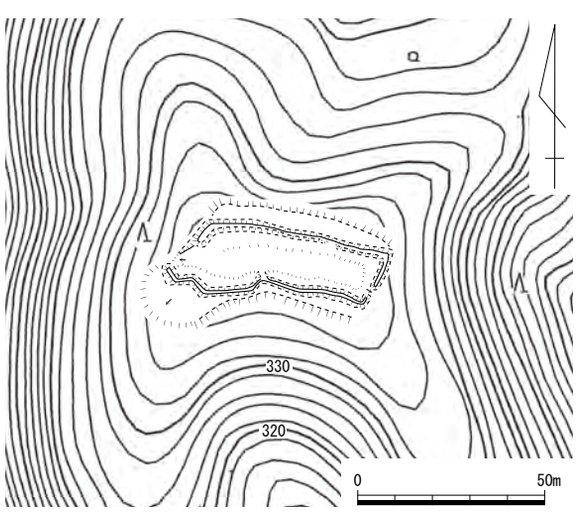
第 237 図　三角城跡縄張り図（1 /2,000）

239　寄（よせ）城跡　　岡山市北区建部町和田南　　地図 26 左

立地　滝谷川右岸の標高 340 mの山頂に立地する。比高は 260 mで、眺望は南側と北東側に開ける。近隣には北 1.3㎞に石丸屋敷跡、南 600 mに高城跡、南 1.5㎞に鶴田城跡が位置する。特に南隣の高城跡は尾根伝いで至近距離にある。

概要　城域は東西 65 m、南北 20 mと小規模である。縄張りは単郭で、頂部の中心曲輪は約 55 m× 15 mの不整長方形を呈し、周りは低い土塁で囲む。南辺は複雑に折れて中央西寄りに横矢をかけるほか、東辺中央と南西隅にはそれぞれ虎口を設ける。また、曲輪の北側と南西側に削平のあまい平坦面がある。全体的に規模が小さく、土塁のみで守ることから、臨時的な城跡であったと考えられる。

文献・伝承『美作国諸家感状記』などは、天正 8（1580）年の鶴田城周辺での攻防を伝え、垪和の竹内為能は毛利方につき、宇喜多勢と争ったとする。　（米田）



第 238 図　寄城跡縄張り図（1 /2,000）

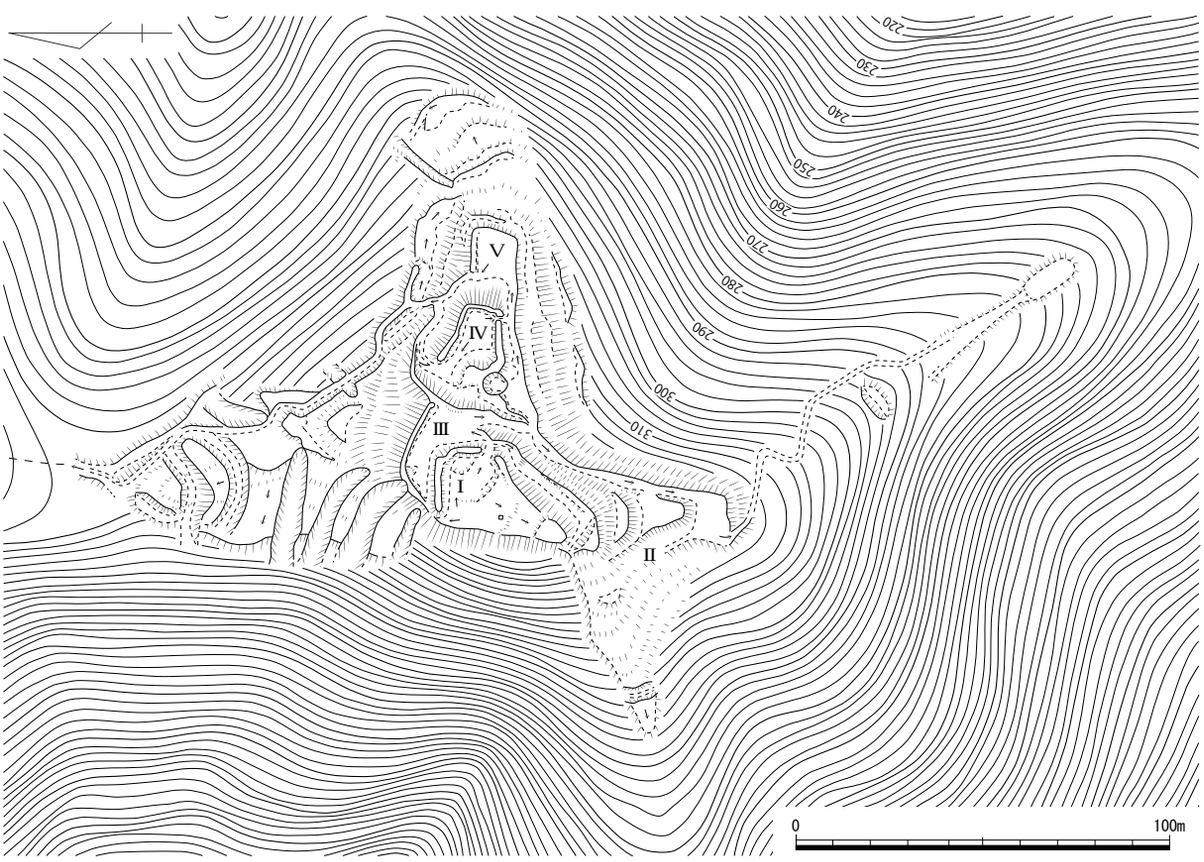
240 高城（たかん）跡　　岡山市北区建部町和田南・建部町角石谷　　地図 30 左

立地　滝谷川右岸の山頂部に立地する。

概要　主郭（曲輪Ⅰ）北辺から東辺には土塁が巡り、東辺中央に喰い違いの虎口が造られる。主郭の南側は急峻な切岸が伴う帯曲輪が築かれ、南端の土塁状の高まりによって横堀状を呈する。この曲輪の縁辺は部分的に高まり、東側に巡って主郭虎口まで延びる。帯曲輪下方には 3 面の腰曲輪をもつ曲輪群Ⅱが築かれ、東方向に延びる尾根部に築かれた曲輪Ⅲ～Ⅳにつながる通路が、その東辺側に取り付く。曲輪群Ⅱの南東方向には小曲輪や平坦面が、南西方向には加工段や堀切 1 条が認められる。

主郭の北東側下方には、北辺に主郭とつながる土塁が巡る曲輪Ⅲが築かれる。この曲輪の北側には幅広の畝状竪堀群が認められ、その東側には横堀状の掘削を伴う通路が、東方向に延びる尾根部に築かれた曲輪Ⅳ・Ⅴに取り付く。曲輪Ⅳの周囲には土塁が巡り、南辺には石積みによる集石が見られ、北西隅に虎口が設けられている。また、曲輪Ⅴの北辺には土塁が築かれ、その西端には北西方向に下る通路の虎口となっている。この曲輪Ⅴから東斜面には竪堀 1 本と 3 ～ 4 面の加工段が見て取れる。

文献・伝承　『古城之覚』は久米北郡角石畝の「高山之（城）」として、城主を竹内源十郎と記す。『作陽誌』は和田南村の「高城堡」として、竹内善十郎為能、貴志備前守氏秀らが拠って毛利輝元に属し、宇喜多直家が落城と記す。『美作鏡』は城主を竹内善十郎為能と記す。『天保国絵図』は「高城古城跡」とある。『小坂家記』は鶴田城主の垪和八郎為長の出城とある。『久米郡誌』は「高城」とある。（文献 133）　（澤山）



第 239 図　高城跡縄張り図（1 /2,000）

写真 112　曲輪Ⅲ西切岸
（北西から）

写真 113　曲輪Ⅳ南辺土塁
（北から）

写真 114　曲輪Ⅴ虎口
（北西から）

写真 115　曲輪Ⅴ北辺土塁
（北西から）

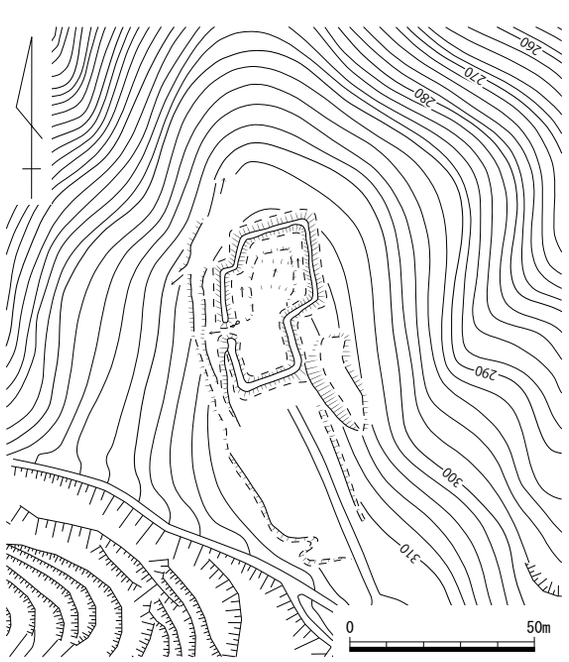
241　蕨尾（わらびお）城跡　　岡山市北区建部町角石谷　　地図 30 左

立地　滝谷川左岸の山塊から北西に延びる山端部に所在し、北方向に延びる尾根部に位置する。

概要　単郭式山城であり、主郭の周囲には外高約 0.5 ～ 2 ｍの土塁が巡り、西側中央付近に虎口、北西隅と東側中央付近に横矢掛りが見られる。南西側は地盤が高いためか土塁の外側を掘削して切岸を設けている。

一方、主郭内部は平坦ではなく北側に傾斜しており、特に土塁の盛土の掻き揚げによって内高が高くなっている。なお、主郭の南側では東西に切岸状の斜面をもつ平坦面が認められる。

文献・伝承　『作陽誌』では宇喜多家臣の明石飛騨守が高城攻撃のため、「蕨尾山」に陣を置いたと記す。『建部町史』では「松端山」の別称として「蕨尾城」を挙げており、松端山本陣跡の付近に蕨尾山陣屋跡があるともしている。　（澤山）



第 240 図 蕨尾城跡縄張り図（1/2,000）

242　鶴田（たづた）城跡　　岡山市北区建部町鶴田・建部町角石谷　　地図 30 左

立地　旭川左岸にあたり、旭川と滝谷川との合流地点から北西側に所在する「城山」山頂部の「く」の字に屈曲する尾根部に位置する。

概要　最高所に方形を呈しながら、南側に向かって傾斜もった平坦面を有する主郭（曲輪Ⅰ）が築かれ、北東方向に延びる尾根上には腰曲輪群が急峻な切岸を伴って連続して造られており、東辺に通路状遺構が取り付いている。尾根端部には台形状を呈する高さ約 1m のやや広い曲輪Ⅱが配置され、東西切岸には部分的に石垣が認められる。曲輪Ⅱの北西側には土壇状の高まりと周囲に石が散在している。

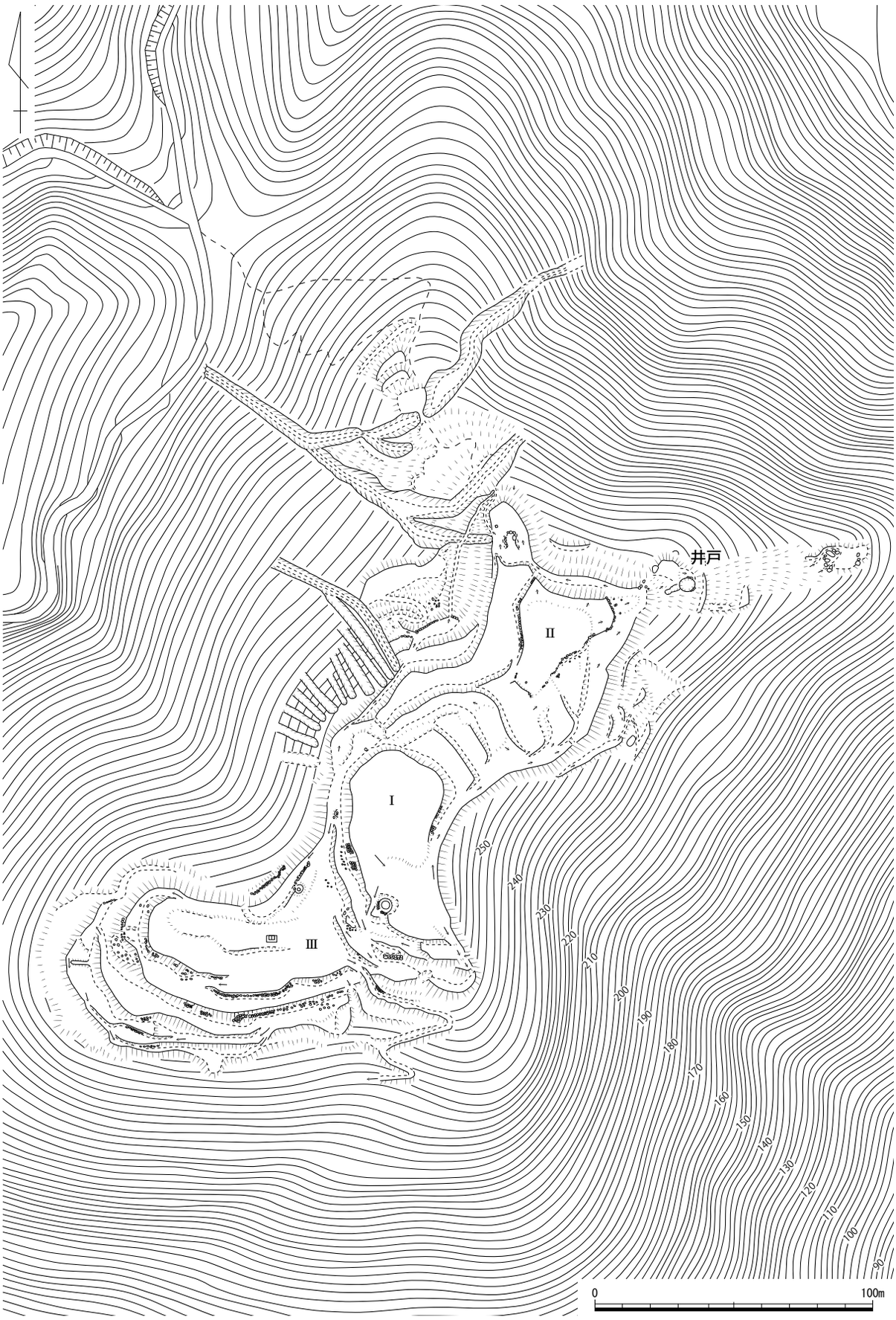
主郭の西側には、部分的に石垣が残存する急峻な切岸の下方に細長い帯曲輪が巡っており、南側にもこれらが数面の小曲輪に分かれて築かれている。この主郭から北東方向に延びる尾根上に築かれた通路状遺構の東斜面には切岸が伴い、曲輪Ⅱの南東側の地形の突出部には小規模な加工段が認められる。また、西斜面には合計 11 条の畝状竪堀群が深く掘削されている。尾根の北西斜面には、一部で交差状況が見られる竪堀や土橋が伴う堀切により尾根筋を遮断した配置がなされており、下方に向かって３～４面程度の小曲輪が認められる。総じて、北西側の防御施設が充実しているといえる。一方、この尾根の北東端下方には深さ約 3m を測る井戸が築かれ、ここから約 40m 下方には露岩で遮蔽された状況の長さ 15m、幅 10m 程度の平坦面があり、北方の見張り台として適している。

主郭から西方向に延びる尾根上には曲輪Ⅲが配置されており、現在中央付近には「城主芳賀八郎為永　杉山備中守為就」を祀った天保年間に建立された石碑が所在する。この曲輪Ⅲの周囲には３～４面の帯曲輪が築かれ、各曲輪の移動のための通路が取り付いている。特に上・中段の帯曲輪に伴う切岸には、高さ約 1 ～ 2m の石垣が部分的ながら確認できる。また、曲輪Ⅲの南東端には法面に石垣が伴う虎口が認められ、麓に向かってつづら道が南方向に延びている。

文献・伝承　『古城之覚』によれば久米北郡和田南村の「鶴田之（城）」として、城主を塀和八郎為長と記す。『作陽誌』は和田南村の「鶴田堡」として、城主を垰和八郎為長といい、一説に元の城名を「鶴鳴」として閑国大夫重実が築城、代々居城したと記す。『美作鬢鏡』と『美作鏡』は城主を垰和八郎とする。天保国絵図に「垰和古城跡」とある。（文献 133）　（澤山）

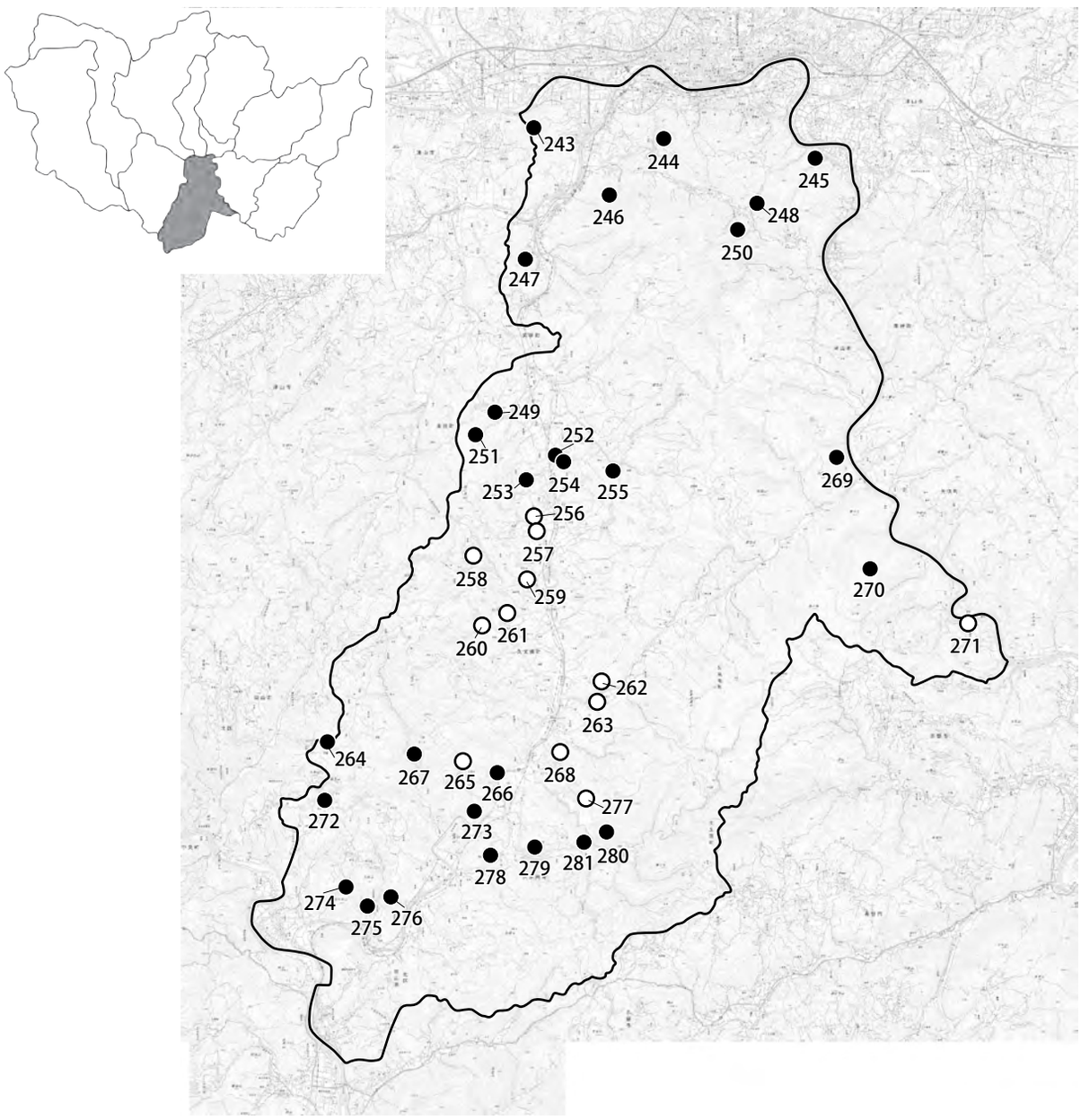
写真 116　主郭（南西から）

写真 117　主郭土塁（南東から）



第 241 図　鶴田城跡縄張り図（1 /2,000）

第 8 節　久米南条郡



243. 嵯峨山城跡
244. 神南備山城跡
245. 小桁城跡
246. 皿山城跡
247. 丸山城跡
248. 荒神山黒岩遺跡
249. 是久山城跡
250. 荒神山城跡
251. 大谷城跡
252. 構跡
253. 城山城跡
254. 稲荷山城跡
255. 新城城跡
256. 丸山城跡
257. 名称未定
258. 原田故営堂跡
259. 本丸城跡
260. 大将軍城跡
261. 奥谷城跡
262. 樋の元城跡
263. 秋小屋城跡
264. 上殿城跡
265. 将監山城跡
266. 立畑城跡
267. 安盛城跡
268. 上原陣跡
269. 大戸山轟城跡
270. 高城跡
271. 藤原城跡
272. 竜王山城跡
273. 草木城跡
274. 下風城跡
275. 伏山城跡
276. 伊勢畑城跡
277. 小松城跡
278. 沼元構跡
279. 大西構跡
280. 蓮華寺城跡
281. 大植城跡

第 242 図　久米南条郡城館位置図

243　嵯峨山（さがやま）城跡　　津山市中島・平福・久米郡美咲町錦織　　＜市指定史跡＞　　地図 20 右

立地　津山市と美咲町との境界にある独立丘陵、嵯峨山（標高 288 m）の山頂付近に築かれた城である。丘陵の北麓を吉井川、東麓を皿川が流れ、南東麓で合流する。主郭からは奈義町から旧久米町に至る津山盆地と、周囲の主要な城郭を広く視界に収めることができる。

概要　主要な城域は山頂ではなく、尾根筋を北へ約 250 m進んだ位置にある、標高約 260 mの頂部とその周辺に展開する。山頂につながる背面の鞍部を堀切で遮断し、頂部を主郭とする。曲輪や堀は、背面にあたる南東側に多く配置されている。

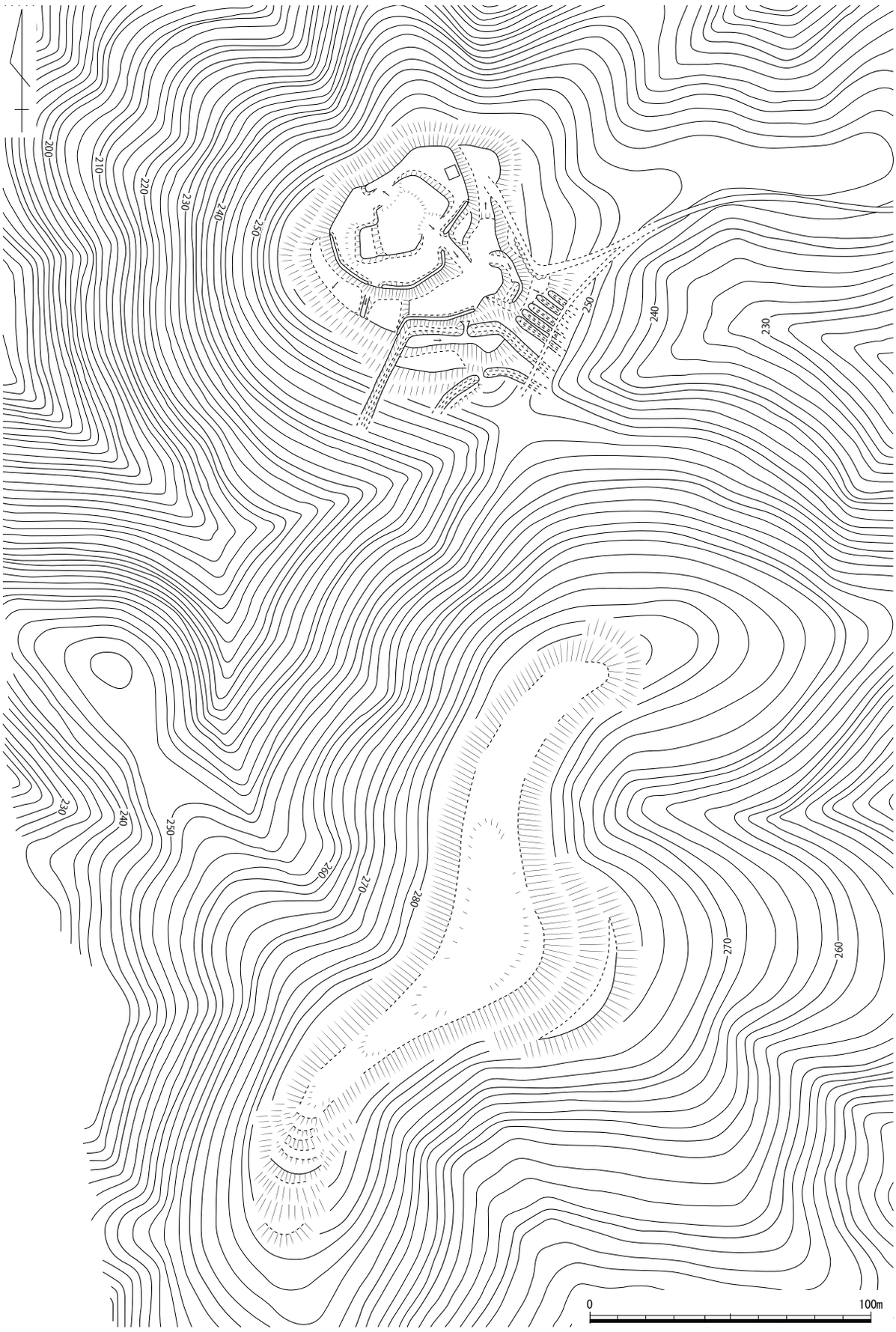
主郭の外郭線は、屈曲を多用した多角形を呈する。郭面の中央は周囲よりも 0.6 ～ 1.5 mほど盛り上がっている。郭面の南側縁辺部には土塁が巡り、外側は高さ 2 ～ 4 mの切岸をなす。東側及び南側には土塁の切れ目があり、斜路が取り付くことから虎口跡と考えられる。東側虎口の下方には、主郭と斜路でつながる不整な三日月形の曲輪があり、北東側の曲輪とも面が連続する。この曲輪の西側には、約 1.2 mの段差を置いて正方形に近い小規模な曲輪が配置され、南側虎口の防御を担ったと想定される。これらの曲輪の南側には土塁が築かれ、さらにその外側には、城内側での深さが最大約 2.5 mを測る横堀が掘削されている。この横堀の両端はそのまま斜面下方へ延伸して竪堀へと移行する。一方、曲輪の南東側にも土塁を伴う小規模な横堀状遺構が確認できる。城域の南東端に 5 本の畝状竪堀が掘削されており、横堀と堀切から続くものも含めて 7 条が並列している。

以上のように、本城では背面にあたる南東側に曲輪・土塁・堀を集中的に配置して防備を厚くする一方、平野に面する北側が薄く、極めて対照的な様相を見せるのが特徴的である。正面側は吉井川南岸の急斜面を天然の防御施設として利用しつつ、背後への警戒を重視した構造と推測できる。

一方、山頂周辺は南北に細長い平坦な地形であるが、明確な遺構はみられない。ただ、その東側及び南側の尾根上には人為的な平坦面が確認できたため、確証はないものの城域に含めることとした。

文献・伝承　『作陽誌』では、古歌に詠まれる「佐良山」をこの嵯峨山とし、古城があり高さは 160 間、一名を洲前城ともいい、赤松孫三郎教弘の築城で、天文年間に尼子氏の門属、錦織右馬助利路が在城したとする。天正 11（1583）年、備前の川橋一族がこの城と英田郡久米山に拠った。同年、高山城主の草刈重継が配下の将に佐良山を攻撃させ陥落させたという。また宇喜多秀家の時に川端丹後が城を守ったという。『美作国の山城』は諸史料に依拠して以下のように記す。元亀年間、小早川隆景の兵が出城にしていた「さが山」の城を、荒神山城の花房職秀が攻め取った。天正 7（1579）年の宇喜多氏と毛利氏の対立の後、毛利方の拠点となった院庄構城と、「皿山の捕手」に拠る宇喜多直家の家臣、河端丹後が対峙したという。　（岡本）

写真 118　遠景（北東から）



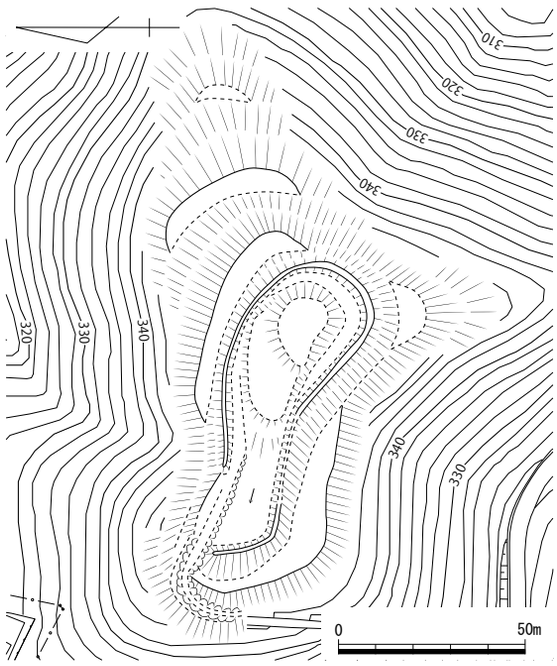
第 243 図　嵯峨山城跡縄張り図（1 /2,000）

244　神南備山城跡（かんなびやま）　　津山市井口　　地図 20 右

立地　吉井川と皿川合流地点の南東側にある山塊で、標高 350 m級の神南備山頂部に位置する。現津山市街地を眼下に収める絶好の眺望で、北側正面にある神楽尾城を一望できる。

概要　最高所を含め、なだらかに下った頂部全体、長さ約 80 m、幅約 30 mを全て土塁で囲みきった山城である。土塁の高さは、0.5 ～ 1 mを測る。東側にある最高所の背後は、土塁までの間が横堀状に凹んでいる。主郭の西側から南側にかけて腰曲輪が 1 面あり、西側斜面にはもう 1 面の曲輪が続いていた可能性がある。主郭の南側尾根に 1 面、北側尾根に 3 面の曲輪が続いている。小規模ながら土塁囲いが特徴的な山城である。

文献・伝承　『古城之覚』は「間鍋山」、『作陽誌』は「神南備山」と記され、神楽尾城を攻撃するための陣所としている。（文献 133）　（小林）



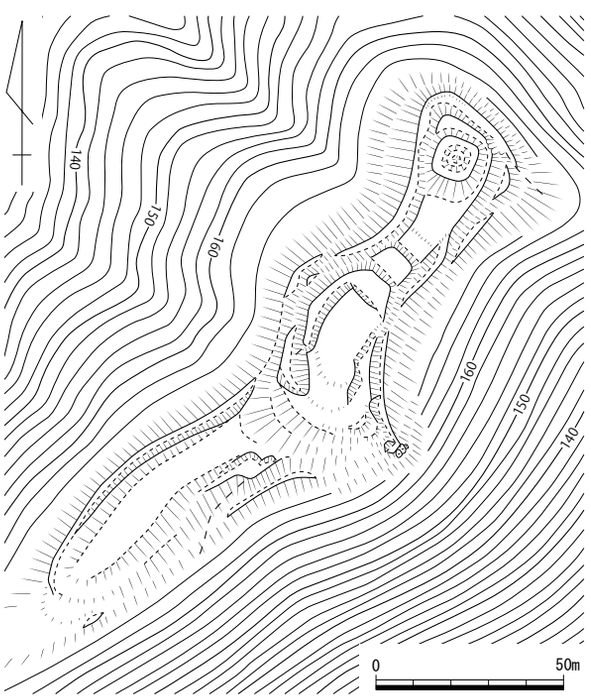
第 244 図　神南備山城跡縄張り図（1 /2,000）

245　小桁（おげた）城跡　　津山市小桁　　地図 21 左

立地　吉井川西岸の丘陵尾根に立地。加茂川と広戸川が吉井川に合流する一帯を眼下にする。また、西側の谷筋を南にたどると、荒神山城の立地する山麓に通じている。

概要　尾根筋に曲輪を連ねているが、切岸が不明瞭なものが多く、段差も小さい。南西の尾根筋の平坦地は自然地形とも考えられる。突端の曲輪は中央部が窪んでおり、古墳を成形して造成した可能性がある。尾根筋を下がった斜面に犬走りが巡るのが特徴である。

文献・伝承　『作陽誌』は「神原山」とし、小桁村にあって、山上に平地があると記す。『美作国の山城』は、位置関係から、荒神山城に拠る宇喜多勢の出城の可能性があるが、集落に面した立地から村落に拠る土豪層の持城である可能性が高いと指摘する。（文献 133）　（物部）



第 245 図　小桁城跡縄張り図（1 /2,000）

246　皿山（さらやま）城跡　　津山市皿・高尾　　地図 20 右

立地　皿川の東岸にある笹山（標高 306 m）の山頂に立地する城である。城の北麓を種川が西流し、皿川に合流する。城の南麓は皿川、東麓は種川の支流による谷筋が深く刻まれており、背後の山塊とは鞍部で接続している。城からは、北方向に現在の津山市街地西部を見渡すことができる。

概要　地形や遺構の状況から、主郭を含む山頂部と、その南側・南西側の大きく三つに区分できる。

主郭は不整な長方形を呈し、北西端に内側への折れを伴うほか、南端では郭面を大きく内側へ凹ませて、深さ２ｍほどのほぼ正方形の空間を作り出している。その形状は桝形を思わせるが、性格についてははっきりしない。郭面の南端と北西端には低い土塁が残存する。主郭の北側及び東側は高さ１～２ｍの切岸を挟んで３面の曲輪が配置され、さらに斜路で北西側の曲輪にも接続している。これらは主郭と一体の曲輪群と見なすべきかもしれない。主郭の北側から東側下方にかけては細長い帯曲輪が巡り、その西端は斜路によって主郭と接続している。帯曲輪の東端付近には露岩があり、その根元には「月見の池」と呼ばれる湧水点がある。北東方向に延びる２本の尾根筋にも多数の曲輪が連なるが、うち東側の尾根筋では小規模かつ不明瞭なものが多い。主郭の西側は、土塁を伴う平坦面や竪堀と思われる遺構が分布するが、山道の造成など後世の地形改変もみられることから、正確な評価は難しい。しかし曲輪や竪堀の存在自体は間違いないと考えられる。

主郭の南側には多角形の曲輪が配置され、主郭との間は堀切と竪堀で画される。郭面の中央付近には１ｍほどの段差があり、南端には高さ 50㎝ほどの土塁が巡る。南側の尾根は堀切で遮断され、東側の急斜面には小規模な平坦面が複数造成されている。

主郭の南西側には大規模な曲輪が設置され、背後は土橋を伴う堀切で仕切られる。郭面はほぼ平坦で、南北は切岸となる。さらに西側には、山道の切り通しを挟んで別の平坦面が広がる。この平坦面は、切岸を伴わず城の遺構かどうか判断は難しいが、東側の曲輪とは本来一連の地形と考えられ、ここでは城域に含めた。全体に他の２地点に比べて造成が甘く、土塁や竪堀も伴わない。

以上のように、本城は、地点によって曲輪の造成の度合いに差異が認められ、主郭とその南側の曲輪に機能を集中させるべく改修がなされた結果かとも考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』は、久米南郡皿村の「皿山」として、城主を伊利谷河内守長昌とする。永正年中までは伊利谷氏が抱え、のち天正年中まで宇喜多秀家の家臣、川端丹後が抱えたとする。『作陽誌』では「篠山」に城跡があり、永正年中に入谷河内守長昌が在城したが、敵に包囲されて脱出した際に流れ矢に当たり死んだと記す。『美作国の山城』では、諸史料に基づき次のように記す。嘉吉元（1441）年８月、石見の国人増田兼亮は「作州高尾代」を焼き落としたとして細川持之から感状を与えられており、この城のことか。また元亀年間（1570 ～ 1573）頃に、肥田・高橋両人が拠る「さゝ山の城」を、荒神山城の花房職秀が攻め取ったという。　（岡本）

写真 119　遠景（北東から）

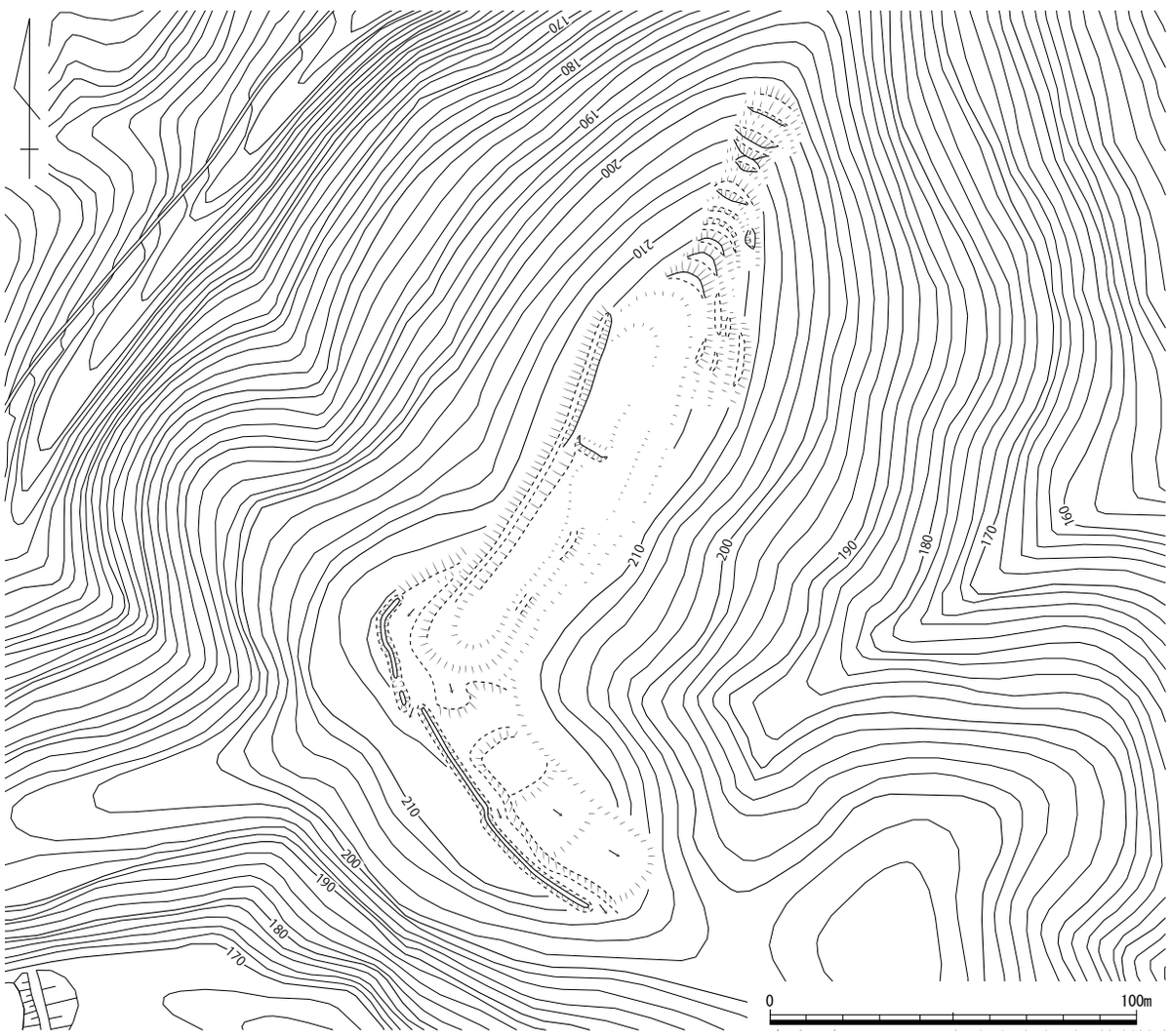
第 246 図　皿山城跡縄張り図（1 /2,000）

247　丸山城跡（まるやま）　　津山市福田　　地図 20 右

立地　北流する皿川の左岸に接した、標高 210 mの丘陵の頂部一帯に立地する。城からは北側及び東側に展望が開け、東麓を近世の津山往来のルート、現在は国道 53 号と津山線が通っている。

概要　山頂部の地形に沿った、不整な「く」の字形の城域が想定されるが、明瞭な遺構は少ない。南半部では、南東に延びる尾根上に不明瞭な面が続き、その西側は犬走り状をなしている。さらに、城域の南西辺には土塁が約 100 mにわたって築かれる。この土塁は、外側が 1 m前後、内側が 0.3 ～ 0.6 m程度の高さで、喰い違いを伴う開口部や屈曲部が確認できる。北半部の山頂一帯も基本的には自然地形とみられるが、一部に地形改変の痕跡があり、西側斜面上には犬走り状の細長い平坦面が延びる。北端の尾根上には、小規模な平坦面が階段状に連続する。急峻な地形自体を防御に極力利用し、背後の丘陵に続く尾根筋を土塁で遮断したと考えられる。

文献・伝承　『作陽誌』には、「丸山」として福田村にあり高さ 20 間、宇喜多氏家臣の岡平内家利が屯したと記し、山の下に温泉跡があり堂の礎石が残るという。（文献 133）　（岡本）

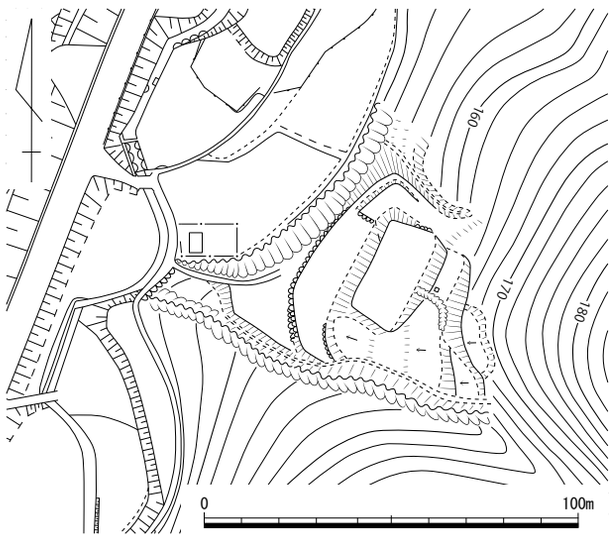


第 247 図　丸山城跡縄張り図（1 /2,000）

248　荒神山黒岩遺跡（こうじんやまくろいわ）　　津山市荒神山　　地図 21 左

立地　荒神山城跡の北麓を東流する荒神川の左岸から、北に延びる支流の谷筋を遡った場所に立地する。

概要　２本の谷筋の間を城館に造成したようで、北側の谷筋は人為的に掘削された溝かもしれない。現状では、ほぼ中央に主郭に相当するとみられる長方形の曲輪があり、その下方には曲輪が２面配置される。法面の随所に石垣を伴っているが、後補の可能性が高い。主郭の上方から南側面にかけては不整形な曲輪が連なる。現地には由来を記した「難波氏宅址碑」が建立されている。



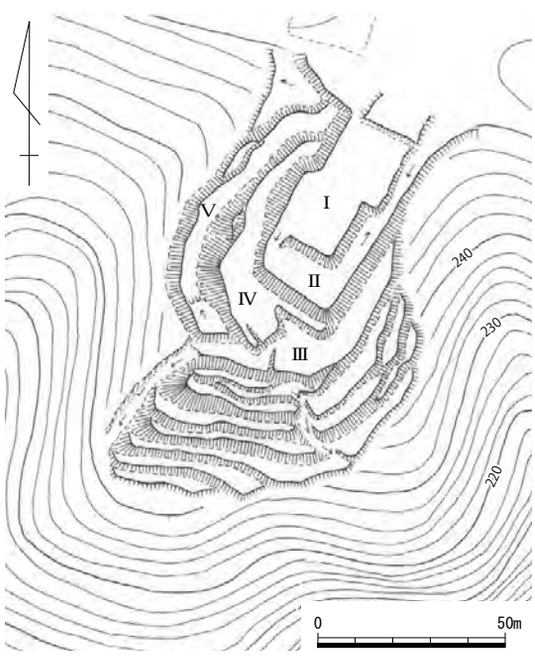
第 248 図　荒神山黒岩遺跡縄張り図（1 /2,000）

文献・伝承　碑文によれば、和気郷行信邑出身の難波孫左門信明は荒神山城の花房職之に仕え、住居を城の北、今の弥九郎谷という場所に移した。信明は天正２（1574）年に「院庄之役」で戦死し、文禄３（1594）年に職之が城を退去するのに伴い、孫の孫兵衛正氏は行信邑に戻ったと記す。　（岡本）

249　是久山城跡（これさやま）　　久米郡美咲町原田　　地図 26 右

立地　是久山は、運動公園の南側、榎本の西背後に位置する標高 283 ｍの山で、城跡は頂上近くの西側の鞍部に小さく南に張り出した尾根に所在する。

概要　現在、頂部には城主とされる岩野家歴代の墓地が存在し、その東西と南側の斜面には切岸造成による曲輪が段状に多数存在する。主郭Ⅰは墓地の範囲に想定され、その規模は全長約 30 ｍ、幅約 20 ｍで、平面長方形を呈する。主郭の約１ｍ下段の南側から東側にかけては幅５～ 10 ｍの逆Ｌ字形の曲輪Ⅱが廻る。さらに、この下段南側と西側の緩斜面には、幅５～ 10 ｍの帯曲輪Ⅲ・Ⅳ・Ⅴが高さ２～４ｍの切岸によって配置されている。特に西側のⅣとⅤは切岸の規模が大きく、反対に南側と東側は１～２ｍと切岸が低く、曲輪を階段状に配置している。



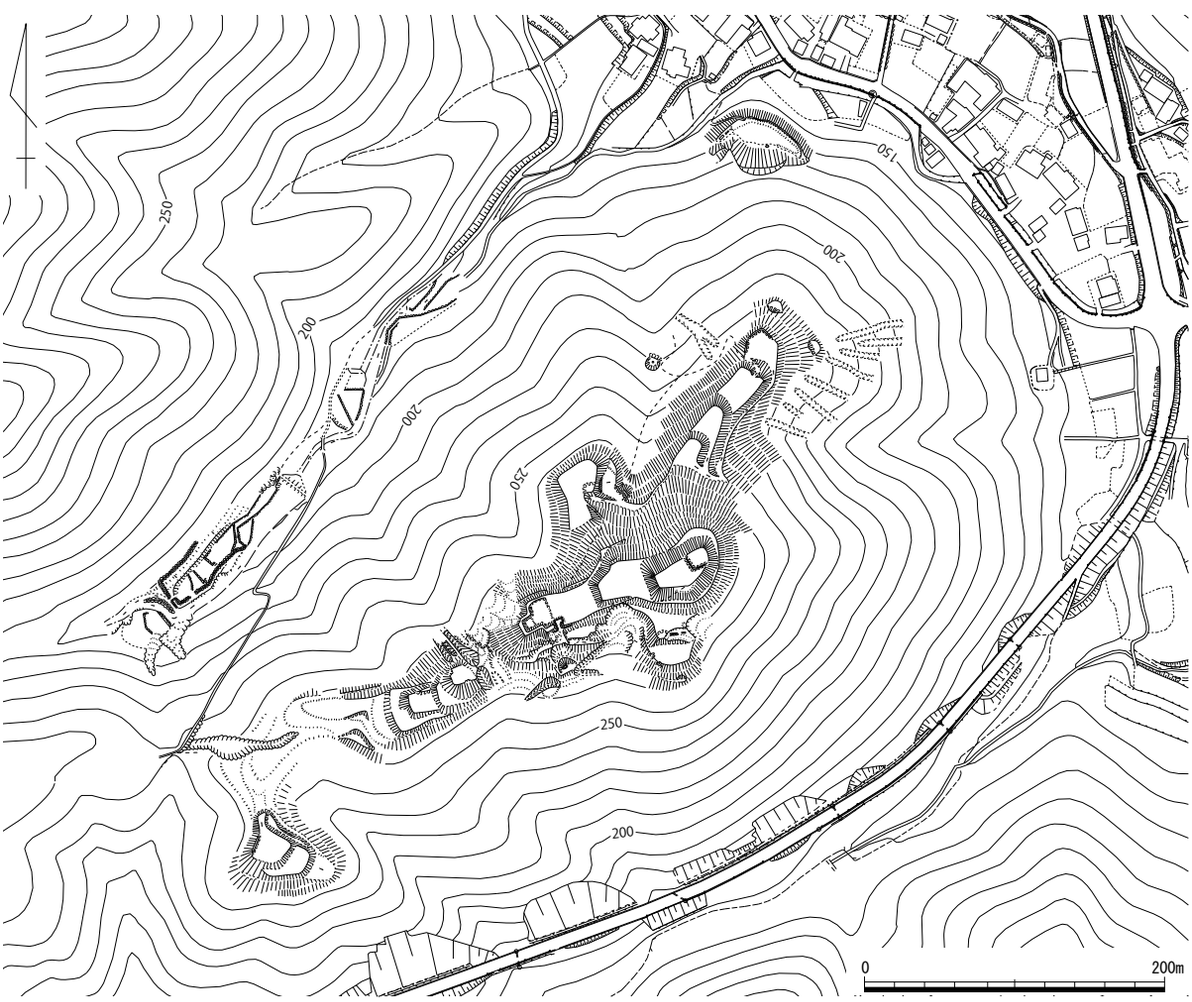
第 249 図　是久山城跡縄張り図（1 /2,000）

文献・伝承　『古城之覚』には原田村と下打穴村境の「是久山」として城主不詳とある。　（島崎）

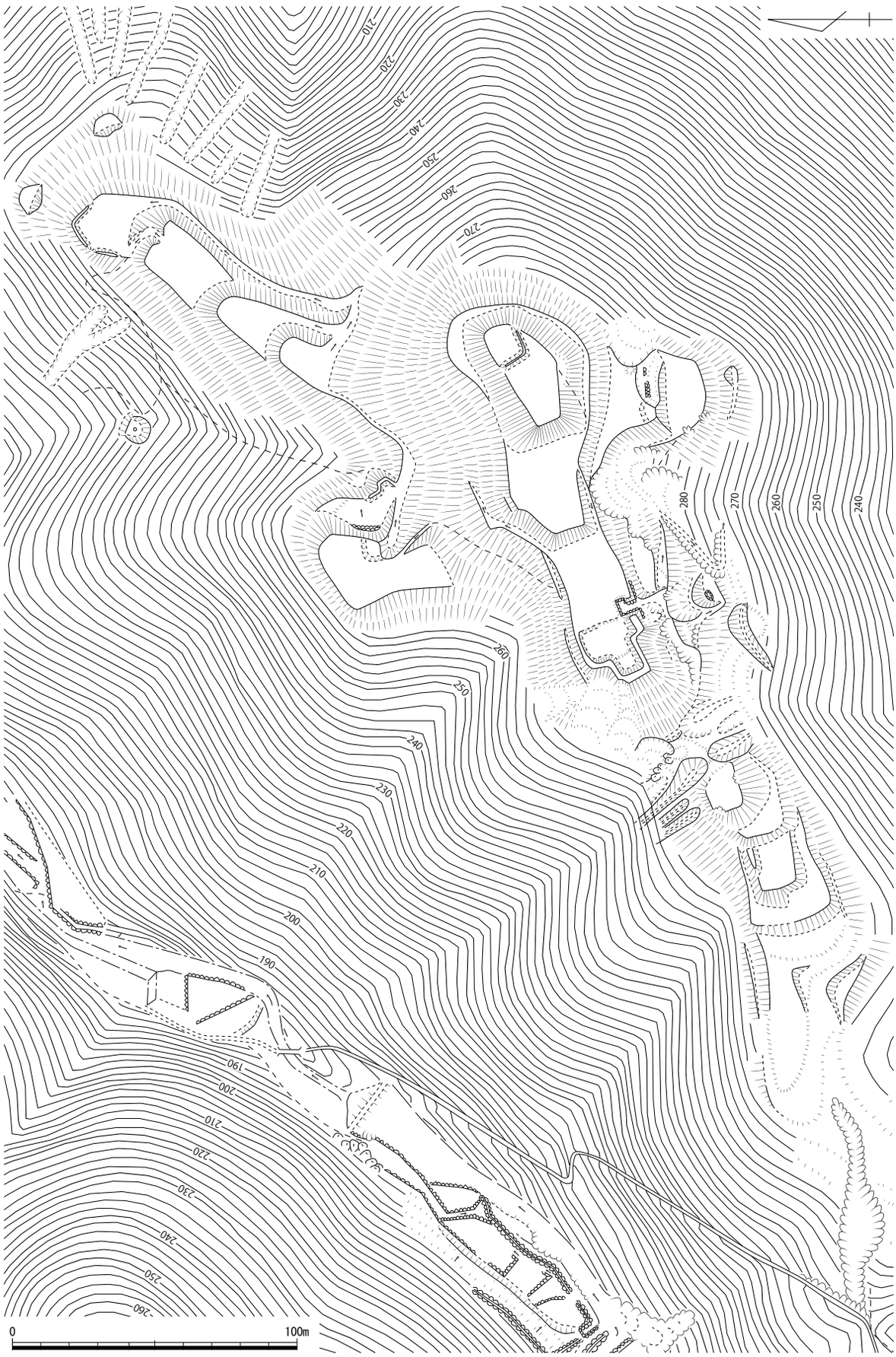
250　荒神山城跡（こうじんやま）　　津山市荒神山　　＜市指定史跡＞　　地図 21 左

立地　荒神山城はＪＲ姫新線津山駅の南約３㎞、津山盆地南縁の山塊中に位置する。津山盆地の南縁に吉井川が東流し、その南に神南備山塊が横たわっている。この神南備山塊の南麓に吉井川筋と皿川筋を繋ぐ谷筋が東西に延びており、その中程、谷筋南側にある北東に延びる尾根先端に立地する。

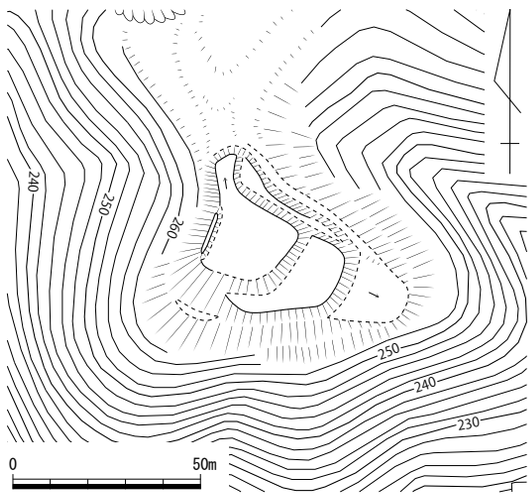
概要　尾根先端の高所を画する堀切を２条設け、高所とそこから派生する尾根を中心に曲輪を設けている。堀切は、尾根筋から斜面へかけて竪堀を向かい合わせて掘削するもので、尾根筋は細い土橋となる。竪堀は、自然の崩れと判別しがたい状況である。高所には３面の曲輪が並ぶ。一番高い東側の曲輪が主郭で、その北東部には、高さ約 0.3 mの低い土手が約 10 m四方の空間を区画している。主郭の西、約５m下にある２面目の曲輪は主郭の周囲を一周する犬走り・帯曲輪と繋がっている。西端の３面目の曲輪は、西縁に「凸」形に屈曲する土塁を配している。土塁の上幅約 1.5 ～ 2.5 m、高さ約 1.5 mを測る。土塁の西側は高さ約 10 mの切岸・堀切である。土塁の東側、曲輪の南縁に虎口を造っている。南斜面約 3.5 m下にある曲輪から上方の曲輪に向けて北へ斜路を造成し、そのまま幅３mで曲輪に入り、すぐに東へ直角に曲がり２mほどで閉じる。現状で曲輪面より通路面が約 0.3 ～ 0.5 m低く、通路周囲の壁面に石列が認められ、石列は土塁の外側、南斜面へ続いていく。この石列が石



第 250 図　荒神山城跡縄張り全体図（1 /5,000）



第 251 図　荒神山城跡縄張り図 1 （1 /2,000）



第 252 図　荒神山城跡縄張り図２（１/2,000）

垣になるかどうかは不明である。虎口の南下方に、斜面を掘削して造った平坦地の山際に直径約 2.5 ～２ｍの不正円形を呈した石組みの井戸がある。主郭から南に派生する尾根には２面の曲輪を設けているが、曲輪と曲輪の間の切岸部分は大きく崩れており、そこに土留めとして高さ約１ｍの石垣を築いている。主郭から北西に延びる尾根にも２面の曲輪を設ける。曲輪間の切岸下半に高さ約 1.3 ｍの石垣を築く。上段の曲輪には尾根高所の曲輪群と繋がる斜路や下の曲輪と通じる溝状の虎口があり、下の曲輪には屈曲する土塁を付設し、谷からの侵入を防いでいると考えられる。これらの曲輪の東側は谷筋が北へ落ち、その途中に、周囲を掘削した平坦地があり、その中央に内径約 60㎝の石組みの井戸がある。主郭から北東へ延びる尾根には４～７ｍの高い切岸を持つ４面の曲輪が階段状に築かれている。最上段の１面目と最下段の４面目の曲輪を繋ぐ通路や、１面目と２面目を繋ぐ通路が南東斜面にある。また、３面目と４面目の間には尾根筋の斜面に屈曲する通路を設けている。４面目の北・西縁に土塁がある。その下方東～南東斜面に見られる竪堀状の溝は、雨水の浸食や崩れと考えられる。堀切以西の尾根にも曲輪が見られるが、削平が甘く、段差も１～２ｍほどである。それらの曲輪の西側は自然地形となって尾根鞍部に向けて徐々に下がっていく。そこから南に向けて派生する尾根があり、先端の高所に３面の曲輪と北東斜面に犬走りが造成されている。周囲の切岸は約１～ 1.8 ｍの高さで、上段の曲輪の西縁に土塁がある。尾根突端山裾の「館跡」や、北側谷筋の「家臣団屋敷」と指摘のある平坦地は、後世の造成の可能性もあり、詳細不明である。

また、以前より瓦が、主郭を中心に、尾根筋高所西端の曲輪の虎口付近や、主郭から北西に延びる尾根の曲輪、主郭から北東に延びる尾根の曲輪などで散見されている。これらの瓦は天正もしくはそれ以前の製品と文禄頃の製品に大別できる（1）。

文献・伝承　『西作誌』は「荒神山」として、宇喜多氏の武将花房助兵衛職秀が居城し、職秀の退転後は廃れ、城下には職秀の与力の柴田与一郎・難波弥九郎・河内七郎左衛門・苔口宗十郎居宅の跡があり、城の北には職秀の営んだ華教寺跡ありと記す。（物部）

（1）乗岡実「瓦からみた宇喜多秀家期岡山城の枝城網」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会 2002 年

写真 120　凸の字形の土塁（南西から）

写真 121　虎口の石列（南西から）

251　大谷城跡（おおたに）　　久米郡美咲町原田　　地図 26 右

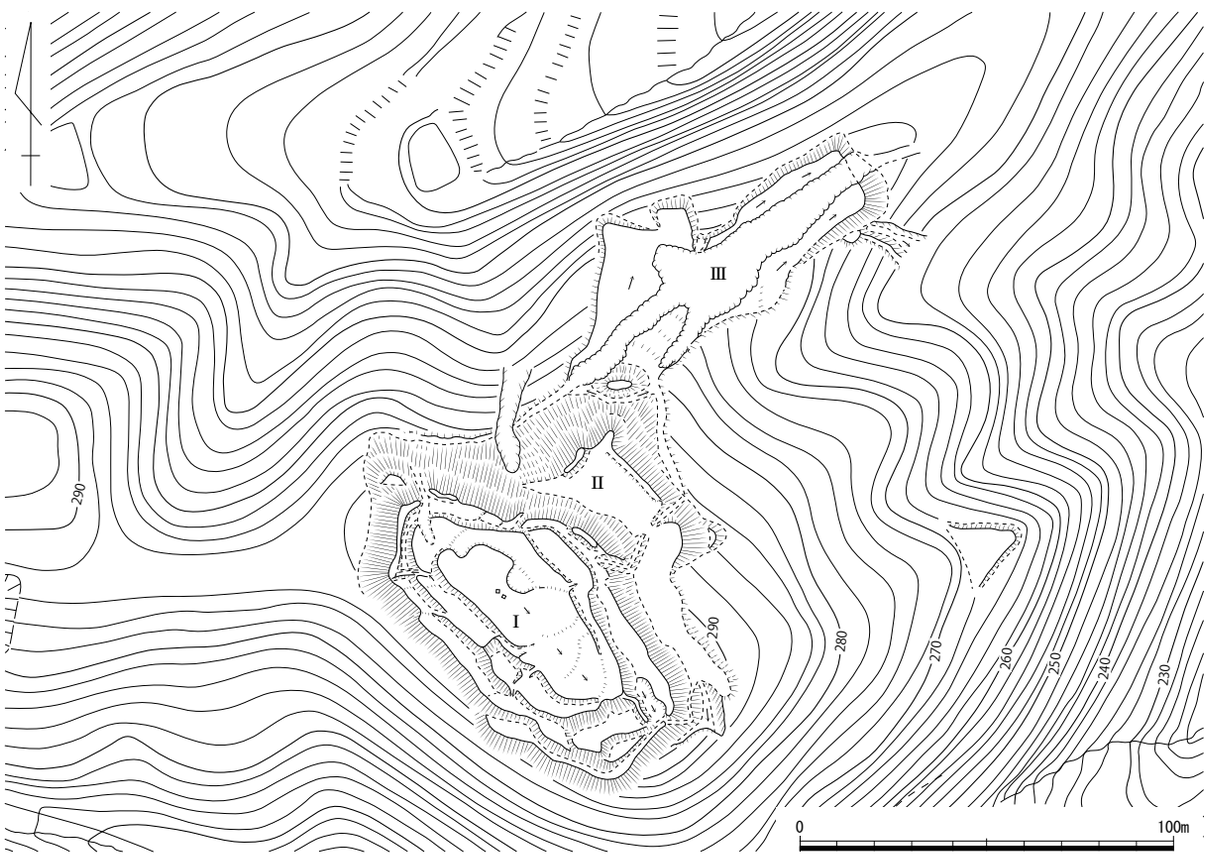
立地　筒ノ宮山から北東に延びる山頂部から北東方向に細長く延びる尾根部に位置する。

概要　山頂部の最高所に南東方向に２面の平坦面をもつ長楕円形の曲輪Ⅰを築いている。その下方に３～４面の帯曲輪が巡り、これらをつなぐ通路が部分的に認められる。ただし、これらの帯曲輪は平坦ではなく自然地形に沿った加工段を有しており、水平移動を妨げている。また、下段の帯曲輪には部分的に土塁が確認でき、特に北西端には高さ約１ｍの土塁が巡り、掻き上げのため土塁の内側は横堀状を呈している。

その前面に比較的広い曲輪Ⅱが造られており、特に北東側下方には比高差約６～７ｍを測る急峻な切岸が造られ、肩口に土塁状の高まりが見られる。また、北西側には土塁が認められ、掻き上げのため内側は横堀状を呈している。北側斜面には自然地形の可能性も考えられるが、竪堀１本が見られる。

山頂部から北東方向に細長く延びる曲輪Ⅲの南西側から北端下方までは急峻な切岸が施され、北東側から下方に肩口に土塁が伴う竪堀１本が見られる。尾根部を切断する堀切は確認できなかったが、主郭への侵入を防ぐ施設の役目を果たしたと考えられる。なお、尾根部中央は複数回の後世の通路の造作により損壊している。

文献・伝承　『古城之覚』は久米南郡原田西村の「大谷」として、城主不詳とあり、『作陽誌』は原田氏が構えた城と記す。　（澤山）



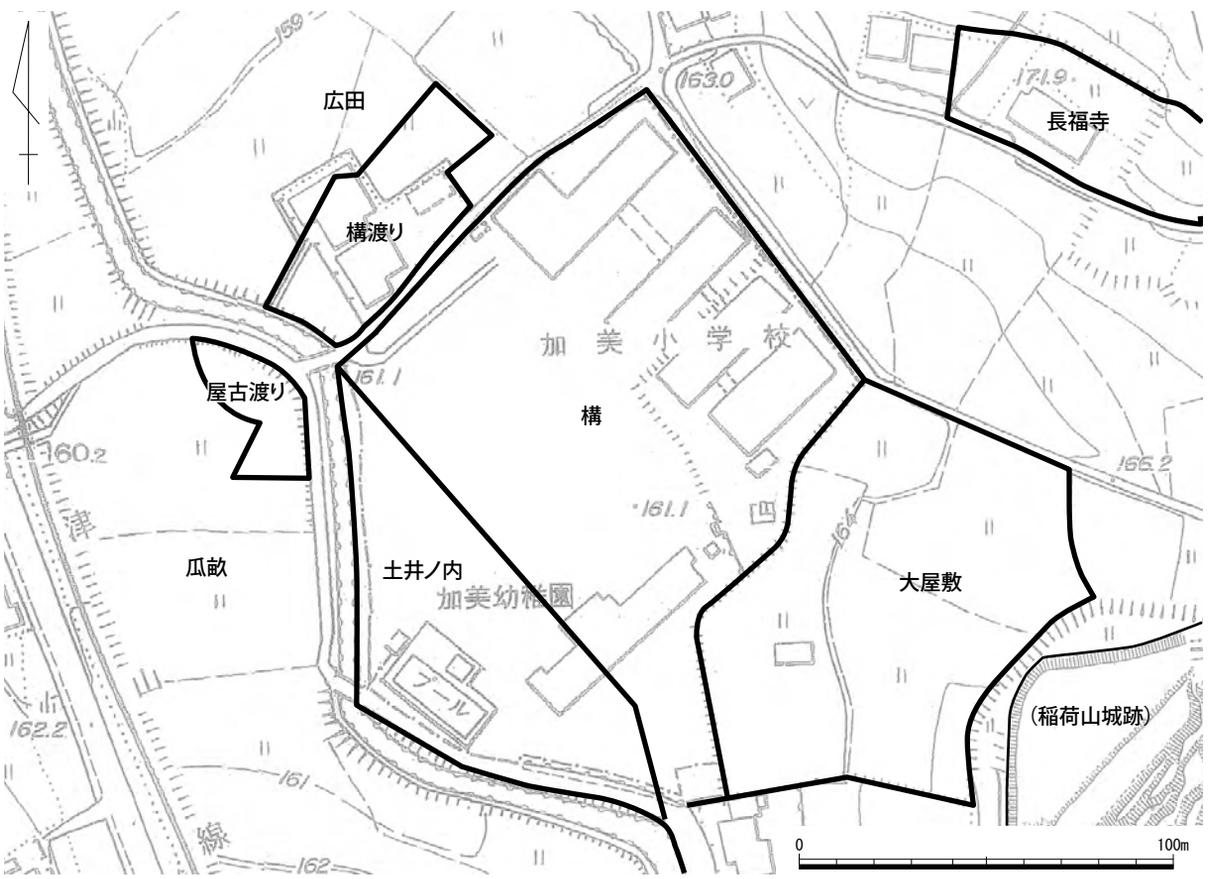
第 253 図　大谷城跡縄張り図（1 /2,000）

252 構跡（かまえ）　久米郡美咲町原田　地図 26 右

立地　皿川上流域に位置する原田地区は、周囲を低位な山塊で囲まれた狭長な平野部に存在する地域である。ここは原田氏十七代の本貫地で、稲荷山城跡が所在する。その北西約 200 mには現在加美小学校が存在するが、ここに構の地籍名が見られる。

概要　稲荷山城跡とは指呼の間に位置する加美小学校の運動場を含めた一辺 100 mの正方形を呈する敷地全体に残された地籍名が構である。発掘調査がなされていないので内部はもちろんのこと、堀の有無についても詳細は不明であるが、一辺 100 mの方形を呈するそのあり方からはこの構跡が稲荷山城跡の築城以前の領主の館の可能性を有し、稲荷山城築城後も城主の平時における館として存在していたと考えられる。館は、国人層の館とされる規模とも一致することから国人層である原田氏の居館とみて差し支えないと考えられる。また、構から稲荷山城跡までの間には土居ノ内や大屋敷などの地籍名が連続して存在することから、ここには領主である原田氏を中心とする有力家臣団の屋敷が存在していたことも推測される。さらに、山側には原田氏の菩提寺であった長福寺跡や、周辺には農地を現わす畑や田の地籍名以外にも南側の山と谷筋には村が一か所に集められていたことを窺わせる「屋古」という地籍名のまとまりをもった場所が存在する。

文献・伝承　中世文書はもとより近世の地誌類にも全く見られない構跡である。　（島崎）



第 254 図　構跡及び周辺地形（1 /2,000）

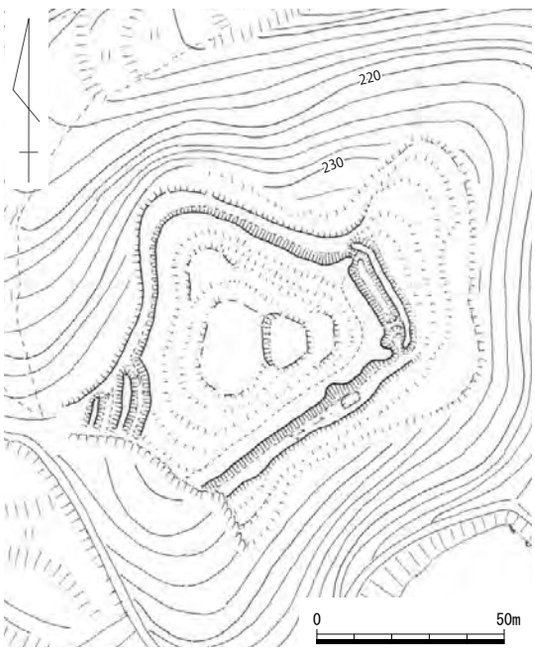
253　城山（しろやま）城跡　　久米郡美咲町西幸　　地図 26 右

立地　稲荷山城跡の所在する皿川流域低位部の西側、尾根間の谷筋を西に約 800 m上った地点に標高 244 mの城山に城山城跡が所在する。

概要　城山は尾根の端頂部で、西と東側尾根筋が堀切や土塁によって、また南側の急斜面肩口には全長 70 mにも及ぶ高さ 1 ～ 3m の切岸と幅 3 ～ 5m の曲輪が階段状に造成されている。北側は山道による改変がなされ明確ではないが簡易な切岸痕跡が見られる。一方、これら堀切と切岸によって守られた内部には、わずかに頂部とその北と東側斜面に簡易な造成痕跡が 3 面認められるにすぎず、ほとんどが自然地形を残した状態である。

これらの特徴は、南北朝期の山城によく見られるあり方といえる。

文献・伝承　中世文書および近世の地誌類には見られない城である。　（島崎）



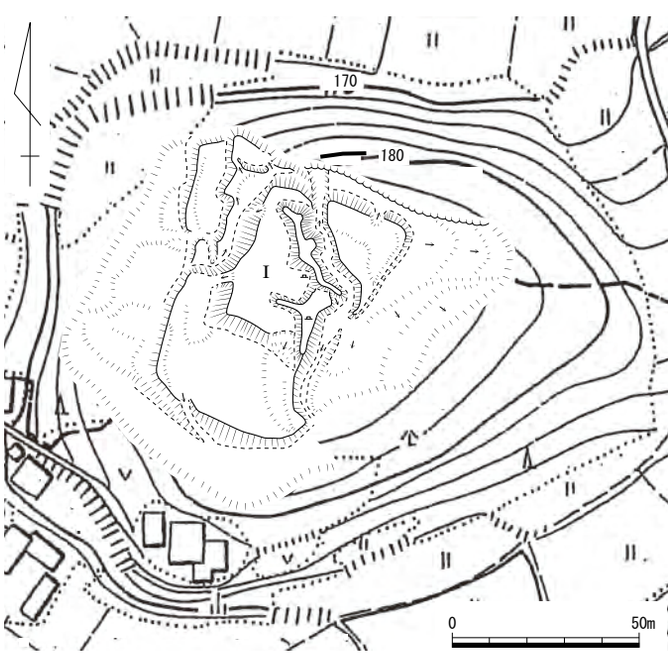
第 255 図　城山城跡縄張り図（1 /2,000）

254　稲荷山（いなりやま）城跡　　久米郡美咲町原田・西幸　　地図 26 右

立地　皿川右岸、狐山という標高 185 mの丘陵頂に立地する。比高は 10 mながら、西側の皿川沿いが広く望める。周辺には東 1.5㎞に新城城跡が位置する。

概要　城域は東西 60 m、南北 75 mと中規模でも小さい。縄張りは頂部の曲輪Ⅰを中心とし、その東西と南に腰曲輪を配置する。頂部の曲輪Ⅰの西辺中央と南東隅に虎口、北辺から東辺にかけて複雑に折れて内外に張り出す土塁を設け、その東側は歪に曲がる横堀で区切るが、これらは築城後の改修により造作された遺構である可能性がある。

文献・伝承　『美作古城史』では保安 5（1124）年に平興方が築城後、文禄年間まで原田氏が居城したと伝える。（米田）



第 256 図　稲荷山城跡縄張り図（1 /2,000）

255　新城城跡（しんじょう）　　久米郡美咲町新城　　地図 26 右

立地　新城川左岸の標高 239 mの山頂部に立地する。比高は約 60 mとやや低い。頂部からは北側の新城川沿いを良好に望むことができる。近隣には西 1.5㎞に稲荷山城跡が位置する。

概要　城域は東西 90 m、南北 80 mと中規模である。縄張りは頂部の曲輪Ⅰを中心に、その北西側と南東側に腰曲輪Ⅱ・Ⅲ、南側から東側に帯曲輪、北東側に延びる尾根端に小曲輪群を連ねる。

頂部の主郭と考えられる曲輪Ⅰは不整の長方形を呈し、30 × 19 mの規模である。西辺と北辺は折れが認められる。虎口は北辺中央、南西隅、南東隅の３か所に設ける。南西隅の虎口からの経路は南西側の堀切まで直行する一方、南東隅の虎口からの経路は南東側の帯曲輪の端を経由しながら複雑に折れ曲がる。腰曲輪Ⅱ・Ⅲは頂部の東西に配置されている。東側の腰曲輪Ⅱは頂部の曲輪Ⅰからわずかに面が下がり、東辺中央に虎口がある。また、西側の腰曲輪Ⅲは北西の眺望に優れることから物見台であった可能性も考えられ、北端に土塁状の斜路がある。南側の緩斜面に配された帯曲輪は上下２面あり、上段は平面形が台形で南辺は折れをもつ土塁で堅く守る。一方、下段の帯曲輪は切岸が急で高く、中央部分が明確に折れ、東側緩斜面の造作があまい帯曲輪に繋がる。頂部から北東側に延びる細い尾根には小曲輪が７面程度連なるように配置されている。南西側の鞍部は堀切で堅守され、中央は土橋となり、北西と南東の谷部に向かってそれぞれ延びる。全体的に南西側から北東側の守りを固めた縄張りと言える。

文献・伝承　『古城之覚』は新庄山とし、城主は赤松兵部少輔と伝える。また、『美作古城史』によれば、本城は稲荷山城主原田氏の支城であったが、大永～天文元（1521 ～ 1532）年頃には原田氏に靡いた赤松政祐が在城していたとされる。赤松政祐は浦上村宗に追放され、播磨の小塩城跡から新城城に移った。享禄３（1530）年に赤松政祐は村宗を討って小塩城跡に戻り、新城城は廃城となったと伝えられる。　（米田）

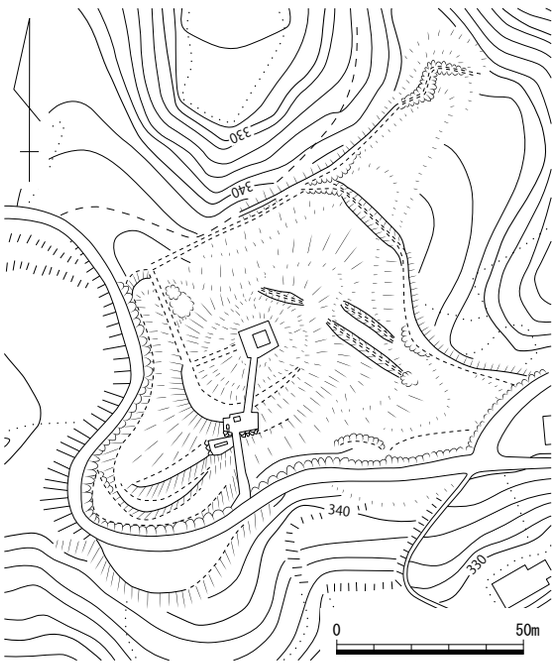
第 257 図　新城城跡縄張り図（１/2,000）

264　上殿（うえんと）城跡　久米郡久米南町中籾・岡山市北区建部町三明寺　< 町指定史跡 >　地図 26 左

立地　標高 350 m級の山塊から、南へ向けて派生する尾根線頂部に位置する。岡山市と久米南町の境に位置しており、東西約 100 m、南北約 170 mの規模を測る。

概要　頂部に位置する主郭には、現在川島神社が築かれている。神社内には、宝篋印塔が２基納められていた。主郭自体は 15 mほどの規模になるが、加工した痕跡は曖昧である。南西側に下る尾根線上には、長さ５mほどの曲輪が３面、さらにその先に長さ 10 m程の曲輪が１面連なる。主郭背後は、堀切状の溝が２条築かれ、さらにその先にも堀切１条が築かれ守りとしていた。

文献・伝承　『久米郡誌』は、永禄６（1563）年に、毛利氏が尼子氏を攻める際、河島左近将監惟家が従い当地に在城したとする。その後一族の反逆により落城したと言われる。　（小林）



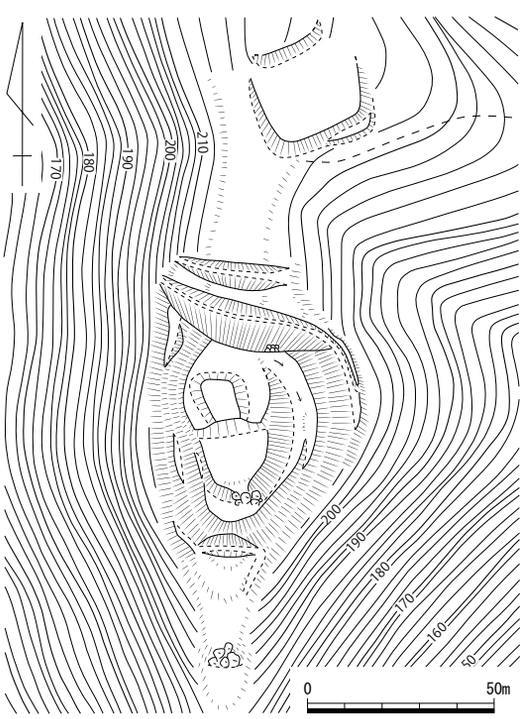
第 258 図　上殿城跡縄張り図（１/2,000）

266　立畑（たてはた）城跡　久米郡久米南町上二ケ　＜町指定史跡＞　地図 26 右・30 右

立地　誕生寺川西岸の南に延びる尾根先に立地する。南方、東方の誕生寺川流域を眺望できる。

概要　高所の曲輪（主郭）には高さ約 50㎝の台状の高まりがある。主郭の南にある２面の曲輪の内、１面目と主郭の段差は 0.5 ～１m、１面目と２面目は約 2.5 mで、１面目まで一体の主郭と捉えることもできる。東側斜面には通路状の曲輪がある。堀切は曲輪群の南に１条、北に２条あり、主郭北に接する堀切は深さ 2.5 ～６m、東端部は浅い溝状になって南に回り込むが、横堀かも知れない。北方の尾根に約 1.5 mの切岸をもつ方形平坦地があるが、性格不明。

文献･伝承　『美作国の山城』は､『古城之覚』は「立畑」、城主不詳、『久米郡誌』は立畑山にあり、高さ約 500 尺、山上の約７畝が６段となり、宇喜多氏将士の屯営のあとかと推定するとする。　（物部）



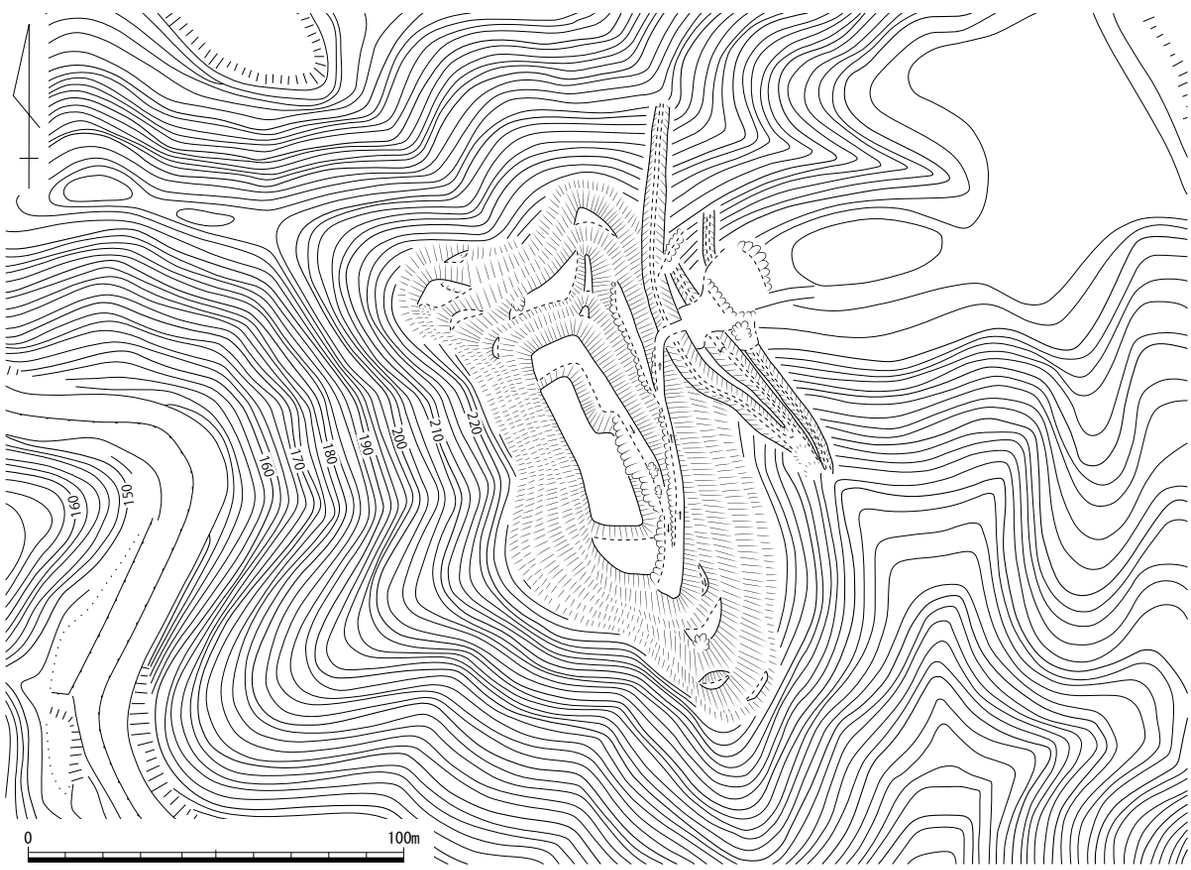
第 259 図　立畑城跡縄張り図（１/2,000）

267　安盛城跡（やすもり）　　久米郡久米南町上神目　　＜町指定史跡＞　　地図 26 左

立地　誕生寺川の支流、中田川は吉備高原を穿って南北に長い「V」字渓をつくっている。安盛城は中田川の東岸に位置するが、立地は、谷底から見ると切り立つ斜面上の尾根高所となるが、東側の高原上から見ると、鞍部を挟んだ、目線よりやや下方の低丘陵尾根上となる。

概要　高所に 40 × 10 mの南北に長く平坦な曲輪（主郭）があり、その南北両側に段差 1 ～ 1.5 m の腰曲輪を配置する。東斜面にはそれら腰曲輪を繋ぐ犬走りがあった可能性があるが、林道による掘削があり、詳細不明である。主郭東辺に折れ曲がりがみられるが、林道の影響かもしれない。南・北・北西に下る尾根に設けられた複数の曲輪は、規模は小さいが段差は３～６mある。北斜面の小さな谷部に造成されたやや広い曲輪は、東にある北へ下る尾根を削り込んで、尾根筋を土塁状に残している。また、東側鞍部には林道等による造成のため埋め立てられているが、３条の堀切が認められ、堀切の両端はいずれも竪堀となる。堀切の規模は幅 2.5 ～ 5 m、深さ 2 ～ 0.3 mで、西側堀切底部と主郭上面との比高は約 15 mである。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『古城之覚』は久米南郡上神目原村の「安盛」として城主不詳、『作陽誌』は「安盛故営」とし、赤松孫五郎がありと記し、『美作鏡』も城主を赤松孫五郎則勝とするとする。『久米郡誌』は「安盛城址」とし、東面以外は峻険な絶壁で、築城年不明、草木城主赤松孫五郎則勝が一時居城、天正年間に赤松の一族赤松豊後守が在城中、宇喜多氏に攻落されたとする。　（物部）



第 260 図　安盛城跡縄張り図（１/2,000）

269　大戸山轟城跡（だいとやまとどろき）　　久米郡美咲町大戸下　　地図 27 左

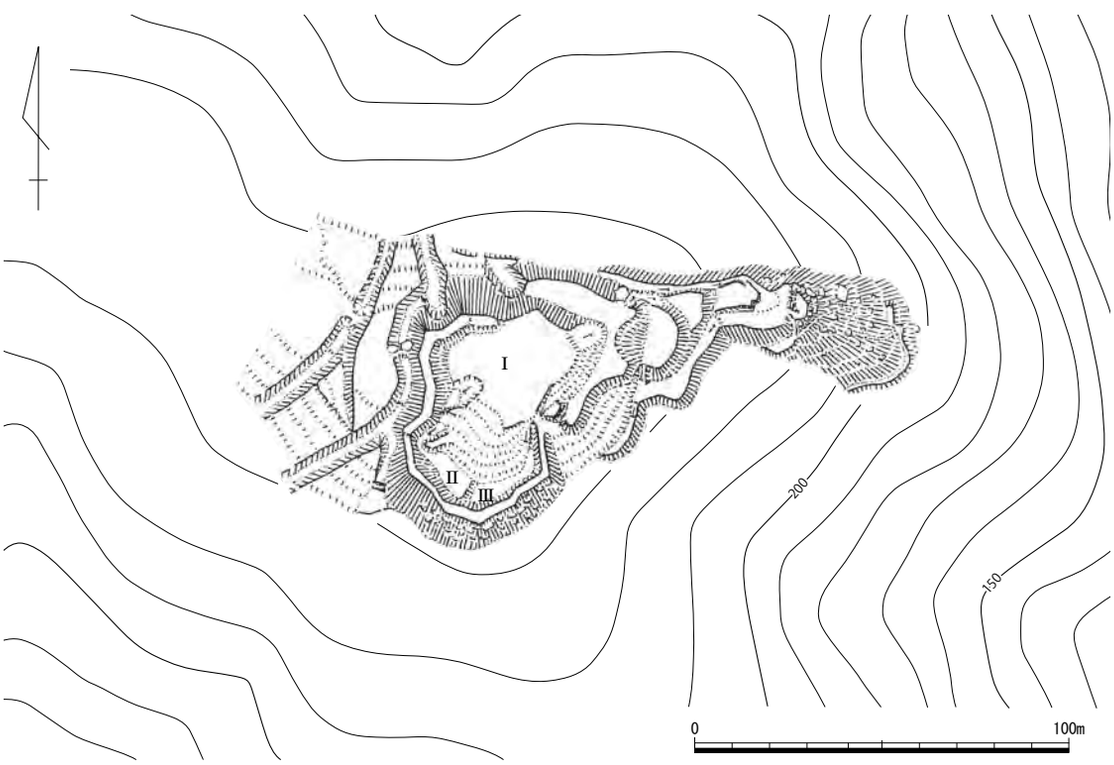
立地　城は、吉井川右岸の大戸下地区を眼下に眺望可能な西の山塊から川側に大きく張り出した標高 230 mの山塊端頂部に位置する。ここは吉井川沿いの県道 23 号と 52 号が交わる地点で、陸上・河川両交通の要衝の地といえる。

概要　城の所在する東西に長い山頂部は、西側が緩やかな自然の起伏をなし、東端と南斜面は急峻な斜面である。またここは露岩が多く存在し、東端と南斜面側からの登頂をより困難にしている。

城は、東側先端の山塊端部から西に約 120 mの地点に、緩やかな自然の起伏であった場所が南北方向に 2 条の堀切によって画され、その東側に主郭他 8 面の曲輪が配置されている。

主郭 I は、西側直下の堀切底部から約 4 mの高さに造成されており、南北約 50 m、東西約 40 mの楕円形を呈する。ただし、この曲輪は全てが造成された平坦面ではなく、造成面は北側の頂部約 30 m間で、南側は南に向けて下がる自然面を残した傾斜面で、端部に曲輪Ⅱ・Ⅲを設け南側の防御を固める。土塁は、堀切沿いから南と東側にかけて地形に即して斜めに造成されており、外郭の防御線を強く意識した造りとなっている。注目すべきは、土塁には折れが多用されている点で、主郭には大小 15 の折れが横矢を効かせている。一方、主郭から東端部下方に階段状に連続する曲輪は、尾根幅が狭くなるにつれて小規模になる。ただし、曲輪間の切岸は顕著なものではなく、自然面を多く残す。

文献・伝承　『古城之覚』によると「とゝめき山」として「城主赤松一族抱ル」とする。『作陽誌』には「轟山」として別名を弾正山といい入江弾正の在城を伝える。　（島崎）

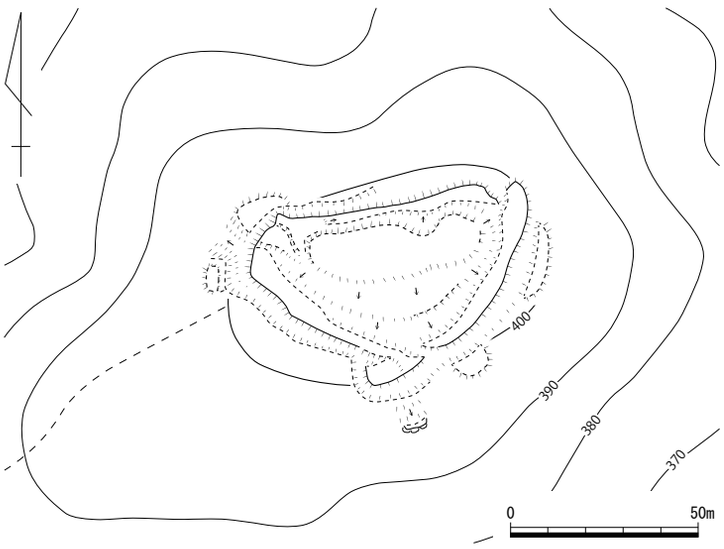


第 261 図　大戸山轟城跡縄張り図（1 /2,000）

270 高城（たかしろ）跡　　久米郡美咲町小瀬・栗子　　地図 27 左

立地　吉野川右岸、小瀬集落の西側にある標高約 406 mの城ヶ山頂に立地する。比高は約 330 mと高い。頂部からは北東側の吉井川沿いが望める。近隣には北西 2.6㎞に大戸山城跡、吉井川を挟んで北東 3.4㎞に城の尾山城跡が位置する。

概要　城域は東西 90 m、南北 60 mで、中規模でもやや小さい。縄張りは頂部の周縁に帯曲輪、東西の斜面に小曲輪を配置している。頂部の曲輪は削平があまく、周りの斜面は緩い。帯曲輪は北、南東、南西の三辺に配置され、幅が狭く長い。さらに帯曲輪外側の東斜面には小曲輪を３面、西斜面には虎口を挟んでその南北脇に小曲輪を配置し、守りを固めている。土塁や堀切は認められず、全体的に防御施設は明確ではない。　（米田）



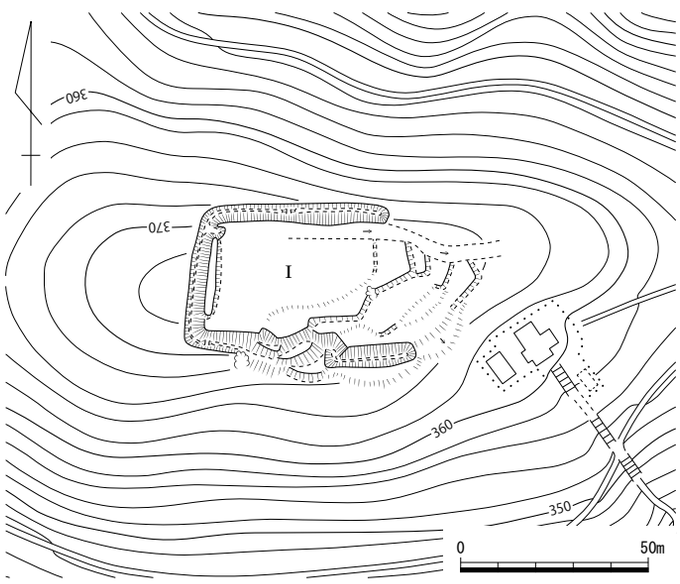
第 262 図　高城跡縄張り図（1 /2,000）

272 竜王山（りゅうおうざん）城跡　　久米郡久米南町下籾　　＜町指定史跡＞　　地図 30 左

立地　城は、備前国との境界をなす山塊から西へ延びる尾根の先端頂部に所在する。

概要　標高 370 mの頂部に、東辺を除く３辺に幅約５m、深さ約２mの横堀を巡らした曲輪Ⅰを配する。この曲輪の南辺中央部は南に突出し、その東側には「L」字を呈する横堀と連動した横矢掛けが設けられている。西辺には、高さ１m弱の土塁が残存する。曲輪Ⅰから東に延びる尾根筋上には、比高差約１mの段差をいくつか設けているのみである。『作陽誌』には「四方に塹有り」と記載されていることから、後世に横堀を埋めた可能性もあるが、判然としない。曲輪Ⅰの北･南辺には、石積みが築かれている。

文献･伝承　『美作国の山城』には､「龍王山」として城主を岸備前守とすると『古城之覚』は記すと記載する。（小嶋）



第 263 図　竜王山城跡縄張り図（1 /2,000）

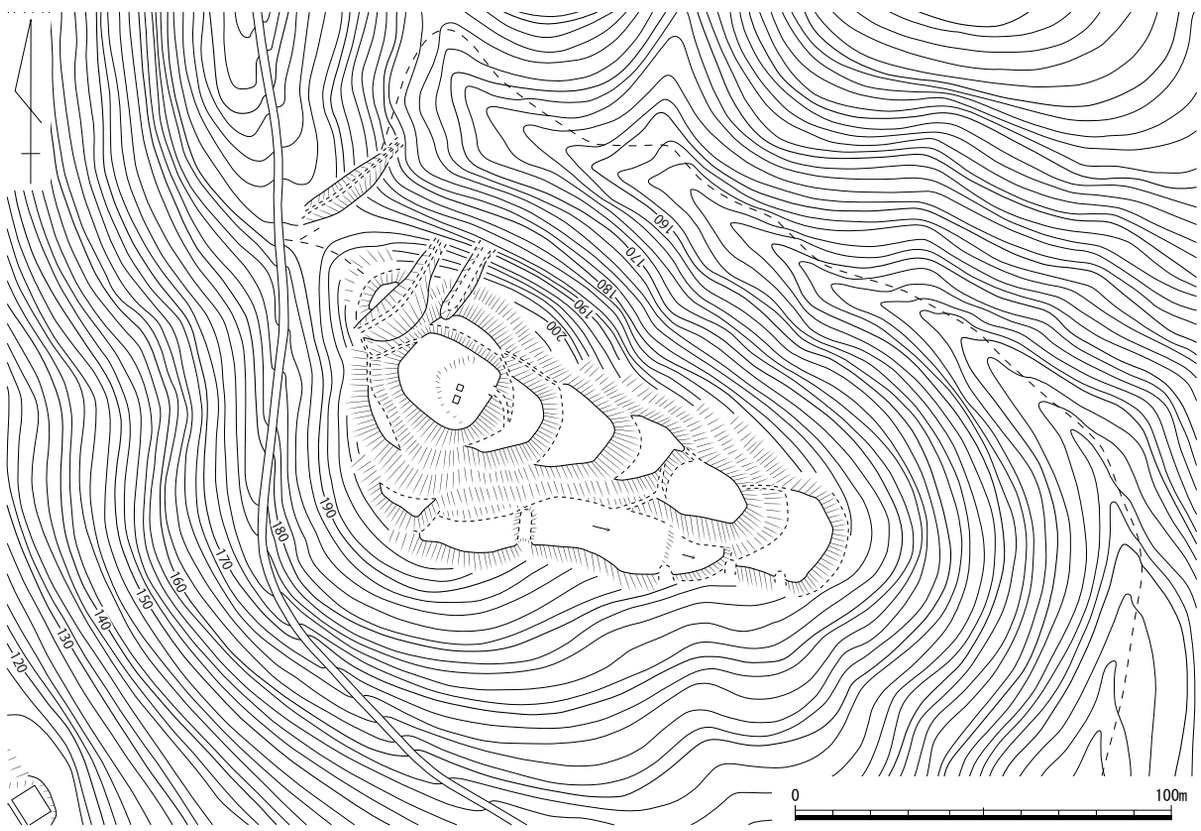
273　草木（くさき）城跡　　久米郡久米南町下二ケ　　地図 30 右

立地　誕生寺川左岸で、国道 53 号線のすぐ西側沿いにあり、標高 209 m、比高差 80 mの尾根上に位置する。尾根は北西側から南東側へ延びる細尾根で、頂部に主郭がある構造である。

概要　尾根頂部に 30 × 20 mの主郭を置き、その周りを腰曲輪で囲む。さらに南東方向に向けた尾根筋上に 4 面の曲輪が連なる。曲輪列の南側には、1 段下がった箇所にも幅 20 m前後の曲輪を設けている。主郭の南東側には通路があり、虎口になるかもしれない。また曲輪列の北側には、道状に走るスロープがあるが、部分的に繋がらない箇所も存在する。腰曲輪は広い箇所で 10 mあるが、正確には南側の斜面部が途切れていて廻らない。4 面の曲輪列は、3 面まで 15 m前後の幅であり、長さは主郭側から 10 m、8 m、17 mを測る。最下段の曲輪のみが幅 25 m、長さ 11 mと大きい造りになっている。主郭北側方向は、谷部に向けて急峻な地形を利用して守りにしていたと考えられる。主郭の北西側には 2 条の堀切、北側には 1 本の竪堀で守りとしてた。また主郭上には祠が 2 つ存在していた。

当城は、尾根先端側には曲輪を連ねた典型的な連郭式山城である。規模などから当地の中規模国人層の本拠であった可能性が考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』は城主が赤松孫次郎とあり、『美作鏡』は城主が赤松左衛門家盛・赤松孫五郎則勝とする。『美作古城史』では、赤松孫次郎則勝が「草木之城」に在した。（文献 133）　（小林）



第 264 図　草木城跡縄張り図（1 /2,000）

274　下風（しもかぜ）城跡　　岡山市北区建部町川口　　地図 30 左

立地　旭川支流の誕生寺川右岸の標高 236 mの山頂に立地しており、備前との国境に極めて近い。比高は 150 mである。頂部からは南西側の旭川と誕生寺川との合流点付近、南東側の誕生寺川沿いの眺望が良い。近隣には南東 600 mに伏山城跡、東 1.0㎞に伊勢畑城跡が位置するほか、南東 700 mには志呂神社が鎮座する。

概要　城域は東西 90 m、南北 145 mと中規模である。縄張りは頂部の土塁囲みの曲輪Ⅰを中心とし、その周りに幅広の曲輪を構える。

頂部中央にある中心となる曲輪Ⅰは 30 × 25 mの不整方形を呈し、周縁を土塁で囲む。土塁の南東辺は 2.5 mと高い。土塁の北東辺は二重に折れて横矢を効かすほか、北西辺は北半が内側に折れ、加えて曲輪の北東隅と南西隅の２か所に虎口を設けるなど複雑な構造をもつ。

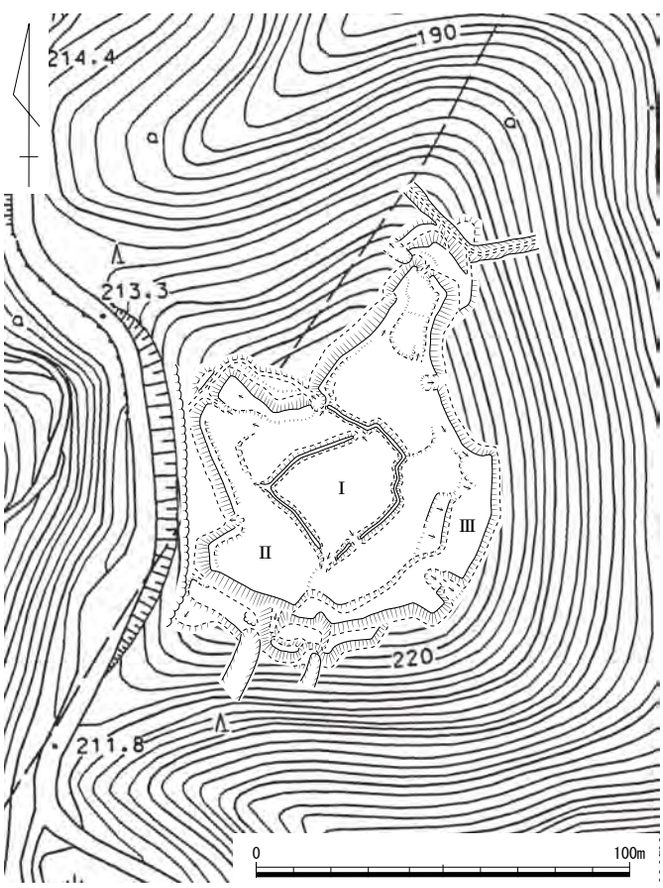
頂部の周囲下段は幅広の曲輪Ⅱが全周しており、北西部は頂部の曲輪Ⅰから続く土塁で南北に区切る。北部は縁辺を低い土塁で囲み、土塁を屈曲させて狭くした北端と北東側に虎口を設ける。また、東部の曲輪は２段構えで、下段の曲輪Ⅲは横矢や折れ、虎口を備える。南部は 25 × 20 mと広く、横矢のように南西に張り出し、西辺に低い土塁を伴う。この張り出しの切岸は高低差が５m近くある。さらにその南西下段には帯曲輪や小曲輪を４面配置している。西部は２段構えで、西辺に低い土塁、北西隅に虎口や横矢を設ける。

防御施設として、北東端に弧状の堀切と竪堀、北西端は小さな堀切、南西端は２本の竪堀を備えており、曲輪の要所に巧みに設けられた土塁や横矢、折れと併せて縄張り全体を堅固に守る。

文献・伝承　『古城之覚』では「おしろ」と伝えるほか、『美作鬢鏡』は「下風ノ城」、『美作鏡』は「下風城」、『久米郡誌』では中尾山また尾城とする。（文献 133）

（米田）

写真 122　曲輪Ⅰ東辺土塁・切岸（南東から）



第 265 図　下風城跡縄張り図（１/2,000）

275　伏山城跡（ぶしやま）　　岡山市北区建部町下神目　　地図 30 左

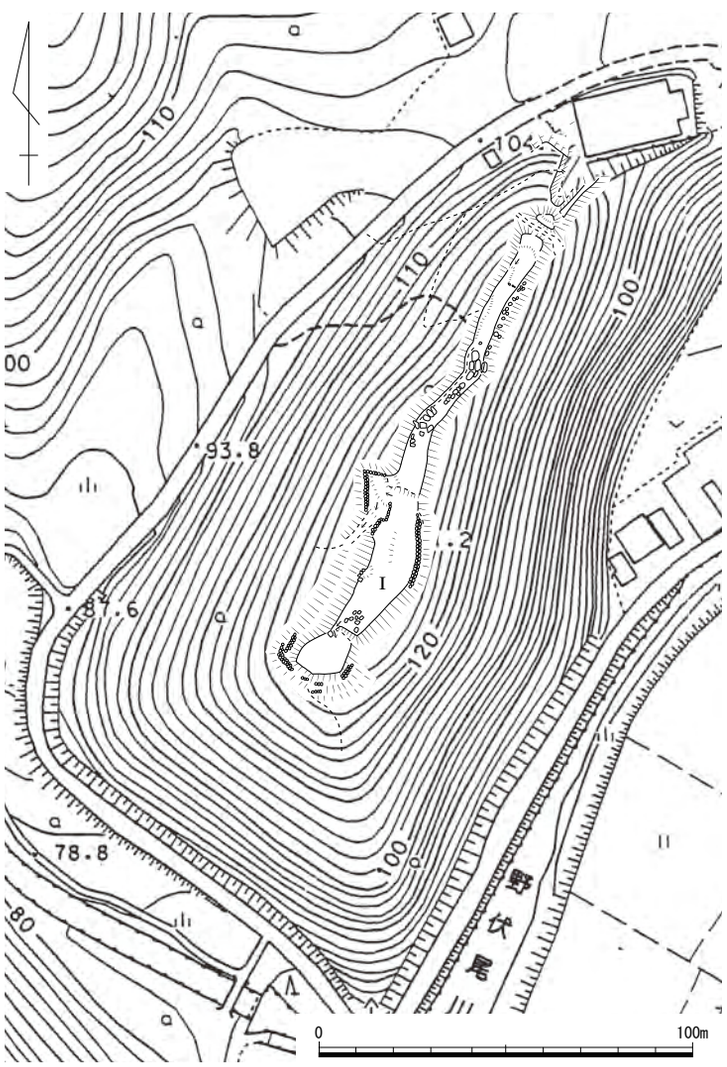
立地　旭川支流の誕生寺川及び野伏尾川右岸の標高 130 mの独立丘陵上に立地しており、備前との国境は極めて近い。丘陵は北東から南西に細く延び、比高は 60 mである。丘陵の北東裾には志呂神社が鎮座する。近隣には北東 500 mに伊勢畑城跡、北西 600 mに下風城跡が位置している。

概要　城域は東西 20 m、南北 170 mと規模は小さい。丘陵頂部の幅が狭い尾根筋に沿って、幅 10 ～ 20 mの細長い曲輪が 4 面連なる縄張りである。頂部中央に露出している複数の巨石を境に、頂部の南北にそれぞれ配置された曲輪が分断されている。中心的な曲輪は明確ではないが、頂部南半に配置された曲輪Ⅰは約 40 × 20 mと城内で最も規模が大きい。曲輪Ⅰの西辺北側には折れや屈曲する高さ 1 ～ 2 mの石垣を築いて、喰い違いの虎口が設けられている。また曲輪Ⅰの東辺北側は高さ 3 ～ 4 mの石垣を延長約 20 mにわたって築くことで、曲輪の幅を拡げるほか、東側からの守りを固めている。さらに南端の曲輪の縁辺にも東側、南側、南西隅角に石垣が築かれている。このほか、頂部北端は東西の斜面が急峻で幅が狭くなり、堀切 1 条で尾根筋を区切るほか、北斜面に竪堀 1 本を配置して、北側を堅固に守る。全体的に小規模な曲輪群ながら、南半は東西と南側に築いた石垣、北半は堀切と竪堀、急峻な地形で堅守する縄張りと言える。

文献・伝承　『古城之覚』は「ぶゝ山」、『美作古城史』は「ぶし山の城と申す古城山」と伝える。　（米田）

写真 123　曲輪Ⅰ北西の石垣（北西から）

写真 124　曲輪Ⅰ東側の石垣（南から）



第 266 図　伏山城跡縄張り図（1 /2,000）

276　伊勢畑（いせはた）城跡　　岡山市北区建部町下神目・久米郡久米南町神目中　　地図 30 左

立地　旭川支流の誕生寺川が蛇行する右岸の標高 249 mの山頂に立地し、備前との国境に近い。比高は 170 mで、東側と南西側の誕生寺川沿い、北西側の野伏尾川沿いの眺望に優れる。山の南西裾には志呂神社が鎮座する。近隣には南西 500 mに伏山城跡、西 1.0㎞に下風城跡が位置している。

概要　城域は東西 240 m、南北 320 mと大規模である。縄張りは頂部の土塁囲みの方形の曲輪を中心とし、頂部から南側と南東側に二股に分かれた尾根全体に虎口、横矢、折れ、土塁を要所に配した曲輪や帯曲輪を巧みに配置したうえ、塁線を土塁で囲んだ複雑な構造である。

頂部の中心となる曲輪Ⅰは 43 × 33 mの不整方形を呈し、北東隅に横矢、南辺と西辺は土塁を設けている。虎口は南東隅と北西隅にある。このうち、北西隅の虎口は西辺の土塁を曲輪の内側に屈曲させて幅を狭くしている。また、頂部の南側に配置された曲輪Ⅱは 45 × 22 mの長方形を呈し、曲輪Ⅰの土塁から繋がるように周りを土塁で囲み、南西隅と南東隅に虎口がある。さらに頂部の曲輪Ⅰの西側に土塁で囲まれた帯曲輪Ⅲがあり、西辺中央の虎口付近は土塁裾に石積みが構築されている。このほか、曲輪Ⅰの北側の曲輪Ⅳは横矢や折れを効かし、北端は横堀、西辺から北辺は通路を兼ねる幅広の土塁、東辺は折れを伴う土塁で堅守する。なお、横堀の西端には径３mほどの窪みがある。また、頂部の曲輪Ⅰの東側から南東側は長さ 90 m前後、幅 10 m前後の帯曲輪Ⅴ～Ⅶを３段で構え、窪みが２か所、帯曲輪Ⅴ・Ⅵの南東側には不整楕円の窪みも認められる。さらにその北、東、南の外側に幅 15 m前後の幅広の横堀を設けるほか、その外縁は東に向かって折れや横矢を効かした土塁で囲んで堅固に守る。また虎口は土塁の東辺中央に２か所あり、曲輪Ⅹ・Ⅺの間の谷部に通じる。このほか、曲輪Ⅱ・Ⅲの西側には帯曲輪Ⅷ、その南端に腰曲輪Ⅸを構え、西方の睨みを利かせる。頂部から南東側の延びる尾根に曲輪Ⅹを構える。曲輪Ⅹは削平があまいが、南東端に向かって緩やかな段を複雑に設けるほか、通路が北東端と南西端に向かう。

曲輪Ⅹの北辺は幅広の横堀とその外側に土塁、東辺は折れや横矢を伴う土塁がめぐる。横堀には窪みもある。虎口は東辺に３か所あり、その外の北側から東側にかけて複数の帯曲輪や小曲輪を集中的に連ねて配置している。南側に延びる尾根に曲輪Ⅺは削平がややあまいが、切岸はしっかりとしており、南側に複数の段を配置する。谷部に面した東斜面には帯曲輪を３面近く構える。西辺、南辺、南東辺は折れのある土塁で囲み、南西隅と南東隅に横矢と虎口をそれぞれ要所に配している。曲輪Ⅹと曲輪Ⅺの間にある谷部は大半が南東に下がる自然の緩斜面である。谷部の北西側には径約 2.5 mの窪み、南東端にも窪みが認められる。また、谷部の南東端は曲輪Ⅹ・Ⅺからそれぞれ続く土塁が途切れ、喰い違い虎口を設ける。全体的に南側の尾根端は堀切あるいは横堀と竪堀と土塁を複雑に組み合わせるほか、北側の鞍部は幅広の連続堀切と竪堀に加え、急な切岸で堅固に守る。このほか、東西の斜面は要所に竪堀を配置して防御する。

以上の縄張りは、土塁の繋がりや連結状況からみて、曲輪Ⅰ～Ⅳは頂部の曲輪Ⅰを中心に拡張した第１段階、帯曲輪Ⅴ～Ⅸは頂部東側を中心に縄張りを拡張した第２段階、曲輪Ⅹは第３段階、曲輪Ⅺと谷部は第４段階に改修された可能性があり、最終的に大規模になったと考えられる。

文献・伝承　『豊楽寺文書』によれば、永正元（1504）年に「伊勢ヶ旗」の城主「赤松左衛門尉家盛が豊楽寺を再建したと伝える。　（米田）

第 267 図　伊勢畑城跡縄張り図（1 /2,000）

写真 125　曲輪Ⅶ東側の横堀（南西から）

写真 126　曲輪Ⅱ東辺の土塁（南から）

写真 127　曲輪Ⅹ北側の土塁（西から）

写真 128　曲輪Ⅲ西側の虎口（北西から）

写真 129　曲輪Ⅶ北東の虎口（北から）

写真 130　城域南側の堀切（西から）

写真 131　城域北端の堀切（東から）

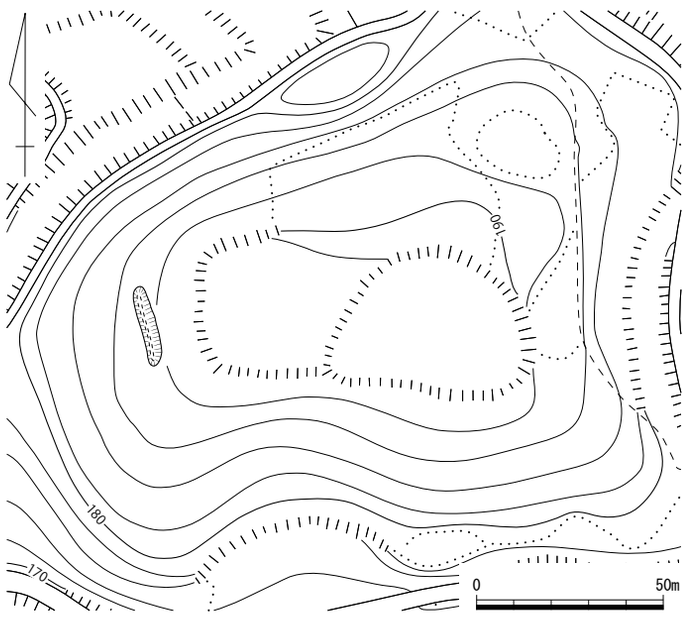
写真 132　曲輪Ⅹ南側の横堀西肩の石積み（東から）

278　沼元（ぬもと）構跡　　久米郡久米南町宮地　　地図 30 右

立地　誕生寺川東岸の山塊の山上部は高原状を呈し、そのほぼ中央に位置する低丘陵に立地する。

概要　頂部に平坦地があり、南縁は約２ｍの切岸状を呈するが、畑地・果樹園として開墾され、詳細不明。丘陵西側に南北方向の横堀を確認した。深さは東側で約 1.5 ～２ｍ、西側で 0.5 ～１ｍ。南北両端は閉じている。「本丸」の地名が残る。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『岡山県立博物館所蔵文書』に、永禄８年（1565）８月、宇喜多直家は備前国の侍、難波三郎右衛門尉に宛て、「沼元構」を取り詰めれば、備中国の三村家親は出勢してくるだろうから、一戦をもって決着したいなどと書き送っているとする。　（物部）



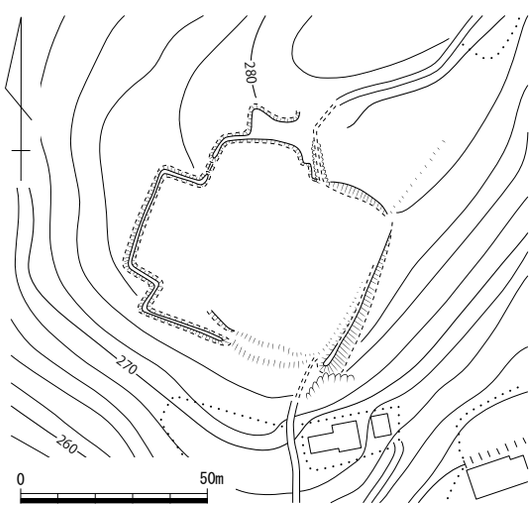
第 268 図　沼元構跡縄張り図（１/2,000）

279　大西（おおにし）構跡　　久米郡久米南町山手　　地図 30 右

立地　誕生寺川の南東にある山塊の、高原状を呈する山上部南西角に位置し、南に延びる幅の広い尾根筋の緩斜面に立地する。南の谷底との比高は約 100 ｍを測るが、周囲の水田や集落との比高は約 10 ｍである。

概要　畦に囲まれた約 60 × 50 ｍの方形を呈する平坦地を確認した。畦は、「凸」状に折れ曲がることや、高さが高いところで約１ｍあることから、土塁と考えられる。北辺は尾根を掘削し、高さ約 1.5 ｍの段を設けている。土塁の南と東外側は最大で高さ約 2.5 ｍの切岸となっている。

文献・伝承　『美作国の山城』は、元禄２年（1689 年）の『下神目村書上』には、難波十郎左衛門が山手村大西の地の「構之屋敷」にあり、浦上宗景に敵対しようとしたと伝えるとし、『作陽誌』では、「大西構」とし、久米郡南分下二箇村にあり、永禄年間（1558 ～ 1570）に難波十郎左衛門が住み、浦上宗景の招きにも応じず没したと記す。　（物部）



第 269 図　大西構跡縄張り図（１/2,000）

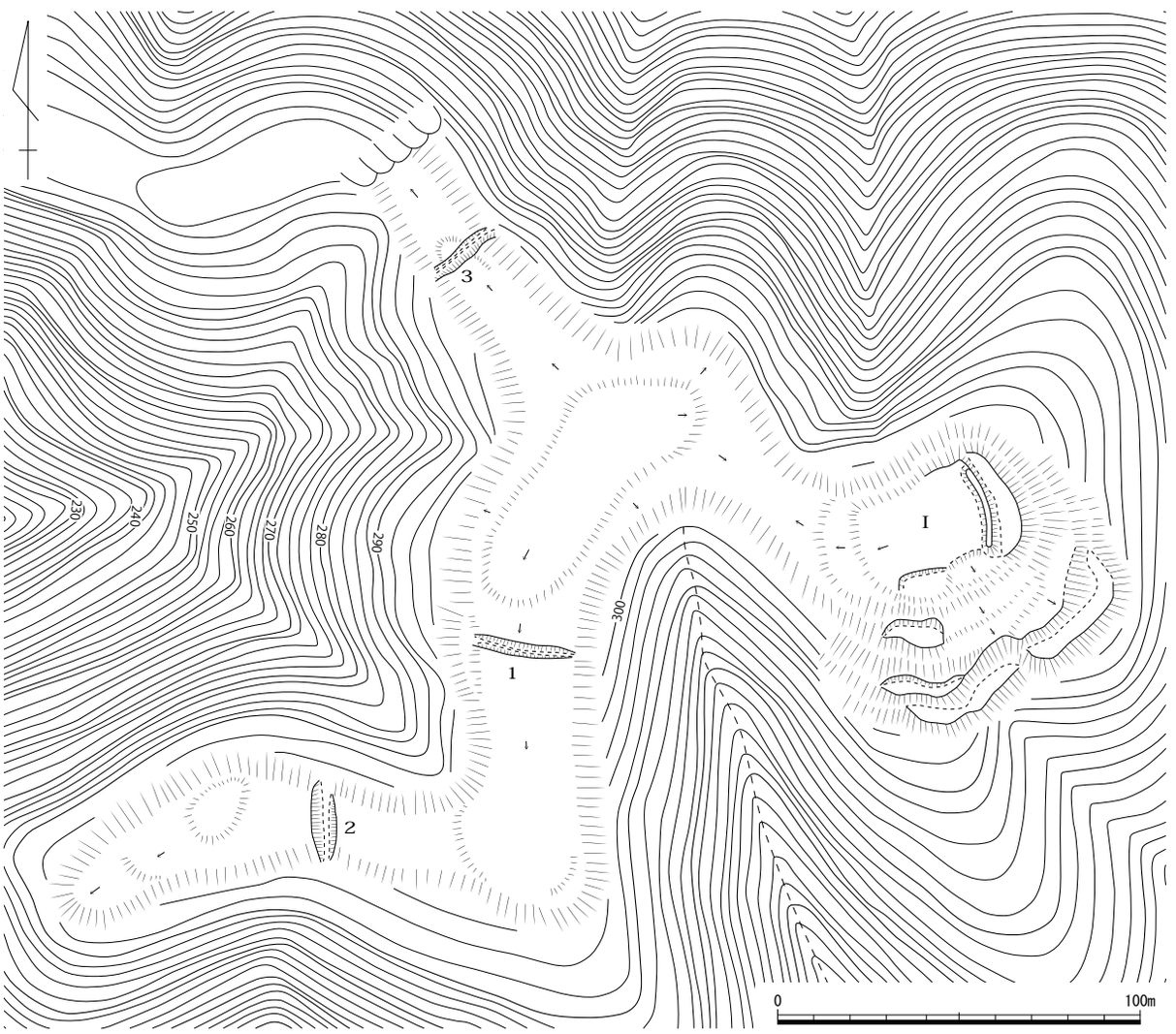
280　蓮華寺城跡（れんげじ）　　久米郡久米南町全間・下二ケ・山手　　地図 30 右

立地　城は、備前国と美作国の境目に位置し、誕生寺川に注ぎ込む全間川が形成した小谷部を東から望む尾根先端頂部に立地する。約 800 m西に大植城跡、約 1 km 北西に小丸山城跡が所在する。

概要　頂部から南に約 60 m延びたのち、ほぼ直角に西へ向きを変える幅広い尾根上に堀切１・２、北西方向に延びる尾根筋に堀切３を設けている。いずれの堀切も幅が狭くかつ浅い。この頂部から東側に向かって緩やかに下がった場所にある峰部には、高さ約 30cm の土塁が残存する曲輪Ⅰを築く。この曲輪から南に向かって延びる尾根筋には、幾面かの曲輪を配しているが、造成が甘く、自然地形を残しているものも認められる。

文献・伝承　畑氏によると、天正２（1574）年、浦上氏が弓削庄に侵攻した際、菅納氏がこの山に逆茂木を引いてたて籠もることにしたと『菅納家記』に記載されているという。　（小嶋）

写真 133
頂部より西方を望む



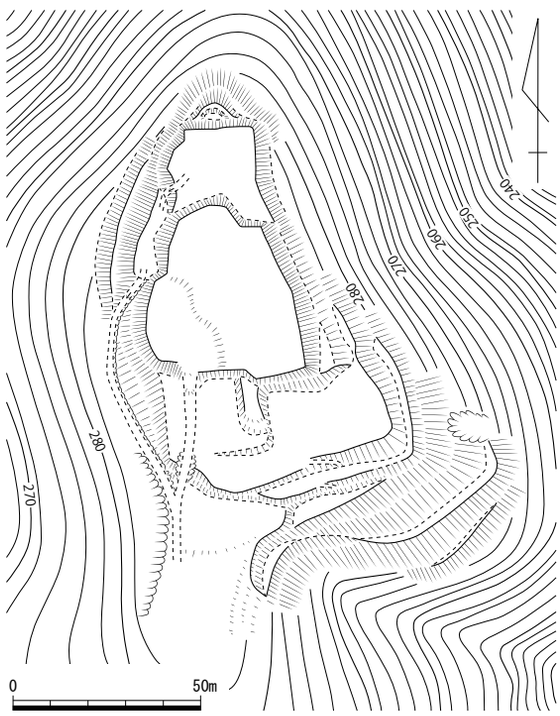
第 270 図　蓮華寺城跡縄張り図（１/2,000）

281　大植（おおうえ）城跡　　久米郡久米南町山手　　＜町指定史跡＞　　地図 30 右

立地　高原状を呈する山上の東端尾根に立地し、北東側は全間川に面する。

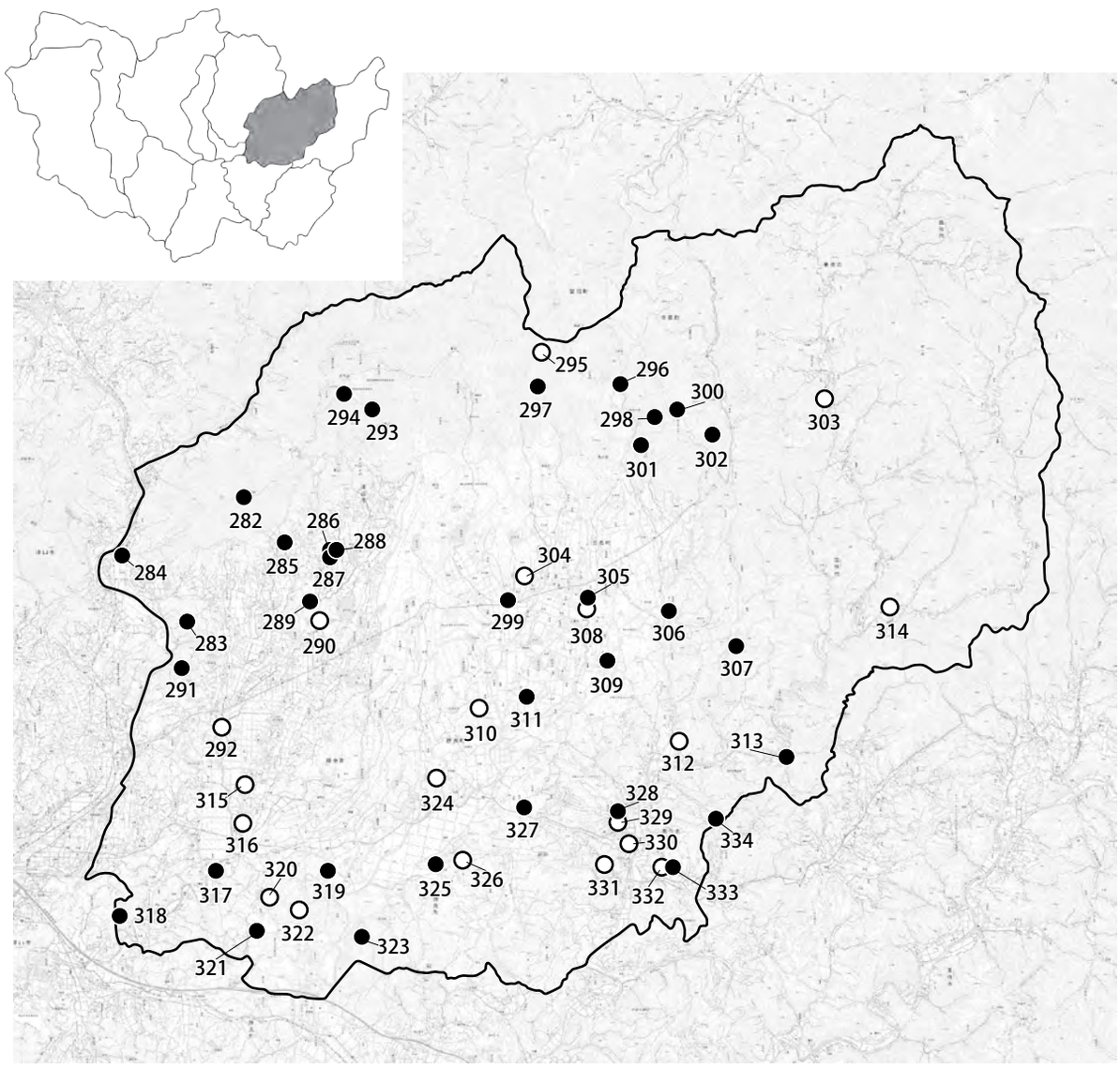
概要　北へ延びる尾根の先端高所に約 40 × 40 mの曲輪（主郭）を造る。２か所に折れ曲がりが見られ、横矢を掛けている。主郭の北に約 20 × 20 mの曲輪、その北に前面に土塁を築いた小さな曲輪を配する。主郭の南の曲輪には高さ１m程の突堤状の高まりがある。曲輪の段差は 1.5 ～２mほど。周囲の斜面には小曲輪や犬走り状の細長い段が確認出来る。尾根鞍部は畑地の開墾等のため詳細不明。

文献・伝承　『作陽誌』は「大植故営」とし、下二箇山手村にあり、山の東に「米穴」という岩窟ありと記す。『久米郡誌』は、山手の東部にあり、文禄・元亀・天正の頃、沼元興太郎久家が在城したとする。（文献 133）　（物部）



第 271 図　大植城跡縄張り図（１/2,000）

第９節　勝北郡



282. 仲山城跡
283. 黒目城跡
284. 堀坂城跡
285. 烏帽子形城跡
286. 河原山城跡
287. 本丸城跡
288. 国司尾館跡
289. 吹山城跡
290. 名称未定
291. 天王山
292. 金森城跡
293. 矢櫃城跡
294. 爪ヶ城跡
295. 名称未定
296. 名木ノ城跡
297. 細尾城跡
298. 八巻城跡
299. 今宮城跡
300. 菩提寺城跡
301. 大別当城跡
302. 鎌倉山城跡
303. 右手城跡
304. 岡・城が端城跡
305. 久常城跡
306. 加賀尾城跡
307. 丸山城跡
308. 久常城跡
309. 福光屋敷跡
310. 吉正城跡
311. 有元城跡
312. 余野山屋敷跡
313. 長畑構跡
314. 富坂屋敷跡
315. 野田構跡
316. 野田城跡
317. 岩倉山城跡
318. 新宮城跡
319. 植月城跡
320. 構城跡
321. 茂平城跡
322. 鬼ヶ池城跡
323. 大谷城跡
324. 石生構跡
325. 小風呂山城跡
326. 構城跡
327. 鎌倉屋敷跡
328. 上ノ山城跡
329. 大爺の構跡
330. 真加部構跡
331. 河内山城跡
332. 別所城跡
333. 星尾城跡
334. 比丘尼城跡

第 272 図　勝北郡城館位置図

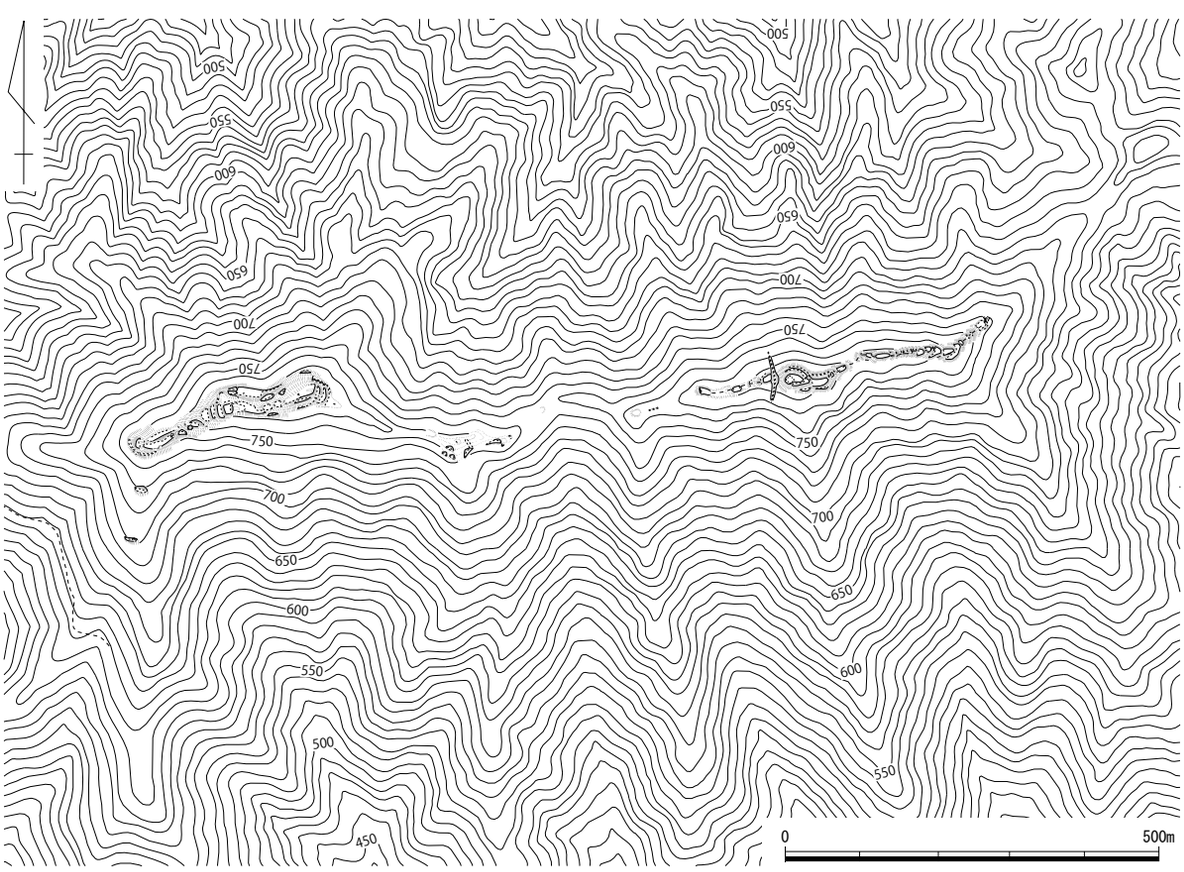
282　仲山城跡（なかやま）　津山市奥津川・三浦・妙原・新野山形・西上・市場　地図 14 右

立地　山形仙（標高 791 m）山頂に立地する。東へは声ヶ屹の峠を越えて爪ヶ城、滝山、那岐山と千m級の山々が連なり、西へは加茂川を挟んで標高 600 ～ 800 mの烏山、天狗寺山、黒沢山、桝形山が位置する。南山裾との比高差は 530 mを測る。医王山城跡は西約３～４㎞に所在する。

概要　山頂は約 700 m離れて東西に高所をもち、それぞれに曲輪群を造成している。高所の標高は西側が８m東側より低いだけで、差はない。

西の曲輪群は東西約 280 mにわたって約 30 の曲輪を配している。曲輪は尾根筋だけでなく、南北両斜面に平坦地を設けられている。その平坦地の規模は、幅は約５mの小さなものから幅約 20 mの細長いものまであり、点在する。曲輪群のほぼ中央の北斜面には 30 × 10 mの広い曲輪があり、居住空間とも考えられる。曲輪群の東端にある最高所の曲輪は、北縁がなだらかで切岸を造っていない。また、平坦面に屈曲する高さ約 30㎝の低い土手が観察できるが、その性格は不明である。西端の曲輪から南に下がる尾根筋に２か所の平坦地がある。

東の曲輪群は約 400 mにわたって 20 を越える曲輪を連ねている。最高所の曲輪は西寄りにあり、その北から東、南にかけて帯曲輪や犬走りを、西に接して堀切を設けている。堀切より西側の尾根稜線部には曲輪が３か所に点在し、西端の曲輪の西辺に高さ約 50㎝の土塁を配している。中間の曲輪は小さな鞍部を削平したものである。

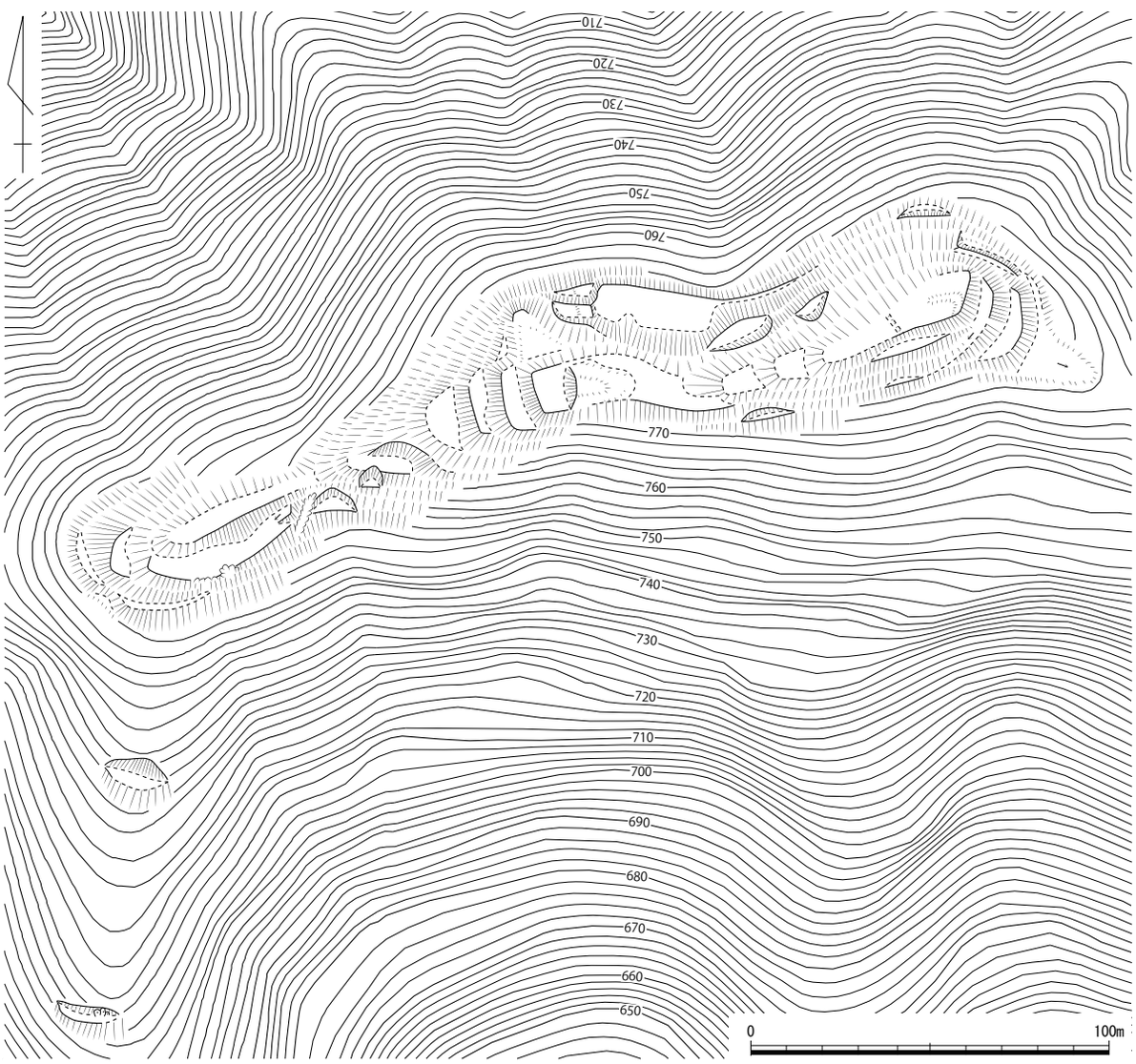


第 273 図　仲山城跡縄張り全体図（１/10,000）

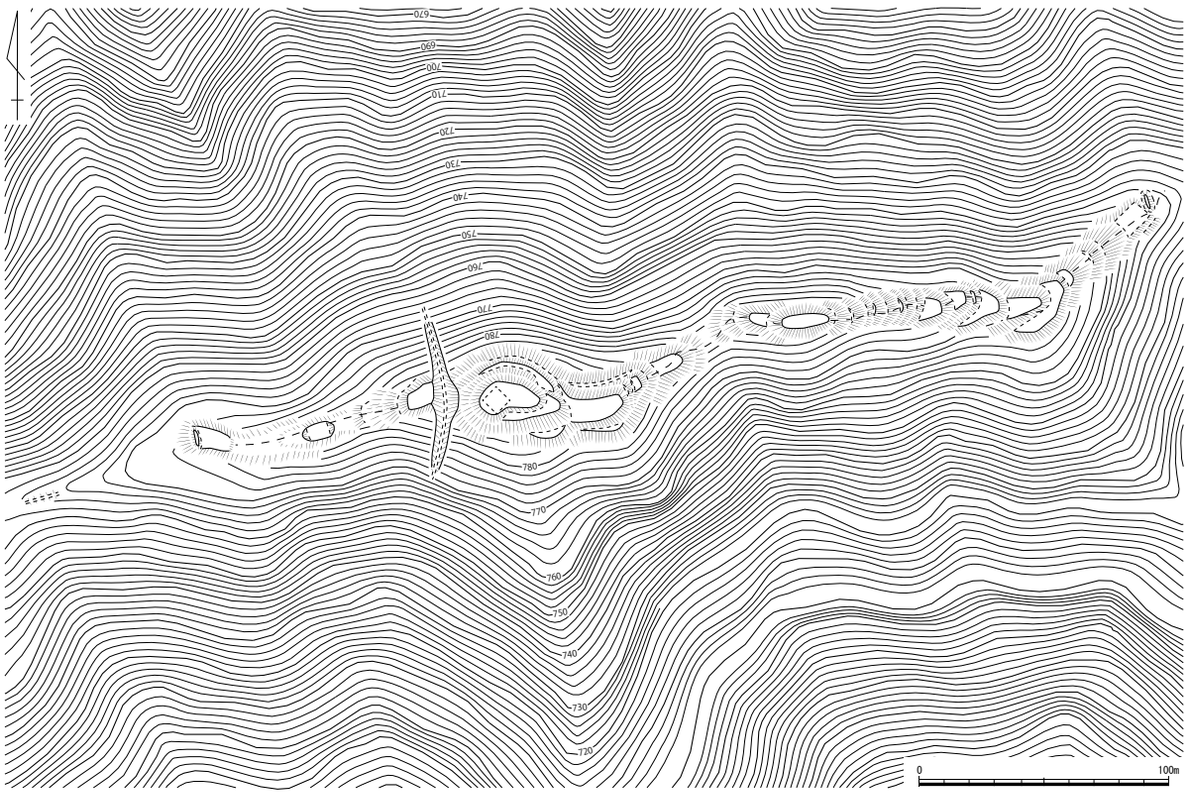
西東の曲輪群の間の稜線にも小さな平坦地や、竪堀状の溝が認められるが、城館関連遺構かどうははっきりしない。

以上のように、東と西の曲輪群は、曲輪の配置に違いが見られ、西側の方が長期滞在を志向した構造と考えられる。また、東側の堀切と土塁の配置は、西からの攻撃に備えたものであるが、西と東の曲輪群の関係は不明である。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『新野村史』所収の『山形村明細帳』明和７年（1770）に「一古城跡　中山与申壱ヶ所御座候得共、年数何角相不申候」とあるとし、『東作誌』は勝北郡山形村の「東ヶ城・西ヶ城」とし、北山にあり、城主・時代など不詳と記し、『藩中諸家古文書纂』は、天正８年（1580）３月、毛利輝元は升形城に在番していた森脇春方に、「中山」の付城「吹山」から敵勢が退いたとの報に接し、草苅氏の拠る医王山城は一安心であろうと報じ、同年閏三月、吉川元春は同じく春方に「祝山・中山」両城への兵粮搬入を命じているとし、『閥閲録』はしかし、同年６月には輝元が草苅重継に「中山逆意」に際しての医王山城堅持を賞しているように城兵が毛利氏から離反したことが知られるとする。（物部）



第 274 図　仲山城跡縄張り図　西側（１/2,000）



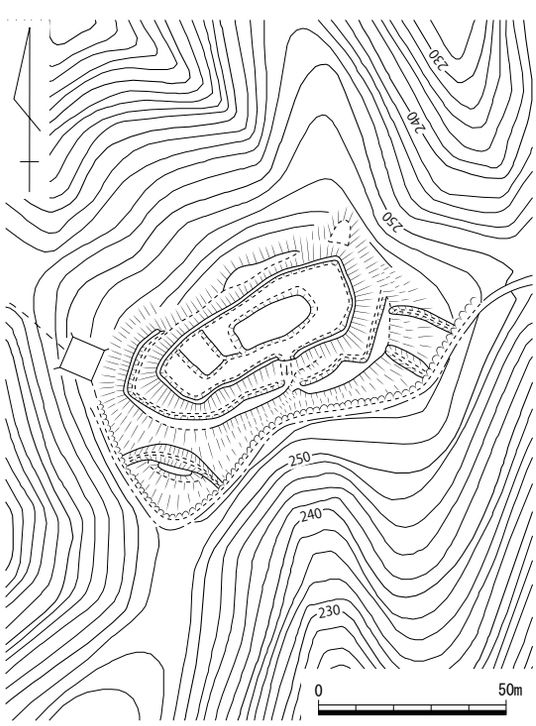
第 275 図　仲山城跡縄張り図　東側（1 /3,000）

283　黒目（くろめ）城跡　　津山市堀坂　　地図 14 右

立地　加茂川の左岸に接する、標高約 265 mの丘陵の頂部に立地する。丘陵の南北を、加茂川から旧勝北町に抜ける道が通っている。

概要　主郭は最上部にあり、全長約 60 m、幅約 20 mの不整長方形を呈する。主郭はほぼ全周が土塁で囲まれており、南側に虎口跡と思われる切れ目と斜路が残っている。主郭のほぼ中央には、全長約 20 m、幅約 10 m、高さ約 0.6 mの長方形の高まりがある。主郭の南側は横堀、その外側を土塁が築かれる。城域の東端に 2 本の竪堀、南端の尾根筋には堀切が確認できる。

文献・伝承　『東作誌』は勝北郡保坂村の「黒見山」とする。『新野村史』は「黒目城」として、医王山城の寄せ城とする。『美作古城史』は「黒女城」とし、麓の加茂川畔に「小島地蔵」があり、宇喜多家の侍小島次郎兵衛戦死の場所とする。（文献 133）（岡本）



第 276 図　黒目城跡縄張り図（1 /2,000）

284　堀坂（ほっさか）城跡　　津山市堀坂・妙原　　地図 14 右

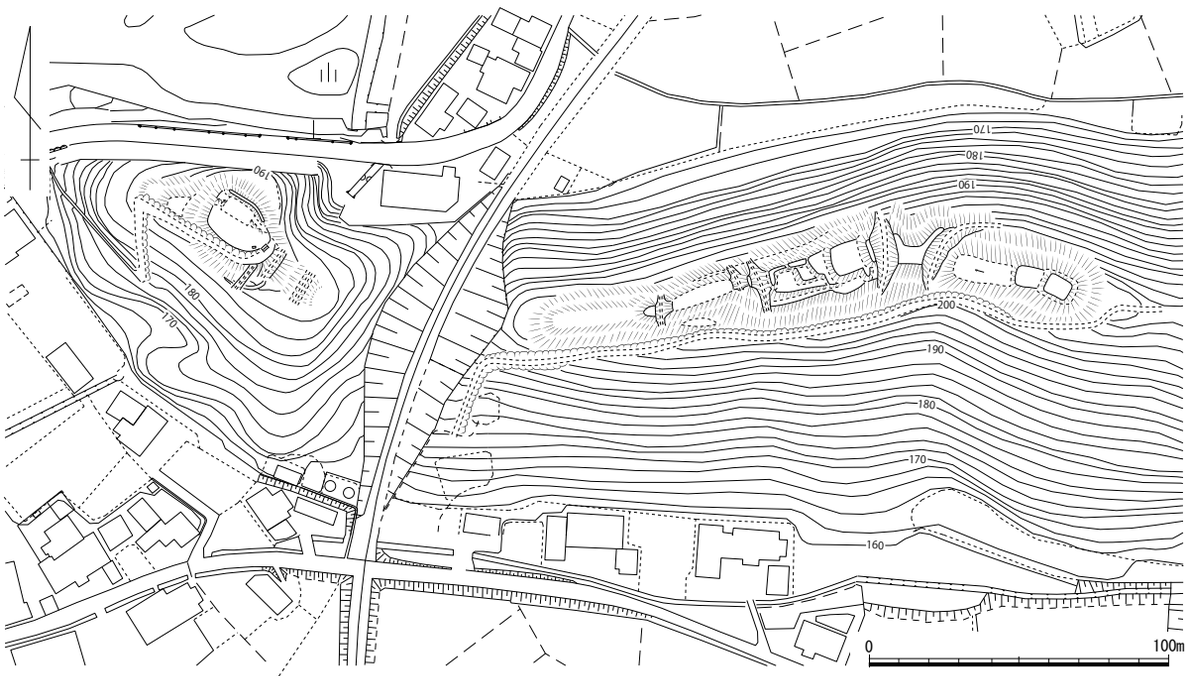
立地　山形仙山頂から続く尾根筋の末端に位置し、加茂川に向かって突き出した細長い丘陵上に立地する。現在、この丘陵を国道 53 号のトンネルと、JR 因美線の切り通しが南北に貫いている。北東へ約 3 km の山形仙山頂には仲山城、加茂川の対岸には医王山城が所在する。

概要　東西に伸びる尾根筋上に、約 300 mにわたって曲輪が連なる。現在、尾根の鞍部だった場所を JR 因美線が貫通しており、その切り通しによって城域も東西に分断されているが、本来は一体として機能した城であったと思われる。地形は後世に改変されている可能性が高く、遺構の認定には慎重を要する。因美線よりも東側の尾根には、合計 5 条の堀切が設けられているが、曲輪群の背後にあたる東端の鞍部には確認できない。曲輪は堀切の間に配置されており、東から 2 番目の堀切の西に接する曲輪が主郭とみられる。主郭は一辺 10 mほどの方形で、東側の堀切との境は土塁で仕切っている。主郭の西側には、高さ 1 ～ 1.5 mの切岸をもつ小規模な曲輪が連なり、北側に土塁を有する。主郭の南側には帯曲輪状の平坦面、西側には 2 条の堀切が設けられている。因美線西側の頂部には、北側に土塁を伴う全長約 20 m、幅約 15 mの不整な方形の曲輪が築かれ、南東側の尾根上には小規模な堀切が 2 条に掘削されている。

本城は、加茂川左岸の平野を遮断するような丘陵上にあり、津山盆地と加茂地域を結ぶ水運・陸運のルートを押さえる位置に築かれた山城といえ、対岸の医王山城との関連も注目される。

文献・伝承　2003 年に発見された城であり、近世の地誌類には記載がない。　（岡本）

写真 134　遠景（西から）



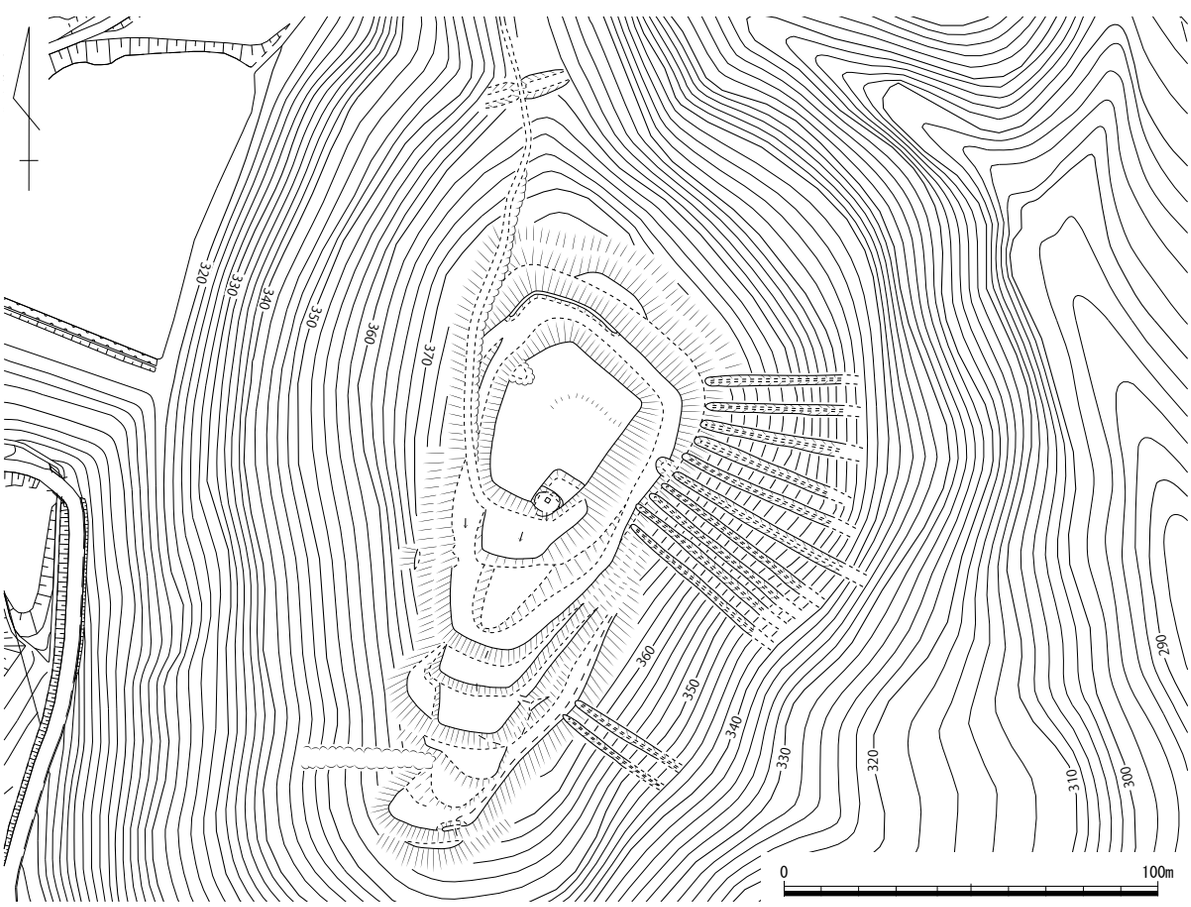
第 277 図　堀坂城跡縄張り図（1 /2,500）

285　烏帽子形（えぼしがた）城跡　　津山市西上　　地図 14 右

立地　山形仙（標高 791 m）から南東に派生する尾根筋の末端付近にある、標高 385 mの金剛山の頂部に立地する。金剛山は周囲から半球状に盛り上がってよく目立つ地形であり、これが「烏帽子形」の名前の由来であろう。東へ約 1 km の位置に河原山城・本丸城・国司尾館が所在する。

概要　城域の北西部を山道が通っているが、保存状態は良好である。丘陵頂部に設けられた主郭は全長約 40 m、幅約 30 mの不整な方形を呈する。南東隅には祠がまつられた方形のくぼみがあり、下段への斜路が取り付いており虎口の名残とみられる。主郭の南側直下に 2 面の曲輪、その下にはほぼ全周する帯曲輪、さらに南側に 5 面の曲輪が連なっている。主郭と帯曲輪との高低差は、最大で約 6 mに達する。帯曲輪の北端部は突出して折れを形成し、縁辺には土塁を伴い、その下は高さ 4 ～ 5 m の切岸となる。また、南端の曲輪の先端部にも土塁が一部残存している。東側斜面には 2 本および 10 本からなる畝状竪堀群を 2 か所に設けて防御を固めている。一方、北側の尾根筋にも 1 条の堀切を設けるが、背後からの攻撃には主として切岸での対応を想定していたと考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』では、「金剛山」「金剛寺」として、城主を山名忠村・上野対馬とする。城主については、『美作鬢鏡』は岡本弾正広家、『美作鏡』は岡本弾正入道広家とする。『東作誌』は古城「金剛寺山」として、永禄の頃に岡本弾正が居城という、と記す。（文献 133）　（岡本）



第 278 図　烏帽子形城跡縄張り図（1 /2,000）

286 河原山城跡（かわはらやま）　287 本丸城跡（ほんまる）　288 国司尾館跡（くにしお）　津山市市場・大岩 〈市指定史跡〉　地図 14 右・15 左

立地　山形仙南麓の緩斜面上に点在する小規模な丘陵を利用し、互いに近接して築かれた城館群である。本地点から西へ約 1 ㎞の位置に烏帽子形城跡、南西へ約 1 ㎞の位置に吹山城跡が所在する。

概要　河原山城跡は、南北約 160 m、東西約 110 mの丘陵を利用して築かれている。一部に墓地造成などによる改変がある以外は、極めて保存状態が良好である。平成 10 年度に測量調査が実施され、規模や内部構造が明らかにされた。主郭は一辺 60 ～ 70 mの方形を呈し、周囲を土塁、横堀、切岸によって防御し、北東隅と南側中央に虎口を設けている。北東側の虎口は不明瞭ながら枡形状を呈する。主郭内は段差や土塁によって三つの曲輪に区分され、北側の土塁直下に石組みの井戸が残っている。土塁は主として主郭の北辺から西辺にかけて築かれ、最も大規模な箇所では基底部幅 14 ～ 18 m、高さ 5 ～ 6 mに達する大規模なものである。主郭の北側には不整形の曲輪が 3 面設置される。主郭の南西隅には、本丸城の方向へ延びる土塁が一部残存し、両城の密接な関係を示唆している。島崎東氏は本城の年代について、虎口の構造などから 16 世紀第二四半期から第三四半期の間としている。

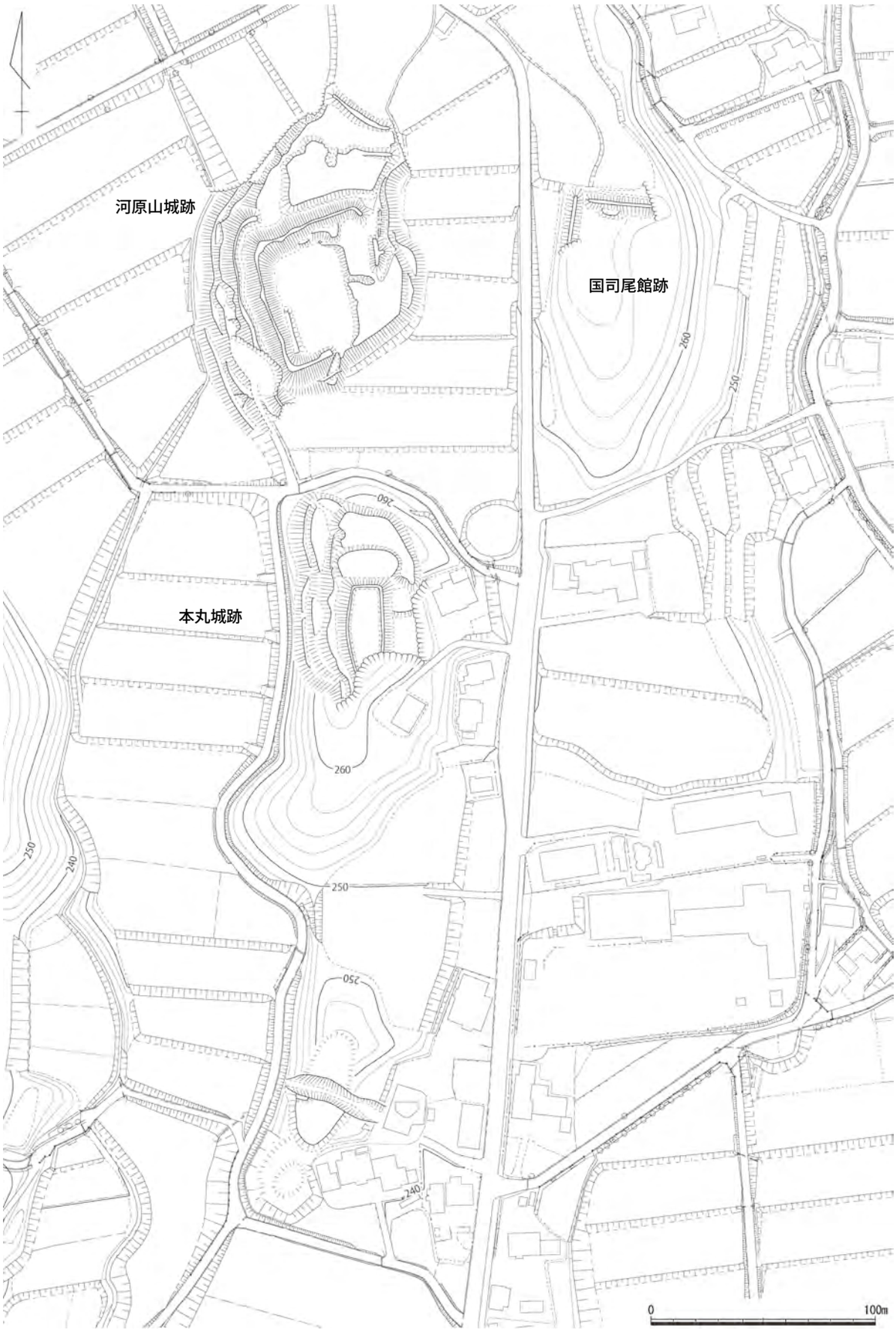
本丸城跡は、河原山城の南側に隣接する城館であり、やはり丘陵を利用して築かれている。主郭は南端が損壊しているが、現状で南北に細長い長方形を呈し、周囲に土塁を巡らせている。主郭北側には曲輪を 2 面配し、西側の切岸にも腰曲輪状の平坦面を複数設けている。なお今回の調査で、主郭から南に約 200 m離れた小丘陵上にも堀切状の遺構の存在を確認した。本丸城との関連は不明であるが、『岡山県遺跡地図』での扱いを踏襲し、本書でも本丸城跡に含めた。

国司尾館跡は、河原山城の東に隣接する城館である。本来は方形プランであったと思われるが、後世の地形改変により、北西隅部分の土塁が L 字形に残存するのみで、本来の規模や形状、内部構造などは不明である。土塁は高さ 4 mほどに達し河原山城跡と近似する。北西端にある土塁の切れ目は出入り口跡の可能性がある。土塁の内側法面の一部に石積みが認められたが、城館に伴うものかどうか不明である。

これら 3 か所の城館はそれぞれに独立したものではなく、有機的に関連しながら全体を構成していた可能性が高い。なお、本丸城跡の南端から南に 1.3km の位置には、本地点に至る谷筋を仕切った土塁状の高まりがあり（190 名称未定）、城下の防御線の存在を示唆するものかもしれない。

文献・伝承　本丸城跡については、『古城之覚』では勝田北郡新野西村の「吹山城」（本書 373 ページの吹山城とは別）として、城主を広戸（岡本）次郎広実とする。『東作誌』では「吹山城」として、岡本次郎広実のち竹内下総守吉家の居城で、本丸・二の丸・三の丸と 2 か所の家老屋敷があるとする。『勝北郡各村誌抄録』（大岡家文書）には「本丸城」として、言い伝えでは広戸新三郎の築城という、と記す。河原山城・国司尾館について、『美作国の山城』では、『東作誌』が吹山城の家老屋敷とするうちの一つにあたる、としている。　（岡本）

写真 135　遠景（北から）



第 279 図　河原山城跡・本丸城跡・国司尾館跡縄張り図（1 /2,500）

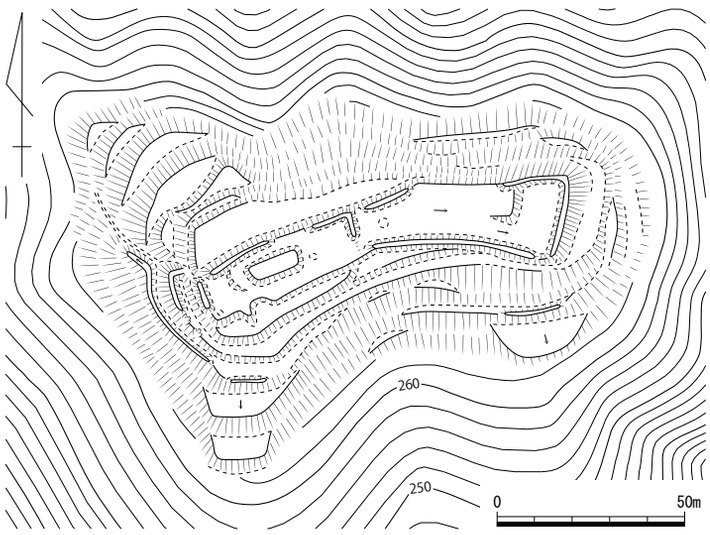
289　吹山城跡（ふきやま）　津山市市場　地図 14 右

立地　広戸川西岸の低丘陵頂部に立地する。

概要　頂部は平坦に造成され、その周縁等に畦状の高まりが残る。高さ約 50㎝でしっかりしており、土塁と考えられる。土塁の外方は高さ１～２ｍの切岸状を呈する。西斜面には横堀状の土手と溝が認められる。尾根筋には階段状の平坦地がある。一体は地形改変されているが、土塁等は城館遺構とみられる。

文献・伝承　『東作誌』は「吹山城」とは別に「吹山」を載せ、別名岡本城、山のみにて段不見と記す。『美作国の山城』は、『藩中諸家古文書纂』に、天正８（1580）年、毛利輝元は升形城在番の森脇氏に、「中山」の付城「吹山」から敵勢が退いたとの報に接し、草苅氏の拠る医王山城は一安心であろうと報じているとする。

（物部）



第 280 図　吹山城跡縄張り図（１/2,000）

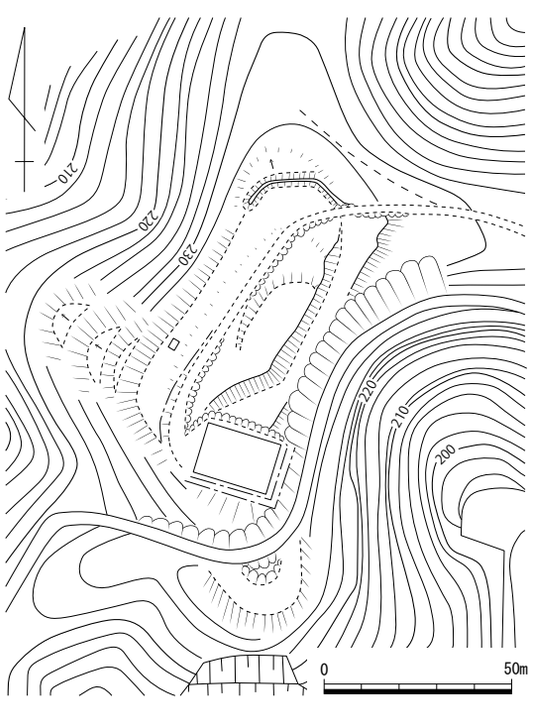
291　天王山（てんのうやま）　津山市掘坂・西下　地図 14 右

立地　加茂川東岸の低丘陵の山頂に比定されている。医王山城の南東約３㎞の位置で、眺望は 360 度見渡せ、良好である。

概要　平坦地と土塁状の盛土が認められる。ただし、山頂一帯はかつて園地または畑地として整備されたようで、1972 年の航空写真には、樹木が伐採され、真っ白く写っている。平坦地は、山頂とその周囲に帯曲輪状に巡っている。切岸は明瞭でなく、北に延びる尾根を遮断するように幅約２ｍ、高さ約 0.5 ～ 0.8 ｍの土塁状の盛土がある。これらを城館関連遺構と捉えるか、後世の造成と残土と捉えるか、判断が難しい。

文献・伝承　『美作国の山城』は、『萩藩閥閲録』収載の毛利氏の古文書等に、天正８（1580）年、医王山城攻防の最中、「天王山」への築城が献策・要請された記録があるとする。

（物部）



第 281 図　天王山縄張り図（１/2,000）

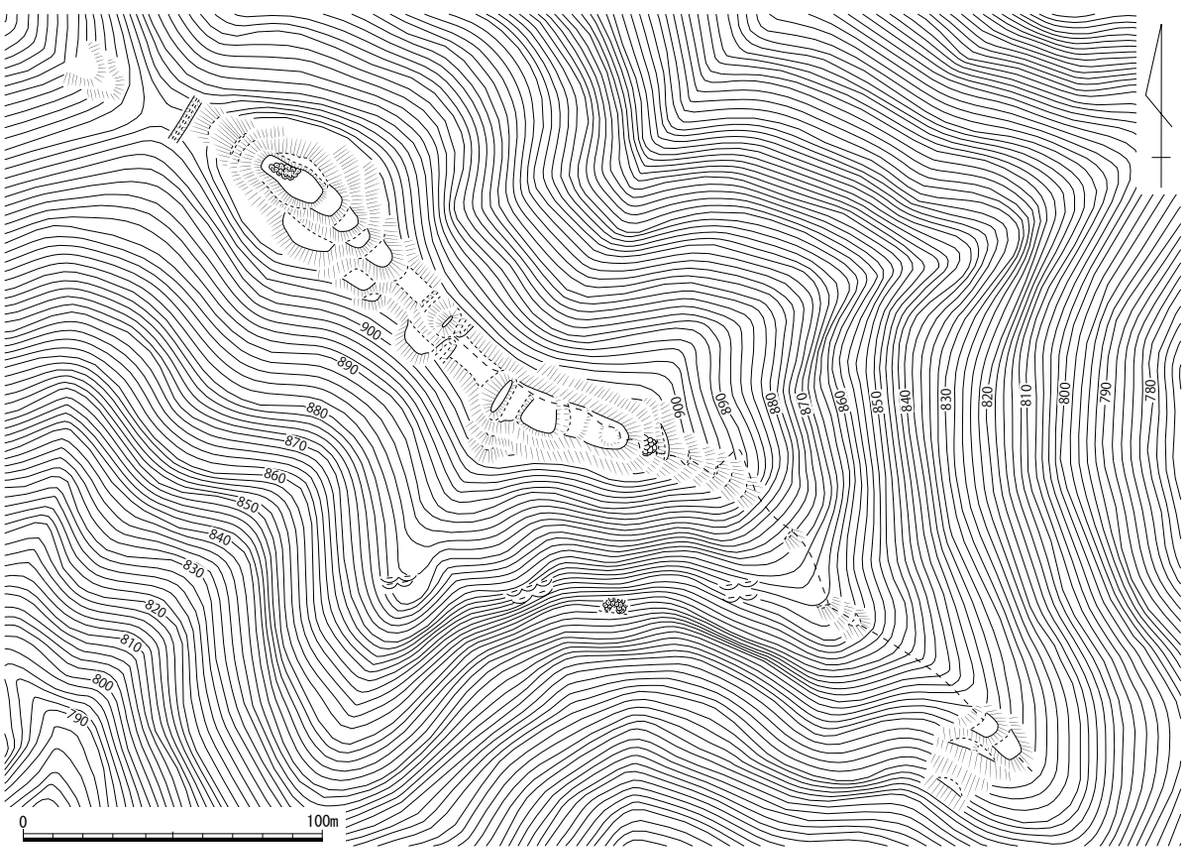
293　矢櫃（やびつ）城跡　　津山市大吉　　地図 15 左

立地　標高 1115 mの広戸仙から、南東方向にある標高 770 m級の甲山へ派生する尾根線上の中間地点頂部に位置し、標高は 900 mを超える。

概要　上方と下方の２つに頂部を持ち、それぞれ曲輪を連ねる山城で、全長は 300 m近くに達する。本城が立地する場所が細尾根であるため、曲輪の幅は 10 m弱のものが多いのが特徴である。

北西方向にある上方側は、長さ約 20 m、幅約 10 mの主郭から南東方向に向けて長さ 10 m程度の曲輪を４面連ねる。各曲輪間の切岸は２m前後を測る。主郭には露岩の削り残しが 10 m前後ある。また曲輪群の南西側斜面にも、腰曲輪が３面配される。主郭北西側の尾根鞍部方向は、小さな曲輪が数面続いた後、幅の小さな堀切が１条あり、城域を画する。南東方向にある下方側は、１辺 10 m前後の主郭から、南東側にわずかな段差をつけている。その先端はやや高まりを有している。主郭背後は、高さ約 1.5 mの土塁によって守りを固めていた。この２つの曲輪群は、約 40 mの距離で近接しており、その間には土塁と２条の堀切が配されている。また下方の曲輪群のさらに南東斜面には小さい曲輪がいくつか続き、約 140 m離れた位置に長さ 10 m程の曲輪が２面配される。

文献・伝承　『古城之覚』『美作鬢鏡』『東作誌』などでは、城主を広戸（岡本）新三郎広義としている。『美作古城史』では、城の下の岩壁に洞穴があって、弓矢等を置いたと伝承があり、当城の名前の由来となっている。先端曲輪群の南斜面にある岩穴が、該当するのかもしれない。（文献 133）　　（小林）



第 282 図　矢櫃城跡縄張り図（１/2,500）

294　爪ヶ城跡（つめがじょうあと）　　津山市大岩・奥津川・大吉　　地図 15 左

立地　那岐山山系の広戸仙（標高 1,115 m）の山頂から南に延びる尾根上に立地する。岡山県内では最も高所に位置する山城で、城からは津山盆地を広く見渡せる。南東側の尾根上に矢櫃城がある。

概要　明瞭な遺構は、山頂との間の尾根筋を遮断する３条の堀切のみである。尾根筋南端にある、現在は展望台が建つ標高 1,075 mの地点が主郭に相当するとみられるが、輪郭は不明瞭で平坦化もされておらず、地形を大きく改変した形跡は見受けられない。南側の斜面に小規模な平坦面が段状に連なるが、城の遺構かどうか不明である。本地点から約 300 m北側の広戸仙山頂には遺構は確認できなかった。

文献・伝承　『勝北町誌』によれば、正徳年間（1711 ～ 15）の広戸絵図に「爪ヶ城」の名称が記されているという。また、「爪ヶ城」の名称は、矢櫃城の「詰めの城」であったことに由来するとある。　（岡本）

第 283 図　爪ヶ城跡縄張り図（1 /2,000）

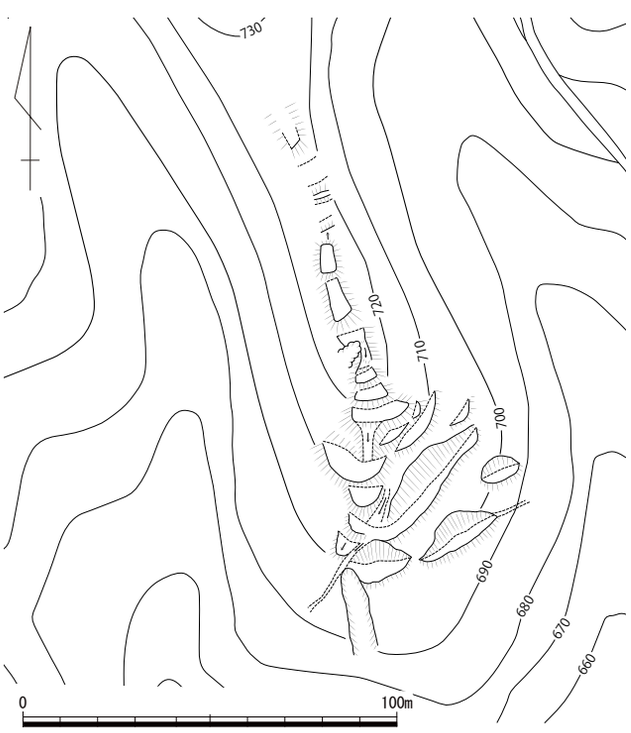
296　名木ノ城跡（なぎのじょうあと）　　勝田郡奈義町高円　　地図 15 右

立地　那岐山南中腹の標高 720 mの細い尾根に立地する。比高は約 350 mと高い。周辺には南東 1.3㎞に菩提寺城跡、1.0㎞に八巻城跡、1.4㎞に大別当城跡が位置する。

概要　城域は東西 50 m、南北 140 mで、中規模でもやや小さい。中心的な曲輪は特定しづらく、尾根端から南斜面にかけて小曲輪や帯曲輪が 17 面連続する。北側の鞍部はやせ尾根で岩盤が露出し、幅広で深い堀切と浅い堀切状の窪みが連続する。東西斜面は絶壁で、天然の要害となる。

文献・伝承　『古城之覚』は「なきか仙」とし、城主は有本右衛門大夫と伝える。また、『太平記』は名木杣二箇城などが康安元（1361）年に山名時氏の侵攻により降参したと記す。

（米田）



第 284 図　名木ノ城跡縄張り図（1 /2,000）

297　細尾（ほそお）城跡　　勝田郡奈義町宮内　　地図 15 左

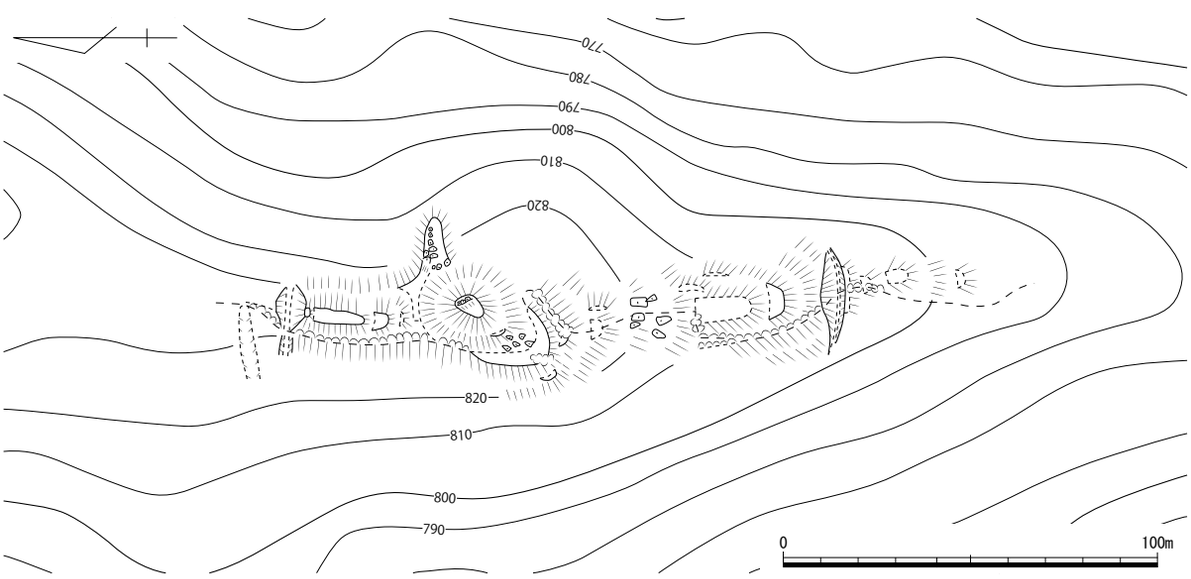
立地　那岐山頂から南へ延びる標高約 830 mの急峻な尾根頂部に立地。南東側約 2.7km に大別当城跡がある。

概要　南北ほぼ 200 m、東西最大 40 mを測る。南北に細長い尾根上の南北端を掘切で画し、最高所に小規模な主郭を置き、その北～東側に３面の曲輪、南側は飛び飛びに４面の曲輪を配する。

最北端は深さ最大４mの堀切で尾根を切断する。その南側に土塁状の高まりを経て長さ 14 mの曲輪、その下に４mの曲輪を置き、さらに４m下がって掘切状の谷部に達する。谷部から８m程度登った頂部に南北長８mの不整形な主郭がある。主郭東側には約 50cm の高さで岩盤を掘り残した土塁を設ける。また、主郭から東側の痩せ尾根にも曲輪を１面置いている。主郭から南西へは５mの切岸を経て、最大幅４mの三日月状曲輪が１面ある。それから南の尾根上は、小規模な曲輪を１つ挟んで約 40 mの間岩盤が露出した自然の斜面が続き、長さ 15 mと４mの２面の曲輪となる。南端の掘切は深さ最大２mを測り、尾根に沿った緩い馬蹄形を呈している。その南にも不明瞭な曲輪が観察される。なお、北端の堀切の北側に西斜面に向かって下がる竪堀状の窪みを確認した。

文献・伝承　『美作古城記』は天文２（1533）年３月下旬に皆木右工門太夫保高、その弟の皆木管四郎佐保、廣戸因幡守廣家・同小次郎廣吉、福田孫八盛佐が当城に籠城し、尼子氏の将である三好安藝守に攻められ落城したと記す。『新訂作陽誌６　東作誌３巻』　勝北郡西豊田庄宮内村の細尾城の項では、城主を福田助四郎盛昌 (一説に福田助八郎盛佐) とし、尼子の将である三好安藝守に攻められ落城したと記し、異伝として天正２（1574）年菅家一族が細尾城に籠り、三好安藝守に攻められ落城したとする。『新訂作陽誌４　東作誌１巻』　東北条郡上高田庄上横野村の利元城の項では、城主福田助四郎盛昌は天文の頃細尾城主だったが二男孫八に与える、とある。『新訂作陽誌６　東作誌３巻』勝北郡梶並庄西谷皆木村の項では、廣戸因幡守が（天文２年）正月 14 日に皆木右衛門太夫、勘四郎あての書状で「近々三好安藝守岩尾山より押寄せ」るので、「細尾之城」へ籠城する旨を伝えている。

（氏平）



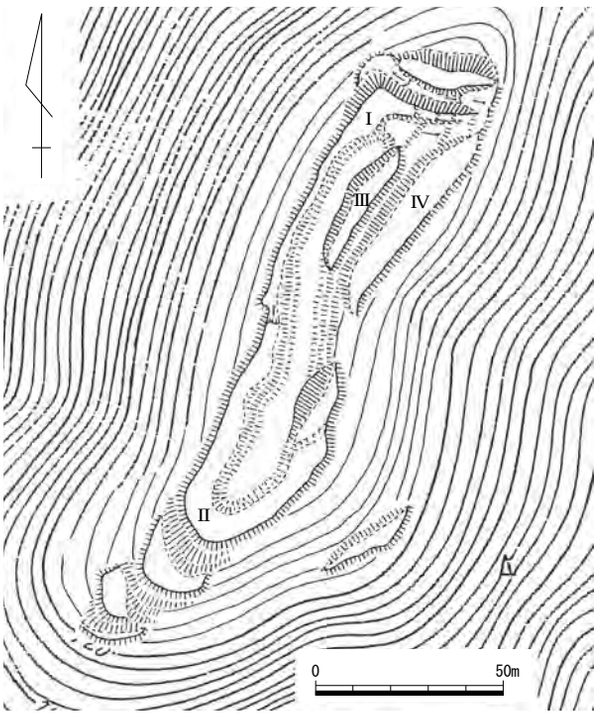
第 285 図　細尾城跡縄張り図（１/2,000）

298　八巻（はちまき）城跡　　勝田郡奈義町高円　　地図 15 右

立地　那岐山中腹に位置する標高 746 mの八巻山山頂に位置する。

概要　北東から南西方向に 170 mと長い頂部を城地とする。北の尾根筋には幅 7m、深さ 4 mの堀切とその外側には上端幅 5m の土塁が防御を固める。一方、城内の曲輪Ⅰ・Ⅱは頂部縁辺部の全長 120 mを測る西辺の北肩口から南端、さらに東側斜面肩口にかけて幅２～ 10 mの切岸造成によるもので、その内部に曲輪造成のない自然地形を残す。また東側の斜面には切岸造成による曲輪Ⅲ・Ⅳが配置され、防御を固める。南北朝期の特徴を残した城である。

文献・伝承　近世地誌類に八巻城としての記載は見えない。康安元（1361）年の山名時氏の美作国侵攻に際して降参した６城の一つと考えられる。　（島崎）



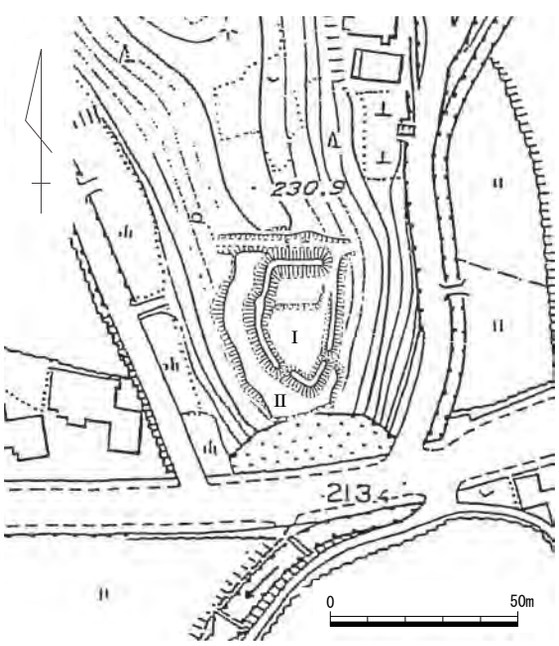
第 286 図　八巻城跡縄張り図（１/2,000）

299　今宮（いまみや）城跡　　勝田郡奈義町広岡・滝本　　地図 15 左

立地　那岐山から日本原低位部に長く派生した標高 230 mの尾根先端部に位置する。低位部との比高差 15 mを測る。

概要　城は、尾根先端部から北に約 50 mの地点に尾根筋に直交して掘られた幅約５mの堀切によって遮断され、そこから南側を城域とする。曲輪は上下２面に地形され、上面の曲輪Ⅰを主郭とする。主郭は、北辺堀切に沿う長さ 15 mの土塁から南方に先細りの地形に即した状況で囲繞する土塁で防御が固められている。堀切と接した北東部分には土塁が見られない場所があり、ここに虎口の存在が窺われる。一方、主郭から約２m下面に所在する曲輪Ⅱは、西側に幅５～ 10 mの規模に造成されているが斜面部に竪堀は存在しない。

文献・伝承　『東作誌』によると、城主は皆木勘四郎佐保と伝える。　（島崎）



第 287 図 今宮城跡縄張り図（１/2,000）

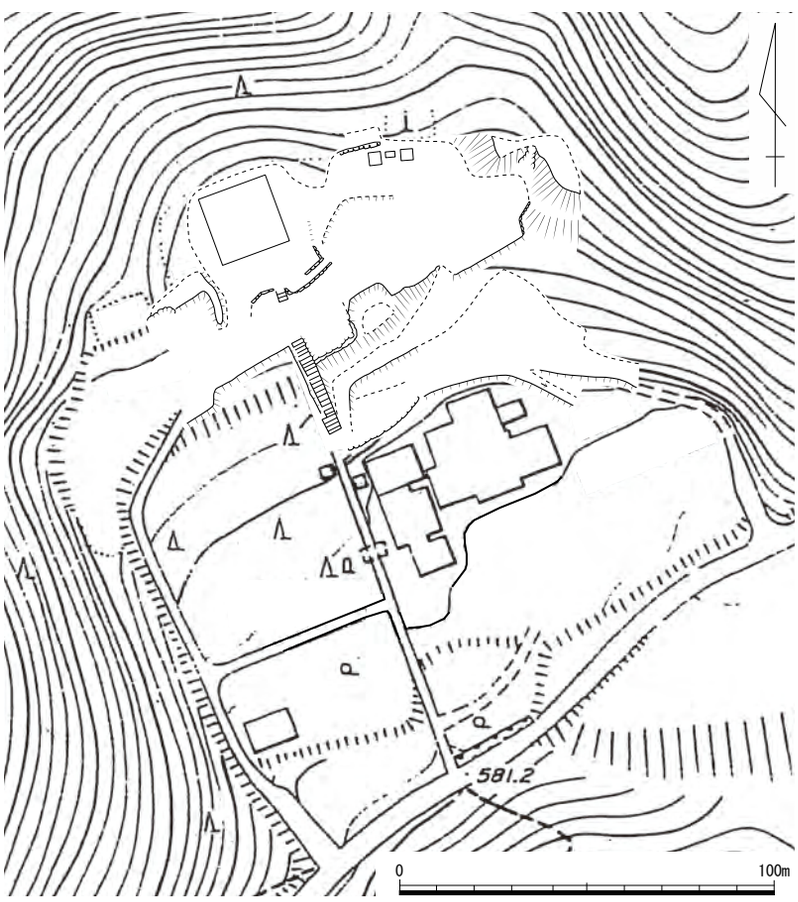
300　菩提寺（ぼだいじ）城跡　　勝田郡奈義町高円　　地図 15 右

立地　那岐山の南東中腹の標高約 600 mあたりに立地する。比高は約 300 mである。菩提寺城跡は浄土宗の古刹菩提寺の境内周辺にあり、南面の眺望に優れる。周辺には西約 500 mに八巻城跡、南東 1.0㎞に鎌倉山城跡、南西 1.0㎞に大別当城跡、北西 1.3㎞に名木ノ城跡が密に分布している。菩提寺は浄土宗の開祖、法然上人が幼年期に修行したことが伝えられ、かつては七堂伽藍三十六坊を誇ったとされる。

概要　菩提寺は堂宇がある平坦面を中心に、その南面にも２～３面の平坦面が東西に連続するほか、「菩提寺の大イチョウ」の北側にも小規模な平坦面が認められる。現状で確認できる範囲は東西 120 m、南北 80 mに及ぶが、後世の地形改変が著しく、旧那岐山青少年研修センター周辺の平坦面も伽藍に含まれる可能性も考えられる。全体的に防御施設は認められず、多くの平坦面が伽藍の造成によるものと考えられ、菩提寺城は菩提寺の境内を二次的に利用していることが想定される。

昭和 58 年度に那岐山青少年研修センター建設に伴う確認調査が実施されており、柱穴群が検出され、備前焼、勝間田焼が出土した（岡山県教育委員会「菩提寺境内確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』1984）。検出された柱穴群は掘立柱建物の一部とみられ、戦国時代の城館跡を構成するものと推察されている。

文献・伝承　『太平記』には、有元民部大夫入道が菩提寺の城に籠もったことが記されている。『古城之覚』は小原孫次郎入道を城主と伝える。（文献 114、133）　（米田）



第 288 図　菩提寺城跡縄張り図（１/2,000）

写真 136　菩提寺境内（南東から）

写真 137　石造仏群（南から）

301　大別当城跡（だいべっとう）　勝田郡奈義町高円　地図 15 右

立地　淀川左岸にあたる那岐山塊から南方向に細長く延びる山頂端部に立地し、同城から北東約 400m には八巻城跡が位置する。

概要　縄張りは細長く延びる尾根部に沿って複数の曲輪と堀切・竪堀・土塁などを備えた連郭式の山城である。曲輪は尾根部の 2 か所で見られる鞍部が仕切りの役目を果たし、斜面部の築かれた腰曲輪を含めた 4 つの曲輪群で構成されている。

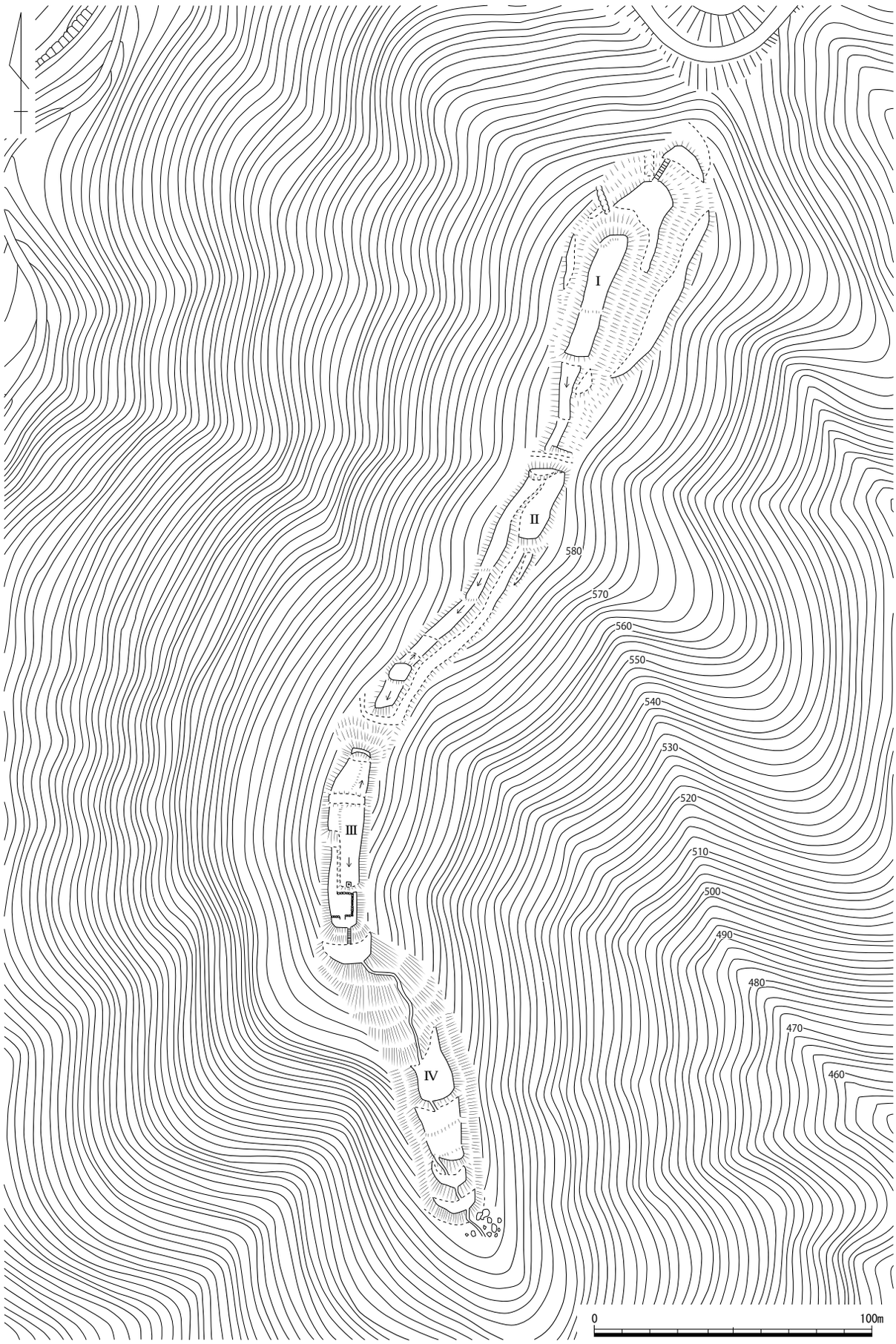
曲輪群Ⅰには、北端に土塁と比高差約 4m を測る急峻な切岸が伴う曲輪を中心として、その周囲に 1 ～ 2 面の腰曲輪・帯曲輪が配置されている。このうち北側の曲輪では比高差約 6m の急峻な切岸を造作して防御性を高めており、竪堀も 2 か所確認できる。曲輪群Ⅱには北端に土塁をもつ細長い曲輪を中心として、その北東端にやや広い曲輪と東側に細長い曲輪が伴う。また、曲輪群Ⅰとの間にある鞍部を利用して、切岸を造作して堀切を配置している。全体的に曲輪群Ⅰと比べて曲輪面の削平度は低く、自然地形を残す。

曲輪群Ⅲには北端に土塁をもつ曲輪が配置されており、南西側では約 2m 低い鍵手状の段差が認められる。曲輪面の状況は南西側の削平度が高いが、北東側は低く、自然地形を多く残す。北東側曲輪の南端には「鬼子母神」の石碑がある。南西側曲輪の南端では那岐山麓を始め、勝北・吉野郡域までが一望でき、説明看板や東屋を備えた展望台が整備されている。曲輪面の削平度も高く、一辺約 5 ～ 6m の石積み基壇や階段の痕跡が見られることから、これ以前に何らかの施設が存在した可能性がある。主郭はこの曲輪群Ⅲが相当すると思われるが、判然としない。ここから比高差約 3m を測る急峻な切岸の下方には、腰曲輪が 1 面築かれている。なお、曲輪群Ⅱと曲輪群Ⅲとの間にある鞍部にも堀切が存在しているが、曲輪群Ⅰと曲輪群Ⅱの鞍部の設けられた堀切と比較して造作があまい。

曲輪群Ⅲから比高差約 9m、約 40m 離れた南側斜面部には、約 1 ～ 2m の段差を設けた大小 4 面の腰曲輪で構成される曲輪群Ⅳが築かれている。この曲輪群Ⅳには土塁や堀切は伴わず、全体的に曲輪面の削平度は低く、自然地形も多く残す。築造場所の違いが大きいが、尾根頂部に造られた曲輪群Ⅰ～Ⅲとは構造や機能が異なっていると思われる。なお、最下段にあたる腰曲輪の南側には、大形の露岩が重なり合った状態で確認できることから、ここまでがこの城の南端と見ることができる。

写真 138　遠景（北西から）

文献・伝承　『東作誌』には勝北郡高円村の「大見丈城」・「大別当城」として、それぞれの城主を有元佐顕、有元右衛門大夫佐国とし、両城は一山とする。ただし、大見丈を鉢巻山の西方に位置する「能仙」とする里民の説も紹介しており、混乱している。また、『太平記』には康安元年（1361）7 月、山名時氏の美作国侵攻にあたり降参した 6 か城のうちに「菅家ノ一族大見丈ノ城」が見える。（文献 133）　（澤山）



第 289 図　大別当城跡縄張り図（1 /2,000）

302　鎌倉山城跡（かまくらやま）　勝田郡奈義町馬桑・関本・小坂・高円　地図 15 右

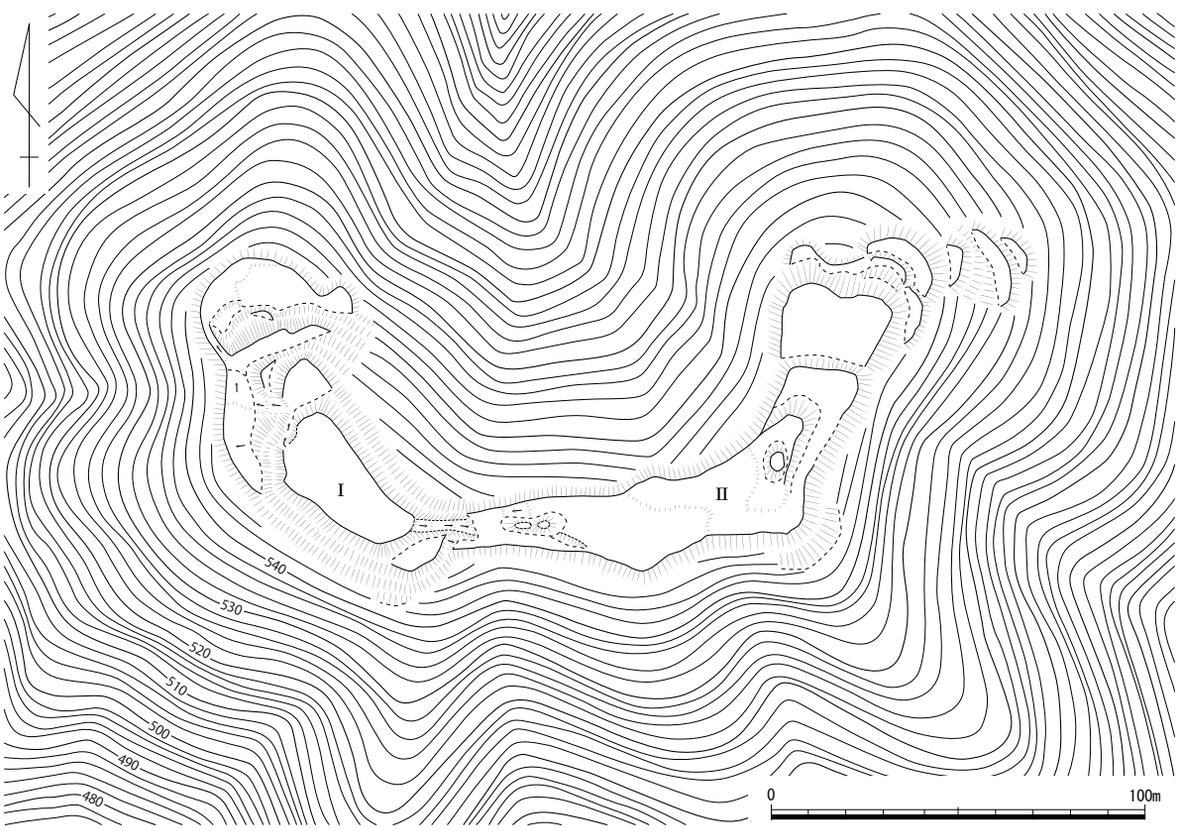
立地　那岐山南東にある標高約 550 mの鎌倉山頂に立地する。比高は約 250 mである。ここは鳥取県境の黒尾峠から南へ約 4.2㎞のところに位置しており、美作と因幡との国境付近の要衝にあたる。周辺には北西 1.0㎞に菩提寺城跡、北西 1.2㎞に八巻山城跡、西 1.5㎞に大別当城跡が位置する。

概要　城域は東西 220 m、南北 90 mと規模は大きい。頂部西側に中心となる曲輪Ⅰを築き、北東側と北西側に長く延びる尾根に大小の曲輪を連続させた連郭式の構造を持つ。

曲輪Ⅰは 40 × 20 mの不整長楕円形を呈し、北西部の２か所で折れが確認できる。全体的に平坦で、周縁の切岸は高低差が５m近くあり、急勾配である。曲輪Ⅰの北西隅角と南東隅角から下段の腰曲輪に続く傾斜は緩く、虎口及び通路であった可能性がある。曲輪Ⅰの北西側斜面部には一辺約 10 mの台形の腰曲輪を配し、その下段には北から西にかけて帯曲輪を配置する。さらにその北側には尾根西端を通路で繋げ、北端に小曲輪と帯曲輪を置く。一方、曲輪Ⅰの南側には 15 × 5 mの腰曲輪、東側の尾根に長曲輪Ⅱを配置する。長曲輪Ⅱは造作があまく、長径 15 m前後の高まりを２か所に残す。さらに北東側に延びる尾根端は帯曲輪となり、その北東側の斜面部は大小７面の腰曲輪や帯曲輪を配置している。

全体的に頂部西側にある曲輪Ⅰを急勾配の切岸で守るほか、北東側と北西側の斜面部に帯曲輪や小曲輪を連続して配置することで、堅固に守る縄張りである。

文献・伝承　『古城之覚』は「鎌倉山」として、江見兵庫親政を城主とする。　（米田）



第 290 図　鎌倉山城跡縄張り図（1 /2,000）

305　久常（ひさつね）城跡　　勝田郡奈義町久常　　地図 15 左

立地　高殿川右岸に位置する独立した小丘陵頂部に位置する。

概要　主郭から比高差約１～３ｍ下方に帯曲輪が段状に巡り、梯郭式山城の縄張りとも見て取れる。北西・南側にも段状の平坦面が続くが、後世の墓地造成による地形改変の可能性が高い。なお、丘陵北側は道路により大きく消失しており、当時の状況は不明である。その他の城館関連遺構は確認できない。

文献･伝承　『東作誌』には勝北町久常村の「上山」に岡備後左衛門の子・岡新介が居城したと伝わる記載がある。地元にも同所に山城が存在したとする故事来歴が伝わり、主郭には岡氏の墓地や顕彰碑などが建つ。一方、ここから約 200 ｍ南側にある小丘陵上にも同様の伝承が残るようであり、情報が交錯している。（澤山）

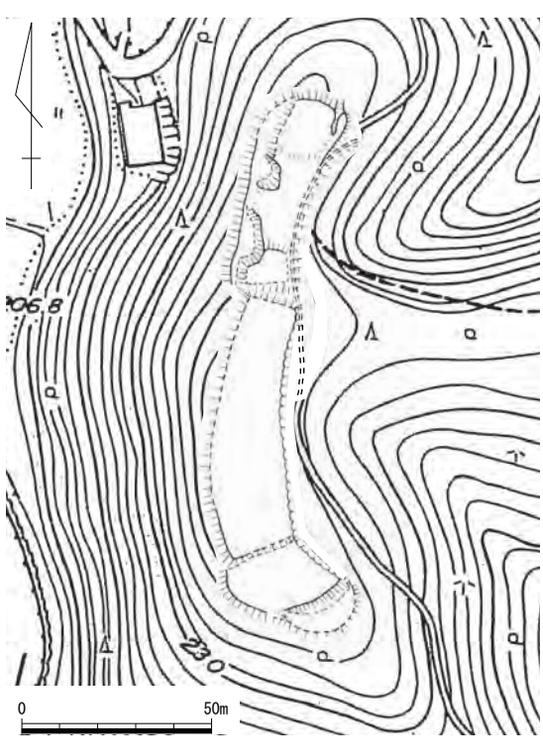
第 291 図　久常城跡縄張り図（１/2,000）

306　加賀尾（かがお）城跡　　勝田郡奈義町西原　　地図 15 右

立地　那岐山の南裾、淀川右岸の標高約 240 ｍの丘陵頂に立地する。比高は約 50 ｍである。周辺には南西約 2.1㎞に福光屋敷が位置する。

概要　城域は東西 20 ｍ、南北 140 ｍと小規模である。頂部には中心曲輪があると考えられるが、現状は草木の繁茂が著しく、詳細は不明である。その周縁は切岸の高低差が６ｍ前後あり、急勾配である。北側尾根には３面の腰曲輪、西側斜面に帯曲輪が配置されている。また、南側の尾根端には腰曲輪が２面ある。これより南側の竹林にも小規模な段が連続するが、後世の開墾等に伴う可能性があろう。全体的に堀切などの防御施設は認められず、頂部の中心曲輪を急な切岸で守る縄張りと言える。

文献・伝承　『東作誌』によると、加賀尾城は豊田、皆木氏の居城と伝える。このほか、豊田出雲守らが居した西原城との伝承もある。　（米田）



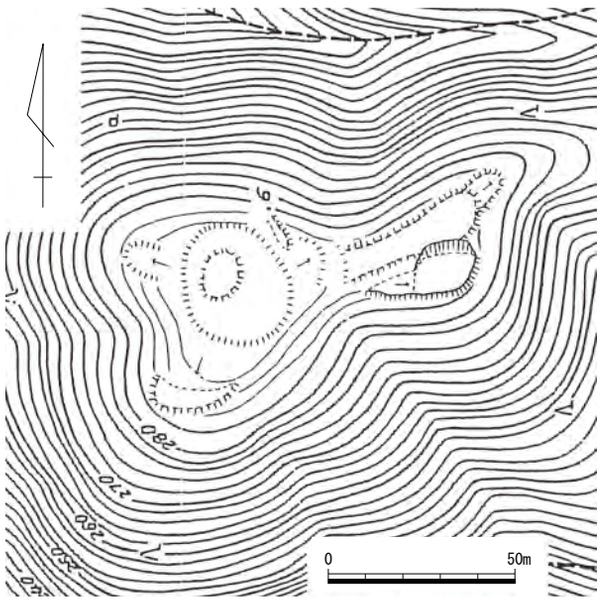
第 292 図　加賀尾城跡縄張り図（１/2,000）

307　丸山（まるやま）城跡　　勝田郡奈義町皆木　　地図 15 右

立地　馬桑川流域にある下皆木は、西原と梶並を東西に結ぶ街道とが交差する地域である。城は、この地域を西眼下に眺めることが出来る標高 293 mの山塊頂部に所在する。

概要　西側頂部から東に派生した尾根筋の端部に切岸による全長 30m、幅 10m の曲輪の造成を認めることができる。ただし、現在確認できるのは頂部の東側尾根端部と東側と南側を切岸によりわずかに造成して造られた平坦面、さらに頂部および頂部東側とその東側下方に緩やかな斜面が面的に見られる程度で、明瞭な曲輪等城郭痕跡は認められない。また、鞍部から山頂に至る東側尾根筋には防御機能を意図した堀切は存在しない。

文献・伝承　『東作誌』には、皆木村に古城として丸山の名前が見え、皆木弥平治の在城が伝えられる。　（島崎）



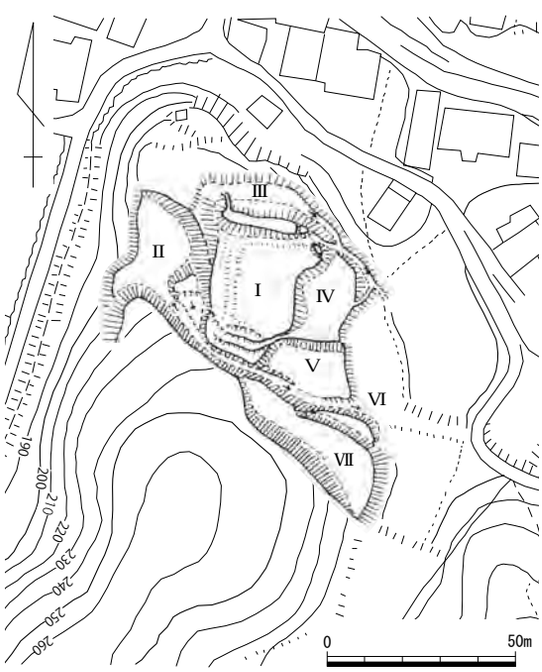
第 293 図　丸山城跡縄張り図（1 /2,000）

309　福光（ふくみつ）屋敷跡　　勝田郡奈義町柿　　地図 15 右

立地　高殿川左岸の南北方向に細長く延びる丘陵北端部に位置する。

概要　主郭（曲輪Ⅰ）北辺には高さ約 2m の土塁が築かれ、北東端には塁線の折れをもつ虎口が認められる。南辺には段状の平坦面が見られる。主郭の西・北・東側の約 2 ～ 3m 下方には、曲輪Ⅱ～Ⅴが築かれている。また、主郭の南側には深さ約 3m 以上を測る堀切が認められ、曲輪Ⅱに取り付いている。なお、この堀切は集落からの続く通路と重複しており、築城当時の状態のものか判然としない。さらに、堀切の南側には曲輪Ⅵ・Ⅶが見られる。

文献・伝承　勝北郡柿村所在の屋敷として、『東作誌』は「福光三郎屋敷跡」、『美作古城史』は「福光屋敷」の記載がある。（文献 133）　（澤山）



第 294 図　福光屋敷跡縄張り図（1 /2,000）

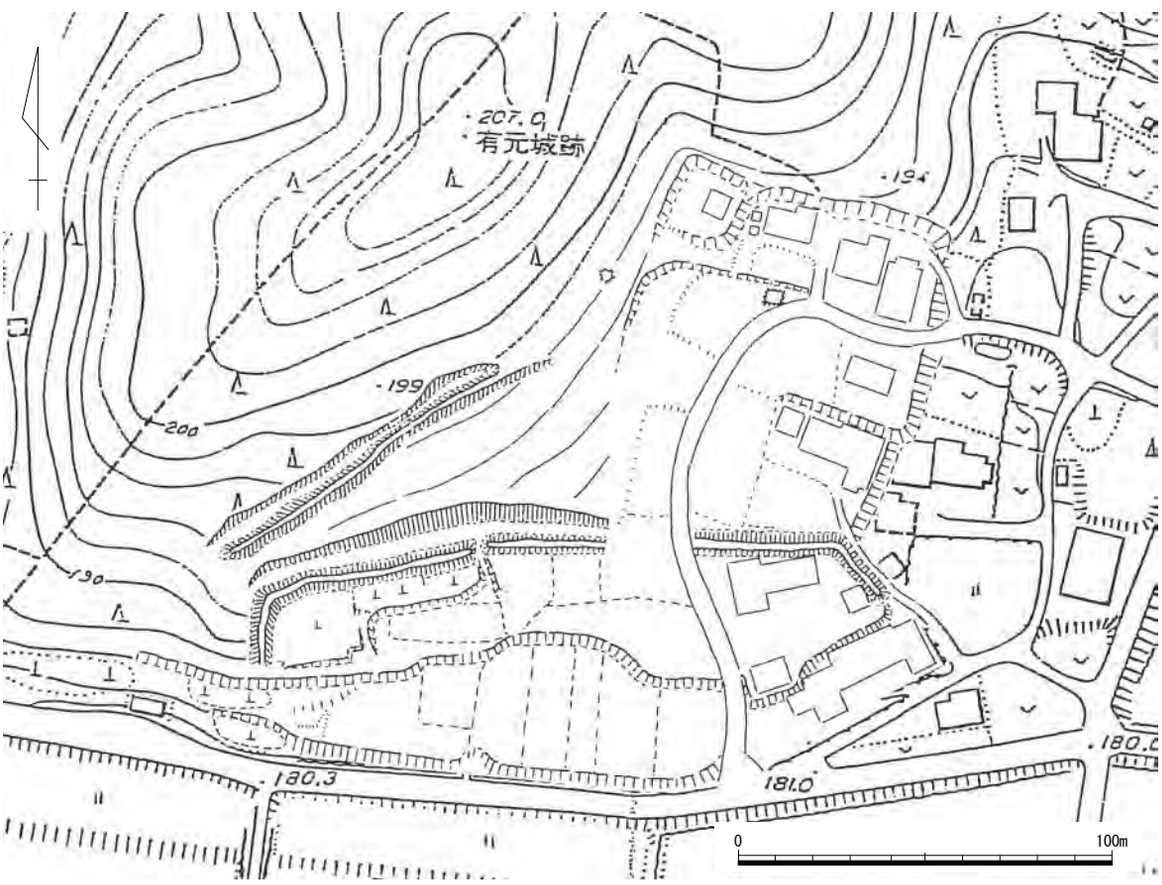
311　有元（ありもと）城跡　　勝田郡奈義町中島東　　＜町指定史跡＞　　地図 15 左

立地　那岐山麓南部、中島東に所在する丘陵の東西両側には名義川と高殿川が流れ、城はこの両川が合流する低位部を見下ろすことの出来る丘陵先端部に所在する。

概要　城は、低位部からの比高差約 7 mを測る段丘状高所に丘陵を背にした状態で構築されている。段丘は、東側に広い平坦面を見せるが、その東端側は谷地形で、 5 m以上の比高差をもって下がる。ここには、東西に長い段丘先端部から 30 ～ 50 m奥まった所に平行して造られた総延長 150 mを測る「コ」字状を呈する土塁が見られる。また、この土塁が存在する場所から山側に上がった斜面にも全長約 100 mの横堀と上端幅 2 m、高さ 2 mの土塁が斜めに造られ、山側からの攻城に備える。

前者の土塁は長さの割に尾根先端部との間が 30 ～ 50 mと狭い。現在この間の二段の平坦面は墓地および畑地として利用されており、後世の改変によって本来の姿を失っていると考えられる。しかし、道路との間に今日残る小字「城ノ前」と「コ」字状土塁によって囲まれた状況等から考えて、この中が城内と考えられる。なお、「コ」字状土塁の北東背後に存在する南北 100m、東西 80m の長方形区画であるが、城に伴う屋敷等何らかの施設が存在した可能性が考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』では「中島山」として城主を有本勘四郎佐弘とする。『東作誌』では「西坪城」として、「城の前」にあり、本丸（東西二（ママ）間、南北十五間）、惣囲の土塁は二百七十間、東は谷、南は田、西・北は山で、城主は有元遠江守菅原佐氏とする。（文献 133）　　（島崎）



第 295 図　有元城跡縄張り図（ 1 /2,000）

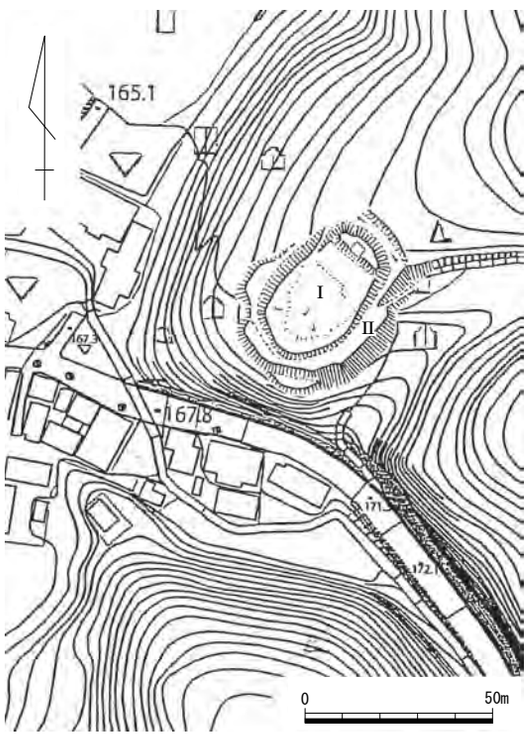
313　長畑（ながはた）構跡　　美作市久賀　　地図 15 右

立地　長畑地区を西側眼下に眺望可能な標高 190 mの尾根端部に所在する。

概要　城は、尾根先端部から北に約 50 mの地点に尾根筋に直交して幅３m程の比較的小規模な堀切を開削し、それより南西側を城地としている。主郭は、堀切に沿って造られた長さ 15 m、高さ１mの土塁の南西側に存在する全長 30m、幅 20m の曲輪Ⅰである。土塁には祠が祀られ、周辺部は平坦面であるが主郭から先端にかけては緩やかな自然面を残す。主郭の周りを馬蹄形に廻る下段の曲輪Ⅱは幅３～５mを測る。

文献・伝承　地誌類には城の記載は認められない。『日本城郭全集』には、「長畑構」として天正２（1574）年に長畑三郎三右衛門重則が築城し、天正６（1578）年に皆木季長・季秀によって落城されたとされる。

（島崎）



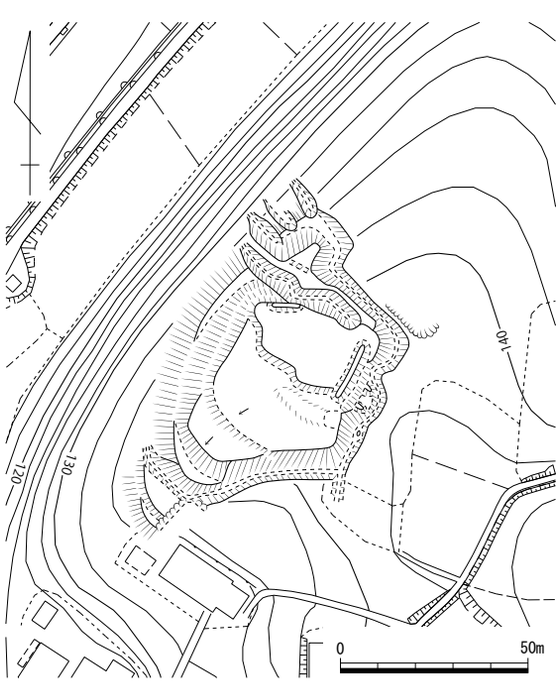
第 296 図　長畑構跡縄張り図（1/2,000）

317　岩倉山（いわくらやま）城跡　　津山市田熊　　地図 21 右

立地　北東方向から南西方向に流れる広戸川の、東側に近接して立地する。

概要　広戸川に接する北西側以外の３方を、幅約 10 m、深さが最大５mの横堀で囲った全長約 90 mの城である。主郭は約 30 mあり、規模が大きい。背後には高さ１mの土塁があり、その背後部分のみ横堀も２条になる。横堀に付随して竪堀も３本配されている。主郭前面は、高さ約 1.5 mの切岸に囲まれ、幅約 30 mと大きめの曲輪が続く。この曲輪の東側には、虎口状の施設があり、その先の横堀部分には、橋が渡せるような箇所がある。さらに南西方向に曲輪が数面続く。

文献・伝承　『岡山県勝田郡志』では、城主は佐々木直正で、その子の正清が井上蔵人と称し、『古城之覚』『美作鬢鏡』『美作鏡』『東作誌』などは、以後井上一族が居城するとある。　（小林）



第 297 図　岩倉山城跡縄張り図（1/2,000）

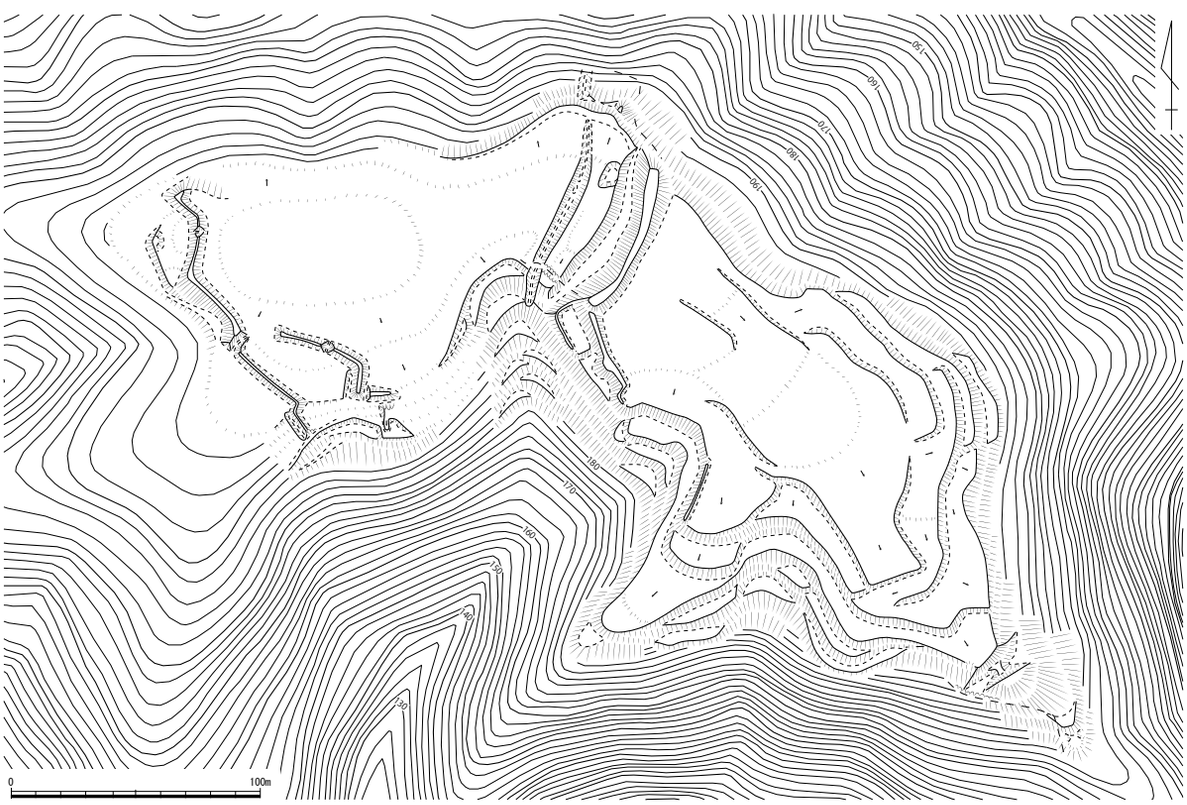
318　新宮城跡（しんぐう）　　津山市福井・新田　　地図 21 右

立地　加茂川と広戸川に挟まれた丘陵地帯に位置し、城跡のある山頂は周辺の山々より高いため、眺望は良好である。南眼下に蛇行する広戸川を望む。

概要　山頂部はなだらかな平坦地が東西に広がり、その一帯を城域とする。平坦地のほぼ中央に大規模な堀切２条を南北方向に設けて、平坦地を東西に分断している。２条の堀切は 10 ｍほど間隔を開け、長さ約 80 m、西側の堀切は深さ 1.5 ～２m、東側の堀切は深さ３～７ｍを測る。この堀切を境に東西で遺構の様相が異なっており、東側の遺構は曲輪が主体となっているのに対し、西側の遺構は土塁が主体となる。

東側の曲輪は平坦地の周縁部に階段状に設けられ、地形に合わせて長く造っている。切岸は１～４ｍの高さがある。土塁も一部に設置されており、堀切に接する西辺部には、高さ約 2.5 ｍの土塁がある。その南端部から南東に延びる土塁には横矢を意識したと考えられる屈曲部や張り出しが造られている。南東端部の尾根筋には堀切を設けている。深さ５～１ｍで、底部中央に土橋がある。

西側の平坦部はほぼ自然地形のままであり、土塁は平坦地の西～南部に設けられている。高さは１～ 1.5 ｍで、南部では２重に設置され、総延長は約 170 ｍを測る。土塁は折れ曲りが複数箇所で見られ、また、土塁が途切れる部分か４か所あるが当時の虎口かどうか不明である。土塁外側が高さ 2.5 ～４ｍの切岸となる部分もある。土塁の南端部は傾斜面に造られており、土塁の西に沿って溝がある。



第 298 図　新宮城跡縄張り図（1 /3,000）

堀切のある平坦面中央部北側斜面には東西に長く延びる犬走りがあり、現地では東側の堀切が犬走りを切っているような印象を受けたが確証はない。また、西の平坦地の中央やや東寄りを南北に新田と福井の大字境が通り、それは勝南郡と勝北郡の郡境でもある。

文献・伝承　『美作国の山城』によると、『古城之覚』は英田郡新田村の「神宮之（城）」として、城主は木下道光、別に勝田北郡福井村の「新宮山」として城主不詳とし、同一の城を別々に掲げ、『美作鏡』は両城を同一と指摘し、『東作誌』は「真宮山」とも表記し、一説に木下道光の家臣木下勘四郎が居城、城の麓に神宮の小祠があるとし、西の城は新田村に、東の城は福井村に属すと記すとする。また、『日本城郭全集』は「新宮城」とし、長元（1028 ～ 37）の頃、木下道光が築城、元暦元年（1184）道元の時、源氏の軍勢に攻撃され落城したとし、山上は本丸、二の丸に区切られ、南側は断崖絶壁とし、『太平記』に、延文５年 (正平 15 年、1360) ８月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞、則祐が攻撃し降参した城のうちに「新宮」がみえるとする。　（物部）

写真 139　遠景（南から）

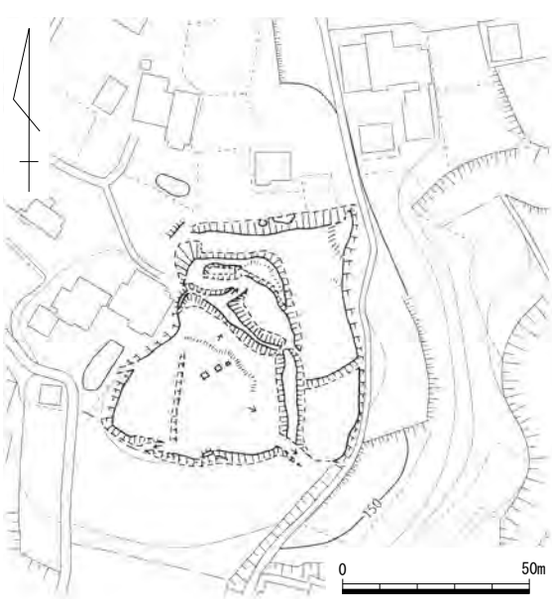
写真 140　堀切に接する土塁（東から）

319　植月（うえつき）城跡　　勝田郡勝央町植月中　　＜町指定史跡＞　　地図 21 右

立地　南に緩く延びる丘陵頂部に位置しており、ここから約１㎞東側には滝川が流れている。

概要　周囲より約３～４ｍ高い場所に築かれた方形居館で切岸は急峻である。主郭の北辺には高さ約２ｍの土塁が巡るが、西・南辺は一部削平を受ける。この主郭の北・東側は約 0.5 ～１ｍの切岸をもつ大小３面の帯曲輪を配置している。なお、城跡の周囲には水溜まりや池が点在し、南側と南東側の田畑は堀を埋めて造成したとする地元の話から、築城時は堀で囲まれていた可能性も高い。

文献・伝承　『森家先代実録』巻第十八の「美作国古城并城主之覚」、『美作鬢鑑』、『東作誌』によれば植月重佐が居城したとされ、主郭中央付近に顕彰碑が建つ。別称小山城跡・宮山城跡。（澤山）



第 299 図　植月城跡縄張り図（1/2,000）

321　茂平（もびら）城跡　　勝田郡勝央町大平台　　地図 21 右

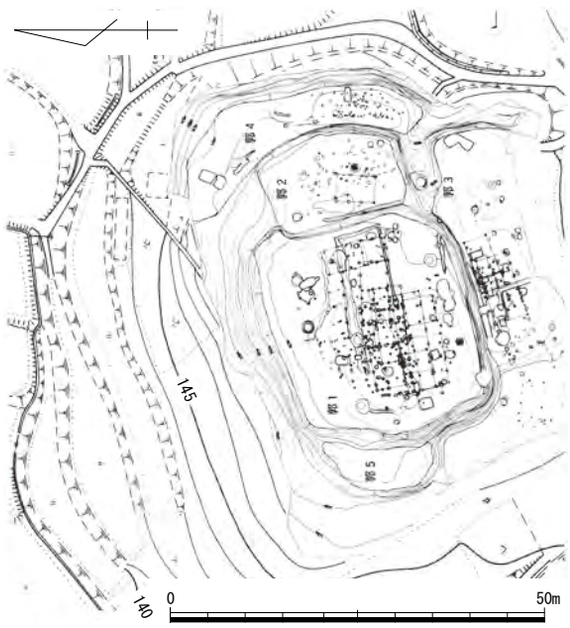
立地　山塊から西へ延びる丘陵端部に立地する。

概要　現地は平成 4（1992）年度に実施した新勝央中核工業団地建設に伴う発掘調査後、造成工事により消滅しており、現況は工場と調節池となっている。調査成果として、主郭の周囲に 5 面の曲輪を配置し、建物 13 棟のほか断面形がＬ字形を呈する貯蔵穴、井戸や堀切を確認している。

出土品としては、16 世紀後半～ 17 世紀後半の備前焼・陶磁器・土師器・石臼・五輪塔などがあるが、特に石臼と摺鉢が多い。城主は不詳であるが、中世末期の美作東部の混乱した政治状況の中、在地勢力の築いた平山城で、居館的な様相が多いと想定している。

文献・伝承　城跡のある田畑の小字名は「城山」であり、地元では周知されていた城と思われる。

（澤山）



第 300 図　茂平城跡縄張り図（1/1,000）
文献 154 を改変

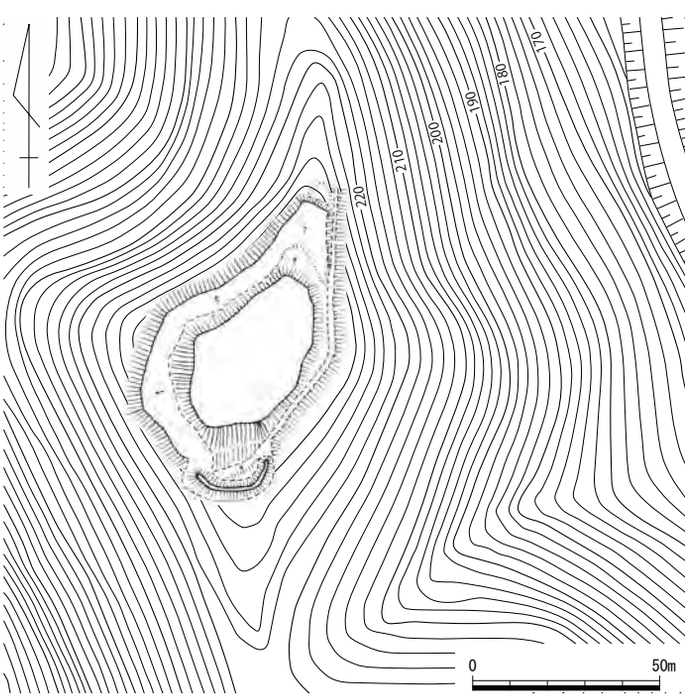
323　大谷（おおたに）城跡　　勝田郡勝央町植月中　　地図 22 左

立地　滝川左岸の標高約 230 m、比高約 100 mの東西が絶壁に近い険しい山頂に立地し、北東から西の眺望が良好である。

概要　城域は東西約 55 m、約 85 m と中規模でも小さい単郭である。頂部には 45 × 30 mの曲輪があり、造作があまく切岸は緩い。曲輪下段の西半には帯曲輪が弧状にめぐり、頂部南端の土塁と繋がる。土塁は低く、弧状に設けられている。全体的に東西が絶壁、土塁で南方を守る縄張りである。

文献・伝承　文献 4『美作鬢鏡』では下大谷城、文献 13『日本城郭大系』では金山城、城主を大谷佐介と伝える。

（米田）



第 301 図　大谷城跡縄張り図（1/2,000）

325　小風呂山城跡（こふろやま）　勝田郡勝央町美野　地図 22 左

立地　西側に延びる丘陵の裾部に位置する。

概要　基本的には方形居館であり、主郭縁辺には高さ約 0.5 mの低い土塁が巡り、北側に深さ３m程度の堀切が２条配置されている。また、南西側には塁線が屈曲する狭い平坦地が認められ、横矢掛りとも見て取れる。

一方、造成時期は不明であるが、主郭の北西隅に土壇状の高まりの上に鷹取種佐の顕彰碑が建ち、また北側には墓地と五輪塔群等がある。わずかではあるが、こうした地形改変が全体的に認められる。

文献・伝承　『東作誌』には勝北郡美野村の「小風呂城山」と記載され、城主は鷹取彦次郎、猪股采女とされる。（澤山）

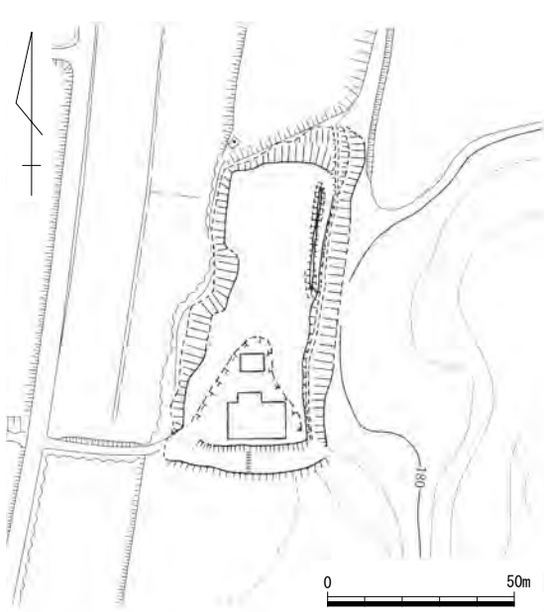
第 302 図　小風呂山城跡縄張り図（1/2,000）

327　鎌倉屋敷跡（かまくら）　勝田郡勝央町豊久田　地図 22 左

立地　荒神池のある丘陵西側の端部に位置する。

概要　西方に延びる丘陵に対して、南北方向に長辺をもつ方形居館である。北・西側の切岸は急峻であり、特に西辺には塁線の折れが認められる。東辺には丘陵を南北に切断する深さ約３mの堀（現在、一部は排水溝）が設けられている。その西肩から約１m離れた場所に堀と並行する高さ約１m土塁が伴う。この堀と土塁は比較的北東側で明瞭に確認できるが、中央付近以南は判然としない。なお、全体的に雑木・雑草が生い茂り、平面状況を現認することは困難であった。

文献･伝承　『東作誌』には勝北郡八日市村の「鎌倉屋敷」と記載され、土井兵庫・佐桑佐兵衛が居城し、その後菅家一族に滅ぼされたとされる。（澤山）



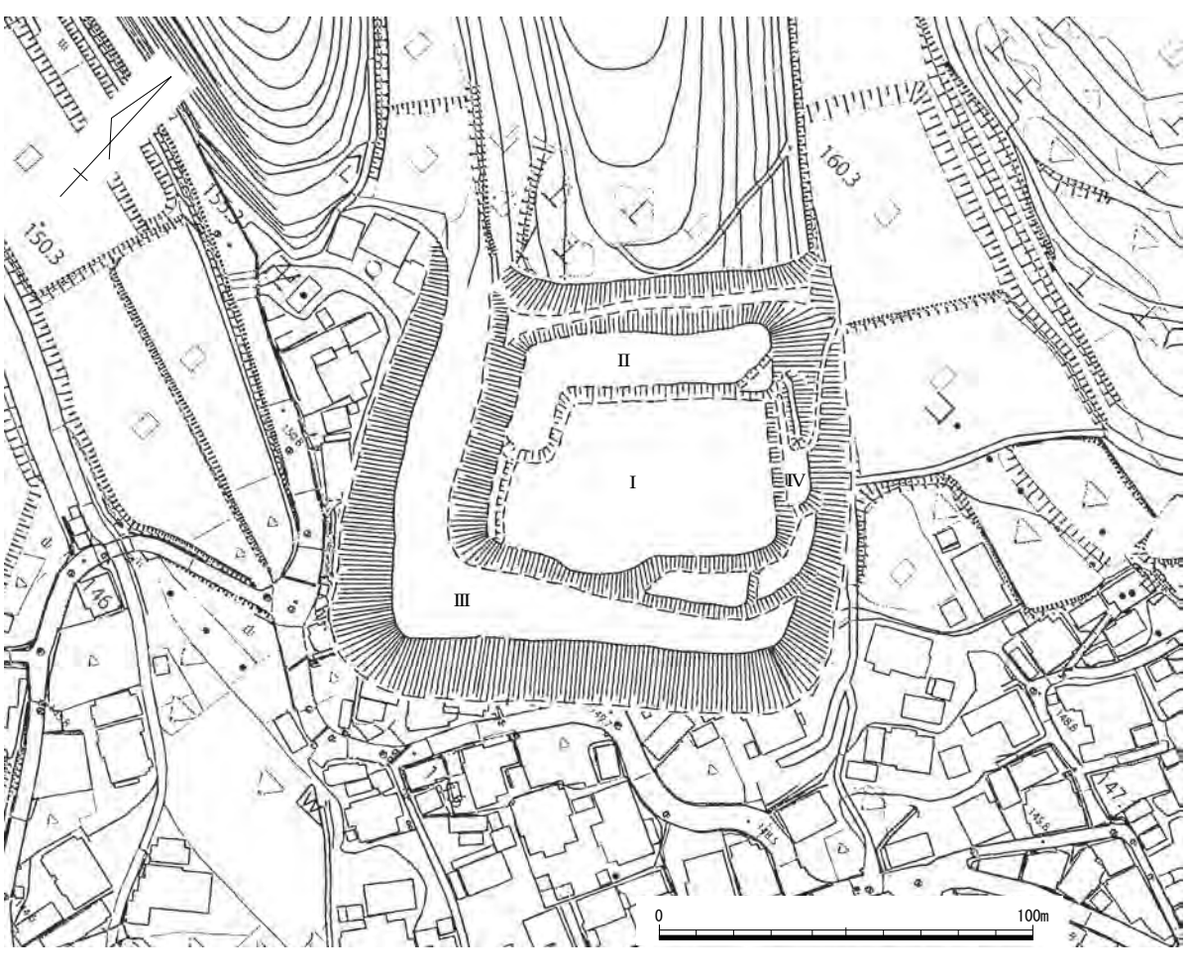
第 303 図　鎌倉屋敷跡縄張り図（1/2,000）

328　上ノ山城跡（うえのやま）　美作市真加部　地図 22 右

立地　吉野川の上流域、勝田町真加部にはその支流である梶並川が形成した肥沃な平野部が見られ、ここには鎌倉時代から室町時代にかけての矢田条里・真加部条里等が存在する。この平野部を東方眼下に見下ろせる北西から南東に延びる尾根先端部に上ノ山城跡は所在する。

概要　城は、幅約 90 mの尾根筋を先端部から約 100 mの地点で尾根に直交した全長 80 m、上端幅約 15 mの堀切で画されたもので、これより南東側が城内である。堀切に直交・並行した外郭を成す 3 側面はいずれも直線的に切岸がなされ、方形館に仕上げられている。城内は、大きく 2 面の曲輪から構成されている。最も高所にあるのが東西 65 ～ 75 m、南北 65 mの方形を呈する曲輪Ⅰ・Ⅱで、堀切側には後世の開削によって本来の高さは不明であるが幅 15 mの曲輪ⅡがＬ字状に造られ、北西方向からの防御を固める。一方、曲輪Ⅰ・Ⅱの下段には、幅 10 ～ 15 mの平面Ｌ字状の曲輪Ⅲが配置される。なお、曲輪Ⅰの北東側下段には幅 5 m前後のやや狭い曲輪Ⅳが付属する。ここには防御施設としての長さ 20 mにわたる横堀と土塁の存在が認められる。現在の小道が当該期の城道とすれば横矢掛かりを意図したものといえ、ここに虎口の存在が想定される。

文献・伝承　『美作鬢鏡』によれば真加部城とされ、城主は原与次郎とする。『岡山県勝田郡志』では、文明・長享年間（1469 ～ 1489 年）に山名持豊の家臣原与次郎が居城と伝える。　（島崎）



第 304 図　上ノ山城跡縄張り図（1 /2,000）

333　星尾城跡（ほしお）　　美作市大町　　地図 22 右

立地　粟井川右岸、北側の山塊から尾根が南へ細く延びた標高 162 mの丘陵端に立地する。比高は 20 mと低い。周辺には北東 1.4㎞に比丘尼城跡、東 2.0 に高畑城跡、南東 1.7㎞に高山城跡が位置する。

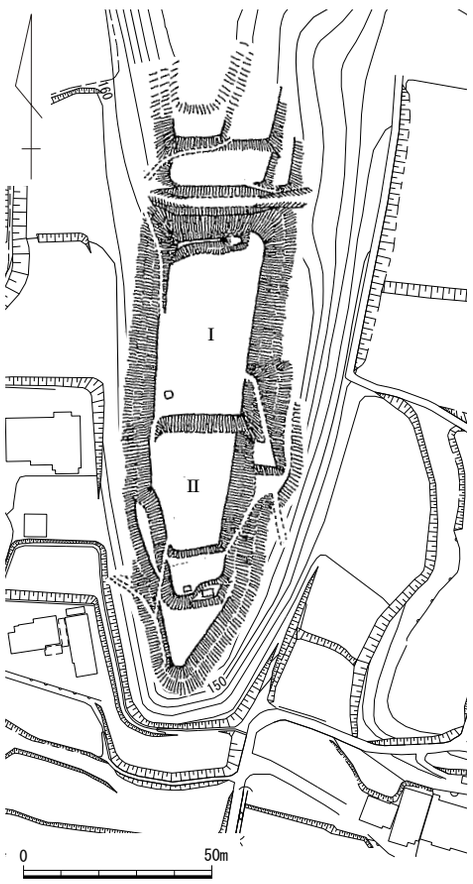
概要　城域は東西 40 m、南北 130 mで、中規模でも小さい。頂部の曲輪Ⅰを中心とし、その南に曲輪や腰曲輪を直線的に連ねた縄張りである。

頂部の曲輪Ⅰは長方形を呈し、東西 25 m、南北 40 mと広く、中心曲輪と考えられる。北辺には幅５m前後、高さ約 2.5 mの大規模な土塁が構築されている。また曲輪の南西側には径約２mの窪み、南西隅には下段の曲輪と繋がる虎口がある。

曲輪Ⅰの南側下段にある曲輪Ⅱは広く、東西 20 m、南北 30 mの長方形を呈する。その南端には腰曲輪が３面、東西斜面には小曲輪が１面ずつ配置されている。

防御施設として、南、東西斜面は急な切岸、曲輪Ⅰ北端は土塁に接して幅８m、深さ７m前後の大規模の堀切があり、尾根筋を堅固に守っている。

文献・伝承『東作誌』は一名を「構」とし、大町右京などを城主と伝える。『美作古城史』によると、薬王寺豊楽寺の古記録のなかに、文安２（1445）年の大町山城守基佐に関連する文書がある。　（米田）



第 305 図　星尾城跡縄張り図（1/2,000）

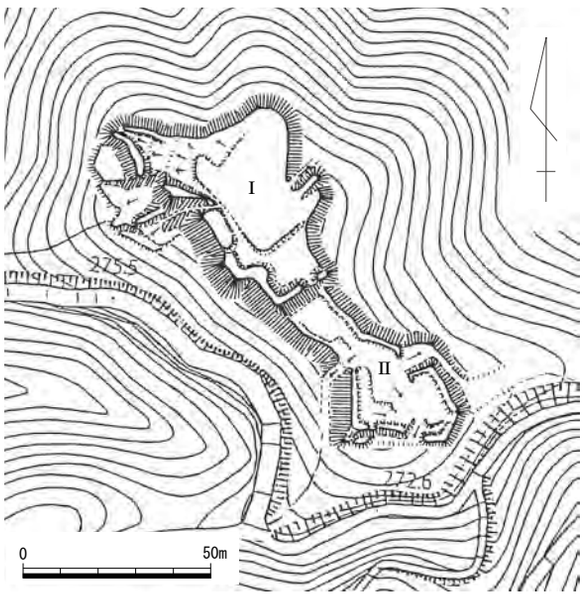
作図：畑和良

334　比丘尼城跡（びくに）　美作市大町・長谷内　地図 22 右

立地　大原地区と長谷内地区にまたがる標高280 mの山塊頂部に所在する。

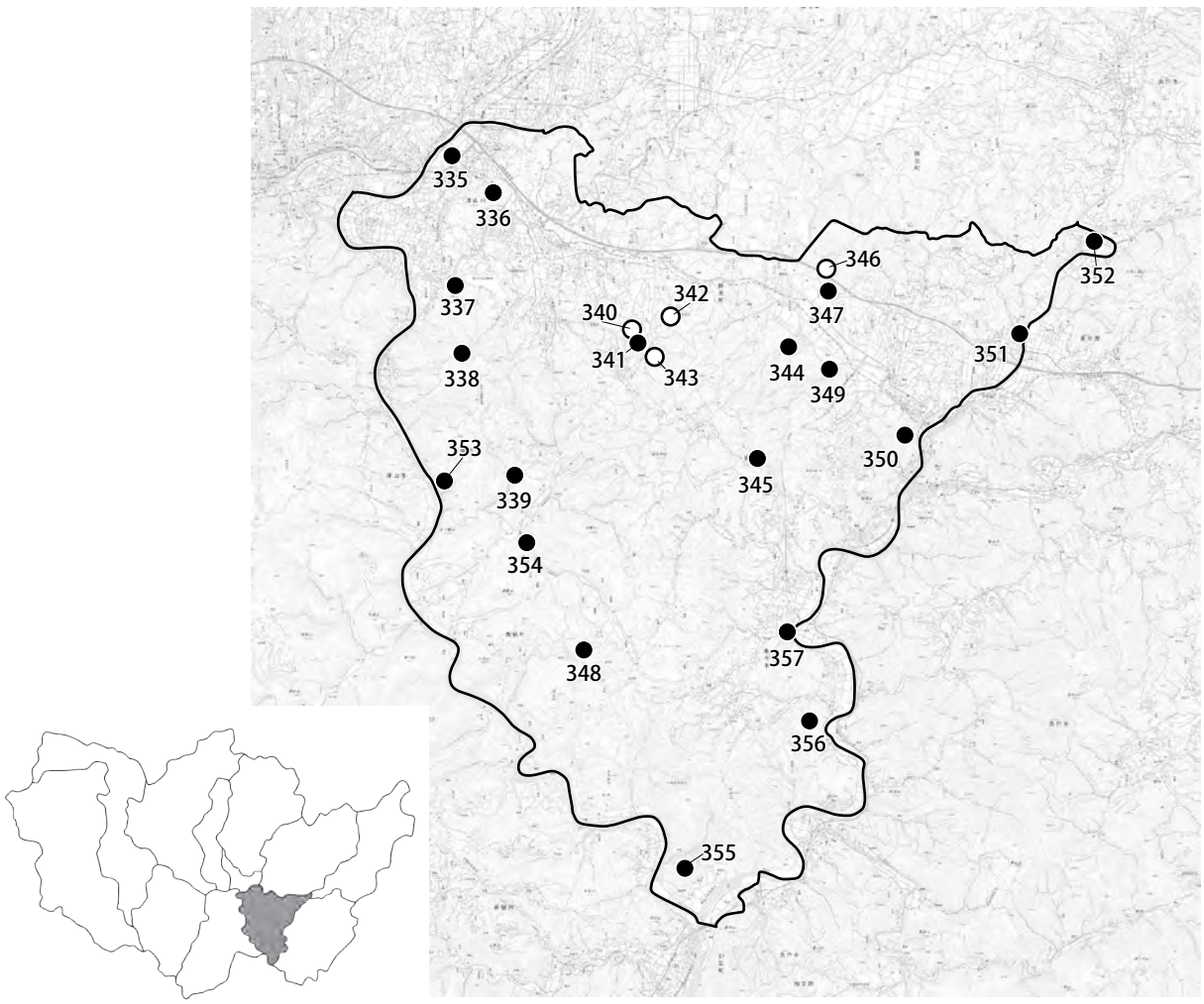
概要　比較的緩やかな山頂部に全長 120 m、最大幅 30 mの範囲に造成されている。曲輪は、中央部の尾根に直交した土塁を境に東西二つの面が見られる。主郭Ⅰは北西側の高所で、その東側と南側には折れを多用した土塁が存在する。北西端は、土塁がハ字状に狭まり、主郭からは斜傾する面が存在するなど特徴的である。一方、東側の曲輪Ⅱは主郭より約２m低い面で、ここにも周囲に折れを多用した直線的な土塁が巡り、曲輪を防御する。各所に配された折れや横矢掛構造から織豊系城郭の進化した築城技術を窺うことができる。

文献・伝承　『東作誌』には比丘尼の名前から尼子氏の城跡とする。　（島崎）



第 306 図　比丘尼城跡縄張り図（1/2,000）

第 10 節　勝南郡



335．河辺構跡
336．河辺城跡
337．瓜生原城跡
338．横手城跡
339．姥ヶ城跡
340．井上城跡
341．神田城跡
342．高取城跡
343．新造構跡
344．東吉田城跡
345．大谷城跡
346．糸山筑紫城跡
347．岡城跡
348．城の尾山城跡
349．小矢田城跡
350．三星城跡
351．尼ヶ城跡
352．舞山城跡
353．鴛淵山城跡
354．金室城跡
355．鷲山城跡
356．井内城跡
357．勝間城跡

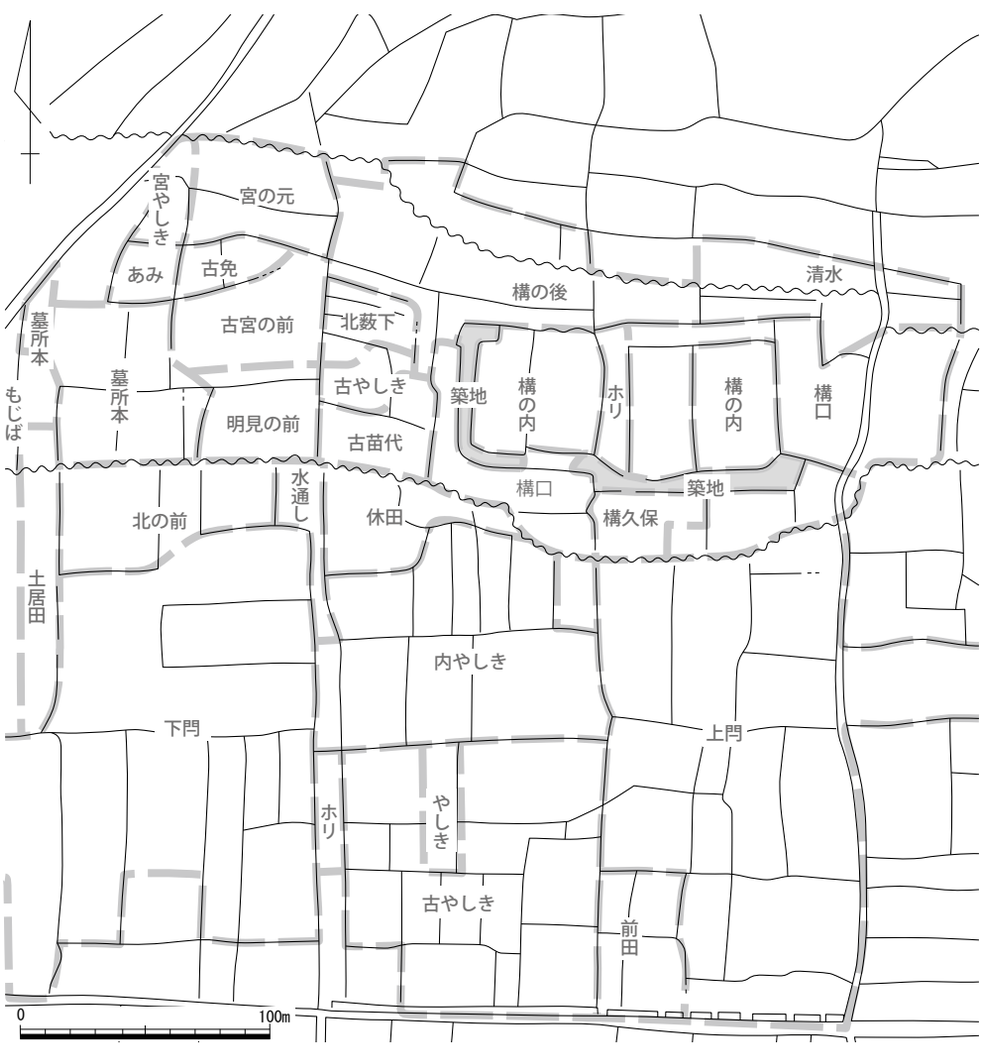
第 307 図　勝南郡城館位置図

335　河辺構跡（かわなべかまえ）　　津山市河辺　　地図 21 左

立地　加茂川の南東岸に広がる沖積平野に立地する。現在、一帯は工場、店舗、住宅地となっている。

概要　竹久順一『美作 国府 館 構 城下町の検証』(1995 年)によると、江戸期の地名に「構の内」があり、「堀」と「築地」がこれを取り囲む。工場化以前には「築地」部分は小高くなっており、「構の後」の北側は湿田で一段低く、「構の内」から南は緩やかに低くなっていたという。また、南北に続く「水通し」「堀」は水田経営や灌漑の証拠とする。さらに、河辺水田地域の南縁にあたる尾鼻丘陵に苔口氏と丹沢氏の墓地があり、五輪塔の記名から花房職秀に与した苔口宗十郎と河辺村との関係を指摘する。下図は竹久氏作成「河辺構の地名」(「河辺村図」(文政８年）と「田畑名寄帳」(明和元年）により作成）と、1947 年の空中写真（国土地理院）に見える地割りを合成したもので、土塁に囲まれた 50 ～ 60 m四方の屋敷地が幅約 10 mの「ホリ」を挟んで東西に並び、その周囲に水路を兼ねた大きな堀が廻っていたと考えられる。

文献・伝承　『美作 国府 館 構 城下町の検証』は、河辺の農民の中に、河辺構の主は丹沢氏との口伝があるが、丹沢氏については不明であるとする。　（物部）



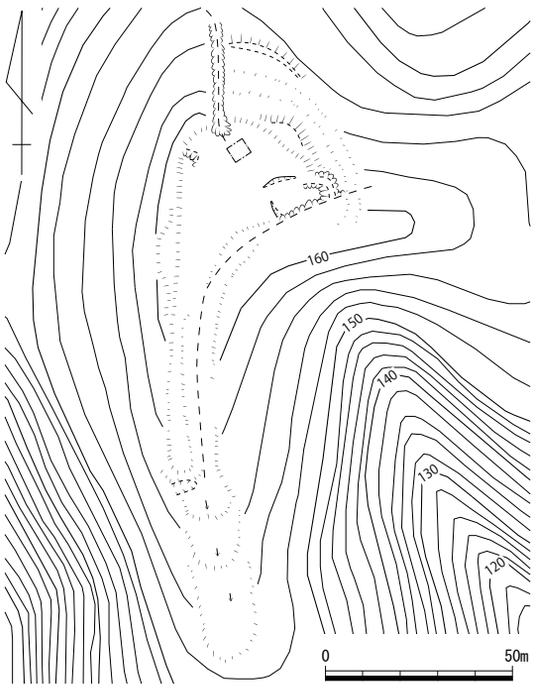
第 308 図　河辺構跡平面図（１/3,000）　※作成は本文参照

336　河辺城跡（かわなべ）　　津山市河辺・西吉田　　地図 21 左

立地　加茂川と広戸川の間に所在する丘陵地帯の高所に立地する。

概要　明確な城館関連遺構は見られないが、頂部一帯に広い平坦地がある。部分的に後世の開墾等と考えられる地形改変が認められる。北斜面の溝は山道である。

文献・伝承　『東作誌』は勝南郡河辺村の「城山」とし、城主や由来、歴史、規模は不詳とする。『美作国の山城』は、『美作古城史』に付近に的場・鍛冶の地名が残り、古城との関連が伝えられているとし、『上月文書』は、文和 3（1354）年閏 10 月 4 日、赤松貞規から注進を受けた足利義詮は、相賀一族中の「美作国河述城」での軍功を賞しているとする。　（物部）



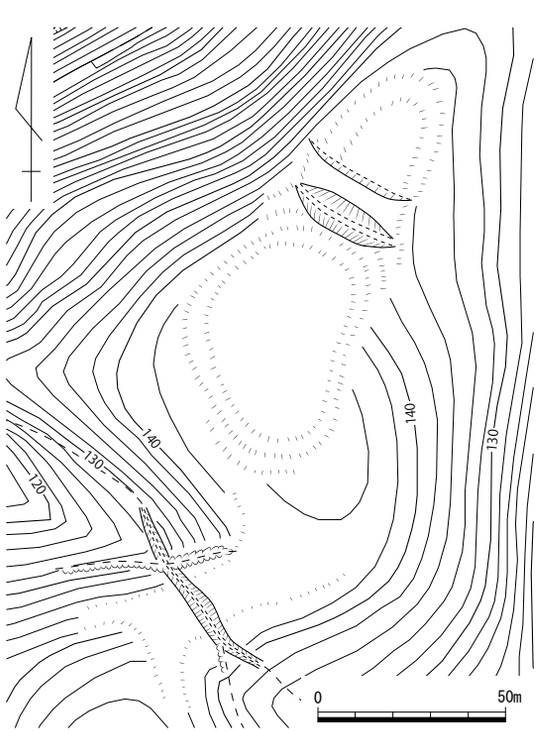
第 309 図　河辺城跡縄張り図（1 /2,000）

337　瓜生原城跡（うりゅうばら）　　津山市瓜生原　　地図 21 左

立地　和気山山塊の北端で、広戸川の左岸に向かって突出する丘陵上に立地する。丘陵頂部と北東に伸びる尾根筋が城域と想定される。

概要　頂部はやや平坦ではあるが、人為的な地形改変は認めがたい。頂部の北側尾根筋に 1 条の堀切を設け、その前面は尾根をカットして土塁状を呈する。頂部南側にも鞍部を遮断するような溝があり、堀切の可能性もあるが確証はない。堀切以外は地形にほとんど手を加えていない城と思われる。『岡山県遺跡地図』では、本地点から南東約 400 mの丘陵頂部を瓜生原城にあてていたが、現地に遺構は認められず、本地点のほうが正しいと判断した。『美作国の山城』では名称を「相賀屋敷（仮称）」とする。

文献・伝承　『美作国勝南郡瓜生原村誌』（明治 13 年）では「相賀市兵衛宅趾」とする。相賀市兵衛は荒神山城の花房職之の与力という。　（岡本）

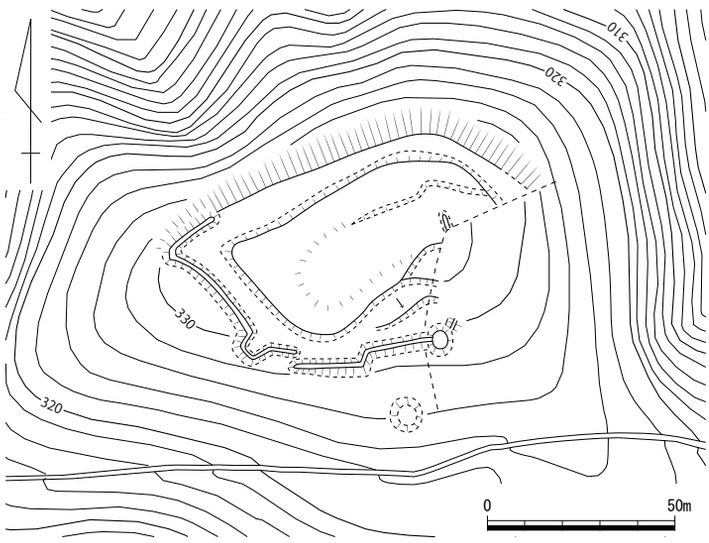


第 310 図　瓜生原城跡縄張り図（1 /2,000）

338　横手（よこて）城跡　　津山市瓜生原・金井・久米郡美咲町羽仁　　地図 21 左

立地　吉井川左岸にある、標高 332 mの和気山の山頂に立地する。

概要　不整な長方形を呈する主郭と、その外側をとりまく帯曲輪の２面からなると思われるが、城域の南東端は後世の削平により失われている。主郭は高さ最大 1.5 mほどの高まりで、内部には明瞭な構造物は確認できない。帯曲輪の外縁は、北半部は土塁を伴わない一方、南半部には土塁が巡り、喰い違い虎口や横矢掛かりを思わせる突出部、屈曲箇所が認められ防御性を高めている。なお、城域の南側に接して円墳が２基現存する。



第 311 図　横手城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『東作誌』では「城山」として城主不詳、高城と出丸の平城からなると記す。『美作国勝南郡瓜生原村誌』では「横手ノ城」とし、本丸の三方に「宅地ノ跡・塀ノ座砦跡」があるとする。（岡本）

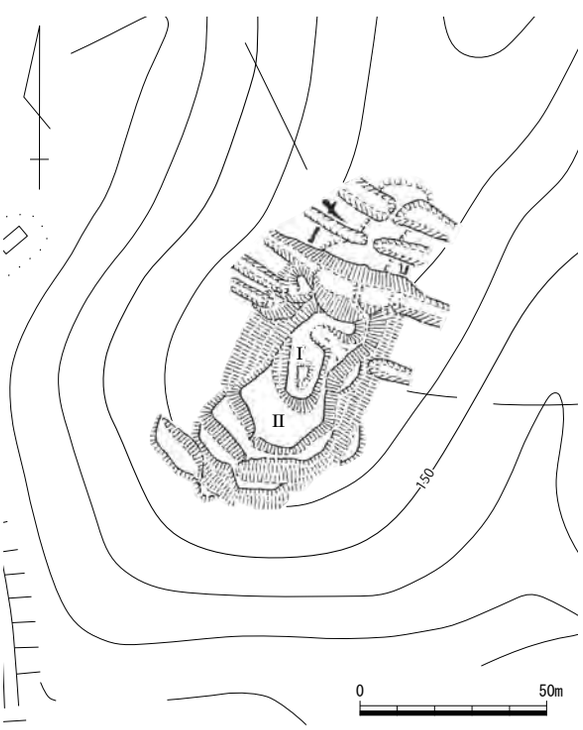
339　姥（うば）ヶ城跡　　久米郡美咲町羽仁・安井　　地図 21 左

立地　乙和気川支流の長谷川の狭小な谷筋を西眼下に見ることができる北東から南西に延びた尾根端部に位置する。

概要　尾根端部から北東約 70 mの地点に最大幅 15 m、深さ約 4 m、全長 50 mの堀切・竪堀を開削し、その南西側を城内とする。

主郭Ⅰは、長さ 20 m、幅 10 mの小規模な曲輪で、中央には露岩を残す。堀切に接して造られた幅約３mの土塁は、南東側に徐々に下がり高さを確保したもので、ここには堀切から上がってきた城道が取り付く。主郭の南西側には高さ２～３mの切岸により曲輪Ⅱ以下 4 面が造られている。

文献・伝承　『古城之覚』では「姥ヶ」として「城主難波九郎左衛門尉」とする。『東作誌』では、長谷奥にあり「比丘尼の持城」と伝える。（島崎）



第 312 図　姥ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

341　神田（こうだ）城跡　　勝田郡勝央町為本　　地図 21 右

立地　津山市に近接する勝央町西端に位置し、山塊から北東方向に延びる山頂部に位置する。

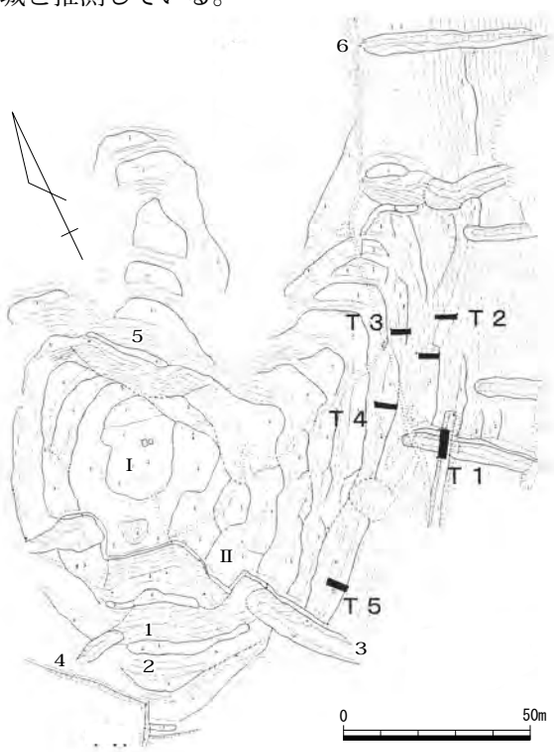
概要　山頂に築かれた主郭（曲輪Ⅰ）を中心に、北・北東方向に延びる二支尾根に曲輪が連なる連郭式の山城である。主郭の中央付近の削平度は高く、現在二社が祀られている。主郭西側には切岸は高くないが２面の帯曲輪が築かれ、さらに下方にも帯曲輪が確認できる。

主郭南側には高さ約５ｍを測る急峻な切岸を有し、下端の幅が広い堀切が２条を設けている。堀切１の東端は堀切２と重なる竪堀３が堀削され、西端の竪堀４も位置を少し主郭南西隅からずらして、この竪堀３と同様の機能を果たしている。また、この堀切１の主郭側の肩口には強い横矢掛りの土塁が巡り、その土塁の東側下方の裏側には「武者隠し」となる小曲輪Ⅱが伴う。堀切２は、堀切１よりも切岸は緩いが、高さ約３ｍを測る。堀切２の南側には小規模な曲輪が築かれており、そこから南側の尾根筋に向かう土橋が延びている。

一方、主郭北側にも高さ約５ｍの急峻な切岸をもつ堀切５を配置しているが、堀切１よりも規模は小さい。主郭から北方向に延びる尾根には、急峻な切岸が伴う５面程度の腰曲輪・帯曲輪が築かれている。また、北東方向に延びる尾根にも同様に腰曲輪・帯曲輪が多く築かれており、尾根の端部には深さ約４ｍ、最短部には深さ約１ｍの堀切６が配置しており、東端は竪堀となっている。また、東斜面にも複数の竪堀が堀削されている。確認調査の成果では、北東側の曲輪から装飾した火鉢や天目茶碗が出土しており、15 ～ 16 世紀頃の国人層の居城と推測している。

文献・伝承　『森家先代実録』巻第十八の「美作国古城并城主之覚」、『美作鬢鏡』、『東作誌』で「神田山」・「為本」などと称する城館の記載が見られる。城主は『東作誌』には後藤豊前入道良貞、次郎丸氏、『岡山県勝田郡志』は藤原種憲・髙取左馬頭氏元の名前が認められる。　（澤山）

写真 141　主郭南側切岸（南西から）



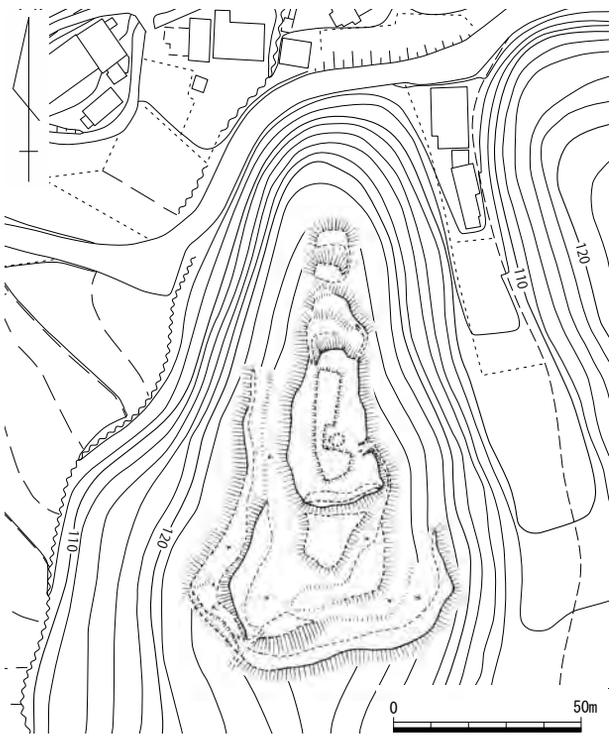
第 313 図　神田城跡縄張り図（1/2,000）
作図：勝央町教育委員会に加筆

344　東吉田城跡（ひがしよしだ）　勝田郡勝央町東吉田　地図 21 右

立地　滝川右岸の標高約 130 m、比高約 30 mの丘陵端部に位置する。

概要　城域は東西 75 m、南北 120 mと中規模である。頂部には主郭となる約 40 m×約 20 mの曲輪があり、南辺に低い土塁を設ける。曲輪の中央北側は長方形の土壇、中央南側に台形状の土壇があり、西側で連結する。曲輪中央には径３m前後の楕円形の窪み、中央東側は坂虎口がある。頂部から北斜面にかけては小曲輪５面が連続する。頂部の南側は緩斜面で、造作があまい平坦面が３面程度認められる。西斜面から南・東斜面にかけては帯曲輪が延び、南西側には低い土塁が伴う。

文献・伝承　『美作太平記』は安東信濃守安佐の二男（高泰）を城主と伝える。　（米田）



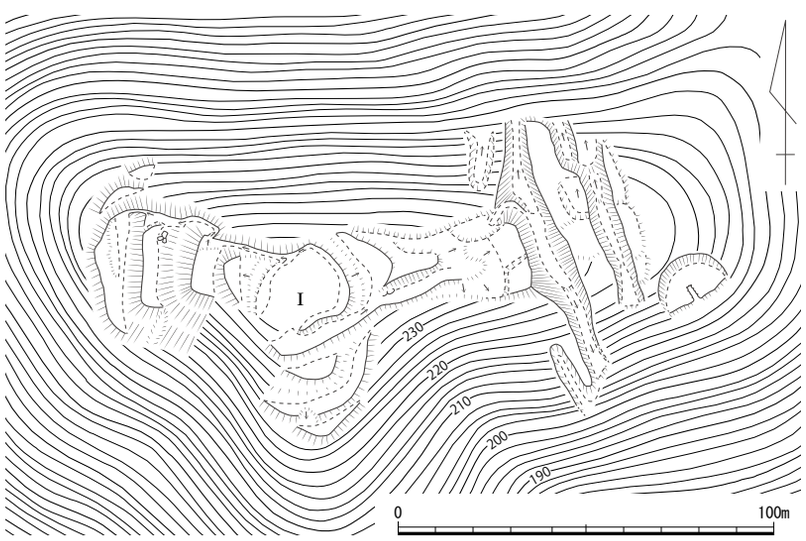
第 314 図　東吉田跡縄張り図（１/2,000）

345　大谷城跡（おおたに）　美作市下大谷　地図 21 右

立地　美作市下大谷の字「城山」に所在し、吉野川の支流大谷川左岸の標高約 220 mの山頂部に立地する。比高は約 100 mである。ここは美作市湯郷と勝央町為本を山越えで繋ぐ交通路の中間にあたる。近隣では東 3.0㎞に三星城跡、北西 3.4㎞に神田城跡が位置する。

概要　城域は東西 150 m、南北 80 mと中規模である。頂部の曲輪Ⅰを中心とし、西・南斜面に複数の曲輪や帯曲輪群を構えた縄張りである。東側の鞍部には２条の堀切とその両側に土塁を設けるほか、２条の堀切の西隣には南・北斜面に竪堀を設けて堅固に守る。

文献・伝承　『古城之覚』は「下大谷」とし、城主不詳とする。　（米田）



第 315 図　大谷城跡縄張り図（１/2,000）

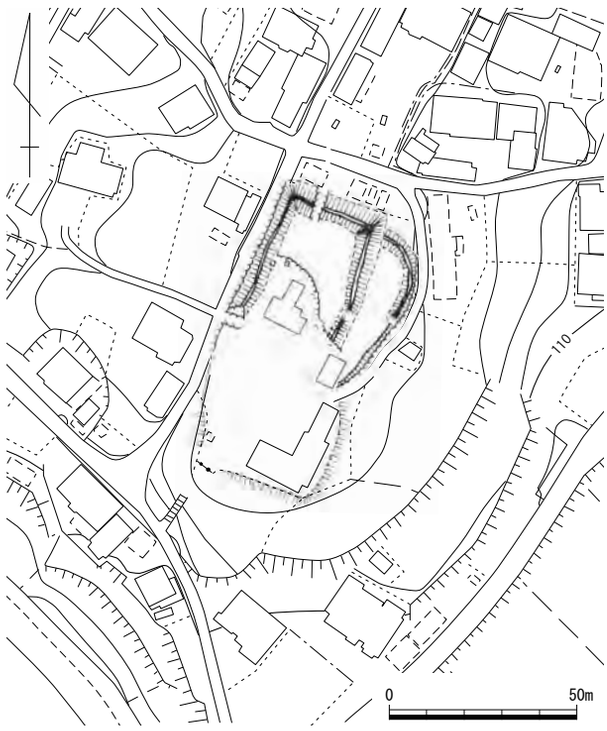
347　岡（おか）城跡　　勝田郡勝央町岡　　地図 22 左

立地　滝川左岸の南に延びる標高約 110 m、比高約 10 mの丘陵南端に立地し、岡神社境内周辺にあたる。

概要　城域は東西約 60 m、南北約 80 mと小規模である。城館関連遺構の根拠に乏しいが、立地、土塁、帯曲輪、遺称地名を参考とし、城館と評価しておく。

岡神社境内には 20 × 70 mの曲輪があり、南半は表面が削平されている。曲輪の北半には幅約６m前後の土塁が現状で北・東・西辺が「コ」の字状に残存し、本来は方形に曲輪を囲んでいた可能性がある。土塁は南北長約 60 m以上、東西長約 25 mであり、高さは３m前後である。

文献・伝承　周辺には「馬場」「城内」の地名が残る。　（米田）



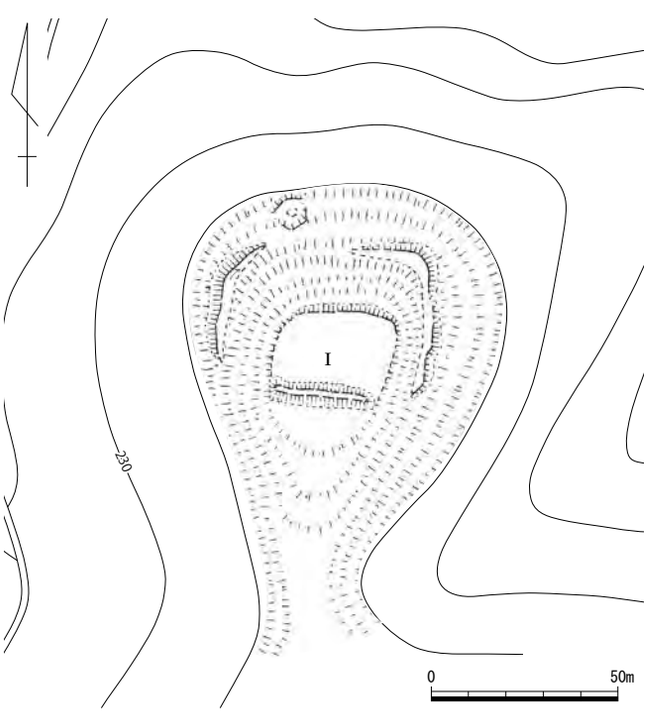
第 316 図　岡城跡縄張り図（１/2,000）

348　城（しろ）の尾山（おやま）城跡　　久米郡美咲町藤田上・藤田下　　地図 27 右

立地　吉井川左岸栗尾から和気川右岸の藤田に抜ける街道沿いを見下ろすことが可能な比高差 70 mの丘陵端頂部に所在する。

概要　城は、南山塊から北に派生した比較的緩やかな尾根の先端部に存在する。防御の主要な施設である堀切は南尾根筋には見られなく、頂部には曲輪が１面と、その南側には長さ約 30 m、高さ１m未満の低い土塁が存在し、主郭Ⅰを防御する。また、主郭は上面を大きく削平して造られたものではないことから、肩部の切岸は低く、北側一辺においてわずかに見られるにすぎない。なお、主郭下方の東西に幅１～２mの帯曲輪が見られるが造成度は弱い。

文献・伝承　『東作誌』には「城の尾山」として城主不詳とする。　（島崎）



第 317 図　城の尾山城跡縄張り図（１/2,000）

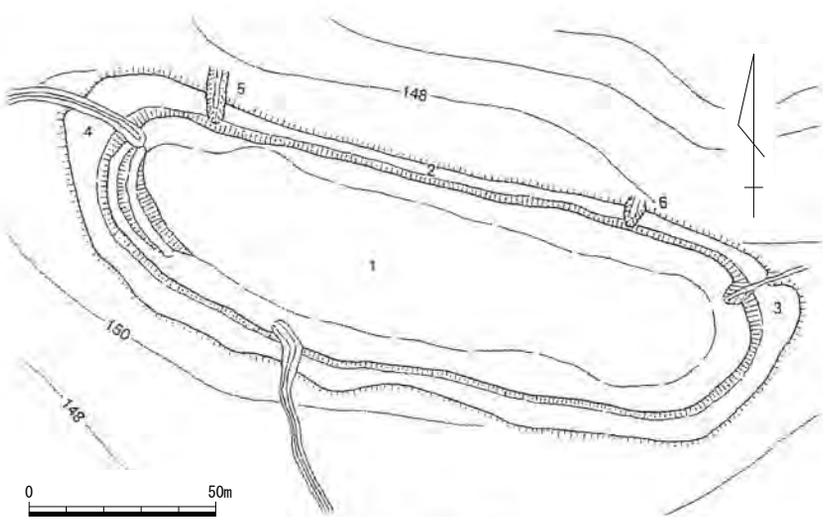
349　小矢田（おやた）城跡　　勝田郡勝央町小矢田　　地図 22 左

立地　滝川を北に見下ろす山頂部に立地する。滝川を挟んで約 700 m北東の大河内遺跡では 12 世紀末～ 13 世紀初頭の集落や、勝間田焼用の粘土採掘坑が多数検出されている。周辺域には平安時代末～戦国時代に勝田庄という荘園が形成されていた。

概要　東西に長い山頂部の周辺を鉢巻き状に削平して幅の狭い帯曲輪を造成している。削平した土砂は上方斜面に上げて平坦面を造成し、頂部に自然地形を残しながら一周する帯状の曲輪を上下二段に造成したような構造となる。帯曲輪より外側は自然地形で、北側は急峻な斜面となる。東・西は緩やかに尾根筋が続くが、堀切による分断は行われていない。ただ、帯曲輪の西端部には横堀と土塁を造成しており、守りを固めている。北側を巡る帯曲輪には竪堀２本を 120 m間隔で掘削する。基本的には切岸を守りの要とし、尾根筋を通って西からの侵入に対して警戒を強めた構造といえる。

文献・伝承　享保２（1717）年に編まれた『美作鬢鏡』や『美作鏡』に「小矢田城」の記載があるが、城主は不詳である。1912 年の『岡山県勝田郡誌』には赤松則祐の一族、戸倉弾正が勝田庄の地頭職に任ぜられたとある。その年代は暦応２（1339）年で、当初は戸倉城と呼称したとされている。嘉吉の変の際に山名氏に攻められ、文安２（1445）年、山名氏の一族塩見判官貞満が地頭職となって入城するが、この時に小矢田城に改まったとされる。天文 13（1544）年には尼子氏に攻められ、落城となった。

なお、大字小矢田には城山、城谷ノ一、城谷ノ二という地名が確認できる。　（上栫）



第 318 図　小矢田城跡縄張り図（１/2,000）

『岡山県立博物館研究報告』33 より引用

350　三星（みつぼし）城跡　　美作市明見・入田・栄町　　＜市指定史跡＞　　地図 22 左

立地　梶並川と滝川が合流する西岸に聳える標高 233 mの三星山頂に立地する。山の北裾では梶並川と滝川が合流するだけでなく、南裾ではこれらの河川と吉野川が合流するほか、北 2.5㎞には旧出雲街道が東西を縦断するなど、水陸交通の要衝にあたる。山頂からは北東の梶並川、北西の滝川、南の吉野川沿いが一望できる。周辺には南東 900 mの至近に林野城跡があるほか、北東 1.8㎞に鬢櫛山城跡、南 2.2㎞に三倉田城跡、西 3.0㎞に大谷城跡が位置する。

概要　三星山の主峰を中心とし、北、南東、南西に派生する支尾根に大小複数の曲輪を構えた連郭式山城である。城域は東西 400 m、南北 700 mで、美作国の山城としては最大級の規模を誇る。

三星山は中央頂部が最高峰で、東西にも尾根が続く。標高 233 mの中央頂部に構えられた曲輪Ⅰは 10 m× 7 mの台形を呈し、狭小ながら中心曲輪と考えられる。その周辺には南に帯曲輪を置き、東西頂部に繋がる尾根筋にそれぞれ複数の曲輪を連ねる。また、中央頂部から北東側、標高 194 m あたりの中腹には径 5 mほどの井戸（第 319・321 図●地点）が 1 基認められる。

中央頂部から東へ続く標高 230 mの東側頂部には 25 × 14 mの曲輪Ⅱを構え、その中央には一辺 9 mの土壇状の高まりがある。その北東斜面には小曲輪を 4 面連ね、北西と南斜面にも曲輪を配置する。南斜面の曲輪の南裾には小規模な帯曲輪と 2 本の竪堀を設けている。

一方、中央頂部から西へ続く標高 230 mの西側頂部には 32 × 11 mの長方形を呈する曲輪Ⅲを構え、中央には一辺 6 mの土壇状の高まりが認められる。曲輪Ⅲの東側尾根筋には 5 面の小曲輪を互い違いに配置するほか、中央頂部に続く尾根鞍部に細長い曲輪を 2 面構える。このほか、西側頂部の南斜面には弧状の堀切、その下方の谷部には竪堀を 1 本設けて、守りを固めている。

東側頂部から南東に派生する標高 175 m前後の尾根上は、北半に造作のあまい小規模な曲輪を 7 面連ね、その中間の東西谷部にそれぞれ竪堀を 1 本ずつ配する。尾根南半には造作のあまい細長い曲輪Ⅳを配置し、周りに帯曲輪を 2 面、尾根南端に土塁を設けることで南の入田方面からの攻撃に備える。

西側頂部から南に派生する尾根の北半は自然地形だが、南半の標高 209 mの尾根上には 46 × 18 mの長楕円形を呈する曲輪Ⅴが配置され、中央南寄りに円形の高まり、南北と西辺に土塁をめぐらす。

また、南西に延びる支尾根の鞍部には土橋を伴う小規模な堀切で区切って防御している。

中央頂部から北に派生する尾根中腹には長大な土塁を伴う曲輪Ⅵを構えている。曲輪Ⅵは 15 × 15 mほどの小さい規模ながら、北西部と南西部を突出させて横矢掛けとし、その北辺に土塁、西側に虎口を設ける。特に南西部の横矢掛けを画する土塁は西側に直角に屈曲させて突出させただけでなく、中央頂部に向かって標高 180 mあたりまで長く築かれている。その延長は約 45 mに及ぶ長大なものである。このほか、曲輪Ⅵの北東側には一段下に小曲輪を置く。

中央頂部から北に派生する標高 145 mの支尾根北端には曲輪Ⅶを中心とする曲輪群が配置されている。曲輪Ⅶは南北 60 ×東西 20 mと広大で、長方形を呈する。北辺と西辺には幅広の土塁をめぐらすとともに、北辺中央に虎口、北西隅角に直角な折れを伴う二重の横矢掛け、南西隅角に土塁を屈曲させた横矢掛けを設けている。西辺に築かれた土塁は長大で曲輪Ⅵまで繋がり、その延長は約 115 mに及ぶ。また、東斜面には谷部に向かって大小 12 面の帯曲輪を構える一方、西斜面には 9 本

からなる畝状竪堀を設け、その谷奥に 4 面以上の帯曲輪を配置することで防御力を高め、北の明見方面からの進攻に対して堅固に守っている。さらに北西に延びる標高 131 mの支尾根頂部には造作のあまい小曲輪、その南側の鞍部には方形の曲輪Ⅷを構えるほか、東側の谷部を大規模に竪堀状に造作している。

北東に延びる標高 113 mの支尾根先端には方形や多角形を呈する大小 7 面の曲輪が連なる。なかでも曲輪Ⅸは 30 × 20 mと広い。これらの曲輪群は屋敷跡の可能性も指摘されており、北東の明見、林野方面からの攻撃に備えて造られたと考えられる。このほか、東に延びる支尾根端にある平坦面には明見三星稲荷が祀られており、かつては曲輪であった可能性がある。

三星山の中央頂部と東西頂部、南東、南西尾根に築かれた曲輪Ⅰ～Ⅴを中心とする曲輪群は自然地形を巧みに利用して造られ、急峻な地形に加えて要所を堀切や竪堀で防御する縄張りであり、在地的な要素が強い。一方、北側に延びる尾根に築かれた曲輪Ⅵ～Ⅷを中心とする曲輪群は塁線が直線的で、長大で複雑に折れる土塁や横矢掛け、虎口を伴うほか、畝状竪堀で防御する縄張りであることから、織豊系城郭に見られる特徴が随所に認められる。こうした縄張りの特徴から前者は長年にわたって本拠とした後藤氏、後者は天正 7（1579）年に後藤氏を討ち破った宇喜多氏によって改修された可能性がある。

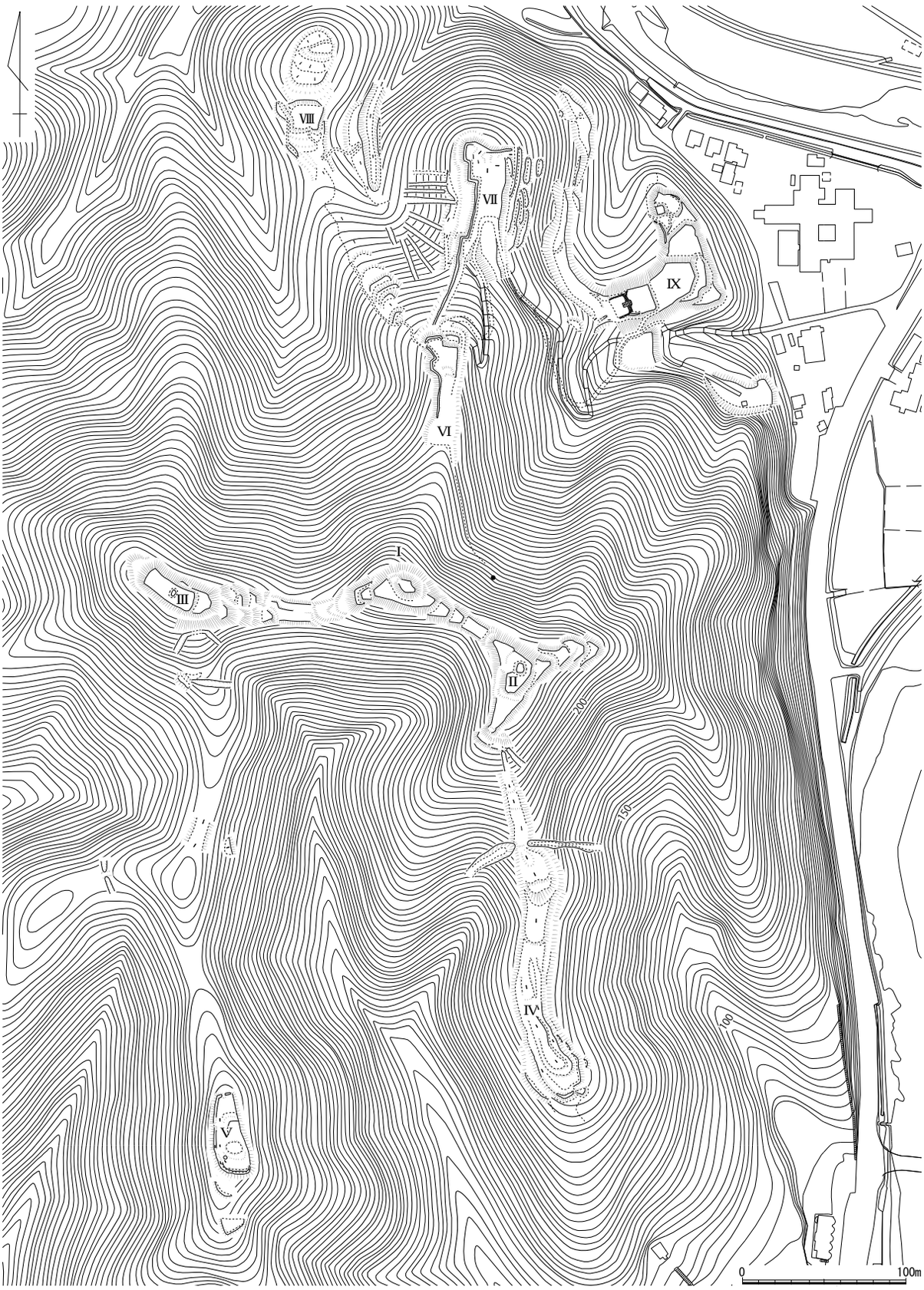
文献・伝承　三星城は応保年間に渡辺長寛が居館を構えたのが始まりと伝えられる。その後、南北朝時代の延元 4・暦応 2（1339）年又は観応 2・正平 16（1351）年に後藤氏が入城し、美作国塩湯郷の地頭職として治めるようになる。美作国守護をめぐって赤松氏と山名氏による長い抗争のなか、後藤氏は翻弄されながらも、応仁元（1467）年に三たび美作国守護となった赤松氏のもと、文亀 2（1502）年に立石氏の居城である美和山城跡、大永 3（1523）年に浦上氏の金室城を攻め落として、徐々に勢力を拡大していった。そして、後藤氏は天文年間に美作に進攻してきた尼子氏の旗下に入り、林野城に入った尼子氏の重臣川副久盛とともに美作国東部を守るようになる。永禄 5（1562）年に毛利氏の侵攻により尼子氏の勢力が衰え始めたことをきっかけに、備前の天神山城主の浦上宗景と通じて林野城の川副氏を攻めて一時は反撃されたが、永禄 8（1565）年に追放させた。その後間もなく、同年に毛利氏は備中松山城主の三村家親に三星城を攻めさせたが、後藤氏は堅固に城を守った。永禄 9（1566）年、毛利氏が尼子氏を滅ぼすと、美作国東部の諸士の多くは後藤氏に服し、後藤勝基は美作国東部の支配権を確立することとなる。元亀年間に後藤氏は浦上宗景を離れて毛利氏に属したことを契機に三星城は浦上氏に攻囲されたが、毛利氏の援軍や足利義昭の仲裁を得ながら、林野城に入った江見氏とともに対抗した。そして、天正 3（1575）年に浦上氏の本拠である天神山城を攻めて追放させた宇喜多氏が天正 7（1579）年に三星城を攻めて落とし、やがて後藤氏は滅亡した。

写真 142　井戸（北から）

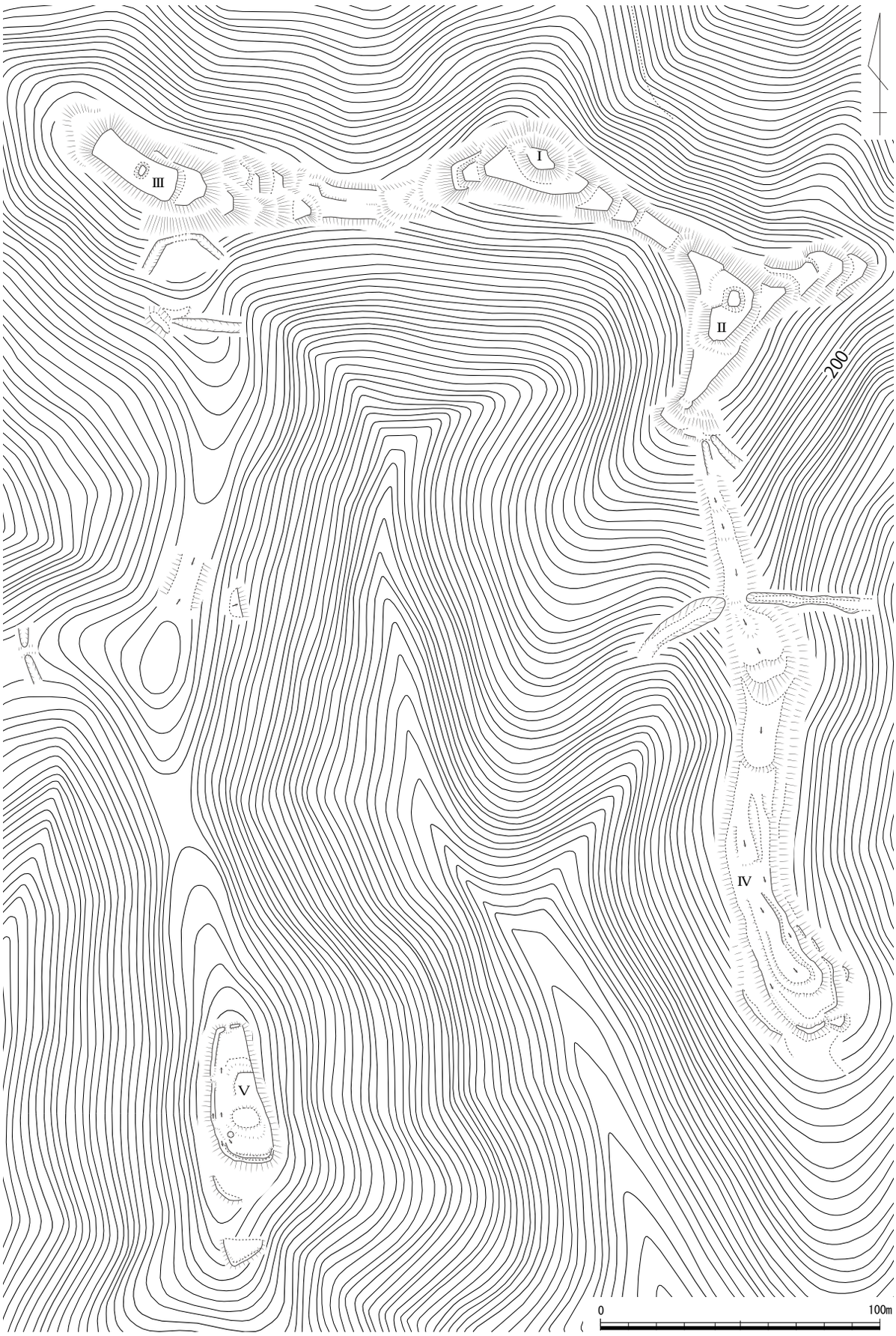
写真 143　曲輪Ⅶ（南東から）

三星城跡に関わる史料は多く、長らく本拠とした後藤氏だけではなく、江見、尼子、浦上、斎藤、毛利、小早川、吉川、織田の諸氏らが発給した文書によって本城の重要性や各氏の動向などの一端を垣間見ることができる（表 5 史料 41・43・44・52・56 ～ 58・80・84・86 ～ 91・114・119・397）。また、三星城跡をめぐる合戦の様子は軍記物『三

星軍記』『美作太平記』などで語り継がれている。　（米田）



第 319 図　三星城跡縄張り図（1/3,500）作図：畑和良・文化財センター



第 320 図　三星城跡（南半）縄張り図（1 /2,000）作図：畑和良・文化財センター

第 321 図　三星城跡（北半）縄張り図（1/2,000）作図：畑和良・文化財センター

351　尼（あまが）ヶ城跡　　美作市北山　　地図 22 左

立地　梶並川沿いの右岸にある標高約 130 mの丘陵頂部北半に立地し、比高 30 mである。周辺には梶並川を挟んで北東 1.2㎞に鞍懸城跡、南西 1.8㎞に鬢櫛山城跡が位置する。

概要　城域は東西 105 m、南北 90 mと中規模である。頂部北半の曲輪を中心とし、その北東側と西側にも曲輪を構えた縄張りである。

中心となる曲輪Ⅰは丘陵北半東寄りに配置されており、北辺約 45 m、南辺約 30 m、南北長約 50 mと規模は大きく、不整方形を呈する。曲輪は平坦に近いが、北端はやや低くなる。曲輪の西辺と南辺は内高約 1 mの土塁がめぐる。土塁は南辺が直線的であるのに対し、西辺は中央が虎口となって途切れるうえ、北端は緩く「S」字状に曲がって外側の土塁に繋がる。また、土塁の南西隅角は北側に屈曲する一方、南西側にも延びる。曲輪の東辺と北辺では土塁が明確に認められないが、それぞれの中央に幅 1 mのわずかな高まりが部分的に確認できる。また、曲輪Ⅰの北東隅角には石列が認められる。曲輪Ⅰの西側は中央が平入虎口となり、曲輪Ⅱとの間を幅 7 mの横堀と土塁で区画して堅守する。

曲輪Ⅰの西側は台形の曲輪Ⅱが配置されている。その西半には南北からそれぞれ延びる土塁がすぼまって虎口が設けられるほか、西辺南側の土塁は中央が屈折して横矢掛けとなる。

曲輪Ⅰの北東側には曲輪Ⅲが配されている。曲輪の西半は曲輪Ⅰ北側の虎口から繋がる幅狭の斜路になっているのに対し、東半は 10 m四方の平坦面が梶並川沿いの東側へやや突き出すことから、櫓台であった可能性がある。

防御施設として、曲輪群の北・西・南側に幅 6 ～ 10 mの大規模な横堀と土塁が長々とめぐらされ、厳重に区画する。特に西側は横堀の両脇に土塁を二重に設けるほか、南側の横堀と土塁は幅広く大規模である。これらの横堀と土塁は、北側では 4 か所、南側では内側の土塁に平行するように 3 か所で折れが確認でき、巧みな構造が見てとれる。

縄張りの西側土塁の西隣にある鉄塔部分を 2012 年に美作市教育委員会が発掘調査を行ったが、小規模な横穴式石室が 1 基確認されたのみで、城館関連の遺構・遺物は認められなかった（文献 143）。

文献・伝承　『古城之覚』は「尼ヶ城」とし、城主不詳とする。『東作誌』は「尼城」とする。　（米田）

第 322 図　尼ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

352　舞山（まいやま）城跡　　美作市和田　　地図 22 右

立地　梶並川が大きく蛇行するところの右岸にある標高 176 mの丘陵頂に立地する。比高は約 40 mである。近隣には南西 1.1㎞に鞍懸城跡が位置する。

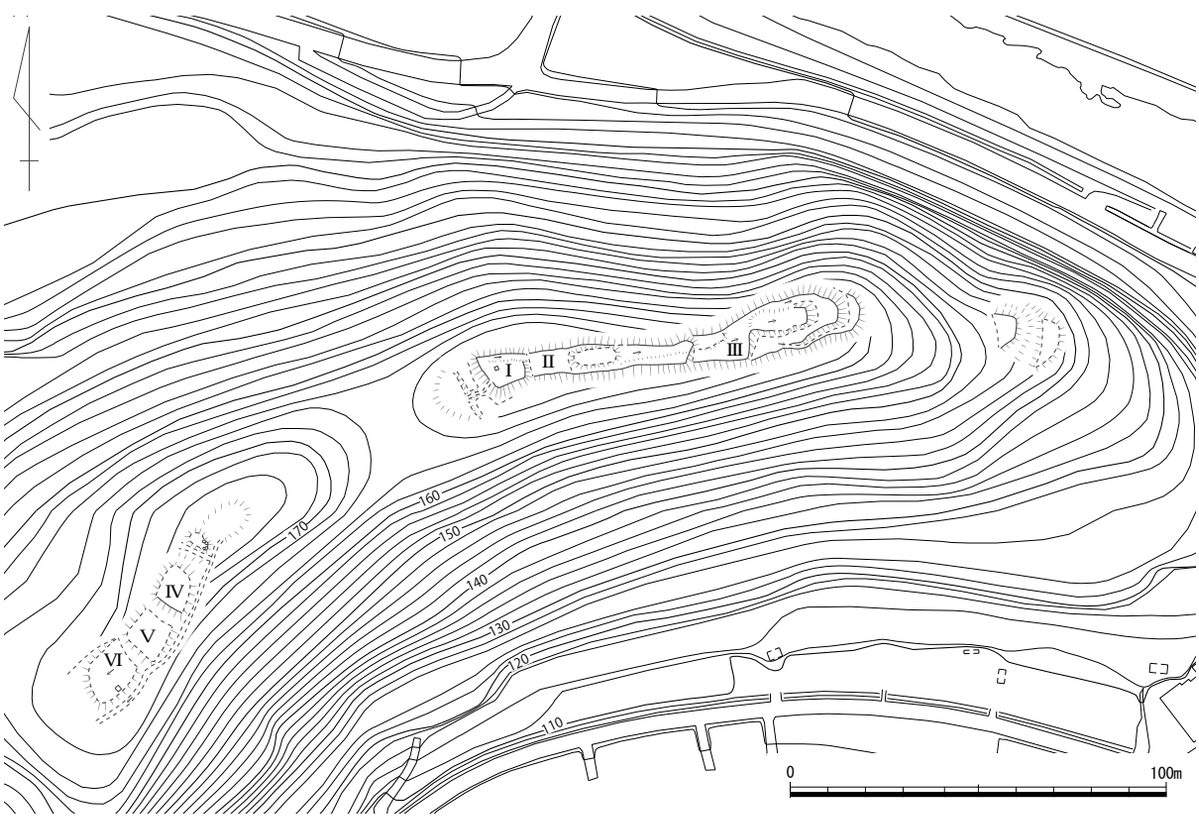
概要　城域は東西 280 m、南北 15 mと小規模である。縄張りは東西に細く延びる尾根上の標高 176 mと 170 mの２つの頂部に大きく分かれ、それぞれの頂部に複数の曲輪を連ねた構造である。

東側頂部は曲輪３面と帯曲輪２面が配置されている。頂部西端に造られた曲輪Ⅰは台形を呈し、10 × 8 mと小規模であるが、丘陵中央の頂部に配置されていることから、中心曲輪の可能性がある。北辺は通路となり、東隣の曲輪Ⅱに繋がる。曲輪Ⅱは 41 × 7 mと狭長で、中央に楕円形の高まりがある。その東隣には曲輪Ⅲを配置しており、南辺は鍵形に折れて横矢掛けとなる。さらにその下段には帯曲輪２面が配置されており、その南・北辺は通路となる。防御施設としては、曲輪Ⅰの西側に浅い堀切が設けられており、東肩は曲輪Ⅰの切岸と合わせると高さが３m近くある。

一方、西側頂部には３面の曲輪を構える。頂部中央の曲輪Ⅳは一辺約 10 mの方形を呈し、その南西にも同形同規模の曲輪Ⅴ・Ⅵを連ねる。防御施設として、曲輪Ⅳの北西側に浅い堀切と低い土塁が設けられている。なお、東側頂部西端の堀切と東側頂部東端の堀切や土塁の間の鞍部はなだらかな自然地形で城館関連遺構は明確ではない。

このほか、東側頂部からやや離れた東斜面には小曲輪が２面配置されている。

文献・伝承　城跡が築かれた舞山と呼ばれる丘陵の南東裾に「陣取バナ」という地名が残る。（米田）



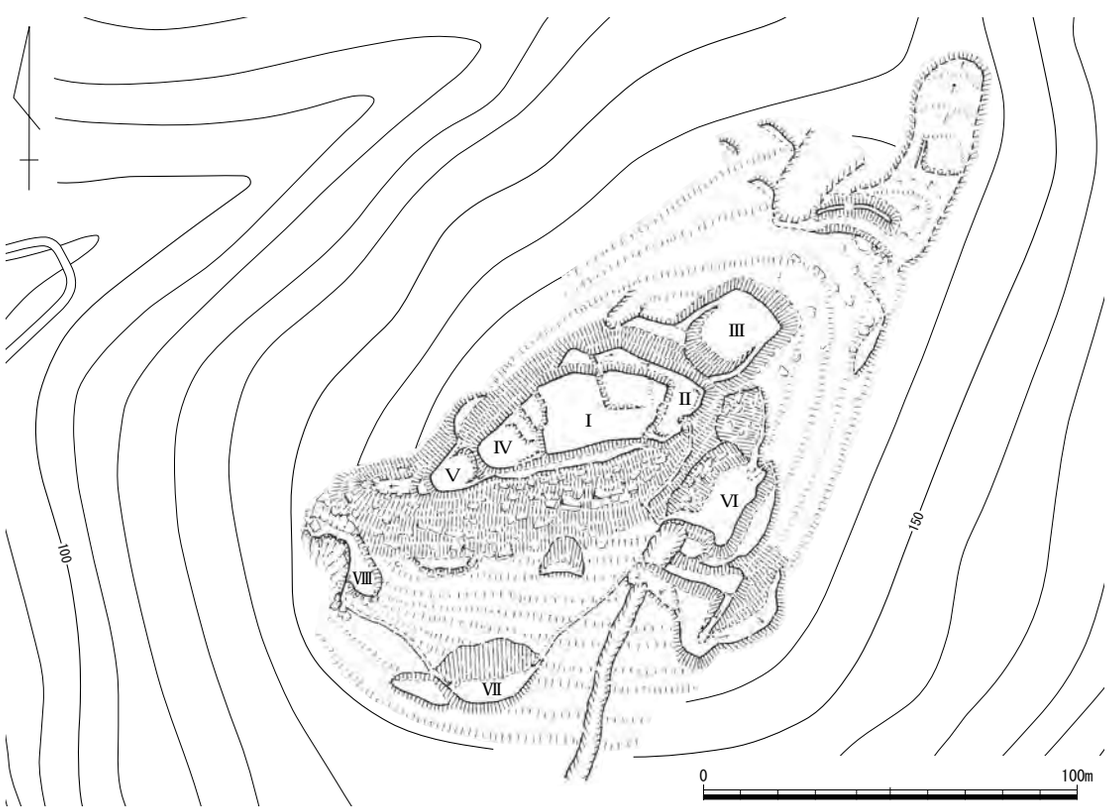
第 323 図　舞山城跡縄張り図（1 /2,000）

353　鴛淵山城跡（おしぶちやま）　久米郡美咲町羽仁　地図 21 左・27 左

立地　吉井川沿いの羽仁から押渕地区にかけては両岸ともに山塊が急峻で、城が所在する鴛淵山山塊も北と南側斜面は露岩が多く、急峻な天然の要害である。

概要　比高差 120 mを測る標高 198 mの山頂を中心に曲輪配置が見られる。中心となる曲輪Ⅰは、頂部東側に造られた全長 30、幅 20 mのおおむね長方形を呈するもので、この東から北側にかけては逆Ｌ字状の曲輪Ⅱが付属し、その東側には曲輪Ⅵから上がってきた城道・虎口が取り付く。さらにこの北側下段尾根筋には、一辺 15 m四方の曲輪Ⅲが配置され、その北辺と南辺には城道を兼ねた土塁が斜めに造られる。これは、主郭西側曲輪Ⅳ下段の曲輪Ⅴにも同様のものが見られる。なお、曲輪配置は頂上ばかりではなく、頂上から南東側に下った斜面と南側斜面にも上方斜面を大規模な切岸によって造成された曲輪ⅥとⅦが見られる。曲輪Ⅵは、約 10 mの高さの切岸によって造られた全長 20 m、幅 10 mの曲輪で、居住域の確保と南東側の防御が図られている。さらに曲輪Ⅵの下段には５面の曲輪が階段状に造られ、南側斜面には幅５m前後の城道をかねた竪堀が 100 mにわたって掘られ、西側斜面から攻め上がる敵兵の侵入を防ぐ。一方、密に連続した上記城郭群とは異なったあり方を見せる曲輪が曲輪ⅦとⅧである。曲輪Ⅲ下方尾根筋を含め、簡易な造りといえる。

文献・伝承　『東作誌』には城主を難波九郎左衛門とする。『美作古城記』には、文明４年の鴛渕山合戦に際して山名氏に攻められ落城したことが伝えられる。『備前難波文書』には応仁４（1467）年正月、「美作国鴛淵山」での合戦で備前国の領主難波行豊の兄九郎左衛門を始めとした十余人が討ち死にし、赤松政則から感状が与えられたとある。（文献 133）　（島崎）



第 324 図　鴛淵山城跡縄張り図（１/2,000）

354　金室（かなふろ）城跡　　久米郡美咲町行信・百々　　地図 27 左右

立地　山家川の左岸にあって、川筋に沿った東西に長い標高 154 mの山塊東端に位置する。

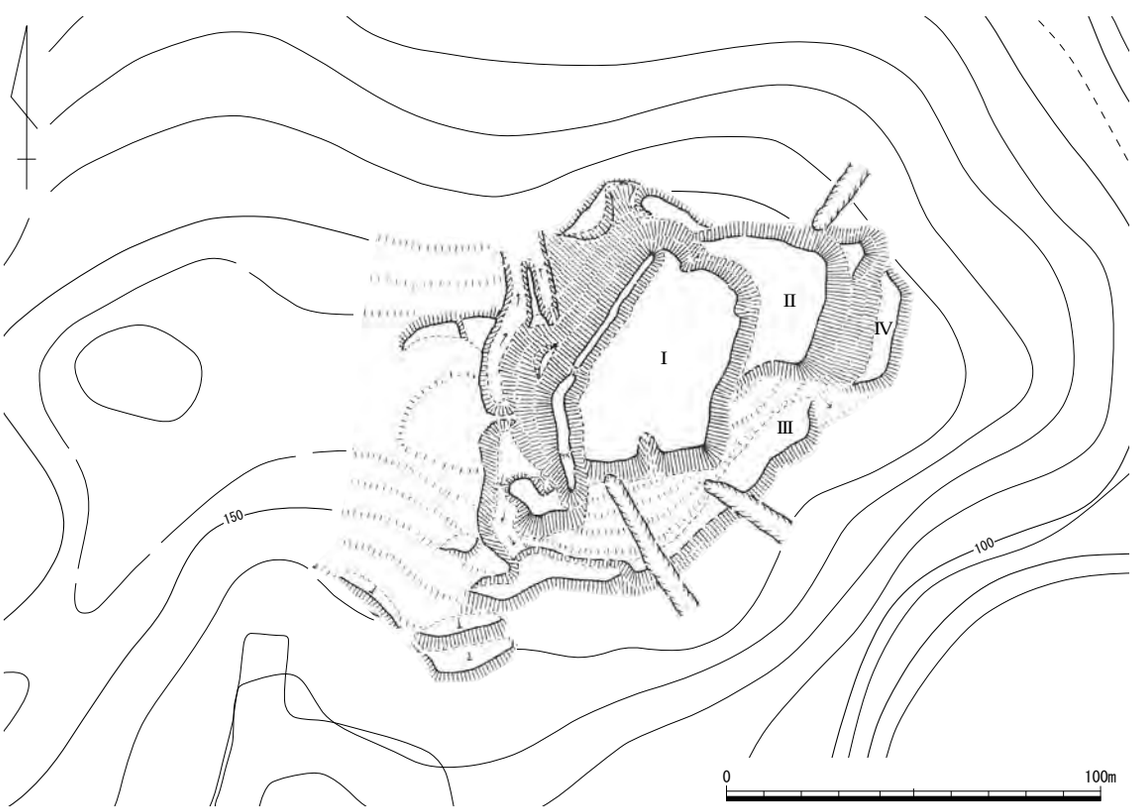
概要　城は、山塊中央部の鞍部に幅 10 m前後の堀切を南北方向に全長約 80 mの規模で掘開し、その東側に高さ約５mの高まりである曲輪を造成、これより東側下段に大小の曲輪を連続させる。

主郭である曲輪Ⅰは、全長約 50 m、幅 30 mの規模を誇り、その西から北東側端部にかけては堀切に接して「く」字状に高さ２mに達する土塁を構築し、西側からの敵兵の侵入に備える。なかでも東西側の土塁は上端幅３m、高さ３mに達する大規模なもので、上面には何らかの防御施設が存在した可能性が高い。さらにこの土塁は南側斜面にも斜傾して続き、端部では堀切に面した状況で「L」字状の張り出しを造り、堀切から進入する敵兵に対する横矢を効かせる。主郭の東側と南側下段には曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳがそれぞれに約４mの高い切岸が配置され、連続して取り付く。

曲輪Ⅱは、南北 30 m、東西 15 ～ 20 mを測る。曲輪Ⅲは、南東側が近年の土地造成によって削平を受け本来の姿を失い明瞭ではないが、端部はかろうじて現存しており、本来の縄張りの姿を窺い知ることが出来る。また、周辺斜面には竪堀が３本配置され、防御の一端を担っている。

文献・伝承　『古城之覚』では「金ふろ」として「浦山（上ヵ）左馬助行信」と伝える。『美作鬢鏡』では「行信村金風呂城」として城主を浦山左馬助行重とする。『東作誌』では「金風呂山」あるいは「金室」といい、城主を浦上左馬助行重とする。『美作古城記』には、大栄３（1523）年２月、後藤勝政・政友が城を取り囲み、同 27 日に浦上行重を始めとし難波次郎他皆討ち死にして当城没落せりとある。

（島崎）



第 325 図　金室城跡縄張り図（1 /2,000）

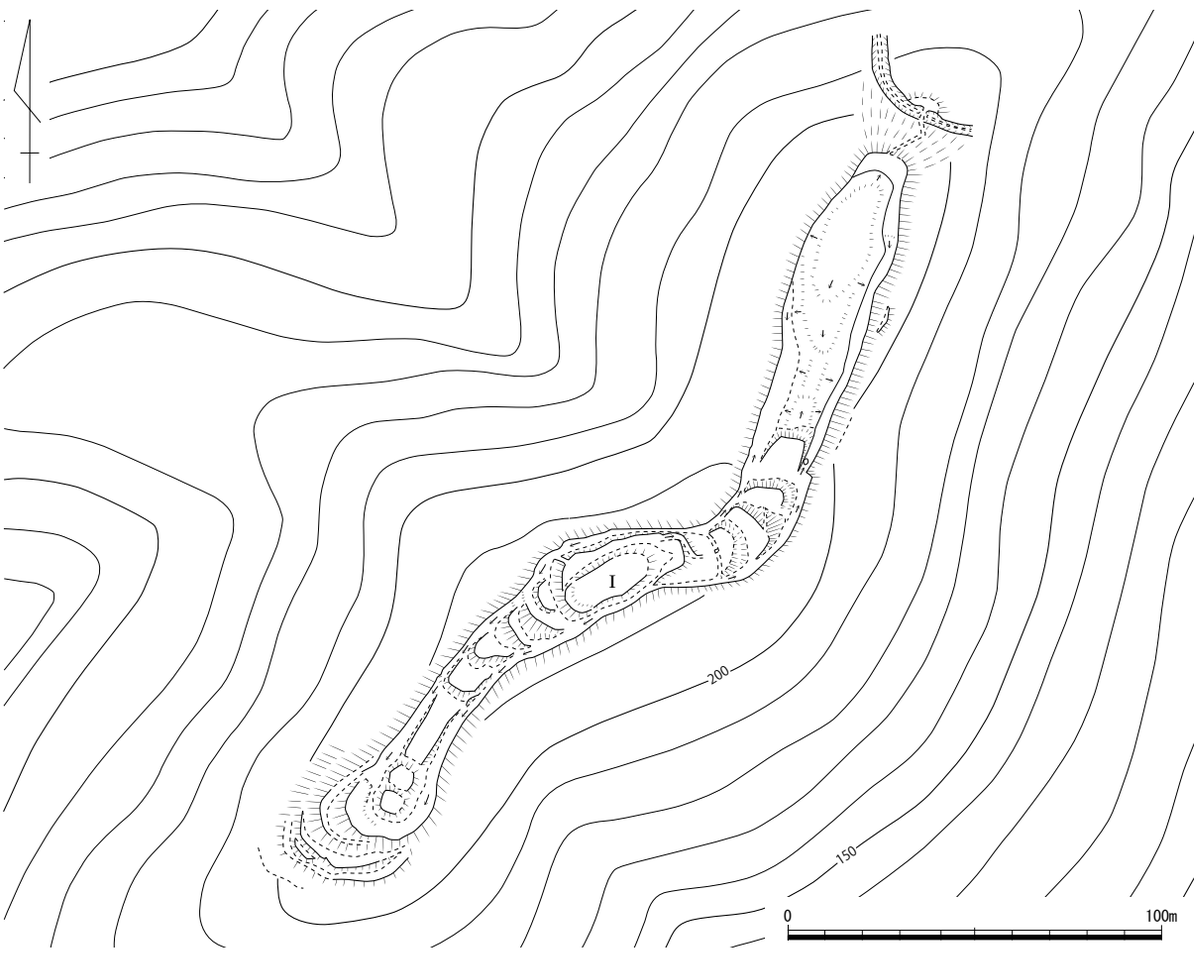
355　鷲山（わしやま）城跡　　久米郡美咲町飯岡　　地図 27 右

立地　吉井川と吉野川の合流地点から北側に所在する「鷲山」の山頂部に位置する。

概要　連郭式の山城であり、最高所に築かれた長楕円形の主郭（Ⅰ）の下方には帯曲輪が巡る。ここから南西側には、比高差約１～２ｍを測る切岸が伴う大小５面の腰曲輪と長曲輪が造られ、その端部には櫓台状を呈する比高差約 0.5 ｍを測る２段築成の土壇が認められる。その下方にも３～４面の小曲輪が見られる。

一方、主郭から北東側にも比高差約２～４ｍを測る切岸が伴う５面程度の腰曲輪と自然地形を多く残す幅広の長曲輪が造られ、その端部下方には土橋が伴う堀切が配置されている。また、これらの曲輪の両外縁部には幅約２～３ｍの通路が設けており、城域間の移動を容易としている。なお、土塁や竪堀などの防御施設は確認できなかった。

文献・伝承　『古城之覚』によれば英田郡飯岡村の「鷲山之（城）」として、城主は星香藤内、別に勝田南郡の「鷲山」として城主は江見二郎とする。『東作誌』では古城の「鷲山」として記す。（澤山）



第 326 図　鷲山城跡縄張り図（1 /2,000）

356　井内（いのうち）城跡　　美作市下山・鳥渕　　＜市指定史跡＞　　地図 27 右・28 左

立地　吉井川の支流である吉野川下流域の右岸の山頂部に立地する。吉野川沿いの美作国最南端付近で、備前との国境まで約５㎞と近い。山は西の山塊から東に延び、頂部から南北に複数の張り出しがある。標高約 250 m、比高約 190 mである。頂部からは北東から南東に広がる吉野川流域を良好に望むことができる。近隣には吉野川沿いの北 1.7㎞に勝間城跡、南 3.8㎞に鷲山城跡が位置する。

概要　東側の尾根頂部にある曲輪Ⅰを中心とし、東西に細く延びる鞍部を挟んで、西側の尾根頂部にも複数の曲輪が連なる連郭式山城である。城域は東西約 240 m、南北約 400 mと大規模である。

東側の尾根は頂部から南北に細長く尾根が延びる。頂部には 11 × 17 mの狭小な曲輪Ⅰがあり、主郭と考えられる。曲輪北端には祠があり、周辺はわずかに削平されている。その北半下方には幅広の腰曲輪Ⅱと小曲輪が配置されている。対して、主郭から南東側の尾根には曲輪が４面連続する。主郭から一段南東へ下がったところに小曲輪、南斜面から南東にかけて東側の周縁に高さ１m程度の土塁を「コ」字状に巡らせた曲輪Ⅲがある。また、曲輪Ⅲの東には曲輪が２面続くが、北辺と南辺は幅広で高さ約1.0～1.5 mの土塁が延びる。これら曲輪群の南北斜面は急勾配で、東側は急な切岸となる。

東側頂部の南斜面から延びる尾根の張り出しには、16 × 8 mの長方形を呈する曲輪Ⅳがあり、その西辺のみ上幅２m、高さ１mの土塁が配置されている。この土塁は西へ屈曲して、鞍部南斜面にある犬走りに繋がる。さらに長方形曲輪Ⅳの南下には、延長約 18 m、深さ１mの横堀があり、その南面に土塁を設ける。土塁の南西端には竪堀状の浅い掘り込みが１本のみ認められる。

東側頂部と西側頂部を繋ぐ鞍部は東西に延長 75 mに及ぶ。この鞍部の東半には東側尾根の頂部から西に向かって長さ約６～ 20 mの大小の曲輪が４面連続して配置されている。鞍部の西半は東西約 30 m、南北約 15 mのやや長い曲輪Ⅴがある。その中央には長軸約 18 m、短軸約 12 mの不整楕円形の窪みがあるが、性格は明らかではない。鞍部の南辺には幅５m前後、高さ１m程度の土塁が長さ約 65 mにわたって直線的に延び、さらにその西端は長さ 10 mの土塁が断続する。また鞍部の南辺土塁中央から連結するように南斜面には約 10 m四方の方形を呈する曲輪Ⅵが張り出しており、曲輪の東西辺は土塁兼通路となり、その南西隅は西側に延びる土塁に繋がる。曲輪Ⅵの西側にある横堀は、長さ約 35 m、深さ約１mで、南面には高さ約 1.5 mの土塁を伴う。横堀及び土塁の西端は鍵形に屈曲しており、横矢が掛かる。また、曲輪Ⅵの南は幅 15 m前後の孤状の堀切があり、それに繋がるように南斜面には５本の竪堀がまとまって配置され、強固に守る。

西側頂部は自然地形に近いが、南側は鍵形の曲輪Ⅶが配置されている。曲輪の南辺は東半に低い土塁を設け、中央には南へ一辺５mの方形曲輪が張り出す。南・西側の切岸は特に急である。南斜面には長さ 10 mの横堀の南面に土塁を配置し、さらにその南には８本の竪堀を設ける。また頂部から北へ延びる尾根には削平のあまい小曲輪が５面連続し、その東西辺は通路となっている。さらに尾根の北端は急な切岸となり、土橋を伴う堀切を１条配置して遮断する。西側頂部の西端は急に切り立った切岸をへて、２条の堀切で堅固に区切る。東側の堀切は長さ約 65 m、最大幅 20 m、深さ約 10 mと大規模で、中央に土橋を伴う。西側の堀切は長さ約 70 m、幅 10 m、深さ７m程度の規模である。両堀切の西岸は土塁となる。また両堀切の南端はそれぞれ２本ずつ竪堀を掘っており、東側の南斜面及び谷部を含めると竪堀は計 14 本となる。

東側頂部より北側の鞍部にかけては北斜面部に小曲輪が４面連続する。鞍部は平らな面が延び、西辺がわずかに高まる。北側尾根の最北端は、西半に小区画の方形曲輪が５面連なり、東辺は幅広の通路及び土塁がある。東斜面にある帯曲輪は犬走りをへて土塁に繋がる。尾根先端の北・西斜面及びには小曲輪があり、両者は犬走り及び土橋で繋がり、北斜面の急な切岸の下を浅い堀切で区切る。

このほか、南東側へ細長く延びる尾根筋は緩やかな自然地形が続くが、尾根南端には東西 10 m、南北 25 mの細長い曲輪Ⅷがあり、その南端は岩が露出して崖地形となる。吉井川に面した東側頂部の東斜面は極めて急であり、防御施設は認められない。

全体的に東西頂部及び鞍部の曲輪を中心として、東側頂部から南北に延びる尾根先端にも曲輪を配置する縄張りである。防御に関しては、西端は大規模な堀切を連続させるほか、東西頂部及び鞍部中央の南斜面には土塁を伴う横堀を３か所に配置し、さらにその中央と西側には畝状竪堀群を設けるなど、特に南・西方向を堅固する縄張りとなっている。

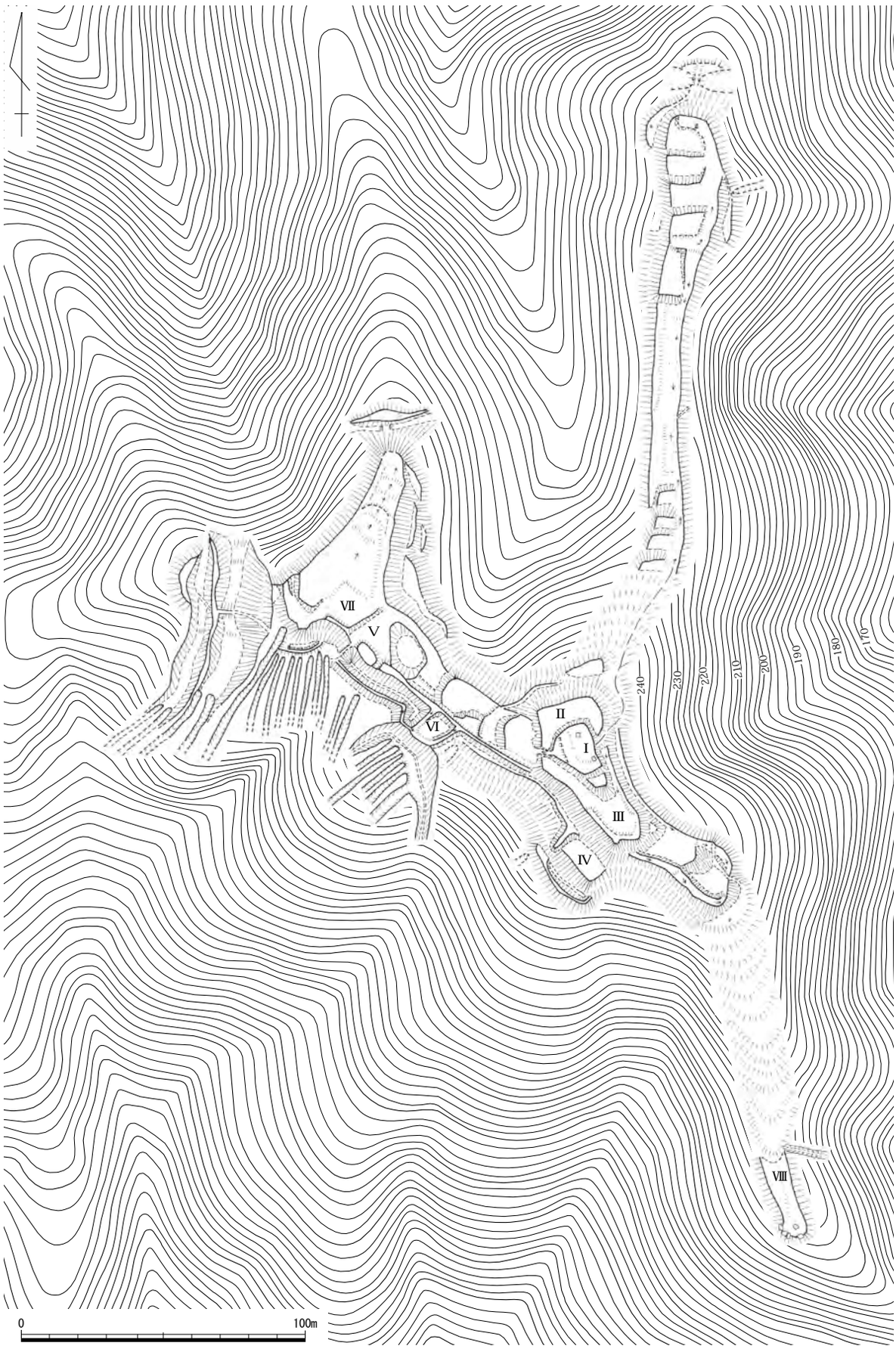
文献・伝承　『美作鏡』は下山筑後守を城主と伝える。また『岡山県勝田郡志』は、嘉吉元（1441）年に、山名持豊に従った北条氏吉が公文荘を与えられて築城したと伝えられる。『勝田郡公文村誌』によれば、天文 13（1544）年 11 月に尼子氏に激しく攻められて一旦廃城し、天正６（1578）年には陣小屋を築き、下山半内正氏らが立て籠もっていたが、天正７（1579）年４月４日に宇喜多勢に攻められ、落城したとされる。　（米田）

写真 144　曲輪Ⅰ（北西から）

写真 145　二重堀切の東側（南から）

写真 146　南側中央の弧状の堀切（東から）

写真 147　南側中央の畝状竪堀群（南西から）



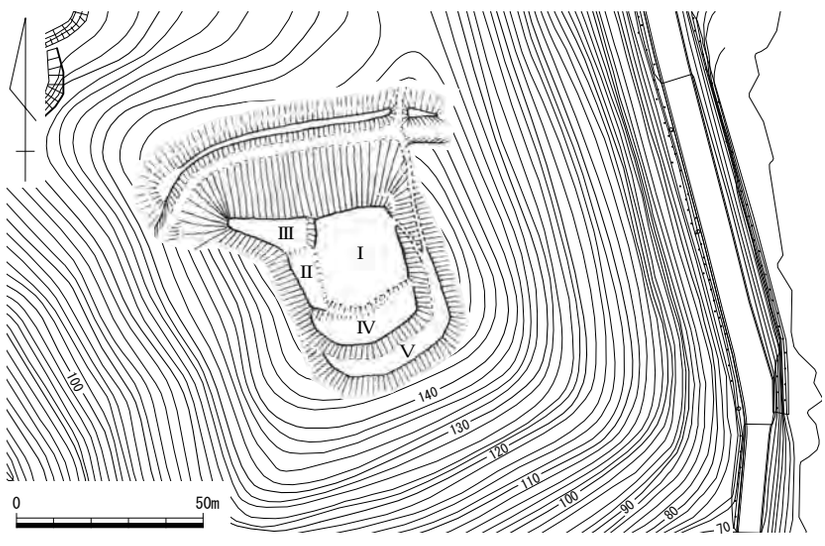
第 327 図　井内城跡縄張り図（1 /2,000）

357　勝間（かつま）城跡　　美作市位田　　地図 27 右

立地　吉野川に面した右岸、標高 154 mの山頂に立地する。比高は 80 mで、東側の吉野川沿いの眺望に優れる。周辺には南東 1.8㎞に井内城跡、北東 3.0㎞に三倉田城跡、北 4.6㎞に三星城跡が位置する。

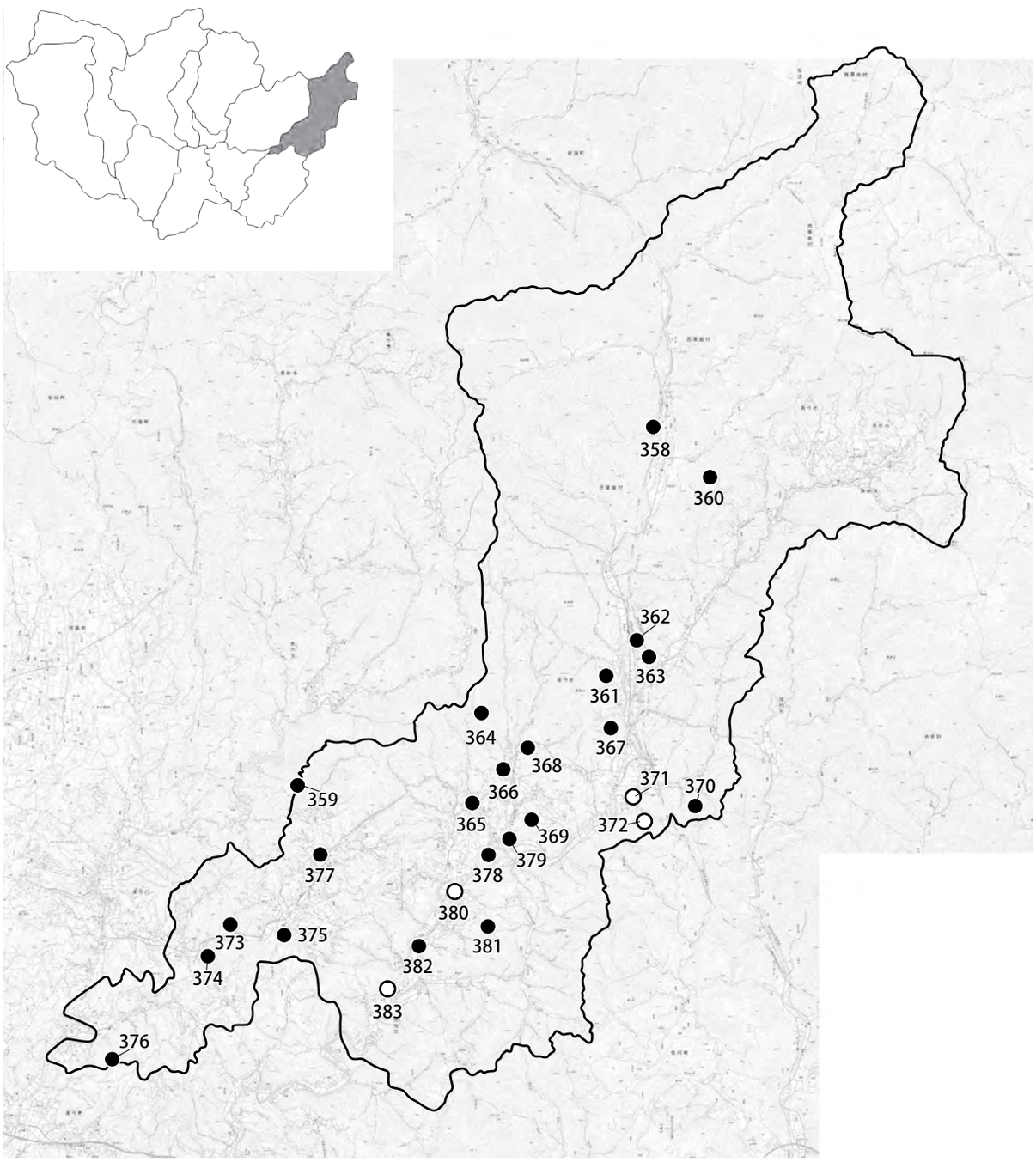
概要　城域は 80 m四方で小規模である。縄張りは頂部の曲輪Ⅰを中心とし、その西側に小曲輪Ⅱ・Ⅲ、南側に帯曲輪Ⅳ・Ⅴを構える単郭に近い構造である。頂部の北側は急勾配の切岸に加え、長大な横堀と土塁を設けて堅固に守る。

文献・伝承　『美作古簡集』には和田甚助が後藤勝基・元政に仕え、「位田村ノ内勝間山と申端城」を預かったことが記されている（「落穂ひろい」）。一方、「美作鏡」では延原弾正を城主と伝える。　（米田）



第 328 図　勝間城跡縄張り図（1/2,000）作図：畑和良

第 11 節　吉野郡



358. 佐淵城跡
359. 小房城跡
360. 黒山城跡
361. 会下城跡
362. 八幡山城跡
363. 小原山王山城跡
364. 仁寿寺城跡
365. 政岡城跡
366. 寺坂城跡
367. 竹山城跡
368. 小淵城跡
369. 比丘尼ヶ城跡
370. 比丘尼城跡
371. 伝宮本武蔵宅跡
372. 小山城跡
373. 高畑城跡
374. 高山城跡
375. 淡相城跡
376. 大将ヶ陣山城跡
377. 殿屋敷跡
378. 赤田城跡
379. 法天山城跡
380. 壬生の構跡
381. 比丘尼ヶ城跡
382. 横山城跡
383. 殿屋敷跡

第 329 図　吉野郡城館位置図

358 佐淵（さぶち）城跡　英田郡西粟倉村長尾　地図９右

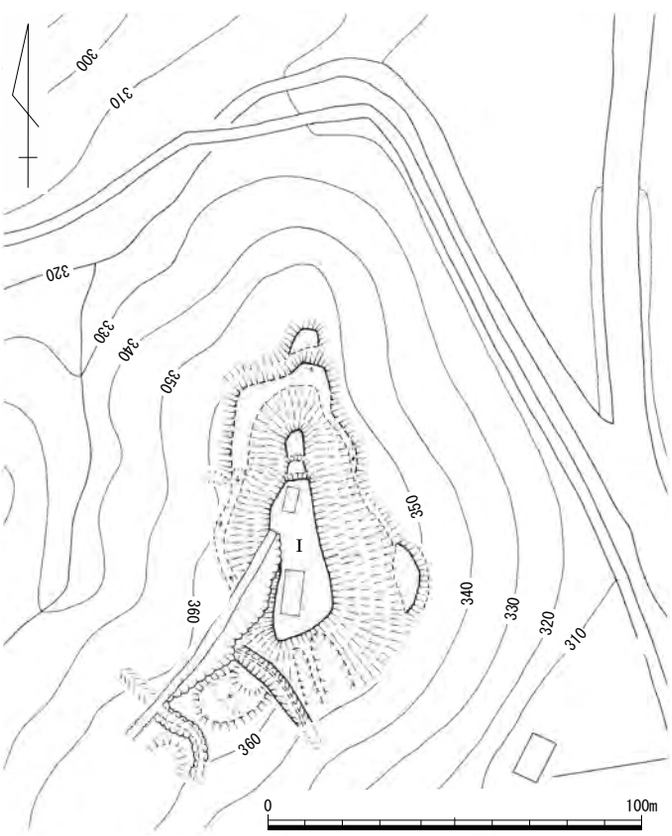
立地　吉野川上流域の右岸、西側の山塊から北東へ延びる標高約 370 ｍの丘陵尾根端に立地する。比高は約 50 ｍである。ここは美作国北東端、因幡との国境にある志度坂峠から南へ約 4.5㎞のところで、美作北東部と因幡を往来する重要な幹線交通路の要衝にあたる。城からは吉野川沿いの狭長い平野部が北東から南東にかけて眺望できる。近隣には吉野川を挟んで南東約 1.6㎞に黒山城跡が位置する。

概要　城域は東西 60 m、南北 130 ｍで、中規模でもやや小さい。頂部に曲輪Ⅰ、その北と東に小曲輪や帯曲輪を配置し、南側の鞍部を連続堀切で遮断する縄張りである。

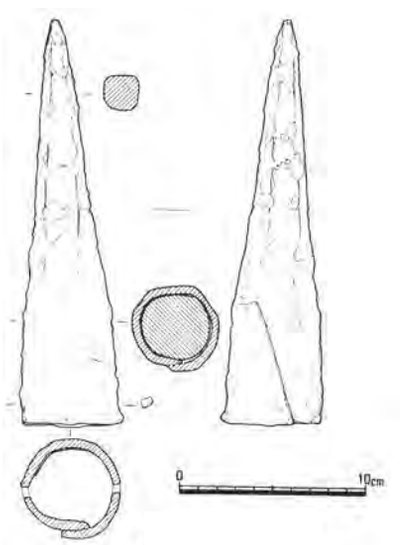
頂部に主郭となる曲輪Ⅰがあり、長さ 42 m、幅 16 m以上の不整長方形を呈し、平坦面や曲輪西端が公園の造成及び道により改変を受けている。曲輪の東・南辺の切岸は高低差が大きく、急勾配である。また、曲輪の北側には一辺５ｍ前後の小曲輪２面、帯曲輪、小曲輪が連続して配置されている。このうち、帯曲輪は南東斜面にある小曲輪と犬走りで繋がる。尾根南側の鞍部には堀切が２条あったと考えられ、北側の堀切は幅約６ｍで現存するが、南側のもう１条は林道の開削により大半が失われている。

また、頂部の曲輪Ⅰ周辺で昭和 58 年度に鉄矛（石突）、備前焼、須恵器片が採集されている（『県埋文報告 14』）。

文献・伝承　『東作誌』によると、草刈太郎左衛門重継の弟与次郎あるいは須々木主計の居城と伝える。草刈氏は天正６（1578）年に播磨へ進出した際に攻撃を受けたほか、天正７（1579）年には筏津村で繰り広げられた合戦の末、佐淵城から出陣した城主草刈与次郎が竹山城主新免備後守に討たれたことが『美作古城記』に記されている。（米田）



第 330 図　佐淵城跡縄張り図（１/2,000）



第 331 図　鉄矛（1/4）

359　小房（おぶさ）城跡　　美作市久賀・小房　　地図 15 右

立地　梶並川左岸の標高約 510 mの小房山頂に立地する。小房山は比高 260 mと地域内の最高峰に近く、頂部からは北西、南東、南西の眺望に優れる。山は北東の山塊から南西に延び、東西は谷が深く険しい。周辺には南 3.4㎞に淡相城跡、南東 3.6㎞に高畑城跡、南西 4.4㎞に高山城跡が位置する。

概要　城域は東西 230 m、南北 130 mと大規模である。縄張りは最頂部の曲輪Ⅰを中心とし、北東と南東に延びる尾根に曲輪群、北斜面に小曲輪群を配置した連郭式の構造である。

最頂部には主郭となる 50 × 30 mの「く」字形の曲輪Ⅰがある。曲輪の東半がわずかに高く、西半は一段低い。西辺には土塁の痕跡が確認できる。周りの切岸は全体的に急であるが、特に西斜面が絶壁に近い。頂部から北東に延びる尾根上には 10 m四方の腰曲輪Ⅱ、35 × 10 mの長曲輪Ⅲが配置されている。この長曲輪Ⅲの北東辺と南辺には低い土塁の痕跡が残るほか、南辺中央と南東隅には虎口があり、北東側の鞍部の土橋に犬走りが繋がる。土橋は「Ｓ」字状に緩やかに曲がり、北西と南東の谷部に向かって竪堀がそれぞれ喰い違うように設けられている。

さらに最頂部から南東に細く延びる尾根には、20 × 10 mの長曲輪Ⅳ、10 m未満の小曲輪２面が連続して配置されている。これより南はやや急峻で岩盤が露出するところも多いなか、南西端には４段前後の石積みを伴う小曲輪Ⅴがあり、南方が望遠できる。

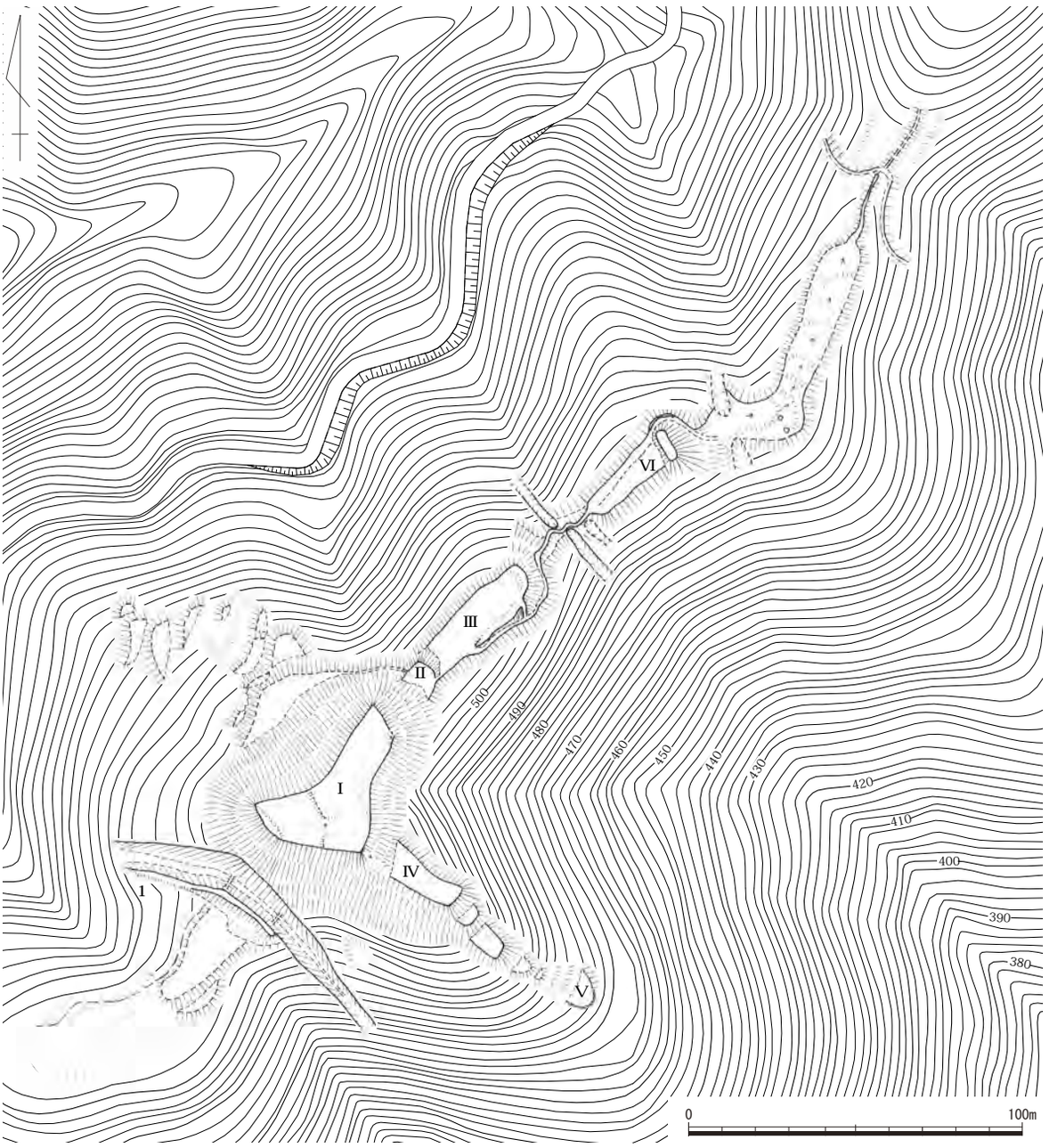
最頂部の北斜面はやや緩やかで、小規模の平坦面が段々に連なっている。これらの平坦面は不規則な配置で周辺は植林も著しいため、城館関連遺構かどうかの判断が難しいが、周辺には土師器片がわずかに散布している。

一方、最頂部から北東側の鞍部の土橋を隔てた標高 498 mの頂部には、25 × 7 mの細長い曲輪Ⅵが配置され、その北東端には上幅３m、高さ６mの土塁が築かれている。また、土塁の北東裾を通るように虎口があり、凝った造りとなる。土塁や虎口よりも東側は尾根上に削平のあまい小曲輪が７面連続する。さらにその北東端は尾根筋を土橋状に造作するとともに斜面を急崖にして侵入を制限している。

主郭の西側の切岸は絶壁に近い急勾配で、その下方にはやや湾曲した長大な堀切１がある。堀切の規模は長さ約 100 m、上幅約 10 m、深さ約６mと格別に大きい。また堀切の底面２か所には土橋状の痕跡が確認できるが、後世の改変であることも否めない。さらに堀切の西肩には最大で高さ約３mの土塁が長く延びる。堀切より西側の尾根は、削平のあまい曲輪及び帯曲輪が認められるほかは、なだらかな自然地形が続く。

全体的に最頂部の曲輪Ⅰを中心とし、北東の尾根に細長い曲輪、南側に小曲輪群を連ね、西側を大規模な堀切で強固に守る縄張りと言える。最頂部と北東側の頂部に造られた曲輪は鞍部の土橋を挟んで規模や造作の度合いに違いがあることから、幾度かにわたって改修された可能性がある。

文献・伝承　『美作古城史』によると、はじめに有元宗兵衛佐顕が在城したが、佐顕が大別当城に移ったため、後に新免七条少将則重が入城したとある。さらに文明 12（1480）年、赤松方についた新免弾正助長重が居た時に、山名方の粟井景盛らが攻略し、その後に皆木與一、福田孫八が在城した。また、大野新左衛門、同与次郎、宇野河内が居城していた天正３年（1575）年に矢筈山城主草刈景継が攻めて落城させた後に有元惣兵衛が在城した。その後は新免伊賀守による攻略があった。　（米田）



第 332 図　小房城跡縄張り図（1/2,000）

写真 148　堀切 1（南東から）

写真 149　曲輪Ⅴの石積み（南西から）

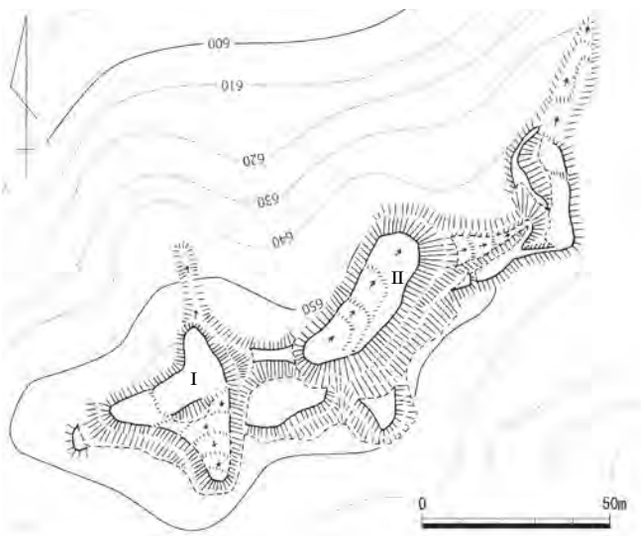
360　黒山（くろやま）城跡　　美作市東吉田・英田郡西粟倉村長尾　　地図 16 右

立地　西粟倉村と美作市の境界にある標高 660 mの山頂部に位置する。

概要　南西に延びる尾根に配置した２か所の曲輪群で構成され、各曲輪の切岸は急峻に仕上げている。３方向に延びる尾根頂部に築かれた主郭（曲輪Ⅰ）の南側には数面の加工段が認められる。また、この西側には小曲輪が築かれ、北側には見張り台に適した細長く延びた露岩が認められる。この北東側には副郭（曲輪Ⅱ）にあたる細長い曲輪が築かれ、北側に下がる加工段が見られる。

一方、この主郭と副郭の間には土橋が築かれ、その南側にはやや広い曲輪と狭い曲輪が段状に認められる。なお、副郭北側にも人為的な加工痕跡が認められるが、築城当時の造作か判然としない。

文献・伝承　『東作誌』では春名新次郎が居城したとされる。　（澤山）



第 333 図　黒山城跡縄張り図（１/2,000）

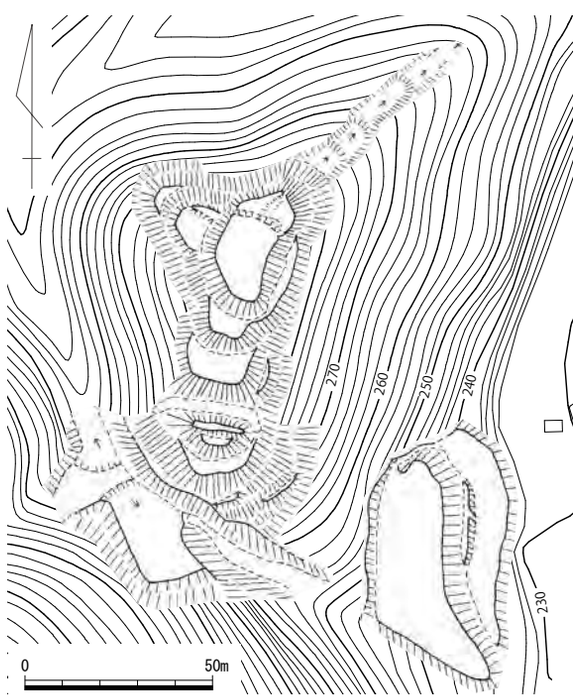
361　会下（えげ）城跡　　美作市古町　　地図 16 右

立地　吉野川右岸にある山塊から南北方向に延びる山頂部に位置する。

概要　主郭北側は高さ約１mの切岸をもつ小曲輪、東側は高さ約１mの切岸をもつ帯曲輪を配置する。西側は高さ約４mの切岸をもつ腰曲輪が認められ、北辺に高さ約 0.5 mの通路状を呈する土塁が伴う。また、その西側斜面部にも狭い平坦面が見られる。

南側は高さ約２～ 2.5 mの切岸をもつ腰曲輪が２面連なって築かれており、その下段の腰曲輪の南側には深さ約１mの堀切が設けられ、南端にも小曲輪が見られる。さらにその南側斜面部にも狭い平坦面が２面見られる。

文献・伝承　『東作誌』では佐用美濃守貞久が居城したとされる。　（澤山）



第 334 図　会下城跡縄張り図（１/2,000）

362　八幡山城跡（やはたやま）　美作市古町　地図 16 右

立地　吉野川東岸にある南西方向に延びる尾根の丘陵頂部に立地する。

概要　東西約 25m、南北約 40m を測る主郭の南側には、幅約 8m、深さ約 3m、北側にも幅約 6m、深さ約 2m の堀切 1・2 がそれぞれ設けられている。

主郭南東隅には土橋状通路が伴い、その下方にはやや広めの腰曲輪が配置され、さらにその下方には堀切 1・2 と連結した深さ約 3m の横堀 3 が設けられている。主郭の西側下方には狭い腰曲輪が設けられ、一部で高さ約 0.5m の土塁が見られる。その下方にも犬走り・腰曲輪などが数か所見られる。比較的緩い傾斜をもつ南斜面には、所々段状に加工された平坦面が認められる。その下方にあたる八幡神社上方にも段状を呈する地形改変が認められるが、この城との関係性は判然としない。

写真 150　堀切 2（東から）

なお、主郭北側の堀切の北東側には、長さ約 80m、幅約 40m を測る平坦面が広がるが、その東西側斜面には切岸は認められず、土塁や堀切の遺構も見られないことから、この場所は緩衝地の役割を担っていたと思われる。

文献・伝承　『英田郡史考』によれば由来不詳とされ、小寺民部大夫が居城したとの口碑があると記す。　（澤山）

第 335 図　八幡山城跡縄張り図（1 /2,000）

363　小原山王山城跡（おばらさんのうざん）　美作市古町　＜市指定史跡＞　地図 16 右

立地　美作北東部、播磨と因幡を結ぶ街道に面し、吉野川と後川が合流するところの左岸にある標高約 350 mの山頂に立地する。比高は約 90 mである。山は北東の山塊から南西になだらかに延び、南北に複数の張り出しがある。頂部からは西に広がる吉野川流域、南に広がる後川流域を良好に望むことができる。周辺には多くの城跡が近接しており、北西 500 mに八幡城跡、西 1.1㎞に会下城跡、南東 1.9㎞に竹山城跡が位置する。また、南西麓には大原神社が鎮座する。このほか、近世には南西 800 mに大原本陣や脇本陣が置かれ、当地が因幡往来の交通の要衝であったことがうかがえる。

概要　城域は東西約 300 m、南北約 320 mと大規模である。縄張りは北東側尾根にある最頂部の曲輪Ⅰを中心とし、その北東、南東、南西にも曲輪群を配置した連郭式の構造である。

北東側の尾根は、最頂部に長さ 50 m、幅 12 mの細長い曲輪Ⅰがあり、主郭と考えられる。この曲輪の北東端には近現代の対空監視哨跡が築かれており、同地点からの監視及び眺望の良さが窺える。曲輪Ⅰの北西と南東の切岸は比較的急勾配である。また、最頂部から北東側の尾根には腰曲輪と周縁に土塁を伴う長曲輪Ⅱ、北西側斜面部には帯曲輪、最頂部から南に延びる張り出しには小規模な腰曲輪 5 面を配置する。特に北東端の曲輪Ⅱは長さ 50 m、幅 15 mの長方形を呈し、主郭と同規模で広く、北辺及び南辺東半に幅 1 m、高さ 30㎝程度の土塁を設けている。

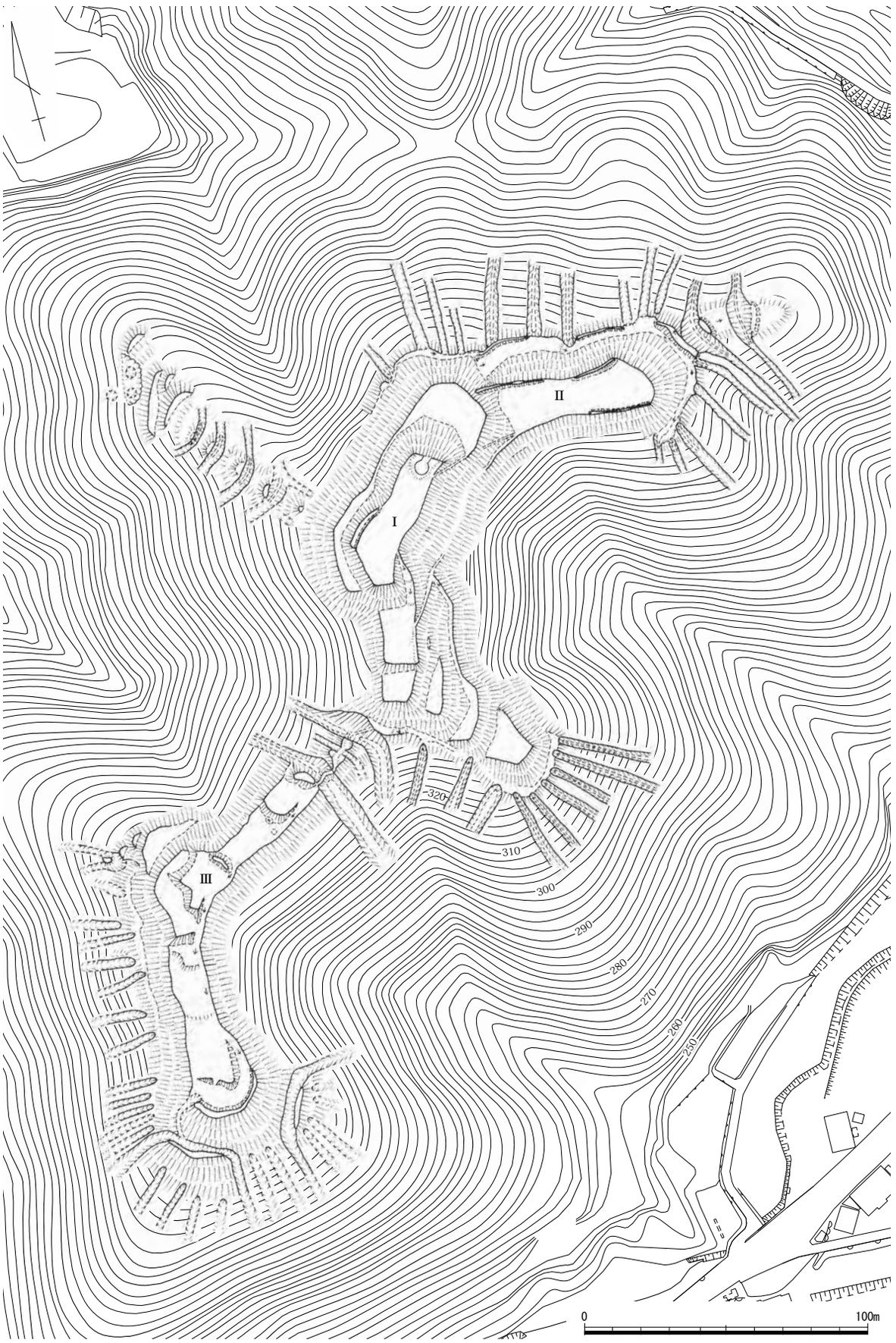
これらの周辺の防御施設としては、北東側尾根の東斜面から北斜面にかけて土塁を伴う帯曲輪をめぐらせたうえ、北東端の堀切 2 条を挟んで北斜面に 10 本の竪堀、南東斜面に 5 本の竪堀を巧みに配置して堅固に守る。また、最頂部から南に延びる張り出しの南斜面に 9 本の竪堀からなる畝状竪堀群、最頂部から北西に延びる張り出しの上方に 2 本の竪堀、下方に 4 条の堀切を配して守りを固めている。

最頂部から南西側に延びる尾根中央の鞍部には 3 条の堀切によって尾根筋が遮断され、強固に防御している。このうち、西端の堀切は幅 8 m、延長 70 m近くあって規模が大きく、西肩には高さ約 1.5 mの高い土塁を伴って厳重であるのに対して、中央の堀切は規模が小さい。

南西に延びる尾根の頂部には中央に一辺 15 mの鍵形の曲輪Ⅲがあり、北西隅に横矢を効かす。その北東側は高さ 1 m程度の土塁を隔てて、3 条の堀切との間に曲輪を 2 面連ねる。頂部から南側の尾根端は長さ 8 ～ 20 m程度の曲輪を 3 面連続させ、東辺に通路を設ける。南東端には幅広で高さ 1 mの土塁を伴う帯曲輪を配置する。尾根南東端と南西端の斜面には規模の大きな孤状の堀切を 1 条ずつ配し、さらに南斜面から西斜面に 24 本の竪堀を巧みに配置して防御を厳重にしている。

全体的に最頂部とその周辺の曲輪がやや小さい規模であるのに対し、尾根の北東側、南西側、南北の張り出しに配置された堀切や竪堀の数が多く、城の周囲全体を強固に守っている縄張りである。また、最頂部から南西側に延びる尾根中央の鞍部にある 3 条の堀切を境にして、北東側の最頂部周辺の曲輪Ⅰ・Ⅱを中心とした曲輪群と南西側の尾根頂部周辺の曲輪Ⅲを中心とした曲輪群は、規模や造作の度合い、土塁の配置などの様相が異なることから、南西側の曲輪群が当初築かれた後、3 条の堀切を隔てた尾根の最頂部に北東側の曲輪群を拡張した可能性が考えられる。

文献・伝承　『東作誌』には小原孫次郎入道信明が居城したとある。康安元（1361）年に山名時氏の攻撃により落城するが、康正 2（1361）年に宇野中務大家貞が再興する。そして、新免伊賀守貞重が居城するが、明応 2（1501）年に竹山城跡へ拠点を移したことにより廃城した。　（米田）



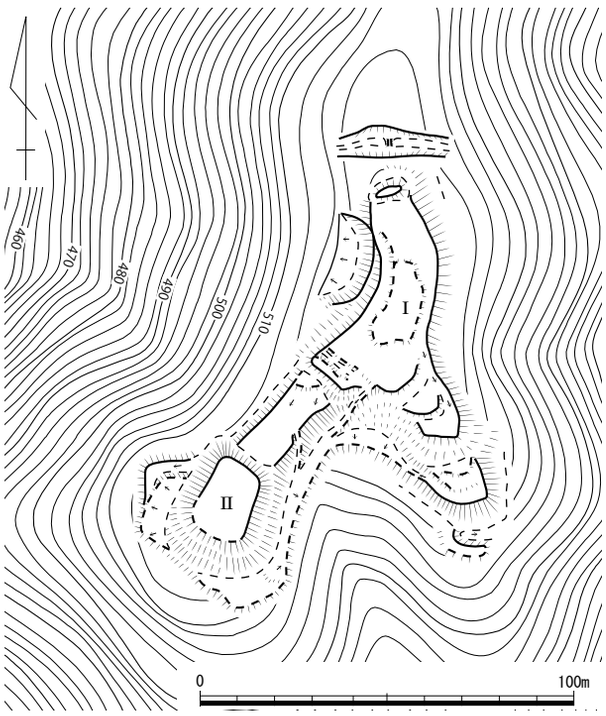
第 336 図　小原山王山城跡縄張り図（1/2,000）

364　仁寿寺城跡（にじゅうじ）　美作市川上・滝　地図 16 左

立地　川上川右岸、霊山寺から北西約 3.0㎞にある標高 523 ｍの山頂部に立地する。近隣には南東方向に小淵城跡、寺坂城跡が位置する。

概要　頂部の逆「く」字形の曲輪を中心とし、南西側と南東側の尾根に大小の曲輪を各３面ずつ構える。城域は東西 60 ｍ、南北 140 ｍで、中規模でも小さい。中心となる曲輪Ⅰは中央に楕円形の土壇状の高まりがわずかに確認でき、北端に低い土塁が設ける。南西側尾根の南端頂部には西に腰曲輪を付す方形の曲輪Ⅱを置き、曲輪Ⅰとの間に長方形の曲輪を連ねる。南東側の尾根は小曲輪を３面配置する。さらに南東側と南西側の尾根端は帯曲輪で繋がる。頂部北端は堀切により尾根筋を遮断して守る。

文献・伝承　『英田郡史考』に示された略図は、頂部から南西側尾根の様相に近い。　（米田）



第 337 図　仁寿寺城跡縄張り図（１/2,000）

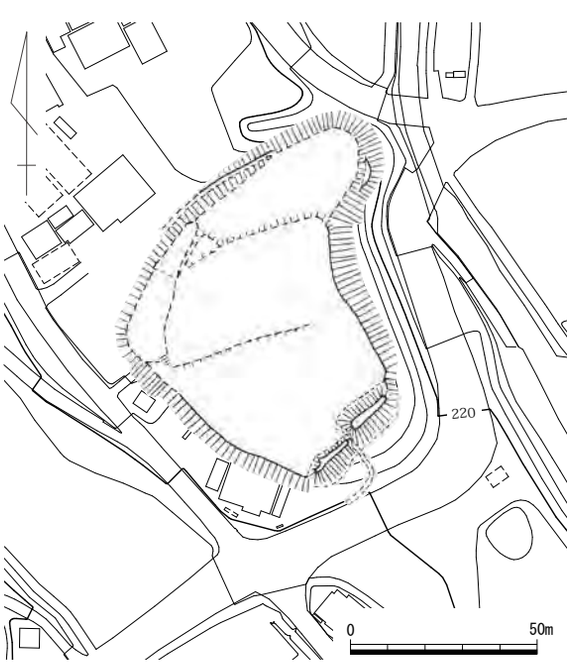
365　政岡（まさおか）城跡　美作市滝　地図 16 左

立地　北西から南東に緩く延びる低い丘陵頂部に位置する。

概要　主郭はほぼ長方形を呈し、外周の切岸は高く急峻に築かれている。主郭の南辺には高さ約 1.5m を測る喰い違い土塁が設けられ、その箇所が虎口となっている。

また、墓地が存在している土塁北側の上幅は約 3m を測る一方で、土塁南側の上幅は約 0.5m と幅狭で、差異が認められる。なお、『英田郡誌考』の城略図を見ると、主郭の北西隅から北東隅にかけて「防禦堤」として土塁が図化されているが、後世の地形改変のためか、今回の調査では確認することができなかった。

文献・伝承　『英田郡誌考』によれば新免遠江守が居城したとされる。　（澤山）



第 338 図　政岡城跡縄張り図（１/2,000）

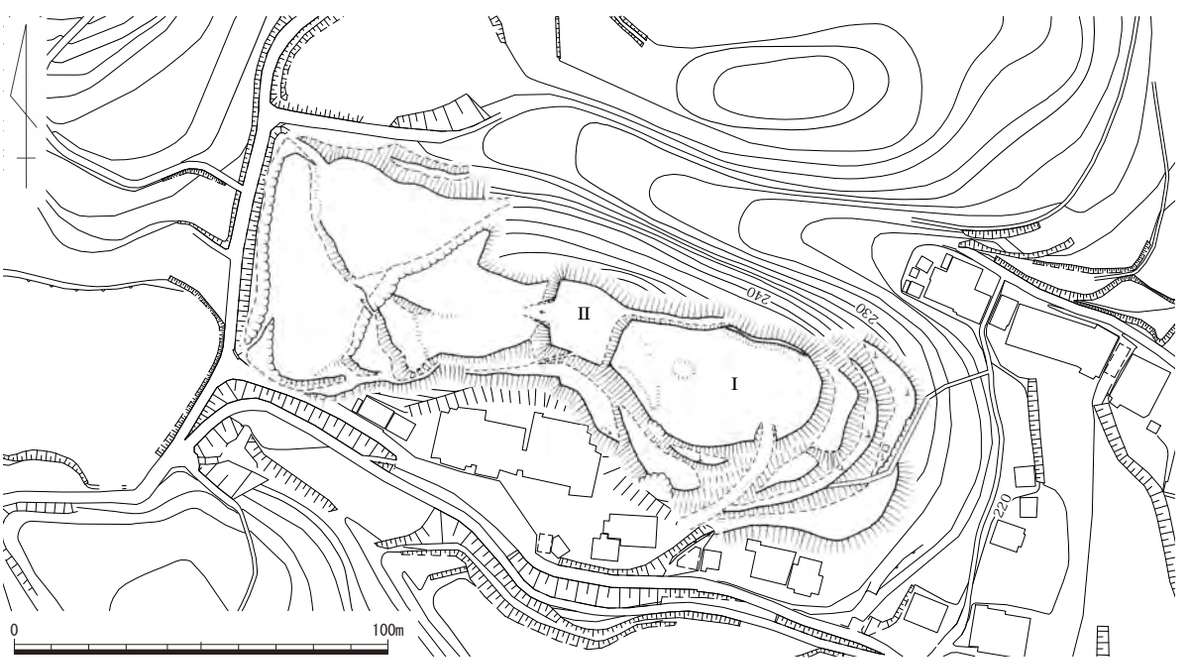
366　寺坂（てらさか）城跡　　美作市川上　　地図 16 左

立地　川上川右岸、西側の山塊から東へ張り出した標高 252 mの丘陵端に立地する。比高は 30 mと低く、城跡の南裾に霊山寺がある。ここは美作市粟井、赤田と中町を結ぶ交通の結節点にあたる。周辺には城跡が多く、北東 800 mに小淵城跡、南西 1.0㎞に政岡城跡、北西 1.4㎞に仁寿寺城跡、南 1.6㎞に法天山城跡、南 2.0㎞に赤田城跡が位置する。

概要　城域は東西 150 m、南北 60 mで、中規模である。頂部には東西 55 m、南北 35 mの曲輪Ⅰがあり、主郭と考えられる。北、東、南の周縁は切岸が急である。北辺中央には高さ約 20㎝の低い土塁が確認できる。曲輪Ⅰは全体的に平坦であるが、東側は微かな起伏がある。曲輪Ⅰ中央には径約５m、高さ 50㎝の土盛りが確認でき、古墳か古墓の可能性がある。頂部より西側には尾根上に一辺約 20 mの方形を呈する腰曲輪Ⅱがあり、西辺中央に直線的な虎口、北東隅は犬走り状になって南西斜面の帯曲輪に繋がる。さらに尾根の西側は一辺約 30 mの不整形な平坦面と南西隅に小規模な平坦面が２面あるが、地形改変が著しいために曲輪かどうかの判断が難しい。西側の鞍部は畑地により削平されており、現状では堀切は確認できない。また、南斜面は３面、東斜面は５面の帯曲輪が配置されているが、東斜面の下方は墓地などによる改変もあろう。

全体的に北・南斜面は急勾配の切岸、東西斜面は腰曲輪又は帯曲輪を連続させることで守りを固めた縄張りである。

文献・伝承　『新免家侍帳』には「劔持土佐守　寺坂城主　川上」とある。また、『東作誌』によると、康安年中（1361 ～ 1362 年）に城に籠もった大野一族を山名時氏が攻めて破った後、大永年中（1521 ～ 1528 年）に新免備中守貞弘が再興して居城したとされる。山下の「竹の鼻」の地には、士屋敷跡があると伝えられる（文献 133）。　（米田）



第 339 図　寺坂城跡縄張り図（1 /2,000）

367 竹山（たけやま）城跡　美作市下町・笹岡　＜市指定史跡＞　地図 16 右

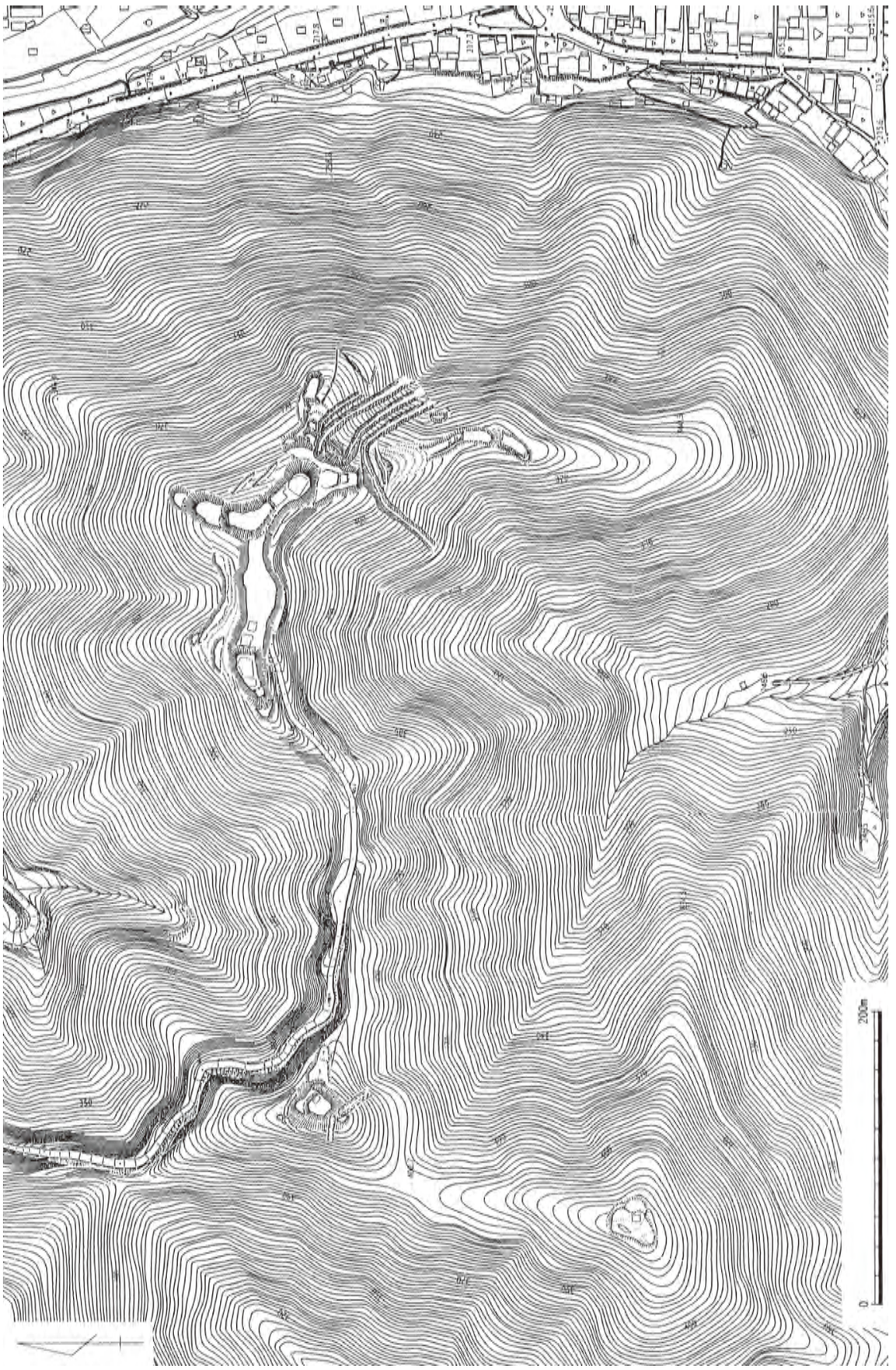
立地　美作市下町地区は、標高 400 m以上の山続きの中国山地にあって吉野川上流域に開けた谷底平野である。ここからは鳥取自動車道の発掘調査によって古代の因幡道が発見され、また中世においては山陰の山名氏や尼子氏の美作侵攻ルートであったことが知られるなど交通の要衝であった。さらに、近世においても因幡国鳥取藩主の参勤交代の要道として因幡往来が存在し、この地には本陣が置かれていた。竹山城は、この平野部のみならず広く東作地域を一望出来る標高 430 m、集落との比高差 200 mの山頂に位置する。

概要　城は、標高 575 mの星祭山から南東に派生した尾根筋先端の標高 430 mの頂部を中心に、西側の「西の丸」と伝えられる曲輪Ⅲから東の「太鼓丸」と伝えられる曲輪Ⅵ、さらにその東下方に派生した場所に造られた曲輪Ⅷまでを含めてほぼ東西 250 mにわたって、比較的高低差の少ない状況で大小 20 の曲輪を連結して長大な城郭が構成されている。この規模から竹山城は、『東作誌』では「吉野郡第一の大城」とされている。

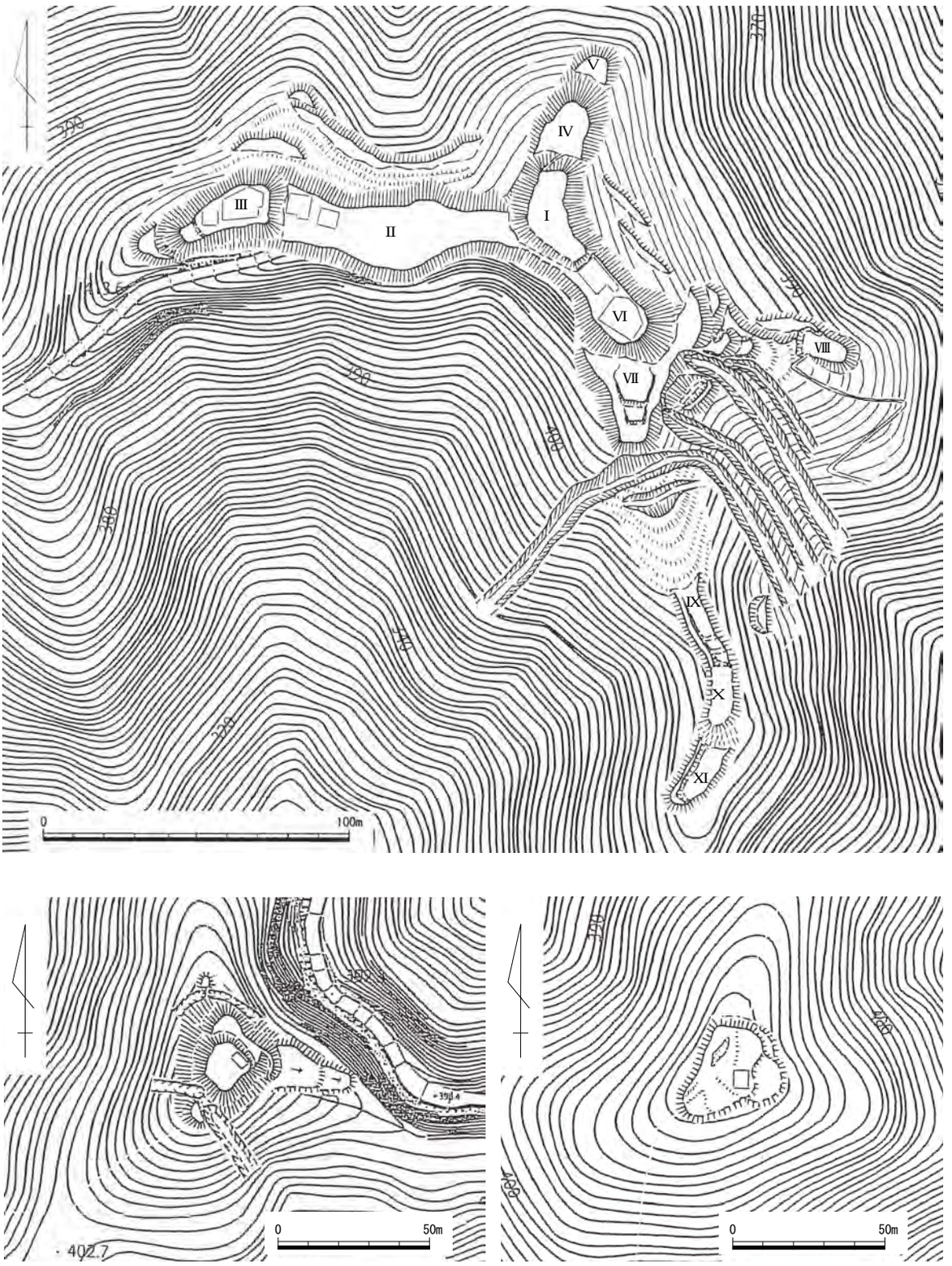
城は、中央の曲輪Ⅱ「馬場」が長さ 70 m、幅 10 ～ 20 mと広大で、その西側と東側が小高く、ここに曲輪が配置されている。なかでも中心となる主郭は、東側先端部分にあって「本丸」と伝承される最も高い位置に地形された全長 30 m、幅 10 mを測る曲輪Ⅰで、これには南東側下段の曲輪Ⅵ「太鼓丸」と北側には曲輪ⅣとⅤが階段状に密接した状態で連結する。また、この場所は街道側に面することから防御面での完成度が高く、曲輪Ⅵの眼下にはこれを帯状に取り巻く状況で南北 50 m、最大幅 30 mの規模の大きな曲輪Ⅶが造られ、その南東側直下には２条の堀切とこれから長く両斜面に派生した竪堀が、また東に派生した緩やかな斜面には比較的小規模な曲輪が階段状に配置され、斜面を登ってくる敵兵に対して横矢掛りが図られている。さらに堀切に続く竪堀との間斜面には３本の大規模な畝状竪堀群が造られるなど二重三重に防御が固められている。また、２条の堀切の南に下った幅５m前後と狭い尾根筋にも、長さ約 20 mの長い曲輪Ⅸが西側に土塁を伴って、さらに二段の曲輪ⅩとⅪが全長 80 mにわたって造られ、尾根筋の防御を担っている。一方、西端の「西の丸」と伝えられる曲輪Ⅲは、曲輪Ⅱから約３mの切岸上に造られた全長 27 m、幅５～７mの曲輪で、西下には小規模な曲輪が付属する。ただし、ここには西辺を画する堀切は存在しない。

なお、曲輪Ⅲから尾根づたいに西に約 250 m徐々にのぼった標高 430 mの高所と、そこからさらに南に 200 m離れた地点に鞍部を隔てて位置する標高 426 mの高所の二地点には曲輪や堀切等で防御が固められた施設の存在が認められる。前者は、「坊主ヶ丸」と呼称され、小規模ながら南と北側には浅い堀切りが掘られ、直径 20 mの頂部には２面の明瞭な曲輪が存在する。一方、後者は前者ほどの明確な造成面は存在しないが２面の曲輪が造成されている。さらに、両者間をつなぐ尾根筋には明瞭な平坦面は見せないが、部分的に北側に土塁を窺わせる高まりが認められる。

文献・伝承　『太平記』康安元（1361）年の山名時氏・義師父子による美作国侵攻の際の鞍掛城攻めに対して守護の赤松則祐によって構えられた「竹山」に比定される。『古城之覚』には正保書上五十四ヶ城の一つ「竹山之」として「城主新免伊賀守長重」とする。『東作誌』によると城主は、新免伊賀守貞重・同左衛門尉宗貞・同伊賀守宗貫の三代で、明応２（1493）年、新免貞重が小原（山王山城）から移り、慶長五（1600）年まで在城とされる。　（島崎）



第 340 図　竹山城跡縄張り全体図（1 /4,000）



第 341 図　竹山城跡縄張り部分図（下図左「坊主ヶ丸」）（1 /2,000）

368　小淵（おぶち）城跡　　美作市川上　　地図 16 左

立地　川上川と小松川が合流する左岸の山端部に立地する。山は標高約 300 m、比高 80 mで、南東の山塊から尾根があらゆる方向に複雑に派生し、城跡は北西に張り出した尾根に築かれている。

概要　城域は東西 380 m、南北 220 mである。中心曲輪は明確ではなく、城に関わる遺構は北東方向に二股に延びた標高約 250 mの尾根を中心に広がる。北側の尾根は東西 30 m、南北 20 mの不整梯形の曲輪Ⅰがあり、その北側にも台形の曲輪が配置されている。西側の斜面は削平があまい小曲輪が３面連続する。

一方、北西側の尾根は東半に幅 10 m前後の細長い曲輪が４面程度直列し、一部は北斜面に帯曲輪

第 342 図　小淵城跡縄張り図（1 /2,000）

状に延びる。さらに尾根先端に向かう西半は長さ 10 m未満の小曲輪 14 面が連続する。これらの曲輪は造作があまく、切岸の勾配は緩い。頂部から北西及び東に延びる尾根斜面は大半が自然地形で、わずかに平らな面が認められるが、曲輪かどうかの判断が難しい。山の頂部東側の鞍部にある南北の谷部付近は急傾斜となっており、防御のために切岸状に造作された可能性が考えられる。

全体的に堀切や土塁は認められず、防御施設は乏しい。北西に張り出した二股の尾根先端に曲輪を集中的に配置した縄張りと言える。

文献・伝承　『東作誌』によると、小淵城は大野一族の拠点で、後年に地士元木三郎左エ門が居住したとされる。また、『英田郡史考』には小淵城跡は美作市野形にあり、30 間× 10 間で土塁を伴う曲輪の略図が描かれているが、本城の縄張りの一部なのか、別の城館なのかは特定が難しい。　（米田）

写真 151　曲輪Ⅰ（南から）

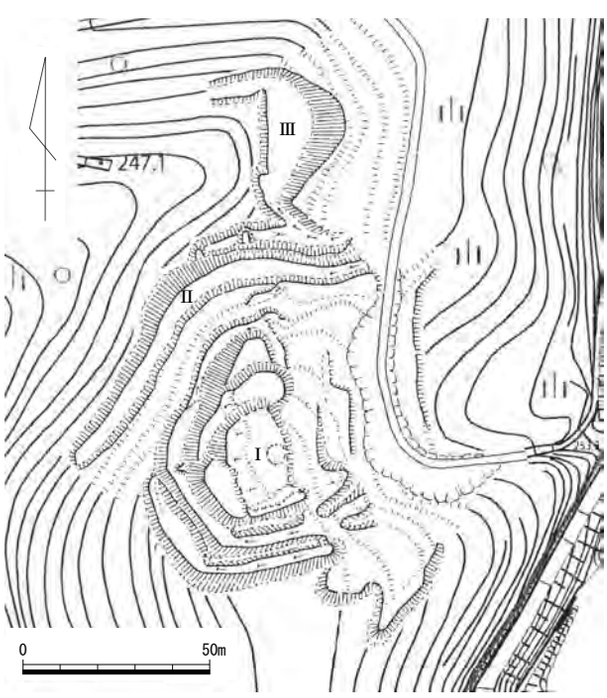
写真 152　南東側鞍部の谷部（北東から）

369　比丘尼（びくに）ヶ城跡　　美作市川上・野形　　地図 16 左

立地　川上川左岸の大野神社背後の標高 304 mの山塊から派生した尾根筋に所在する。

概要　城は、尾根筋を２条の堀切と竪堀で切り、その排土を南側に盛って土塁を構築する。土塁から北側の頂部には南北 25 m、東西 15 mの主郭Ⅰが自然地形を残して造成されている。注目されるのは主郭を取り巻く長大な帯曲輪Ⅱで、最長 100 mを測る。斜面を高さ２～３mの高さの切岸によって、幅５m前後の平坦面を造ったもので、曲輪群との間には自然地形が残る。なお、北側には長さ 35 mの平坦面Ⅲが造成されている。

文献・伝承　『東作誌』には「駿論坊」として大野一族の駿論坊が住んだ跡とする。『英田郡史考』では「康安元年山名時氏に攻落さる」とされる。　（島崎）



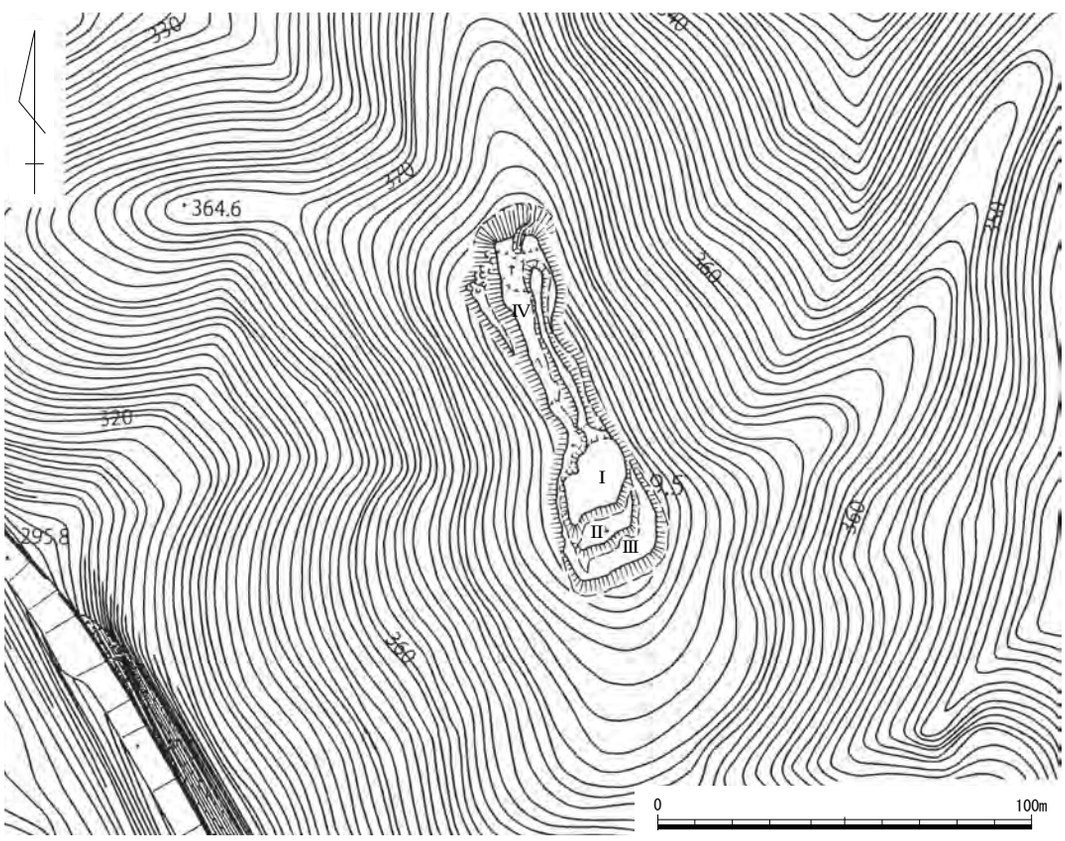
第 343 図　比丘尼ヶ城跡縄張り図（1 /2,000）

370　比丘尼城跡（びくに）　美作市宮本　地図 16 右

立地　吉野川の支流、宮本川沿いに位置する中西町集落の南側にあって、兵庫県佐用町へと通じる県道下庄佐用線を南眼下に眺望可能な標高 400 mの山頂部に所在する。

概要　緩やかな尾根筋であるが、ここには堀切は存在しない。頂上部に造られた曲輪Ⅰを中心に北西側の長いながらもやや狭い尾根筋と頂上から南に若干下った斜面にかけて曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳが存在する。各曲輪面の造成は主郭以外については比較的自然地形を残したもので、本格的な造成は見られない。主郭Ⅰは、およそ長さが 18 m、幅 15 mの規模で、北西側に虎口の存在が推測される。また、主郭の南側約 1.5 m下段には 2 面の曲輪がそれぞれ取り付くが、その曲輪境は緩やかで明確な切岸を意識した状況ではない。一方、主郭北西側の全長 60 m、幅 7 ～ 15 mを測る細長い尾根筋には、北西端部に約 10 × 10 mの平坦面を確保しながら、これより主郭までの間に全長 50 m、幅 5 m前後の曲輪Ⅳが尾根筋の中央より西側に長い切岸によって造成されている。残った尾根筋は高さ 1 mの土塁として活かされ、北側からの防御を固める。また、曲輪Ⅳの北西側斜面部には幅 3 m、長さ 20 mの狭小な帯曲輪が見られる。この城に至る城道は、北西側尾根筋が想定され、曲輪Ⅳの北端部に虎口が存在する。築城時期は、尾根筋に堀切りがなく、各曲輪面には比較的自然面をよく残すといった状況から、城は戦国期以前のものと考えられる。

文献・伝承　『東作誌』には宮本村の「蜂谷」に「古城跡」があり「城主知らず」とされる。（島崎）



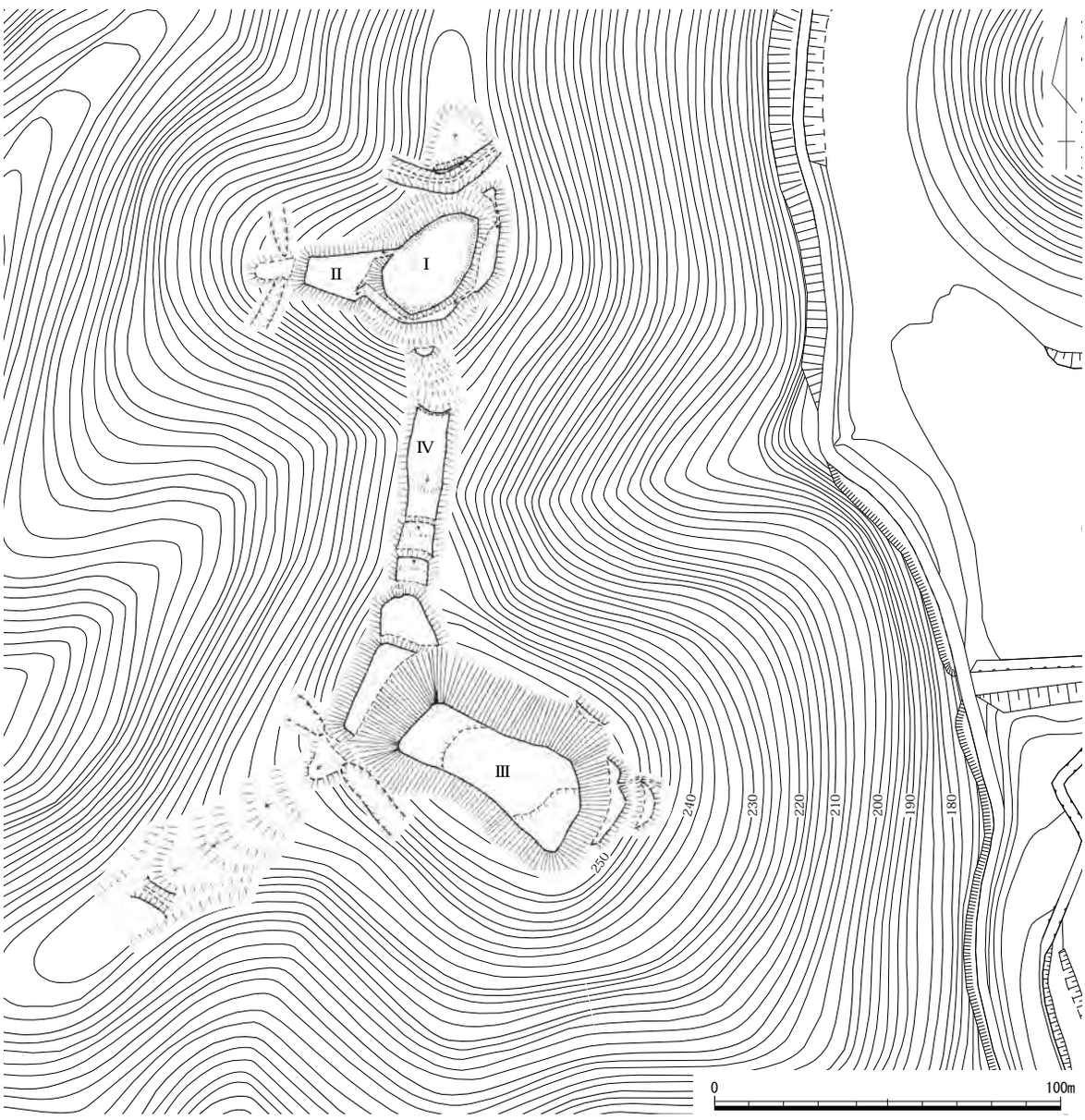
第 344 図　比丘尼城跡縄張り図（1 /2,000）

373　高畑（たかはた）城跡　　美作市馬形　　地図 22 右

立地　粟井川右岸、北側の山塊から南へ延びた標高約 260 mの山頂部に立地する。比高は 100 mとやや高く、南から南西にかけて粟井川沿いの眺望が良好である。近隣には粟井川を挟んで、南西 900 mに高山城跡、南東 1.2㎞に淡相城跡が位置する。

概要　城域は東西 160 m、南北 220 mと規模は大きい。縄張りは標高がほぼ同じで南北に連なる 2 つの山頂にそれぞれ築かれた曲輪を中心に構成される。

北側の頂部には低い土塁で囲まれた 35 × 20 mの曲輪Ⅰが配置されている。その東斜面と南斜面には帯曲輪がそれぞれ置かれ、西側の台形の腰曲輪Ⅱと繋がる。防御施設としては、頂部の北側は高さ約 1 mの土塁を北肩に伴う幅約 6 mの弧状の堀切、西側の腰曲輪の西側に竪堀が南北に 1 本ずつ



第 345 図　高畑城跡縄張り図（1 /2,000）

設けられ、北と西からの守りを固めている。

一方、南側の頂部には 55 × 22 mの曲輪Ⅲが配置されている。曲輪の中央はやや高くて、東西は緩やかに一段下がる。周りの切岸は急勾配で高低差もある。西斜面には腰曲輪を２面構え、北側の頂部に尾根の鞍部が続く。北側の頂部と南側の頂部の間を繋ぐ尾根鞍部には長曲輪Ⅳと小曲輪２面を連ねている。防御施設として、南側の頂部の南西隅には南北に１本ずつ竪堀を配するほか、南西に延びる尾根に１条の堀切を設けており、南西を堅く守る。

全体的に北、北西、南西の防御を固めた縄張りである。北側と南側の頂部はともに同じ標高で、それぞれに構えられた曲輪は単独でも機能する規模であり、防御施設もそれぞれに備わっているため、最終的には並立の関係にあったと考えられる。また、南側頂部の曲輪は造作があまくて切岸主体で守る一方、北側頂部の曲輪と腰曲輪は縁辺が鋭くて、北を大きな堀切で防御することから、南側頂部の縄張りのほうが古相で、後に北側頂部の縄張りが追加で改修された可能性も考えられる。

文献・伝承　『古城之覚』によれば、城主は粟井景盛の家臣、須々木主計とされる。また、『粟広村史』は、高山城とともに粟井城の出城であり年替わりで城番が置かれたと伝える。　（米田）

写真 153　曲輪Ⅰ（北東から）

写真 154　堀切（西から）

写真 155　曲輪Ⅲ（南東から）

写真 156　長曲輪Ⅳ（北から）

374　高山（たかやま）城跡　　美作市馬形・宗掛　　地図 22 右

立地　勝田町馬形から大原町へと向かう国道 429 号が平野部から谷部へと入るあたり、城はこの道の通る狭隘な谷底平野を北眼下に見下ろす標高 250 mの山塊端頂部に所在する。北東約 1 ㎞には高畑城跡が、さらに高畑城跡から 1㎞東には淡相城跡が所在する。

概要　城が構築されているのは、国道 429 号に並行するおよそ北東から南西方向に連なる山頂部の約 300 mにかけてである。城は、南西側の標高 250 mの端頂部と途中自然地形を間に挟んだこの北東に約 10 m低い尾根筋に曲輪配置が認められる。ただし、曲輪配置やその規模等で両者の様相は大きく異なる。前者の端頂部には主郭と考えられる頂部を大きく削平した全長 45 m、幅 30 mの長方形の曲輪Ⅰが造成され、その東と南側約 7 m下方には切岸によって造成された曲輪Ⅱ・Ⅲが配置される。両者は幅 1 m前後の比較的幅広い整備された道によって繋がっており、密な連結状況が看取される。さらに、主郭南西側約 4 m下方の約 20 m四方の曲輪Ⅳには主郭の北と南側隅から土塁を兼ねた道が斜めに北と南側一辺に取り付けられている。また、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲとの中間地点からは幅 2 m前後の整備された城道が斜めに主郭に向けて取り付けられている。虎口は、曲輪Ⅱの東下段南北に長い枡形を思わせる曲輪Ⅵに存在し、ここにはＬ字状に土塁が構築されている。なお、曲輪Ⅵから上段の曲輪Ⅱ・Ⅲには南側から曲輪Ⅱ直下に廻る道が、構矢効果を狙った位置に付設されている。

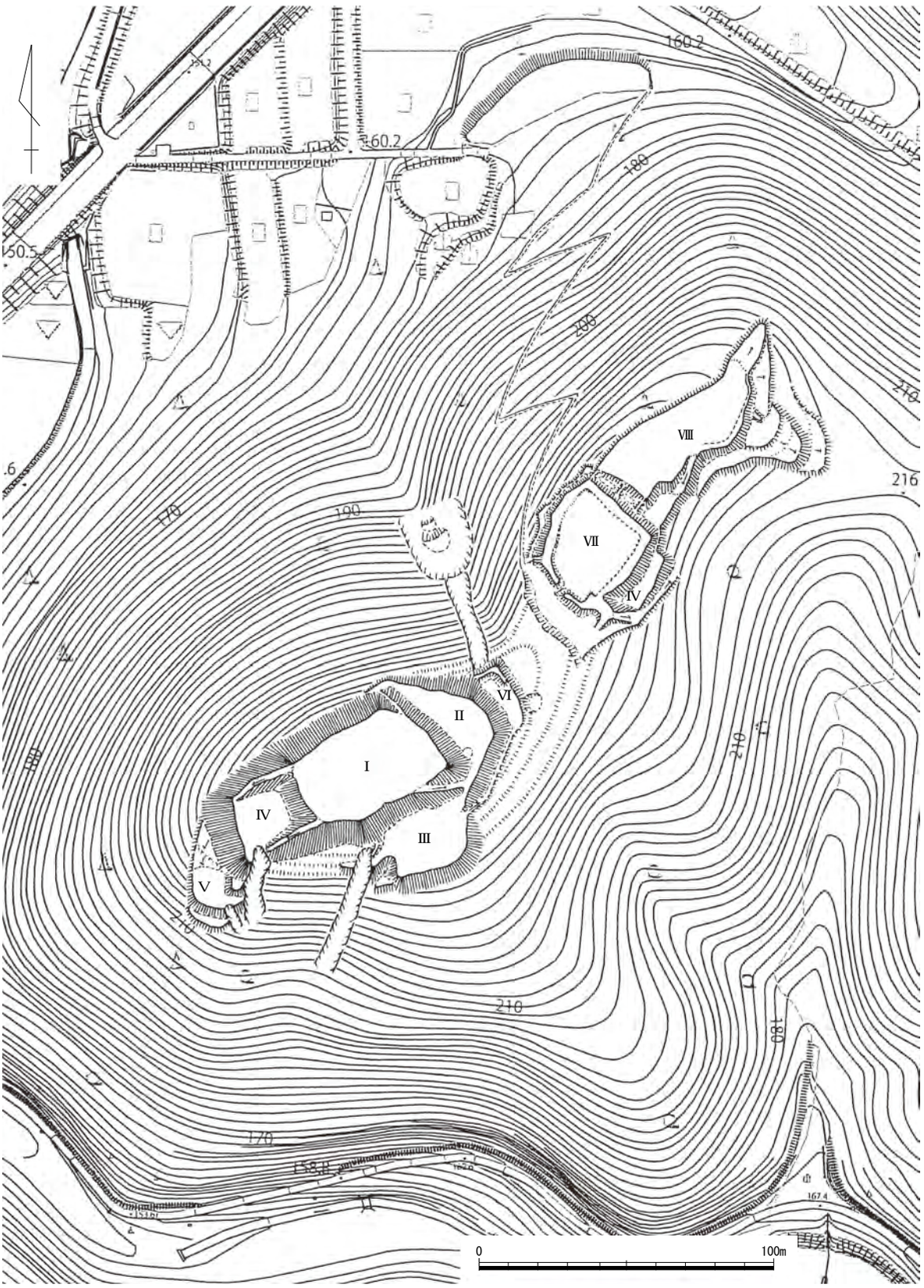
一方、後者の北東側尾根筋に配置された曲輪群は、頂部を浅く削平して平坦面を造成した全長約 70m、幅約 20m の不定形な曲輪Ⅷと、その南西側には尾根筋を遮断する幅 5 ～ 8m の堀切を隔てて存在する一辺約 30m 四方の曲輪Ⅶから構成されている。曲輪Ⅶの周辺部には上端幅 2 ～ 3m の土塁が巡り、そこには何らかの施設の存在が窺われる。堀切には北西と南東側、さらにその中央部には土橋状の間仕切りが見られ、天水の貯水効果をも狙った可能性が考えられる。また、ここには南西側一辺中央部に輻 3m の虎口の存在と、南東隅上端から下段の曲輪Ⅸとを繋ぐ道の存在が認められる。曲輪はこの他にも北側と南側の斜面で階段状に連続して見られるが、いずれも段差 1m 前後と造成度の小さいものである。なお､曲輪Ⅶと北に存在する北東側と南西側の曲輪群には防御面で差異が大きく、これには築城主体の違いが考えられ、時期的にも新旧両様相が窺われる。

城の防御施設については、選地した山が急勾配の高い山塊であることからか尾根筋を遮断する堀切は必要でなかったようで、谷部に長大な竪堀が３本見られるのみである。

なお、城の北麓の現在墓地となっている場所が斜面を切岸によって造成された根小屋の可能性を窺わせる長さ 70 m幅 10 ～ 20 mの平坦面Ｘが存在し、城までの山腹には九十九折りの道が続くのが確認される。

文献・伝承　『東作誌』には、時代は不明ながら粟井一族がこれに居り､或いは須々木主計とも伝える。『美作古城史』所収の「新免家記」には「草刈太郎左衛門重繼天正四年作州勝田吉野をはたらき粟井高山城を乗取、新免伊賀守軍を発して大いに戦ふ。草苅は苫北郡へ引退く云々」とある。　（島崎）

写真 157　遠景（西から）



第 346 図　高山城跡縄張り図（1 /2,000）

375　淡相（あわい）城跡　　美作市粟井中　　地図 22 右

立地　粟井川左岸の東西に隣接する２つの丘陵先端に立地する。西側丘陵は 208 m、東側丘陵は 206 mで、ともに比高約 30 mである。近隣には粟井川を挟んで北西 1.2㎞に高畑城跡、東 3.2㎞に横山城跡が位置する。両丘陵頂部からは北方の粟井川沿いの眺望が良好である。

概要　城域は西側丘陵の縄張りが東西 80 m、南北 130 m、東側丘陵の縄張りが東西 50 m、南北 110 mに及び、大規模である。

西側丘陵は北西裾に春日神社が鎮座し、その南側の頂部に城が築かれている。最頂部には東西 20 m、南北 33 mの整った長方形を呈する曲輪Ⅰが構えられており、主郭となる。曲輪の北西隅は細く延びるほか、南辺には堀切に沿って幅５mの土塁が設けられている。曲輪Ⅰの北側の一段下がったところには東西 38 m、南北 16 mの不整長方形を呈する曲輪Ⅱが配置されている。曲輪Ⅱの北辺中央に土塁があり、その東側は虎口、西側は北西に突出して横矢掛けとなる。また曲輪Ⅱの西辺北側にも土塁が設けられ、その北側は折れている。曲輪Ⅱの北東隅角は北へ土塁が細く延び、櫓台と想定される小曲輪Ⅲに繋がる。これら頂部に築かれた曲輪Ⅰ・Ⅱの周縁は急勾配で、高低差が９mにも及ぶ切岸と

第 347 図　淡相城跡縄張り図（1 /2,000）作図：畑和良

なる。

また、曲輪Ⅰの南西側には東西 10 m、南北 25 mの細長く延びる帯曲輪Ⅳが配置されている。防御施設として、頂部南側は上幅約 15 m、底幅約３mの大規模な堀切で区切られているほか、頂部西側から北側にかけては切岸、横堀、土塁が巧みに配置され、防御力の高い施設が凝縮している。横堀は頂部西側から北側にかけて蛇行しながら延長約 80 mにもわたって造られている。横堀の底面は約５mで、断面が逆台形の箱堀状となり、中央北寄りの一部は沼地や土橋となる。さらに横堀の南西側は上幅３mの土塁が横堀に沿うように屈曲する。なお、横堀より北西に延びる２つの尾根はなだらかな自然地形となる。

写真 158　西側丘陵一曲輪Ⅰ・Ⅱ西の横堀・沼（北から）

一方、東側丘陵は頂部の曲輪Ⅴを中心とし、その周りや北に延びる尾根端に複数の曲輪や帯曲輪を配置した縄張りである。頂部周辺は草木の繁茂が著しく、現地での遺構の確認が難しい。ここでは畑和良氏が作図した縄張りを参考にした。東側丘陵の中心曲輪と考えられる曲輪Ⅴは頂部に造られ径 15 m前後の不整円形を呈する。その周辺の東西斜面には小規模な帯曲輪を３面にわたって配置している。頂部から北に延びる尾根端にかけては、やや規模の大きな曲輪Ⅵ～Ⅷを３面連続して配置しており、丘陵北端は急勾配で高低差も著しい。防御施設としては、曲輪Ⅴの南辺に幅５m、高さ２mの土塁を備えたうえ、南側の鞍部には幅６m後、深さ 10 mの大規模な堀切を設け、尾根筋を分断して堅固に守っている。

写真 159　西側丘陵一帯曲輪Ⅳ南東・横堀（北西から）

東西丘陵にそれぞれ築かれた城跡は、居館的な性格が強い西側丘陵と軍事的な性格を色濃く残す東側丘陵に分けられ、お互いに補完関係にある。両者は縄張りの性格が異なるが、お互いに近接していることから、「一城別郭」として本城と出城の関係にあると想定されている（「落穂ひろい」）。

写真 160　西側丘陵一曲輪Ⅰ南の堀切（西から）

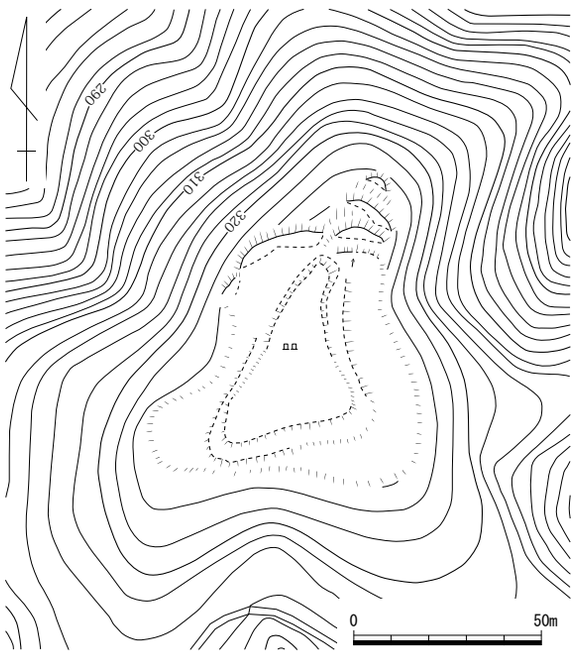
文献・伝承　『古城之覚』は吉野郡粟井村の「中村之城」として、菅家の一族を城主とし、赤松氏に仕えた粟井近江守景盛らの居城とする。また、『備前記』によると、出雲国尼子氏は備前国周匝の城山と三星城、さらに「粟井村ノ赤松之城」を攻め落として出雲国に引き取ったと伝える。　（米田）

376　大将ヶ陣山城跡（たいしょうがじんやま）　美作市田殿　地図 22 右

立地　梶並川左岸の「大将ヶ陣山」の山頂部に位置する。

概要　単郭式の山城であり、主郭の北端に小曲輪が５～６面認められる。その周囲にも部分的に低い加工段や平坦面が見られるが、全体的に自然地形を多く残す。簡易な構造から臨時的な砦の役割を担ったものと思われるが、雑木の繁茂により一部で現認できなかった場所がある。なお、主郭頂部には明和二年（1765）に一色部落が遷座したとする藺塔２基が建つ。

文献・伝承　『英田郡史考』では田殿の「大将が陣」として、鞍掛山城を攻撃の時、山名氏の主将が陣を敷き持久戦に備えたとする。（文献 133）　（澤山）



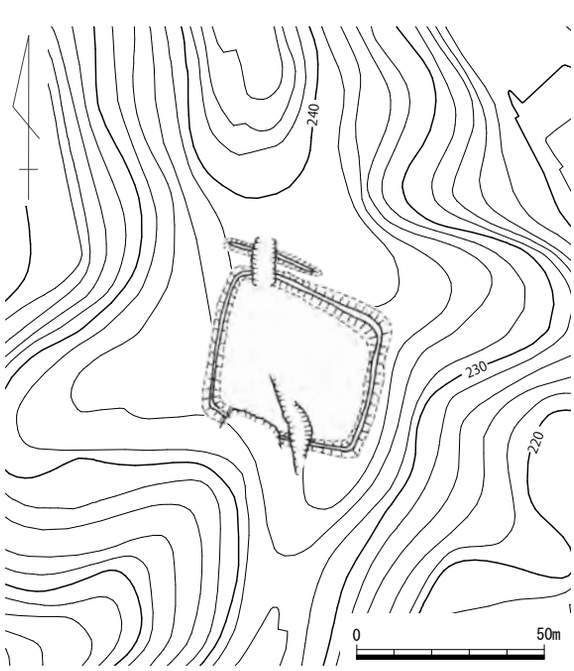
第 348 図　大将ヶ陣山城跡縄張り図（１/2,000）

377　殿屋敷跡（とのやしき）　美作市小野　地図 23 左

立地　粟井川右岸にある東西方向に延びる尾根頂部に立地する。

概要　ほぼ正方形を呈する主郭の周囲には高さ約１ｍ、上幅約２ｍの土塁が巡っており、北辺が他辺に比べて造りがよい。虎口は未確認であるが、林道で損壊した場所以外に土塁が切れている場所がないので、北辺ならば北西隅付近、南辺ならば中央付近に設置していたと考えられる。なお、北辺の北西隅の前面には林道で損壊したと思われる高さ約 1.5 ｍ、長さ約 25 ｍの土塁が築かれていることから、茀を伴う一文字虎口が推定される。

文献・伝承　『英田郡史考』で郷司の屋敷跡である「殿屋敷」とする居館と同一と判断できる。しかし、略図で表現している「馬場」跡は未確認で、その存在は評価し難い。　（澤山）



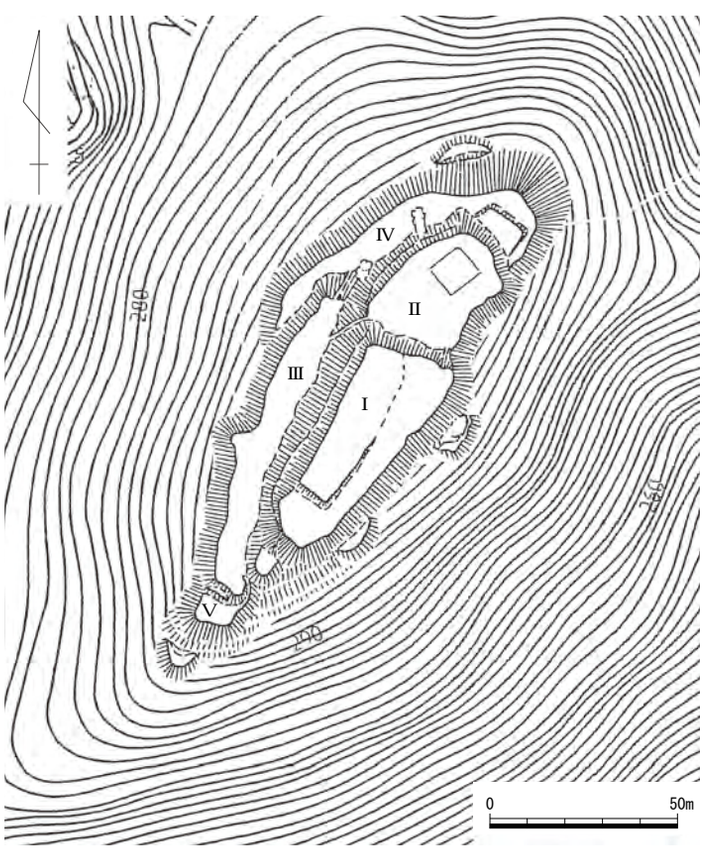
第 349 図　殿屋敷跡縄張り図（１/2,000）

378　赤田（あかだ）城跡　　美作市赤田・桂坪　　地図 23 左

立地　吉野川とその支流川上川が合流する地点西側の標高 311 mの山塊頂部に所在する。川上川を隔てた東約 500 mの山頂には、法天山城跡が指呼の間に位置する。

概要　山の稜線が北東から南西方向に延びる幅の狭い山容で、標高 290 mあたりから頂上にかけて、大小 10 面の曲輪配置が全長 160 mにわたって見られる。主郭は、頂上に存在する全長 60 m、幅 15 ～ 25 mの長方形を呈する曲輪Ⅰで、この内側西辺沿いには南側一辺に石積を見せる全長 45 m、幅 10 mの長方形の高まりが約 50㎝の段差をもって造成されている。またこの曲輪Ⅰから北東側下段には高さ約 2.5 mの切岸によって造成された全長 30 m、幅 20 mの曲輪Ⅱが存在する。現在ここには携帯無線基地局が設置されており、これに伴って実施された発掘調査では掘立柱建物の存在を示す柱穴２個と土坑１基が検出されている。出土遺物には、北宋の元豊元（1078）年初鋳の「元豊通宝」が１枚と、青白磁の皿と碗、備前焼等の小片がある。曲輪ⅠとⅡの西側緩斜面下には、約４mの切岸によって造成された曲輪ⅢとⅣの２面の長い曲輪がこれに沿った状況で配置されている。規模は、曲輪Ⅲが全長 80 mで幅 10 m前後を測る。曲輪Ⅱの北西にあって曲輪Ⅲの３m下段に造成された曲輪Ⅳは、全長 70 mで幅３～８mのやや狭い帯曲輪状に造成され、曲輪Ⅱの北側に造成された長さ 12m の舌状の曲輪へと繋がる。また、この他の曲輪では、南西側の尾根筋に曲輪Ⅲの南端部に繋がる小規模な曲輪Ⅴが存在する。各曲輪間には曲輪と曲輪を繋ぐ通路が比較的良好に遺存しており、その在り方からは曲輪が密接に結びついて機能していたことが知られる。この城には尾根筋を遮断する堀切や竪堀、さらに各曲輪には土塁が存在しない。なお、『東作誌』には「二の段」下に井戸の存在が記されているが、これについては現在確認できない。

文献・伝承　『太平記』には山名時氏の康安元（1361）年の美作国侵攻に際して「大野ノ一族ガ籠リタル大野城」とあり。『古城之覚』では、「赤田之」城主を大野一族とし、「天正年中には浮田直家家臣井口長兵衛抱ル川上村之内大山小山六ケ所之城地有、大野一族寄城と云伝る」とする。『東作誌』には赤田村井の口山に塀高城、或は大野城と云われる古城が存在し、城主には康安元年には赤松貞規が、その後井口長兵衛貞詮、天正の頃には春名三之丞の在城を伝える。　（島崎）



第 350 図　赤田城跡縄張り図（1 /2,000）

379　法天山城跡（ほうてんやま）　美作市川上・立石　地図 23 左

立地　吉野川と川上川が合流する地点の東側に位置する標高 270 m前後の山頂にあって、東西に連なる尾根の西側先端部に所在する。この西約 500 mには赤田城跡が所在する。

概要　城は、比較的緩やかな東側尾根筋に幅５～７m、深さ最大３m、長さ 40 mにわたって遮断する堀切を掘り、そこから西側先端までの約 250 m間に曲輪配置がなされる。主郭は、西側の最高所に構築された 25 × 20 ～ 30 mの曲輪Ⅰで、周囲には３面の曲輪が比高差およそ１m前後と比較的低い位置に配置される。一方、この主郭から東に一段下がった鞍部からさらに東側の堀切に向けて地形がやや高くなり、この間の 60 × 50 mの範囲に 10 面以上の曲輪配置が認められる。ただし、ここでも各曲輪の造成は小規模で、その比高差１m前後と低い。しかもそれらは十分な削平がなされたとは言い難く、各所に自然面を残す。東端部に所在する堀切の城側肩口に認められる土塁と曲輪Ⅰの西端に構築された土塁にはいずれもが途中に横矢掛りを意図した折れが多用されている。なお、これら頂部に構築された曲輪群から南西に下がった尾根筋とこの北側谷筋にも様相の異なる防御施設の存在が認められる。南西方向に舌状に大きく張り出した尾根の南東側から南西側先端にかけての、標高 250 mあたりに見られる複数の曲輪と竪堀の存在である。最も規模の大きな曲輪Ⅱは、総延長 120 mにわたって斜面側を高さ２～３mの切岸によって幅２～３mに造成されたもので、先端付近で地形に沿って大きく曲がりそこに浅く掘られた竪堀を南限とする。また、この曲輪の下段にも同様の曲輪と小規模な曲輪の点在が認められ、南西尾根筋の防御を固めている。さらに、北西の谷頭部分にも全長 40 mにわたり斜面を切岸によって造成された幅２～３mの曲輪が配置されている。なお、この間に挟まれた頂部は自然地形をそのまま残している。

第 351 図　法天山城跡縄張り図（１/2,000）

文献・伝承　『東作誌』によると川上村には法天山城があり、「元弘の頃出城があり本丸二の丸土井池等の跡あり城主大野の一族」としている。康安元（1362）年には「山名時氏の為に落去す」とも伝えられる。『英田郡史考』では、この城を「大野城址」とし、別名を法天山城としている。　（島崎）

381　比丘尼（びくに）ヶ城跡　　美作市沢田・壬生　　地図 23 左

立地　吉野川沿い左岸の沢田から壬生地区にかけては広域な平野部が形成されている。山麓には河岸段丘が発達し、現在この一帯は豊かな穀倉地帯となっている。城はこの地域の東に聳える山塊、最高所の標高 385 mの城山山頂に所在し、城からはこの平野部と吉野川沿いを山陰と山陽を繋ぐ街道筋も西眼下に一望することが出来る。

概要　城は、城山山頂を中心に北・東・南西の三方向に派生する尾根筋に大小 50 を超える曲輪が密に存在する。その規模は、およそ東西 230 m、南北 390 mを測り、東備地区では大型の部類に属する山城といえる。主郭は、山頂部中央に一辺 10 m、高さ 50㎝程の小規模な方形壇を削り出した 30 × 20 mの曲輪Ⅰと考えられるが、南西方向に若干下がった尾根筋鞍部に全長 50 m、幅 10 ～ 25 mと大規模な曲輪Ⅱが同一面で造られており、南東側には土塁を伴った曲輪配置も見られることからも、全長 70 mを測るこの全体部分が中心的な場所であったことが窺われる。また、この曲輪Ⅱの南西側下段にはこれを取り巻く状況で、最大幅 10 mに達する比較的規模の大きな舌状の帯曲輪Ⅲが配置されている。さらにこの下方尾根筋には切岸造成による大小 18 面の弧状を呈する曲輪が 100 m以上にわたって階段状に密接に連結しており、防御を一層強固にしているのが理解される。同様の連結はこの他にも南東側の尾根筋にも小規模ながら５つの切岸と曲輪が見られる。

一方、頂部からは北方向に派生した二筋の尾根筋が存在するが、これには東側下方に下がって全長約 30 mの鞍部を挟んで高所に上がり、その高所から北に延びる狭いながらも南北に長い尾根筋と、曲輪Ⅰからやや北西に下る全長 100 mの尾根筋がある。

前者の東側の尾根筋は、頂部の主郭からの比高差約 10 m、距離にして約 50 m下った所に全長 30 mに及ぶ曲輪Ⅳを配した鞍部が存在し、ここには北の高所に向けて幅約１m程の土橋状の通路が約 30 mにわたって見られる。高所には一辺約 20 m四方の方形の曲輪Ⅴが中央に削り残しの高まりを残しているものの整備された状況で存在する。曲輪Ⅴからさらに５m下段には約 90 mにわたって北に向かって延びる平坦な尾根が存在する。ここには尾根筋の中央部に曲輪地形の際の削り残しの細長い高まりを土塁状に２か所残した幅約 15 mの曲輪Ⅵが見られる。また、この北端には北の尾根筋から上がってくる城道が取り付き、ここに虎口が存在する。そこには高さ２m の切岸が切られ、下段には２条の堀切と土塁が対になって造られる等防御を強固なものとしている。

一方、後者の主郭から北に緩やかに延びる尾根筋には、緩斜面と急斜面では切岸の規模が異なるが、大きく６面の曲輪がそれぞれ２～５mの切岸によって最大長 40 m、幅 10 mの曲輪Ⅶ～Ⅺが階段状に配置されている。

なお、以上の尾根筋を中心に存在した曲輪群が防御面を重視して構築されたものであったが、これとは様相を異にする曲輪群が北向きの屋根の西側緩斜面に存在する。そこは主郭から北に曲輪Ⅶ～Ⅺを続ける尾根筋からは西側斜面下方に自然斜面を隔てた場所に存在する舌状を呈する斜面である。そこには最大５mの切岸によって造られた全長 30 m、幅５m前後の曲輪Ⅻをはじめとし、舌状地形に沿って切岸造成された８面の曲輪がおよそ 70 × 50 mの範囲内に階段状に見られる。

文献・伝承　『美作鬢鏡』には「尼山」として城主を赤松一族とする。また、『東作誌』においては城名を「尼山」あるいは「比丘尼が城」とする。『英田郡史考』では、「比丘尼ヶ城」として、城主は不

詳としながらも『三星軍傳記』から天正年間に河副美作守久盛が林野城退転後に居る、とする。（島崎）

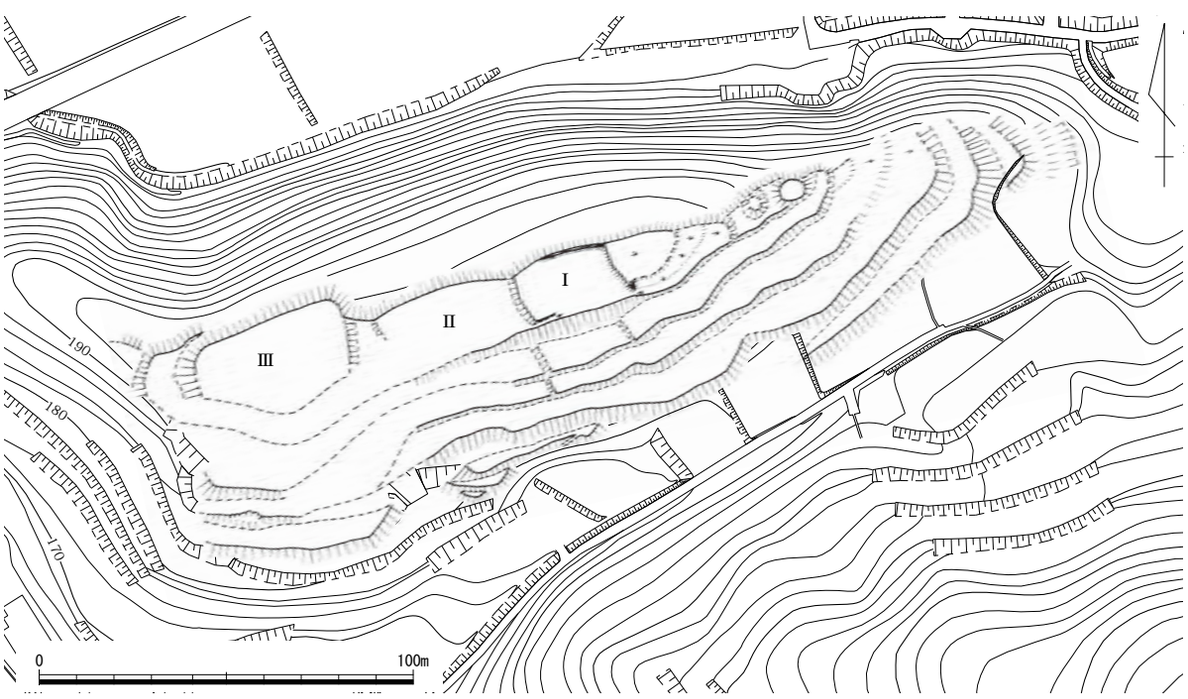
第 352 図　比丘尼ヶ城跡縄張り図（1 /2,000）

382 横山（よこやま）城跡　　美作市五名・沢田　　地図 23 左

立地　吉野川が大きく蛇行するところの左岸にある標高 198 mの丘陵頂に立地する。丘陵は吉野川に向かって西に大きく突き出た東西に細長く延びる独立丘陵で、比高は 35 mである。周辺には城跡が多く分布しており、北東 1.6㎞壬生の構、北東 1.7㎞に比丘ヶ城跡、南西 2.8㎞に越坂山城跡が位置する。頂部からは北から西にかけて吉野川沿いの眺望が良好である。

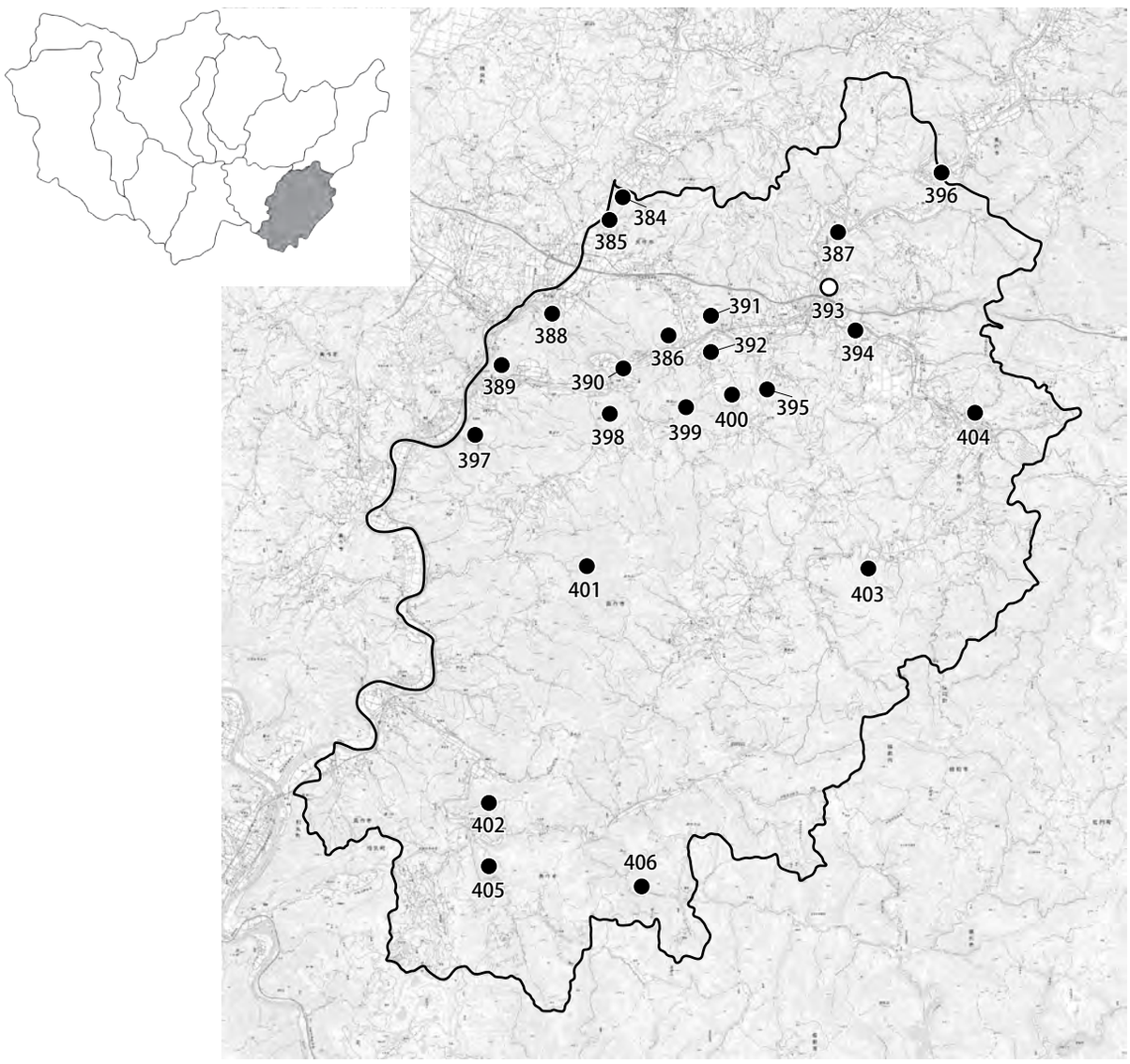
概要　城域は東西 260 m、南北 65 mと規模は大きい。東側頂部の曲輪Ⅰを中心とし、尾根上に曲輪を複数連ねて配置した構造である。曲輪Ⅰは東西 25 m、南北 15 mで長方形を呈し、北辺には高さ 50㎝前後の低い土塁が直線的に延び、南西隅は曲輪Ⅱと通路で繋がる。曲輪Ⅰより西側の尾根上には曲輪Ⅱ・Ⅲが連なる。曲輪Ⅱは東西 40 m、南北 25 mの長方形を呈し、東西の曲輪Ⅰ・Ⅲよりも 1 m近く平坦面が低い。東側の曲輪Ⅲ周辺は草木の繁茂が著しく、詳細を把握することが難しい。また、南斜面には長大な帯曲輪が少なくとも３面、南東と南西斜面には帯曲輪が１～２面程度配置されている。曲輪Ⅰより東側は造作があまく、東斜面の変換点付近には径８m前後の古墳が２基確認できる。防御施設として、堀切は認められないが、北斜面は急峻な地形を利用しつつ、南斜面に複数の帯曲輪を配置して堅く守る縄張りである。

文献・伝承　『東作誌』は「東山城」、又は「吉野城」とし、赤松氏の一族である坂部大炊介、あるいは横野大膳や江見出雲守を城主と伝えるなど諸説ある。また、『太平記』によると、康安元（1361）年７月、山名時氏の美作国侵攻、倉懸城攻囲の救援のため、赤松則祐が兵を籠めた播磨・美作国境の四城の一つとも考えられている。　（米田）



第 353 図　横山城跡縄張り図（1 /2,000）

第 12 節　英田郡



384. 鞍掛城跡
385. 比丘尼城跡
386. 妙見山城跡
387. 鳥越山城跡
388. 鬢櫛山城跡
389. 林野城跡
390. 友野城跡
391. 緑青山城跡
392. 比丘ヶ城跡
393. 川越屋敷跡
394. 松田城跡
395. 久保木城跡
396. 越坂山城跡
397. 三倉田城跡
398. 矢櫃山城跡
399. 大叫城跡
400. 大畠城跡
401. 鷹ノ巣城跡
402. 神田山城跡
403. 尾越城跡
404. 福城跡
405. 高鉢城跡
406. 横尾城跡

第 354 図　英田郡城館位置図

384　鞍掛（くらかけ）城跡　　美作市田殿・楢原中　　地図 22 左

立地　吉井川の支流である梶並川と滝川の合流地点から北に約 4 ㎞梶並川を遡った地点に位置する標高 220 mの鞍掛山に所在する。頂部からは南方に豊国盆地はもとより林野城や三星城をはじめとする山城の眺望が可能で、城はこの地域の交通・軍事を押さえる要衝にあったことが知られる。

概要　縄張りは、急峻な標高 223 mを最高所とした山塊の頂部に曲輪Ⅰが位置し、その北東側に曲輪Ⅱが、曲輪Ⅰから南西側に約 150 m続く峰筋には曲輪Ⅲと曲輪Ⅳが、さらにその峰筋北端から東に下がった鞍部を隔てて存在する標高 212 mの山塊に曲輪Ⅴが配置されている。曲輪Ⅰから曲輪Ⅴまで全長約 350 mの規模を誇る。

主郭は、曲輪Ⅰとしたもので標高 230 mの頂部の北側と南側が堀切によって遮断された約 70 × 60 mの円形を呈する。西側肩口には高さ約 5 mを越える切岸が急峻な斜面をさらに急なものとし、これより下段には幅 2 ～ 7 mの帯曲輪が総延長 100 mにわたって巡り、全体の防御を堅固にしている。ただし、曲輪Ⅰの上面は自然地形そのままで、頂部から周辺部に向けて緩やかに傾斜する。曲輪Ⅱは、東尾根筋と主郭側が堀切によって遮断され、中央部上面には方形プランを意識した曲輪地形が確認されるが、主郭と同様に自然地形を残す。なお、ここでも北から西側の斜面には主郭と同様に高さ約 5 mの切岸が総延長 100 mにわたって切られ、下段には幅 2 ～ 7 mの帯曲輪が造成されている。曲輪Ⅲは、主郭と曲輪Ⅳとの間に存在する全長約 20 mの鞍部を造成して造られているが、ここも全体に自然地形をよく残す。主郭側と曲輪Ⅳ側にはそれぞれに土塁と堀切が一体となって取り付き、東側斜面下方には全長 35 m、幅 1 mの狭い帯曲輪が造られており、緩やかな東側谷部からの侵入に備えられている。曲輪Ⅳは、全長約 100 m、幅 10 ～ 25 mの長い曲輪である。北半上面には自然地形を残すが、南半側は部分的ながら三段に曲輪面が造成されている。南半の肩口には北側に比べて明瞭な高さ約 5 mの高い切岸がなされ、さらに南端下方には小規模ながら尾根筋を遮断する堀切と横方向への移動を困難とする竪堀が 1 本存在する。曲輪Ⅴは、主郭である曲輪Ⅰと曲輪Ⅳと同じく頂部に自然地形をそのまま残した状況で、頂部下方に鉢巻き状に切岸を切り、幅 3 ～ 5 mの曲輪を全周させている。また、その東側下段には全長 40 m、幅 5 m前後の帯曲輪Ⅵが竪堀を伴って造られており、南側に 50 m以上にわたって掘られた竪堀と相俟って東側からの攻城に対する防御を担っている。

文献・伝承　鞍掛城は、文和 4（1355）年足利尊氏が上月左近将監に「美作国鞍掛城」の警固を命じたことを初見とする。『太平記』では、康安元（1361）年に山名時氏による美作国侵攻に際して「鞍懸ノ城」には赤松方の佐用美濃守貞久と有元和泉守佐久が 300 余騎で籠城し、同年 11 月に落城したことが伝えられる。

『古城之覚』では建武年中のこととして「鞍懸之城主」に佐用美濃守貞久と有本和泉守佐久を挙げ、城は高さ 1 町 7 、 8 反、西に大河が、東南の谷は深く険阻、東北に峰が続き、北に出丸が有って、本丸と二ノ丸は南北百間を計る。山名の陣は出城の他に寄城 28 か所あるという。その後、弘治の頃（1555 ～ 1558 年）丹波の国から五島基政が入部して住すと伝えられる。　（島崎）

写真 161　遠景（南から）

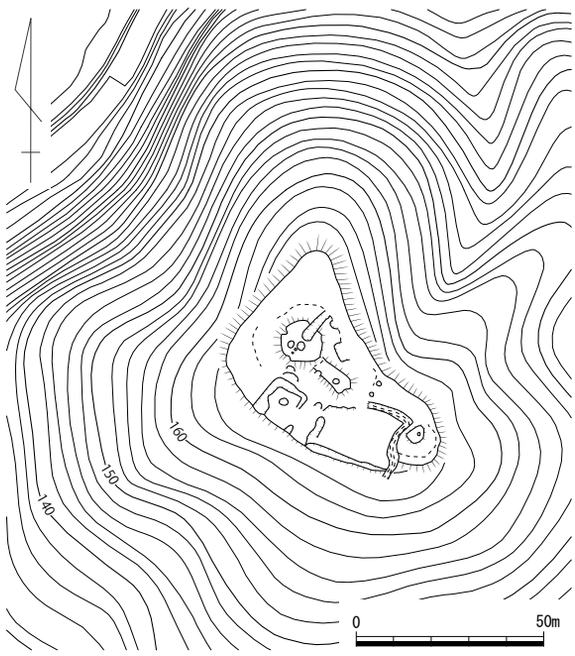
第 355 図　鞍掛城跡縄張り図（1 /2,000）

385　比丘尼城跡（びくに）　美作市楢原中　地図 22 左

立地　楢原中集落北側にあたる梶並川左岸の山頂部に位置し、約 200 m北東側に鞍掛城が所在する。

概要　金焼山１・２号墳に改変が加えられ、１号墳の後円部北側や各古墳の南側斜面に竪堀状の掘削痕が認められる。また古墳裾部から幅約５～ 10 mの平坦面が巡り、北隅がやや広がりを見せる。この平坦面から急峻な斜面が認められるが、南側は緩斜面となっており、防御性は低いと言える。山腹にも帯曲輪状の造作面が見られるが、墓地や通路の地形改変が著しく、性格が判然としない。縄張り的には主郭に帯曲輪が伴う単郭式山城と思われるが、鞍掛城に関する出丸あるいは陣・砦などと考えられる。

文献・伝承　『東作誌』には「金焼山」として、高さ１町半、比丘尼城ともいうと記す。（澤山）



第 356 図　比丘尼城跡縄張り図（１/2,000）

386　妙見山城跡（みょうけんやま）　美作市平福　地図 22 右

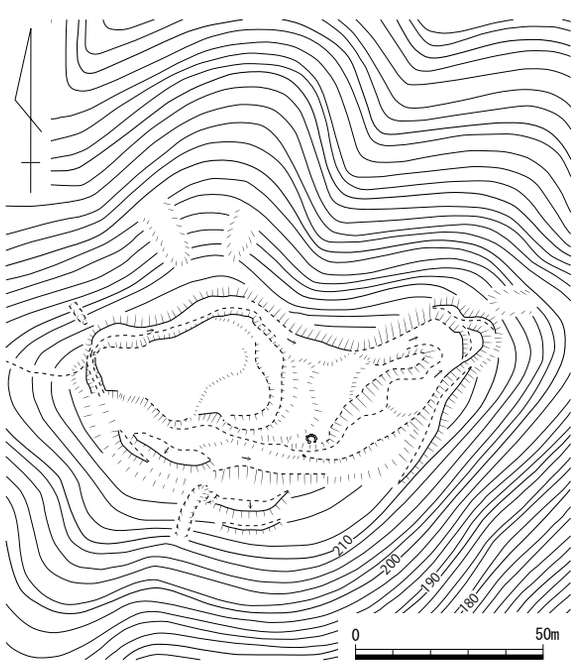
立地　吉野川右岸の山頂部に位置する。

概要　主郭の南・北側には帯曲輪状の小曲輪が数面認められる。西側には堀切が、東側では地形に沿った加工段や平坦面が部分的に見られ、東端では比高差約３mの急峻な切岸が認められる。

また、周辺には竪堀状の自然地形が見られるが、性格が判然としない。なお、山腹の明見山観音堂内には石組井戸がある。

文献・伝承　『東作誌』は平福村から分村した下福原村の条に妙見山を載せ、難波氏が「緑青山・妙見山両城主」であったと記す。なお、同城を「比丘尼城」、「天王山城」とするのは、上福原の「比丘ヶ城」に相当する。

また、『太平記』に登場する「妙見」の城や、『応仁別記』の「妙見ノ城」は同城にあたるとされる。（澤山）



第 357 図　妙見山城跡縄張り図（１/2,000）

387　鳥越山城跡（とりごえやま）　　美作市鯰・江見吉田・松脇　　地図 22 右

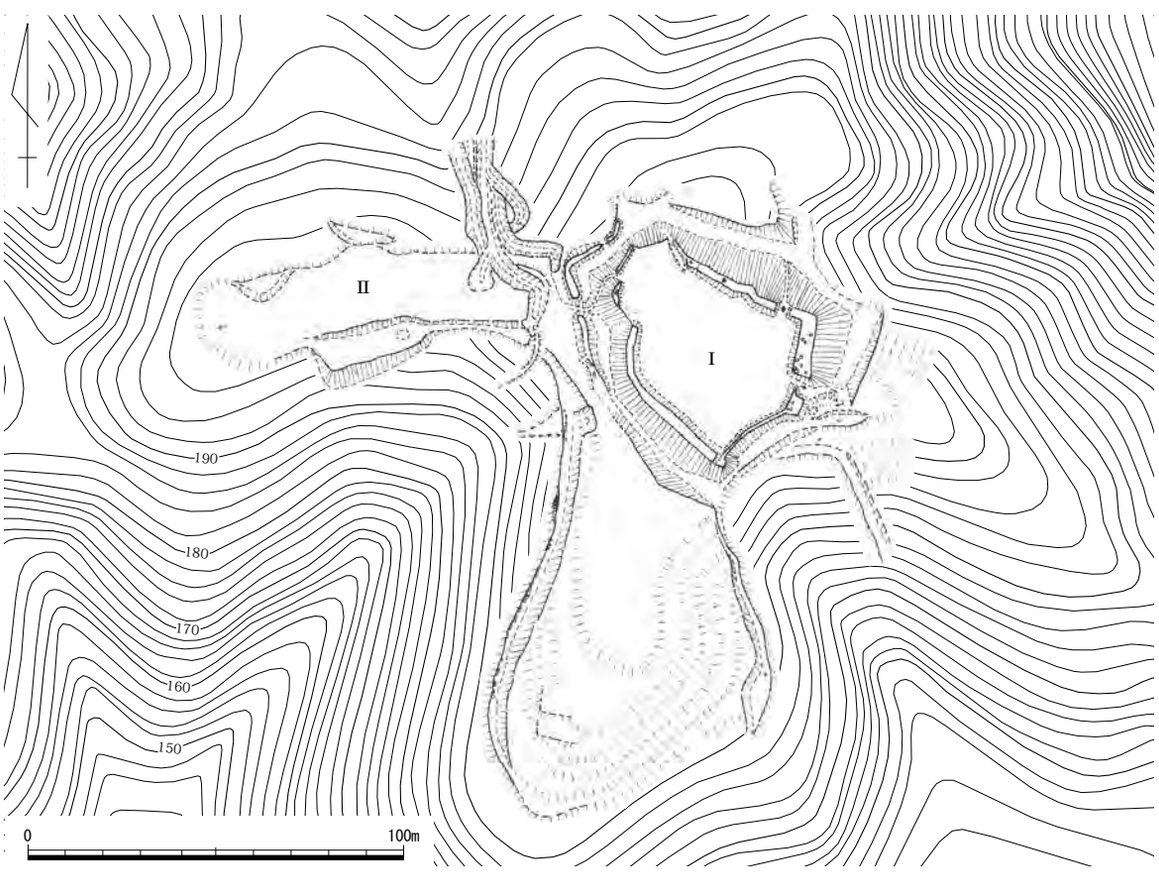
立地　吉野川が北へ大きく蛇行する左岸の標高約 209 mの山頂に立地する。比高は約 80 mである。周辺には北東 2.5㎞の吉野川沿いに越坂山城跡が位置する。

概要　城域は東西 180 m、南北 180 mと規模は大きい。頂部の曲輪Ⅰを中心とし、東側に延びる尾根にも長曲輪を配置した構造である。曲輪Ⅰは東西 50 m、南北 35 mと広く、周りを土塁で囲む。土塁は幅や高さが位置によって異なり、幅は東辺が最も幅広で、高さは南北辺が 1.5 m前後と最も高い。また、北辺中央と南西側は土塁が折れるほか、南東隅角は横矢掛けとなる。虎口は東辺中央、北辺東端、北西隅角、西辺中央の 4 か所に配置されている。なかでも東辺中央の虎口は両側を幅広の土塁で遮へいする。このほか、周りの切岸は急勾配で、南側は 8 m、他は 5 mと高低差がある。

曲輪Ⅰの周囲は堀で悉く区切って堅守する。東側の堀は曲輪Ⅰ東辺中央の虎口及び土橋より北側に造られ、幅 14 m、高さは 5 mと規模が大きい。南側、西側、北側の堀は幅 13 m前後で、横堀状に繋がる。特に西側の堀は西肩に土塁を設けるとともに、土橋を挟んで鍵状に屈曲する。

西側の尾根には東西 70 m、南北 15 mの曲輪Ⅱ、その南側に東西 30 m、南北 7 mの帯曲輪が配置されている。ともに西に向かうほど造作があまい。一方、南側の尾根は、頂部はゆるやかな自然地形をとどめるが、西縁に延長約 95 m、幅 2 m前後の犬走り、東縁に竪堀状の犬走りが 1 本認められる。

文献・伝承　『東作誌』は英田郡鯰村の古城「鳥坂山」とし、江見氏歴代の居城と伝えるほか、『美作鏡』では「鳥越城」あるいは「江見ノ城」といい、江見若狭守を城主とする。　　（米田）



第 358 図　鳥越山城跡縄張り図（1 /2,000）

388　鬢櫛山城跡（びんぐしやま）　美作市楢原下　地図 22 左

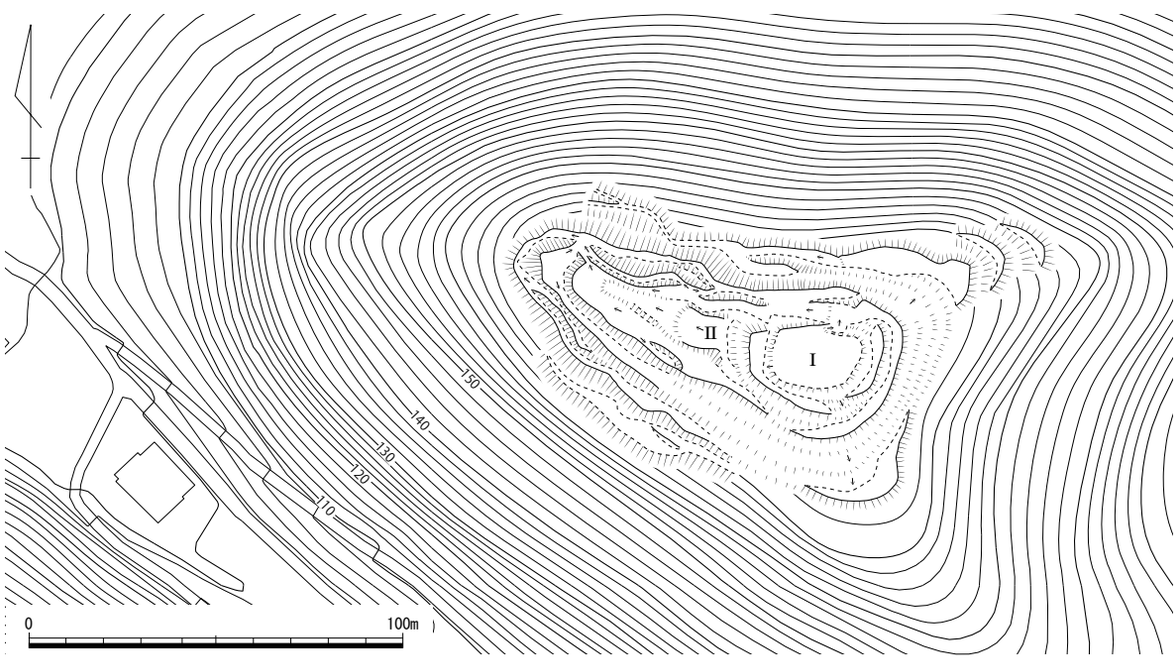
立地　梶並川右岸の標高約 170 mの山頂に立地する。比高は約 80 mである。近隣には南西 1.7㎞に林野城跡、西 1.8㎞に三星城跡、北東 1.8㎞に尼ヶ城跡、南東 1.9㎞に友野城跡が位置する。

概要　城域は東西 145 m、南北 75 mと中規模である。頂部の曲輪Ⅰを中心し、西・北東側の尾根、南北斜面に複数の帯曲輪を備えた縄張りである。曲輪Ⅰは 23 × 16 mの不整楕円形を呈する。北辺中央に虎口が設けられており、北側の帯曲輪に繋がる。北辺西半は切岸が明瞭であるが、他は造作があまい。曲輪Ⅰから西側に延びる尾根には帯曲輪を挟んで曲輪Ⅱが配置されているが、その西側は自然地形に近い。これら曲輪Ⅰ・Ⅱ周辺の北・西・南斜面には帯曲輪が３～４面構えられているほか、曲輪Ⅰの北東、南東斜面にも帯曲輪や小曲輪が配置されている。全体的に堀切や土塁などの防御施設は認められないが、斜面に幾重にも配された帯曲輪群によって北・西・南側の守りを固めている。

文献・伝承　『英田郡史考』は、城主を安東甚左衛門、小林平内と伝える。　（米田）

写真 162　曲輪Ⅰ北東の帯曲輪（西から）

写真 163　西端の小曲輪（東から）



第 359 図　鬢櫛山城跡縄張り図（1 /2,000）

389 林野（はやしの）城跡　美作市林野・栄町・朽木　＜市指定史跡＞　地図 22 左

立地　吉野川と梶並川が合流する林野は、かつて倉敷と呼ばれ、河川および陸上交通の要衝であった。また、軍事面でも重要な地点で、吉野・梶並両川に挟まれて位置する標高 249 mの城山山頂には当城が構築されており、梶並川を隔てた対岸約 700 mには三星城が所在する。

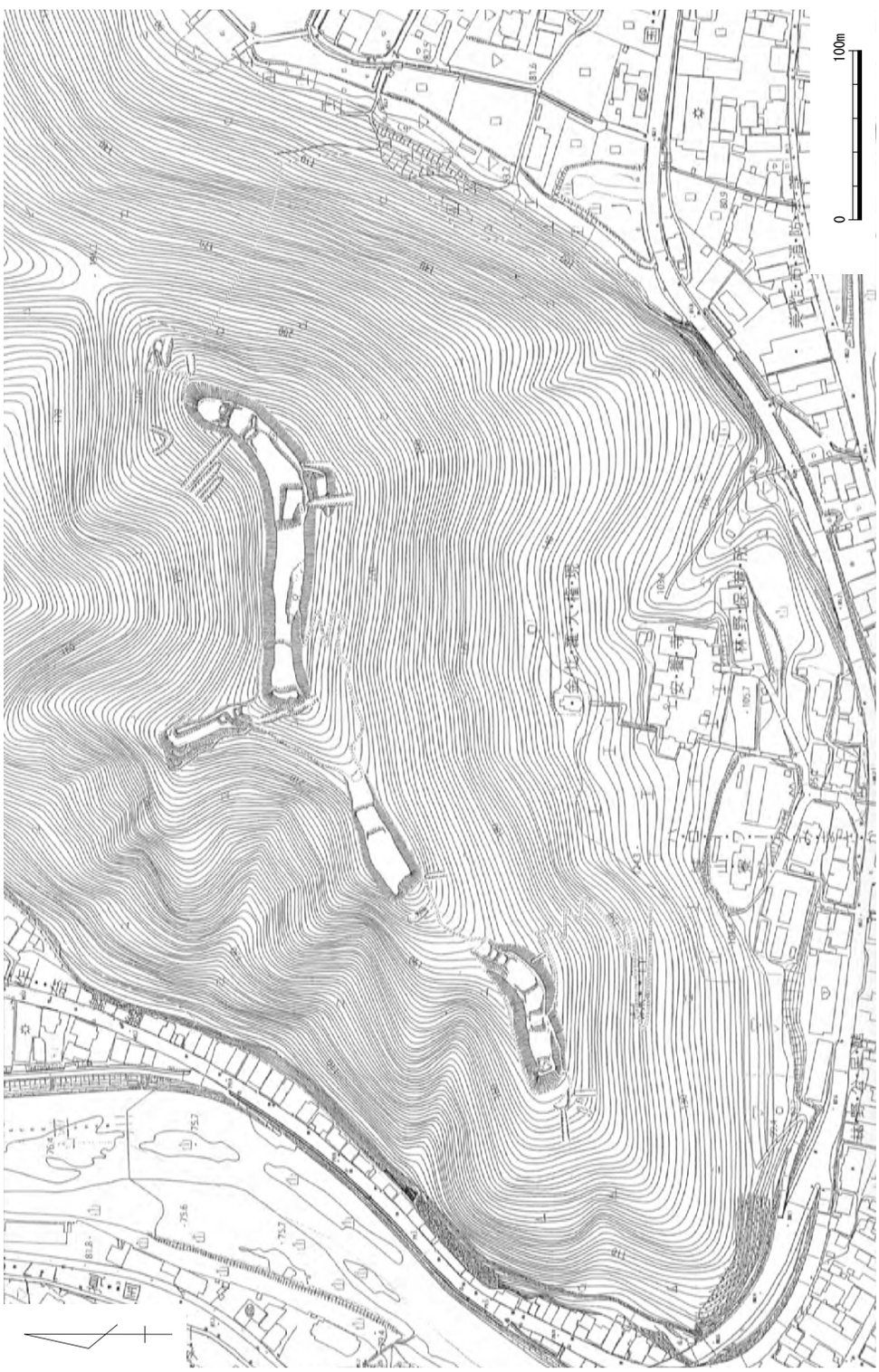
概要　城は、東西に長い山頂部を中心に北東から南西、あるいは北に派生した急峻な尾根筋の端頂部に大きく 4 か所の曲輪群を配置することで天然の要害をさらに強固なものとしている。

主郭は、頂部に造られた幅 10 ～ 20 mと狭いながら全長 170 mにも及ぶ単郭を呈する曲輪の中にあって、そのほぼ中央部、中央から東側には全長約 60 m、幅 10 ～ 20 mにわたって造成された曲輪Ⅱが存在するが、その西端部に位置するのが主郭Ⅰである。西側の曲輪Ⅳからは約 1.5 m、曲輪Ⅱからは約 1 m高い位置に存在する。中央南西側に城道をもった全長 17 m、幅 10 mの長方形を呈するものである。主郭北から全長 50 mの規模を測る曲輪Ⅱの東端には全長 13 m、下端幅 10 mの土塁が防御線となり、またこの南側下段には高さ 1.5 m前後の切岸造成された全長 60 m、幅 2 ～ 5 mの曲輪が存在する。一方、西側の曲輪であるが、ここには全長約 70 mと約 25 mの曲輪ⅣとⅢが緩やかな段差で連続して存在し、曲輪Ⅲの西側端部には全長 20 m、上端幅 2 ～ 5 m、高さ 1.5 mの土塁が存在する。なお、曲輪Ⅳ中央約 1 m下段に存在する曲輪Ⅷは、全長約 30 m、幅 5 m前後もので、斜面側には城道としての斜路が取り付いており、中央には経 3 mの井戸状の窪みが存在する。全体的に頂部の曲輪周辺は、外郭線から垂直気味に下がる急斜面であるが、特に南北側は顕著である。比較的緩いのが中央コーナー付近で、ここはほぼ垂直気味に斜面を下る幅 5 m前後の竪堀が一本と、その脇には高い切岸によって造成された全長 10 m、幅 7 mの曲輪Ⅶが配置され防御が固められている。巨視的に見れば頂部のこの長い曲輪は後世の改変による若干の段差はあるものの本来単郭構造で、南北朝時代に遡る古い形式と考えられる。一方、頂部北東端部から北側尾根筋にかけては高さ 4 m前後の高い切岸で造成された舌状を呈する曲輪ⅤとⅥが二面階段状に配置され、さらにこの北西斜面には幅約 5 mの畝状竪堀が 3 本と、尾根下方には小規模ながら堀切が尾根筋を遮断するなど、天正期になって北の守りの強化が図られたことが窺われる。

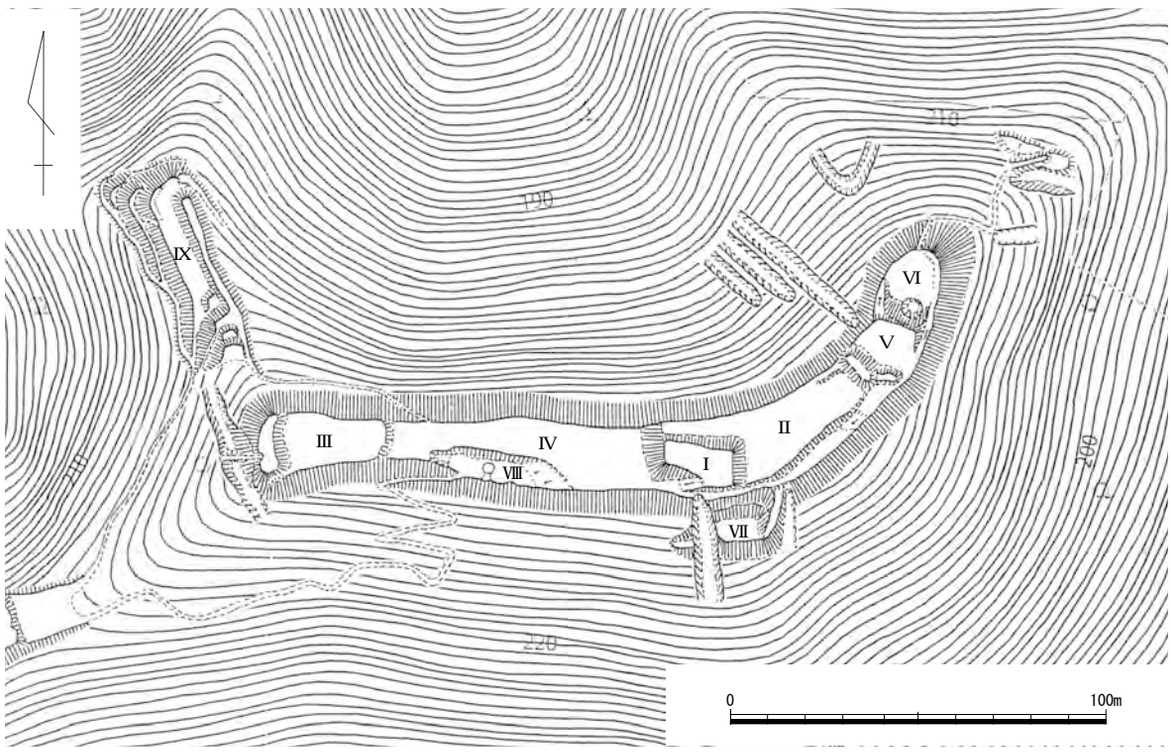
頂部から北に派生した尾根は、梶並川に対して垂直気味に長さ 50 m、幅 10 mの張り出した地形で、ここには切岸造成による全長 50 m、高さ 2 mの土塁と、その西側には幅 5 mの曲輪Ⅸが、また北西側斜面には小区画の曲輪の配置が見られる。一方、曲輪Ⅲから南西側に斜面を下った場所にあるテラス状を呈する全長約 70 m、幅 10 ～ 20 mの屋根には西から東方にかけて 1 ～ 2 mの段差で下がる曲輪Ⅹ・Ⅺ・Ⅻが造成されている。最大規模を誇るのが曲輪Ⅹの全長 30 m、幅 18 mで、西端には横矢を意識した張り出しが造られ、ここに虎口が取り付く。この東下段の曲輪Ⅺとは南北両側の肩口に存在する城道によって繋がる。さらに曲輪Ⅹ南東下方にも、急な尾根筋を下った斜面が緩やかな傾斜に移行するところから尾根筋先端までの間に曲輪ⅩⅢ・ⅩⅣ・ⅩⅤ・ⅩⅥ等、大小 8 面の曲輪が階段状に配置されている。最も大規模なものが端部に下方斜面との比高差約 3 mをもって防御が固められた曲輪ⅩⅥで、その端部には長さ 10 mの土塁とその内側に東曲輪面とは一段低い約 7 m四方の窪地が枡形状に見られ、北西隅には城道の存在を窺わせる虎口が存在する。

文献・伝承　『太平記』に康安元（1361）年、山名時氏による美作国侵攻に際して登場する「林野」

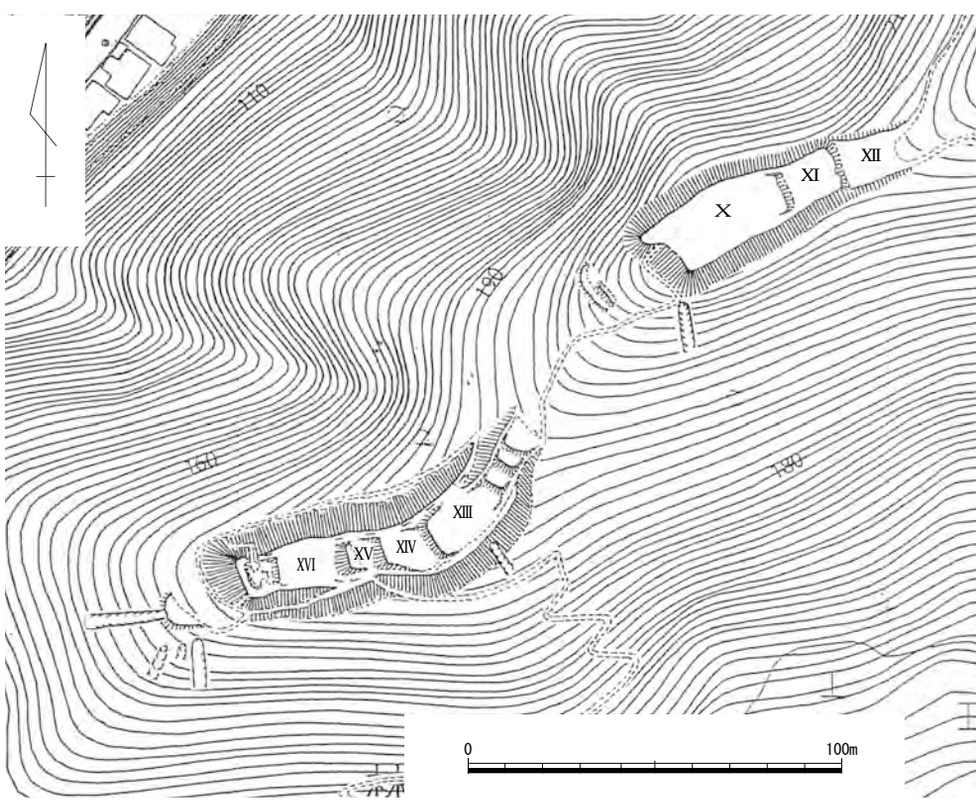
が林野城に比定される。天文元（1532）年以降は尼子氏の傘下におかれ、尼子氏撤退前後の永禄期（1558 ～ 1569 年）には江見久盛・久資の在城が知られる。さらに天正 7（1579）年以後は宇喜多氏の東美作地域支配の拠点となり、ここには戸川秀安・岡市亟が置かれていた。また、関ヶ原合戦後の慶長 5（1600）年以降美作国は小早川秀秋の所領となり、稲葉通政等が城番として、さらに慶長 8（1603）年以降は津山藩森氏が三代にわたって城を抱えていた。（島崎）



第 360 図　林野城跡縄張り図（1 /4,000）



第 361 図　林野城跡中央部周辺曲輪縄張り図（1 /2,000）



第 362 図　林野城跡西側曲輪縄張り図（1 /2,000）

写真 164　曲輪Ⅲ（西から）

写真 165　曲輪Ⅲ土塁（南東から）

写真 166　曲輪Ⅲ西下堀切（南から）

写真 167　曲輪Ⅰ基壇（西から）

写真 168　曲輪Ⅷ井戸（北から）

写真 169　曲輪ⅩⅣ・ⅩⅢ全景（西から）

写真 170　曲輪 ⅩⅥ 桝形（東から）

写真 171　曲輪Ⅸ全景（南から）

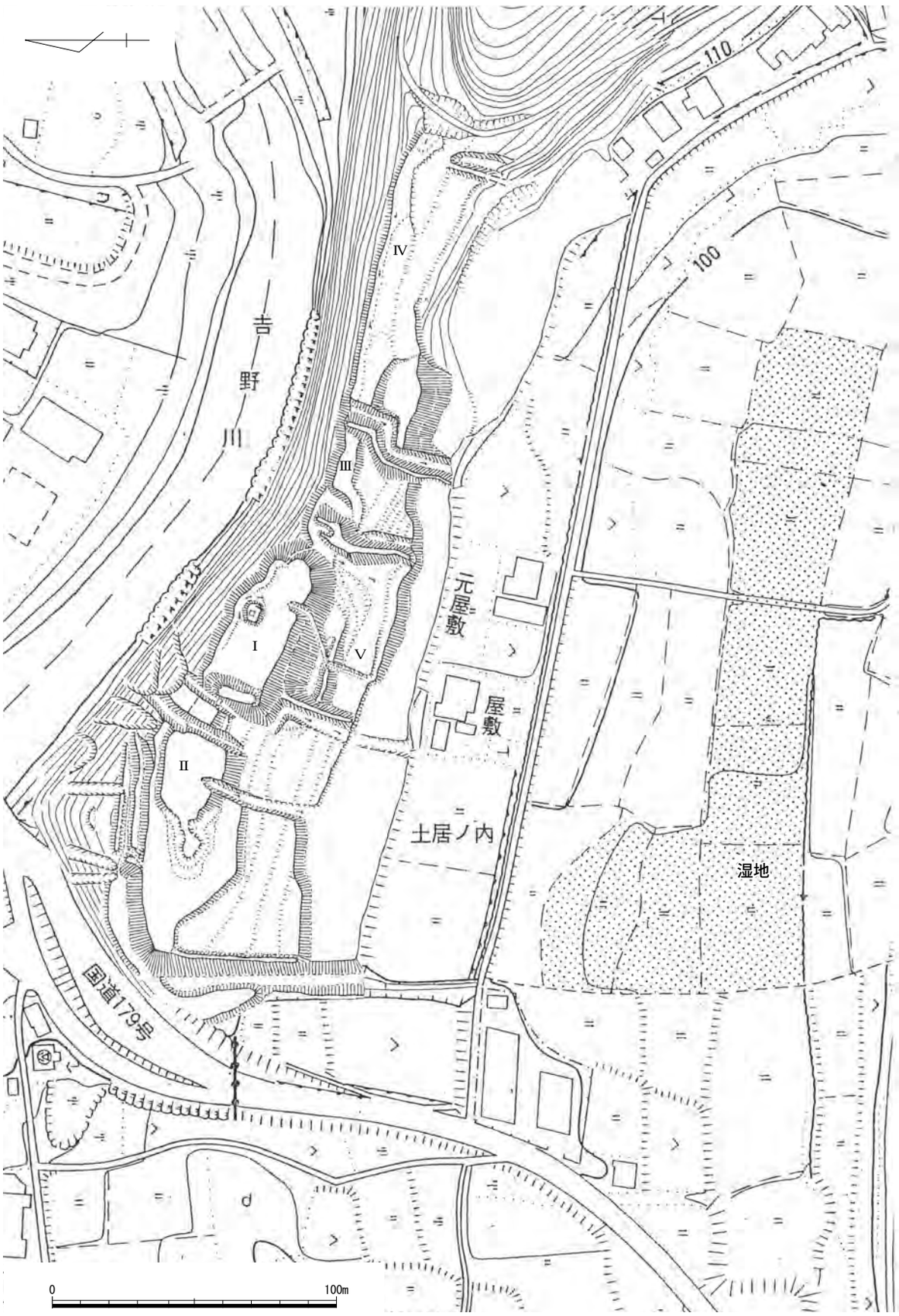
390　友野（ともの）城跡　　美作市友野・北原　　地図 22 左

立地　林野と作東との中間地点に存在する友野地区は、南流する吉野川が稗田山から長く派生してきた尾根裾を削りながらその南側に大きくＳ字状に蛇行した流路を刻んだ中に形成された入江状の地域である。城はこの友野地区の北背後に存在する東西 300 m、低位部との比高差 20 mを測る長い尾根筋に所在する。

概要　城の北限は吉野川によって浸食された 300 mにおよぶ険阻な斜面、西限は国道 179 号線によって分断され明確ではないがここに尾根に直交して南北に開削された幅 10 m、全長 80 mにおよぶ竪堀、東限は西限の竪堀から約 300 m尾根を上がった地点に造成された竪堀と麓に一部残る土塁とを結ぶ地点で、この間が城域として認識される。一方、南側にはこの尾根から南麓にかけて切岸を伴った大規模な平坦面が東西に長く存在する。ここには「屋敷」「元屋敷」「土井の内」等の地籍名が現存しており、城主や家臣団の館が存在していたことが窺われる。

城は、全長 300 mにおよぶ尾根筋を中心に南側斜面にかけて、これを南北に堀切や竪堀などで切って区画地形されたもので、頂部には大きく 4 面の曲輪が存在する。主郭である曲輪Ⅰは、「屋敷」「元屋敷」地名が残る麓の北の尾根に存在する長方形の曲輪で、2 m前後の地下げによる曲輪造成の結果、東西 55 m、南北 15 ～ 20 mの規模を測る。北を除く三方斜面には高さ 5 mを越える急勾配の切岸が造られ、また、西辺には全長 20 m、幅 7 m、高さ 1.5 mの土塁が西側の堀切からは約 5 mの比高差をもって存在する。なお、主郭北側には直径 7 m前後の高まりが磐座として削り残されており、そこには現在天神宮ならびに八幡宮が祀られている。虎口は、南辺中央部に存在し、斜面には横矢を効かせた斜路が取り付き、「屋敷」「元屋敷」へと繋がる。主郭の東と西側はいずれも最長 60 mに及ぶ堀切と竪堀が土塁を伴って連続して造成され、下段には全長 60 m、幅約 10 mの長方形を呈する曲輪Ⅴが造られている。曲輪Ⅱは、「土井の内」の北の尾根上に存在する全長 80 m、最大幅 30 mを測る曲輪である。城の西端にあるこの曲輪の西辺には、尾根から東斜面にかけてこれを切る幅 10 mの竪堀が 80 m以上にわたって掘られていて、さらにこの内側肩口には高さ 1 m程の土塁が造られるなど西端での防御をより強固なものとしている。一方、南側斜面には緩やかな自然斜面の広がりが存在するのみで、ここに曲輪は見られない。曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰと東端に存在する曲輪Ⅳとの間にあって、両者を画する 2 重の土塁に挟まれて存在する。頂部に造成された長さ 25 m、幅 6 m前後の曲輪である。南側は斜面で自然地形を残す。曲輪Ⅳは、城の東限である山側の竪堀と曲輪Ⅲの東にクランク状に掘られた堀切と竪堀によって画された全長 100 mを測るものである。尾根と南側斜面にかけては自然地形が見られるにすぎない。なお、城の南側に広がる低位部は、1988 年に岡山県教育委員会によってほ場整備事業に伴う確認調査が実施された。調査の結果、中世に遡る湿地帯の存在と、北側高所部からは鎌倉時代から南北朝時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

文献・伝承　慶長 9（1604）年の『供野村慶長検地帳』には「供野ほり」といった地名が見られるが、『古城之覚』には記載は見られない。『東作誌』によると城は「天神山」或いは「浄福寺」ともいうとして、北は厳壁で吉野川の上を覆い、南を大手口とするも城主は江見左馬助久次、あるいは江見四郎元盛と記す。また、同書中、三海田村に住む小坂田の系図によれば、その祖但馬守・河内守は「友野城主」であったという。（文献 133）　（島崎）



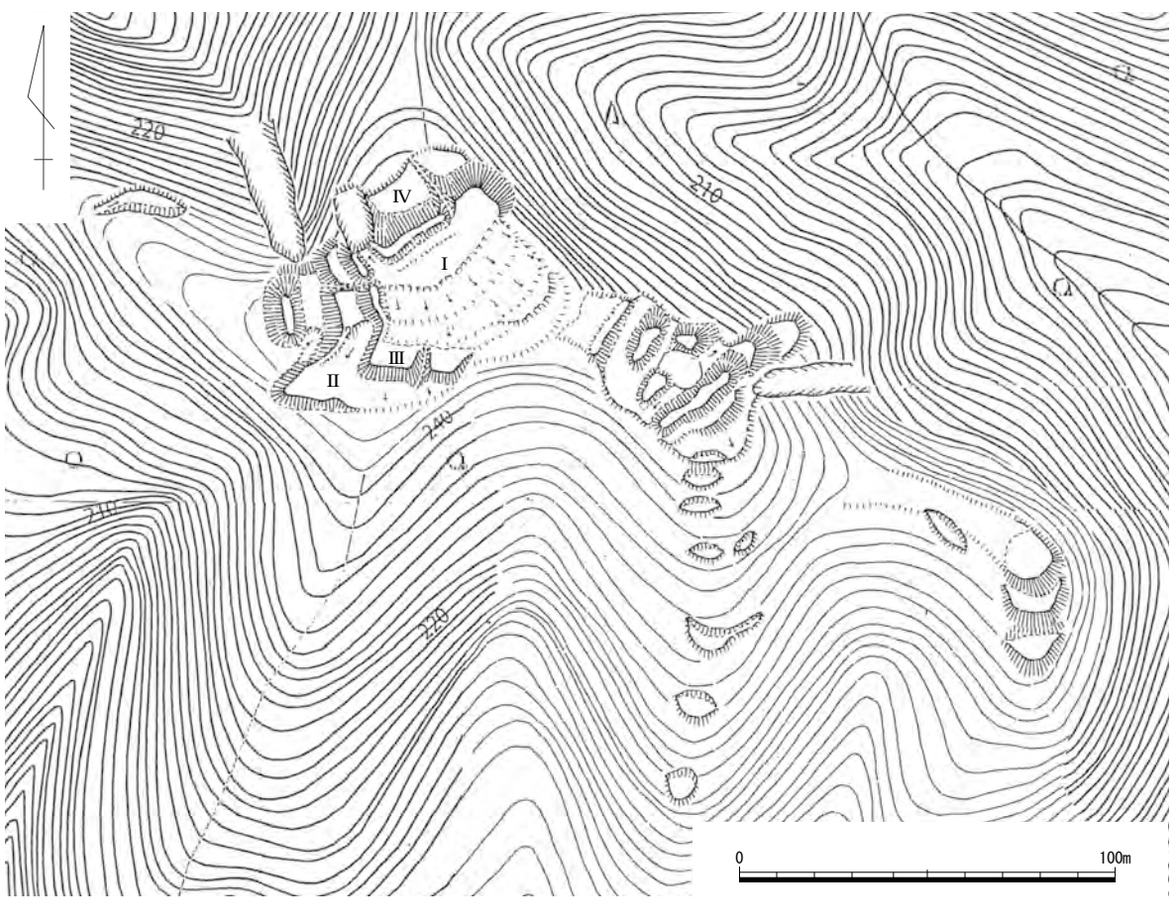
第 363 図　友野城跡縄張り図（1 /2,000）

391　緑青山城跡（ろくしょうさん）　　美作市平福・川北　　地図 22 右

立地　林野と作東を結ぶ吉野川右岸にあって、平福地区は楢原と山口とを結ぶ街道が交わる地域である。城は、この平福地区を西眼下に望む標高 240 mの山頂に位置する。

概要　北から続く比較的緩やかな尾根筋の南端頂部を中心に東側尾根筋にかけて所在する。西側は、尾根筋に幅約 10 mの堀切を掘り、その西側には同規模の土塁を造成し、西方からの侵攻に備えた防御線を構築している。また、この東側主郭Ⅰとの間には幅約 5 m、長さ 10 mの曲輪がこの堀切の 4 m上段にあり、さらに南側斜面端部には高さ 1.5 mの曲輪Ⅱが北からの傾斜面を残した状況で鋭角に造られ、横矢を効かせている。主郭は、頂部を削平した全長 40 m、最大幅 15 mの長方形の平坦面で、北と西側には長さ約 20 mの土塁が防御を固めている。ただし、南東側は自然の斜面となり曲輪が存在するのは南西側下段で、そこには中央に虎口を挟んだ長さ 25 m、幅約 7 mの曲輪が取り付く。また、主郭北下段には高さ 4 mの切岸によって造成された全長 30 m、幅 7 m前後の曲輪Ⅳが、主郭への城道を間に挟んだ状況で存在する。一方、主郭の南東側は自然地形が続き防御のための加工痕跡は認められないが尾根の先端部には尾根を切断する幅 5 m前後の堀切が 3 条とこれによって形成された上端幅 2 ～ 3 mの土塁の存在が、さらに下方の尾根先端部には曲輪が 3 面造成されている。

文献・伝承　『東作誌』には「緑青山」の「古城跡」として、城主は「難波備前守恒宗以来居住」と記されている。また、城は西向きで門と土居跡があり、他に「砦山」の存在が記される。　（島崎）



第 364 図　緑青山城跡縄張り図（1 /2,000）

392　比丘ヶ城跡　　美作市山口　　地図 22 右

立地　吉野川左岸の標高約 157 mの丘陵頂に立地する。比高は 40 mで、北西側の吉野川沿いの眺望が良好である。周辺には城跡が多く、吉野川を挟んで北西 1.4㎞に天王山城跡が対峙するほか、南東 1.1㎞に大畠城跡、南東 1.5㎞に久保木城跡、南西 1.3㎞に大屻城跡、西 1.9㎞に友野城跡、南西 2.5㎞に矢櫃城跡が位置する。

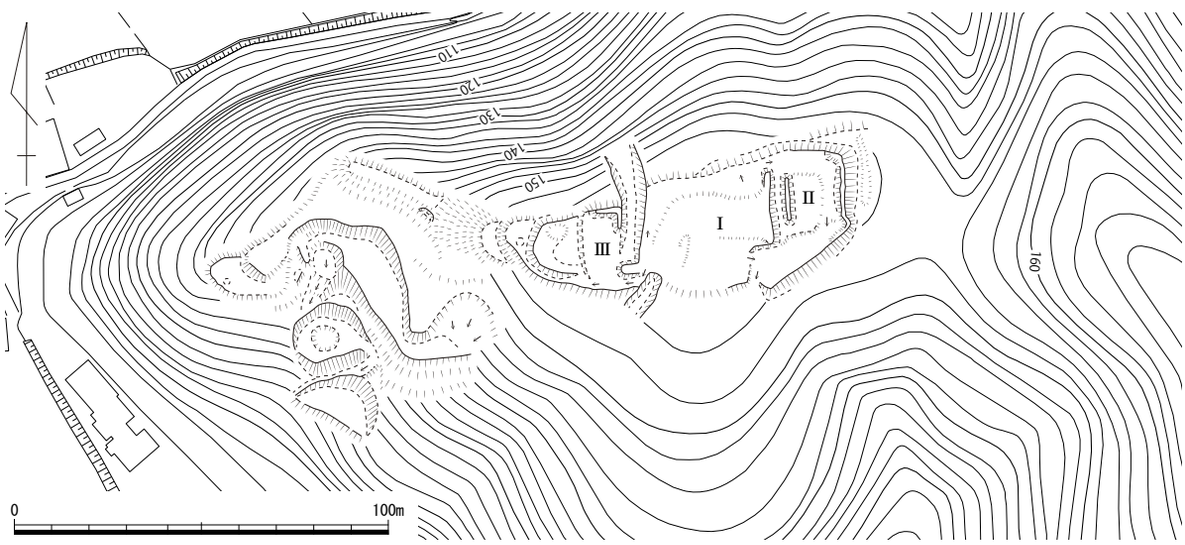
概要　城域は東西 175 m、南北 75 mと規模はやや大きい。頂部の曲輪Ⅰを中心とし、その東西の尾根上に複数の曲輪、南西斜面に帯曲輪や複数の小曲輪を構えた縄張りである。

頂部の曲輪Ⅰは東西 33 m、南北 30 mで不整方形を呈する。造作はあまく、南北にわずかに下がる。虎口は南西隅、北東隅、南東隅の３か所に設けられ、東西それぞれの曲輪Ⅱ・Ⅲに繋がる。各虎口の付近はわずかに平坦面を突出させて横矢掛けをなす。曲輪Ⅱは頂部東端に配置されており、中央に方形の段があり、その周縁は一段下がる。曲輪Ⅱの西側には低い土塁を設けることで、曲輪Ⅰとの間は横堀状となる。また、東辺に高さ２mほどの土塁を設け、南東隅は折れる。曲輪Ⅰの西側は南北の竪堀を挟んで曲輪Ⅲを構え、さらに小曲輪が３面連なる。曲輪Ⅲの北東隅角は低い土塁が鍵形に造られている。防御施設として、曲輪Ⅰと曲輪Ⅲの境は南側の虎口より北側を堀切状に区切り、北斜面に竪堀状に延ばす一方、南側の虎口より南斜面には竪堀を設け、曲輪Ⅰの西側を堅固に守る。

丘陵の尾根西端には造作のあまい 26 × 3 mの平坦面があり、その南西斜面には帯曲輪、その下段には小曲輪が３面程度配置されている。

文献・伝承　『東作誌』では康永年間に安東千代一丸が居城していたと伝えるほか、『美作古城史』では安東左右馬助が居城したと記す。　（米田）

写真 172　北側の竪堀（北から）



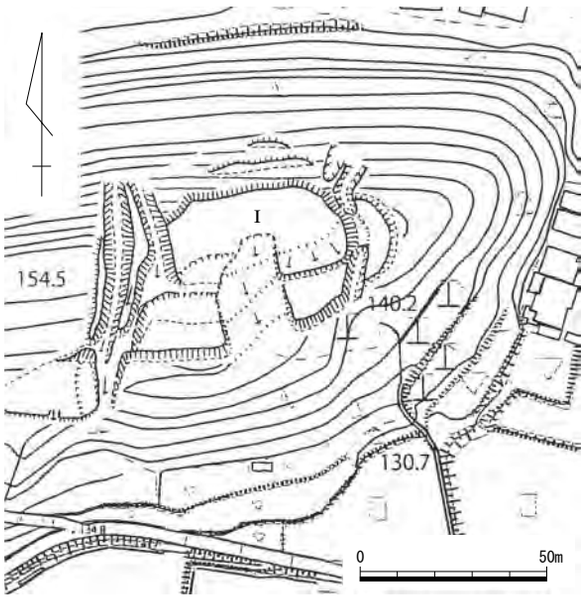
第 365 図　比丘ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

394　松田（まつだ）城跡　　美作市上福原　　地図 22 右

立地　山家川に沿って存在する東西に長い山塊の標高 154 mの東端頂部に城は所在する。

概要　城は、尾根の東端部からおよそ 90 mの地点を尾根に直交した上端幅５～８mの２条の堀切と竪堀で切り、さらにその東先端部も高さ約２mの切岸と竪堀で切ってこの内側を城域とする。規模はおよそ 40 × 20 mを測り、この範囲が主郭と考えられる。主郭Ⅰから南側には中央に自然斜面を挟む状況で、曲輪が２面造成されている。また、北側斜面にも全長 10 mと 25 mの曲輪が存在し、北側の防御を固めている。

文献・伝承　『東作誌』には、比丘ヶ城として城主不詳、或いは松田伊賀守とする。『英田郡史考』では天王山城として、城主は康安年間に山名氏との戦いで敗死した松田岩之丞とする。　（島崎）



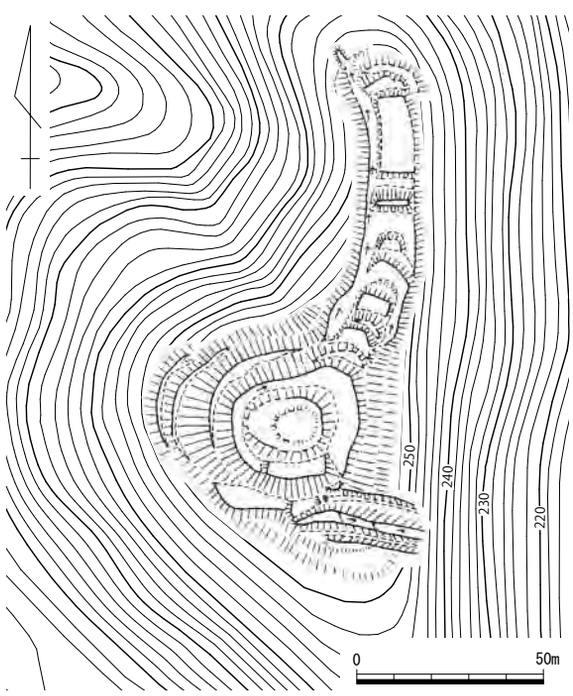
第 366 図　松田城跡縄張り図（１/2,000）

395　久保木（くぼき）城跡　　美作市原　　地図 28 右

立地　吉野川左岸にある久保木集落の南西方向に位置する山塊の尾根頂部に立地する。

概要　主郭上面には高さ約 0.5 mの低い高まりが認められる。その下方には帯曲輪が全周し、南斜面に腰曲輪が１面、西斜面に犬走り状の幅狭の腰曲輪が３面伴う。主郭から南方向に延びる尾根には、東斜面に沿って堀切または竪堀を２条掘削しているが、西斜面方向には延びておらず、このうちの１条は先述した南斜面の腰曲輪とつながる。一方、北方向に延びる尾根には、大小 11 面の腰曲輪が認められ、腰曲輪群の中央付近には尾根筋を遮蔽する高さ約２mの土塁が築かれている。また、各腰曲輪の西辺は通路となり、腰曲輪北端から城域外へ延びている。

文献・伝承　『東作誌』では安東一之丞、『英田郡史考』では安東頼信が居城したと記す。（澤山）



第 367 図　久保木城跡縄張り図（１/2,000）

396　越坂山（おつさかやま）城跡　　美作市岩辺・小ノ谷　　地図 23 左

立地　岩辺地区は、吉野川が大きく逆「コ」字状に蛇行した所で、地区の中心には標高 260 mの越坂山が存在する。城は越坂山山頂にあって、眼下には吉野川沿いに存在する低位部や街道を監視することが出来る。

概要　城は、南東から北西方向に約 240 mにわたって長く延びる越坂山の稜線上にあって、南東側の標高 260 mの最高所を中心として、さらにその北西側端部にも曲輪の配置が見られる。この間には、上端幅約 5 mの平坦面が約 100 mにわたって見られ、北側斜面からの攻城に対応する防御線として両者間を繋げる。途中、このやや広い鞍部の南西側斜面には帯状を呈する長さ 15 mと 30 m、幅 2 ～ 3 mの曲輪が上下 2 段に造成されている。

南東側最高所には、一辺約 20 mの多角形を呈する主郭Ⅰが存在し、この周辺には合計 7 面の曲輪が高さ 1 ～ 2 mの切岸によって梯郭状に配置されている。主郭の南東側は急斜面となるが、ここには南東側尾根筋からの敵の侵入に対する防御線として、斜面を幅 5 m前後で全長 30 mにわたって直線的に掘開した堀切と、さらにこの両端から東と南西斜面に向けて 50 mと 30 mの規模の竪堀が長く掘られている。さらに堀切部分と南東側竪堀部分については、外側肩口に竪堀掘開土を掻き上げて構築された土塁が連続して見られる。また、東側の竪堀に近接する北東側斜面には防御を固める意図で、長さ 5 ～ 20 m規模の曲輪が高さ 1 ～ 2 mの高さをもった切岸によって階段状に造成されている。

一方、主郭から北西約 200 mの北西側端部に配置された全長 60m、幅 20 mの曲輪Ⅱには、現在南西側前面を川原石による石積みによる基壇が造成され、ここに祠が祀られている。その規模は、全長 50 m、幅 15 mを測る。この南西側には虎口の存在が推測されるが、現在ここには麓から尾根筋を九十九折に上がってくる参道が取り付き、大きく改変されており不明である。

文献・伝承　『江見家記』には江見秀俊が岩辺山城主とある。『東作誌』では、城主を江見新左衛門尉秀俊、同伊賀守秀益父子とし、永禄 2（1559）年には竹山城主新免左右衛門尉宗貞のため落城とされる。『日本城郭大系』によれば城は享禄 2（1529）年鳥坂山城主江見為秀の子秀俊が築城し、永禄 2（1559）年に新免宗貞のため落城とある。

（島崎）

写真 173　遠景（西から）

写真 174　主郭Ⅰ（北西から）

写真 175　南東側堀切（北西から）

第 368 図　越坂山城跡縄張り図（1 /2,000）

397　三倉田（みくらだ）城跡　　美作市三倉田　　地図 28 左

立地　吉野川左岸、標高 251 mの山頂に立地する。比高は 160 mで、北側と西側の吉野川沿いが一望できる。周辺には北 1.6㎞に林野城跡、北 2.1㎞に三星城跡、南西 3.0㎞に勝間城跡が位置する。

概要　城域は東西 60 m、南北 150 mと中規模である。頂部の曲輪Ⅰを中心とし、北側に複数の曲輪や帯曲輪を構えた縄張りである。

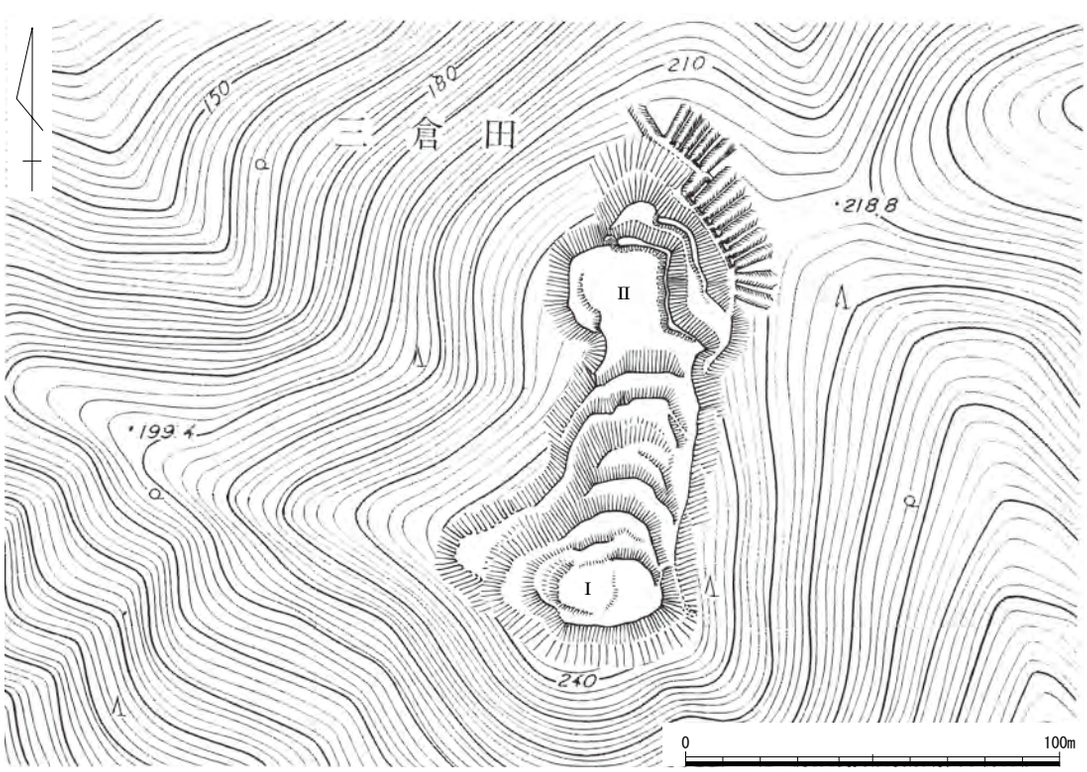
頂部の曲輪Ⅰは 22 × 18 mの楕円形を呈し、西半がやや高い。東端と南西端に虎口が設けられ、下段の帯曲輪に通じる。曲輪Ⅰより北斜面には帯曲輪が６面ほど連ねて配置されており、各帯曲輪の東端は曲輪Ⅱまで通路で繋がる。特に下段の帯曲輪は延長 70 mと長く、東側北辺は三重に折れて横矢掛けを設けている。これら北斜面に造られた帯曲輪群の北側、尾根北端には曲輪Ⅱが配置されている。曲輪Ⅱは 28 × 20 mの不整方形を呈し、東辺と北辺東半は幅広かつ長大で折れを伴う土塁を設ける。さらに曲輪Ⅱの北東下段には北東辺に土塁を伴う帯曲輪が配置され、その北西端は横矢掛けとなる。

防御施設として、尾根北端に 14 本からなる畝状竪堀を設けて堅固に守る。竪堀は南東から９本は曲輪Ⅱ下段の帯曲輪の切岸に接して配置されるのに対し、北西から５本はそれよりもやや下方に配して防御力を高めている。

文献・伝承　『英田郡史考』によれば、城主は広幡某で、康安年間（1361 ～ 1362 年）に落城したと伝えられる。

（米田）

写真 176　曲輪Ⅱ土塁（南東から）



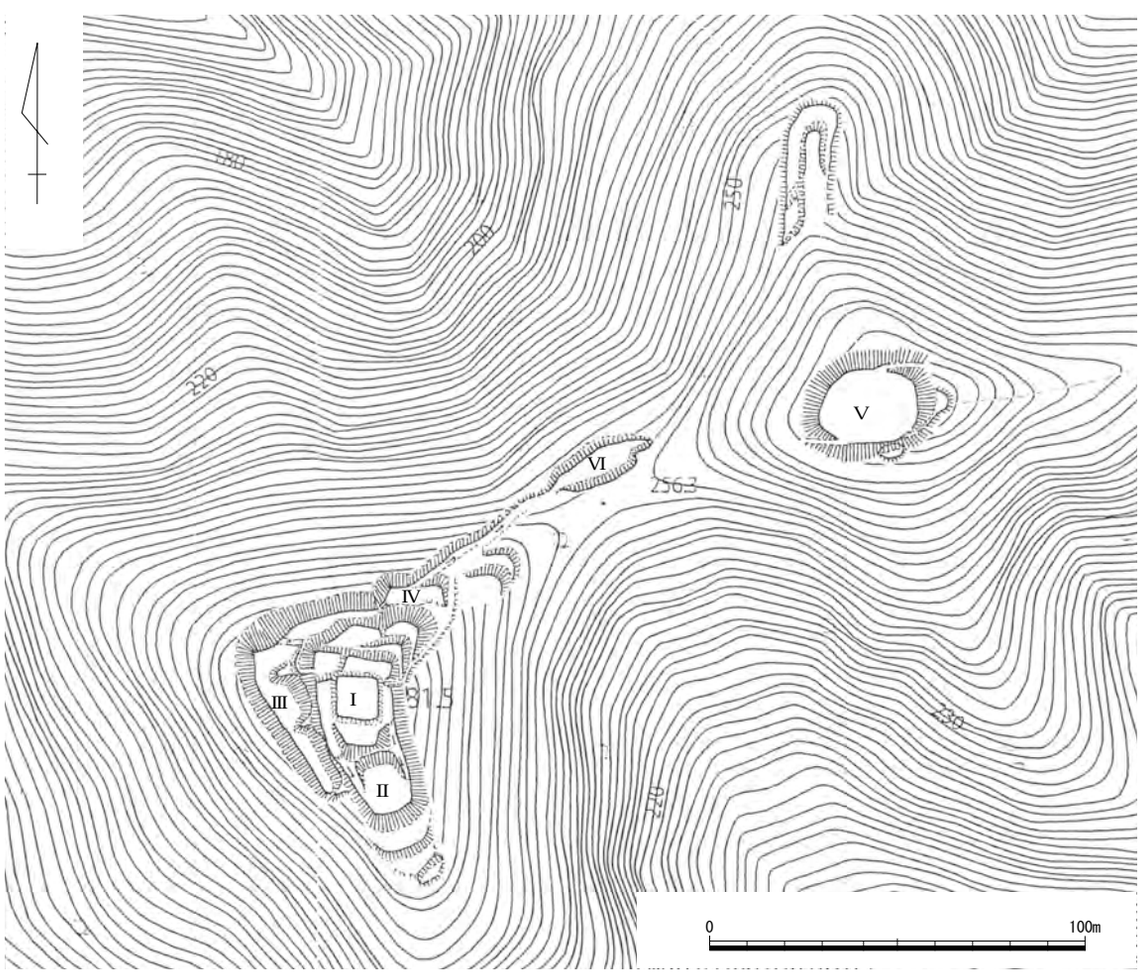
第 369 図　三倉田城跡縄張り図（１/2,000）　作図：畑和良

398　矢櫃山城跡（やびつやま）　美作市北原・猪臥　地図 28 左

立地　吉野川左岸にあって、支流の猪臥川と大原川に挟まれた標高 281 mの山塊頂部に位置する。山頂からは吉野川流域の各地区の眺望が効く。北方には直線距離にして約 1 ㎞に友野城が所在する。

概要　城は、標高 281 mと 280 mの近接する二つの山頂部に構築されている。中心となるのは西側山頂部である。主郭は頂部にあって中央に約 10 m四方の高さ数 10 ㎝の低い方形壇を置いた 20 × 25 mの曲輪Ⅰで、その南側下段には東西辺に通路を兼ねた斜めの土塁をもった曲輪Ⅱが付属する。また、主郭西と北下段には全体Ｌ字状を呈する曲輪Ⅲが高さ 5 mの比高差をもって存在する。主郭への城道は、鞍部から主郭へと繋がる尾根筋に造られた長い土塁沿いに存在していたようで、主郭北下段の長方形を呈する曲輪Ⅳ中央部に取り付く。一方、東の頂部には 20 × 25 mの楕円形の曲輪Ⅴが造成され、北東側と南西側に斜路が取り付く。なお、鞍部の北側には全長 30 m、幅 10 mの曲輪Ⅵが存在する。ここには「小屋の谷」地名が残り、籠城に際しての役割が窺われ、注目される。

文献・伝承　『古城之覚』は「北原之」として、城主を「山名」とし、『美作鬢鏡』では城主を「同人」（山名藏人）とする。『東作誌』は北原村の「矢櫃山」と猪臥村の「矢櫃山」では城主が異なり、前者では天正年中に後藤佐馬介の在城が、後者では猪臥入道と伝える。　（島崎）



第 370 図　矢櫃山城跡縄張り図（1 /2,000）

399　大屶（おおたわ）城跡　　美作市大原・山口　　地図 28 右

立地　大原川右岸の「稗田山」から南東に延びる山頂尾根部に所在する。

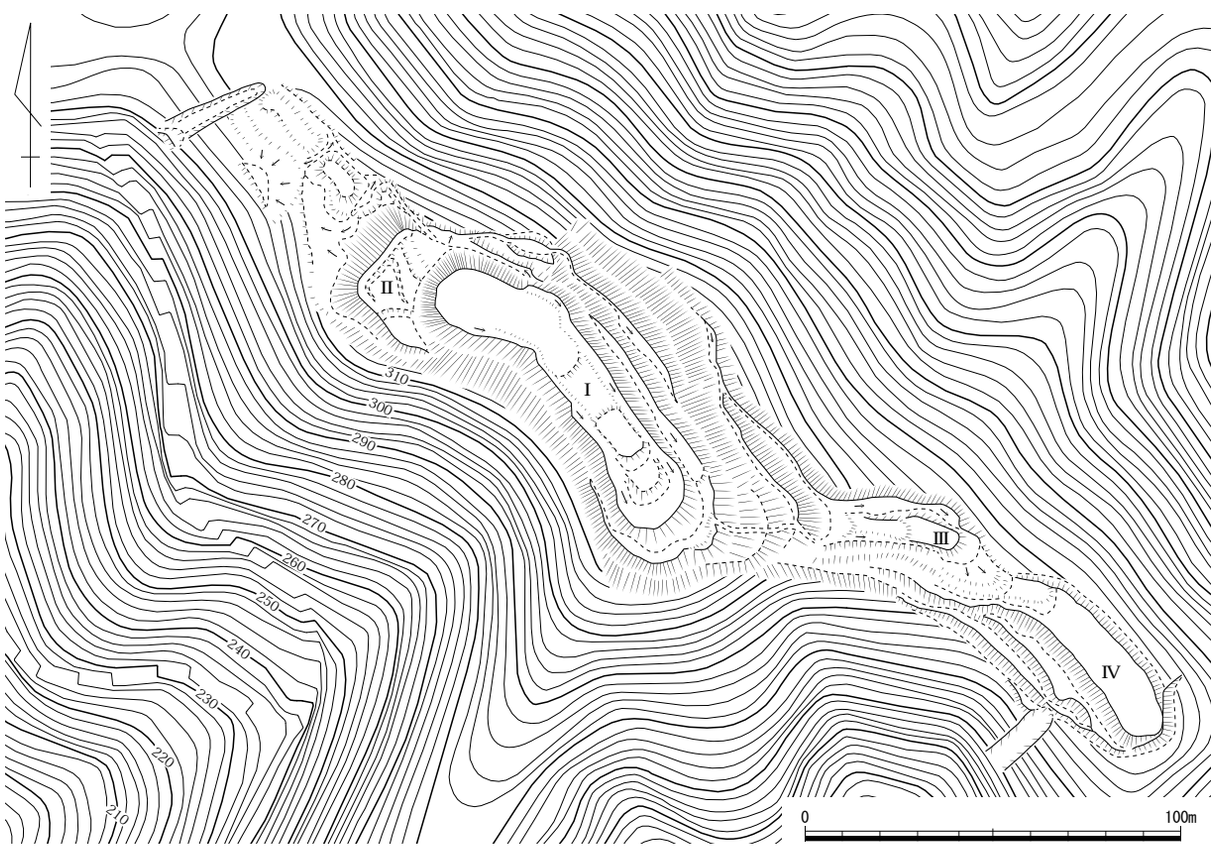
概要　ゆるく湾曲した尾根に沿って築かれた主郭（曲輪Ⅰ）を見ると、北半は削平度が高い平坦面を造り出し、南半は 2 面の小曲輪を配し、東西外縁部には幅約 2 ～ 3m の通路を設けている。一方で、中央付近は削平度が低くて、自然地形も残るなど、全体的には曲輪面の造作が一応でないといえる。

この主郭の北側には比高差 5 ～ 6m の急峻な切岸の下方に低い土塁が巡る曲輪Ⅱが築かれ、さらにその下方にも同様な切岸を造ることによって、二重の防護体制を取る。この切岸から北側約 40m には竪堀 1 本が設けられており、その間は自然地形と土壇状の高まりで構成される平坦地が認められる。

また、主郭の東西斜面は急峻な切岸が認められ、その下方には帯曲輪が築かれており、さらに東側斜面には 2 面程度の小曲輪または犬走りが造られている。このうち、東側斜面の下位にあたる小曲輪または犬走りは、主郭から約 14m 下方に築かれた曲輪Ⅲに取り付いている。この曲輪Ⅲも中央付近に自然地形を多く残し、両外縁部には通路を設けている。この南東側下方にも曲輪Ⅳが認められ、その南側斜面には細長い帯曲輪が 2 面築かれており、端部付近には竪堀が 1 本造られている。なお、この城域南東端から約 70m 付近の尾根鞍部には、土橋状となる通路が見られるが、性格は判然としない。

文献・伝承　『東作誌』によれば、大原村に城主不詳の「古城」の記述があり、同城の可能性がある。

（澤山）



第 371 図　大屶城跡縄張り図（1 /2,000）

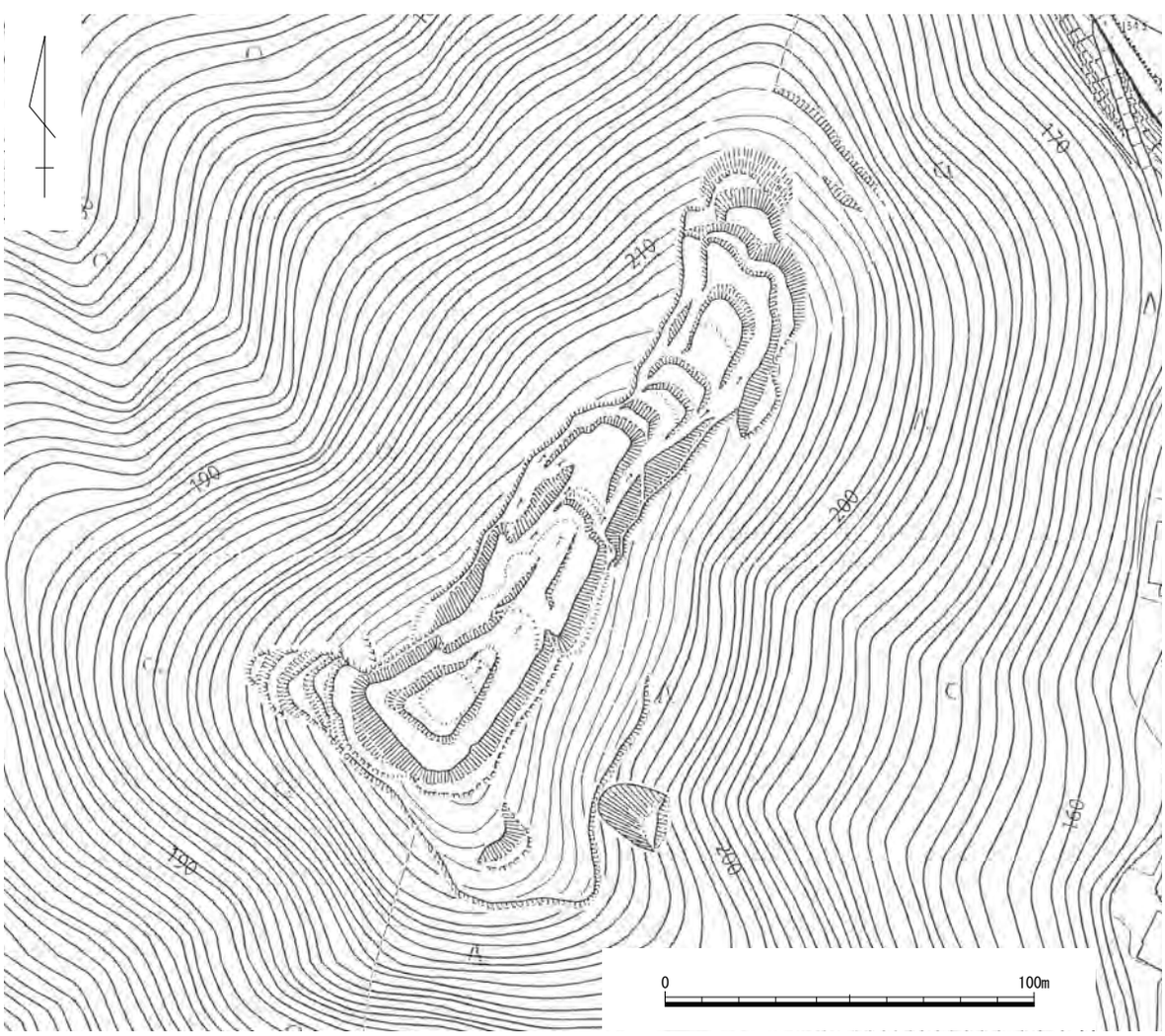
400　大畠（おおはた）城跡　　美作市山外野・山口　　地図 28 右

立地　林野と江見のほぼ中間地点に位置する山口は、楢原と平福を結ぶ街道が交わる地域で、要衝の地といえる。城は、角南に抜ける街道沿いの標高 237 mの独立山塊頂部に所在する。

概要　城は、麓との比高差 100 mを測る南西側を頂部とし、そこから北東方向に向けて緩やかに下る稜線上に構築されたもので、全長 200 mにわたって曲輪の連続した配置が見られる。尾根筋や斜面部には堀切や竪堀は存在しないが、尾根の両端と両脇には長い切岸を行うことで、特に南東側には高さ２～３mの急勾配の壁を構築しており、これが堀切に代わって防御線としての役割を担っている。

一方、城内は、南西側端部から中央部にかけての全長80 m、幅30 mの長方形を呈する範囲を中心に、北東方向に緩やかに下がる尾根筋にかけて高さ１m前後の階段状の曲輪が連続する。曲輪はいずれも尾根の中央部分に造られたもので、その両端には通路状に長い曲輪が存在する。

文献・伝承　『古城之覚』は「大畠之」として、城主を角南法印とする。『美作鬢鏡』によると山外野村大畑の城として城主を角南法印とする。『東作誌』で城は邑の戌の方にある山で、山半は山口村に罹れりとし、城主を角南法印とする。　（島崎）



第 372 図　大畠城跡縄張り図（１/2,000）

401　鷹ノ巣（たかのす）城跡　　美作市海田　　地図 28 左

立地　海田川の支流である舎利谷川右岸、赤松山から西に派生した支尾根の標高約 320 ｍの山頂部に立地する。比高は 180 ｍで、南北の斜面は急峻で険しい。眺望は限られ、榎地区の集落が西に見えるに過ぎない。近隣には城館が少なく、吉野川沿いでは北 3.2㎞に矢櫃城跡、北西 3.7㎞に三倉田城跡が位置する。

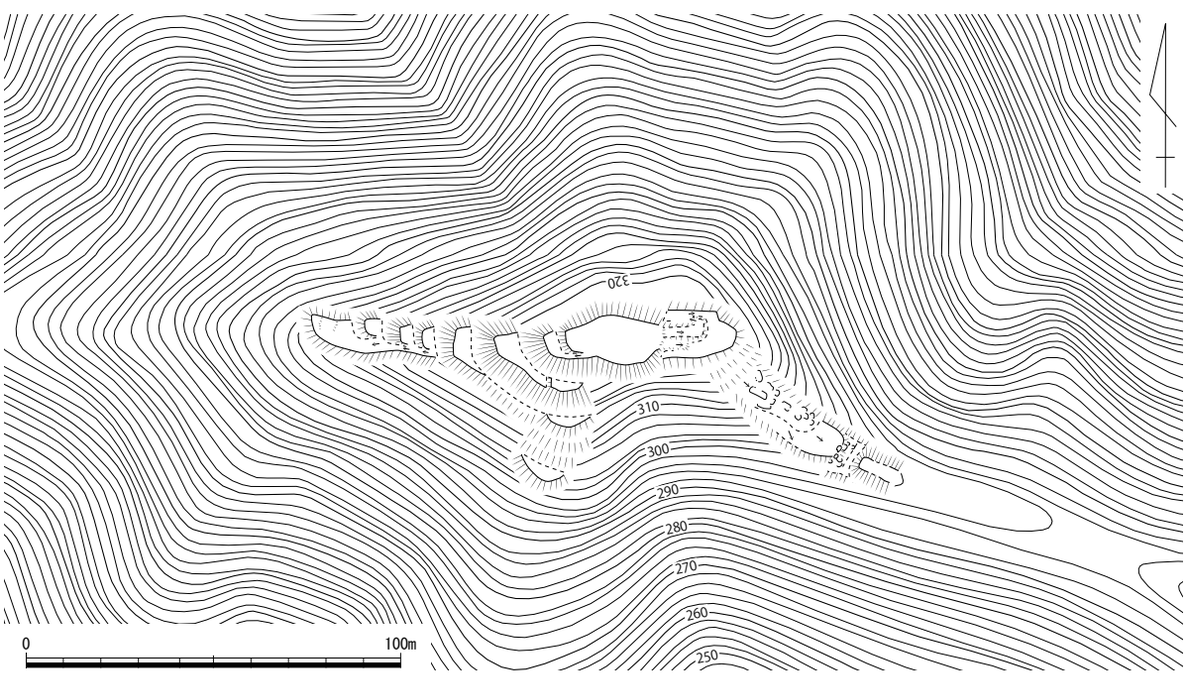
概要　城域は東西 150 ｍ、南北 45 ｍと中規模でもやや小さい。頂部に東西 26 ｍ、南北 12 ｍの不整長方形を呈する狭い曲輪があり、主郭と考えられる。その東端中央と南西隅の２か所に虎口がある。頂部から西に細く延びる尾根筋には小曲輪や帯曲輪が７面連なり、南に短く延びる尾根にも小曲輪３面が配置されている。一方、頂部の東側は中央が土塁状に残り、縁辺部は帯曲輪となる。

防御施設としては、南北斜面は険しい急峻な地形で、東西の斜面も急で狭く、部分的に断崖をなすところがあり、自然の要害となっている。加えて、東側の鞍部との境には１条の堀切で区切って守りを固めている。

文献・伝承　『古城之覚』によれば、江見次郎が城主と伝わる。江見次郎は『花房家記事』や『寛永諸家系図伝』に記されている「作州たかのすと申す山城」の城主「ゑみの次郎」を指す可能性があり、花房職秀が討ったとされる。

（米田）

写真 177　東側鞍部の堀切（北から）



第 373 図　鷹ノ巣城跡縄張り図（1 /2,000）

402　神田山城跡（かんだやま）　　美作市真神　　地図 28 左

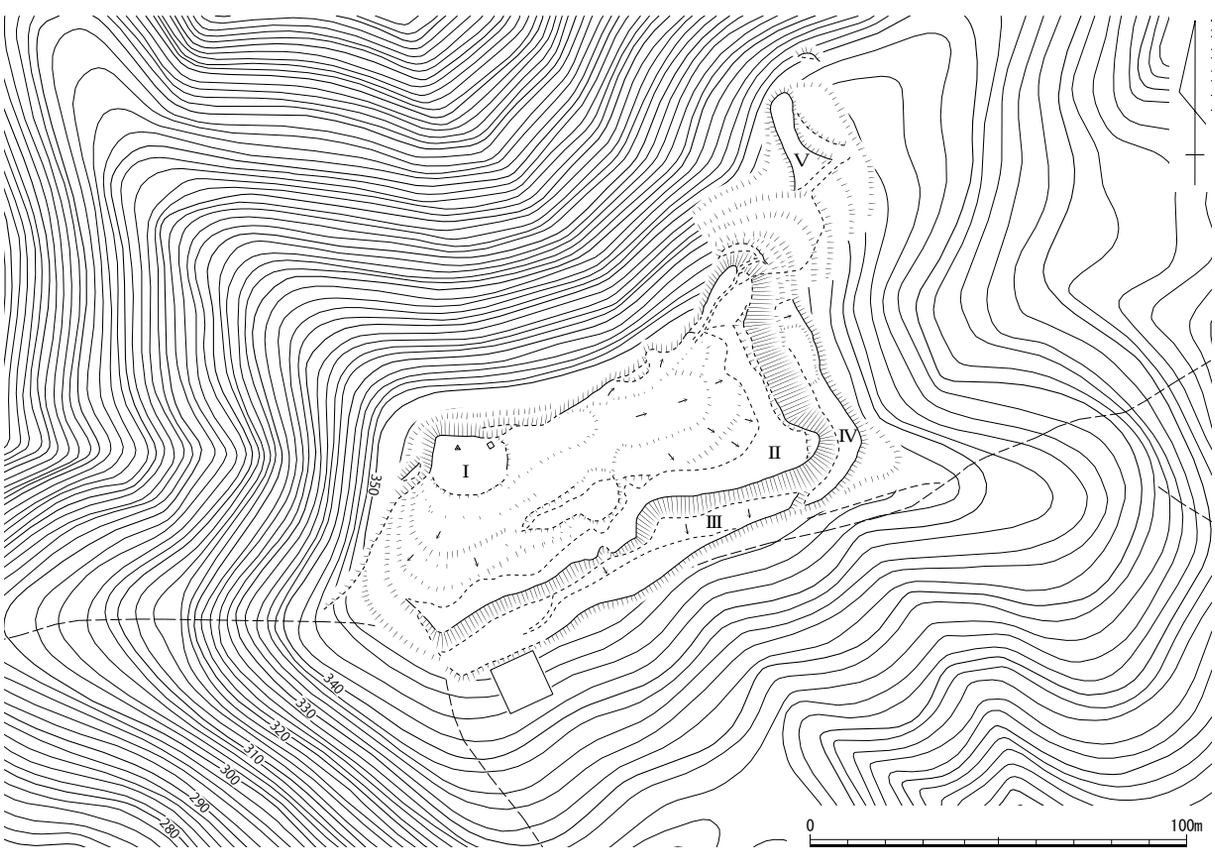
立地　河会川右岸の標高 350 mの愛宕山山頂に立地し、比高は 270 mである。眺望は北西の井口地区の集落を遠くに望むことができる。近隣では河会川を挟んで南 1.4㎞に高鉢城跡が位置する。

概要　城域は東西 170 m×南北 120 mで、規模はわりと大きい。頂部の小さな曲輪Ⅰを中心とし、南辺と東辺に狭長い帯曲輪を二重に配置する山城である。頂部の曲輪Ⅰは東西 20 m×南北 15 mと小規模で、北辺と西辺は直線的である。その周辺は自然地形を多く残し、緩やかに下がる。東・南斜面には帯曲輪Ⅱ・Ⅲを上下に配置している。上段の帯曲輪Ⅱは幅約 10 ～ 15 mで、北東隅、南東隅、南辺中央の３か所は横矢のように外方へ張り出す。加えて南辺中央は折れも認められる。

一方、下段の南辺の帯曲輪Ⅲは幅約 10 ～ 20 mで、削平があまく、南へ緩やかに傾斜する。下段東辺の帯曲輪Ⅳは南辺よりわずかに一段下がる。このほか、北東に張り出した尾根端に細長い曲輪Ⅴが配置されており、北側の眺望を効かしている。

全体的に斜面が緩い東側と南側の守りを堅め､北側と西側は急峻で自然の要害となる縄張りである。

文献・伝承　『古城之覚』では「城尾之城」とし、渋谷権王を城主と伝える。また、『美作鬢鏡』では城主を渋谷権之丞とする。このほか、『英田郡史考』では元亀・天正年間に渋谷権之丞国重の居城を宇喜多直家が攻め、落城したことが記されている。　（米田）



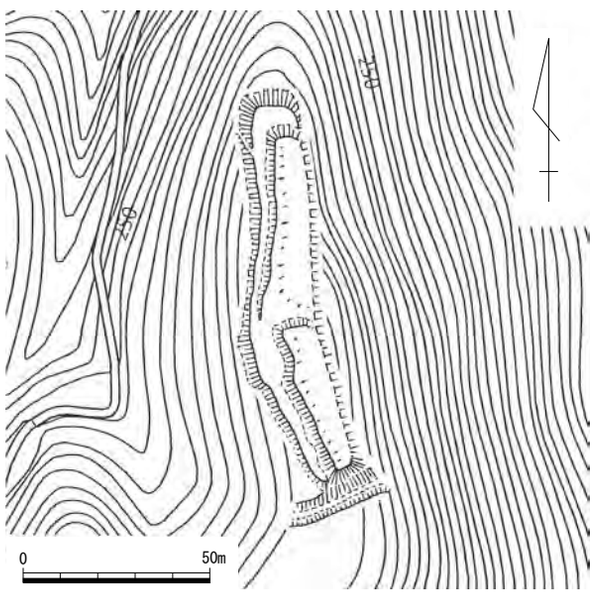
第 374 図　神田山城跡縄張り図（１/2,000）

403 尾越（おこし）城跡　　美作市柿ヶ原　　地図 28 右

立地　角南地区を東側に一望できる標高 270 mの山塊端部、低位部からの比高差 80 mの地点に所在する。

概要　城は、南から北に長く延びる幅 20 mの尾根の先端部から南方に約 100 mの地点に堀切を行い、この間を城地としている。城内には堀切から先端までの約 100 m間に西側の肩部にのみ高さ１m前後の低い切岸を行い、幅１～２mの犬走り状の曲輪を造成している。中央部と先端部には 10 m前後のやや広い面を造る以外は全て狭く、長期籠城のためより一時的な避難のために用意された城の性格が考えられる。

文献・伝承　『英田郡史考』には、尾越には香山と称する一族がいて当城城主の後裔と称していたことが、また天文年間に尼子氏による落城が伝えられる。　（島崎）



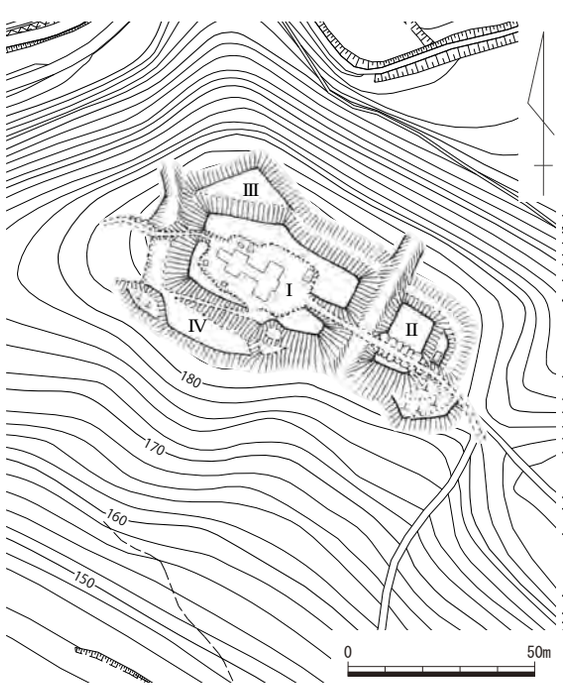
第 375 図　尾越城跡縄張り図（1 /2,000）

404 福（ふく）城跡　　美作市土居・蓮花寺　　地図 29 左

立地　山家川右岸の標高約 191 mの山端部に立地し、比高は約 50 mである。美作と播磨の国境にある杉坂峠から南へ 2.1㎞のところに位置し、美作国最東の城跡にあたる。近隣では西へ 4.5㎞に久保木城跡が位置する。頂部からは南・西方の眺望に優れる。

概要　城域は東西 90 m、南北 50 mと規模は小さい。頂部には曲輪Ⅰがあり、その東側には堀切を隔てて腰曲輪Ⅱを配置する。また、北側斜面には三角形を呈する腰曲輪Ⅲ、南西側には帯曲輪Ⅳを構える。防御施設として、曲輪Ⅰの東側に幅約６mの堀切、北西側に竪堀を設けて守る。

文献・伝承　『古城ノ覚』は「土居山之（城）」の城主を江見帯刀と記す。また、『美作古城記』は、後藤勝基が江見与一右衛門、安藤一族らを派遣して福城を攻撃したと伝える。　（米田）



第 376 図　福城跡縄張り図（1 /2,000）
作図：畑和良

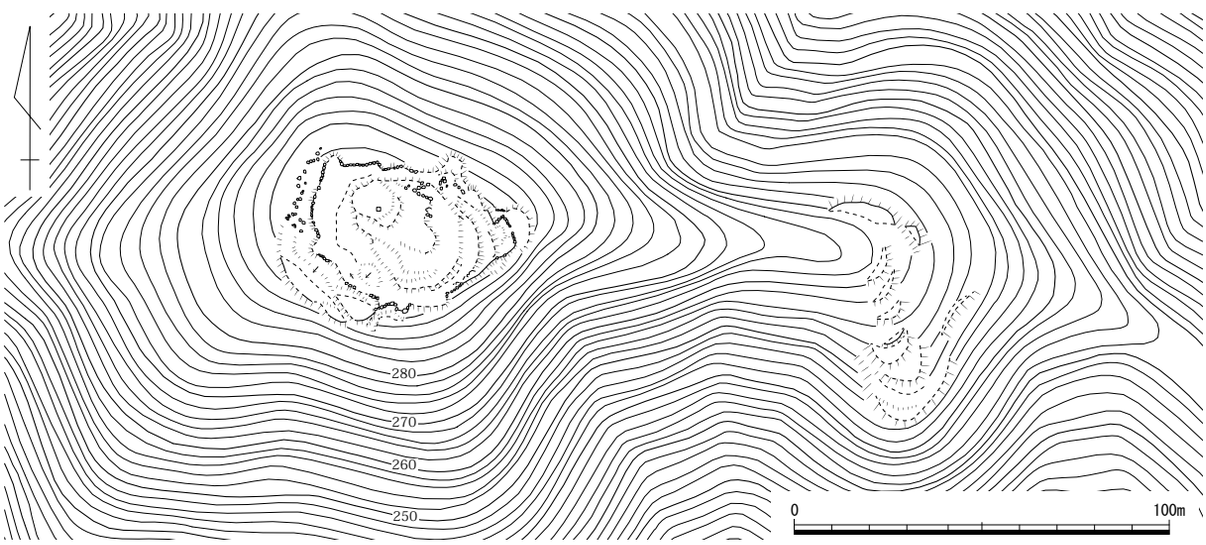
405　高鉢（たかはち）城跡　　美作市上山・中川　　地図 31 左

立地　河会川と渕尾川の合流地点から南東側に所在する「城山」と称する山頂部に位置する。

概要　単郭式の山城であり、主郭西側の最高所にやや広い平坦面が認められ、この西下方には比高差約 1 ～ 2 mを測る切岸が伴う。一方、平坦面の東側では低く段状に造りだした平坦面が広がっている。

主郭の外縁には折れを多用した横矢掛りが用いられ、その法面には部分的に石積みや石列が組まれている。主郭北東隅には枡形に塁線を屈曲させた 1 ～ 4 段の石積みで築かれた高さ約 1.5 mを測る横矢掛りが確認でき、櫓台状を呈している。また、主郭南側中央付近には塁線の喰い違いよって築かれた虎口が認められる。なお、主郭周辺には石材が広く散在している。一方、主郭から約 100 m東方の尾根部には 4 ～ 5 面程度造り出した加工段が認められるが、主郭と異なり石積み・石列や土塁は確認できない。東側からの侵入を防御するための簡易な施設と思われる。

文献・伝承　『古城之覚』によれば英田郡上山村の「上山之（城）」として、城主は浦上宗景の家臣である延原弾正少弼とする。『東作誌』では小川村の「高鉢山」として、城主は延原弾正とする。『英田郡史考』では河会村大字中川の「古城　高鉢山」とある。（文献 133）　（澤山）



第 377 図　高鉢城跡縄張り図（1 /2,000）

写真 178　主郭南側中央虎口（南東から）

写真 179　主郭北東隅横矢掛（北西から）

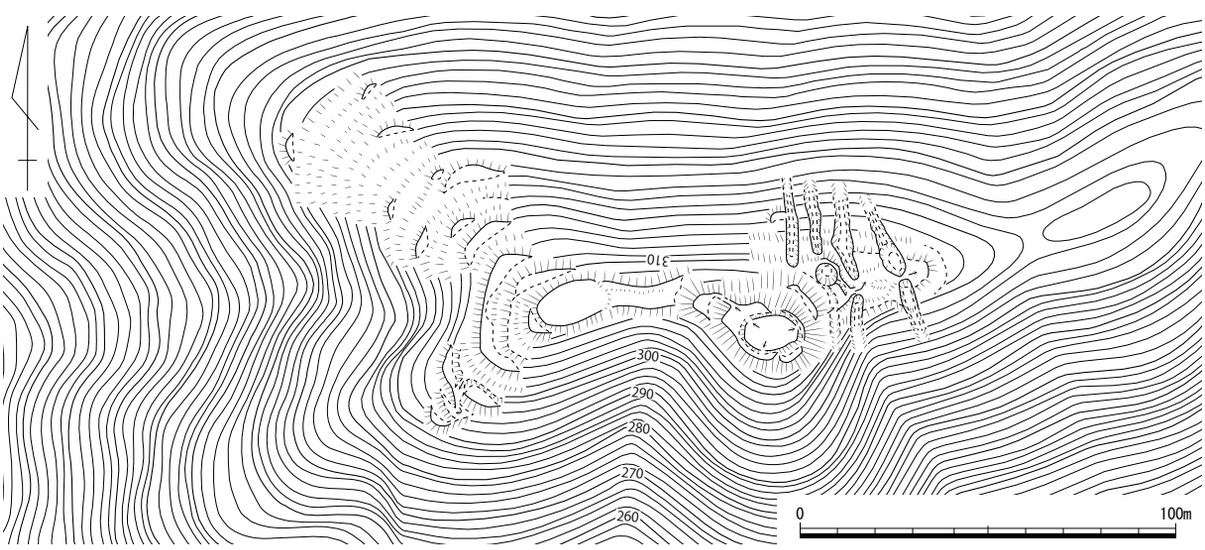
406　横尾（よこお）城跡　　美作市横尾　　地図 31 左・右

立地　横尾川右岸の山頂部に位置する。

概要　最高所に築かれた主郭の北東側と南東側には小曲輪が巡る。この主郭の東側下方には堀切３条と北側斜面に竪堀１本が確認でき、その尾根筋上には土橋が伴う。南斜面に比べて北斜面が緩いため、堀切・竪堀の深い掘削が下方に長く延びる状況が認められる。竪堀の中位付近には小規模な曲輪が見られる。また、主郭の北東側下方には直径約５ｍの大型の窪みが認められ、井戸の可能性がある。

一方、主郭の西側下方には、比高差約２～３ｍを測る切岸が伴う腰曲輪が２面築かれており、その下方には西端が幅広の楕円形状を呈する長曲輪が造られている。この長曲輪の下方にも小曲輪が３面認められ、さらに北西・南西支尾根には小曲輪を数面配置している。北西斜面には自然地形に沿って小曲輪が互い違いとなるように下方付近まで配置されており、南西斜面は通路状遺構を伴う小曲輪が上方付近でまとまるように造られている

文献・伝承　『古城之覚』によれば英田郡の「横尾之（城）」として、城主は山名一族とする。『東作誌』では「古城址」として、城主は尼子一族というと記す。また、『美作鬢鏡』では新田村と所在地を誤っている。（文献 133）　（澤山）



第 378 図　横尾城跡縄張り図（１/2,000）

写真 180　堀切（南から）

写真 181　腰曲輪（北西から）

第４章　歴史史料調査

凡例

・城が機能していた当時、関係者や見聞した人間が記した書状・日記その他の記録については、一次史料一覧表にまとめた。
・関係者自身やその子・孫が近世初頭に入って記述した覚書、比較的信頼できる中世軍記、近世初頭段階の地域住民の記憶を伝える文書など、リアルタイムの記録ではないが一次史料に準じる価値をもつ史料については、参考史料一覧表にまとめた。
・近世軍記については、史実に対する編集・改変や誤解・創作などを多く含んでおり、安易な利用が遺構の編年に齟齬を生じさせる恐れがあること、一つの出来事に関する叙述が大部に及び抽出自体が困難であることなどを踏まえ、本一覧表では調査・採録を行っていない。本報告書には軍記類の目録も掲出されると思われるので、その目録にしたがって各自で掲載書を読書されることをおすすめする。
・史料の配列と年月日について。史料には作成年代と内容年代とが一致しないものがある。例えば、史料の作成者が去年または数年前の出来事を振り返って記したもの（『鵜庄引付』など）、史料の作成者が老年になって自身の履歴や自身の関与した出来事についてまとめたもの（『赤松記』『牧左馬助覚書』など）、領主から依頼された禅僧などがある時点でその領主の履歴をまとめて記した賛文（『宇喜多能家寿像賛』）などがある。書状であっても、部下の去年の武功を翌年になって賞したようなものは、当然作成年と内容年にズレが生じる。こうした性質の史料が存在する点を考慮し、本一覧表では史料の配列・年月日覧の記載について、以下のような統一基準を設け、配列・年代記入を行っている。
　１．一次史料･参考史料ともに､史料内に記されている出来事の発生年次（以下､内容年）に沿って配列した。
　２．一次史料のうち、作成年と内容年にズレのあるもの、および参考史料の全てについて、年月日覧に（内容年）／（作成年）を記入した。
　３．賛文や覚書のように、一つの史料中に特定の人物が経験した出来事が一括して記述されているような史料については、出来事ごとに抽出した内容をそれぞれの発生年次に割り振った。
・史料の採録範囲について。古いものは平安末期の源平争乱期の記録（1,100年代後半）、新しいものは織豊期から近世初頭に活躍した人物がおおむね死去する 17 世紀中盤ごろ（1,650 年代）までの史料を取り扱った（宇喜多秀家が死去するのが明暦元年＝ 1,655 年である）。新しいもののうち、内容が一次史料と一致し信憑性の高さが窺える記録については、一部 17 世紀後半にかかるものも採録した。特に池田家文庫に含まれる岡山藩士奉公書のうち、寛永～貞享年間に作成されたものには城館関係の有益な情報が豊富に含まれていることから、積極的に採録を行っている。
18 世紀以降については、それ以前に成立した各種史料・伝承の編纂期に当たり、完全に二次的史料の範疇に入るため、調査・採録ともに見送った。

・近世まで存続する城館に関する史料の扱いについては、城の起源が確実に中世・織豊期に溯るものに限定して収録対象とした。近世を通じて存続した岡山城については、全時代の史料を網羅することは困難かつ本書の扱う範囲を超えているので、中世・宇喜多・小早川氏段階の史料に限定して収録している。備中松山城についても、今のところ中世・毛利氏段階までの史料に限って収録している。津山城については、中世史料が全く残されておらず先行する中世城館があったかどうか確証がないこと、実質的に近世初頭の新規築城であることを鑑み、史料の採録を見送った。下津井城のごとく近世初頭の段階で廃絶した事例については、現在把握できる史料を悉皆的に採録した。なお、陣屋・代官所・台場については、今回史料の採録そのものを実施していない。
・中世文書においては、城名をもって城主の代名詞とする文法がしばしば用いられる。これらは本来城主の動向を示す史料ということになるが、城主の動向は城の歴史・使用主体と直結するものであるため、こうした文法で城名を記す史料についても全てではないがその多くを収録している。
・加茂崩れ・八浜合戦など、一部の著名な合戦関係史料については、文中に城名が記されていないものも参考までに収録している場合がある。
・都市・城下町にかかわる史料、城・陣として利用された実績のある山岳寺院の史料、荘園経営の拠点である政所に関する史料も一部収録した。特定の領主と結びつく可能性のある屋敷・土居などの記述がみえる史料も採録したが、必ずしも居館的なものを表現したものではない可能性もあり、あくまで参考史料と考えていただきたい。
・中世文書のうち、書状類のほとんどには年紀が記載されていない。一覧表収録にあたっては、これらの史料を収載する資料集の年代比定に従って各史料の年代を決め配列しているが、近年の研究進展で年代比定がより確実なものに改められたものについては、最新の成果を反映させて配列を行った。また、特に研究成果のないもの・既存の研究成果が存在するものでも編者の検討の結果従来の年代比定を改めるべきと判断したものについては、適宜よりふさわしい年代を与え、配列を行った。
・上述のような作業によっても現状では確実な作成年を特定できない史料については、発給者の死去・没落時や勢力交代の画期など適宜の時点で、年未詳文書としてまとめて掲載している。
・本来縦書きの史料を横書きで表記するため、次のような基準を設けた。
　1．引用した史料原文に割注・傍注・挿字が含まれる場合は、割注・傍注が付されている語句の直後に《割注：○○》《傍注：○○》、挿字箇所に《○挿字：○○》と表示した。
　2．古文書独特の長い繰り返し記号（「く」を縦長にしたような記号）は、「〳〵」に置き換えて示した。
　3．刊本に編者による注が施されている場合は、注の対象となる文字列の直後に〔　〕で括った注記を挿入している。校訂注によって異本の語句を示している場合は、〔異本：○○〕と表記した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入している場合は、挿入箇所に〔○異本：○○〕と表記した。
　4．本資料編の編者が独自に注を付す場合は、注の対象となる文字列の直後に【　】【異本：○○】と記述して示した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入する場合は、挿入箇所に【○異本：○○】と表記した。
　5．見せ消しについては、訂正後の語句のみ二重下線引きで表示した。訂正前の語句については出典書を確認願いたい。

・各史料については、専門家・研究者のみならず広く一般の読解の便をはかるため、抄録部分について逐一現代語訳を載せている。わかりやすさを優先して大きく意訳を進めており、編者の能力の問題もあって万全の訳となっていないと思われるが、史料内容の大まかな把握は可能になっているはずである。

・以上のような編集状況をふまえ、利用者諸賢におかれては、年代比定・内容意訳など各自適否を検討された上で利用されることを希望する。

・一次史料一覧表、参考史料一覧表に続いて、引用文献一覧表を掲載した。一次史料一覧表、参考史料一覧表の再右列にある文献番号は、この引用文献一覧表の文献番号に準じている。なお、引用文献番号は史料読み仮名を 50 音順に並べたものである（順不同）。　　（畑　和良）

表 5　一次史料一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
1	佐々木直貞請文／大賀文書	常寿院門跡領美作国高倉庄事、（中略）渋谷三郎左衛門尉重見以下輩、構城塁於当庄、致濫妨候	常寿院門跡の荘園である美作国高倉庄に、渋谷重見らが城郭を構えて乱暴を働いている。	城塁	（佐々木）左衛門尉直貞	観応三年八月七日	1352年	13
2	足利尊氏御判御教書案／上月文書	美作国英多城合戦之時、致忠節之由、赤松筑前守貞範所注申也、尤以神妙	美作国英多城の合戦で上月源七が忠節していたとの報告を赤松貞範から聞いた尊氏が、源七の働きを褒めたもの。	美作国英多城	（足利尊氏）	文和弐年二月十三日	1353年	13・93
3	安積盛兼軍忠状／安積文書	為作州英多城凶徒退治、依筑州御発向、被差進赤旗一揆之間、去十月十日、馳向彼城、致日夜合戦、十二月十一日、致没落之期、抽軍忠畢	美作国英多城を拠点とする敵を退治するため、赤松貞範が出陣した。これにあわせ、赤松氏から赤旗一揆に出動要請があったので、その一員だった安積盛兼は去る十月十日から英多城に攻め寄せて日夜合戦し、十二月十一日に城が没落した時、軍忠に励んだ。	作州英多城	安積平次盛兼	文和二年十二月	1353年	13・63
4	足利義詮御判御教書／昭和61年東京古典会古典籍下見展観大入札会出品文書	於美作国河述城、致忠節之由、赤松筑前守貞範所注申也、殊以神妙	相賀一族が美作国河辺城にて忠節を尽したと赤松貞範より報告を受けた義詮が、その働きを褒めたもの。	美作国河述城（335河辺構跡・336河辺城跡）	（足利義詮）	文和三年後十月四日	1354年	13
5	足利尊氏御判御教書／上月文書	美作国鞍懸城事、且令警固、且可致忠節	尊氏が上月左近将監に対し、美作国鞍懸城を警護し、忠節を尽すよう指令したもの。	美作国鞍懸城（384鞍懸城跡・658　楢原城跡）	（足利尊氏）	文和四年正月十七日	1355年	13・93
6	播磨国矢野庄公田分学衆方年貢并雑穀等算用状／教王護国寺文書	国下用　（中略）一斗三升　代百文　作州石堂城々誘人夫催促力者雑事 一石五升　同夫十五人粮米半分定 一斗三升　代百文　作州栗【粟】倉城々誘人夫拾人催促力者雑事《割注：七月十日　十日役》九斗三升九合二勺　同夫十人内半分五人十日役□〔粮〕米　（中略）一斗三升　代百文　竹山城衆内長夫催促力者□□（雑事）、八月八日六斗三升二勺　同夫粮米《割注：八月十日ヨリ、十月廿五日マテ、半分定》	東寺領播磨国矢野庄に対し、赤松氏から美作国石堂城・栗倉城（栗倉城の誤読）・竹山城の「城誘人夫」＝築城のための人足を差し出すよう、催促があったことを示す記述。	作州石堂城　（619　石塔城跡・620　立石城跡・番号なし　堂ヶ峰城跡） 作州栗倉城（栗倉城）（番号なし　堂尾城跡・358佐淵城跡・363小原山王山城跡・632　景石城跡・582　清水構跡・360黒山城跡） 竹山城　（367竹山城跡）	田所代秀恵・政所祐尊	貞治二年二月	1363年	79
7	『蔭涼軒日録』	浦話云。（中略）昔我祖父美作入道為御敵追討向作州。時大敵籠篠向城。攻落彼城。討取大敵。（後略）	浦上則宗が話すところによると、むかし則宗の祖父浦上美作入道が敵を追討するため美作国へ向かったところ、大敵が篠向城に籠っていたので、この城を攻め落とし敵を討ち取ったのだと言う。※明徳の乱からほどない時期の事件と推定されている。	篠向城　（88篠向城跡）	亀泉集証	（明徳三年ごろヵ）／長享二年正月十三日	1392年ごろ／1488年	28・47
8	播磨国矢野庄学衆方年貢・雑穀等算用状／教王護国寺文書	一、国下用事（中略）六百五十文　作州林野城奉行并守護代方一献分持参入目 百廿五文　同陣之粮物《割注：此時御巻数付畢》	東寺領播磨国矢野庄関係者が、美作国林野城の奉行と守護代に応対した際の献金や必要経費を記録したもの。	作州林野城　（389林野城跡）	田所家久・明済	明徳四年四月七日	1393年	27・98
9	『建内記』	伝聞、美作国垪和右京亮城、《割注：官軍方也、》赤松勢自播州攻之、仍城衆自放火退散了、垪和右京亮者雖発向之未及其地、在他所云々、	伝聞によると、美作国の垪和右京亮（幕府方）の城を、赤松満祐の軍勢が攻めたところ、籠城衆は自ら城に放火して退散した。城主右京亮は（京都から現地に）向かったが、現地に辿り着けず他所にとどまっている、という。	美作国垪和右京亮城　（240高城ヵ）		嘉吉元年八月十四日	1441年	53

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
10	細川持之感状写／『閥閲録』巻七之四　益田越中	去廿三日作州高尾代被焼落之由、従山名匠作注進到来候、神妙之至候	去る八月二十三日、益田兼堯（増田殿）は山名匠作（教清）に従って出陣し、美作国の高尾城を焼き落とした。そのことを山名氏からの報告で知った幕府管領細川持之が、兼亮の働きを褒めたもの。	作州高尾代　（番号なし　上岡城跡ヵ）	(細川)持之	嘉吉元年八月二十九日	1441年	13・85
11	『蔭涼軒日録』	藤月廿四日赴作州、同廿五日至湯郷土居館、於長興寺守歳、経新正五日、又往土居、	蔭涼軒主亀泉集証が文明十二～十三年ごろの播磨・美作方面への旅について、延徳元年になって回想して書いた記事。文明十二年十二月二十四日、亀泉は播磨国を発って美作国へ旅立ち、翌日に湯郷土居館へ到着した。同地の長興寺で年越しした亀泉は、正月五日に再び土居館へ赴いた、という。湯郷は亀泉にとって「旧枌」＝郷里という。	湯郷土居館　（575　湯郷土居館跡）	亀泉集証	文明十二年十二月二十四日～文明十三年正月五日／延徳元年十二月二十八日	1480～81年／1489年	48・98
12	難波行豊軍忠状／備前難波文書	同年五月、播磨国雖入御手、備州事、於福岡小鴨太和守構用害、依国中相踏、御退治急度難叶之間、行豊於京都、浦上美作守相談、愚兄掃部助并同名等、可致計略之由申下之処、小鴨一族被官等、為山名修理大夫調談、美作国打越之時、掃部助并同名等於路次懸合、宗者十余人討捕之、依其利、国中御被官衆同心、差寄小鴨館追散（中略）応仁四年正月廿四日、於美作国鴛淵山合戦之時、愚兄九郎左衛門尉・同掃部助子両人、同名三人悴者四人、其外中間等、以上十余人令討死（後略）	応仁元年五月、備前国では小鴨大和守（山名氏重臣）が福岡に要害を構築し、国中を掌握していたので、すぐに退治することは難しかった。そこで、赤松方の難波行豊は京都で浦上則宗と相談し、兄の掃部助や一族に計略をめぐらすよう指示した。ちょうど小鴨一族と家臣たちが、山名政清と相談するため美作国へ向かったので、掃部助らは路次で小鴨一党を襲撃して勝利し、その勢いに乗って小鴨を館から追い散らした。（中略）応仁四年正月二十四日、美作国鴛淵山の戦いで、兄の九郎左衛門尉・掃部助ら十余人が戦死した。	於福岡小鴨太和守構用害・小鴨館（〈備前190〉福岡城跡・〈備前197〉福岡奥之城跡） 美作国鴛淵山（353鴛淵山城跡）	難波十郎兵衛尉行豊	文明十三年四月七日	1481年	11
13	山名政之注進状案／蜷川家文書	兵部少輔元之・小太郎已下、去月晦日夜、当国竹田没落砌、赤松被官大河原引執作州久多庄令許容候、剰南条与力者共、同国奥津と申在所構城由候	山名元之・小太郎らが、八月三十日夜に伯耆国竹田から没落した時、赤松氏家臣の大河原氏は彼らを美作国久田庄にかくまった。それどころか、伯耆国の南条氏の与力たちが、美作国奥津という場所に城を築いた。	同国奥津と申在所構城	(山名)政之	(文明十三年）九月五日	1481年	13・62
14	安東政藤注進状／古文書	御料所作州小吉野庄御経御年貢之事、被仰出候、去年春、山名兵部強入国之刻、有元民部丞為張本、山名方被官人村々へ引入、号給主御年貢納取、有名無実之儀候之間、既在庄下用不及了簡式候（中略）結句自去月山名兵部被官人所々押領候之間、御料所政所可去渡由候間、弟候者、在庄不叶候て、彼在所可罷退由注進仕候	幕府御料所美作国小吉野庄の代官安東政藤が、山名軍の侵略によって年貢納入が絶望的である旨を幕府奉行人飯尾元連（大和入道）に伝えたもの。文明十六年の春に山名政清（兵部）が入国した際、有元民部丞が山名方に味方してその家臣たちを村々へ導き入れ、年貢を押さえてしまったこと、結局この八月には政藤の弟も山名方に政所を明け渡すよう言われ、在庄できなくなって退去したことなどが報じられている。	政所	(安東)政藤	(文明十七年）九月十二日	1485年	13・67
15	大内政弘判物／山口県文書館蔵常栄寺文書（『長防風土記』十二　山口宰判・香山常榮寺所蔵文書に写しあり）	為山名中書合力、至作州進発之儀、当郡中加下知之処、子息出陣感悦（中略）代官在陣之仁事、自身着国相待之由、自院庄重々被申下（後略）	大内政弘が「当郡中」（石見国邇摩郡の諸将）に対し、山名中務少輔（政理）に協力するため美作国へ進発するよう命じたところ、大家出雲守はこれに応じ子息を出陣させた。政弘はそのことを感謝する一方、代官を在陣させている者についても本人の入国を待っているとの「院庄」の意向を伝え、それが実現するよう郡中の者と相談せよ、と命じたもの。	院庄　（134院庄館跡・135院庄構城跡）	(大内政弘)	文明十七年十一月十五日	1485年	13・67・102
16	『蔗軒日録』	作州旅人至、美・備両国今無事、茆庵《割注：山名大夫殿事也、》、今年四十八歳、未年《割注：火姓人》、書写山ニ与金吾同居、中務少輔殿在院庄、（後略）	美作国からやってきた旅人の談話を、本日記の記主季弘が書き留めたもの。旅人によれば、美作・備前両国は現在無事という。山名政清（茆庵）は今年四十八歳で、播磨国書写山に山名政豊（金吾）と一緒にいる。中務少輔殿（山名政理）は院庄に在住している、という。		季弘大叔	文明十八年四月十一日	1486年	54
17	『蔭涼軒日録』	自藤左方中間太郎次郎上洛。山名殿出奔之注進也。（中略）此日作州院庄之敵退散云々。	後藤則季（藤左）の中間が上洛し、山名政豊が逃亡したことを報じた。この日、美作国院庄にいた山名軍も退散したとのことである。	作州院庄　（134院庄館跡・135院庄構城跡）	亀泉集証	長享二年七月二十三日	1488年	13・47
18	『蔭涼軒日録』	夜来禅孝自備前福岡来。去月廿日浦上三郎四郎入福岡之代。上下二百人許有之。一夜之中千余人相集也。敵一人亦無之。作州亦同前。浦上伯耆守在院庄之代猛勢云々	夜来に禅孝が備前国福岡からやってきた。七月二十日に浦上宗助が福岡の城に入った時は二百人ほどの人数だったが、一夜のうちに千余人の人が集まったという。敵は一人もいなくなった。美作国も同様で、浦上基景（伯耆守）が院庄の城にあって猛勢をふるっているという。	福岡之代　（〈備前190〉福岡城跡・〈備前197〉福岡奥之城跡） 院庄之代　（134院庄館跡・135院庄構城跡）	亀泉集証	長享二年八月七日	1488年	13・47
19	『蔭涼軒日録』	赤松公湯治、垸和新三郎宅被居之云々、藤左者居現大寺修復長奥【興】寺、以可替赤松公之宿云々、	赤松政則が湯治のため、垸和新三郎の居宅に滞在しているという。後藤則季（藤左）は現大寺におり、赤松政則の宿所とするため長興寺を修復しているという。	垸和新三郎宅	亀泉集証	長享二年十月十五日	1488年	13・68・98

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
20	『蔭涼軒日録』	富田土佐守来、（中略）作州小原陳松拍、今月十七日有之云々、	富田土佐守（赤松家臣）が来て言うには、美作国小原の陣にて、今月十七日に松拍（赤松家の伝統行事）が行われたという。	作州小原陣	亀泉集証	長享三年二月二十五日	1489年	13・69
21	『蔭涼軒日録』	（前略）今日初二、南方両宮三十三回忌、於大原陳所営之、自宝林寺僧衆五十員、作州所々僧七十員集之、（後略）	今日初めて、後南朝の王子二人の三十三回忌が、大原の陣所で営まれた。播磨国の宝林寺より五十人の僧が、美作国のあちこちから七十人の僧が集まった。	大原陣所	亀泉集証	延徳元年十二月五日	1489年	70
22	『蔭涼軒日録』	古沢弥三郎自播衆。播州之時宜件々雑話。今月四日於作州讃甘陳藤左被官。長。高橋。田中。三人打殺之。後藤修理亮為大将。	古沢弥三郎が播磨からやってきて、播州の様子をいろいろ雑談した。今月四日、美作国讃甘の陣にて、後藤則季（藤左）の家臣長・高橋・田中の三人が殺された。後藤修理亮が大将だった。	作州讃甘陣	亀泉集証	延徳二年正月晦日	1490年	13・48
23	『蔭涼軒日録』	江見岡殿宅江雷落。一家中悉焼失。人馬者無灾也云々	江見一門の岡氏の居宅に落雷があり、一家中が全て焼失した。人馬は無事だったという。	江見岡殿宅	亀泉集証	明応二年五月二十九日	1493年	49
24	氏未詳実平書状／井関家文書	（前略）美作国真壁庄領家職事、自先々御代官職被仰付、致取沙汰候処ニ、同地頭方依仏果寺領両家職一所ニ可有成敗由にて、去九月六日より□〔大ヵ〕勢入部にて、即領家政所屋へ捕懸発向候、就其御百姓等及逐電、在所儀、無正躰罷成候（後略）	美作国真壁庄領家職は、以前から実平が代官として管理していた。ところが、地頭方が仏果寺領と一緒に自分が支配すると称して、九月六日に大勢を率いて入部し、領家方の政所屋に攻めかかってきた。そのため庄内の百姓も逃げ出し、在所は異常な状態になった。	領家政所屋	実平	明応五年十月二十九日	1496年	13・50
25	赤松則実書状／豊楽寺文書	今度籠当城、各寺僧衆粉骨之由、白国備前守申候、神妙候（中略）、殊坊中悉破脚之由候、言語道断之次第候	「当城」への籠城に参加した寺僧衆の奮戦ぶりにつき白国宗貞（備前守）より報告を受けた赤松則実が、その功労を褒めたもの。この合戦で豊楽寺も大きな損害を受けたとある。	当城　（276伊勢畑城跡ヵ）	赤松則実	年未詳八月六日	15世紀末～16世紀初頭	7
26	刀銘　忠光	備前国住長船忠光 於作州院庄為丹治則久作之 永正元年八月吉日 及心処不可有此上者也	備前長船の刀鍛冶忠光が、美作国院庄の守護所にて、守護代中村則久（丹治は中村氏の本姓）のために作刀したことを示す銘文。忠光の自信作であることも記入されている。	作州院庄　（134院庄館跡・135院庄構城跡）	忠光	永正元年八月	1504年	105
27	鵤庄引付／斑鳩寺文書	同明ル年十七年三月ニ、美作国中村、従御屋形依可有御対治御墳〔憤〕ニ、義村様御自身箸〔荷〕崎取福寺迄御出陣、其□〔後ヵ〕白幡城エ御馬ヲ被寄、御一家已下ノ諸勢ヲ作州中村館エ被遣候処仁、在所ヲ取退、岩屋ノ城構楯籠間、数日雖被攻無落居所仁、浦上掃部助村宗、元ヨリ中村一味ノ間、後詰ニ自身従三石城打立テ、色々計略ヲ被廻間、寄手ニ意替之衆在之テ、俄寄手ノ陣同キ十月六日ニ破、少〔小〕寺加賀守ヲ始テ、数百人被打畢、	守護赤松義村による岩屋城攻撃。永正十七年三月、義村は美作国の中村氏を退治するため、自ら播磨国白幡城まで出馬して御一家衆以下の将兵を美作国の中村氏の館へ差し向けた。中村氏は館から撤退して岩屋城に立て籠もったので、赤松軍は数日間攻めたが落ちなかった。その間に浦上村宗が自分に味方する中村氏を助けるため、自ら三石城を出陣し、いろいろ計略を仕掛けた。すると、赤松軍の中に心変わりする者が現れ、十月六日に赤松軍は浦上軍に敗北し、小寺則職（加賀守）をはじめ数百人が戦死した。	作州中村館 岩屋ノ城　（189岩屋城跡） 三石城　（〈備前162〉三石城跡）	西政所実厳・東政所信誉	永正十七年十一月二十七日	1520年	51・71
28	宇喜多能家寿像賛／岡山県立博物館蔵（『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡邑久郷村吉弥所蔵文書に賛文の写しあり）	十月三日、村宗入作陽、陣乎岩山南、能家将二千余徒、敵軍如雲、其勢雖当、士卒皆散、纔残者七十人、同四日、能家一戦而勝、同七日、敵軍瓜潰矣、村宗斬数百人首、帰于三石	十月三日浦上村宗は美作国に入り、岩山の南に陣取った。宇喜多能家は二千余の兵を率いていた。士卒は敵軍の多さに驚いて散り散りになったが、十月四日、能家は残った者を率いて一戦を挑んで勝ち、敵軍を瓦解させた。村宗も数百人を討って三石に帰った。	岩山　（189岩屋城跡） 三石　（〈備前162〉三石城跡）	九峰宗成	永正十七年十月三日／大永四年八月	1520年／1524年	15・16
29	浦上村宗感状写／『武家聞伝記』巻第七　備州赤坂郡広戸村清兵衛所持文書	今度作州岩屋面合戦之事、各可決安否旨令儀定、去ル廿三日夜小寺藤三・大河原弾正左衛門等両陣に交号名（中略）四日未（虫喰）処即切崩数輩打捕段、村宗（虫喰）屋城中南条紀伊守・中村已下同前令検知畢、忠節無比類候	村宗が宇喜多能家（和泉守）に与えた感状。今回の美作国岩屋での合戦の際、能家ら浦上方の諸将はここで勝敗を決することを定め、九月二十三日の夜に岩屋城を包囲する赤松方の小寺・大河原氏の陣に攻めかかり、今月四日には赤松軍を切り崩して数人を討ち取った。こうした能家の手柄については、岩屋城中にいた南条紀伊守と中村則久らが確認しており、その忠節は比類ないものである、と能家を称えている。	作州岩屋・□屋城中　（189岩屋城跡）	浦上掃部之助村宗	（永正十七年）十月二十三日	1520年	19
30	江原佐次寺領支証施入状写／幻住寺文書	去歳永正拾七年辰歳、岩谷御陣為後巻、浦上掃部助殿并松田孫治郎殿卒軍勢、倭文口ヨリ幻住庵宮腰ニ陣ヲ御居候	去る永正十七年、岩屋城包囲陣の背後を攻めるため、浦上村宗・松田元陸（孫治郎）が軍勢を率い、倭文口から幻住庵宮腰にかけ陣を構えた。	岩谷　（189岩屋城跡）	江原和泉守佐次	（永正十八年）四月十五日	1521年	10
31	新見国経書状／東寺百合文書ヤ函二一五	就作州之儀、自尼子方合力之儀被申候、去年五月より今ニいたり、子共番替ニ高田表ニ立置、大儀不及申候	美作国のことにつき、新見国経は尼子氏か合力するよう命じられ、去年の五月から今まで子供を高田城包囲陣に参加させていた。	高田　（33高田城跡）	（新見）国経	（天文二年）六月二十三日	1533年	11・28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
32	赤松晴政書状／石見牧家文書	去十三日、於岩屋山下被及合戦、始南条治部数多被討捕由候、誠肝要候、春以来堅固被相践、粉骨不及是非候	十一月十三日、尼子軍が岩屋城に攻め寄せた際、城下で防戦し南条治部らを討ち取った三浦次郎の武功を、守護赤松晴政が称えたもの。三浦氏は同年春以来、岩屋城を堅固に守っていた。	岩屋山下　（189岩屋城跡）	(赤松)晴政	(天文九年）十一月二十七日	1540年	18・28
33	岩屋寺快円日記	此砌、作州篠尾中村殿没落、追討八百人、築田ノ城三浦殿落居、大勢被討畢、アサ井ノエキ殿大勢被討畢、尼子民部様、如此御高名、同亀井殿・河本殿ナリ	天文十年五月ごろ、尼子詮久が亀井・河本氏らを率いて美作・備中国へ攻め込み、篠尾の中村氏、月田城の三浦氏、呰部の植木氏を破って大勢を討ち取った。	作州篠尾 築田ノ城　（54月田城跡）	快円	天文十年五月三日	1541年	1・28
34	浦上政宗感状／美作江見文書	去八日、至英多構、敵相動処、依粉骨得勝利、殊被疵之段、忠節無比類	十二月八日、敵が英多構に攻め寄せた際、江見右衛門大夫・江見与三郎は浦上方について奮戦し、負傷しながらも勝利した。こうした江見一族の働きを、浦上政宗が褒めたもの。	英多構	(浦上)政宗	(天文十年代前半）十二月十二日	1540年代	11
35	大内氏奉行人連署書状／石見牧家文書	去比村上左京進令敵同意、既一城取誘、雲州衆相共雖出張、即時取懸、被追崩之由候、御勝利無比類候	村上左京進が敵に同意して城を築き、尼子軍と一緒に出陣してきた際、三浦貞久は即刻これの討伐に向かい、勝利した。この三浦氏の働きを大内義隆の重臣が褒めたもの。	一城	(陶)隆房・(陶)隆満・(青景)隆著	年未詳六月八日		18・28
36	氏未詳職貞書状／井関家文書	仍真壁庄御補任之事、（中略）被下候間、以其筋目せいはい可仕由申候処ニ当国守護代より岩屋入城之諸侍へ兵粮領所として被出候条、于今然々さり不被渡候	美作国真壁庄の代官に任命してもらったので、その名目をもって支配に当たろうとしたところ、美作国守護代が岩屋城に入城する諸侍に真壁庄を兵糧料所として給与してしまい、今も返却してもらえずにいる。	岩屋入城　（189岩屋城跡）	職貞	(年未詳）十二月十日		50
37	尼子晴久袖判尼子誠久・牛尾幸清連署知行書立／石見牧家文書	一高田庄并草賀部村（中略）右此旨高田衆へ可被仰渡候、為向後、晴久袖判被仕候也	高田衆（高田城を本拠とする三浦氏一族家臣団）に対し、尼子晴久が三浦氏所領として認めた高田庄以下の領地を目録として示したもの。	高田　（33高田城跡）	尼子式部少輔誠久・牛尾遠江守幸清	(天文二十年カ）十二月十六日	1551年	18・28
38	氏未詳吉弘書状／牧山家所蔵文書	去年拾月十四日於山下合戦之時、被射鑓脇、被太刀疵、忠節無比類候、于今当城被相詰候之条、為加給と、堀坂一分之内、安積玄蕃允分壱町相計候	弘治元年十月十四日、山下における合戦で活躍した中西孫九郎の忠節を褒め、彼が現在「当城」に在勤している代償として堀坂で所領を加増することを伝えたもの。	当城	吉弘	弘治二年九月二十日	1556年	10
39	牛尾員清奉書写／『美作国諸家感状記』西々条郡塚谷村桜井家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去〔○異本：ル〕十二日於岩尾山〔異本：ナシ〕表、斎藤孫市郎方被及合戦候之処、別而御粉骨之由令披露候、無比類之旨相心得可〔異本：ナシ〕申〔○異本：之〕由ニ候	十二月十二日に岩尾山城で斎藤孫市郎実次が戦った際、その部下桜井与十郎が特に奮戦した。そのことにつき報告を受けた尼子氏からの称賛の言葉を、尼子氏家臣牛尾員清が桜井与十郎に伝達したもの。	岩尾山　（179医王山城跡）	牛尾次郎右衛門員清	(永禄二年）十二月十六日	1559年	28・99
40	斎藤実秀判物写／『美作国諸家感状記』西々条郡塚谷村桜井家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	於〔異本：ナシ〕今度〔○異本：於〕岩尾山表、実次鑓渡候之条〔異本：処〕、脇ニて〔異本：而〕同前ニ〔異本：ナシ〕鑓被仕候段、寔忠節無比類次第候	上記と同じ合戦の史料。斎藤実次が岩尾山城で戦った際、その脇で槍働きをした桜井与十郎を、斎藤実秀が褒めたもの。	岩尾山　（179医王山城跡）	(斎藤)実秀	永禄二年十二月十八日	1559年	28・99
41	後藤勝基書状写／『美作国諸家感状記』勝北郡梶並東谷上村富坂家所持文書	植月庄城領分之内北方八郎丸名・丸久名・則寄名之儀、由緒之儀候之条、如前被召抱	後藤勝基が植月庄内に三星城領を設定したが、そのうち北方八郎丸名ほかは富坂氏伝来の所領だった。そこで勝基はこれらを富坂右京進に返付し、以前のように支配するよう伝えている。	（350三星城跡）	(後藤)勝基	永禄三年五月二十七日	1560年	28
42	江見久盛書状写／『美作国諸家感状記』英田郡三海田村小坂田善兵衛・勘兵衛所持文書	今度籠城牢身之条、鷹取庄内為元土居〔○異本：分〕職并豊国之内一色八段令扶持候	倉敷籠城に参加して苦労した小坂田管兵衛に対し、久盛が恩賞として美作国鷹取庄・豊国庄内で所領を与えたもの。	（389林野城跡）	(江見)久盛	永禄三年七月十一日	1560年	28
43	江見久盛感状写／『美作国諸家感状記』吉野郡壬生村七郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	於三星山下、被及〔異本：ナシ〕合戦被衝鑓之条、忠節無比類候	三星城の麓での合戦で槍をふるって手柄を立てた江見左馬助を、倉敷城主江見久盛が称えたもの。	三星山下　（350三星城跡）	(江見)久盛	年未詳五月一日		28・99
44	尼子晴久感状写／『美作国諸家感状記』吉野郡壬生村七郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去〔○異本：ル五〕月一日、於三星山下〔異本：ナシ〕入田、鑓渡被成粉骨之由感悦候	上記と同じ合戦の史料。五月一日に三星城下入田にて江見左馬助が奮戦したことを聞いた晴久が、その功を賞したもの。	三星山下　（350三星城跡）	(尼子)晴久	年未詳八月二日〔異本は一日〕		28・99

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
45	尼子晴久感状写／『美作国諸家感状記』西北条郡山北村大谷家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去ル十九日至其構敵相働候処付送り、池上両人被討取候由、高名之至ニ候	十二月十九日、原田左衛門が守る「構」に敵が攻め寄せた。その敵がいったん退いた際、原田氏はこれを追尾して池上氏を討ち取った。このことを伝え聞いた尼子晴久が、原田氏の武功を賞したもの。	其構	(尼子)晴久	年未詳十二月二十七日		28・99
46	浦上宗景感状写／『黄薇古簡集』巻第四・城府四　馬場次郎四郎所蔵文書	今度於三星山下及合戦、径鑓令粉骨候段無比類	三星城下の合戦で槍をふるって奮戦した馬場家職（二郎四郎）の手柄を、宗景が称えたもの。	三星山下　(350三星城跡)	(浦上)宗景	年未詳五月二十八日		15・28
47	湯浅次郎四郎書状写／美作総社文書	小原分役銭之事被仰越候、如御存知之、当年義者悉かり田罷成候間、可被成御分別候、（中略）かり田なと罷成候かたへハ、何と申候へ共納所等無之候	軍勢による刈田のため、今年は役銭の納付が難しくなっており、小原分の役銭も同様なので理解するよう伝えたもの。宛名の小井神五郎の肩に「かさ松陣ノ時」との注記がある。	かさ松陣	湯浅次郎四郎	年未詳十一月十八日		9・28
48	新免宗貞感状写／吉野郡大野保川上村新免家所持文書	今度江見新左衛門尉一城取出候所に数刻及一戦、得大利、殊に江見新左衛門尉討捕之段無比類候	城を設けて新免氏に立ち向かってきた江見新左衛門尉と一戦を交えて勝利し、新左衛門尉を討ち取る手柄を立てた新免備中守の働きを、惣領の宗貞が褒め称えたもの。	江見新左衛門尉一城	(新免)宗貞	年未詳四月七日		40・99
49	氏未詳誠忠感状写／勝北郡梶並庄東谷下村富坂家所持文書	去十九日夜、於岩尾山出張口、彼【被ヵ】官人数刻相戦切取候、粉骨無比類儀候	七月十九日の夜、岩尾山城の出張口にて、富坂右京進の被官人（配下）が奮戦した。この活躍を誠忠が褒めたもの。	岩尾山　(179医王山城跡)	誠忠	年未詳七月二十七日		39・99
50	尼子義久書状／岡山県立博物館蔵石見牧家文書	去年以湯浅、久盛被仰越候キ高田之儀、何分二茂計略肝要候、幸三浦人躰、爰許在身之儀候間、彼方於入眼者、即差上可成、則宇山右京亮事、起別家可宛行候	去年、江見久盛が進言してきた高田城への対応につき、計略をめぐらせるよう尼子義久が江見氏家臣団に命じたもの。もし計略が成功して高田城を入手できたら、尼子氏のもとに人質として在住している三浦氏当主をすぐ差し返し城主に復帰させること、以前城主だった宇山誠明には別の所領を与えて対応することを伝えている。	高田　(33高田城跡)	(尼子)義久	(永禄七年)二月九日	1564年	11・28
51	尼子義久書状／石見牧家文書	于今此方為届、原田在身之由、無比類候	三浦氏重臣の牧尚春（兵庫助）が、尼子方への協力を継続するため、原田に駐在していることを聞いた義久が、その行動を褒めたもの。	原田　(254稲荷山城跡)	(尼子)義久	(永禄八年)八月二十日	1565年	18・28
52	浦上宗景書状写／『美作国諸家感状記』久米南条郡下神目村二郎左衛門所持文書	此度者〔異本：ハ〕就三星表働之儀、御人数之儀申入候処〔異本：所〕、歴々被指出喜悦候、年内ハ〔者〕無余日之条、至明春ハ〔者〕早々可覃行覚悟ニ候	宗景が三星城方面に出陣するにあたり、三浦氏に軍勢派遣を依頼したところ、三浦氏は主立った将兵を派遣してきた。これを喜んだ宗景が、もう年内は日数がないので、年明け早々に軍事行動を起こす心算であることを伝えたもの。	三星表　(350三星城跡)	(浦上)宗景	年未詳十二月十二日		28・99
53	宇喜多直家書状／岡山県立博物館所蔵文書（『黄薇古簡集』巻第十一　赤坂郡伊田村小十郎所蔵文書に写しあり）	三郎九郎殿御下向候条、珍敷儀も候かと下之者ハ存候処、龍口御籠城之躰、安之外に候、三修此表可有出張様ニ金川辺沙汰候歟、不審ニ存候、（中略）自伯州此間帰陣之由候条、沼元構被取詰候者、定後巻可在之間、以一戦、備中・当国弓矢可被相澄分にて、被取詰候へ共被見捨要害一途候上ハ、自他分別之前ニ候	宇喜多直家が最近の戦局について赤坂郡伊田の領主難波職経（難三）に書き送ったもの。浦上三郎九郎（誠宗）が備前国に下向してきて龍口城に籠城したのは意外だったこと。三村家親（三修）が備前国に出陣してくるとの噂が金川付近でささやかれているとのことだが、不審に思うこと。家親はこのあいだ伯耆国から帰国したとのことなので、三村方が沼元構を包囲すれば、必ず救援に向かい、一戦をもって備中・備前両国の争いに雌雄を決するつもりでいること。沼元構が取り囲まれても自分たちが見捨て、結果落城した場合は、どうするか思案にくれていること等を伝えている。	龍口　(〈備前181〉龍ノ口山城跡) 沼元構　(277小松城跡・278沼元構跡・281大植城跡)	宇三直家(宇喜多三郎右衛門尉直家)	(永禄八年)八月二十七日	1565年	15・17・28
54	浦上宗景書状／備前松田文書	今度於作州玉鉾構、被抽粉骨之段、神妙候、御恩賞事遂上聞、追而可申談候	宗景が美作国玉鉾構で奮戦した松田彦次郎の働きを褒め、恩賞が出るよう守護赤松義祐に上奏することを伝えたもの。	作州玉鉾構	(浦上)与次郎宗景	年未詳十月二日		11・28
55	江見久盛判物写／『美作国諸家感状記』英田郡三海田村小坂田善兵衛・勘兵衛所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度倉敷〔異本：鋪〕落去之刻、覚悟不相違之段無比類	今回、倉敷城が落城した際、最後まで心変わりせず従った小坂田勘兵衛の行動を、江見久盛が称えたもの。	倉敷　(389林野城跡)	(江見)久盛	永禄八年十月十八日	1565年	28・99

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
56	江見久盛判物写／『美作国諸家感状記』英田郡下福原村難波四郎兵衛・同八郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去〔○異本：ル〕廿七日三星表敵相働候処、於妙見口〔異本：ナシ〕大〔異本：太〕刀討及数刻相戦之段、無比類候	十一月二十七日、三星城に敵が攻め寄せた際、妙見口で太刀をふるって数刻奮戦した難波長三郎の功労を、久盛が称えたもの。	三星表　（350三星城跡）	(江見)久盛	永禄八年十一月二十九日	1565年	28・99
57	斎藤親実判物写／『美作国諸家感状記』英田郡土居村妹尾家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度者於三星表被及初合戦、高名誠無比類候	毛利方の斎藤親実が三星城を攻めた際、太田新九郎が今年の初いくさで高名を挙げた。そのことを親実が賞したもの。	三星表　（350三星城跡）	(斎藤)親実	永禄九年正月十一日	1566年	28・99
58	江見久盛感状写／『東作誌』吉野郡大野保川上村新免家所持文書	今度於三星山下及戦、一番に鎗入、剰敵追崩候段、高名無比類候	三星城下での合戦で一番槍の手柄を立てた江見源次郎を、久盛が称えたもの。	三星山下　（350三星城跡）	(江見)久盛	(永禄九年カ）三月五日	1566年	28・40
59	宝月坊勧進帳写／神村山神林寺文書	文亀之頃、高田城主平朝臣三浦駿河守貞連、附沙門、投財産、御堂造営速成也	文亀年間、高田城主三浦貞連が僧を住まわせ財産を投じて神林寺の堂舎を造営したことを記す。	高田城　（33高田城跡）	沙門宝月坊	永禄九年五月十八日	1566年	28・37
60	斎藤親実起請文／石見牧家文書	高田御家之儀、宗景被得御意、御調之由可然存候、	高田城主三浦家が、浦上宗景の計らいによって立ちゆくことになったことに祝意を述べたもの。	高田　（33高田城跡）	斎藤玄蕃允親実	(永禄九年）閏八月二十五日	1566年	18・28
61	斎藤親実判物写／『美作国諸家感状記』英田郡土居村妹尾家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度者於宮部高味籠屋被及合職、被敵討捕高名之段無比類候	宮部の高味籠屋での合戦に参加し、敵を討ち取った太田新九郎の手柄を、親実が称えたもの。	宮部高味籠屋（187高味城跡）	(斎藤)親実	永禄九年九月七日	1566年	28・99
62	浦上宗景書状／牧家文書	其元相城於相定ハ、高野家来之者共申談可為加番之条、可得其意候、普請其外無緩心遣肝要候	浦上宗景が牧佐介に対し、牧氏が担当する「相城」の場所が決まったら、高野郷にいる家来たちと相談して在番し、普請その他緩みなく勤めるよう命じたもの。	相城	(浦上)宗景	年未詳八月十八日		9
63	岡本氏秀書状写／美作総社文書	将又岩屋下城由ニ候哉、可然存候、相替事候者可被仰越候	岩屋衆が城から降りたことを伝え聞いた浦上宗景宿老の岡本氏秀が、これを喜び、何か変わったことがあれば報告するよう福島源太らに伝えたもの。	岩屋　（189岩屋城跡）	岡太氏秀（岡本太郎左衛門尉氏秀）	(永禄十年ヵ）十一月二日	1567年ヵ	9・28
64	毛利元就・輝元連署書状写／香川家文書（吉川家中并寺社文書にも写しあり）	就今度高田表之儀申付、各被申談悉被討果候、殊御方分捕一所衆等粉骨之次第、祝着千万候	高田城攻略の命を受け、同輩と相談して敵方をことごとく討ち果たした安達十兵衛尉の功労を毛利元就・輝元が賞したもの。	高田　（33高田城跡）	(毛利)元就･(毛利)輝元	(永禄十一年）二月二十六日	1568年	13・28・101
64	毛利元就・輝元連署書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	就今度高田表之事、申付儀別而令心遣、悉打果之候、寔以悦入候	高田城攻略の命を受け、格別の心遣いによって敵方をことごとく討ち果たした小川右衛門兵衛尉の功労を、毛利元就・輝元が褒めたもの。	高田　（33高田城跡）	(毛利)元就･(毛利)輝元	(永禄十一年）二月二十六日	1568年	13・28・86
66	小早川隆景書状写／吉川家中并寺社文書四（御書感状写にも写しあり）	今度三浦衆其外逆意之輩被打果候、御心仕推察候	三浦衆その外の反乱者を討って高田城を攻略した安達信奏（十兵衛尉）の心がけを労ったもの。	(33高田城跡)	小早川隆景	(永禄十一年）二月二十六日	1568年	13・28・80
67	江見久資書状写／『美作古簡集』芦河内村江見与次右衛門所蔵文書	当城相戻候段、弥忠節ニ候	江見久資の居城に帰参してきた同族与助の行動を褒めたもの。	当城　（389林野城跡ヵ）	(江見)伊豆守久資	永禄十一年三月二十四日	1568年	99
68	上野信恵書状／草刈家証文（『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門に写しあり）	江見九郎次郎殿茂対草三左御馳走之通、内々達　上聞候、御感候、弥帰城之段相調様可被申候	江見九郎次郎（久秀カ）が草刈景継（草三左）に協力していることにつき、幕臣上野信恵が将軍足利義昭に内奏したところ、義昭は喜んだ。これを受け、信恵が草刈氏家臣の宇津宮相模守に対し、江見氏が居城に戻れるよう調整せよと指示したもの。	(389林野城跡ヵ)	(上野)佐渡守信恵	(永禄十一年）十二月九日	1568年	28・85
69	毛利元就書状／備中原家文書	蔦下里御在番付而御心遣令察候、弥御馳走候之様、御方御心得肝要候	元就が、葛下城に在蕃中の原太郎左衛門尉の心労を気遣いつつ、ますます奔走するよう伝えたもの。	蔦下里　（122葛下城跡）	(毛利)元就	(永禄十二年ヵ）二月二十三日	1569年ヵ	8・28・81
70	毛利元就書状／備中原家文書	殊貴殿蔦下聢御在城候て、普請以下御入魂之由、自久野所申候、祝着之至候	原太郎左衛門尉が葛下城に在城して普請工事に励んでいるとの報告を受け、元就がその功を褒めたもの。	蔦下　（122葛下城跡）	(毛利)元就	(永禄十二年）後五月二十日	1569年	8・28・81

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
71	毛利元就・輝元連署書状写／『閥閲録遺漏』弐ノ二　美禰郡小野村百姓幸右衛門所持文書	今度宗景逆意ニ付而、某元事及忩劇候、就夫貴殿別而以御馳走蔦外〔下カ〕里堅固之由〔○異本：候〕太慶至候、此以下不知〔異本：殊蔵人殿高田〕御在城之由候、貴所御供之由、誠々入魂之儀祝着無極候	このたび浦上宗景が逆心したため美作国方面も混乱した。この状況下で葛下城を堅固に保った上、多治部蔵人の供をして高田城に在城していた原太郎左衛門尉の功労を、元就・輝元が称えたもの。	蔦外里　(122葛下城跡) 高田　(33高田城跡)	(毛利)元就・(毛利)輝元	(永禄十二年）七月二十一日	1569年	28・84
72	氏未詳興幸感状／米井家文書	今度神戸山表於岸中及合戦、心懸之段誠高名無比類候	尼子再興軍にしたがい神戸山の合戦で活躍した原又太郎の心がけを褒めたもの。	神戸山 ※他県の地名・城館名を指す可能性がある	興幸	永禄十二年七月二十七日	1569年	9
73	蔵田元貞・香川光景連署起請文写／香川家文書	今度爰許御籠城、別而御馳走被抽御粉骨之段無比類、殊更御息御女中之儀俄不慮之儀付而、雲州牢人雖取籠、一篇被差切無二之御覚悟不浅、然上者乍勿論、於此方少茂疑申儀有間敷候	安達十兵衛尉がこのたびの高田籠城で比類ない尽力をした上、尼子牢人によって子息と妻女を人質にとられたにも関わらず、一切を押し切って毛利方に留まる覚悟を決めたことを賞揚し、元貞・光景も安達氏に疑いをもたない旨、誓ったもの。	(33高田城跡)	蔵田与三右衛門尉元貞・香川美作守光景	永禄〔○異本：十〕二年七月二十一〔異本：八〕日	1569年	28・101
74	毛利元就・輝元連署書状／備中原家文書	今度作州表諸牢人乱入付而、貴殿預御入魂候、祝着候、殊御方事、高田在城候而、別而馳走之由、御粉骨不浅段	このたび美作国に諸牢人が乱入した時、高田城に在城してよく奔走した原太郎左衛門尉の功労を、元就・輝元が褒めたもの。	高田　(33高田城跡)	(毛利)元就・(毛利)輝元	(永禄十二年）八月二十日	1569年	8・28・81
75	長就連・香川光景連署書状／美作岡田家文書	作州西郡之社役、（中略）高田領之内当座ノ我等裁判之在所之儀、於両人者不可有余儀候	毛利方の高田城番長・香川両氏が、高田領（高田城を中核とする旧三浦氏領）のうち、自分たちの裁量権が及ぶ範囲に限って、注連大夫に社役（神社での神楽興行権）を安堵したもの。	高田　(33高田城跡)	長就連・香川光景	(永禄十二年ヵ）十月二十三日	1569年ヵ	9・28
76	花房職秀書状写／『美作国諸家感状記』勝南郡川辺村苔口勘兵衛所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	於院庄杉山宗三郎討取候砌、難波孫左衛門尉鑓下討死悲歎其方同事候、就夫同名弥九郎続目之儀、委細令承知候、直家任仰之旨、和気庄内さらい福谷小坂元行名、如孫左時昨日申付候	宇喜多軍が院庄での戦いで杉山宗三郎を討ち取った際、宇喜多方の難波孫左衛門尉も討死した。花房職秀は、孫左衛門尉の跡目を難波弥九郎に継がせることについて同意し、主君宇喜多直家の意向を踏まえ、美作国和気庄内の難波氏所領を弥九郎に安堵している。	院庄　(135院庄構城跡)	(花房)職秀	年月未詳二十九日		28・99
77	毛利輝元書状／美作牧山家文書	先年院庄被籠城、粉骨之次第、慥令承知之、祝着之至候、当時景継申談候之条、弥御馳走肝要候	先年の院庄構城の籠城戦に参加した中西三郎兵衛尉（草苅氏に従う武士）の活躍について聞き及んだ毛利輝元が、現在毛利氏と草苅景継とは協力関係にあるので、今後も毛利方に助力するよう三郎兵衛尉に伝えたもの。	院庄　(135院庄構城跡)	(毛利)輝元	(永禄十年～元亀三年）三月十七日	1567～1572年ごろ	10・28
78	後藤勝基感状写／『美作古簡集』英田郡川崎村安東彦次郎所蔵文書	去八日於土居面合戦之事、数刻被相戦御同名左右馬助方分捕之時被致鎚付、并於同前口衒討候々、御分捕之段御粉骨誠無比類候	十二月八日、土居での合戦に安東左右馬助（相馬助）と一緒に参加し、手柄を立てた安東助丞を褒めたもの。	土居　(404福城跡)	(後藤)勝基	年未詳十二月十一日		99
79	小早川隆景書状写／山田家古文書巻六	作州三星儀、最前敵及行候刻、手前堅固候て、勝利之処、其以後天神之衆以武略三丸仕取、難儀之由不及是非候、（中略）其元之儀ハ方角之事候間、別而此節被成御短息、三星堅固候様、御才覚頼存候	毛利方の美作国三星城はこれまで味方が堅固に守備して籠城戦で勝利を収めていたが、天神山城の浦上宗景の軍勢（天神之衆）が武略を用いて三の丸を攻め取ったため、難儀に陥っていた。こうした状況を受け、小早川隆景が山田出雲守に対し、三星城が堅固に保たれるよう才覚をめぐらすよう指令したもの。	三星　(350三星城跡) 天神　(〈備前137〉天神山城跡・〈備前138〉古天神山城跡)	小早川隆景	「元亀三年ヵ」三月七日	1572年	13・28・72
80	後藤勝基書状写／『美作国諸家感状記』英田郡三海田村小坂田善兵衛・同勘兵衛所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	於塩尾山下、為通路〔○異本：切〕被打〔異本：討〕出、殊ニ分捕〔○異本：之〕段御〔異本：ナシ〕忠儀之至〔○異本：り〕ニ候	敵方の通路を分断するため、後藤軍が塩尾山麓に出撃した。その際、後藤軍に加わって手柄を立てた小坂田又四郎に対し、後藤勝基が与えた感状。	塩尾山　(578塩尾山城跡)	(後藤)勝基	(元亀三年）三月十五日	1572年	28・99
81	後藤勝基書状写／『美作国諸家感状記』英田郡下福原村難波四郎兵衛・同八郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	塩尾山下、為道路切被〔異本：之〕打出、殊分捕之段無比類候	上記498と同じ。浦上軍の通路を断つ目的で出撃した後藤軍に加わり、手柄を立てた難波理介に対し、後藤勝基が与えた感状。	塩尾山　(578塩尾山城跡)	(後藤)勝基	(元亀三年）三月十五日	1572年	28・99
82	毛利輝元判物写／毛利氏四代実録考証論断十二	至作州三星城差籠付而、於彼国百三十貫地遣置之候、弥可抽忠儀事肝要候	毛利方の美作国三星城への籠城に参加した足立十郎右衛門尉に対し、輝元が美作国内での所領給与を約束したもの。	三星城　(350三星城跡)	(毛利)輝元	元亀三年三月十六日	1572年	13・28・72
83	小早川隆景書状写／『美作国諸家感状記』英田郡尾谷村六兵衛所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	其表之儀、三星三丸雖不慮候、於当城旁被仰談之堅固之御覚悟之由、寔御粉骨無比類候、後巻之儀、先因伯衆被差向候、定而漸可為着陳候	小早川隆景が、三星城主後藤氏の支城倉敷城の籠城衆に宛てた書状。三星城三ノ丸が落城したものの、倉敷城は籠城衆が相談して堅固に守っていた。そのことを聞いた隆景が倉敷城衆の尽力を褒め、因幡・伯耆の軍勢を援軍として派遣したことを報せている。	三星三丸　(350三星城跡) 倉敷城　(389林野城跡)	(小早川)隆景	(元亀三年）三月十九日	1572年	28・99

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
84	後藤勝基判物写／『美作国諸家感状記』英田郡鮭村江見重郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	倉敷城御在番御辛身之条、御同名帯刀左衛門尉土居分令合力候并西東平坂分同前ニ候	倉敷城に在番して守備を固めていた江見右衛門太夫に対し、後藤勝基が江見帯刀左衛門尉の旧領ほかを恩賞として与える旨、伝えたもの。	倉敷城　（389林野城跡）	(後藤)勝基	元亀三年三月二十六日	1572年	28・99
85	小早川隆景書状／美作牧山家文書	三星表備前衆罷出候付而、某許御短息之段令察候、此方之儀、急度中途罷出、一行可被申付候	三星城に備前衆（浦上宗景）が攻め入った際、中西三郎兵衛は毛利方として三星城維持に奔走した。隆景はその労を謝し、毛利氏として必ず援軍を出し、軍事行動を行うことを伝えている。	三星　（350三星城跡）	小早川隆景	(元亀三年)三月二十六日	1572年	10・28
86	小早川隆景書状写／山口県文書館蔵長府桂家文書	与州隙明、作州三星為後巻急度出張之儀候	隆景が垣田内蔵丞に送った書状。伊予国での戦闘が収束したので、美作国三星城を救援するため出動する予定だと伝えている。	作州三星　（350三星城跡）	小早川隆景	(元亀三年)四月十四日	1572年	102
87	某書状写／『美作国諸家感状記』吉野郡壬生村七郎右衛門所持文書	爰許之儀明日三星出張、輝元義〔異本：茂〕至中途被罷出候間、備作衆茂多分被申越候、其表之義者草三被仰談之御手合肝要候、（中略）後藤・天神間之義及鉾楯之由承知候、先以可然候	毛利方の何者かが、美作国東部近隣の誰かに送った書状。毛利軍が明日三星城に向けて出陣し、毛利輝元自身も途中まで出向く予定を伝え、宛名の人物も草苅景継と相談し毛利軍に合わせて行動するよう求めている。また、後藤勝基と天神山城の浦上宗景とが争っていることを聞き、自分たちにとって好都合だと答えている。	三星　（350三星城跡） 天神　（〈備前137〉天神山城跡・〈備前138〉古天神山城跡）	未詳	(元亀三年ごろ)	1572年	28
88	氏未詳基則判物写／『美作古簡集』勝北郡梶並村水島新右衛門所蔵文書	今度籠城相届候条、為給所、皆木分本役壱貫百五拾文、壱貫三くにハ田分、古銭又四段者闕所分、小吉野内江見分一町八反公事、同三村之内新免分遣候	今回の籠城戦に参加した水島重之丞に対し、給地として皆木分本役・小吉野内江見分などを与えたもの。	（350三星城跡）	基則	元亀三年八月二十六日	1572年	99
89	毛利輝元書状／毛利家文書	一其表之事、頓可被相動御儀定之処、宇喜多申分付而、少被相延、一往之所、御聞合之通承候、得其心候、定可為表裏之条、日幡・賀茂・蛙鼻間被見合、可被及御行之由、承知候（中略）一荵ニ角ニ、三星表之儀肝心候条、為兵粮・銀子差上可然之由承候	毛利輝元が小早川隆景ほかの諸将と備前・美作国経略の方針について協議した書状。宇喜多直家の申し入れによって備前国攻撃は延期としたが、完全に信用できないので、日幡・賀茂・蛙鼻城あたりの様子をうかがって軍事行動を起こすつもりである、との隆景らの提案を輝元が承認している。また、三星城を救うため兵糧・銀子を送付すべし、との提案も了解している。	日幡　（〈備中431〉日畑城跡） 賀茂　（〈備中427〉加茂城跡） 蛙鼻　（番号なし　蛙鼻城跡） 三星　（350三星城跡）	(毛利)輝元	(元亀三年)九月十二日	1572年	28・55
90	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十七　久芳五郎右衛門	一去月廿三日至佐治高信有出張、作州西屋表則被相動催候処、蔵与三所迄差上書状某許到来付而、境目動用捨之通尤候、一此表和平実否頓可申登処、浦上・宇喜多毎事表裏之儀候条、要害一二ケ所茂指渡、三星之陣破却之段不見澄候内者、更真実無之と存候	因幡国の武田高信に付添って行動中の毛利家臣久芳新四郎・内海兵庫允に対し、小早川隆景が指示・連絡を行ったもの。高信は西屋城へ進出するため出陣していたが、毛利側の指示で因幡国佐治に留まっていた。そのころ毛利氏と浦上・宇喜多氏との間で和平交渉が進められていた、。しかし隆景は、浦上側が要害（＝城）を明け渡し三星城包囲のために築いた陣城を破却しないうちは、本当に和睦する気があるのか疑わしいと述べている。	西屋　（105西屋城跡） 三星之陣　（578　塩尾山城跡など） （350三星城跡）	(小早川)隆景	(元亀三年)十月十日	1572年	13・28・87
91	後藤勝基感状写／『武家聞伝記』巻第拾　勝北郡水島徳右衛門所持文書	先度於矢櫃城下合戦時、数刻相戦候処、以鉄炮見事之仕様、忠節無比類候	勝基が水島早介に与えた感状。先日、矢櫃城下で行われた合戦において、数刻戦っていた際、水島早介が鉄砲を使って見事な手柄を立てた。こうした早介の働きを、勝基が忠節比類なしと褒めたもの。	矢櫃城　（293矢櫃城跡）	(後藤)勝基	(年未詳)三月十三日		20
92	岡本氏秀書状／石見牧家文書	久田事ハ西屋被作持候へハ、当時彼城其（カ）下代をも仕事候間、無手ニ被相放事も不成候而遅々候	浦上宗景の宿老岡本氏秀が、美作国高田城主三浦氏の宿老牧尚春からの質問に答えたもの。久田庄は西屋城主の支配するところで現在西屋の下代が管理しているので、無理に召し放つことも出来ず対応が遅れていると返答している（浦上氏が三浦氏側に久田庄を進呈する約束でもあったものか？）。	西屋　（105西屋城跡）	岡太氏秀（岡本太郎左衛門尉氏秀）	(天正元年)九月二十七日	1573年	18・28
93	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻四十七　南方九左衛門	草刈江被申合、一城被取出候者可為入魂候、此調儀肝要候、（中略）俄之様候而城取之事けに＼／不成候者、至奥津・才原一勢可被打出候、此方検使彼表差出待可申之条、於于時行之儀者、可被任申旨之通、岡山江申遣候	小早川隆景が吉川元春らと因幡国鹿野城攻めについて意見交換した書状。草刈景継と相談して城を一ヶ所築くのが肝要だが、にわかのことで城取り（＝築城）が難しい場合は、奥津・才原まで軍勢を出してほしいと伝えている。また、検使を奥津・才原で待機させ、作戦行動実施の際はその指示に任せて動くよう岡山城の宇喜多氏に連絡した、と伝えている。	一城 岡山　（〈備前180〉岡山城跡）	(小早川)左衛門佐隆景	(天正元年ヵ）十月十三日	1573年	28・86

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
94	大友宗麟書状／橋本文書	作州高田城弥堅固之由、尤肝要候、仍塩硝之事承候条、壺弐進之候	亀井鹿介こと山中鹿介幸盛に対し宗麟が与えた返書。高田城が尼子方として堅持されていることを鹿介から伝え聞いた大友宗麟が、塩硝（鉄砲の火薬）を送付する旨伝えたもの。	高田城　(33高田城跡)	(大友)宗麟	(天正元年ヵ）十一月十九日	1573年	4・28
95	後藤ヵ与四郎書状写／『美作国諸家感状記』英田郡下福原村難波四郎兵衛・同八郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度籠城中、別而入魂祝着候、就其保内給所并平野・福原分一円令合力候	後藤ヵ与四郎が、今回の籠城に参加した難波理介に対し、褒美として元々の知行地を安堵し、平野・福原を給与する旨伝えたもの。	(350三星城跡ヵ)	(後藤ヵ)与四郎	天正二年九月十四日	1574年	28・99
96	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	今度者、於武枝攻口昼夜之御辛労、無申計候、（中略）将亦秋之固屋落居之由、手前被明御隙候之段、尤可然存候	宇喜多直家が、竹枝（武枝）方面で浦上軍と対峙する沼元与太郎の労をねぎらったもの。秋小屋城が落城し、手隙になったことに満足を示している。	秋之固屋　(263秋小屋城跡)	宇泉直家(宇喜多和泉守直家)	(天正二年)九月十六日	1574年	23・28・101
97	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻七十八　粟屋七郎左衛門	木原左馬允事、至月田可差籠之通申聞候処、則罷上候、祝着候	毛利輝元が重臣桂就宣を介して木原左馬允に月田に籠るよう命じたところ、左馬允はすぐ月田へ向かった。これを喜んだ輝元が、木原氏に労いの言葉をかけるよう就宣に伝えたもの。	月田　(54月田城跡)	(毛利)輝元	(天正二年)壬十一月三日	1574年	28・86
98	浦上宗景書状写／下河内牧家文書「牧之家可秘」（『美作古簡集』にも写しあり）	其表之事堅国ニ被仰付候〔○異本：段〕、寔以大慶候、併貴殿并各無油断動と存候、猶々備中之事少々雖敵心候、松山何茂無異儀候由可然候、其之〔異本：元〕程近之事候間、行等切々可被仰談候、真島御在城之由候〔異本：ナシ〕、日夜之御辛身令察候	真島城に在城し日夜辛労して城を堅持している牧菅兵衛（三浦氏重臣）に対し、浦上宗景が戦況等について申し送ったもの。備中国で少々毛利方へ寝返る者が現れたが、松山城では特段の問題も発生していないとの報せを受けた宗景が、牧氏の在所は松山にほど近いので、今後の軍事行動について三村氏とよくよく相談するよう要請している。	松山　(〈備中158〉備中松山城跡) 真島	浦上宗景	(天正二年）十二月二十九日	1574年	28・99
99	三浦貞広判物写／下河内牧家文書「牧之家可秘」（『美作古簡集』にも写しあり）	今度岩屋衆至多田山取出候付而、去廿二日ニ〔異本：ナシ〕夜討申付候、其方以心遣若者共引卒被罷出、即時彼陳被切崩、数人手負・死人被仕成被勝利候事、誠粉骨不浅候	宇喜多方の岩屋城衆が、多田山城まで出張ってきた。これに対抗するため、三浦貞広は去る二十二日、牧菅兵衛に宇喜多陣への夜討ちを命じた。牧菅兵衛はこの宇喜多陣を即座に切り崩し勝利したので、貞広より奮戦ぶりを称えられている。	岩屋　(189岩屋城跡) 多田山　(77茶臼山城跡)	(三浦)貞広	天正三年正月二十七日	1575年	28・99
100	浜口ヵ家職書状写／『美作国諸家感状記』久米南条郡下神目村菅納善三郎所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去〔○異本：ル〕廿二日、高田〔○異本：之〕衆夜討仕候処、手前粉骨之段、忠節無比類候〔異本：ナシ〕	上記文書に関連。正月二十二日、牧菅兵衛の率いる三浦軍（高田衆）が多田山城に夜討ちをしかけてきた際、宇喜多軍に属して奮戦した神納三郎右衛門の手柄を家職が褒めたもの。	高田　(33高田城跡)	(浜口ヵ)家職	(天正三年)二月二日	1575年	28・99
101	岡本氏秀書状写／下河内牧家文書「牧之家可秘」（『美作古簡集』にも写しあり）	先度ハ〔異本：ナシ〕岩屋衆被成御行、数人被打取之段心地能存候（中略）次ニ松山表之事此表へ〔異本：江ハ〕通路就不自由、此頃之趣不聞申候、御方へ〔異本：ナシ〕ハ寔可相聞候、此御〔異本：ナシ〕返事ニ委可預示候	浦上宗景の宿老岡本氏秀が、石井与兵衛・牧菅兵衛ら三浦氏重臣に通信したもの。三浦氏が宇喜多方の岩屋城衆を討ち取ったことを快事と喜び、通路不自由のため最近の様子がわからない松山城の情報について、返書で教えてほしいと述べている。	岩屋　(189岩屋城跡) 松山　(〈備中158〉備中松山城跡)	(岡本)氏秀	(天正三年)二月七日	1575年	28・99
102	小早川隆景書状写／下関市立長府博物館蔵渡辺家文書	今度月田表肝要候時分、為御番手被指遣候処、無相違被罷籠、彼城堅固候、御辛労之至候	月田の重要性が増していた時期に、番手として同地に派遣され、城を堅固に守った渡辺神兵衛の労を、小早川隆景がねぎらったもの。	月田　(54月田城跡)	(小早川)隆景	(天正三年)二月十五日	1574年	28・35・103
103	三浦貞広書状写／下河内牧家文書「牧氏系図」（『美作古簡集』に写しあり）	今夜各真木城相動而切取候由、寺畑より申越候事実候者、満足不過之候	今夜の合戦で、三浦氏重臣の牧菅兵衛らが真木城を攻め落としたとの報告が、大寺畑城から三浦貞広の元にもたらされた。貞広は、それが事実なら満足この上ないと菅兵衛の働きを褒めている。	真木城　(番号なし　槙山城跡・63真木ヶ城跡) 寺畑　(78大寺畑城跡)	(三浦)貞広	(天正三年)三月二十六日（十六日の誤りヵ）	1575年	28・99
104	三浦貞広判物写／下河内村牧家文書「牧之家可秘」（『美作古簡集』にも写しあり）	去十六日至真木城被及道、以旁粉骨則時彼山被切崩、宗清〔徒ヵ〕者数輩被討捕候、三ケ国去年以来之干戈ニ如此之三〔衍ヵ〕合力、自他以無之候	三月十六日に牧菅兵衛らが真木城を切り崩し、敵のおもだった者を討ち取ったことを、三浦貞広が絶賛したもの。備前・備中・美作三ヶ国における去年以来の戦乱で、これほど助けになる戦果は他にない、と述べている。	真木城　(番号なし　槙山城跡・63真木ヶ城跡)	(三浦)貞広	天正三年三月十八日	1575年	28・99
105	小早川隆景書状／荘家文書	元親事茂定高田被心懸可被落行之条、是非於其境被討留候様、御才覚千万頼存候	小早川隆景が津々加賀守らに対し、三村元親が高田城に落ち延びようとするはずなので、中津井あたりで発見して討ち取るよう命じたもの。	高田　(33高田城跡)	小早川隆景	(天正三年)五月二十三日	1575年	7・28
106	浦上宗景書状／亀山家文書	蓮花寺之事、不覃是非候、手負共在之由候、不吉候歟、無御心元候、別而被入精候由候、御辛労之至候	浦上宗景が美作国蓮華寺城攻めの失敗を仕方ないと述べ、攻城に参加して負傷した中島吉右衛門尉（中吉）・同右兵衛尉（同右）・同市内（同市）の容態を心配し、その尽力に謝意を示したもの。	蓮華寺　(280蓮華寺城跡)	遠宗景(浦上遠江守宗景)	(天正三年ヵ）七月十日	1575年	28・106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
107	宇喜多直家書状写／『美作国諸家感状記』久米南条郡下神目村菅納善三郎所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去八日至蓮花寺岸涯天神山衆取詰候処、被及合戦、剰御分捕、誠御忠節無比類候	七月八日、浦上軍（天神山衆）が蓮華寺城を包囲し、その切岸の際まで迫った。その際、城方に味方して抗戦し敵将を討ち取った神納三郎右衛門の武功を、宇喜多直家が褒めたもの。	蓮華寺　（280蓮華寺城跡）	宇泉直家（宇喜多和泉守直家）	（天正三年ヵ）七月十一日	1575年	28・99
108	宇喜多直家書状写／美作沼元家文書	去八日至小松城岸涯天神山衆取詰之処、被及合戦、剰御分捕、誠御忠節無比類候	七月八日、浦上軍（天神山衆）が小松城を包囲し、その切岸の際まで迫った。その際、城方に味方して抗戦し敵将を討ち取った沼元彦右衛門尉の武功を、宇喜多直家が褒めたもの。	小松城　（277小松城跡）	宇泉直家（宇喜多和泉守直家）	（天正三年ヵ）七月十一日	1575年	9・28
109	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	今度天神山衆及行、既至二三丸雖切入、被及合戦、宗徒之者数十人被討捕、則時被切崩之段寔各御覚悟無比類御忠節不浅候	浦上軍（天神山衆）が沼元与太郎の籠る城を攻撃し、二の丸・三の丸まで侵入してきた。その際、与太郎は防戦して主だった者を数十人討ち取り、敵軍を切り崩した。その武功を宇喜多直家が賞揚したもの。	（277小松城跡・278沼元構跡・280蓮華寺城跡・281大植城跡）	宇泉直家（宇喜多和泉守直家）	（天正三年ヵ）七月十一日	1575年ヵ	23・28・101
110	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六　毛利伊勢	天神山落去之儀ハ委細申候キ、作州高田之事、去十一日令落去候、於于今者無残所申付候間、可御心安候	毛利輝元が吉見正頼に備前・美作・因幡の戦況を報じたもの。天神山城の落城については詳しく述べた通りで、美作国高田城も九月十一日に落城し、今は残るところなく毛利氏の命令が行きとどくようになったので安心してほしい、と伝えている。	天神山　（〈備前137〉天神山城跡・〈備前138〉古天神山城跡） 高田　（33高田城跡）	（毛利）少輔太郎輝元	（天正三年）九月十四日	1575年	13・85
111	三浦貞広書状写／下河内牧家文書「牧之家可秘」（『美作古簡集』『作陽誌』にも写しあり）	去年高田下城之刻、其方機遣之故、江兵父子被遂入魂、公私無恙被退之段、本望難忘子細候	天正三年に三浦貞広が高田城を開城した際、牧菅兵衛の心づかいのおかげで江原兵庫助久清（江兵）父子が三浦氏に協力することになり、貞広は無事退去することができた。本史料は貞広が牧菅兵衛に対し、開城退去時の配慮に深甚の感謝を伝えたもの。	高田　（33高田城跡）	（三浦）貞広	（天正四年）五月十八日（二十八日ヵ）	1576年	28・37・99
112	毛利輝元判物写／下関市立長府博物館蔵渡辺家文書	去々年作州月田城難儀之時、其方以一人之覚悟則罷籠、彼表如存分成行候、寔粉骨無比類候	去々年（天正二年）、作州月田城が難局に立たされた際、渡辺神右衛門が覚悟を決めて籠城したおかげで、同地の状況は毛利方の思い通りに展開した。その時の働きを毛利輝元が褒めたもの。	月田城　（54月田城跡）	（毛利）輝元	天正四年六月七日	1576年	28・35・103
113	後藤元政書状写／『美作古簡集』英田郡芦河内村江見与次右衛門所蔵文書	大野庄之内大土居分一円為替地進之候	後藤元政が、江見与一に対し、美作国大野庄内にある「大土居」付属の所領全てを別の所領と交換で与えたもの。	大土居	（後藤）元政	天正四年十月十二日	1576年	99
114	織田信長朱印状写／『美作国諸家感状記』吉野郡壬生村七郎右衛門所持文書（『美作古簡集』『武家聞伝記』巻第拾にも写しあり）	三星出頭之事、可申調之由、神妙ニ候（中略）所申無相違者、本領之事勿論、其外恩賞地可宛行之候	江見九郎次郎（久秀ヵ）が三星城主後藤元政を説得し織田方に味方するよう調整したいと織田信長に申し出た。これを受けて信長が江見氏の申し出を喜び、それが本当ならば本領安堵の上恩賞地も給与すると伝えたもの。	三星　（350三星城跡）	（織田）信長	（天正五年）十月二十日	1577年	20・28・99
115	篠向城跡表採軒平瓦線刻銘	天正五 十月廿日〔カ〕番〔播〕州〔〔美ヵ〕　□九	篠向城跡で表面採集された瓦の銘文。天正五年十月に播磨国で生産された瓦が使用されていた。	（88篠向城跡）		天正五年十月二十日	1577年	24・28
116	毛利輝元書状／木村文書	信長五畿内致一変、近日作州境越山之旨申越候（中略）其国上方筋城々出丸曲輪等普請はた＼／と可指急候、竹木人足縄被下何にても入用之物其郡々支配之方へ、自両川可申参	毛利輝元が美作国の諸城を預かる大原主計頭・中村大炊助頼宗・福田玄蕃助理昌・牛尾次右衛門・近藤豊後守に対し、織田信長が近日中に美作国境を越えて進出してくることを伝え、守備を固めるよう伝えたもの。上方筋の城々の出丸・曲輪の普請を急ぐよう命じ、竹木・人足・縄など必要な物があれば、各郡の管轄者に両川（吉川・小早川氏）を通じて申しつける旨を伝えている。	其国上方筋城々	（毛利）輝元	（天正五年）十一月朔日	1577年	28
117	羽柴秀吉書状／下村文書	作州之内新免弾正左衛門、人質を召連罷出候間、居城させ此方一味候事	羽柴秀吉が播磨国福原・上月城攻めの様子を下村玄蕃助に報じた書状。上月城陥落に前後して、美作国の新免弾正左衛門（宗貫ヵ）が人質を連れて出頭し織田氏に味方する旨申し出てきたので、その居城を安堵したことを伝えている。	居城　（367竹山城跡ヵ）	（羽柴）秀吉	（天正五年）十二月五日	1577年	28・93

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
118	吉川元長・元春連署書状写／吉川家中并寺社文書十	播州佐用郡事ハ羽柴一味之由候、於于今者後藤方之儀肝要迄候、如先年馳走者三星表〔カ〕事可有安否と存候（中略）井又右、自松山之折紙披見候（中略）去比作州高田へ忍共付候哉、城内ちと油断之様候つる〔カ〕か、相替儀候ハヽ、可被申越候	吉川元春父子が重臣の今田経高に近況を報じたもの。播磨国佐用郡が羽柴秀吉に味方したとのことなので、今後後藤氏の去就が注意されるが、後藤氏が先年のように毛利氏に尽してくれるなら三星城はとりあえず安心できるだろうか、と予測を述べる。また、松山城から届いた井上春忠（井又右）の書状を読んだことを伝え、少し前美作国高田城に忍者が侵入したとの噂に対し、城内に油断があるのではないか、変わったことがあれば報告するように、と伝えている。	三星　(350三星城跡) 松山　(〈備中158〉備中松山城跡) 高田　(33高田城跡)	(吉川)元長・(吉川)元春	(天正五年)十二月十三日	1577年	28
119	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	上口無異儀趣、自高田茂被申越候、可然候、三星之儀堅固之通信瀬源二郎申候て肝要候	吉川元春が重臣の今田経高に近況を報じた書状。上口に異常なしとの高田城からの報告に満足し、三星城を堅固に守備するよう信瀬源二郎に命じるのが肝要であると伝えている。	高田　(33高田城跡) 三星　(350三星城跡)	(吉川)駿河元春	(天正六年)正月十八日	1578年	28
120	小早川隆景書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書(『閥　閲　録』巻百四之二　湯浅権兵衛に写しあり)	先度草刈別心之通申入候、然処於于今者、更覚悟相違之儀者、有間敷之由申候、彼家来黒岩土佐守祝山取退候儀者、洞中就申分ニ如此候条、任指南可返置之通申候間、則蔵田与三右衛門尉・井上孫兵衛尉指出取操半候	隆景が湯浅元宗に対し、草苅氏の変心について報じたもの。今のところ草苅氏側は心変わりするつもりはないと言っていること、草苅氏家臣の黒岩土佐守が毛利方の祝山城へ退散した事件も草苅家中でのいさかいによって生じたものに過ぎないと釈明していること等を伝えている。	祝山　(179医王山城跡)	(小早川)左衛門佐隆景	(天正六年)二月十七日 ※『久世町史』ほかは天正十二年とする	1578年	13・28・87・102
121	富坂隆保所領目録／富坂家文書	そうりやう屋敷壹反分	富坂氏が自身と同名衆・寺分の所領となっている土地を一筆ごとに書き上げたもの。「そうりやう屋敷壹反分」は、富坂氏惣領家の屋敷の面積を表したもの。	そうりやう屋敷(314富坂屋敷跡カ)	富坂孫六隆保	天正六年十月十九日	1578年	10
122	吉川元長自筆書状／吉川家文書別集	味方城祝山爲伝益形与申城被取付候、左候へハ、備伯しきり不可過之候条、南北弓矢相卜候	毛利氏が味方の城である祝山城との連絡用に益形という名の城を築城した。この城は備前・伯耆の連携を妨害する「仕切り」となり、毛利氏による山陽・山陰両面作戦の今後を占うものとなる、との考えを吉川元長が述べたもの。	祝山　(179医王山城跡) 益形与申城　(141桝形城跡)	(吉川元長)	(天正七年八月ごろ)	1579年	60
123	宇喜多直家書状写／『美作国諸家感状記』真島郡関村鈴木九右衛門所持文書(『美作古簡集』にも写しあり)	鈴木名字一類中并庄官衆、此方有一味、松山・高田之間通道可被指切之由、然者水田七百貫之事一円相計候	美作国の鈴木一族とその取り巻きの荘官衆が宇喜多氏に味方し、毛利方の松山城と高田城を結ぶ通路を遮断する働きをした。これを聞いた直家が、彼らに褒美として水田七百貫の地を与える旨を伝えるよう、花房職秀・市三郎兵衛に命じたもの。	松山　(〈備中158〉備中松山城跡) 高田　(33高田城跡)	(宇喜多)直家	(天正七年)九月五日	1579年	28・99
124	吉川元春自筆書状／小早川家文書	高田表之儀付而、一々被仰越候（中略）此方にも山内一城爲可申付候	小早川隆景から高田城近辺のことにつき連絡を受けた元春の返書。山内に城一つの築城を命じたことなどを伝えている。	高田　(33高田城跡) 山内一城	(吉川)元春	(天正七年)九月七日	1579年	28・61
125	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十	備前表之儀、境目一二ケ所要害取付之由候、月田之儀申付候由候哉、自高田も其分ニ申越候、宮山之儀をも諸牢人取付候由候条、左候へハ高田□〔江〕之通路相□〔差カ〕□□〔可カ〕然間、従是元彼伝之一城可被仰付候由、尤肝心候、盛重之罷出可取付候由被申候哉、寔短束之段不浅候、自此方も彼伝之一城可取誘との儀候、下野守国吉表罷居候て、右之一城之短束仕半候	備前・美作における宇喜多氏との合戦について、毛利輝元が吉川元春と情報・意見の交換を行ったもの。備前国との境目に一、二ヶ所要害を築いたとの報告があり、月田城についてもそのようにしたと高田城から報せがあった。宮山城にも敵方諸牢人が入ったとのことなので、高田城への通路を維持するよう指示している。また、杉原盛重が「彼伝之一城」構築に尽力する意向を示していることを聞いて感謝の意を伝え、現在口羽通良（下野守）が国吉城にあって「伝之一城」築城に取り組んでいることを伝えている。	月田　(54月田城跡) 高田　(33高田城跡) 宮山　(56宮山城跡) 国吉　(〈備中135〉国吉城跡)	(毛利)右馬頭輝元	(天正七年)九月八日	1579年	28
126	吉川元春書状写／『拾遺感状録』勝南郡東吉田村龍門家所蔵文書(『美作古簡集』にも写しあり)	至梶並口各被取出普請等則時被相調之由尤肝要之儀候（中略）此方之儀も咸重《本ノマヽ》之事至山内表、頓差出諸城申付候	後藤氏旧臣の龍門清兵衛らが、美作国梶並口に出張し、城普請を行った。これを褒めた吉川元春が、自分たちも杉原盛重を山内表に出張させ、諸城の普請を申しつけていることを報じたもの。	諸城　(75湯山城跡など)	(吉川)駿河守元春	(天正七年)十月三日	1579年	28・99
127	穂田元清書状／厳島野坂文書	此表之儀、宮山被取付候、境目堅固被仰付候之条、可御心安候、諸城何茂手堅候、於此口之儀者不可有御心遣候、備前所々手塞之故、此節者曾而不及行候、（中略）作州山之内へも元康・盛重被罷出、要害二ケ所被申付之由候	元清が厳島神社の神官棚守元行に近況を報じた書状。備中国において毛利軍は宮山城？を築城し、諸城も手堅く防衛し境目を堅固に守っているので、安心してほしいと伝えている。また、美作国山之内にも末次元康・杉原盛重が出陣し、要害を二ヶ所構築したこと、備前の宇喜多軍は方々手詰まりで、今のところ目立った軍事行動を起こしていないことを報じている。	宮山　(〈備中353〉宮路山城跡ヵ)※山本浩樹氏論文による推定 要害二ヶ所　(7飯山城跡・14大沼山陣所か？)	(穂田)治部太輔元清	(天正七年)十月十一日	1579年	28・94

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
128	小早川隆景外二名連署書状／吉川家文書	一草苅祝山同篇候哉、雖然、祝山数ケ所之付城、日夜及取相ニ付而、難堪之通、咲止存候、殊兵粮ニ相縮之由、一大事与存候（中略）一祝山・北賀茂中間一城之儀、彼両所談合候て、可被取付之由被仰含、湯民部少輔ニ蔵田与三右衛門尉・森脇飛騨守被相副（中略）一作州山内表之事、盛重其外聢与有在陳、両城堅固ニ被申付、剰動等被得勝利趣	隆景らが吉川元春らと戦況について情報交換したもの。毛利方の祝山城の周囲に宇喜多軍が数ヶ所の付城を築き、日夜争奪戦が続いて祝山城の兵糧が少なくなってきていること、祝山城と北賀茂（草刈氏本拠地）との中間に城を一つ築くよう命じるべきこと、山内表に杉原盛重が在陣して二つの城を堅固に守り、合戦にも勝利していることについて述べる。	祝山　（179医王山城跡） 数ケ所之付城 祝山北賀茂中間一城 両城　（7飯山城跡・14大沼山陣所か？）	(小早川)隆景・(口羽)通良・(福原)貞俊	(天正七年)十一月二日	1579年	28・58
129	吉川元春書状写／『譜録』神保市郎右衛門常知	我等存事にハ、盛重一人此口ニ残申候て悉打丸、四畝表へ罷出、彼山之儀ハ則可被任御存分候、其御競ニ、宮山・寺畑之城、湯山之儀可落去候、左候て、作州葛下の城此方被成取付候者、祝山江成相、作州之儀者、多分一色可見せ候（中略）此方御短束候ハすハ、作州之儀も、備前境之儀も、岡山より仕堅候ハヽ、御手間も入成かね候すると存候	宇喜多直家の離反を受け、吉川元春が長男元長・志道元保に対し、今後の織田方との戦争の方針について述べた書状。元春は、山陰方面には杉原盛重一人を残し、毛利軍を結集させて四畝城を攻めれば、すぐにこの山城は落ちるであろう、と予測する。その余勢をもって宮山・寺畑・湯山城を落城させ、葛下城までたどり着くことが出来れば、祝山城と呼応して美作国での形勢をおおよそ決することができるだろう、と述べる。ただ、毛利側が努力しなければ、美作国も備前国境も岡山城の宇喜多氏によって堅められてしまい、手間が要ることになるだろうと述懐している。	四畝　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 宮山　（56宮山城跡） 寺畑之城　（78大寺畑城跡） 湯山　（75湯山城跡） 葛下の城　（122葛下城跡） 祝山　（179医王山城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡）	(吉川)元春	(天正七年)十一月三日	1579年	28・96
130	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十九　児玉勘左衛門	今朝宮山尾頸為山見、諸勢打出候之処、従城中出はり候条及戦追崩、於鑓下宗徒之者討捕、得勝利太慶候、然処平左衛門尉事、心知能相働立用候、寔言語道断不及是非候	十一日の朝、毛利軍が宇喜多方の宮山城と接続する尾頸の状況を偵察するため出動したところ、城中から宇喜多軍が出てきて合戦となった。戦いそのものは毛利軍が籠城兵を追い崩し、主立った者を討って勝利したが、毛利方でも児玉景栄（平左衛門尉）が心地よく働いた末、戦死した。この景栄討死の報に接した隆景が、一門の児玉就方にお悔やみの言葉をかけたもの。	宮山尾頸　（56宮山城跡）	(小早川)左衛隆景	(天正七年)十二月十一日 ※『久世町史』は天正八年とする。	1579年	13・28・87
131	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十六	其方之儀、今度草苅、祝山表へ罷上候而、辛労気遣候て、彼表之儀時儀可然惣調候、肝要候	吉川元春が森脇春方（飛騨守）に対し、草苅氏の領域にある祝山城へ行って気遣いし、その方面の状況が好転するよう調整せよと命じたもの。	祝山　（179医王山城跡）	(吉川)元春	(天正七年)十二月十三日	1579年	28
132	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	原三、其元於着城ハ、御帰候へと申候つれ共、虎倉之事、無異儀候、（中略）然間、福渡表気遣不入候条、其儘有御在城、普請之事、別而頼存候、来三日ニ両川、木山・神村へ陣替之由候、宮山之事ハ普請諸支度堅固候条、無機遣候、篠葺新普請ニ候条、弓削之百姓中悉被呼寄、別而普請頼存候	直家が篠葺城を守備する沼元新右衛門尉に各地の戦況を伝え、指示を与えたもの。以前、原田氏が着城したら帰宅していい、という話をしたが、虎倉城ほかに異常はなく、福渡地域に気遣いはいらない状況なので、そのまま篠葺に在城して普請に努めるよう依頼している。篠葺は「新普請」なので弓削の百姓中を全て呼び出して念入りに普請するように伝えている。一方、「両川」＝吉川元春・小早川隆景の軍勢が木山・神村に陣替えするとの噂だが、これに対峙する宮山城は普請も諸支度も万全なので心配ないと伝えている。	虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 宮山　（56宮山城跡） 篠葺　（88篠向城跡）	(宇喜多)直家	(天正七年)十二月晦日　丑刻	1579年	23・28・101
133	吉川元春・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	今度祝山在番之儀被仰付候処、則被罷籠候儀誠御忠儀之至候、就夫作州之内大野三百貫地之事、任望之旨被遣之候	毛利氏の命に従い、美作国祝山城への在番任務に就いた湯原春綱（右京進）に対し、作州大野において300貫の給地を与える旨、約束したもの。	祝山　（179医王山城跡）	(吉川)元春・(小早川)隆景	天正八年正月二日	1580年	13・28・87
134	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	今度祝山在番之儀被申付之処、即罷籠候事感悦之至候、然者於作州之内三百貫之地之事可充行候	上に同じ。祝山城在番の命を受け、すぐに同城へ籠った湯原春綱に対し、毛利輝元が作州のうちで300貫の給地を与えることを約束したもの。	祝山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	天正八年正月五日	1580年	13・28・87
135	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	今度祝山在番之儀申付候之処、無異儀罷籠馳走之段誠感悦之至候、弥福三申談、堅固之儀肝要候	祝山城在番の任に就いた湯原春綱の行動を毛利輝元が褒め、元々の城将である福田三郎左衛門尉盛雅（福三）とよく相談して堅固に守備するよう伝えたもの。	祝山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)正月五日	1580年	13・28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
136	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之三　湯原文左衛門	此表四畝一着儀者先日申候、定而可為参着候、伊賀要害山下迄悉討果、付城数ヶ所取付、明隙候之条、不日至寺畑・宮山取懸、即時可仕崩候、吉左右鑓而可申入候	吉川元春が祝山城番湯原春綱（湯右）に戦況を報じたもの。四ツ畝城を攻略した後、毛利軍は伊賀久隆の持ち城の麓を全て討ち果たした。この伊賀氏の城を包囲する付城を数ヶ所築いて手隙になったので、ほどなく寺畑城・宮山城に攻めかかり、即時に攻め落としたい、と伝えている。	四畝　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 伊賀要害　（〈備前25〉虎倉城跡または〈備前19〉福山城跡） 付城数ヶ所 寺畑　（78大寺畑城跡） 宮山　（56宮山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）正月六日	1580年	13・28・87
137	蔵田元貞書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	此表四畝一着儀者、頓盛雅申入候条可被仰入候、一両日中高田表被成御陳替、寺畑・宮山儀可被討果儀定候	毛利輝元の臣蔵田元貞が、祝山城在番の湯原春綱（湯右）に毛利軍の最近の動向を伝えたもの。四畝城が片付いた件は福田盛雅に伝えたこと、一両日中に高田城に陣替えし、寺畑城・宮山城を討ち果たす方針に決まったことなどを報じている。	四畝　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 高田　（33高田城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡） 宮山　（56宮山城跡）	「蔵田与三右衛門事也」元貞	（天正八年）正月九日	1580年	13・28・87
138	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之三　湯原文左衛門	去五日之御状到来披見候、（中略）当城儀乍勿論堅固段、一入太慶候、弥無御油断福　三被仰談、無異儀様御才覚専一迄候、此表四畝一着儀者、先状申候、一両日中高田表令陳易、寺畑・宮山儀則時可討果候、御吉左右鑓而可申入候	湯原春綱（湯右）から手紙を受け取った元春が、祝山城が堅固に保たれていることを喜び、福田盛雅（福三）と油断なく相談して異変ないよう才覚せよと返書したもの。ついでに、四ツ畝城攻略以後の戦況として、毛利軍が一両日中に高田城へ陣替えし、寺畑城・宮山城攻略を開始することを伝えている。	当城　（179医王山城跡） 四畝　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 高田　（33高田城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡） 宮山　（56宮山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）正月九日	1580年	13・28・87
139	小早川隆景書状／甲田家文書	爰許之儀両城普請等多分相調候条、急度寺畑差寄候、一途程有間敷候	隆景が阿曽沼元秀に対し、美作国の戦況を伝えたもの。両城の普請がほぼ整ったので、すぐに寺畑城に攻め寄せるつもりでおり、陥落させるのに時間はかからない、と述べている。	両城　（〈備中140〉飯の山城跡・66都我風呂城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）正月十五日	1580年	28・101
140	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百　児玉惣兵衛	此表之儀四畝之事者頓落去候て、至備前内賀茂御陳易候而、伊賀城廻作州苅田悉討果放火候、一二ケ所要害被申付、近日至高田陣易候而、寺畑と申敵城、可被及御行之由候	吉川元春が児玉就英（内蔵大夫）に備作の戦況を報じたもの。四畝城が早々に落城した後、毛利軍は備前国賀茂へ陣替えし、伊賀氏の城館の周囲や美作国苅田（鹿田）に放火、付近に一、二ケ所ほど要害を構築した。近日は高田城まで陣替えして、寺畑城という敵の城を攻めようと計画している、とある。	四畝　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 伊賀城　（〈備前25〉虎倉城跡または〈備前19〉福山城跡） 一二ケ所要害（〈備中140〉飯の山城跡・66都我風呂城跡） 高田　（33高田城跡） 寺畑と申敵城（78大寺畑城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）正月十七日	1580年	13・28・87
141	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂四　大塚新兵衛	其方事益形一途可在番之由祝着候、然者、以弓矢本意之上、於伯州弐十石之地可遣置候	桝形城への在番命令に応じた大塚与三に対し、吉川元春が恩賞授与を約束した書状。合戦に勝利した後に伯耆国で20石の所領を与えると伝えている。	益形　（141桝形城跡）	（吉川）元春	（天正八年ヵ）正月十九日	1580年ヵ	41
142	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	今度於篠葺、各御調之分、普請註文岡権指越候、被抽余人、一角被仰付と見へ申候、御入魂祝着之至候、打続城山之普請、是又大分御調之段、快然之至、誠難尽紙上候（中略）	宇喜多直家が沼元新右衛門尉に送った書状。岡本秀広（岡権）の提出した篠葺城の普請注文を見た直家が、沼元氏の普請工事における尽力を認め、感謝している。また、「城山」の普請も大分ととのってきたことを喜んでいる。	篠葺　（88篠向城跡） 城山	（宇喜多）直家	（天正八年）正月二十日	1580年	23・28・101
143	毛利輝元書状／河北家文書（『閥閲録』巻百十二　河北孫左衛門に写しあり）	栂森在番可令所勤之由、祝着候、然者備作以一着之上、三拾貫之地可遣置之候	栂森城の在番を務めることになった河北木工助に対し、毛利輝元が備作平定の後に30貫の給地を与える旨、約束したもの。	栂森　（66都我風呂城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十六日	1580年	2・28・87
144	毛利輝元書状／河北家文書（『閥閲録』巻百十二　河北孫左衛門に写しあり）	つかふろ在番之儀令所勤之条、以準拠三十貫之地遣之候、然者内々志之儀候間、弐拾貫相加遣之候	毛利輝元が栂森城在番の河北木工助に対し、基準額の30貫とは別に、「内々志」によって20貫を追加して与える旨を伝えたもの。	つかふろ　（66都我風呂城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）正月二十七日	1580年	2・28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
145	小早川隆景書状／山田家文書	此表之儀者、明日十九〔ママ〕陣替候て、則寺畑可取詰候（中略）少之警固にて候共、只今寺畑取詰刻、被乗上候へ者、役ニ立候、備前衆御多分此口ニ在陣と聞候	隆景が山田新右衛門尉に水軍出動の件で指示を与えた書状。毛利軍は明日陣替えして寺畑城を包囲する予定だが、それに合わせて水軍を少しだけでも動かしてくれるとありがたい。備前宇喜多氏の軍勢の多くが美作方面に在陣している現状を考えると、作戦上役に立つ、と述べている。	寺畑　（78大寺畑城跡）	(小早川)隆景	(天正八年)正月二十八日	1580年	28・93
146	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十三　高須八郎左衛門	つかふろ在番之儀、可所勤之由、祝着之至候、然者以備作一着之上、弐十貫之地可遣之候	栂森城在番を務めることになった高須元与（彦次郎）に対し、毛利輝元が備作平定の後に20貫の給地を与える旨、約束したもの。	つかふろ　（66都我風呂城跡）	(毛利)輝元	天正八年正月二十九日	1580年	13・28・86
147	吉川元春ほか三名連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	一爰許陣易之儀、片時茂可指急之由、被申越候、於各無油断候、此口之儀先書ニ如申遣候、伊賀左衛門尉城山下迄、無残令放火、為初鹿田悉討果、要害二ヶ所申付、番衆指籠隙明候条、明日二至月田令陣易、則寺畑取懸候、落去不可有程候間、可心安候、一兵粮之儀、追々可指上候条、是又可心安候、於様躰者、至寺畑切々可被申越候	毛利氏が祝山城在番の湯原春綱に戦況を報じた書状。毛利軍は伊賀久隆（左衛門尉）の城の麓を焼き払い、鹿田地域をことごとく討ち平らげた上、要害を二ヶ所構築し番衆を籠めて守らせた。隆景らは明日には月田まで転陣し、すぐに寺畑城に攻め寄せる予定だが、落城まで時間はかからないと思うので安心するよう伝えている。また、春綱の元に兵糧を追々輸送するのでこれも安心してほしい、そちらの様子を寺畑の陣まで報せるように、と伝えている。	伊賀左衛門尉城（〈備前25〉虎倉城跡または〈備前19〉福山城跡） 要害二ヶ所　（〈備中140〉飯の山城跡・66都我風呂城跡） 月田　（54月田城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡）	(吉川)元春・(福原)貞俊・(口羽)通良・(小早川)隆景	(天正八年)二月一日	1580年	13・28・87
148	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	昨日爰元至高田陣替候	吉川元春が、重臣今田経高（上野介）に対し、昨日高田城付近に陣替えしたことを伝えたもの。	高田　（33高田城跡）	(吉川)駿河元春	(天正八年)二月四日	1580年	28
149	吉川元長書状写／藩中諸家古文書纂十五	今度其方升形取上ニ付而、弥次郎奉公様之事申候、勿論其方ニ不相易可召仕候	吉川元長が森脇春方（飛騨守）に送った書状。春方が升形城に登るにあたり、一族の弥次郎の奉公の有り方について元長に尋ねた。これに対し元長が、春方と変わらず召し使うと回答したもの。	升形　（141桝形城跡）	もと長(吉川元長)	(天正八年)二月九日	1580年	28
150	吉川元春・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	仍小寺畑之儀夜前仕崩候、本城事茂一途不可有程候、（中略）然間其表之儀、弥堅固之御行肝要候	隆景・元春が、祝山城在番の湯原春綱に対し、寺畑城の攻城戦について報じた書状。昨夜、小寺畑城を切り崩したこと、本城（寺畑城）の陥落もほどないことを伝え、祝山も堅固に守備するよう命じたもの。	小寺畑・本城（78大寺畑城跡・80小寺畑城跡）	(吉川)元春・(小早川)隆景	(天正八年)二月十三日	1580年	13・28・87
151	桂就宣書状／厳島野坂文書	此表之儀去二日陣易候、然者小寺畑之儀落去候、公私之御太慶此時候、仍我等事此表在番被仰付候、遠国乍太儀任上意如此候	飯山城在番の桂就宣が、厳島神社の神官棚守元行に近況を報じた書状。毛利軍が二月二日に陣替えし、小寺畑城を攻め落としたこと、就宣自身は毛利輝元の上意により、遠国のこの地に在番するよう命じられたことを伝えている。	小寺畑　（78大寺畑城跡・80小寺畑城跡）	(桂)就宣	(天正八年)二月十四日	1580年	28・94
152	小早川隆景・吉川元春連署書状写／『閥閲録』巻百十五之三　湯原文左衛門	一此表之儀、去九日至小寺畑指寄候、則十二日落去候、然者明日十六大寺畑へ取懸候、是又一着不可有程候、吉左右自是可申候、一其表之儀、福三一入気遣歎息故、当城于今無差之由承候、乍勿論本望候、兵粮之儀急度可差上候条、可御心安候、大寺畑落去之上を以各令相談、先々可陣易候	隆景・元春が祝山城の湯原春綱に送った書状。毛利軍が二月九日に小寺畑城に攻め寄せ、十二日にはこれを陥落させたこと、明日から大寺畑城攻撃にとりかかることを伝える。また、祝山城が福田盛雅（福三）の気遣いと努力で差無く保たれているとの報に接し、必ず兵糧を搬送するので安心するよう伝え、大寺畑城を攻略次第、各と相談して陣替えすると申し送っている。	小寺畑・大寺畑（78大寺畑城跡・80小寺畑城跡） 当城　（179医王山城跡）	(小早川)隆景・(吉川)元春	(天正八年)二月十五日	1580年	28・87
153	竹内為能書状写／『美作国諸家感状記』大庭郡久世村杉山家所蔵文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度者我等同前ニ無二之覚悟之段、御頼母敷候、然者土居分廿五貫文（中略）已上五拾貫辻令合力訖	竹内為能が毛利氏に服属を決めた際、これに従った杉山又三郎に対し、土居分などの所領を与えたもの。	土居	(竹内)善十郎為能	天正八年二月十六日	1580年	28・99
154	粟屋元秀書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	今度垉和江打渡、倭文動之時、於城山之下敵一人被討捕候、御心懸不浅候	毛利軍が高城救援のため垉和方面へ出陣し、倭文地区で軍事行動を行った際、飯田与一左衛門尉は「城山」の麓で敵1人を討ち取った。こうした飯田氏の働きを、毛利氏の家臣粟屋元秀が褒めたもの。	城山	粟屋宗兵衛尉元秀	天正八年二月二十三日	1580年	13・28・86
155	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	黒土被越之由、尤可然候、祝山への伝之城取付さま彼是可相尋候、黒土をも同道候て是へ可被上候	吉川元春が蔵田元貞・森脇春方に送った書状。蔵田・森脇氏のいる現場に黒岩土佐守（黒土。草刈重継の宿老）が来訪したことを聞いた元春がこれを喜び、土佐守に祝山城への伝の城の造り方についてあれこれ尋ねるよう両人に命じている。また、土佐守を同道して元春のもとへ来るよう伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 伝之城　（141桝形城跡ヵ）	もと春(吉川元春)	(天正八年)三月三日	1580年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
156	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	中山之付城吹山之事明退之由、従境目注□趣来着候、草苅祝山之儀、弥可為安堵候、益形之儀、早速候□相調	毛利輝元が森脇春方に送った書状。毛利方の中山城に対し宇喜多方が吹山城という付城を設けていたが、宇喜多氏がこれを放棄したとの注進が輝元のもとにもたらされた。この一報を聞いた輝元が、草苅氏や祝山城衆がさぞ安堵していることだろうと伝え、益形城の築城についても言及している。	中山　(282仲山城跡) 中山之付城吹山　(289吹山城跡または287本丸城跡ヵ) 祝山　(179医王山城跡) 益形　(141桝形城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)三月九日	1580年	28
157	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山為伝之益□〔形ヵ〕取付候、然者吉田源四郎［　］差籠候付而、其方事可致在番之由申聞候処、無難渋分別之段、祝着候、聊不可有忘却候、羽衣石行申付候時者、祝山相抱候段、肝心之儀候、随分令歎息、堅固之気遣専一候	吉川元春が森脇春方に送った書状。祝山城への伝の城として益形城を構築した元春が、春方に在番するよう命じたところ、春方は難渋せず承知した。これを喜んだ元春は、自分たちが伯耆国羽衣石城を包囲している間、祝山城を維持することが大事であると伝え、同城が堅固に保たれるよう尽力せよと命じている。	祝山　(179医王山城跡) 伝之益□　(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正八年)三月十日	1580年	28
158	吉川経言書状写／藩中諸家古文書纂八	祝山為□〔伝ヵ〕益形と申城之取付候、彼城普請已下相調候ハヽ、御相談以上、北表可為御打廻り候	吉川経言（広家）が某（『新鳥取県史』は彦右衛門とする）に送った書状。祝山城の伝の城として益形という城を構築したこと、益形城の普請がととのい次第、相談の上で北表（伯耆方面の戦場）へ転進する予定であることを伝えている。	祝山　(179医王山城跡) 益形　(141桝形城跡)	(吉川)経言	(天正八年)三月十二日	1580年	28・41
159	毛利輝元書状写／『美作国諸家感状記』久米北条郡和田南村竹内家所持文書(『美作古簡集』にも写しあり)	至城山従敵方兵粮差籠之処、竹内相支及合戦、敵壱人打取之首到来候、毎事短息馳走之段神妙之通、能々可申候	毛利輝元が三村親成（成羽越前守）・粟屋惣兵衛に送った書状。宇喜多軍が「城山」に兵糧を搬入しようとした際、竹内為能がこれに合戦を仕掛け、敵1人を討って首を毛利陣に差し出してきた。こうした竹内氏の活躍を輝元が賞し、いつも尽力してくれていることに感謝している旨を伝達するよう、三村親成らに命じたもの。	城山	(毛利)右馬頭輝元	(天正八年)三月十二日	1580年	28・99
160	花房職之書状写／『美作国諸家感状記』真島郡追記	先日者河元孫兵衛被討捕、頸被指越、対我等忠節之御志勿論、御心懸傍感悦不斜候、荒神山罷越候刻御使者祝着之通可申入候	河元孫兵衛なる者を討ち取りその首を送ってきた松井又左衛門の心がけを花房職之が褒めた書状。職之が荒神山城へ出向いた際、松井氏の使者に直接祝着の意を申し入れたい、と述べている。	荒神山　(250荒神山城跡)	花助兵職之(花房助兵衛職之)	(天正八年)三月十六日	1580年	28
161	花房職之書状写／『美作国諸家感状記』真島郡追記	先日於祝山麓ニ河元孫兵衛事、御家来松井又左衛門方被討捕、頸至荒神山被差越候、対我等忠節御機遣之段、併近実無御等閑申談故と致満足候、(中略) 猶荒神山帰路之節可其申候	上の史料に関連。祝山城の麓で河元孫兵衛を討ち、その首を荒神山城へ届け出た松井又左衛門は、斎藤玄蕃允近実の家来だった。こうした経緯のため、花房職之が斎藤近実に対して感謝の意を伝えるべく書いたのが本書状。荒神山城に帰ったらまた申す、とある。	祝山　(179医王山城跡) 荒神山　(250荒神山城跡)	花助兵(花房助兵衛職之)	(天正八年)三月十六日	1580年	28
162	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百二十三　大多和惣兵衛	此表之儀、両寺畑落去以来、諸所得大利、作州之儀、多分平均候之条、心安可存候	石山本願寺救援のため大坂出張中の大多和就重（宗兵衛尉）に対し、輝元が戦況を報じたもの。大寺畑城・小寺畑城が落城して以来、毛利軍があちこちで勝利し、美作国を大方平定したので安心するようにと伝えている。	両寺畑　(78大寺畑城跡・80小寺畑城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)三月十八日	1580年	13・28・87
163	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	其表之儀、升形普請頓相調之由、可然候、就夫弥其許行之儀、其外《○挿字：為》可被仰遣渡辺石見守被指出候、従隆景・我等も一人宛申付遣置候、(中略) 天王山之儀被取付候て番衆にも文候ハヽ、元康在番候て可有馳走之通被申越候、(中略) とにかく祝山草苅之儀、被指救度与之儀までニ候	升形城の普請を早期に仕上げた蔵田元貞・森脇春方に対し、吉川元春が満足の意を伝えた書状。毛利氏から今後の作戦その他について言い渡すため渡辺石見守を升形城に遣わすこと、小早川隆景・吉川元春からも一人づつ人を派遣することを伝えている。また天王山に構築した城に末次元康が在番したいと申し出があったことを伝え、とにかく祝山城と草苅氏を救いたいとの気持ちで色々考慮している旨、書き送っている。	升形　(141桝形城跡) 天王山　(291天王山) 祝山　(179医王山城跡)	(吉川)駿河公元春	(天正八年)三月十九日	1580年	28
164	毛利輝元感状写／『閥閲録』巻五十三　高須八郎左衛門	今度竹内現形之刻、早速妙珍〔現ヵ〕罷出、備前衆罷出候節、堅固ニ相抱之候、就中河口相動、敵一人打取之候、誠心懸之段、神妙之至候	美作国高城の竹内氏が毛利方に味方(現形)したとき、毛利方の高須彦次郎はすぐ妙現に出陣して宇喜多軍が攻め寄せた際も堅固に維持し、逆に河口へ撃って出て敵一人を討ち取った。これらの手柄を輝元が称賛したもの。	妙珍（妙現の誤記）（番号なし　妙見山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)三月十九日	1580年	13・28・86
165	毛利輝元感状写／『閥閲録』巻百二十六　蔵田藤左衛門	今度竹内現形之時、妙現面早々罷出、備前取出之刻相抱候、就中河口相動敵一人打捕之候、心懸之段神妙之至候	美作国高城の竹内氏が毛利方に味方(現形)したとき、毛利方の蔵田就貞はすぐ妙現表に出張り、宇喜多軍が出陣してきた時も維持に努めた。また、逆に河口へ出撃し敵一人を討ち取った。これらの武功を輝元が褒めたもの。	妙現面　(番号なし　妙見山城跡)	(毛利)輝元	天正八年三月十九日	1580年	13・28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
166	小早川隆景書状写／『美作国諸家感状記　』大庭郡久世村杉山家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度備前衆、当城取掛之所、去十七日至明石飛騨守陳所夜討懸、無比類候、誠粉骨之至候	宇喜多軍（備前衆）が毛利方の高城に攻めかかってきた。これに対抗した又三郎は、三月十七日に宇喜多方の明石行雄（飛騨守）の陣所を夜襲し、比類ない武功を立てた。こうした又三郎の働きを、隆景が褒めたもの。	高城　(240高城跡) 明石飛騨守陣所（番号なし　松端山本陣跡・241蕨尾城跡）	(小早川)左衛門佐隆景	(天正八年)三月二十日	1580年	28・99
167	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之三　湯原文左衛門	其方事、去年以来祝山令在番、辛労之段寔祝着之至候、猶以馳走肝要候	毛利輝元が、去年以来祝山城の在番を務めている湯原春綱（右京進）の辛労を賞し、さらに奔走するよう命じたもの。	祝山　(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)三月二十四日	1580年	28・87
168	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	湯原右京進受領之儀、即任御意相調候、寔彼者事去年以来祝山罷居、一段辛労仕候段不可有忘却候	毛利輝元が吉川元春から湯原春綱の受領（～守という官職の授与）について打診され、元春の申し出を容れて調整すると返答したもの。春綱が去年以来祝山城に居て、特別辛労していることは忘却していない、と述べている。	祝山　(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)三月二十四日	1580年	28・87
169	慈恩寺内陣書付／『武家聞伝記』巻第七	芸州衆近日至院庄表陳替之旨、其沙汰候、左様ニ候者及一戦実否可仕覚悟候（中略）抑此弓箭之成行、芸州当国至高田表被成御打出、寺畑籠城ニ罷成、依難儀御現形候へ共、難相続候之処、虫喰〔江ヵ〕原又四郎殿・真木菅兵衛殿御退候、急度上虫喰〔衆御下ヵ〕国候ハヽ高田表ニ押寄芸州衆悉討捕高名可仕候、於先陳者宮山小瀬修理衛〔弼ヵ〕・市三郎兵衛・新身平内丞被差籠候、岩屋之儀長船又左衛門殿堅固ニ被相践候、於後陳者岡平内殿・富川平右衛門殿御在陳候、作州表之儀者可御心安候（中略）播州之住、十日之番手ニ当寺ニ在陳候、岩屋南口へ之送番ニ候	宇喜多氏支援のため播磨国からやってきた武士が、布陣していた美作国久米北郡慈恩寺の壁に記した落書き。毛利軍（芸州衆）が近日中に院庄へ陣替えするとの噂があり、本当なら一戦に及び勝敗を決する覚悟である、と述べつつ、この戦争の経緯について記す。それによれば、毛利軍が当国高田に出陣したので宇喜多方は寺畑城に立て籠もることになったが、籠城を継続できず、江原親次（又四郎）・牧菅兵衛は城から立ち退いてしまった。今後織田勢が下ってきたら、高田城に押し寄せて毛利軍をことごとく討ち取る高名を挙げるつもりでいる、という。また宮山城には小瀬修理・市三郎兵衛・新見平内丞が籠り、岩屋城は長船貞親（又左衛門尉）が堅固に守っていること、後陣にも岡家利（平内）・富川秀安（平右衛門）が在陣しているので、美作方面の戦局については安心していい、という。落書きの主は、十日交替で慈恩寺の陣に詰めており、岩屋城南口への連絡を務めていたという。	院庄　(135院庄構城跡) 高田　(33高田城跡) 寺畑　(78大寺畑城跡) 宮山　(56宮山城跡) 岩屋　(189岩屋城跡)	(播磨国の侍)	天正八年三月下旬	1580年	19・28
170	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十六	昨日吉源四、某元被越候、早登城候哉、趣為可見合此者差遣候、雖不及申遣候、城内彼是賦等之儀、能々裁判肝要候	元春が枡形城番の森脇春方に送った書状。昨日吉田源四郎がそちらに行ったが、もう枡形へ登城したか尋ね、状況視察のため源四郎を派遣したので、城内の差配についてよく裁判するよう伝えている。	(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月五日	1580年	28
171	吉川元春ほか3名連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	天王山之儀、此時可取付之旨、従其元度々被申越候、無余儀候条、則雖可被仰付候、宮山・篠吹之儀、先以申付候ハて、不相叶儀候間、少被指延候、其間之儀、弥番衆兵粮以下、無緩被指籠候条、被申談堅固在番肝要候、	毛利氏が祝山城番の湯原春綱（豊前守）からの要請に返答したもの。春綱から天王山への築城要請を度々受けた毛利氏であるが、宮山城・篠吹城をまず攻略しないことには天王山への築城はかなわないため、施工が延期になったと述べている。その間、祝山城へ番衆・兵糧などを油断なく補充するので、よく相談して堅固に在番するよう伝えている。	天王山　(291天王山) 宮山　(56宮山城跡) 篠吹　(88篠向城跡)	(吉川)駿河守元春・(口羽)下野守通良・(福原)出羽守貞俊・(小早川)左衛門佐隆景	(天正八年)閏三月十二日	1580年	13・28・87
172	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山・中山兵粮之儀付而、委細□□(虫入)申候、内談候而可差籠事肝要候	吉川元春が枡形城番の森脇春方に対し、祝山城・中山城への兵糧搬入について、内談の上実行するよう命じたもの。	祝山　(179医王山城跡) 中山　(282仲山城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月十二日	1580年	28
173	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	熊野兵庫助事、従其方内儀申越候条、升形城番之儀申付候、毎事申談無緩在番候様裁判	吉川元春が、升形城の森脇春方からの要請に応え、熊野兵庫助に升形城番を命じたことを伝えたもの。何でも相談し緩みなく在番させるよう裁判せよ、と伝えている。	升形城　(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月十二日	1580年	28
174	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	為升形在番之儀、吉田源四郎被差出候、毎事無隔心被申談候様、具祝山衆へ可申達候	吉川元春が升形城の森脇春方（飛騨守）に対し、追加の在番として吉田源四郎を派遣したことを伝え、何でも隔てなく相談するよう祝山城衆へ伝達せよ、と命じた書状。	升形城　(141桝形城跡) 祝山　(179医王山城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月十四日	1580年	28
175	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	某元為加番、野村藤内被差遣候、万事申談番堅固ニ可遂、其節事肝要候	吉川元春が升形城の森脇春方（飛騨守）に対し、野村藤内を追加の在番として派遣したことを伝え、万事相談して堅固に番を遂げるよう命じたもの。	(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月十八日	1580年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
176	口羽通良書状写／『美作国諸家感状記』久米北条郡和田南村竹内家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度於高城、平尾弾正忠被討捕候仁江、為御褒美銀子弐枚被遣候、忠儀無比類被思召候段、能々従両所可被申届候	今回の高城の戦いで、宇喜多方の平尾弾正忠を討ち取った人物に対し、毛利輝元が銀子2枚を褒美として与えることになった。これを受け、毛利家宿老の口羽通良が、輝元の意向をその人物によく伝達するよう、三村親成（成羽越前守）・粟屋元秀（惣兵衛）に命じたもの。	高城　(240高城跡)	口羽下野守通良	(天正八年)閏三月二十日	1580年	28・99
177	吉川元春・福原貞俊・口羽通良・小早川隆景連署書状写／『美作国諸家感状記』久米北条郡和田南村竹内家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	当城堅固御抱之由無比類候、備前衆罷出候由候条、幸之儀候、爰許御陳易廿二日然与相定候、為先勢三吉・平賀・志道、今日被差出候	毛利氏が、当城＝高城を堅固に維持している竹内為能（善十郎）・難波左馬進の働きを褒めた書状。備前衆（宇喜多軍）が出陣してきたとのことなので、毛利軍も閏三月二十二日に陣替えすることと決め、今日先陣として三吉広高・平賀元相・志道元保を派遣したことを伝えている。	当城　(240高城跡)	吉川元春・福原貞俊・口羽通良・小早川隆景	(天正八年)後三月二十日	1580年	28・99
178	吉川元春・福原貞俊・口羽通良・小早川隆景連署書状写／『美作国諸家感状記』久米北条郡和田南村竹内家所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	今度最前以来被抽忠儀之由祝着之至候、其上高城被取誘堅固之由候、備前衆雖取懸候、数度及防戦、御勝利之由喜悦候、別而可被加褒美之由候間、可御心易候	毛利氏が竹内為信（孫三郎）の以前からの忠義を賞した書状。為能は高城を修築して堅固に維持し、備前衆（宇喜多軍）が攻め寄せた際も、数度防戦して勝利したので、元春らは喜んで毛利輝元から褒美が出るので安心せよと伝えている。	高城　(240高城跡)	吉川元春・福原貞俊・口羽通良・小早川隆景	(天正八年)後三月二十一日	1580年	28・99
179	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	一天王山之儀是非可取付覚悟ニ候へ共、宮山之儀難□□□□(虫入)各被申之間、先以指懸候、彼城一着候者、則其境可被及行候条、其間之儀堅固候之様何と様にも福三可申分事肝要候、一祝山重而人質之儀肝要之儀候間、能々申分早々至其城差出候様調専一候、先天王山不仕付上にても彼人質事千万＼／入事候、不可有油断候、一祝山并仙普請事、此節無緩被申付候様、是又可申遣事専要候	吉川元春が枡形城番の森脇春方（飛騨守）に送ったもの。以前から要望のあった天王山への築城については、是非そうしたいと思っているものの、宮山城を攻略しないと実現が難しいとの意見があることを伝え、宮山城の落城次第その方面に出陣するから、その間は祝山城を堅固に維持するよう何とか福田盛雅（福三）に納得してもらうことが肝要と伝えている。また、天王山築城の実現可否にかかわらず、祝山城番の人たちから人質を取り、森脇氏のいる城（枡形城）に差し出させ、祝山および仙の城の普請を緩みなく行うのが重要、と述べている。	天王山　(291天王山) 宮山　(56宮山城跡) 祝山　(179医王山城跡) 仙　(番号なし 仙々城跡・160仙の城跡) 其城　(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正八年)閏三月二十一日	1580年	28
180	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百三　尾越正右衛門	今度寺畑在番之儀、元郷同前可有登城之通俄申候処、御分別可然存候	毛利輝元が有福元貞（民部大輔）に対し、寺畑城への在番を命じ、和智元郷と一緒に登城するよう突然申し付けたにもかかわらず、同意してくれたことに感謝を表明したもの。	寺畑　(78大寺畑城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)閏三月二十一日	1580年	28・87
181	吉川元春・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	此表之儀、至宮山一行、可被仰付之由候処、此比直家自身罷出、併和表及行之由候条、為可被付御心至栂森表各陣替候、雖不及申候、当城之儀、毎事無緩可有御心遣事、肝要候	祝山城番湯原春綱（豊前守）に元春らが戦況を報じ、城を緩みなく守るよう伝えたもの。毛利軍は宮山城攻撃を開始する予定だったが、最近宇喜多直家が自ら出陣し併和表の攻略を開始した。そのため、同地の毛利方（竹内為能）を勇気づけるため栂森城まで転陣したと述べている。	宮山　(56宮山城跡) 栂森　(66都我風呂城跡) 当城　(179医王山城跡)	(吉川)駿河守元春・(小早川)左衛門佐隆景	(天正八年)閏三月二十三日	1580年	13・28・87
182	宇喜多直家判物写／『美作国諸家感状記　』久米南条郡上神目村小坂四郎右衛門所持文書（『美作古簡集』にも写しあり）	高城之者籾村口へ令通路候処、悉追散、剰赤木与申者被討捕候段、忠節無比類候	毛利方の高城の籠城衆が、籾村方面へ通路を切り開こうとしていた。これを発見して追い散らし、赤木という武将を討ち取った小坂与三郎の働きを、直家が褒めたもの。	高城　(240高城跡)	(宇喜多)直家	(天正八年)閏三月二十七日	1580年	28・99
183	毛利輝元書状／口羽家文書（『閥閲録』巻八十八　口羽四郎五郎に写しあり）	高城への兵粮入之事、鹿田・栗原地下人賃【○異本：質】をも取候て罷出候者も可有之哉之由、武安可相尋之由心得申候、則呼ニ遣候	毛利氏宿老口羽通良が、高城への兵糧搬入について、鹿田・栗原の地下人の中に駄賃をもらって運搬に出動した者がいるかどうか、その地域の担当者である武安元種に確認したいと輝元に申し出た。これを承諾してすぐに武安氏を呼び出す旨伝えたのが、本史料。	高城　(240高城跡)	(毛利)右馬輝元	(天正八年)閏三月晦日	1580年	13・28・86・102

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
184	房顕覚書	浮田依二心、備前・美作至被取懸、度々合戦是在、大寺畑又小寺畑切クツス、敵味方手ヲイ死人数人在、宮山事可被切落相定ル、然所ニ上勢五六千至上月下向ス、美作口ヘモアケチ手ノ衆下向風聞ス、然者作劔高田ヲ帰陣在、備中水田ト云所陣取タマフ	厳島神社の神官棚守房顕が、天正八年（1580）前半の美作方面の戦況について書き留めたもの。宇喜多直家が二心を起こしたため、毛利軍が備前・美作へ攻め込み、大寺畑・小寺畑城を切り崩したので、敵味方ともに負傷者・死者が出た。そのまま毛利軍は宮山城を攻め落とす予定を立てたが、織田軍（上勢）5、6000人が上月城まで下向し、美作方面へ明智光秀の手勢が出陣するとの風聞が流れた。そのため毛利軍は、美作国高田城に置いていた陣を引き払い、備中国水田に陣所を替えた、という。	大寺畑・小寺畑（78大寺畑城跡・80小寺畑城跡） 宮山　（56宮山城跡） 高田　（33高田城跡）	棚守房顕	（天正八年）		28・95
185	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	当城為番衆、小川右衛門兵衛尉指出候、然者番所之儀付而申入儀候、旁々分別専一候	吉川元春が祝山城の湯原春綱（豊前守）に対し、追加の番衆として小川元政（右衛門兵衛尉）を派遣したことを伝え、番所に関する申し入れについて分別するよう述べたもの。	（179医王山城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）四月朔日	1580年	28・87
186	口羽通良書状／毛利家文書	高城へ御加勢之事、苑ニ角ニ我等式も不及候、通路ニ敵城三四ケ所有是之由候、備前へも程近候、御行一両日不成立候者、於彼表備前衆上勢可被及御楯鉾存候、（中略）敵方にも、不成事ハならぬ物候、小寺畑又寺畑被召詰候時も、不及手候へハ、備前衆も彼両城へ加勢も不成候つる、こなたにも河を渡り、わたり口ニ妙見山敵罷居候条、是を差越、高城への御加勢を不覚之候	毛利氏宿老口羽通良が、毛利輝元側近の国司元武に対し、高城への援軍派遣は困難との見解を伝えたもの。通路に宇喜多方の城が三四か所もある上、備前国に近い。こちら側から川を渡った上陸地点に妙見山があり、ここも宇喜多軍に占拠されている。この場所を越えて高城へ加勢することは考えられない、との意見。例として、毛利軍が小寺畑城と寺畑城を攻めた時、同じような理由で宇喜多軍もこの両城に加勢できなかったことを付け加えている。	高城　（240高城跡） 敵城三四ケ所 小寺畑又寺畑（78大寺畑城跡・80小寺畑城跡） 妙見山　（番号なし　妙見山城跡）	（口羽）下野守通良	（天正八年）四月三日	1580年	13・28・56
187	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻八十八　井原十郎左衛門	今度舛形在番之儀、可有馳走之由、令祝着候、然者以備作一着之上、弐百貫之地可進之候	枡形城への在番を応諾した宇山久信（大蔵丞）に対し、毛利輝元が備前・美作平定後に200貫の所領を与える旨、約束したもの。	舛形　（141桝形城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）四月五日	1580年	13・28・86
188	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山への兵粮之儀、某許迄送遣候、於其表山崎ニ申付之、堅固ニ可請取置候	吉川元春が升形城の森脇春方に対し、祝山城へ搬入する兵糧をそちらまで輸送したので、山崎なる人に申し付けて兵糧を確実に受け取るよう命じたもの。	祝山　（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）四月九日	1580年	28
189	吉川元春書状写/『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	其方之儀去年以来祝山難堪之節云、殊雪中馳籠、彼山堅固ニ被相抱候事馳走無比類候、然間伯州東北条之内西分弐百石可進置候	元春が祝山城番の湯原春綱（豊前守）に与えた書状。去年以来祝山城が困難な状況に陥っている際、雪中を押して同城へ立て籠もり、堅固に維持してきた春綱の功労を称え、伯耆国内で200石の所領を与える旨約束している。	祝山　（179医王山城跡）	（吉川）元春	天正八年四月十日	1580年	87
190	吉川元春書状写／『閥閲録』巻八十八　井原十郎左衛門	今度舛形御在番之儀付而、以羽衣石一着之上、於伯州百石之地可進置之候	舛形城在番を引き受けた宇山久信（大蔵丞）に対し、吉川元春が羽衣石城陥落の後に伯耆国において100石の給地を進呈することを約束したもの。	舛形　（141桝形城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）四月十三日	1580年	28・86
191	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	輝元賀茂表出張ニ付而、我等事茂十日十五日之逗留ニて、可罷出之由候条、明日令陣易候、鬱而隙明此表可令帰宿候間、重畳可申談候、直家事茂為賀茂・小倉之加勢、福渡表陣易之由其聞候、其内之儀、当城弥堅固之御心遣肝要候	元春が祝山城番湯原春綱（右京進）に戦況を報じたもの。毛利輝元の備前国賀茂出陣に合わせ、元春も明日陣替えすること、宇喜多直家も賀茂・虎倉城に加勢するため、福渡表まで転陣したらしいことを伝え、祝山城を堅固に維持するよう春綱に命じている。	小倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 当城　（179医王山城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）四月十五日	1580年	13・28・87
192	竹内為能感状写／『美作国諸家感状記』大庭郡久世村杉山家所蔵文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去十四日之夜、至尾頭〔頸ヵ〕備前衆捕乗候処、罷出衝鑓諸〔カ〕中後抽手柄之段、粉骨無比類候	四月十四日の夜、尾頸（高城と背後の山をつなぐ尾根筋）に宇喜多軍が進出した時、杉山又三郎は城から撃って出て手柄を立てた。その功を竹内為能が褒めたもの。	（240高城跡）	竹内善十郎為能	（天正八年）四月十五日	1580年	28・99
193	吉川元春・小早川隆景連署書状写／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛にも写しあり）	爰許陣取之際之【異本：候】条、高田番衆堅固被仰付、人質是又能々被副御心候て、御一身之儀者、不図御出可為御馳走候	元春・隆景が高田城番の楢崎元兼（楢弾）に指示した書状。こちらは陣取の最中なので、高田城の番衆に守備を堅固に申付け、人質の扱いにもよく注意を払った上で、元兼自身はこちらに出向いて活動するよう要請している。	高田　（33高田城跡）	（吉川）駿河元春・（小早川）左衛隆景	（天正八年ヵ）四月十七日	1580年	86・102
194	毛利輝元書状写／『黄薇古簡集』巻第十　津高郡小森村又次郎所蔵文書	今度高城難義之節、馳籠忠義之段、無比類候、作劔之儀於任存分ハ、一所可遣候	菱川源四郎は、高城が宇喜多軍に攻められて難儀している際、城に馳せ参じて忠義を尽した。こうした菱川氏の働きを輝元が賞美し、美作国平定後に所領を与える旨約束したもの。	高城　（240高城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）四月十九日	1580年	15・28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
195	杉原盛重書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十二　岡六兵衛に写しあり）	輝元年内より御山陣にて候間、我等事罷出度之由、於富田元春雖令申候、南条逆意付而被残置間、方々我等気遣儀候、（中略）作州山内にも一城抱置候、我等方々気遣之段、可有御察候、　（中略）一備作表之儀、存分ニ輝元被申付候、竹庄表于今各山陣にて候（後略）	吉川元春の家臣杉原盛重が、岡伯耆守に送った書状。毛利輝元が備前・美作国攻略を思いのままに進め、今は備中国の竹庄の山に陣取っているとの話題を受けて、盛重も本心では出陣したいと述べている。盛重自身も美作国山内に持ち城を一つ抱えており、備作方面への気遣いが絶えなかった。しかし、月山富田城で吉川元春に出動を申し出たものの、毛利氏に反逆した伯耆国の南条氏への押さえとして残留を命じられ、あれこれ心配するだけの状態になっている。こうした不安な心境を察してほしい、と述べている。	一城　（7飯山城跡または14大沼山陣所などか）	杉原盛重	（天正八年）五月朔日	1580年	28・86・102
196	新免宗貫感状写／『美作国諸家感状記』吉野郡古町村春名松右衛門所蔵文書（『美作古簡集』にも写しあり）	去月廿八日、垸〔○和脱ヵ〕高城江直家被出御馬御責候処、尾頸より一番入仕、剰河本又四郎与申者討取候段、高名無比類候	四月二十八日、宇喜多直家が自ら出馬して高城を攻撃した際、宇喜多方の新免氏家臣春名三之丞が尾首から城中へ一番乗りし、敵将を討ち取った。この春名氏の武功を新免宗貫が称揚したもの。	垸高城　（240高城跡）※垸和高城の誤写	（新免）宗貫	天正八年五月五日	1580年	28・99
197	吉川元春自筆書状／吉川家文書	小田草之城取付隙明候者、至富田打廻候て、羽衣石への行之儀、重疊談合申、一行可申付候	吉川元春が子息経言に送った書状。小田草城の修築が済んで手が空いたら、出雲国月山富田城へ戻って、伯耆国羽衣石城攻略の作戦を談合する予定だと告げる。	小田草之城　（119小田草城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）五月十日	1580年	58
198	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵田中家文書	小者与三郎事、高城にて用ニ立候、不便之儀候、はゝ在之由候条、無忘却之旨、可申聞候＼／、	輝元が家臣の堅田元乗（堅三左）・佐世元嘉（佐与三左）に与えた書状。与三郎という小者が高城の戦いで手柄を立てて戦死したことを聞いた輝元が、その死を悲しみ、決して与三郎の働きを忘れないとの気持ちを残された母親に伝えるよう堅田・佐世両人に命じている。	高城　（240高城跡）	てる元（毛利輝元）	（天正八年）五月十三日	1580年	102
199	吉川元春書状／岡本文書	其方事、今度作州小田草城為在番差籠候、就夫石州三宮神田分并給地段銭之事閣候、（中略）以此上堅固在番肝要候	元春が岡本大蔵丞（兼祐または春識）に与えたもの。元春は兼祐に小田草城の在番を命じたが、その見返りとして石見国三宮の神田と岡本家の給地にかかる段銭を免除する旨を伝え、堅固に城を守るよう申しつけている。	小田草城　（119小田草城跡）	（吉川）元春	天正八年五月十九日	1580年	34・41
200	吉川元春書状案写／岡本文書	其方儀、小田草在番申付候、堺目要害之事、日々夜々用心不可有緩候、第一酒を可相控候	小田草城の在番命令に応じた岡本大蔵丞に対し、吉川元春が指示を与えたもの。境目の要害の守りを昼夜にわたり用心を怠らずに行うこと、そのためにも特に酒をひかえるよう命じている。	小田草　（119小田草城跡）	（吉川）元春	（天正八年）五月二十一日	1580年	41
201	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百三　尾越正右衛門	今度寺畑御在番祝着之至候、然者以備作一着之上、一所之儀無忘却可進置之候	毛利輝元が、寺畑城在番の任に就いた有福元貞に対し、備作平定の後に所領を進呈する旨、約束したもの。	寺畑　（78大寺畑城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正八年）五月二十六日	1580年	28・87
202	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五ノ一　湯原文左衛門	岡山衆東郡蔵敷口打出之由候間、為押諸警固今日乗浮候之条、甲斐敷人数雖打出候、定而事々敷申響、所々可及武略候、被得其心、何篇手堅御覚悟専一候、高田口急度一勢被指出候	宇喜多軍が美作国東郡・倉敷口へ出陣した。これを知った隆景は、水軍を出航させて宇喜多軍を牽制した。その上で隆景は祝山城番湯原春綱に対し、宇喜多軍の所々への武略に用心するよう伝え、毛利輝元が援軍を高田口まで差し向けるであろうことを報じている。	蔵敷　（〈備中422〉小野城または389林野城に関連）※「蔵敷口」について、備中国の倉敷、美作国の倉敷の2説あり （179医王山城跡） 高田　（33高田城跡）	小早川隆景	（天正八年）五月二十八日	1580年	13・28・87
203	鵜飼元辰書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	某許御在番昼夜之御辛労無申計候、今度因州之成下不及是非候、就夫備前衆東口取出、二三所不慮之由無御心元候、（中略）当城之儀幸御方様御在番之事候間、此度一廉可被抽御忠儀事肝要候（中略）鵜新元辰　判　幸山ｙ	小早川隆景の家臣鵜飼元辰が、祝山城番の小川元政（小右）に宛て昼夜の在番の苦労をねぎらった書状。因幡国の離叛にともなって備前衆（宇喜多軍）が美作国東部へ進出し、毛利方の城が二、三ヶ所陥落したことを心配し、祝山城には元政が在番しているのでこのような情勢下で一廉の忠義を心がけるのが大切である、と伝えている。	二三所 当城　（179医王山城跡） 幸山　（〈備中414〉幸山城跡）	鵜新元辰（鵜飼新左衛門尉元辰）	（天正八年）六月八日	1580年	28・86
204	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五ノ一　湯原文左衛門	今度因州表為手合、備前之者共、其境与風打越、二ヶ所之不慮不及是非候、灘手切之相動、於于今者為始直家、多分打入候条、不可有珍儀候、（中略）至高田先一勢被差出候、此節各被指堅、無異儀被相拘様ニ、御短束肝心候、鑓而可罷出候条、勝利眼前候	織田軍の因幡国侵攻に呼応して、宇喜多軍が祝山城周辺に進出し、毛利方の城が二ヶ所落城してしまった。しかし、水軍の活動によって、今は直家をはじめ宇喜多軍の多くが撤収した。隆景はこれらの状況を祝山城番湯原春綱に伝え、毛利輝元が高田城まで援軍を差し向けるので、城を異変なく維持するよう命じている。	二ヶ所 高田　（33高田城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）六月九日	1580年	13・28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
205	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	因州表為手合、備前之者共其境与風打越、二ケ所之不慮不及是非候、灘手切被相動、於于今者為始直家、多分打入候（中略）至高田先一勢被差出候、此節各被指堅、無異儀被相抱候様ニ御短束肝心候	小早川隆景が祝山城番の小川元政（右衛門兵衛尉）に送った書状。羽柴秀吉の因幡国攻撃に合力するため、宇喜多軍（備前之者）が祝山城周辺に出陣し、毛利方の城が二ヶ所落された。だが、灘で宇喜多氏に敵対する動きがあったため、直家以下の多数の宇喜多軍が帰陣した。こうした戦況を受け、まず高田城に毛利軍の一部を出動させたので、元政らも城を異常なく維持するよう努力せよ、と命じている。	二ヶ所 高田　（33高田城跡）	(小早川)隆景	(天正八年)六月九日	1580年	28・86
206	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	其元之儀堅固之由肝要候、兵粮等之儀急度可指上候、無緩之条可心安候	毛利輝元が祝山城番の小川元政（右衛門兵衛尉）に与えた書状。元政が城を堅固に維持していることを褒め、兵糧を必ず搬送するので安心するよう伝えている。	(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)六月十日	1580年	28・86
207	吉川元長書状写／岡本文書	今度作州小田草へ被籠付而、従上両三通被遣候、於我等茂向後不可有余儀候、遠国と云、辛労之至り候	小田草城へ籠もることになった岡本大蔵丞に吉川元長が与えた書状。毛利輝元からの手紙にもあったが、元長としても今後大蔵丞を大事に扱いたいと思っていることを伝え、遠国の城への勤番の苦労をねぎらっている。	小田草　（119小田草城跡）	(吉川)元長	(天正八年)六月十一日	1580年	41
208	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	先以当分堅固之由候間肝要候、兵粮之儀以銀子差籠候、則此者遣之候、趣可申候、至高田者頓口中指出候、爰元之儀茂隆景被越候間令相談、其口心付之儀不可有油断候、城内彼是之様躰具可申越候	毛利輝元が祝山城番の湯原春綱（豊前守）に与えた書状。春綱が城を堅固に守っていることを褒め、兵糧については銀子のかたちで送ることを伝えている。また、高田城に口羽春良（口中）を派遣したことを伝え、輝元自身も小早川隆景と相談して祝山城方面への支援を油断なく行う予定なので、城内の様子を報せるよう命じている。	高田　（33高田城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月十五日	1580年	28・87
209	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	今度中山逆意之節、其許祝山儀千万無御心元存候処、御堅固之段本望候	毛利輝元が草苅重継（次郎）に与えた書状。中山城が毛利氏に叛逆した際、輝元は草苅氏の領域や祝山城がどうなるか心配していたが、重継の働きで堅固に維持されたことを聞き、満足の意を示している。	中山　（282仲山城） 祝山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月十九日	1580年	28・85
210	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	此節当城堅固之覚悟、無比類次第候、両度被申越之通、慥令承知候、就夫先兵粮之儀、追々至舛形被指上候間、可御心安候、毎事福　三被相談、是非当城之儀、此方行被待付、於被持詰者、一廉可為忠儀候、勿論別而可被加御褒美候	隆景が、祝山城を堅固に守っている湯原春綱（右京亮）・小川右衛門兵衛の心がけを称賛したもの。兵糧については、追々枡形城まで送り届けるので安心すること、福田盛雅（福三）と相談し毛利の援軍がたどり着くまで城を堅固に維持できたら、褒美を与えることなどを伝えて励ましている。	当城　（179医王山城跡） 舛形　（141桝形城跡）	(小早川)隆景	(天正八年)六月十九日	1580年	13・28・86
211	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻八十　井上作左衛門	今度其方事、至祝山可遣之由申候処、即事請祝着候、自然万一立用事も候ハヽ其方忠儀通、対小三郎可相届候	毛利輝元が井上元治（雅楽允）に祝山城へ向かうよう指示したところ、元治はこれを即座に了承した。輝元はこうした元治の心がけを褒め、もし万一元治が落命するようなことがあっても、その忠義ぶりを一族の井上元久（小三郎）に伝える旨、約束している。	祝山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十日	1580年	28・86
212	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十一　阿武郡裁判江山市郎左衛門	今度其方事、祝山へ可遣之由申聞候処、則事請祝着候、自然万一立用事候ハヽ、其方忠儀之段、対子共可相届候	上と同じ。毛利輝元の命を容れて祝山城へ赴くことになった江山弥左衛門に対し、もし万一命を落とすようなことがあっても、その忠義のあり様を遺児に伝えることを約束している。	祝山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十一日	1580年	28・88
213	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	祝山兵粮之事、至升形追々指越之候、福　三右申談、可取入事肝要候	毛利輝元が湯原春綱（豊前守）に対し、升形城から追々祝山城への兵糧搬入を実施するので、福田盛雅（福三）と相談して城内へ取り込むよう命じている。	祝山　（179医王山城跡） 升形　（141桝形城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十一日	1580年	28・87
214	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	今度其方以無二之覚悟、当城堅固之由候、寔神妙之至候、更々無比類候、然間弓矢一着候者、別而為志一所可遣之候	小川元政（右衛門兵衛尉）の無二の覚悟によって祝山城が堅固に保たれたことを聞いた輝元が、その働きを称賛し、戦争終結後に特別に給地を与える旨約束したもの。	当城　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十二日	1580年	28・86
215	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	急度可令出張之条、其内之儀堅固之覚悟専一候	毛利輝元が湯原春綱(豊前守)・小川元政（右衛門兵衛尉）の両人に対し、必ず救援のため出陣するので、その間祝山城を堅固に維持するよう心がけよ、と命じている。	(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十三日	1580年	28・86
216	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	急度可令出張之条、其内之儀堅固之覚悟専一候	上記史料214と宛先・内容ともほぼ同じ。輝元が湯原春綱と小川元政に対し、必ず救援のため出陣するので、それまでの間祝山城を堅固に維持するよう命じたもの。	(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)六月二十三日	1580年	28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
217	小早川隆景書状写／藩中諸家古文書纂十五	従祝山此両使到来候条、趣申含只今差籠候、両度如申銀子・兵粮之儀、定而はや某元可為参着候条、城［　　］少宛茂可被入置、（中略）彼城之儀、是非一救立之段、深□申遣候間、被成其意、御才覚肝要候	隆景が升形城番の吉田源四郎（吉源）・森脇春方（森飛）に指示したもの。祝山城から使者が到来したことを受け、すでに升形城に銀子・兵糧が届いていると思うので、少しづつでもいいから祝山城へ搬入するよう命じている。祝山城については必ず救援すると約束しているので、そのつもりで才覚するよう伝えている。	祝山　（179医王山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）六月二十五日	1580年	28
218	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	就当城抱様之儀、児玉ニ壱人被相副承候通具得其意候、幾度申候而茂今度御方堅固之覚悟、更無比類候段申疎候（中略）某許之儀是非共被持抜、此方行被待付、此時連々可被抽忠儀事肝要候	隆景が祝山城番の小川元政（右衛門兵衛）に送った書状。児玉氏ほか一名の使者から祝山城守備の様子について聞いた隆景が、元政の心がけを賞揚し、是非このまま城を守り抜き、毛利軍の到着を待って忠義に努めるよう伝えている。	当城　（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）六月二十五日	1580年	28・86
219	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	就当城拘様之儀、両使被差越条々承候通得其意候、何ケ度申候而茂今度無二之覚悟無比類候、然間先兵粮之儀、追々至舛形指上候、行之儀元春相談候条、是非共可被持抜事、可為一廉之忠儀候	隆景が祝山城番の湯原春綱（右京進）に送った書状。春綱の使者から祝山城守備の様子について聞いた隆景が、春綱の心がけを称賛し、追々兵糧を升形城から搬入することを伝えている。また、吉川元春と相談して援軍を出すようにするので、是非それまで持ち堪えるよう指示している。	当城　（179医王山城跡） 舛形　（141桝形城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）六月二十五日	1580年	28・87
220	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	当城之儀、以両三人覚悟堅固踏静、籠城忠儀之段無比類候、然間諸勢相揃、急度打出可相救之条、本意案中候、其内於兵粮等者折々可指籠候、得其意可持抜事肝心候	輝元が祝山城番の湯原春綱（豊前守）に送った書状。春綱ら三人の城番の覚悟によって、祝山城が堅固に保たれていることを褒めている。また、諸勢を集めて必ず救援すること、兵糧等もその都度搬入することを伝え、そのつもりで持ち堪えるよう命じている。	当城　（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）六月晦日	1580年	28・87
221	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	当城之儀、以両三人覚悟堅固踏静、籠城忠儀之段無比類候、然間諸勢相揃、急度打出可相救之条本意案中候、其内於兵粮等者折々可指籠候、得其意可持抜事肝心候	上記史料219と同文で祝山城番の小川元政（右衛門兵衛尉）に宛てたもの。	当城　（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）六月晦日	1580年	28・86
222	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山堅固之由肝要候、雖然、日夜無御心《〇挿字：元》候条、何と様にも切々被相談之猶以可被付御心事可為祝着候	輝元が升形城番の森脇春方（飛騨守）に送った書状。祝山城が堅固に維持されていることを聞いた輝元が、そうはいっても日夜心配なことも多いので、とにかくよく相談して祝山城衆を元気づけるのが大事だと伝えている。	祝山　（179医王山城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正八年）六月三十日	1580年	28
223	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	此方行之事来八月上旬ニ者本陣・隆景陣替候而可被及行儀定候、其内之儀為何雖難堪之子細候、番衆中無二被申談、当城之儀此方行迄是非可被待付事肝要候、然者於因作千貫之地可被差遣之通、自我等能々可申之旨、以安国寺被仰越候、尤可然候、此段涯分申調之可進置候、然上者愈当城之儀堅固被相抱、可被極忠節事肝心候	元春が祝山城番の湯原春綱（豊前守）に対し、八月上旬に毛利輝元（本陣）・小早川隆景が陣替えして祝山城救援を実施することが決まったので、どのような困難があっても番衆どうしでよく相談し、援軍到来まで城を維持するよう命じている。また、因幡・美作両国で1000貫の恩賞地がもらえるよう輝元に働きかけてほしい、という春綱の要望を聞き入れ、希望が実現するよう調整することを約束している。	当城　（179医王山城跡）	（吉川）元春	天正八年七月四日	1580年	28・87
224	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	今度祝山兵粮五百俵之儀、自御本陣於葛下御短束候而、少完茂被差遣之由候、然者祝山罷居候此方番衆江茂兵粮之賦候て、可勘渡事肝要候	元春が升形城番の森脇春方（飛騨守）に送った書状。祝山城へ搬入する500俵の兵糧を毛利軍本陣から葛下城まで運ぶ旨を伝え、祝山に籠城している毛利方の番衆へ兵糧を割り当てるよう命じている。	祝山　（179医王山城跡） 葛下　（122葛下城跡）	（吉川）元春	（天正八年）七月五日	1580年	28
225	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	何ケ度申候而茂、某許堅固之段太慶此事候、福三被相談、弥無二之御才覚専一候	小川元政（小右）が祝山城を堅固に維持していることを隆景が褒め、福田盛雅（福三）と相談してますます才覚に励むよう命じたもの。	（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）七月十日	1580年	28・86
226	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之三　湯原文左衛門	何ケ度申候而茂、某許堅固之段太慶此事候、福三被相談、弥無二之御才覚専一候	上記史料224とほぼ同文で、祝山城番の湯原春綱に与えられたもの。	（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）七月十日	1580年	28・87
227	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	某許愈堅固之由先以肝要太慶候、（中略）雖然出勢之儀一日茂可指急之由、重畳以内意承候通速得其意候、度々如申此方短束少茂無緩候条、随分可被抱抜事肝心候＼／、今度其境一行之儀、経〔軽〕々と互申承候つるも、惣人数之催ニ候条、けにとハ五日十日之遠近ハ可有之候、其段両人共功者之儀候間、能々被遂分別、是非当城下ニ退屈之所を茂被仕延、此度可被持抜事可為御名誉候、仍兵粮之儀承候、則一人相添本陣江申下候	隆景が祝山城番の湯原春綱(豊前守)に送った書状。祝山城が堅固に維持されていることに祝意を述べ、一日も早く援軍を出陣させてほしいとの春綱の要望に対しては、少しも緩みなく尽力している、「惣人数の催し」になるので五日や十日のずれは生じると弁明している。また、春綱らは「巧者」なので、よく分別して城を守り抜けば名誉となるだろうと述べ、兵糧に関する要望については本陣へ申告した、と伝えている。	当城　（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）七月十一日	1580年	28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
228	吉川元春書状写／『閥閲録』巻八十八　井原十郎左衛門（『譜録』い70井原にも写しあり）	舛形在番之儀申談付而、於伯州百石之地可進之通令約諾候、其段少茂不可有相違候、以羽衣石一着上、坪付等可進置候	吉川元春が宇山久信（大蔵丞）に対し、舛形城在番の代償として伯耆国で100石の給地を進呈するとの約束を改めて確認し、羽衣石城攻略の後に給地の詳細を記した坪付を渡す旨伝えたもの。	舛形　（141桝形城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）七月十三日	1580年	28・41・86
229	小早川隆景書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山之儀、具為可蒙仰、彼番衆中青彦・某元被罷出候、則被差越条々示給候、祝着候（中略）以金銀之間、兵粮少宛も短束可成様、此使被申候条、先以肝心候、只今も指遣候、追々可差籠候、其元調置候兵粮之儀、何と様にも御才覚候	隆景が升形城番の森脇春方に送った書状。祝山城衆の要望を具体的に聞くため、青松彦三郎と春方が出向き、ただちに要望を箇条書きにしたものを示したことに礼を述べている。兵糧補充を少しづつでもいいので努力してほしいとの要求については、今回も送付し、さらに遣わすつもりであると伝え、春方が調達した兵糧についても、何とか才覚して祝山城へ届けるよう依頼している。	祝山　（179医王山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）七月二十日	1580年	28
230	吉川元春書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	湯淺甚助事昨日爰許帰着候て、某元之趣具承知候、当時難堪之由候、心遣察申候、雖然本陳・隆景事頓被打出候条、其間之儀弥堅固之覚悟肝要候、（中略）此節今少之儀候条、何と様にも城中被申談、出張可被相待付事肝心迄候	元春が湯浅甚助からの報告を受け、祝山城番の小川元政（右衛門兵衛尉）に送った書状。今は堪えがたい状態にあるようだが、毛利輝元（本陣）・小早川隆景がすぐに出陣するので、その間堅固に城を守る覚悟をなし、城中で何事も相談して毛利軍の出陣を待つよう伝えている。	（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）七月二十日	1580年	28・86
231	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	湯淺甚助事、昨日爰許帰着候而其許之趣承知候、当時難堪候由御心遣察申候、雖然本陣・隆景頓被打出候条、其間之儀弥堅固之御覚悟肝要候、（中略）此節今少之儀候間、何と様茂各被仰談、出張可被待付事肝心迄候	史料230とほぼ同文で、祝山城番湯原春綱に宛てられたもの。	（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）七月二十日	1580年	28・87
232	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	今度籠城之儀、盛雅・旁之事者被引懸たる儀候条、不及申候、家中衆被相揃、御堅固之段可然候、（中略）愈出勢被待付候事頼存計候、然間以御本意之上、輝元申聞一所之地可進置候	隆景が湯原春綱（豊前守）に対し、祝山城への籠城について、福田盛雅や春綱ら城番のみならず家中衆まで揃って城の堅持に努めていることを褒め、援軍出陣を待つよう伝えるとともに、合戦勝利の後に恩賞地が給与されるよう毛利輝元に取りなすと約束している。	（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）七月二十日	1580年	28・87
233	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	羽衣石儀可然調略之儀候間、此表之儀ハ則時ニ際可明候、然間祝山之儀其間之事、木の根かやの根ニて成共相堪事入儀候（中略）此口行間之儀、其表堅固之覚悟肝要候、祝山兵粮之儀、自本陣某元迄被送越之由候、通路不輒付而于今少茂不差籠之由、何共笑止千万候、何と様に茂気遣候て、少充成共差遣度事候	元春が祝山城番の湯原春綱（右京進）に送った書状。伯耆国羽衣石城は調略がうまくいって即時に片がつきそうだと伝え、それまでの間祝山城は木の根・茅の根を食べてでも堪え忍び、堅固に守ることが必要だと述べる。毛利軍本陣から祝山城に兵糧を送っているものの、通路確保に難航して少しも城には届いてないとの報せに対し、大変困ったことで、何とかして少しづつでも兵糧を入れたい、と伝えている。	祝山　（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）七月二十二日	1580年	28・87
234	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	当城之儀弥堅固之由尤肝要候、不及申候へ共、短息専一ニ候、爰元之儀不日出張候、来月上旬至其口可及行儀定候、其内之儀各申談、無異儀候様気遣肝心候	輝元が祝山城を堅固に守備する湯原春綱（豊前守）に対し、来月上旬には毛利軍が出陣し、祝山城付近に進軍すると決まったことを伝え、その間各々で相談し、城に異常が発生しないよう気遣いせよ、と命じている。	当城　（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）七月二十二日	1580年	28・87
235	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	此者事、至祝山差遣候、堅固ニ可被送付候、爰元之儀、来二日出張儀□〔定ヵ〕候、□国衆無残相催候、則及行候条、可心安候、其内至益形心付之儀、不可有御油断候	輝元が益形城番の森脇春方（飛騨守）に対し、毛利家からの使者を無事に祝山城へ送り届けるよう命じた書状。祝山城への援軍については、来る八月二日の出馬が決定し、国衆を残らず召集したただちに軍事行動を起こすので安心するよう伝え、その間益形城への配慮を怠らないよう命じている。	祝山　（179医王山城跡） 益形　（141桝形城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正八年）七月二十三日	1580年	28
236	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	其許弥堅固之段尤肝要候、此方之儀急度打上及行之間、其内無不慮之様気遣専一候、無緩之趣為可申聞、蔵田事如升形指上候	輝元が湯原春綱に対し、祝山城をますます堅固に守備するよう命じた書状。毛利軍が必ず出陣し支援するので、その間不慮が起こらないよう配慮せよと命じ、督励のため蔵田元貞を升形城へ派遣したことを伝えている。	升形　（141桝形城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）八月五日	1580年	28・87
237	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山兵粮差籠候《○挿字：趣》并草苅表弥心付之儀、為無緩一人至其元差上之可然之由、従元□□被仰越候条、蔵田与三右衛門事差上候、（中略）祝山無不慮候様調儀頼入候とても此方打上、及行預無油断候、其内之儀短束肝要迄候	輝元が升形城番の森脇春方（飛騨守）に送った書状。祝山城への兵糧搬入及び草苅氏領への支援を緩みなきものとするため、人員を派遣してほしいとの要望があったので、蔵田元貞（与三右衛門）を派遣したことを伝えている。また、毛利軍が出陣するまで祝山城に不慮なきよう調整を春方に依頼している。	祝山　（179医王山城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正八年）八月五日	1580年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
238	小早川隆景書状写／『美作国諸家感状記』　勝北郡某所持文書	今度其方事、籠城中乍三〔ママ〕対盛雅別而忠心之由無比類候、弥当城堅固之儀御心懸肝要ニ候、既来廿五六日発足候間、追々着陣候条、大利案中ニ候	隆景が芦田菅兵衛・芦田甚左衛門に対し、祝山城に籠城し福田盛雅に忠節を遂げていることを褒め、ますます城が堅固になるよう心がけよと命じた書状。毛利軍の出陣は来る八月二十五、六日とされ、着陣すれば大勝利間違いないと述べている。	当城　(179医王山城跡)	(小早川)隆景	(天正八年)八月九日	1580年	28
239	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	当城之儀、中旬迄者兵粮等可有之由、尤可然候、吉田ニ茂此比至中途出張之儀候、左候間隆景被申談、急度其口可被及行候、唯今迄無二之覚悟、被相抱事候条、今少何と様にも有才覚、加勢可待付事、肝心迄候＼／、(中略) 其表加勢之儀、一日茂差急儀候条、先付城等取付候て、其表可打廻覚悟候、右之趣盛雅申談、弥堅固之短束専一候	祝山城将湯原春綱（豊前守）から兵糧が中旬まで持ち堪えると報告を受けた元春が、今後のことを伝えたもの。毛利輝元が最近途中まで出陣したので、隆景と相談してまもなく祝山城救援の軍を起こすだろうこと、元春も差し急ぎ加勢に出陣し付城を築くことを伝え、今少し加勢を待ち福田盛雅と相談して堅固に城を維持するよう命じている。	当城　(179医王山城跡)	(吉川)元春	(天正八年)八月十五日	1580年	13・28・87
240	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	備前衆其表江就打出ニ、追々御注進到来、披見候、先書ニ如申、諸警固之儀、浦辺差廻及行候、爰許之儀、悉打立候間、轟而高田可上着候、何ヶ度候而茂、無不慮様、旁御才覚肝要候、委細蔵　与申含、舛形差上候間、可有演説候	湯原春綱（湯豊）・寺岡備前守（寺備）から宇喜多軍が祝山城付近に進出してきたことにつき注進を受けた隆景が、返答したもの。隆景は水軍で瀬戸内沿岸を脅かしていること、毛利軍も全軍出陣しやがて高田城に到着するだろうことを伝え、春綱らに不慮の事態にならぬよう才覚を求めている。なお、詳細は枡形城に向かわせた蔵田元貞（与三左衛門尉）に言い含め、口頭伝達するとある。	高田　(33高田城跡) 舛形　(141桝形城跡)	(小早川)隆景	(天正八年)八月二十日	1580年	13・28・87
241	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	先以当城堅固之段肝心候、旁之覚悟無二之儀更無比類候、爰許出張之儀去五日雖儀定候、少気相悪之故延引候、於于今ハ得快気之間、来廿六日聢発足候之条、其内弥以堅固才覚可待付事簡要候	輝元が祝山城を堅固に守備する湯原春綱（豊前守）の覚悟を褒め、援軍の出立について述べた書状。毛利軍出陣は去る五日と定めていたものの、体調不良で延期になり、来る二十六日に変更になったことを伝え、その間才覚をもって城を堅持し援軍到着を待つよう命じている。	当城　(179医王山城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)八月二十日	1580年	28・87
242	小早川隆景書状写／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛にも写しあり）	就高田表行之儀、弾正忠殿御越候、委細申談候、弥至松山被仰談御上之儀肝要之通、申事候、豊景可有御上国之由、専要存候、(中略) 御養生候而作州御上、於輝元祝着可被申候	隆景が楢崎豊景（三川守）に送った書状。毛利軍の高田城転陣について、高田城番の楢崎弾正忠元兼がやって来て詳しく相談したところ、松山城で相談した上で転陣するのが肝要である、との意見だったという。豊景も病気を治して作州へ出立するとのことで、これを知れば毛利輝元も喜ぶだろう、と述べている。	高田　(33高田城跡) 松山　(〈備中158〉備中松山城跡)	(小早川)隆景	(天正八年)八月二十日	1580年	86・102
243	天野隆重書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	祝山之事無御心元之由、従隆景茂昼夜被仰越候、於元春茂尤之由被申候、爰許城普請一ツ二ツ以配差急可仕之由被申候間、急度隆景迄可被申談候、其御城はや数年之儀候之条、下々之者窮困疲果ル之由無余儀存候、何と様ニ候て茂救可被申候	吉川元春に従って転戦中の天野隆重が祝山城番の湯原春綱（湯豊）に送った書状。祝山城について小早川隆景が心配していること、元春も同じように感じており、山陰方面の一、二ヶ所の城普請を急いで仕上げ、隆景と相談して対処するつもりでいることを伝えている。祝山の籠城もはや数年に及び、下々の者は困窮し疲れ果てているとのことだが、毛利氏は何としても救援するつもりでいると述べている。	祝山　(179医王山城跡)	(天野)隆重	(天正八年)八月二十二日	1580年	28・87
244	宇喜多直家感状写／備前北野加茂村源八所蔵文書	高城之者追散其上竹内籾村口へ落候處被討捕候段無比類候	宇喜多軍が高城を攻め落とすと、城主竹内為能は籾村口へ落ち延びた。これを発見して討ち取った小坂与三郎の手柄を、宇喜多直家が称揚したもの。	高城　(240高城跡)	(宇喜多)直家	(天正八年)八月二十三日	1580年	99
245	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	爰許出張延引ニ付而、児玉善右衛門方被差出候、誠至于今当城堅固被相抱之段更無比類迄候、仍明後日輝元出張候、其外追々ニ高田可令着陳候 (中略) 殊元春伯州隙明、其口被打廻候条、打まるミ可及行候間、勝利眼前候	毛利軍の出陣延期について、使者（児玉善右衛門）を立てて問い合わせてきた湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右）ら祝山城番に対し、隆景が返答したもの。三人が今に至るまで祝山城を堅固に維持してきたことを褒め、明後日に毛利輝元が出張し、追々高田城へ着陣する旨を伝えている。また、吉川元春も伯耆国での戦争を終え、祝山城方面へ転進するので、これと合同して戦えば勝利間違いないと述べている。	当城　(179医王山城跡) 高田　(33高田城跡)	(小早川)隆景	(天正八年)八月二十四日	1580年	28・86
246	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	於于今者はや悉被打立候儀候間、外儀内儀之申分茂無之候、堅固ニ行可被待届事肝要候、さて＼／今度之被抱様、無比類申茂疎候、於此上行肝要迄候、従高田追々可申談候	隆景が祝山城番の湯原春綱・小川元政に対し、既に毛利軍は全て出立したので、城を堅固に守って待つよう命じている。また、春綱らがこれまで城を維持してきた有様を比類なきことと称え、高田に着いたら追って相談すると伝えている。	高田　(33高田城跡)	(小早川)隆景	(天正八年)八月二十四日	1580年	28・86

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
247	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	備前衆中通打出候、篠吹を被誘候様ニ申候哉、爰元へも其聞候、何茂趣之聞合候て可承候	元春が某（宛名欠損）に宛てた書状。宇喜多軍（備前衆）が「中通」に出陣し、篠吹城を修築したとの噂があり、元春のところにもそのような風聞が届いていた。元春は宛先の人物に対し、このような噂について、聞き合わせた上で事実関係を承りたい、と述べている。	篠吹　（88篠向城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）八月二十七日	1580年	28
248	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山之儀去廿四一着之由、蒙仰候、不及是非候、当城之儀弥堅固之御覚悟候肝要候、加勢之儀、不可有油断候	升形城番の吉田源四郎・森脇春方（飛騨守）から去る二十四日に祝山城が落城したとの報告を受け、吉川元春が仕方ないと返答したもの。升形城についてはますます堅固に維持するよう心がけよと命じ、油断なく加勢する旨伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 当城　（141桝形城跡）	（吉川）元春	（天正八年）八月二十八日	1580年	28
249	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻七十四　粟屋縫殿	然者当時某許御在番之由、誠御辛労令察候、（中略）爰許之儀、急度出張候、元春其境被打過候条、打合一行可申付与存候吉田ニも急度御出張之由候、万々於其境以面可申承候、直家事茂篠吹取付打入之由ニ候哉、於于今者、珍儀有間敷と存候	隆景が飯山城在番の粟屋元通（備前守）の辛労をねぎらい、戦況を報じたもの。隆景も必ず出陣し、すでに出動した吉川元春と打合せの上で軍事行動を起こすこと、毛利輝元も必ず出陣すると言っていることを伝え、宇喜多直家が篠吹城を修築していったん撤収したとの情報につき真偽を確認している。	篠吹　（88篠向城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年）八月二十八日	1580年	13・28・86
250	小早川隆景書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山衆於覚悟者、更無残所迄候、然間、兵粮之儀此［　　］少成共属可□籠□従至高田・升形□所之置兵粮［　　］弐百三百之間是非可被差籠候、軈而於高田過分ニ相調儀候条、少□旁御手前相違之儀有間敷候	隆景が升形城番の松源（未詳）・森脇春方（森飛）・吉田源四郎（吉源）に対し、祝山城への兵糧搬入について指示した書状。	祝山　（179医王山城跡） 高田　（33高田城跡） 升形　（141桝形城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）九月二日	1580年	28
251	小早川隆景書状写／藩中諸家古文書纂十五	就祝山之儀、至高田被仰越候通、追々到来慥令承知候、福三并番衆中重畳無比類覚悟之段、更不能言悟〔語〕候、去廿八日輝元途中出張候間、弥路次等無滞着陣之儀追々申下候間、軈以不可有緩候、吾等事元春申合候間、同日高田［　　］着陣候	高田城に到来した祝山城に関する注進・要請を受け、隆景が升形城番の吉田源四郎（吉源）・森脇春方（森飛）に送った書状。福田盛雅（福三）・番衆の覚悟は言語に絶するものであるとして、去る二十八日に毛利輝元が途中まで出陣したことを伝え、隆景自身も吉川元春と申し合わせ、同日に高田へ着陣する予定である、と回答している。	祝山　（179医王山城跡） 高田　（33高田城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年）九月二日	1580年	28・80
252	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百三十六　磯兼求馬	祝山之儀、福田并番衆中以覚悟持堪候之条、追々令出勢儀候、然間其元各々事、六日にハ隆照上着肝要候、余爰元着急度候之間、先其内松山迄小物一人ニて可被越候哉との調儀候、一切不可有緩候	隆景が磯兼景道（左近大夫）らに送った書状。福田盛雅や番衆の覚悟で持ち堪えてきた祝山城を救援するため、毛利軍が出陣することになったと伝え、景道らにも六日には上着するよう伝えている。また、事を急ぎたいので、松山城まで従者一人だけ連れて来てもらおうか、という話も出ていることを伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）九月二日	1580年	28・87
253	毛利輝元起請文写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	先以籠城堅固之段、祝着候、然者加番者之内、備前江申合現形之由、無曲候、其方難堪之通、尤無余儀候、就夫雑説不及是非候、御方心底之趣、以罰文被申越、則令承知喜悦至候、於我等少茂無別儀候（中略）今度籠城堅固ニ被相抱、加勢可被待付事専一候	湯原春綱（豊前守）が守備する祝山城の加番者の一部が、宇喜多直家と通じて謀反を起こした。このため、城内には悪い噂が流れた。春綱はこの事態を受け、自身の潔白を示す起請文を毛利氏に提出した。これを受け輝元は、春綱に全く疑心をもっていない旨を誓い、その進退を保証した上で城を堅固に維持し加勢を待つよう命じている。	（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）九月三日	1580年	13・28・87
254	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	祝山之儀、直家取懸種々及取拵、過半和平相調様候処、備前衆指操之趣、福田其外此方番衆聞付、各指固、甲丸三重堅固相拘、無二之覚悟之由、追々申来候、誠盛雅無比類段、申茂不足候、就其、右趣隆景へ申遣候間、此書状早々笠岡へ被付候て可給候	吉川元春が某（宛名欠）に対し、祝山城の戦況を記したこの書状を笠岡城の小早川隆景に届けるよう依頼したもの。そのころ宇喜多直家が祝山城に攻め寄せてあれこれ調略を行い、和平がととのうかのように見えたが、宇喜多軍（備前衆）の謀りごとに福田盛雅ら毛利方の番衆が気付き、甲丸（祝山城の主郭）を厳重に固めていたという。	祝山　（179医王山城跡） 笠岡　（〈備中254〉笠岡城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）九月三日	1580年	28
255	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	富屋事、はや小田草へ被差籠候処、自兵部鉄炮之者二三人茂被付之趣□《傍注：消》被仰越候、祝山無異儀付而茂早々差籠候ハて不叶事候、其段分別候て可被差急	吉川元春が重臣の今田経高に宛てた書状。富屋氏を急いで小田草城へ籠らせようとしているところに、今田春倍（兵部。経高の子）から元春に対し鉄砲衆を二三人添えてやってほしいと依頼がきた。これに対し元春は、祝山城に異常がなくても、早々に小田草城へ将兵を入れなくてはいけないので、そのことを理解し急いで小田草への将兵派遣を急ぐよう命じている。	小田草　（119小田草城跡） 祝山　（179医王山城跡）	駿元春（吉川駿河守元春）	（天正八年）九月三日	1580年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
256	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	至当城備前衆差詰之、城中敵同意候而、既及落去候処ニ、両三人以無二之覚悟、三之丸相抱、剰敵心之者立出、福田事茂堅固之由、誠肝要候、併悉皆両三人短束之故候、更無比類候、此方之儀、（中略）追々令陳易、即時可及行議定候、其段可心安候	祝山城を宇喜多軍が包囲し、城中からも敵に同意する者が現れて、もはや落城かという状況になった。その時、湯原春綱（豊前守）・塩屋元真（豊後守）・小川元政（右衛門兵衛）の三人が無二の覚悟で三の丸を維持し、敵に内通した者を城外へ追い出した。福田盛雅も変わらず堅固に守備を継続している。これを聞いた輝元が、全て三人の奔走あってのことと喜びを伝え、毛利軍が陣替えし即刻救援に向かうことが決定したので、安心するよう伝えている。	当城　（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）九月四日	1580年	13・28・86
257	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六十八　湯川平左衛門	爰元之儀今朝申きかせ候やうに、一昨日至山中着陣候、追々陣替候て行可申付儀定候、明後日者至新見陣替候、則宮山可為取詰候	毛利輝元が湯川元常（平左衛門尉）に対し、美作国への進軍の状況を伝えたもの。輝元は一昨日備後国山中に到着したところで、明後日には備中国新見に陣替えし、ただちに宮山城を包囲する考えであることを伝えている。	宮山　（56宮山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）九月五日	1580年	28・86
258	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十之一　萩町人日限二郎右衛門	忍斎事、今度高田江差遣候、然者今程之儀通路不輒之由候、一段辛労候（中略）此由可申聞候	輝元が門田良清（門左）・堅田元乗（門三）に与えた書状。忍斎を高田城へ派遣することにしたが、最近は通路も不自由とのことなので、苦労をかける旨忍斎に申し伝えるよう両人に命じている。	高田　（33高田城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）九月五日	1580年	88
259	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	備中内郡之衆中悉到舛形、楢弾相添差出候、於趣者可申談候、吾等事軈而高田可令着陳候条、其内之御覚悟肝心候	隆景が祝山城衆の福田盛雅（福三）・小川元政（小与門兵）・塩屋元真（塩豊）・湯原春綱（湯豊）に毛利軍進出の状況を報せた書状。備中内郡衆に楢崎元兼（楢弾）を添えてことごとく舛形城に向かわせたことを伝え、隆景自身もやがて高田城に着陣する予定なので、そのつもりでいるよう命じている。	舛形　（141桝形城跡） 高田　（33高田城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）九月六日	1580年	28・86
260	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	祝山之儀幾度申候而茂、今度堅固之段太慶迄候、其以後打続之、昨夕茂我等籠置候鉄炮放為使罷越候、殊外手堅趣之由候、左候而加勢并兵粮之儀急度可差籠之催半候、隆景事頓高田着之由候、貞俊ハ一昨日五高田江被罷越たる由候、勿論御本陣之儀茂不日彼表被成御着之由候、従此口茂令加勢候条、彼城衆弥本意迄候	元春が湯原元綱（湯弾）に対し、元綱の父春綱の籠る祝山城への援護について報じた書状。元春が祝山に籠らせていた鉄砲衆からの伝聞として、城が手堅く維持されていることを伝えている。祝山への加勢・兵糧搬入については実施の半ばにあり、小早川隆景・福原貞俊が高田城へ到着したこと、毛利輝元（御本陣）も不日高田へ着陣の予定であることを伝えている。また、元春のいる山陰方面からも加勢を出すので、祝山城衆の思い通りになるはずだ、と述べている。	祝山　（179医王山城跡） 高田　（33高田城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）九月七日	1580年	28・87
261	吉川元春書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	於加勢之儀者、一切無緩候、既輝元御事、去三日吉田御打立候、頃漸新見・高田之間、可為御着陳候、隆景事者、急度高田被罷着由候、我等事茂山内通彼表可打越覚悟候、何茂諸行示合儀迄候、兵粮等之儀、是又追々差上候条、可心安候、呉々其表江加勢之儀者、南北共ニ少茂無油断候	湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右兵）に対し、祝山城への加勢について少しも油断していないことを元春が述べたもの。九月三日に毛利輝元が吉田郡山城を出立し、今は新見と高田の間まで着陣していること、隆景と元春も高田城へ出動する覚悟でいることを伝え、兵糧などは追々送付するので安心するよう述べている。	高田　（33高田城跡）	（吉川）元春	（天正八年）九月八日	1580年	13・28・86
262	吉川元春書状／吉川家文書	当春寺畑にて我等内証之段申候キ	吉川元春が息子の経言（広家）に送った書状。天正八年の春、寺畑城にて元春が経言と内談したことが述べられている。	寺畑　（78大寺畑城跡）	駿もと春（吉川駿河守元春）	（天正八年）九月八日	1580年	28・58
263	吉川元春書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	某許之儀、各以無二之覚悟被指堅候段、誠無比類次第候、就夫加勢之儀無緩候、既輝元御事去三日吉田を被成御打立、至備後山中御着陳候、追々御陳易之由候条、不日高田可為御着候、隆景事者不及申候、我等茂来十六日山内迄しかと打立候、十七日ニ者高田可打廻候条、輝元・隆景申談、行之儀不可有油断候条、旁々本意眼前候	元春が、祝山城衆の湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右兵）に援軍の進発状況を伝えたもの。毛利輝元が去る三日に吉田郡山城を出立し、備後国山中に着陣したこと、不日高田城へ到着する予定で、小早川隆景も同様であることを報じている。元春自身も来る十六日に美作国山内へ出立、翌日には高田城へ赴いて、輝元・隆景と相談の上で軍事行動を実施する予定なので、祝山城衆の本意が叶うのは目前だ、と励ましている。	高田　（33高田城跡）	（吉川）元春	（天正八年）九月十日	1580年	28・86
264	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	児　善重而被指出、城中覚悟之趣承候、寔今度逆意之衆被立出、最前之姿無相違当城被持堅、着陳可被待付之由候事、名誉無比類段都鄙不可有其隠候、不及言語迄候、迚途中各打出候之間、弥堅固之才覚専一候	祝山城衆の湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右）の使者（児玉善右衛門）から城中の状況について報告を受けた隆景が、返答したもの。祝山城衆が反逆者を城から追放し、以前の通り異常なく城を固めて援軍到来を待っているとの報せを受け、隆景は都鄙に隠れなき名誉の手柄と褒め称え、既に援軍が途中まで出陣しているので、ますます堅固に守るよう命じている。	当城　（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）九月十一日	1580年	28・86

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
265	吉川元春書状写／『東作誌』東南条郡苫田郷東一宮村東山方農茂右衛門家蔵文書	今度直家其口差詰、種々申曖付而、為始猪俣備前へ申合搆逆意候、既当城及落去候処、各以無二之覚悟、彼謀叛人悉立出し、盛雅并此方番衆被仰談差堅、于今相堪候段、寔無比類御粉骨申茂疎候、（中略）急度至高田打廻令加勢、御本意眼前候	元春が祝山城衆の矢野孫六・矢野九郎三郎に与えた書状。宇喜多直家が祝山城を包囲し調略をこらした結果、猪俣氏らが宇喜多氏に内通し逆心を起こした。そのため、祝山城は落城の危機に瀕したが、矢野孫六らの無二の心がけによって謀反人を城から追放し、福田盛雅・毛利方の番衆と相談して城を堅固に維持し、今に至るまで持ち堪えていた。元春はこうした矢野一族の働きを褒め、必ず高田城まで出馬して加勢するので、祝山城衆の本意が叶うのも間もなくである、と激励している。	当城　（179医王山城跡） 高田　（33高田城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）九月十一日	1580年	28・38
266	楢崎元兼・国司元武・口羽通平連署書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	当城堅固御覚悟無比類候、此表御出勢之儀、無油断相催候、其段盛雅江申入候、其表御行之儀不可有程候、其内之儀弥旁被仰談、御加勢御待付肝要候、元春茂一両日中爰元可為御着候、可御心安候	毛利氏配下の楢崎元兼らが、祝山城を堅固に守備する小川元政（小右）の覚悟を称え、援軍の出陣については城主の福田盛雅に伝えているとおりで、程なくそちらに向かうことを伝えている。その間、城衆どうしでよく相談して加勢を待て、吉川元春も一両日中に毛利軍に合流するので安心するように、と述べている。	当城　（179医王山城跡）	楢弾元兼（楢崎弾正忠元兼）・国右元武（国司右京亮元武）・口羽通平	（天正八年）九月十四日	1580年	28・86
267	蔵田元貞書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	今日益形罷帰候、某許儀御堅固段、更以無申計候、一隆景様頓可有御打出候処、元春様高田御打越被聞召合付而、成羽御逗留候、然者元春様十八日ニしかと山内江御陳替候而、十九日高田可有御着由被仰越候、少も＼／日限不可有相違候（中略）一備中庄・多治部、楢弾頓爰許可罷出由被仰渡、高田着候、此表江之儀楢　弾被申分在之付而延引候、乍去貞俊昨日高田御着候条、堅可被仰渡候	出先から益形城に帰城した蔵田元貞が、湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小与門兵）・寺岡備前守（寺備）ら祝山城衆に対し、毛利軍集結の様子を報じたもの。小早川隆景は吉川元春の高田城入りのタイミングについて聞き合わせを行うため成羽に逗留していること、元春は十八日に美作国山内に陣替えし十九日に高田へ着陣する予定で、日限を違えることはない旨を伝えている。また、楢崎元兼（楢弾）を通じて備中の庄・多治部一族に出陣を要請したところ、高田まで着陣したと述べている。楢崎氏自身の祝山城方面への出陣が延引しているが、昨日高田に到着した福原貞俊が厳しく出陣を命じるだろう、と伝えている。	益形　（141桝形城跡） 高田　（33高田城跡）	（蔵田）元貞	（天正八年）九月十五日	1580年	28・86
268	吉川元春書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	各被差堅之、于今当城被相抱候段無比類候、其付而加勢之儀一切無緩候、既我等事十八日ニ聢と爰元を打立候	吉川元春が、祝山城を堅く維持する湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右兵）らの働きを褒めた書状。加勢については緩みなく進めており、元春自身も十八日に山陰を出立することを伝えている。	当城　（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）九月十六日	1580年	28・86
269	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十六	□〔其〕表之儀、直家数度雖及行、旁以無二之覚悟にて無異儀候、不相堪候之段、寔無比類次第候、爰許之儀、為加勢既十八日聢与令出馬之儀候条、本意眼前候	元春が升形城番の森脇春方に与えた書状。その方面に宇喜多直家が数回にわたって攻め寄せた際、春方らの無二の覚悟によって異常なく凌いだことを褒め、十八日には加勢が必ず出馬するので、本意が叶うのも目前である、と伝えている。	（141桝形城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）九月十六日	1580年	28
270	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	御本陣之儀、近日至高田表可被成御着之由候、然者我等事茂急度可打廻内意候、左候間、□《朱書：兵》部方計可有出陣之由申遣候、内々支度候て、従高田一左右次第ニ可被罷出之通、御助言可為本望候	元春がその重臣今田経高に送った書状。毛利輝元（御本陣）が近日高田城へ到着すること、元春も出陣する心づもりであることを伝えている。これにともない、経高の子今田春倍（兵部）に出陣するよう申しつけたので、支度を整えて高田からの報告次第で出陣できるように、春倍に助言するよう伝えている。	高田　（33高田城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）九月十七日	1580年	28
271	小早川隆景書状／福原家文書	自葛下桜井越中守被差越、兵粮玉薬之事被申越候、此両条肝要之儀候之条、追々本陣可被仰遣事専一候	隆景が毛利氏宿老福原貞俊に送った書状。隆景のもとに葛下城から桜井越中守が使者として到来し、兵糧・鉄砲の弾薬の補充を依頼してきた。この件は重要なので、追々毛利輝元の本陣に伝達するようにと述べている。	葛下　（122葛下城跡）	左衛隆景（小早川左衛門佐隆景）	（天正八年）九月二十七日	1580年	28・97
272	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之二湯原文左衛門	元春打廻少相延故延引仕候、乍去於于今ハ一通明隙候条、可陳替之由候間、勿論不可有緩候、今少之儀候条、盛雅申談堅固之覚悟肝要迄候、（中略）先勢儀者備中内郡衆、楢弾其外追々人数差出候条、可心安候、猶従益形可被申入候	隆景が祝山城番の湯原春綱（湯豊）に送った書状。吉川元春の出陣が延びたため救援が遅れているが、今は手隙になって陣替えできる状況になったことを伝え、今少しの間福田盛雅と相談し堅固に城を守るよう伝えている。また、先陣として備中内郡衆と楢崎元兼（楢弾）らの軍勢を出発させたので安心するよう伝え、詳しくは益形城の番衆から申し入れる旨、述べている。	益形　（141桝形城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）九月二十九日	1580年	28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
273	吉川元棟（繁沢元氏）書状／岩国藩諸家古文書纂	祝山之儀此節従備前雖武略立入候、芸州行依議定弥堅固之由肝要存知候、於今にハ輝元・隆景へ其表可為陣易之条、可然幸便候条一□申候	元棟（吉川元春の子）が、舛形城番の森脇春方（一郎右衛門尉）に送った書状。毛利輝元・小早川隆景が美作方面へ陣替えし、ちょうどいい幸便が出来たので、この書状を差し出した、とある。祝山城に対して宇喜多氏が武略をしかけたものの、毛利軍の出動が決定したことにより城がますます堅固になっているとの報せを喜んでいる。	祝山　（179医王山城跡）	宇少三元棟	（天正八年）九月二十九日	1580年	80
274	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻七十四　粟屋縫殿	爰元之儀、先様弥令陳易、元春申談祝山行、一切無油断申催候、就中篠吹為普請、明　飛罷出候哉、定而可為其分候	隆景が飯山城番の桂就宣・粟屋元通と情報交換したもの。隆景は陣替えの上で吉川元春と相談し油断なく祝山城救援を行うを告げ、篠吹城普請のため宇喜多氏宿老明石行雄（明飛）が出張してきたとの情報につき、おそらくその通りだろうと伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 篠吹　（88篠向城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年）九月晦日	1580年	13・28・86
275	小早川隆景書状／大阪城天守閣所蔵文書	祝山表与風陣替之条、乃兵・安国寺へ彼趣申渡候ハヽ、継夜於日可罷上候	隆景が山田新右衛門に対し、祝山城方面へ陣替えするので、そのことを乃美宗勝（乃兵）・安国寺恵瓊に伝達した後、日に夜を継ぎ急いで参陣するよう申しつけたもの。	祝山　（179医王山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）十月八日	1580年	5・28
276	小早川隆景書状／福原家文書	舛形へ兵粮被付候御調儀、諸村ニ兵粮短束之衆と被仰談、勿論御本陣昼夜御注進候て御急専一迄候、此方角人数之催弥仕候、兵粮必定舛形可有着日限御校量候て可蒙仰候、一祝山之儀、兵粮可被相揃内、無不慮様種々被仕延候、（中略）一因州口之儀付而、羽柴依催岡山衆悉打立たる由候、院庄・荒神山へ罷出候哉、楢　弾・蔵　与被仰談、半納之者敵地ニ被付置、無御油断趣を御聞合可為肝要候	隆景が出陣先の福原貞俊・蔵田元貞（蔵与）・児玉元良（児三右）・楢崎元兼（楢弾）に対し、指示を与えたもの。舛形城への兵糧補充については、諸村で兵糧集めに努力している衆と相談し、毛利輝元（御本陣）にも昼夜注進し、必ず日限までに舛形城へ兵糧が到着するよう裁量せよ、と伝えている。祝山城については、兵糧が揃わないうちに落城したりしないよう、戦闘の引き延ばしを指示している。また、羽柴秀吉の因幡国侵攻に応じて宇喜多軍（岡山衆）がことごとく出陣したとの報せを受け、宇喜多軍は院庄・荒神山城へ向かうのではないかと思うので、楢崎元兼・蔵田元貞と相談して「半納の者」を敵地に配備し、様子を窺うよう命じている。	舛形　（141桝形城跡） 祝山　（179医王山城跡） 院庄　（135院庄構城跡） 荒神山　（250荒神山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）十月十日	1580年	28・97
277	児玉元良書状写／『閥閲録』巻百十五ノ四　湯原文左衛門	此表御陣易事、少茂不可有御緩候条可御心安候、一両日中爰許被成御着陳候之条、今少之儀候間随分御待付肝要候、頃又彼家中衆罷退候哉、笑止千万々、雖然各差堅無二之御覚悟候者、可為御待付候	毛利氏重臣の児玉元良が、祝山城番の湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右）に送った書状。毛利軍の転陣が緩みなく行われていることを伝え、一両日中には元良のいる地点まで到着する予定なので、今少しの間待つよう伝えている。また、城内にいた某家の家臣団が城から退去してしまった由だが、湯原氏らで無二の覚悟をもって城を堅めて援軍を待つよう伝えている。	（179医王山城跡）	（児玉）元良	（天正八年）十月十日	1580年	87
278	小早川隆景書状／福原家文書	此者共之事、先様両口通道之趣、弥尋聞度候て舛形差遣候、元俊去春御澗底之儀共候へ共、仙統なとの路次実儀尋究度之条、自其元茂御一人相副、被差出候て可被聞食合哉と存候	隆景が、通路の様子を把握する目的で舛形城に配下を派遣したことを福原貞俊・元俊父子に報せた書状。「仙統」(山続きの意か）の道の実態を尋ねたいので、福原氏のところからも人を出して聞き合わせを行わないか、と提案している。	舛形　（141桝形城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）十月十一日	1580年	28・97
279	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十九　臼井又右衛門（臼井家文書にも写しあり）	兵粮之儀、六七百俵相調、急度至山内指出候由、尤可然候、能程にも候者、益形まて可差出調儀者、不相成事候哉、乍去其段者不苦候、継夜於日彼表可指出儀肝要候、何と候ても千俵之辻ハ相調、差出候ハてハにて候	祝山城へ搬入するための兵糧六、七百俵を調達し、必ず山内まで運ぶと約束した児玉元貫（市允）・神保就俊（又右衛門）に対し、輝元が指示したもの。もしうまくいきそうなら枡形城まで搬送する手立てはないか、日に夜を継ぎ何としても千俵ていどは調達して搬入しなければならない、と伝えている。	益形　（141桝形城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）十月十一日	1580年	13・28・87・101
280	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山兵粮入候儀、□□延引之段、咲止千万候、兵粮之儀ハ多分相調候ー、山内并其元差出候益形送候儀、貞俊・児三右是非共短息候へと申遣候、（中略）何篇ニ付而祝山表への加勢之儀専一まて□	輝元が益形城番の森脇春方（飛騨守）・蔵田元貞（与三右衛門）に送った書状。祝山城への兵糧搬入が遅れていることを困ったことと嘆き、すでに兵糧は大方整っているので、美作国山内と春方らが出張している益形城への搬送に尽力するよう、福原貞俊・児玉元良に申しつけたことを伝えている。また、何につけても祝山城への加勢が大事であると述べている。	祝山　（179医王山城跡） 益形　（141桝形城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）十月十一日	1580年	28
281	宇喜多直家書状／淀金万家文書	尚々高丸ニ在番之由、尤肝要候、弥無緩用心等専一候、人数草臥者又左・岡平へ被申、可然者可被入替候矣	宇喜多直家が美作国の高丸城に在番中の某に送った書状。某に対しゆるみなく用心して在番するよう伝え、在番の兵がくたびれているようであれば、長船貞親（又左）・岡家利（岡平）に話して了解を得られたら在番を交替してもよい、と伝えている。	高丸　（現在地未詳。医王山城周辺の陣城ヵ）	（宇喜多）直家	（天正八年）十月十三日	1580年	100

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
282	小早川隆景書状／福原家文書	祝山可被差籠兵粮、舛形へ可相揃時分之儀付而、尋申候、御返事夜前到来令披見候、未しか＼／其元へ者不相調之由蒙仰候、咲止と申者疎候、五千一万打出候ても更不可有其詮之条、於于今者此一儀相極候、陣替之儀者、兵粮舛形可為着日限候、諸勢打出重而路次従之無逗留候、能々被相計、可被仰越候、先へ成候ハヽ寒天ニ向咲止此事候、如此申候処、御本陳御返事到来之条、入御披見候、追々新見被得御意、為始児市諸村被差出奉行衆御談合候て、舛形着之御短束専一迄候	祝山城へ搬入するための兵糧が舛形城に揃う時期について、隆景が福原貞俊・元俊父子、児玉元良（児三右）に尋ねた書状。いまだ福原氏らの手元で兵糧の準備が整ってないとの返答を受けた隆景が、困ったことで言葉もないと述べている。兵糧がなければ五千一万の軍勢が出陣しても何の意味もない、今となっては兵糧のことだけが大事だ、陣替えの日限は舛形城に兵糧が到着する日にしてある、出立した諸勢は路次で逗留もせずに進軍している、これらのことをよく考えてほしい、先送りになれば寒冷期に入りさらに困ったことになる、と隆景が毛利輝元に進言したところ、輝元から返書があったという。新見で輝元の了解を得て、児玉元貫（児市）らの奉行衆を村々に派遣して談合させ、兵糧が舛形城へ搬入できるよう努力することが大切だ、と説明している。	祝山　（179医王山城跡） 舛形　（141桝形城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）十月十三日	1580年	28・97
283	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	其表弥就火急ニ、追々被申越趣、具承知候、無余儀候、既輝元至新見御上着候、隆景阿佐井江被出候、急度其境有陣替、随分可被差救との御事候、（中略）併其元之儀長々窮困と申、難堪之段存知候間、鳥取堅め并羽衣石相城等調候条、不日可令陣易候	火急の状態になった祝山城の城番湯原春綱（湯豊）・塩屋元真（塩豊）・小川元政（小右兵）に対し、元春が援軍の進捗状況を報じたもの。毛利輝元は新見に、小早川隆景は呰部（阿佐井）にそれぞれ着陣し、必ず祝山方面へ陣替えして救援すると言っていることを伝え、元春も因幡・伯耆の諸城に対する処置を終えたので間もなく出陣する、と述べている。	（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）十月十四日	1580年	13・28・87
284	吉川元春書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	其表弥就火急之、追々被申越趣具承知候、無余儀候、既輝元至新見御上着候、隆景阿佐井江被打出候、急度其境有陳易、随分可被指救との御事候、（中略）併其元之儀長々窮困と申、難堪之段存知候間、鳥執固め并羽衣石相城等調候条、不日可令陳易候	（上記史料とほぼ同文につき省略）	（179医王山城跡）	（吉川）元春	（天正八年）十月十四日	1580年	28・86
285	吉川元春書状／福原家文書	塩屋豊後守事、祝山在番辛労候、殊専之儀、彼者為一分相抱人数等五六十ニてしかと相詰候、兵粮等之儀、只今迄ハ自我等雖申付候、此表方角短束ニ付而闕如之儀候間、祝山為兵粮自吉田被遣候以銀子之内、彼者人数あてに御勘渡候様旁御気遣憑申候	吉川元春が福原貞俊・児玉元良（児三右）・楢崎元兼（楢弾）に指示した書状。塩屋元真（豊後守）が自身の裁量で五六十人の兵を率いて祝山城の在番を務めていることに触れ、今までその兵糧支給を元春が手配していたが、元春の手元でも兵糧が欠如しているので、今後は吉田郡山城から遣わされた銀子を兵糧購入用として、塩屋氏配下の人数分支給するよう福原貞俊らに依頼している。	祝山　（179医王山城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）十月十四日	1580年	28・97
286	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十六	祝山仙々番衆斎藤并塩屋家中之者構敵心之被退候哉、不及是非候、其付而本陣・隆景へ追々御注進之由、肝要候、至中途被打出たる儀候条、其而於加勢者不可有緩候、此表之儀茂（中略）鳥執之分に今少申付候故、延引之様候、併無油断候、兵粮等之儀、是又得其心候、雖不及申、自其元も祝山へ随分可被付心事専一候	祝山城および仙々城の番衆として城内にいた斎藤氏と塩屋氏の家中の者が、逆心を起こして城から立ち退いた。このことを聞いた元春が、舛形城番の吉田源四郎・森脇春方に対し、毛利輝元本陣と小早川隆景に注進するのが肝要であることを伝え、鳥取城の件で元春の出立が延引しているが、油断しているわけではない、兵糧のことは心得ている、春方らも祝山城衆を気遣うように、と伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 仙々　（番号なし　仙々城跡または162梶間山城跡または160仙の城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正八年）十月十五日	1580年	28
287	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	当城仙々番衆備前江申合、現形之由不及是非候、其付而弥難堪之通、追々被申越候、尤候、誠此間中数度之難儀、于今被相凌候段、何ヶ度申候而茂、無比類次第、難尽筆紙候、早々可令陣易之処、因州一味付而少遅々候、然者鳥取之儀、番衆等手堅差籠、一通之隙明候条、本陣申談急度可打廻候、其内之儀、迚弥無二之覚悟候之条、何と様にも候て、可被待付事専一迄候、此已前度々陳易之趣、厳重ニ申候て、今まて相延候間、定而雖可有疑心候、既因州表之儀、隙明候条、於此度者、聢と議定之事候間、不可有御不審候	祝山城に付属する仙々城の番衆が宇喜多軍と内通して寝返り、さらに祝山城の守備は難航を極めた。元春は数度の危機を凌いできた湯原春綱（湯豊）に最大限の賛辞を送りつつ、因幡国の処置で何度も援軍出発が延期になり、もはや信用できないかもしれないが、今度こそ間違いなく決定したので、不審のないように、と釈明している。	当城　（179医王山城跡） 仙々　（番号なし　仙々城跡または162梶間山城跡または160仙の城跡）	（吉川）元春	（天正八年）十月十七日	1580年	13・28・87

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
288	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻八十九　臼井勘左衛門	兵粮追々至山内差出候由肝心候、祝山之儀、殊外相弱之由候、爰許一両日に至高田陣替候、隆景は昨日被打立候、愈其許不可有油断候	兵糧を美作国山内へ搬送していた児玉元貫（児市）らに対し、毛利輝元が近況を報じた書状。祝山城は非常に弱っているとのことなので、輝元は一両日中に高田城へ陣替えする予定であること、小早川隆景も昨日出立したことを伝えている。	祝山　（179医王山城跡）※臼井家文書(『山口県史』史料編中世2）では「鈴山」となっている 高田　（33高田城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)十月十九日※臼井家文書(『山口県史』史料編中世2）では七月九日となっている	1580年	28・86・101
289	吉川元長書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山之儀其以後様體無心元候、爰元取々到来候て無□左右候	吉川元長が舛形城番の森脇春方（飛騨守）に対し、祝山城の様子が心配だ、様々な報告が届いているが本当のことがわからない、と述べている。	祝山　（179医王山城跡）	(吉川)元長	(天正八年)霜月朔日	1580年	28
290	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山之儀、此節従備前雖武略立入候、芸刕行依議定、弥堅固之由肝要存知候、於于今ハ輝元・隆景へ其表可為陣易之条、可然候	元春が舛形城番の吉田源四郎・森脇春方（飛騨守）に送った書状。祝山城に対し、最近になって宇喜多氏が武略を仕掛けたものの、毛利軍の救援が決定したことによって、城はますます堅固に維持されているという。毛利輝元・小早川隆景もその方面へ陣替えしたという。	祝山　（179医王山城跡）	(吉川)駿河守元春	(天正八年)十一月三日	1580年	28
291	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	従祝山到来之舟《傍注：示カ》給	輝元が舛形城番の吉田源四郎・森脇春方（飛騨守）に与えた書状。破損多く内容不明だが、祝山城より舛形城へ書状が到来し、それを源四郎らが輝元に届けたものと思われる。	祝山　（179医王山城跡）	(毛利)右馬頭輝元	(天正八年)十一月十四日	1580年	28
292	国司元武・児玉元良連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	今度当城固屋中之衆、誠去年以来敵数ケ所取付、通路等不自由之処、相堪候段御感不浅候、仍銀子弐拾枚被遣候	祝山城の「固屋」を守備する将兵たちは、去年以来宇喜多軍が数ヶ所の陣城を構築し通路も不自由になっていた中で、ここまで籠城し堪えてきた。そのことを毛利輝元が非常に感心し、銀子20枚を褒美として遣わすことになった。本連署書状は、こうした輝元の意思を、その重臣である元武・元良らが祝山城番の湯原春綱に伝達したもの。	当城　（179医王山城跡）	(国司)元武・(児玉)元良	(天正八年)十一月十五日	1580年	28・87
293	国司元武・児玉元良連署書状写／吉川家中并寺社文書五	元春様御鉄槍《朱書：放ヵ》衆十五人、去年以来籠城忠儀之段、御感不斜、元春被仰談可被加御褒美候、仍銀子五枚之《朱書：被》遣候	吉川元春は「御鉄槍衆」（御鉄砲衆？）十五人を祝山城に籠城させていた。彼らの去年以来の忠義に、毛利輝元が感じ入り、元春と相談して銀子5枚を褒美として与えることになった。本文書はこのことを「御鉄槍衆」の指揮者と思われる青松木工允に伝えたもの。	(179医王山城跡)	(国司)元武・(児玉)元良	(天正八年)十一月十五日	1580年	28
294	福原元俊・口羽春良・小早川隆景連署書状写／吉川家中并寺社文書五	去年以来籠城中、通路不合期之処、及数ケ度往返、御短束相拘候事、御感不浅候、　元春御相談、追而一所可被遣由候	青松木工允は、去年以来祝山城に籠城し、通路が不自由にもかかわらず数度にわたって毛利陣との間を行き来するなど城の維持に尽力した。こうした働きに感じ入った毛利輝元が、吉川元春と相談し木工允に恩賞地を与えることになった。本文書はそのことを元俊らが木工允に伝達したもの。	(179医王山城跡)	(福原)元俊・(口羽)春良・(小早川)隆景	(天正八年)十一月十五日	1580年	28
295	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	当城之儀、去年以来敵数ヶ所取付、夜白之合戦通路等、不合期之処、旁籠置故無異儀持堪之段、忠儀更無比類候、一行之儀元春令相談、急度可申付候間、弥堅固才覚肝心候、仍銀子拾枚遣之候	去年以来宇喜多軍が数ヶ所の付城を築いて包囲する中、湯原春綱は祝山城を異常なく維持し続けた。この春綱の忠節を毛利輝元が賞揚し、銀子10枚を褒美として与え、吉川元春と相談して必ず救援するので、ますます堅固に守るよう命じたもの。	当城　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)十一月十五日	1580年	13・28・87
296	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	当城之儀、去年以来敵《傍注：数乎》ヶ所取付、昼夜之合戦通路等不自由之処、旁籠置候故、無異儀持堪之段、忠儀更無比類候、一行之儀元春令相談、急度可申付之条、其内堅固之才覚肝心候、仍銀子拾枚遣之候	№312とほぼ同文・同内容。これは小川元政（右衛門兵衛尉）に宛てたもの。	当城　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)十一月十五日	1580年	13・28・86
297	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百七十　内藤小源太家来勝間田八郎左衛門	祝井山江之調ニ付而用談〔○異本：之儀〕内儀申候処ニ、のし付脇差到来候、懇志祝着候	輝元が勝間田元信（勝孫右）に与えた書状。祝山城への対応について、輝元が元信に対し内々の用件を申し入れた際、元信から輝元へ脇差が送られてきた。このことに輝元が謝意を表したもの。	祝井山　（179医王山城跡）	(毛利)輝元	(天正八年)十一月十五日	1580年	88
298	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻七十四　粟屋縫殿	昨日令陳替、高仙城取被仰付候、急度普請可相調候条、可御心安候、敵無珍儀候、其境無相替事之由、尤肝要候	飯山城番粟屋元通から付近で宇喜多方に珍しい動きもなく異変が生じていないとの報告を受けた輝元が、現在の戦況を返答したもの。昨日陣替えして高仙の「城取」＝築城を命じたが、必ず普請はうまく運ぶと思うので安心するよう伝えている。	高仙城　（85高山城跡）	(小早川)左衛門佐隆景	(天正八年)十一月十七日	1580年	13・28・86

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
299	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百　児玉惣兵衛	此表之儀、去四日自高田、二山近辺迄輝元被成御山陣所々山見等被仰付、先以岩屋尾頸高仙一城被取付候、普請悉相調候、一段之在所山柄と申、岩屋之向城葛下への此方伝、其外当国西郡之事共、多分敷付たる趣にて候、城督之事、三沢方可有馳走由、被申付而被成御頼、可有在番旨相澄候、（中略）祝山之儀、敵数ヶ所相城重々雖取付候、城中之儀、今日迄ハ堅固候、雖然一入雪深在所と申、無勢にて此方行等、難相計候、就夫最前以来之首尾候条、元春是非一とをり於御打廻者、可成程之可被及御行段、至伯州重畳相談候、彼打廻り之有無ニより候て、祝山之儀者、善にも悪にも年内可相澄候	隆景が毛利水軍の将児玉就方に美作国の戦況を報じたもの。十一月四日、毛利輝元が高田城を出て二山近辺の山に陣取り、あちこちの「山見」を命じた結果、まず岩屋城の尾根続きにある高仙に城を一つ築くことになり、その普請も完成した。ここは素晴らしい場所で山柄もよく、岩屋城への向い城としても、葛下城への中継地点（伝いの城）としても使え、美作国西郡のほとんどを眼下に制するような様子の所である。この高仙の城督を三沢為虎に依頼したところ、在番することを了解してもらった。一方、祝山城については、宇喜多軍が数ヶ所の相城を厳重に築いて包囲しているが、今日までのところ城中は堅固の様子である。しかし、付近は特に雪深い地方で、軍勢の数が足りない状況では毛利軍の出動も難しい。吉川元春が出動してくれれば、可能な限りの援助はできるので、彼の出陣の有無によって祝山城の運命は良くも悪くも年内に決するだろう、と述べている。	高田　（33高田城跡） 岩屋　（189岩屋城跡） 高仙　（85高山城跡） 葛下　（122葛下城跡） 祝山　（179医王山城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年）十一月二十三日	1580年	13・28・87
300	宇喜多直家感状写/妹尾家文書	於寺畑山下敵通路、頸壱ツ討取候段、無比類、必恩賞可相計者也	内容・日付から同一合戦の史料とわかる下記史料の花押型から年代を推定。宇喜多軍が寺畑城の麓で毛利方の兵站・連絡通路を遮断しようとした際、妹尾新九郎が毛利兵の首一つを討ち取る手柄を立てた。こうした新九郎の功労を直家が賞賛し、恩賞を与えることを約束したもの。※下記文書と同文の感状をもとに、後世になって作成された史料である可能性も含む	寺畑　（78大寺畑城跡）	（宇喜多）直家	（天正八年）十一月二十八日	1580年	75
301	宇喜多直家感状写/『備 前 記』巻八・上道郡南方村太郎兵衛所持文書	於敵通路、頸一討取之由、神妙之至、必恩賞可相計者也	宇喜多軍が毛利方城郭の兵站・連絡通路を遮断しようとした際、岡本孫六が毛利兵の首一つを討ち取る手柄を立てた。こうした孫六の功労を直家が賞賛し、恩賞を与えることを約束したもの。ほぼ同文の上記史料が真正とすれば、寺畑城の攻防に関するもの。	（78大寺畑城跡ヵ）	（宇喜多）直家	（天正八年）十一月二十八日	1580年	91
302	福原元俊・口羽春良・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	其表行之儀、元春江一両人被指遣相談之処、急度打廻一同可被及行之由候、各安堵察入候（中略）爰許之儀被打廻候間、伝之城一両所取付可相待候、其内盛雅相談、当城可被抱抜事専一候	元俊ら毛利家宿老が、祝山城番の湯原春綱（豊前守）・塩屋元真（豊後守）・小川元政（右衛門兵衛尉）に指示を与えた書状。祝山城救援につき吉川元春に相談したところ必ずその方面に出陣するとのことだったという。自分たちも出陣するので、「伝の城」を一、二ヶ所築いて待つこと、、その間福田盛雅と相談し祝山城の維持に努めることを指示している。	当城　（179医王山城跡） 伝之城	（福原）元俊・（口羽）春良・（小早川）隆景	（天正八年）十一月二十九日	1580年	28・86
303	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	当城行、至元春令相談之処、急度可打廻之由被申候	毛利輝元が吉川元春に祝山城救援について相談したところ、必ず出陣するとの返事を得た。そのことを輝元が祝山城番の湯原春綱（豊前守）・塩屋元真（豊後守）・小川元政（右衛門兵衛尉）に伝えた書状。	当城　（179医王山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）十一月二十九日	1580年	28・86
304	吉川元春書状写／藩中諸家古文書纂十五	升形へ之事、弥分別候て可罷越之由、誠祝着候、今少之儀其方短息頼入候	元春が森脇春方（森飛）に送った書状。春方が升形城への出張要請を理解し受諾したことを喜び、もう少しだけ尽力を頼みたい、と依頼したもの。	升形　（141桝形城跡）	（吉川）元春	（天正八年）十二月十日	1580年	28
305	妙寿寺周泉・国司元武連署書状／井原家文書	已前両度被仰越候当境御城番之儀、為両人申伺候之処、当時宮山付城数ケ所被仰付之候、多分方角之衆被罷居候、然者幸御望之儀候之条、何そ一城之儀於御在番者預置可被申之由候	毛利氏配下の井原元尚（小四郎）は、以前から備作境目の城番任務について、周泉・元武を通じ毛利氏に申し立てを行っていた。毛利氏はちょうど宮山城攻めの付城を数ヶ所構築し、多くは「方角の衆」に守らせている状況であった。輝元は元尚の希望を幸いとし、宮山の付城のうち一城への在番を打診してきた。本書状は、この輝元の意向を、周泉・元武が井原元尚に伝え、検討するよう述べたもの。	宮山　（56宮山城跡） 付城	妙寿寺周泉・国司右京亮元武	（天正八年）十二月十四日	1580年	28・102・108
306	粟屋元連書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	然者舛形ニ可被置之由御意候、可為其分候	毛利氏家臣の粟屋元連が、飯田与一左衛門尉（飯与一）を桝形城に配備したいという毛利輝元の意志を与一左衛門尉に伝え、そのつもりでいるよう述べたもの。	舛形　（141桝形城跡）	粟　弥四元連（粟屋弥四郎元連）	（天正八～九年）十二月二十五日	1580から81年	86

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
307	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十五	祝山之儀、福田其外被退候、然上者其面弥堅固之御心遣相極此節候、敵及行候者即加勢之儀可申付候、随而爰元之儀宮山付城相調候条、来□行為可差急、先以至中途令陣替候、其境□左右可承之、此方在陣所中間ニ一勢残置候、何篇之趣至高田於御注進者即出張不可有遅々候	輝元が舛形城番の吉田源四郎・森脇春方（飛騨守）に送った書状。祝山城が開城し、福田盛雅その他の番衆が退去する事態になった。こうなった上は源四郎らの守る舛形城付近を堅守することが更に重要になったと言い、宇喜多軍が進出してきたら直ちに加勢を派遣すると伝えている。また、宮山城に対する付城構築が終わったのでいったん中途まで陣替えした、源四郎らとの連絡用に毛利方陣所の中間地点に一部隊を残留させたので、高田城へ注進してくれればすぐに出陣する、と伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 宮山　（56宮山城跡） 付城 高田　（33高田城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正八年）極月二十七日	1580年	28
308	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四十二　熊谷与右衛門	夜前宮山・篠吹中間江熊谷少輔九郎手之者罷出、敵三人打捕之由神妙之至候	昨夜、宮山城と篠吹城との間に熊谷元実（少輔九郎）の手下が出陣し、敵三人を討ち取った。このことを聞き知った毛利輝元が、元実の兄弟三須隆経（兵部少輔）に満足の意を伝えたもの。	宮山　（56宮山城跡） 篠吹　（88篠向城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正九年カ）某月十五日	1581年カ	28・86
309	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五ノ二　湯原文左衛門	今度祝山永々在番、凌難堪心遣辛労之段申茂疎候、仍福田方小田草在番之儀、吉田・隆景・我等申渡分別候、既盛雅如此候時者、其方之儀茂、同前ニ可被籠之由申候処、同心可然候、然者祝山在城之節、従吉田可被付御手之由候つる間、涯分申達可調進候条、弥馳走肝要候	元春が、長らくにわたって祝山城を守備し、艱難をしのいできた湯原春綱（豊前守）の労を謝したもの。祝山城主だった福田盛雅には、輝元・隆景と自分から小田草城への在番を命じたが、春綱も一緒に小田草へ籠ることに同心してくれたことを喜んでいる。	祝山　（179医王山城跡） 小田草　（119小田草城跡）	（吉川）元春	（天正九年）正月二十一日	1581年	13・28・87
310	吉川元春書状／児玉家文書（『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門に写しあり）	今度湯原右京亮・小河右衛門兵衛尉并塩屋豊後守、於祝山籠城永々窮困之儀、中々無比類儀候、然所福田方小田草被指籠候付而、彼三人之者共事茂、升形・小田草之間、重而在番申渡候条、兼而御約束之地無相違可被宛遣之事肝要候	吉川元春が、児玉元貫（市佑）に与えた書状。湯原春綱（右京亮）・小川元政（右衛門兵衛尉）・塩屋元真（豊後守）らは、祝山に籠城し長い困窮の中比類ない働きをした。元春は彼ら三名の処遇について、小田草城へ入城させた福田盛雅同様、舛形城と小田草城との間の城で再び在番を命じようと思うので、かねて恩賞として約束していた領地を間違いなく彼らに給付するよう、元貫に伝えている。	祝山　（179医王山城跡） 小田草　（119小田草城跡） 升形　（141桝形城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正九年）正月二十一日	1581年	87・102
311	吉川元長書状写／藩中諸家古文書纂十五	其境之儀、祝山一着候付而、各取分気遣之段、淵底察之候、（中略）一小田草へ福田方可□□差籠之由候、請付能候間、先以可然候、葛下佑《傍注：マヽ》被申様之急度可被差頼候＼／、其方角覚之仁候間、可然候	吉川元長が祝山開城によって気遣いの増えた升形城番の森脇春方（飛騨守）を労い、近況を伝えたもの。もと祝山城主福田盛雅を小田草城へ配置したことにつき、彼はその方面に詳しい人物なので然るべき措置と喜び、葛下城からの申し分によっては協力を願うだろうと述べている。	祝山　（179医王山城跡） 小田草　（119小田草城跡） 葛下　（122葛下城跡）	（吉川）元長	（天正九年）正月二十二日	1581年	28
312	二宮春澄・井上春佳連署奉書写／岡本文書	福田殿小田草為御番被指籠候、然者自吉田之置兵粮九十五俵之辻、慥盛雅御奉行中へ可有勘渡候由、被　仰出候	吉川元春の重臣二宮・井上両氏が、岡本大蔵丞・三次孫右衛門尉に与えた奉書。福田盛雅が小田草城に在番することになったと伝え、毛利氏（吉田）から配給する兵粮95俵を確実に福田盛雅の奉行に渡すように、との元春の命令を伝達している。	小田草　（119小田草城跡）	二右春澄・井杢(井上木工允)春佳	天正九年正月二十六日	1581年	41
313	二宮春澄・井上春佳連署奉書写／岡本文書	一御番衆之儀者、福田方被差籠儀候間、不及返事候、一当城御普請之儀、是又福三右被仰談候条、不能委細候	吉川元春の重臣二宮・井上両氏が岡本大蔵丞に与えた奉書。小田草城へ籠める番衆のことも、城普請のことも福田盛雅（福田方・福三右）と相談して対応する方針を伝えている。	（119小田草城跡）	二右春澄・井木工（井上木工允）春佳	（天正九年）二月五日	1581年	41
314	小早川隆景書状写／吉川家中并寺社文書四	福田方小田草在番請付候而、湯原・小河・塩屋事、今一通是非可致辛労之旨被仰究御事請付候由、尤可然候、湯原・塩《○朱書挿字：屋》事ハ益形江被遣、小河事者福田同前ニ小田草可有在番通、両城江御記《朱書傍注：配》一段候而御座候	隆景が吉川元春へ送った書状。福田盛雅が小田草城への在番を承知したことを受け、湯原春綱・小川元政・塩屋元真も今一度辛労すべきとの話になり、彼らがこれを了承したことを喜んでいる。湯原・塩屋氏は益形城へ、小川氏は福田氏と一緒に小田草城に在番させるという配備になることを伝えている。	小田草　（119小田草城跡） 益形　（141桝形城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正九年）二月五日	1581年	28
315	吉川元春・元長連署書状写／藩中諸家古文書纂十五　森脇繁生	就今度益方在番之儀、於伯州津村給弐百四十五貫文之事遣置候	吉川元春・元長父子が、桝形城への在番を務める森脇春方（飛騨守）・同盛若丸の二人に、伯耆国津村で245貫文の給地を与える旨、伝えたもの。	益方　（141桝形城跡）	（吉川）元春・（吉川）元長	天正九年三月十日	1581年	41
316	毛利輝元書状写／『美作国諸家感状記』真島郡鹿田村辻新次郎所持文書	今度宮山行之刻、無比類働手柄之段忠節之儀ニ候、然間本地六拾貫差遣候、同百貫之儀者備作一着＃〔之〕上以真島郡＃〔之〕内ニ而可遣候	宮山城攻撃の際、比類ない手柄を立てた辻新次郎に対する恩賞として、輝元が辻氏の本領60貫を安堵し、備作平定の後に真島郡内で100貫の地をも与えることを約束したもの。	宮山　（56宮山城跡）	（毛利）輝元	（天正九年）卯月六日	1581年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
317	毛利輝元書状／木村文書	今度宮山行之刻、無比類働手柄之段、忠節之儀共候、然間為加給五拾貫指遣候、備作以一着之上、東郡之内ニ而百貫可遣也	上記史料1120と同じ合戦。宮山城攻撃の際、比類ない手柄を立てた福田玄蕃助に対し、輝元が追加の給地として50貫の地を与え、備作平定後は東郡のうちで100貫の給地を与えることを約束したもの。	宮山　(56宮山城跡)	(毛利)輝元	(天正九年)卯月六日	1581年	28
318	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	作州祝山数年被遂籠城、御忠儀之段吉田ニ茂被感思召候、可被加似合之御褒美之由候、当時依無明所、末次・黒田百貫之内五拾貫地之事、従吉田可被成御扶持間之事、拙者令裁判進置候	吉川元春が、湯原春綱（豊前守）に恩賞地給与について伝えた書状。美作国祝山城に数年にわたって籠城した湯原春綱の忠義ぶりは、毛利輝元の感じるところとなり、春綱に似合いの褒美を与えることになった。ちょうど今空いている所領がないようなので、出雲国末次・黒田100貫のうち50貫の地が毛利家から給与されるよう元春が調整する、と伝えたもの。	祝山　(179医王山城跡)	(吉川)元春	(天正九年)卯月二十二日	1581年	28・87
319	毛利輝元書状写／『美作国諸家感状記』真島郡鹿田村辻新次郎所持文書	去五月十日、敵相働様々行を催候処ニ一戦得勝利、真木山之者壱人茂無越度様ニ才覚、殊以則不移時宮山城下江相働令放火并二人討捕之段、忠節無比類候	五月十日に宇喜多軍が真木山城を攻撃した際、毛利方の辻新次郎は一人の犠牲者も出さずに城を守りきった。さらに新次郎は、宇喜多方の宮山城下へ押し寄せて放火し、敵二人を討ち取った。それらの手柄を毛利輝元が褒めたもの。	真木山　(63真木ヶ城跡) 宮山城　(56宮山城跡)	(毛利)輝元	(天正九年)六月二日	1581年	28
320	毛利輝元書状写／『武家聞伝記』木村昌明所持文書	去ル十日、宮山城下へ相働、令放火并三人討捕候段、三輪与三・栗原(ママ)惣兵衛より慥注進、無比類候、旧冬も其城在番等、何角与申処早速御請申上、御感不斜候	五月十日、毛利方の福田玄蕃助が宮山城下に攻め寄せ、放火して三人を討ち取った。こうした玄蕃助の働きについて、三輪・栗原氏から報告を受けた毛利輝元が、旧冬「其城」の在番命令に早々に服したことも含め、その心がけを褒めている。	宮山城　(56宮山城跡) 其城	(毛利)輝元	天正二年戌六月二日(実際は天正九年)	1574年？(実際は1581年)	28
321	中村頼宗感状／宮川家所蔵文書	去廿五日岩屋城儀、大原主計助方撰卅二人、差副之処、以無二覚悟切捕之段、粉骨至、感悦無極候	六月二十五日、毛利方の大原主計助に選抜された三十二人の武将が奇襲し、宇喜多方の岩屋城を攻め落とした。この奇襲に参加した西尾与九郎の武功を、中村頼宗が称えたもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗→西尾与九郎	(天正九年)六月二十八日	1581年	10・28
322	中村頼宗感状／立石家文書	去廿五日岩屋城之儀、大原主計助方撰卅二人被【差】副之処、以無二覚悟切捕之段、粉骨之至、感悦無極候	同上。これも岩屋城奇襲に参加した立石孫一郎に与えられたもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗→立石孫一郎	(天正九年)六月二十八日	1581年	9・28
323	中村頼宗判物／木村文書	去廿五日岩屋城之儀、撰三拾二人切取之処、以無二之覚悟乗取候、殊敵壱人突伏候段、粉骨不浅候、必恩賞可相計者也	六月二十五日、中村頼宗が選抜した三十二人の武将が岩屋城を攻め、無二の心がけによって城を乗っ取った。本史料は、その三十二人の一人として攻城戦に参加し、敵一人を討ち取った福田助四郎の働きを頼宗が褒め、恩賞を与えることを約束したもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗	(天正九年)六月二十八日	1581年	28
324	中村頼宗書状写／『美作国諸家感状記』西々条郡上森原村大林市右衛門所持文書	去廿五日岩屋城之儀、大原主計助方撰卅弐人差副之処、以無二之覚悟切捕之段、粉骨之至、感悦無極候、	六月二十五日、大原主計助が選抜した三十二人の武将が岩屋城を攻め、無二の心がけによって城を乗っ取った。本書状は、三十二人の一人として参戦し墳骨した大林久助の奮戦を、頼宗が賞揚したもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗	(天正九年)六月二十八日	1581年	28
325	中村頼宗書状写／『美作国諸家感状記』西々条郡黒木村武本家所持文書	去廿五日岩屋城之儀、大原主計助方撰卅弐人差副之処、以無弐之覚悟切取候段、粉骨之至、感悦無極候、恩賞必可相計候	六月二十五日、大原主計助が選抜した三十二人の武将の一人として、武本又三郎は岩屋城攻撃に参加し、無二の心がけによって城を攻め取った。頼宗はこうした又三郎の奮戦に感動し、恩賞を与えることを約束している。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗	天正九年六月二十八日	1581年	28
326	中村頼宗判物写／『拾遺感状録』久米北条郡中北村則安氏藤七所蔵文書	去廿五日岩屋城之儀、大原主計助方江撰三十二人差副候処、以無二之覚悟切捕之、殊崖上江取上、初中後御心遣粉骨無比類候、必恩賞可相計もの也	六月二十五日、大原主計助が選抜した三十二人の武将の一人として、原田藤七郎は岩屋城攻撃に参加し、無二の覚悟をもって城を攻め落とした。特に藤七郎は崖上によじ登って最初から最後まで粉骨したので、頼宗はこれを褒め称え、必ず恩賞を与える旨伝えている。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(中村)頼宗	天正九年六月二十八日	1581年	28
327	森脇春親書状写／山田家古文書巻七	作州岩屋落去事実候、可御心安候	吉川元春の臣森脇春親が、某に対し美作国岩屋城の陥落は事実なので御安心ください、と伝えたもの。	岩屋　(189岩屋城跡)	森太春親(森脇春親)	(付箋)「天正九年」六月二十八日	1581年	28・41
328	吉川元長書状写／藩中諸家古文書纂十四	岩屋落去之儀付而、早々被仰越本望候、従其許茂院庄江一働被申付候由候、勝利申計候、追々吉左右待入候	元長が美作国在陣中の牛尾次郎右衛門尉ほか4名に与えた書状。岩屋城陥落の一報を早々に届けてくれたことに謝意を示している。また、院庄へ一合戦仕掛けようという牛尾氏らに対し、勝利は間違いないと激励し、吉報をお待ちすると述べている。	岩屋　(189岩屋城跡) 院庄　(135院庄構城跡)	(吉川)元長	(天正九年)六月二十九日	1581年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
329	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	篠吹之儀、去廿九日明退之由、弥大吉事迄候、則楯弾入城付而、従御方茂人数被差籠候由、尤可然	元春が重臣今田経高に送った書状。美作国篠吹城が六月二十九日に開城したとの報せを大吉事と喜び、楯崎元兼（楯弾）が入城し今田氏も手勢を派遣する段取りになったことに満足の意を示している。	篠吹　（88篠向城跡）	(吉川)駿河元春	(天正九年)七月一日	1581年	28
330	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之二　湯原文左衛門	舛形在番之儀付而被示越之通承知候、雖然此比京勢至因州表取出之由候条、我等事急度出張之覚悟候、其内之儀者先以堅固ニ城番可為祝着候	湯原春綱（豊前守）からの舛形城在番に関する願い出（恐らく別人と交替して城番をやめたいとの依願）に対し、元春が回答したもの。このごろ織田軍（京勢）が因幡国に出陣してきたとの報告があり、元春も出陣して織田勢に当たる覚悟なので、その間はとりあえず城番を堅固に続けてくれればありがたい、と宥めている。	舛形　（141桝形城跡）	(吉川)駿河守元春	(天正九年)七月二日	1581年	87
331	吉川元長書状写／『閥閲録』巻六十七　福原二郎右衛門	岩屋落去之儀、御勝利誠申疎之候、殊宮山・篠吹頓被任御存分目出度存候	岩屋城が落城して毛利方が勝利したこと、宮山城・篠吹城も毛利氏の思い通りに入手できたことにつき、吉川元長が福原就理（孫兵衛尉）に祝意を伝えたもの。	岩屋　（189岩屋城跡） 宮山　（56宮山城跡） 篠吹　（88篠向城跡）	(吉川)治部少輔元長	(天正九年)七月三日	1581年	28・86
332	小早川隆景書状写／『美作国諸家感状記』西々条郡黒木村武本家所持文書	今度岩屋要害之儀、旁以調儀、被切捕候事、寔不顧一身、無弐之覚悟之段、無比類次第候、輝元以感状褒美被申候	岩屋城攻略にあたって、一身を顧みず無二の心がけで奮戦した武本又三郎を隆景が褒め、毛利輝元から感状と褒美が与えられるであろう、と伝えている。	岩屋要害　（189岩屋城跡）	小早川隆景	(天正九年)七月十一〔異本：二〕日	1581年	28
333	小早川隆景感状写／立石家文書	今度岩屋城【ナシ】要害之義、旁以調儀、被切捕候事、誠不顧一身無二覚悟候段、無比類次第候	立石孫一郎らが一身を顧みない調略によって岩屋城を切り取ったことを、小早川隆景が褒めたもの。	岩屋城要害　（189岩屋城跡）	小早川隆景→立石孫市郎	(天正九年)七月十二日	1581年	9・28
334	小早川隆景書状写／『武家聞伝記』巻第十　木村昌明所持文書	今度岩屋要害之儀、旁以調儀被切捕候事、誠不顧一身、無二覚悟之段、無比類次第候、輝元以感状褒美被申候	福田助四郎らが一身を顧みず無二の覚悟でもって岩屋城を攻め落とした。こうした福田氏の活躍を隆景が褒め称え、毛利輝元からも感状・褒美が与えられるであろう、と伝えたもの。	岩屋要害　（189岩屋城跡）	小早川隆景	(天正九年)七月十二日	1581年	28
335	小早川隆景書状写／『美作国諸家感状記』西々条郡上森原村大林市右衛門所持文書	今度岩屋要害之儀、旁＃〔々〕以調儀、被切捕候事、誠不顧一身、無二＃〔之〕覚悟之段、無比類候、輝元以感状褒美被申候	一身を顧みず無二の覚悟でもって岩屋城を攻め落とした大林久助の活躍を隆景が褒め称え、毛利輝元からも感状・褒美が与えられるであろう、と伝えたもの。	岩屋要害　（189岩屋城跡）	小早川隆景	(天正九年)七月十二日	1581年	28
336	小早川隆景感状／宮川家所蔵文書	今度岩屋要害之儀、旁以調儀被切捕候事、誠不顧一身、無二覚悟之段、無比類次第候	西尾与九郎らが一身を顧みない調略によって岩屋城を切り取ったことを、小早川隆景が褒めたもの。	岩屋要害　（189岩屋城跡）	小早川隆景→西尾与九郎	(天正九年)七月十六【二】日	1581年	10・28
337	織田信長黒印状写／蜂須賀家文書写	岩屋之儀、無是非次第候	信長が羽柴秀吉の家臣蜂須賀正勝（彦右衛門尉）からの因幡周辺地域における戦況報告に返答したもの。岩屋城の陥落については、どうしようもないことだった、と感想を述べている。	岩屋　（189岩屋城跡）※発給年月日、文書の発受者が置かれた状況から、当文書の「岩屋」は淡路国ではなく、美作国岩屋城を指すと考えられる。	(織田信長)	(天正九年)七月二十一日	1581年	46
338	小早川隆景書状写／吉川家中并寺社文書五	青木工允事、祝山以来今度岩〔屋脱ヵ〕調略等迄別而辛労気遣仕候、元春被仰置候彼者越訴之事、御透被成御披露、可然候	吉川元春を通じて青松木工允が越訴してきたことを受け、隆景が毛利輝元の重臣児玉元良に対応を指示した書状。青松氏は祝山城の籠城戦以来、今度の「岩」（岩屋？）の調略でも特別に努力した者なので、手際の際に彼の訴えごとを毛利輝元に取り次ぐよう依頼している。	祝山　（179医王山城跡） 岩　（189岩屋城跡ヵ）	(小早川)隆景	(天正九年)七月二十二日	1581年	28
339	毛利輝元感状／宮川家所蔵文書	今度岩屋城之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠忠功之至祝着候、永不可忘却候	西尾与九郎らが大原主計助と共に調略によって岩屋城を即時に陥落させたことを褒めたもの。	岩屋城　（189岩屋城跡）	(毛利)輝元→西尾与九郎	天正九　七月二十八日	1581年	10・28
340	毛利輝元感状写／立石家文書	今度岩屋城之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠忠功之至祝着候、永不可忘却候	立石孫一郎らが大原主計助と共に調略によって岩屋城を即時に陥落させたことを褒めたもの。	岩屋城　（189岩屋城跡）	(毛利)輝元→立石孫市郎	天正九年七月二十八日	1581年	9・28
341	毛利輝元判物写／『武家聞伝記』巻第十　木村昌明所持文書	今度岩屋之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠忠功之至祝着候、永不忘却候	福田助四郎は大原主計助と調略に努め、即時に岩屋城を手中に収めた。毛利輝元は本書状にて、こうした福田氏の忠節を褒め称え、その功績を長く忘れないと伝えている。	岩屋　（189岩屋城跡）	(毛利)輝元	天正九年七月二十八日	1581年	28
342	毛利輝元感状写／『美作国諸家感状記』西々条郡上森原村大林市右衛門所持文書	今度岩屋城之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠以忠功之至祝着候、永＃〔々〕不可忘却候	大原主計助と共に調略に努め、即時に岩屋城を落城させた大林久助に対し、輝元がその忠節を称え、長く忘れないことを伝えたもの。	岩屋城　（189岩屋城跡）	(毛利)輝元	天正九年七月二十八日	1581年	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
343	毛利輝元感状写／『美作国諸家感状記』　西々条郡黒木村武本家所持文書	今度岩屋之事、大原相共令調儀、即時属存分候、寔忠節之至祝着候、永不可忘却候	大原主計助と共に調略して岩屋城を即時に陥落させた武本又三郎の忠節ぶりを毛利輝元が賞揚し、長く忘れないことを伝えたもの。	岩屋　(189岩屋城跡)	(毛利)輝元	天正九年七月二十八日	1581年	28
344	毛利輝元書状写／『東作誌』東南条郡苫田郷一宮村里方下組農豊田氏嘉助家蔵文書	今度岩屋城之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠忠功之至祝着候、永不可忘却候	大原主計助と共に調略して岩屋城を即時に陥落させた須藤市右衛門の忠節を輝元が賞揚し、長く忘れないことを伝えたもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(毛利)輝元	天正九年七月八日(二十八日ヵ)	1581年	28・38
345	毛利輝元判物写／『拾遺感状録』中北村之農家蔵文書	今度岩屋城之事、大原相共令調儀、即時属存分候、誠忠功之至祝着候、永不可忘却候	大原主計助と共に調略によって岩屋城を即時陥落させた石井五郎太夫の忠節を輝元が褒め、長く忘れない旨伝えたもの。	岩屋城　(189岩屋城跡)	(毛利)輝元	天正九年七月二十八日	1581年	28
346	福原貞俊・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻百三　尾越正右衛門	就今度元郷御同前宮山御在番、最前御約束之内、於備前馬屋之郷先百五拾貫之地可被遣置候	有福元貞（民部大輔）が和智元郷と一緒に宮山城へ在番することになった。これを受け、以前から約束していた恩賞地として、備前国馬屋郷のうち150貫を与える旨、貞俊・隆景が元貞に伝えたもの。	宮山城　(56宮山城跡)	(福原)貞俊・(小早川)隆景	(天正九年)十一月十三日	1581年	28・87
347	宇喜多直家ヵ書状写／『美作国諸家感状記』東北条郡下高倉村忠右衛門所持文書	此方兵粮等之事ハ荒神山・長岡辺へも可差遣候分ニ而、又此方江も大分可被差越候、各へ飯米分配之条、爰元とも入候、利元堅固ニ候ハヽ、御気遣無之事ニ候	宇喜多直家と思われる人物が、「宗」なる人物に送った書状。こちらにある兵糧は荒神山城や長岡方面へも搬入する予定なので、またこちらにたくさん兵糧を送ってほしい、各々へ飯米を分配するためこちらでも必要になる、と依頼している。また、利元城が堅固に保たれているので、今のところ気遣いもない、と伝えている。	荒神山　(250荒神山城跡) 利元　(165利元城跡)	直(宇喜多直家ヵ)	(年月日欠。天正七～九年ごろ)	1579～81年ごろ	28
348	毛利輝元書状写／『美作国諸家感状記』真島郡鹿田村辻新次郎所持文書	去月廿七日敵相働候節、其方分別手柄之故即時退散、其城無異儀趣、三輪与三兵衛嬙ニ注進候、忠節無比類候、殊更旧冬其城在番等之儀茂各中何角申候所ニ早速御請申段、感悦不斜候	去る十二月二十七日、毛利方の城に敵軍が攻め寄せたが、この城に旧冬から在番していた辻新次郎の働きで敵を撃退した。このことにつき三輪氏から報告を受けた毛利輝元が、辻氏の功労を褒めたもの。	其城	(毛利)輝元	(天正十年ヵ)正月十二日	1582年	28
349	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書四	塩屋豊後守事、城山番之儀申付候、然処此節相煩候哉、就其杢助事、近日自益形下候、彼者可差上候由申越候通、承知候、益形長々雖辛労之儀候、塩豊右之差合趣候間、塩杢ニ人数相添、急度罷上候様ニ弥可申遣候	元春が桂春房（左馬助）からの書状に返答したもの。伯耆国の「城山」に在番していた塩屋元真（豊後守）が最近病気ということで、一族の塩屋杢助は近日桝形城から下っていた。元春は塩屋杢助を「城山」に出動させてほしいとの桂春房の要望を了承し、杢助には桝形城の守備で長年苦労をかけたが、塩屋元真の体調がよくないので、杢助に軍勢を添えてすぐに出動するよう申付けよ、と春房に伝えている。	益形　(141桝形城跡)	(吉川)元春	(天正十年)正月十四日	1582年	41
350	羽柴秀吉禁制写／『作陽誌』大庭郡山川部　大庭郷神上堡　三崎村民家蔵　文書	禁制　作州内かし村さいしやう小屋 一軍勢乱妨狼藉之事、(中略) 右条々堅令停止畢、若違犯之輩有之者、速可処厳科者也	このころ、美作国樫村の住民が戦乱を避けて「さいしょう小屋」という村の城に籠っていた。この史料は、彼らの求めに応じた秀吉が、軍勢による乱暴禁止などを定め住民の安全を保証するため与えた禁制。	さいしやう小屋(425　さいしょう小屋跡)	筑前守(羽柴秀吉)	天正十年三月	1582年	28
351	毛利輝元書状／妙蓮寺蔵末國家文書（『閥閲録』巻百廿八　末国与左衛門に写しあり）	宮山普請之儀、如形相調之由候之条、其方事先々爰元可罷越候	輝元が末国元光（伊豆守）に与えた書状。宮山城の普請工事が型どおりととのったとのことなので、こちらへ出向くよう元光に指示している。	宮山　(56宮山城跡ヵ)※同名他所の城跡の可能性もあり	(毛利)輝元	(天正十年ヵ)五月六日	1582年ヵ	87・102
352	花房職秀書状写／『美作国諸家感状記』勝南郡川辺村苔口勘兵衛所持文書（『美作古簡集註解』にも写しあり）	今度神楽尾夜攻之時臥兵申付候処、敵勢衝崩剰一番入仕候段、高名無比類候	宇喜多氏の重臣花房職秀が美作国神楽尾城を夜襲した。その際、敵勢を突き崩し城に一番乗りする手柄を立てた苔口宗十郎の活躍を、職秀が褒め称えたもの。	神楽尾　(151神楽尾城跡)	(花房)職秀	年未詳三月十日		28・99
353	花房職秀書状写／『美作国諸家感状記』勝南郡行延村矢吹孫左衛門・難波惣右衛門所持文書（『美作古簡集註解』にも写しあり）	此度神楽尾夜攻之時臥兵申付候処、敵勢衝崩候段、高名無比類候	上と同じ合戦のもの。美作国神楽尾城を夜襲した際、伏兵として敵軍を突き崩した難波弥九郎の活躍を、花房職秀が賞したもの。	神楽尾　(151神楽尾城跡)	(花房)職秀	年未詳三月十日		28・99
354	花房職秀判物写／『美作古城記』西北条郡田邑庄田村村神楽尾の城の条	今度神楽尾夜攻の時敵城へ入込付火之段、忠節無比類候	上と同じ合戦の史料。美作国神楽尾城を夜襲した際、城内へ侵入して放火した小島次郎兵衛の手柄を、花房職秀が賞したもの。	神楽尾　(151神楽尾城跡)	(花房)職秀	年未詳三月十日		28・42

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
355	堀坂表合戦軍忠状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去月廿九日、岩尾山城下堀坂表動之時、郎従等或太刀打鑓穿、或分捕之輩、人数備左　一番太刀打　上原新三郎（中略）　頸一　城之内　石谷藤兵衛討捕之	某月二十九日、岩尾山城下の堀坂付近で草苅氏が敵軍と戦った際、草苅氏に従って太刀打ち・分捕りなどの手柄を立てた部将の名を毛利輝元に上申し、輝元の証判を得たもの。	岩尾山城　（179医王山城跡）	（草苅重継ヵ）	（年月日欠）		85
356	福原貞俊書状写／『閥閲録』巻百十五之四　湯原文左衛門	祝山御籠城候而御忠儀ニ付、一所可被進置之由雖御兼約候、便宜之地依無之、于今不被届申候	以前、祝山城に籠城し忠義を尽した湯原春綱（豊前守）に対し、毛利輝元は恩賞として所領を進呈する約束をしていた。しかし、都合のよい所領がみつからず、未だに恩賞支給に至っていないことを毛利氏宿老福原貞俊が弁解したもの。	祝山　（179医王山城跡）	（福原）出羽守貞俊	（天正十一年）閏正月十五日	1583年	28・87
357	宇喜多秀家書状写／『美作国諸家感状記』真島郡関村鈴木九右衛門所持文書	真木城緊固ニ被相践可有一味之由尤珍重〔○異本：ニ〕候、（中略）其節無相違、於御現形者、水田之庄一円并〔○異本：於〕中津井之内三百貫文可〔異本：ナシ〕令合力候	美作国の鈴木孫右衛門尉が、真木城を堅固に維持して宇喜多氏に味方することを申し出てきた。これを宇喜多秀家が喜び、自分たちが指示した時期に間違いなく「現形」（味方）した場合は、水田庄全域と中津井のうち300貫の地を所領として与える旨、約束している。	真木城　（63真木ヶ城跡）	（宇喜多）八郎秀家	天正十一年六月二十二日	1583年	28
358	吉川元春書状写／『東作誌』東南条郡苫田郷東一宮村東山方農茂右衛門（矢野氏）家蔵文書	至沖之搆備作衆打出、弥々付城等差寄申付之由、無心許存候、雖然方々別而之入魂之故、堅固之由肝要候、仍其表之為先勢、元康・景盛・三刀屋、其外備中内郡衆《割注：一行不読》諸事被仰談同〔御ヵ〕行専要候、於其上茂為後詰、元春〔ヵ〕・福原方至新見可被出	元春が矢野又右衛門に与えた書状。当時、沖構に宇喜多軍（備作衆）が進軍し、周囲に付城を築いて包囲していた。元春はこのことを心配していたが、又右衛門らの尽力によって城が堅固に守られていることを褒めている。この事態を受け、沖構救援の先陣として、末次元康・杉原景盛・三刀屋久扶・備中内郡衆を出動させたことを伝え、諸事にわたって相談して戦うよう指示している。その上さらに後詰として元春（元長？）・福原氏の軍勢が新見まで進出することをも伝えている。	沖之構　（129沖構跡） 付城　（128大田和城跡・竹田古墳群・149茶臼山などを指すか）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年ヵ）六月二十六（九ヵ）日	1583年	28・38
359	吉川元春書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	如仰作州表沖構之儀、備前衆取出差寄之由候、雖然城内之以覚悟、于今堅固之儀候、然時者、急度為可有加勢之、従雲・伯、元康・景盛・三刀屋出張候、勿論備中内郡之衆無残被指出候、従吉田為撿使、国司右京亮其外被相副被指上候、於此上茂為後詰、元長・元俊事、芸・石之衆中相催、到新見不日被指出之候儀定候（中略）一当城御抱様之儀、無二之御覚悟之由示預候、不始于今儀とは乍申、無比類次第中々申茂疎候	吉川元春が矢筈城主草苅重継（太郎左衛門尉）からの報告に返答したもの。このころ、美作国沖構に宇喜多軍（備前衆）が攻め寄せていたが、城内に籠る人々の覚悟によって維持されていた。この事態を受け、出雲・伯耆から末次元康・杉原景盛・三刀屋久扶らが加勢のため出陣し、備中内郡衆にも残らず出陣するよう命が下り、毛利輝元（吉田）のもとから検使として国司元武（右京亮）らが派遣されたことを伝えている。さらに後詰として、吉川元長・福原元俊らも安芸・石見の軍勢を率いて新見へ出動することが決まったという。なお、重継が無二の覚悟で「当城」（矢筈城）を守備していることに対しても、称賛の言葉をかけて励ましている。	沖構　（129沖構跡） 当城　（157矢筈城跡）	吉川元春	（天正十一年ヵ）六月二十九日	1583年	28・85
360	中村頼宗感状写／『美作国諸家感状記』西々条郡黒木村武本家所持文書（『美作古簡集註解』にも写しあり）	今度沖構籠城之節、凌通路被籠心遣、殊以鉄砲〔異本：炮〕敵数〔○異本：十〕人射〔異本：討〕取、粉骨不浅候	毛利方に属して沖構への籠城に参加し、鉄砲で宇喜多兵数人を討ち取った武本源兵衛の手柄を、中村頼宗が褒めたもの。	沖構　（129沖構跡）	（中村）頼宗	天正十二〔異本：一〕年七月十一日	1583年	28・99
361	中村頼宗判物／美作立石家文書	今度花房陣所焼崩無比類候、就其、倭文上妙〔カ〕□寺ニ而□〔五〕貫前并他所［　］〔ニ而〕五貫宛行候、以併和之内拾貫相加、廿貫之辻可遣候者也	毛利方の中村頼宗が宇喜多方の花房職之と戦った際、立石孫一郎は頼宗に従って奮戦し花房氏の陣所を焼き落とした。こうした武功を立てた孫一郎に対し、頼宗が合計20貫の地を恩賞として与えたもの。	花房陣所	（中村）頼宗→立石孫一郎	（天正十一年ヵ）七月二十日	1583年	9
362	美作国石米・佐良山城合戦頸注文写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	河端居城、石米於山下及合戦鑓始草苅又次郎（中略）頸之注文 頸一　河端弥五兵衛　進市兵衛討捕之（中略）於佐良山口討捕頸注文之事　頸一　岡与五郎　山本善次郎討捕之（後略）	草苅重継が河端氏の居城石米城の麓、および佐良山城方面で宇喜多軍と戦って討ち取った首級・首級を獲得した武将について毛利氏に報告し、毛利輝元の確認を求めたもの（九月一日付けで輝元が確認したことを示す花押入り）。	河端居城石米（155室尾城跡） 佐良山　（159佐良山城跡）	（草苅重継）	天正十一年八月十八日	1583年	13・28・85
363	吉川元春書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去十八日到石米・佐良山両城、従備前相動候処、被懸合之、宗徒之衆十余被討果之由、度々御粉骨更申茂疎候、銘々注文被指越候、令技見驚目候、上下和睦相調候上にては、御手前之儀、安国寺申談候条、乍恐可御心安候	八月十八日、草苅氏攻撃のため石米城・佐良山城に宇喜多軍が入った際、草苅重継はこれに立ち向かい、敵の主立った者十余人を討ち取った。この件につき、重継から首注文を受け取った元春は驚嘆し、重継の奮戦を称えると同時に、織田方との和睦が整った後の草苅氏の身上についても安国寺恵瓊と相談しているので安心するよう伝えている。	石米　（155室尾城跡） 佐良山　（159佐良山城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年）八月晦日	1583年	13・28・85

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
364	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去十八日、至石米・佐良山表被及行家来之衆太刀打、高名粉骨之趣、具承知之候、仍軍忠状令一見、加判進之候、以此等之旨、戦功無比類之通、能々可被仰旨候	八月十八日の石米城・佐良山城合戦における草苅氏家臣団の奮戦につき、草苅重継から報告を受けた毛利輝元が、軍忠状を確認し花押を捺した上で草苅氏に返送する旨伝えたもの。武功を立てたそれぞれの武将に輝元が称賛していたと伝えるよう命じている。	石米　(155室尾城跡) 佐良山　(159佐良山城跡)	(毛利)右馬頭輝元	(天正十一年）九月一日	1583年	13・28・85
365	児玉元良書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去六日備前衆罷出、両城取付之人数指籠付而御難堪之由、無余儀被存候、然者貴城程近相鮨〔ママ〕之処、御人数被差下、宗徒之敵数輩被討捕候、同十八日河端居城於山下防戦、軍忠状一見被仕之、封裏被進候、両度御勝利之段、誠無比類被存候、将又福原元俊、至高田被指上候間、万事被仰談候	毛利氏重臣の児玉元良が、草苅重継からの報告に返答したもの。八月六日、宇喜多軍（備前衆）が草苅領に進出し、二つの城を設けて将兵を入れたので、草苅氏側は堪えがたい状況になっていた。これらの城は「貴城」（草苅氏の居城）にほど近い場所にあるため、重継は軍勢を繰り出して敵の主だったものを討ち取った。また、八月十八日には河端居城の麓で防戦に努めた。元良は重継に対し、これらの戦果報告として重継から提出された軍忠状に毛利輝元が目を通し、裏に花押を捺して返送したこと、二度の戦いに勝利した重継の働きを輝元が喜んでいたことを伝えている。また、福原元俊を高田城まで派遣したので、万事相談するよう伝えている。	両城・河端居城（155室尾城跡・159佐良山城跡）※河端居城＝155室尾城跡 貴城　(157矢筈城跡) 高田　(33高田城跡)	児玉三郎右衛門尉元良	(天正十一年）九月二日	1583年	28・85
366	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去十八〔六ヵ〕日備前衆并荒木平太夫罷出、諸口付城取誘之由候、方々御心遣令察候、先以度々之合戦、被得勝利之故、敵討入之由先々肝要ニ存候、無比類存候	隆景が草苅重継からの注進に対し返答したもの。去る十八日に宇喜多軍（備前衆）と荒木重堅（平太夫）が草苅領に進出し、付城をを築造したとの報せに心配していたが、度々の合戦に勝利して敵が退却したとのことで、とりあえずよかった、重継の働きは比類ないものだ、と伝えている。	諸口付城　(155室尾城跡・159佐良山城跡など)	小早川隆景	(天正十一年）九月五日	1583年	28・85
367	小早川隆景判物写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去八月八日、木下平太夫取出之処被及合戦、敵数輩被討捕、頸注文銘々披見候、旁御高名之次第無比類候、別而可有褒美通、対重継申入候	隆景が草苅重継の配下有元弥九郎ほか6名に与えたもの。八月八日、羽柴秀吉の部将木下重堅が草苅領に進出した際、弥九郎らが合戦を挑み、羽柴勢をいくらか討ち取って毛利氏に首注文を提出し戦果報告とした。これを読んだ隆景が弥九郎らの働きを称賛し、彼らに褒美が支給されるよう主君である草苅重継に申し入れた、と述べている。	(157矢筈城跡)	小早川隆景	天正十一年九月五日	1583年	28・85
368	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去八月十八日、於河端居城石米山下、旁以先懸被及合戦太刀討、高名御粉骨之次第、無比類候、別而可有褒美通、対重継申入候	八月十八日の石米城麓における合戦で、先駆け・太刀打ちの高名を挙げた草苅又次郎ほか5名に、隆景が賛辞を贈ったもの。又次郎らに褒美を与えるよう、彼らの主人である草苅重継に指示したことも伝えている。	河端居城石米(155室尾城跡)	小早川隆景	天正十一年九月五日	1583年	13・28・85
369	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去八月十八日、於佐良山口合戦之時、敵数輩被討捕、頸注文銘々披見候、旁御高名之次第、無比類候、別而可有褒美通、対重継申入候	八月十八日の佐良山城方面における合戦で、敵数人を討ち取った山本善次郎ほか3名の武功を頸注文で確認した隆景が、彼らに賛辞を贈ったもの。善次郎らに褒美を与えるよう、彼らの主人草苅重継に指示したことも伝えている。	佐良山　(159佐良山城跡)	小早川隆景	天正十一年九月五日	1583年	13・28・85
370	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	去八月十八日、於河端居城石米山下合戦之時、敵数輩被討捕、頸注文銘々披見候、旁御高名之次第、無比類候、別而可有褒美通、対重継申入候	八月十八日の石米城麓における合戦の際、敵数人を討ち取った進市兵衛尉ほか6名の武功を頸注文で確認した隆景が、彼らに賛辞を贈ったもの。市兵衛尉らに褒美を与えるよう、彼らの主人草苅重継に指示したことも伝えている。	河端居城石米(155室尾城跡)	小早川隆景	天正十一年九月五日	1583年	13・28・85
371	小早川隆景書状／冷泉家文書	就其境傍爾之儀、蜂須賀有同道、安国寺・林山城守下向之由到来之条、手島東市助差上候、諸城諸郷之落着以有躰之儀、検使差出可相澄候間、聊無仰天被相静、堅固之御在番可為肝要候	隆景が備前・備中境目地域の城に在番する冷泉元満（民部少輔）に送った書状。毛利・宇喜多の領界確定のため、秀吉の重臣蜂須賀正勝を同道して安国寺恵瓊・林就長が戻ってくるとの通知を受け、隆景が家臣の手島景繁を境目地域に派遣している。諸城・諸郷の引き渡しが落着次第、検使を派遣してこの案件を済ませるつもりなので、静かに様子を見守りつつ、今いる城を堅固に在番するよう命じている。	(〈備前240〉常山城跡ヵ) 諸城　(〈備中414〉幸山城跡など)	(小早川)左衛門佐隆景	(天正十一年）十月二十五日	1583年	28・101
372	岡家利書状／鈴木家文書（拾遺感状録　真島郡関村鈴木氏所蔵文書にも同文書の写しあり）	槙山之事、御請取之由尤可然存候、鈴孫御覚悟無相違段、別而御祝着由候、備中諸要害儀茂兼可被相渡分候へ共、支度難成故ニ而延引由候、内郡表要害之事弥頓相澄候様御才覚肝用候　※出典書所載の写真版により翻刻を訂正	宇喜多氏の宿老岡家利が、江原又四郎親次（江又四）に送った書状。鈴木孫右衛門（鈴孫）の同心により、親次が無事に槙山城を受け取ったことを喜んでいる。備中国の諸要害についても、毛利氏から宇喜多氏へ引き渡すことになっているが、支度がまだ出来ておらず延期になっているとの報告に対し、速やかに諸城の接収を済ませるよう才覚してほしいと指示している。	槙山　(番号なし　槙山城跡・63真木ヶ城跡) 備中諸要害・内郡表要害	岡平家利(岡平内丞家利)	(天正十一年）十一月七日	1583年	3・28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
373	氏名未詳書状／竹田家文書	彼御和平之儀付而、安国・岡平御上り之由候間、今度者何之様にも、可相証迄御座候、各申事候、定貴辺様にも御同前之可為御取沙汰と致推察候、江又四、去六日ニ帰城候、彼御両所御下向にて候者、則時又岡山へ被罷出之由候	差出人・宛名ともに欠。秀吉・宇喜多氏と毛利氏との和平協議のため、安国寺恵瓊（安国）と岡家利（岡平）が上京したことが記されている。江原親次（江又四）が去る六日に帰城したが、恵瓊と家利が戻ってきたらすぐにまた岡山城へ出頭する予定であるという。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡）		（天正十一年ごろ）	1583年ごろ	13・28
374	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	今度京芸和談之儀ニ付而、南北分目之儀為可申談、至岡山蜂須賀・黒田被差下候条、従吉田、渡石見・児三、従隆景・我等、井又右・児市差出候、重畳此間中申談之由候、然者於南表ハ、児島之常山・松山・高田之儀、何と被申候共相渡間敷之由被申遣事候、（中略）備中外郡之儀茂、庭妹・松島・幸山・宮山・妹尾之儀、早被相渡之由候	元春が重臣の今田経高に、羽柴・毛利講和交渉（京芸和談）の状況を報じた書状。山陰・山陽における羽柴・毛利両勢力の境界（南北分目）を定めるため、秀吉が岡山城に蜂須賀正勝・黒田孝高を派遣してきた。毛利輝元・吉川元春・小早川隆景もそれぞれ重臣を派遣し、蜂須賀らとずっと相談させていた。毛利氏としては、備前児島の常山城・備中松山城・美作高田城は、秀吉が何を言ってきても渡さないが、備中外郡の庭妹城・松島城・幸山城・宮山城・妹尾城については、早々に秀吉側へ引き渡す方針であった。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 常山　（〈備前240〉常山城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡） 高田　（33高田城跡） 庭妹　（〈備中402〉庭瀬城跡） 松島　（〈備中436〉松島城跡・番号なし　射越山城跡） 幸山　（〈備中414〉幸山城跡） 宮山 妹尾　（〈備中442〉須浜城跡ヵ）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年）極月十一日	1583年	28
375	安国寺恵瓊・林就長連署書状／毛利家文書	備中外郡諸城之事、悉引渡申候、無是非存候（中略）一作州江一両日中ニ蜂彦右、黒官可罷越之由候、（中略）高田一城被相残、早々御渡専一ニ存候、一虎倉之儀、尽善美侘言雖申候、一円無分別候、於虎倉岩屋之儀者、第一岡山相障候、自然上衆両人当座分別候ても、八郎母所より直文ニて申上せ候へは、両人失面目之由候、退城日限相延候やうにと雖申候、是も無分別候、やう＼／来廿二三日ニしかと可有退城之由申懸候（中略）一児嶋、松山、高田之事、ちと多過たる御愁訴ニて候、中にも児嶋之儀共ハ、曾分引仕間敷由ニて候、雖然、此一所ニ底意被縮候て可有御侘言候哉一つ、高田新見江かけ候て可被仰理候哉一つ、松山城領所共ニ可被仰理候哉一つ、此三つニて候（中略）去年南表、冠山、宮路山責落、高松二重三重ニ取巻候後、やう＼／猿懸河辺あたりまて御打出候、又当年来年と候ても、上衆ハ十日十五日之間ニ可罷出候（中略）世上不被御覧衆之御目とハちと違可申候、然共、芸州の御旁ハ底慢心御座候て、世上之者を御見こなし候	毛利氏と秀吉との間で行われた領界確定協議について、毛利側の交渉担当者恵瓊・就長が、毛利氏重臣佐世元嘉（佐与三左）ら4名に対し所見を述べたもの。備中国外郡の城は全て秀吉に引き渡したこと。一両日中に秀吉側の交渉役黒田・蜂須賀氏が美作国へ向かうので、高田城を早々に明け渡すこと。虎倉城については言葉を尽して毛利側に残すよう交渉しているが、秀吉側は全く聞き入れてくれないこと。虎倉城と岩屋城とは、岡山城の宇喜多氏にとって障害になるので、宇喜多秀家の母親が秀吉に直訴すれば話が破綻してしまうこと。秀吉側は、来る二十二日か二十三日には虎倉・岩屋両城から退城するよう言ってきていること。毛利側が児島と松山・高田両城の留保を求めているのは、要求が多すぎるので、どれか一つに絞って要求した方がよいこと。毛利氏は去年、冠山・宮路山両城が落ち、高松城が何重にも包囲された後、ようよう猿懸城・川辺宿あたりまで出陣できた程度で行動が遅い。上方の軍勢は十日か十五日あれば動ける。このように秀吉と毛利氏には力量の差があるのに、世間知らずの安芸国の人々は慢心して状況を理解していない、と述べる。	備中外郡諸城（〈備中414〉幸山城跡など） 高田　（33高田城跡） 虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 岩屋　（189岩屋城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 松山城　（〈備中158〉備中松山城跡） 冠山　（〈備中373〉冠山城跡） 宮路山　（〈備中353〉宮路山城跡） 高松　（〈備中393〉備中高松城跡） 猿懸　（〈備中227〉猿掛城跡）	安国寺恵瓊・林杢允就長	（天正十一年）十二月十五日	1583年	13・28・56
376	安国寺恵瓊・林就長連署書状／毛利家文書	一秀吉者、於岩崎陣互以誓帋申定候之辻、今以可為同前之由被存候、（中略）毛頭上より事新申にて無之候、高田も松山も児嶋も御約束之内ニて候	毛利・秀吉間の領界交渉について、秀吉側の言い分を毛利輝元に伝えたもの。秀吉は岩崎の陣でお互いに誓紙を交わして約束した通りのことを今も変わらず要求しているのであって、高田城・松山城・児島を明け渡すという話は新しく言い出したことではないことを伝える。	岩崎陣　（〈備中423〉庚申山城跡） 高田　（33高田城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡）	（安国寺）一任斎恵瓊・林木工就長	（天正十一年）十二月十八日	1583年	13・28・36・56・104

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
377	林就長書状／山口県文書館蔵毛利家文庫遠用物所収文書	備中河切・伯州半国被捨候而、余国安堵ニかへ候、御大慶中（繰り返し記号）可申儀も無之候、境目のかきをハ相渡、此上ノ弓矢まことに尚以かゝり候ハす候、（中略）高田辺へハ御内儀被仰度事候、とても（繰り返し記号）不成儀候（繰り返し記号）、俄ニ崩退候やうに候てハ、せうしにて候、弾正へ御無届ニ成候、岩屋・草刈なとにハ相替事にて候	毛利輝元の家臣林就長が、輝元の側近佐世元嘉（佐与三左）・木原元定（木次兵）に対し、毛利・秀吉間の領界交渉について述べたもの。備中国を高梁川で切り分け、伯耆国も半国を捨てることと引き替えに他の領国の安堵を得られたのは、大慶の至りで言葉もない、境目の城砦を明け渡し、今後は合戦も本当に収まるだろう、と述べる。また、高田城には輝元から直接、内々に退城するよう言ってほしい、そうでないと難しい、あわてて敗走するようなかたちになるのは問題で、城主の楢崎弾正元兼に対し配慮のないことになってしまう、岩屋城や草刈氏の矢筈城などとは事情が違う、と述べている。	境目のかき　※境目の城砦の意 高田　（33高田城跡） 岩屋　（189岩屋城跡） 草刈　（157矢筈城跡）	林木就長（林木工就長）	（天正十一年）十二月十八日	1583年	102
378	吉川元春書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	京芸和睦ニ就而境目傍示之儀、従安国寺被申入候条、俄之儀と申、御仰天之由尤候、誠数年御忠儀之段、於此方聊不令忘却候、於趣者従輝元、井上新兵衛尉進置被申入候	秀吉と毛利氏の和睦にともなう領界確定の件（＝矢筈城からの退城要求）について、安国寺恵瓊から聞かされた草刈重継（太郎左衛門尉）が、仰天して吉川元春に連絡した。これに対し、元春が重継の数年来の忠義を謝し、詳しくは毛利輝元よりの使者が申し入れる旨を伝えたもの。	（157矢筈城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年）十二月二十一日	1583年	28・74・85
379	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	和談之儀付而、其表傍示之趣、御使申入候、於御取退者、連々御入魂首尾聊不可有忘却候、御進退之儀勿論見放申間敷候	毛利輝元が草刈重継に対し、秀吉と毛利氏の和睦にともなう領界確定の結果を受け入れ矢筈城から退去してくれたら、これまでの懇意を忘却せず、草刈氏の進退についても見放さないと約束したもの。	（157矢筈城跡）	毛利輝元	（天正十一年）十二月二十一日	1583年	28・74・85
380	吉川元春書状写／『閥閲録』巻三十四　草苅太郎左衛門	和談入眼ニ付而、其表傍示之儀、御使者被申入候、寔御退城之儀、雖無是非候、御納得肝要候、数年御入魂之儀候之條、御進退之事見放被申間敷候通、既以一通被申入候	上記とほぼ同じ。吉川元春が草刈重継（太郎左衛門尉）に対し、矢筈城からの退城について納得して受け入れるよう要請し、毛利輝元も草刈氏の進退を保証する旨、書状で申し入れていることを伝えたもの。	（157矢筈城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年）十二月二十一日	1583年	74・85
381	熊野権現棟札写／旧勝山町高田神社所在	奉造修熊野大権現社御宝殿如意円満祈誓成就 天下泰平　武運長久　国家安全　百姓出世　五穀成就豊年 城中安全　大願成就	高田城主楢崎元兼（弾正忠）が天下泰平・城中安全などを祈願し、熊野大権現社（高田神社）の宝殿を修造した際の棟札。	（33高田城跡）	楢崎弾正忠元兼・婆多朝臣彦四郎	天正十一年未十二月	1583年	6
382	羽柴秀吉書状／小早川家文書（『閥閲録』巻十之三　堅田安房に写しあり）	一虎倉升形城請取由、尤候事、一伊賀与三郎城事、入念可請取事、一草苅城是又可被入念事、（中略）一高田、松山、児嶋、八橋等事、只今又可侘言由、沙汰限事候	秀吉が毛利氏から受け取る諸城について、黒田孝高（官兵衛尉）・蜂須賀正勝（彦右衛門尉）に指示したもの。虎倉城・枡形城を無事受け取ったことを良しとし、伊賀与三郎家久の城・草刈重継の城（矢筈城）を入念に受け取ること、高田城・松山城等について今更毛利氏が明け渡したくないと言ってきているのは言語道断であることなどを伝える。	虎倉・伊賀与三郎城　（〈備前25〉虎倉城跡） 升形城　（141桝形城跡） 草刈城　（157矢筈城跡） 高田　（33高田城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡）	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）正月二日	1584年	13・28・61・85
383	羽柴秀吉書状／小早川家文書	境目城之儀、急度請取、明隙可罷上候	秀吉が家臣の黒田孝高（官兵衛尉）・蜂須賀正勝（彦右衛門尉）に対し、備中・美作・伯耆にある毛利方の城郭を早く接収して上坂するよう命じたもの。	境目城	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）正月五日	1584年	73
384	安国寺恵瓊書状／毛利家文書	外郡諸城之儀、引渡申候、乍勿論、至川西聊無其煩候、（中略）一虎倉、岩屋、其外作州衆之儀、引付之段、種々雖申操候、曾以無分別候、先虎倉之事、急度請取候て、作州江可打越之由候、先書ニ如申上候、早々作州城々の儀、高田一城被相残、被成御渡候事専一ニ存候（中略）一高田、松山、児嶋、其外奥郡之儀、川東之内、過分之儀候（中略）一高田、岩屋、宮山、高仙江自是申遣候儀、曾以不成候条、従其方可被仰遣候	安国寺恵瓊より、秀吉側への城明け渡しの件で毛利氏重臣児玉元良（児三右）・児玉元貫（児市）・井上春忠（井又右）に報告・要請。備中国外郡の諸城の引き渡しが済み、高梁川西岸にはトラブルが起こらなかったこと、虎倉城・岩屋城そのほか美作国衆の件について秀吉側に種々要請しているが理解してもらえないこと、秀吉側は速やかに虎倉城を受け取って美作国へ赴くと言っているので、早々に高田城のみ残して美作国の諸城を明け渡すべきこと、高田城や松山城の残留を望むのはぜいたくであること、高田城・宮山城・高仙城へこちらから話しても事が進まないので、毛利氏首脳部から話してほしいこと、など。	外郡諸城　（〈備中414〉幸山城跡など） 虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 岩屋　（189岩屋城跡） 高田　（33高田城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡） 宮山　（56宮山城跡） 高仙　（85高山城跡）	安国寺恵瓊	（天正十二年）正月十一日	1584年	13・28・56

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
385	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵 楢崎家文書（『萩藩閥閲録』巻53　楢崎与兵衛に写しあり）	就今度高田退城、湯谷之内後家分百貫之地無残之、并浮米百石之儀申付之候、弓箭任存分之安堵候而者、右之地可有上表之候	輝元が美作国高田城番の楢崎元兼（弾正忠）に与えた書状。今度、羽柴方との講和によって元兼が高田城から退城することになったので、その代替として備後国湯谷の100貫の地などを給与することを伝え、もし交渉が毛利氏の願いに叶うかたちでまとまり、高田城が安堵されることになれば、今回与えた所領は返上するよう伝えている。	高田　（33高田城跡）	（毛利）輝元	（天正十二年ヵ）二月十五日	1584年	86・102
386	羽柴秀吉書状／黒田文書	渡候城々請取候分、人数兵粮已下丈夫入置候て、両人儀者、早々可被罷上候事	秀吉が毛利氏からの城受け取りを担当している黒田孝高（官兵衛尉）・蜂須賀正勝（彦右衛門尉）に対し、受け取った城に軍勢と兵糧を入れて厳重に守らせた上で、早々に上坂するよう命じている。	渡候城々	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）三月十一日	1584年	74
387	中村頼宗感状／宮川家所蔵文書	去二日於石厥尾首、江原衆討捕之段、粉骨之儀候	美作国岩屋城をめぐる攻防戦。四月二日、城から撃って出て宇喜多方江原親次の築いた石蕨の陣城の尾根続きに迫った西尾左兵衛が、江原氏配下の兵を討ち取ったことを岩屋城主中村頼宗が褒めたもの。	石蕨尾首　（190岩屋城陣城群跡:石蕨砦跡）	（中村）頼宗→西尾左兵衛	（天正十二年）四月二十日	1584年	10・28
388	中村頼宗感状／立石家文書	去二日石蕨尾首交入敵中、以鉄炮射臥之段、忠節之至、実ニ神妙候	同上。宇喜多方の石蕨陣城へ迫った岩屋籠城衆のひとり立石右兵衛尉が、敵中へ入り込み鉄砲で敵を倒したことを頼宗が褒めたもの。	石蕨尾首　（190岩屋城陣城群跡:石蕨砦跡）	（中村）頼宗→立石右兵衛尉	天正十二四月二十日	1584年	9・28
389	中村頼宗書状写／『美作国諸家感状記』大庭郡余野下村入江七郎右衛門所持文書	去十九日之夜、岩屋尾首到敵陳仕懸、弟助次郎合一番鑓、〔○異本：於〕鎗下ニ討死之段不便ニ候、云忠儀云奉公之実無比類候	五月十九日の夜、岩屋城の籠城衆は、城の尾首に設置された宇喜多軍の陣に攻撃をしかけた。この時、籠城衆の一人入江助次郎は一番槍の手柄を挙げたが、討死してしまった。本書状は、これを知った岩屋城主中村頼宗が入江又太郎を慰問し、その弟助次郎の忠死を称えたもの。	岩屋　（189岩屋城跡）	（中村）頼宗	天正十二年五月二十三日	1584年	28
390	中村頼宗書状写／『東作誌』東南条郡苫田郷一宮村里方下組農豊田氏嘉助家蔵文書	去十九日夜於岩屋尾首及防戦候処、被合槍候段、粉骨至候、恩賞追而可相計者也	五月十九日の夜、宇喜多軍が岩屋城の尾根続きに攻め寄せた際、籠城衆の一人司藤市右衛門尉は敵兵と槍を合わせ、防戦に尽した。こうした働きを中村頼宗が賞し、後日恩賞を与える旨、約束したもの。	岩屋　（189岩屋城跡）	（中村）頼宗	天正十二年五月二十三日	1584年	28・38
391	中村頼宗感状／立石家文書	去十九日於江原陣以鉄鉋敵射臥之段、忠節神妙候	同上。五月十九日、岩屋城を出て再び江原親次の陣城へ攻めかかった立石右兵衛尉は、鉄砲で敵を倒した。この武功を中村頼宗が褒めたもの。	江原陣　（190岩屋城陣城群跡:石蕨砦跡ヵ）	（中村）頼宗→立石右兵衛尉	天正十二五月二十八日	1584年	9・28
392	中村頼宗書状写／『美作国諸家感状記』西々条郡黒木村武本家所持文書	去〔○異本：ル〕十九日夜岩屋尾首至敵陳仕懸、以鉄砲〔異本：炮〕射取候段、忠節無比類候、恩賞必可相計候	五月十九日の夜、岩屋城の籠城衆が尾根続きに陣取る宇喜多勢に攻撃をかけた際、籠城衆の一人武本源兵衛は鉄砲で敵を倒した。こうした源兵衛の武功を中村頼宗が褒め、恩賞の支給を約束している。	岩屋　（189岩屋城跡）	（中村）頼宗	天正十二年五月二十八日	1584年	28
393	中村頼宗感状／立石家文書	今度岩屋尾首江原陣忍寄付火之段、忠節無比類候	同上。岩屋城を出撃した立石右兵衛尉は、尾根続きに宇喜多軍が設営した陣および江原親次の陣に忍び寄り、放火した。このことを中村頼宗が褒めたもの。	岩屋尾首　（189岩屋城跡） 江原陣　（190岩屋城陣城群跡:石蕨砦跡ヵ）	（中村）頼宗→立石右兵衛尉	天正十二六月九日	1584年	9・28
394	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	小田草番衆之儀、吉田源四郎方人数取懸候、然者伯州馬山番衆無之付而、吉源事可被罷居之通申談候、乍去小田草人数不（被ヵ）引せ候者、当城難成候由、追々被申越候、惣別小田草之儀、於于今差立不入之儀候条、不持せ候共、不苦候我々（傍注；哉と）申事候、雖然安国寺被罷下、国分等之儀、多分可相聞之条、其内之儀、番衆置候て可然との事候、（中略）徳光為人躰其外家人之衆并富屋人数被引合、廿人はかり仕置、早々小田草可被差遣候、（中略）俄ニ遣事候間、兵糧等高田表ニて可遣候、奉書進之候、小田草ニ此方人数一子之者十人はかり置候	吉川元春が重臣の今田経高（上野介）に指示した書状。伯耆国馬山に在番する者がいないので、元春は現在小田草城に在番している吉田源四郎に馬山へ転じるよう相談を持ちかけた。ところが源四郎は、自分たちの軍勢が小田草城から退去したら城を維持できないと返答してきた。元春としては現在のところ小田草城は特に維持する必要がないとの認識だったが、安国寺恵瓊がやってきて、毛利・宇喜多の領国境界確定（国分）について言い聞かせる必要があるので、その間は小田草城に番衆を配置しておくのが望ましいとのことだった。そこで元春は、今田経高に対し、備中国衆の徳光氏当主とその家来に富屋氏の引率する兵を合わせた20人ほどを早々に小田草城へ派遣するよう命じ、突然の命令なので兵糧については高田城で受け取ることができるよう奉書を与えること、元春からも10人ていどの兵を小田草城へ配置することを伝えている。	小田草　（119小田草城跡） 高田　（33高田城跡）	（吉川）駿河元春	（天正十一～十二年ヵ）六月二十七日	1583～1584年ヵ	41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
395	中村頼宗書状写／『美作国感状記』苫西郡黒木村市郎右衛門所持文書	去ル十日、於岩尾〔ママ〕蕨尾首逢、至敵中紛入以鉄炮敵射臥候段、誠ニ無比類働神妙候、弥心掛ケ忠節肝要ニ候	六月十日、岩屋籠城衆の武本源兵衛は、宇喜多軍の陣が設置されていた石蕨の尾根筋に迫り、敵中に紛れ込んで鉄砲を放ち、敵を倒した。こうした源兵衛の働きを中村頼宗が称え、ますます忠節に努めるよう激励したもの。	岩尾（ママ）蕨（190岩屋城陣城群跡:石蕨砦跡ヵ）	(中村)頼宗	天正十二年六月二十八日	1584年	28
396	宇喜多秀家判物写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六　二日市町小松屋宝次郎所蔵文書	作州高田一養事、岡山在城可仕之旨申来候、無異儀相越候やう可被申付候也	美作国高田城にいる青木一養から岡山に在城したいとの申し出を受けた秀家が、異常なく岡山へ引っ越すことができるよう指示せよと角南太郎右衛門に命じたもの。	作州高田　(33高田城跡) 岡山　(〈備前180〉岡山城跡)	(宇喜多秀家)	文禄三年十一月十五日	1594年	15
397	宇喜多秀家士帳	一岡　市丞 三千百六拾石内　五百石　文三加　千石　　慶三、高田城領　　(中略) 一明石四郎兵衛尉 千石　無役 但三星城領	慶長年間の宇喜多氏分限帳から抜粋。岡市丞が慶長三年（1598年）以降に高田城領として1000石を預かり、明石四郎兵衛が三星城領として同じく1000石を預かっていたことがわかる。	高田城　(33高田城跡) 三星城　(350三星城跡)		(慶長五年)	1600年	90
398	宇喜多秀家書状写／新出沼元家文書	一其元番等之儀、此刻肝用之候間、不可有由断、然ハ各手前うたかい候て申遣にてハなく候へ共、為外聞候間、其方面々人質之儀被差越尤候、一岡山在番之儀ハ宍四・宍太御座候間、此両人人質之儀早々差上尤候、四郎左衛門事むす子を早々差上可申候、(中略) 一常山在番丹後事、是又慥候人質差上尤候、自然実子無之候て養子成共差のぼらせ可申事、一小串在番新右衛門事ハ、せかれ爰元ニ有之事候へ共、今一人差のほせ尤事、一小倉長田右衛門丞事、左近、越中守所ニ有之事候へ共、今一人せかれ於有之ハ、此方へ差越可申事、(中略) 一高田中務事、助兵弟於有之ハ早々差越候可申候、慥成人質差上可申候、(中略) 一倉敷四郎兵衛事、是者せかれ此方ニ居申候間、今一人も人質として差出尤候、(中略) 右之通、早々何待及、むすめ子なとハ差上事、堅無用候間、可有其心へ候事、	宇喜多秀家が、関ヶ原合戦直前に備前・美作・播磨の諸城の留守居を務める家臣に人質提出を命じた書状。岡山城在番の宍甘四郎左衛門には息子を、実子のない常山城在番の川端丹後守には養子を、高田城在番の小瀬中務正には一族の弟を差し出すよう命じている。すでに子息を秀家に添えて出陣させている小串城の沼本新右衛門・小倉城の長田右衛門丞・倉敷城の明石四郎兵衛にも、もう一人別に人質を出すよう申しつけている。また、人質は男子に限り、娘などを差し出すことを禁じている。	岡山　(〈備前180〉岡山城跡) 常山　(〈備前240〉常山城跡) 小串　(番号なし　丸山城跡・〈備前224〉小串城跡) 小倉　(〈備前25〉虎倉城跡) 高田　(33高田城跡) 倉敷　(389林野城跡)	(宇喜多秀家)	(慶長五年)九月十日	1600年	28

表６　参考史料一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
1	鷹取彦次郎種佐先祖代々之事	鷹取彦次郎は一男、大和国に而城郭を落、当国へ罷越、少之内者方々にも居申候得共、小吉野庄内余野村山屋敷を拵住宅仕居申候、則京都猪熊合戦に臨み打死仕候	勝北郡余野村の鷹取氏の先祖書。鷹取彦次郎は長男の家系で、大和国の城から落ち延びて美作国へやって来て、しばらくは方々に居住していたが、小吉野庄内余野村に山屋敷を構築し住居するようになった。ほどなく彦次郎は、京都猪熊合戦（元弘三年＝1333年）に参加して討ち死にした、という。	余野村山屋敷		南北朝期（元禄三年二月）	14世紀前半（1390年）	77
2	『太平記』巻第十六　西国蜂起官軍進発事	将軍筑紫へ没落シ給シ刻、四国・西国ノ朝敵共、機ヲ損ジ度ヲ失テ、或ハ山林ニ隠レ或ハ所縁ヲ尋テ、新田殿ノ御教書ヲ給ラヌ人ハ無リケリ。此時若義貞早速ニ被下向タラマシカバ、一人モ降参セヌ者ハ有マジカリシヲ、其比天下第一ノ美人ト聞ヘシ、勾当ノ内侍ヲ内裏ヨリ給タリケルニ、暫ガ程モ別ヲ悲テ、三月ノ末迄西国下向ノ事被延引ケルコソ、誠ニ傾城傾国ノ験ナレ。依之（中略）播磨国ニハ、赤松入道円心白旗ガ峯ヲ城郭ニ構テ、討手ノ下向ヲ支ントス。美作ニハ、菅家・江見・弘戸ノ者共、奈義能山・菩提寺ノ城ヲ拵ヘテ、国中ヲ掠メ領ス。備前ニハ、田井・飽浦・内藤・頓宮・松田・福林寺ノ者共、石橋左衛門佐ヲ大将トシテ、甲斐河・三石二箇処ノ城ヲ構テ船路・陸地ヲ支ントス。備中ニハ、庄・真壁・陶山・成合・新見・多地部ノ者共、勢山ヲ切塞デ、鳥モ翔ラヌ様ニ構ヘタリ。是ヨリ西、（中略）将軍方ニ無志モ皆順ヒ不靡云事ナシ。	足利尊氏が筑紫へ落ち延びた際、四国・西国の尊氏方の人々の多くは新田義貞方への転向を図り、義貞の御教書をもらっていた。この時もし義貞がすぐに西国へ下向していれば一人も降参せぬ者はいなかったろうに、その頃義貞は天下第一の美女勾当内侍を朝廷から与えられ、少しの間の別れもつらいといって三月末まで西国出陣を延ばしてしまった。そのため、播磨国の赤松円心は白旗の峯に城郭を築き、新田軍の下向に対応する備えを固め、美作国の菅家党・江見氏・広戸氏らは奈義能山・菩提寺の城を構築して国中を武力で押さえた。備前国では、田井氏・飽浦氏・内藤氏・頓宮氏・松田氏・福林寺氏らが、石橋和義（左衛門佐）を大将として甲斐河・三石の二城を構え、海路・陸路の守りを固めた。備中国でも庄氏・真壁氏・陶山氏・成合氏・新見氏・多治部氏らが勢山で山陽道を封鎖し、鳥も飛び越えられないよう厳重に防禦を固めた。これより西では思い入れもない人たちまで尊氏方に従い、靡かぬ者はいなかった。	奈義能山　(296名木ノ城・301大別当城) 菩提寺　(300菩提寺城) 甲斐河　(場所未詳。諸説あり) 三石　(〈備前162〉三石城跡)		建武三年（応安四年ごろ）	1336年（1371年ごろ）	82・107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
3	『太平記』巻第三十五　南方蜂起事　付畠山関東下向事	山名伊豆守ハ、東国勢既ニ南方ヲ退治シテ、都ヘ帰ヌト聞シカバ、始ハ何様此次ニ我方ヘモ被寄ヌト推量シテ、城ヲ構ヘ鏃ヲ磨テ、可防用意ヲセラレケルガ、都ニ不慮ノ軍出来テ、仁木右京大夫宮方ニナリ、和田・楠又打出タリト聞ヘケレバ、伊豆守鑓機ニ乗テ、其勢三千余騎ヲ卒シ二手ニ分テ、因幡・美作両国ノ間ニ勢ヲ分テゾ置タリケル。赤松筑前入道世貞・同律師則祐ガ、所々ノ城ヲ責ルニ、草木・揉尾・景石・塔尾・神宮・神楽尾ノ城共、一揉モセズ、或ハ敵ニ成テ却テ御方ヲ責メ、或ハ行方ヲ不知落失ヌ。	延文五年（1360）。山名時氏（伊豆守）は、畠山国清の率いる東国勢が南朝を退治して京都へ凱旋したとの伝聞を聞いて「次は自分たちが攻められるのでは」と推量し、城を構築し鏃を磨いて防戦の用意を整えていた。ところが、京都で不慮の内戦が起き、仁木義長（右京大夫）が南朝方に寝返り、和田・楠木氏らの南朝軍が出撃した、との噂が聞こえてきた。そこで山名時氏はこの機に乗じて三千余の軍勢を二手に分け、因幡・美作両国にわたって軍勢を配備した。赤松貞範（筑前入道世貞）・赤松則祐（律師）はこれに対抗して山名方の所々の城を攻めたところ、草木城・揉尾城・景石城・塔尾城・神宮城・神楽尾城などはひとこらえもせず、あるいは赤松方に降参して山名方を攻める側に回り、あるいは行方をくらまし落ち延びていった。	草木　※県外、因幡国智頭郡の城 揉尾　※県外、因幡国智頭郡の城 景石　（番号なし　景石城跡ヵ）※県外、因幡国智頭郡の同名の城の可能性あり 塔尾　（340井上城跡ヵ・番号なし　塔尾城跡ヵ・343新造構ヵ・番号なし　堂尾城跡ヵ） 神宮　（318新宮城跡ヵ、あるいは神宮城跡ヵ） 神楽尾　（151神楽尾城跡）		延文五年（応安四年ごろ）	1360年（1371年ごろ）	83
4	『太平記』巻第三十六　山名伊豆守落美作城事　付菊池軍事	七月十二日山名伊豆守時氏・嫡子右衛門佐師義・次男中務大輔、出雲・伯耆・因播、三箇国ノ勢三千余騎ヲ率シテ美作ヘ発向ス。当国ノ守護赤松筑前入道世貞、播州ニ在テ未戦前ニ、広戸掃部助ガ名木杣二箇所ノ城、飯田ノ一族ガ籠タル篠向ノ城、菅家ノ一族ノ大見丈ノ城、有元民部大夫入道ガ菩提寺ノ城、小原孫次郎入道ガ小原ノ城、大野ノ一族ガ籠リタル大野城、六箇所ノ城ハ、一矢ヲモ不射降参ス。林野・妙見二ノ城ハ、廿日余リ悒タリケルガ、山名ニ兎角スカサレテ、遂ニハ是モ敵ニナル。今ハ倉懸ノ城一残テ、佐用美濃守貞久・有元和泉守佐久、僅ニ三百余騎ニテ楯籠リタリケルヲ、山名伊豆守時氏・子息中務少輔三千余騎ニテ押寄セ、城ノ四方ノ山々峰々二十三箇所ニ陣ヲ取テ（中略）攻タリケル。播磨ト美作トノ堺ニハ、竹山・千草・吉野・石堂ガ峯、四箇所ノ城ヲ構テ、赤松律師則祐、百騎ヅヽノ勢ヲ籠タリケル。山名ガ執事小林民部丞重長、二千余騎ニテ星祭ノ嶽ヘ打上リ、城ヲ目ノ下ニ直下シテ、透間モアラバ打蒐ラント、馬ノ腹帯ヲ堅メテ引ヘタリ。赤松筑前入道世貞・舎弟律師則祐（中略）相集テ二千余騎、高倉山ノ麓ニ陣ヲ取テ、敵倉懸ノ城ヲ攻バ弊ニ乗テ後攻ヲセント企ツト聞ヘケレバ、山名右衛門佐師義、勝レタル兵八百余騎ヲ卒シテ、敵ノ近付ン所ヘ懸合セント、浮勢ニ成テ引ヘタリ。（中略）去程ニ倉懸ノ城ニハ人多シテ兵粮少カリケレバ、戦フ度ニ軍利有トイヘ共、後攻ノ憑モナク、食尽矢種尽ケレバ、無力十一月四日遂ニ城ヲ落ニケリ（後略）	七月十二日、山名時氏父子が三千余の軍勢を率いて美作国に攻め込んだ。美作国守護赤松貞範（入道世貞）が戦いを挑む前に、名木能仙の二か所の城、篠向城、大見丈城、菩提寺城、小原城、大野城が一戦も交えずに山名軍に降参した。林野・妙見の二か城もしばらく持ち堪えたが、山名方に説得されて敵に降った。今は倉懸城だけが赤松方として残り、佐用貞久・有元佐久が三百余の兵と立て籠もっていた。山名軍は城の四方の山々に陣取って倉懸城を攻撃した。赤松則祐は、播磨・美作両国の境にある竹山・千草・吉野・石堂峰の四か所に城を構え兵を籠めた。山名氏の執事小林重長は、二千余の兵を率いて星祭嶽に上り、これらの城を見下ろして隙があれば攻めかかろうと窺った。赤松貞範とその舎弟則祐らは二千余の軍勢を集めて播磨国高倉山の麓に陣取り、山名軍が倉懸城を攻めたら背後から攻撃しようと企てた。山名師義も遊軍を率いて赤松軍の後攻めに備えた。そうしているうち、倉懸城には人が多くて兵糧が少なかったので、十一月四日、赤松軍は城から脱出し敗走した。	名木杣二箇所ノ城　（296名木ノ城跡・301大別当城跡） 篠向ノ城　（88篠向城跡） 大見丈ノ城（301大別当城跡） 菩提寺ノ城（300菩提寺城跡） 小原ノ城　（363小原山王山城跡ヵ） 大野城　（378赤田城跡ヵ・赤岩城跡ヵ） 林野　（389林野城跡） 妙見　（350三星城跡ヵ） 倉懸ノ城　（384畝懸城跡） 竹山　（367竹山城跡） 千草　※県外、兵庫県宍粟市の城か 吉野　（382横山城跡ヵ） 石堂ガ峯　（619　石塔城跡ヵ・620　立石城跡ヵ） 星祭ノ嶽　（番号なし　星祭城跡）		正平十六年（応安四年ごろ）	1361年（1371年ごろ）	13・64・83

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
5	『太平記』巻第三十八　諸国宮方蜂起事　付越中軍事	山陽道ニハ同年六月三日ニ、山名伊豆守時氏五千余騎ニテ、伯耆ヨリ美作ノ院庄へ打越テ国々へ勢ヲ差分ツ。先一方へハ、時氏子息左衛門佐師義ヲ大将ニテ、二千余騎、備前・備中両国へ発向ス。一勢ハ備前仁万堀〔異本：仁ノ堀〕ニ陣ヲ取テ敵ヲ待ニ、其国ノ守護勢、松田・河村・福林寺・浦上七郎兵衛行景等、皆無勢ナレバ、出合テハ叶ハジトヤ思ケン。又讃岐ヨリ細河右馬頭頼之、近日児島へ押渡ルト聞ユルヲヤ相待ケン。皆城ニ楯籠テ未曾戦。一勢ハ多治目備中守、楢崎ヲ侍大将ニテ、千余騎備中ノ新見へ打出タルニ、秋庭三郎多年拵スマシテ、水モ兵粮モ卓散ナル松山ノ城へ、多治目・楢崎ヲ引入シカバ、当国ノ守護越後守師秀可戦様無シテ、備前ノ徳倉ノ城へ引退ク刻、郎従赤木父子二人落止テ、思程戦テ遂ニ討死シテケリ。（中略）只陶山備前守許ヲ、南海ノ端ニ添テ僅ナル城ヲ拵テ、将軍方トテハ残リケル。	六月三日、山名時氏が軍勢を率いて美作国院庄へ出張し、国々へ兵を差し向けた。時氏の子・師義を大将とする軍の一隊は備前国仁堀に陣取った。備前国守護の松田氏や浦上行景は、みな城に籠って山名軍と戦わなかった。備中では秋庭三郎が多年にわたって築造し水も兵糧も潤沢な松山城に多治部・楢崎氏らを引き入れたので、備中国守護の高師秀は戦う術を失って備前徳倉城に退却した。備中ではただ陶山備前守だけが南海の端に小さな城を築き、幕府方として残っていた。	（守護勢、松田、河村、福林寺、浦上行景らの）城 松山ノ城　（〈備中158〉備中松山城跡） 備前ノ徳倉ノ城　（〈備前44〉徳倉城跡） 南海ノ端ニ添テ僅ナル城　（〈備中254〉笠岡城跡ヵ）		康安二年（応安四年ごろ）	1362年（1371年ごろ）	13・65・83
6	『応仁別記』	同六月十三日、美作国へ乱入ス、赤松伊豆守被官粟井右京進ト云者引入ケレバ、ヤス＼／ト打入テ南峡、塩垂山両所ニ陣ヲ取、山名掃部頭物共セズ、三方四方ヨリ責上ケレバ、宇野モ太田モ叶ジトヤ思ケン、馬物具ヲ捨テ播磨ヲサシテ落ニケリ	応仁元年六月十三日、美作国に乱入した赤松軍は、赤松貞祐（伊豆守）の家臣粟井右京進の手引きで易々と打ち入り、南峡・塩垂山の二か所に陣を取った。山名清宗（掃部頭）はこれを三方四方から攻撃したので、宇野・太田氏の率いる赤松軍は播磨国へ撤退した。	南峡　※美作市南海ヵ 塩垂山　（578塩垂山）		応仁元年六月一三日	1467年	13・66
7	『応仁別記』	赤松内ニ、中村五郎左衛門尉ト云者纔ニナリシカ、大功上ニ立ン事ヲ朝暮希フ者ナレハ、（中略）同十月三日切テ入、院ノ庄ヲフマヘ、数度大略利ヲ得シカトモ、東郡へ敵出テ、妙見ノ城・菩提寺・和介山等ニ籠シカハ、政則一名字ニ広岡民部少輔祐貴ニ人勢ヲ相添テ差下ス、三箇年ノ間合戦無止時、（中略）掃部頭又病死シケル、其子彦房モ尽期山ノ合戦打負テ、伯耆国へ落行ケリ、粟井加賀・松原弾正、和介山ニテ討死ス、	赤松氏家臣の中村五郎左衛門尉は大功を立てて出世しようと願い、十月三日美作国へ攻め込み、院庄を確保して山名軍との戦いに何度も勝利した。しかし、東郡（美作国を東西に二分した東半国）に山名軍が現れ、妙見の城や菩提寺・和介山（和気山）に立て籠もった。そのため、赤松政則は一門の広岡祐貴（民部少輔）に軍勢を預け、援軍として美作国に派遣した。三年間は合戦が収まらなかったが、山名清宗（掃部頭）が病死しその子彦房も尽期山の合戦で負け伯耆国へ退いた。粟井・松原氏も和介山で戦死した。	院ノ庄　（134院庄館跡ヵ・135院庄構城跡ヵ） 妙見ノ城　（350三星城跡ヵ） 菩提寺　（300菩提寺城跡） 和介山　（353鴛淵山城跡ヵ・339姥ヶ城跡ヵ） 尽期山　※津山市神戸ヵ		応仁元年十月三日	1467年	13・66
8	『赤松記』	永正十七年美作の住人中村五郎左衛門、浦上一味の者にて、美作の岩屋と申城に楯籠候分、御成敗の為に、小寺加賀守則元承りとして、同四月廿日、各彼城へとり詰候、御屋形様もはしさきまで御馬を出され、其後城へ取詰、白旗の城へ御陣替あり、既に中村難儀におよぶ、浦上後巻を致し候へば、岩屋の陣取の御間の中に、中務丞と申人、是は下野守村秀の弟にて候、城衆と心を合て十月六日寄手を打破り、小寺加賀守同子ども三人不叶自害、白旗ｙ御屋形にあら＼／にて御帰陣候	赤松義祐の側近だった得平定阿が、老後になって戦国期の赤松氏をめぐる諸事情を振り返って記した記録。永正十七年に美作国の中村則久（五郎左衛門）という浦上氏に味方する人物が、美作国の岩屋という城に立て籠もった。これを成敗せよとの守護赤松義村の命を承った小寺則職（加賀守）は、同年四月二十日、岩屋城に攻め寄せ、包囲した。赤松義村（御屋形様）自身も嘴崎まで出馬し、その後白旗城へ陣を進めたので、次第に中村則久は城を守るのが困難な状態に陥った。浦上村宗は岩屋城を救援するため後巻（城を包囲する軍勢の背後を取り巻いて攻撃する）を行ったところ、岩屋城包囲の陣中にいた赤松村秀の弟村景（中務丞）という人が、浦上・中村方に寝返り、岩屋城籠城衆と心を合わせて十月六日に寄せ手の赤松軍を打ち破った。赤松軍を指揮していた小寺則職と彼の子ども三人は、劣勢を挽回できず自害して果てた。白旗城まで出馬していた赤松義村も、自身の屋形（置塩）へ引き返した、という。	美作の岩屋と申城（189岩屋城跡） 岩屋の陣取　（番号なし　野州陣山、195姿山砦などか）※野州陣＝赤松下野守村秀の陣の可能性。姿山については赤松軍本陣とする『久米町史』説あるが未詳。	得平定阿（宣阿とも）	永正十七年四月二十日～十月六日（天正十六年八月）	1520年（1588年）	32
9	本堂汗之記文／太山寺文書	同年拾月六日仁美作岩屋城御発向在之、小寺加賀守殿生涯在之	永正十七年十月六日に赤松軍が浦上村宗方の美作国岩屋城に出陣し、赤松軍の大将小寺則職（加賀守）が討死したことを記す。	美作岩屋城（189岩屋城跡）		永正十七年十月六日（成立年未詳）	1520年（成立年未詳）	71・92

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
10	小坂氏先祖書／小坂家文書	小坂十郎右ヱ門ハ当国へ参、赤松孫次郎乗勝様ニ被召抱居申候、当国久米郡南分下二ヶ村之内くさぎと申所ニ御城を赤松様御拵被成候て、弐拾年余程当国ニ御座被成、其後播磨へ御帰被成候	久米南条郡弓削地域の領主小坂氏の子孫が、津山藩へ提出した先祖書。小坂氏は十郎右衛門の代に美作国へやってきて赤松孫次郎乗勝に召し抱えられた、という。主君の赤松氏は、美作国久米郡南分下二ヶ村のうち草木という場所に城を築き、二十年あまり美作国にいたが、その後播磨国へ帰っていった、という。	くさぎと申所ニ御城　(273草木城跡)	(近世前期段階の小坂氏一族)	戦国時代前葉ヵ（元禄二年巳正月）	15世紀末～16世紀前半ヵ（1689年）	78
11	下神目村書上 此村之内善三郎先祖／菅家文書	此村之内鷹栖と申古城山之跡御座候、古へ菅左近将監、其子豊前守と申者相続城主にて罷在候、赤松公之家臣之由申伝候、其節ハ赤松左衛門尉家盛と申当村之内伊勢旗と申ニ被成御座候、後ニハ上野守家盛殿と申上候、上野守殿御終被為候て後赤松孫次郎則勝殿と申御人、雲州尼子家之押ニて播州より御越被成、同郡下二ヶ村草木之城ニ御座候、其比ハ菅豊前守子五郎右衛門と申候、五郎右衛門若名八郎左ヱ門と申候節、播州之赤松家より被下候御書之由持伝罷在候	久米南条郡下神目村が津山藩に提出した書上。同村のうちに鷹栖という古城山があり、いにしえの時代菅左近将監とその子豊前守が相次いで城主として居住していた。菅氏は赤松氏の家臣と伝わっている。その頃の赤松氏当主は赤松左衛門尉家盛といい、下神目村のうち伊勢旗という場所にいた。彼は後に赤松上野守家盛を名乗った。家盛が亡くなった後は、赤松孫次郎則勝という人が雲州尼子氏に対する押さえとして播磨国から入部し、下二ヶ村の草木城を居城とした。その頃の菅家当主は、菅豊前守の子五郎右衛門であった。五郎右衛門は八郎左衛門を名乗っていた若年の頃、播州赤松氏から書状をもらい、これを持ち伝えている、という。	鷹栖と申古城山之跡　(番号なし 鷹栖城跡) 伊勢旗　(276伊勢畑城跡) 草木之城　(273草木城跡)	菅善三郎	戦国時代前葉ヵ（元禄二年巳正月）	15世紀末～16世紀前半ヵ（1689年）	78
12	下神目村書上 此村之内善三郎先祖／菅家文書	自雲州大軍ニ而此国之内責入、此辺へも押寄申候由、右之五郎右ヱ門才覚ニ而人数五拾騎計弓削町之下四日市と申所之溝谷密隠置、敵勢草木之城近へ攻寄則勝公御人数御出し被成戦中半成節、隠置申候者共出し敵之後二ヶ村之在家へ火をかけさわき申候所を無透間切懸り、敵悉追散し大勢打取申候由申伝候、其時則勝公御感状被下候	同上。雲州より尼子氏が大軍をもって美作国へ攻め入り、久米南条郡あたりにも押し寄せたという。この時、菅五郎右衛門は才覚をもって50騎ほどの手勢を弓削町の下四日市という場所の溝谷に密かに隠した。草木城の近くまで攻め寄せた敵勢に対し赤松則勝が兵を出撃させ合戦になった半ばの頃、五郎右衛門は隠していた手勢を敵の背後に出撃させ在家に火をつけ、驚き騒いでいる敵勢に隙間なく切り掛かって追い散らし、大勢を討ち取った、と伝わっている。その時、赤松則勝が五郎右衛門に対し感状を与えた、という。	草木之城　(273草木城跡)		戦国時代前葉ヵ（元禄二年巳正月）	15世紀末～16世紀前半ヵ（1689年）	78
13	寺坂三郎右衛門家伝覚	天文の頃寺坂五郎左衛門信康と申候は右玄蕃の孫也、草刈家老也、作州へ罷越し北加茂高山の城に居り申候	寺坂氏の天文年間の当主寺坂五郎左衛門信康は、寺坂玄蕃の孫で、草刈氏の家老を務め、美作国へ移住して北加茂の高山城に居たという。	北加茂高山の城　(157矢筈城跡)	寺坂三郎右衛門	天文年間（元禄三年四月）	1532～55年ごろ（1690年）	21
14	安東徳兵衛奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十二　干城一	安東肥前。始名左馬允、美作三星城主後藤摂津守へ仕へ、知行五百貫武功に付、感状四通今に所持。	岡山藩士安東徳兵衛が、高祖父安東肥前守の履歴を略記したもの。安東肥前守は初名を左馬允といい、美作国三星城主後藤勝基（摂津守）に仕えて知行500貫を領有していたという。彼の武功に対して与えられた感状4通は、今でも安東徳兵衛が所持しているという。	三星城　(350三星城跡)	安東徳兵衛	戦国期中盤（貞享年間）	16世紀中盤（1684～1688年）	26
15	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十　干城九	美作国三星城は浦上宗景家老に守らせられ候、然るに安芸毛利家より向城を付、成和家近と申侍を被置、切々合戦有之旨、直家より三星之城へ加番として侍ども被入置候、二郎四郎加番として相出候節、五月二十四日之合戦にも無比類働仕、則宗景より感状給り、爾今所持仕候。	岡山藩士馬場十郎右衛門が曾祖父馬場家職の武功について（家職自身の覚書とされる書物に基づき）記述したもの。美作国の三星城は浦上宗景が家老に命じて守らせていた。安芸毛利氏は三星城に対する向城を構築し、三村家親（成和家近）という武将を配置して合戦をしかけてきたとのことだった。これに対応するため宇喜多直家は三星城へ加番として配下の武将を入れた。馬場二郎四郎家職が加番として出向いた時、五月二十四日の合戦の際にも比類ない軍功を挙げたので浦上宗景より感状を与えられた。この感状は今も所持している、という。	三星城　(350三星城跡)	馬場十郎右衛門	永禄年間前半（貞享年間）	1560年代前半（1684～1688年）	26

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
16	小坂氏先祖書／小坂家文書	小坂与三郎と申候ハ宗景公ニ被召抱居申候、其節当郡山手村之内小松をと申城を拵、宗景公御家頼数多持居申候、然所ニ芸州より三村備中守家親殿一万騎余ニ而宗景公ヲ責、当郡下籾村興善寺を御本陣ニ被成、宗景公御家頼衆上神目村・下二ヶ村ニ居申候五百騎余にて責ニ参候、其時小坂与三郎下二ヶ村二ツ石と申所ニ而掛合先かけニ参候、甲首取大勢追払申候、其時宗景公より御感状被下	久米南条郡弓削地域の領主小坂氏の子孫が、津山藩へ提出した先祖書。小坂与三郎は浦上宗景に召し抱えられていた。そのころ久米南条郡山手村のうちに小松尾という城が築かれ、浦上氏家臣が大勢入って維持していた、という。そこに安芸毛利氏に味方する三村家親が一万騎余りの軍勢を率いて進出し、浦上宗景を攻めるべく当郡下籾村の興善寺を本陣に定めた。これに対し宗景の家来たちは上神目村・下二ヶ村に陣取り、五百騎あまりの軍勢で三村軍に立ち向かった。この時、小坂与三郎は下二ヶ村二ツ石という場所で先駆けして敵の兜首を取り、大勢を追い払って宗景から感状をもらった、という。	小松をと申城（277小松城跡ヵ）	（近世前期の小坂氏一族）	永禄八～九年ごろ（元禄二年）	1565～66年ごろ（1689年）	78
17	下神目村書上 此村之内善三郎先祖／菅家文書	難波十郎左ヱ門と申者、同郡山手村大西と申所構之屋敷ニ居申候、此者宗景公敵之色を仕候由	久米南条郡下神目村が津山藩に提出した書上。難波十郎左衛門という者が、久米南条郡山手村の大西という場所にある構屋敷に居住していた。この難波氏は、浦上宗景に敵対する姿勢をみせていたという。	大西と申所構之屋敷 （279大西構）		戦国時代後期（元禄二年正月）	16世紀後半（1689年）	78
18	尼子義久家臣人数帳／佐々木家文書	平野又右衛門尉　籠城より御使ニ出、作州小田草にて御用ニ立、	尼子義久の家臣平野久秀（又右衛門尉）が、義久の月山富田城籠城中、使者として美作国へ向かい、小田草城で名誉の死を遂げたことを伝えた記事。	作州小田草（119小田草城跡）		永禄八～九年ごろ（近世初期ヵ）	1565～1566年ごろ（17世紀初頭ヵ）	45
19	森脇覚書	平野又衛門を作州小田草にて、斎藤と申もの討果、頸洗合へ持せ申候。	上と同じ事件に関する史料。平野久秀が美作国小田草城にて斎藤親実に討ち果たされ、その首が出雲国洗合の毛利氏本陣へ送られた、との意味。	作州小田草（119小田草城跡）	森脇春方（春秀）	永禄八～九年ごろ（元和四年）	1565～1566年ごろ（1618年）	43・52
20	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	某十六歳之時、真島郡有為山之城主由井宗四郎と申仁与及合戦、太刀打仕、則三浦貞広より感状給候事	牧左馬助が十六歳の時、真島郡有為山城主由井宗四郎と合戦して奮戦し、三浦貞広から感状をもらった。	有為山之城 （66都我風呂城跡ヵ）	牧左馬助	永禄九年（江戸時代初期）	1566年（17世紀前半）	28
21	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	同歳、作州岩屋・高田取合之時、大庭郡樫村高の上之城〔山〕下ニ而、首弐ツ討取申、右同人より感状給候事	牧左馬助が十六歳の年に、岩屋城と高田城との間に合戦が起きた。この時、大庭郡樫村の高上城の麓で左馬助は首級二つを挙げ、三浦貞広から感状をもらった。	作州岩屋 （189岩屋城跡） 高田 （33高田城跡） 高の上之城 （83神上城跡）	牧左馬助	永禄九年（江戸時代初期）	1566年（17世紀前半）	28
22	覚之次第／花房家記事	作州院庄ニ於ゐて、ぢんこと申所ニ而野相之かせん御くミうち被成候とき御ゆひに手御あひ被成候、（中略）御歳十七ノ時	花房職秀が十七歳の時、美作国院庄・神戸で野合わせの合戦に参加し、敵と組み討ちになって指を負傷した。	作州院庄 （135院庄構城跡）	（花房職秀）	永禄八～九年ごろ（元和三年以前ヵ）	1565～66年ごろ（1617年以前ヵ）	28
23	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	院ノ庄と申城御せめおとし被成、則其きほひに、ぢんこと申所ニ而御鑓を被成御くミうちを被遊、御高名被成候由を聞伝承候、敵之名之字ハ覚不申候、則ぢんこきおひをもつて道十四五丁わきに古川と申城御座候を御切取被成候由語つたへ申由候	花房職秀の重臣小島次郎兵衛が、主君の行状につき自分が聞き伝えたことを記しとどめたもの。花房職秀は院庄という城を攻め落とし、その勢いに乗って神戸という場所で敵と組み討ちし高名を挙げた、という（敵の名は覚えていない）。職秀はさらに勢いに乗じて街道から十四、五丁わきに入った場所にある古川城を攻略した、という。	院ノ庄と申城（135院庄構城跡） 古川と申城（131古川城跡）	小島次郎兵衛	永禄八～九年ごろ（寛永拾八年六月十二日）	1565～66年ごろ（1641年）	28
24	花房職利書状／正宗文庫所蔵文書	作州於院庄ニ御高名、御歳十六と承及候	花房職利が、父職秀が美作国院庄構城で手柄を立てたのは十六歳の時だったと聞いている、と述べたもの。	院庄 （135院庄構城跡）	花房五郎左衛門職利	永禄八～九年ごろ（寛永十八年ヵ三月八日）	1565～66年ごろ（1641年ヵ）	9
25	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	明年大庭郡篠向〔之〕城江岩屋衆取懸候時、岩佐勘ケ由与申者与某籠出、山下ニ而首弐ツ討取申候段、同人より感状給候事	（神上城合戦の）明くる年、大庭郡篠向城に岩屋城の軍勢が攻めかかった。この時、牧左馬助は岩佐勘解由と一緒に出陣し、篠向の山下で首級二つを挙げ、また三浦貞広から感状をもらった。	篠向城 （88篠向城跡） 岩屋 （189岩屋城跡）	牧左馬助	永禄十年（江戸時代初期）	1567年（17世紀前半）	28
26	花房職利書状／正宗文庫所蔵文書	作州から（さヵ）松しつはらい被成候時、御歳十九と御申つる、未かけゆきニ御座候時と覚候、其通ニ候哉	花房職利が父職秀の業績について、事実関係を問い合わせたもの。美作国から（さヵ）松（笠松？）での撤退戦に参加した際の年齢が十九歳で合っているかどうか等。	から（さヵ）松	花房五郎左衛門職利	永禄年間か（寛永十八年ヵ三月八日）	1560年代か（1641年ヵ）	9

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
27	虎倉聞書／類纂虎倉物語	直家の内室は作州高田の城主三浦能登守娘か妹かのよし。高田落城の節、親類江川小四郎と申者、女性をつれ備中の内にかくれ居申を、何者やらん直家へとり遣申候。是秀家公の御母儀のよし。	宇喜多直家の妻円融院に関する伝聞。直家の妻は、美作国高田城主三浦能登守の娘か妹であった、という。高田城が落城した際、親類の江川小四郎という者がこの女性を連れて備中国内に隠れ住んでいたのを、何者かが宇喜多直家に取り次ぎ、その身柄を直家のもとへ送ったのだという。この女性が宇喜多秀家の母親に当たるという。	高田の城　(33高田城跡)	下土井村庄屋土井六郎兵衛(話者)	永禄七～十年ごろか(江戸時代前期)	1564～1567年ごろか(17世紀後半)	25
28	覚之次第／花房家記事	作州たかのすと申山城にて城主ゑミの次郎と今壱人、両人御うち被成候事、(中略) 御歳十九なり	花房職秀の記憶によれば、十九歳の時、美作国鷹巣城で城主江見次郎ほか一人を討ち取ったという。	作州たかのすと申山城　(401鷹ノ巣城跡)	(花房職秀)	永禄十一年ごろか(元和三年以前ヵ)	1568年ごろか(1617年以前？)	28
29	小坂氏先祖書／小坂家文書	当国之内友野御城主さるはみ河内殿・江見牛之助殿両大将ニ而御持被成候、宗景公之御意ニ而大勢責向、御城責落、其時江見牛之助殿を右之与三郎討取申候、其時宗景公より御感状被下申候	久米南条郡弓削地域の領主小坂氏の子孫が、津山藩に提出した先祖書。美作国の友野城は、さるはみ河内・江見牛之助の両人が大将として守っていた。浦上宗景は大勢を友野城の攻撃に向かわせ、同城を攻め落とした。このとき小坂与三郎は江見牛之助を討ち取って宗景より感状をもらった、という。	友野御城　(390友野城跡)	(近世前期の小坂氏一族)	永禄末～元亀三年ごろか(元禄二年)	1567～1572年ごろ(1689年)	78
30	森脇覚書	作州高田之城ニハ香川左衛門尉光景・長左衛門太夫、其外加番被置候。加番之内、雲伯衆熊野を初而、鹿介申談、番所ニ火を懸、二丸を兵粮前悉焼はらひ罷退候付而、香川兵部を被遣候。備前岡本・長船・赤・斎藤頭ニ而取懸候。十月五日、山下ニ而一戦候。(中略) 佐伯と申者、鹿介あねむこにて候。是も高田城番仕候が、鹿介より内通候て、心替仕候。討手のもの仕損候を、香川兵部討果候。	吉川元春の家臣森脇春方の回想。毛利氏は美作国高田城に香川光景・長就連(左衛門太夫) その外の在番を置いて守らせていた。ところが、在番衆のうち元尼子氏配下だった熊野・佐伯氏らが山中鹿介に内通し、番所や二の丸の兵糧を焼き払ってしまった。そこで毛利氏は香川春継 (兵部) を増援につかわした。浦上宗景は宿老岡本氏秀らを指揮官に高田城に攻め寄せ、十月五日城下で一戦を交えた。内通者は香川春継が討ち果たした、という。	作州高田之城(33高田城跡)	森脇春方(春秀)	永禄十二年(元和四年)	1569年(1618年)	43・52
31	長大蔵左衛門元近履歴／『閥閲録』巻百廿七 岡忠兵衛	美作国高田之城ニ香川美作・長左衛門尉御籠置、此時茂戦功有之由申伝候事	萩藩家臣岡忠兵衛の先祖長元近・信政父子について記されたもの。長信政 (左衛門尉) は毛利氏の命で香川光景 (美作) と一緒に美作国高田城に籠もった時、戦功を挙げたと言い伝えられているという。	美作国高田之城　(33高田城跡)	永田政純(編)	永禄十二年ごろ (享保十一年)	1569年ごろ(1726年)	87
32	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	一作州へ御取出の時分花房又三郎様と申而、御とし廿二三ノ頃、山口よりいた・ひら岡使を被成、作州之つたへニ御引こミにて作州荒神山御出被成候、一作州御取出被成、助兵様荒神山つめノ〔カ〕山御こしらへ被成候事書付上申候、一御年廿二三ノ比、荒神山御見立被成、御掟御持被成、(中略) 荒神山より卅四五丁北ノ方ニさヽ山と城を肥多と申侍、高橋と申侍両人相持ニ仕居申を、助兵様御セめ落し被成御取被成候由、其時分、御年も同年由申候、一其頃ニさが山と申城を中国高影人数出城ニもち候を、助兵様御手柄せめニ被成御切取之由、親共のもの語を聞伝申候、	花房氏の家臣小島次郎兵衛が、親や関係者が語る花房職秀 (助兵衛) の事績について記録したもの。職秀 (そのころ花房又三郎を名乗る) は22歳か23歳のころ、備前国赤坂郡伊田・平岡の諸将を味方につけることで自身の所領赤坂郡山口から美作国への通路を確保し、荒神山へ出向いた。そこで荒神山を城地として見立てて築城し、自身の城として保持するようになった、という。その荒神山城から34～35丁ほど北方にある「ささ山」という城を肥多・高橋という武士が保持していたが、職秀はこれを攻め落とした。この合戦は、職秀が荒神山に城を築いたのと同じ年だったと聞いている。そのころ、嵯峨山城を中国地方の小早川隆景の配下の人々が出城として保持していたが、これも職秀が攻め取ったと、親たちが話しているのを聞き伝えている、とある。	作州荒神山(250荒神山城跡) さヽ山と城(246皿山城跡ヵ) さが山と申城(243嵯峨山城跡)	小島次郎兵衛	永禄末～元亀三年ごろ(寛永十八年六月十二日)	1567～1572年ごろ(1641年)	28
33	覚之次第／花房家記事	作州之内つきだの城、森家より持申をぶりやくとり御手柄之事、	花房職秀が毛利家の持ち城だった美作国月田城を武略を使って攻め取る手柄を立てたという。	つきだの城　(54月田城跡)	(花房職秀)	元亀二～天正二年ごろ(元和三年以前ヵ)	1571～74年ごろ(1617年以前？)	28
34	江見平右衛門奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』江見平右衛門	曽祖父江見大膳、美作之内倉敷之城ニ居住仕由ニ御座候	岡山藩士江見平右衛門が主家に提出した自家の履歴書。平右衛門の曽祖父江見大膳は、美作国の倉敷城に居住していた、という。	倉敷之城　(389林野城跡)	江見平右衛門	戦国後期(寛文九年か)	16世紀後半(1669年か)	31

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
35	小坂氏先祖書／小坂家文書	直家様敵心発、宗景公之御家頼衆二手ニわかり、宗景公之御身方仕ものも御座候、又直家様御身方仕ものも御座候、其時右之与三郎ハ御主之宗景公之御身方仕候、其節当国下弓削村秋のこやと申山城ヲ拵、此辺之押ニ居申候、又それより十町ほど間、至全間村蓮花寺と申山ヲ沼本新右ヱ門殿・三浦源十郎殿御こしらへ居被申候、右両人直家様御身方仕申候ニ付而、宗景公より蓮花寺を小坂与三郎ニ責申候得と被仰付、御加勢ニ岡本太郎左ヱ門殿・信原蔵之丞殿両人ニ三百騎相そへ、蓮花寺を与三郎ニ夜討ニ仕、三浦源十郎殿首与三郎討取、其時宗景公より御かん状被下申候	久米南条郡弓削地域の領主小坂氏の子孫が津山藩に提出した先祖書。宇喜多直家が敵対心を起こしたため、浦上氏の家臣団は二つに分裂し、浦上宗景に味方する者も宇喜多直家に味方する者もそれぞれにいた。その時小坂与三郎は浦上宗景の味方につき、美作国下弓削村に秋小屋城という山城を築いて周辺の押さえを担当した。一方、秋小屋城から十町ほど離れた全間村の蓮花寺という山には、沼元新右衛門・三浦源十郎が城を築いて駐留していた。この沼元・三浦氏らが宇喜多直家の味方についたため、浦上宗景は小坂与三郎に蓮華寺城を攻撃するよう申し付け、加勢として岡本氏秀（太郎左衛門）・延原内蔵丞（信原は当て字）を将とする三百騎をつけ、蓮華寺城を夜討ちさせた。この時、与三郎は三浦源十郎の首を討ち取り、宗景から感状を与えられた、という。	秋のこやと申山城（263秋小屋城跡） 蓮花寺と申山（280蓮華寺城跡）	（近世前期の小坂氏一族）	天正二年または三年（元禄二年）	1574年または1575年（1689年）	78
36	下神目村書上 此村之内善三郎先祖／菅家文書	其後、菅納五郎左ヱ門・沼元彦右ヱ門、宗景公へ敵心御座候之由、何者哉覧讒言仕候由、夫故打手被差向之由急ニ風聞御座候故、先籠城して時を可得申候と両人申合、其節ハ当村之内伊勢旗と申古城山へ一門家来共を引連、早々籠一夜之内ニ柵を結申して居申候へとも、数日打手不参候由、然所ニ宗景と直家公之間直家公御味方申上る様に御頼被下候由申伝候、伊勢旗ハ大山故、小勢ニ而難籠、全間村之内蓮花寺と申四方嶮岨なる深山御座候、此山ニ取籠、大木を伐り分ケ○たり木ニ貫をぬき菅納・沼元・川島等其外一門家来共取籠居申候へハ、宗景公より為討手大将には信原蔵之助・岡本太郎左ヱ門と申者、○持にて押寄申候、城中よりも罷出合戦仕大勢打取悉追散シ申候へハ、重而寄も不仕候由申伝候、其節に直家公如此御書被下候由、申伝候	久米南条郡下神目村が津山藩に提出した書上。菅納五郎左衛門・沼元彦右衛門が浦上宗景に敵意をいだいていると何者かが讒言したことがきっかけとなり、宗景が両人に討手を差し向けるという風聞が流れた。この風聞を知った菅納・沼元氏はとりあえず籠城して時を稼ごうと申し合わせ、下神目村のうちにある伊勢畑という古城山へ一門と家来を引き連れて立て籠もり、一夜のあいだに柵を設けて待ち構えた。ところが、数日経っても浦上氏が差し向けた討伐軍は現れなかった。そうしたところに菅納・沼元両人は、対立する浦上宗景・宇喜多直家両陣営のうち、直家に味方させてほしいと申し出た、という。そして、伊勢畑の古城山は規模が大きいので小勢で立て籠もるには不適当ということで、全間村のうち蓮華寺という四方嶮岨な深山の大木を伐採し、菅納・沼元・川島氏など一門家来を集めて籠城した。これをみた浦上宗景は、延原内蔵助・岡本氏秀（太郎左衛門）を討手の大将として蓮華寺城へ押し寄せてきた。城中からも出撃して合戦におよび、浦上軍を大勢討ち取って追い散らしたので、浦上軍が再び寄せてくることもなかった、という。この時、宇喜多直家から菅納氏に書面が与えられた、という。	伊勢旗と申古城山（276伊勢畑城跡） 蓮花寺　（280蓮華寺城跡）		天正二年または三年（元禄二年正月）	1574年または1575年（1689年）	78
37	渡辺道因奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』渡辺道因	同年代【自享禄年中至天正二年迄】美作真島郡高田之城主ハ三浦能登守貞広　右同断【知行高ハ不存】	岡山藩の医師渡辺道因が主家に提出した自家の履歴書。享禄年間から天正二年ごろ、美作国真島郡の高田城主は三浦貞広（能登守）という人物だった、という。	高田之城　（33高田城跡）	渡辺道因	享禄年中～天正二年ごろ（寛文九年）	1528～74年ごろ（1669年）	31
38	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	作州高田之城主三浦被居候を備前浮田直家責被申、先手花房助兵衛・沼本新右衛門両人被出、久世多田山ニ居候を、高田より牧源之丞・石井源太・某三人其外侍とも夜中ニ働仕、鑓下ニ而首壱討取候	宇喜多直家が高田城主三浦氏を攻めた際、先陣として花房職秀（助兵衛）・沼元新右衛門が出撃し、久世の多田山に在陣していた。高田城から出撃した牧源之丞・石井源太・牧左馬助らは、この多田山に夜討ちをかけ、左馬助は敵の首ひとつを討ち取った、という。	高田之城　（33高田城跡） 多田山　（77茶臼山城跡）	牧左馬助	天正三年（江戸時代初期）	1575年（17世紀前半）	28
39	位田村助兵衛書上	私之伯父和田甚助と申もの、生国は播州ノ者、後藤勝基当国へ御入之時供いたし、子息ノ基政迄二代奉公仕候、（中略）則位田村ノ内勝間山と申端城預り居申候、基政死去之後其まゝ位田村ニ住居仕居申候御事、	位田村の助兵衛が、津山藩の奉行所から先代のことを尋ねられ、答申した記録。助兵衛の伯父は和田甚助といい、生まれは播磨国で、後藤勝基が美作国へ入部する際、これに従って美作国へ来住し、勝基の子息元政（基政）の代まで奉公したという。この和田甚助は、後藤氏から位田村の勝間山という出城を預かり、そこに居城していたが、後藤元政が死去した後はそのまま位田村に居住したという。	勝間山と申端城（357勝間城跡）	位田村助兵衛	天文末年～天正七年ごろ（（慶長十八年）丑七月九日）	1550～1579年ごろ（1613年）	99
40	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正六年山中鹿之助高山の城へ押寄せ候砌り、桃千代十七才にて初陣仕り、山中が手の者高村と申者打取之申候	天正六年、山中鹿之助幸盛が高山城に攻め寄せた際、寺坂桃千代は十七歳で初陣を果たし、山中氏配下の高村という者を討ち取ったという。※天正六年という年号、対戦相手など検討の要あり	高山の城　（157矢筈城跡）	寺坂三郎右衛門	天正六年ヵ（元禄三年四月）	1578年ヵ（1690年）	21

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
41	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	小早川隆景・吉川元春・輝元作州迄被出候時、浮田直家被出候而、作州大庭郡湯山江浮田平右衛門を城主ニ従直家被致、牧源之丞・某同道ニ而参、毛利衆人数五千程ニ而湯之山を責三千程筏ニ而川を渡り三ノ丸迄取詰候処、城中より防出、則川を追帰シ川向江某与源之丞弐人裸ニ而川を渡り、高橋与申者と名乗相組打仕、高橋首を某討取	毛利軍が美作国へ攻め込んできた際、宇喜多直家は浮田平右衛門を湯山城主に任じ、牧源之丞・牧左馬助を同行させた。毛利方は五千人ほどの軍勢で湯山城を攻め、筏で川を渡って三の丸を包囲した。これに対し、宇喜多軍は城中から撃って出て、毛利軍を川向こうへ追い返し、牧源之丞・左馬助は裸で川を渡って追い討ちをかけ、高橋と名乗る武士と組み討ちしてその首を取った、という。	湯山または湯之山（75湯山城跡）	牧左馬助	天正七年ごろ（江戸時代初期）	1579年ごろ（17世紀前半）	28
42	寺坂三郎右衛門家伝覚	右五郎左衛門の子又太郎・勘兵衛・弥三郎と申、女子も三人有之候内一人は草刈三郎左衛門か室となり一男を儲け候処、天正三年四月廿七日草刈三郎左衛門於高山城切腹之砌り自害仕り候	寺坂五郎左衛門信康には又太郎・勘兵衛・弥三郎の三人の男子があり、女子も三人いた。女子のうち一人は草刈景継（三郎左衛門）の室となって男子を設けたが、夫の景継が高山城で切腹した際、ともに自害したという。※草刈景継夫妻の自害は天正三年ではなく、天正七年が正しい	高山城　（157矢筈城跡）	寺坂三郎右衛門	天正七年（元禄三年四月）	1579年ごろ（1690年）	21
43	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正七年六月、右勘兵衛・弥三郎兄弟、草刈与次郎が手に従ひ、作州吉野郡長尾村の城に居り申処へ、小原新明入道俄に押寄合戦の砌り、日ヶ谷と申所にて兄弟一所に打死仕り候	天正七年六月、寺坂勘兵衛・弥三郎兄弟は草刈与次郎の軍勢に加わり、美作国吉野郡長尾村の城を守っていたが、小原の新免氏がにわかに攻め寄せ合戦となった際、日ヶ谷というところで兄弟一緒に討ち死にしたという。※長尾村の城をめぐる合戦が天正七年六月に発生したかどうかは検討の要あり	作州吉野郡長尾村の城　（358佐淵城）	寺坂三郎右衛門	天正七年ヵ（元禄三年四月）	1579年ヵ（1690年）	21
44	伊志美作守書状写／吉川家中并寺社文書一	作州小寺畑御取詰之時、明退申候夜御番、今さ、又其外と私罷居候、又其夜、今一仕寄被仰付候とて為請手今平右・朝源次、其外御座候処ニ、土(上ヵ)州御見捨有間敷と候て、先様仕寄場江御出候、私指留、御番所御明候事ハ御無用と申候、私ニ御預ケ之由に候て、先へ被成御出候、案のことく敵出候而さわき申候、私涯分肝煎申候而救申（カ)候事、高尾右衛門淵底存之事ニ候、隆景様御仕寄場ニハ成和紀伊守殿御座候	毛利軍が小寺畑城を落した直後の様子を、合戦参加者の伊志美作守が書き残したもの。乗っ取った小寺畑城に今田経高と伊志美作守が陣取っていたが、その晩さらに本城近くまで陣を寄せようということになり、経高も前進しようとした。美作守はこれを引き留めたが、経高は番所を美作守に預けて前進した。案の定、敵が出撃してきて騒ぎになったが、美作守の尽力で事なきを得た。その時、小早川隆景の陣には成羽紀伊守（三村親宣）がいた、という。	小寺畑　（80小寺畑城跡） 仕寄場、御番所、隆景様御仕寄場　（79陣山城などか）	（伊志美作守）	天正八年（慶長十五年四月二十三日）	1580年（1610年）	28
45	氏名不詳某覚書／花房家記事	其後備前直家、ちくせん殿へ御見かた被申、毛利殿と相わかれ候、則作州ましばのかうりみや山と申てさきのしろ相こしらへ我にあつけられ候、右の城より岡山までつたへの城四ツ相こしらへれき（繰り返し記号）こめをかれ候処ニ、吉川・小早川衆罷出せめ申こと（繰り返し記号）くあけのき、又ハかうさん仕、右つたへの城共四つなからつきよ仕候	宇喜多直家が羽柴秀吉（ちくせん殿）に味方し毛利氏と手切れになった後、真島郡宮山と言う出先の城を築城し、「我」(この記録の筆者)に預けた。また、宮山城から岡山城までを連絡する伝の城を四つ構築し、宇喜多家の歴々が守備についた。しかし、吉川元春・小早川隆景の軍勢に攻められて四つの伝の城は全て落城してしまった、という。	みや山と申てさきのしろ　（56宮山城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡） つたへの城四ツ	（宮山城番の某）	天正七～八年（寛永十八年以前ヵ）	1579～1580年（1641年以前？）	28
46	身自鏡	例の宇喜田め亦敵に成、備中・作州・伯耆騒動しける間、備中口は隆景様、伯州口は元春様、美作口は直に被成御発向ける、作州高田の付城と、備前より宮山・篠葺・寺畑・岩屋と云山を向城にしたりけるを、一々に責崩し、敵共数人打取ける	宇喜多直家がまた毛利氏に敵対し、備中・美作・伯耆が騒ぎになったので、備中方面へは小早川隆景が、伯耆方面へは吉川元春が、美作方面へは毛利輝元が直々に出陣した。美作国高田城に対する宇喜多方の付城と、宮山・篠葺・寺畑・岩屋城といった宇喜多方の向城を一つひとつ攻め落とし、敵を数人討ち取った、という。	高田の付城 宮山　（56宮山城跡） 篠葺　（88篠向城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡） 岩屋　（189岩屋城跡）	玉木吉保	天正七～九年（元和三年）	1579～1581年（1617年）	43

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
47	桂岌円覚書	作州寺畑の城、宇喜多より持ち候へ、輝元様・隆景様御取掛り成され候、五三日候て明け退き候、然ば伊賀左衛門尉城小倉へ付城仰せ付けらるべしと御意候刻、小倉より出城に持ち候福山と申すを明け退き候、幸の儀候条、此山をこなたより御取誘へ候て、御持せ成さるべしとて、備中の才田と申す城、前原左衛門尉大夫・熊谷玄蕃両人、今に於ては才田は入らず候間、右の福山に置かせらるべきの由御意候えば、両人御理に、其身は上意に任せ、何ようにもと存じ候え共、家人共打続き先様へ罷り越し候儀、相成る間敷と申し候、（中略）しからば同国松山に検使に置かせられ候桂源右衛門尉へ仰せ付けらるべしとて、寺畑の御陣へ召寄せられ、隆景様御座候所に置かせられ、（中略）去年以来松山に罷り越し辛身致し候、（中略）打続き辛身に候え共、福山へ罷り越し候はゞ御祝着たるべきの由仰せ聞けられ候、御意の如く賀茂付城仰せ付けられ候へば、松山は御検使にも及ばず候、何方に罷り居り候も同前の儀に候間、兎角上意次第たるべしと御請け申し候	宇喜多氏の持ち城だった美作国寺畑城を、毛利輝元・小早川隆景が攻めたところ、十五日ていどで開城した。これを受けて輝元が、伊賀久隆の居城虎倉城に対する付城を構築しようと思っていたところ、伊賀氏が出城として持っていた福山城を放棄して退いた。輝元はこれを幸いに思い、福山城を自分たちで修築し毛利方の武将に守らせようと考え、備中才田城を守備していた馬屋原左衛門太夫・熊谷就真の二人に対し、もう才田城は守らなくてよくなったので福山城の守備につくよう命じた。ところが、馬屋原・熊谷両人は、自分たちは上意に従って行動したいと思っているが、家来たちが連続して最前線へ行くのを嫌がっている、と申し出た。仕方なく輝元は、備中松山城に検使として配置していた桂源右衛門尉元盛に福山城の守備を命じようと考え、寺畑城付近の毛利本陣に呼び寄せ、小早川隆景の御座所に滞在させた。その上で元盛に対し、去年から松山城への出張で辛労をかけているが、引き続き福山城へ出張してくれればありがたい、と申し聞かせた。輝元の依頼を聞いた元盛は、賀茂に付城があるなら松山城で検使をする意味もなく、どこに居ても同じことなので、上意に従って福山城の守備につくことを了承した、という。	寺畑の城　（78大寺畑城跡） 伊賀左衛門尉城小倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 小倉より出城に持ち候福山　（〈備前19〉福山城跡） 才田と申す城（〈備中76〉才田城跡） 松山　（〈備中158〉備中松山城跡） 寺畑の御陣、隆景様御座候所　（79陣山城か）	桂元盛（岌円）	天正八年（元和八年）	1580年（1622年）	44
48	蔵田就貞覚書／『閥閲録』巻百廿六　蔵田藤左衛門	作州竹内現形之時妙見山被籠、備前衆雖罷出候、堅固相抱、河口合戦之時頸一ツ河本孫左衛門与申者討捕之、御感状被下置候事	毛利氏家臣の蔵田就貞が、後年になって自身の経験を書き留めたもの。天正八年（1580）、美作国の竹内為能が毛利氏に味方（現形）した際、就貞は毛利氏の命令で妙見山に籠っていた。そこへ備前衆（宇喜多軍）が出陣してきたが、就貞は堅固に妙見山を守り、河口の合戦で河本孫左衛門という敵将を討ち取って毛利輝元から感状を与えられた、という。	妙見山　（現在地未詳、240高城跡に関連）	蔵田東市之助就貞	天正八年（天正廿年二月九日）	1580年（1592年）	87
49	吉川広家功臣人数帳／吉川家文書	御用ニ罷立衆　（中略）備中 新山　大草又右衛門尉 （中略）作州 寺畑 朝枝源次　宮山 少阿弥　祝山 塩屋佐介	吉川家のために戦って討死した家臣の名を、戦死した場所と共に書き上げたもの。	備中新山　（〈備前8〉新山城跡ヵ） 作州寺畑　（78大寺畑城跡） 宮山　（56宮山城跡） 祝山　（179医王山城跡）	吉川広家	天正七～九年（元和三年四月）	1579～81年（1617年）	59

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
50	虎倉聞書／類纂虎倉物語	出城ハ備中四ツうね・作州鷹ケ城相持候処に、芸州毛利より四ツうねを乗取候、虎倉より二里計西、加茂市場村之内藤沢と申山に虎倉方之者取登り居申所ニ、又芸州より藤沢をも乗取、城番として青屋与十郎と申人を据置申候、其後伊賀殿と扱に仕り、右領分之物成半納ツヽ藤沢と虎倉へ取入申候由、其節鷹ケ城を浦上宗景（ママ）より攻申候ニ付、後詰として虎倉より出勢仕共、其留主ニ扱を破り、藤沢より虎倉へ不意ニ押懸け申候を、留主居とも伝聞、城中の妻子・下女はしたまて呼出し旗刺物さゝせ、数百人城山の後、広面村と上加茂村の境高き山へ出張居申候、藤沢の者とも案之外ニ候へハ上加茂の坂中へ下り、軍の評議仕候処に、虎倉勢用ニ立程のものハ下加茂へ廻り、上加茂の後十力村の山の高ミへ取登り居申候。其内片山弥左衛門と申鉄炮の上手、上加茂川のへり、柳のかけニかまり居申候て、大将青屋与十郎をねらひ打ニ打落申候、其時後へ廻り居申者とも、ひた（繰り返し記号）と打寄聞を揚候得ハ、敗軍仕り方々へ逃申候を追かけ大形打取申候、虎倉勢の内ニハ土井三郎左衛門と申もの壱人、長追を仕打死いたし候、大将与十郎打死、其外大勢打死仕候ニ付、藤沢推（難ヵ）抱、残ル者共ハ芸州へ立退申候	（伊賀氏は）出城として備中国四畝城・美作国高城を保持していたが、毛利氏によって四畝城を乗っ取られてしまった。また、虎倉城から2里ほど西にある加茂市場村の藤沢という山に虎倉城側に味方する人たちが登って拠点としていたが、これもまた毛利軍が奪取して、城番として粟屋元信（青屋与十郎）を配置した。その後、毛利氏と伊賀氏との間で休戦が成立し、年貢（物成）を折半して藤沢と虎倉の両方へ納める状態になった（半納）。その頃、高城が浦上宗景（宇喜多直家の誤り）に攻撃されたため、後詰めのため虎倉城から援軍を出陣させた。その留守を狙って毛利側が休戦を破り、藤沢城から虎倉城へ不意に攻め寄せてきた。虎倉城の留守居はこれを事前に伝え聞き、城中の妻子・下女なで呼び出して旗指物を掲げ、広面村と上加茂村の境の高い山へ数百人を配備した。藤沢城の軍勢にとっては思いの外のことだったので、上加茂の坂中で軍評定をしていたところ、虎倉城の軍勢のうち役に立つ者は下加茂へ回り込み、十力村の山の高みに登って陣取った。そのうち、片山弥左衛門という鉄砲上手が、上加茂川の傍の柳の陰から毛利軍の大将粟屋元信を狙撃し、背後に回り込ませていた軍勢が押し寄せ鬨の声をあげたところ、毛利軍は敗走し、それを追い打ちして多数を討ち取った。虎倉城側では、土井三郎左衛門という者1人が、深追いし過ぎて討死した。大将の粟屋氏が戦死し、その他大勢が討死したため、毛利氏は藤沢城を維持することが困難になり、残っていた者も毛利領へ退散した、という。	四ツうね　（〈備中93〉四ツ畝城跡） 鷹ヶ城　（番号なし　高城跡） 虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 藤沢と申山　（〈備前17〉藤沢城跡）	下土井村庄屋土井六郎兵衛（話者）	天正八年（江戸時代前期）	1580年（17世紀後半）	25
51	小坂氏先祖書／小坂家文書	小坂与三郎牢人仕居申候所ニ、直家様被召出、御抱被為成候、其時当郡上神目中ノ村兼正と申所ヲ城かくニこしらへ、芸州より之おさへニ御置被成候、其後当国久米郡北分高城と申城、芸州ノ方之御家頼竹内惣右ヱ門殿・岸備前殿・赤木弥三郎殿御持被成候、然所ニ直家公右之高城御せめ被成候迚御遣被為成候節、小坂与三郎同所ニ御腰被為掛、則御腰物被為下候、直家様ハ仏教寺ヲ御本陣ニ被成、高城与三郎ニ責候得と被仰付責申候、其時掛合之合戦ニ赤木ヲ討捕、其時直家様御感状被下申候	久米南条郡弓削地域の領主小坂氏の子孫が津山藩に提出した先祖書。浦上氏滅亡後、小坂与三郎は牢人していたが、宇喜多直家に召し出され、宇喜多氏に従うことになった。その時宇喜多氏は、久米南条郡上神目中ノ村の兼正という場所に城郭を築き、安芸毛利軍への押さえとして与三郎を配置した。その後、久米北条郡の高城という城を、安芸毛利氏に味方する竹内惣右衛門・岸備前守・赤木弥三郎らが保持していた。宇喜多直家はこの高城を攻めるため軍勢を派遣したが、その時直家と小坂与三郎が同じ場所に腰を落ち着ける機会があり、その場で与三郎は直家から腰刀をもらった。直家は仏教寺を本陣としており、高城を攻めるように小坂与三郎に申し付けた。その高城攻めの合戦の際、与三郎は城将の赤木弥三郎を討ち取り、直家から感状をもらった、という。	兼正と申所ヲ城かく　（番号なし《仮名》兼正城跡） 高城　（240高城跡）	（近世前期の小坂氏一族）	天正八年（元禄二年）	1580年（1689年）	78
52	有松源五左衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻七十二　干城一	有松与兵衛。備前松田殿に罷有、其後播州別所殿へ罷出、（中略）別所殿滅亡の後、宇喜多中納言殿へ罷出候。作州の内三の宮城攻の時、大将村上を鑓下にて組臥、首を取申所、身方其首を奪取申候。後承候へば、岡豊前奪申候由、其後備前高城にて、大将岸修を打取申候。	岡山藩士有松源五左衛門が、祖父与兵衛の履歴を岡山藩に報告したもの。与兵衛は備前松田氏に仕え、其後播磨国の別所氏に仕えた。別所氏滅亡後は宇喜多氏に出仕し、美作国三宮城攻めの時、籠城軍の大将村上氏を槍働きで組臥せ、その首を取った。ところが、味方にその首を奪い取られたという。後日聞いたところでは、首を奪ったのは岡家利（豊前守）だったという。その後、美作国高城（備前は誤り）で、城将の岸修理を討ち取ったという。	三の宮城　（217三宮城跡） 高城　（240高城跡）	有松源五左衛門	天正八年（貞享年間）	1580年（1684～1688年）	26
53	岡多兵衛奉公書/岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』岡藤兵衛	藤吉殿ハ同国三木別所江御寄被成候、其節両岡美作国江罷越、安芸毛利家来之者共と致合戦、三ノ宮其外かつら・いわふ山数々之は城共責落申候、（後略）	羽柴秀吉（藤吉殿）が播磨国三木城の別所氏を攻めていたころ、両岡（岡筑前守と岡但馬守）は美作国へ出陣し、安芸毛利氏の家臣たちと戦い、三ノ宮城・葛下城・祝山城など毛利方の端城を攻め落とした、という。	三ノ宮　（217三宮城跡） かつら　（122葛下城跡） いわふ山　（179医王山城跡）	岡多兵衛	天正八年ごろ（寛永二十一年）	1580年（1644年）	30
54	花房職利書状／正宗文庫所蔵文書	於作州ニ塩屋左介御討捕せ、死がい(骸)を毛利へ被相送由候、右之場所可申越候	宇喜多氏重臣の花房職秀が美作国で塩屋佐介を討ち取り、その遺骸を毛利陣へ送り届けたことがあった。その場所がどこであったか、職秀の子職利が古くからの家臣小島次郎兵衛に尋ねたもの。	（179医王山城跡）	花房五郎左衛門職利	天正八年（寛永十八年ヵ三月八日）	1580年（1641年ヵ）	9

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
55	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	一備前浮田直家より作州岩屋城江長舟越中被指遣候時、毛利衆岩屋を責被申候而後、毛利衆又余野へ働候時、輝元内山田市助与申者、其時大将与名乗、某と太刀討仕、則市助首討取候（中略）一毛利陣へ夜働仕候時、余野二ツ山之城主湯殿右衛門督と申仁参会仕、互ニ名家を名乗、散々ニ切合数ケ所手負、互ニ相退仕候事、	備前の宇喜多直家が美作国岩屋城に長船貞親を派遣して守らせていたところ、毛利軍が岩屋城に攻め寄せてきた。毛利軍は岩屋を攻めた後、余野に進出した。ここで宇喜多軍に属する牧左馬助は、毛利輝元の家臣でその部隊の大将を名乗る山田市助と渡り合い、その首を討ち取った。また、宇喜多軍が毛利陣へ夜討ちを仕掛けた際、左馬助は余野の二ツ山城主湯殿右衛門督と渡り合い、散々に斬り合ったが、数ヶ所の手傷を負って互いに退いた、という。	岩屋城　（189岩屋城跡） 二ツ山之城　（84二ツ山城跡）	牧左馬助	天正八～九年（江戸時代初期）	1580～1581年（17世紀前半）	28
56	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	一作州高田ニ毛利衆被居候を路次を留候而、岡本権之丞・某を被遣候刻朝待仕候処ニ、岩見之銀山鷲見源之丞と申者通候を某と名乗合太刀打仕、則源之丞首討取（中略）一毛利衆寺畑を責詰、陣を居候時、直家より毛利陣江夜働仕候得と市三郎兵衛江被申付候処、何哉覧相延候とて牧源之丞・某ニ被仰付、則弐人夜働仕散々切乱（後略）	美作国高田城に滞在する毛利軍の通路をふさぐため、宇喜多直家の命で岡本秀広と牧左馬助が出陣し、朝方に待ち伏せしていたところ、石見銀山の鷲見源之丞という武将が通りがかったので、これを討ち取った。また、毛利軍が寺畑城を攻めるために築いた陣を夜襲するよう直家から市三郎兵衛に命が下ったがなぜか延期になり、代わりに牧源之丞と牧左馬助が出陣して毛利陣に夜討ちを掛け、散々に斬りまわった、という。	高田　（33高田城跡） 寺畑　（78大寺畑城跡） 毛利陣　（79陣山城か）	牧左馬助	天正八～九年（江戸時代初期）	1580～1581年（17世紀前半）	28
57	氏名不詳某覚書／花房家記事	我等い申候みや山一城計もちかため申処ニ、小早川山見へ罷越、則鉄炮いくさ仕、こたま十兵衛と申もの一人うちとり申、又此方も大蔵左吉と申もの我等い叓のこ一人相はて、両方ひきとり申候、其後とりつめらるへきと存候処ニ我々知行の内よこ山と申所ニあい城をこしらへ小早川そのとしおつねん被仕、明二月ニ三村孫太郎・備中・備後衆のこしおかれ小早川ひきしりぞかれ候事	天正八年（1580年）。毛利方による宇喜多方諸城攻略が進む中、この覚書の記主が籠る宮山城だけが宇喜多方として堅固に維持されていた。そこに小早川隆景の手勢が「山見」にやって来て銃撃戦になり、毛利方の児玉十兵衛を討ち取った。籠城側も大蔵左吉を討ち取られ、双方とも兵を引いた。その後、覚書の記主は「毛利軍に宮山城を包囲されるだろう」と思っていたところ、隆景は記主の所領内の横山という場所に「相城」を築城してそこで年越しし、天正九年（1581年）二月には三村親宣（孫太郎）ら備中・備後の軍勢のみを残して隆景自身は退却してしまった、という。	みや山　（56宮山城跡） よこ山	（宮山城番の某）	天正八～九年（寛永十八年以前ヵ）	1580～1581年（1641年以前ヵ）	28
58	森脇飛騨守功名覚書／阿川毛利家臣山県家文書	作州益形と申城御取誘、吉田肥前殿を物頭被置、我等在番被仰付候、（中略）其後、荒神山花英助兵衛居城候而、院庄かまへ・二宮辺ニて数度取相候つれ共、益形人数一度もふかく不仕候、助兵衛殿于今有之由候間、自然ハ沙汰可有之候	吉川元春の家臣森脇春方（春秀）が自身の参加した合戦について老後に回想して記述した覚書。天正八年、毛利氏は宇喜多氏との戦争に備え、美作国に益形城という城を構築し、吉田肥前守を物頭とする部隊を配備、森脇春方も在番を命じられて益形城へ入った。その後、宇喜多方の花房助兵衛職秀（原文の「花英」は誤記）が荒神山城に居城して、院庄構城や二宮近辺で毛利・宇喜多両軍の合戦が数度行われたが、益形城の駐留部隊は一度も不覚を取らなかった。合戦相手の花房職秀は今も顕在なので、必要ならば確認してみてほしい、と記す。	益形と申城（141桝形城跡） 荒神山　（250荒神山城跡） 院庄かまへ（135院庄構城跡）	森脇春方（春秀）	天正八年ごろ（元和元年十月吉日）	1580年（1615年）	89
59	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	北ノ賀茂ひつめと申山城草かり殿と申侍持被申、其城より仕出しの城いわう山と申と、ますかたと申城と、としもとゝ申城、此三ツの城主を助兵様御きりとり候て、則三つの城助兵様御もち被成、ひつめの城の相城ニ被成加番御入置候	北賀茂の日詰という山城を草刈氏が維持しており、その「仕出しの城」（前衛の意か？）として祝山・桝形・利元城という城があった。宇喜多氏の重臣花房職之（助兵様）は、この三つの城を攻め落とし、日詰城を攻めるための相城として利用するため番衆を入城させた、という。	ひつめと申山城（158百々城跡） いわう山　（179医王山城跡） ますかたと申城（141桝形城跡） としもとゝ申城（165利元城跡）	小島次郎兵衛	天正七～九年ごろ（寛永十八年六月十二日）	1579～1581年（1641年）	28
60	氏名不詳某覚書／花房家記事	其後吉川被罷出みや山へよせられし時、我々めしつかひ申ひた権丞と申もの、わたくしニむほん仕、吉川ニたのまれ内通いたし、みや山の城ニひをかけ、夜はん過より吉川とりつめられせめ被申、然共やう（繰り返し記号）相しのき明七ツ時分まて相たゝかい、ておい・しにんおゝく出来申、吉川ひきしりそき被申候而、みや山うんをひらき申候	天正九年（1581年）。隆景の撤収後、今度は吉川元春が出陣して本史料の記主らが立て籠もる宮山城に攻め寄せてきた。その時、記主の家来「ひた権丞」が吉川軍に内通して謀反を起こして宮山城に放火し、これに呼応して夜半過ぎから吉川軍が攻め込んできた。明方七つ時分までの激戦で多くの死傷者が出たが、何とか吉川軍の攻撃をしのいで撤退させ、籠城衆は運を開いた、という。	みや山の城　（56宮山城跡）	（宮山城番の某）	天正九年（寛永十八年以前ヵ）	1581年（1641年以前ヵ）	28

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
61	氏名不詳某覚書／花房家記事	其後みや山之外一城も無御座候故、てさきみや山ばかりもち候ても不人(入ヵ)事二而ひきとり候へ与直家被申越候、三年らうしやう仕重々ひきとり候へ与直家岡山より被申付而、日中ニひきとり岡山へ罷越し、らつきよ仕候つたへの城ぬしとも々与市弾正・大森伝右衛門両人ハけつしよ被仕候、一人ハせいばい仕、知行共共我々被下、則同めうニ被仕候	天正九年（1581年）。その後、宇喜多方の城は宮山城を残して一つもなくなってしまった。出先の宮山城だけを維持していても意味がないので退却しなさい、と覚書の記主のところへ宇喜多直家から命令がきた。三年間籠城を続けたものの、重ねて兵を引くよう直家から指示があったので、日中に城から退却し岡山城へ向かった。毛利氏に攻め落とされた伝の城の城主（市弾正・大森伝右衛門）は、直家によって所領没収または成敗の処分となった。直家は宮山城を長く守った覚書の記主に報いるため、彼らの遺領と「宇喜多」姓を与えた、という。	みや山　（56宮山城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡） つたへの城	（宮山城番の某）	天正九年（寛永十八年以前ヵ）	1581年（1641年以前ヵ）	28
62	『森家先代実録』巻第六	大庭郡湯原村宗玄と云、丁百歳長寿の老人申せしハ、今ハ御侍の世の中也、某若キ時分ハ笹向の侍・飯山の侍・一瀬の侍衆平生ハ白布ヲ表裏共糊ヲ能つけ打候て綿ヲ入、布子と云て出仕着物也、備前よりの通路不自由なれハ、朝夕麦飯ニ赤鰯の料理の外ハまいられず、誰尊丈ハ久敷不逢と云へハ、十日以前ニ打死して毛利家へ首取られしと云	美作国大庭郡湯原村の宗玄という百歳の老人が若いころ（戦国期）の様子を語ったもの。笹向城・飯山城・一瀬城（市瀬の宮山城か）の侍が「布子」という衣服を着て出仕していたこと、備前国との通路が不自由で朝夕麦飯に赤鰯を添えた料理以外食べることができなかったことが述べられている。また、誰それにしばらく会わない、と話題にしたら、その人は十日前に毛利軍に討たれたと返答されたことなどが語られている。	笹向　（88篠向城跡） 飯山　（現在地未詳） 一瀬　（56宮山城跡か）	宗玄（話者）	天正七～九年ごろ（江戸時代前期）	1579～81年ごろ（17世紀前半）	12
63	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	くたの西やと申山城手前ニ敵の城弐ツ三ツ御座候を、御ふミこして西屋を御とり候て加番御入置、則苔口宗十郎大将分にて罷在候、是ハ伯州への伝と聞申候	天正九年（1581年）ごろか。美作国久田に西屋城という山城があり、その手前に敵の城が2、3ヶ所あった。宇喜多氏重臣の花房職之は、伯耆国と連絡するため、これらを踏み越えて西屋城を確保し、苔口宗十郎を大将とする加番衆を配置した、という。	西屋　（105西屋城跡）	小島次郎兵衛	天正七～九年ごろ（寛永十八年六月十二日）	1579～81年ごろ（1641年）	28
64	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正九年冬、（中略）間も無く京家の先手木下・祖奥の両大将立籠たる百々村落合の城へ夜打の砌リ、右又太郎、進市兵衛と先陣を争ひ打死仕り候	天正九年（1581年）冬、織田勢の先陣木下・祖奥（？）氏が籠る百々村の落合の城を毛利方の草刈氏が夜討ちした。その際、草刈軍に属する寺坂又太郎が進市兵衛と先陣を争って突入し討死した、という。	落合の城　（158百々城跡）※近年の説によれば、本史料のいう落合の城は蕗谷城（鳥取県）を指すもので、岡山県域の城館ではない可能性が高い	寺坂三郎右衛門	天正九年（元禄三年四月）	1581年（1690年）	21・28・33
65	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正九年冬、木下・祖奥が立籠り候百々村落合の城夜打に仕り候砌り、桃千代木下が家来岩藤佐内を打取之申候	天正九年（1581年）冬、織田方の木下・祖奥（？）氏が立て籠もる百々村の落合城を草刈氏が夜討ちした際、寺坂桃千代は木下氏家臣の岩藤佐内を討ち取った、という。	落合の城　（158百々城跡）※近年の説によれば、本史料のいう落合の城は蕗谷城（鳥取県）を指すもので、岡山県域の城館ではない可能性が高い	寺坂三郎右衛門	天正九年（元禄三年四月）	1581年（1690年）	21・28・33
66	小川信秀覚書／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	美作いんの庄ニて備前の浮田殿と御取相被成候時、御忠儀高名被仕候事	信秀が同族の小川元政（右衛門兵衛尉）の高名について、記憶していることを書き出したもの。美作国院庄で毛利軍が備前の宇喜多軍と合戦した際、小川元政が手柄を立てたという。	美作いんの庄（135院庄構城跡）	小川土佐（信秀）	天正九年ごろヵ（元和八年三月五日）	1581年ごろヵ（1622年）	86
67	福岡重継書状／毛利家文書	従　太閤様、宮部善乗坊・木下備中守・八木・磯辺以下、私城へ被成御向候条、両度及合戦、得勝利、是又捧軍忠之状、裏ニ被居　御判被下候事、	もと矢筈城主草苅重継（福岡に改姓）が、後年になって自身の毛利方としての武功を書き上げたもの。羽柴秀吉（太閤様）の命で宮部継潤（善乗坊）・荒木重堅（木下備中守）・八木豊信・磯部豊直らが草苅氏の城（矢筈城）へ進撃してきた際、重継は二度合戦に及んで勝利し、軍忠状を毛利氏に提出して紙背に確認の花押を入れてもらった、という。	私城　（157矢筈城跡）	福岡（草苅）対馬守重継→前原休閑	天正九～十年ごろ（）	1581～82年ごろ	57
68	福岡重継書状／毛利家文書	南条包兵衛致御敵之故、雲伯之境御弓箭ニ罷成候、左候条、北表通路及三日路無御座候故、御救難成被　思召候条、私居城一ニ相つほミ可申之由、元春様御意ニ付而、淀山を引取申候、宇喜田御敵仕候而後三ヶ年者、城二ツ持詰、致御味方事、	同上。南条元継が毛利氏に敵対したため、出雲・伯耆両国の間が戦争状態になり、北表（山陰方面）の通路が途絶え気味になってしまった。そのため毛利氏として草苅氏に直接的な救援を出しがたいとの判断がなされ、吉川元春から草苅重継に対し「居城（矢筈城）一ヶ所につぼむよう」命が出され、重継はこれに従って因幡国淀山城を撤収した。重継は宇喜多直家が毛利氏に敵対して以降三ヶ年のあいだ、毛利方として城を二ヶ所維持し続けた、という。	私居城　（157矢筈城跡）	福岡（草苅）対馬守重継→前原休閑	天正七～十年ごろ（）	1579～82年ごろ（）	57

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
69	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	一芸州中村与備前浮田戦之時、作州月沢与申所ニ而「小原源太与申者与名乗出、互ニ初ハ鑓ニ而」戦、其後太刀打仕、則源太か首討捕、（中略）一中村月沢を責落候而後、其城ニ北右衛門督と某弐人城主ニ居候刻、従岩屋罷出城江取詰申候を、某と沢源次兵衛と罷出及合戦、鑓下ニ而沢源次兵衛者打死仕候得共、某鑓壱本ニ而突崩、城を被取不申候、其時直家死去ニ付、感状者家老より給候事、	天正十年（1582年）。毛利方の中村頼宗と備前宇喜多氏が美作国月沢というところで合戦した際、宇喜多方の牧左馬助は小原源太という者を討ち取った。その後、中村氏の月沢城を攻め落とした宇喜多氏は、この城を北右衛門督と牧左馬助の二人を城主として守らせた。岩屋城から中村頼宗が出撃し、月沢城を包囲したが、牧左馬助と沢源次兵衛が迎え撃ち、沢氏は討死したものの、左馬助は槍働きで敵軍を突き崩し、城を守り切った。その時、すでに宇喜多直家は死去していたので、感状は家老からもらった、という。	月沢　（48月沢城跡または199萩丸城跡） 岩屋　（189岩屋城跡）	牧左馬助	天正十年（江戸時代初期）	1582年（17世紀前半）	28
70	樫村金田氏家記	金田弘成の嫡子江原兵太弘貞、又云牧与兵衛、三崎邑ニ住ス、天正十年三月羽柴筑前守秀吉公ヨリ樫村才庄谷ノ小屋作リテ預ケラレ、然ルニ其谷ニ所集軍兵、民家ニ乱入狼藉ヲナスノ聞、依有之弘貞急ギ打向ヒ可相静旨禁制書ヲ成賜リ、（中略）弘貞後ニ祝髪シテ朴意ト云	高田城主三浦氏の旧臣金田氏歴代の経歴を記した史料。金田弘成の嫡子江原弘貞（兵太）は、又の名を牧与兵衛といい、大庭郡三崎村に住んでいた。弘貞は天正十年三月、羽柴秀吉から樫村才庄谷の立て籠もり用施設の守備を任された。ところが才庄谷に集まった軍勢が民家に乱入し狼藉を働いているとの一報があり、弘貞はこれを沈静化させる禁制を秀吉からもらって現場に急行したのだという。弘貞は後に剃髪して牧朴意を名乗ったという。	樫村才庄谷ノ小屋　（425　さいしょう小屋）		天正十年（江戸時代中期以降カ）	1582年（18世紀以降カ）	76
71	寛永諸家系図伝　清和源氏乙五　花房職之	同十一年、毛利が兵大軍を以て沖構の城にたてごもるゆへ、職之加勢を秀家にこふて大兵を以て攻落す、是よりさき、職之附城に居する時、敵兵夜中にをそひ来るといへども、職之が兵難波又市郎、夜討の先がけ興津市郎を討取故、敵利をうしなひてひき退く	天正十一年（1583）、毛利氏の大軍が沖構に立て籠もっていたので、花房職之は宇喜多秀家に加勢を請い、大軍を率いて沖構を攻め落とした。その少し前、職之が沖構包囲の付城にいた際、敵兵が夜討ちをしかけてきたが、職之の部下難波又市郎が敵の先鋒興津市郎を討ち取ったので、敵は手立てを失って退却した、という。	沖構の城　（129沖構跡） 附城　（149茶臼山城跡など）		天正十一年（寛永二十年）	1583年（1643年）	22
72	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正十一年八月十六日、備前国河橋党立籠り候皿山の城へ草刈太郎左衛門軍勢未明に押寄合戦之砌り、寺坂桃千代一番首と名乗り真先に進だる敵河橋が嫡子弥一郎と申者打取之	天正十一年八月十六日、備前国河橋（河端）党が立て籠もる皿山城に草苅重継（太郎左衛門）の軍勢が夜討ちをかけた際、草苅氏の配下寺坂桃千代は河橋氏の嫡子弥一郎を討ち取った、という。	皿山の城　（159佐良山城跡）	寺坂三郎右衛門	天正十一年八月（元禄三年四月）	1583年（1690年）	21
73	福岡重継書状／毛利家文書	直家私居城を取詰、相城数ヶ所取付候、因州口ｙハ木下備中其外歴々罷出、是又数ヶ所之付城を仕候故、諸口通路不輙候へ共、私真先ニ堅固ニ罷居候故、舛形・岩屋・高田・多治部、一筋如弓之絃御味方中御座候、如右之候而、六ヶ年之籠城仕候事、	もと矢筈城主草苅重継（福岡に改姓）が、後年になって自身の毛利方としての武功を書き上げたもの。宇喜多直家が重継の居城（矢筈城）を包囲し、城の周りに相城を数ヶ所構築した。因幡方面からは秀吉方の木下備中守（荒木重堅）ら歴々が出陣し、彼らも矢筈城の周囲に数ヶ所の付城を設営した。そのため矢筈城は孤立化して諸方面との連絡が困難になったが、重継が堅固に城を持ちこたえたため、舛形・岩屋・高田・多治部城が一筋の弓の弦のようなかたちで味方として生き残り、六ヶ年の籠城をし遂げた、という。（六ヶ年は誇張表現）	私居城　（157矢筈城跡） 相城数ヶ所 数ヶ所之付城 舛形　（141桝形城跡） 岩屋城　（189岩屋城跡） 高田　（33高田城跡） 多治部　（〈備中58〉塩城山城跡）	福岡（草苅）対馬守重継→前原休閑	天正九～十一年ごろ（慶長十五年十一月十六日）	1581～83年ごろ（1610年）	57
74	福岡重継書状／毛利家文書	備中高松之城、従　大閤様被成御取詰候節より、諸口之通路無之間、只可立御用一筋之覚悟計ニ而候処、信長公不慮之儀候而、大閤様御上洛候条、運を開可申と存、成案堵之思候処、都鄙御和談弥有御順熟、悴城を渡可申旨　御意候而、井上新兵衛を被下候、従元春様・隆景様一人宛被成御添候	同上。備中高松城を秀吉が包囲したころから、諸方面への通路が途絶えており、重継は毛利氏の役に立って死ぬことを覚悟していたが、信長が不慮の最期をとげ秀吉が上洛したため、運がひらけたと安堵していた。ところが、秀吉と毛利氏との和談が整えられた結果、草苅氏の居城を秀吉方に引き渡すようにと、毛利輝元から命じられた。輝元からの使者は井上新兵衛で、吉川元春・小早川隆景からの使者も添えられていた、という。	備中高松之城（〈備中393〉備中高松城跡） 悴城　（157矢筈城跡）	福岡（草苅）対馬守重継→前原休閑	天正十～十一年ごろ（慶長十五年十一月十六日）	1582～1583年ごろ（1610年）	57
75	寺坂三郎右衛門家伝覚	天正十二年、毛利家、京方と和睦に就き、高山の城明退き、草刈芸刕へ罷越し候砌り、桃千代は作州に留り浪人にて罷在り、阿波村と申処に住居仕り候	天正十二年（1584）に毛利氏が秀吉（京方）と和睦した結果、草苅氏は高山城を秀吉方に明け渡し、安芸国へ退くことになった。この時、草苅氏配下の寺坂桃千代は美作国に留まって浪人となり、阿波村に住居した、という。	高山の城　（157矢筈城跡）	寺坂三郎右衛門	天正十二年（元禄三年四月）	1584年（1690年）	21・28・33

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
76	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	岩屋ニ中村被居候時、従備前岡豊前・長舟越中、其外大勢集壁際迄取詰候時、城内より坂手勘之丞と名乗、某江立向候を壁際にて組首討取候	天正十二年（1584年）。岩屋城に毛利方の中村頼宗がいたころ、備前宇喜多氏は岡家利（豊前守）・長船貞親（越中守）らが率いる軍勢をもって、岩屋城の壁際まで迫り、包囲攻撃した。この時、城中から坂手勘之丞が名乗りを挙げ、宇喜多軍に属する牧左馬助に立ち向かってきたので、壁際で組み討ちして首を取った、という。	岩屋　（189岩屋城跡）	牧左馬助	天正十二年（江戸時代初期）	1584年（17世紀前半）	28
77	中島本政覚書／西島氏文書	作州岩屋と申城に本庄大和守頼宗と申仁被居候、宇喜多中納言殿御取詰候、岩屋之南坪井之上と申所江原兵庫助陣所ニ而御座候、敵伏勢を仕、足軽をつけ申所江、瀬島宗四郎と申者先掛を仕、手負相果候、敵首取にかゝり候時、某つきかゝり追くずし首とらせ不申候	もと美作国高野郷の領主で篠向城主江原親次に従っていた中島政家（法名本政）が、老後に自身の活躍について追想して記録したもの。美作国岩屋城に本庄頼宗（中村頼宗のこと）がおり、これを宇喜多秀家が包囲攻撃した。岩屋城の南、坪井の上という場所は宇喜多方の江原親次の陣所だったが、ここを籠城側の伏兵が襲った。宇喜多方の瀬島宗四郎が先駆けして戦死したが、その首を取ろうとした敵に中島政家が突きかかって追い払い、首を取らせなかった、という。	岩屋と申城（189岩屋城跡） 江原兵庫助陣所（195姿山砦跡または194茶臼山跡または198加治子山城跡などか）	中島政家（本政）	天正十二年（元和六年以降寛永八年以前）※成立年は史料中にみえる花房平吉職利の家督相続年および池田右京政綱の没年から推定	1584年（1620～1631年）	29
78	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	其後にもおきのかまへと申城、いわやと申山城御座候処、是ハ大分人数御座候故、直家様(ママ)へ被仰上、御加勢の人数御加候而御せめおとし被成由候	沖構という城、岩屋という山城があったが、これらは籠っている人数も多かったので、花房職之は宇喜多直家？に注進して加勢を得た上で攻め落とした、という。	おきのかまへ（129沖構跡） いわやと申山城（189岩屋城跡）	小島次郎兵衛	天正十二年ヵ（寛永十八年六月十二日）	1584年ヵ（1641年）	28
79	中島本政覚書／西島氏文書	一作州笹吹ニ而古見源三郎と申者、被申候時、本丸ト二ノ丸との間ニて呼かけ切合仕ふせ申候時、大〔太〕田垣軍監と申す牢人居合見被申、執成しニて兵庫介指脇さしくれ被申候事、（中略）一同笹吹城下ニ而はさま九郎兵衛と申者、牧修理と申者を切候而おち申候、某迄〔追〕かけ呼返し切合仕ふせ申候、其時兵庫介より知行くれ申候、同国高田城主服部隠岐と申仁脇指くれ申候、同宮ノ城主市三郎兵衛と申仁刀くれ	中島政家は、美作国笹吹城の本丸と二の丸との間で、古見源三郎という人を切り伏せた。その様子をたまたま居合わせて見ていた太田垣軍監助という浪人（但馬山名氏のもと宿老）が、笹吹城主江原親次（兵庫介）に取り成してくれ、政家は親次から脇差をもらった、という。また、笹吹城下ではざま九郎兵衛という者が、牧修理という人を斬って逃げた。中島政家はこれを追い掛け呼び戻し、切り伏せた。この時も江原親次は褒美に所領をくれた。高田城主の服部隠岐守、宮の城主市三郎兵衛もそれぞれ脇差・刀をくれた、という。	笹吹城　（88篠向城跡） 高田城　（33高田城跡） 宮ノ城　（56宮山城跡）	中島政家（本政）	天正十三～慶長三年ごろ（元和六年以降寛永八年以前）※成立年は史料中にみえる花房平吉職利の家督相続年および池田右京政綱の没年から推定	1585～1598年ごろ（1620～1631年）	29
80	岡田玄慶奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』岡田玄慶	私祖母ハ豊福因幡守と申者之娘ニ而御座候、美作之内ニ小城ヲ預居申候由承及申候	岡山藩の医師岡田玄慶が主家に提出した自家の履歴書。玄慶の祖母は豊福因幡守の娘であった。この豊福氏は美作国内で小さな城を預かっていた、という。	美作之内ニ小城　（具体的な該当城館未詳。吉野郡のうちか）	岡田玄慶	戦国後期（寛文九年）	16世紀後半（1669年）	31
81	鷹取彦次郎種佐先祖代々之事	次男鷹取源右衛門と申者、余野村風呂屋之土居と申所に住居仕、備前代に者奉公に罷出、小吉野美野村を小知に取、相果申候、源右衛門末かたの者豊久田村に居申候	勝北郡余野村の鷹取氏について記した先祖書。鷹取氏の家系でいうと次男の系列にあたる鷹取源右衛門という人は、余野村の風呂屋の土居という居館に居住しており、備前代（宇喜多氏統治時代）には奉公に出て小吉野美野村で小規模な所領をもらい、その後亡くなったという。源右衛門の末裔は豊久田村に居住している、という。	余野村風呂屋之土居　（325小風呂山城跡ヵ）		戦国期～織豊期ヵ（元禄三年二月）	16世紀後半ヵ（1690年）	77
82	虫明又八奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十四　干城一三	秀家落人に罷成、薩摩へ罷下、島津義久可頼と、豊後国佐賀関迄上下三人にて罷下、牧藤内と祖父九平次と供仕候得共、人多にては難成候間、鬮を仕り、残り候へと秀家被申付候。九平次残り鬮を仕取申に付、色々之義申立候得共、中納言殿被申候は、我姉并に甥宇喜多内記親子之者、作州笹吹に罷在候、是を京都へ連行、上京へ置給候へば、我供仕候より、生々世々之奉公と被申候に付、（中略）指図之通笹吹に罷越、両人を京都へ送届申。	岡山藩士虫明又八が祖父九平次の履歴について書き上げたもの。関ヶ原合戦後、宇喜多秀家は落人となって薩摩に下り、島津義久を頼ろうと考え、豊後国佐賀関まで主従三人で出立し、牧藤内と虫明九平次（又八の祖父）が供をした。ただ、供の人数が多いと潜行が難しいので、くじ引きで供に連れて行く人間を決めることにした。虫明九平次は残りクジを引き当てたので、宇喜多秀家は九平次に残るよう命じた。九平次はあれこれ申し立てて秀家に随行しようとしたが、秀家は自分の姉と姉の子息である宇喜多内記が美作国笹吹城にいるので、この母子を京都へ連れて行き、上京へ落ち着かせてくれれば、自分に供をするよりずっと奉公を尽くしたことになる、と九平次に言い含めた。そこで、九平次は秀家の指図にしたがい、笹吹に出向いて秀家姉と宇喜多内記の二人を京都へ送り届けた、という。	笹吹城　（88篠向城跡）	虫明又八	慶長五年（貞享年間）	1600年（1684～1688年）	26

・【城館名】欄の数字は、一覧表と一致している。また、〈備前○〉〈備中○〉は、備前国、備中国にある城館である。

表７　引用文献一覧表

番号	文献名
1	『出雲尼子史料集』上巻
2	『今治郷土史』資料編古代・中世
3	内池英樹「鈴木家文書について」(岡山県立博物館『研究報告』36)
4	大分県先哲叢書『大友宗麟』資料集第４巻
5	大阪城天守閣特別展図録『五大老』
6	『岡山県金石史』続
7	『岡山県古文書集』第１輯
8	『岡山県古文書集』第２輯
9	『岡山県古文書集』第３輯
10	『岡山県古文書集』第４輯
11	『岡山県史』家わけ史料
12	『岡山県史』津山藩文書
13	『岡山県史』編年史料
14	『岡山県史』編年史料『新見市史』史料編
15	岡山県地方史叢書８『黄薇古簡集』
16	『岡山県立博物館蔵優品図録』
17	岡山県立博物館特別展図録『歴史を彩る人々―岡山の古代・中世―』
18	岸田裕之・長谷川博史『岡山県地域の戦国時代史研究』(『広島大学文学部紀要』　55巻特輯号２
19	『岡山のアーカイブズ』４
20	『岡山のアーカイブズ』５
21	『勝加茂村史』
22	『寛永諸家系図伝』第２
23	岸田裕之「小瀬木　平松家のこと　付「新出沼元家文書」の紹介と中世河川水運の視座」(『熊山町史』参考資料編)
24	『吉備　されど吉備』
25	『吉備群書集成』第３輯
26	『吉備群書集成』第６輯
27	『教王護国寺文書』２
28	『久世町史』資料編第１巻編年資料
29	『倉敷市史』第10冊
30	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音寄』１
31	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音寄』３
32	『群書類従』第二十一輯合戦部
33	『御正田志稿』
34	『島根県史』第７巻
35	『下関市史』資料編Ⅴ
36	『新修倉敷市史』第９巻史料古代・中世・近世（上）
37	『新訂作陽誌』３
38	『新訂作陽誌』４
39	『新訂作陽誌』６
40	『新訂作陽誌』７
41	『新鳥取県史』資料編古代中世１古文書編下
42	『新編吉備叢書』第１巻
43	『戦国期中国史料撰』
44	『戦国期毛利氏史料撰』
45	『戦国大名尼子氏の伝えた古文書―佐々木文書―』
46	『増訂織田信長文書の研究補遺・索引』谷本進「鳥取城攻め太閤ヶ平本陣群の検討」(『鳥取城調査研究年報』５号)
47	続史料大成23『蔭涼軒日録』３
48	続史料大成24『蔭涼軒日録』４
49	続史料大成25『蔭涼軒日録』５
50	『大覚寺文書』上
51	『太子町史』第３巻史料編Ⅰ
52	第二期戦国史料叢書７『中国史料集』
53	大日本古記録『建内記』４

番号	文献名
54	大日本古記録『蔗軒日録』
55	『大日本古文書』家わけ８－２
56	『大日本古文書』家わけ８－３
57	『大日本古文書』家わけ８－４
58	『大日本古文書』家わけ９－２
59	『大日本古文書』家わけ９－２（追加）
60	『大日本古文書』家わけ９－別
61	『大日本古文書』家わけ11－１
62	『大日本古文書』家わけ21－１
63	『大日本史料』６－18
64	『大日本史料』６－23
65	『大日本史料』６－24
66	『大日本史料』８－１
67	『大日本史料』８－17
68	『大日本史料』８－23
69	『大日本史料』８－26
70	『大日本史料』８－31
71	『大日本史料』９－11
72	『大日本史料』10－８
73	『大日本史料』11－１
74	『大日本史料』11－５
75	寺阪五夫『美作古城史』
76	寺阪五夫『美作古城史』第一輯第二章
77	寺阪五夫『美作古城史』第三輯第一章
78	寺阪五夫『美作古城史』第二輯第三章
79	『南北朝遺文』中国四国編４
80	『新見市史』史料編
81	『新見市史』通史編上
82	日本古典文学大系35『太平記』２
83	日本古典文学大系36『太平記』３
84	『萩藩閥閲録遺漏』
85	『萩藩閥閲録』第１巻
86	『萩藩閥閲録』第２巻
87	『萩藩閥閲録』第３巻
88	『萩藩閥閲録』第４巻
89	畑和良「備前国における中世山城の縄張りと年代観」(『愛城研報告』第22号)
90	備作之史料(５)『金沢の宇喜多家史料』
91	備作之史料（４）『備前記』全
92	『兵庫県史』史料編中世２
93	『兵庫県史』史料編中世９・古代補遺
94	『広島県史』古代中世資料編Ⅱ
95	『広島県史』古代中世資料編Ⅲ
96	『広島県史』古代中世資料編Ⅳ
97	『福原家文書』上巻
98	『美作町史』資料編Ⅰ
99	『美作古簡集註解』全
100	森俊弘「宇喜多直家の新出書状」(『津山市史研究』創刊号)
101	『山口県史』史料編中世２
102	『山口県史』史料編中世３
103	『山口県史』史料編中世４
104	『山手村史』史料編
105	横田孝雄『所持銘のある末古刀』
106	横山定「亀山家伝来の美作国高野郷中島氏受給文書」(『倉敷の歴史』13号
107	『和気郡史』資料編上巻
108	岸田裕之・秋山伸隆「安芸内藤家文書・井原家文書」(広島大学文学部紀要　49巻特輯号１)

第５章　城館関連地名表

凡例

１　地名表の作成について

（１）本表は、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店 1989 や自治体誌等に収載された小字名から、城館に関連する地名を抽出し作成した。

（２）城館に関連する地名については、『城館調査ハンドブック』新人物往来社 1993 を参考とした。

２　地名表の記載内容について

（１）本表には、市町村名、郡名、大字名、城館関連地名（小字名）、周辺城館等（大字地内に所在する城館跡）を記載した。なお、大字に残る城館関連地名（小字名）の場所に、必ず表記している城館が所在していたとは限らない。

（２）郡名は、新郡区編成時（明治 11 年）の名称を用いた。

表 8　美作国中世城館跡関連地名表

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
真嶋	真庭市	蒜山西茅部	垣ノ内　門　城ノ内　城ノ下　城山ノ上　城山ノ下　城山ノ前　竹ノ内　堂ノ前古屋敷　前田	１徳山城山城跡・２波作利城跡
真嶋	真庭市	蒜山本茅部	城山　城山東平　城山平	２波作利城跡
真嶋	真庭市	蒜山東茅部	粟住山ノ下　上前田　門田　門　垣ノ内　城ノ後　城　城ノ下　城ノ前　城ノ上　城ノ渡　竹ノ内　竹ノ庄　竹ノ前　古屋敷　城山	３粟住山城跡・４経塚山城跡・８間谷城跡
真嶋	真庭市	蒜山下見	堀ノ内　山城　竹ノハナ　山城川　古ヤシキ　竹ノ段	
真嶋	新庄村		的場ヶ峪　城ノ元　油免　縄手ノ上へ　縄手ノ下　カケ田縄手脇　城脇峪ベリ　城脇　城元　馬場尻　馬場口　馬場　馬場川原　馬場川端　馬場石クロ　天神免　大垣ノ内　城山　城山北平ラ　竹ノハナノウエ　城山新林　城山新頭　上ミ垣ノ内　林ガ旦　大原家ノ上壇　平旦　ヒラ旦　竹ノ元　垣ノ内　城ガ畝　城ガ畝川原　竹ノ下井手ノ上　釜ヶ城　遊免　古屋屋敷　前田川端　前田　油免	５浦山城跡・６沢城跡
真嶋	真庭市	黒田	的場　門城バタ	15要害山城跡
真嶋	真庭市	鉄山	竹ノハナ　土居ノ内　殿屋敷　古屋敷　竹ノ上　門城	15要害山城跡
真嶋	真庭市	田口	前田	
真嶋	真庭市	豊栄	どいはやし　前田　前田の上　竹の下た　大段	14大沼山陣所跡・19目地城跡・20藪邉山城跡
真嶋	真庭市	本庄	垣の内　垣添　竹の下　竹の上　古屋敷　古屋敷の脇　前田　なわて	
真嶋	真庭市	見明戸	竹山の旦　ひろだん　ひろだん下　馬場の前　馬場屋敷　堀の内　馬場　馬場の上　馬場道の上　竹山旦道の下　竹の下　大門　大門川端　城山　粟田城山　市場山　市場山谷　竹の鼻　市場　土居の上　土居分　土居分の上　古やしき	16小坂向城山城跡・17竹山旦城跡・18見明戸城山城跡
真嶋	真庭市	仲間	東古ヤシキ　ゆつかまへ　古屋しき　馬場　垣の内　まとば	
真嶋	真庭市	禾津	寺ノ上堀ノ段　城が平　マトバ　竹の下　竹ノ花　土居	21土居城跡
真嶋	真庭市	美甘	竹ノ下　城バナ　城山	22麓城跡・23陣山城跡・24陣山城跡・25山根城跡
真嶋	真庭市	清谷	城山　城ガ平　垣ノ内	26清谷城山城跡・27岩明山城跡
真嶋	真庭市	曲り	馬場河内	
真嶋	真庭市	古呂々尾中	ヤビツ	28臼水城跡
真嶋	真庭市	本郷	陣山	29大料城跡・32陣山砦跡
真嶋	真庭市	江川	マト場	
真嶋	真庭市	荒田	笹ヶ丸	
真嶋	真庭市	神代	矢ヶ原　殿河内　つる木田　的場　土居田	29大料城跡
真嶋	真庭市	組	マトバ　木戸ノ元　土居	31舟津屋敷跡・32陣山砦跡
真嶋	真庭市	柴原	殿屋敷　的場　津井地　堀切　垣ノ内	30出羽屋敷跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
真嶋	真庭市	勝山	城山　馬場隅　馬場　水ノ手　下馬場　馬場入ル　三ノ丸跡　櫓下　如意山　東虎口　槙ノ土居	33高田城跡・34天神山砦跡・41牧土居・42阿波土居
真嶋	真庭市	横部	陣山　マトバ	34天神山砦跡
真嶋	真庭市	若代	土居ノ前　矢道　城山　殿王峪　殿河内	35若代城跡
真嶋	真庭市	岩井谷	古城畑　城山　狩又	36則行城跡
真嶋	真庭市	若代畝	マタバノ上	37荒木屋敷
真嶋	真庭市	上	的場　カリ又	
真嶋	真庭市	菅谷	カキノ内	
真嶋	真庭市	星山	垣ノ内　城光　縄手　堀	
真嶋	真庭市	高田山上	カキノ内	
真嶋	真庭市	関	開キ　竹ノ上　城山　城景　城谷　城ノ谷　城ノ景　古屋敷　竹ノ鼻　竹ノ花　古ヤガ段　開ノ内	40飯ノ山城跡
真嶋	真庭市	草加部	古屋敷　堀田　堀田ノ前　堀田前　門ノ前　門田　要害	43梶原屋敷跡・44殿土井・45飯山城跡・46惣七遺跡・47金砕山城跡
真嶋	真庭市	惣	上前田　前田　縄手ノ上	47金砕山城跡
真嶋	真庭市	日名	竹ノ上　竹ノ跡　竹ノ下　古家渡り　竹ノ下河原　竹ノ端　古屋尻り　古家　古屋奥　古屋西	47金砕山城跡・55野田屋敷跡
真嶋	真庭市	中	前田　組ノ土居　組ノ土井　縄手添　古屋敷	48月沢城跡
真嶋	真庭市	月田本	殿河内　又場　城山	49本山城跡
真嶋	真庭市	月田	矢ノ谷　堀ノ内　二郎丸　要害平　城ガ畝　土居ノ内　駒ノマヤ　狩又　殿河内　城山　要害　要害ノ段　天王守　イクサ畑ノロ	50栩原城跡・51会下山城跡・52三堂坂城跡・53鳶乃森城跡・54月田城跡
真嶋	真庭市	富尾	古屋敷　土井田　土居田　縄手添　堀リ	
真嶋	真庭市	落合垂水	土井畑長畑　大段　前田　土居原　土居河原　土居道ノ下　土居　土井渡リ上リ　土井大境　垣ノ内　土居中島　木戸	59注連山城跡・64十六城跡
真嶋	真庭市	向津矢	中土居　古屋敷	
真嶋	真庭市	西河内	竹ノ鼻　土居畑	59注連山城跡
真嶋	真庭市	下市瀬	前田　古屋敷	59注連山城跡
真嶋	真庭市	上市瀬	志かまえ　殿どい　門田　縄手　古屋敷　築土手	56宮山城跡・57城山城跡
真嶋	真庭市	開田	前田　的場	56宮山城跡
真嶋	真庭市	福田	土井田	
真嶋	真庭市	影	前田	
真嶋	真庭市	高屋	縄手　竹ノ後	56宮山城跡
真嶋	真庭市	杉山	下モ前田　下前田　前田利分　前田　的場　長兵衛前田　荒堀り	
真嶋	真庭市	野原	堀レ上ミ　堀レ　堀レノ上　堀レ道ノ上　竹ノ上	
真嶋	真庭市	舞高	竹ノ元　竹ノ本　竹下　竹ノ下　竹ノ下タ	
真嶋	真庭市	旦土	竹上　竹ノウエ　的場	
真嶋	真庭市	吉	前田平　前田ノ尻　大段　マエ田ノ口　前田ノ口　古ドリイ　竹ノ下　馬場　カマヘ　前大段　前田邊　前田辺　後馬場　竹ゾヘ　馬場ハナ　馬場鼻　開キ　竹ノ内　大段　前田邊　前田　前田ノ上　前田上	
真嶋	真庭市	佐引	城ウネ　城ノウネ　本丸　竹ノ後	58佐引城跡
真嶋	真庭市	鹿田	土居前　土居谷　土居畑　前田　土居　城山	60蜂ヶ城跡・61植木構跡・62石ヶ城跡・63真木ヶ城跡
真嶋	真庭市	栗原	馬場　竹ノ下　堀ノ上　垣添　堀ノ下　垣ノ内　土井畑　馬場田　竹ノ上　城ガ畝　古市場　蜂ヶ城	60蜂ヶ城跡・65栗原城跡
真嶋	真庭市	田原山上	古屋垰　下前田　下大旦　縄手　前田平　前田ノ上　大旦ノ上　土井垰　土井ノ旦　土井段　大段　大旦　前田　前田前　縄手添　縄手漆　竹之上エ　竹辺り　竹ノ内　竹ノ下　古屋河内　古屋ヶ地　古屋開地　古屋ヶ市　木戸ガ垰	63真木ヶ城跡・64十六城跡
真嶋	真庭市	下方	縄手添　竹ノ鼻　土居屋敷　土居平　土居原	63真木ヶ城跡
真嶋	真庭市	上山	前田　垣ノ内　大エ前田　多城　前田東受　開キ　古屋敷	66都我布呂城跡
真嶋	真庭市	木山	堀切　前田	
真嶋	真庭市	日野上	古屋敷　小宗古屋敷　古屋敷　的場　的場ヒシリ畠　堀切リ　開キ	
真嶋	真庭市	別所	古ヤシキ　竹ノ下　前田　城六　殿屋敷　古屋敷	
真嶋	真庭市	一色	馬場田　竹ノ上　マトバ　竹ノ花　古土井　前田　垣ノ内　的場	60蜂ヶ城跡・67城山城跡
大庭	真庭市	蒜山上徳山	垣ノ内　垣添　門田	
大庭	真庭市	蒜山下徳山	公文名　竹ノ元　竹ノ内　竹ノはこ　土居ノ後　古屋敷　古屋敷田　古屋敷脇　城山	
大庭	真庭市	蒜山上福田	内堀　門田　垣添　垣ノ内	
大庭	真庭市	蒜山湯船	門田　門	
大庭	真庭市	蒜山下長田	城連場	
大庭	真庭市	蒜山中福田	土居ノ内　門田　古屋敷　土井ノ脇	68日爪城跡
大庭	真庭市	蒜山下福田	前田　土居ノ後　古屋敷　垣ノ内	69七屋敷跡
大庭	真庭市	蒜山富山根	竹ノ下　垣ノ内　前田　古屋敷　門田　木戸ノ内	
大庭	真庭市	蒜山富掛田	古屋敷　木戸ノ内	
大庭	真庭市	蒜山上長田	馬場　城脇	70山名屋敷跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
大庭	真庭市	社	古やしき　門田　大手畝　馬場の上　馬場した　竹の花　かきの内　かきの下	71田井城跡
大庭	真庭市	蒜山別所	前田	72殿屋敷遺跡
大庭	真庭市	蒜山下和	古屋谷　古屋敷　垣ノ内　門田	73下和城跡
大庭	真庭市	蒜山吉田	古屋敷　前田	
大庭	真庭市	蒜山初和	古屋　城山	74初和城山堡
大庭	真庭市	蒜山真加子	前田	
大庭	真庭市	都喜足	的場　竹の上	
大庭	真庭市	釘貫小川	前田　垣の外　古やしき	
大庭	真庭市	久見	竹屋敷　縄手添　前田	
大庭	真庭市	下湯原	なわて　竹の鼻　的場　垣添　竹の下	
大庭	真庭市	湯原温泉	城山　築地の内	75湯山城跡
大庭	真庭市	田羽根	古屋敷　古屋　前田　古屋舗　たけのうち　竹の鼻　たいもん　古屋　ふるやおく	
大庭	真庭市	三世七原	竹の下　古屋敷　竹の上	
大庭	真庭市	山久世	堀切　土居の上　土居ノ前　荒堀　的場　城ヶ段	76大壇城跡
大庭	真庭市	久世	陣屋敷　土居　土居田	78大寺畑城跡・79陣山城跡・80小寺畑城跡・81羽庭城跡・87上ヶ市遺跡
大庭	真庭市	中島	土井	
大庭	真庭市	鍋屋	縄手	
大庭	真庭市	三阪	古屋敷　常城　竹ノ内	77茶臼山城・80小寺畑城跡・82砥石山城跡
大庭	真庭市	目木	前田	82砥石山城跡・89目木構跡
大庭	真庭市	樫東	一ノ丸　下射場　古屋敷　三ノ丸　射場の詰　射場詰　上射場　城戸口　城山　城山谷　城平　前田　的場　土居田　縄手　二ノ丸	83神上城跡・86城山城跡
大庭	真庭市	余野下	的場　的場ノ向	84二ツ山城跡・85高山城跡
大庭	真庭市	余野上	古屋　古屋尻　古屋敷　土居	85高山城跡
大庭	真庭市	上河内	城山　土井ノ内　古屋敷　土居　土居奥　土居ノ下　マエダ　馬場　明前田	85高山城跡・90持家城跡・190岩屋城陣城群跡
大庭	真庭市	大庭	内構　土居	88篠向城跡
大庭	真庭市	平松	前田	88篠向城跡
大庭	真庭市	野川	門田　竹ノ花	
大庭	真庭市	古見	土居　前田	88篠向城跡・91鳥越山城跡
大庭	真庭市	下河内	古屋敷　古屋敷上ミ　縄手　古屋敷　城ヶ谷　竹ノ下　土井谷	92名称未定・95高山城跡・97土器尾城跡
大庭	真庭市	中河内	前田　土井　古屋舗　弓場　前田道跨　竹ノ下　古屋舗　竹ノ内　竹ノ花	93田楽城跡
大庭	真庭市	田原	古屋ノ段　前田	91鳥越山城跡
大庭	真庭市	西原	土居原　市場	
大庭	真庭市	赤野	竹ノ下　要害　古城山　城山	94赤野遺跡・96逆巻城跡
西西条	鏡野町	富仲間	段の口　屋敷　へらやしき　岡の段　古やしき　鳴ヶ市　竹の口　猪の子ヶ市　土居山	
西西条	鏡野町	富東谷	畑ヶ市　柿ヶ市　馬場高下　馬場　馬場渡　馬場の下　東ヶ市　寺ヶ市　尺免　久保通り　井上免	108岡の虻城跡・110ビクニガ城跡
西西条	鏡野町	富西谷	鍛冶屋　神子免　段ノ下　かはらけ免　地免　九文田　殿屋敷　トウ免　若市免　的場　大久保田　ノット免　屋敷　大段　城山　城山ノ下　岡ノ段　櫻ヶ市　大久保田　竹カハナ　谷ヶ市　的場　土樋の上　土樋の下　久保峪　仲ヶ市　中ヶ河内　城の上　藤城　段の峪　城屋敷　堀田　段の下　段　殿野山　松の段　竹の下　竹の上	108岡の虻城跡・109城山・110ビクニガ城跡
西西条	鏡野町	馬場	市場尻り　門所田　城ノ前　広戸　築地　城山　市場　馬場　殿ノ丸　大将軍井手口　高城　城ノ段　的場　ヲ前ガ市　前田　開キ　ヒガンデン　竹ノハナ　井戸ノ段　公門山　久田場　小カジ　古ヤ谷　桐ノ段　矢倉	119小田草城跡・120城山城跡
西西条	鏡野町	入	カケ上リ　古屋敷　山ノ下　久谷　段　久塚原　久三田　屋敷田　宮山段　旦ノ鼻　金突免　墓ノ段	121岩棚構跡
西西条	鏡野町	山城	要害　池ノ段　加藤丸　竹ノ段　官兵衛丸　要害坂　二ノ丸　城山　大段ノ鼻　口ノ段　築峪　久そ岩谷　土居ノ内　土居ノ下　市場　久保田　前田　屋敷　薬師ノ段　場々口　見返シ　大蔵	122葛下城跡
西西条	鏡野町	中谷	前田　古ヤ　ダン　城塚　苗字ヶ市　塘原　金堀　大久保　矢櫓　ズリガ段　仙ノ下　横山下モ　鼻戸　上馬場　杉ノ段　古見ヶ段　大門原　下ガ市　竹ノハナ　段ノ下　大段　堀田　岡ヶ市　ヤシキ　楮ノ段　竹ガ峪　奥ヶ市　助ヶ市　大門　前田ノ平　庄田　大倉　竹ノ鼻　小谷　柚ノ木ノ段　釜ヶ段　大段　鎮守ノ段　近衛殿	122葛下城跡
西西条	鏡野町	貞永寺	屋敷　段畑　タキノ段　前田藪根　堀ノ内　竹ノ下　マトバ　ミノテ　熊ノ面　城山　金付免　垣之内　古屋敷　倉ヶ市　ナツメガ市　実丸　行免　久保田　カジヤ　的場	123春日城跡
西西条	鏡野町	土居	屋敷　御戸開キ　掛上リ　土井河原　公保田　馬場田　土井屺　馬場土井　地殿　前田　古屋敷　犬城　免田　馬場　岡ノ段　荘境　要田　上要田　下要田　欠上り　屋敷前　開キ　堀上ケ　カジノメン　土居　雁股　地頭屋敷	124犬城跡
西西条	鏡野町	高山	カジヤ林　槙木山下　湯之段　竹之下　屋敷田　ウルフメン　大蔵　奥大蔵　免谷　久☒田　久満田　大蔵道下　免田　上殿　道城　上道城　宮ノダン　城ヶ端　城ヶ谷　城山　屋舗　前田　庄田　コヤガ谷	125小田城跡・126キリゴ谷城山城跡
西西条	鏡野町	真加部	久保前　大城子　久保　領家　前田　下ケ市　構　久蔵畝　竹ノ下　構後口　構ノ前　上ケ段　市場　犬馬場　竹ノ鼻　小屋場　堀り　古屋	127鴨津の構跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
西西条	鏡野町	和田	久保　ヤシキ　楼ノ元　小門口　屋敷田　ツキ山　古屋敷　鼻戸　川久保ノ内　嫁縄手　嫁縄手ノ上　ダケ　竹ノ下　竹辺　大シメン	
西西条	鏡野町	竹田	築山　古屋敷　川久保　ツキ場　前田　屋敷田　表屋敷　政所　屋敷　久保田　斉藤丸　酒迎谷	128大田和城跡・竹田遺跡・竹田古墳群
西西条	鏡野町	瀬戸	ヤシキ　鐘鋳谷　竹田境　掛上り　門前　門前茶畑　佃　久保田　前田　久蔵田　古屋敷　土居境　畷添	128大田和城跡・竹田遺跡・竹田古墳群
西西条	鏡野町	円宗寺	掛ケ上リ　横城　沖前田　構　御所清水　竹田東　ドフデン　山城田　舟ガ免　政所　小竹　切レ戸　沖屋敷　虹ヶ池　祖母田　政所	129沖構跡
西西条	鏡野町	宗枝	市場　堀上　古屋敷　乱塔場　美濃ヶ市　掛上	131古川城跡
西西条	鏡野町	布原	徳竹上へ　徳竹　屋敷　石塔之段　兵ノ山　竹畝	
西西条	鏡野町	吉原	屋敷　兵ノ山　唐戸元　上久保　古屋敷　屋敷前　カケ上り　下久保　伝中久保　吉原縄手　下屋敷　堀切	
西西条	鏡野町	小座	楮ヶ段　古ヤシキ　墓ノ段　縄手下　土居ノ毗　川久保　前田　岩ヶ段　堀切レ　矢倉道免　縄手　西道免　久保屋敷	
西西条	鏡野町	上森原	久保田　ツク田　公文マエ　古やしき　前田　榎段　家ノ門　天神馬場　御供免　塚之段　屋敷　殿畑　屋敷上　竹ノ辺リ　竹ノ下　上犬丸　犬丸　下犬丸　桐ヶ段	
西西条	鏡野町	下森原	土居之内　関田　矢嶋　久保田　カジ屋敷　屋敷東　前田	
西西条	鏡野町	塚谷	土居之内　山下　矢谷　関屋　馬場村境　久谷　前田　屋シキ　古ヤシキ　畷　本ヤシキ　勝負峪　竹ノ内向	
西西条	鏡野町	河本	久保田　屋屋敷　前田籔ノ鼻　山ノ下　新開　鎌ノ庄　土居ノ内　堀坂　勝負峪	
西西条	鏡野町	原	久保田　犬飼免　矢萩田　屋敷　掛ケ上リ　クグリキド　竹中　免田　門田　山城分　前田　畷添　閏免　古屋敷　懸ケ上リ　庄田　竹ノ鼻　唐戸ノ元　土居ノ鼻　堂ノ段	
西西条	鏡野町	薪森原	城ノ下　勝負田　目崎ノ久保　蔵ヤシキ　的場　庄田　竹ノイダ　神子免　掛ケ上リ　堂免　キセカ市　屋敷　目々コ谷　前田　油免　西山垣ノ本　前堀リ下　堂ヶ市	
西西条	鏡野町	下原	城ノ西　城ノ谷　屋敷後　正境　土居根　梶田　屋敷　城山麓　横竹　構ノ前　的場　土居内　堀　構ノ内　構　屋敷下　竹峪　構ノ脇　南久保　竹ノ端　古屋敷　狐垣　前田　久保田　屋敷下　大久保田　開峪	130目崎城跡・137下原構跡
西西条	鏡野町	寺元	段　大久保　竹田境　ハデ場　馬場　城ヶ谷　墓之段　城山　城ヶ谷　山ノ下	
西西条	鏡野町	古川	又十郎開　杉縄手大道下　堀廻り　久保田　掛上り　上山下　土居前　古屋敷　金付免　蔵敷　前田　因幡殿　カジダ　大開　成段	132因幡殿
西西条	鏡野町	大	萩の段　門下　谷ヶ市　段　三久保田　古屋シキ　庄田　段はな　先の段　大段	
西西条	鏡野町	楠	山下　楠屋敷　前田　屋敷　段　段畑　木戸ノ上　谷ヶ市　古屋敷屋敷下　屋敷前　さいの屋敷　久保田　大段ノ上	
西西条	津山市	院庄	構　中構　御殿	135院庄構城跡
西西条	津山市	二宮	城山	136美和山城
西北条	鏡野町	越畑	両免屋敷　八蔵開　ホリ田　大名竹　前田　満久保　縄手下タ　やしき上　北ヤシキ　屋敷　馬乗石　段林　段ノ上　段沢ノ下　段沢ノ北　坊ケ市　西坊ケ市　屋敷上へ沢　馬場　ケザコ　堀切西ビラ　堀り切レ口　坊ヶ市　帯石	
西北条	鏡野町	百谷	矢谷　上ヶ市　奥ケ市　段土地　竹畑　鍛冶屋ヶ市　マトバ　屋敷峪下タ　荒堀　ナウテ　下ヶ市　久保畑　原殿　ヤシキ　荒神下タ　墓ノ段　スノコ段　前田　小段　家奥満門　荒堀　竹ノ下　竹ノ谷　庄滝橋　元屋敷　久保　十蔵　段ノ高下	
西北条	鏡野町	岩屋	垣ノ内　門口　下ノ段　上ヶ市　屋敷　構峪　柿ノ段　竹ノ向赤峪　荒堀　屋敷廻リ　前田　大段　堂免　大屋敷　ナワテノ下	138さんこう城跡
西北条	鏡野町	真経	城山　連ヶ市　金開　久安田　ク田　屋敷　梨ノ木段　上ヶ市　谷社ヶ市　屋敷ノ段　縄手上　場ヶ市　垣ノ内	139相坂城跡
西北条	鏡野町	大町	竹ノ下　屋敷上　大段　堀切上　岡ノ段　屋敷廻リ　上ノ段　屋敷古跡　鍛治田　北縄手　宮ヶ市　的場　平段　段　段ノ尻リ　屋敷前　下ノ段　門口　森ヶ市　大倉　門田	
西北条	鏡野町	寺和田	竹ノ下　馬場尻　まへ田　屋敷　さ河免田　古屋敷　柿ノ内　唐戸ノ元　古戦場　屋敷藪辺り　縄手	140日上山城跡・141桝形城跡
西北条	鏡野町	香々美	土居ノ下　門前　堀ノ内　公保田　屋敷　土居ノ後　舛形　門前井手北　唐戸口　カジ屋敷　大師免　竹添　古屋敷　構ノ下　久保田　土居ノ下　布原井手口　竹貞井手西　カジ田　行司免　大縄手　西戸辺　観音免　山市場　築地　馬場ノ内　構之内　犬丸　市場寺東　山市場	141桝形城跡・145山名房安居館跡
西北条	鏡野町	市場	クダ田　久七屋敷　古市場　市場　築地　馬場ノ内　かまへの内　久保田	
西北条	鏡野町	公保田	観音免　前田　下前田　着倒　馬場屋敷　屋敷	
西北条	鏡野町	沢田	乗留　乗久　西加市　竹ノ下加市　竹ノ下　加市	
西北条	津山市	東田辺	城山	142東田辺城山城跡・143黒沢山城跡・144東田辺谷上城跡
西北条	鏡野町	沖	水久　薬師免　堀　王子免　北丁田縄手　前田　丁田縄手　堀越し　竹ノ下　公保田　古屋敷　屋敷　林之段	148天王木土塁跡・149茶臼山城跡
西北条	津山市	小田中	西新座　屋敷	
西北条	津山市	山下	鶴山	152津山城跡
東北条	津山市	下横野	城山	182池上城跡
東南条	津山市	吹屋町	南新座	
東南条	津山市	材木町	南馬場前屋敷	
東南条	津山市	上之町	弓之町　宮川屋敷	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
東南条	津山市	西今町	雑賀町	
東南条	津山市	安岡町	新屋敷	
東南条	津山市	中之町	東鉄砲町	
東南条	津山市	京町	使者屋敷	
東南条	津山市	宮脇町	竹の馬場	
東南条	津山市	籾保	城山	
東南条	津山市	高野本郷	城山	186高野城跡
久米北条	津山市	宮部上	城ヶ岨　鍛治屋川　竹内　道城　古見岨　大門　才ノ段　中ノ段　小屋ヶ谷　構黒	187高味城跡・188城山城跡・190岩屋城陣城群跡・193宮ノ上城跡
久米北条	津山市	（岩屋城）	本丸　二の丸　三の丸　馬場　鐘の段	189岩屋城跡
久米北条	津山市	中北上	勝負谷　敵見要害	189岩屋城跡・190岩屋城陣城群跡・191一備谷砦跡・192八幡埒城跡・197磯尾城跡・202年末城跡
久米北条	津山市	坪井上	小屋谷　滝之段　寄合場　取首　屋敷	194茶臼山城跡・195姿山砦跡・198加冶子山城跡
久米北条	津山市	坪井下	城山	196亀山城跡
久米北条	津山市	久米川南	土居ノ下　城埒下　矢ヶ市　城峪上　市場　外開キ	
久米北条	美咲町	北	荒堀	199萩丸城跡・213高山城跡
久米北条	美咲町	中	城目南　城　別当　的場　城西　城東　城埒　荒堀川東　古屋敷	200城小屋跡・201横岩城跡
久米北条	津山市	宮部下	鼓打　木戸口　堀切　殿ヶ市	202年末城跡
久米北条	津山市	里公文上	城平　柳之久保	203円宗寺城跡
久米北条	津山市	大字不明	大鎗　倉打　中前田　久保ノ上	
久米北条	津山市	神代	構　構前　家老津　市場　古丸山　後矢田　矢田　神子免　大蔵　家老谷	204鍋山遺跡・205構城跡
久米北条	津山市	一色	小板屋　長縄手　竹平　神子河内	
久米北条	津山市	南方中	前田　見取場　久保田　城山　乗行　馬場下　大久保　山田登り立	
久米北条	津山市	領家	風呂免　竹ヶ花	130目崎城跡
久米北条	津山市	宮尾	前田　古屋敷　土居西　大門　蔵入	
久米北条	津山市	里公文	彦六屋敷　彦六田	206平福寺城跡・208八幡長者屋敷跡
久米北条	津山市	戸脇	鍛治屋谷　カワデン　小久保　西小久保　兵庫土居　分所	209江原兵庫助別墅跡・210戸脇土塁跡
久米北条	美咲町	錦織	堀切	207稲荷山城跡・211天神山城跡・243嵯峨山城跡
久米北条	津山市	油木上	カジヤ　梶屋向　雨乞場　大曲り　奥之庄　的場前	
久米北条	津山市	油木北	竹ノ下安京　前田　殿田　宮免　場市　久保田	213高山城跡
久米北条	美咲町	栃原	城山　城ノ谷	212一之瀬城跡・218鳥首城跡
久米北条	美咲町	打穴中	縄手	214鬼山城跡
久米北条	美咲町	南	城市向　城市　城市上	
久米北条	美咲町	里	城山　城谷　堀田　門口　荒堀　鐘鋳場	215江原城跡・216丸山城跡
久米北条	美咲町	西垪和	城之尾　堀切　馬場　縄手元	
久米北条	美咲町	東垪和	馬場	217三宮城跡
久米北条	美咲町	和田北	射場岨	219金地城跡
久米北条	美咲町	打穴西	城谷　馬場尻　大門　城山　土居　場々久保	221細田城跡・222天神山城跡
久米北条	美咲町	打穴北	古戦場　城ノ尾	220城山城跡・227杉城跡・228城山城跡
久米北条	美咲町	打穴上	荒堀り　金堀　城の平　堀り	227杉城跡・228城山城跡・229構跡・230八幡山城跡・232植松城跡・233鳥越山城跡
久米北条	美咲町	打穴里	城中屋敷　城屋敷	231青木城跡・233鳥越山城跡
久米北条	美咲町	大垪和東	土居　場々	
久米北条	美咲町	大垪和西	堀ノ下	234茶臼山城跡
久米北条	美咲町	境	城根　城尾　城高下　城山　高城上　馬場田	235高土城跡・236城能城跡
久米北条	美咲町	角石祖母	古丸場　城ノ上　新殿	237三角城跡
久米北条	美咲町	中垪和	城落	
久米北条	美咲町	上口	荒堀　縄手　金堀田　的場	
久米北条	美咲町	小山	古屋敷　馬場	
久米北条	岡山市	建部町和田南	尼子場　舟堀　堀　流堀田　ホリ畑　堀田尻リ　古屋敷　高城	238石丸屋敷跡・239寄城跡・240高城跡
久米北条	岡山市	建部町角石畝	馬場　天守後口　天守　天守高下　天守前	
久米北条	岡山市	建部町角石谷	上ミ城墓　下モ城墓　八城畝窪　馬場田　失城屋　古屋敷　城ノ根　高城三ノ丸　三ノ丸堀切　高ノ城　兼尾城ヶ岨	240高城跡・241蕨尾城跡・242鶴田城跡
久米北条	岡山市	建部町鶴田	シロヤマ　古屋敷　城山　シロガタワ　城平　矢内田　下城平　ホリ　市場　古ヤシキ　ミノ口　堀切　開キ　岩戸	242鶴田城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
久米北条	岡山市	建部町三明寺	堀畑　的場　縄手　金堀平	264上殿城跡
久米北条	津山市	八社	古土居　土居　縄手渕　真弓後　丈見　尾成場	
久米北条	津山市	福田下	忍番　大段	
久米北条	津山市	桑上	大戸　掛上り	
久米北条	津山市	桑下	杁ノ久保　勝負山下　公文山谷　地免　カリギメン　ジダラメン	
久米南条	津山市	皿	城	246皿山城跡
久米南条	美咲町	原田	大屋敷　鍛冶屋　構　城け峪　城山　土井　長縄手　古屋敷　堀田	249是久山城跡・251大谷城跡・252構跡・254稲荷山城跡
久米南条	美咲町	西幸	土井ノ内　馬場	253城山城跡・254稲荷山城跡・256丸山城跡・257名称未定
久米南条	美咲町	新城	垣の内	255新城城跡
久米南条	美咲町	金堀	小縄手	
久米南条	美咲町	小原	古土居	
久米南条	久米南町	塩之内	古城	262樋の元城跡　263秋小屋城跡
久米南条	久米南町	中籾	殿ヶ市　弓場ノ屻　土井ノ内　馬場　中城　上ノ殿	264上殿城跡
久米南条	美咲町	頼元	築地	
久米南条	久米南町	南庄	城山	260大将軍城跡・261奥谷城跡
久米南条	美咲町	大戸下	土居　御喰殿　御伴殿　宮ノ馬場	269大戸山轟城跡
久米南条	美咲町	定宗	古屋敷	
久米南条	美咲町	高城	金堀　的場	
久米南条	美咲町	久木	土居	
久米南条	美咲町	小瀬	堀田　城ヶ山	270高城跡
久米南条	美咲町	栗子	樋ノ内	270高城跡
久米南条	美咲町	塚角	馬場荒神　的場　古屋敷　宮ノ馬場	
久米南条	美咲町	藤原	城ノ内　馬場	271藤原城跡
久米南条	久米南町	下籾	土井ノ内　縄手上　構	272竜王山城跡
久米南条	久米南町	別所	殿ヶ市　城ノ尾　堀切	
久米南条	岡山市	建部町川口	堀田　築地　大門口	274下風城跡
久米南条	岡山市	建部町下神目	古屋敷　大門口　城河内　門田　堀田　城ノ表　尾城　地殿口	275伏山城跡・276伊勢畑城跡
久米南条	久米南町	上籾	佃　竹ノ花　竹ノ上　竹ノ下　土井	
久米南条	岡山市	建部町豊楽寺	古縄手	
久米南条	岡山市	建部町福渡	古屋敷	
勝北	津山市	市場	土井ノ内　屋敷　前田　土井ノ後　縄手　古屋敷　土居前　神子免　上ヶ市　竹ヶ花　土居後　久保　門　門田　門戸脊　堀　大手　といの元　西久保　古ヤシキ　本丸　本丸西平　構　平助ヤシキ　築ヶ花　城山吹上　百町城山　与治郎ヶ市　まとば　勝負ヶ谷	282仲山城跡・286河原山城跡・287本丸城跡・288国司尾館跡・289吹山城跡・290名称未定
勝北	津山市	西下	段ノ向　段ノ下　岸河内　屋敷　竹原才　土居　上屋敷　堀川　西丸山　源蔵開　土居の内　西堀　東堀	291天王山
勝北	津山市	西中	城山　竹ノ下　竹カ口　中土居　尻河内	
勝北	津山市	西上	段　堀田　端戸　前田　京免　伊領免　下門所　影ヶ市　竹ノ下　柿畑　屋敷の上　上門所　金剛免　勝負谷　久保道尻　城山西　城山　志城　城首	282仲山城跡・285烏帽子形城跡
勝北	津山市	新野山形	割石　出立　西久保　梶屋　土居　馬場　角田　前田　竹ノ下　河内坂　殿上　段　柿屻　上梶屋　クラツケ　堀ノ上　向屋敷	282仲山城跡
勝北	津山市	奥津川	前田	282仲山城跡・294爪ヶ城跡
勝北	津山市	上村	久保田　惣免田　堀リ　土居　前田　古屋敷　上屋敷　郷屋敷　矢倉免　前田分レ　大丸	
勝北	津山市	中村	スノコ河内　土居根　前屋敷　前田　屋シキ東　ヤシキ前　東門　堂ヶ市　正面ナワテ　佃田　トヲカ市　西前田　中前田　堀　大土居　与市ヶ土居　本学屋敷　大門　城山岡　間所免　屋敷西　元ヤシキ　チンジヨウ免	292金森城跡
勝北	津山市	大吉	水久保　田井ヶ市　栄吉前田　屋敷東　国司久保畑ケ　ヤシキ下　鳥居ノ久保山神　前田　門田　大ヶ市　川久保下　花ヶ市　西久保　的場　高免　河原川久保　後ヶ市　寺ヶ市　松ノ段　鐘撞堂　段ノナル　開キ	293矢櫃城跡・294爪ヶ城跡
勝北	津山市	大岩	屋敷東　屋敷下　久保田　林野堀田　縄手　門田　屋敷西　門口　端戸　ハナト窪　小丸山　大久保　屋敷後　門下　新屋敷　神子免　前田　土居　上洛作蔵開キ　屋敷前	288国司尾館跡・294爪ヶ城跡
勝北	津山市	杉宮	土居根　築地　堂ヶ市　土井前　東堀　北堀　土井内　南堀　前田　屋敷　上之段　馬出シ　屋敷後　間所免　京免　梶免	
勝北	津山市	大字不明	保頭土居	
勝北	奈義町	滝本	門殿　土井ノ内　土井　土居　西ノ土井　的場　小縄手　堀切藤三畑　垣ノ内　古屋敷　堀ノ内　門口	299今宮城跡
勝北	奈義町	上町川	中土居　古屋敷　荒堀　土居前　古戦　大築地	
勝北	奈義町	荒内西	囲ノ内　馬場ノ上　市場　中土井　殿畑ヶ	
勝北	奈義町	中島西	馬場ノ下　門田　城ノ内　城大町　堀ノ上　古屋敷　合戦場　馬場ノ上	310吉正城跡
勝北	奈義町	中島東	城ノ前　柳縄手　前古屋敷　ビクニ城	311有元城跡
勝北	美作市	右手	土居ノ内　木戸ノ元　狸ヶ城	303右手城跡
勝北	美作市	梶並	荒堀	
勝北	美作市	楮	荒堀　城仙　荒堀東　荒堀西	
勝北	美作市	余野	馬場井　城の段	312余野山屋敷跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
勝北	美作市	久賀	土居畑　城山	313長畑構跡・359小房城跡
勝北	美作市	東谷下	城ノ尾　土居ノ内　上ノ土居	314富坂屋敷跡
勝北	津山市	上野田	古土居　構屋敷　市場　今土井　屋敷　中土井　前田　墓ノ段　入免　地免河原　車場　加免田　藪土井　作右衛門開　家門田　殿田　油免	315野田構跡
勝北	津山市	原	土居の内　工門前　古屋敷　ツク田　大築地　墓ノ段　上ヶ市	
勝北	津山市	安井	土居　竹ノ下　築地　前田　薬師免　兵ヶ端　長久保　開キ　大縄手　久保峪	
勝北	津山市	坂上	中土居　屋敷　前田　久保　川久保　柿ノ木　地免　堂屋敷	
勝北	津山市	下野田	構　屋敷　久保　前田　市場　古屋敷　寺屋敷　矢倉　中土居　大日免	316野田城跡
勝北	津山市	新野東	構　中河内　久保田　久本　梶屋川内　西工門　古土居　礫打場　三俵開	
勝北	美作市	大町	構	332別所城跡・333星尾城跡・334比丘尼城跡
勝北	美作市	真加部	城ノ内　構　木戸	328上ノ山城跡・329大爺の構跡・330真加部構跡
勝南	美作市	下大谷	城山　城山下　堀レ	345大谷城跡
勝南	美作市	豊国原	城蔵　夫城迨　鳥井縄手　土居根　後堀　枡形　東門　前田堀　縄手添　堀　荒堀り	
勝南	美作市	中尾	城山	
勝南	美咲町	藤田上	城尾	348城の尾山城跡
勝南	勝央町	小矢田	城山	349小矢田城跡
勝南	美作市	明見	城山	350三星城跡
勝南	美作市	入田	三ノ丸　三ノ丸口　勝負谷	350三星城跡
勝南	美作市	北山	城山　城山本丸　本丸東　城山口　城ヶ花　城ヶハナ　馬場先　馬場前　堀　馬場谷　堀ノ間畝ネ	351尼ヶ城跡
勝南	美作市	下香山	構ノ山　荒手上	
勝南	美作市	吉	土居ノ内	
勝南	美作市	和田	中ノ土居　陣取バナ	352舞山城跡
勝南	美作市	湯郷	城る以　鐘付免　東門　かまへ　堀　土居ノ内　土居ノ下	
勝南	美作市	中山	小縄手　土居　門口屋敷　堀ノ内	
勝南	美作市	奥大谷	射場ノ屻　陣取久保　殿ヤシキ	
勝南	美作市	長内	土居ノ上　土居	
勝南	美作市	則平	古ヤシキ　大門　大門上エ	
勝南	美作市	岩見田	馬場	
勝南	美作市	安蘇	堀田　古屋敷	
勝南	美作市	城田	縄手淵	
勝南	美作市	英田青野	古屋鋪	
勝南	美作市	青木	門田　居屋敷	
勝南	美作市	北坂	古ヤシキ　ビクニヤシキ	
勝南	美作市	金原	土居根	
勝南	美作市	下山	古城山	356井内城跡
勝南	美咲町	百々	城谷　荒堀	354金室城跡
勝南	美咲町	周佐	樋ノ口	
勝南	美咲町	飯岡	縄手下　城山下　城山　城ヶ辻　城ヶ辻下　西荒手　荒手脇　縄手添　土居分　柵ノ手	355鷲山城跡
勝南	美咲町	高下	古屋敷中溝東	
勝南	美咲町	休石	金堀	
勝南	美咲町	上間	勝負谷	
勝南	美咲町	書副	殿畑ヶ	
吉野	西粟倉村	長尾	中土居　下土居	358佐淵城跡・360黒山城跡
吉野	西粟倉村	知社	城山	
吉野	美作市	東青野	宮土居	
吉野	美作市	太田	土居	
吉野	美作市	宗掛	城コシ　ヰ夕城	
吉野	美作市	古町	堀（堀ノ元　居屋敷　構　下タ堀　土手ノ内　土手ノ下　北門）　土肥ノ内　上エ土居　土居之内　尾崎（土肥ノ内　邸ノ上　屋敷ノ上　築出し城山口馬）　屋根木土居　百々（堀ノ元）	361会下城跡・362八幡山城跡・363小原山王山城跡
吉野	美作市	江ノ原	中土居　上ミ中土居　細土居	
吉野	美作市	中町	堀町ノ下　堀町ノ上ミ（古屋敷）　町ノ浦（堀添）	
吉野	美作市	川上	土居ノ尻　中土居　中土居上へ　土居　田中上ミ馬場（馬場　馬場ノ三辻北）　馬場ノ岡（土居　土居ノ内　土居ノ上へ　土居墓ノ上へ　馬場　土居ノ上）　馬場山田口（馬場岡　馬場ノ岡　馬場荒神ノ上へ　馬場荒神ノ脇　馬場荒神ノ下モ　馬場道ノ下タ）　三反田（土居ノ尻）　構へ（カマエ家ノ前　構エ北平　構へ墓ノ南　カマエ）　寺ウ子（城ノ段　寺ウ子城ノ段南）　森（森高城位置ノ上へ）　モリ田高城位春日田（高城位　高城位櫻ノ壇　高城位道ノ下タ　高城位道上へ　高城位北ヒラ　高城位ノ口　高城位山北ノ尾崎　高城位奥　高城位溝ノ上へ　城位北ヒラ中道ノ下タ　高城位北ノ窪）　岡（的場）　的場　中土居（古屋敷　中土居上へ）　木戸ヶ谷	364仁寿寺城跡・366寺坂城跡・368小淵城跡・369比丘尼ヶ城跡・379法天山城跡
吉野	美作市	滝	平木（城出口　城川ノ上エ）　土居田	364仁寿寺城跡・365政岡城城

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
吉野	美作市	下町	土居久保　土居溝上　土居坂　射場（城山東向　城山矢倉下タ　城山裾　上射場　射場茶下タ）　町頭（構エ）　堂ノ奥（構エ）	367竹山城跡
吉野	美作市	笹岡	久保田（堀　堀切　堀西）　坂久保（馬場毛　馬場畑）　森ヶ原（馬場毛　馬場畑）	367竹山城跡
吉野	美作市	下庄町	大塔（古屋敷）	
吉野	美作市	宮本	馬場	370比丘尼城跡・371伝宮本武蔵宅跡・372小山城跡
吉野	美作市	今岡	土居ノ上へ	
吉野	美作市	西町	横壇（籠馬場）　古屋敷　中土居　北田（荒堀）	
吉野	美作市	野形	西田（比丘尼ヶ城）　西高下（城ノ段　古屋敷ノ上エ　城ノ段義鏡山麓）	369比丘尼ヶ城跡
吉野	美作市	馬形	構平	373高畑城跡・374高山城跡
吉野	美作市	田殿	立縄　勝負迨　堀家　土居内　上ノ土居　鐘鋳場　馬場屋敷　勝負谷	376大将ヶ陣山城跡・384鞍掛城跡
吉野	美作市	桂坪	西田（城ノ出口）	378赤田城跡
吉野	美作市	赤田	土居之内　森迨（土居ノ内）　谷河内口（馬場高下）　谷河内奥（馬場高下）　馬場高下　上赤田（堀ノ元）　井ノ口上ミ（城山）	378赤田城跡
吉野	美作市	田井	河本二（縄手）　河本三（荒堀　縄手）　迨（荒堀）	
吉野	美作市	粟野	宮ノ上（門田）	
吉野	美作市	川戸	樋詰　粟原口（堀田ノ外　堀田ノ尻）　堀迨口	
吉野	美作市	立石	荒神ノ前（土居前）　屋田坂（荒堀道ノ上へ　荒堀リ）　小谷口（荒堀り　荒堀上へ　荒堀リ上　荒堀上ミ）	379法天山城跡
吉野	美作市	沢田	城ノ元	381比丘尼ヶ城跡・382横山城跡
吉野	美作市	壬生	福原（縄手添）　倉政（古屋敷　屋敷）　迨田（屋敷）南（屋敷）　城山	380壬生の構跡・381比丘尼ヶ城跡
吉野	美作市	五名	城の腰	382横山城跡
英田	美作市	楢原上	鋳物師谷	
英田	美作市	楢原中	渡縄手　鳥居縄手	384鞍掛城跡・385比丘尼城跡
英田	美作市	平福	高城　勝負谷　勝負谷頭　勝負谷尻　居屋敷　屋敷上エ	386妙見山城跡・391緑青山城跡
英田	美作市	楢原下	土居奥　堀尻　馬場尻	388鬢櫛山城跡
英田	美作市	朽木	比丘尼段　西ノ土居　城下タ　馬場田　古屋敷　馬場ヶ瀬　鐘鋳場	389林野城跡
英田	美作市	林野	城山　城下タ	389林野城跡
英田	美作市	猪臥	古屋敷　堀田　勝負畑久保	398矢櫃山城跡
英田	美作市	海内	堀田　古屋敷	
英田	美作市	友野	土居ノ内　大門　馬場瀬　馬場瀬東	390友野城跡
英田	美作市	平田	勝負谷	
英田	美作市	山口	土居ノ前　寺土居　御馬屋久保	392比丘ヶ城跡・399大虻城跡・400大畠城跡
英田	美作市	山外屋	城山下　大畠城山　城山　城山申開　堀キレ　堀切　古ヤシキ　殿奥　殿ノ前　戸樋ノ元　的場　堀レ内	400大畠城跡
英田	美作市	北原	堀切レ之元　構之上　谷尻構下タ	390友野城跡・398矢櫃城跡
英田	美作市	大原	助方縄手　古屋敷	399大虻城跡
英田	美作市	巨勢	古屋敷　土居　縄手　城連　門畑　宝殿　馬場　南殿	
英田	美作市	福本	古殿	
英田	美作市	井口	堂前荒堀	
英田	美作市	真神	土井　古屋敷	402神田山城跡
英田	美作市	岩辺	城山	
英田	美作市	柿ヶ原	城山	403尾越城跡
英田	美作市	中川	殿田	405高鉢城跡
英田	美作市	上山	荒堀　古屋敷　大門　樋迨　樋坂	405高鉢城跡
英田	美作市	横尾	山城口　城ノ腰　城ノカゲ　城ノ下　宮ノ馬場	406横尾城跡
英田	美作市	尾谷	宮ノ馬場	
英田	美作市	北	馬場田　古屋敷　殿河内	
英田	美作市	南	市場　土居	
英田	美作市	奥	市場	
英田	美作市	滝宮	宮ノ馬場　馬場　馬場谷	

第６章　総括

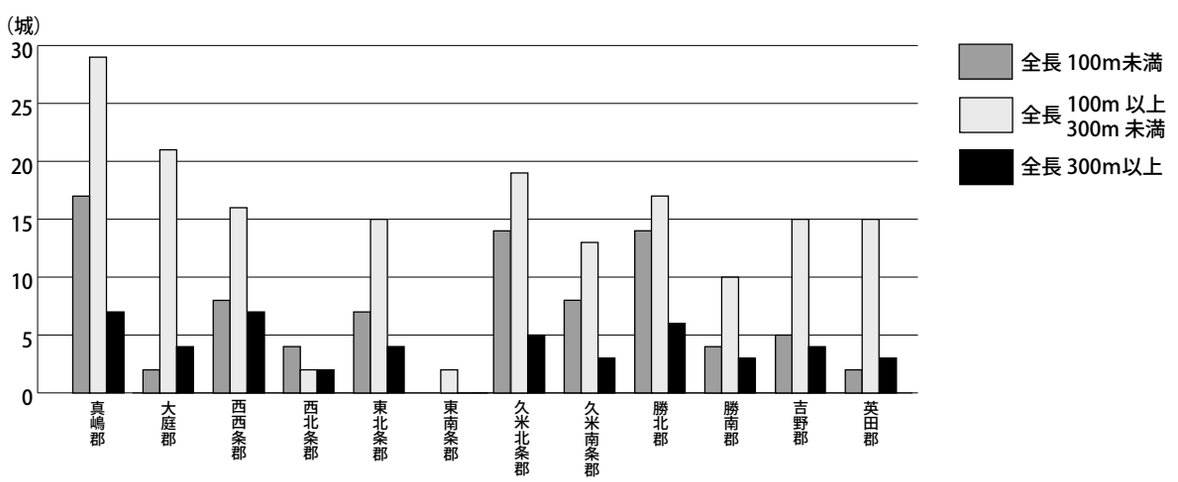
第１節　考古学から見た美作国の中世城館跡

美作国は岡山県の北東部に位置し、古くから山陽地域と山陰地域を結ぶ交通の要衝であった。そのため多くの外来勢力が進出してきては鎬を削り、最終的には備前を制した宇喜多氏と中国地方の雄毛利氏が、抗争を繰り広げた地域である。そのことを反映するかのように、当国には多くの城館が築かれ、また多くの先行研究があり縄張り図も公表されている(1)。

美作国にある城館の中で、国指定の史跡は134院庄館跡、152津山城跡の２か所で、県指定の史跡は、157矢筈城跡（158内構跡含む）、189岩屋城跡、371伝宮本武蔵宅跡の３か所である。また市町村指定は28か所を数えている。これらの指定を含め、今回の報告では406か所の城館を掲載しており、それらを立地・規模・構造などの面から分析する。

１　城館の規模・立地・現況について

○規模：城館の規模を、全長300ｍ以上、100ｍ以上300ｍ未満、100ｍ未満の３種類に分類した（第379図）。東南条郡以外は、各郡とも300ｍ以上が５城前後存在する。当国東部にある勝南郡・吉野郡・英田郡の３郡は、よく似た数値を示す。この地域は、戦国時代最末期の毛利氏対宇喜多氏による抗争が直接的には影響しなかった地域であり、山城のあり方が普遍的に現れた地域とも言える。西西条郡は300ｍ以上が多く、大庭郡は100ｍ以上300ｍ未満、久米北条郡・勝北郡は100ｍ未満、真嶋郡は全ての城館が多い。これらの地域は両氏の戦端が影響した地域であり、例えば真嶋郡・大庭郡は寺畑の戦いと宮山城・篠向城攻略戦、西西条郡は西屋城と沖構攻略戦、東北条郡と勝北郡は医王山城攻囲戦、久米北条郡と久米南条郡は岩屋城攻囲戦と高城攻略戦などが行われた。このことから美作国



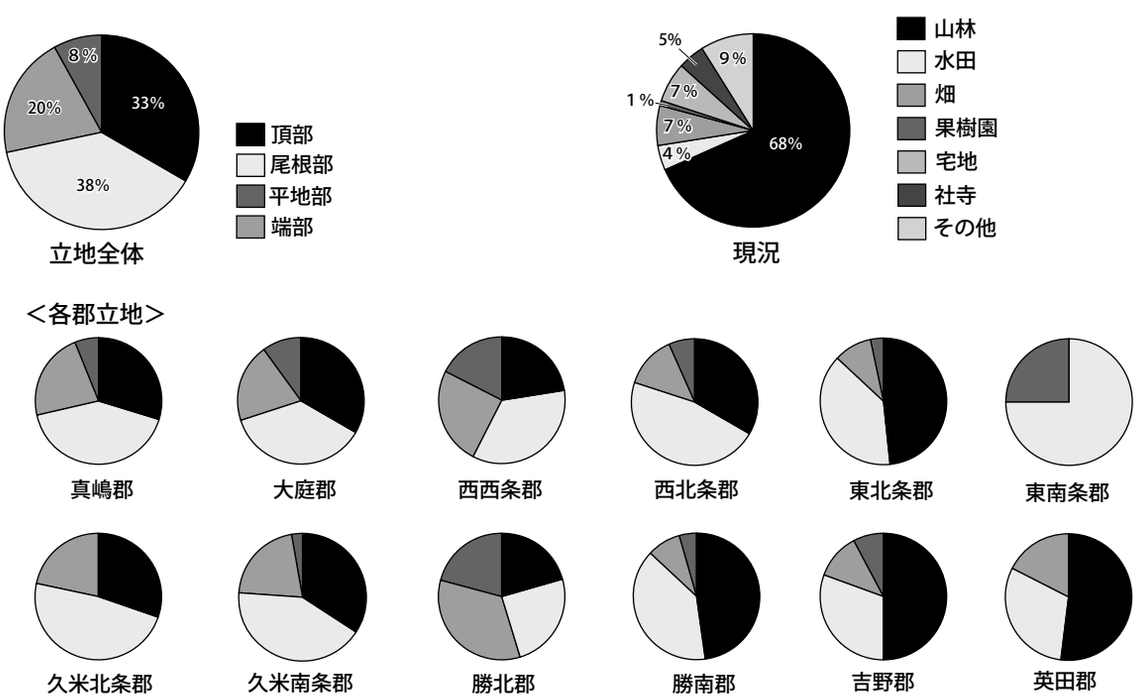
第379図　美作国における城館跡の規模（旧郡別）

の中世城館は、領域の 2/3 程が毛利氏と宇喜多氏との戦乱の影響が色濃く残ると推測される。

○**立地**：当国の城館を、第２章城館一覧表の立地欄で示した「頂部」「尾根部」「端部」「平地部」の４つに分類してみた。全体では、頂部 33％、尾根部 38％、端部 20％、平地部８％になる。頂部と尾根部を足した割合が７割を越えるが、若干尾根部に造られた山城が多い。これは当国に標高 1,000 mを越える中国山地が横断するなど比較的険しい山々が多く、そのため山城は山頂部よりもそこから平地部へ張り出した尾根筋を好んで占地したためであろう。このことは、山城が山頂部に築かれることが多い備前国などとは異なり、当国の地域性と言えるであろう。

真嶋郡・大庭郡・久米南条郡は、全体平均に近い数値で、頂部・尾根部が７割になる。これらは険しい山々が多い地域であることを物語っている。西西条郡・勝北郡は、端部と平地部の合計で５割を越える。両郡には比較的緩やかな平地部に存在し、そこに立地する城館が多いためであろう。東北条郡は大半が山間部であり、頂部と尾根部で９割近いの数値となっている。また険しい山々にも関わらず、頂部に立地する山城が多い。これは医王山城攻囲戦に伴う陣城の類いが、果敢に高い山を選んで築城したためであろう。東南条郡は、該当する城館が４つと少ない。現津山市街地の東半分を含んでいるため、平地部分に埋もれた城館があった可能性も考えられる。久米北条郡は、尾根部が５割近い数値となる。これは当郡を中心に行われた岩屋城攻囲戦やそれに伴う陣城の多くが、尾根筋を選んで築城しているためだと思われる。勝南郡・吉野郡・英田郡の３郡は、頂部の割合が尾根部より多い。この３郡は毛利氏対宇喜多氏の直接的な戦場ではなく、山頂に築かれた比較的古い時期の山城が、改変されずに残っている可能性を示している。

○**現況**：城館が立地している場所の現況を示したのが第 380 図（現況）である。山林が全体の 68％と圧倒的に多い。山城が山林に立地しているというのは、当たり前であるが、当国が元々山間部に所在しているため、備前国や備中国に比べてその数値が高くなっている。本国の地域性と言える。



第 380 図　美作国城館跡の立地と現況

○比高差を入れた規模：先に見た規模を、さらに 100 m単位で分け、比高差を入れて分析してみたい。さらに頂部に広い平坦面（長さ 30 ×幅 20 m程度・幅が 15 m前後でも長さが 40 ～ 50 mあるものは含める）がある城館を抽出すると表 9 になる。多くの城館は規模が 200 mまで、比高差 100 mまでに入る。この範囲には、広い平坦面をもつ城館が半分程度の割合である。規模 300 m以上になると城館の数が減るが、広い平坦面を有する城館の割合が高くなる。特に比高差 100 m以上で顕著な数字となっている。また規模が 201 ～ 300 mでも比高差 100 m未満では、広い平坦面をもつ城館の割合が高い。

これらの城館は、それぞれどのような機能があるのだろうか。いくつかある発掘調査例から考えてみる。標高 0 mの例では、134 院庄館跡と 135 院庄構城跡がある。方形区画に囲まれた広い敷地と比較的多くの遺物が出土している。標高 0 ～ 30 m以下の城館には、曲輪が大きいものが多い。発掘調査例としては、94 赤野遺跡と 321 茂平城があり、両者とも掘立柱建物が多数検出され、また多くの遺物が出土する。上記の 4 例は、屋敷地として評価されており、館になるであろう。

規模が 100 m未満で比高差 31 ～ 100 mの発掘調査例として、16 小坂向城山城跡と 20 藪迩山城跡がある。小坂向城山城跡は長方形主郭の 3 方を土塁で囲った城で、比較的広い平坦面を持つものの、そこから遺構は検出されず遺物もほとんど出土しない。藪迩山城跡は、小さな曲輪数面と鞍部に 2 条の堀切が配される。曲輪内には検出遺構がなく、遺物も少量である。規模が 100 m未満で比高差 101 ～ 200 m範囲での発掘調査例に、93 田楽城跡がある。この城は細長い主郭をもつが、建物などの遺構は検出されず、遺物もほとんど見つからなかった。これら 3 例は、恒常的に使われた城というより、見張り台や出城などの機能を考えられ、ここでは砦と呼ぶ。

規模が 100 ～ 200 mで比高差 30 ～ 100 m範囲の発掘調査例として、81 羽庭城がある（2）。20 面ほどの曲輪が連なる城であるが、曲輪上から柱穴が数基検出されたものの建物等は検出されなかった。遺物の出土も少ない。この城は、「寺畑の戦い」の時の陣として評価されている。この城の例から、規模が中型以上で大きな平坦面を持たない山城は、陣としての機能が考えられるのでないか。

規模が 400 mを越えた城での発掘調査例には、33 高田城跡と 88 篠向城跡がある。両者とも主郭

表 9　美作国城館跡の規模と比高差から見た数と割合

	0 ～ 100	101 ～ 200	201 ～ 300	301 ～ 400	400 以上
300 以上	5 0%	10(2) 20%	2 0%	4(3) 75%	2(2) 100%
	砦	砦	砦・陣	本城	本城
201 ～ 300	8(2) 25%	7(2) 29%	7(2) 29%		5(5) 100%
	砦	陣	陣・本城	本城	本城＜※＞
101 ～ 200	15(5) 33%	32(15) 47%	14(4) 29%	17(12) 71%	8(5) 63%
	砦＜※＞	陣	陣・本城	本城	本城＜※＞
31 ～ 100	41(18) 44%	59(27) 46%	15(11) 73%	5(3) 60%	2(1) 50%
	砦＜※＞	陣＜※＞	陣・本城	本城	本城
0 ～ 30	36(17) 47%	24(14) 58%	6(2) 33%	1(1) 100%	1(1) 100%
	館＜※＞	館＜※＞	館＜※＞	館	館

全長（m）

比高差（m）

・数値は城館数で、カッコ内は 30 × 20 m程の平坦地が存在する城館の数。下段%はその割合。
・陣と砦は規模の上での分類で、構造による差ではない。
・陣・本城とある場合、主郭平坦面が広いものを本城としている。
・全長 300 mを越えた場合でも、平坦地が狭い場合は陣と考える。

・＜※＞は発掘調査例あり

やその周辺の曲輪に広い平坦面があり、掘立柱建物や礎石建物が検出されている。また遺物も多数出土する。高田城跡などは、瓦が使用された建物が存在した可能性もあり、郡を越えて美作国を代表する拠点的な本城になると考えられる。規模が 201 ～ 400 mで、広い平坦面をもつ城館の発掘調査例は当国にはないが、備前国の保木城跡などの例から、やはり本城と考えていいのではないか。

上記の発掘調査例から、規模 200 m以上で広い平坦面を有するものは本城の機能を考える。それらを大きさで細分すると、400 m以上を超大型、300 m前後が大型、200 ～ 300 mを中･小型になる。また比高差 0 ～ 30 mで広い平坦面を有するものは、館と位置付けられよう。それ以外を小都氏の分類基準(3)も参考に、陣・砦(4)として位置付けた。次項で郡ごとに傾向を見ていきたい。

2　各郡の概要

＜真嶋郡＞　当郡は中国山地とそこから派生した高い山々が連なる地域であり、同山地から端を発しほぼ南北に流れる旭川とその支流によって形成された平地部に小地域が存在している。

南北に長い地形である当郡には、北から蒜山、勝山、月田、落合高屋・福田地区などの主要地域が存在する。ここに 3 粟住山城跡、33 高田城跡、54 月田城跡、56 宮山城跡といった本城タイプの山城が築かれる。特にその中でも高田城跡は一際規模が大きく、超大型規模になる当郡随一の山城である。「城山」「勝山」と呼ばれる 2 つの曲輪群からなり、代々三浦氏の本拠であったが、立地が良好過ぎるため、度々落城の負い目にあった。大型には、3 粟住山城跡・54 月田城跡・56 宮山城跡がある。粟住山城跡は蒜山地区にあり、頂部に 2 つの主郭が存在し、この両者を大きな堀切によって分断している。月田地区の月田城跡は、城域の幾か所にも堀切が存在し曲輪間を遮断している。落合高屋地区の宮山城跡は、連郭式の曲輪群からなる山城で、斜面上に竪堀群とU字形の堀切を配するなど防御性を高めている。また湯原湖周辺の地区に 12 釜戸原城跡、新庄村地区に 5 浦山城跡、美甘地区に 22 麓城跡、月田城跡の北向かいに 52 三堂坂城跡、落合佐引地区に 58 佐引城跡、といった本城タイプでも中・小規模の山城が築かれている。

陣・砦タイプの数は多い。麓城跡の南向かいには、3 城（23・24・25）が対峙する。粟住山城から湯原温泉方面（7 飯山城跡・ 9 ・10）と、鉄山川下流域から湯原温泉方面（15 ～ 21 など）には数多く築かれている。これらの大半は、大庭郡にある 75 湯山城跡攻略に関わる周辺紛争時の爪跡と考える。特に粟住山城跡と飯山城跡は、各曲輪間を大きな堀切によって遮断しており、構造が非常に似通る。この 2 城は、毛利氏が築いた城の可能性があるという(5)。月田川流域（27・28・35・36・49・51・53）と、33 高田城跡の周辺（29・32・34）などにも、陣・砦タイプが複数存在する。なお備中川流域には、広大な陣タイプ（59・62・63・65）が乱立している。これらは、毛利氏による 56 宮山城攻略のための陣城と指摘される(6)。66 都我風呂城跡は、毛利氏が備中飯山城とともに築いた城である（本巻第 4 章参照）。

真嶋郡

城	超大型	33高田城跡
	大型	3粟住山城跡・54月田城跡・56宮山城跡
	中・小型	5浦山城跡・12釜戸原城跡・22麓城跡・52三堂坂城跡・58佐引城跡
陣		2波作利城跡・7飯山城跡・17竹山旦城跡・18見明戸城山城跡・19目地城跡・21土居城跡・24陣山城跡・25山根城跡・29大料城跡・34天神山砦跡・40飯ノ山城跡・47金砕山城跡・49本山城跡・51会下山城跡・53鳶乃森城跡・57城山城跡・59注連山城跡・62石ヶ城跡・63真木ヶ城跡・65栗原城跡・66都我布呂城跡
砦		9向立石城跡・10立石城跡・11城ヶ山城跡・15要害山城跡・16小坂向城山城跡・20藪迫山城跡・23陣山城跡・27岩明山城跡・28臼水城跡・32陣山砦跡・35若代城跡・36則行城跡・39浅田城跡・45飯山城跡・48月沢城跡・60蜂ヶ城跡
館		1徳山城山城跡・8間谷城跡・30出羽屋敷跡・46惣七遺跡・55野田屋敷跡・61植木構跡

＜大庭郡＞　真庭市域でも旭川を境に、その東側にあたる地域である。当郡も山間部が多く、その中にある蒜山盆地・久世低地といった平地を中心に小地域が形成されている。

本城タイプの中でも、当郡を代表する超大型は、久世地区に存在する 88 篠向城跡である。この地区には、同城の北西側に大型山城タイプの 78 大寺畑城があり、「寺畑の戦い」の舞台となった。蒜山地区には真嶋郡粟住山城があるが、当郡にはその向かいに 68 日爪城跡が築かれる。多条の堀切と土塁によって城域を画した館タイプである。本城タイプでも中・小規模の山城は、目木川流域地区に 83 神上城跡、落合古見地区で真嶋郡宮山城の向かいにある 91 鳥越山城跡、落合追分地区に 90 持家城跡が存在する。陣・砦タイプでは、湯原温泉のある北側裏山の 75 湯山城跡がある。この城は宇喜多側の城として、旭川対岸にある真嶋郡の陣・砦タイプの城と攻防戦が繰り広げられた。大寺畑城跡と篠向城跡の間にも、77・79 陣山城跡・80 ～ 82 と数多く集中している。その中でも最大の山城は陣山城跡で、全長が約 1.8㎞もある。これらは、「寺畑の戦い」やその後の篠向城跡攻略戦の時に使用されたと考える。また河内川沿いには、真嶋郡内から続く陣・砦タイプが並ぶ（93・95 ～ 97）。これらも、宮山城跡、篠向城跡や久米北条郡の岩屋城跡を狙う毛利方の陣の可能性がある。西西条郡へ向かう筋にある 84 二ツ山城跡・85 高山城跡も、同様の機能が考えられる。

大庭郡

城	超大型	88篠向城跡
	大型	78大寺畑城跡
	中・小型	83神上城跡・90持家城跡・91鳥越山城跡
陣		75湯山城跡・77茶臼山城跡・79陣山城跡・80小寺畑城跡・81羽庭城跡・84二ツ山城跡・85高山城跡・95高山城跡・96逆巻城跡・97土器尾城跡
砦		71田井城跡・76大壇城跡・82砥石山城跡・86城山城跡・93田楽城跡
館		68日爪城跡・73下和城跡・94赤野遺跡

＜西西条郡＞　当郡も山間部であり、郡域のほぼ中央を南北方向に吉井川が流れ、その支流である羽出川・中谷川・香々美川などによって形成された平地部に小地域が存在している。また当郡の南側は、津山盆地の西端にあたるため、比較的広範囲に平地部が広がっている。平地部が多いためか、他の郡に比べて館タイプが多く存在する。守護所であったとされる 134 院庄館跡や、121・123・126・127・129・135 院庄構城跡・137 などで、これらはほとんど郡の南部に位置している。

本城タイプの中でも超大型の山城は、鏡野町城山・中谷地区にある 122 葛下城跡で、その全長は 800 mを越える。大型は、富村地区の 108 岡の屺城跡、鏡野町西屋地区の 105 西屋城跡、鏡野町馬場地区の 119 小田草城跡、鏡野町下原地区の 130 目崎城跡があり、それぞれ各主要地域の中核をなす。

陣・砦タイプは、奥津温泉周辺（99・100）、西屋城跡周辺（101・103・104・111）に集中する。特に後者は、西屋城跡を毛利方が攻略した時の陣城であろう。岡の屺城跡の周囲にも 109 や 110 のような砦タイプが存在し、院庄館跡と院庄構城跡の周辺（133・136）にもある。また 131 古川城跡は、129 沖構跡攻略時の陣城ではないか。

鏡野町久田地区にある、113 河内城跡・115 久田上原城跡・117 比丘尼ヶ城跡・118 城峪城跡は、発掘調査によって室町時代前半の城と判明している。麓にある 116 久田堀ノ内遺跡は館タイプである。

西西条郡（●は室町時代前半の可能性）

城	超大型	122葛下城跡
	大型	105西屋城跡・108岡の屺城跡・119小田草城跡・130目崎城跡
	中・小型	
陣		100余瀬ヶ城跡・101西浦城跡・111天狗山城跡・113河内城跡●・114東山城跡●・115久田上原城跡●・117比丘尼ヶ城跡●・118城峪城跡●・131古川城跡・133局笠山城跡
砦		99奥津城山城跡・103二山城跡・104小丸城跡・109城山・110ビクニガ城跡・120城山城跡・124犬城跡・125小田城跡・136美和山城跡
館		112河内構跡・116久田堀ノ内遺跡●・121岩棚構跡・123春日城跡・126キリゴ谷城山城跡・127鴨津の構跡・129沖構跡・134院庄館跡・135院庄構城跡・137下原構跡

＜西北条郡＞　当郡内中央をほぼ南北に吉井川支流である香々美川が流れ、また同じく支流の紫竹川と宮川流域に小地域が形成される。

本城タイプ超大型の城は、151 神楽尾城跡と 152 津山城跡の２つを数える。大型の本城は 141 桝形山城跡で、医王山城攻囲戦時の毛利氏の兵站基地である。中・小規模には、140 日上山城跡がある。陣・砦タイプは、桝形山城跡と神楽尾城跡の間に集中している（142・143・144・146・150）。これらは直接的ではないにせよ、医王山城攻囲戦に関連した城ではないか。148 天王木土塁跡と 149 茶臼山城跡は、129 沖構跡攻撃の陣城と考えている。

西北条郡

城	超大型	151神楽尾城跡・152津山城跡
	大型	141桝形城跡
	中・小型	140日上山城跡
陣		139相坂城跡・143黒沢山城跡・150神楽尾城関連遺構跡
砦		142東田辺城山城跡・144東田辺谷上城跡・146長良獄城跡・148天王木土塁跡・149茶臼山城跡
館		

＜東北条郡＞　大釈山山地（矢筈）・南加茂山地など、中国山地上の険しい山々が続く地域である。

本城タイプの中でも超大型の山城として、加茂地区の 157 矢筈城跡が存在する。当城は、麓からの比高差が約 470 ｍもある県内でも最も高い場所に築かれた本城タイプである。大型の本城タイプは、旧加茂町の街並みを見下ろす位置の 158 百々城跡と津山市堀坂地区にある 179 医王山城跡の２つがある。百々城跡・医王山城跡ともに連郭式の山城である。前者は土塁で囲う曲輪が存在し、後者からは瓦が出土している（7）。当郡には中小規模の城タイプが一つもない。代わりに多くの陣・砦タイプが存在する。百々城跡と矢筈城跡の周辺には、153・154・155 室尾城跡・159 佐良山城跡・161 などがある。これらは矢筈城跡をめぐる宇喜多氏と毛利方草苅氏の抗争の跡と考えられ、室尾城跡と佐良山城跡などでは抗戦の記録が伝わっている。医王山城周辺には、さらに多くの陣・砦タイプ（160・162 ～ 165・166 吉見仙砦跡・167・168 烏ヶ仙城跡・169 ～ 173・176 ～ 178・180）が築かれ、美作国でも最も多い分布を示している。これらの多くは、1579 ～ 1581 年にかけて毛利側と宇喜多側との間で行われた、医王山城攻囲戦に関連したものと考えられている。医王山城跡の背後（北側）の城が毛利側で、前面（南側）が宇喜多側と指摘されている（8）。この時の両者の抗争が激しかったと予想され、麓からの比高差が 400 ～ 500 ｍもある吉見仙砦跡・烏ヶ仙城跡などにも、竪堀群や土塁によって武装された防御性の高い山城が存在する。

＜東南条郡＞　現津山市街地の東側半分が該当し、郡域の大半が平地部である。当郡には本城となるような山城タイプは存在しない。186 高野城跡は、津山盆地東側に位置する館タイプで、勝南郡の河辺構跡などと同様の機能が考えられる。当郡は市街地が多いことから、本来もっと多くの館タイプが存在した可能性もある。185 山方高築遺跡・山方芦屋遺跡は、尾根の張り出し部分を土塁線で囲った山城である。その立地から、医王山城攻囲戦に関連した城であった可能性が考えられる。

東北条郡

城	超大型	157矢筈城跡
	大型	158百々城跡・179医王山城跡
	中・小型	
陣		155室尾城跡・161行重城跡・163松ヶ屻城跡・164笠松城跡・165利元城跡・167天狗寺城跡・170天神山城跡・171福田城跡・172懸縄山城跡・180鉢伏城跡
砦		153殿ノ山城跡・154祖星ヶ山磐跡・159佐良山城跡・160仙の城跡・162梶間山城跡・166吉見仙砦跡・168烏ヶ仙城跡・169塩屋ヶ城跡・173うらば城跡・175横田城跡・176藤田山城跡・177台山城跡・178別所城跡
館		182池上城跡

東南条郡

城	超大型	
	大型	
	中・小型	
陣		185山方高築遺跡・山方芦屋遺跡
砦		
館		186高野城跡

＜久米北条郡＞　当郡は吉備高原内にある森上山山地・垪和山地などが連なる地域である。吉井川の支流である久米川・倭文川・打穴川などによって形成された平地部ごとに小地域が存在する。

本城タイプの中でも超大型の山城は、189 岩屋城跡である。当城は久米北条郡のみならず、美作国を代表する山城として名高い。幾多の合戦譚があるが、現在の姿は 1584 年に行われた毛利方中村氏と宇喜多氏による攻囲戦時のものであろう。その時宇喜多側は、城の四周を全て囲む陣城群（190）を築いた。その状況は、先行研究によって明らかにされている（9）。

本城タイプ大型の山城は、津山市坪井地区にある 202 年末城跡、美咲町里地区にある 215 江原城跡、岡山市鶴田地区にある 242 鶴田城跡である。中・小規模の山城は、津山市里公文地区に 206 平福寺城跡、美咲町打穴地区に 214 鬼山城跡・221 細田城跡・222 天神山城跡、美咲町打穴上地区に 233 鳥越山城跡などがある。これらはそれぞれ交通の要衝である地域に築かれている。また平福寺城跡周辺に 205 や 208 など、館タイプも多い。

陣・砦タイプは、倭文川流域から平福寺城跡周辺を経て久米川流域の岩屋城にかけて（194 ～ 197・203・204・213）と、打穴川流域から 240 高城跡にかけて（212・219・220・223 ～ 225・227・228・230・234・235・237・239）に集中している。前者は岩屋城攻囲戦、後者は高城攻略戦の時に築かれた城も多かったと考える。

久米北条郡（●は室町時代前半の可能性）

城	超大型	189岩屋城跡
	大型	202年末城跡・215江原城跡・242鶴田城跡
	中・小型	206平福寺城跡・214鬼山城跡・221細田城跡・222天神山城跡・233鳥越山城跡
陣		188城山城跡・190岩屋城陣城群跡・195姿山砦跡・196亀山城跡・201横岩城跡・203円宗寺城跡・211天神山城跡●・213高山城跡・219金地城跡・225高陣城跡・227杉城跡・235高土城跡・236城能城跡●・240高城跡
砦		190岩屋城陣城群跡・193宮ノ上城跡・194茶臼山城跡・197磯尾城跡・200城小屋跡・204鍋山城跡・212一之瀬城跡・220城山城跡・223中の城城跡・224あたご山城跡・228城山城跡・230八幡山城跡・232植松城跡・234茶臼山城跡・237三角城跡・239寄城跡・241蕨尾城跡
館		205構城跡・208八幡長者屋敷跡・226両山寺城跡・229構跡

＜久米南条郡＞　吉備高原内にある神南備山山地、誕生寺丘陵、雨降山山地などの比較的低位な山々が連なる地域である。吉井川の支流である皿川、種川、誕生寺川、塩之内川、全間川などによって形成された平地部を中心に小地域が存在する。

本城タイプの超大型は、250 荒神山城跡である。当城は宇喜多方の花房氏の本拠であり、岡山城と同型の軒瓦が出土したと報告されている（10）。大型の山城は、郡内の南北に 1 城ずつが存在する。北は津山市佐良地区にある 246 皿山城跡、南は岡山市建部町地区にある 276 伊勢畑城跡である。伊勢畑城跡は、広く方形な主郭部分を持ち本城たる山城の様相を呈しているが、城域全周を土塁で囲うなど陣城的な要素も持ち合わせている。中・小型の山城は、美咲町 255 新城城跡・269 大戸山轟城跡、久米南町 267 安盛城跡・273 草木城跡・281 大植城跡などで、小地域に点々と存在している。

陣・砦タイプは、その分布が南北に分かれて存在する。北側は 243・244・247・249・251・253・254 で、南側は 264・266・272・275・278 ～ 280 などである。これらは全てではないが、前者が岩屋城攻囲戦、後者は高城攻略戦の影響と予想され、伊勢畑城跡は、高城攻略戦時の中心的な城であった可能性が考えられる。

久米南条郡

城	超大型	250荒神山城跡
	大型	246皿山城跡・276伊勢畑城跡
	中・小型	255新城城跡・267安盛城跡・269大戸山轟城跡・273草木城跡・274下風城跡・281大植城跡
陣		243嵯峨山城跡・244神南備山城跡・245小桁城跡・247丸山城跡・249是久山城跡・251大谷城跡・253城山城跡・275伏山城跡・280蓮華寺城跡
砦		254稲荷山城跡・264上殿城跡・266立畑城跡・270高城跡・272竜王山城跡・278沼元構跡・279大西構跡
館		

勝北郡

城	超大型	
	大型	301大別当城跡
	中・小型	285烏帽子形城跡・300菩提寺城跡・302鎌倉山城跡・334比丘尼城跡
陣		282仲山城跡・284堀坂城跡・289吹山城跡・291天王山・293矢櫃城跡・296名木ノ城跡・297細尾城跡・298八巻城跡・306加賀尾城跡・307丸山城跡・311有元城跡・318新宮城跡
砦		283黒目城跡・294爪ヶ城跡・305久常城跡・313長畑構跡・323大谷城跡・325小風呂山城跡
館		286河原山城跡・287本丸城跡・288国司尾館跡・299今宮城跡・309福光屋敷跡・317岩倉山城跡・319植月城跡・321茂平城跡・327鎌倉屋敷跡・328上ノ山城跡・333星尾城跡

勝南郡（●は室町時代前半の可能性）

城	超大型	350三星城跡
	大型	356井内城跡
	中・小型	353鴛淵山城跡・354金室城跡
陣		341神田城跡・344東吉田城跡・345大谷城跡・349小矢田城跡●・352舞山城跡・355鷲山城跡
砦		336河辺城跡・337瓜生原城跡・338横手城跡・339姥ヶ城跡・348城の尾山城跡・357勝間城跡
館		335河辺構跡・347岡城跡・351尼ヶ城跡

＜勝北郡＞　当郡の北側は那岐山・滝山・広戸仙など 1,000 mを越えた山塊が連なり、南側はこれら山塊から発する名義川・高取川・淀川・馬桑川などの流域に、比較的広範囲な平地部が続く。

当郡には、超大型の本城タイプは存在しない。あるいは館タイプの 286 河原山城・287 本丸城・288 国司尾館跡が、まとめてそういう存在であったのかもしれない。本城タイプ大型は、301 大別当城跡のみである。那岐山山塊の南側尾根筋に築かれた細長い連郭式の縄張りを持つ。中・小型は、津山市西上の 285 烏帽子形城跡、奈義町にある 300 菩提寺城跡、302 鎌倉山城跡で、これらは全て那岐山麓の南側に位置する。また美作市大町地区にある 334 比丘尼城跡も中・小型に該当する。当郡の南側平地部には、館タイプが多い。321 茂平城跡など、奈義町の国道 53 号線沿いと勝央町の北側に集中している（299・309・317・319・327・328・333）。

陣・砦タイプは、当郡の西側に多く、それらの多くは医王山城攻囲戦時の陣城と想定する（282 ～ 284・289・291 など）。318 新宮城跡は、『太平記』にその名が登場する。城域の東側半分は室町時代前半の様相を持っているが、西側半分は土塁で曲輪稜線を築くなど、戦国時代後半の様相である。医王山城攻囲戦の兵站地として使われた説がある (11)。奈義山麓の南側にも、陣・砦タイプが存在する（293・294・296 ～ 298）。これらは戦国時代後半よりも時期が遡る城かもしれない (12)。

＜勝南郡＞　当郡は、吉備高原内の柵原山地などを包括した比較的低位な山塊が続く地域で、吉井川と吉野川や滝川・和気川などによって形成された平地部に小地域が存在する。

本城タイプの超大型として、350 三星城跡が存在する。東部美作地域を代表する規模と構造を持ち、頂部付近は連郭式の構造であるが、北側尾根筋を下った曲輪群は平坦面端部を土塁で囲っている。この城の周辺には、本来あってしかるべき中・小型の本城タイプがほとんど見られない。

大型では、吉野川の下流域で三星城跡と備前大仙山城跡・茶臼山城跡との中間地点にある 356 井内城跡が存在する。津山市河辺地区にある 335 河辺構跡は、館タイプであるが本来は大型本城タイプと同様の役割があったと推測する。中・小型は、吉井川流域で美咲町羽仁地区に 353 鴛淵山城跡と行信・百々地区に 354 金室城跡がある。それより上流の 336 河辺城跡・337 瓜生原城跡・338 横手城跡などは、陣・砦タイプである。この辺りまで、医王山城攻囲戦時の影響を考えてもいいかもしれない。国道 179 号線沿いの平地部には、335 河辺構跡・347 岡城跡・351 尼ヶ城跡など館タイプが存在する。

＜吉野郡＞　当郡は、中国山地内の南大原山地・作東山地・滝山山地などの山塊が大半を占める地域で、郡域の中央を走る吉野川とその支流域に平地部が点在し、小地域を作り出している。

当郡には、本城タイプの超大型は存在しない。その代わりに小地域ごとに本城タイプ大型が築かれていおり、その数は美作国で一番多い。美作市大原地区に 363 小原山王山城跡と 367 竹山城跡、美作市小房地区に 359 小房城跡、美作市壬生地区に 381 比丘尼ヶ城跡がある。小原山王山城跡は、全周を堀切や竪堀で守っている美作東部でも希有な存在である。竹山城跡は、尾根前面方向にＵ寺形の堀切と竪堀を配している。小房城跡は、尾根鞍部の堀切が大きく、各曲輪群は方形を呈している。比丘尼ヶ城跡は、頂部から派生した尾根筋にも小さい曲輪を配するのが特徴的である。郡域の南側は、365・366・373 ～ 375・378・379・382 など中・小型本城と館タイプが小地域ごとに数多く点在し、当郡を特徴付けている。

吉野郡

城	超大型	
	大型	359小房城跡・363小原山王山城跡・367竹山城跡・381比丘尼ヶ城跡
	中・小型	373高畑城跡・374高山城跡・378赤田城跡・379法天山城跡・382横山城跡
陣		358佐淵城跡・361会下城跡・364仁寿寺城跡・368小淵城跡・369比丘尼ヶ城跡
砦		360黒山城跡・370比丘尼城跡・376大将ヶ陣山城跡・377殿屋敷跡
館		362八幡山城跡・365政岡城跡・366寺坂城跡・375淡相城跡

英田郡（●は室町時代前半の可能性）

城	超大型	389林野城跡
	大型	396越坂山城跡・399大屻城跡
	中・小型	387鳥越山城跡・397三倉田城跡
陣		384鞍掛城跡●・386妙見山城跡・388髻櫛山城跡・391緑青山城跡・392比丘ヶ城跡・395久保木城跡・398矢櫃山城跡・400大畠城跡・401鷹ノ巣城跡・402神田山城跡●・403尾越城跡・405高鉢城跡・406横尾城跡
砦		385比丘尼城跡
館		390友野城跡・394松田城跡・404福城跡

陣・砦タイプが少ないのは、戦国時代最末期の毛利氏対宇喜多氏の直接的な抗戦地でなかったためであろう。唯一存在する地域は大原地区で、小原山王山城跡と竹山城跡を取り巻くように立地する（358・360・361・364・368・370）。これらは小原山王山城跡の物々しい縄張りとも併せて、東隣の播磨国での抗争の影響が及んだ可能性も考えられる。

＜英田郡＞　吉野川と河会川の挟まれた英田山地の山塊が、郡域の大半を占める地域である。

本城タイプの超大型として 389 林野城跡があり、また規模が大きい館タイプとして 390 友野城跡がある。大型は、396 越坂山城跡と 399 大屻城跡があり、中・小型は 387 鳥越山城跡と 397 三倉田城である。これらの城は全て吉野川流域にあり、美作市江見地区より東へ向けた国道 179 号線沿いに位置している。また館タイプ 394 松田城跡と 404 福城跡は、江見地区から播磨国上月へ向けた筋に築かれている。このようにこの筋に主要城館が数多く造られており、当時から交通の要衝であったことが窺える。特に林野城跡と友野城跡の間は、最重要地点であったろう。陣・砦タイプも、やはりこの筋に集中している（386・388・391・392・395・398）。郡域の南側は英田山地などの山間地区にあたり、401 鷹ノ巣城跡・403 尾越城跡・405 高鉢城跡・406 横尾城跡など陣タイプが点在しているのみである。

美作市楢原地区にある 384 鞍懸城跡は、伝承などで室町時代前半に遡る可能性が指摘されている。402 神田山城跡もその可能性あるという (13)。

3　防御施設から見た美作国の山城

美作国では、各郡ともに本城タイプよりも陣・砦タイプが多いことが分かった。それでは防御施設から見た場合どうであろうか。堀切・竪堀・土塁の３つ遺構に注目したい。

○堀切　通常は尾根筋に築かれた山城の鞍部に配され、主郭など主要施設の背後を遮断し、城域を画する目的がある。鞍部を遮断するタイプは、室町時代前半にも見られ、山城防御の普遍的施設と言え

よう。このような堀切は、城タイプのみではなく、陣・砦タイプにも配された例がある。そのため今回は、その箇所以外に配された堀切に着目したいと思う。

・堀切Ａ：曲輪が続いている尾根上に存在し、各曲輪同士を断ち切るように配される。１城に複数配される例も多い。類例としては、54 月田城跡と７飯山城跡を挙げる。（※第２冊では堀切２類）

・堀切Ｂ：曲輪群に繋がる尾根筋を遮断するため斜面部分に配され、時にはＵ時形を呈する場合も多い。類例としては、141 桝形城跡と５浦山城跡を挙げる。（※第２冊では堀切３類）

この２種は、同時に鞍部にも堀切を持つ城館も多い。またＡは同時にＢを併せ持つ例（54 月田城跡など）が多々ある。これら両者を持つ城はＡに含めている。

○竪堀群：畝城に連続する竪堀 (14) を取り上げ、城のどの部分に配されるかで、２種類に分ける。

・竪堀群Ａ：山城背後側から側面部分にあって、鞍部の堀切に沿って配される。そのまま尾根筋前面まで廻るものも存在する。類例として 168 烏が仙城跡を挙げる。

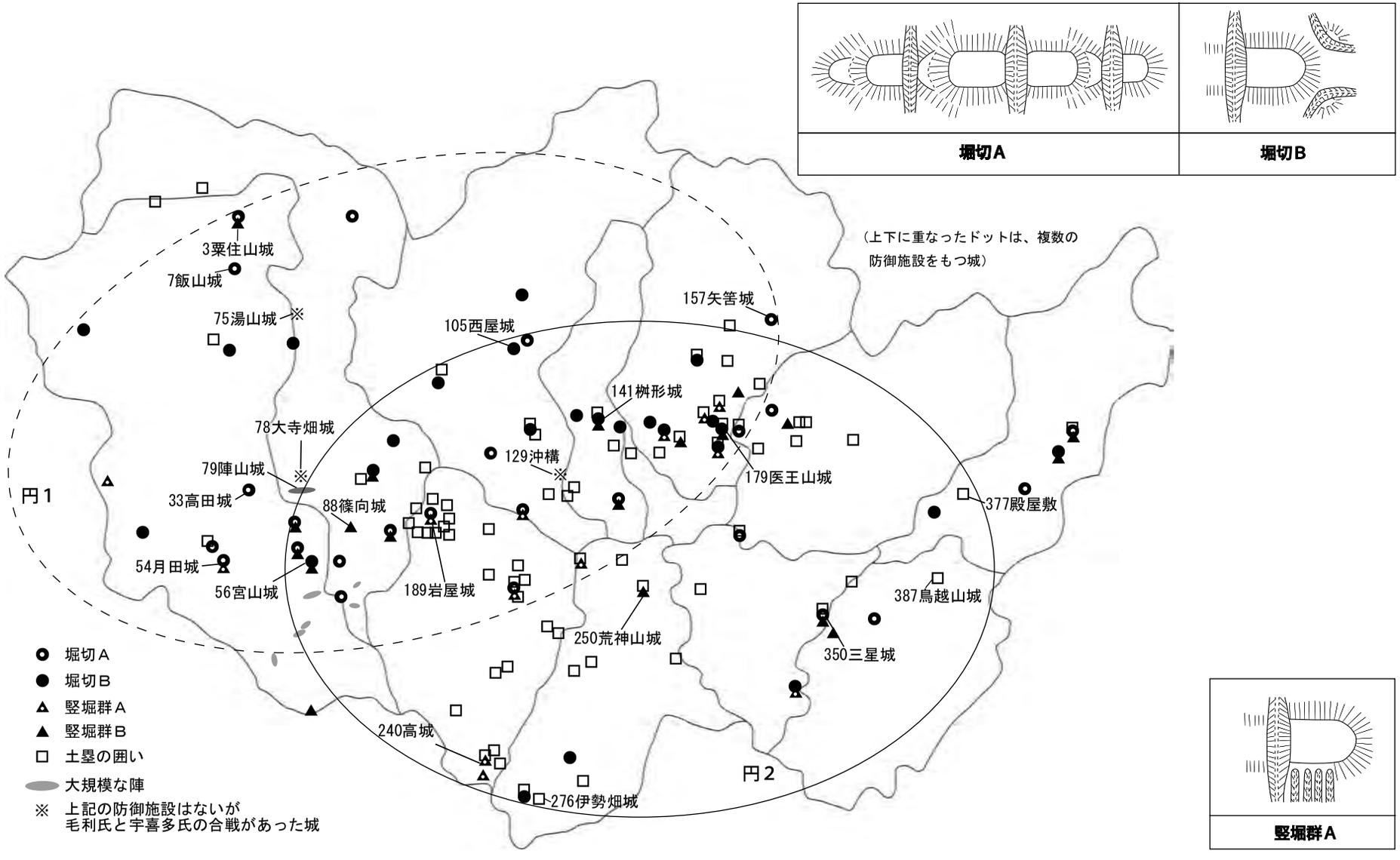
・竪堀群Ｂ：Ａ以外のものを全て含める。類例として 176 藤田山城跡を挙げるが、この城は尾根前面に対して放射状に竪堀を配している。

Ｂは仮想敵の前面側に配される場合が多い。本来的に言えば、こちらの方が最も効果的であろう。これに対しＡは城の背後側、つまり城の弱点部分を補強している。しかも連続性はＡの方が高い。そのためＡの方が、城の防御を丁寧に作り上げたと言えるのではないか。

○土塁：ここでは、どれか１つの曲輪に２辺以上の土塁が配されたものを取り上げる。（以下土塁囲いと仮称）。類例として 190 岩屋城跡陣城群の荒神の上砦と 276 伊勢畑城跡を挙げる。

Ａ・Ｂの堀切は、真嶋郡から東北条郡にかけて、美作国の中央から西側にかけて多い。この範囲は、1579 年～ 1584 年にかけて美作国に進出してきた毛利軍の侵略範囲と重なる。竪堀群Ａ・Ｂもそれに近い（第 381 図円１）。堀切Ａは、分布の中心が真嶋郡にあり美作国の西側に多い。Ｂはそれよりやや東側に多いと言える。これに対し土塁囲いは、当国の中央からやや南東側にかけて濃厚に分布する（第 381 図円２）。その中心付近に、宇喜多方花房氏の居城 250 荒神山城跡が存在し、西限は岩屋城周辺、東限は 377 殿屋敷跡・387 鳥越山城跡である。この範囲は、当時の美作国における宇喜多氏の実効支配と重なるのではないか。また２つの円が重なる箇所は、これらの防御施設が混在している地域であり、毛利と宇喜多が争った戦場が多く含まれている（医王山城攻囲戦＜ 1579 ～ 1581 年＞・沖構攻略戦＜ 1583 年＞・岩屋城攻略戦＜ 1581 年＞攻囲戦＜ 1584 年＞・大寺畑城攻略戦＜ 1580 年＞・篠向城・宮山城攻略戦＜ 1581 年＞）。毛利方は堀切と竪堀を強化したのに対し、宇喜多方は土塁を強化したと言えるであろう。

堀切Ａは、高田城・月田城といった文献資料に見る毛利の本軍が陣した場所の背後に多い。実際に陣として使った 79 陣山城跡などの最前線を、支援する城に多いのではないか。円の最も北側に位置する飯山城跡と粟住山城跡も、湯山城付近の戦いの兵站に使われた可能性が考えられる。これに対し堀切Ｂは、医王山城近辺に多い。この戦いは毛利本軍は参加せず、毛利系の国人層が守っていた。竪堀群でも特にＡは、２つの円が交わる箇所とその西側に多く存在している。最も激しい戦いが行われる地域に造られるタイプであり、美作において多用するのは毛利氏だった可能性が考えられる。土塁囲いは、医王山城周辺と岩屋城周辺、高城周辺に多い。また岩屋城跡と荒神山城跡の間と、荒神山城跡と高城跡の間にも点在している。宇喜多軍の攻め込んだ城周辺に多く、荒神山城跡を本拠としてい



第 381 図　美作国城館跡の防御施設（1/400,000）と模式図

た花房氏の行軍ルートと一致するのではないか。岩屋城跡周辺にある 195 姿山砦跡は、宇喜多軍の兵站と考えられているが(15)、さらにその兵站は荒神山城まで続いていた可能性がある。

美作国は毛利・宇喜多の両氏が戦国末期に最も激しく争った地域である。本来は、第６章第２節にあるように、さまざまな歴史を刻んできた山城が多いはずだが、特に本国の中央部から西側にあり前述の防御施設を持つ城館は、この時に改変された可能性が考えられる。この地域に陣・砦タイプが多いことからも、この時の戦いの激しさが窺える。逆に東側の地域は、古くからの歴史をそのまま残して現在に至った可能性がある。特に吉野郡や英田郡における大型と中・小型城タイプの配置関係は、当時の中小地域社会を反映しているものと思われ、興味深い事例である。　　（小林）

註

（1）『美作国の山城』 美作国の山城編集委員会　2010 年
用田政晴「美作における中世山城について」『考古学研究』第 26 巻第 3 号　考古学研究会　1979 年
高橋成計『織豊系陣城事典』図解日本の城郭シリーズ６　戎光祥出版　2018 年
池田誠「美作国における中世城郭の一考察」『中世城郭研究』第８号　中世城郭研究会　1994 年

（2）羽庭城跡以外に、規模 101 ～ 200 m、比高 31 ～ 100 ｍの範囲の山城に、西西条郡でいくつかの調査例がある。113 河内城・117 比丘尼ヶ城・118 城峪城で、自然地形を生かし造作は少なく、遺物も少量のみである。これらの時期は、室町時代前半に位置付けられている。このことから上記の範囲に入る城館で、防御施設が少ないものの中には室町時代前半に遡る城が含まれている可能性がある。

（3）小都隆「西国の中世城館跡」『西国の権力と戦乱』日本中世の西国社会１　川岡勉・古賀信幸編　清文堂出版　2010 年

（4）ここで言う陣タイプとは、狭義の意味での陣ではなく、付城・向城・伝城などを含めた本城ではないという広義な意味である。また砦タイプは支城や出城の意味を含めるが、構造上では陣タイプと区別はできなかった。本論においては便宜的に規模と比高差だけで区分している。

（5）森俊弘氏から教示。

（6）森俊弘「西美作、攻城戦のなごり」『教育時報』819 号　岡山県教育委員会　2017 年

（7）平岡正宏「医王山城採集の瓦」『年報　津山弥生の里』第４号　津山市教育委員会　1997 年

（8）高橋成計「美作医王山城合戦の意義について」『戦乱の空間』第 13 号　2014 年
高橋成計「美作医王山城落城の危機について」『戦乱の空間』第 15 号　2016 年

（9）池田誠「美作岩屋城攻囲戦での陣城群」『戦乱の空間』第４号　戦乱の空間編集会　2005 年

（10）乗岡実「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣」『吉備地方文化研究』第 18 号　就実大学吉備地方文化研究所　2008 年

（11）高橋成計「備前宇喜多氏の陣城縄張りの考察」『中世城郭研究』第 28 号　中世城郭研究会　2014 年

（12）山上雅弘「戦国時代の山城」『中世城郭研究論集』村田修三編　新人物往来社　1990 年
※この論考で紹介された城と同様の時期になる可能性がある。

（13）島崎東氏から教示。

（14）高屋茂雄「畝状空堀群」『中世城館の考古学』萩原三雄・中井均編　高志書院　2014 年

（15）高田徹「美作岩屋城包囲の付城群について」『中世城郭研究』第 25 号　中世城郭研究会　2011 年

第２節　文献史料から見た中世美作国の政治動向と戦乱

中世美作国において、戦乱に伴う城郭の存在が現れるのは、南北朝時代である。本稿では以下、同国をめぐる政治動向と戦乱について、年代を追って叙述を進めるものである。

１　南北朝・室町時代

建武政権の瓦解　建武２年（1335）、足利尊氏は、政権内での後醍醐天皇との対立に敗北し、九州へ逃れた。しかし、翌年には蜂起し、これに呼応した播磨国の赤松円心が城郭を構え、美作国でも菅家・江見・広戸の各氏が、奈義能山（No.296、301 ヵ。奈義町高円）・菩提寺城（No.300。同）に籠城した（「太平記」16）。しかし天皇方の軍勢によって両城は攻略され、城兵も敗走したため、尊氏は４月、三浦高継に美作国の敵勢討伐を命じている（三浦文書、『梅松論』）。その後、上洛した尊氏は、同３年（延元元年、1336）８月に持明院統の光厳上皇・光明天皇を擁立し、後醍醐天皇が 12 月に吉野に入ったことで、南北朝時代へと突入する。

転変する美作国守護　美作国では、出雲国の佐々木（富田）秀貞（美作前司）が、康永３年（興国５年、1344）、及び貞和元年（同６年、1345）、また観応３年（正平７年、1352）前後に、幕府から守護へと任じられており、その守護代として佐々木（羽田井）高泰（孫六左衛門）、同（富田）直貞（左衛門尉、美作四郎左衛門尉）が活動している（安東家文書、岩田佐平所蔵文書、大賀文書）。その後、文和２年（同８年、1353）冬には南朝方勢力の籠城する英多城（所在未詳）、同３年には川述城（No.336 ヵ。津山市河辺）で交戦があり、同４年には足利尊氏により倉懸城（No.384。美作市田殿）の警備が命じられた（安積家文書、昭和 61 年 11 月東京古典会主催古典籍下見展覧大入札会目録、上月文書）。そして延文元年（同 11 年、1356）正月、赤松世貞（貞範。筑前々司、筑前入道。？～ 1374）が守護に任じられ、世貞のもと、有元佐貞（式部丞、三河守）が守護代に任じられ活動している（東福寺文書 479・480、天理大学附属図書館所蔵文書など）。

ところが同５年（同 15 年、1360）、南朝方の山名時氏（伊豆守、左京大夫。1299 ～ 1371）・師義（左京亮、左馬権頭、伊豆守、右衛門佐。1328 ～ 76）父子等が出勢し、赤松世貞・則祐が構えた因幡国境の城をはじめ、塔尾（津山市堂尾ヵ）・新宮（No.318。津山市新田・福井）・神楽尾（No.151。同市総社等）の諸城を攻略した。さらに時氏父子は康安元年（同 16 年、1361）７月にも出勢し、名木杣二ヶ所城（広戸氏。奈義町高円）、篠向城（No.88。飯田一族。真庭市三崎・大庭）、大見丈城（No.301。菅家一族。奈義町高円）、菩提寺城（有元氏。同）、小原城（小原氏。美作市古町ヵ）・大野城（大野一族。同市赤田ヵ）、併せて林野（No.389。美作市林野）・妙見（No.386。同市平福ヵ）二ヶ所城を降参させた。山名氏は、残る倉懸城を包囲し、赤松氏が播磨・美作国境に構えた竹山（No.367。同市下町・笹岡）・吉野（同市五名ヵ）・石堂ヵ峯（同市立石）等４ヶ所、及び栗倉（粟倉ヵ。所在未詳）の諸城に対しても、星祭峠（美作市下町）に布陣して対峙し、11 月には倉懸城を攻略した。そして時氏は同２年（同 17 年、1361）、改めて伯耆国から院庄を経て備前・備中両国に出勢している（「太平記」35・36、教王護国寺文書）。南朝との戦いも小康状態になると、山名時氏は領国の安堵を条件に直冬から離反、貞治２年 (同 18 年、1363)8 月に上洛し、室町幕府へ帰順する。その結果、美作国の守護職は山名氏へ明け渡され、同４年（同 20 年。1365）から同義理（弾正少弼、前修理大夫。

1337 ～？）が任じられ、守護代には、入沢持治（参河守、参河前司、前参河守）が任じられた（東福寺文書 481・482 など）。

明徳の乱・嘉吉の変　山名義理は明徳 2 年（1391）、明徳の乱に際して、紀伊国で挙兵したが敗北した。美作国には播磨・備前守護の赤松義則（性松。上総介、上総入道、大膳大夫入道。1358 ～ 1427）が侵攻し、浦上性貞（美作入道）が篠向城を攻撃している。義則は同 3 年（1392）正月、乱後の論功行賞で美作国の守護に任じられ、そのもとで有力被官の浦上助景（美濃入道）、同性貞が相次いで守護代を勤めたとみられる。同 34 年（1427）9 月に義則が死去すると、赤松満祐（性具。左京大夫、大膳大夫、同入道。1381 ～ 1441）が家督を相続し、播磨・備前・美作三ヶ国の守護に任じられた。

しかし満祐は嘉吉元年（1441）6 月、将軍足利義教を謀殺し、本拠の播磨に退去してしまう。追討軍の派遣は遅れ、8 月には赤松勢が美作国の垪和右京亮の城を攻撃、退散させるなど混乱が続いたものの、満祐は 9 月 10 日、山名氏ら諸将に討たれた。美作国の支配を回復した山名氏は以降、山名常勝（もと教清、のち常捷。修理大夫、同入道）、山名政清（兵部少輔）が相次いで守護に任じられ、被官の高山入道、同清重（のち統空。右京亮、石見入道）、大町曽俊（もと基佐。山城守、同入道）、山名清宗（掃部頭）が相次いで守護代となって現地支配に臨んでいる（「明徳記」、「蔭涼軒日録」、「建内記」、豊楽寺文書、壬生家文書、「北野社家日記」など）。

2　戦国時代

応仁・文明の乱と中村氏の台頭　応仁元年（1467）、応仁・文明の乱の勃発に際して赤松政則（次郎、兵部少輔、左京大夫。1455 ～ 96）は、山名氏から播磨・備前国を奪回し、美作国へも 5 月に侵攻して南峡（美作市南海）・塩垂山（同市湯郷・中山）に布陣したが、守護山名政清らに退けられた。しかし 10 月、中村五郎左衛門尉が院庄に入り、政清の子彦房を退け、数年にわたる山名氏残党との交戦の末、和介山（津山市瓜生原、美咲町羽仁）で山名勢を破った（「応仁別記」、難波文書など）。三ヶ国守護となった政則のもと、五郎左衛門尉は美作国守護代に任じられたが、因幡国内での山名家の内紛に介入し、文明 12 年（1481）に戦死してしまい、支援していた山名元之（兵部少輔）も同 13 年（1482）8 月、美作国に逃れた。中村氏一門の太河原氏は、元之を久多庄（鏡野町久田上・下一帯）へ置き、奥津（同町奥津付近）に城を構え備えている（蜷川家 199・120・121）。

対して、但馬此隅山城（兵庫県豊岡市）の山名政豊（弾正少弼、左衛門佐、右衛門督。1441 ～ 99 ヵ）は同 15 年（1483）に播磨国へと出兵、同 16 年（1484）には赤松政則を退けた。美作国では、赤松方の小瀬弾正忠と太河原弾正左衛門を大将に、備前国境まで出勢して、山名方の松田氏を牽制しているが、同年春には山名兵部（のち中務少輔。政理ヵ）が入国、被官に知行が配分され、半国が山名氏の支配下となった（「備前文明乱記」、蜷川家 217、「大乗院寺社雑事記」など）。このようにして播磨・備前・美作半国を支配した山名氏であったが、赤松政則が 10 月に兵を起こし、山名勢と交戦を続け、同 17 年（1485）閏 3 月に播磨国で勝利して以降、転落していく（「多門院日記」、「閥」121-1 など）。美作国では長享 2 年（1488）7 月 23 日の山名勢退去後、「院庄之代（しろ）」に浦上基景（伯耆守）が入り、さらに政則は 9 月、湯治として播磨国から被官多数と下向し、湯郷（美作市湯郷）の寺院を整備して居所とした。下向の目的は山名氏の圧迫にあり、因幡国境の小原（おはら）（大原）・讃甘（さのも）（同市古町・下町一帯）に浦上則宗等が諸陣を構え、同 3 年（1489）正月には、新春の祝宴が行われ、4 月には因幡・伯耆 2 ヶ国の牢人衆が国境を侵し、さらに延徳 2 年（1490）2 月にも山名

勢が越境してきたため、後藤則季を大将に江見備前守・新免弾正が出陣している。政則は同年6月まで滞在を続け、帰国した。なお明応元年（1492）12月、豊田庄（奈義町東北地域）で領民の年貢緩怠があり、垪和新次郎等湯郷衆百人が、「内方太郎左衛門尉代（しろ）」を攻め、同人を討ち取る事件が起こっている（「蔭凉軒日録」）。

中村則久と赤松義村　中村五郎左衛門尉の没後、後継者の則久（孫四郎、左衛門大夫、大和守）は、長じて守護代に任じられた。赤松政則は明応5年（1496）4月に病死し、養子の義村（次郎）が家督を相続し、備播作三ヶ国の守護となった。9月、真壁庄（鏡野町真加部一帯）へ守護代被官等の違乱が行われ、訴えを受けた浦上則宗は同6年（1496）10月、所領を引き渡し解決を図った。守護代の則久も更迭し、浦上基景（伯耆守）に代えようとしたが、事態は紛糾し、則久の復帰で決着したらしい。ただしこの頃、東六郡守護代には、牛窓湊（瀬戸内市牛窓町）の石原伊俊（修理亮。1459～？）が任じられており、則久は、西六郡守護代に転落したらしい。（「感状記」）。

そうしたなかにあっても則久は、依然として勢力を保ち、赤松氏一門の所領弓削庄（久米南町上・下弓削一帯）に使節を入れるなど、荘園・公領への侵略は続く（「家風条々」）。その後、浦上則宗の子村宗との対立を背景に、永正17年（1520）3月、赤松義村は小寺則職（加賀守。？～1520）らに粟井・中村両氏の討伐を命じたが、則久は院庄の館を出て岩屋城（No.189。津山市中北上）を構え、200日間にわたり籠城し、10月に村宗等の来援により勝利に至る（刀銘、「鵤庄引付」、「官符宣記」、幻住寺文書など）。村宗は、義村の嫡子道祖松丸（のち政村、晴政。次郎、左京大夫。1513～65）を推戴、大永元年（1521）9月に義村こと性因を殺害した。ただ、則久は、同年末で姿を消し、同2年10月には、則久の後継者とみられる赤法師が現れる（幻住寺文書など）。そして村宗も享禄4年（1531）6月、赤松政村の翻心によって摂津国大物（兵庫県尼崎市）で戦死してしまう。

出雲尼子氏が侵攻　享禄5年（天文元年、1532）5月、出雲富田城（島根県安来市）の尼子経久（民部少輔、伊予守。1458～1541）が、備中国経由で美作国に侵攻して高田城（No.33。真庭市勝山）を攻撃、7月9日に城主の三浦貞国（駿河守。？～1532）が死去し、同城には在番が立てられた。交戦は続き、天文2年（1533）6月には、伯耆半国と美作一国で尼子氏に敵対しているが、年内で制圧されたらしい（「作陽誌」、東寺百合文書）。ところが、備中・美作両国が再び尼子氏に敵対したらしく、同5年（1536）、尼子詮久（のち晴久。修理大夫、民部少輔。1514～60）が出陣して両国を平定し、積雪のため出雲国に帰陣した（大徳寺 1992、「江北記」）。さらに尼子勢は、同6年（1537）末に播磨国へ出勢、同7年（1538）年明けの積雪で再び帰陣したのち、7月に再び播磨に出勢、置塩城（兵庫県姫路市）の赤松政村（のち晴政・性熙。次郎、左京大夫。1513～65）を敗走させる（「証如上人日記」、「赤松伝記」、「親俊日記」など）。

同9年（1540）9月、尼子詮久は美作衆を含む諸国衆を動員して、安芸国の吉田郡山城（広島県安芸高田市）に毛利氏を攻囲したが、同年春以降、岩屋城にあった三浦次郎（貞久か）は、中村氏の蜂起に与したものか、11月13日に城下に攻め寄せた因幡勢と交戦している（毛利家286、石見牧家文書）。さらに同10年（1541）正月、郡山城での尼子氏の敗北を受け、赤松政村改め晴政は、播磨国へ入国して巻き返しを図り、東郡では江見右衛門大夫が2月、晴政の家臣浦上政宗（与四郎、帯刀左衛門尉。？～1564）に対し、河述構（No.335ヵ。津山市河辺）への増援を要請し、11月8日には同与三郎とともに英多構（所在未詳）で勝利している（「感状記」）。しかし、西郡では、備前国境に在陣していた尼子詮久によって5月頃、篠尾（真庭市月田本ヵ）で中村氏が敗北し、三浦氏

の拠る築田城（No.54。月田城ヵ。同市月田）も落城した（「岩屋寺快円日記」）。三浦貞久（下野守、上総介？。？～ 1548）は抗戦を続けたが、同 17 年（1548）9 月 16 日に病死し、籠城中の高田城は落去した。同氏の本領はその後、太河原貞尚（孫三郎）を通じて貞久の子道祖（さい）五郎（才五郎。のち貞広）に安堵された。貞尚は、貞久の弟で、岩屋城主という（「感状記」、「作陽誌」、「高田城主次第」、石見牧家文書）。ところが同 20 年（1551）、中村氏が西郡守護代職をめぐって国内諸勢力と呼応、蜂起したため、尼子晴久は 10 月、太河原貞尚を先駆けにして出陣、中村氏が本陣とした美作国一宮を焼き討ち、勝利した（「一宮社伝書上」、「証如上人日記」、「作陽誌」など）。そして同 21 年（1552）6 月、晴久は 4 月 3 日付で、美作国を含む六ヶ国守護に任じられた（佐々木文書）。

尼子氏支配の崩壊　永禄 2 年（1559）4 月には、晴久による美作一宮本殿の再建が完了し、国内に威勢を誇ったが、その支配にも陰りが見え始める。西郡ではこの頃、三浦貞広の兄弟貞勝（孫九郎。？～ 1564 ？）が宇山氏を攻撃し、高田城から退去させたと伝わる（「高田城主次第」）。以降、三浦氏の家中は、反尼子方の貞勝と、尼子方の太河原貞尚と出雲在国の貞広を支持する二派に分裂する。また、同年 12 月には、小田草城（No.119。鏡野町馬場）の斎藤実秀（河内守）が、岩尾山城（No.179。津山市綾部・吉見）で反尼子勢力と交戦している（桜井家感状折紙竪文写）。実次は、岩屋城の蘆田秀家（備後守。？～ 1567 ？）と二人で、太河原氏の両翼を担う存在であったらしい。東郡では同 3 年（1560）5 月より先、後藤勝基（摂津守。？～ 1579）が尼子氏から離反した。かねてから尼子氏と交戦していた、備前天神山城（和気町田土・岩戸）の浦上宗景（与次郎、遠江守）に服属したらしい（江見文書、「感状記」など）。江見久盛（左衛門佐ヵ）は、病身の久誠に代わって 5 月 1 日、勝基の居城である三星城（No.350。美作市明見・入田）へと攻め寄せたが、同年 7 月、かえって居城の倉敷城（No.389。同市林野等）で籠城に追い込まれた（「感状記」）。

尼子方の劣勢は同年 12 月、尼子晴久の病死によって拍車がかかる。同 4 年（1561）6 月、毛利方で備中成羽城（鶴首城。高梁市成羽町）の三村家親（修理亮。？～ 1566）は、月田城（真庭市月田）に兵を寄せ、尾頸で交戦している（「備藩古文書」3）。院庄（津山市神戸・院庄）にあったとみられる太河原貞尚は、東西から挟撃された。浦上宗景は同 5 年（1562）、後藤勝基等をして兵を西に進め、総社（同市総社）へ布陣し、院庄へと向かう笠松（同市小田中）で 3 月、二宮城（No.136。同市二宮）の立石久朝と交戦した。久朝は大敗、城も落城したという（立石家文書、「作陽誌」など）。窮地の太河原方からは 6 月、宗景の同盟者である安芸毛利氏に服属を懇望する使者を送っており、遣使が奏功した結果か、備前衆は 10 月、総社から退散した（「閥」55、総社文書など）。

太河原貞尚から中村則治へ　毛利氏への遣使は、斎藤実秀・蘆田秀家の主導とみられ、戦後に太河原貞尚に代えて、かつての守護代中村則久の子則治（赤法師ヵ、大和守）が擁立されたらしく、排斥された貞尚は 11 月、山内（真庭市北部地域）の社（やしろ）（真庭市社）まで退去している。斎藤氏でもこの頃、実秀から実次（孫一郎。のち玄蕃允親実・近実ヵ）に当主が交替した（「作陽誌」、「感状記」、美甘文書）。東郡で孤立した尼子方の江見氏も、以前にも病気と報じられていた久誠に代わって久盛が家督を相続、家臣の知行安堵を行っている（江見文書、「感状記」など）。結果、美作国内では、中村則治を推戴する斎藤実次・蘆田秀家、三浦貞勝、後藤勝基等の毛利方と、太河原貞尚及び三浦氏の牢人衆、江見久盛等の尼子方に分かれ、それぞれが対立する状態となった。

浦上宗景と三村家親の交戦　ところが浦上宗景は、永禄 6 年（1563）5 月に先立ち、天文末年以降対立を続けてきた兄政宗と和睦した（田村文書）。尼子氏との盟約を恐れた毛利氏及び三村家親は、

後藤勝基の三星城に向城を付け、対して宗景も家臣の宇喜多直家等に加番を命じており、5月24日には城下で戦闘があった（「馬場家奉公書」、「備藩国臣古証文」、「感状記」等）。明けて同7年（1564）2月、家親は、毛利家の催促によって、備作衆（斎藤・蘆田氏等か）を動員し、伯耆国へと出勢した（「閥」3・52など）。12月には、三浦貞勝の家臣金田氏と三村家親が示し合わせ、貞勝が自刃、祖父の貞守（貞盛）を擁立する事件が起こったとされる（「高田城主次第」など）。同8年（1565）、大河原貞尚・三浦貞広を推戴する牧尚春等は、浦上方の原田氏の本拠原田（美咲町原田）で蜂起、毛利・三村勢力への反攻を開始した。出雲富田城の尼子義久も8月、尚春に知行宛行を約束するとともに、同人を通じ近隣への調略を進めた結果、尚春等は9月に高田城を回復し、出雲国から貞広を迎えている（石見牧家文書、「高田城主次第」）。事態を重く見た毛利氏は、三村家親に帰国と美作国への出陣を命じ、対して浦上宗景も、家親と雌雄を決すべく、小松城（No.277。久米南町下弓削・上二ケ）を築いて兵を籠め、弓削沼本氏の居城（No.278。同町宮地）に攻め寄せた。家親は、まもなく多勢を率いて出勢、興禅寺（同町下籾）を本陣とし、仏教寺（同町仏教寺）など山上に布陣し、浦上勢と交戦している（「桂岌円覚書」、岡山県博所蔵文書、「小坂氏書上」、「西国太平記」など）。

三浦貞広は10月に山内（真庭市北部地域）、11月に久田（鏡野町久田上・下）へ出兵して中村方の蘆田・斎藤両氏を圧迫し、一方、斎藤親実（もと実次ヵ。玄番允。三村家親の偏諱か）等は東郡へと出勢し、10月に江見久盛の倉敷城を攻略、さらに久盛が退去した三星城に寄せ、11月27日には妙見口（美作市明見）で、同9年（1566）正月14日にも妙見で交戦が行われた（美甘文書、「諸家感状記」、難波家文書など）。三星城は孤立したが、2月9日、宇喜多直家の送り込んだ牢人が三村家親を殺害、備中勢が帰陣するなどして状況は急転し、浦上方の勝利となった（「御答書」、「森脇覚書」、「両家記」、「感状記」など）。

浦上宗景の美作平定　備中勢の退潮に前後して、浦上宗景が美作国に派遣した明石景行（大和守）は、中村則治の本拠院庄を攻略した。則治は敗走し、太河原貞尚が復帰したとみられ、斎藤親実は浦上方へ転じ、太河原貞尚を推戴する三浦氏と閏8月に同盟した。その結果、岩屋城に入った則治と蘆田秀家は、周囲を浦上勢に包囲されることとなった。9月7日、親実は宮部高味籠屋（No.187。津山市宮部上）を攻撃、三浦貞広も境目へと出勢し、対して蘆田勢は、城から北に山越で神上城（No.83。真庭市樫東）に入って三浦勢と城下で交戦している（「覚之次第」、石見牧家文書、「感状記」、「牧左馬助覚書」）。11月に尼子義久が富田城を開城した後も、蘆田氏と三浦氏の対立は継続し、永禄10年（1567）7月に神森（同市目木）で、次いで篠向城（同市三崎・大庭）の城下で交戦している（「感状記」、「牧左馬助覚書」）。ところが秀家は、宇喜多直家の調略を受け、中村則治を刺殺し、自身も直家の重臣富川秀安（平右衛門尉、肥後守。1538～97）に殺害されたといい、同年10月頃、岩屋城は開城した（「作陽誌」、総社文書）。

小早川氏の侵攻、浦上氏の対抗　以上の経過により毛利元就（陸奥守。1497～1571）は、子の小早川隆景（左衛門佐。1533～97）に美作国の平定を命じた。西郡では、永禄11年（1568）2月、高田城が攻略され、当主の三浦貞広は備中在国となり、同城には毛利方の番衆が多数籠められた。院庄の太河原貞尚も没落したとみられ、程近い蔦下城（No.122。葛下城。鏡野町山城・中谷）にも番衆が籠められている（毛利家579、「吉川家中」4、香川家文書、「閥」51、「高田城主次第」、原家文書など）。東郡では、江見久盛の後継者久資（伊豆守。？～1568？）が3月、多くの一門から離反され、倉敷城を捨て近隣の山林に隠れたが、捕えられ討たれた（「感状記」、「聞伝記」1）。対して

浦上宗景は出勢し、鷹巣城（美作市巨勢）の江見次郎等や、友野城（No.390。同市友野・北原）の猿喰（さるはみ）河内・江見牛之助を討つなどした。久資の後継者久秀（九郎次郎）も、11 月に倉敷城近くに迫ったが、回復できなかったらしい（「覚之次第」、「小坂氏書上」、「感状記」、「草刈家証文」）。

3　織豊時代

（1）足利・織田政権期―国内諸領主の中央政権接触―

足利・織田連立政権と美作国衆　永禄 11 年（1568）10 月、足利義昭（1537 ～ 97）が織田信長（1534 ～ 82）に伴われて上洛し、征夷大将軍に任官した。将軍の代替わりにあたっては、美作国からも、草苅景継（三郎左衛門尉。？～ 1579）をはじめ、中山手城（No.215。江原城。美咲町里）の江原氏等が、祝儀の使者を送り、義昭の知遇を得ている（「草刈家証文」）。これ以降、新興勢力の景継は、東郡で急速に勢力を拡大していくことになる。一方、浦上宗景は、足利・織田政権への恭順を拒否したため、同 12 年（1569）3 月、信長から播磨国への出兵を表明されている（昭和 49 年正月古書逸品展示大即売会出品目録）。6 月、毛利元就の九州出勢に乗じて尼子勝久（孫四郎。1553 ～ 78）が挙兵、但馬国、隠岐国を経て出雲国へと上陸し、呼応して美作国でも、備中在国の三浦貞広が 7 月、擁立されて篠向城（真庭市三崎・大庭）に拠った。同様に蜂起した牢人衆の主体には、蘆田五郎太郎（正家ヵ）や市氏等があったといい、東郡でも同月下旬、江見久秀が一門等に知行を宛行っている（「感状記」、「高田城主次第」「安西軍策」）。毛利氏は、敵方からの調略による、高田城や蔦下城に在番していた備中衆の動揺収束に追われ、特に高田城では、出雲・伯耆衆等が城内で放火し退去する事件が起こった（「閥」遺漏 2-2、「森脇覚書」など）。

浦上宗景の勢力伸張　そうしたなか、同年 7 月、浦上宗景と宇喜多直家が訣別した。宗景は 19 日、備前衆と美作衆（垪和・江原・原田・貴志・沼元・打穴氏）により、前年 7 月から直家が居城としていた備前金川城（岡山市北区）に進攻したが退けられ、兵乱は国内に拡大した（松田文書、鳥山文書）。訣別の背景には、織田信長が、備前・美作国方面の毛利方への支援として、播磨国を平定、赤松政秀・宇喜多直家・三村元親の連携により、宗景を討とうとしていたことにある。ところが 9 月、宗景が織田勢を退けたため、一転して直家は和睦を申し入れ、次いで宗景は、三浦貞広等牢人衆の高田城攻撃を支援し、同城下で 10 月 5、6 両日にわたる激戦となった。その後まもなく貞広は、高田城を回復している（益田家 295、林原美術館所蔵文書、「無尽集」、「森脇覚書」、「高田城主次第」など）。宗景は 11 月、足利・織田政権へ服属を申し入れ、12 月には美作一宮社に対し、社領不入、諸役免許の判物を発給している（「今井宗久書札留」、中山神社文書）。同 13 年（元亀元年、1570）4 月、草苅景継は幕府奉公衆の三番に加えられ、同年 10 月、将軍足利義昭側近の上野信恵から、浦上宗景が畿内の三好三人衆と同盟し、播磨国三木（兵庫県三木市）の別所氏を攻撃する状勢として、宗景の牽制を命じられている（「草刈家証文」）。元亀 2 年（1571）8 月、尼子勝久が出雲新山城（島根県松江市）から隠岐国へ逃走し、勝久を擁立して伯耆末石城（鳥取県大山町）にあった亀井幸盛（山中氏、鹿介。1540 ？～ 78）も、吉川元春に投降したが脱走し、美作国を経て但馬国に滞在し、再起を期している（「島家遺事」、石見牧家文書など）。

後藤勝基の離反　先頃から浦上宗景が築城、植木下総守（？～ 1598）等を籠めていた備中佐井田城（真庭市下中津井）を、庄元資・三村元親兄弟が攻撃した。対して宗景は、宇喜多直家等、備前・美作衆を救援に送り、9 月 4 日、城下で交戦して備中勢を破り、元資を討った。さらに直家の家臣花房職秀（の

ち職之。助兵衛尉。1549？～1616）は、毛利方の月田城（真庭市月田）を攻略している（「黒田御用記」、鳥山文書、河口文書、難波文書、片山文書、「植木家先祖覚」、「覚之次第」など）。そして宗景は、当時推戴していた播磨置置塩城（兵庫県姫路市）の赤松満政（則房。次郎、左京大夫、上総介）を背後にし、12月には原田貞佐（三河守）・豊佐（蔵人）父子を通じて、三浦貞広に当知行分の段銭納入を定めるなど、分国への支配を強めた（石見牧家文書）。一方、後藤勝基は11月末、江見家の旧臣に、同家の息女を引き立てるとして、出仕を促している。まもなく勝基は浦上氏から離反し、小早川隆景の加勢を受けて三星・倉敷城に籠城した。宗景は対塁を築いて三星城を攻囲し、同3年（1572）3月には、三丸まで攻め込まれたが、城兵はよく耐え、勝基も塩尾山麓へ出勢して浦上勢と交戦している（牧山家文書、「山田家古文書」、難波家文書、「感状記」など）。

足利義昭による調停と和睦　将軍足利義昭は6月、浦上・毛利・大友三氏の和睦を命じたものの、吉川元春と小早川隆景は7月、備前国への出兵準備を進め、26日には毛利輝元も吉田郡山城から出陣した。隆景は、江見久秀に草苅景継との連携を説き、後藤・浦上両氏の軍事的対立についても、状況を報告するよう要請している（久芳文書、「聞伝記」7など）。最終的に毛利氏は仲裁を受諾し、浦上氏との交渉は、浦上・宇喜多氏の要害1、2箇所の破却と三星城の対塁破却等など困難を極めたが、12月に和睦が成立した。浦上・後藤両氏の関係も回復したようだが、後藤氏の当主は、勝基から元政（与四郎）へ交代している（柳沢文書、「閥」117、久芳文書、反町文書、難波文書など）。

（2）織田政権期―織田・毛利戦争の展開―

浦上・宇喜多氏の対立　織田信長と対立を繰り返した足利義昭は、天正元年（元亀4年。1573）7月、京都から追放された。義昭の没落に前後して、草苅景継は毛利氏から給知を与えられている（牧山家文書）。信長は12月、浦上宗景と別所長治の対立を仲裁し、宗景に備前・播磨・美作三ヶ国の朱印状を、毛利氏への進呈だとして与えた（吉川家610）。宇喜多直家は宗景と訣別し、同2年（1574）3月、盟約を結んだ原田貞佐・行佐（三河守・三郎左衛門尉）父子と花房職秀に岩屋城を攻略させて蘆田正家を退け、一門の浜口家職（淡路守）を城主とし、一方、三浦貞広は4月、宗景に与している（原田文書、「聞伝記」1、「感状記」、「先年岩屋城主次第」、「黒田御用記」、石見牧家文書など）。両陣営の対立は、宗景が天神山城に籠城しつつも5、6ヶ城を維持して推移し、秋には停戦して両陣営で知行の安堵等が行われている（「感状記」、「作陽誌」、亀山家文書、難波家文書、福田文書、高野牧家文書）。

ところが、三浦貞広が備中国の三村元親を浦上陣営へと引き入れ、事態は急変した。毛利輝元は11月、小早川隆景に命じて月田城（真庭市月田）に兵を籠め両者の連絡を遮り、備中国へと出陣する（「森脇覚書」、「桂岌円覚書」、石見牧家文書。「閥」78、粟屋家文書、渡辺家文書など）。直家も、浜口家職に三浦貞広の攻撃を命じ、同3年（1575）正月、花房職秀・沼本新右衛門尉（当時は与太郎か）を先手に、多田山（同市多田）へ布陣した。対して貞広は22日に多田山を夜襲し、3月16日には、直家の一門伊賀久隆が兵を籠める真木山城（No.63。同市鹿田）を夜襲して、宇喜多勢を撃退した（「牧左馬助覚書」、「感状記」、下河内牧家文書）。

浦上宗景の備前国退去　しかし直家は、浦上政宗の孫で播磨国にあった久松を推戴するとともに、毛利氏の備中松山城攻撃に協力するなどし、支援を取り付け、再び天神山城を攻囲した（宇喜多文書、「浦上覚書」、内等家文書など）。当時、浦上方の小坂氏が拠る秋固屋（No.263。久米南町塩之内）と、宇喜多方の沼元与太郎・三浦源十郎等が構えた蓮華寺（No.280。同町全間・下二ヶ等）が対峙しており、

宗景は岡本氏秀（太郎左衛門尉）・延原内蔵丞等に蓮花寺を夜襲させた。さらに 7 月 8 日にも蓮花寺に攻め寄せ、沼元豊盛（彦右衛門尉）等の拠る小松城（No.277。同町下弓削・上二ヶ）では二、三丸まで侵入されたが、攻略に至らなかった（亀山家文書、「感状記」、沼本家文書、「小坂氏書上」など）。その頃、草刈景継は、因幡国の尼子勢に対して、弟重継（次郎、太郎左衛門尉。1558 ～ 1616）を淀山城（鳥取県智頭町）に置き、8 月 29 日に鬼城（同県若桜町）を攻撃している。天神山城で籠城を続けていた宗景も 8 月、播磨国へと退き、三浦貞広も、江原久清を通じた宇喜多直家の調停によって 9 月 11 日、高田城を開城し、毛利方の楢崎元兼（弾正忠。1552 ～ 97）に引き渡した（「閥」34、「草刈就氏覚書」、「感状記」、「閥」6、「高田城主次第」）。弓削庄周辺の紛争も、浦上方の秋固屋が落城して終息したが、沼本与太郎は、未だ備前国の武枝（岡山市北区建部町大田付近）で戦闘を続けている（沼元家文書）。直家が荒神山城（No.250。津山市荒神山）に置いた花房職秀は、篠山城（No.246。皿山城。同市皿・高尾）を攻略して美作国へと勢力を伸張し、以降も、嵯峨山城（No.243。同市中島・美咲町錦織等）を攻略、次いで院庄城を攻め北方の神戸（じんご）（同市神戸）へと追撃、古川城（No.131。鏡野町宗枝）を攻略したといい、草苅氏や後藤氏等、国内諸領主との摩擦を重ねていくことになる（小島二郎兵衛書状写）。

織田・毛利戦争の勃発、上月城の戦い　織田信長と対立した将軍足利義昭は、天正 4 年（1576）2 月、備後国鞆浦（広島県福山市）に引き移った。義昭を迎えた毛利輝元は 5 月、信長との対立を明らかにし、同 5 年（1577）3 月以降、宇喜多直家と播磨国へ侵攻した。信長の家臣、羽柴秀吉は 10 月 23 日、京都を出発して播磨国に向かい、同月 26 日付けで、山中幸盛が調略していた江見久秀と三吉興能（五郎左衛門尉）・元孝（新太郎）へ、自らの書状を添え信長の朱印状を与えている。また、幸盛を通じて草苅景継が、また江見久秀を通じて後藤氏も服属に応じた（「信長公記」、「閥」104-1、荘家文書、江見文書、「古文書纂」、「草刈家証文」、「思文閣古書史料目録」202）。そして羽柴勢は 11 月、美作国境に程近い上月城（七条城。兵庫県佐用町）を包囲した。救援に出勢した宇喜多勢は敗走し、大原（おはら）（美作市古町）の新免弾正左衛門尉は、信長に服属した。

秀吉は、降参した上月城に尼子勝久・山中幸盛等を入れ、近江国の安土（滋賀県近江八幡市）で越年、同 6 年（1578）2 月に再び播磨国へと出兵している。しかし、同年 4 月から毛利氏・宇喜多氏、草苅重継等諸勢に攻囲された上月城は、籠城勢の降参により 7 月 5 日に落去し、勝久も自刃した（「吉川家中」10、下村文書、「信長公記」、「某覚書」、「草刈家証文」、吉川家 1466 など）。実は、同城の攻囲中から、直家の織田陣営内通の噂が流れており、先に播磨国に在陣中の信長の嫡男信忠へ遣使していたという（「佐々部一斎留書」。「両家記」は、同 7 年 4 月、羽柴秀吉を通じて家老を派遣とする）。戦後の 7 月下旬になってようやく直家は播磨国へ出陣し、吉川元春・小早川隆景に饗応を申し入れた。ところが、直家に叛意ありとの通報があり、さらに 8 月 2 日、直家が入った八幡山城（兵庫県赤穂市）の二丸で争いが起こり、直家の婿で隆景の一手衆となっていた三星城主後藤氏（元政ヵ）が討たれる事件が起こったため、3 日には元春・隆景ともに帰陣している（「吉川家中」10、吉川家 89、「佐々部一斎留書」、「山県長茂覚書」、「安西軍策」など）。

混迷する国内状勢　これより先、美作国内で起こっていた、宇喜多氏と隆景配下の諸領主による対立状態にあたり、荒神山城の花房職秀も 8 月 2 日、高野庄（同市高野本郷付近）の牧佐介を仲介に、福田理昌を通じて交渉に臨もうとしている（高野牧家文書）。このような状況を背景に、毛利家では、上月城の戦いの際に草苅景継から徴した人質の返還について、直家の意向との調整に苦慮しており、

問題は 10 月下旬に至っても解決していない（三原城城壁文書）。さらに直家は、景継が毛利家に別心ありとして、北賀茂の入口に構えられた日詰城（No.158。百々城。津山市加茂町百々・中原）の出城、祝山城（No.179。岩尾山城。同市綾部・吉見）に付城を 6 か所構えた。対して景継は天正 7 年（1579）2 月、小早川隆景に、毛利家の「洞中」での内紛であって異心はないと釈明し、直家も少なくとも 4 か所の付城を退去させている（「閥」104-2、「譜録」、光成 2016 は天正 9 年に比定）。これら一連の紛争にあたり、毛利氏に与して宇喜多方に対したのが、葛下城（No.122。蔦下城。鏡野町山城・中谷）の中村頼宗（大炊助）であった（同上）。頼宗の前歴は不明だが、小瀬助左衛門（中務正の子）の伯父で、名字は本庄（真庭市禾津一帯が本貫か）ともされることから、縁戚で中村氏の名跡を継承した可能性がある（「中島本政覚書」）。ただし、紛争は続き、3 月には神楽尾城（同市総社等）の千波土佐守が、荒神山城を夜襲したが伏兵により敗走し、土佐守も討たれた。同城には、福田勝昌（玄番助）等が入り、毛利氏からも岩岐兵庫が派遣されたという（「感状記」、「聞伝記」1 など）。

草苅景継と後藤勝基　一方、草苅景継は、織田陣営への内通が露見し、小早川隆景からの指示によって 4 月 27 日、自刃あるいは高山城（No.157。矢筈城。津山市加茂町山下・知和）の城下で家臣に討たれた（「草苅氏覚書」、「陰徳記」など）。さらに後藤勝基も 4 月下旬、直家が派遣した延原景能（弾正忠）の攻撃を受けた。景能は、倉敷城を攻撃したが敗軍、改めて勝間山（No.357。同市位田）に布陣して三星城を攻略し、勝基は 5 月 2 日、長内（美作市長内）の隠峪で自刃した（「東作誌」など）。景継死後の草苅家では、弟重継が同年夏、羽柴方の新免氏を圧迫しようと、因幡国境近くに佐淵城（No.358。東粟倉村長尾）を構えた。重継は、新免勢との交戦で弟与次郎を失ったものの、新免氏を討ち、備前国へと退けた。そして 6 月 26 日、景継の死を「不慮」として、重継に家督継承が認められている（「草刈就氏覚書」、「聞伝記」1、「閥」34）。

宇喜多直家が織田陣営に転じる　宇喜多直家は 9 月、羽柴秀吉を通じて信長に服属を申し入れた。これに前後して備前・備中・美作国境では、鈴木孫右衛門尉の調略による通路遮断や、高田城の向城として、小瀬修理亮・市三郎兵衛・新見平内丞等、牢人衆による宮山城（No.56。真庭市高屋・上市瀬等）の築城、また江原親次（又四郎、兵庫助。？～ 1598）・牧菅兵衛尉等が大寺畑城（No.78。同市久世）・小寺畑城（No.80。同市久世・三阪）、浮田平右衛門尉等が湯山城（No.75。同市湯原温泉）に籠もるなど、まもなく直家の旗色が明らかになった。対して北賀茂の草苅重継のもとには、直家に対抗する諸牢人が結集し、21 日には東西二手に分かれ出勢した。宇喜多勢は西勢を追い散らし、祝山城に付城を付けて攻撃を開始し、梶並（美作市梶並一帯）に城を構えた東勢の後藤氏牢人は、北賀茂に退いた。吉川元春も、出雲・伯耆国から杉原盛重（播磨守。1533 ～ 81）等を山内（真庭市北部一帯）に進め、飯山城（No.7。同市藤森・黒杭）等 2 ヶ城を築城、湯山城を攻撃させた。また、10 月には蔵田元貞（与三右衛門尉）・森脇春方（飛騨守）を派遣し、湯民部少輔に副えて葛下城と高山・祝山両城を連絡する升形城（No.141。鏡野町香々見・寺和田等）の築城を命じている（「信長公記」、「藩中」10、「聞伝記」7、高田城主覚書、岩国沼本家文書、「拾遺感状録」、牧左馬助覚書、厳島野坂文書、吉川家 1210、「譜録」など）。

11 月に備中国へ出陣した元春は、毛利輝元・小早川隆景と 12 月 24 日夜、四畝城（真庭市上水田・高梁市有漢町上有漢）をはじめ伊賀氏の城を攻略し、天正 8 年（1580）正月には備前・備中・美作国境に栂森（つがふろ）城（No.66。真庭市上山・吉備中央町溝部）と飯山城（吉備中央町福沢・高梁市有漢町上有漢）を築城して在番を置いた。そして輝元等は 2 月 3 日、高田城へ陣替し、大寺畑・小寺畑両城

（同市久世）に寄せ、9 日から小寺畑城を攻撃し、13 日未明に降伏させた。次いで 16 日から大寺畑城を攻撃したところ、籠城勢は開城し、直家が沼元新右衛門尉に命じて前年末から新たに普請していた篠向城（同市三崎・大庭）へと退去した（岩国沼元家文書、「閥」2・3・74・100・115-1・166、河北家文書、厳島野坂文書など）。

垪和衆蜂起と高城の戦い　同年 2 月、高城（No.240。岡山市北区建部町和田南・角石谷）の竹内為能が毛利方に転じた。村上勘兵衛（左衛門尉久成とも）は、三宮城（No.127。同町西垪和・東垪和等）にあって、妙見山（No.212。一瀬城。美咲町栃原）に布陣した毛利方の加勢と共に、江原親次の中山手城（江原城。同町里）に攻め寄せ、城下で交戦している（竹内家文書、「感状記」、「閥」50・53・97・126・166、河北家文書など）。こうした西郡での毛利勢優勢を受け、総社（津山市総社）では、吉川元春・小早川隆景等から、3 月 2 日付けで禁制を受給している（総社文書）。また、升形城の森脇春方も、3 月初旬に祝山城の付城、吹山城（No.289。津山市市場）から宇喜多勢が撤退したこともあり、中旬には城の普請を終えた（「藩中諸家」8・15、「閥」88 など）。

宇喜多直家は、明石行雄を河口（岡山市北区建部町川口）に進めて高城の攻略を命じ、中山手城に兵粮搬入を試みたが、3 月 17 日夜に竹内勢によって陣所が襲撃された。しかし高城の包囲は進み、妙見山の毛利勢を退けて兵を籠め、高城救援を阻んだ（「感状記」、「閥」126、毛利家 854 など）。さらに直家は 20 日、羽柴秀吉に出勢を仰ぎ、秀吉は閏 3 月 2 日に播磨国に着陣し、さらに直家の要請に応じて 17 日には播磨・備前・美作国境の上月付近に布陣した。対して毛利輝元等は月末、備中国境の水田（真庭市水田一帯）まで兵を退いた（船田祥一郎氏所蔵文書、「聞伝記」7、田中信雄氏所蔵文書、「紀伊国古文書」、「房顕覚書」など）。これにより直家は 4 月、福渡（岡山市北区建部町福渡）まで出陣し、三宮を攻略、宇喜多勢はさらに 4 月 14 日夜、高城の尾首から攻撃を加え、28 日には直家自身が出馬して総攻撃をかけ、高城は落城した（「閥」115-1、「両家記」、「感状記」など）。

祝山城の戦い　改めて吉川元春は 5 月、斎藤近実（もと親次。玄番允）の小田草城（鏡野町馬場）を攻略して、19 日には岡本大蔵丞を籠め、近実は毛利氏へと転じ、祝山城とともに北賀茂への通路を固める仙々城（No.160。仙城。津山市加茂町楢井・上横野）の在番を命じられた（岡本文書、金万家文書など）。高城を降した直家は、毛利方への対応、因幡出勢中の羽柴秀吉との連携のため、祝山城を攻略しようと、倉敷（美作市林野）を経由して北上、5 月末には中山城（No.282。津山市奥津川・新野山形等）等 2 ヶ城を調略した。しかし 28 日、小早川隆景が岡山沿海に警固船を派遣したため、6 月 6 日に直家等は帰陣している。織田信長も 7 月、直家を通じて祝山城を調略したものの不首尾に終わり、再び直家は 8 月 4 日、播磨衆とともに出勢し、戸川・林田（同市戸川町、林田町周辺）に布陣した。この出勢にも、小早川隆景が、備前国沿岸への警固船派遣で牽制したが、直家は祝山城を取り詰め、20 日に攻撃している。直家は同城に和睦を申し入れる一方、城内の調略により 24 日には落城寸前に追い込んだが、籠城側は城を守り切った。ついで 10 月上旬、直家は三度出勢し、ついに仙々城の番衆斎藤近実等の調略に成功している。ただし、直家は持病が悪化し、他国への出陣はこれが最後となった（「閥」51・115-1 ～ 4、「藩中」15、金万家文書、「両家記」など）。

毛利輝元は 11 月 4 日、高田城から二山城（No.84。真庭市余野下）まで出陣、岩屋城への向城、葛下城への伝の城として高仙城（No.85。同）を普請し、さらに宮山城への付城の普請を命じ、真木城（No.63。同市鹿田・下方等）に辻新次郎等を籠めている。12 月 11 日には、小早川隆景が宮山城の後背から城に寄せての交戦があり、対して 27 日には宇喜多勢が真木城を攻撃し退けられている。

しかし、天正９年（1581）正月、祝山城は降参、開城した（牧左馬助覚書、「閥」74・100・119、「感状記」、木村文書、某覚書、「佐々部一斎留書」など）。続けて職之は、祝山城・利元（としもと）城（No.165。同市上横野）等に兵を籠め、日詰城の向城とし、草苅氏の動きを封じた。そして２、３ヶ城（升形・葛下城等か）を飛び越して西屋城（No.105。鏡野町西屋・女原）に兵を籠め、伯耆国への連絡とした（小島次郎兵衛書状写）。

宇喜多方の諸城が落城　ところが、直家の体調悪化とともに、天正９年（1581）に入って、２月下旬には羽柴秀吉の元にあった人質が脱走したため毛利陣営への復帰が噂され、また一門の伊賀久隆が急死し、家中は動揺する。（フロイス書簡、「桂岌円覚書」、「虎倉物語」など）。ただし毛利氏は、織田陣営の状勢を睨み、直家に対して曖昧な態度をとり続けた（石見吉川家 146・143）。結局、春以降、吉川氏が宮山城攻撃を再開し、内応者の城内での放火を合図に夜襲を行った。対して籠城勢は５月 10 日、吉川方の風呂屋を襲撃したが、かえって城下まで退けられ放火、城兵を討ち取られている（某覚書、「感状記」、「佐々部一斎留書」など）。

中村頼宗も、西浦城（No.101。鏡野町井坂・養野）の大原主計助等とともに浜口家職の岩屋城へ寄せ、６月 25 日夜に攻略した。篠向城も 29 日に降伏し、宮山城は孤立したため、直家の命を受け開城した（立石家文書、「感状記」、某覚書など）。残る西屋城（同町西屋・女原）も吉川・小早川勢に包囲され、宇喜多方の斎藤近実は、９月８日夜に井坂（飯坂とも。同町井坂）まで出て交戦し、年末には一度囲みを解かれたものの、天正 10 年（1582）春、再び包囲され、近実は逃れて落城した（米井家文書、「作陽誌」など）。宇喜多勢は、通路で待伏せての襲撃や、中村頼宗が兵を籠めた月沢城（No.48。真庭市中ヵ。または No.199。美咲町北ヵ）を攻略、在番し、さらに中村勢を迎撃するなど、国内での抵抗を続けている（「牧左馬助覚書」）。

直家の死去、高松城の戦い　宇喜多直家は岡山城（岡山市北区丸の内）で病死し、遺領は同 10 年正月 21 日、織田信長から遺児八郎（のち秀家）に安堵された。救援のため備前国へ出陣が決まった秀吉は、３月下旬、備前・美作両国の各所へ禁制を下し、４月以降、備中国に侵攻して高松城（同市北区高松）を囲み、毛利勢と対陣した。ところが６月２日、京都で信長・信忠父子が明智光秀に討たれたことを知った秀吉は、毛利方と和睦して引き返し、光秀を破った（「信長公記」、「感状記」、高野牧家文書など）。

草刈重継・中村頼宗との攻防　その後も美作国では、交戦が続いた。天正 11 年（1583）６月、中村勢が沖構（おきのかまえ）（No.129。鏡野町円宗寺）に籠城したため、花房職之は付城（No.148 等。同町沖等）を構えて包囲した。対して毛利氏は、同構の救援のため、石見・出雲・伯耆・安芸・備中国の諸勢の派遣を決定したものの、来援を待たず落城したらしい（「感状記」、「寛永諸家系図伝」、「閥」34、「東作誌」、横山文書、立石家文書）。また、７月には、真木城（槇山城。真庭市鹿田・下方）にあった毛利方の鈴木孫右衛門尉が、江原親次の調略に応じて宇喜多氏へ一味を申し入れている（「感状記」）。

最前から秀吉は、毛利氏と領国の割譲交渉を進める一方で、草刈重継が籠城していた高山城に、因幡国境を越えて荒木（木下）重堅（平太夫）を侵攻させ、８月８日に因幡口で交戦している。宇喜多方からも高山城への付城として石米（こくまい）城（No.155。室尾城。津山市加茂町青柳）、また佐良山城（No.159。同町公郷）を構えたため、草苅勢は同月 18 日に出勢、交戦して敵勢を退けている。一方、11 月には江原親次が鈴木孫右衛門尉から真木城を受け取っており、さらに同年末に毛利・宇喜多両氏の領国境が確定したことを受けて、升方城などの引き渡しが進んだ。天正 12 年（1585）に入って草苅重継も、

高山城から安芸国へと退去し、3月までには高田城等も引き渡しが終了したらしい（「閥」34、鈴木家文書、小早川家278、毛利家1273、「備藩国臣古証文」など）。最後まで立ち退きに反発したのが岩屋城の中村頼宗であった。宇喜多方では3月、花房職之を軍奉行とし、城の外周に諸勢を布陣、包囲した（No.190等。津山市中北上・宮部上・真庭市上河内）。頼宗は、江原氏との交戦を中心に、4月2日、5月19日、6月10日と戦闘を繰り返し抵抗を続けたが、備後国鞆（広島県福山市）の将軍足利義昭に調停を要請して停戦し、7月18日に開城、頼宗も安芸国へと退去した（「岩屋古城覚」、「先年岩屋城主次第」、「作陽誌」、「中島本政覚書」、「牧左午助覚書」、立石家文書、宮川家所蔵文書、「東作誌」、「感状記」など）。

（3）豊臣政権期―岡山城・城下町整備と山城停止―

豊臣大名宇喜多氏の領国政策　中村頼宗の退去から間もなく、備前・美作両国と備中・播磨国の一部からなる宇喜多氏領国が確立した。豊臣秀吉の猶子（擬制的な親子関係）として遇された宇喜多秀家は、豊臣政権の政策に倣い、領国支配を進めていく。美作国内には、その後も、荒神山城（花房職之）、岩屋城（長船貞親）、篠向城（江原久清・親次）、宮山城（市三郎兵衛）、高田城（牧家信等）、竹山城（新免伊賀守）等の諸城が存続していたが、秀家は天正16年（1588）、岡山城の大規模改修、城下町の整備を開始し、併せて同17年（1589）からは分国内の城破り、山麓及び岡山城下への居住を進めた。美作国内では、高田城が服部勘助（のち隠岐守）に、次いで富川秀安に倉敷城とともに預けられ支城としたとされた以外は、同18年（1590）8月の岩屋城廃城が伝わるように、城破りが進められたようである（「聞伝記」、「作陽誌」など）。分国内の国衆も、矢櫃城（No.293。津山市大吉）の広戸広義（新三郎）が、九州攻め出陣中の同15年（1587）に日向国の耳川（宮崎県日向市）で溺死して断絶、原田忠佐が朝鮮出陣中の不行跡で改易、秀家一門の江原親次が慶長3年(1598)5月17日に出陣先の朝鮮国釜山で病死するなど、機会を捉えて宇喜多氏への権力集中が進んだ(「中島本政覚書」、「聞伝記」1、「作陽誌」、「感状記」など)。

家中の混乱と没落　度重なる対外戦争や城郭普請、秀家の体面的支出等に由来する、財政問題を解決するため、宇喜多氏は文禄4年（1595）春、惣国検地や家臣の所領替えを断行した。しかし、家中は混乱し、慶長3年（1598）、花房職之が退去したのをはじめ、同5年（1600）正月には所謂「宇喜多騒動」へと発展し、大きな禍根を生む（「寛永諸家系図伝」「両家記」「戸川記」など）。そして同年7月、西軍側で挙兵した宇喜多秀家は、留守中の分国の諸城、美作国では倉敷城に明石四郎兵衛尉、高田城に小瀬中務正を在番させており、9月10日には在番衆に人質の差出を命じている。しかし、15日の関ヶ原での戦いで西軍は敗北し、秀家は潜伏、国許では中務正等が岡山城に籠城したものの、東軍に属していた戸川達安（肥後守。1567～1627）・岡越前守（？～1615）等の接収に応じ、宇喜多氏の領国支配は終わった（新出沼元家文書、中島本政覚書など）。

小早川秀秋の入封　10月、小早川秀秋（のち秀詮。金吾、岡山・備前中納言。1582～1602）は、備前・美作両国の国主となり、美作国では、12月から倉敷城に木下勝助・萩原龍浦等を、同6年（1601）から高田城に木下斎之助を置いて引き続き支城とし、領国支配を進めている（「作陽誌」、「聞伝記」1など）。しかし、秀秋から名を改めた秀詮は、同7年（1602）10月18日に21歳で急死し、嗣子なく断絶したため、領国は収公された（「舜旧記」、足守木下家文書など）。

4　江戸時代

津山藩の成立　慶長 8 年（1603）2 月、美作国は森忠政（右近大夫。1570 ～ 1634）が拝領、信濃国川中島（長野県）から入部した。忠政は当初､院庄の構城に居住し､津山城を築城､元和 2 年（1616）に完成させた。継続して支城の高田城には､各務四郎兵衛､慶長 14 年（1609）春からは大塚丹後守を、倉敷城には同 13 年までは細野左兵衛、次いで忠政の叔父森可政（対馬守）を置き、大塚・森両家が数代にわたり各城代を勤めた。しかし後には、一国一城令、また領国内の軍事拠点が不要となったため、山上の施設は廃城となった。さらに、天草の乱が契機となり、寛永 15 年（1638）には幕府の命によって、領内で知られるだけでも院庄の構城（No.135。津山市院庄）や宮本武蔵屋敷（No.371。美作市宮本）など古城跡等の城破りが実施され､その機能を完全に断たれることとなった（「作陽誌」、「東作誌」、「聞伝記」1 など)。　（森　俊弘）

主要参考文献

長尾勝明・正木輝雄著、矢吹金一郎校訂『新訂作陽誌』一～八　作陽古書刊行会　1912 ～ 4。

東京大学史料編纂所編『大日本古文書』、毛利家文書など（文書番号を付し、毛利家○等と略称)。

藤井　駿・水野恭一郎共編『岡山県古文書集』第 1 ～ 4 輯（第 1 輯：共同印刷製本株式会社、1953。第 2 輯：瀬戸内海総合研究会、1955。第 3 輯：山陽図書出版株式会社、1956）思文閣出版 1981

山口県文書館編集・校訂『萩藩閥閲録』第 1 ～ 4 巻・遺漏　山口県文書館　1967 ～ 71（「閥」○と略称）

村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』上　雄松堂書店　1969

山陽新聞社編『ねねと木下家文書』同新聞社　1982

岡山県史編纂委員会『岡山県史』 中世Ⅰ・Ⅱ、近世Ⅰ・家わけ史料・編年史料　岡山県　1984 ～ 91

松岡久人編『南北朝遺文』中国・四国編 1 ～ 6　東京堂出版　1987 ～ 95

牧　祥三『美作地侍戦国史考』私家版　1987

田口義之「美作三星城主後藤勝基について」『岡山地方史研究』55　1987（改稿して『山城誌』第 17 号、2003）

佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』下、東京大学出版会　1988

皆木佽耿『美作中世史研究』1 ～補遺 2　私家版　1997 ～ 2004

山本浩樹『西国の戦国合戦』吉川弘文館　2007

長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館　2000

岸田裕之『大名領国の経済構造』岩波書店　2001

小川博毅『美作垪和郷戦乱記』吉備人出版　2002

畑　和良「浦上宗景権力の形成過程」（『岡山地方史研究』100、2003）

真庭市史資料編編纂委員会編『久世町史』資料編第 1 巻　編年資料　久世町教育委員会　2004

山下晃誉『上月合戦』上月町　2005

同　「天文前期の播磨における尼子氏勢力の動向」（『年報赤松氏研究』創刊号、2008）

美作町史編集委員会編『美作町史』通史編　美作市　2007
鏡野町史編集委員会・同町教育委員会編『鏡野町史』史料編・通史編　同町　2008・2009
拙稿「岡山城とその城下町の形成過程」（『岡山地方史研究』118 、2009）
「美作国の山城」編集委員会編『美作国の山城』第 25 回国民文化祭津山市実行委員会　2010
大西泰正編『備前宇喜多氏』岩田書院　2013
拙稿「中近世移行期草苅氏に関する通史的言説をめぐって」（『鳥取地域史研究』第 15 号、2013）
名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1・2、吉川弘文館　2015、6
拙稿「宇喜多直家の新出書状」（『津山市史研究』創刊号、2015）
内池英樹「鈴木家文書について」（『岡山県立博物館研究報告』第 36 号、2016）
光成準治『毛利輝元』ミネルヴァ書房　2016
森脇崇文「天正初期の備作地域情勢と毛利・織田氏」（『ヒストリア』254 号、2016）
拙稿「美作国守護代の歴史的展開」（『津山市史研究』第 3 号、2017）
黒田基樹「小早川秀秋」戎光祥出版　2017
光成準治『小早川隆景・秀秋』ミネルヴァ書房　2019
※「備藩国臣古証文」、「備藩古文書」は、東大史料編纂所データベースで閲覧し、畑　和良氏の論考は、歴史サイト『落穂ひろい』も参照した。また、「御答書」は山口県文書館所蔵の写本、「浦上覚書」（仮題）は拙稿「大森家が伝えた備前国の戦国時代」（『光基』11、2017）、「武家聞伝記」（「聞伝記」と略称）は岡山県立記録資料館編『『岡山のアーカイブズ』1・2、同館、2012、3 に拠った。
※（No. ○○）は本書第 2 章の城館番号と一致する。

美作国中世城館関連文献一覧表

凡例

・一次資料を除く主要な城館関連文献を近世地誌類、自治体史、その他関連文献、及び発掘調査ごとに別けて覧表を掲載している。なお、文献番号は通し番号である。

・各一覧表に記載されている文献番号は、出典文献の読み仮名順に振っている（順不同）。

・城館文献一覧表には報告書掲載番号、城館名とその城について記述がみられる文献番号を記載している。

近世地誌

・出典欄には資料名称と出典を記している。

・年代は出版年ではなく、編纂年を記している。

自治体史

・単著によるものは著者名を、共著によるものは編集者、あるいは出版者名を記している。

その他

・主に明治時代以降に編纂された地誌類や、軍記物、個人研究の一部を記している。

発掘調査報告書

・発掘調査対象となった城館名、出典、及び調査主体を記している。

表 10　美作国中世城館跡文献一覧表

近世地誌

文献番号	著者	出典	編集者・出版社	年代
1	平川親忠	「古戦場備中府志」『吉備群書集成』第五輯	吉備群書集成刊行會	享保20（1735）年
2	藤一雲	「天神山記」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	天明7（1787）年
3		「備前文明乱記」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	万治3年(1660)年
4	林盛竜軒	「美作鬢鏡」『吉備群書集成』第壹輯	吉備群書集成刊行會	享保2（1717）年
5	岡村白翁	「美作風土畧」『吉備群書集成』第貳輯	吉備群書集成刊行會	享保2（1717）年
6		「森家先代実録　美作国古城并城主之覚」『岡山県史』第25巻	岡山県史編纂委員会	文化6（1809）年

自治体史

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
7		『英田郡粟廣村史』	谷口一巳	1954年
8	椎口松玲	『英田郡史考』	小林晧二	1928年
9		『英田町史』	英田町史編纂委員会	1996年
10		『旭町誌』　資料編	旭町	2002年
11		『阿波村誌』	村制施行百周年記念事業実行委員会村史編纂部会	1993年
12	鳥家精孜	『植月村誌』		1893年
13		『大井西村誌』	髙柳美作	1953年
14		『大庭郡三阪村々誌』	勝山町教育委員会	
15		『岡山県大庭郡目木村地理誌』	勝山町教育委員会	
16		『岡山懸勝田郡志』	勝田郡役所	1912年
17		『岡山県史』第1巻	岡山県史編纂委員会	1983年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
18		『岡山県史』第4巻	岡山県史編纂委員会	1989年
19		『岡山県史』第5巻	岡山県史編纂委員会	1991年
20		『岡山県史』第6巻	岡山県史編纂委員会	1984年
21		『岡山県史』第7巻	岡山県史編纂委員会	1986年
22		『岡山県史』第17巻	岡山県史編纂委員会	1991年
23	永山卯三郎	『岡山県通史』上篇	岡山県	1930年
24		『奥津町史』　資料編	奥津町史編纂委員会	2009年
25		『奥津町史』　通史編　上巻	奥津町史編纂委員会	1905年
26		『奥津町史』　通史編　下巻	奥津町史編纂委員会	1905年
27	尾崎蘭青	『落合町史』		1972年
28		『落合町史』　地区誌編	落合町史編集委員会	1999年
29		『落合町史』　通史編	落合町史編集委員会	2004年
30		『鏡野町史』　考古史料編	鏡野町史編纂委員会・鏡野町教育委員会	2000年
31		『鏡野町史』　民俗編	鏡野町史編纂委員会・鏡野町教育委員会	1993年
32		『鏡野の歴史』　史料集1	鏡野町学校教育研修所	1959年
33		『勝賀茂村史』	寺坂五夫	1951年
34		『勝加茂史』	寺坂五夫	1959年
35		『勝田郡豊国村誌』	椎口松玲	1952年
36		『勝田町誌』	勝田町誌編纂委員会編纂	1975年
37		『合併記念　勝田郡誌』	勝田郡誌刊行会	1958年
38	権田甚四郎	『勝間田町誌』正編	勝間田町	1927年
39		『勝山町史』　前編	勝山町史編集委員会	1974年
40		『勝山町史』　後編	勝山町史編集委員会	1982年
41		『勝山町略史』	勝山町教育委員会	1968年
42		『上斎原村史』　通史編	上斎原村	2001年
43		『加茂町史』　本編	加茂町史編纂委員会	1975年
44	石井常太郎	『久世町誌』		1932年
45		『久世町史』	久世町史編集委員会	1975年
46		『久米郡誌』	久米郡教育会	1923年
47		『久米町史』上巻	久米町史編纂委員会編	1984年
48		『久米町史』下巻	久米町史編纂委員会編	1984年
49		『久米南町誌』	久米南町誌編纂委員会編	1982年
50		『西西条郡地誌』	私立西西条郡教育会	1892年
51		『新編　作東町の歴史』	新編・作東町の歴史編集室編	1967年
52		『郷の村誌』	寺阪五夫編	1960年
53		『勝央町誌』	勝央町誌発行委員会	1984年
54		『勝北町誌』	勝北町教育委員会編	1905年
55		『勝北町誌』	勝北町企画広報課	1991年
56		『新庄村史』　前編	森本清丸編	1966年
57		『新野村史』	寺阪五夫編	1957年
58		『村誌美甘』上巻	美甘村誌編纂委員会編	1974年
59		『建部町史』　地区編・史料編	建部町	1991年
60		『建部町史』　通史編	建部町	1995年
61		『建部町史』　民俗編	建部町	1992年
62		『建部町略史』	建部町	1977年
63		『中和村史』	中和村史編纂委員会	1975年
64		『津山市史』第1巻　原始・古代	津山市史編さん委員会編	1972年
65		『津山市史』第2巻　中世	津山市史編さん委員会編	1977年
66		『津山市史』第3巻　近世Ⅰ	津山市史編さん委員会編	1973年
67		『津山市史』第6巻　現代Ⅰ	津山市史編さん委員会編	1980年
68		『苫田郡誌』	苫田郡教育委員会	1927年
69		『富村郷土誌』	山崎節治	1966年
70		『富村史』	富村史編纂委員会	1989年
71	尾崎蘭青	『富原村史』	富原公有林保護料管理委員会	1961年
72		『豊沢誌』	寺阪五夫	1962年
73		『奈義町誌』	奈義町誌編纂委員会	1980年
74		『奈義町誌』　続編	奈義町誌編纂委員会	1994年
75		『二川村史』	二川村史刊行会	1965年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
76		『西粟倉村史』　後編	西粟倉村史編纂委員会	1977年
77	中尾泰二	『広戸村誌』	広戸村誌発刊委員会	1977年
78		『眞庭郡誌』全	真庭郡役所	1923年
79		『三保村誌』	落合可卜	1928年
80		『美作史跡名勝誌』	寺阪五夫	1963年
81		『美作町史』　絵図・文化財編	美作町史編集委員会	2004年
82		『美作国大庭郡久世村地誌』	勝山町教育委員会	
83		『籾村風土記』	石田農夫男	1973年
84		『八束村史』	八束村	1982年
85	二司百合子	『岡山県真庭郡勝山町山久世小史』	真庭市役所商工観光課	1985年
86	丸山肇	『弓削町史』		1954年
87		『湯原町誌』	湯原町	1941年
88	森本清	『湯原町史』　前編		1953年

その他

文献番号	著者	出典	編集者・出版社	年代
89		『院庄誌』	院庄記念誌編纂委員会	1979年
90		『通俗日本全史 13･14巻 陰徳太平記』	早稲田大学出版部	1913年
91	平井春樹	『おかやまの歴史』	河原書店	1960年
92		『勝田町の城址と構え跡』	勝田町文化財保護委員会	
93	平山登一	『郷土の武将　草苅氏興亡記-矢筈城をめぐる郷土史-』	加茂郷土史研究会	1973年
94		『郷土の文化資料』1集	柵原町郷土文化研究会	1969年
95		『郷土の文化資料』2集	柵原町郷土文化研究会	1970年
96	谷口澄夫他	『郷土の歴史』　中国編	宝文館	1959年
97		『新訂作陽誌　1 西作誌　上巻』	矢吹金一郎	1912年
98		『新訂作陽誌　3 西作誌　下巻』	矢吹金一郎	1913年
99		『新訂作陽誌　4 東作誌　1巻』	矢吹金一郎	1913年
100		『新訂作陽誌　7 東作誌　4巻』	矢吹金一郎	1913年
101	五弓久文	『三備史略』巻之三	府中村	1894年
102		『山陽の城』	小学館	1989年
103	早田玄洞	『史上の吉備』下	歴史図書社	1980年
104	木村増夫	『勝央今昔滝川のほとり』	勝央町	1978年
105	美濃源三郎	『城と城主と戦』	西日本古城研究会	1972年
106	柴田一	『新釈備前軍記』	山陽新聞社	1986年
107	加原耕作	『新釈備中兵乱記』	山陽新聞社	1987年
108		『地域研究』第24集	岡山大学教育学部社会科教育内地域研究会	1984年
109		「中国兵乱記　第二巻」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	1922年
110		『通俗日本全史　13･14巻　中国兵乱記　第二巻	早稲田大学出版部	1913年
111		『中世瀬戸内をゆく』	山陽新聞社	1981年
112	今井三郎	『津山坪井町の歩み』		1959年
113		「美作古城合戦記」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	1922年
114		『奈義町内の中世城郭』	奈義町郷土の歴史を知る会	1993年
115		『日本城郭全集』10	人物往来社	1967年
116		『日本城郭全集』15	人物往来社	1968年
117	葛原克人	『日本城郭大系』13	新人物往来社	1980年
118	土肥経平	「備前軍記 上」『吉備叢書』　第5巻	小橋藻三衛	1898年
119	美濃源三郎	『備前太平記』巻一　東備前の巻	郷土史研究会	1964年
120	角田直一	『備中兵乱常山合戦』	山陽新聞社	1984年
121	藤原姓某	「三星軍伝記」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	1922年
122		「美作一覧紀」『岡山県史』第27巻	岡山県史編纂委員会	1981年
123		『美作一国鏡』『岡山県史』第27巻	岡山県史編纂委員会	1981年
124	福島政民	『美作鏡抄』『吉備群書集成』第貳輯	吉備群書集成刊行會	1921年
125		『美作郷土読本』上巻	野村完六	1936年
126		『美作郷土読本』中巻	野村完六	1930年

文献番号	著者	出典	編集者・出版社	年代
127		『美作郷土読本』下巻	野村完六	1930年
128		「美作古城記」『新編吉備叢書』第1巻	新編吉備叢書刊行会	1897年
129	寺阪五夫	『美作古城史』		1956年
130		「美作太平記」巻之三『新編吉備叢書』第1巻	新編吉備叢書刊行会	1976年
131		「美作太平記」巻之四『新編吉備叢書』第1巻	新編吉備叢書刊行会	1976年
132		『美作町の歴史と現在』	岡山大学教育学部社会科教室内 地域研究会	1984年
133		『美作国の山城』	「美作国の山城」編集委員会	2010年
134		『美作物語』1	島田秀三郎	1979年
135	石田農夫男	『籾村物語』	美作出版社	1974年
136		『わたしたちの郷土　鏡野の歴史』	鏡野町学校教育研修所	1962年
137		『倭文志稿』	寺阪五夫・槙茂雄	1952年

発掘調査

文献番号	出典	編集者・出版社	年代
138	「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3	岡山県教育委員会	1974年
139	「院庄構城跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』82	津山市教育委員会	2013年
140	「院庄館跡」『史跡院庄館跡発掘調査報告』	津山市教育委員会	1974年
142	「河内構跡　河内城跡　久田上原城跡　比丘尼ヶ城跡　城峪城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170	岡山県教育委員会	2003年
143	『鞍懸城跡・尼ヶ城跡　携帯電話基地局建設に伴う発掘調査報告』	ソフトバンク中国・NTTドコモ中国・岡山県美作市教育委員会	2012年
144	「小坂向城山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』176	岡山県教育委員会	2003年
145	「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』7	津山市教育委員会	1981年
146	「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査布告』192	岡山県教育委員会	2005年
147	『篠向城』	久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会	2008年
148	『篠向城跡』	NTTドコモ中国受信施設建設埋蔵文化財調査委員会	2007年
149	「須内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11	岡山県教育委員会	1976年
150	「須の内遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』4	落合町教育委員会	2004年
151	「高田城跡」『高田城三の丸遺跡』	勝山町教育委員会	2005年
152	「高田城　田楽城」『真庭市埋蔵文化財調査報告』3	真庭市教育委員会	2010年
153	「真庭市指定史跡高田城跡総合調査報告」『真庭市埋蔵文化財調査報告』6	真庭市教育委員会	2015年
154	「津山城跡」『史跡津山城跡保存整備事業報告書』1	津山市教育委員会	2007年
155	「津山城跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』86	津山市教育委員会	2016年
156	「津山城跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』87	津山市教育委員会	2017年
157	「津山城跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』88	津山市教育委員会	2018年
158	「津山城跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』90	津山市教育委員会	2019年
159	「津山城跡」『津山城宮川門跡石垣保存修理事業報告書』	津山市教育委員会	2012年
160	「羽庭城跡」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3	久世町教育委員会	1999年
161	「茂平城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111	岡山県教育委員会	1996年
162	「藪逕山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166	岡山県教育委員会	2002年

表 11　美作国中世城館跡城館関連文献

城館番号	城館名	別称	文献番号
1	徳山城山城跡	徳山屋敷・徳山砦	39,78,116,117,133
2	波作利城跡	岩倉山城	39,56,75,78,84,115,117,133
3	粟住山城跡	粟角山城	39,56,75,78,115,117,133
4	経塚山城跡		133
7	飯山城跡		23,39,56,65,75,78,87,88,98,116,117,133
8	名称未定	城・豪族屋敷	133
9	向立石城		133
11	城ヶ山城跡		133
12	釜戸原城跡		133
13	塚原城		133
14	大沼山陣所跡	大沼山屯所・大沼山城・大沼山	39,65,66,88,133

城館番号	城館名	別称	文献番号
15	要害山城跡	要害山	98,58,133
16	小坂向城山城	小坂向山城	87,88,133,143
17	常隆院屋敷		133
18	見明戸城山城跡	鷂山城・鷂山・鶏山・鶏山屯所	87,88,98,133
19	目地城跡	目地山城・目地山屯所・目地屯所・目地	39,87,88,133
20	藪谿山城跡		133,162
21	土居城跡	土居屯所・土居	39,87,88,133
22	麓城跡	麓山城・美甘麓ノ城・麓山城趾	39,41,56,58,75,78,98,103,115,117,133
23	陣山城跡		133
24	陣山城跡		133
25	山根城跡	陣山	133
26	清谷城山城跡	城山	71,133
27	岩明山城跡	岩明山	71,133
28	臼水城跡		133
29	大料城跡	大領城・横塚城跡	39,98,117,133
30	出羽屋敷	高田庄柴原村	39,98,133
31	舟津屋敷		98,133
32	陣山砦跡	神山	39,41,78,98,116,133
33	高田城跡	高田山の城・高田の城・大総山城・高田山城・勝山城・高田	3,4,6,9,10,14,18,19,20,22,23,25,26,28,29,32,36,37,39,40,41,44,45,47,49,56,58,65,66,68,69,71,78,79,80,86,87,88,89,90,91,98,101,102,103,105,106,107,115,117,118,126,131,133,134,137,151,152,153
35	若代城跡	岩井谷・若代堡	39,56,71,78,98,116,117,133
36	則行城跡	岩井の城・岩井城・則行堡	4,6,23,39,56,71,78,98,116,117,133
37	荒木屋敷		71,133
39	浅田城跡	福谷の浅田の城	39,41,133
40	飯ノ山城跡		4,6,28,29,39,49,56,78,98,116,117,133
41	牧土居		133
42	阿波土居		133
43	梶原屋敷跡		27,29,39,41,43,44,45,65,68,89,98,117,133
44	殿土井		44,133
45	飯山城跡		44,117,133
46	惣七遺跡		44,133
47	金砕山城跡		29,45,133
48	月沢城跡	月澤城	4,6,23,27,28,29,39,56,65,78,88,98,116,133
49	本山城跡	月田本・本山・本山の城・八幡山南台の塁	4,6,23,39,71,78,98,102,116,117,133
50	栩原城跡		39,117,133
51	後山谷城跡		27,133
52	三堂坂城跡	山屋堡	4,6,23,39,56,78,98,102,115,117,133
53	鳶乃森城跡	宮原山城	133
54	月田城跡	月田山の城・月田山城	4,6,27,28,29,39,41,44,56,65,71,75,78,98,102,103,107,109,116,120,133
55	野田屋敷跡		29,133
56	宮山城跡		4,6,19,23,26,27,28,29,32,39,44,47,49,56,65,71,78,93,98,102,103,106,110,115,116,117,118,130,133
57	城山城跡		4,27,29,133
58	佐引城跡		4,6,23,28,29,39,56,78,98,116,133
59	注連山城跡		4,6,23,27,28,29,39,56,75,78,98,103,116,117,133
60	蜂ヶ城跡		28,29,39,117,133
61	植木構跡		28,101,117,129,133,149,150
62	石ヶ城跡		4,28,29,32,39,78,98,103,116,117,133
63	真木ヶ城跡		27,28,29,39,47,56,66,75,78,88,98,116,133
64	十六城跡		6,23,29,39,56,78,98,116,133
65	栗原城跡	栗原の城	4,6,23,27,28,29,39,56,78,116,117,133
66	都我布呂城跡	上山城・栂森城・都我風呂城	4,6,22,23,28,29,39,56,78,98,103,116,117,119,133
67	城山城跡		4,6,27,28,29,39,133
68	日爪城跡		39,78,98,116,117,133
70	山名屋敷跡		78,116,133
71	田井城跡		39,78,87,88,98,103,116,117,133

城館番号	城館名	別称	文献番号
72	殿屋敷遺跡		63,133
73	下和城跡		39,63,78,98,116,117,133
74	初和城山堡		63,133
75	湯山城跡		4,6,23,39,44,75,78,87,88,90,98,102,115,116,117,133
76	大壇城跡	大壇堡・城ヶ段の城跡	39,85,98,117,133
77	茶臼山城跡		4,6,14,23,29,39,44,47,58,78,102,117,133
78	大寺畑城跡		4,6,14,19,23,26,27,28,29,32,39,43,44,45,47,49,65,71,78,82,88,90,91,93,98,102,103,106,115,117,118,133
79	陣山城跡		44,78,82,98,116,117,133
80	小寺畑城		14,22,26,27,29,39,43,44,45,65,78,82,90,102,103,106,115,117,118,133
81	羽庭城跡		133,160
82	砥石山城跡		28,29,45,90,103,106,118,133
83	神上城跡		4,6,34,39,45,78,98,117,128,133
84	二ツ山城跡		23,39,65,78,88,98,116,117,133
85	高山城跡		4,22,23,28,39,65,69,78,93,98,102,117,133
87	上ヶ市遺跡		44,133
88	篠向城跡		4,6,10,15,18,19,22,23,25,26,27,28,29,32,35,39,41,43,44,45,47,49,56,65,66,71,75,79,88,89,90,93,98,102,103,106,115,117,118,124,128,133,134,137,147,148
89	目木構跡		117,133
90	持家城跡		6,23,28,29,39,78,98,116,133
91	鳥越山城跡		29,133
92	名称未定		133
93	田楽城跡		28,29,39,78,98,116,133
94	赤野遺跡		25,29,133,138
95	高山城		23,25,29,78,116,117,133
96	逆巻城跡		4,6,23,28,29,39,78,116,117,133
97	土器尾城跡		23,25,28,29,39,78,103,116,117,133
98	陣山		25,133
99	奥津城山城跡	城尾山・城尾山城跡・鷹の巣城・鷹巣山城	25,133
100	余瀬ヶ城跡		25,25,25,26,68,117,129,133
101	西浦城跡	西浦の城・西浦・養野城・井坂堡	4,6,13,23,23,25,26,27,65,68,69,102,113,117,125,128,129,133,136
102	寄山城跡		26,68,133
103	二山城跡	二山の城・二ツ山城・弐ッ山	4,6,23,26,68,102,133
104	小丸城跡		25,26,133
105	西屋城跡	西屋の城・西屋	4,22,23,24,25,26,32,50,52,65,68,80,102,115,117,126,129,133
106	斉藤別遺跡		25,97,133
107	侍屋敷跡		25,97,133
108	岡の屻城跡	三塚の壇	70,133
109	城山		70,133
110	ビクニガ城跡	びくにヶ城・比丘尼ヶ城	69,70,133
111	天狗山城		25,26,133
112	河内構遺跡		25,97,133,129,142
113	河内城跡		25,133,142
114	東山城跡	末谷の城	25,133
115	久田上原城跡	城尾山・上ノ原城	25,133,142
116	久田堀ノ内遺跡	堀ノ内・堀ノ内遺跡	25,133,143
117	比丘尼ヶ城跡	下原城・比丘尼城	25,68,133,142
118	城峪城跡	城峪	25,133,142
119	小田草城跡	小田草之城・小田草山・小田草	4,6,9,22,23,25,26,31,32,36,39,44,47,50,52,58,65,68,69,90,93,102,103,116,117,129,133,136
120	城山城跡	城山・西浦城	23,102,133
121	岩棚構跡		32,97,117,129,133
122	葛下城跡	葛下の城・葛下ノ城・葛下	4,6,13,23,25,26,27,30,31,32,34,47,50,52,65,68,69,80,90,102,103,106,116,118,129,133,136
123	春日城跡	春日山城・中屋山城・平三屋敷・城山	30,31,32,117,129,133,136
124	犬城跡	犬ヶ城・張方城	31,133

城館番号	城館名	別称	文献番号
125	小田城跡	高山城	23,30,31,32,52,68,117,129,133,136
126	キリゴ谷城山城跡	城山・後谷城・後谷	30,52,129,133
127	鴨津の構跡	石須構・石津構	30,97,117,129,133
128	大田和城跡	大田和堡・大田和砦・大田和山・太田和山	31,32,103,116,117,126,129,133
129	沖構跡	沖構城・構城・沖の構城・毛利構城・円宗寺	6,23,30,31,32,47,49,50,65,66,68,97,102,103,116,117,126,129,133,136
130	目崎城跡	眼崎城・根崎城・眼崎	4,6,23,30,32,47,50,52,68,115,117,129,133,136
131	古川城跡	古川村城	30,32,117,133,136
132	因幡殿		32
133	局笠山城跡	下田邑局笠山遺跡	68.133
134	院庄館跡	院荘・院庄府城・構の城・院庄の城地・院の庄・院庄の館	4,5,9,17,18,19,22,23,25,29,46,47,49,55,58,67,69,70,79,80,89,97,111,117,124,126,129,133,134,137,140,141,145
135	院庄構城跡	院庄城・構城・院ノ庄府城・院庄の構城・院庄城・院の庄村古城・院庄構・構城	6,9,20,23,32,50,56,65,66,80,89,91,115,117,119,133,136,139
136	美和山城跡	二ノ宮城・二宮城・構・城山	4,6,19,23,37,65,68,80,94,102,103,115,117,129,132,133
137	下原構跡	構城	30,52,93,117,133
138	さんこう城跡		30,117,133
139	相坂城跡	逢阪城・相坂ノ城・あふさかの城・あふさか	4,6,23,30,32,68,117,133,136
140	日上山城跡	日上城・日上ノ城・日上山城・ひかミ・(日上山) 堡跡	4,6,23,29,30,32,35,68,97,103,117,129,132,133,136
141	桝形城跡	升形城・升形ノ城・升形・舛形の城・桝形山城・桝形山・枡形・益形・益形城	4,6,20,22,23,26,30,31,32,35,47,66,68,69,90,93,97,101,102,103,106,115,117,118,121,125,129,133,136
142	東田辺城山遺跡		133
143	黒沢山城跡		133
144	東田辺谷上遺跡	谷上城	133
145	山名房安居館跡	山名房安構・山名屋敷・山名旧宅・構城	30,31,32,117,129,133
146	一宮長良獄遺跡	長良嶽城	133
147	一宮甲宮ノ谷遺跡		133
148	天王木土塁跡		115
149	茶臼山城跡	茶臼山に陣・大田和堡	31,32,68,126,133
151	神楽尾城跡	神官神楽尾城・新宮神楽尾・神楽尾・神樂尾城・神楽城・神楽岡ノ城・神樂尾	4,5,6,20,23,25,26,32,37,65,66,68,69,80,86,93,97,102,103,115,117,125,128,129,133
152	津山城跡	鶴山・鶴山城・鶴山に城・津山鶴山城・津山・鶴山古の城	5,6,9,10,17,19,20,21,22,23,25,29,31,32,34,35,37,41,44,47,49,51,52,57,58,64,65,66,67,68,69,79,80,88,102,112,115,117,122,123,126,127,128,129,133,136,153,154,155,156,157,158,159
153	殿ノ山城跡		133
155	室尾城跡	室尾・高尾城・石米・石米山城・石米城	6,22,23,26,37,43,65,68,93,115,117,129,133
156	内構跡		117
157	矢筈城跡	矢筈山城・矢筈の城・高山城・高山の城・矢倉城・高山	4,6,11,20,22,23,26,29,32,37,39,43,47,57,65,66,68,88,90,93,99,102,103,113,115,125,126,128,129,133
158	百々城跡	落合城・百々ノ城・百々・城山・日詰城	4,6,23,43,68,93,99,116,117,129,133
159	佐良山城跡	佐良山	4,22,23,25,43,65,93,99,113,117,126,128
160	仙の城跡	仙ノ城	23,93,99,133
161	行重城跡	行重山城・行重山	4,6,23,43,68,129,133
162	梶間山城跡		99.133
163	松ヶ屸城跡	松ヶ屸古城	93,99,103,117,129,133
164	笠松城跡	笠松といふ古城	43,68,93,99,116,117,129,133
165	利元城跡	年本城・歳本城・利元・年本・年元・年元城	4,6,23,32,66,68,99,103,117,129,133
166	吉見仙砦跡		23,99,117,133
167	天狗寺城跡		133
168	烏ヶ仙城跡	鳥ヶ山古城・烏ヶ山城・烏ヶ山・仙々城	65,68,99,129,133
169	塩屋ヶ城跡		103,117,129,133
170	天神山城跡		4,6,23,68,99,102,129,133
171	福田城跡		4,128
172	懸縄山城跡	懸縄山	99,129,133
173	うらば城跡		133

城館番号	城館名	別称	文献番号
174	上横野谷口遺跡	横田城	4,133
175	横田城跡	福田城	4,133
176	藤田山城跡	藤田城・藤多山城・藤田の城・藤田の城・高倉山麓の陣・高倉山の麓に陣・藤田山古城・たう多山	4,6,23,35,99,102,113,115,124,128,129,133
177	台山城跡	大山城・大山の城・臺山古城・台山城・代山	4,6,23,99,102,115,117,129,133
178	別所城跡	別所	4,6,23,68,99,102,117,129,133
179	医王山城跡	祝山城・岩尾山城・岩尾山・岩尾山の城・祝山城・岩尾古城・伊王山・醫王山・祝山	4,6,22,23,25,26,28,29,31,32,34,57,65,68,72,80,90,93,99,101,103,106,113,115,117,118,121,128,129,133
180	鉢伏城跡	八臥城・鉢伏山城・八臥	6,23,68,93,117,129,133
181	小丸山城跡	天神山城・小丸山	23,47,99,129,133
182	池上城跡	池上砦	99,129,133
183	中陣跡		93,117,129,133
184	山方深田遺跡		133
185	山方高築遺跡	関勘解由屋敷	99,129,133
186	高野城跡	築地跡北村の内・城	23,99,117,129,133
187	高味城跡	高味籠屋・高味・宮部高味	47,133
188	城山城跡	城山・中仙道城山	37,47,133
189	岩屋城跡	岩屋の城・岩屋・岩屋山の城・岩屋山	4,6,9,13,19,20,22,23,25,26,27,28,29,31,32,34,35,36,39,44,46,47,48,49,51,52,58,65,66,68,69,79,80,88,90,91,93,101,102,103,106,113,115,117,118,119,125,126,133,135,136,137
190	岩屋城付城群		25,47,133
191	一備谷砦跡	与右衛門ノ上・与右衛門ノ上城	25,47,133
192	八幡砦城跡	八幡城垉	133
193	宮ノ上城跡	日吉城・日吉神社裏山	47,133
194	茶臼山城跡	茶臼山・茶臼山古戦場	13,46,116,133
195	姿山砦跡	姿山	47,133
196	亀山城跡	河本城	13,46,47,115,117,133
197	磯尾営跡	以曽宇営・いそう城	13,46,47,116,117,133
198	加治子山城跡	加治子山・加治子山古戦場・寄合場	13,46,47,115,117,133
199	萩丸城跡	月沢城・月澤城	10,28,46,115,117,126,133,137
200	城小屋跡		133
201	横岩城跡		133
202	年末塁跡	年末壘趾	13,46,47,117,133
203	円宗寺城跡	円住寺山城・圓住寺山城址・円宗寺山城址	23,46,47,115,117,133,137
204	鍋山遺跡		133
205	構城跡	構ノ城・構の城・構・川原屋敷	4,6,23,46,47,117,133,137
206	平福寺城跡	平福城・江原兵庫助屋敷	4,6,23,46,47,116,117,133,137
207	稲荷山城跡（立満砦）	立万城・立満城・立萬城・立萬砦・立萬とりで	32,46,65,79,115,117,133,137
208	八幡屋敷城跡		137
209	江原兵庫助別墅跡		46,47,133,137
210	戸脇土塁跡		23
211	天神山城跡	天神山	4,6,23,46,115,117,133
212	一之瀬城跡	一瀬城・一の瀬城・一瀬の城・一ノ瀬城・市瀬の城・一瀬山城・一之瀬城・一之瀬・垉和の一瀬砦	4,6,10,23,46,59,60,62,103,115,117,128,133
213	高山城	高山の城・高山・江原城	4,6,23,47,80,90,102,116,117,133,137
214	鬼山城跡	鬼山	4,6,23,117,133
215	江原城跡	中山手城・中山手の城・中山手・久米郡中山手村の城・常山城	4,6,10,23,29,39,46,80,102,115,117,133
216	丸山城跡		10,133
217	三宮城跡	三ノ宮城・三宮	10,46,60,103,106,115,117,118,133
218	鳥首城跡（仮）		133
219	金地城跡		133
220	城山城跡	城山	46,133
222	天神山城跡	是久山・天神山城跡・邑久山城	4,6,117,133

城館番号	城館名	別称	文献番号
225	高陣城跡	高陣の城・高陣峰・高陣	4,6,23,46,102,117,133
228	城山城	打穴城	116,117
233	鳥越山城跡	鳥越城・鳥越の城	4,23,35,46,115,117,133
234	茶臼山城跡	茶臼山陣・茶臼山	46,116,133
235	高土城跡		46,115,117,133
236	城能城跡		133
237	三角城跡		133
239	寄城跡		61,117
241	蕨尾城跡		115
243	嵯峨山城跡	佐加山城・佐加山の城・佐加山・嵯峨山	4,6,32,35,47,66,68,79,103,106,115,117,118,133,136
244	神南備山城跡	間鍋山城・間鍋山・藤田山城	4,6,68,133
245	小桁城跡	神原山城・神原山	115,117
246	皿山城跡	佐良山城・篠山城・皿山の城・皿山・皿山城	4,5,6,22,32,46,65,68,91,102,103,106,118,133
247	丸山城跡	丸山の城	4,6,117,133
249	是久山城跡		113
250	荒神山城跡	荒神山・荒神山の城	2,4,5,6,20,22,26,29,32,35,39,47,52,65,66,90,95,101,102,103,106,118,121,125,128,133
251	大谷城跡	大谷	4,6,46,117,133
254	稲荷山城跡	稲荷山・稲荷山の城	4,6,19,20,29,32,37,46,49,65,91,102,103,113,117,128,133
255	新城城跡	新庄山城・新庄山・新城山・藤多城・新庄山に城・別城を新荘山	4,6,46,51,103,106,116,117,118,128,133
256	丸山城跡	丸尾山城	46,116,117,133
258	原田故営堂跡	原田監物故営・原田監物の故営	46,115
259	本丸城跡		46,60,115,117
260	大将軍城跡		46,115,117,133
261	奥谷城跡	奥谷	4,6,46,116,133
262	稗の元城跡	桶ノ本城	46,86,115,117,133
263	秋小屋城跡	本丸城	60,86,115,117,133
264	上殿城跡	上の殿城・上ン殿城	46,83,117,133,135
265	将監山城跡		117,133
266	立畑城跡	立畑の城・立畑	4,6,46,49,86,102,117,133
267	安盛城跡	安盛寿尾・安盛	4,6,46,86,103,117,133
268	上原陣跡	沖原に陣	86,116,117,133
269	大戸山轟城跡	轟山城・轟城・トトメキ山城	4,6,46,94,102,117,133
270	名称未定（高城跡？）	高城・城ヶ山	133
271	（仮）藤原城跡	丸山城跡	94,133
272	竜王山城跡		6,83,133
273	草木城跡	草木の城・草木	4,6,23,46,49,60,79,86,102,103,105,106,115,117,118,133
274	下風城跡	下風の城・衣笠城・おしろ	4,6,46,133
275	伏山城跡	ぶゝ山	6,46,117,133
276	伊勢畑城跡		4,6,23,46,60,62,79,86,102,117,133
277	小松城跡		4,26,46,60,62,79,86,102,117,133
278	沼元構跡	中山城・中山	117
279	大西構跡		133
280	蓮華寺城跡	蓮下池の城・蓮花寺の城・蓮華寺山城・連下地	4,6,23,39,46,47,49,60,65,83,86,117,133,135
281	大植城跡	大上・大上城	4,6,23,46,60,117,133
282	仲山城跡		54,57,117,129,133
283	黒目城跡	黒見山城・黒女城	57,117,129,133
284	堀坂城跡	堀坂	23,55
285	烏帽子形城跡	金剛寺山城・金剛寺城・金剛山城・金剛寺・烏帽子形城・烏帽子形・舊城金剛寺	4,6,23,37,54,55,57,102,117,121,128,129,133
286	河原山城跡		133
287	本丸城跡	本丸・吹山城・吹山・俚谷本丸・廣戸城	6,23,37,54,55,57,77,80,133
288	国司尾館跡		133

城館番号	城館名	別称	文献番号
289	吹山城跡	吹山の城・吹山	4,37,54,57,117,129,133
290	名称未定		133
291	天王山		133
292	金森城跡	金盛山城・金盛山・金森山古城・古城跡	4,23,33,34,54,55,73
293	矢櫃城跡	矢遣の城・矢櫃・伊伏矢櫃・詰ヶ城	4,6,19,54,57,73,77,95,102,121,129,133
294	爪ヶ城跡	詰ヶ城	54,133
296	名木ノ城跡	名木山城・名木能仙城・ナキカ仙城・名木能仙二箇所城・木杣二箇処の城・名木仙二か所の城・名木能仙二城・能仙・名木能杣二ヶ所之城・なきか仙・名木仙二か所の城	4,6,18,25,29,32,35,37,43,44,54,55,65,68,77,91,102,103,124,128,134
297	細尾城跡	畑尾の城・細尾山城・細尾	4,6,16,19,29,32,37,55,57,65,72,73,93,102,103,117,128,129,133
298	八巻城跡	大見丈の城・大見丈城・八巻山を切開き籠城・奈義仙城	4,55,121,128,133
299	今宮城跡	今宮の城	16,37,73,117,128,129,133
300	菩提寺城跡	奈義能山・菩提寺ノ城・菩提寺ノ城・菩提寺の城・菩提寺	4,5,6,16,18,19,23,25,29,32,35,37,43,44,49,51,54,55,57,65,73,80,91,103,119,121,124,129,133,134
301	大別当城跡	大見丈ノ城・大見丈城・大見丈の城・能畝の城・大別当城・能仙・奈義能仙・大見丈城・大別当・大別當	4,6,16,18,19,23,25,29,35,43,44,54,73,102,103,115,117,121,128,129,133
302	鎌倉山城跡	鎌倉山	4,6,16,23,37,73,102,115,129,133
303	右手城址		36,115,133
304	岡・城が端城跡	赤迩城	4,16,37,73,105,117,128,129,133
306	加賀尾城跡		4,16,37,73,117,128,129,133
307	丸山城跡		16,37,73,117,129,133
308	久常城跡	久常の城・久常の構	37,117,121,128,129,133
309	福光屋敷跡	福光三郎屋敷跡・長者屋敷	4,37,73,117,129,133
310	有元城跡	有元が城・有元・西坪城・中島山城	16,29,36,73,74,93,115,121,129,133
311	余野山屋敷城	山屋敷城	37,115,133
313	長畑構跡		16,36,115,117,133
314	富坂屋敷跡	上の土居	36,37,115,117,133
315	野田城跡・野田構跡	構	4,16,23,33,34,37,115,116,129,133
317	岩倉山城跡	岩黒倉山城・岩黒城・岩黒山城・岩倉（黒）山	6,16,23,53,115,117,129,133
318	植月城跡	宮山城・宮山・小山城	4,6,12,16,23,37,53,102,104,117,129,133
319	新宮城跡	神宮山城・新宮	4,6,16,37,103,117,124,129,133
320	構城跡	構の城	53,117,129,133
321	茂平城		53,133,161
322	鬼ヶ池城跡	鬼池ヶ城	53,117,133
323	大谷城跡	金山城・下大谷城・下大谷	4,6,23,129,133
324	石生構跡		53,115,117,129,133
325	小風呂山城跡	小風呂城	16,36,37,53,104,117,129,133
326	構城跡	構・美野村構址	16,37,53,104,117,129,133
327	鎌倉屋敷跡		37,53,104,117,129,133
328	上ノ山城跡	真加部山城・眞加部山城・上の山城・真加部城・真加部山	6,16,36,37,53,115,117,121,129,133
329	大爺の構跡		36,104,117,133
330	真加部城	眞加部構・真加部の城	4,6,16,23,35,36,37,51,53,115,116,117,129,133
331	河内山城跡	河内城	4,6,16,23,36,37,51,53,73,102,115,117,129,133
332	別所山城	大町山城・大町山	4,16,23,36,37,53,116,117,129,133
333	星尾城	星尾山城	16,36,37,115,116,117,129,133
334	比丘尼城跡		129,133
335	河辺構跡	河辺城	117,129,133
336	河辺城跡		117,129,133
337	瓜生原城跡	相賀屋敷	4,23,37
338	横手城跡	シヤワガ(勝又尉)横手・田淵城・田淵の城・勝横手城・尉ヶ城・じやうがよこて	4,6,16,23,37,95,102,117,133
339	姥ヶ城跡	姥か	4,6,16,23,37,95,117,129,133
340	井上城跡（塔尾城）	塔屋（尾）城・塔尾城・塔尾	94,103,133
341	神田城跡	神田山城・神田山・為本	4,6,16,23,37,53,102,104,117,129,133

城館番号	城館名	別称	文献番号
342	高取城跡（為本城）	為本城	53,121,133
343	新造構跡		37,117,129,133
344	東吉田城跡	吉田の城・吉田城	4,6,129,133
345	大谷城跡	下大谷城	4,23,133
346	糸山筑紫城跡	糸山筑紫(円山)城・筑紫城・京山筑峰城・圓山筑紫城・糸山城・いと山　筑紫	4,6,23,36,37,53,104,116,117,129,133
347	岡城跡		115,117,133
348	城の尾山城跡	城ノ尾山城・城ノ尾山	37,133
349	小矢田城（戸倉城）		4,6,9,16,23,38,53,115,117,129,133
350	三星城	妙見城・妙見・入田の城・三星	2,4,5,6,9,18,19,22,23,25,26,29,32,34,35,36,37,39,43,44,51,55,57,65,68,69,77,80,81,88,90,93,94,95,96,102,103,104,106,108,117,118,120,121,125,128,129,132,133,134
351	尼ヶ城跡		4,100,133
352	舞山城		133
353	鴛渕山城跡	鷲淵山・羽仁山の城・羽仁山城跡・羽仁城	19,22,32,37,79,94,95,117,121,129,133
354	金室城跡	金風呂(室)城・金風呂城・金室山・金ふろ・金室・金室山城	4,6,16,23,32,37,65,94,95,102,103,117,125,129,132,133
355	鷲山城跡	鷲山の城・鷲山・飯岡・飯岡城・飯岡の城	2,4,6,9,16,23,35,37,65,94,95,102,103,106,117,118,121,128,129,132,133
356	井内城跡	下山城・下山城・下山の城・下山・猪内の古城・井内城・井の内城址・井ノ内の城・井之内城・井ノ内城・菜喰の城・大山	2,4,6,9,16,23,32,39,44,65,95,103,106,117,118,121,128,129,133
357	勝間城		4,6,9,16,35,23,37,81,102,106,116,118,121,128,133
358	佐淵城跡		6,13,34,76,100,115,117,128,129,133
359	小房城	小房村の城・尾房城・尾房山・尾総・尾総城・吉野郡小房城	4,6,9,19,23,25,29,36,51,65,100,103,117,121,128,129,133
360	黒山城		35,76,100,115,117,129,133
361	会下城	会下・會下城・會下山	4,6,23,37,80,100,117,129,133
362	八幡山城		133
363	小原山王山城跡	山王山城・小原城・小原の城・山王の城・山王城・山王山古城・三王山城・三王山・小原ノ城	4,6,18,19,23,25,29,35,44,51,54,55,76,80,100,103,117,121,124,128,129,133
364	仁寿寺城跡		133
365	政岡城跡		117
366	寺坂城跡	川上城	100,103,117,128,129,133
367	竹山城跡		4,6,9,19,23,32,35,37,43,51,65,80,91,100,102,103,117,124,128,129,133
368	小淵城跡	二萬塚宮城	1,100,103,115,117,128,129,133
369	比丘尼ヶ城跡	駿論坊・駿論坊城	103,129,133
370	比久尼ヶ城跡	黒山城・尼ヶ城	133
371	伝宮本武蔵宅	宮本屋敷・宮本・宮本武蔵屋敷・宮本構・宮の本・宮本	80,100,103,117,129,133
372	小山城	小山古城	100,117,129,133
373	高畑城	高畑	4,6,7,36,51,100,102,117,129,133
374	高山城	高山・高畑城	6,7,36,38,51,53,100,102,115,117,121,128,129,133
375	淡相城	高山・中村城・粟井の城・粟井城・粟井御館・中村城・中村	4,6,19,23,51,65,100,103,117,129,133
376	大将ヶ陣山城跡	法天山城	7,117,133
377	殿屋敷跡		100,117,133
378	赤田城跡	赤田・赤岩城・大野の城・大野城・大野の城・大野郷城・塀高城・塀高城	4,6,18,23,29,32,35,44,51,76,100,102,103,115,117,124,128,129,133
379	法天山城跡		100,103,117,129,133
380	壬生構	壬生城・壬生の搆	41,100,103,117,128,129,133
381	比丘尼ヶ城跡	尼山・比丘尼城	4,6,23,100,116,117,129,133
382	横山城跡		51,100,116,124,129,133
383	殿屋敷跡		129,133
384	鞍掛城	倉懸城・倉掛城・倉鋪山ノ城・鞍掛の城・鞍掛・鞍掛山・倉掛山に陣	2,4,6,7,9,18,23,25,29,32,35,37,43,49,51,54,55,76,80,81,95,100,102,103,106,117,118,124,128,129,132,133,143

城館番号	城館名	別称	文献番号
385	比丘尼城跡		9,133
386	妙見山城跡	妙見城・明見山・居城妙見山・山王城	51,54,55,117,121,128,129,133
387	鳥越山城跡	烏越城・烏越の城・鯰城・英田江見・鳥坂山城・鳥越山城	5,6,23,32,51,65,103,117,121,128,129,133
388	鬢櫛山城跡		129,133
389	林野城跡	倉敷山城・林野明見城・林野妙見城・妙見城・林野城・林野城跡・林野・明見	2,4,6,9,10,18,19,22,23,26,29,32,35,36,37,43,47,51,55,68,69,72,76,79,80,81,93,103,115,117,121,124,126,128,129,132,133
390	友野城跡	友野城跡・友城	46,81,86,102,117,129,133
391	緑青山城跡		117,129,133
392	比丘ヶ城跡	比丘尼城・山口の城・山口城・比丘城跡	35,36,51,81,117,121,128,129,133
393	川越屋敷跡	川端屋敷	129,133
394	松田城跡		133
395	久保木城跡	原城	35,51,117,121,129,133
396	越坂山城跡	岩辺城・岩辺山城・岩辺山の城・岩越坂の城・岩越城・越坂山城・越坂山	23,35,51,103,117,121,128,129,133
397	三倉田城跡	三倉田	81,117,121,129,133
398	矢櫃山城跡	矢櫃・矢櫃の城・小原紫城・北原城	2,4,6,16,37,102,103,117,128,129,133
399	大屻城跡	林野城	54,133
400	大畠城跡	大畑城・大畑の城・大畠の城・大畠城・大畠・羽仁山の城	4,6,23,35,81,117,121,128,129,133
401	鷹巣城跡	鷹巣城・鷹ノ巣・城鷹巣の古城・鷹巣山城・鷹巣・鷹の巣の城・鷹之巣城・鷹巣の城・鷹の巣	2,4,6,9,23,35,37,81,95,102,103,106,117,118,121,128,129,132,133
402	神田山城跡	城尾城・城尾	4,6,23,117,129,133
403	尾越城跡		51,129,133
404	福城跡	土居福城・土居福の城・福之城・福の城・土居山城・土居山・土居福城	4,6,23,51,102,117,121,129,133
405	高鉢城跡	上山・上山城・上山の城・高鉢山城	6,23,35,90,102,103,117,121,128,129,132,133
406	横尾城跡	横尾	4,6,23,102,117,129,133

報告書抄録

ふりがな	おかやまけんちゅうせいじょうかんあとそうごうちょうさほうこくしょ
書名	岡山県中世城館跡総合調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林利晴・和田　剛・物部茂樹・島崎　東・米田克彦・岡本泰典・澤山孝之 小嶋善邦・亀山行雄・氏平昭則・上栁　武・髙田恭一郎・畑　和良・森　俊弘
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-３　　℡ 086-293-3211
	https://pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市北区内山下２-４-６　　℡ 086-224-2111
発行年月日	2020年2月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
岡山県美作地域所在の城館跡等406か所	真庭市（旧北房町除く）	33214	39ほか	―	―	20150401～20180331	―	岡山県中世城館跡総合調査
	新庄村	33586	34ほか					
	鏡野町	33606	524ほか					
	津山市	33203	7ほか					
	美咲町	33666	202ほか					
	久米南町	33663	42ほか					
	岡山市	33201	9ほか					
	奈義町	33623	2ほか					
	勝央町	33622	771ほか					
	西粟倉村	33643	23ほか					
	美作市	33215	29ほか					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡山県美作地域所在の城館跡等406か所	城館跡及び関連遺跡	鎌倉時代から江戸時代	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁・石垣・虎口・櫓台・土橋など	なし	

要約	岡山県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成25年度から国庫補助事業として実施した中世城館跡総合調査の成果。岡山県全体では、1,423地点の調査を実施し、1,126城の城館関連遺構を確認。目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等を掲載。美作国では、493地点の調査を実施、406城の城館関連遺構を確認、岩屋城跡など318城について掲載した。

岡山県中世城館跡総合調査報告書
第３冊
－　美作編　－
令和２年２月 28 日　印刷
令和２年２月 28 日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻 1325- ３
発　行　岡山県教育委員会
岡山市北区内山下２- ４- ６
印　刷　株式会社中野コロタイプ
岡山市北区玉柏 390